LA REKONSTRUO

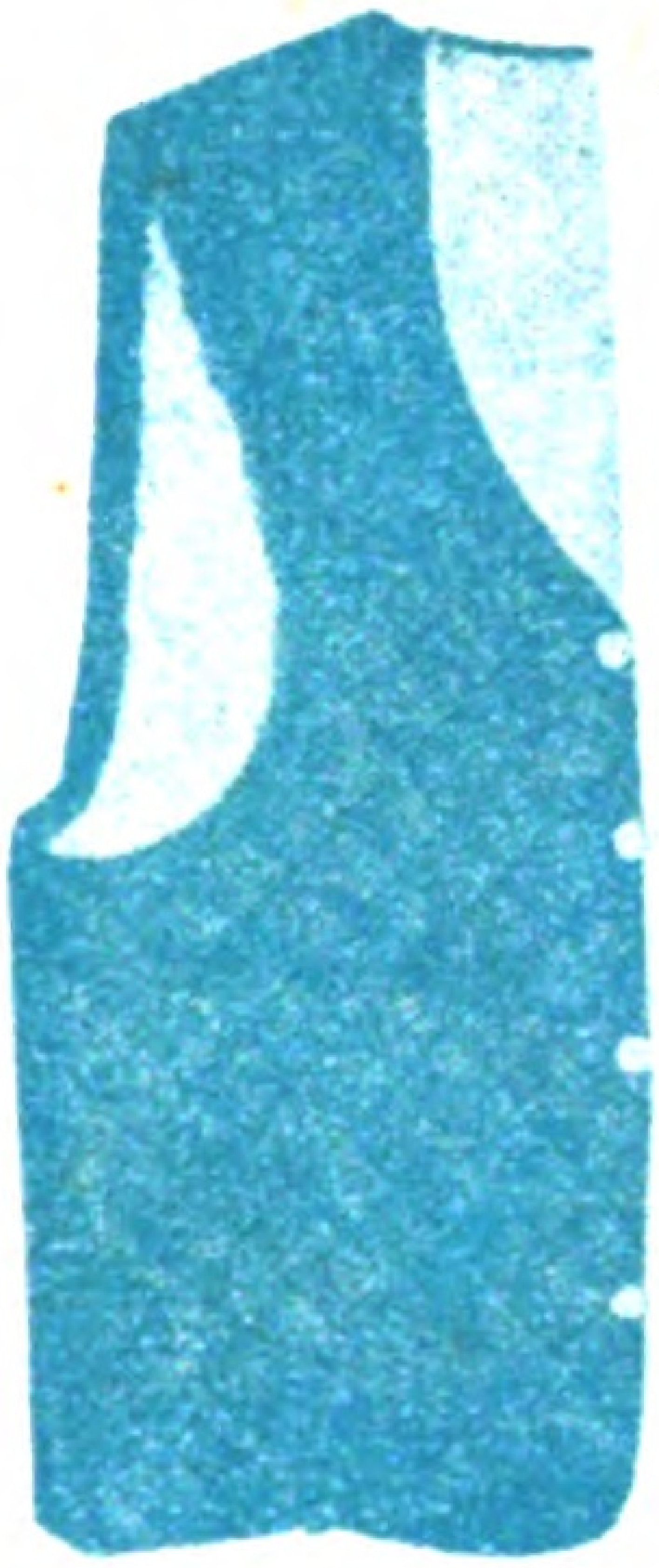
改造

新年號

1923

御旅行と防寒に

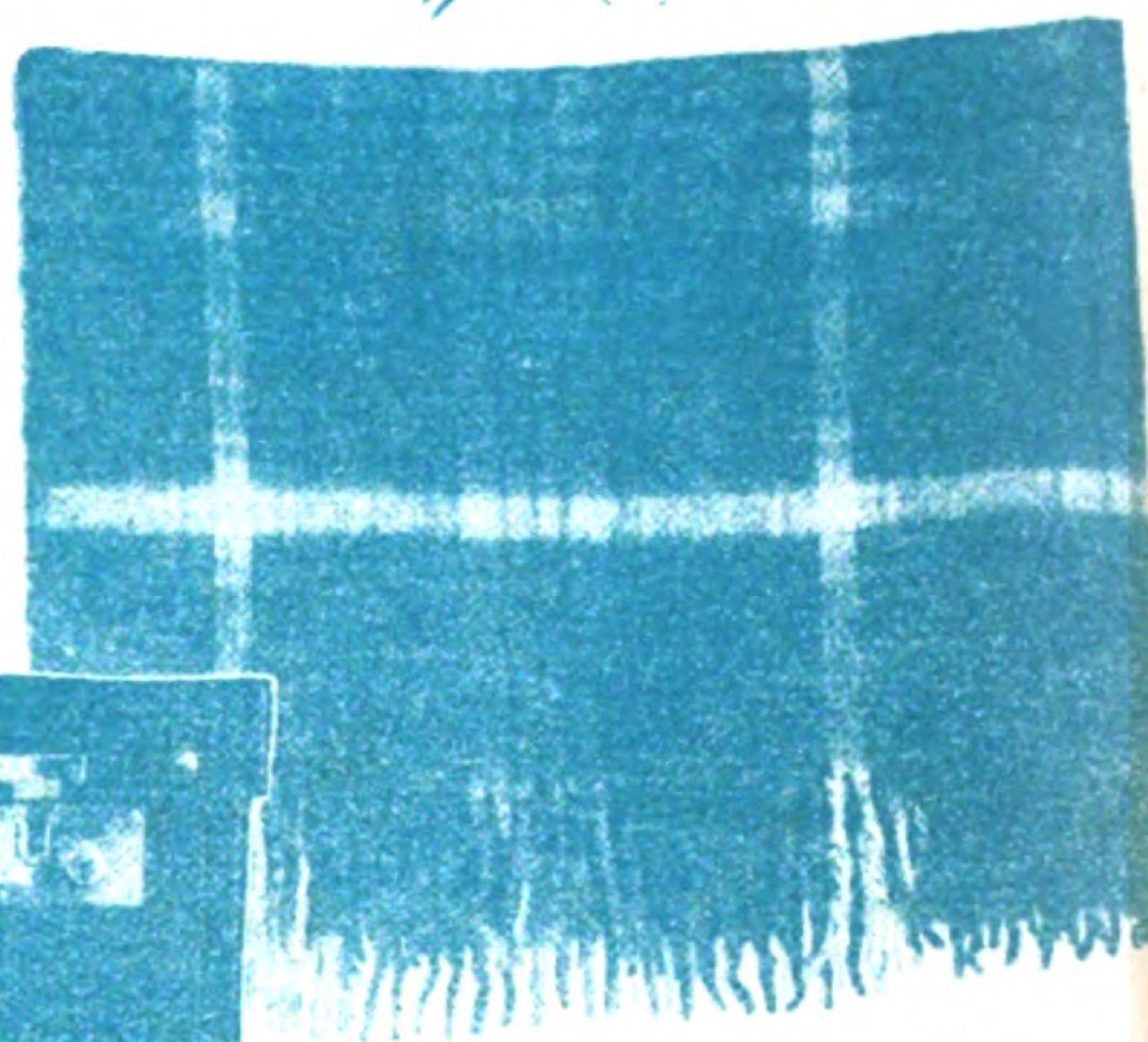
(2)



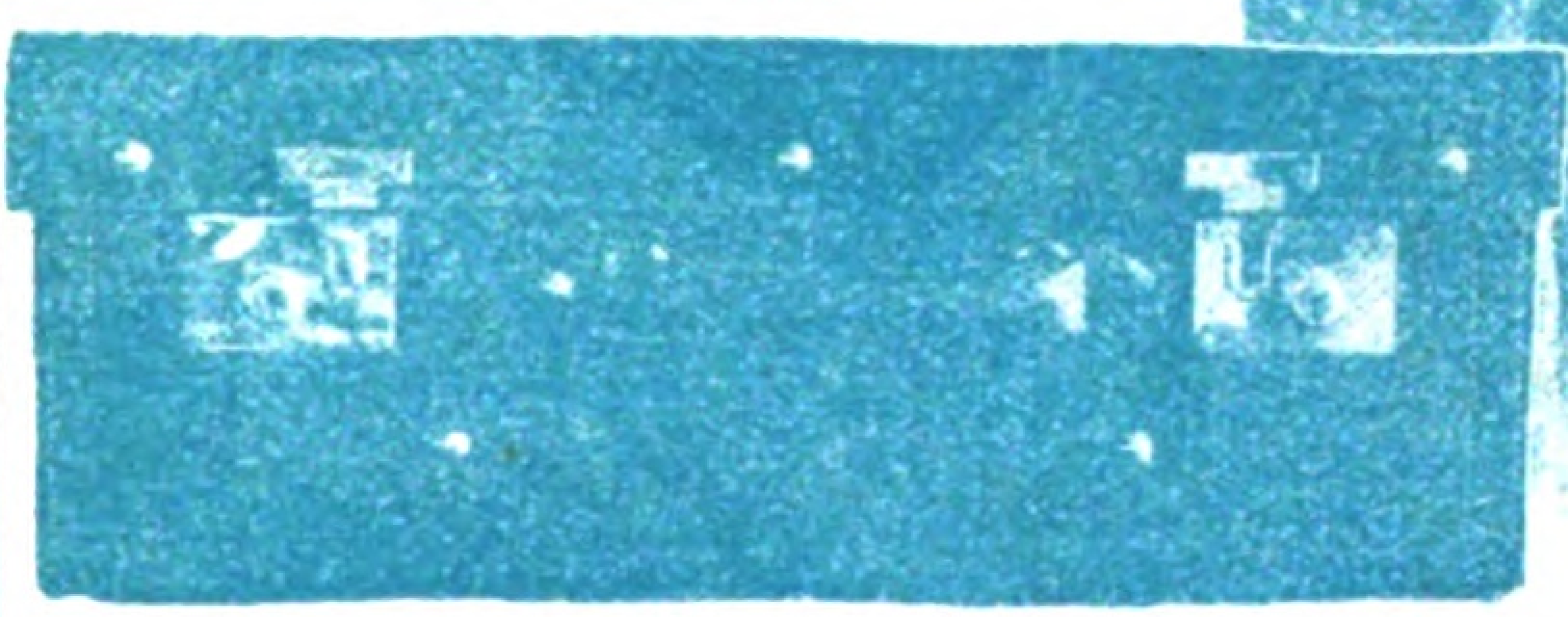
(1)



(3)



(4)



(1)
織生地ネクタイ
現表派模樣應用
貳圓前後

(2)
防寒用眞綿チョッキ
三圓七十錢

(3)
英國製ラクダ風膝掛
濃茶地にグリーン大格子
貳拾四圓

(4)
服入鞄
新型舶來ロータス
尺八‖貳尺
卅圓前後

東京今川橋

松屋呉服店



改造新年號目次

創作

◇小林一郎氏新著

七部集連句評釋

四六判上製 約九百頁 金參圓九拾錢 送料金廿四錢

（芭蕉研究者必讀書）日本の生んだ文學者の中で芭蕉翁ほど感化力の大きかつた人はない。翁を知ることは何人にも必要である。翁を知るには是非とも七部集を讀まなければならぬ七部集の中でも連句は頗る難解のものであるが是が分らなければ七部集を讀んだかひは無い著者は舊來の解釋に囚はれず。自分の思想と自分の語を以て評釋を加へたので是なら誰にでも分ると信じて居る凡ての人々の一讀を希ふ。

島地大等序
朝日融溪著

●感想 一筋の白き道へ

壹圓五拾錢 送料十二錢

（報知新聞評）…思想界の傾向は今や宗教的方面へと集中してゐる此書も其の一で人間の明るき生を輝ける生活といつた樣なものを中心として日常生活の迷ひを除き自棄自棄の危難を避け專念に與へられたる道を進む可を述ふ

◇尾上登良子著

（四六判上製 六百餘頁） 金貳圓五拾錢 送料金十八錢）

頭註 源氏物語大意

國文の至寶と稱へられ乍も讀み味ふに甚だ骨の折るゝ爲に世に敬遠されたるは此源氏の物語なり 此書は源氏の意を細かに嚙みくだき俗にし新くして現代の讀者の頭腦に容易に消化せしむる樣に工夫したるものなり源氏縮約圖と云ふべきもの巻頭の系圖年表は有益のもの也

◇栗山周一著（新刊）

●目と耳の教育

（金貳圓五拾錢送料十二錢）

◇工藤由太郎著（新刊）

●人間文化出發

（正價金貳圓送料十二錢）

◇井上床三氏著（新刊）

●性と自我

（正價金貳圓送料十二錢）

白石實三著（ 版）

●武藏野巡禮

（金貳圓 拾錢送料十三錢）

秋の武藏野は繪の如く詩の如し武藏野愛慕者快讀書

◇朝日融溪著（五版）

●一 親鸞出現と思想

（金壹圓八拾錢送料十 錢）

◇小林一郎著（四版）

●芭蕉翁一生

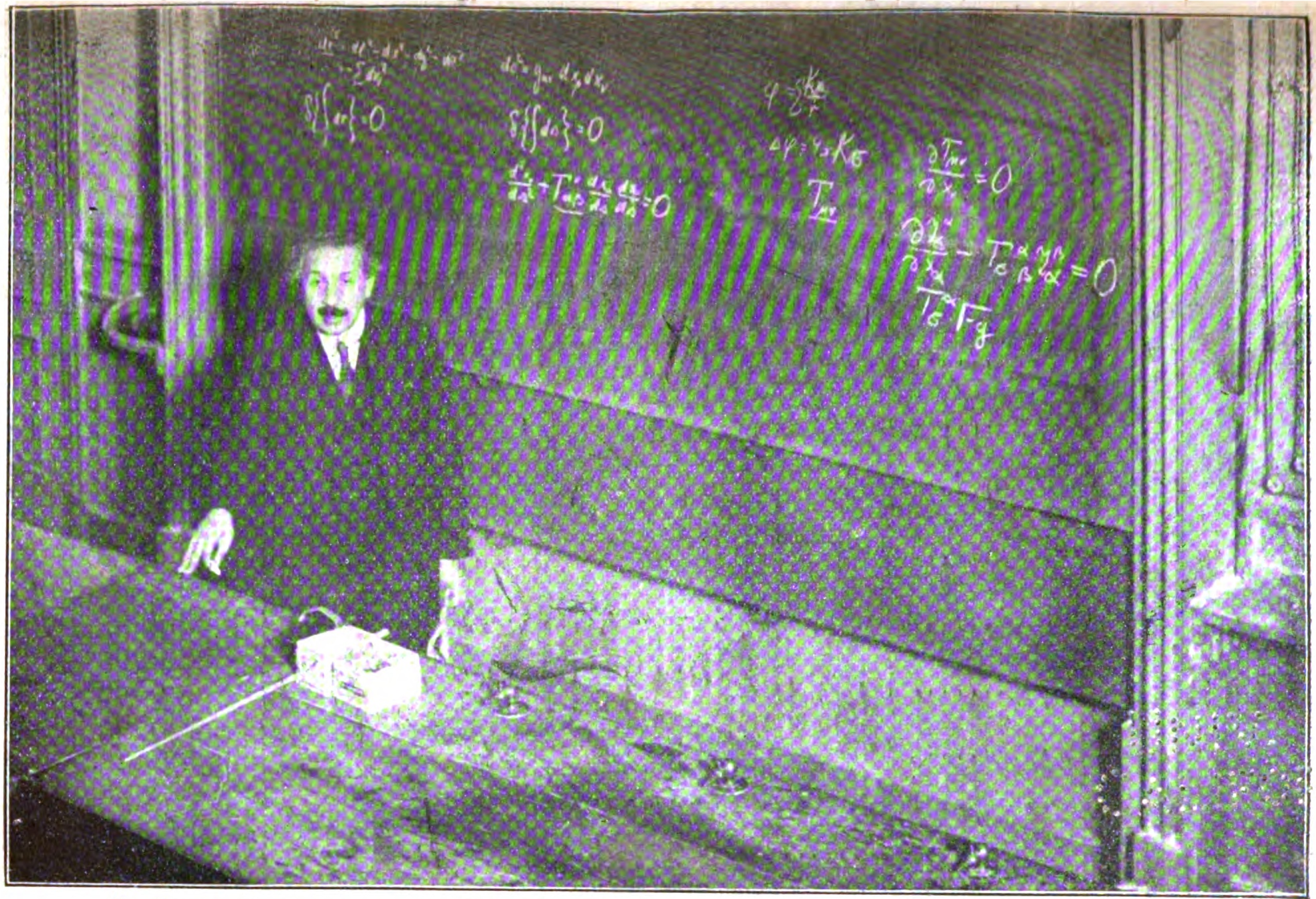
（金 圓八拾錢送料十八錢）

◇宇野哲人著（新版）

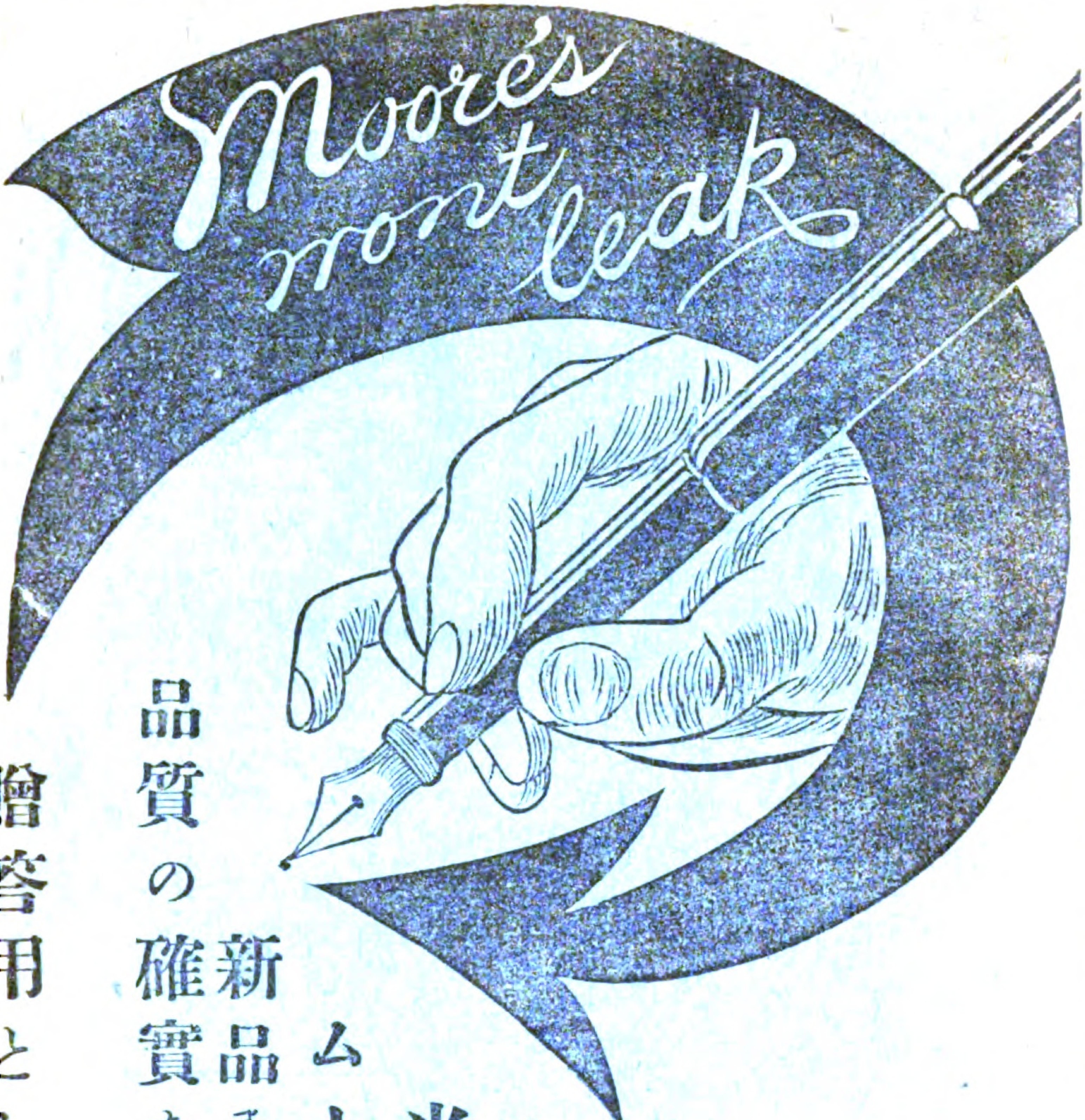
●支那文明記

（金貳圓八拾錢送料十八錢）

東京市神田區表神保町七番地　**大同館發行**　振替貯金口座東京八七貳番



東京帝國大學に於ける特別講演壇上のアインスタイン教授



●特約販賣店●

京橋　伊東文房具店
仝　文祥堂文房具店
仝　文永堂文房具店
日本橋　三越呉服店
仝　白木屋呉服店
上野　松坂屋いとう呉服店
神田　文房堂
大阪　三越呉服店
名古屋　松坂屋いとう呉服店
其他市内及全國著名の百貨店
文房具店にあります

日本總代理店　東京 神戸　米國貿易會社

米國製
ムーアー萬年筆

新品入荷

品質の確實なるは本品の特色

贈答用としては最適當品

自己の生活を尊ぶものは日記を求む、
尊くもゆかしき生活の記錄は永劫の記念なるを知ればなり。
日記を求むるものは大倉書店の日記を求める。
そは新式當用日記の優秀にして便利なるを知り、
尊き文字を其の中に保存するの愉快を知ればなり。

新式を標榜せる所以は

大正 新式 當用日記

◆卷末の附錄は日常必須の事項を悉く收めて優に日用百科辭典の觀あり。

◆新式の圖表により、起床、勤務時間風位晴雨を記入し得。

◆日日舊曆を對照して干支九星、二十八宿を明白にす。

◆溫度の高低を計るため日日溫度表を掲げて氣溫變化の記入に便せり。

◆用紙は弊店の特撰によるものにして、紙質硬軟其の宜しきを得たり。

洋裝四六判

定價 上製金壹圓拾錢 / 特製金壹圓參拾錢

東京市日本橋區通一丁目

發行所 大倉書店

（電話本局二四〇四・四一四番）
振替東京二三八番

賀川豊彦著

星より星への通路

氏の苦しき體驗からにじみ出た此の人生觀が、若き人々にどんな感激を與へるであらうか、氏のシンミリした宗教觀が我々をどこに引きいれるであらうか、我々はかく考へつつ本書のページを愉快にめくつて行く、秋冷の夜にウツトリしつつ氏のふくよかな詩筆に囚はれて行く我々は、魂の髓までも、心の奥底までも矢つ張り敬虔な神の實在へと導かれて行くのであつた。

第四十五版

定價貳圓
送料十七錢
四六版布製

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

◎經子史部　二十冊

四書、五經を始め、老、莊、韓非、荀子、管子、呂氏等の諸子十餘種、即ち所謂支那哲學の名著を網羅し、外に左傳、國語、史記全編等の史篇を收む。

◎文學部　二十冊

楚辭、文選、八家文、唐詩選等の詩文の外、晉唐小説西廂記、琵琶記、還魂記、桃花扇、水滸傳、紅樓夢等各時代の代表的戯曲小説を網羅す。

編纂評議員

（イロハ順）

東京帝國大學教授、文學博士　市村瓚次郎
國學院大學長、帝國學士院會員、文學博士　芳賀矢一
東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士　服部宇之吉
帝國學士院長、樞密顧問官、法學博士、男爵　穗積陳重
文學博士　幸田露伴
東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士　上田萬年
文學博士（故）　小牧昌業
東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士　白鳥庫吉
文學博士　醫學博士（故）　森林太郎

執筆譯者

（イロハ順）

東京帝大教授　文學博士　服部宇之吉
文學博士　林泰輔
文學博士　幸田露伴
東京帝大教授　文學博士　宇野哲人
學習院教授　文學博士　岡田正之
文學博士　小柳司氣太
東京帝大助教授　文學博士　箭内亙
東洋大學教授　山口察常
第一高等學校教授　安井小太郎
文學博士　藤田劍峰
公田連太郎
文學博士　小牧昌業
文學博士　兒島獻吉郎
拓殖大學教授　後藤朝太郎
第一高等學校教授　佐久節
笹川臨風
拓殖大學教授　宮原民平
東京帝大教授　文學博士　鹽谷温
東洋大學教授　釋清潭
平岡龍城

長與善郎著

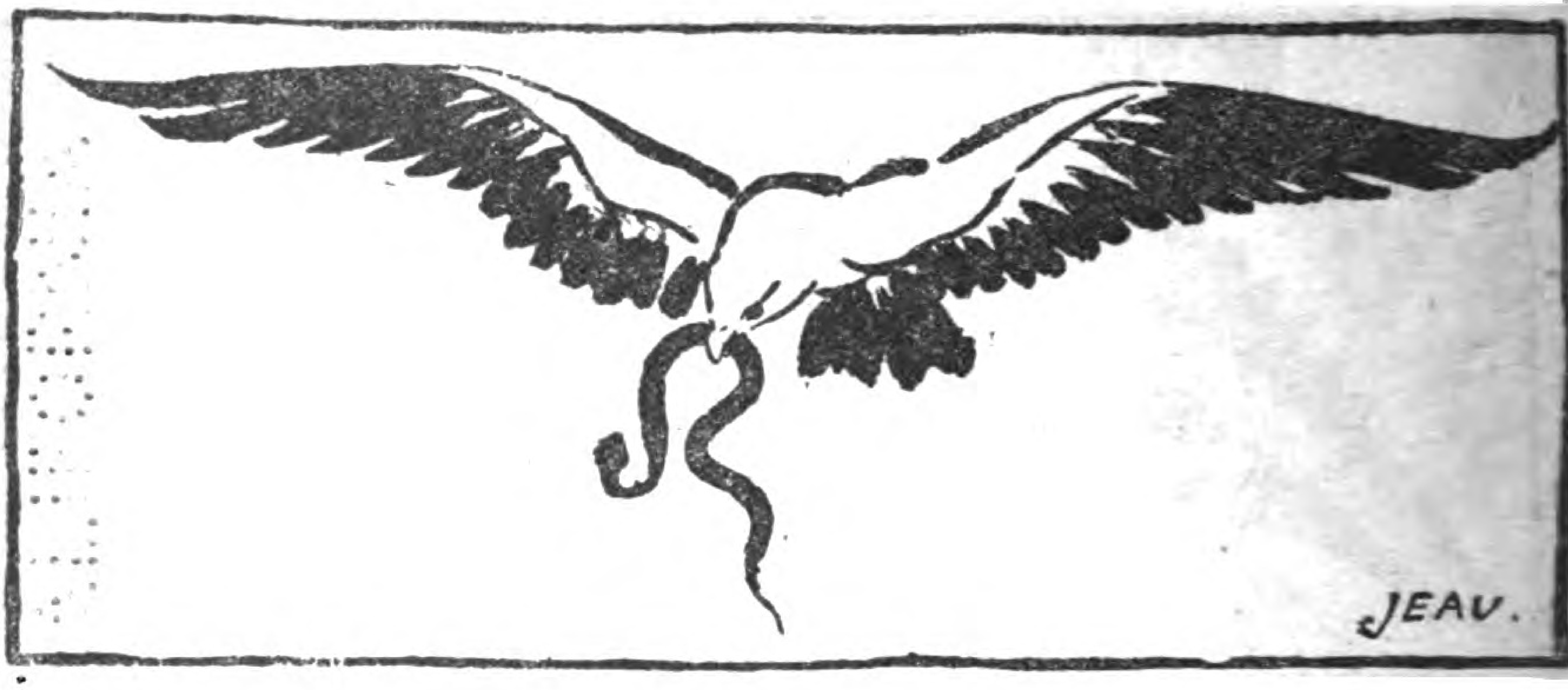
新刊

三戯曲

四六判二八二頁
背絹表装函入
定價一圓六十錢
送料書留十八錢

余は作劇に於て、最も深い意味での現代劇を書く事を理想としてゐる者である。茲に集めた本年度の三つの作品は素よりまだその理想には遠いものである事を認めてはゐるが、それでも余が藝術上に於ける本道と信ずる道に於て、困難に思はれてゐたその現代劇に漸く手をつけ始めた殆んど最初のものである。余は此の三編の作によつて現代劇を、自分の求める形に於て書く緒口をやゝ掴んだ。それだけにそこにはまだ各々幾分試作的傷は存するであらう。併しいかに謙遜して云つてもその出發の作としては決してさう羞しくない、それ〳〵余獨特の進んだ藝術味を既に持つたものである事を充分自信してゐる。少くとも此の余にとつて或るイポックの觀念となる作集は今迄の他のいかなる余の作業よりもすぐれてゐると云へるであらう。此のほかに余は今何も云ひ度くない。（著者序文）

發兌 東京神田南神保町 岩波書店 振替東京二六二四〇 電話九段一二八〇・一二八一



==((改造一月號))==

偉人を慕ふこゝろ

朗かに明くる今年の元旦のやうに考へさせる朝は過去にはなかつた、少くとも眞理の思慕に心をひそめる學徒の胸奥には宇宙を越え得べき幾多の謎をまぼろしのやうに描いて屠蘇に對せざるを得ない、傳統を打破する心と、自己の抱いておつた眞理に懷疑の雲がかゝることゝ、それを拂拭する新眞理の曙光が誰の頭にも強く閃いてきた。そしてそのすべての基礎學術を崩壞せしむべくそゞろに骨の鳴る音が微かにひゞきよつた。

アルベルト・アインシュタインは我々に靜かに上記のやうな謎をなげかけて西へ——西へと歸航つていつた。

波を慕ひ、雲を欣ぶ偉人はそしてまた我國民に深刻なる冥想をうながした、彼は他人を呪はなかつた、階級鬪爭を超越してゐた、民族關係を眼中におかなかつた、國家と國際とに超然としてゐた、刑罰の不遜を悲しんで一人でも善人たるやうに力説した、溫しいその容、慈しいその顏は自然そのまゝの偉大さであつた、その一言、その一靴痕の悉くがわれ〳〵に精神思索を强ゐ、理想追求をうながす感銘深きものであつた。

まのあたり受ける偉人よりの感化、それは我國でこの一ヶ月間の出來事で、いかに偉人思慕の切なさが十二分に證明されたか、彼の行くところ、止まるところ凱歌を聞かない日はなく、その物理學關係以外において響應の廣かつたことは我々に種々なるXを示唆する。

彼の業績はそればかりでも充分だ、波を渝えて行く偉人の俤が新春の杯に浮んで、再び限りなきなつかしさと、涯てしなき宇宙の大思索を我々に與へた。

その感激は進歩への道程であり、同時にまた究極への階段である、——究極——X——われ〳〵はそれを抱いて完璧の殿堂へと歩いて行くのである。



（長編小説）

神の如き人々

酒の如き空氣

エッチ・ヂー・ウエルス

フロレツス・ラモントに此の書を献ず
此の小説はイングルードに於
ける彼れの家で命名された

第一篇

地球人の侵入

第一章　バーンステーブル氏、休暇を取る

（一）

バーンステーブル氏は差迫つて休養の必要を感じたが、誰と一緒に何處に行かうといふでもなかつた。彼は過勞に陷つてゐた。そして家庭に飽きてゐた。

彼は感性の强い人であつた。彼は自分の家族を暗誦するほど、非常に深く愛してゐた　從つて　こういふクサ〳〵した氣分の時には痛切に家族がうるさかつた。彼れの三人の子供達は皆んな今が發育ざかりで、一日々々にズン〳〵伸びて行くように思はれた。彼等は彼が丁度いま腰かけやうとする其の椅子に腰かける。彼等は、彼れの自働ピアノを彼に向つて發砲する。彼等は　何ともかともお話にならない冗談をしては、われるような高笑ひで家中を騷がせる。彼等は直ぐに差出口をしては、彼が今日まで此の世に於ける主なる慰めの一つとしてゐた所の年齢らしい無害な色めきを妨げる。彼等は、テニスで彼を負かす。彼等は、段梯子の仲繼場で戯むれの組打をやつて、二人一緒に、三人一緒に、恐ろしい音を立てゝ段梯子をころげおちる。彼等は兎かく朝飯におくれる。彼等は毎晩、ワハハ、ワハハ、ドシーンといふ大騷ぎで寢床にはいる。そして彼等の母はこれが好らしく見える。彼等に[illegible]な金が掛るのだが一切の物價が一バーンステー

プル氏の所得力を除いては）悉く騰貴してゐるといふ事實に對しては、全く平氣であつた。そして彼がたま〳〵食事の時に、ロイド・ジョージ氏の事について二三の平易な眞相でも語るか、或は食卓の談話の調子を下らない馬鹿話の水準以上に、ほんの少しでも高めようとすれば、彼等の注意は直ぐに態とらしく外にそれる。少なくとも態とらしく見える。

そこで彼はこの家族から逃れて何處かに行きたくて堪らなかつた。そして彼はそこで、靜かな誇りと愛情とを以て家族の者共の事を考へるより外、彼等の爲に煩はされたくないのであつた。

彼は又暫らくビーヴ氏からも逃れたかつた。每日通る町々さへも彼に取つては苦痛の種になつてゐた。彼は一枚の新聞紙も、新聞の看板も、又と再び見たくなかつた。彼は今にも、金融上および經濟上の何等かの大破綻が起つて、現在の大戰爭をすらほんの附隨的の變災と思はせるような事になるだらうといふ、不安な疑惧に惱まされてゐた。それは彼が、『自由評論』（悲觀派急進主義の有名な機關紙）の副主筆兼總務役であつて、社長ビーヴ氏のいつも變らぬ悲觀論に段々感染されてゐたからであつた。以前には、他の編輯員等と共に、コッソリ社長の塞ぎ込みをからかつたりして、一種の反抗をやる事も出來たのだが、今では自分より外に編輯員といふものがない。彼等は皆社長が財政上に意氣沮喪した時、節約されてしまつた。實際上、今日では、バーンステープル氏とビーヴ氏との外、自由評論の爲に極まつて執筆する者は一人もない。從つてビーヴ氏は、バーンステープル氏に對して、何んでも思ひどほりにやるのであつた。彼は主筆の椅子に坐りこんで、ズボンのポッケットに兩手を深く突つこみ、有らゆる事について悲觀的の態度を取りつゝ、時によると二時間も考へこんでゐる事がある。バーンステープル氏の本來の傾向は、寧ろ相當の樂觀主義で社會の進步を信ずるのであつたが、ビーヴ氏は頗る强硬な態度でそれに反對し進步の信仰は少なくとも六年間の時勢おくれだと論じ、自由主義に殘された最も光輝ある希望は今に審判の日に遭ふ事だと論じてゐた。それで彼は、よく編輯員から（ま

だ編輯員がゐた頃には）社會の毎週の不消化と呼ばれた原稿を書き終ると、共まゝ何處かに出かけて、翌週の雜誌一切の事はバーンステープル氏に塗りつけるのであつた。

尋常の時ですら、ピーヴ氏と一緒に居る事は隨分難儀であるのだが、今は尋常の時でなく、不快な事件が續々と出現するので、氏の悲觀的な豫想が如何にもぱからしく聞えた。炭坑の大罷業は既に一個月も續いて、英國に於ける最後の商業的破滅を前兆するやうに思はれる。アイルランドからは、毎朝新たな亂暴狼藉（それは實に許すべからざる 又忘るべからざる亂暴狼藉）の通信が來る。長日月の旱魃は全世界の收穫を脅威してゐる。國際聯盟（それに對しては、バーンステープル氏がウイルソン大統領の得意時代に絶大の希望を屬してゐたのだが）、その國際聯盟も、今では全く氣の拔けた、哀れはかない無用物になつて到る處に予盾撞着があり到る處に不道理がある。全世界の八分の七は、漫性の擾亂と社會的解體とに沈みつゝあるかに見える。此の事實に面しては、ピーヴ氏がなくても、それを突破して進む事は極めて困難な筈である。

バーンステープル氏は實際、希望を分泌する事をやめかけてゐた。所が、彼れの如きタープの人に取つては、希望は肝要な溶解劑であつて、それがなくては消化のよい生活が出來ないのであつた。彼れの希望は常に自由主義と寛大な自由主義的な努力とに在つたのだが、今では、自由主義はもう迚も何んの役にも立たない、そして只だ兩方をポケットに突つこんで坐りこみ、他の自分よりも俗惡な、然し自分より活動力のある人物（但し それのガムしやらの活動はノッピキならず世界の破滅を來すのだが）その人物の活動に對し、不平を鳴らし、愚痴をこぼすに過ぎない、と考へはじめてゐた。

斯くてバーンステープル氏は、夜も晝も世間全般の事について心配してゐた。夜は殊に、追々眠れなくなつて來るので

それが甚よりも甚だしかつた。それで彼は、自由評論の或る一號を全く自分の物にして出して見たいといふ、恐ろしい慾求に惱まされてゐた。即ち彼は、ピーヴ氏が出かけたあとで、スッカリ雜誌の內容を變更して見たい。總ての陰氣くさい材料や、個々の不正不義に對する、つまらない空虛な嘲笑や、殘忍な不幸な事柄を指摘する痛快がりや、ロイド ジョージ氏の（誰にもありがちな）單純な不行跡の誇張や、グレイ卿、セシル卿、ランスダウン卿、ポープ、女王アンヌ、若しくば皇帝フレデリクバーロサなんどに訴へて、（其の相手は每週かはるのだが。）早く起つて再生の新世界の若き熱望に對して要求と形式とを與へんと叫ぶ事などを皆な拔き去つて、其の代りに、雜誌の全面に『ユトピヤ』を刷りだし、驚き呆るゝ自由評論の讀者に向つて、我々の爲さねばならぬ所のものは即ち之である。我々の爲さんと欲する所のものは即ち之である、と云つてやりたいのであつた。若しそしたなら、ピーヴ氏は日曜の食卓で、如何に大なる打擊を感ずるだらう。恐らく彼は驚きの餘り、異常の分泌が忽ち止まつて、其の食事を消化させるだらう。

然しこれは空想の最も馬鹿げたものであつた。彼れの家には三人の子供がある。それらを相當にして世間に出してやらねばならぬといふ考慮がある。空想としては、右の計畫は美しいに相違ないが、そんな事を忘れてしまふほど、自分は本當に利口でないのだといふ、甚だ不快な自信をバーンステープル氏は持つてゐた。何しろ彼は（そんな事をすれば大味噌をつけるに極まつてゐるのであつた。）

フライパンから火の中に飛び込むといふ事がある。自由新聞は陰氣な、不景氣な、狹量な、新聞ではあるけれども、兎にかく俗惡な下劣な新聞ではない。

けれども、ヨシそういふ難儀な破目はないものとしても、バーンステープル氏は是非とも暫らくピーヴ氏から暇を取らねばならぬのであつた。一兩度、彼は既にピーヴ氏と意見の衝突をやつてゐた。そしてピーヴ氏は、其の衝突の爲め

急速に變化した。いつ激論が起るかも知れないのであつた。そこでビーヴ氏から暇を貰ふ第一歩は、正に醫者に行く事であつた。バーンステープル氏は醫者に行つた。

『私はどうも神經が鎭まらないで困つてゐます。ひどく神經衰弱に罹つたようです。』バーンステープル氏は斯ふ云つた

『あなたは確かに神經衰弱です。』醫者は斯ふ云つた。

『毎日の仕事が厭で堪らないのです。』

『休養が必要ですな。』

『生活の變化が必要でせうか。』

『出來得るだけ完全な變化が結構です。』

『何處か好い轉地先の御指圖を願へないでせうか。』

『あなたは何處にお出でになりたいんです。』

『別に何處といふこともありません。お指圖が願へるだらうと思つたんですが……。』

『何處でもあなたの氣の向く處を見つけて、それにお出でなさい。只今のところ、氣の進まない事は一切なさらないが宜しい。』

バーンステープル氏は醫者に一ギニーの謝金を拂つた。そして此の醫者の指圖を武器として、機會の熟し次第、病氣の旨をビーヴ氏に發表して、休暇の必要を告げようと準備した。

(二)

此の休暇の期待は、當分の間、バーンステープル氏に取つては只、既にありあまる苦勞の重荷の上に、更に新らしい

重みを添へるに過ぎなかつた。逃げだしを決定するのは、一時に三個の乘り越えされそうもない難問題にブツつかる事であつた。即ちどうして逃げだすか。何處に行くか。それから（バーンステーブル氏は直ぐに連れの人に飽きる質の男だから）誰と行くか。そこでバーンステーブル氏の近來の常習になつてゐる、不愉快のさらけだしといふ表情の間に、内證の計畫といふスバシこい閃きがもぐりこんで來た。但しバーンステーブル氏の表情に對して、誰も餘り氣にとめる者はなかつた。只だ一事だけ彼れの心中に明瞭であつた。此の休暇の事につき、家庭で一言も漏らしてはならない。若し一たびバーンステーブル夫人がそれをけどらうものなら、何事が起るかは知れきつてゐる。彼女は、如何にも適切な熱誠ぶりで、一切の事を切り廻すに相違ない。『あなた十分に休養しなきや駄目ですよ』と彼女は云ふだらう。彼女はコーンウオールか、スコツトランドか、ブリタニーかの、可なり遠方の、そして金のかゝる場所柄を選定するだらう。彼女は旅行用品をドツサリ買ひ込むだらう。そして又いろ／＼後で思ひだしては、邪魔な小包などをクツつけて、最後の瞬間に荷物のカサを張らせるだらう。それに又、彼女は子供等を連れて行くだらう。恐らく彼女は、賑かで面白いからと云つて、知合の二組三組を同じ場所に行くように誘ひあはせるだらう。若しそうなると、彼等は銘々の性質の最悪の方面を持寄るので、それは實に倦む事を知らざる最大の厄介者となるに極まつてゐる。しみ／＼した會話はなくて、空笑ひばかりがあるだらう。そして際限もない遊び事が續くだらう。……斷じて否！。

然し男が妻にけどられないで、旅行に出かけようとするには、どうすればいゝだらう。何しろカバンを一つ詰めこんで、それを持出しておく事が必要だ。………

バーンステーブル氏の此の立場として最も有望な一事は、バーンステーブル氏の見地からすれば、彼が自分用の小いさな自動車を持つてゐる事であつた。彼れの秘密の計畫について、此の自動車が一の大役を演ずべきは當然である。此

の自動車が最も容易な逃げだしの手段を提供するように思はれる。此の自動車は、『何處へ』の問題に對する可能の答案を、或る一定の場所から、數學者の謂ゆるたしか軌跡なる者に變換する。又この小いさな車奴は、『誰と』の問題に對して、極僅かではあるがハツキリと感知され得る程度に於て、答へをしてくれるが甚だ賴もしい。此の車は二人乘であつた。そして家庭內では、フート・バス（洗足器）、コールマンス・マスタード（芥子壺）、イエロー・ペリル（黃禍）などと呼ばれてゐた。これらの名が示す通り、此の車は透きとほるような黃色塗の、低い無蓋車であつた。バーンステープル氏はシドナムの家から新聞社に通ふのに、いつもこれを使つてゐた。この車はギヤソリン一ガロンで三十三マイル走るのだから、電車の定期券よりは遙かに安あがりであつた。それで晝間は、この車はいつも、新聞社の窓下の空地に立つてゐた。シドナムでは物置の中がそれの住居で、バーンステープル氏だけが物置の鍵を持つてゐた』斯くて彼は、子供等がそれに乘つたり、或はそれをこわしたりする事を防いでゐた。折々はバーンステープル夫人が良人にそれを運轉させて、買物のためにシドノムを乘りまわすこともあつたが、實を云ふと彼女はこの小さい車を好まなかつた。なぜと云ふに、この車では餘りに風や埃りに晒されるので、姿はくづれるし、體中はザラ／＼になるのだから。そこで此の總ての理由に依つて（この車が許容する事と、禁止する事との、兩方の理由に依つて）この小さい車が、所要の休暇に對する仲介物として、明らかに認定されたのであつた。それにバーンステープル氏は實際、この車に乘る事を好んでゐた。彼は頗る下手な運轉はしてゐたが、頗る注意深く運轉してゐた。尤も折々は、車が立止まつて進行を肯んじない事もあるが、それにしても、バーンステープル氏の生活に於ける、殆んど總ての他の事物が悉く我が意に反するのとは違つて柁を西に向けた時に眞東に行くといふような事ではない。少なくとも、今日までは無かつた。從つて、この車は彼に統御の快感を與へた。

バーンステーブル氏は遂に大速力を以て決心した。そこに不意な好機會が彼れの前に開けた。木曜日は印刷所行の日であつた。彼は其の日の夕方、恐ろしくクサ〳〵して家に歸つて來た。天氣は頑固に暑く照りつゞけてゐた。況んや其の旱魃が、全世界の半分に於ける饑饉の慘狀を前兆してゐるのだから堪らない。而もロンドンは盛んな社交期で、はしやぎきつてゐる。一九一三年（大戰勃發の前年）は大タンゴ歳（タンゴ踊の流行した歳）で、それに續いて起つた諸事件から考へて、バーンステーブル氏は今日まで、其の年を以て世界史上に於ける最も愚劣な年だとしてゐたが、今年は又それよりも一層愚劣な年である。雜誌『スタア』の紙上には、諸種の競技や流行物に關するケバ〳〵しい記事の餘白にいつもの通り兇報の數々が載つてゐる。戰爭はロシヤとポーランドとの間に、それからアイルランドにも、小アジヤにも、印度の內地にも、東部シベリヤにも續いてゐる。恐るべき殺人事件が三つも新らしく起つてゐる。炭坑夫は今だに締めだされて居り、技術工の大ストライは今にも起りそうにしてゐる。それに下り列車は滿員で腰かける座席がなく、而も二十分おくれて發車したのであつた。

彼は妻の置手紙を發見した。それに依ると、ウインブルドンにゐる彼女のイトコ等が電報をよこして、ラングラン孃その他あらゆるチヤンピオン達と一緒に、思ひがけなくテニス見物をする機會と云ふので、子供等を連れてそこに出かける。歸りは遲くなる。本當に第一流のテニスを見る事は、自分等の競技に取つて此の上もない爲になる。それに今晩は女中の外出日だが、たまに一晩ぐらゐ、獨りで內に居てもいゝでせう。女中達は外出前に、何か冷たい食事を拵へて置くでせう、と云ふのであつた。

バーンステーブル氏は此の手紙を讀んで、仕方がないと思つた。食事をやりながら、彼れの目は或パンフレツトに注がれてゐた。それは支那人の友達が送つてくれたので、如何に日本人が故意を以て、支那に殘存する文明と敎育とを破

壞しつゝあるかを示したのであつた。

それから彼は食事を終つて、裏の小屋に腰かけてパイプをくゆらしてゐた時、その時はじめて、斯うして獨り家に殘されたといふ事が、彼の爲に何を意味するかに氣がついた。

そこで彼は急に活動的になつた。彼はビーヴ氏に電話をかけて、醫者の診斷を彼に告げ、自由評論の事務が丁度いま特に手放し得る狀態に在る事を說明して、遂に休暇を貰つた。それから彼は自分の寢室に行つて、旅行に携帶すべき品品を大急ぎで選りだし、それを古いグラッドストン袋（それならば持出しても、急には氣づかれそうにないから）その袋に詰めこんで、自動車の腰掛臺の下に入れた。それが濟むと、彼は妻に宛てた手紙を書き、それを用心ぶかく胸の內かくしにしまつた。

次に彼は自動車部屋に錠をおろし、パイプをくわえ、『ヨーロッパの破產』といふ立派な本を持つて、庭のズック椅子に身を落ちつけた。家內の者共が歸つて來る前に、出來るだけ無邪氣な振りと心持とになつてゐたいのであつた。

妻が歸つた時、彼はさりげなく、どうも神經衰弱に罹つたようだと話し、明日はロンドンに行つて醫者に見て貰ふ事にしてあると話した。

バーンステープル夫人は自分で適當な醫者を見つけると云ひだしたが、イヤそれについてはビーヴ氏の方の都合がある、ビーヴ氏は自分で掛つた事のある醫者を馬鹿に信用してるのだからと云ふので、彼はヤットそれを逃れた。それからバーンステープル夫人が、內の者も皆な一度ゆつくり休養がしたいと云ひ出した時、彼は只あやふやな態度で輕く鼻を鳴らした。

斯樣にしてバーンステープル氏は、何等の乘越えがたき反對を起させる事なしに、數週間の休暇に必要な總ての荷物を

持つて、安々と自分の家から逃れ出る事が出來た。翌朝、彼はロンドンに向つて出發した。途中の交通は隨分頻繁であつたが、決してうるさくはなかつた。そして『黄禍（エロー・ペネル）』は如何にも氣持よく走つて、『黄金の希望（ゴールデン・ホープ）』とでも名づけたい位であつた。カンバウエルで、彼は新カンバウエル街道に曲り、ヴオークスホール橋通の辻で郵便局に乘りつけた。彼はビク〳〵ものではあつたが、又頗る得意であつた。彼は郵便局にはいつて妻に電報を打つた『ドクトル・パガンが云ふ。彼は大至急に閑靜な處で休養せよ。直ちに湖水地方に出かける。こんな事だらうと思つてカバンと入用品は持つて來てる。委細手紙。』

それから彼は郵便局を出て、ポケツトを探して、前夜用心ぶかく書いておいた、あの手紙を取出して投函した。その手紙は、極度の神經衰弱を暗示する爲に、態と滅茶書きにしてあつた。その手紙に依ると、ドクトル・パガンは即時の休養を命じ、且つ北の方にブラ〳〵歩く事を勸めた。それで數日間、一切の書信と絶縁するがいゝと思ふ。自分は何か事が起らない限り、面倒だから手紙は書かない。便りのないのは無事な證據だ。何處か手紙の受付所が見つかり次第、電報を打つか、本當の急用だけ云つてよこす事にしてほしい。

それが濟むと、彼は再び車に乘つたが、何とも云はれぬ自由の感じがして、昔し初めてはいつた學校から初めて休暇を貰つた其の時以後、こんな氣持のした事がなかつた。彼は大北街道に向つて進んだが、ハイド・パークの角の人込で、巡査に注意され、ナイト橋の方へ廻つた。それから又、バス街道がオクスフオード街道から分岐する角の處で、大きな荷車に邪魔をされて、バス街道にそれて行つた。然しそんな事は餘りに苦にならない。どの道を通つても變つた處に行かれる。北の方にはあとで行けばいゝ。

(三)

其の日は、一九二一年の大旱魃の特徴、カラリとした照りつゞきの中の一日であつた。蒸し暑いような氣味は少しもなかつた。何となく一體にせい〳〵して、それがバーンステーブル氏の氣分と混りあつて、彼れの前途に如何にも愉快な冒險がありさうに思はれた。希望が既に彼れの上に戻つてゐた。彼は、此の道で世間の外に出た事を知つてゐた。然し彼はまだ、此の道が如何に全く世間の外に彼を連れて行きつゝあるかの、些少の疑念も持つてゐなかつた。只だ彼は今にもそこらの田舍宿に立寄つて晝食でもすれば、それだけでも面白い小冒險だと思つてゐた。若し又、途中でさびしくなつたら、誰かを車に乘せてやつて話をすればよい。此の場合人を乘せてやる事は何でもない。彼れの背中が大體に於いてシドナムと自由評論社とに向いてゐる以上、どちらの道に行かうと、彼は少しも構はないのであつたから。

スラウの沼から少し行つた處で、巨大な灰色の遊覽自動車が一つ、後ろから彼を通りこした。彼はビクリとして少し進路をゆがめた。其の遊覽車は音もさせずに彼れの並びに進んで來て、(彼れの車は、其ほんの少しばかり不正確な速度計によると、優に一時間廿七マイルを走つてゐたのだが)、其の遊覽車は一瞬間に彼を拔いてしまつた。それの乘客は三人の紳士と一人の貴婦人とであつた。彼等は跡から來る何物かに氣を引かれてゐるらしく、皆な立ちあがつて後ろを振向いてゐた。彼等は餘り早く通り過ぎたので、彼は十分氣をとめて見る暇もなかつたが、貴婦人は正に判然と紛ふ方もなく、まばゆいほど綺麗であつた。そして彼に最も近くゐた紳士は、一種特異な、いたづら者らしい、而も年配らしい顏つきであつた。

彼が此の追ひ拔きの騷ぎからまだ回復し得ない中に、有史以前の蜥蜴のやうな聲がして、又一つの車が彼を追ひ拔きつゝある事を彼に警告した。これは、バーンステーブル氏が追ひ拔かれる時に好む所の遣口であつた。即ち相談づくであつた。彼は速力を緩め、道路の中央に對する總ての要求權を放棄し、早く通過せよと手振な[illegible]た。すると、大きな滑

らかな早いリムジーン（箱型自動車）が、彼の許可に乘じて、彼の右側に於ける道路の三十餘フイートばかりを使用した。其のリムジーンは澤山荷物を積んでゐたが馭者の隣りに腰かけてゐる眼鏡の青年紳士の外には、一人の乘客も見えなかつた。そして其の車は、遊覽車の跡についてツイ向ふの角をスルリと曲つて行つた。

如何に手工的の洗足器とは云へ、斯ういふ横柄な遣口で、大道の眞中に於て、此の好天氣の朝に於いて、乘り越される事は有りがたくない。バーンステープル氏の加速器は降つた。そして平生の用心ぶかい乘方に比べると、たしかに一時間十マイル增し速力で、其の曲り角を曲つた、見ると行く手の道には何物もない。

實際、行く手の道に餘り物が無さすぎた。道路は彼の前方に、恐らく一マイルの三分の一ばかり眞直に延びてゐる左側には、よく刈りこんだ低い生籬があり、飛び飛びの立木があり、平らな野原があり、二三の傾いた小家があり、遠く離れてポプラの林があり、そして遙かの彼方にウインゾル城が見えてゐる。右側には、平らな野原があり、小さな宿屋が一軒あり、そして其の背景に樹木の茂つた低い丘がある，此の靜かな風景の中に一つ目立つてゐる物は、メイヅンベツドの川岸の或ホテルの廣告板であつた。彼の前面には、かげらふのやうな光線のゆらめきが宙中にあり、又埃りの渦まきが二つ三つ道ばたに舞ひあがつてゐた。そして灰色の遊覽車の影もなく、リムジーンの影もなかつた。

此の事實に對して、バーンステープル氏が十分の驚きを感ずるまでには、ザツト二分間もかゝつた。右側にも左側にもあの車のどちらにしてもが姿を隱せるような脇道はありそうにない。若し又、彼等が既に向ふの曲り角を廻つたものとすれば、彼等は一時間二三百マイルの割で走つた事になる。

何か不審を感じた時、直ぐに速力を緩めるのが、バーンステープル氏の結構な習慣であつた。彼は今も速力を緩めた。彼は恐らく一時間十五マイルの速度で進みつゝ、此の不思議な失踪について何かの手掛りを求めるべく、口をポカンと

あけて空虚な風景の中を見つめてゐた。そして不思議な事には、彼は自分が何等か危險の中にあるといふ、少しの感じも持たなかつた。

その時、彼の車が何かにブツつかつたような氣がして、そして滑つた。一二瞬間、バーンステープル氏が全く氣を失つたほど、それほど烈しく車はツル〳〵と滑つた。車が滑る時にはどうすればよいのか、彼はそれを覺えてゐなかつた。何んでも只、車の滑る方向に梶を取るのだといふ事だけは漠然と思ひだしたが、此の激動の場合、どちらの方向に滑つてゐるのか、それが分らなかつた。

後に思ひ出した事だが、彼は其の瞬間に或る音響を聞いた。それは正に、累積された強壓の頂點(クライマツクス)として來る所の、其の同じ音であり、琵琶の糸の切れたような鋭どい音であり、又痲醉に掛つた人が、知覺喪失の終り——或は初め——に聞く所の音であつた。

彼は右側の生籬の方に捩りまがるような氣がしてゐたのだが、今見ると、彼の前方には又道が開けてゐる。彼は加速器を動かした、速力を緩めた、やがて停止した。彼は實に絶大の驚愕を以て停止した。

今此の道は、半秒時間前に彼が進んでゐた道とは、全く違つた別の道であつた。生籬も變つてゐる、樹木も變つてゐる、ウインソル城は消えうせてゐる、そして——僅かの代償物として——あの大きなリムジーンが再び見えてゐる。リムジーンは二百ヤードばかり彼方の道ばたに立つてゐた。

第二章　不思議な道路

(一)

暫らくの間、バーンステープル氏の注意は、甚だ不平等に二分されてゐた。即ちリムジーン（それの乘客は今車臺から降りる處であつたが）それと、周圍の光景との間に。所で實際、此の役者が餘りに珍らしく餘りに美しいので、向ふに居るあの人達の事など念頭に浮べる暇はないのだが、それが今ま幾分なり彼れの意識の中に入り來るのは、其の人達が必ず彼れの感嘆と驚愕とを分つ者であるだらうし、從つて又、彼れの心中に増大しつゝある此の恐ろしい當惑を、分るように說明もして呉れ、救つても呉れるが知れないといふ只その賴みからであつた。

道路その者は、普通の英國の街道とは違ひ、（即ち小石を詰めこんでタールで汚なく塗りつぶし、其の上が砂利や、泥や、馬糞などで蔽はれて居るのとは違ひ）、見たところガラスで作つたようで、或る處々は澄んだ水のようであり、或る處々は乳光色であり、そして柔らかな色の斑紋があつたり、伏せこみの金砂子の実が豐かに光つたりしてゐる。幅は多分十二ヤードか十五ヤードで、兩側には芝草の緣がある。バーンステープル氏は熟練な、忠實な芝草の刈手であつたが、こゝの芝草は彼が今までに曾て見た事のない、美しい草であつた。そして其の向ふには幅の廣い花壇があつた。バーンステープル氏が車上でアツケに取られてゐた其の場所、及び其の前方にも後方にも、恐らく三十ヤードばかりづゝ、此の花壇は忘れな草のような青い色をした、何か珍らしい花の眞盛りであつた。それから先には、春の高い純白な穗花が次第に多く青花の中に交つて、遂には全く地上から青色を驅逐してゐる。道の反對側では、此の同じ穗花と交りあつて、矢張バーンステープル氏の見た事のない、莢豆のなつた草叢があつて、其の花の色が青と艷紫と紫との諸列を經て强烈な深紅の列に轉じてゐる。此の見事な色々の花のもりがあつた向ふには、廣い平らな牧場があつて、クリーム色の牝牛が草を食んでゐた。近くにゐた三疋は、多分バーンステープル氏が不意に現はれた爲だらう、少し驚いた樣子で反嚼をやりながら柔和な思案らしい目で彼方を見つめた。彼等は南歐および印度の牛のやうに、長い角と喉の肉垂

とを持つてゐた。バーンステープル氏の目は此の深切な動物達から、搖ぶたの木の長い列へ次に白色と金色との圓柱の列へ、それから雪を戴いた山々の背景へと移つて行つた。

牝牛を外にしては、バーンステープル氏は他に一個の生き物をも見る事が出來なかつた。只だ見えるのはリムジーンのそばに立つてゐる人間の小群ばかりであつた。彼等はジツと立つたまゝで、あたりを見廻してゐるようであつた。何か不平をこぼすらしい聲の響きが彼に聞えた。

急に強いパチ〳〵といふ爆音が背後に聞えて、バーンステープル氏の注意がうしろに向いた。彼が今そちらから來たと思はれる方向の道に沿うて、ツイ僅か前に破壊されたと見える石造の家のくづれ跡があつた。それのそばにはツイ今ま捩ぢ仆され、引き裂かれたばかりの、大きな林檎の木が二本あつて何かの爆發の爲らしく見えた。くづれ跡の中心からは一筋の烟が立ちのぼつてゐた。先きの爆音は即ち何かに火が燃えついたのであつた。此の滅茶々々にされた林檎の木のゆがみねぢけた樣を見たので、バーンステープル氏ははじめて氣がついたのだが、自分の近くにある道ばたの前の中にも、今しがた一陣の烈風にでも吹きさらされたらしく、一方に仆れてゐるのがあつた。けれども彼は爆發を聞いた覺えもなく、風に吹かれた覺もない。

彼は暫く打眺めて、それから説明を求めるかの如くリムジーンの方に向いた。あちらの連中の三人は今ま彼れの方に向いてやつて來かけてゐた。一番先には、脊の高い、痩せた、灰色の髮をした紳士が、フエルト帽を冠り、自動車用の長い塵よけ外套を着て歩んでゐた。彼は仰向いた小さい頬と、金縁の眼鏡のバネを辛うじて支へるに足る小さい鼻とを持つてゐた。バーンステープル氏は再び自動車を動かして、そろ〳〵と彼等を出迎へた。

彼は最早や能域内に達したと考へた時、運轉をとめた。そして『黄禍(イエローペーリ)』の横側に頭を突きだして問を發した。同時に

脊の高い灰色の髮の紳士も、殆んど同じやうな問を發した。
『一體こゝは何處でせう。あなたにはお分りですか。』

(二)

『五分間前には、メーヅンヘッド街道だつたんですが。スラウの沼のそばの。』バーンステープル氏は云つた。
『その通り！』脊の高い紳士は鹿爪らしい議論調子で云つた。『その通り！　そして私は主張する、これが今でもメーヅンヘット街道でないと假定すべき毫末の理由もない。』
議論家の挑戰的態度が其の聲の中に鳴り響いてゐた。
『所がどうもメーヅンヘッド街道らしくない。』バーンステープル氏が云つた。
『同感です！。然し我々は外觀に依つて判斷すべきであるか、それとも自分の經驗の直接の連續に依つて判斷すべきであるか。我々はメーヅンヘット街道からこゝに來た。メーヅンヘット街道がこゝに連續してゐる。故に私は主張する、こゝはメーヅンヘット街道である。』
『あの向ふの山が？』バーンステープル氏は考へこんだ。
『ウインゾル城があそこにあるべきです。』脊の高い紳士は、將棊の棄駒をするかのやうに、得意らしく斯う云つた。
『五分間前にはあそこに在つたのです』バーンステープル氏は云つた。
『だからあの山が何かの湖林(カムフラーヂュ)化してある事は明白だ。』脊の高い紳士は勝ちほこるらしく云つた。『そして此の全體の事物が、謂ゆる拵へ物ですな。』
『それにしては、隨分よく拔へたものですなア。』バーンステープル氏は云つた。

こゝで話がとぎれた。その前にバーンステーブル氏は、脊の高い紳士の連れの人達を見わたした。脊の高い紳士に、彼が知りきつてゐる人であつた。公けの集會や宴會で幾十遍も見た事がある。即ち保守黨の大領袖たるセシルバーレー氏であつた。彼は政治家として著名であるばかりでなく、一個の紳士としても、哲學者としても、博識家としても、優秀な人物であつた。彼れの後に立つてゐるのは脊の低い、頑丈な、中年の若者で、バーンステーブル氏の知らない人だが、その人づきのわるい風采が片眼鏡の爲に甚だしく誇大されてゐた。三番目の人はこれも馴染のある顔だが、バーンステーブル氏は暫らくそれを誰れとも見定め得なかつた。彼は綺麗に髭を剃つた、圓い、ふつくりした頬で、一體に營養のいゝからだつきであつた。その服裝から察すると、高教派の牧師か、或はローマカ・トリック教の全盛の僧侶と見えた。

今度は片眼鏡の青年が氣のぬけた一種の金切聲で話しだした。『私は一月にもならない以前、タプロウ宮に此の道で行つたのですが、其の時には斷じてこんな物は途中にありませんでした。』

『勿論、不審の點はある。』バーレー氏は大いに意氣込んで云つた。『不審の點の頗る多い事は私も承認する。それでも私は猶ほ信じたい。私の提案の大體はこわれない。』

『あなたは、これをメーヅンヘツト街道とお考にならないのですね。』片眼鏡の紳士があからさまにバーンステーブル氏に云つた。

『拵へ物にしては餘り完全の樣です。』バーンステーブル氏は溫和に自說を固執した。

『けれども君!』バーレー氏は抗議した。『此の街道は草花の栽培で評判な處です。時によると彼等は優に驚くべき陳列を行ふ。勿論、廣告の爲に。』

『それならなぜ我々は直ぐに此のまゝタプロウ宮に行かないのですか。』片眼鏡の紳士が問ふた。

『それは君』と、バーレー氏は、少し突ッけんどんな調子で、（既に明かに分つてゐる事を、飽くまで知らぬ顔で頑張り通さうとする時、誰でも自然にさうなるやうな、突ッけんどんな調子で）云つた。『ルーパートが、我々は餘所の世界に來てるんだと云つて、前進しようとしないぢやないか。それだからさ。彼はいつでも空想に耽る癖がある。彼は、存在しない物が存在し得ると考へる。それで彼は今、一種の科學小説の中に在つて、全く我々の世界の外に在ると想像してゐる。即ち他の次元（ディメンション）の中に在ると考へてゐる。私は折々さう思ふのだが、ルーパートが若し―自分で小説を實行しないで―小説書きになつてゐたら、社會の爲に一層有益であつたらう。若し彼れの秘書たる君が彼に説いて、ウインゾルの人達（宮中の人達）との午餐に間に合ふやうに、彼をタプロウに行かしめ得ると思ふならば、……』

バーレ氏は、言葉で現はすには不適當と思つた自分の考へを、手眞似で指し示した。

バーンステープル氏は既に先程から氣がついてゐたのだが、向ふのリムジーンのそばの花の藪の中を、ゆるやかに動きつゝ熱心に踏査してゐる、黒いバンドのついた灰色の高帽をかぶつた、赤茶けた顔色―毎度漫畫で馴染のある―人物の姿が見えてゐた。して見ると、これが有名な軍事大臣ルーパート・キヤツキル其人に相違ない。バーンステープル氏は忽ちにして、此の甚だしく冒險的な政治家と全く意見の一致することを發見した。こゝは正に別世界である。バーンステープル氏は車から降りてバーレー氏に話しかけた。『私は斯う思ひますが、今すぐそこに燃えてゐるアノ建物を踏査したなら、こゝが何處であるかについて、必ず大いに得る所があるでせう。私はツイ先つき、あの家のうしろの坂に横たはつてゐる人影を見たやうに思ひます。若し我々が此の手ずま師の一人を見つけだしさへすれば……』

彼は此の最後の言葉を未完のまゝに殘した。手ずまを使はれてゐるなどゝは、彼は一瞬間も信じないのだから。バーレー氏もこの最後の五分間、大いに其の主張を下げてゐた。

四人は皆な畑のあがつてゐる壞れ跡に顏を向けた。

『人がひとりも見えないとは實に不思議だ。』片眼鏡の紳士は地平面を見まはしながら云つた。

『兎にかく何が燃えてゐるかを見屆けるに差支はない。』バーレー氏はそう云つて先に立ち、豫期を持つた賢こげた顏を上向にして、折れた木の間を壞れた家の方に進んで行つた。

然るにまだ十數歩も歩かない中に、此の一群の注意はリムジーンに呼び戻された。其の車の中に殘つてゐた貴婦人から聲高い恐怖の叫びが發せられたのであつた。

（三）

『何んといふ事だ、一體あれは！』バーレー氏は心から憤怒した口氣で叫んだ。『こんな事を防止する位の警察規則がなくてどうするんだ。』

『あれはキット旅稼ぎの見世物の檻からでも出て來たのでせう。』片眼鏡の紳士は云つた。『どうしたら可いでせう。』

『あれは馴れてゐるようですよ。』バーンステープル氏はそう云つたが、別段その理論を試しにかけて見る氣もなかつた。

『何しろあれぢや誰だつてビックリするだらうぢやないか。』バーレー氏が云つた。そして物やさしい聲をあげて叫んだ。『騷ぐことないよ、ステラ！。キットよく馴れてるんだから構はないよ。そんなに日傘で怒らしちやいけない。飛びかゝるかも知れないよ。ステラア！』

「あれ」といふのは美しい斑のある大きな豹で、花壇の間からノソ〳〵と出て來て、ガラス道路の眞中のリムジーンのそばに、大きな猫のように坐りこんだのであつた。貴婦人はこういふ場合の最良策だといふ口傳に從つてハラソルを豹に向けて出來るだけ早くそれを開いたり閉ぢたりしたので、豹は呆れてそれを見てゐるといふ表情で、細目をしばたゝ

きながら、頭を律動的に振り動かしてゐた。運轉手は車のうしろに逃げこんでゐた。ルーパート・キヤツキルは、花の中に膝まで埋もれて、そちらを見つめて立つてゐた。彼は、バーレー氏や其の連れの人達が注意を引かれた其の同じ叫びで、初めて動物の存在に氣がついたのであるらしかつた。

キヤツキル氏が先づ行動を開始した。そして其の行動が彼れの氣概を示した。それは思慮ぶかく、且つ大膽であつた。

『傘をバタ〳〵させるのをおやめなさい、ステラ夫人。私が今に直ぐ奴を取つちめますから。』

彼は車を迂回して面と豹に向ひあふ處に來た。それから暫らくジツトとして、其の灰色のフロツクコートと、黒いバンドのついた高帽との、決然たる姿を見せてやつといふ態度で、立つてゐた。彼は用心ぶかい片手を差しだした。但しそれも豹を驚かせない爲に餘り急でなく、そして『プウシイ！』と呼びかけた。（プツシイは猫を普通に呼ぶ言葉）

豹はステラ夫人の傘がとまつたのに安心して、興味と好奇心とを以て彼を見つめた。彼は更に近く寄つた。豹は鼻先を突きだして香を嗅いだ。

『此奴が私に撫でさせてくれさへすればいいのだが。』キヤツキル氏は斯う云つて、手の屆く處まで來た。

豹は不信用の表情をして、其の差しだされた手を嗅いだ。そして忽然、一つクシヤミをした。キヤツキル氏は數歩あとに退いた。豹は又一つ前よりはズツト烈しいクシヤミをして、暫らくキヤツキル氏を咎めるように見つめた後、輕く花壇の上を飛び越えて、白と金との圓柱の別の方へ行つてしまつた。牧場に草を食んでゐた牛共が、豹の通るのを見て少しも驚いた樣子をしないのに、バーンステープル氏は氣がついた。

キヤツキル氏は聊か大きくなつて道路の中央に立つてゐた『如何なる動物も』（彼は語り出てた）『人間の目の斷乎たる睨みには對抗し得ない。如何なる動物と雖も。そこが唯物論者諸君に取つての躓だ。……ステラ夫人、セシル氏

の處へ行きませうか。何かそこに見る物があるらしい。あの小さい黄色の車の男が、こゝの事を知つてるのかも知れないですからね。』

彼は夫人を助けて車から降し、二人でバーンステープル氏の仲間の方へやつて來た。その時こちらでは、再び燃えてゐる家の方へ向つてゐた。運轉手は、何が起るとも知れない此の奇怪な世界に、獨りでリムジーンと共に殘される事は有りがたくないと見えて、敬意の許す限り接近して後について來た。

第三章　美しい人間

（一）

其の小さい家の火は燃えさかるのではないらしかつた。それから立登る煙は、バーンステープル氏が初めてそれを見つけた時に比べて、今は餘ほど少くなつてゐた。近づいて見ると、その潰れた石室の間に、輝く金屬品の拗ぢまげられたのや、こわれたガラスのかけらなどが澤山あつた。學術上の機械裝置の爆發といふ暗示が頗る強く感じられた。それから一行の全部が殆んど同時に、壞れ跡のうしろの芝生の斜面にころがつてゐる人の體を見つけた。それは壯年の男子の體で、腕輪や首かざりや腰紐などの外、全く裸體で、そして血が口と鼻から流れだしてゐた。バーンステープル氏は一種の畏敬の念を以て、此の斃れた人體の傍らに膝まづき、其の靜かな心臟にさわつた。彼はこれほど美くしい顔と體を見た事がなかつた。

『死んでる。』彼はさゝやいだ。

『アラ！　もひとつ！』片眼鏡の紳士の鋭どい聲が叫んだ。

彼は、壞れ殘りの壁の爲にバーンステーブル氏に見えない或物に指さしてゐた。バーンステーブル氏は起きあがつて、われ石の盛りあがつた上に踏みのぼり、それでヤット第二の發見物を見る事が出來た。それは細っそりした娘で、前の男と同じように裸體であつた。彼女は明らかに、恐ろしい暴力で壁に叩きつけられ、其まゝ殺されたものであつた。彼女の頭蓋骨はうしろから叩きつぶされてゐたが、其の顏は少しもゆがんでゐない。その整つた口と、その緣がゝつた灰色の目とは少し開いて、その顏つきは恰かも、何か六かしい、然し面白い問題を今も考へこんでゐる人のそれであつた。彼女はどうしても死んでゐるとは見えないで、只うつとりしてゐるようであつた。片手にはまだガラスの柄のついた銅製の器械を握つてゐたが、片手はグニヤリと垂れさがつてゐた。

數秒の間、誰も口を開かなかつた。彼等は恰かも皆、彼女の思索の流れを遮ぎる事を恐れたかのやうであつた。

その時、バーンステーブル氏は、かの僧侶らしい紳士が自分のうしろで、極く靜かに語る聲を聞いた。『何といふ完全な姿でせう!』

『私は承認する、私は間違つてゐた』バーレー氏はおもむろに斯う云つた。『私は間違つてゐた……これは決して地上の人間でない。明かにそうだ。此の故に又、我々は地球上に居るのでない。何事が起つたのか、又何處に我々が來てゐるのか、それには私の想像が及ばない。十分なる證據の前には、私は曾て自說を撤回するに躊躇した事がない。今まで我々の居る此の世界は、我々の世界でない。これは何か別の………』

彼は暫らく中絕した。『これは何か別の、眞に不可思議な世界である。』

『すると、ウインゾルの人達は、我々なしに午餐會をやるのだらう。』チヤツキル氏は別段殘念そうにもなく斯う云つた。

『然し一體』僧職紳士が云つた。『こゝは何の世界で、我々はどうしてはいつて來たのだらう。』

『さアこれです！』バーレー氏はおだやかに云つた。『そこに行くと、もう私の貧弱なる想像力以外です。我々は今ここに、吾々の世界に似て、そして又、妙に違つた或る世界に來て居る。此の世界はどうかして我々の世界と關係してゐる、さもなければ我々がこゝに來られる筈がない。然し如何なる關係の仕方をしてゐるかは、私は白狀する、私に取つて全くの神秘である。或は、我々の感受する空間の次元と違つた、他の次元にはいつてゐるかも知れない。然しそんなヂメションの事など考へると、私の貧弱な頭はグラ〳〵する。私は……私は昏迷してゐる……昏迷してゐる。』

『アインシュタイン！』片眼鏡の紳士は簡潔に、而も明白な自負を以て口を入れた。

『そうだ！』バーレー氏は云つた。『アインシュタインはこれを解釋して呉れるかも知れない。或は、あの老ハルデーンなら、これを說明しようとして、あの脂肪の多いヘーゲル哲學で我々を煙に卷くかも知れない。然し私はハルデーンでもなく、アインシュタインでもない。兎にかく我々は今こゝに或る世界—それは、あらゆる實際上の效果として、此の週末の休暇に於ける我々の諸種の約束に對する效果をも含めて、「ノーホエヤの國」（何處とも知れぬ國）——に來てゐるのだ若し諸君がそれをギリシヤ語で云ひたいならば、我々は即ち「ユトピヤの國」（空想の國、理想の國）に來て居るのだ。そして再びこゝから出られそうな道は差當り無いのだから、理性ある人間として我々の爲すべき事は、最も善く之を利用するに在る。そして機會の生ずるを待つに在る。所で此の世界は確かに愛すべき世界である。驚くべきよりも一層多く愛すべきである。それに人間—心を持つた人間も住んで居る。こゝにある此の總ての材料から判斷すると、此の世界では實驗化學が、殆んど田園詩的とも云ふべき狀態の下に於いて、追求されてゐる——實に極度まで追求されてゐる。化學——そして裸體。私は敢て告白する。此の二人（明らかに今こゝで爆破されたと見える此の二人（明らかに今こゝで爆破されたと見える此の二人を、ギリシヤの神々と見るべきか、裸體の野蠻人と見るべきかは、全く個人的趣味だと考へ

られる。但し私は寧ろギリシャの神——及び女神と見るに傾むいてゐる。

『只だ然し、不死の神が二人死んでゐるといふ事が少しく思考の上の困難を生ずる。』片眼鏡の紳士が急所を突いたといふ調子で交ぜかへした。

バーレー氏はそれに考へようとしてゐた。そして其の激した表情から判斷すると、其の答は譴責的のものでありさうだつた。然るに彼は、其の答はしないで、頓狂な叫びを發して、二人の新來者に對面すべく振返つた。皆の人達も同時に其の新來者に氣がついた。剛健な二人のアポロ(ギリシャの太陽神)が壞れ跡のほとりに立つて、我が地球人を見つめてゐた。彼等が我々を驚かしたのと、少なくとも同じほど大きな驚きを以て、

一人が話しだした。するとバーンステープル氏は、それが理解される言葉として自分の心に響きわたるのを見て、云ふに云はれぬ驚きを感じた。

『赤い神々よ』ユトピヤ人は叫んだ。『君達は何者だ。又どうして此の世界にはいつて來た。』

(それが英語だ!。若し彼等がギリシャ語を話したのなら、遙かに驚きが少なかつたらう。然し兎にかく彼等が人間に知られた言語を話すといふのが、奇怪至極の事であつた。)

(二)

セシルバーレー氏は一行中で慌て方が一番少なかつた。『相』彼は云つた。『これで我々は多少とも判然とした事を知る望みが出來た。——理性のある、言語のある人間と對面したのであるから。』

彼は一咳して、其の二つの長い神經的な手で長い塵よけの外套の折襟を攫み、一行の代言者たる任務を取つた。諸君我々は我々のこゝに來た事について、全く其の理由を說明し得ないのです。我々は諸君が呆れて居られる通りに呆れて

ゐる。我々は自分の世界から、忽然として諸君の世界の中に我々自身を見出したのです。』

『君等は外の世界から來たのか。』

『そうです。全く別の世界から。我々はそこに天然の、本來の立場を持つてゐるのです。我々は其の我々の世界に於いて、――そうです――或る乘物に乘つて旅行してゐた中、忽然としてこゝに來てゐたのです。侵入者なる事は自認しますが、然し御安心下さい、全く無害の、無計畫の侵入者です。』

『では君達は、アーデンとグリーンレーキとが、どうして實驗に失敗したのか、又どうして死んだのか、それは知らないのですね。』

『若しアーデンとグリーンレーキといふのが、此の二人の美しい青年の名であるならば、我々はそれに就いて何も知らないのです。只、我々は諸君の見られる通りに、こゝに仆れてゐる彼等を發見したのです。我々はあの街道からこちらへ、何かの手がゝりを、つまりその、何かを聞きたいと思つて……。』

　彼はこの言葉尻を曖昧に消してしまつた。

ユトピヤ人(便宜のため姑くそう呼んで置くが)――初め物を云つたユトピヤ人は、今度は連れの一人に目合はせして、無言で何かを問うてゐるようであつた。それから彼は再び地球人の方を向いて語つた。その澄みきつた聲が再び響きわたつた。然しそれは、耳に聞えるのではなく、頭の中に聞えるように、バーンステープル氏には感じられた。

『君達は此の破損物を踏み散らさないが宜しい。君達は皆な街道に返るが宜しい。私と一緒に來たまへ。こゝにゐる私の兄弟が此の火の始末をするだらう。そして死んだ兄弟達に對して然るべき處置をするだらう。そして後程、此の場所は、こゝでやつてゐた事柄に通曉した人達が來て、いろ〳〵取調をするだらう。』

『我々は全然、諸君の待遇に依頼する外はない。』バーレー氏は云つた。『我々は全然、諸君のお指圖に從ひます。繰返して申しますが、此の邂逅は決して我々の態と求めたものではありません。』

『但し、かういふ可能性があると知つてたら、態と求めたかも知れない。』キヤツキル氏が一般に向つて斯う云つた。そして其の承認を求めるかの如くバーンステープル氏に目を向けた。そして其、『我々は諸君の此の世界を、極めて、興味ぶかく感じます。』

『實に、只だ一見したのみで、極めて興味ぶかい世界です。』片眼鏡の紳士が裏書した。

一同がユトピヤ人とバーレー氏との跡について、深い花叢の中を街道の方へ返つて行く時、バーンステープル氏は自分のそばに、ステラ夫人が絹ずれの音を立てゝゐるのを發見した。彼女の言葉が、此の驚異の充ち溢れた際に於いて平氣な、何者にも屈服せざる尋常さを持つてゐるのが、ひどくバーンステープル氏を驚かせた。『あなたには何處かで――午餐か何かでお目にかゝらなかつたでせうか、ミスタ……………』

これが只だ見せかけに過ぎないのであらうか。彼は暫らくポカンと彼女を眺めた後、初めて彼女の云ひかけを繼ぎました。

『バーンステープル。』

『ミスタ・バーンステープル？』

彼も漸く彼女と同じに心持になつて來た。

『イヤ、私はまだお目に掛つた事はありません、ステラ夫人。勿論お顏はよく週刊附錄の寫眞や何かで存じて居りますが。』

『あなたお聞きでしたか、セシル氏がツイ先つき云つてた事を。こゝはユトピヤだとか。』
『ユトピヤと呼んでもいゝと、セシル氏は云はれました。』
『セシル氏らしいわね。だけど、これがユトピヤでせうか。本當にユトピヤでせうか。』
『わたし、しよつちゆうユトピヤが見たいと思つたんですわ。』夫人はバーンステープル氏の答を待たずに話しつゞけた。
『ほんとに立派な青年ですわね、あの二人のユトピヤ人は。あの人達はキツト、ユトピヤの貴族なんでせう、――服裝はゾンザイだけれど。イヤ、あの服裝の爲にとも云へる。……。』
バーンステープル氏はこゝで丁度好い事を思ひついた。『ステラ夫人、私はバーレー氏とキヤツキル氏とは存じて居りますが、外の二人の若い紳士、片眼鏡の紳士と僧職の紳士とはどなたでせう、お教へ下さいませんでせうか。二人とも直ぐ後ろにお見えですが。』
ステラ夫人は愛相よく打解けた小聲でそれを告げた。『片眼鏡はね、――わたし綴りで云ひますわ――F・R・E・D・D・Y・M・U・S・H。ね、旨いでせう。あの人は若い詩人達を見つけたり、それから何んでも文藝上の事には恐ろしく明るいんですよ。そしてルーパートの秘書ですの。若しか文藝院が出來たら、あの人キツトそれにはいると云ふ評判です。あの人はそりやア皮肉屋ですよ。私達がタブロウに行きかけてゐたのは、スツカリ昔し風に、學者ぞろひの會合をやる筈でしたの。勿論それは、ウインゾルの人達の歸られた後の事ですけれど。……ミスタ・ゴツスも來る筈だし、マクス・ビヤボームも、それからまだそんな人達が大勢。……だけど近頃は、いつでも變な事ばかりあるんだから。ほんとに變な事ばかり……思ひかけない……そして餘んまり多過ぎるんですもの。……それからアノ僧職の人はね、………』彼女はちよつと後ろを見返して、噂の聲の人が聞える處に居るか否かを突きとめて、『あの人は教父アマートン。

社會の罪とか、そんなような事ばかり、いつでも直言する人ですの。だけどおかしい事には、教壇の外では、內氣な、おとなしい人で、フォークやプーンを持つと、おど〳〵してる位なんですよ。不似合ぢやありませんか。』

『まつたくですね。』バーンステーブル氏は叫んだ。『それで私も思ひだしました。あの人の顏は知つてゐたんですけれど、どうも誰だか分らなかつたのです。どうも有りがとう、ステラ夫人。』

（三）

バーンステーブル氏に取つては、これらの有名な、お歷々の人達と一緒にゐる事、殊にステラ夫人と一緒にゐる事が何だか頗る氣丈夫に思はれた。彼女は實際、賴もしかつた。彼女は懷かしい舊世界を甚だ多く保つてゐて、そして明らかに、苟くも機會のあり次第、此の新世界を舊世界の標準に切り從へようと構へてゐた。彼女は、バーンステーブル氏を溺らし盡さうとした所の、其の驚異と美との多くを拒否した。彼女と其の仲間の人達とに會ふ事だけでも、彼れの如き身分の男に取つては、ちよつとした（然しながら可なりの）一事件である。從つてそれが、彼れの日常の俗務といふ此の緊張しきつたユトピヤの空氣との間に於ける、驚愕の例に橋わたしをする助けになつた。只だ之が爲に、彼れの周圍の燦爛赫耀たる光景が、別に彼女に依つて、及びバーレー氏に依つて、見られ許されるといふ、そして又、フレヂー・マッシュ氏の鑑定的双眼鏡に依つて觀察されるといふ、完全なる確實性に引き締められ、又（若しかういふ場合にかういふ言葉が許されるならば）引下げられたのである。即ち又、之が爲めに、此の光景が新聞記事となるべき事柄の別に入つたのである。若しバーンステーブル氏が獨りでユトピヤに來たのならば、彼は全く威壓されて、精神的の破滅を來したに相違ない。

然しそれでも、バーンステーブル氏の注意が、リムジーノの人達から、此の（彼と彼等と共に落ちこんだ）停とげな

世界に轉じた時、それは彼に取つて、何だか丸で息の止つたような心持であつた。一體、この世界(意地わるい雜草は花の間に生ひはびこる事をやめたらしく、豹は其の猫かぶりの惡性を失つて、親しげな目を以て通行人を眺めるといふ此の世界)の男女は、果して何者であるのか。

又、彼等が初めて見出した二個の住人が、或る冒險的な實驗の犧牲であるらしく、そこに死んでゐたと云ふ事が、洵に驚くべきである。更に又、其の死んだ男と女との兄弟と稱する他の二人が、其の悲劇に對して殆んど何等の悲しみ、もしくば力落しを示さぬといふ事が、一層驚くべきである。バーンステープル氏の見た所に依れば、そこには全く情緒的の場面がなかつた。慌てるでもなければ、騷ぐでもなかつた。彼等は明らかに、恐れるといふよりは、寧ろ多く呆れて居り、嘆くといふよりは、寧ろ只だ心を索かれてゐた。

壞れ跡に殘つてゐたユトピヤ人は、娘の屍體を其の相手の屍體のそばに運んで行つた。そして今(バーンステープル氏は見た)彼は實驗の破損物を精査すべく元の處に返つてゐた。

然るに此の時、外のユトピヤ人等が追々その場に到着しつゝあつた。彼等は此の世界に飛行機を持つてゐた。今その小さい二臺が、音もなく速かに燕のような飛び方をして、直ぐそばの野原に着陸した。一人の男は、クペー(二人乘の箱馬車)に似た小さい二輪の器械に乘つて道路を走つて來たが、其の車輪は自轉車風に縦に二つ續いて、地球の有らゆる自動車より輕々として簡短で、そして不思議にも、立ちどまつた間、その二輪車で眞直に立つてゐるのであつた。大きな笑ひ聲が彼方の道路から聞えたので、バーンステープル氏の注意がそれらのユトピヤ人の一群に引きよせられた。彼等はリムジーンの發動機に何か餘ほどおかしい事を發見したらしかつた。それらの人達は大抵死んだ二人の實驗家と同じように、着る物は僅かで、體格は美しい。然し其中の一二人は麥藁の大きな帽子をかぶり、又三十か或はそれ以上の稍や年ゆ

きの婦人と見える一人は、濃い赤色の縁をつけた白い外衣(ローブ)を着てゐた。其の婦人が今バーレー氏に話しかけてゐた。

彼女は二十ヤードばかりも離れてゐるのだが、その言葉は大なる明瞭さを以てバーンステープル氏の心に寫つた。

『私達はまだ、あなた方の此の世界に來た事と、先つきこゝで起つたアノ爆發との間に、どんな關係があるのかを知らない。又關係があるのか無いのかも知らない。私達はそれらの事を取調べて見たい。それであなた方と、あなた方の持つて來た總ての物とを、こゝから餘り遠くない便宜な會議場へ運びたいと思ふのです。その爲に、今乘物の準備をしてゐます。あなた方はそこで食事をなされても宜しい。あなた方いつごろ食事をする習慣なのか私に分りませんが。』

『何か輕い食事を。』バーレー氏はそれで思ひだして云つた。『餘り永くならない中に、何か輕い食事を戴くと結構です。實は、若し我々がこんなに急に自分の世界からあなた方の世界に落ちて來なかつたら、今ごろは丁度立派な人達と一緒にランチをやつてゐる時分です。』

『驚異とランチ。』バーンステープル氏は考へた。人間は、驚くと否とに係はらず、是非とも食はねばならぬ動物である。バーンステープル氏も實際、既に空腹である事を感じた。そして彼れの呼吸してゐる其の空氣が、實に清冽な、食慾を催させる空氣である事を感じた。

そのユトピヤ人はこゝで一つ、珍らしい事を思ひ浮べたように見えた。『あなた方は一日に幾度も食事をするのですか。そしてどんな物を食べるのですか。』

『オー、願はくば、彼等が菜食主義者であるな！』マッシュ氏が強く叫んだ。片眼鏡を鼻から落しながら、抗議的の挿み文句としてそう云つた。

彼等は皆な空腹であつた。それが皆の顏に現はれてゐた。

『我々は皆な一日に數回食事をする習慣です。』バーレー氏は云つた。『こゝで我々の食事の概略をお話しして置くのもよいかと思ひます。勿論、いろ／＼差別はありますが。先づ我々は通例、寢床のそばに持つて來る一杯の茶とバタをつけたパンの極く薄い片とから始めます。次に朝食(ブレキフアスト)です。……』彼は自分の美食日の巧妙な概説をやりだした。先づイギリスの朝食の詳細を明瞭に面白く話した。卵をゆでるには四分間半、それより長くても短くてもいけない。次に晝食(ランチ)、これは本氣の食事といふよりは寧ろ社交的の會合で、輕い酒なり茶なりが添はる。次に正餐(ダナー)、これを委しく話し、ついでに夜食(サパア)にまで及んだ。其の話し方が如何にも輕妙で、而もまじめさを失はないで、正に國會の議場を喜ばすべき、明晰な陳述であつた。ユトピヤ婦人は其の話の進むに連れて、深い興味を以て彼を見つめてゐたが、『あなた方は皆そんな風に食事をするのですか』と聞いた。

バーレー氏は自分の一行をズラリと見た。『あなたの事は私から答へかねますが、ミスタ………』

『バーンステープル。…イヤ、私も大體そんな風です。』

どういふ譯でか、ユトピヤ婦人はバーンステープル氏に笑みかけた。彼女は頗る可愛らしい茶色の目を持つてゐた。彼は彼女の笑みを喜んだが、今のような風に笑まれる事は嬉しくなかつた。

『それから、あなた方は寢ますか。』

『場合次第で、六時間から十時間まで。』バーレー氏が答へた。

『それから、あなた方は戀をしますか。』

此の問は我が地球人を困らせた。彼等は餘ほどビックリさせられた。彼女の眞意が分らない。暫らくの間、誰も返事が出來なかつた。バーンステープル氏の心は、何か珍らしい事のありそうな氣持でドキ／＼した。

するとバーレー氏は、近代的の首領らしく、其の練れた智慧と迅速な遁辭とを以て岸頭に進み出た。『滅多にはやりません、御安心下さい、滅多にそんな事はやりません。』

赤い綠の外衣（ローブ）の婦人は、ちよつと此の話を考へてゐたやうだが、直ぐに又幽かに笑つた。

『まだ色々こんなお話をする爲に、私達はどこかにあなた方を連れて行かねばならぬ。如何にも、あなた方は不思議な外の世界から來たに相違ない。こちらの學者達があなた方に會つて、いろ／＼思想の交換をやるでせう。』

（四）

其の朝の十時半には、バーンステープル氏はスラウの沼を越えて街道に自動車を走らせてゐた。然るに今一時半には自分の世界の事はもう半分忘れて、不思議の國に舞ひ登つてゐる。『驚いた！實際驚いた！』彼は心中に繰返した。『今度はキット好い休養が出來るとは思つて居たんだが、然しこんな、こんな事とは……』

彼は異常な幸福を感じてゐた。圓滿な夢の光り輝いた、曇りのない幸福を感じてゐた。彼は未だ曾て新地探險の愉快を持つた事がなかつた。未だ曾てそういふ愉快を經驗しようといふ希望を持つた事がなかつた。ツイ二三週間前、彼は自由評論に、『探險時代の終末』を嘆ずる論文を書いたが、それは徹底的な無目的な失望を表白したもので、非常にピーヴ氏を喜ばせた。彼は今その手柄を思ひだしたが、少しばかり悔恨の痛みをピリリと感じた。

地球人の一行は四臺の小さい飛行機に分載されて、バーンステープル氏は敎父アマートンと共に空中に登つた。振返つて見る、と彼等の自動車や荷物が實に驚くべき手輕さを以て、二つのキヤシヤに作られた大荷車に積まれてゐた　各荷車はピカ／＼する一對の腕を突きだして、乳母が赤坊を抱きあげでもするかのやうに、それ／＼の自動車を抱きあげた。

現時の地球上に於ける安全の標準からすれば、バーンステープル氏の操縦者は大變に低く飛んだ。折々は、樹木の上と

いふより寧ろ其の間を飛んだ。そしてそれが爲に、初は少し驚かされたけれども、十分に近く風景を視察する事が出來た。初の間、そこらの風景は、クリーム色の乳牛の飼つてある綺麗な牧場と、ケバ〲しい色の（バーンステープル氏には何とも分らない）草木の繁つた畑地であつた。此の耕作地の間を、歩行道もしくば自動車道でもあらうか、幾つもの狹い小路が縫つてゐた。又そこゝに、花で緣を取られ、果物の木で蔽はれた道路もあつた。

家は少なくて、町とか村とかいふのは一つもなかつた。家々の大きさには大變な違ひがあつて、バーンステープル氏の目に、風流な夏別莊か、小さな神殿かと見えた、離れ離れの小建築物もあれば、又在所の城館を思ひださせるような、或は廣大な農産所もしくば製酪所かと思はれるような、多數の屋根や棟の群がりもある。そこゝには野で働らいて居る人もあり、徒足や乘物で往來してゐる人もあるが、大體に於いて非常に人口の少ない土地柄と思はれた。

飛行機は向ふの雪の山（それは先ほど忽然としてウインゾル城の遠見の景色を塗り消したのだが）その雲の山の脊を越えるのだと分つた。

彼等がその山に近づくと、黄金色の穀物畑の廣い地面が今までの牧場の綠色に代つて、それから先には又、種々の違つた作物があつた。日あたりの傾斜地には紛ふ方なき葡萄園があつて、多くの働らき人の姿が見え、家々の數も倍加して來た。飛行機の小隊は峠の方に向つて廣い谷間を飛び登つて行くので、バーンステープル氏は精しく其の山景色を視察する事が出來た。先づ栗林があつて最後には松林があつた。谷川の急流には巨大な渦水車が掛つてゐた。又そこには低い窓の多い建築が幾つもあつて、何かの工業をやつてゐるらしく見えた。この分では（彼は考へた）平地よりも山地の方に人が多く住んで居るらしい。但しそこでもまだ、地球上の之に似たような田舍に比べて遙かに人口が少ないのだが。

雪まだらの高地（片側には大氷河の雪野を交へた高地）を十分間ばかり進んで、彼は會議場のある山腹の平地に降り

そこで飛行機からおりた。會議場は山あひの凹みで、石造の臺地が拵へてあるのだが、其の構造の意匠が如何にも大膽で、山その者の地質の一部分と見えてゐる。そして其の臺地は、谷間の下の方に築かれてゐる（素晴しく大きな堤防で支へられた）廣い人工の湖水に面してゐる。其の堤防の上にはところ〴〵大きな石柱が立つてゐて、何かの像が置いてあるらしくボンヤリ見えてゐる。彼は其の向ふに、イタリーのポー川の沿岸を思ひだすような、廣い平野をチラリと見わたしたが、飛行機をおりると、堤防の一直線が目を遮つて、その遠い眺を隠した。

この諸臺地の上に、殊に其の低い方の臺地の上に、花のような建物の數多の群があつて、其の間に小道や、石段や、池などが見えて、全體が丸で庭園のように思はれた。

彼等は芝原の上に安々と着陸したが、その芝原の直ぐ側には、湖水の岸から水上に突きだした優雅な山小屋があつて、それが派手な色塗りのボートの一小隊の繋ぎ場になつてゐた。

先つき、村がないといふ事をバーンステープル氏に注意したのは教父アマートンであつたが、彼は今又、教會堂が一つも見えない事、及び尖塔や鐘樓が何處にも見えない事を注意した。然しバーンステープル氏は、あの小さい建物のどれかゞ神殿であるかも知れぬと考へた。それで彼は云つた。『宗教もこゝでは違つた形式を取つてるでせう。』

『それに赤坊や子供が殆んど見えないのはどうした事だらう！』教父アマートンは云つた。『子供を抱いた母親といふものを何處でも見かけないのだが。』

『山のあちら側に大きな學校の運動場のような處がありましたが、あそこには大ぜい子供が居て、そして白い着物を着た大人も一人二人居たようです。』

『それは私も見た。けれど私は今、赤坊の事を云つてるのだ。例へばイタリーあたりの光景と比べて見たまへ。』

『實に美しい、そして好もしい若い婦人が』教父は更に云ひたした。『實に好ましい姿………それでゐて母親らしい徴候が少しもない。』

彼等の操縦者（青い目の日やけのした金髪(ブロンド)白色の婦人）は彼等を助けて飛行機からおろした。そして彼等はそこに立つて、一行の他の人々のおりるのを見守つてゐた。バーンステープル氏は、自分が如何に速かに、此の新世界の色彩と調和とに馴染みつゝあるかを感じて驚いた。今この全景の中に於いて、最も奇異に見える物は彼れの仲間の風采と服装とであつた。有名なる灰色の高帽のルーパート・キャツキル氏、不自然な片眼鏡のマツシュ氏、バーレー氏の變な細長い姿、バーレー氏の運轉手の革づくめの角ばつた恰好、それらが皆、彼れのまわりの温雅なユトピヤ人の姿よりも遙かにヨリ多く不思議に感じられた。

操縦者のそれを面白がり、おかしがる事が、更に又バーンステープル氏の、自分の仲間に對する奇異の感じを増大させた。すると今度は、深刻な疑惑の波が彼れの心中に起つて來た。

『これが本當の現實でせうか。』彼は教父アマートンに向つて云つた。

『本當の現實！……でなくて何だらう。』

『これが皆な夢ではないでせうか。』

『君の夢と私の夢とが同一になりさうな事がないぢやないか。』

『さうです、けれども實に不可能な事があります、……絶對に不可能な事があります。』

『例へば？』

『あの人達が英語で（近代英語で）我々に話してゐるのは、どういふものでせう。』

『それは今まで氣がつかなかつた。成ほど不思議だ。彼等はお互ひの間には英語で話してゐない。』

バーンステープル氏は驚きの目を丸くして叔父アマートンを見つめてゐたが、この時はじめて更に一層不思議な事實に打たれた。『彼等はお互の間に、何語でも話してゐない。そして我々は今の今までそれに氣がつかなかつた。』

第四章　アインスタインの影

（一）

ユトピヤ人等が總て方言的の英語を完全に使い得るらしいと云ふ、一つの不可能な事實を除いては、バーンステープル氏は此の新世界のまぼろしが前後の矛盾なく、彼れの經驗上、如何なる夢にも決してあつた事のない一致を以て發展しつゝある事を發見した。その聯絡が如何にも確かで、その秩序が如何にも正しいので、不思議な世界などといふ氣持が段々に少なくなり、只だ或る遠方の、そして非常に文化の高い外國に來たのだといふ考へが段々に多くなつて來た。

　赤い線のローブを着た鳶色の目の婦人に指圖されて、地球人等は此上なしの鄭重な愉快な待遇で、會議場に近い或る場所に落ちついた。五六人の若い男女が、ユトピヤ人の家内生活の細々した事柄をこの外人達に與へる役に當つてゐた。彼等は別々の建物の中に入れられたが、それには各々氣持のいゝ小さい化粧室があり、又極上のリンネルのシーツと輕いフワ〳〵した蔽い物のある寢床があつた。そして其の寢床はあけはなしの廊下に置いてあつた。餘りあけはなしだとステラ夫人は考へたが、然し直ぐに又『こゝなら何も不安心はない』と云つた。やがて荷物が來た。彼等は何處から地球の、もてなしのいゝ館(やかた)にでも來てゐるように、銘々に自分のカバンや何かを受取つた。

　然し、ステラ夫人は、餘り馴々しすぎる二人の若者を部屋から追ひ出して、それから初めて衣類入のカバンを開き、

顏の化粧に取りかゝつた。

幾分かの後、ステラ夫人の隱れ場から、烈しい笑ひ聲の爆發と、柔しくはあるがヒステリ性の、何かを爭ふ物音とが聞えて、少しく皆を驚かせた。それは、婦人のそばに殘つてゐた娘が、女らしい興味を感じて、中にも殊に美しい透明なネマ着を見つけたのであつた。どうした譯でか、この秘密の珍品が若いユトピヤ人を非常に面白がらせて、直ぐにそれを着て公衆の前で踊つて見せると云ひ出し、ステラ夫人はそれを制止するに可なりの骨を折つた。

『では、あなたそれをお着なさい。』娘は是非にと云ひ張つた。

『だつて、あなた分らない。』ステラ夫人は叫んだ。『それはあなた………神聖ですよ!。人に見せられないのですよ……誰にも。』

『だつて、ナゼ?』ユトピヤ人は呆れ返つて問うた。

ステラ夫人にはその答が不可能であつた。

それから直ぐに輕い食事があつたが、地上の標準から見て全然滿足すべきものであつた。フレヂー・マツシュ氏の心配は全く無用であつた。鷄の冷肉と、ハムと、大變に旨い肉の饅頭とがあつた。又、荒ずりの粉ではあるが最も口さわりのいゝパンと、純なバタと、極上のサラダと、果物と、スヰスのグリユエール式のチースと、輕い白葡萄酒とがあつた。

『モゼールにもこれ以上の物はありはしない』と、バーレー氏は此の酒に讃辭を呈した。

『私達の食物もあなた方のと大抵おなじですか。』赤い緣のローブの婦人が聞いた。

『極めて結構です。』マツシュ氏は大ぶん口の中をふくらませて云つた。

『食物は最近三千年間、餘り變つてゐません。人間は最後の混亂時代よりズツト前に、總て最善の食物を發見し

のです。』

『これが現實なら餘り現實すぎる。』バーンステーブル氏は獨り言を繰り返した。『これが現實なら餘り現實すぎる。』

彼は仲間の人々を見まわして、昂奮し、緊張し、そして感嘆しつゝ食つてゐた。

若し――このユトピヤ人等が此のように明晰な英語を話して、そしてそれが頭の中に鐵槌で叩きこまれるように響くといふ、其の背理な事が若し無いならば、バーンステーブル氏は此の世界の現實性について何等の疑ひをも持たなかつたであらう。

食卓はクロスを掛けない石のテーブルであつたが、給仕人は一人も居なかつた。白と赤とのローブの婦人と、二人の飛行操縦者とが一緒に食事をしたが、客人等は皆な互ひに入用品の世話をしあつた。バーレー氏の運轉手は初め遠慮して他のテーブルに控えてゐたが、主人の大政治家が『ヘシク、お前はそこへ座れ、マッシュ氏の隣りに』と、許しを與へた。他の多くのユトピヤ人が、この食卓の据えられた、大きな柱のあるヴェランダにやつて來て、好意のある、然し鋭どく注意する目つきで地球人等を見ながら、微笑を含んで立つたり腰かけたりしてゐた。その間に紹介といふ事もなければ、禮儀らしい事もなかつた。

『こりやア實に氣安くていゝ。』バーレー氏は云つた。『全く氣安くていゝ。この果物は確かにチヤツツウオーツの挑よりも上等だね。ルーパート君、それはクリームですか　その君の前に在る小さい栗色の壺は？……だらうと思つた。ちやどうかそれをチョット、……ありがたう。』

（二）

ユトピヤ人等の名前が追々に地球人に知れて來た。茶色の目の婦人の名はリチニスであつた。髭のある一人の男（多

分四十歳ぐらゐになるだらうとバーンステープル氏に思はれた人）は、アースレッド、或はアダム、或はエドムと云ふのであつた。此の名は大變聞きとりにくかつた。彼は人種學者であり歴史學者であつて、我々の世界の知り得る限りを知りたいと云つた。彼はバーンステープル氏に斯う云ふ感じを與へた。彼は地球での銀行家もしくは大新聞の持主とでも云ひさうな、ゆつたりした風采を持ち、我々の世界でよく見かける、單なる學者にありがちのハニカミがなかつた。又、主人側の他の一人なるサアペンチンも、其の樣子振が矢張ドッシリとしてゐるのに、それが科學者だと聞いてバーンステープル氏は大いに驚いた。彼は學者としての自分の事を何と云つたのか、バーンステープル氏には善く聞き取れなかつた。初めは原子的機械學者と云ふ樣に聞えたが、次には奇態にもそれが分子的化學者と聞えた。そして又、バーレー氏がマッシュ氏に向つて『彼は今、物理的化學者と云つたようですね』と云つてゐるのがバーンステール氏に聞えた。

『私は、彼が今、自分は物質主義者だと云つたと思ふ。』マッシュ氏は斯う云つた。

『私は、あの人が、物を量る仕事をするのだと云つたように思ふ。』ステラ夫人は斯う云つた。

『彼等の音調は餘ほど變だ。』バーレー氏は云つた。『時には不愉快なほど大きな聲をするかと思ふと、どうかすると又何だか聲の消えてしまふ時がある。』

食事が終つてから、一同は他の小さい建物に移つた。そこは明らかに教授や討論の爲に設計されたものであつた。そこには半圓形の出張臺があつて、其まわりには白色の板面が掛け並べてある。それは明らかに、講演者の黒板として折々役立つものであるらしい。と云ふのは、その板面の下の程よき高さに大理石の棚があつて、その上に黒や色付のペンシルと、拭き物の布とが置いてあるので分る。そして講演者は話をしながら、其の半圓臺の端から端まで歩けるので

あつた。リチニス、アースレッド、サアペンチン、及び地球人等は、その講演者の通路の下にある、半圓形のベンチに着席したが、彼等の前には、八十人もしくば百人ばかりを入れ得る座席の設備があつた。その座席は皆な塞がつてゐた。そして其の向ふには、溫雅な人達の群が石楠木に似た藪を背景にして立つてゐた。バーンステーブル氏は其の藪の間から、芝草の原が日に輝く湖水まで下り坂に續いてゐる、透しの景色をチラ〳〵見た。

彼等は此の、彼等の世界への異常な侵入について語らうとするのであつた。それを語るのは洵に當然な事である。然しこれほど又、奇妙な困難な事はあるまい。

『燕の居ないのが不思議だ。』マッシュ氏が不意にバーンステーブル氏の耳にさゝやいた。『どうして燕が一疋も居ないのだらう。』

バーンステーブル氏の注意は空しい青空に向けられた。『恐らく蚊も蠅も居ないのだらう。』と、彼は其の事を思ひついた。どうしたわけか、燕の事には今まで少しも氣がつかなかつた。

『シイッ!』ステラ夫人が云つた。『始まりますよ。』

（三）

此の不思議な會議が始まつた。會議はサアペンチンと呼ばれた人に依つて開かれた。彼は聽衆の前に立つて演說するやうに見えた。彼れの唇は動いた。彼れの兩手は彼れの言說を助けた。彼れの表情は彼れの發言に伴つた。けれども、バーンステーブル氏には、サアペンチンが果して本當に演說してゐるのかといふ、極めて隱微な、抑へがたい疑念が起つてゐた。全體に何となく奇妙な事がある。或時には、サアペンチンの云つてゐる事が變な響きで頭の中に聞える。或時には、それが不明瞭に、つかまへどころのない樣に聞えて、恰かも掻きまぜた水の中の物を見る樣な心持がする。或時に

は又、サアペンチンが矢張りその柔らかな手を動かし、聽衆の方を見つめてゐるに係はらず、全然沈默の間隙がある。──その折々には、バーンステープル氏は丸でツンボになつた樣であつた。──けれどもそれは講演に相違ない。場内は引締つてゐた。バーンステープル氏の注意はそれに引きつけられてゐた。

サアペンチンは、頗る複雜な問題を出來るだけ簡短にする爲め、非常に骨を折つてゐる樣子振であつた。彼は一句々々の間に區切りをつけて、おもむろに其の話を進めて行くものゝ如くであつた。『既に久しい以前から知られてゐる事だが、』彼は斯う口を切つた。『ヂメンション（次元）の可能數は、他の有らゆる數へ得べきものゝ可能數と同じく、無限である！』

宜しい、バーンステープル氏はそれを聞き分けた。然しフレヂー・マッシユ氏に取つてはモウ澤山であつた。

『オー神よ！ヂメンションの話だ！。』彼はそう云つて片眼鏡をはずし、全く聞く氣を失つてしまつた。

『大抵の實用問題としては』サアペンチンは說き續けた。『我々がそこに生活し、我々がその一部分を成してゐる所の、此の特殊の宇宙（此の特殊の事物體系）は、直線的三次元の空間中に起るものと考へて宜しい。又第四次元なる時間を通して移動を生ずるものと考へて宜しい。（移動とは即ち時續の事である。）凡て斯ういふ事物體系は必然的に萬有引力體系である。』

『チヨツト失禮ですが。』バーレー氏が鋭く口を入れた。『どうも私にはそれが分りません。』

して見ると、彼も兎にかく聞いてゐたのである。

『如何なる宇宙も、それが存續する以上、必然に萬有引力をもつて相引かねばならぬ。』サアベンチンは、自明の事柄を主張するものゝ如く、斯樣に繰返した。

『私の生活としては、どうもそれが分らない。』バーレー氏は一考の後、斯う云つた。

サアペンチンは暫らく彼を見やつてゐたが、『其の筈です』と云つて、更に其の講演を續けた。曰く、我々の心は此の實用的事物觀の形式に於いて進化してゐる。我々の心はそれを眞實として受取つてゐる。それで我々は實に永い研究の大努力の後、初めて次の事を悟つた。即ち、此の我々の住んでゐる宇宙は、從來永く夢想だもされなかつた所の、他の幾多の空間的次元に延長してゐる。只だ延長してゐるばかりでなく、云はゞ少し歪みを帶びて、そこに達してゐる。宇宙が三つの主要な空間的次元を乘り越えて他の諸次元に延長してゐる有様は、例へば、薄い一枚の紙が、實用上には長さと幅との二次元であるけれども、本當は其の厚さの爲に、及び其の皺や撓みの爲に、第三次元に延長してゐるのに似てゐる。

『私はツンボになつたのでせうか。』ステラ夫人は舞臺さゝやぎ（聞えるさゝやぎ）で聞いた、『何だか私にはチットも聞えない。』

『私にも聞えない。』教父アマートンが云つた。

バーレー氏は此の不幸な人々を手眞似で制して、自分の目はサアペンチンの顏から離さなかつた。バーンステープル氏は額を拭ひ、膝を重ね、手の指を組み合せて、一生懸命になつてゐた。

彼は聞いてゐたに相違ない――勿論、彼は聞いてゐた。

サアペンチンは猶ほ說明を續けた。實用上に二次元な宇宙が幾つでも、紙の重ねのように、三次元の空間の中に並んで存在する事が可能であるのと同じく、多次元の空間（それについては、準備の不足な人間の心が、まだ漸く僅かの智識を得るに苦しんでゐるのだが）その多次元の空間の中には、實用上に三次元の宇宙が無數の量を以て、云はゞ並んで存在して、それが大體並行した運動を時間の中に生ずる事が可能である。ローンストン及セフアラスの研究は既に早く

から此の信仰に對して最も堅實なる基礎を與へてゐる。即ち、斯ういふ時間的及空間的の宇宙の餘ほどな多數が、現實に存在してゐる。そしてそれが相互に並行し、相互に類似してゐる。勿論、精密にではないが、ちようど書物の各葉が相互に類似してゐる位に類似してゐる。そして彼等は總て時績を持つものであり、彼等は總て萬有引力體系に屬するものである。………

（バーレー氏は、矢張まだ分らないといふ事を示すべく、其の頭を振つた。）

………そして最も近く存在するものは、互ひに最も善く類似してゐる筈である。それが如何に善く類似してゐるかは即ち今玆に我々が知る機會を得たのである。かの二大天才たるアーデン及グリーンレーキの大膽なる計畫は、……（この所、聞き取れず）……の言葉を使用すれば、此ユトピヤの物質的宇宙の一部分を他のヂメンション（即ちFヂメンション）に廻轉させる爲の分子の突入であつた。そして其のFヂメンションに入るには、恐らく人間の腕の長さだけ延長すればよいといふ事が、既に永く知られてゐた。所で此のユトピヤ物質の粉末を、例へば戸が蝶つがひで開くように、廻轉させる計畫が、全く成功したものと見える。即ち開いた戸が閉め返つて、それと共に濃密な空氣のそよぎと、埃りの渦卷と、それから三組の來訪者とを、未知の世界から持ちこんで、此ユトピヤに大驚愕を與へてゐる。

『三組？』バーンステーブル氏は不審らしくさゝやいだ。『三組と云ひましたか？』

サアペンチンはそれに頓着しなかつた。

『我々の兄弟と姉妹とは、或る豫期されない力の放出の爲に殺された。けれども彼等の實驗は、此ユトピヤに於ける現在の空間的制限から、從來想像されなかつた諸世界の大綴込の中に入るべき通路を開いた。それは今後決して再び閉されぬであらう。そしてそれが、昔しローンストンの考へた通り、直ぐ我々の手近に在る。それは實に（彼が云つた通り）

我々の心臓の血よりも近くに在る。………』

（『呼吸よりも我々に近く、手足よりも近い！』敎父アマートンは急に目ざめた様になつて、サアペンチンの右の言葉を聞き違へて引用した、『然し何の話をしてるか、私には丸で分らない。』）

『……我々は新らしい一遊星を發見した。其の大きさは、居住者の柄から判斷して、大體我々のと同じだらう。そして多分、我々の空にあるような太陽のまわりを循環してゐるのだらう。又その遊星は生命を生んで、（我々に於けると同じく）おもむろに其の智的生命に依つて征服されつゝある。その進化の狀態は我々のに比べて、殆んど精密に平行してゐる。只この姉妹星は、外觀から我々の判斷した所では、我々に比べて少しく時間に於いて後れてゐる。我が來訪者達は最後の『混亂時代』に於ける我々の祖先に善く似た着物を着、又それに善く似た肉體的特徵を示してゐる。

『彼等の歷史が我々の歷史と嚴密に並行してゐると想像する事は、まだ是認されて居らぬ。如何なる物質の二片も同一ではない。如何なる二個の振動も亦た然り。有らゆる實在のヂメンションに於いて、有らゆる神の宇宙に於いて、曾て精密な繰返しはなかつた。又あり得べきでない。我々が今ま知得しようとしてゐるのは、卽ち其の不可能の事である。然し、それにしても、諸君が地球と呼ぶ其の世界は、明らかに此の我々の宇宙と甚だ善く類似してゐる。

『我々は是非とも地球人諸君から學びたい。又我々の歷史（それはまだ甚だ不完全に知られてゐるのだが）それを諸君の經驗に依つて檢討したい。又我々の知る所を諸君に示して、諸君の世界と我々との交通及び互助に於いて、何が可能であり何が望ましくあるかを發見したい。我々ユトピヤ人は智識に於いて極めて微々たる初學者である。我々はまだ僅かに、今後學ぶべき事、爲すべき事の、莫大だといふ事だけを學んだに過ぎない。思ふに幾千萬の類似した事物について、我々の二世界は恐らく互ひに敎へ、互ひに助け得るであらう。……

『我々の世界に於いて發達しそこなつた、或は死滅した所の遺傳の線脈が、諸君の世界にはあるかも知れない。又、一方に稀少であり、或は缺乏してゐる元素や鑛物が、他方にはあるかも知れない。………諸君の原子の構成は（?）………我々の世界は…………通婚に依つて（?）………相互の强壯を計る………。』

彼れの話は又聞き取れなくなつて來た。丁度、バーンステープル氏が最も深く感動して、最も熱心に聞き續けようとしてゐた所で。

バーンステープル氏は、自分と同じように苦しみ且つ當惑してゐるキヤツキル氏の目に出會つた。敎父アマートンの顏は兩手の中に埋もれてゐた。ステラ夫人とマツシユ氏とは、二人で靜かにさゝやぎあつてゐた。彼等は疾くからモウ聞く振もしてゐなかつた。

『以上。』サアベンチンの話は急に又聞えだした。『これが我々の世界に於ける諸君の出現、及び諸君と我々との相互作用に對する、我々の最初の粗雜なる解釋である。私は今、我々の考へを出來るだけ平易に諸君に告げた。そこで今度は、どうぞ諸君の中の一人が、諸君の世界と我々の世界との關係について、諸君の眞理と信ずる所を、簡單に平易に話して戴きたい。』

第五章　ユートピア國の政治振と歴史

（一）

ポーズが來た。地球人等は互ひに顏を見合せたが、皆の凝視はセシル・バーレー氏に集まるように見えた。この政治家はそういふ一般の期待に氣づかぬ振をして云つた、『ルーパート君、君やりたまへ。』

『僕はマア差控へます。』キャッキル氏は云つた。

『教父アマートン、あなたは他界の事を取扱ふに慣れて居られる。』

『あなたの前でどうして、ミスタ・セシル。否。』

『だつて私が彼等に何を話さう。』

『何でもお考へどほりを。』バーンステーブル氏は云つた。

『左様。』キャッキル氏は云つた。『何でもお考へどほりをお話しなさい。』

バーレー氏以外は迚もお話になりそうになかつた。彼はおもむろに立ちあがつて、考へ深げに半圓臺の中央に歩み出た。彼はコートの折襟をつかんで、これから云ふべき事を考へるらしく、暫らく俯向いて立つてゐた。『ミスタ・サーペンチン。』彼は遂にやりだした。眞摯らしい面を振りあげて、その眼鏡の中から遠い湖水の上の青空を見ながら、『貴女および紳士諸君。……』

彼は演説をやらうとするのであつた。……恰かもプリムローズ同盟の園遊會にでも行つたかの如く。それは此の場所柄、如何にも突拍子であつたが、さりとてそれより外に彼が何をやらう。

『私は先づ諸君に告白せねばならぬ。私は決して初心の演説者ではないが、然し此の場合、少しく當惑せざるを得ぬ。サアペンチン氏の天晴れな講話、——あの眞摯な、直截な、明晰な、簡潔な、そして折々、飾りけのない雄辯的な辭句を發せられる氏の講話は、實に私の喜んで倣ふべき模範を示されたものであつて、私は只だ謹んで其の前に畏縮するのであります。扨、氏は私に向つて、私共が何等の豫想もなく出て來た所の、其の兄弟世界について、私共の考へてゐる大體の事實を、出來得る限り平易に明瞭に語れと求められました。凡そ斯樣な幽玄微妙な事柄に對する、私の貧弱な理

解力もしくば理論力としては、氏の數學的見地からしての驚くべき解説に對し、何等の改善をも、否な單に補充すらも爲し得るとは考へません。氏の我々に語られた所は、地球上の學問に於ける最新最高の思想を表現するものであつて、實際。遙かに高く、我々の間に於ける現時の思考以上に立つものであります。或る事柄に關しては、例へば時間と引力との關係の如きについては、私は氏に贊成し得ない事を言明すべきだと考へますが、然しそれとても、積極的の反對と云ふよりは、寧ろ氏の立場を理解し得ないといふ事であります。此の事件の大體の觀察については、氏と私との間に何等の難點はありません。我々は氏の主要提案を無條件に承認します。即ち我々は諸君の宇宙と並行した宇宙、諸君の星と正に兄弟で、實に驚くべきほど善く似た星に住んでゐる事を感知する。勿論、こゝで見出ださるべき幾多の差異の可能をも總て考慮に入れてゐます。我々は又、我々の世界が、どう考へても、諸君の世界に比べて、時間の點に於いて少しく成熟を缺いてゐる（恐らく數百年もしくは數千年、諸君の經驗に後れてゐる）事を痛感して、此の點に於いても諸君の見解を心よく承認する。斯樣に論定する以上、諸君に對する我々の態度の中に、多少の卑下を交へるのは不可避の事であります。そこで諸君の後輩として、我々は教ふべきでなく、只だ學ぶべきであります。我々は、諸君が何を爲したか、諸君が何處に到達したかを問ふべきであつて、我々のまだ頗る未熟の域にある事物を、下手に傲然として諸君に誇示すべきでない。………』

『ノー！』バーンステープル氏が獨りごとを（但し半ば聞えるように）云つた。『これは夢だ。………若し夢でないとすれば………』

　彼は指の節で目をこすつて、再び其の目を開いた。彼は矢張そこに在つた。マッシュ氏の隣に坐つて、オリンピヤの神人達の間に在つた。そしてバーレー氏は、――あの磨きのかゝつた懷疑者、曾て信仰した事のない、曾て驚いた事の

ない。バーレー氏は——足を爪立てゝ前方にこゞみかゝり、一萬遍の演說をした人の落付を以て、盛んに辯じ立てゝゐた。ロンドンのギルド・ホールに於いても、彼はこれほど自分と聽衆とに安心してゐないだらう。そして皆が彼を理解しつつある。それが不思議だ！。

然しどう仕樣もない、只だ此の大不思議に負けるより外はない。そしてジツト坐つて聞くより外はない。バーンステープル氏の心は折々全くバーレー氏の演說から離れたり、又た立戾つては一生懸命その演說に噛りついたりした。バーレー氏は、そのまんべんなき議會風の調子で、人間世界の略說をユトピヤに與へ、それを槪括的に、明晰に、合理的にすべく努めてゐた。彼は國家及び帝國に就いて語り、戰爭及び今次の大戰爭に就いて語り、又た經濟上の組織とそれの解體について、革命とボリシエヰズムについて、今起りつゝあるロシヤの饑饉について、廉直なる政治家と官吏とを見つける事の困難について、新聞紙の頼りにならぬ事について、要するに人間生活の有らゆる暗い厭な狀況について語つた。サアペンチンは先きに『最後の混亂時代』といふ言葉を使つたが、バーレー氏は其の句を捕へて、盛んにそれを利用してゐた。

それは實に大雄辯の即席演說であつた。そして約一時間も續いただらうか、ユトピヤ人は皆、氣ごんだ熱心な顏つきで聞いてゐた。そして折々は、この點、あの點について、彼等の贊成および承認を頷づいてゐた。するとバーンステープル氏に頭の中に、例の琴槌の叩きが聞える。『善く似てる。』『其の通り、我々の混亂時代も。』

遂にバーレー氏は、議會の老練家としての念入りの語法を以て、其の演說を結んだ。

最後の會釋——敬禮——退席。要するに彼は大出來であつた。マツシユ氏は盛んな拍手を以て衆人を驚かした。

バーンスプル氏の心中に於ける緊張が堪へきれなくなつた。彼は忽然として立ちあがつた。

（二）

彼は立ちあがつた。無經驗な演說者にありがちの、弱いモジ〳〵した身振をして立ち上がつた。『貴女がたおよび紳士諸君、』彼は云つた。『ユトピヤ人、ミスタ・バーレー！ 私は暫らく諸君のお許しを懇願する。こゝに一つ小さな問題があります。緊急な問題です。』

暫らくの間、彼は無言でゐた。

すると彼は、アースレッドの目の中に注意と奬勵とを見て取つた。

『一つ私の理解し得ない事がある。實に不思議な、――そうです、實に矛盾した事です。此の小さな割目が……。一切の事が其の爲に空漠な幻影になつてしまふ。』

アースレッドの目にある信號が如何にも奬勵的であつた。バーンステープル氏は會衆全體に向つて語るといふ企てを放棄して、直接にアースレッドに話しかけた。

『あなたは數千萬年間、我々に先だつて此のユトピヤに住んでゐる。然るに其あなたが、現代の英語を話し得る―我々の用ゐる通りの其の同じ言葉を精密に用ゐ得るのは、一體どういふ譯ですか。私はそれを聞きたい、どういふ譯ですか。實に不思議です。無茶です。それがあなたを夢と思はせる。けれどもあなたは夢でないでせう。私は實に―殆んど―氣が違ひそうだ。』

アースレッドは愉快そうに微笑して云つた。『我々は英語を話してゐない。』

バーンステープル氏は大地が足の下から滑り落ちるやうに感じた。『だつてあなたが英語を話すのが私に聞える。』

『それでも我々は英語を話してゐない。』

アースレッドはいよ〳〵明らさまに笑つた。『我々は——日常の用事の爲には——何も話をしない。』』

バーンステープル氏は、腦髓の作用がとまつてしまつて、只だ恭々しい、氣をつけいの姿勢を保つてゐた。

『數世紀以前までは、』アースレッドは語り續けた。我々は如何にも言語を使用してゐた。我々は音聲を發し、音聲を聞いた。人は皆な考へて、それから言葉を選び整へ、そしてそれを發音するのであつた、聞手はそれを聞いて、覺えと めて、そして其の音聲を思想に譯し戾すのであつた。然るに、或る方法に依つて（それは我々のまだ充分に理解し得ない所だが）、人は皆、思想が言葉の着物を着せられ、そして音聲に發せられる以前、それを覺りはじめた。彼等は心で聞きはじめた。話手が思想を纏めると直ぐ、そして彼が其の思想を（自分の心の中でゞも）言葉の符牒に代へるより以前に、それを心で聞きはじめた。即ち彼等は、話手の云はうとする事を、云ふより以前に知つてゐた。此の直接傳達法が直ぐに一般に行はれた。大抵の人は誰でも、少し骨を折りさへすれば、或る程度まで、互ひに此の方法に習熟する事が分つて來た。そこで通話の新方法が組織的に發達した。

これが我々の今、この世界で普通にやつてゐる仕方である。我々はお互ひ直接に考へる。我々が思想を傳へようと決意すれば、それが直ぐに傳へられる（距離が餘り遠くない限り）。我々が今この世界で音聲を用ゐるのは、詩と遊びの爲、感情の激した時、或は遠距離に向つて叫ぶ時、或は動物に對する時ばかりで、人間の心が同類の人間の心に對して思想を傳達する爲には、もう決して使はない。それで私があなたに向つて考へると、其の考へが、（あなたの心の中に於いて、相當する思想と、適合する言葉とを見出だす以上）、直ぐにあなたの心に反射される。私の思想はあなたの心の中で言葉の着物を着せられる。其の言葉をあなたは聞いてゐるやうに感ずる。勿論それは、あなた自身の言葉と、あなた自身の言葉癖とで。だから今、あなたの仲間の人達が私の話してゐる事を聞いても、必ず銘々に違つた言葉と違つた句作りと

で聞いてるでせう。』

バーンステーブル氏は、コクリ／＼と物分りのいゝ頷き方をして、此の解説に句點を打つてゐた。そして折々は解説の遮斷をする間際までも進んでゐた。それで今はもう堪りかねて爆發した。『成程それで分つた。サアペンチン氏が先つきあの驚くべき説明をやつてゐる中、我々の心に其の影すらもない高尚な思想にはいつた時、我々には全く何も聞えなかつた。』

『そんな空隙がありましたか。』アースレッドは聞いた。

『澤山ありました。恐らく我々の總ての者に。』バーレー氏は斯う云つた。

『ところ／＼ツンボになつた樣でしたわ。話に大穴があいた樣。』ステラ夫人は斯う云つた。

叔父アマートンも同意の頷づきをした。

『ハヽアそれだからですね。あなたの名がアースレッドだか、アダムだか善く分らなかつたり、又アーデン（森の名）と、グリーン・トリー（青木）と、フオレスト（森）とが私の心で混雜したりしたのは。』

『もうこれであなたも安心が出來ましたか。』アースレッドは云つた。

『イヤ、全く安心しました。』バーンステーブル氏は云つた。『そして要するに、此の通話法があつたといふ事は、我々に取つて眞に非常に便利でした。若しそうでなかつたら、今ま我々の得てゐるだけの理解に達するまでには、幾週間の語學上の面倒を避ける方法が無かつたでせう。お互ひの文法や、論理や、語義などの原則を考へたりするのが、どんなに厄介だつたか知れやしない。』

『如何にも善いお氣づきでした。』バーレー氏は頗る親しげにバーンステーブル氏の方に向き直つて云つた。『如何に

もよいお氣づきでした。君の注意がなければ、私は遂に氣づかなかつたかも知れない。全く奇妙な事です。私は其の――其の論點については少しも氣がつかなかつた。私は、正直に云ふと、自分の考へにばかりかまけてゐた。私は彼等が英語を話すとばかり思つてゐた。そして當り前と思つてゐた。」

（三）

バーンステープル氏に取つては、此の驚くべき經驗が今は既に驚くべき完全に達して、あとにはもう驚くべき何者もなく、只それの絶對確實性を驚くだけであつた。彼は此の美しい小さな建物の中に坐つて、愛の國の樣々な美と、日に輝く湖水とを眺めつゝ、週末休暇の英國風俗と、ギリシャの神以上の裸體姿との奇異な混淆の間に交つて、會議のあとに續いた長い雜談を聞き、折々はそれに口を入れたりした。それで色々の議論の中に、道德觀および社會觀の最も驚嘆すべき根本的相違が分つて來た。けれども、總ての事の確實性が今は既に認定されてゐるので、彼は只だ自然に斯う考へた。程なく彼は内に歸つて自由評論に其の事を書かう。又、この從來知られなかつた世界の風俗について（現時に適當と考へられる限り）妻にも話さう。彼には兩世界の間に於ける距離の考へも全く無かつた。シドナムはついそこの曲り角の先にありそうに思はれた。

間もなく二人の可愛らしい若い娘が、石楠木の間の仕度場で茶を入れて、それを人々の前に持つて來た。茶！　それは支那茶と呼ぶべき極めて趣味の深いもので、持手のない支那風の小さい茶碗に入れてあつた。そしてそれが現實で、極めて香ばしい茶であつた。

地球人間の最初の好奇心は政治の方法に向けられた。バーレー氏およびキャッツキル氏の如き二人の政治家がゐる以上これは洵に當然であつた。

『こちらの政府の形式はどんなものですか。』バーレー氏が問うた。『君主制ですか、專制政治ですか、それとも純粹のデモクラシーですか。行政部と立法部とは別れてゐますか。そして此の地球の全體に對して一個の中央政府があるのですか、或は幾つもの政治中心があるのですか。』

之に對し、ユトピヤには全く中央政府がないといふ事を、バーレー氏その他に呑み込ませるには、可なりの困難があつた。

『けれども、』バーレー氏は云つた。『必ず何處かに何人かゞ居て、或は何者かゞあつて、（例へば何會議とか何局とか云ふ者があつて）、人民共通の福利の爲に協同動作を取る場合、其の最終の決定を與へるでせう。この、主權の究極の所在（少くとも機關）が無くてはならぬと考へられますが、………』

否、（ユトピヤ人は宣明した。）彼等の世界にはそういふ權力の集中はない。過去にはそういふ者もあつたが、それは疾くの昔し、社會全體の中に分散してしまつた。或る事柄に關する決定は、其の事柄を最も善く知つてゐる人々に依つて爲される。

『けれども、それが一般に履行されねばならぬ決定である場合はどうです。例へば公衆衞生に關する規則の如き、誰がそれを强制するのですか。』

『別だん强制する必要がない。どうしてそんな必要があるのです。』

『だつて、或者が諸君の規則に服從する事を拒否したらどうです。』

『其の時はなぜ從はないかを其人に尋ねる。何か特別の理由があるのかも知れないから。』

『それでも從はない時は？』

『其人の心理上および道徳上の健康を取調べる。』

『では心の醫者が警察の代りになるのだな。』バーレー氏は云つた。

『我輩は警察の方を取るね。』ルーパートキヤツキル氏は云つた。

『君はそうだらうさ。』バーレー氏は云つた。(此ところ意味不明。英國政治界の樂屋落でもあらうか。譯者)("You would, Rupert," said Mr. Burl ighas who shoult say: "God you that time.")

『では斯ういふわけですね。』彼は大聰明の表情を以て更にユトピヤ人等に語つた。『諸君の社會の事務は、總て特殊の團體、もしくは結合體に依つて、……それを何と呼ぶべきかは私に分らないが……、それ／＼の活動に何等の聯結もなくて處理されると云ふのですね。』

『我々の世界の諸活動は、』アースレッドが云つた。『一般の自由を確保する爲に、總て聯絡されてゐる。我々は全人類の一般的心理と諸種の合同的任務の交互作用とを考察する爲に、賢明者の一群を持つてゐる。』

『成程、では其の賢明者の一群が即ち支配階級ではないのですか。』バーレー氏は云つた。

『彼等が少しでも自分の勝手な意志を行ふといふ意味なら、それは違ふ。』アースレッドは云つた。『彼等は一般的の諸關係を取扱ふ、只それだけです。彼等は其の爲に高い地位に居るでもなく、優勝權を持つでもない。それは丁度、析學者が專門の科學者に比べて別に高尚でないのと同じ事です。』

『如何にも共和國だ！』バーレー氏は云つた。『然しそれがどういふ風に運用されてゐるか、又それがどうして出現されたのか、私には想像が出來ない。諸君の國家は多分、高級な社會主義的國家でせうね。』

『あなた方はまだ、空氣と、道路と、海面と、極地との外、殆んど總ての物が私有されてゐる世界に住んでゐるので

すね。』

『さうです。』キャツキル氏が云つた。『私有されて、……そして競爭させられてゐます。』

『我々も其の段階を通過して來たのです。我々は結局、總ての私有財產が（極く個人的の物についての外）人間に取つて堪へがたき邪魔物である事を發見した。我々はそれを追ひ拂つた。それで今では、藝術家もしくは科學者は自分に必要な一切の材料を完全に支配し、又外の者は皆な自分の道具類器具類を持ち、又自分の部屋と住居を持つけれども商賣とか投機とかの爲にする財產は全く無い。さういふ戰國的の財產、軍略的の財產は、悉く追つ拂つてしまつた。然しどうしてそれを追つ拂つたかは、長い物語です。それは數年間に成し遂げられたのではない。私有財產の過大な出現は、人間性の發達に於ける、洵に自然の、そして必然の段階だつたのです。最後にそれは恐ろしい結果を生じたが、其の恐ろしい大破滅の結果に依つて、人間は初めて私有財產制限の必要と、その性質とを學んだのです。』

バーレー氏は、明かに彼れの平生の癖と見える姿勢を取つてゐた。即ち彼は甚だ低い椅子に座りこみ、長い兩足を前方に組み合せ、一方の手の親指と他の指々とを、痼症やみらしい精密さを以て、他方の手の指々に向けあはせてゐた。

『私は告白する。』彼は云つた。『私はここに行はれてゐると見える、無政府主義の特殊の形式に對して、極めて深い興味を持つ。若し私が全く諸君を誤解してゐないとすれば、こゝでは、各人が國家の從僕として銘々の業務に當るのである。私は斯う解してる……間違つてたら直して下さい……この社會には食物の生產、分配、準備などにたづさわる大勢の人々がある。彼等は（私の想定する所では）世界の需要を調べて、それに滿足を與へる。そして彼等はそれを行ふについて、自分が自分のおきてである。彼等は研究をやり、實驗をやる。彼等を强制し、拘束し、防止する者は一人もない。（『注意の言葉を與へる者はある。』アーストレツドが幽かな笑ひを帶びて云つた。）それから又、他の人々は全人

類に對して、金屬類を産出し、製造し、研究する。それにも矢張り、自分が自分のおきてである。更に他の人々は又、この世界の住居の事に任じ、さういふ心持のいゝ家を設計し設備し、そして誰がそれを使ひ、如何にそれを使ふべきかの世話をする。猶ほ純粹科學を研究する者もある。感覺的および想像的の技能を以て實驗をやる者もある。即ち藝術家もある。猶また人に物を教へる者もある。』

『それが非常に重要なのです。』リチニスが云つた。

『そしてそれが皆な互ひに調和を保つて、適當な釣合を保つて、行はれる。中心たる立法部も行政部もなくて行はれる。如何にも結構な仕組です。私も正に承認する。……只だ然し不可能です。我々の住んでゐた世界では、未だ曾てさういふ風な考への提議された事がない。』

『ギルド社會主義者が餘ほど前からそんな風な考へを提議してゐます。』バーンステープル氏が云つた。

『ハハア！』バーレー氏は云つた。『私は頓とギルド社會主義の事を知らない。一體どんな説です。伺ひませう』

バーンステープル氏は暗に其の答辯の任務を拒否した。『若い人達の間では大てい誰でも知つてゐます。ラスキイはそれを複合國家と呼んでゐます。主權が一個處に集積されてゐる一元的國家と區別しての名稱です。今では支那人すら知つてゐます。北京の大學教授ＳＣ張（チャン）氏は「職業主義」と題するパンフレットを書いてます。私はツイ二三週間前に讀んだのですが、支那としては、歐洲式の民主政治の階段を通過する事が、如何に不利益であり、如何に不必要であるかを論じたのです。彼は支那をして直ちに、官吏、工業從事者、農業勞働者などゝいふ職能的諸階級が、並行して獨立する状態、（大體英國に起りそうな其の状態）に進ませたいと云ふのです。勿論それには教育上の革命といふ事を伴ふのですが。兎にかくさういふ思想が、我々の殘して來た世界に漲つてゐた事は明らかです。』

『ハハア、そうですか！』バーレー氏は一段の聰明と感賞とを示して云つた。『成るほど。私は少しも知らなかつた！』

（四）

會話は雜談の形で續いたが、それでも思想の交換は急速であり有効であつた。謂ゆる『末期の混亂時代』から以後に於けるユトピヤ國の歴史の大綱が、間もなくバーンステープル氏の心中にハツキリと見えて來たように思はれた。

彼が其の『末期の混亂時代』の事を知れば知るほど、それは如何にもよく地球の現代に似てゐるように思はれた。その時代のユトピヤ人は全く地球の風俗と同じく、澤山の着物を着て、處々の都會に住んでゐた。之より先、何ら一定の計畫があつたわけではないが、只だ幾つもの偶然事が運よく出くわした爲に、彼等は數世紀の間、好機會を摑んで大發展をやり得たのであつた。永い永いあいだ、物質の缺乏や、惡疫の流行や、破壞的の戰鬪が繰返された後、氣候上の狀況と政治上の形勢とが、彼等人類の上に笑ひはじめたのであつた。ユトピヤ人は其時はじめて、自分等の住む全地面を踏査する力を持つた。そして其の踏査に依つて、廣大なる處女地が斧や鍬や鋤の下に持ち來たされた。其の結果、莫大なる財物の增加を生じ、餘暇と自由とも亦それに伴なつた。そこで幾千の人々がみじめな一般の人間生活から免かれて、（若し自分でそれを欲するならば、）前代未聞の自由を以て考へ且つ行ひ得るといふ高い地位に擧げられた。或る人々（可なり多數の人々）は、それをやつた。從つて科學的研究の大發達が起り、珍奇な發明がそれに伴なつて續出し、遂に實際的人間力の大擴張が生じた。

それより以前にも、此ユトピヤ國に、科學的智識の突發が無いではなかつた。けれども、此の時のように好都合な狀況の下に出現した事もなく、又この時ほど永續した事もないので、未だ曾て實際上に多量の成果を見るに至らなかつた。然るにユトピヤ人は、この時まで、のろくさい蟻のように地球面を這ひまはり、或は自分より大きな、自分より早い動

物にたよつて漸く寄生的に旅行してゐたのに、今や僅々一二世紀の間に、自ら迅速に飛ぶ事も出來、地球面の如何なる部分とも即時に語り合ふ事が出來る身の上となつた。彼等は又、有らゆる前代の經驗に超越した大規模の機械力を所有した。單に機械力ばかりではない。生理學および心理學が物理學および化學に續いて起つて來たので、彼等は自己の肉體に關する、及び其の社會生活に關する、異常なる統制力の發生を見た。然るに斯ういふ進歩がやつとの事で來たとなると、今度は其の來方が餘りに急激で、餘りに混雜してゐた爲に、此の素晴らしい智識力の擴大に對して、其の具體的の眼前の効果から離れて眞に其の將來の可能性を認め得る者は、單に微々たる少數者に過ぎなかつた。多數者は只、手あたり次第に新發明を採用するばかりで、その新發明が包含する新要求に對して自分の思想と生活法とを適合させる事は、出來るだけ避けてゐた。

斯くて一般ユトピヤ人の、自分等に與へられた此の力と餘暇と自由との見越しに對する第一の感應は、繁殖であつた。其の無反省な、機械的な遣口は、全く動物か植物かの繁殖と同じであつた。彼等は、自分の前に開かれた廣大な便宜を悉く涸し盡すまで子を産んだ。彼等は其の科學の大なる賜物を受取ると直ぐ、それを單なる平凡な生命の無意義な増殖の爲に費した。末期の混亂時代に於いて、一時はユトピヤの人口が二十億以上に達してゐた。……

『すると、今は幾らです？』バーレー氏が問うた。

約二億五千萬。（ユトピヤ人は答へた）それが此のユトピヤの地面に於て、十分に進歩した生命の生活し得る最高限度であつた。但し今日では、生活資源の増加につれて人口も亦増加しつゝある。

恐怖のウメキが教父アマートンから起つた。彼は先頃から斯ういふ事の實現を恐れてゐたのであつた。彼の道徳的根據がこれで突きくづされた。『あなた方は人口の調節を敢てするのですか！人口の制限をやるのですか？。こゝの婦人

達は、必要な時だけに子を持つて、その外には持たないと云ふのですか？』

『勿論です。』アースレッドが云つた。『その筈ぢやありませんか。』

『そんな事だらうと思つてゐた。』教父アマートンは斯う云つて前に俯向き、兩手に顔を蔽うて更につぶやいた。

『先程からそんな氣がしてゐた。人間の種馬育成所だ！、靈魂の創造を拒むとは何事だ！何と云ふ悖徳亂倫だ！オー神よ！』

バーレー氏は聊か驚いた表情を浮べて、此の僧職紳士の感動を眼鏡の中から見つめてゐた。彼は（アーマントの使つたやうな）通り文句が嫌ひであつた。然し教父アマートンは、英國の社會に於いて甚だ有力なる保守黨分子を代表してゐた。バーレー氏は再びユトピヤ人に向つて言つた。『非常に面白い事實ですな。我々の地球は、現時に於いてすら、其の最高限の少くとも五倍を維持しやうと目論でゐるのです。

『然し、ツイ先つきのお話しでは、この冬には二千萬人ばかり、ロシヤといふ處で餓死するだらうと云ふぢやありませんか。それに又、全人口の中で、あなた方が餘裕のある生活を送つてゐると目する者は、極く僅かな一部分だと云ふぢやありませんか。』

『それにしても、實に著しいコントラストです。』バーレー氏は云つた。

『恐ろしい事です！』教父アマートンは云つた。

末期の混亂時代に於けるユトピヤ國の人口過剰は、（ユトピヤ人の主張する所に依れば）、當時人類を惱ました所の有らゆる害惡の根本であつた。洪水のやうに此の世界に注ぎこまれる夥だしい新來者が、少數賢明者の有らゆる努力を悉く押し潰してしまつた。少數賢明者は、其の多數者の中で相當な部分を教育して、新らしい（そして猶ほ急速に變化し

つゝある）生活條件の要求に適合させやうと努めたが、それも皆な無効であつた。

それに少數賢明者は、この運命を支配すべき何等の地位に置かれてゐる者でなかつた。民衆の大群は滅茶苦茶に此の世の存在に投げこまれたので、傷のついて壞れかゝつた傳統や因襲には左右され、淺はかな暗示や誘惑には直ぐに乘せられる代物であるのだから、丁度それにはまるだけの、がさつな心と、安つぽい成功主義とを持つた山師が出て來れば、譯もなくそれの餌になり、それのお味方になるのであつた。生産および分配の新らしい技術的條件に適合する爲、大慌てをして無器用に作り直した經濟制度は、次第々々に少數の掠奪者および營利業者が、一般の平人間に對する、殘忍無耻の搾取機關になつて來た。そしてその一般の平人間は搖床から墓場まで、悲慘と屈從との間に驅りたてられてゐた。彼等は面皮の厚い少數者（彼等自身より以上に大膽であり、又確かに根氣強くはあるが、他の有らゆる點に於いて別だん勝れてゐるでもない小數者）の爲に賺され、欺かれ、買はれ、賣られ、支配されてゐた。それで今日のユトピヤ人としては（アースレッドが云つた。）末期の混亂時代に於ける、それ等の富强者が行つてゐた、其の驚くべき愚劣と濫費と醜陋とを、諸君の心中に傳達する事が困難である。

（『イヤ、その御配慮に及ばない。』バーレーが云つた。『不幸にして……我々は知つてゐる、善く知つてゐる。實は知り過ぎてゐる。』）

此の腐爛しつゝある、夥たしい人間の群の上に、遂に災害が下つて來た。それは丁度、腐つた果物の積み重ねの上に虻が集まつたやうであつた。それは實に、避くべからざる自然の運命であつた。即ち、地球面の殆んど全部に亙つた戰爭が、脆弱な金融組織と、經濟機關の大部分とを、再び修理の方法のないほどに壞滅させてしまつた。諸種の内亂と、社會革命を目的とした未熟な諸計畫とが、更に其の解體を積けさせた。凶作の連續が一般の物資缺乏を彌が上に甚だしく

した。搾取階級の山師共は、かういふ事態の眞相には全く氣がつかないで、只だ一般人を欺き胡麻化す事ばかりを考へ、正しい人々の收拾運動をば悉く壓伏した。それは丁度、虻が、自分の體は既に引裂かれてゐながら、それでも猶ほ食ひ續けやうとするのに似てゐた。物を作ると云ふ努力はユトピヤ人の生活から消失し、只だ物を攫まうとする努力が得々としてそれに代つてゐた。生產は低減して殆んど消滅點に近づいた。蓄積された過去の富は減盡した。負債制度の大壓迫、負債者の大群（道德的に不能力な、自制心のない連中）、それが爲に有らゆる淸新な發意力は社會から一掃されてしまつた。

前述の大發明から始まつたユトピア國の永い開張期が、今や急速な收縮期に移つた。猶ほ僅かに殘存してゐた此の世界の餘裕と快樂とが、金融業や商工業の山師共に依つて一層貪婪に盜み去られた。一切の科學は疾くの昔し商業化されて、今は只主として有利な特許權の獲得や生活必需品の買占にのみ『應用』されてゐた。

純粹科學の忘れられたランプは、次第に其の光りが薄らぎ、風にゆらめき、遂に再び全く消えるかと思はれた。ユトピヤ國は再びあの發明時代以前と同じやうな永い、永い新暗黑時代に入るのかと思はれた。………

『實にどうも之は、我々の世界の悲觀論者の診斷その儘ですな。』バーレー氏は云つた。『實に全くその儘ですな。若しインジユ僧正が聞いたらどんなに喜ぶだらう。』

『あゝいふ不信者には、如何にも之は極めて愉快に見えるでせう。』教父アマートンは少々とんちんかんで斯う云つた。

バーンステープル氏には、こんな評語が邪魔になつた。彼は熱心にもつと先を聞かうとあせつてゐた。

『それから、どうなつたのです。』彼はアースレッドに問うた。

（五）

それからどうなつたか。バーンステープル氏が聞き得た所に依れば、それはユトピヤ人の思想の上に於ける、おもむろの變化であつた。今や科學と組織とがこの強大な、そして容易に發動し得る諸力（自然力や機械力）を、人間の手の中に與へてゐる時に當つて、社會生活の舊觀念（人間の男女が互ひに勝を爭うて、或る制限內に合法的鬪爭をするのが、社會生活だとする舊觀念）を、此うへ持續させるのは最早餘り危險だと云ふ事が、次第に多くの人に理解されて來た。それは丁度、近世の武器が其の威力を增大したので、諸國民の間に別々の主權を立てる事が餘り危險になつたのと同じである。そこで若し人間の歷史が困頓頹敗の中に亡ぶべきでないとするならば、そこに何か、人間の團結に對する新らしい考案と、新らしい風習が生ずべきであつた。

凡そ有らゆる社會は、法律、禁制、條約等に依つて、我々の祖先たる人間猿の、獰猛な原始的鬪爭心を制限する事を根本としてゐた。此の自我主張の太古の精神が、今は人間の新らしい力と、新らしい危險とに比例して、更に新らしい制限を受けねばならぬ事になつた。所有競爭の觀念を人間交際の主要思想とする事は、恰かも出來そこないの鎔鑛爐のやうに、從來それで動かしてゐた器械を燒き盡す虞れがある。そこで創造的奉仕の觀念がそれに代つて起らねばならなかつた。若し此の社會生活を救はうとするならば、人間の心と意志とが其の觀念に向つて進まねばならぬのであつた。昔しに在つては、極めて崇高な理想主義と思はれた提案が、今は單に冷靜な心理學的眞理としてのみならず、更に實際的の、且つ急要必至の眞理として、認められて來た。アースレツドが右の事を說明する時、その言葉の言ひまはしが、バーンステープル氏の心に、或る馴染の深い文句を思ひ出させた。即ち、アースレツドは斯う云つてゐるやうに聞えた。

凡そ己れの生命を救はんと欲する者はそれを失ふ。又た、己れの生命を與へんと欲する者は、その爲めに全世界を得べし。』

教父アマートンの考へも、それと同じやうに動いてゐたと見えて、彼は不意にアースレッドの言葉を遮つて斯う云つた。『チヨツト。今あなたの言はれた言葉は引用ではありませんか！』

アースレッドはそれを承認した。彼は心の中で或る引用をしてゐたのであつた。言語時代の古い昔しに生存した、大なる詩力を持つた或人の教訓の中から、其の一節を引用してゐたのであつた。

彼は更に前の説明を續けやうとしたが、教父アマートンは昂奮してそれを押し留めた。『マアちよつと。其の教訓者は何人です。何處に住んでゐた人です。どうして生れて、どうして死んだ人です。』

すると、バーンステープル氏の意識の中に、一つの畫面がヒラヒラと浮んで來た。それは寂しさうな、青い顏をした人が、狹い高塀のある町で、日光に晒されながら、押し合ひへしあひしてゐる群衆の間に、武裝した衞兵に取りかこまれて、血みどろになつて打倒れてゐるのであつた。其うしろには何か大きな、汚ない、厭な、道具があつて、群衆のどよめきに連れて搖れたり傾いたりしてゐた。………

『其人は此の世界ででも矢張り十字架の上で死んだのですか！』教父アマートンが叫んだ。『十字架の上で死んだのですか！』

此のユートピヤの豫言者は誠に痛ましい死方をしたが、十字架の上ではなかつた。彼は何とかの責苦に遭つたと云ふのだが、其の責苦の方法がどんなものであるやら、ユートピヤ人等にも、こゝにゐる地球人等にも、丸で考への及ばない事であつた。只だ分つてゐるのは、彼が緩やかに廻る車輪の上に縛りつけられて、死ぬるまで晒し物にされたと云ふ事で

あつた。この忌はしい刑罰は、殘酷なる征服人種のやつた事で。それが彼の上に課せられたのは、彼れの普遍的奉仕の教義が、奉仕をしない富者と支配者を驚かせたからであつた。

バーンステープル氏の目には、暫らくの間、燃えるやうな日光に晒された責苦の車輪の上にねぢけゆがんでゐる人の姿が、まぼろしとなつて現はれた。あゝ死に對する驚くべき勝利よ！。こういふ惡業の行はれた世界の中から、今は此の大平和と普遍美とが生れてゐる！。

（六）

色の白い、少し痩せた、物柔らかな美しい顔の男（それの名はライオンといふのだと、後にバーンステーブル氏に知れたのだが）、その男が今度はアースレッドに代つて、地球人の間に對する應答說明の任務に當つた。

彼はユトピヤ國に於ける教育係の一人であつた。彼れの說き聞かせた所に依れば、ユトピヤ社會の變化は決して急激な革命ではなかつた。如何なる新法律も新習慣も、如何なる經濟上の新組合制度も、（共同福利の爲にする社會全員の總奉仕といふ觀念に基づいて作られたのであるが）、それが皆、初めから充分に整頓して忽然と出現したのではない。末期混亂時代と其の以前との、永い年月に亘り、研究者と運動者との數が段々に增大して、其の人々の手に依つて新國家の諸基礎が据えつけられた。それには最初から一定の計畫とか、豫定の方策とかがあつたのではないが、只だ共通の社會奉仕の衝動、及び共通の明敏と誠實とに依つて、自然に無意識の協力が行はれたのであつた。ユトピヤ國に於いて心理科學が發達しはじめたのは――（その前數世紀の間に於ける、地理學や物理學の大發達に比較すべきほどの活氣を以て發達しはじめたのは）――末期混亂時代が既に其の頂點に近づく頃であつた。その頃、社會上および經濟上の混亂無秩

序の爲、實驗科學の進歩は阻碍され、諸大學の綜合的事業は不具となる有樣であつたので、それに刺戟されて、人間團結の過程に關する研究が大いに起り、而もそれが大膽猛烈となりつゝあつた。

バーンステープル氏が此の說明から受けた印象は、我々の世界に於いて革命と呼ばれた所の、あの暴力的の變化とは違ひ、只だ光明の增大、新思想の夜明けであつて、それに依つて舊制度の事物が次第に其の氣勢を減退しつゝ猶ほ暫らく存續してゐる間に、人は漸く新事物を當り前の事としてやりはじめると云ふのであつた。

新制度の起りは、討論と、書籍と、心理的實驗室との中に在つた。それの發生する土壤は學校の中に見出された。舊制度は學校敎師に些少な報酬を與へてゐた。そして舊制度の有力な諸人物は、富と權力とに對する鬪爭に忙がはしくて、敎育の事などに大した氣を配る暇がなかつた。それで敎育の事は、別だん有形の報酬など望まないで、只だ少年の心の中に新世界を作る爲に、自己の思想と勞力とを提供する人達に任されてゐた。實際それが少年の心中に作られた。斯くて、山師の政治家に依つて公然と支配されてゐる世界に於いて、又營利事業にモガキとほす者、財政的の奸智ある者が、權力を占める世界に於いて同時に一方では、次の事が敎へられて、そして理解されつゝあつた。即ち、擴大された私有財產は社會的に見て邪魔物である。無責任なる富者の一階級が存在する間、國家は正當に其の任務を果す事が出來ず、敎育は其の正當の効果を生ぜしめる事が出來ない。富者は其の本質上、有らゆる國家事業を襲擊して、それを腐敗せしめ、顚覆せしめるものである。彼等の見せびらかしの豪奢生活は有らゆる人生の價値を歪め且つ紛らはすものである。彼等は人類の福利の爲に亡ぶべきである。

『彼等は戰はなかつたですか。』キヤツキル氏が喧譁ずきらしく問うた。

彼等は無茶苦茶に、然し猛烈に戰つた。ユトピヤに於ける此の總科學的國家、敎育的國家の到來を遲延せしめ、若し

くば阻止しようとする戰鬪は、殆んど五世紀の間、意識的鬪爭として繼續した。此の戰鬪は實に、協力同心の新思想を具體的現實に結晶させようとする運動に對する、貪婪な、我儘な、偏頗な、利己的な人々の戰鬪であつた。其の戰鬪は、新思想の傳播された總ての處に於いて戰はれた。其の戰鬪は、解雇と、威嚇と、ボイコットと、暴行とを以て戰はれた。又虚言と、僞訴と、告發と、投獄とを以て、戰はれた。更に私刑(リンチ)を以て、タールと羽根との拷問を以て、パラフィンを以て、棍棒と銃とを以て、爆彈と砲とを以て戰はれた。

けれども、一たび此の世界に進水された新思想の服務は決して衰へなかつた。新思想は強制的の力を以て其の服務に必要な男女を捕へた。ユトピヤに科學的國家が建設された以前、百萬人以上の殉道者が其の爲に殺された。それより輕い受難者は數ふるに堪へない。さうする中に、一點又一點、或は教育上に於いて、或は社會立法に於いて、或は經濟的方策に於いて、勝利が獲得された。此の變化に對して確たる時日を定める事は出來ない。只だ或時、このユトピヤが、夜の既に明けた事を悟り、新事物が既に舊事物に代つた事を悟る時が來た。………

『あゝそれでなくちやいけない。』バーンステープル氏は、ユトピヤがもうそこに自分の前に無いかのように云つた。

『全く、それでなくちやいけない。』

次に又一つの質問に對する答があつた。ユトピヤの子供は總て其の能力の限度まで教育される。そして銘々の希望と力量とにはまる仕事に振りあてられる。子供は皆な丈夫に生れつく。彼等は充分健全な兩親から生れる。母親は適當な思慮と準備とを盡した後、彼等を産む事になる。彼等は充分健全な境遇の下に成長する。遊びたい、學びたいといふ、彼等の天然の衝動は、極めて緻密な教育的方法に依つて滿足させられる。彼等の手や目や足は、習練と發育との有らゆる機會を與へられる。彼等は畫をかき、字をかき、自己を表現する事を學び、又た自己の思想を助長する種々雜多の記

態を使用する事を學ぶ。親切と丁寧とは身に浸みこんだ習慣になつてゐる。彼等のまわりが總て悉く親切と丁寧であるのだから。又殊に、彼等の想像力の發達が深く注意され、獎勵される。彼等は世界と人類との驚くべき歴史を學び、如何に自分の同類が、昔の動物的の偏狹心や、主我心から脱却する事に努力したか、又如何に現に努力しつゝあるかを學び、更に此の自然界──（それは人間が厚い無智のヴエールを通して、まだほんの幽かにしか理解してゐないのだが）──其の自然界の支配に向つて進みつゝある事を學ぶ。彼等の情慾は皆な純化されてゐる。彼等は詩に依つて、實例に依つて、又自己の周圍の人々の愛に依つて、自己の爲の心配を愛の中に無くする事を學ぶ。彼等の性慾は自己の私慾と戰ふ事に向けられる。彼等の好奇心は科學的情熱として花を開く。彼等の爭鬪心は無秩序との戰ひに充てられる。彼等の持つて生れた自負心と野心とは社會共同の業績にあづかるの名譽を分有する事に振り向けられる。彼等は自分の好きな仕事に向ひ、自分で自分の爲すべき事を撰ぶ。

若し彼等の或者が怠惰であつても、それは別だん大した損害でない。ユトピヤには萬人の爲に有りあまる程の物がある。只だ然し其の怠惰者は遂に戀人をも得ず、子供を持つ事も出來ないだらう。なぜと云ふに、ユトピヤでは、精力の強い者か、勝れた所のある者かでなければ、人の愛を得ない。ユトピヤの戀愛では甚だ多く其の配偶を誇りとする。又ユトピヤには、遊んで暮す富裕者の『社交界』といふものがない。又單なる見物の爲にする演技も興行もない。總て單なる見物の爲には一物もない。ユトピヤは實に休暇日の爲には愉快な世界であるが、絶えず何もしまいといふ人の爲には、決して愉快でない。

ユトピヤの科學には既に數百年以來、產兒を識別する力がある。從つて現在生存してゐるユトピヤ人は殆んど總て、昔ならば、精力旺盛な創造的人物と目さるべき者ばかりである。現在のユトピヤ人として、愚鈍な者は殆んどなく、又

不具者といふ程の者は一人もない。怠惰者や、無性者や、無氣力者は、大抵死に絶えてしまつた。幽鬱なタイプは皆な解職されて居なくなつた。意地悪や腹黒は追々に消失しつゝある。斯くてユトピヤ人の大多數は、元氣で、活潑で、發明的で、感受的で、そしていつも上機嫌である。

『そして、こゝには國會もないのですか。』バーレー氏がまだ不審らしく聞いた。

ユトピヤには國會もない、政治もない、個人の富もない、商工業の競爭もない、警察も監獄もない、瘋狂院もない、不具者も癈疾者もない。そしてさういふ物の一つもないのは、學校と教師——（有らゆる學校と教師との力の限りを備へた學校と教師）——があるからである。政治と商業と競爭とは、未熟な社會を整理する手段方法である。さういふ整理法は、ユトピヤではもう千年以上も前に棄てられてゐる。成年以上のユトピヤ人に取つては、規則も政府も全く入用がない。彼等に入用な規則や政府は總て子供の時に心得てゐるのだから。

それでライオンの曰く。『我々の教育が即ち我々の政府である。』

第六章　地球人のユトペヤ批評

（一）

此の忘るべからざる日の午後から夕へにかけて、バーンステープル氏は只、政府と歴史とに關する珍らしい大問答（何んとも説明の出來ない見世物的の大問答）に没頭してゐるのだとしか思はれない折々があつた。それは又、總て只だ彼れの心中に起つてゐるだけのものゝ樣にも思はれた。すると又、此の冒險の絶對な現實性が急に強大な壓伏力を以て彼

れの上に戻つて來る。そして此の不思議を極めた自分の境遇を考へると、智識的興味は消え去つて、只だ茫然となるりであつた。さういふ茫然たる折々には、彼は自分の周圍にゐるユートピヤ人達の顏をひとつ〳〵次から次へと眺めわたし、其の間に暫らくは建物の構造の或る精妙な點に目をとめ、そして又再び其の神々しい高雅な姿に目を戻すのであつた。次に彼は又、自分の仲間の地球人等に立戻つて、不滿らしくそれを見るのであつた。

ユートピヤ人達の顏は、丁度イタリーの畫にある天使のやうに、無邪氣な まじめな、美しい顏でないのは一つもない。或る一人の婦人は不思議なほどよく、ミケール・アンジェロのかいたデルフアイの巫女に似てゐた。彼等はらくな姿勢で坐席に着き、男も女も一緒になつて、大抵は討論に一心になつてゐたが、それでもバーンステープル氏は折々親切らしい一對の目が穿鑿の眸を自分に向けてゐるのに出會つた。又或るユートピヤ人の顏が、ステラ夫人の服裝や、マッシュ氏の片眼鏡の上に、熱心に向けられてゐるのを見た。

ユートピヤ人に對するバーンステープル氏の第一印象は、彼等が皆若い人だといふ事であつた。然るに今では、その顏の中に、元氣旺盛な圓熟の氣品を備へた者の多いのに氣がついた。我々の世界で見るやうな、老人らしい特異の徴候を少しでも示した者は一人も居ないが、アースレッドとライオンとは、どちらも目や唇や顎のあたりに經驗の線影をとゞめてゐた。

この人達がバーンステープル氏に與へた感銘は、呆れと懐かしみとの奇妙にこんがらかつたものであつた。彼は平生から斯ういふ人間の存在し得る事を知つてゐたといふ氣がしてゐる。そして其の智識が、社會の事物に對する有らゆる判斷の、暗默の標準になつてゐたといふ氣がしてゐる。けれども彼は同時に又、其の人間と同じ世界に自分を見出す事は餘りの不思議として寧ろ呆れてゐるのである。彼等は尋常であつて、而も驚くべく異常である。それに比べると、自分

や自分の仲間は又、奇妙奇態であつて、而も全く平凡である。

それで彼は、この立派な懐かしい人達と親しみ交はつて、自分を彼等に與へ、又彼等を自分に結びつけ、互に助けあつて働らきたいといふ切ない望みがあると同時に、一方には又、彼等に接する事を尻込みし、彼等に觸はられて震へあがるといふ恐怖と畏縮があつた。彼は仲間として同輩として彼等から個人的に認識されたいといふ願望が餘りに强いので、自分の不束と無價値との痛感に壓伏されてゐた。彼は彼等の前に平伏したかつた。彼れの周圍にある總ての光明と優美との底に、結局、彼を此の新世界から排斥するといふ用捨のない警戒が潜んでゐる様に思はれた。

バーンステープル氏はユトピヤ人からそれほど大きな感銘を與へられ、又彼等の温雅と肉體の立派さとに對して眞に心の底から悅服しきつてゐたので、彼は暫らくの間、自分の仲間の地球人等の中に、自分と違つた反應を呈してゐる者のある事に氣づくだけの餘裕がなかつた。ユトピヤ人等が、地球人の日常生活の奇妙な事、醜怪な事、殘忍な事に對して、冷然として立ち離れてゐるのが、バーンステープル氏に取つては、ユトピヤの制度風俗を全然無批判に是認させるに足るものであつた。

彼は教父アマートンの擧動に依つて、此の驚くべき人間を大いに非難し、彼等に對して著るしい敵意を示す事の可能を初めて知つた。初め教父アマートンは、其の丸い襟の上に丸い顔と丸い目との驚きを見せてゐた。彼は誰でも進んで先だちをしようとする者に任せるといふ態度を示して、自分では一語をも發せず、只だ死んだグリーンレーキの裸體の美に接した時、驚きの餘り、僧侶らしくない讚嘆の意を表しただけであつた。然るに湖水のほとりまで來る間と、食事の間と、會議を開く準備の間とに、反動が起つて來て最初の無邪氣な謙遜な驚きが、反抗と敵意の態度に代つて來た。初めは此の新世界が單なる見せ物であつたのに、それが段々と主張の性質を帶びて來て、彼としては承認か否認かを決

定せねばならぬ事になつたものと見える。恐らく彼は公けの風紀取締役としての心の習慣が強すぎて、何に對してでも糺彈をやりはじめるまでは、氣が濟まないのであらう。實際、彼は、自分のまわりにゐる此のうるわしい多くの肉體の殆んど裸體の姿に對して、打擊と苦痛を感じたに相違ない。彼はやがて變な鼻音や咳を出し、獨りごとをつぶやき、そしてモウ長く默つて居られないといふ樣子振を示しはじめた。

彼は先づ人口問題が起つた時に口出しをやつた。それから車輪の豫言者の事が論議された時、彼れの智力が暫らく此の感情的のどよめきを抑へてゐたが、やがて又先入の心持が威力を振つて來た。

『到底だまつてゐられない。』バーンステーブル氏は彼れのつぶやくのを聞いた。『到底だまつてゐられない。』

それから急に彼は質問をやりだした。『私は是非聞いて置きたい事がある。私は此の謂ゆるユトピヤ國が、如何なる道德狀態に在るかを知りたい。御免を蒙ります。』

彼は立ちあがつた。手をわなわなさせて暫らくは言葉が出なかつた。それから彼は坐列の端まで出て行つて、そこで椅子の脊中に手を掛け得る地位に立つた。彼は自分の髮の間と手の指を通した。そして深く息を吸ひこんでゐるようであつた。並々ならぬ昂奮が彼れの顏に現はれた。彼れの顏は赤らんで輝きだした。或る恐ろしい懸念がバーンステーブル氏の心を掠めた。西ロンドンのセント・バルナバス教會堂で、彼が毎週の說教をやる時の、あの殆んど總てのものに對する忌憚なき罵倒、それが今こゝで始まるのではないかと懸念された。實際、其の懸念は一層おそろしい確實性を帶びて來た。

『友よ、此の新世界の兄弟よ。……私は是非ともあなた方に云はねばならぬ事がある。一刻も猶豫のならぬ事がある。私は靈魂を追求する或る問題をあなた方に問ひたい。私は或る簡單明白な、然しながら極めて根本的な事柄について、

明白にあなた方と論じたい。私は率直に云つてのけたい。そして男同志として、何等の腹蔵なく、此の緊急な、但し微妙な問題を語りたい。そこで何等の豫備交渉を用ゐず、直ちに私の云ふべき事を云はせて戴きたい。私があなた方に訪ねたいのは、——此の謂ゆるユトピヤの國に於いて、あなた方は矢張り、社會生活に於ける最も神聖な一事を保持してゐるか否か、尊敬してゐるか否か。即ちあなた方は矢張り結婚の神聖な束縛を尊敬してゐるか否か。』

彼は暫らく止まつた。其の止まつた間にユトピヤ人の答がバーンステープル氏に聞えた。『ユトピヤには束縛といふ者がない。』

然し教父アマートンは、何等の答を求める爲に問を發してゐるのではなかつた。彼は教壇式の問を發してゐるのであつた。

『私が知りたいと思ふのは。』彼はいよいよ調子づいてゐた。『かのエデンの花園に於ける、我々の最初の父母に示現された神聖なる結合が、此の國に於いても亦た認められてゐるか否か。即ちかの、一男一女の間に於ける、幸運の時にも不運の時にも變りのない、有らゆる他の親交を排斥する、清浄潔白なる終身の結合が、あなた方の生活の規範であるか否か。私が知りたいと思ふのは、……』

『あの人は知りたいと思はないのだから駄目だ。』ユトピヤ人のまぜかへしがあつた。

『……果して此の防衛され守護された二重純潔が……』

バーレー氏が長い白い片手を擧げて抗議した。『教父アマートン、もう其の位でいゝでせう。』

バーレー氏の手は權威のある手であつた。昇進の爲に振られ得る手であつた。教父アマートンが一たび其の心靈的雰圍氣を起した以上、それを止め得る者は極めて稀であつた。バーレー氏の手は其の稀な物の一つであつた。

『……他の一層貴重なる神の賜物に從つて、それで此の國に於いて廢棄されたのであるか否か、それで全く人間から排斥されたのであるか否か。（此ところ、意味不たしか。譯者。）……何ですか、ミスタ・バーレー。』

『もうどうか此の問題は暫らく其の位にして置いて下さい。もすこし善く我々がこゝの事を學ぶまで。御覽の通り、制度習慣がスッカリ違つてゐるのだから。結婚の制度だつて違つてゐるでせう。』

教父の顏色は落ちた。『ミスタ・バーレー、私は云はずに居られない。若し私の疑ひが當つてゐるならば、私は猶豫なく此の世界から、健康と道德を裝つてゐる其の熱病的の假面を剝ぎ取つてやりたい。』

『あんまり剝ぎ取る物は殘つて居ないようだ。』バーレー氏の運轉手が聞えるような獨白（アサイド）をやつた。

幾分疳癪の氣味がバーレー氏の聲の中に現はれた。

『ぢや質問をおやりなさい、質問を。演說はもうよして下さい。あの人達は我々の演說を聞きたくはないのです。』

『私は質問をしたのです。』教父アマートンは少しムツトして、修辭的睥睨をアースレッドに與へ、其まゝ突立つてゐた。

それに對する答は明白卒直であつた。ユトピヤに於いては、男女が不可分の一對として生活するといふ何等の强制はない。さういふ强制は、大部分のユトピヤ人に取つて不便である。男女が仕事の爲に近接する時、多くの場合、それが戀人同志となつて永く一緒に生活する。アーデンとグリーンレーキの如きがそれである。けれども彼等にさうする義務があるわけではない。

但し此の自由が、昔からあつたのではない。昔の群集時代、混亂時代に在つては、殊に農業勞働者や、雇はれ人等の間に立つては、一度情人となつた男女は重刑の威嚇の下に一生涯を縛りつけられてゐた。彼等は小さな家に一緒に住み、

女は男の爲に其の家の世話をした。女は男の下婢であつて、そして出來るだけ多くの子供を産み、男は又それを養ふ食物を取つて來た。子供の欲しがられたのは、それが間もなく田園に於いて、或は賃金取として役に立つからであつた。然るにさういふ配偶法に婦人を屈從させてゐた貧困窮迫の事實が無くなつてしまつた。人は今でも自分の好きな相手と配偶になるのだが、然しそれは内的の必要からであつて、何等外的の強制からではない。

敎父アマートンは隱しきれぬいらだちを以て聞いてゐたが、急に又飛びあがつて斯う云つた。『では私の思つた通りだ。あなた方は家族制度を廢止したのですね。』彼がアースレッドに向けて突きだした指は、殆んど人身攻撃の態度であつた。

否。ユートピヤは家族制度を廢止したのでない。ユートピヤは家族制度を擴大し美化して全世界を其の中に包容させた。昔車輪の豫言者は（此の人のことは、敎父アマートンも尊敬して居られる樣だが）、彼は太古の家庭の偏狹を擴大せよとこそ説敎した。彼が其の説敎をしてゐた時、人々は、彼れの母と兄弟とが戶の外で彼に會ひたいと云つてゐると告げた。然るに彼は母と兄弟との處に行かなかつた。彼は自分の言葉を聞いてゐる群集の方に振向いて云つた。『見よ、我が母と我が兄弟とはこゝに在り』と。

敎父アマートンは、自分の前にある椅子の脊中をけたたましく叩いて叫んだ。『胡麻化しだ！ 胡麻化しだ！。惡魔も經典を引用するとは其事だ！。』

バーンステープル氏には、敎父アマートンが自分を制しきれなくなつてゐる事が見えてゐた。彼は自分のしてゐる事に驚いてゐたのだが、さりとてそれをやらずには居られなかつた。彼は餘りに激昂して明晰に考へる事も出來ず、自分の

動を適當に抑制する事も出來なかつた。それで彼は只だ無茶苦茶に怒鳴りつゞけてゐた。彼は全くどうにでもなれといふ態度で、誰か來て助けて呉れるだらうといふ、セント・パルナバスの教堂に於ける習慣に信頼してゐた。

『今私にあなた方の立場が分つた。分りすぎるほどあなた方の立場が分つた。最初から私はさうだらうと察してゐた。私は待つてゐた、十分それを確かめるまで待つてゐた、確證を握るまで待つてゐた。然しそれはモウ自然に現はれてゐる。其の破廉耻な服裝！　其の放縱な淫猥な態度！。若い男女が、笑ひながら手をつないで、接吻もしかねまじき其の有樣は何事だ。せめてさういふ事に目を背けるのが、人間の禮節であり、嗜みであるのに！。それに何ぞや先程の下劣な言分、結婚もなく、神助もなく、法式もなく、制裁もなくして男女が愛人になるとは何事だ。一體これはどういふ意味です。一體これでどうなるのです。私が僧侶である故に、――大なる誘惑があるにも係はらず、純潔無垢の男子であるが故に――それで私に理解が出來ないと思つては間違ひです。私と雖も、人心の秘奥の委を知らないではない。心に傷を負うた罪人、陶器の破片のような人々が、其の哀れな懺悔を以て、私の許に忍び寄るではないか。だから私は明らかに云ひ得る、あなた方は今ま何處に行きつゝあるか、あなた方は今ま何をしてゐるか。あなた方の謂ゆる自由とは淫佚に過ぎない。あなた方の謂ゆるユトピヤとは無制限な放縱の地獄に過ぎない！。實に無制限な放縱の地獄に過ぎない！』

バーレー氏は反抗の手を擧げた。然し教父アマートンの雄辯は其の障礙を乘り越えた。

彼は自分の前の梯子の脊中を打ち叩いて叫んだ。『私は證言する。私は敢て證言する。私は寸毫も躊躇しない。私は斷乎として曖昧な言辭を弄する事を拒否する。諸君は悉く亂婚の中に生活して居る！亂婚といふより外に言葉がない。即ち動物的亂婚である！畜生的亂婚である！』

バーレー氏は蹶起した。彼は兩手を擧げて此のロンドンの『電辯士』を制止した。『ノー、ノー。おだまりなさい、ミスタ・アマートン、おだまりなさい。餘りの暴言です。あなたには理解が出來ないのです。お坐りなさい。サ、お坐りなさい。』

『坐つて靜かになさい。』涼しいハッキリとした聲が云つた。『聞かなければ連れて行く。』

敎父アマートンは、ふと自分の肱の脇に靜に立つてゐる人の姿に氣がついた。彼は品やかな一人の若者と目を見あはせた。其の目は、恰かも肖像畫家が新たな被寫人を檢分するやうに、アマートンの身體を檢分してゐた。彼れの態度には少しも威嚇の氣がなかつた。彼は只だ靜かに立つてゐた。けれども彼れの風貌は、不思議なほど敎父アマートンの影を薄くした。さしもの大說敎師の聲が喉の中に消えた。

バーレー氏の穩やかな聲が、衝突を防ぐべく擧げられた。『ミスタ・サーペンチン、私はあなたに訴へます、そして謝罪します。彼は今ま少し責任感を失つてゐます。我々他のもの一同、此の故障——此の出來事を遺憾とします。どうか彼を連れて行くことをやめて戴きたい、（連れて行くといふ事が如何なる意味であるにせよ）。今から私が請合つて彼れの行狀に氣をつけさせます。ミスタ・アマートン、お坐りなさい。サア今直ぐに。さもなければ、私はもう手を引きますぞ。』

敎父アマートンは躊躇した。

『今に私の時が來る。』彼はさう云つて暫らく若者の目を見つめ、そして自分の席に返つた。

アースレッドが靜かに明らかに語りだした。『君等地球人は隨分取扱に骨の折れる客人だ。まだ外にもあるが……何しろ此人の心は餘ほど汚れてゐる。彼れの性に關する想像力は明に病的で、炎症を起してゐる。彼は怒つてゐる。そ

して人を罵り傷つける事を好んでゐる。そして彼れの騒ぎ方は實に恐ろしい。明日はよく診察して處置しなければなるまい。』

『何？』叔父アマートンの丸い顔が急に灰色になつた。『どういふ意味だ、處置するとは？』

『默つてお居でなさい。』バーレー氏が云つた。『もうどうか默つてお居でなさい。隨分迷惑を掛けたぢやありませんか。………』

差當りこれで此の事件は片づいたように思はれたが、バーンステーブル氏の心には、妙にピク／＼するような恐怖の感じが殘つた。このユトピヤ人は如何にも柔しい優雅な人達ではあるが、然し先ほど暫らくの間、力の手が地球人等の上に徘徊したように思はれた。地球人間の周圍は恐く日光と美とである。けれども彼等は他國人である、此の未知の世界に於ける全く頼りなき他國人である。ユトピヤ人の顔は親切げであり、其の目は好奇心に充ちて何處となく心安げである。然し心安いといふよりは遥かに多く注意ぶかいといふ所がある。そしてそれが恰かも、或る越えがたき差別の淵を隔てゝ見るといふ趣きである。

（二）

それからバーンステーブル氏は、其の苦悶の最中に於いて、リチニスの鳶色の目に出會つた。其の目は他のユトピヤ人の目よりも一層親切げであつた。彼女は少なくとも彼れの持つ恐怖を理解し、彼をいたはつて彼れの爲に友人となつてくれさうに思はれた。バーンステーブル氏は彼女を見つめた。そして恰かも、迷ひ犬が、親切さうではあるが不安心な人の群れに近づいて、そこで柔しい目つきや扱ひに會つた時のような心持を感じてゐた。

今一つユトピヤに對して盛んに反抗してゐたのはソレヂー・マッシユ氏の心であつた。彼はユトピヤの宗教や道德や社會組織については、何等の興存を持つてゐなかつた。苟くも少しく本氣に美的抱負を持する紳士は、さういふ事柄に對しては何等の興味を示さないといふ事を、彼は疾くにから承知してゐた。彼れの感覺は、さういふ事物に對しては高雅に過ぎると假定されてゐた。然し彼は今、『自然界の均衡』といふ美しい事實が、昔から存してゐた事、そしてユトピヤの科學的方法がそれを破壞した事を指摘した。彼れの謂ゆる『自然界の均衡』とは何であるか、又それが地球上に於いてどんな風に行はれてゐると云ふのか、ユトピヤ人にもバーンステープル氏にも、ハッキリ理解する事が出來なかつた。そこで段々その點の吟味を遂げると、マッシユ氏は顏を赤めて意地張りだし其の片眼鏡が守勢的に光つて來た。『僕は敢て燕の事を固執する。』彼は繰返した。『これで若し諸君が僕の論旨を解しないなら、僕は外に說明の仕樣がない。』

彼は燕の事から始めて、又燕の事に立戻つた。ユトピヤには燕が一疋も見えない。燕が一疋も見えないのは、蚋蚊や蠅が居ないからであると。如何にも、ユトピヤには昆蟲の生命に對する故意の大縮少があつた。從つてそれが直接間接に昆蟲の生命に依存する、他の有らゆる生物に對して重大な影響を及ぼした。ユトピヤに於いて社會の新狀態が確立され、教育的國家が運用を始めるが否や、ユトピヤ社會の注意は久しい間の宿題たる、有害動植物の組織的撲滅に向けられた。即ち例へば、蠅、虻、鼠の諸種類、兎、蟑蝨などの、有害と除去の可能とについて、注意ぶかい研究が遂げられた。又、病菌から犀や豹に至るまでの幾萬種屬が、それ／＼裁判に掛けられた。有らゆる種屬に辯護人が附せられた。そして各種屬について詰問があつた。それに如何なる利益があるか。それは如何なる害を爲すか。それは如何にすれば撲滅され得るか。それが亡びれば、如何なる物がそれと共に亡びるか。それを根絶させるだけの値打があるか。それとも輕減して保留すべきであるか。斯くていよ／＼判決が死刑と確定しても、ユトピヤ人は極めて愼重に其の撲滅事務を

遂行した。即ち、豫備が保存される事となり、現に今でも、宣告を受けた諸種屬の大部分が、或る安全な隔離所に保存されてある。

大抵の傳染病は全く驅逐された。其の或者は頗る容易に消滅したが、或者に至つては、それに宣戰を布告し、全人類を嚴重な紀律に服せしめて、初めてそれを人間生活から排除する事が出來た。人間および動物の、内的および外的の多くの寄生物も全く除去された。それから又、不衛生な昆蟲類や、雜草や、害蟲や、猛獸に對する、此の世界の大掃除があつた。蚊が居なくなつた。蝿も居なくなつた。家蝿も、肉蝿も、種々雜多の蝿類も、皆な居なくなつた。彼等は實に莫大な努力と、數年代に亘る戰鬪とに依つて、漸く人生から驅逐された。豹とか狼とかいふ大きな厄介物を始末するのは、右の小さな害物を無くするのに比べると、容易至極なものであつた。蝿に對する攻撃の中には、ユトピヤの家屋の大部分を殆んど全く建て直し、又總家屋の綿密な大掃除をする事まで含まれてゐた。

或る種屬が亡びれば、他の如何なる物がそれと共に亡びるかといふ事は、ユトピヤが當面した最も微妙難解な問題であつた。例へば、或る昆蟲は、其の生活の初期に於いては破壞的な忌はしい毛蟲であり、幼蟲あるひは蛹としては恐怖であつて、それで次にはそれ自體が華麗な者となるか、或は有用な花もしくば愉快な花の受精に必要な者となる。又他の昆蟲は、それ自體としては忌はしいが、愉快な好もしい動物の爲に必要な、他に代りのない食物である。燕が、ユトピヤから居なくなつたといふのは眞實でないが、非常に少くはなつてゐる。その他、昆蟲を餌とする小鳥の數種（例へば鮫鶲しのり鴫の如き）も稀になつてゐる。けれども彼等は全く滅亡してはゐない。昆蟲の驅除はそこまで行つてゐない。或る地方にはまだそれらの愉快な鳥が生息し得るだけの、相當の昆蟲種屬が殘つてゐる。

或る植物は、外の點では非常に忌はしいけれども、或る種の化合物（それを合成的に作るには、まだ甚だ高價な或は

面倒な化合物）の便宜な出所であるので、人生の中に、或る範圍の地歩を保つてゐる。植木や花は動物と違ひ、昔から栽培者や雜種家の手に於いて簡單に變形され得るので、それがユトピヤに於いては甚だしい變化を呈してゐる。だから我が地球人等は、全く見たことのない珍らしい茂りや、麗はしい匂ひのよい花ざかりを、幾十百種も發見したのであつた。バーンステープル氏の聞いた所に依ると、或る植物は新らしい育成法の爲に、極めて精良な愛好すべき品質を有する、新らしい空前の分泌物（蠟、ゴム、精油など）を作りだしてゐる。

又、大動物の飼ひ馴しも甚だ多い。大きな食肉獸が毛を梳かれて綺麗になり、乳汁食に慣らされ、荒い氣質を失つて全く猫の様に化せられ、そしてユトピヤの愛玩物となり裝飾物となつてゐる。殆んど絶滅してゐた象が又繁殖し、ジラフまでも救はれてゐる。猨は古くから菓子や菜食に馴らされて、其の智力も大いに進歩してゐる。犬は吠える事をやめて、比較的に少なくなつてゐる。獵犬は廢止され、小さな愛玩動物も無くなつてゐる。

馬はバーンステープル氏の目につかなかつた。然し彼は甚だ近代的な都人士タイプであつたので、別だん馬の見えないのを氣にしなかつた。從つて現にユトピヤに居る間、馬について何等の質問をも發しなかつた。

彼は此の世界に於ける最初の日の午後、自然界に對する人間の此の修正と編輯、即ち此の除去と栽培を聞いた時、それが人間の歴史に於いて、最も自然な、最も必要な段取であつたと感じた。『これで見ると』彼は自分に云つた。『人間が園丁として神から作られたといふのは、實に面白い想像だ。』（譯註。アダムはエデンの花園の園丁だと云はれてゐる。）

彼れ自身も矢張り人に栽培されたのである。…………

ユトピヤ人は又人種改善の端緒について語つた。即ち親の選擇に關する一層確實な新決定法、遺傳學に關する確實性の増大等について語つた。それでバーンステープル氏は、總てのユトピヤ人が現はしてゐる其の顔と四肢との、逞まし

い、晴々とした美しさと、自分の仲間の地球人等の、様々な取合せの恰好と、其の體の不平均とを對照して見て、此のユトピヤ人が、僅かに三千年かそこらの優勝な地位の爲に、既に人間を超越して一層高潔な人性に進みつゝある事を感知した。彼等は既に別種類の人間になりつゝあつた。

三

彼等は既に別種類の人間であつた。

其の午後に於ける質問や應答や意見の交換が進行する中、バーンステープル氏に取つては、彼等の肉體の差異は其の心の差異に比べると、殆んど何でも無いといふ事が、次第に明かに感じられた。元來、生れつきからして違つてゐるのだが、此の光の子等の心は、地球人の心の發達を不具にする、あの恐ろしい不和や、隱蔽や、曖昧や、無智などに依つて害される事なしに發育してゐる。彼等は明白であり、眞率であり、直截である。彼等は未だ曾て、教師に對する防禦的の猜疑心、教訓に對する反抗心（それは、半ば強迫的の教訓に對する自然の反應であるが）、そういふ心持を發達させた事がない。彼等は思想の傳達に於て、實に美しいほど不注意である。地球人の會話にある、反語、隱蔽、不實、虛飾、見せかけなどいふものは、彼等に知られてゐないらしい。バーンステープル氏は、此の彼等の心的のはだかを、今ま呼吸してゐる山の空氣と同じく、如何にも清新爽快に感じた。彼等が自分や自分の仲間のやうな、こんな不躾な者共に對して、よくもあれほど忍耐して、氣持よくしてくれるものだと、彼はそれを驚いた。

不躾といふ言葉を、彼は自分の心の中で使つてゐた。殊に自分を、皆の中で一ばん不躾だと感じてゐた。彼はユトピヤ人を恐れてゐた。彼等の前に於て、彼は俗惡であり、下劣であつた。彼は不作法な地球の闖入者が客室に通されたや

うに感じてゐた。そして彼は其の自分の下劣さを痛切に恥ぢてゐた。バーレー氏とステラ夫人との外、他の總ての地球人等は、劣弱を自覺した動物が其の自覺に對して闘爭する時の、その防禦的怒氣を漏らしてゐた。

バーレー氏の運轉手は、叔父アマートンと同じく、ユートピヤ人の裸體姿の爲に甚だしく惱まされてゐたものと見える。彼れのさうした感情は、身體や、顏付や、及び『違ふ、違ふ！』或は『へへエ！』などといふ折々の皮肉な評語に現はれてゐた。彼はさういふ評語を、大部分はバーンステープル氏に向つて吐いてゐた。彼としては、バーンステープル氏が小いさい舊式の自動車の持主であるので、氏に對して深い輕蔑の念と同輩らしい心安立とを交へた感じを持つてゐたらしい。彼は又、自分が目ざましいと考へた何事にでも、態度や身振でバーンステープル氏の注意を向けさせやうとした。そしてそれには、眉を釣り上げて變な眺め方や作り顏をするのであつた。彼は又、口と鼻で指さしをする癖があつて、モット通常な場合なら、バーンステープル氏はそれを面白いと思つたかも知れない。

ステラ夫人は、初め近代的タイプの大貴婦人としてバーンステープル氏に印象されたが、今では防禦的になつて、餘り貴婦人すぎるやうに思はれだした。然しバーレー氏はさすがに幾分の貴族的氣品を保つてゐた。彼は地球上に於いて生涯を通じて大人物であつた。從つて勿論彼は、ユートピヤに於いても、大人物として待遇されない理由がないと信じたのであつた。地球に在つては、彼は殆んど何事をもしないで、そして聰明にも其の最も好都合な結果を受入れたのであつた。彼れの其の機敏な、試驗的な心、（何の意見もなく、確信もなく、革命的の慾望もない其の心）からして、今こゝでも平然として、著名な大人物が（同情のある、然しながら全くどつちつかずの態度で）外國の制度を視察するといふ氣分になつたのである。從つて、『ハヽア、伺ひませう』と云つたやうな、鷹揚な愛嬌のある言葉が、彼れの會話の節々を點綴してゐた。

日暮が近づきつゝあつた。清いユトピヤの空が入日の金色で輝いてゐた。そして湖水の上の雲の峰が石竹色から紫にあせつゝあつた。その時、ルーパート・キヤツキル氏が急にバーンステープル氏の注意を引いた。彼は自分の席でジレジレしてゐた。『私は少し云ひたい事があります。是非少し云ひたい事があります。』

やがて彼は飛びおきて、先ほどバーレー氏がそこで演說をやつた、その半圓台の中央に歩み出た。『ミスタ・サアペンチン。ミスタ・バーレー。若し諸君が私に其の機會をお與へ下さるならば、私は少しく玆に申上げて見たい事があります。』

(四)

彼は灰色の禮帽をぬいで、元の席に返つてそれを椅子の上に置き、そして再び半圓台の中央に立つた。上衣の裾を後ろにまくり、兩手を腰にあてがひ、頭を前の方に突きだし、半ば狡猾な、半ば尊大な表情で、暫らく聽衆を見まわし、何か聞えない事を口の中でつぶやきながら遣りだした。

彼れの發端は餘り愛嬌よくなかつた。彼れの演說には少し吃り氣味があつて、舌の先が兎かく前齒にさわり、其の聲はいつも喉に引つかゝつてゐた。それで最初の二三句は、不安定な努力に依つて彈きだされるような調子であつた。そうする中に、バーンステープル氏には漸く、キヤツキル氏が或る特殊な意見を發表しつゝある事が分つて來た。即ち彼がユトピヤに對して、相當の理屈をつけた、筋道の通つた意見を提出しつゝある事が分つて來た。バーンステープル氏は其の批評に反對であつた、猛烈に反對であつた。けれども、それが一個の理解すべき心的態度である事だけは承認された。

キヤツキル氏は、ユトピヤの美と秩序とに對する一應の承認から始めだした。彼は『總ての人の類』に現はれた『艶

饒しい健康』を稱讃し、ユトピヤ生活の富と平穩と安樂とを稱讃した。彼等は『自然界の諸勢力を飼ひ馴らして、全くそれを只だ一個の目的、即ち人類の物質的安樂の爲に屈從させたのである。』

『だつて、アーデンとグリーンレーキはどうです。』バーンステープル氏はつぶやいた。

キヤツキル氏はその交ぜかへしを聞かなかつた、或は氣にとめなかつた。『從つて、議長閣下！……イヤ、ミスタ・サーペンチン、……それが地球人の心に與へた第一の影響は實に壓伏的である。だから』……（彼はこゝでバーレー氏とバーンステープル氏とに一瞥を與へた。）……『だから我々の中の或者が、其の感嘆の爲に足をすくわれたのは不思議でも何んでもない。だから諸君の此の殆んど魔術のような美が我々を魅惑して、我々の本性に於ける深奥な衝動や、切望や、欲求を忘れさせたのは不思議でも何んでもない。だから我々はツイ斯う云はうとするのである。「理想郷が遂に茲に發見された。我々をしてこゝに止まらしめよ。我々をして此の秩序整然たる華麗の國に順應せしめよ。そして我々をして此の國に生活し此の國に死せしめよ」と。實は私も矢張り、ーミスタ……ミスタ・サーペンチン、ー暫らくの間、その魔術に掛けられたのです。然しそれはホンの暫らくです。今では既に多大の疑問を抱いて居るのであります。……』

彼れの輕卒な性急な心は、次の事實を捉へて放さないのであつた。即ち、ユトピヤに於ける害物や寄生物や疾病の除去と大掃除とは、附隨的の減少と損失との可能を伴つてゐると云ふのである。此の事實が彼れの心を捉へて放さなかつたと云ふ方が正しいかも知れない。ユトピヤ人が此の世界を人間の活動の爲に十分健全なものにする其の過程に於いて其の一歩每に愼重な熟慮を費した事については、彼は全くそれを無視してゐた。彼は總ての利益に伴ふ損害のあつた事を假定し、更に其の損害を過大に誇張し、そして赤坊を湯と共に棄てるといふノツピキならぬ比喩（英國の國會政治家としてはノツピキならぬ比喩）に、スル〳〵と其の議論を持ちこんでしまつた。次に彼は言明した。ユトピヤ人は異常

なる平和と、安樂と、露骨に云へば放縱との生活を送つてゐる。(─彼等は働らいてるぢやないか─と、バーンステーブル氏は云つた。)けれども百千の不安と不快とが無くなつたと同時に、それよりも一層大なる、一層貴重なる他の何物かが無くなつてゐるではないか。地球の生活は不安であり、勞苦と心配とに充ちて居り、更に悲慘と困窮と煩悶とに充ちて居る。それは彼も承認した。けれども又、そして實はそれらの事のあるが爲に、緊張があり、希望があり、意外の喜悅があり、冒險の愉快があり、才能技術の上達がある。其の點に於いては、ユートピヤの規律整然たる生活が到底企及し得ざる所である。『諸君は矛盾と困窮とから逃れた。然し同時に又、生きて躍動する人生の現實から逃れたのではないか。』

彼は滔々として地球生活に對する頌德の辭を述べだした。彼は地球に於ける人生の活氣を稱揚して、今ま彼れの周圍にある此の雄大華麗の中に何等の活氣が存してゐないかの樣に論じた。彼は『我が人口稠密の都市に於ける殷賑』の狀を語り、『我が生々繁殖する幾百萬人の疾驅』の勢ひを語り、『我が人類の熱鬧地および避難所を風靡し去來する』所の『商業上の大波や、工業上の努力鬪爭』について語つた。

彼は如何にも尤もらしい文句を用ゐる事、および雄辯を見せかけるに足る、想像的修辭を用ゐる事の巧みを持つてゐた。バーンステーブル氏は、其の演説の吃り氣味と、其の音聲の濁りとを忘れてゐた。キヤツキル氏は、バーレー氏が先に小賣をした、其の有らゆる地球の害惡と危險とを大膽に承認した。バーレー氏の云つた所は悉く眞實である。彼れの云つた所の總ては、まだ實は眞實を盡してゐない。饑饉も疾病も固よりある。我々はユートピヤが除去した幾百千の疾病に苦しんでゐる。我々はユートピヤが今は只だ昔しの傳説としてのみ知つてゐる所の幾百千の苦艱に苦しんでゐる。虱は噛り散らし、蝿は我々を責め惱ます。人生は時として惡臭を放ち、嘔吐を催さしめる。私は諸君、明らかにそれを承認する。我々は諸君の極端な經驗から見ると、心身の不快、悲慘、苦惱、憂悶に於いて、遙かに諸君の下に在る。

並にそれに相違ない。けれども、我々は別に諸君より以上に登つてゐるではないか。私は敢て其の點に於いて諸君に挑戰する。諸君は此の無限の安全の中に在つて、我々の多くの努力が有する、あの強烈な意氣込、あの狂はしい、一生懸命の強烈な意氣込を、どうして知る事が出來ますか。諸君はどうして、刑の執行猶豫の喜び、中間劇の樂しみ、危險を逃避した愉快を知る事が出來ますか。我々の多くの幸福が諸君の眼界以外に存する事を考へて戴きたい。病氣の快復期のあの初期の樂しさを諸君はどうしてこゝで知る事が出來ますか。不愉快な周圍から逃れて休養に出かける時の愉快。身體あるいは財產の大危險を冒して、それを脫出する愉快。巨大な賭越しにだいて勝利を博する愉快。牢獄から出て來る愉快。諸君はどうしてそれを知る事が出來ますか。だから諸君、我々の世界に於いては、苦痛その者の中にすら魅惑を感ずる人があると云はれて居ります。我々の生活は諸君のよりも恐ろしい者であるが故に、それ故に又、諸君のよりも無限に多く輝いた瞬間があるのです。又實にそうあるべき筈です。人生が單に順調である處に於いては、これは實に超人間の事であります。然るに我々は常にそれに慣らされ、それが爲に硬化されてゐます。即ち我々は銳利な刄に鍛へあげられてゐます。試みに我々に向つて、我々の地球の無秩序、我々の悲慘と苦惱、我々の高い死亡率、および我々の忌はしき疾病を放棄するか否かを問へ。その問はれた最初の時には、世界中の有らゆる男女が『然り、固より然り』と答へるであらう。然しそれは問はれた最初の時ですよ、諸君!』

キヤツキル氏は指を前方に突きだして、暫らく聽衆をそれに控へてゐた。

『暫らくすると我々は必ず考へはじめる。諸君の中の博物學者が、蠅や其他の小さな害物について疑問を出したと云ふのと同じように、我々も矢張り疑問を出す。『それと同時に何事が生ずるか。それの代價は何であるか。』そして其の代價が、(我々の不斷の鬪爭が產み出す所の)あの強烈な生活の意氣込の放棄、あの苦艱に堪へ來つた元氣の放棄、あの經驗

を積んだ、鹽漬のような粘り强さ（あの鼠のような、狼のような粘り强さ）の放棄であると知る時に、我々は必ず躊躇する。然り、我々は必ず躊躇する。そして最後に、（私は信ずる、我は希望し且つ信ずる、更に私は祈り且つ信ずる、）我々は必ず「否」と答へる。我々は必ず「否」と答へる。』

キャツキル氏は今や大昂奮の狀態に在つた。彼は握りかためた拳こつで性急な突撃の身振をしてゐた。彼れの聲は、或は上り、或は下り、或は怒鳴り散らした。彼は體を振り動かし、あたりを見まわし、自分の仲間の地球人に對して贊成を求むる一瞥を與へ、折々はバーレー氏に對して微笑を投げかけたりした。

此の考へ方（即ち我々の、摑みあひばかりしてゐる、生氣の抜けた、手當り次第の、哀れな世界が、實は熱烈な、緻密な、反作用の大組織であつて、それが此の整頓完備したユトピヤの夕暮の平穏さに對して、正にコントラストを爲してゐるといふ考へ方）が、全く彼れの心を占領してゐた。『私は實に諸君、我が地球人類の、高尚な、猛烈な、危險的な運命を、未だ曾て今日の如く痛感した事がない。私は今この、諸君の理想鄕に對し、此の有らゆる矛盾衝突の排除された、靈妙なる完全國に對して、……』

バーンステープル氏は此の時、先きにデルフアイの巫女を思ひ出させられた、あの婦人の顏に、幽かなほゝゑみの浮ぶのを見つけた。

『……確かに私は其の秩序と美とを承認し讃美する。昔しの物語にあるように、或る埃りに塗れた、而も大膽な順禮者が、其の貴い神祕な探求の爲に恐らくこゝに立止まるだらうと思はれる、其の秩序と美とを承認し讃美する。又或る豪奢なシバリス人（シバリスは昔し其の住民の豪奢を以て有名な土地の名）の愉快な花園のような、此の秩序と美とを承認し讃美する。そして私は、その順禮者と同じく、諸君の生活方法についての智慧をお尋ねしたい。なぜと云ふに、私は信

する。凡そ生命なる者は、及び有らゆる生命の元氣と美とは、總て鬪爭と競爭と衝突から生れるものだといふ事は、旣に確證された事實である。我々は艱難困苦の中に鍊りあげられ、作りあげられてゐる。諸君も矢張りさうに違ひない。然るに諸君は今、永劫に亙つて矛盾衝突を排除したと夢みてゐる。諸君の經濟的國家は、私の解する所に依れば、一種の社會主義である。諸君は有らゆる平和の事實の中に競爭を廢止してゐる。諸君の政治的國家は單一の世界的結合である。諸君は全く、激勵向上の効果を有する敵の威嚇を除去し、又淨化と恐怖との効力ある戰爭の經驗を除去してゐる。總ての物が整頓され、準備されてゐる。總ての物が確保されてゐる。然るに諸君、只だ一事の確保されない者がある。

……

『私は諸君の平穩を亂す事を好む者ではない。けれども私は、敢て其の忘れられた一事の名を舉げざるを得ない。それは外でもない、「退化」である。此の國に於いて、退化を防止する方法は抑々何でありますか。諸君は退化を防止しつゝあるのですか。

『一體、怠惰に對して如何なる刑罰があるのですか。特殊の元氣と努力とに對する報酬は何でありますか。個人的の危險もなく、個人的の損害もなく、只だ全社會に對する遼隔の危險もしくば損害のみがあるといふ處に於いて、人間を勤勉ならしめるものは何でありますか。何がそれを見張るのですか。思ふに暫らくの間、諸君は一種の惰力に依つて前進し得るだらう。諸君が今、諸事成功の觀を呈してゐる。事は私も承認するけれども、秋の榮よ！日沒の華やかさよ！。其の間に諸君の周圍には、諸君と並行する諸々の宇宙に於いて、諸君と並行する他の諸人類が、猶ほ働らき、猶ほ苦しみ、猶ほ競爭し、猶ほ排擠し、そして力と元氣とを凝成しつゝあるのだ！』

キャッキル氏は修辭的勝利の感を以て、ユトピヤ人に向つて其の手を振りまわした。

『然しながら諸君、諸君の世界に對する是等の批評が、敵意を以て提出されたものと考へられては困ります。私の批評は實に最も親切なる、そして助力的の精神を以て提出されたものであります。私は諸君の變遷に於ける一個の無作法者であるが、然し最も友情のある、最も深い謝意を有する無作法者であります。私が此の突撃的な、不愉快な質問を出したのは、實に止むを得ないからであります。實際、諸君の選んだ方法は賢明であるのでせうか。諸君は快美と光明とを有し……猶ほ閑暇を有してゐる。宜しい。けれども諸君、若しサーペンチン氏が爾く明白に麗々と語られた通り、無數の宇宙が群居するものとすれば、そして若し一の宇宙が他の宇宙に向つて不意に其の道を開き得るものとすれば、(即ち我々の世界が諸君の世界に道を開いた如くなり得るものとすれば)、諸君の快美と、諸君の光明と、諸君の閑暇とが果して安全であり得るだらうか。私は最も切實にそれを諸君に問ひたい。我々は今こゝに無數の他世界から或る隔てに依つて(如何ほど脆弱であるとも分らない或る隔てに依つて)區劃されてゐる。我々は今ま斯うして語つてゐるが、それを思ふと諸君、私は實に、此の靜穩な大黃金國に立つて居ながら、殆んど直ちに或る物凄い響きを聞くような心地がする。即ち鼠や狼のような獰猛な、慓悍な、飢に迫つた幾千萬人の足踏みの響き、有らゆる困苦と殘忍とに慣らされた諸人類の唸り聲、猛烈な勇敢性と冷酷な攻擊心との威嚇を聞くような心地がするのである。………』

彼は突如として其の演說を終つた。彼は幽かに微笑した。彼はユトピヤに對して凱歌を奏したものゝ如く、バーンステーブル氏に見えた。彼は兩手を腰に當てゝ立ち、その態度に依つて身體を曲げたかの如く、そのまゝ硬ばつたお辭儀をした。『諸君』彼は例の、舌先を前歯にあてる變な聲で、目はバーレー氏に向けながら云つた。『私は之で私の云ふべき事を云ひました。』

彼は次に少し振り向いて暫らくバーンステーブル氏を見つめたが、其の顏は變に捩ぢまげられ、目くばせでもする樣

な恰好に見えた。それから彼は首を一つ輕く頷づき、ハンマアで釘を打ちこみでもしたかの樣な態度で、忽ち體を轉じて自分の席に返つた。

五

アースレツドは、特にキヤツキル氏に對して答へなかつた。彼は坐つたまゝ、肱を膝に突き、頭を手のひらにもたせて、聞えるやうに考へてゐた。

『鼠の物を噛る强い力や、狼の餌食を追ひかける熱烈な力や、蚋や蠅や病菌の機械的な執着力は、正に相違なく我々の世界から亡びてしまつた。我々は生命の破壞的勢力をそれだけ抹殺したが、それが爲に何を失つたといふ程の事もない。只だ我々自身に對する（或は何等かの生物に對する）苦痛と汚穢と侮辱、それが無くなつた（或は無くなる）。但し鬪爭が我々の世界から無くなつたと云ふのは間違つてゐる。彼はナゼあんな事を云ふのか。此の國の總ての人は、皆それ〳〵、奉仕の爲、及び榮譽の爲に、力の限り働らいてゐる。昔しの混亂時代には、賤しい慾深な人間が他の大まかな人達の無頓着を利用して、贅澤な生活を續けてゐたのだが、今日では何人も自分の勞役もしくば義務を胡麻化す事は出來ない。彼はナゼ我々が退化すると云ふのか。もう先程からの話を聞いて分つてゐる筈ではないか。怠惰者や低級者は此國で生殖をする事が出來ない。又彼は何故に、他の獰猛な野蠻な世界からの侵入を想像して、それで我々を威嚇しようとするのか。さういふ他の世界に對して門戶を開き得る者は我々である。又それを閉めたい時に閉め得る者も我々である。それは我々に智識があるからだ。我々は他世界に行き得る。我々の智識がそこまで進めば、我々は必ず行く。けれども彼等はこちらに來る事が出來ない。人生の籠から出る道は智識の外にない。……あの男の心は一體どうしてゐ

のか。

『彼等地球人等はまだ科學の初歩に屬してゐる。彼等はまだ實際、こちらの人間の發達上、自信と理解との以前に生じた、あの恐怖と禁制との段階にある。我々の世界も、末期の混亂時代の間、その段階から脫却する爲めに奮鬪したのであつた。彼等地球人は恐怖と禁制とに充ちてゐる。彼等は宇宙を支配し得るといふ考へに目ざめかけてはゐるが、直接それに當面する事はまだ餘りに恐ろしいのである。彼等はそれに對して自分の心を背けてゐる。彼等はまだ彼等の先祖が考へてゐたように考へたいのである。即ち、宇宙は人間が自分で支配するよりも、自然に善く人間の爲に處理されつゝある、と考へたいのである。なぜと云ふに、若しそうだとすれば、彼等は銘々の亂雜な小さな個人的動機に從つて構はない事になる。そして彼等は、何事も神に任せよ、或は何事も競爭に任せよ、と叫ぶ事が出來る。』

『我々には進化といふ有りがたい言葉があつた。』バーンステープル氏が深い興味を持つて斯う云つた。

『それも同じ事だ。神でも、進化でも、何でも構はない、自分以外の力を押し立てゝ、それに依つて自分の任務を免かれようとする以上、皆な同じ事だ。ユトピヤは之に反し、「何事も放任するな、自ら處理せよ」と云ふ。然るに彼等地球人はまだ現實の覆ひ物を剝ぎ取つて、それを直視する習慣を缺いでゐる。あの首のまわりに白い布の邪魔物をつけてゐる男は、男と女とを在りのまゝに見る事すら恐れてゐる。彼は普通の人間の身體に對してすら、憎々しそうに昂奮してゐる。又左の目の前にガラスのレンズをかけてゐるあの男は、事物の外觀の背後に「自然」といふ賢い母があつて、「均衡」を保つといふ信仰にかぢりついてゐる。彼が「自然の均衡」を說くのは、何といふ空想だ。二つの目と一つのレンズとで、もすこし善く見えないのか。それから最後にひどく痛切らしく話したあの男は、この「自然」といふ老婆を意志と元氣との無制限な源だと考へ、我々は只だ彼女の最も野蠻な心持を眞似ればよい、我々は只だ出來るだけ多くお

互ひの間に摸りあひ、殺しあひ、盗みあひ、奪ひあひをやりさへすればよいと考へてゐる。……彼は又、昔しの宿命説を説いて、それが科學の敎へだと信じてゐる。………

「彼等地球人はまだ、此の「自然の母」が何物であるかを見るだけの勇氣がない。彼等の心の背後にはまだ、自分等を彼女に放任したいといふ希望がある。若し我々の目と意志とを除けば、彼女は全く無目的であり盲目である事が彼等には分つてゐない。彼女は我々人間の標準に對して、若しくば一切の善美の標準に對して、何ら留意する所はない。彼女は偶然に我々を作つた。彼女の有らゆる子供は總て願はれざる私生兒である。彼女が彼等を育てるのも棄てるのも、愛するのも餓やすのも苦しめるのも、何らそこに韻律があり理由があるわけではない。彼女は平氣である、無頓着である。彼女は我々を權力と智力とに高めもするだらうが又兎のような詰らない弱い物に落しもするだらう。或は又、彼女の無數なる寄生的發明物のような、あの粘々した白い汚ない物に落しもするだらう。彼女の中にも善い所があるには相違ない。彼女は現に我々の中に在る總ての善い物を作つてゐるのだから。けれども又、實に無限の害惡が彼女に在る。地球人諸君は彼女の汚なさを見ないのか。彼女の仕事の多くに現はれてゐる、あの殘忍、あの狂的な惡行を見ないのか。』

『あゝ驚いた！「齒から爪まで血に染つた自然」と云ふが、それ以上だ。』フレヂー・マッシュ氏がつぶやいた。

『我々の此の遊星に於ける生命種屬の半分、否、有らゆる生物の半分以上は、醜惡であり、愚劣であり、悲慘であり、念入りの病氣で散々に侵されて居り、絶えず動搖する地上の狀態に對して氣の毒なほど不適合であつた。然るに我々は此の「自然の母」といふ妖婆を我々の手に取りあげて、彼女の餘りにむさくるしい出來心を押しつぶし、彼女を洗ひ、彼女を櫛けづり、そして彼女に敎へて、その氣まぐれの最後の子供たる「人間」を尊敬させた。「人間」が出でて、初めて此の宇宙に「道(ロゴス)」が生じ、「言葉(ウォード)」を生じ、「意志(ウィル)」が生じた。そしてそれが初めは宇宙を見守つてそれを恐れ、

次にはそれを學んでそれを恐れる事をやめ、最後にはそれを知り、それを理解し、それを支配する事になつた。斯くて我々ユートピヤ人は、最早や踏みにじられ餓やされたる「自然」の子供ではなく、既に成人した。自由の若者である。我々はかの老婦人の財産を受け繼いだ。我々は日に日に、此の小さい遊星を如何に支配するかについて、少しづつ善く學んでゐる。我々の思想は日に日に、我々の相續物なる諸星に向つて、次第に確實に進みつゝある。」

『あなた方はもう星と交通してゐるのですか。』バーンステープル氏が叫んだ。

『まだです。他の遊星とすら出來てゐない。けれども、この大距離が最早や我々を妨げなくなる時節が近づいてゐる事は明瞭である。………』

彼は暫らく休止した。『今に我々の多くは、空間の深みに向つて進まねばならぬであらう。………そして再び歸つて來ない……彼等の生命を擲つて………』

『それから其の新らしい空間に對して………無數の勇敢な人々が………』

アーススレッドはキヤツキル氏の方に向いた。『我々は今日、あなたの率直に言明された思想を特に興味ぶかく聞きました。あなたは我々をして我々の世界の過去を理解せしめる助になつた。又あなたは、或る切迫した問題（それは今に直ぐ説明しますが）其の問題を處理する助になつた。此の國に於ける二三千年以前の古代文學の中に、丁度あなたと同じような思想がある。即ち主我的暴力を道德とするような、丁度あなたと同じような教へがある。當時と雖も、もすこし善く物の分つた聰明な人もあつた。あなた自身と雖も、若し我意を以て間違つた説を固執しないなら、もすこし善く分るに相違ない。然るにあなたの樣子振を見るに、實際あなたの説の中に、非常に強い我意のある事は明瞭である。

『あなたは餘り美しい人物ではない。そしてあなたは恐らく、快樂と行爲とに於いても亦た餘り美しくはないだらう。

けれどもあなたは有りあまるほどの精力を持つてゐる。從つてあなたが其の一身を危險と切拔けとの刺戟に向けるのは洵に自然である。又あなたが鬪爭と勝利との感覺を人生の最善事と考へるのも洵に自然である。又、あなたの世界のような經濟的混亂の中に在つては、人間の負はされる勞務が到底堪へがたいほど多量である。そこで少しく氣力のある人物は、出來るだけ多くそれを投げ棄てようと努める。そして高級な身分、勇敢な性質、もしくば多額な財產の故を以て、其の勞務からの免除を要求する。人はさういふ場合、甚だ容易に自分を說得して、自分の免除を正當視するものである。現にあなたも其の說得に從つてゐる。あなたは自分の訓練の不足な心で、自分の言譯を發明する必要は少しもない。あなたの生れた其の階級は、疾くにからチヤンと其の言譯を拵へてゐる。それであなたは只、何等の顧慮する所なく、有らゆる事について勝手に振舞へば宜しい。そしてあなたは人生に冒險を試みる。而もそれは主として他の人々に損害を掛けての事である。そしてあなたは、人間の生活に、堅實で規律があつて、而も同時に元氣旺盛で幸福な方法があり得るといふ思想に對して、自分の周圍の境遇上、飽くまで反抗すべく訓練されてゐる。あなたはさういふ主張に對して、それが自分の個人的の仇敵ででもあるかの樣に、常に全力を擧げて論爭した。實際それはあなたの個人の仇敵である。これは全然あなたの生活方法に對して有罪の宣告を下すものである。

『所で今あなたは、此の整頓した、成就した、生活の美に當面しながら、猶それに反抗してゐる。あなたは我々の此の世界が非ロマンチツクで、緊張味が不足で、デカダンで、柔弱だと論じてゐる。然らば試みに、肉體の力について、あなたの側に坐つてゐる其の若い人と腕の捩りあひをやつて御覽なさい。』

キヤツキル氏は其の突きだされた腕に一瞥を與へて、分別らしく頭を振つた。そして彼は云つた。『話をお續けなさい。』

『そこで、我々の意志も、我々の肉體も、決してあなたのように弱くはないといふ事をあなたに話しても、それでも矢張あなたの心は頑固に反抗してゐる。あなたはそれを信じない。たとひ暫らくあなたの心がそれを承認しても、やがて又、あなたの自尊心を保護する所の、其の勸說力に負けてしまふ。あなた方の中で只だ一人だけ、全く我々の世界を受入れてをるが、それは我々の世界を好むといふよりは、寧ろ自分の世界に飽き果ててゐたからである。私は必ずそうであらうと思ふ。あなた方の心は混亂時代の心である。闘爭と不安と祕密な利己的行爲とに慣らされた心である。「自然」とあなた方の國家とが、そういふ風に生活すべく、あなた方に敎へたのである。あなた方は是非ともそういふ風に生活せねばならないのである。凡そこういふ敎訓は、長久に亙る年代の間に於いて、三千年間の徐々たる敎育に依つてのみ初めて拭ひ去らるべきものである。

『所で我々は、あなた方をどうすればよいかといふ問題に當惑してゐる。若しあなた方が我々の法則や習慣を尊重するなら、我々は出來得る限り鄭重に親切に、あなた方を取扱つて見たいと思ふ。

『けれども、それはあなた方に取つて甚だ困難な事に相違ない。あなた方の習慣と先入の思想とが、どれだけそれを困難にするか、あなた方には迚もまだ分つてゐない。あなた方の連中は、今までの所、思想上では善くないが、行爲上では頗る正當におとなしく振舞つてゐる。所が、我々は今日別に一つ、遙かに甚だしい悲劇的の、地球人の行爲を經驗した。獰猛な野蠻世界が我々の上に侵入するといふあなたの話が、今日現實に於いて其の奇怪な並行を現はした。實際、地球人には、獰猛な、鼠に類した、危險な何物かがある。今日、一瞬時のあいだ。開かれた門戸に依つて、此ユトピヤにはいつて來た地球人は、あなた方ばかりでない。まだ外に………』

『勿論！』バーンステープル氏が云つた、『それは私に推惻が出來る。かの謂ゆる第三の組！』

「あの奇妙な、あなた方の運轉機械が、今一つユトピヤにはいつてゐるのです。」

「あゝ、あの灰色の車―」バーンステープル氏がバーレー氏に云つた。『あれはあなたより百ヤードも先には行つてゐなかつたでせう。」

「ヘオンスローから我々と競爭したのです。」バーレー氏の運轉手が云つた。「馬鹿に氣の強い奴で。」

　バーレー氏はフレチー・マッシュ氏に向つて云つた。「君はあの車に誰かを見たと云ひましたね。」

「バラロンガ卿です。確かにそうだと思ひます。それから多分ミス・グリータ・グレイ。」

「まだ外に男が二人ゐたようですね。」バーンステープル氏が云つた。

「彼等が面倒な事を起さなければよいが。」バレー氏は云つた。

『面倒な事を起してゐるのです。』リチュスが云つた。「彼等は人をひとり殺した。」

「ユトピヤ人を?」

「あの連中は皆で六人で、その名前はあなた方が知つておゐでのようだが、彼等はあなた方の二つの乘物の直ぐ前で、ユトピヤにはいつて來たのです。彼等はあなた方とは違つて、見なれない新らしい道路に出たと思つた時、其の車を止めないで、却つて甚だしく其の歩みを早めたらしく見える。彼等は幾人かの男女を追ひこした。そして其の人達に對して異常な手振を爲し、又特に其の目的の爲に仕掛けられた器械に依つて忌はしい物音をさせた。それから更に進んで、彼等は銀色の豹(チータ)に出くわし、それに突撃してそれを斃きたふし、それの脊骨を砕いた。彼等は車をとめてそれの成行を見る事もしなかつたらしい。「金」と呼ばれた青年が道路に出て來て、彼等に止まる事を求めた。けれども彼等の車は極めて不思議な、甚だ複雜で、そして甚だ馬鹿らしい、作り方であつた。それは急に止まる事が出來ない。それは十分に

制馭され得る單一の運轉機で動いてゐるのでない。それは內部に複雜な矛盾を持つてゐる。それは一種の運轉機を持つてゐて、其の運轉機が後ろの車輪の軸につけた複雜な齒車に依つて、車台を前進させる。そしてそれは又、或る部分に摩擦を起させて、それで車台を制止させる、種々な不器用な仕掛を持つてゐる。それで最高の速力を以て其の運轉機を動かし得ると同時に、其の車輪の回轉を防止する事も出來るらしい。所が、此の青年が彼等の前に步みだした時、彼等は全く停止する事が出來なかつた。停止しようとは試みたらしい。彼等はそうしたと云つてゐる。それで車は危なく橫にそれて、其の片側で青年を打つた。

『そして殺したのですか。』

『そして即坐に彼を殺した。彼れの體は恐ろしく傷つけられてゐた。…然るに彼等はそれでも止まらうとしなかつた。彼等は速力を緩めて早急の相談をしてゐたが、追々人が集まつて來るのを見ると、直ぐに又車に速力をかけて走りだした。彼等は捕へられて所罰されるといふ恐怖に襲はれたものと見える。彼等の動機を理解する事は甚だ困難である。何しろ彼等は前進した。彼等は數時間のあいだ、我々の國內を乘りまわした。一臺の飛行機は直ぐに彼等を追ひかけるべく、又他の一台は彼等の前方に於ける道路の障礙を除去すべく、仕立てられた。然し道路の障礙を除去する事は非常に困難であつた。なぜと云ふに、この國の人間も動物も、そういふ乘物を理解しないし、又そういふ行狀を理解しないのであつた。午後になつて、彼等は山の中にはいつたが、我々の道路が餘りに滑らかで、彼等の車に對しては甚だ困難である事を發見したらしい。そこで車は齒ぎしりでもするように異常な音を立て、厭な臭ひのする青い蒸汽を放出した。そして或る曲り角で、急に止まる筈であつたのだが、ツル／＼と滑りだして不意に脇道にそれ、或る崖の上に乘りあげて、恐らく人間の脊丈の二倍もあらうといふ處を、谷川の中へ落ちこんでしまつた。』

『それで皆な死んだのですか。』バーレー氏が問うた。其の聲には一脉の熱情が籠つてゐるようにバーンステーブル氏の耳に聞えた。

『イヤ、一人も死なない。』

『ア、そうですか。で、それからどうしました。』バーレー氏は云つた。

『一人は腕を挫き、他の一人は頭にひどく傷をした。他の二人の男と婦人とは、只ビックリしたばかりで少しの傷もなかつた。それから、こちらの人達がそこに行くと、四人の男は頭の上に高く其の手を差しのべた。彼等は直ちに殺されでもするかと恐れたものらしく、赦免の訴へとしてそうしたのであつた。』

『それで彼等は今どうなつて居ります。』

『今こゝに連れて來る所です。我々は地球人を皆な一緒に置いた方がよいと考へた。差當り、我々はあなた方をどうすべきであるか分らない。我々はあなた方からいろ／＼學びたい。そして出來るならば、あなた方と仲善くなりたい。尤も、あなた方を元の世界に返さうといふ說もある。結局はそれが一番よいだらうと思ふ。然し今のところ、それが確かに出來るかどうか、十分には分らない。アーデンとグリーンレーキとが、Fチメンションを通して、我々の物質の一部分を廻轉させようと企てた時、彼等は空虛な空間に於けるFチメンションの中にそれを廻轉するものと信じてゐた。然るにあなた方が丁度そこに居つて、我々の宇宙に引込まれたといふ事は、實に此ユトピヤに於ける一千年來の大珍事であつたのです。』

（第六章終）

▲譯者申す。私は改造社から氏の雄篇を反譯する榮誉を負はされましたが、不幸にして中途病氣に罹り、最後の一章（第七章）を譯了する事が出來なかつたのは、洵に相濟まぬ事でありました。猶ほ其他に不行屆の點の少くない事も深く慚愧して居ります。

——堺利彦——

改造問題と明治時代の省察

末弘嚴太郎



一　はしがき

金で取引をしつけて居る日本の商人は銀は相場が動き易くて困ると謂ふ。所が銀で商賣をしつけて居る支那人に謂はせると、金はどうも動き易くて困る、と謂ふさうである。環境と習慣とは多くの場合吾々の腦裡に何等か先入の或るものを形作つて、事の眞相を見るべき吾々の眼は兎角之が爲めにくらまされ易い。

吾々は平素互に餘り深い考慮を拂ふこともなしに輕々しく或は「善良の風俗」であるとか「淳風美俗」であるとか云ふ樣な言葉を口にする。さうして其等の言葉に依つて言現はされて居る事柄を内容的實質的に深く省察することもなしに容易く之を理由として或は人を責め或は人に刑罰までをも加へやうとする。けれども吾々はお互にもう少し愼まねば

ならない。事の眞相を此の目此の頭でありのまゝに觀察しありの儘に考慮して實質的の價値判斷を下さねばならぬ。無論人間には結局それが出來ないのかも知れない。人間のすべての觀察と判斷と意見とは程度に多少の差こそあれ常に必ず主觀的であり個別的である。すべての哲學も實は皆一篇の叙情詩に過ぎないのかも知れない。吾々は自ら公平を誇り善智を恃むで居ても實は環境と習慣とさうして其他あらゆる狹少な主觀的事情に支配されて、單なる主觀的の判斷を爲し又其の意見をきめ得るに過ぎない。けれども吾々は努力せねばならぬ。此の吾々にフエータルな缺點に甘むじ安むじて居るとは絕對に許し難い。眞面目に努力し眞面目に考へて事の眞相を掴まねばならない。夫は無論の事である。

所が今日吾々の世の中には唯漠然と傳統に依倚し習慣に拘束せられつゝ平然と呑氣に「淳風美俗」を說き「善良の風俗」を唱へる人が少くない。さうして其の空しき名に依つて、より合理的な世界に向はむとする人々の努力を抑制し鎮壓しやうと試みる。けれども吾々は先づ其の人々に向つて反問せねばならない。其所謂「善」とは何か、「美」とは何かと。吾々は先づかく反問せねばならないのである。

二

高い山に登る者にとつての最も大事な心得は一旦濃霧が捲いて來たが最後最早濫りに動き廻はつてはならぬと云ふことである。濫りに五里霧中を模索すれば終には自己の現在場所の何所なるかゞ解らなくなる。一度さうなれば如何に詳細正確な地圖を持つて居ても最早や何の役にも立たない。かれはやがて全く路を失つて終には密林の中に餓死したり斷崖絕壁から墮死するやうな悲慘な運命に陷らねばならない。

又遠い海を渡る航海者にとつて何よりも大切な仕事は、絕えず彼の船が今何所に在るかを精確に知つて居ることでなければならぬ。此の故に古來天文學は航海術に伴つて發達した、と言はれて居る。今でも遠い海を渡る航海者は每朝每夜或は太陽を觀測し或は星の位置を案じて其の船の所在を確める。然る後初めて彼は海圖の上に進路を畫き羅針盤に依つて其路を進むのである。從つて一朝濃霧の包圍する所となり又は暴風雨の襲ふ所となつて自己の所在を失ふとき、如何に精密なる海圖あり如何に正確なる羅針盤ありと雖も、そは彼の爲め最早何等の役をも爲さない。彼れとつては彼の

現在場所を知ることが何よりも大切なのである。進路を定め其路を進むことは漸く其後の仕事でなければならない。

所が現在吾國に於ける幾多の改造論者の中には、其意見が革命的のものであると、改革的のものであると、又進歩的なると復古的なるとに論なく、此の山に登る人々と同じだけの心掛けを持つた人が餘り多くないやうに思はれる。殊に「現在」を大體このまゝ肯定しつゝ吾國を此のまゝ眞直に進めやうとする保守的の意見、及び現在の制度に幾多の缺陷を認めつゝも尚且大體に於て之を是認して所謂「日本古來の淳風美俗」に依つて多少の復古的改革を加へやうとする意見の持主は、現在吾々の住むで居る環境が客觀的實質的に觀察して如何なるものであり如何なる價値を持つものであるかを充分に考へることなく、唯自己の極めて狹い經驗と淺い智識とに依つて僅かに形成し得た所の主觀的な「標準」を目して何等か絶對的な高い價値あるもの〻如くに考へて居る。さうして不謙遜にも濫りに之に「日本古來の淳風美俗」なる名を付け、之を標準として「國民を善導」しやうと考へて居る。彼等は濫りに「善」と云ひ「美」と云ふ。さうして國民を指導すると云ふ。併し彼等は果して現在の此の日本の所在に付いて何れだけ精密なる智識を有するのであらうか。濃霧に捲かれた一隊の登山者が現在に於ける彼等の位置さへも確かに知らない怪しげな案内者に依つて無暗と山中を引き廻はされたとしたならば、結局彼等は如何なる運命に立ち至るであらうか。又深いガスに圍まれて全く自己の所在を失つて仕舞つた船長が、若しも海圖と羅針盤とだけを頼りにして全速力を出すやうなことがあれば、其船の傾て陷るべき悲慘なる運命は何人も之を豫想することが出來るではないか？然るに自ら案内者を以て任じ船長たるを誇つて居る現在の權力者並に有識者達は、自ら能く日本を知れりと妄信し又能く之を理解したりと豪語しつゝ、吾々を「指導」して何所へか行かむとして居る。吾々の明日は果して危くないであらうか。

三

私は老人は年寄なるが故に當然駄目なものと極めて居る譯ではない。又若い者は唯若いが故に當然優れて居るのだと思つて居ない。けれども今日の老人は其生涯の大部分――而かも重要なる部分――を明治時代に於て過ごした人々である。其の結果此等の人々は多く「明治」と云ふ世界歴史の上から見ても珍しい極めて特異な一時代を目してノルマルな「善」き「美」しき時代なりと考て居るらしい。

質を云ふと「明治」位特異性をもつた時代は世界歴史の上にも餘り多く記錄されて居ないのである。然るに其の特異な環境アブノルマルな空氣の中に永年住みなれた人々は──廣く世界を觀察し深く歴史を考へ又眞面目に現實を直視した僅かな人々を除く外──多く其の特異性に氣が付かない。さうして其の特異な環境に影響されて出來上つた狹少なる主觀に向つて永遠な絶對的客觀的の價値を評價し與ふることに依つて濫りに「善」を形作り「美」を提唱し、之を標準として萬事を評價し又之を以て將來に對する指針たらしめむとして居る。

鎖國三百年の夢から目醒めて急遽西洋文明の足跡を追隨した明治時代はあらゆる意味に於て特色のある時代であつた其の特色を一々あらゆる方面に亙つて詳しく論ずることは到底此一小論文の能くする所ではない。けれども極めて唯物的であり又功利主義的であつたことは其最も著しい特色でなければならない。明治人は概して手近かな成功をのみ目指した極めて功利主義的な人々である、成程かくの如き物の考へ方は從來無智にして唯徒らに豪語し又傳統に安むじて何等の向上心もなく安眠を貪つてゐた當時の人々を奮起せしむるの功があつたに違ひない。目醒めたばかりの又はまだ眠つて居た彼等に向つて高遠の理想を說くよりは寧ろ手近かの成功を示し告げた方がよかつたに違ひない。而して其の方策は夫れ自身確かに成功した事には違ひないけれども、同時に遺憾ながら吾々日本人一般の腦裡に拭ふべからざる一つの汚點を殘した。夫は即唯物的な極めて短見な功利主義的の思想である。人々は皆よい人にならうとは考へずに寧ろ偉い人になりたいとばかり考へて居る。親もかく教へ國家もかく教へて若き人々は皆手近な小さい成功のみを夢みて居る

次に又明治は「小智惠專制」の時代であつた。萬事をすべて合理的に理解し說明しやうと努力した結果、其の理解し說明し得ざる所のものゝすべてを否定し去らむとした時代であつた。吾々人間の持ち合はせて居る智能の小く且憐むべきものなることを全く忘却して、此の小智を以て理解し得ざるものゝすべてに向つては其の「存在」をさへ全然否定し去らうとするのが明治の進步した人々の考へ方であつた。私は決してかくの如き意氣と努力とを不可なりとするのではない。之れあるに依つてのみ人類文化の進步があるのだと考へて居る。併しながら絶えず最大の努力を以て突き進みつゝ、而かも其の理解し得ざるもの說明し得ざるもののすべてを否定し去る權利が、どうして吾々にあるのか？「思索す

る人の最も美しき幸福は探究せられ得るものを探究したことであり、そうして探究し得られないものを靜かに尊敬することである」Das schönste Glück des Denkenden Menschen ist das Erforschliche erforscht zu haben und das Unerforschliche ruhig zu verehren と云ふゲーテの言葉は吾々にとつて永遠の價値ある敎へでなければならない。然るに小智惠專制の明治時代には全く此の思想が消え失せて居た。それは丁度初めて飛行機を見た野蠻人がそれを神なりと爲し其の萬能を信ずるのと同じやうに、物質文化の美しさに眩惑された明治人は其の文化の源泉たる科學に向つて相當の評價を與へることが出來なかつた。其所に小智惠の專制が生まれたのである。

四

明治は西洋文明の追隨吸收を唯一の目的とした時代である。上述した二三の特異性の如きも實は其一影響に過ぎない。鎖國の夢から目醒めた維新の先覺者は、何よりも先づ吾國をして歐米諸國と肩を比べ得るものたらしむべく努力せねばならなかつた，それは當時として彼等の正に執るべかりし態度であつたに違ひない。さうしてそれは確かに吾々の爲めに幾多のいゝものを作り上げた。けれども同時に、内に何等內發的自發的の理想を藏することなく唯只管西洋文明を追隨して彼れと同等の標準にまで成り上がらうとばかり焦慮つて居た結果は、其所に自ら色々の特異的現象を生み出さずには置かなかつた。先に一言した「功利主義」「小智惠の專制」の如きも其一例に過ぎないのである。而して私の專門とする法律政治の方面に至ると、之にも益して更に著しい色々の特色に氣付くのであつて、今日深く考へない一般の人々が當然のこと自然の事と考へて居る幾多の制度組織も實は明治特異性の一所產に過ぎないことを發見するのである。

私は改造論の第一步として此事を充分能く一般人に呑み込むで貰はなければならないと考へる。殊に明治時代以來權力者有識者として吾國の指導地位に立つて來た人々及び何氣なく平然と此の事實を是認して居る幾多の人々に向つて、諸君の自ら「美」と信じ「善」と思ふ所のものが、實は自ら赤い空氣の中に住むで萬物を赤しとなすの類ではあるまいかと云ふことを靜かに反省して貰ひたいと思ふ。それが爲めに私は唯事實を事實として諸君の眼前に展開して見たいと思ふ。何等特に多く自己の意見を開陳せむとするのではない。

之が此の小稿の重なる目的である。

第一　國家の指導的態度と劃一主義

一

明治時代の最も顯著なる特色の一は、國家があらゆる方面に於て國民を指導せむとしたことである。さうして國民一般も亦單に國家の此の態度を是認したのみならず、國家の指導に信賴し依倚してのみ萬事を爲し遂げ得たのである。當時の國家　獨り經濟的物質的の方面に於てのみならず精神的の方面に於てさへ國民を指導せむとし、而かも可成りの程度に於てそれに成功したのである。役人が美しいと云へば國民も亦美しいと云ひ、役人が醜いと云へば國民も亦醜いと云つたのがあの時代である。のみならず國家は道德風俗の源泉となり宗教をさへも其手中に統一しやうと企てた。さうして國民は多くそれを不思議とも思はなかつた。國家と其の法律とは萬能であり、至善であると考へた。さうして國家の名の下に萬事が爲し遂げられ、國民は一般に國家の前に一切の批評力を失つた。靜かに考へて見れば、それは如何にも不思議な現象である。而かもそれは確かに事實であつたのである。

然らば　かゝる現象は果して如何なる原因から生まれたのであらうか？

二

一體國家には指導的職能のあるものであらうか？　又指導的態度をとつても差支へないものであらうか？　吾々は此の問に向つて概括的な答を與へることは出來ない。それは時代に依り國に依り又事柄に依つて各別々に考へられ答へらるべきであると思ふ。併し概して言ふならば、革命乃至大改革の行はれた後の國家は大體に於て甚しく指導的の態度を發揮するものであり又せざるを得ないものである。是れ革命後の諸政府があらゆる方面に亘つて、後から平靜に考へれば可笑しく思はれるやうな法令を多量に產出する所以なのである。而して私　吾國明治維新以後の政府があらゆる方面に亘つて廣く指導的態度をとり得たのも實は此の現象の一例に過ぎないものと解するのであつて、殊に西洋文明を追隨し模倣することに依つて西洋諸國と同列にまで浮び上らうとする努力が國民一般に共通する志望であつたことは、實に政

府をして易々と其の指導政策を遂行することを得しめたのだと考へて居る。

當時政府にあつた人々は一般國民に比すればすべて皆先覺者であつた。而して自己の力足らざるを思へば、或は學校を造つて秀才を養ひ、或は人を歐米に馳せて彼の文物學術を修得吸收するに力め、之を手足とし羽翼として、一般國民の上に指導的態度をとつたのである。此故に當時は商業工業其他經濟的一般の事業さへもすべて國家の指導乃至奨勵に依つて爲し遂げられた。教育も亦すべて此の國家的目的を達する手段に過ぎないと考へられて居た。而して政府と其の役人とは物質的にも又精神的にも立派な優越者であつた。加之國民一般が吾國をして急速に歐米諸國と同列にまで浮び上らせやうと熱望して居たことは恰も政府の此の態度と軌を一にして居た爲めに、朝野心を一にし官民合同して國力の發展國威の發揚に努力することが出來たのであつて、此間政府と其の役人とは常に指導的地位に立ち、國民は唯々其言ふ所に盲從つて只管突進をつゞけたのである。

三

「西洋」と云ふ遠い美しい國に渡り着きたいと云ふ擧國一致の熱心なる願望からして國民一同は一隻のボートに乘つて大海の眞只中に漕ぎ出した。舵を握つた指揮者は度の强い望遠鏡をもつて居る。彼は之によつて遠く目的地を眺めつ其美しさを漕手に語つては彼等を激勵して居る。漕手は無論望遠鏡をもたない。彼等は唯彼岸に漕ぎ着きたい一心から只管舵手の見る所言ふ所に信頼して、目的地に背をそむけながら一心不亂に漕ぎつゞけて居る。舟は果して矢のやうに進む。さうして仕舞には最早望遠鏡の力を借らずとも目的地を見得る所まで漕ぎついた。

明治五十年の間に於ける吾國の躍進は實に此の船足の如くに目醒しく速かなものであつた。物質的には勿論精神的方面に於てさへも可成りに急速の進歩を遂げた。國際的經濟競爭に於て相當の地歩を占めることが出來たのみならず、武力の爭鬪に於ても亦日清日露兩戰役の大成功を收めることが出來た。此の目醒しい發展は確かに世界を驚かし且恐れしめた。而して此の結果たるや言ふまでもなく實に擧國一致朝野力を合はせて突進したことの賜物であつて、兎に角吾國の明治は一の成功であつたと言ふことが出來る。

けれども、明治の指導者には内發的の理想もなく又經綸もなかつた。彼等は唯吾國をして歐米先進の國々と同一列にまで進歩せしめやうと努力したに過ぎなかつた、彼等は唯一般國民の持つて居ない望遠鏡を持て居り之に依つて自ら獨り彼岸を見ることが出來たに過ぎなかつた。從つて舟が段々と彼岸に近付いて最早望遠鏡を必要としない程になつたとき、指導者は漸く不安を感じ初めた 吾々は今まで兎も角も突進して此所まで漕ぎついた。けれども、吾々の旅は愈々彼岸に漕ぎついたとき其所にそのまゝ立留まつていゝのではない、吾々は今までと同樣國民を率ゐて進まねばならない。併し考へて見ると、吾々が今まで國民を指導して來た唯一の目標は「西洋諸國に追ひ着く」と云ふことであつた。吾々は其以外別に深く何物をも考ふることなしに唯望遠鏡を賴りにして彼岸を眺めた。さうして只管其追隨と模倣とのみに依つて兎も角も此所まで漕ぎ着けた。併し愈々彼岸に到着した曉に於て吾々は何を目當てに國民を率ゐたらいゝのだらうか。明治以來の指導者はかく考へかく不安を感じつゝも尙漕手を激勵して力漕を續けさせやうとした。けれども漕手は既にやゝ疲れて今まで通りの盲進猪突を續けることが出來なくなつて居た。漕手は面を上げて舵手を見た 然るに何ぞ舵手の面上には一樣の不安が漂つて居る。舵手は愈々彼岸に到着した後に於て何物を目標として漕手を率ゐ行くべきかについて何等の自信もない 彼は明治五十年の間只管望遠鏡を賴りにして指導をつゞけて來た、けれども今最早之を必要とせぬ程目的地に近着いた爲め已むなく急に目から望遠鏡を離して見た 然るに何事ぞ、五十年の久しきに亘つて只管望遠鏡をのぞきつゝ追隨と模倣とのみを續けて來た彼の肉眼は憐むべし全く其の自然の力を失つて最早何物をも正視することが出來なくなつて居た、彼が心に自信を失ひ面に不安を浮べたのは蓋し當然である。

玆に於て漕手は疑つた。一體吾々は何處へ行くべきであらうか? 彼等はかく問ふた。けれども最早肉眼の力を失つて仕舞つた舵手には無論充分の答へを與へることが出來なかつた。其所で今まで只管舵手の言を信じて力漕をつゞけて來た人々は急に後を振り向いて行手を眺めた、舟はもう望遠鏡を要せぬ程彼岸に近付いて居る。漕手の健かな肉眼は最早すべてをありのまゝに見ることが出來る、而して彼等が今自己の肉眼に依つて見た所の彼岸は今まで舵手に依つて言ひ聞かされて居たものとは非常に違つて居た。第一今まで舵手は極めて視野の狹い望遠鏡を以て狹い一の個所だけを見

つめて居た。其以外に幾多の複雜したもののあることを全く知らなかつた。從つて吾々が一生懸命力漕して居た五十年の間に舵手の選むだ視野以外には幾多の驚くべき變化があつたのだけれども、舵手は今まで全くそれを見のがして居たのである。

然るに今漕ぐ手を休めて眼の前の上陸地を眺めた漕手の肉眼には陸上一帶の全景がありのまゝに映つた。而かも其映つた全景は極めて複雜な相を示して居て、到底今まで舵手に依つて語られたものとは似てもつかぬものであつた。

漕手は惑つた。一體吾々は何所へいつたらいゝのか？　舵手は肉眼の力を失つて居ながらそれでも尚虚勢を張つて、唯今まで通り前へ進め〳〵と命令した。けれども漕手は最早彼の命令を奉じない。甲の漕手は言ふ。おれは左にゆく。乙の漕手は又言ふ　おれは右にゆく。さうして丙は眞直にゆくと言ひ、丁は又彼方にゆきたいと言ふ。彼等は何れも皆愈々自己の眼を以て見、自己の心を以て考へつゝ、自己の足を以て自ら自己の途を歩きたいと言ひ出したのである。

舵手は驚いた「民心が混亂した」と唱へ、「國民思想が惡化した」と叫むだ。さうして今までと同じやうに自己の指揮の下に國民をして擧國一致の突進を續けさせやうと焦慮つた。けれども、時は既に遲かつた。何故なれば　彼の肉眼は既に其の自然の力を失つて何物をも正視することが出來なくなつて居たからである。

舵手は周章てた。けれども彼の懐中には最早何の貯へもない。なら指導を續けむとして之を續くべき何等の方策をも持つて居ない。當惑の極彼は終に一夜密かに五十年を走り戻つて其昔長い安眠を貪つて居た故郷に皈つた。さうして昔門出の際邪魔物なりとして塵溜に棄てゝ來た「日本刀」を拾ひ出した。彼は此の「日本刀」に「淳風美俗」とか「美風良習」とか「國民道德」とか其他あらゆる美しく且麗かなる名稱を附して、意氣揚々と國民の面前に現はれた。さうして言つた。愈々立派な指揮刀が出來た。皆の者之に從つて突撃せよ、と。けれども、彼が愈々其刀を拔いて高く振りかざして見ると、驚くべし刀は全く赤く錆て居る。刀は五十年の間彼に依つて塵溜の中に棄てられて居たのだ。それが錆て居るのは當然である。彼は焦慮つて「民力涵養」の聲を擧げ「民心統一」の必要を叫びつゝ「刀」を振りかざして今までと同樣の指導を續けやうと努力したけれども、錆びた刀にどれだけの威力があり得やう？　國民は仰ぎ見て嘲笑ひ且

嘲るのみであつた。民心の統一はかくして見事に失敗に終つたのである。

四

けれども、舵手よ驚くことはない。悲しむこともない。君は民心の統一に失敗した。さうして今後の國民は突如指導者を失つた爲めにチリ〳〵バラ〳〵に行き迷ふに違ひない、と君は思ひ煩つて居るらしい。けれども、心配することはない。君が今まで目當てとして指導して來た彼岸には最早指行き着いたのだ。さうして之れから愈々君の指導を離れて自己の眼自己の頭自己の足を賴りに自力を以て自己の途を進まうとして居るのだ。彼等各自の進む路は各違つて居る。何故なれば彼等は皆各自己の善として信ずる所に向つて進むで居るのだから。今までの指導者 あつた君、さうして今後もまだ其の地位を離れたくない君は、あの有樣を見て定めし「民心混亂」したりと案じて居るのであらう。けれども、案ずることはない。今までは唯君の言葉を盲信して只管盲從をつゞけて來た無爲無力な彼等が、今や愈々自力を以て歩み初めたのだ。彼等の歩み行く方向は各々非常に違ふとしても、而かも彼等は各自己の「善」しとする所に從つて己れの「道」を求めて居るのだ。今まで唯「盲從」をのみ事として居た彼等が今や一人歩きを初めたのだ。「善」を求め「道」を尋ねて一人旅を初めたのだ。喜べ〳〵。今や日本國民は初めて眞の進步發展を爲すべき發程線に辿り着いたのだ。それだのに君はどうして悲しむのか？

君は君の指導の下に日本國が偉大なる發展を遂げたと言つて居る。それは確かにさうに違ひない。けれども、其所謂「發展」とは單なる模倣に過ぎない。吸收に過ぎない。君の指導の下に日本國民は世界文化の爲めに何物を貢獻すべく生み出したか？　それは實に「零」に近いではないか？　所が今その日本國民が愈々自力を以て歩み初めたのだ、愈々眞の「發展」を遂ぐべき序幕が開かれむとして居るのだ。此時に當つて尙君が自らの無力を忘れて指導を續けむとすることは、徒らに唯國民の創造性を阻むに過ぎない。

玆に於て私は言はうと思ふ。君は今や最も謙虛でなければならぬ。さうして國民に自由を與へ創造を許さねばならぬ。かくして初めて眞の日本が出來上るのである。君が此上尙指導を續けやうと焦慮ることは、徒らに國民の自發心と

創造力とを傾けるだけである。國民の內發的な德性を寄するだけのことである。

山に登る者にとつての大きな不幸は道を知らず又自己の所在をさへ明かにし得ない案內者に依つて濫りに山中を引きづり廻はされることである。かゝる案內者は今やもう其職を退くべき時が來たのだ。彼は今後唯荷を擔いで素直に吾々の跡をついて來てくれさへすればいゝのである。

五

次に明治政府の政策並に法制の全般に通じて見逃がすべからざる一の特色は其の劃一主義的色彩である。明治以前に於ける吾國の法制が地方的にも又階級的にも極めて分裂した複雜なものであつたことは廣く人々の知る所である。從つて王政復古を標榜し專ら中央集權を念とした維新政府が政權のすべてを一中央政府に集中し複雜なる法制を統一するに努力したのは蓋し自然の趨勢であつて、其の政策がとかく劃一主義的の色彩を帶びた原因も亦玆に存するのである。けれども更に細かに觀察して見ると其の原因は尙色々別に考へることが出來る。

先づ第一に、明治政府の使つた「規準」が上述の通り大體外來のものであつたことは、其政策をして劃一主義に陷らしむべき大なる原因となつた。當時の爲政者にとつて最も大切なる事柄は西洋文明の追隨であつた。之に依つて彼れと同等の國に成り上ることであつた。此の故に其爲す所は專ら彼の模倣であり追隨であつて、何等自發的獨創的の規準を持たなかつた。すべては唯外來の規準に依つてのみ爲されたのである。從つて、其之を現實に適用するに當つても、多く融通のきかない固定的劃一的の方策をのみ行つた。其結果、都會と農村との差異、各地に現存する地方的特色の如き其他幾多の現實的特殊性は多く無視せられて今や一律の法制一樣の政策の下に規律せられ取扱はれることゝなつたのである。

次に又明治の吾國が歐米諸國を追隨すべく餘りに急なりしことは、自ら又劃一主義に甘むずるの已むなき結果を生ぜしめたやうに思はれる。何故なれば、劃一主義は常に拙速主義の隨伴者であるから。一體法律は性質上劃一的性質をもつたものである。之と現實社會の特殊性とを如何に調和すべきかゞ常に立法上の問題となり法律學の疑問となるのであ

る。而して其劃一的性質は同時に法律の拙速主義的特色と深く關聯を有するものであつて、所謂法律の素人に依つて屢々法律は不道德なりとの非難を爲されるのも實に此の點なのである。併し多數のものを迅速に取扱ふ必要が起れば、其所に必ず拙速主義の必要が感ぜられる。さうして其結果必ず或る程度に於て特殊的需要を無視した劃一的方策が行はれねばならぬことになる。明治政府の施設が劃一主義的色彩を多く示して居る理由も亦之と同じである。突如舊來の制度文物を破壞して新に外來の規準を應用しつゝ迅速新制度新文化を樹立せむとするとき、其前に自ら拙速主義が生れ劃一主義が力を得たのは當然である。それは丁度軍隊に於て兵士に穿かせる靴の大さには初めから種類がきまつて居るのと同じことである。多數の兵士に向つて迅速に靴を引き渡らせる爲めには到底一々足を測つた上注文を出すと云ふ譯にはゆかない。多少の大少長短はあつても何とか無理にはかせて急場の用に立てやうと云ふのが軍隊のやり方であり、而して又同時に明治政府の遣り方であつた。

加之、自己の力を信ずる人々、意志の力に無限の價値を認むる人々をして政治を行はしむれば、其所に必ず劃一主義が生まれる。彼は自己の所信を貫徹するに急にして且其の信念篤きが故に、多く人民の特殊的需要を考慮することなしに、萬事自己の方寸に依つて規律し處斷せむとする。彼等はすべて法律に無上の力を認める。此の故に歷史上大法典を制定した大帝は多く其法典の萬古不易を信じ、註解釋義に依りて濫りに其の意義を紛更すべからざることを命じて居る。例へばローマの大法典を編纂せしめたユスチニアース帝は其註解を禁じて後世異說を爲すべからざる旨を命じて居り、ナポレオンの如きは法典成りたる後幾許もなく其註解書を獻ずる者あるや「我が法典既に失はれたり」と嘆じたとさへ傳へられて居る。

明治の爲政者は一般國民に對する關係上明かに優越者であつた。爲政者自ら之を以て任じ國民も亦之を許して居た。此の故に國家の力を以てし法律を以てすれば何事をも爲し遂げ得べしとする思想は、獨り爲政者の間に於てのみならず、一般國民の間に於ても亦廣く是認せらるゝに至り、其結果各個國民の特殊的需要に向つて多くの顧慮を拂ふことなく萬事を劃一的に規律することが甚しき故障もなしに行はれ得たのである。

けれども、元來國權にしても又法律にしてもそれは決して萬能のものではない。立法の問題は畢竟如何なる程度まで各個人の特殊的需要を斟酌すべきかの問題に歸著するのである。劃一は結局或る程度まで常に必ず必要であらう。けれども、それは決して法の絶對的理想ではない。

六

明治の法制は甚しく劃一的であつた。それは明治時代として已むを得ざることであり、又當時として大に意味のあることであつた。けれども當時として已むを得ざるものであり又大に意味のあることであつたと云ふことは、決して今日尚同じことを同じやうに續けてゆけと云ふ意味にはならない。

明治時代の法制並に政策が劃一的であつたことは既に色々の意味に於て多大の實際的不都合を生ぜしめて居る。先づ第一に、各種の施設が大體に於て都會本位であり。從つて都會と農村との本質的差異が充分に意識されて居ないことは、今日重大問題として一般人士の注目を惹きつゝある農村問題の最も大きな原因をなして居る。此のことは私の從來屢々論じた所であるが、元來農村生活の特色は實物經濟的色彩が都會のそれに比して甚しく濃厚なるに在る。從つて農村人にとつての貨幣は都會人にとつてのそれよりも甚しく貴重なものである。然るに從來爲政者の爲す所は多く此の根本的差異に注目することなく、或は農村に向つても都會に對すると同樣に金錢を必要とすべき施設を要求し、或は農村人をして益々金錢の必要を感ぜしむべき各種の方策を實行する。成程資本主義の影響は農村生活までをも漸次に貨幣經濟化する傾向がある。從つて此傾向と歩調を合はせつゝ農村人に向つて金錢を要求することは必ずしも非難すべきではない。反つて法令の力に依つて農村經濟の貨幣化を防止し得べしと考へることが可笑しいのであらう。けれども從來の爲政者が右の點を充分考慮することなしに、濫りに農村に向つて都會に對すると同樣の貨幣を要求したことは、農村生活をして頗て今日の窮境に陷らしめた大なる原因であると云はねばならない。此點に於て現在行はれつゝある地方稅、敎育、娯樂、道路、衛生等に關する諸政策、公有林野利用策等には大に反省を要すべき餘地があるやうに思はれる。

次に又各種の法制が劃一的であることは色々の方面に於て不都合を生ぜしめて居る。例へば、現在の民事訴訟法に依る

と、五圓十圓と云ふやうな僅かな金額を訴求するにも、必ず數百圓を訴求するのと同樣の手續を履まねばならぬ。其結果小額債權を裁判所の手を經て取立てるとなつて費用倒れとなるの恐れがあり、裁判所があつても結局何の役にも立たないと云ふやうな變な結果に陷つて居る。又昨年出來た借家法の如きでも――其の適用地區が東京其他重要都市に限られて居る點に於て從來幾多の法令とは稍趣を異にしては居るもの丶――其の同じ法律が住宅、商店、オフィス・ビルディング內の借事務所、九尺二間の裏長屋等の別なくすべて家屋の賃貸借に適用されることになつて居るけれども、かくの如きは極めて無意味なる劃一であつて、其結果少からざる不都合のあることは吾々の屢々耳にする所である。

七

明治の法制が劃一的であることは一方より見れば已むを得ざることでもあり、又他方より見れば必要なことでもあつた。けれども無用の劃一が各個人各地方各職業の特殊的需要を無視し其利益を害すること甚しきは既に上述の通りである。今後の立法者は須らく此點に鑑みて先づ現實を直視せねばならぬ。さうして現實の前に謙遜でなければならぬ。「頭のいゝ」立法技師が自己の頭の先きだけを賴りに小利巧な――現實を無視した――立法を爲すことは今後に於ては最早之を許すことが出來ない。大急ぎの飾り出來合ひの着物を着て兎も角も間に合せて居た時代は既に遠く過ぎ去つた。今後の吾々は急ぐことは要らぬ。もつと落着いて先づ現實を直視せねばならぬ。さうしてお互にもつと裄丈の合つた生活をせねばならない。

所が、爲政者にとつては劃一主義は何よりも便利である。第一に各方面の特殊事情などを一々調査する面倒がなくていゝ。又劃一主義は形式上公平なるが故に、形式的だけにでも無暗と公平を要求する現代人――而してそれが多くの場合反つて實質的の不公平を惹起して居る――を兎も角も一先づ滿足させて不公平の謗を免れることが出來る。此故に爲政者は常に劃一主義を好む。

併し爲政者の劃一癖は獨り之を政策法制の上に實現するのみを以て滿足せず、遂には政治の相手方たる人民までをも劃一的のものにして仕舞はうと考へる。人々の心は其面と同樣に種々雜多である。從つて其すべてを滿足せしむべき政

治を行ふことは爲政者の最も難しとする所でなければならぬ。若しも此の種々雜多の人心が多少なりとも統一することになれば政治は餘程樂になる譯である。此故に爲政者は常に國民思想の統一を希望するものであつて、それが爲めには宗教、教育等其他あらゆる手段を利用するものであり、甚しきに至つては强ひて外敵を求むることに依つて民心の緊張合同を計らうとするものさへある。而して此點に於て吾國明治の爲政者の爲したる所は可成り極端にまで及むで居る。

先づ第一に彼等は道德の源泉を國家の手中に掌握しやうと企てた。さうしてそれが爲めには宗教を排斥したり壓迫することさへも敢て辭せなかつたのである。成程憲法に依ると「日本國民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」と云ふことゝなつて居るけれども、宗教中特に民心の統一に最も都合のいゝ神道には之を宗教にあらずとする特別の解釋を與へて其の信仰を國民の全部に强制しやうと企て、其他の宗教の中でも民心の統一に害なきか又は其役に立つものだけは特に寛大に取扱ひ又は保護を與へて居るけれども 全然異別の出發點から道德を說いて居る基督教の如きに至ると隱に陽に幾多の壓迫を加へて兎角之を邪魔物扱ひにして居る。

又國民普通教育を爲すに當つても、例へば日本國民全體が同一祖先から出たものだと云ふやうな科學上寧ろ反對が立證されて居る獨斷を勝手に作り上げる等其他民心の統一に都合のいゝことばかりを教へ込むことに熱中して居る。加之國家は教員を統一することに依つて統一教育の目的を徹底せしめむと欲し、教師殊に小學教員の思想信仰等に向つてさへ屢々色々の强制を加へて居る。さうして甚しきに至ると、獨り教科書の國定のみを以て滿足することなく、更に教員用の參考書を作り又視學官をして監視せしむる方法に依つて教科書の解釋說明をさへも國家的に統一しやうと考へて居る。けれども、責任は常に自由と共にのみ存在する。小學教員の自由を極度に束縛し之をしてすべて國家の蓄音器たらしめむと企つるとき、其所にどうして責任心に富み且仕事に興味をもつた優秀なる教員を期待することが出來やう。小學教員改良の問題は一面に於ては確かに待遇改善の問題である。けれども、同時にそれは自由の問題である。監督の問題である。

八

國家と共政治とは必然的に劃一的傾向をもつものである。又政治は國民思想が統一すればするほどやりよいに違ひない。此故に私は決して劃一主義を絶對に不可なりとし、民心統一を以て全然不必要なりとするものではない。けれども、政治を容易ならしむることにのみ熱中して民心の統一にのみ注意を集中するときは、其結果稍ともすれば各個人民の内容實質が貧弱なものになる恐れが多い。殊に道德の源泉を國家の手中に獨占し力を用ひて道德の實行を國民に强ふるが如きは、徒らに國民の德性を害するのみであつて、何等の利益がない。

國家の法律を尊重するのは無論いゝ。けれども、法律にさへ從つて居れば其以外何をしても差支ないと云ふやうな所謂「免れて耻なき」人々の思想は、國家が道德の源泉までをも獨占せむとすることの當然の結果である。又國民の思想を統一せむとする企ても爲政府の所有として必ずしも不都合なことではない。けれども、かくして國民全部をして國家の前に全然批評力を失はしめることは決して策の得たるものとは云ひ難い。吾々はすべて自己の「尺度」をもたねばならぬ　自己の國家をも批評することが出來ねばならぬ。かくしてこそ初めて眞に内容の充實した國家が出來るのである、自己の國家を批評し得ざる國民をもつことは決して國家の誇りではない。

九

吾國の國民は今や國家の指導を離れて自己の眼自己の頭自己の足に依つて自力を以て自己の途を歩み行かむとして居る。此時に於て國家の彼等に向つてとるべき態度は謙虛でなければならぬ、彼等に向つて自由を與へねばならぬ。さうして彼等自らの責任を以て自由に歩ましめねばならない。私は、かくすることに依つてのみ吾國民の自發性と創造力とを發揚せしめ、眞に道德的であり實質的に充實した國民を作り得るものだと考へる。

國家の指導政策と劃一主義とは曾て大に功績があつた。けれども、それは同時に甚しき害毒を伴ひ易きものなることを忘れてはならない。

第二　自由主義

以上を以て明治の法制及び政策の一般的特色に關する説明を閉づることゝし、以下更に二三の個々の事項について特別の説明を試みやうと思ふ。其所で先づ第一に説明せねばならぬ事柄は自由主義である。

自由は現代人の既得權である。如何なることありと雖も吾々は最早之を棄てたくはない。けれども、誤つて小き自由に執着するときは屢々反つて大なる自由を失ひ濫りに自由の形式のみに捉はるゝときは反つて實質的の自由を失ふ虞れがある。

第十八世紀の歐洲に勃興した自由主義の思想はあらゆる意味に於て餘りに束縛多かりし舊制への反動であつた。而して其の思想は第十八世紀の末葉に於ては既に政治的にも又經濟的にも確立せらるゝに至つた。英國に於ては既にアダム・スミスの理論に依つて基礎付けられた自由主義經濟思想が事實上確固たる地歩を占むるに至つた。佛國に於ては又、一七八九年及び一七九三年兩度の人權宣言が極めて明瞭に自由主義を宣言した。さうしてそれは頓て強い大きな波紋となつて歐洲全土に波及したのである。

すべての人々をして自由に契約を爲さしめるがいゝ。自由に其の所有物を利用し處分せしめるがいゝ。各人は各々自己の爲めに其最善を求めるに違ひない。さうして各人は各々自己の好む所に從つて滿足せしめられ、其結果社會全體も亦自ら最善に到達するであらう。國家は濫りに干渉してはならぬ。或る者の特別なる保護を企てゝはならぬ。すべてを各人の自由に放任せよ。

第十八世紀の自由主義はかく敎へた。さうして其思想は頓て社會上固く確立されて第十九世紀に引き渡された。人々は「自由」の名に眩惑されて空しく其美しき名を讃へた。けれども「現實」は其後幾許もなく冷い手を擧げて夢見る人々の肩をたゝいた。自由の世の中は自由競爭の世の中であつた。強者と弱者との自由競爭は無慘にも忽ち弱者の慘々たる敗北となつた。「自由」其名は美しい。けれども之に依つて實質上眞に自由の利益を享受し得るものは獨り強者のみであつた。弱者は勝ち誇りたる強者の膝下にひれ伏して「生存」を乞ひ受けるの外はなかつた。彼等はかくして賃銀奴

業となり終つたのである。

玆に於てか第十九世紀の中葉には既に自由主義に對する逆潮が各國を通じて漸次其力を得るに至つた。

二

自由主義は明治維新と共に極めて力強く吾國に浸入した。封建治下に於ける多年の壓制拘束に疲れた人々は自由にあこがれた。さうして自由の名の下に何事をも爲し遂げやうとした。無論同じ明治時代でも其の間に行はれた自由主義思想には自ら多少の消長はあつた。又自由主義の主張の中或る種のものは未だに尙充分行はれて居ないし、當時と雖も必ずしも歐米人が理解したと同じ意味に於て自由主義を理解したものとは思はれない。けれども其の中最も重要なる職業の自由と契約の自由と財産の自由とは既に明治の當初に於て早くも制度の上に實現されて、其後漸次に其根柢を深めて行つた。

先づ第一に、今までは或る種の階級又は或る種の人々に限つて從事することの出來た各種の職業が維新と共に漸次四民に向つて平等に開かるゝことゝなつた。それが職業の自由である。第二には又從來各種の法律關係が當事者任意の合意に依る自由決定に任さるゝことなく直接法律に依つて規定せられ又干渉せられて居た。それを當事者自由の合意契約に一任する主義をとるに至つたことは明治の法制の一大特色である。尙第三に、明治以前の法制に於ては獨り封建法の適用を受けた武士の領地、扶持の類のみならず、一般平人の財産と雖も公力に依つて制限せらるゝ所が多かつた。それを變更して財産の自由を確立し、絕對的なる私有財産制度を作り上げたものも亦明治である。私は之より以下右の中契約の自由及び財産の自由について多少の詳說を試みやうと思ふ。

三

萬事を武士本位に考へた德川時代の法制に於ては國家が物價、地代家賃、勞銀等に對して干渉的の立法を試むることは決して珍しいことではなかつた。

大火災暴風雨等天災の後に於て材木商大工其他の職人等が不當に物價乃至勞銀を昂騰せしむることを禁止したる幾多

の法令ある並勿論、天保十二年（西暦一八四一年）辛丑四月十日の町觸の如きは

諸色直段之儀者元方相場を見合賣買致し候得共、諸職人手間賃人足賃は、元方に不ㇾ拘品なれども、地代店賃引上候に隨ひ、商ひ品は勿論、諸職人手間賃人足賃に至迄引上候道理に有ㇾ之候處、稀には御主意を相辨引下候向も有ㇾ之候に候得共、聊之儀にて總體之勢にも不相成、右者畢竟地主共沽券高之歩合に當り候程之地代店賃取置候故、自然高直にも相成候間、何によらず都而寛政度以前之振合に見合直段引下、職人手間賃人足賃之儀も地代店賃引下候上は、同樣之振合に立戻り、早々引下候樣可致、若心得違之もの有ㇾ之、不ニ相用ニにおいては、吟味之上急度可ㇾ及ニ沙汰ニ候條町中不ㇾ洩樣可ニ相觸ニもの也

と云ふやうに一般的に物價地代家賃勞銀等に向つて概括的な制限を試みた法令もあり、又古く明曆元年（西暦一六五五年）乙未八月廿一日には「上職人」の勞銀率を法律を以て公定し「從ニ其下ニ之職人」についてのみ「相對」の契約を許して居るやうな例がある。

無論、明曆三年を初め寛文十一年、天和二年、貞享元年、正德元年等に

一　大工木挽屋根葺石切左官疊屋此外諸職人會所を定、中ケ間一同之寄合いたし、手間料高直申合候に付而、最前共段相觸候間、彌可得其意事

右物別一味同心之寄合、何事によらず御法度の旨最前も相觸候、若自今以後一同之申合仕候もの在之者可爲曲事者也

と云ふやうな勞働者の賃銀率申合はせを禁じた法令を出した例もあるけれども、此等は唯爲事武士本位の政策から物價を引下げやうとして町人に極度の干渉を加へたものに過ぎぬ。從つて當時問屋組合仲間等の名義を以て商工業を獨占して居た排他的同業組合の如きも、之に因る弊害甚しきに至れば、忽ち其全部を廢止して萬事を自由競爭に委ね以て物價の引下げを計るやうなことをして居るけれども、（天保十二年、十三年）其結果が事實捗しからず「諸品下直にも不相成、却而不融通之趣も相聞候」と云ふやうなことになれば、再び昔の問屋組合の制度を再興するやうな次第であつて（嘉永六年）、近代的意義に於ける自由主義の佛は未だ到底之を認めることが出來ないのである。

四

所が明治と共に萬事は段々と自由の契約に放任されることゝなつた。今まで法令を以て極められて居た色々の事柄は漸次「相對」の契約を以て定められることゝなつた。それで先づ第一には諸方の法定運賃率――それは極めて低廉で從來各地方の百姓等を苦しめたものであつた――を漸次に廢止した。併し此の新主義を最も明瞭に宣言したものは明治五年八月二十七日の太政官布告第二四〇號であつて、其の正文は左の通りである。

地代店賃ノ儀從來東京府下ヲ始メ間々其制限ヲ立置候向モ有之哉ニ相聞候處以來ハ双方共相對ヲ以取極メ致貸借候儀可爲勝手事

一　諸奉公人諸職人雇夫等給金雇料ノ儀是亦自今双方共相對ヲ以テ取極メ候儀勝手タルベシ尤諸職人等是迄得意或ハ出入場ト唱ヘ常ニ傭ハレ先キヲ極メ置候分雇主方ニテ他ノ職人雇入候節彼是故障筋申掛ノ者モ有之由向後右樣心得違無之樣可致事

右之通相達候條各府縣ニ於テ管内無洩可觸示事

此の布告は言ふまでもなく其前段に於て地代家賃に關する制限を撤廢し、後段に於ては又勞銀に關する制限を廢止して全然之を當事者「相對」の「取極」に任せることゝしたものであつて、後段末尾は今日米國佛國等に於て屢々論議される Open Shop, Closed Shop の問題と似た事項、即ち或る勞働者が或る雇主を自己の獨占とし他の勞働者が自由競爭を以て其の雇主に雇はれることを妨げやうとする問題について、自由主義の立場からかゝる獨占は許すべからざるものとして Open Shop 主義を宣明したものである。

尚此の布告を讀むについて大に注意すべき事柄が一つある。それは、從來の法令の勞銀に對する干渉制限は――先に一言した通り――勞銀の最高率を決めて其の昂騰を妨げることを目的としたものであつて近來勞働問題の勃興と共に最低賃銀率を法定することが要求せられ又立法されて居るのとは全く正反對の精神を有するものである。從つて今新なる布告を以て「給金雇料ノ儀是亦自今双方共相對ヲ以テ取極メ候儀勝手タルベシ」と定めたのは、從來の最高賃銀率を撤廢

することに依つて「諸爭公人諸職人雇夫等」の利益を増進せむとする目的に出たのである。これは丁度英國の産業革命以前に於ける Edward III や Elizabeth の勞働者條例 Statutes of Labourers に於ける勞働賃銀への干渉は其最高率を定むることに依つて雇主乃至社會全體の利益を計らむとする目的を有したるに反し、産業革命と共に起つた自由主義の思想はかゝる制限を撤廢して賃銀の決定を雇主勞働者間の自由契約に一任することを要求したのと同じであつて、東西事の經過に略同じきものあるを見るは極めて興味ある事柄と云はねばならぬ。

五

かくの如く、明治の法制は既に其の初頭より契約自由の原則を以て初まつて居る。所が其後吾國にも機械工業が段々と輸入されて産業革命が初まると共に、内に無秩序なる産業競爭が起り、外に於ては又吾國も列强と肩を比べて世界的産業競爭の渦中に投ぜねばならぬこととなつた。さうなると、折角萬事を「相對」の契約に任せて勞働者の保護を計つた新制度も忽ちに反つて彼等を禍することゝなつた。資本の集積に伴つて漸次に大資本家が出來た。彼等は資力に於て優秀なるは勿論、其手足として優れたる智識と秩序立ちたる組織とを有するが故に之と個々の引き離されたる勞働者との間に於ける勞銀の協定は、形式上自由契約ではあるものゝ、實質上決して自由ではなかつた。無制限なる自由契約、それは强者にとつてのみの自由であつて、弱者にとつては强制である。賃銀は勿論勞働時間其他の勞働條件は全く唯資本家の任意にディクテートし得る所であつて、其日其日のパンを得るに忙しい勞働者、企業界並に勞働市場の狀況に通曉せざる勞働者にとつては唯かくしてディクテートせられたる勞働條件を其儘受諾するの外何等の自由もない。

成程資本家のすべてが鬼である譯がない。彼等の中の多數者は實は大に溫情主義者であるに違ひない。乍併彼等と雖も亦自由競爭の荒浪の中にもまれて居るのだ。資本を以て競爭し原料を以て競爭し更に經營を以て品質を以て激烈なさうしてきわどい競爭をやつて弱食弱肉の巷に苦鬪して居る彼等が、どうして「勞働の低廉」を以て其の武器としなからう。彼等が企業者として競爭場裡に生きむが爲めには、あらゆる利用し得べき武器の利用を怠つてはならぬ。其所で彼

等は自ら生きむが爲めに何等の遠慮會釋もなく勞銀を切り下げてゆく。個々の企業者の温情も聰明も此の傾向を止むべく何等の效もないのである。殊に經濟的帝國主義の思想に依つて讃美せられ奬勵せられて居る對外的産業競爭は、此の意味に於ける賃銀の切下を更に甚しからしめる。しかしながら一歩々々向上の一路を踏みしめつゝ進み來る勞働者がどうしてか能く此の悲慘なる運命を甘受することが出來やう。勞働問題は自然玆に起らざるを得ないのである。

六

共所で、當然に出で來るべきものは勞働者の團結である。個々の引き離された勞働者が事實上資本家と對等の自由を以て契約を爲し得ざる以上、彼等は團結せねばならぬ。さうして其の力を以て資本家に對抗せねばならぬ。かくして當事者双方の實力が平均するとき玆に初めて眞に內容の充實した實質的の契約自由が行はれるのである。此の故に、從來は各勞働者が獨立して個々的に契約を爲したるに引換へ、勞働組合が直接資本家と協定して勞働條件の最低限を定め、各個の勞働者は其協定條件の範圍內に於て個々の契約を結ぶことゝする勞働協約（Collective agreement, Tarifvertrag）の制度が是認されねばならぬ。又團結がそれ程までにならずとも、同盟罷工其他勞働爭議の際團體交涉に依り代表者を通して集團的に勞働條件を改定すること、又同盟罷工其他の勞働戰術に依り直接資本家を壓迫して双方の勢力平均を作り之に依つて公正なる勞働條件を得ることなどは此意味に於て亦之を是認せねばならぬ。此等はすべて自由主義をして其本來の精神を發揮せしめ、當事者双方にとつて眞に自由なる公正なる契約條件を與ふるにつき必要であると云はねばならぬ。

無論かくの如き勞働者側の事實的壓迫は從來事實力の優勢を利用して自由契約の利益を自己にのみ專斷し來つた資本家にとつては極めて不愉快なことに違ひない。從つて彼等はあらゆる口實術策を盡してかくの如き事實的壓迫を弱めやうと計る。是れ彼等が勞働組合を嫌ひ、同盟罷工其他の勞働戰術を不法視すべく努力する所以である。併しこれは畢竟自由主義の利益を自己にのみ獨占せむとする彼等の我儘に過ぎない、何故なれば、何等の制限なき自由主義をして眞に其精神を發揮せしむるが爲めには當事者双方の間に完全なる勢力の平均あることを前提とせねばならないから。

七

所が、かくの如き有力なる勞働者の團結は實際上中々容易に出來るものではない。現に今日吾國の如き到底資本家と對抗して自由の契約を締結し得る程强力なる團體は一つも存在しない。其の結果之を此まゝに放置すれば、契約自由の原則は獨り資本家にのみ利益を與へて、勞働者は事實何等の自由をも有せず、何時までも萬事資本家のデイクテートする所をそのまゝ受諾せねばならぬ運命を持續せねばならない。併しながらかくの如きことは決して正義でない。又少くとも功利的見地より見て賢明なる政策ではない。何となれば、先づ第一にかくして無理矢理に勞働者を壓迫することは決して一時的にも又永遠的にも産業的平和を持ち來す所以ではないから。又第二にはかくして永く不良なる條件の下に勞働者を酷使することは――恰も利己的な掠奪的農業者が國家全體の資である土地を單に自己一人の利益の爲めに荒して仕舞ふのと同じやうに――永く將來に向つて國民の健康を害し其の勞働力を損することになるからである。

玆に於て、國家干渉の必要が起る。國家は自由競爭に因つて起る上記の慘害不幸を救濟し防止せむが爲めに干渉を初めねばならぬ。勞働立法の必要は實にこゝから起るのである。無論、勞働者の團結が充分に發達して居る國であればかくの如き國家の干渉なしと雖も自ら自由の契約に依つて相當なる勞働條件を得ることが出來やう。けれどもそれのない國に於ては勞働立法を以て最低賃銀を定め勞働時間を制限する等の必要が起る。此故に、例へば英國に於ても勞働組合の充分に發達した職業については萬事が組合資本家間の勞働協約に放任されて居て特別の保護的立法は極めて少いけれども未だ團結の力なき勞働者については特に法律を以て最低賃銀を決める等別段の保護方法が設けられて居る。

要するに自由契約主義の弊害は、契約當事者双方の間に勢力の平均を作ることに依つて其の主義の長所のみを發揮させるやうにするか、又は直接法律を以て其主義を制限するか、二者何れかの方法に依つてのみ之を救ひ得るのであつて、而かも其の二方法は互に密接なる補充的作用を爲すものである。

然るに、現在吾國の爲政者は、一方に於て充分なる勞働立法の制定を躊躇しつゝ、同時に勞働組合の發達其他勞働者の團體的行動を極力防害しやうと考へて居る。彼等は恐らく、吾國の勞働者は力が弱い、從つて彼等の爲めに特に立場を

作つてやるやうな苦心をせずとも、自分等の政治的地位には何等の支障も起らぬものと高をくゝつて居るのであらう。けれども、一方に於て、極力團結を阻止しつゝ他方に於て立法的保護を怠ることは、畢意契約自由の利益を强者たる資本家にのみ與へむとするものであつて、明々白々たる不公平である。背理である。彼等自らの尊重する自由主義の眞精神に戻ること極めて甚しきものである。

吾々は今後、自由契約主義を維持しつゝ勞働者團結の發達に因り之と資本家との勞働協約に依つて、職業的乃至地方的の自治立法が制定されるやうに仕向けて行くがよいか、又は自由主義を棄て若くは制限して國家的干渉を增進するやうに仕向けて行くがよいか、それは吾國民の國民性にも關係し又今後の政治的經過とも關聯して決まる事柄であつて、一概には斷言し難い。併し少くとも、一方に於て勞働者の團結を阻止しつゝ同時に勞働者立法の制定をも爲まいとする今日の政策が――少くとも爲政者並に資本家自らの將來の爲に――極めて危險なものであることは之を斷言し得ると考へる。

八

私は次に財產自由の主義について述べなければならない。

元來人の自由は財產の保障と密接な關係を持つたものである。財產の保障がなければ眞に人の自由を確保することは出來ない。殊に人民をして國家乃至君主の不當なる壓迫より免れしめる爲めには彼の財產をして國家乃至君主の故なき抑壓より脫せしめねばならぬ。是れ佛蘭西革命の際一七八九年の人權宣言第十七條が「所有權は不可侵且神聖なる權利なるが故に何人と雖も法律上確認せられたる公共的必要が明かに之を要求する場合にして且正當なる補償の前拂あるにあらざれば之を奪はるゝことなし」と定め更に一七九三年の人權宣言第十九條が「何人と雖も法律上確認せられたる公共的必要の要求あり且正當なる補償の前拂ある場合の外其承諾あるにあらざれば財產の最小部分と雖も之を奪はるゝことなし」と定めた所以である。舊制の下に於ては一般人民の財產は幾多の苛重なる封建的負擔を受けたるのみならず、王侯貴族の前に必ずしも絕對に安全なものではなかつた。人民は屢々何等正當の理由なしに財產を奪はれたのである。是れ人權宣言が財產不可侵の原則を確立して自由保障の一手段とした所以である。

又經濟的方面より見ても、各人の財産は成るべく各人をして自由に之を利用し處分せしめるがいゝ。さうすれば各人は各自己の最善の爲めに之を利用するに違ひない。さうして因つて生ずる結果の總和は亦自ら最善のものとなつて國家全體の利益となるであらう。何故なれば、國家全體の富は即ち各個國民の富の總和であり、而して元來利己的なる人間は自由なる財産を有して自由に之を利用し得る場合に於て最も能く之を利用して最善の結果を取得するに違ひないからである。此の考は第十八世紀の自由主義經濟學の主張する所であつて、之と上記の自由保障の考へとが自ら結合して、茲に財産自由の原則を生み出し、「不可侵且神聖」なる私有財産の制度を確立したのである。

けれども、實際上各人をして任意に各自の最善を追はしむることは必ずしも社會全體の爲めに最善を生み出すものでないことは、其後第十九世紀以來の社會的事實及び學說の明かに立證する所である。又財産の保障に依つて自由を確保せしむとする企ては夫れ自身確かに正當な考へ方であり又事實上も確かに成功したには違ひないけれども、かくして自由を保障される者は事實財産を有する者に限られねばならぬ。財産を有せざる者にとつてはかくの如き保障は何等の價値もないのである。而して一方財産を保障せられたる者は——其保障の範圍内に於て——國家と雖も何侵すべからざる自由の財産を有するが故に、對國家の問題に於ても可成りの程度に自由を享 することが許される。財産を有する者は之が利用乃至處分について何等國家の制肘を受けざるのみならず、反つて其資力を以て國家を制肘することが出來る。其の結果大資本家の前には全然頭の上らない國家さへ生まれ出るのであつて、事茲に至れば、財産自由の主義は既に其眞精神を失ひたるものと云はねばならない。既に其主義本來の目的を超越して特に或る種の者に依つてのみ不當に利用せられ濫用せらるるに至つたものと云はねばならない。

九

「物」は元來吾々全體の爲めに與へられたものだ、或る者のみが、單に自己の利益の爲めのみに全然他の一般人の利害を顧みずして之を專有することは許し難いと云ふ考は、此種の時代と共に必然に生まれねばならないものである。

吾國に於ける一般人民の財産が明治と共に極めて自由なものとなつたことは大に注目せねばならない事柄である。明治以前にあつては、政府は屢々故なく用達町人等の富豪に向つて巨額の「御用金」を申付けた。又各種の犯罪について屢々附加刑として封祿乃至財産の全部又は一部を沒收した(改易乃至闕所)。其他私有財産は政府に對する關係に於て到底充分なる保護を受けて居なかつた。

然るに明治政府は其初めより人民財産の保護に向つて大に注意を拂つた。即ち明治元年には既に屢々布告を發して献金の強要を嚴禁して居る。又明治三年正月二十日には「刑法新律追テ被仰出候へ共差當リ財産沒籍ノ法被爲停廢思食ニ付各地方官ニ於テモ御趣旨ヲ奉體可致旨御沙汰候事」なる布告を以て、從來の財産沒收刑を廢止した。而して明治五年二月十五日の布告を以て土地の永代賣買が一般的に自由に許されることになつてより此方は、田畑の類に至るまで名實共に完全なる私有財産と變つたのである。かくして私有財産は漸次完全に保護されて段々と國家の制肘を脱することゝなつたのであるが、遂に明治二十二年憲法第二十七條を以て所有權不可侵の原則が國憲の一部に加へられ、玆に絶對的私有財産制度の法律的基礎が確立されたのである。

かくして確立された財産自由の主義は確かに國民の自由を保障する効能があつた。又其の結果一般人民の利己心を刺戟して大に企業の發展農業の進歩等を促す効能があつた。其功の大なる吾々の到底濫りに無視すべからざるは素よりである。併しながらかくして自由の保障を受くる者は獨り有産者のみに限ることを忘れてはならない。又元來財産自由の原則は國家に對する國民の自由を保障する手段として主張され確立されたものに過ぎない。然るに此の方法に依つて國家の抑制から解放された有産者は終に反つて國家を制禦するに至るのである。

現在吾國の實狀を見ると、少數者に依る資本の獨占は自ら他面に於て多數の無産者を搾取するの結果を生ぜしめて居る。本來社會全體の需要を滿足せしむべく利用されねばならない「物」が、單に所有者の營利的目的の爲めにのみ利用されて居る。所有者は唯自己の營利を目安として「物」を使用する。從つて營利の見込みがなければ、一般人民の需要が如何にあらうとも、彼等は其「物」は利用しやうとしない。加之、一般人士の所有物に對する考へ方を見ても、それは全く個人的であつて、何等の公共的考慮をも加へて居ない。これは自己の所有物である。如何に使用しやうともいゝ又使用せずとも、浪費しやうとも、破壞しやうとも何等差支がない。吾國の一般人士は實にかくの如く考へて居るのである。

一〇

其結果、官憲の如きも憲法第二十七條が所有權の不可侵を宣言して居る眞の精神を忘れて、唯形式的にのみ所有權を保護することに專念して居る。それが爲め、物を如何に使用せば最も能く國民全體を滿足せしむるを得べきかの問題を

研究する者が、其の方法として少しでも私有財産を制限するの必要あることを論ずるに至れば、忽ち之を目して秩序を紊亂し、國家の根本組織を破壞するものとする。

けれども、元來「日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コトナシ」と云ふ憲法の規定は、沿革上明かに國家乃至政府の專恣に向つて人民を保護することを目的として制定されたものであつて、其の目的夫れ自身のみが「憲法」なのである。然るに、世人稍ともすれば此の精神を忘れて、私有財産を絶對のものと考へ、之を如何に利用するかは全く所有者の自由なりとすることが憲法の精神なるが如くに考へて居る。けれども、かくの如きは財産自由主義の濫用に過ぎないのであつて、毫も憲法の保護、保障する所ではないのである。

二

之を要するに、明治の自由主義は其の時代に於て其本來の任務を果した。本來の意義を存する限りそれは今日も尚大に價値あるものなることと勿論であつて、自由主義本來の眞精神を今後に向つて一層發揮することは益々必要であらう。けれどもすべての主義思想制度は頓て本來の精神以外に濫用されて幾多の弊害を生じ易い。自由主義も亦其一例である。吾々は此點を三思せねばならない。

今の爲政者、權力者、指導者を以て任ずる人々は、稍ともすれば「我國獨特の精神」であるとか「古來の淳風美俗」であるとか云ふやうなことを口にして、專ら現狀を是認し且之を維持しやうと考へる。けれども、今日彼等が「美」と感じ「善」と考へ又「日本古來の良俗」なりと考へて居る事柄の多數が、實は明治新政の所作であり遺物であり、乃至は又其濫用に過ぎないことを考へねばならない。

自ら赤き空氣の中に住みつゝ萬物を赤しと說いて得々たる者は笑はれねばならない。生れたまゝの眼を開いて現實を見よ。さうして將來を考へよ。新しき世界は既に吾々の前に開かれて居る。

(附記)此小稿は此夏大阪每日新聞社に招かれて二日間講演をした際の筆記を本として出來上つたものである。從つて元來が極めて專門外の一般聽衆をあてにして組立てられて居ることを一言斷はつて置きたい　尚本來此の後に一章「法治主義」に關する說明があつたのであるが、それは大體去る七月東京日々新聞に掲げた「役人の頭」の中で述べたことを繰返したものに過ぎないから、茲には之を省略することにした。

階級の本質

高田保馬

一

私は先づ階級の本質を自ら如何に見るかを述べて、此考案をはじめたいと思ふ。

私見によれば、階級は社會的勢力の類似に基く集團である。此類似と云ふは性質の類似に非ずして勢力の大さの類似であるたゞ集團の形成が此勢力の類似によりて制約せらるゝ結果として階級が勢力の數量的類似を根本の基礎とするに拘はらず、其上にその性質的類似をもまた伴ふと云ふ現象を生ずる。

玆に社會的勢力と云ふは權力と富力(財産、所得のその何れをも含む、經濟的勢力とも稱したい)と威力(dignity)との三者を含む。其性質的差異と今云ふものは此勢力のかゝる内容的差異を意味するに非ず、同一の經濟的勢力もそれが異なれる仕方によりて得らるゝ時、(之を得るものゝ異なれる資格によりて得らるゝ時)同じく此差異ありと見る。(異なれる内容の力も受取らるゝ仕方が同じければ性質を一にすると見る)即ち同じく千圓の所得も勞働の供給者たる資格に於て得らるゝものと、資本の貸付人たる資格に於て得らるゝものとは性質に於て異なりと見るのである。

また玆に集團と云ふは極めて漠然たる意味に於てする。廣義に於てそれは社會的部類と云ふほどの事に過ぎぬ(social categories)云はゞ客觀的考察者の立場よりして、類似を中心に總括して見られたる社會成員の多數である。狹義に於ては、それが社會的部類たるのみならず、互に集りて一全體をなすと云ふ意識が成員に存する事を意味する。云はゞ一集團の意識を伴ふ時に社會的部類としての階級の一部分又は全部分が狹義に於ける階級となる。

階級の概念の決定は常に二の方面を有つ。第一には其中に含まるゝ類似の性質如何。第二には其集團の團結の性質如何である。而して、此集團に就いては三種の段階が分ち考へ得られる。

第一段階。社會的勢力の類似せるもの丶間に個人對個人として同類親和の傾向が認められる、然れども地方的又は職業的等の障壁の爲に此類似者全體を一集團として之に對する親和の感ぜられざる場合。

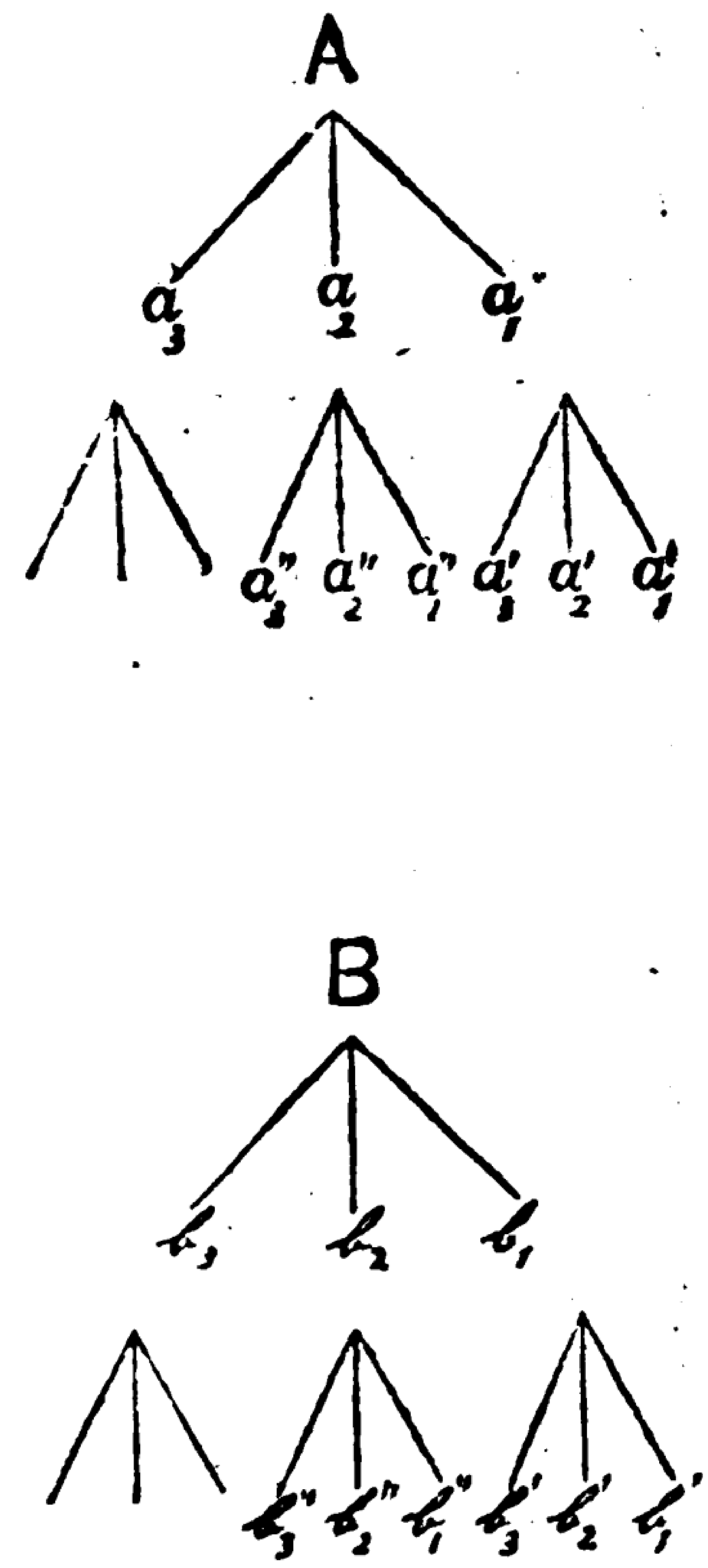
第二段階。個人間に同類親和の傾向あるのみならず、廣き社會に亘れる同一部類を一團として考へ、之に對して同類の親和の認めらる丶場合。所謂階級同情の感ぜらる丶場合。

第三段階。他の階級との對立が意識せられ、從ひて同一階級の人人は單に階級同情を有するのみならず、組織を形成して協働（特に利害相反する他の階級に對する反抗の爲に）を營む場合。此段階の特徴をなすものは、階級意識（他の階級に對し其階級が利害上相對立する一團をなすとの意識）である。此組織は事實に於て全階級を蔽ふものに非ず、たゞ之を包括せむとの意圖を有するのみ。

第一の段階にありては、社會的部類あれども、未だ社會的團結が此全部類を統一的なるものに組み上げたりとは考へられず、從ひて所謂一社會としての階級の存在はなほ認められぬ。第二の段階は所謂同情（これが其實同類の親和を意味する事は私が他の機會に於て屢說明した）に基く團結であると。groupes sympathétiquesと云ふ名稱が之に對して用ひられ得る。而して狹義の階級たるに十分なる團結の要素は之を以て具はる。第三の段階の特徴は此上に意識的協働の要素を加へる、勿論此協働は事實に於て此階級中の一部分を含むに過ぎずとしても、それが所謂階級意識によりて動かされてある限り、階級全成員の包括を少くも其意圖に於て斥けざるものである。私は前の段階に於ける階級の團結を同情的團結、又は同情社會と云ひ、後の段階に於けるそれを協働的團結又は協働社會と云ふ(1)。マルクスの表現を借れば、第三段階が略ぼそれ自體の爲の階級に當る、勿論マルクスにありては階級が組織を有する事と政黨に組織せられる事とが同義を有し、而して政黨に構成せらる丶まではそれ自體の爲の階級とはならぬ。從ひて、此第三段階の政黨形成までの一部分は第二段階と合して、他に對する階級を形成するものと見られなければならぬ。此の如くなるが故に、一の社會的部類が狹義に於ける階級をなすや否やは一に、成員間の團結のその上に加はるか否かによりて定まる。而して此の團結類似を基礎として行はれ、從ひて一人がたゞ其一のみに屬すとは考へられぬ。

今假に社會的勢力の數量的類似を中心として考へたる社會的部類Aが中に a_1 a_2 a_3 a_4 等の部分を含む、a_1 a_2 等は此勢力の性質的類似を基礎としたる部類である。また更に、a_1 は a_1' a_1'' 等より a_2 は a_2' a_2'' 等より成るとする、これも勢力の性質を基礎としたる部

類であるに。Bに就いても亦同様なる事が認められ得る。



此際、例へば、a_2'に屬する人人は、a_{21}'の類似を中心として團結を形成すると共にa_1の類似を中心として團結を形成し得べく、Aの類似を中心として團結を形成し得る。若し此の如き事實ありとすれば、同一人が三の階級に屬し得る譯である(例へばAを榨取者(アウスボイテンデ)、a_1を有産者、a_2を貴族、a_1'を金融的有産者(ファイナンツブルヂョア)、a_2'を工業的有産者(インヅストリエレブルヂョア)等とせよ)。而も此際例へばa_1の階級はAの階級に對して部分階級の地位に立つ。

此點に關して注意すべき事は社會的勢力の性質的類似が決して幾段もの體統を許さざる事である、換言すればA――a_1――a_1'と云ふ如き系列はさまで長きものに非ず、一二段を以て止まる事である。此性質的類似はたゞ勢力の得らるゝ仕方即ち資格に於てのみ定められ、決して其人が仕事に於て取扱ふ對象如何、又は地方的所屬如何と云ふ如き附隨的事柄によりて決定せられるのでは無い、又、其間に成立する親和は勢力の同等を中心にする同類の親和でなければならぬ。即ち同一の地位を有つと云ふ意識が生ずる所の所謂階級的同情でなければならぬ。而して此階級的同情が存立する限りに於てのみ例へばa_1'は狹義の階級となる。a_1'の成員の間にはかゝる同情が成立しても、なほa_1の人人の間にはそれが成立し得ざる事があり得よう。又たとへばa_2'に就いても然り。その時a_1、a_2の如きは階級たらず。

同一の人が包括的關係を有する數多の階級に屬し得る可能あるのみならず、又同一人がかゝる關係に立たざる、云はゞ相並立せる階級に屬し得る可能もある、例へばa_1に屬すると共にa_2に屬する場合の如し。又此の如く狹義なる階級の概念は特殊の團結の要素を必要とするが故に、社會の成員にして全く何れの階級にも屬せざるものがある。即ち社會は幾つかの階級の分立よりなれども、なほ其他何れの階級にも屬せざる數多の人々を認める事が出來る道理である。廣義の階級に關しては然らず。私共が社會の全成員を其地位即ち社會的勢力の大さ、次には其性質的類似に從ひて一定の部類に分てるもの、これ階級であるから成員にして何れかの階級に屬せざるもの無く、又社會全體が幾つかの階級に區劃せられ終る。云はゞ階級を取去りてそこに

成員の殘餘無し。

私は階級をばカスト（最狹義に於ける）封鎖的階級（廣義に於けるカスト）、及び等族等と對立せしめる事をしない。此等のものを多くは階級の特殊なる一場合として包括するが如き、云はゞ極めて廣き意味に此語を用ふる。此點は後に論及したい。

二

私の階級概念の輪廓は略ぼ之を明ならしめた。私の以下試みむとする仕事は一方に於て其內容を立入りて叙述する傍ら、他方に於て從來の學者に於ける階級の意義とい差異、此差異の已むべからざる理由を說く事にある。

而して第二段の豫備的仕事として述べたいと思ふ事が三點ある。

其一の點、階級を如何に見るにせよ、其概念の中心は社會的懸隔にある、即ち社會の體統、又は極めて廣義に於ける地位の區別にある。人々皆無階級の社會と云へば必ず此體統無く懸隔無き社會を思ふに拘はらず、現實の社會に於ける階級を定義せむとするに當りては、動もすれば此事を忘れて、體統以外に於ける差別的類似（他の集團より一集團を區別せしむる後者の成員間の類似）を求め、之を階級概念の中心に置かむとする。

例へばマルクス、エンゲルスの階級概念を見よ。多くの解釋者によりてそれは、所得の泉源の同一(2)（此文句に就いてはマルクス自身の否定あるに拘はらず）、又は利益の共通、(3)又は經濟的活動、經濟的機能の同一(4)による團結なりと考へられる。然れども、マルクス、エンゲルス自身は決して此根本の事柄を忘れては居らない。例へば共產宣言の初めには、歷史の最初の時期より既に社會の體統的區劃（社會的地位の段階）あり、古代羅馬にありては、貴族、中士、平民、奴隷、中世にありては領主、家來、親方、仲間、隷農の如き、而して此等の各階級中に特殊の段階があると說かれてゐる。エンゲルスはまた他の場合に就いて云ふ。分配の不平等と共に階級的區劃が生ずる、社會は特權あるもの特權なきもの、絞取者被絞取者に分れるといふ。これは殆ど自明なるが如くに見ゆるけれども、議論の必要上、第一に注目し置くべき點である。

其二の點、階級は前述の如く差別的類似を中心とする團結である。然れども人々の考の岐れる所は此類似の內容を如何なるものと見るやにある。これに關して次の如き區別を設ける

第一、此類似を社會的勢力以外のものに置くもの。例へば教養の程度、職業（これは或見方からは他の種類に入られる）、慣習其他の文化的水準等の類似が階級の特徵であるとなすもの等

之に當る。及びそれを社會的勢力に置くもの。——この二者の中又後者が他の見地から區別せられる。

第二、此類似を社會的勢力の數量的類似に置くもの、その性質的類似に置くもの。此性質的類似と云ふは人々が受取る所の力の内容そのものに於ける差異を意味せず、受取る仕方の差異即ち受取るものゝ資格の差異　重ねて換言すれば受取る爲に人々の立つ關係の差異を意味する。力の内容は私が別の機會に說明したるが如く　權力、富又は經濟的勢力威力の三つが認められる。かゝる内容の異なる力の間にも、人間の社會には比較が行はれ、其間に數量の大小を云爲し得る。一尺の布と三升の麥との異質的なるものゝ間の經濟的價値の比較は交換によりて表されるが如く、異内容の社會的勢力の間の勢力としての比較また一種の交換によりて表はされる　此交換に當るものはタルドの云ひたるが如く交際と交婚である。赤貧なる公卿貴族と千萬の巨富を擁する豪商とが交際又は交婚の關係に立つ時、此關係が交換方程式に於けるイークヲオルの符號の役目を營む、

第三、階級の差別的類似を社會的勢力の數量的類似に求むると性質的類似に求むるとに拘はらず、此社會的勢力を如何なるものと見るかに差異がある。一は之を社會的勢力一般と見るものにして、こは之を經濟的勢力と見るものである。而して此區分と前の區分とは相交叉し得る。從ひて階級の差異的類似に關する從來の學說には次の如き種類が認め得らるゝ譯である　尤も

階級の差別的類似
- (I) 社會的勢力以外に於ける類似
  - (1) 利益の共同（一）（カウツキイ）
  - (2) 職業の共同（二）（ボオヱエ）
  - (3) 文化的類似（三）（シュモラア）
- (II) 社會的勢力に於ける類似
  - (1) 經濟的勢力に於ける
    - (a) 性質的類似
      - (a_1) 所得泉源の同一（四）（ロオリア）
      - (a_2) 經濟的機能の同一（五）（マルクス）
      - (a_3) 經濟組織の代表的性質（六）（ゾムバルト）
    - (b) 數量的類似
      - (b_1) 財産の大小有無（七）（シュタイン）
      - (b_2) 所得の大小（八）（ロスバッハ）
  - (2) 社會的勢力一般に於ける
    - (a) 性質的類似（九）
    - (b) 數量的類似（十）
    - (c) 性質的制約を有する數量的類似

右表に於ける分類の一のものと他のものとが其實極めて接近せる内容を有し、從ひて一の學者の階級概念を其何れに屬せしむべきかの明ならざる事は多い。(I)に於ける(1)(2)(3)、II(1)に於ける$(a_1)$$(a_2)$$(a_3)$$(b_1)$$(b_2)$等は云はゞ重要なるものゝ列擧にして論理的區分では無い。併しながらこれを以て、階級の差別的類似に關する見方の少くも重なるものはこれに盡きてゐると思ふ。最後のもののみは未だ其代表的學者を認め得ない。從ひて從來の學界に見はれたるに見解の重なるものは十種を數ふ。

其三の點。階級又は社會階級 (soziale klasse, Gesellschaftsklasse) と云ふ言葉は一方に於て等族、又は身分 (Stände, (état, ordre, status) などと區別せられ、他方に於ては種々なる意義に於ける族級、封鎖的階級 (caste kaste) と區別せられる身分と階級との差別は區劃が國家的組織の一部分をなすか、然らずしてたゞ國家以外の、即ち社會の事實なるかにある。換言すれば、國家的範疇なるか、社會的範疇なるかにある。族級階級との差別は集團が封鎖的性質を有するか否かにある、云ひ換ふれば、少くも形式上階級の周流が自由に行はれ得るか否かにある。而して、前述の差別的類似を中心として成立する集團の中に就いて階級と對立する部分即ち身分又は族級を引き去り、其殘餘のみを階級と見る。之を他の方面より說く。前述の差別的類似を特徴とする集團の中には更にそれ以上の屬性を具有する事によりて身分又は族級と呼ばれるものがある、此等を取除き、云はゞかの類似と云ふ最小の特徴のみによる團結を階級と見る。若しかゝる見地を採るならば、階級は勿論他の時期に於て認められざるに非ざるも、重に近代の現象である。然れども、階級の理論に於て極めて重要なる立場を占むる二種の學說の何れも階級を以て少くも有史以來の社會變動及び組織の一說明原理と見る、社會に關する理論構成に於てかゝる包括的なる見地をとる限り、而して階級概念を其一中心と見る限り、かゝる狹義の解釋を不便なりとする。二種の學說と云ふものはマルクス的なる唯物史觀にして、他は社會學の諸流派である。勿論身分及び族級と階級との關係はかゝる簡單なる表現に盡さざる點もあるが、それは別に論じたいと思ふ。

三

階級と云ふ部類又は團結が種々なる類似によりて伴はるゝ事に明白なる事實である。大抵の場合一の階級は他の階級より異なれる、而してそれ特有の社會的地位即ち社會的勢力を有すると共に、生活、標準共通の利害、風俗慣習、思想の傾向等を有し、時には特有なる公法上訴法上の特權、血緣の共同職業の同一等

をさへ伴ふ。然れども、現實の各階級には如何に豐富なる類似の認められるにせよ、此類似の中、階級を他の類似に基く團結（又は部類）より區別すべき中心的のものがある。而して、例へば社會に分配の不平等あると共に階級が成立すると云ふエンゲルスの見方、私有財產の均等の破るゝに及びて階級の成立すと見るフォン・シュタインの考には餘りに經濟的の狹き範圍に始終する嫌ありとは云へ、又例へば掠取の事實が階級的社會の特徵をなすと云ふツウガン・バラノウスキの見解亦十分に階級の全範圍に着眼せざる憾ありとは云へ(5)社會に不平等の生ぜざる間階級無く現在の不平等の消滅し去る時無階級社會が實現せらるべしと云ふ事は何人も疑はぬ。此點より見るならば、階級概念の中心要素は此體統即ち上下の關係にあり、從ひて其特徵をなす差別的類似が地位の同一にありと云ふ事に何人も疑ひ難き所と思ふ。

然れども、此地位の異同と云ふ事は何を意味するか。私は今まで尊卑の區別と同一視した。大體に於ては此見解が當らざるものとは考へぬ。然れども、嚴密に見來れば訂正を要する點がある尊卑の感情的要素は一般の場合に於て、此地位の高下と相平行する然れども、相互の關係の反感的なる場合には優秀なる地位は吾人に尊重の感情を生ぜしめずして、却つて激烈なる嫌惡の念、爭鬪の傾向を生ぜしめる。又此關係が極度に密着的なる場合には劣等なる地位が賤視の念を伴はずして、同情惻隱の感じをもたらす。此等の場合、尊重と賤視とか背後に實は潜在すると云ふ立場も取られ得るがなれども、私は寧ろ之を避ける然らば此地位の異同は何を意味するか、曰くたゞ社會的勢力の不等を意味するのみ勿論此勢力と平行して存在する意識的事實はある。それは各自が他人の有する勢力をば假に他人の場合に身を置いて判斷する價値の大さである。然れども、今かゝる要素を揭げ出す必要はない事と思ふ。

此の如く見來れば、階級の差別的類似は一に社會的勢力の類似にある從ひて、階級の本質を說いて、若し此社會的勢力以外のものに於ける類似を其特徵と見るものがあるならば、それは階級の中心を取り違へた見方であると考へざるを得ぬ。此意味から私は社會的勢力に於ける類似に着眼する立場を姑く後に廻して、社會的勢力に於ける類似に着眼する立場を考へたいと思ふ。先づその中、經濟的勢力の類似を中心とする考に入る。

經濟的勢力の類似を以て階級概念の中心に置く考にも二種のものを分つ事が出來る。それは舊き見解並びに新しき見解との二種である。前者は此種の勢力の數量的類似に着眼し、後者はその性質的類似に着眼する。茲に新舊を云ふは必ずしも其優劣

を意味するのでは無い。たゞ前者は財産又は所得の數量的表面を見るに反し、後者は階級の背後に多くは、社會組織又は社會の經濟的組織を認め、階級の中にその一分肢を見る。而して後の見方は階級概念の發達に於て割合に遲れて發生したるが故に之を新き見解と名づけるのである。

舊き見解即數量的見解は此數量を財産に就いて見るか所得に就いて見るかに從ひて二種に分たれる（勿論此二者を結び付けて考ふる所の中間の立場も稀ならずとは云へ、茲にはそれを姑く考察の外に置く。）財産の大小有無に基いて社會の階級的區劃を認むる考は恐らく階級そのものと共に古く、希臘の歴史の中には國家の組織を之に本づけた事さへもある。近世の學者の中此種の階級概念の代表者を求むれば、マルクスと相並びて近世階級理論の二大泉源をなすと云はれるロウレンツ・フオン・シュタインであらう。シュタインによれば、階級的區劃はたゞに財産の差異のみを意味せず、云はゞ社會的財の差異を意味する、社會的財は一方に於て財産、他方に於て精神的財即ち文化内容より成る。而も後者の分配は一に前者の分配によりて決定せられる、財産の分配の不等の生ずる所の結果として、精神的方面に於ける差異が伴ひ來る。かくて、階級の中心要素をなすものは財産の區劃に外ならぬ。社會が財産の均等時期を去りて其不平等の時期に入れば、富者貧者の二階級又は其需要の程度より見て、餘剩財産を有する階級、不足なる階級、十分なる階級との三に分ち得る。又は其財産の性質的方面より資本と勞働との二階級に分つ事も出來る(6)。

此種の見方は世人の常識の中には深く根ざしてゐるけれども現代の階級理論の中にありてはさまで勢力を有せりとも考へられぬ。たゞ此に關して注意すべきことが二點ある。其一は所謂財産階級（Besitz-oder Vermögensklasse）の概念にして、其二は有産者並びに無産者の觀念である。

財産又は所有の大小有無による區劃は現代の階級概念の中心をなすものでは無い。然れども、兎に角に、財産の差異はその限りに於て一種の高下の懸隔を伴ふ。而して、此點に於て同等の地位に置かれたるものを一團として考へしめる。かくて、財産の方面のみより見たる階級（同地位のものを一集團として考へたる）の概念を生ずる。これ即ち財産階級の概念にして、數多の學者の中にも認められ得る。例へば、マクセ ヴェバアの如きは之を社會階級と對立せしめる。一方に於て、單に階級と云ふ時、それは同樣なる階級的地位にある人々の一集團であるとなし、他方に於て、財産階級は財産が階級的地位を決定する限りに於ける階級であると見る。之に對して社會階級とは地位

の相互的變換が個人的に又世代的に可能にして又行はるゝ事の定型的（ティピッシュ）なる所の階級的地位（クラッセンラーゲ）の總體であると見る(7)。又シュパンも其所謂社會階級即ち狹義の階級（Gesellschaftsklassen oder Klassen im engeren Sinne）と相對立せしめて、財産階級（Besitzstände der Besitzklassen）を認め、豪富より赤貧者に至るまで（Grossbesitz, Mittelbesitz, Kleinbesitz, Besitzlose, Lumpenproletarier）五つの段階を分つてゐる(8)。此種の例はなほ數多增加し得られる事と思はれるが、兎に角、財産の側のみより見たる階級概念として、それが社會階級そのものの概念と同一視せられざれども、相並び認められる。

今日の社會主義的思想（並びに社會問題に關する思潮一般）の中には有産者無産者の階級概念がなほ重きをなす。而してこれは少くも表面上、財産を中心とする階級概念の生命ある唯一のものである。然れども、これが財産階級即ち社會階級を意味する證據であるとは考へられぬ。第一、此區別が財産の有無を示すものであると假定してもそれが社會階級を意味し得る所以は財産の有無と相平行し之に伴へる他の特徵あるによる。從ひて、此特徵のもはや平行せざる財産的區別に至りては社會階級として認められない。第二、今日此二階級別、特に無産者の名稱の重要を有するのは思ふに特殊なる事情に基く。マルクス及びエンゲルスは常に社會が結局有産者無産者との對立を見るに至るべしとなし、之を以て搾取者被搾取者の近代的對立として重視した。然るに、佛國の革命思想家に於ける表現に從ひて、マルクス、エンゲルスは此無産者と勞働者とを混同し、前者を以て後者を表さむとしてゐる(9)。無産者を其本來の意義に於て嚴密に解釋するならば、それは勞働者の他に、窮乏したる貴族及び製造業者、無産の勤め人、藝術家、文士の收入乏しきもの等、所謂知識的無産者を含むべきである。然れども、マルクス、エンゲルスに於ける此意味は恐らく後の社會主義者の間にも廣く用ひられて居る。露西亞に於ける意義の變改は姑く說かずとするも從ひて所謂、有産者無産者の對立と云はるゝものは其內容の上から見る時、財産階級の對立に非ず、寧ろ他の意味の階級の對立を指す。私は此點から見てゾンバルトの無産者階級の概念を道理ある事に思ふ。ゾムバルトによれば「眞の無産者（プロレタリアート）」のものは資本的企業に屬する自由勞働者のみ、準無産者（Halbprolet の無産者）の中には下級官吏、無産なる獨立の農夫、商人等を含む(10)。「範圍を此の如くに擴大すればそれがすべての下層民即ち所謂勞働人口を包含する」。此の如くに見來れば無産者の言葉が本來、の財産による階級を意味するものにもせよ、近代的意義に於て其實多くは勞働者其者を指す。而して、有産

者の言葉が常に資本家を意味する事は明である。かるが故に、有産者無産者の言葉の上の對立は其内容に於て財産階級以外のもの丶對立を意味する。從ひて此點より見るも、財産階級の概念は階級理論に於て重要の役目を營まぬ。

所得の大小を階級概念の中心に置く見方は財産の有無を此中心に置く見解の如くに、特に有力なる代表的學者を有しない、然れども世人の間には此見方も廣く行はれて居る。中等階級の概念の骨子としては常に此所得による階級別の觀念が存する。中等階級(middle class, mittelstand, mittelklasse, classe noyen ne. moyen ordre)の階級としての性質に關しては種々立入りたる考察を要する點もあるが(11)、兎に角に、此表現は英國の社會に關する適用を離れて、今すべての社會に就いて考へられ、又社會科學一般に相當の意義を有するに至つて居る。而して、今日此中等階級によりて意味せらる丶所は所得の大さによりて社會の成員を三の部類に區分し、此區分に於て中等の地位を占むるものの集團に外ならぬ。而して、それは單に所得の表面のみに着眼するが故に、小賣商、小工業者、自作農の如く多少の財産の所有者たり、又獨立の企業家たると、官吏、自由職業者、大企業の使用人等の如き所謂知識階級に屬するとを問はず、マルクス的學說にありて、其所謂 Mittelklasse としての小有産者(クラインブルヂョアヂィ)(12)が漸次に沒落し、社會はたゞ有産者と勞働者との對立の銳盛たるべしと見らる丶に對し、新中等階級の増加の高調せらる丶もの、一に中等階級の概念が所得の大少を階級的地位の決定者と認むるによる。此中等階級の考が其對契として所謂の更に大なる階級、更に小なる階級の概念を有する事は云ふまでも無い

私は思ふ。社會の成員を其所得の大小によりてか丶る部類に區分する事勿論不可能に非ず、又此方面から其限りに於て高下の區別の認められざるに非ず。從ひて、例へば財産階級の概念を認むるが如く、所得階級の概念延いては中等階級の概念も認めらるべきである。然れども(中等階級の概念がかく所得と云ふ經濟的要素のみによりて決定せらる丶やは別問題として)所得狹義の階級、即ち社會的部類としてならず、其團結を意識する事によりて社會的變動の有力なる因子をなせる階級を視野の中心に置いて考ふれば、か丶る意味の社會階級は此所得階級と何等直接なる交渉を有せざるものである。從ひて、所得を區別の標準、又は差別的類似とする階級概念は或る意味の階級を含み得るにしても、云はゞ固有の意味に於ける階級を蔽ひ得ない。更に詳言すれば、それはソレルの所得同一地位の人人の集團と見たる漠然たる、而して通俗の『社會學者的階級概念』を意味し得るにしても(14)近代的意義に於ける階級そのものとは著しき距離を有す

る。

四

社會階級の差別的類似を財産又は所得の數量に求むる考、換言すれば、財産階級、所得階級としての社會階級の概念は云はゞ人人を其財産又は所得の標徴によりて一定の部類に區劃せむとするもの、從ひて一種機械的なる見方とも名づけられ得る。然るに、等しく經濟的勢力を中心に置くものにありても、其性質の差異に着眼するものにありては、常に階級を以て經濟組織又は社會の經濟的構造の一分肢乃至は一表現と見る。かくて、相互の間の關係が一種有機的なるものとして考へられる。即ち階級の背後には此組織が併せ考へられる 此一點がかゝる階級概念を有機的のものたらしめ、又近代的のものとしてかの財産階級、所得階級概念に對立せしめる。

近代に於ける階級爭鬪の本國、而して階級理論の發祥地佛國に於て、先づ如何なるものが社會階級として認められしや。例へばマラアは貴族、僧侶、大有産者、有産知識階級、中小市民自作農、及び無産者を數へた。又ミネエは貴族を三分して、宮廷貴族、官吏貴族、土地貴族とし、有産知識階級を獨立の階級として認めず、之を中小市民に分屬せしめた。サンシモンは其産業的階級の中にマラアが相對立すと認めたる企業者と勞働者及び商人、手工業者、小農をも包括せしめ、此等の間には利益の一致があると見る(15)。此等の階級を通して、其本質如何を考へ來れば、何人も經濟的利益の一致、或は經濟的勢力の性質的類似(かく私が呼ばむとするもの)に想ひ到る。利益の一致と云ふ考に就いては姑く論ぜず。而して、此の如く、社會の中に生きたる力として活躍し革命を齎し變動を促がす團結としての階級の事實は一方それがかゝる經濟的勢力の性質的類似の集團として階級を考へしむると共に、又それが社會の經濟的構造の一分肢として此組織を背後に背負へる事を思はしめる。而して此點に着眼したるものはカアル・マルクスである。舊き階級概念の重心がシュタインにあるが如く、近代的なる階級概念の重心は實にマルクスにある。而して、玆に經濟的勢力の性質的類似を以て階級の差別的類似となす諸見解と云ふもの(前揭の表に於けるに(II)(I)(i)に屬する(a1)(a2)(a3))は皆、マルクス自身、又は其影響の下に生じたるものとして、マルクス的なりと云ひ得る。

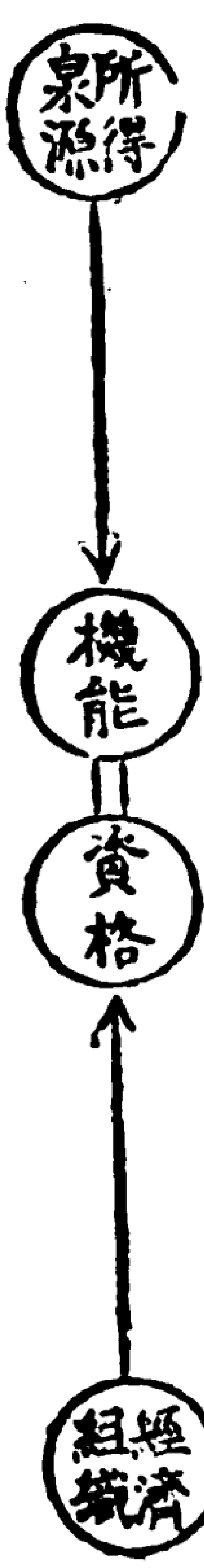
私は別の機會に於ても說明したるが如く、經濟的勢力の性質的差異と云ふ事を此力を受取る仕方の相違にありと見る。此力を如何なる泉源より受取るか、これが此仕方の差異に於ける一方面であり、此點から一種の階級概念が成立する。即ち階級を以て所得泉源の差異による集團と見るのである。

マルクス自身は資本制社會に於ける三大階級、即ち利潤の收得者たる資本家地代の收得者たる地主、勞銀の收得者たる勞働者を列擧したる後、階級の本質は所得又は所得泉源の同一に存するが如きも、其實は然らずと說いてゐる。而して、其理由としては、醫師と官吏とが所得の泉源を別にすれども異なれる階級をなさずと云ふ(13)。然れども此說明は十分に得心を與へ難きものがある。一方、所得泉源の細分せられたる種類が階級をなさずとも、其大なる區分が階級をなすのではないか。又所得泉源の差異はそれ自體階級をなさずとも、他の條件の加はるをまちて階級をなす、從ひて階級の基礎をなすものと考へられないか。これには何の答解も與へられぬ。他方、マルクスの擧げたる數多の階級は皆、所得泉源の同一に基く集團として解釋せられ易く思はれる。實際マルクス自身がかの否定を明白に與へざりしならば、後のマルクス學者はマルクスの階級概念の本質を所得泉源の同一以外に求めざりしならむとすら考へられる。

かくて一方に於てマルクスの影響の下に立てる社會主義の學者の間に階級の本質を所得の泉源の同一に認むるもの少からざる事は自然の勢である。而して又此マルクスとの關係を離れて考ふるも(マルクスが所得の種類を中心としたるかに見ゆる階級概念とアダム・スミスのそれとの聯絡は別問題として)、此種の類似を中心として階級を定義する事は近代の階級を說明するに極めて便利多く、而して又其內容が明瞭なる事を得ると思はれる。今此種の階級概念の一例としてロオリアを擧げ得るかと思ふ(ロオリアの意見は今其著 The Economic Synthesis による、其著社會形態論に於ては更に包括的なる見地から考察が下されてゐるが今參照の便宜を有しない)。ロオリア所得の形態と種類と程度とを分つ。所得の形態と云ふは分化したるもの、未だ分化せざるものとの二を含む。茲に分化と云ふは其收得者が勞働に對する報酬即ち subsistence の收得者より分れる事を云ふ。又其種類と云ふは、種々なる生產の要素の差別に應ずる所得の差異を指す。程度と云ふは所得の大さに外ならぬ。而して普通に所得の種類、又は所得泉源の同一と云ふは此場合、所得の形態に於ける類似種類に於ける類似の何れをも含むものである。所得の形態に應じて基本的階級がある(普通に云ふ所得は勞働に對する報酬を含む、從ひて餘剩のみを意味するロオリアの所得の外にその所謂生活資料 subsistence を含む。ロオリアはこの subsistence の二の形態即ち onerous, gratuitous の別に應じて他に二の基本的階級ありと見る)。而して、此基本階級は所得の種類に應じて數多の副次階級に分たれる。土地所有者、生產的資本家、不生產的資本家と云ふが如きは其一例で

ある。また、ロオリアは所得の程度によりて、種々なる副次階級の存する事を認めはするが、大體に於て、その區別はかの所得の形態及び種類に於ける區別と相照應し合一する傾向を有つものなりと見る（私は此副次階級、及び所得の種類と大さとの照應に就いて後に論及したいと思ふ）。今立入りて、このロオリアの見解に詳説を加へたいとは考へない。而して所得泉源概念の中心を置く見方は福田博士にありて最も明晰に説かれてゐる(16)

　經濟的勢力の性質即ち其受取らるゝ仕方の差異は此の如く受取らるゝ泉源の差異に存する事を得ると共に、次には、之を受取る爲の活動又は機能の差異に存する事を得る。又は人人が其背後に背負ひ、從ひて代表してゐる所の經濟的組織の差異に存する事を得るとも考へ得られる。更に轉じてまた、受取る人そのものの資格、即ち社會の經濟的構造に於て、與へられて占有する地位の差異に存する事も出來る。



　人人が一定の經濟組織を代表し、云はゞ背後に之を背負ひ、又此社會の全經濟的構造の中に一定の資格に於て立ち、一定の機能又は經濟的活動を營む事により、一定の所得の泉源より所得を受取るものとす。受取る仕方の差異は此四の何れに着眼しても考へ得らるゝ譯である。而して、此機能に着眼したる階級概念は一派の學者の解釋したるマルクス的階級である。

　人人が社會の經濟組織に於て營む所の活動そのものは云はゞ職業的活動にして（此二者の間には勿論種々なる差異を考へ得るが大體の見方としては此の如くに云ひ得る）、それ自體何等社會的勢力の性質を意味するものでは無い。階級と分業とは全く異なれる事柄である。然れども、經濟的活動（又は分業的活動）が其社會より受取る所の所得を決定すると見るに於て、前者が後者の性質を意味し得る。而してマルクス説にありては此條件が明瞭に認められる。『社會的生産は生産物の分配をも包攝す』が故に勿論、マルクスの見解によれば、分配關係は生産關係に屬する。かくてマルクスは云ふ、分配關係は生産關係と同一である、前者は後者の一反面に過ぎない。』分配關係は他の形相に於ける生産關係である』(17)。此事情によりて、マルクス階級概念が階級の差別的類似を經濟的活動の類似と見る以上、それは經濟的勢力の一種の性質的差異に前者を認むる見解なりと考へる。

　マルクスが階級の本質に關して積極的敍述を與へざりし結果は之に關する種々の説明が可能となる。而して、ユウアルは云ふ、共産宣言の中に開展せられたる學説に從へば、階級は其起

原を經濟生産に有する。生産に於て人々はそれぞれ異なれる機能(役目(ロオル))を營む、同一の機能を營む人は同一の階級に屬する他の場合にマルクスは階級の特徴を形づくるものは其他の風習利益、異なれる文化なりと云ふに『然れども、彼の眼には、最も重要なる點は宣言の示す所のものである、社會的分化は分業より結果する』(18)。クウノヴの叙説は更に詳細に亘る。社會的全經營の內部にありて互に同樣なる關係に立ち、從ひて、經濟的活動の同一種類に屬するすべての個人及び集團はそれ自身一の階級を作る。從ひてマルクスの見解に從へば、決定的なる點は財産の大さにも所得の高さにも、又職業の種類にも非ずして經濟的活動の種類、及び之によりて決定せらるる所の成員の地位(社會的經濟經營に於ける)である』而して、金融業者も製造業者も『共に資本家である。其所得をば生産過程の中に生じたる餘剩勞働の中より受取る。然れども、此過程に於ける彼等の經濟的機能(フンクチオオン)は種類を異にする、而して資本的經濟の內部に於て異なる經濟的活動範圍を表はす』(19)。

私もマルクスの階級概念に於て此の如き解釋を許すべき一面ある事を疑はぬ。然れども、經濟的活動又は機能と云ふ事を普通の意義に於て解釋する限り・それは社會の限られたる成員にのみ關する、經濟的活動に從事するもの丶みが一定の階級に屬するのでは無い。何等の經濟的活動をも機能をも營まざるものにしてなほ階級を構成する事は考へ得られる。エンゲルスは現に貴族階級が何等の機能をも營まざる事を認める。茲に於て私はマルクスが屬階級の説明に用ひたる同一の位置(gemeinsame Situationen, gemeinsame Stellungen)と云ふ言葉に重きを置く。而して、これは其社會の經濟的構造に於ける位置の同一生産關係に於ける同質性を意味する。經濟的活動又は機能を營むと營まざるとに拘はらず、人々は皆此一定の位置を有すると見るが故に、機能を營まざる階級の存在を妨げぬ。此同一の事柄を私は資格と云ふ言葉を以て表現したい、人々は種々なる資格に於て社會の經濟的構造の中に相臨む、一定の資格に立つものは或る特定の機能を營む、此資格を靜的のものとすれば機能は動的のものである。たゞある種の資格は機能を伴はぬ。私はか丶る意味よりして、マルクス階級概念を解して、機能の同一による集團と見ず、寧ろ經濟的構造に於ける資格の同一による集團なりと考ふる事を主張したい。たゞ此見方の是非は所謂經濟的活動又は機能の意義如何にか丶る。それが、社會の經濟的全經營に於て何等の能動的役目をも營まざるものにも之を認め得べしとするならば、自ら別論である。

經濟的勢力の性質の差異はまた、人々が其所得を受取るに際

して、如何なる經濟組織を背後に背負へるやによりて定まる。これが私の最後に說明せむとする見方である。

私はかゝる見方としてゾムバルトの階級概念を意味する。ゾムバルトは階級を極めて狹義に解釋して、これを身分と對立せしむる、此二者の關係と差異とに關して後に述べる。かゝる意味の階級は、其見解による時一々の經濟組織を代表するものである。此經濟組織と云ふは固よりマルクスの場合に於ける社會の經濟的構造、卽ち生產關係の總體としての社會又は社會組織と云ふものとは全く性質を異にする。ゾムバルトの經濟組織は『一定の經濟原則（ヴィルトシャフトプリンツィピエン）を作へる一定の經濟秩序である。經濟秩序と云ふは當時の財の生產と分配とを客觀的に規制する法規、慣習の總體にして經濟原則と云ふは經濟主體の態度を强く決定する動機の系列である。』此一定の經濟組織を代表し、從ひてそれに於て利益を共通に有する人々の團結が一の階級をなすかくて、かゝる經濟組織の數に應じて階級も亦存立すべきである（私にはゾムバルト經濟組織と云ふ概念はマルクス・ヴェエバアの所謂理念型（イデアアルテイプス）の一種であるとしか考へられぬ、從ひて今日の社會はその種々なるものゝ「未完成なる一例」たるべき側面を有する）。而して、現代の社會は封建貴族、小市民、有產者無產者の四の階級を含み、此等の四は夫れ夫れに、封建的土地的經濟組織、傳統的手工業的經濟組織、資本的經濟組織　社會主義的經濟組織を代表する。而して此等の階級が一の團結を形成するのは一に經濟的利益の共通による、彼等は同一の經濟組織に於ける利益を共通に有するが故に一階級をなす、而も一の經濟組織は他の經濟組織と相容れず、從ひて一の階級の利益は必然に他の階級の利益と相容れぬ。ゾムバルトは階級の團結の性質に關してもまた、詳細の分析を試みてゐるがこれは今私が問題としてゐる所では無い(20)。

私は今これを以て、經濟的勢力の性質的類似を中心とする階級概念の敍述を終る　其一々に對して自分の考を述ぶる代りに此性質的類似の內容を如何に決定するにもせよ、かゝる立場の全體に亘れる私見を略說したい。

此種の見方が其背後に社會の經濟的構造又は經濟組織（ゾンバルトの立場と他の立場との間に差異はあるが、階級を切離されたる事象として見ず、その背後の組織を考ふるに於ては一である）を認むる點に於て、階級概念に一の新なる境地を拓きたる事は爭ふ可からず。然れども、それは階級の中に經濟的勢力の性質を見て數量卽ち强弱を見ない。成程此質差は現に認めらるゝ諸階級、例へば、封建貴族と有產者、後者の中に就いても金融的有產者と工業的有產者との對立を說明するには足りる。

然れども、それは階級の根本に關しては目隱しを着けたるかの觀がある。玆に述べたるが如く、勢力の强弱、即ち其數量的差異無き所に階級無し、此差異無しとすれば、如何に其性質的差異あり、これによりて社會內部の區分對立を見るにせよ、それは階級をなすものでは無い。又假に全然かゝる性質的差異無しと假定しても、若しそこに强弱の區別が成立し得るならば、少くも概念時に階級の存在を考へ得る。畢竟階級概念の中核をなもすのは體統による團結が階級として認められ得る。固より私は決して經濟的勢力の數量的類似を中心とする、云はゞ舊く階級概念に立歸れと主張するので無い。此立場は例へば地主、貴族、資本家等がそれぞれ一の階級として立ち、生きたる勢力として作用しつゝある事實に對して何等の說明をも與へず、而してまた、近時の學界に於て其勢力を潜めたる見方であるが故に私は別に之を吟味する事をしなかつた。然るに拘はらず、それが階級の中心を經濟的勢力の數量的類似に求めたる一點は事象の根柢を把握したるものであると思ふ。なほ第二に、此の如く經濟的勢力を中心として階級を考ふる事に關しては（その數量的類似を見るにせよ、性質的類似を見るにせよ）、なほ異論があり得る。併しながら、これは一般に階級概念を經濟的の立場から定めようとする見方に共通せる難點と考へらるゝが故に、後節に於て說明する。

五

私は先づ經濟的勢力に於ける類似を以て階級概念の中心に置く諸見解を述べた。次に此經濟的勢力の狹き範圍を脫して、社會的勢力一般の類似を中心とする立場に轉ずるのが順序らしくも思はれるが、叙述の便宜上、社會的勢力以外に階級の差別的類似を求むる考を先にする。

ゾムバルトの階級概念が既に一方に於て經濟組織の代表を中心としながら、他方に於て經濟的利益の共同と云ふ要素を含む加之、溯りてマルクスの階級の說明そのものが常に利益の共通を高調する事を忘れず、而して階級爭鬪說は此利益の類似、即ち異階級間に於ける利益の反對を根柢となしたるものである。マルクス階級概念の解釋として、之を經濟的利益の共通に基く團結と見る思想の成立するのは自然の成行である。加之、從來の階級關係を見るに、利益の爭奪が最も明に附く、かくて、或は一方マルクス說の解釋として、或は他方自身の階級概念として此經濟的利益の共通に階級の中心要素を認むる考は割合に廣く行はれる。

前に述べたるが如き、經濟的勢力の性質的類似に着眼する諸見解は常に階級が利益の共通を認め、階級の團結が此利益の共

通の意識によりて成立する事を說く、而して經濟的利益の共通を階級の本質と見る立場の人々もまた所得泉源の同一、經濟的機能の同一と云ふ事が階級の一性質をなす事を忘れぬ。從ひて此二種の立場の間に明確なる境界はない。私はたゞ其最も重きを置ける所に從ひて此區分を立てる。かゝる前置の下に於てならば、例へばカウツキイ、ブウツデインの如きは此種の立場の代表者として認められ得る。カウツキイによれば、階級と云ふ集團を他の集團より區別する特徵は相互間に於ける利益の必然的反對に存する。他の集團相互間にありては相互の利益が相一致し得る、一階級の經濟的利益は必ず他の階級のそれと相容れず(21)。此種の見方は其他にも數多の例を擧げる事が出來るが、私の議論を進むる爲には別に其必要も無い。私は思ふ。集團內部經濟的の利益の一致、外部に對する此利益の反對、それが階級に認めらるゝのは事實である、然れども、此事は階級以外の數多の社會に就いても認められる。而して外部に對する利益の必然的反對を以て階級の特徵なりとする考は成立しない、利益の必然的に反對なる一面はある、然れども、他方に於て一致し得る方面の存する事は明白なる事柄であると思ふ。例へばサンシモンの階級別が產業階級の中に資本家と勞働者とを一括したる事は何物を暗示するか。プラトオ理想國以來の所謂 Lehr-, Wehr- und Nährstände の對立思想は何を教ふるか。私は今此點に深く立入る事を避ける。進みて考ふるに、經濟的利益を重心として階級を考ふる事は經濟的勢力の性質的類似を以て階級概念の中核となす前述の數多の見方と同じく、階級に於ける根本的なるものを離れ去りたる憾がある。數多の集團の經濟的利益が如何に必然的に相背くにもせよ、其間に勢力の懸隔、體統の關係を缺く場合に於ては、階級は存立し得ない。勿論絞取者と被絞取者との間にありては、內部の利益の共通、外部に對する利益の衝突が必然的に體統の關係を意味すると云へるであらう。然れども、此場合利益の共通及び差異あるが故に體統之に伴ふに非ず、利益の關係が絞取の關係の上に成立するが故に、利益の異同が勢力の異同を意味し得る。從ひて、利益の關係がそのまゝ直に體統の關係を意味し、從ひて利益の類似が階級の特徵をなすものとは考へられぬ。

經濟的勢力の類似及び經濟的利益の類似を以て階級の中心に置く見方は共に之を一括して階級概念の經濟的見解と稱する事が出來る。私は此種の見解が社會主義學者及び多くの經濟學者に極めて廣く行はるゝに拘はらず、其視野を餘りに狹しと見る。自明の事ながら再び高調する、階級の中心は體統にある、體統即ち上下の組織無き所に社會無し。然るに社會の體統的關係は

決して經濟的事情のみによりて決定せらるゝものに非ず經濟的利益それ自體が體統を意味せざるは固より、經濟的勢力と雖も、此關係を決定する一因子たるに過ぎぬ。

社會の體統的組織（勢力の關係、階級の關係、獨占の關係——Machtverhältnis, Klassenverhältnis, Monopolverhältnis——の言葉を以てよばるゝものを指す）が經濟的勢力以外のものによりても亦決定せらるゝ事は何人も爭はざる所であらう。特に權力が此勢力と相並びて重要なる意義を有する事は多くの人之を認める。然るに拘はらず體統の關係が經濟的勢力によりてのみ決せられとる云ふ見方が一見成立する樣に思はれる、それは權力を以て經濟的勢力の隨伴者その一義的函數と見るのである。此見解に對して私は二段の問題を有す。權力が經濟的勢力の函數として卽ち前者は常に後者の所有者の手に掌握せらるるものとして見る考方がよし許さるゝとしても二者の平行は完全であり得ない。例へば共產宣言にありてさへ、政治的權力の掌握が現在の絞取の關係を破壞し、絞取者の絞取せらるべき道行であると見る。卽ちこれは既に經濟的勢力の所有者ならざるものゝ手中に權力の掌られ、此權力によりて經濟的勢力の分配の決定せらるゝ事を意味する。私にはこれが二者の平行を主張するエンゲルスの立場の否認であると見る。私の問題は更に進む。權力の所在が經濟的勢力の所在によりて決定せらる事を主張する人々の見解に於て、既に二者の平行の十分ならざる事の認めらるゝのみならず、卒直に私見を述ぶれば經濟的勢力の分配は大體から見て權力の分配に平行し、後者が前者を決定する。權力の分配そのものは社會の形態によりて重に決定せられ、決してそれは經濟的勢力の事情によりて定められるのではない。此點は何れ別の機會に於て詳述したいと思ふ今までの事實に見るに權力が經濟的勢力を有するものの手に掌られると云ふ考は經濟史觀と手を携へて居る。此聯絡がどこまで必然性を有するかは一の問題であるが、今之を後日の考察に殘す。私の見解は一種の社會學的史觀にして、社會の形態によりて權力の分配が定まり、之によりて又經濟的勢力の分配も亦定まると思ふ。かゝる立場に居る故に、階級の經濟的見解は狹きに過ぐると思ふ。此點に關しては私はエンゲルスの論敵であつたデュウリングの見解、それとオペンハイマアの獨占說、ジムメルの唯物史觀に對する批判、デュルケム、グウグレの社會形態の考、これらを聯結し得べき自分の中心觀念を抱いてゐるが其展開は何れ後の機會を俟たなければならぬ。此點は姑く措く。私は此等の經濟的階級概念に關してユウアルと共に次の事を云ふ。唯物史觀の論者は社會的體統の中に純經濟的事實を見むと主張する、而してそ

れはまた經濟學者の大部分に行はるゝ思想である。後者は共視野に更に擴げむと思はず、前者は其根本的提說を此特殊の場合に應用してゐる。一定の社會、一定の時期に於ける諸階級を判別せむとすれば、此客觀性の缺乏が明瞭となる(22)。

階級の經濟的見解以外、なほ社會的勢力一般に注目せざる階級概念の重要なるものに二種類ある。次に之を吟味したい。

六

階級概念の中心を社會的勢力以外に求むる見解にはなほ、職業の類似に着眼するものと、文化內容一般の類似に着眼するものとの二者がある。然れども、事實に於ける一々の學者の見解に就いて、共何れに屬するかを考ふるに當りては判別に苦しむ事少からず。今此二の見解の代表的なるものとしてはボオエエとシユモラアとの二人を擧ぐる。

ボオエエは階級を定義して云ふ。「階級同一の教育を受け、類似の環境の中に發育し、特に同一の職業に從事する人人の集團にして相集りて一の社會を構成する。其各の種類の特徴をなすものは其社會的機能にある。かくて『社會に特殊なる機能あるだけの特殊なる階級を數へる爭が出來る』(23)。Nin Overbergh の階級概念は餘り明瞭ではない、一方に於ては財產の有無大小が階級的區劃をなすと說きながら、他方に於ては、此區劃に應じてそれぞれの階級は、經濟的生產及び社會生活を指揮し遂行する」と云ふ機能を營む。而して此機能に應じて共間に體統が存立すると見る。從ひて半面に於て明に、職業を階級の中心的要素と考ふるものである。勿論私共は何故に、此所有の區劃が機能の區劃と相一致するかを知り得ない。ビウヒヤアの職業階級の說明も此場合十分なる論證を與へうるとは信じない(24)。マルクス說の解釋として、クウノヴが經濟的活動の種類を階級の本質として擧げたるのも、見方によりてはこの見解に屬せしむる事が出來る。たゞそれが經濟的生產に於ける機能のみに着眼したるを異なりとする。

社會の體統的區劃が職業の種類、又は社會的機能の種類と相應じたる事、決して稀なりとしない。印度のカスト制度が大體に於て職業を基礎となせるは云ふをまたず、アフリカの低級社會に於ける數多の効用貴族（アリストクラシイ・オブ・ユウテイリテイ）、及び封建制度に於ける身分の如き、皆職業と體統の關係との相伴へるを見る。然れども近代に入るほど、職業の同一と地位の同一との聯絡は破壞せられて居る。かくて、階級と職業とは共區劃に於て相平行すとすら云ひ難い。況や前者の本質を後者に覓むる事をや。かくて、ルネ・ヲルムスは云ふ。職業は社會の水平的區劃である階級はその垂直的區劃である。かつては此二者の相一致して、そ

の混同の許されたる時代もあつた。タルドもまた、ボオエエを以て階級と職業とを混同するものなりとなし、而し、階級の概念は吾人が社會内部に體統的關係を認めむとする本能的傾向に應ずるものなりと見る(25)。

此の如く、職業を以て階級概念の中心に置くものある傍、また文化的類似、云はゞ生活の殆どあらゆる方面に於ける類似を階級概念の要素として取入れむとするものがある。私はシユモラアの階級觀を此の如くに解したい。シユモラアが階級の形成の主要なる過程として分業を擧ぐる事、而して職業による體統の成立を力説し、從ひて一方より見れば之を以て職業に重心を置く所の階級概念と考へらるべき側面の存する事を否定せぬ。然れども、他方、階級そのものの分析に於てはそれが極めて多方面に亘る類似を包含するとなす。其見解によれば、階級は共職業仕事の様式、財産、教養、時としては政治的權力の類似に基きて形成せられたる團結である。而も此團結たる、共同の事件を處理せむとの目的によらず、其の種々なる點に於ける共通の意識の爲に、又社交の關係を保ち、且共通の利益の實現を追求せむが爲にする。各階級にありては、人々其教育、生活様式權力の分業等に於て相似るのみならず、其風俗をすら相同じとする。かくてシユモラアの考は階級は職業の分岐に基きて成立する(外に人種の差異、財産の差異をも階級の原因として擧げはするが)とは見るものゝ、階級そのものは此の如く、生活の極めて廣き方面に於ける差別的類似を意味する。私は屢々返したる理由により、階級の中核を社會的勢力の類似に覓める。勿論此類似が其副次時結果として、成員の思想、教養、趣味、生活標準、風俗慣習その他種々なる文化方面の類似を作へども、それは階級的區劃に取り決して本質的なるものに非ずと見る文化一般に於ける類似を階級の重心に置くものと解せらるゝ限り、シユモラの見解は階級の中核を捉へざるものと見なければならぬ。

私は最後に社會的勢力一般に於ける類似を以て階級の本質なりと見る一團の思想を檢しなければならぬ順序にまで進み來つた。

七

社會的勢力一般に於ける類似を以て階級を形成する差別的類似と見る事決して新なる見方に非ず、經濟的要素を偏重する唯物史觀論者、經濟學者の大部分を除いて云へば、社會科學特に社會學の研究者の殆どすべてが抱ける考であると云へる。たゞ過去の學者は其意味する所に對して此の如き意識的表明を與へさりしまでゞある。

社會的勢力一般に於ける類似を中心とする階級概念には少くとも二種のものがあり得る、其一は此類似を性質的に考ふるものにして、其には之を數量的即ち强弱的に考ふるものである。經濟的勢力の性質的類似に應ずる階級の種類を認むる立場がある以上、視界を經濟的以外一般の社會的勢力の上に及ぼし、其質的異同に基いて階級概念を構成し得ざる理由は無い樣に思はるたゞ事實上今までの學界に於て此種の階級概念として擧ぐべきものに顯著のものが見當らぬ。私が玆に勢力の性質的差異と云ふのは前述の如く、勢力そのものゝ内容に關せずして、その受取らるゝ方法に關する。而して、職業又は社會的機能の差異が階級の本質をなすと云ふ見解も、此仕事又は活動そのものが階級を意味するに非ずして、それが社會的勢力を受取る方法の差異を意味するが故に階級の本質と見るべしと解するならば、それは明に此種の階級概念に數ふべきである。又社會に閑散或は怠惰の階級と勞働の階級との對立、絞取支配の階級と被絞取被支配の階級との對立を認むる見方、これらもまた、怠惰、絞取等の仕方に於て得らるゝ社會的勢力をたゞ經濟的勢力に限局せしめざる限り、其中に數へ得る。然れども前述の如く、此見方は著しき代表者を有せず、たゞ私の議論の進行が之を考へしめたものに過ぎぬ。

階級は其根柢に於て社會的體統を意味する。ユウアルの言葉を借ればそれは堆積せられたる集團(groupes superposés les-uns aux autres)(20)である。而して社會的體統が社會的勢力の强弱によりて定まる以上、社會的勢力一般に於ける類似が階級と云ふ集團の差別的類似をなす事、最も明白なりと云はねばならぬ。單に經濟的勢力のみが階級の決定者に非ざる事に經濟學者の中にすら、之を認むる者稀ならず。一例としてフイリポヴイッチを擧げる。其者によれば『階級とは權力・聲望及び地位を標準に區別せる社會上の區別である。たゞ經濟上の事實が社會人心をの左右すること愈甚だしきに至るに從ひ、財産は社會上政治上著しく權勢の源となる、從ひて財産の多寡は亦階級の上下を決定する主要の原因となるけれども、財産そのものは必ずしも常に獨り階級の決定を左右するものではない』。體統又は上下の別を區別する社會的勢力として經濟的勢力以外如何なるものが認めらるべきかは極めて困難なる問題にして、私は別の機會に於てこれに詳論を加へた。此答解が如何樣に與へらるべきものにもせよ、經濟的勢力が唯一の決定者に非ざる事は極めて多くの學者によりて認められる。今前に述べたるシュモラアフイリポヴイッチ以外一二の例を擧げる。例へばルネ・ヲルムスニよれば此種の勢力として擧ぐべきものには pouvoir, rich-

case, talent consacré par la réputation, hérédité(consacré par le titre)の四がある。デルベまた、inégalité(權力の分配に於ける不平等を意味すると思ふ)richesse, mérite, naissance の四を數へる(27)。ド・ラ・グラスリイが貴族に軍事貴族、貨幣の貴族、知識貴族の三者を分ち、ツエンカアが同樣にして、Kriegsadel, Geldadel, Intelligenz-adel の三を區分したる考も、經濟的勢力以外にまた體統の決定者を認めたるものと思ふ。此種の例はなほ幾何にても增加し得られると信ずるが、私は今其必要を認めない。一方に於て經濟的勢力以外、かゝる雜多の社會的勢力を認め、他方に於て階級が此等の勢力によりて決定せらるゝ所の體統に於ける同水準の者の集團に外ならずと考ふるならば、階級の本質が一に社會的勢力の數量的、即ち強弱的類似に存するは當然の結論であらねばならぬ。

私は此の種の階級概念を例へば、ルネ・ヲルムスに見る。其見解によれば、職業は並列し階級は堆積する。『社會の職業的區分は云はゞ水平的にして、階級的區分は垂直的である。』『而して風習が同一の地位(rang)に立つと見る人々は其職業の如何に拘らず、同一の階級に屬する。此同一の地位と否とは何によりて決定せらるゝかと云ふに財産と威光(プレスイイジ)、の二者又は權力、財産技能、出生の四者である(此勢力の種類の敍述が場合によりて此の如く相違してゐる)(28)。タルドの階級概念また社會的體統を中心となし、而も財産以外の社會的勢力を認め交婚と交際とを階級的水準を判別すべき標徵と見る點に於て同一の見解に立つものと考へられ得る。また例へばユウアルも階級の重心を體統にありと見る。而もこの體統は何によりて決定せらるゝか。一は身分的特權である、二は財産であり、三は知的道德的二種の形の下に於ける文化である。而して此等の勢力(ユウアルは自ら avantages と云ふ表現を用ふる)に於て優秀なるものは自ら尊重の感情を伴ひこれが上下の體統を形成する(29)。

私は此種の見解の敍述を打切りたいと思ふ、第一、階級概念の中核を社會的勢力の差別的類似に覓むるは正しい。第二、然れども此類似を性質的類似と見る見解は、よし、近代社會史上に顯著なる種々の階級に就いて妥當なるが如しと雖も、階級の根本を忘れたるものである、これ又は前に述べたる所もあるが。此際附け加へて云ふ。第三、かの類似を社會的勢力の強弱的類似に覓むる見方は階級の根本を認めてはゐる。然れども、同一地位に屬すると見らるゝものが數多の階級をなせる事實を如何にして解釋する事を得るか。例へば同一の社會的地位を占むる資本家と地主、工場勞働者と小農、これらのものは異なれる階級をなすと見らるゝに拘はらず、社會的勢力の強さに於てそれぞ

れ相異なる譯ではない。

ルネ・ヲルムスは固より此點に着眼してゐる。然れども其見解は此困難の解決と階級意識と云ふ心理的因子の導入によりて求むるとしてゐる。然れども、少くもマルクス、エンゲルスの意味する階級意識と云ふものは階級相互間の經濟的利益の對立關係、階級內部間の利益の連帶的關係の意識を以て中心とする然れども、此意識の十分なる發達は今日の無産者にありてさへ認むべからざる所、それは所謂構成せられた階級」「それ自體の爲の階級」に於てのみ見得可き所にして、之によりて一般の階級を定義するに足らぬ、よしそれが可能なりとしても、階級意識は既に階級そのものを前提とする、階級概念の本質として階級意識を擧ぐるは求めむとするものを既に前提としたものである。ヲルムスは此階級意識に關して云ふ、これ即ち階級の定義より oute co sidérat on de l'eu et de profession を除斥する能はざる所以であると(30)。然れども此の如く、一方に地位又は體統の他方に職業、此二者によりて、階級が決定せられるとなすならば、階級の本質の統一的解釋は何に之を求むべきか

玆に於て私は最後に私見を述ぶき順序に進み來つた。私は次の如くに考へる。社會に於ける體統、上下の堆積を外にして階級は存在しない、而して、此體統を決定するものは社會的勢力一般の強弱である。從ひて根本的には階級が社會的勢力の一般の數量的類似を以て中心とする集團である事を認む。此強弱に於ける類似を外にして階級無し。然れども、私共が階級に於ける團結の要素を顧慮すると、常に此團結が同一地位の水準の上にありてもそれぞれ部分的中心を形づくりつゝ形成せられる。例へば今日の有産者にありても、一方地主と資本家、他方資本家中の金融的、工業的有産者はそれぞれ別の團結を作る。而して此等の部分的中心は社會的勢力の性質的類似によりて成立する性質的類似の看過すべからざる理由は此點にある。

さりとて、勢力の性質的類似のみに着目すべからざる理由は前に述べたる通りである。此等の部分的團結の階級たり得る所以はそれが同地位者の集團として、內部に強弱關係に於ける同等者の結合の要素を含むによる。かくて結局、階級は社會的勢力一般の類似によりて制約せられたる其數量的類似に基く所の集團でなければならぬ。社會的勢力の類似を基礎とする團結である事は常に失はれず、其本質をなす。而して、數量的類似により成立する集團を根本のものとする、其內部に同一水準に立ちながら性質的類似を共有するもの丶集團としての階級が含まれる。之を部分階級(Unterklassen(31) sub-class(32))とする。一の部分階級が更に高次の部分階級に分れる事は同樣にして理

解する事を得ると思ふ。

八

今日階級概念の決定に於て最も困難なる事情は階級に關する考へ方が大體に於て二に分れたる事である。一方には社會運動史的、社會主義的階級概念が行はれ、他方には社會科學的、特に社會學的階級概念が存立する。サンシモンを中心とする社會的思想が一方には流れてマルクスの經濟史觀を形成し、他方にはコントの社會學を形成したる事實に伴ひ、佛蘭西に本源を發したる社會階級の考が一方には爭鬪を本位としたる概念に成長し、他方には社會の區劃の靜觀の上に立つ概念と變化した。本來階級又はKlassenschichtungと云ふ事柄がこの方面をもつ。一方は其團結の方面にして、他方は其體統の方面である。社會運動に着眼する立場からは其團結特に他の階級に對立する爲の團結の方面が高調せられ、從ひて其階級概念は職業又は社會的機能の同一(或る意味に於ける「勢力の性質的類似」)を中心とするものとなつた。社會の組織の分析に專念する社會學(たとへばソレルの如きは之に有產者的の名稱を冠する事を忘れない、コント既に共產主義を極力否定する事によりて著しく有產者的である)にありては體統卽ち Schichtung の方面のみを重ずる從ひて、體統又は堆積ある社會に於て同地位を占むる人々の一團を階級と稱する事を忘れぬ、それは團結たり得ざるものではないが正面から見れば、上下による成員の區劃に外ならぬ。而して、階級の此見方は階級間の爭鬪に着眼せざる社會科學(社會學以外の)にまた廣く行はれる、統計學者、土俗學、文化史の方面に於て私は屢其顯著なる例を見る。此相分岐したる階級概念の中、たゞ一方のみを採りて他を棄つる事は極めて容易である。又は認識目的の差異と云ふ楯の蔭に二の各を庇護し、それぞれの存立を認める立論も亦不可能なりとせぬ。然れども此二者は必然時に相合一すべき運命を有せざるか。一方の階級概念はそれ自體の裡に他の階級概念と融合すべき性質を有せざるか。

團結の方面に着眼する見解の代表的たるものとしマルクス的階級概念を舉げる。然るに第一マルクス自身は他に對する階級と自己の爲の階級との區別を說く。而して、一の階級が自己の爲の階級たり得るが爲には政黨に構成せられなければならぬ、所謂階級意識を有しなければならぬ。然らざる時、それはたゞ他に對する階級たるに止まる。然らば、他に對する階級は如何なる程度の團結を成員の間に必要とするか。ハムマツハアによれば、それは階級的同情である、クウノヴによれば階級感情である、此見方の當否は姑く論外に置く。何れにせよ、

此二段の階級の區別はヘエゲルの辯證法的見方による。他に對する階級は存在に對する否定に當り、自己の爲の階級は否定の否定に當る。然れども此考は當然に reines Sein としての階級を豫想しなければならぬ。而してかゝる純存在としての階級は所謂階級感情を缺げる、云はゞ社會的部類としての階級の外にはない、私にはクウノウが此必然的歸結を許したるものゝ如くに思はれる。第二に考ふべき點は、マルクス、エンゲルスに於て、階級の考が二様になつてゐる事である。一方に於て、資本家、地主、勞働者が現代の三大階級をなすと云ひ、又は封建貴族、小市民、零細農等八の階級を認めてゐるが、他方に於てまたあらゆる時代を通じて（原始社會を除いて）絞取被絞取の階級を認めてゐる。前者に含まるゝ階級の間に一定の團結が含まれる事は想像するに難からぬ。然れども、所謂絞取階級（被絞取階級に就いて云ふも同じ）の間、常に必ず團結ありとは事實上認められず、またマルクス、エンゲルスの說かざる所である。從ひてそれは必然社會的部類、即ち社會成員の地位による區劃を意味するに外ならぬ。試に見よ、エンゲルスは絞取階級として a class freed from directly productive labour, which looks after the general affairs of society; the direction of labour, State business, law, science, art, etc. を說く(33)、これは勿論社會的部類以上を意味し得ない。

第三、階級概念に團結の要素を重ずると、これを社會の區劃として見るとの區別は、前者にありては全體社會の成員にして、階級に屬せざる人あり、後者にありてはかゝる部分なく、社會は當然に幾つかの階級に仕切り盡される。然るに、マルクス、エンゲルスにありては、社會が階級に區分せらると云ひ、社會の絞取、被絞取の二階級へ分離を說く。此見方は社會が階級に分ち盡さるゝ事を意味するもの、從ひて、社會的部類としての階級を前提とせるものと考へざるを得ぬ（團結を階級必要なる要素と見る時、例へば今日の知識階級と云はるゝものが階級に非ずとの考も成立つ）。

かゝる見方からすれば、マルクス的階級概念の立場から必然に所謂階級感情をも含まざる社會的部類としての階級が認められ豫想せられなければならぬ。而して、此社會的部類として階級に二種のものがあるべきである。一は地主、資本家と云ふが如く、勢力の性質的類似の範圍にして、他は絞取者又は有産者と云ふが如く、勢力の數量的又は强弱者類似の範圍である。勿論マルクス的階級概念は或は經濟的利益の共通、或は經濟的機能の共通と云ふが如く、性質的意味に解釋せらるべき根據がある。然れども、飽迄、階級の根柢は社會の體統、即ち階級的

區別（ディスティンクション）にある。勢力の性質的類似の着眼する限り、これは階級の根柢に觸れず。其基礎に於て、強弱に於ける類似の部類としての階級を認め、其區分をして力の性質的類似の部類を考ふる時、後者が其中に強弱の異同の要素を內含する事により一種の階級として許され得る。從ひてマルクスの立場は其必然の歸結として、一方社會的部類としての階級をも認めなければならず、他方、勢力の數量的類似による階級を許したる上、これに對する部分階級（ウンダアクラッセ）又は副次階級（サブクラス）としてのみ、其列擧したる地主、資本家等の階級を考へなければならぬ。勿論これはマルクスもエンゲルスも說かざりし所、然れども其立場をつき詰むればこゝまで推進まなければならぬと思ふ。

他方社會學的階級概念を考へる。これが體統的方面を中心とする事は前述の如くである。然れども、此立場をとる人も亦階級を社會の成員の集團（グルッペ）として說く事を忘れない。而して、集團の社會學的意義はそれが團結を含み、又は形成する點に存する。加之、それが社會の成員の單なる分類としてでは無く、理論構成の一手段としての階級概念を立せむとする限り、社會の進轉の中に活動せる勢力としての階級を捉へなければならず、其爲には團結の要素に着眼する事を忘れてはならぬ。然るに此同地位者の團結は專ら勢力の數量的に類似せるのみならず、性質的に類似せるもの丶間に行はれる。從ひて同一なる體統的水準に立てる集團としての階級の中にまた、か丶る性質的に類似せるものを、集團としての階級をば云はゞ部分階級として認めなければならぬ、更に高次の部分階級の認め得らる丶事は前述の如くである。

此の如く見來れば、今日全然相岐れたるが如くに見ゆる社會主義的、並びに社會學的階級概念は二者の立場を突きつめて行く限り、當然に相合一し得るものと思ふ。而して此相合一したる點こそは私の前に述べたる階級概念である。即ち、社會的勢力（社會主義的なる見方が經濟的勢力にのみ着眼する點は姑く別として）の數量的類似に基く集團としての階級、その內部に性質的類似に基く集團としての部分階級を共に認める立場である。而して、社會學的立場は前者をのみ、社會主義的立場は後者をのみ偏重する一面觀なりと思ふ。一方は社會の進轉に於て活動する團結の要素を看過し、他方は階級の根本を忘れたる憾がある。

此際問題となる事は社會勢力の類似の如何なる範圍を捉へて一の階級となすと見るべきかにある。これは私を自然に、階級に於ける團結の要素の問題に導く。

私は階級に於ける差別的類似の要素を分析したるが故に、眼を其團結の要素に轉じたいと思ふ。

ソレルは其著『マルキシズムの分解』に於て、所謂有產者的社會學者のun amoncellement de gens de même conditionとして階級的觀念又はユトピストの舊き階級觀念に對する其近代的概念を說く。それは國民的統一に類似せる統一を有せる所の生產者の社會である(34)。此場合　明に階級が組織又は階級意識による團結の要素を含む事を認め得る。ソレルとは遙に立場を異にする人人、例へばユウアルにありても、階級意識が重ぜられ又社會の他の部分よりの區分と云ふ觀念が高調せられる。例へば、米國にありては富貧の懸隔あるにも拘はらず、階級は存在しない、何故と云ふに、そこには階級意識が無い、從ひて一定の地位的類似を備へる人人が社會の全體に於て他の部分より異なれる一集團をなすとの意識を伴はないからである(35)。亦相似たる考例へばルネ・ユウベルに見る。階級とは何ぞや。それは全體より區分せられたる社會の一部分（morceau du monde qui se détache de l'ensemble）である、從ひて社會の全體より分化するに非ざれは形成せられない。而して、此分化は意識の事實の中に覺めらるべきであらう。『一の社會階級は感情である、表現である、集合意識の狀態である。』『階級は感情、信念欲望の全體に存する、此等のものは、一定勞働團體の『形成によりて表示せられる』(36)。

此等の見解の內容は決して明晰なるものと考へられ得ない。然れども此等の所謂近代的階級概念は階級意識を以てその骨子とする。階級意識の存せざる所、社會的勢力に於ける類似の部類ありとしても階級無しと見るのである。共產宣言に於て當時まだ無產者は階級たらずと云ふ、それは無產者の未だ組織せられず階級意識を有せざるが故である。前述の階級概念は大體に於て皆かゝる階級を意味するのであらう。然れども、社會科學的理論構成が更に廣義の階級概念を要求する事は前述の通りにしてかゝる狹義に限局する事に何等の利益ありとも感ぜられず、寧ろ。組織せられたる階級と、これに密接なる關係を保つ他の事象、即ちかゝる組織を生ぜしむる地盤との連絡を認め難からしむる恐れがある。現にマルクス、エンゲルスの階級概念にありても、これを自己の爲の階級と見る時、他に對する階級が之と共に含まれる而して私は前述の如く、最廣義に於て社會的部類としての階級をも認める。私の仕事は今、此社會的部類と組織せられたる階級との團結に於ける連續を明にするにある。

私は所謂階級意識の分析から出發する、クウノヴによれば、これが二の要素を含む。第一は其成員が社會の内部に於ての特

殊たる階級をなすとの意識である、第一は彼等が特殊の共通利益、而も他の階級のそれと相斥くる利益を有すると云ふ事の意識である(37)。私は思ふに、此共通利益が他の階級のそれと相對立すると云ふ事が此階級意識の眼目をなす。マルクスによれば階級が政黨に構成せられると云ふ事、それが組織を有すと云ふ事それが階級意識を有すと云ふ事、此三が全く相平行し、又は同一事實の各側面をなす。然れども私は此三者の必然的に不可離なる關係を保つ事を認め得ず。その中の階級意識を特に掲げて發達したる階級の骨子と見る。而して、社會の内部に於て他の部分から區分せられたる特殊の一階級を作るとの意識はかゝる利益の意識の反面をなすものであらう。此階級意識を伴ふに及びて階級の團結は其飽和點に達する。私はこれから複雜なる要素を差引く事によりて、更に稀薄なる團結を考へたい。同一階級の成員、即ち勢力の類似者相互の間に類似の親和が感ぜられる、勿論此類似の親和の念は利益の異なる共通、其他社會的勢力の同等、文化の諸方面に於ける類似に伴ふ親和である。而して、湧然ながらに、同地位のものを一集團として考ふる事亦自ら之に加はる。云はば一集團の意識に伴ふ類似の親和が此人々を團結せしむる。所謂階級感情、階級的同情、階級的相依の念と云ふ如きは皆之を指すものと解したい。私はなほ進みて、階級間の團結の更に稀薄なる姿を考へよう。これにありては、同地位の人々の間に個人對個人の親和はある、而も此親和は地位の同一を基として生ずる。然れども彼等は或る範圍を越えて、全國民又は一地方に於けるすべての同地位を一集團として考へ、これに對する親和を覺ゆるに至らない。云はゞ同地位の人々が個人より個人への結合によりて相繋がる。かくして漸次にかゝる人々の集團を社會的部類の中に包攝する。私はかく薄め來つた團結は次の如き段階を形成するを見る。

	I	II	III	VI
同地位者の個人的親和……	無	有	有	有
一集團の意識從ひて集團的同類親和、(階級感情)……	無	無	有	有
他の集團に對する利益對立の意識(階級意識)……	無	無	無	有
マルクスの用語	(純存在としての階級)		他に對する階級	自己の爲の階級
私の用語	社會的部類			(所謂近代的意義の階級)

第一段階は最狹義に於ける社會的部類にして、それは理論の上に考へらるゝのみ、事實に於て存在し得ざるものである。此團結の程度の差異はかゝる結合によりて成員の求むる

所(極めて廣義に於ける機能)のものの差異を伴ふ。ユウアルは階級を定義して共同の利益、類似によりて人々の作る結合にして、而も此結合は此利益を保護し、交驩の要求を充的乃至社會史的思想に於て階級概念を要するもの、一方に於ては社會の體統的組織を明にせむが爲であり、他方に於ては、此體統的區分に基き社會の進動に於て生きたる活動力の一をなせる團結の作用を明にせむが爲である、從ひて階級概念の中に、常に體統と團結との二要素が含まれる。而して、此勢力の數量的類似を共通する階級範圍の內部に性質的類似の一範圍を見定めむとせばそれは最早勢力の差等による事は出來ぬ。勢團結の要素を中心にして考へなければならぬ。而も此團結を中心として社會的部類としてのかゝる階級の範圍を定めむとすれば、個人對個人の結合、而もそれは勢力の類似に基く結合の特に稠密なる一區劃をとる外は無い。而して、此の如き區劃こそその內部の團結の進展に伴ひて、一集團の意識に包括せられ得べき範圍である。

此の如くにして、私は一の階級の範圍の決定を原則としては客觀的事實、特に團結の事實に基づける可きものと考へる。從ひて成員間の一集團の意識若しその存せざる場合には地位の同一に基く親和、交驩の稠密と云ふ事實がこれを決定するものなりと見る。この結果として數多の階級が包括的關係に於て並存すと云ふ事實が生じ得る。何となれば、金融的有產者は互に一團をなすとの意識を有する上に、工業的及び商業的有產者と共に亦資本家として一集團をなすと意識しうべく、又地位をも加へて有產者一般の一集團をなすとも意識し得よう。此等の一集團の意識が並存し得る限り、これに相應する數多の階級が相並び存在し得る。異質をなす場合にありては此決定が一義的に行はれ得よう。然れども事實に於て、それは連續的異質をなす、上級より最下級に至るまで微少の階級差異をなして相連なる。此際考察者は階級範圍の決定に關してたゞ二の事を成し得る。其一は自已の考察乃至研究の便宜に從ひて、任意に一定の範圍を定め、これを以て一の階級の分野と見る事である。勿論任意と云ふもそれは交際交婚の行はれ得ざるが如き範圍に亘る決定の許されざる事は言を俟たず。其二はかゝる明瞭なる決定を避けて他の方法を選む事である。勢力の連續的異質の存する場合にも、相互の交驩即ち個人的結合が幾つかの中心範圍を形成し此範圍に於て特に稠密頻繁な事がある、その時はこの中心部分を一の典型の意味に於て一の階級をなすと見、其上方の限界下方の限界を明確に決定せざる事、所謂他の方法は之を指すに外ならぬ。此二の中、後者はなほ、範圍の決定を或る程度まで客觀的事實の上に基けたりと云ひ得る。

社會的勢力の性質的類似に基く階級、云はば剛大的又は部分的階級の一々の範圍の決定に關しても全く同一の事を考へ得る此場合にも　原則として此範圍の決定權は客觀的事實そのものに與へられねばならぬ。而して、既に一集團としての意識を具へたる場合には、此集團と見られたる範圍が一階級の範圍を限る事云ふまでも無い。然れども、此一集團の意識の作はざる時に此問題が困難となる。然れども、私共が階級概念の構成を何故に必要とするかが此點をも決定してくれると思ふ。今日の社會科學勢力を均等なりと見る事の表現に外ならぬ。此客觀的事實に基きて私共は交婚交際等の關係に立つものを同一の階級に屬するを見る。

私は勢力の數量的類似に基く階級の範圍の決定に於て此類似を考察者の見方に委せず、客觀的標徵に從ふ。然れども如何なる範圍を一の階級と見るべきやに關しては尚殘れる問題がある。それは一の階級と見らるべき範圍をどこよりどこまでと限るかこれである。此點に就いても私は客觀的なる事實に決定權を與へる。然れどもこれに關しては單なる社會的部類としての階級(I II)と既に一集團としての意識を作へる階級(I.IV)とを區別し考へなければならぬ。後者にありては如何なる範圍が一階級をなすかと云ふ事は既に事實そのものゝ中に與へられて居る、即ち此成員の意識の中に一集團として考へらるゝ範圍即ちこれである。勿論、此一集團の意識と云ふものも多くの場合、決して明確なるものでは無い、今日の被絞取階級と云ひ、又は中等階級と云ひ征服國家の征服種族と云ふものは、云はゞ成員の側に於ける一集團の意識を伴へるものと見られるが、此意識そのものが極めて漠然たるものである事もあり、又他の階級との限界も甚だ不明瞭に考へられて居る。併しながら、かゝる事情は決して私の提言を否定するものとは思はれぬ。而して、一集團の意識を作はざる、云はゞ社會的部類としての階級にありては一階級の範圍の決定權も事實の中に之を握るものが無い。一集團の意識が存在ざせるが故に、其決定は自ら考察者自身に委せらるゝ事となる。勿論勢力の差異が集團的の可能である。タルドは既に此標準として交際と交婚との二者を擧げたるが、私の狭い知見の範圍よりすれば此問題に答解を與へたるものにビウヒヤア　マルクス　ヴェエバアがある。前者によれば財産階級は財産の多少が職業選擇の自由を制限する事により社會的職業階級を意味する、而して此階級内部にありては、相互の交際結婚が行はれ、又人々の間或は世代の間に職業の交換が行はれ得る(38)。後者によれば、社會階級と云ふは人々相互の間に又世代の間に立場又は地位の取替の可能であり又事實上にも一般に

行はるゝ範圍を云ふ。かくて內方、階級は同地位にある人々の集團を指して此等の人々の團體、卽ち階級團體（Klassenverbände）を示さず、從ひて私が前にあげたる社會的部類を意味する。他方、此地位の同一と云ふ事が種々の內容を意味し得るが相互に取替の可能にして又一般なる（Klassenlagen……, gewischen deren die Wechsel α. persönlich, β. in der Generationsfolge leicht möglich ist und typisch stattzufinden pflegt.）時にそれは社會階級的地位の同一を意味し、此同一なる人々が社會階級（soziale Klasse）をなす(39)。私は此等の見解の何れをも斥けずして採り入れ得ると思ふ。實に經濟的價値の場合に於て異質の財の間に比較の成立し得るもの、一に交換になるが如く、雜多の內容性質を有する社會的勢力間の比較は此交際交婚及び位置の取換によりて表現せられる。社會的勢力に於ける交換方程式或は交婚の方程式又は交際の方程式である。而して、交換は各人の見積る經濟的價値の均等の表現なるが如く此等三の特徵は成員相互の間に社會的たらむが爲なりと云ふ（pour défendre ces intérêts et satisfaire lesbesoins de fréquentation mutuelle）。私は此利益の保護と云ふ事を二に分析する。一は單に同一集團に屬する人々の利益を計らむとする事にして、二は利益の階級的對立を意識するが故に、他の階級の利益を破壞せんとする、云はゞ反抗的目的を到達する事である。

かくて前述の團結の各段階に應じて次の如き機能の各段階がある。

	I	II	III	IV
交驩の要求の充足	無	有	有	有
利益の增進	無	無	有	有
他の階級の利益の破壞	無	無	無	有

十

私はこれより翻りて前に殘されたる問題に立歸る。

階級に於ける團結と前述の如くに區分して考ふる時は第二の段階を最廣義に於ける階級、第四の段階を最も狹き意義に於ける階級而して第三の段階を其中間の意義に於けるものと考へる事が出來る。

殘されたる問題は社會的勢力の類似の如何なる範圍を捉へて一の階級をなすと見るべきかにあるが、これに關して決定的なるものは成員そのものゝ態度にある、云はゞ成員間に存する客觀的事實そのものゝ中にある。

先づ類似は何によりて判斷せらるゝかと云ふに、それは前述の如く交際と交婚とまた或學者によれば立場の交換かくて、包

括せられたる階級を部分階級と云ふならば、勢力の性質的類似に基く階級は常に部分階級である。加之、勢力の數量的類似にある階級　亦同様にして包括の關係に立ち得る。從ひて絞取者被絞取者と云ふが如き最も範圍の廣き階級に關しての外、其他すべての階級は互に或る立場より見れば部分階級にして或る立場より見れば包括的なる階級である。今までは説明の便宜に從ひ、性質的類似による階級、部分階級と云ひ他を單に階級と云ひ來つたのに過ぎぬ。これは一集團の意識を中心として説明したる事柄であるが此の意識を作はざる他の階級に、いつも同様なる包括的關係が云爲せられ得る。

十一

私が述べむと企てたる問題はなほ之に盡きたる譯ではない。たゞ紙數を費す事柄既に多く、私自身また執筆に倦みたるが故に、姑く、なほ取扱はむとして果さゞりし問題を列記し、以て後日の考察を期したい。

(1)社會的勢力の性質的類似による部類としての階級は勢力の數量的類似による部類としての階級の一區分たるに止らず、他の階級に跨り、從ひて一部階級として許すべからざるに非ずや。換言すれば　前者は勢力の數量的區劃と沒交渉のものにして、從ひて何等強弱的意義を有せざるものに非ずや。若し此點にして然り、かゝる意義を有せずと答へられるならば、私の立論は根柢から崩壞する。經濟的活動範圍の同一、又は機能の同一を中心として見たる階級は何等所得の大小と直接なる交渉を有せずと見たるクウノヴの見解の如きは其一例である。然れども私は少しも私の主張を疑ひ得ぬ。ロオリアの所謂所得の種類と程度との相關又は合一の考の如きは強く私見と支持する。若し、勢力の性質的類似にして其數量的類似と沒交渉ならば、前者の範圍は階級たり得ずと信ずる。此點が私の殘したる第一の問題である。

(2)階級の團結の考察はなほ進めらるべきである。階級には此社會的勢力の同一と云ふ紐帶以外、なほ（文化的類似は姑く別として）血縁、又は特權の同一と云ふ、如き特殊の紐帶が加へらるゝ事がある。これに應じて、其封鎖性が決定せられ、或はカスト或は身分をなす。これからカスト、身分との關係如何になほ殘されたる重要の問題である。

(3)その中にも、身分と階級との關係は複雜なる内容を有つ。身分は階級の一の形態なりと云ふ考もあり得ると共に、同一の身分のものは數多の階級を形成し、從ひて身分と階級とは平行せずと見る考もある。これらの何れが果して當を得たるか、これも重要なる問題たるを失はぬ。

4）中等階級、無產者、知識階級等と云ふ表現の意義如何。財產階級、所得階級等の表現が如何なる意味に於て許され得るやと云ふが如き問題

これらの問題に對しては前述の私見の系論又は其補完的部分として稍詳細なる答解を與へむとしたりしものである（一九二三、一一、二〇朝擱筆）

（1）社會學概論第二編第四章。

（2）Marx, Kapital, III, 2. S. 421.

（3）Kautsky, Klasseninteresse etc. Die Neue Zeit, Bd. II; Boudin, Theoretical System of Karl Marx, 192?, p. 27; Sombart, Der Moderne Kapitalismus, Bd. II. S. 1904.

（4）Cunow, Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts, und Staats theorie, II, 1922, 53; Huard, Les classes sociales, Revue Internationale de Sociologie, 1920, p. 565.

（5）Engels, Anti Dühring, S. 151.

（6）L. von Stein, System der Staatswissenschaft, Bd. II. 1856, S. 360 ff.; Grünfeld, Lorenz von Stein und die Gesellschaftslehre, 1910, S. 77ff.; Van Overbergh, La classe sociale, p. 192.

（7）Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, 1921, S. 177.

（8）Othmar Spann, Kurzgefasstes System der Gesellschaftslehre 1914. S. 119–120.

（9）Cunow, a. a. O. S. 62; Eduard Bernstein, Voraussetzungen des Marxismus, S. ff.; Karl Diehl, Die Diktatur des Proletariats etc., 1920, S. 8ff.

（10）Sombert, Sozialismus und Soziale Bewegung, 8 Aufl. 1920, S. 7–9.

（11）Sombart, der Mod. Kapitalismus, S. 1094.

（12）Cunow, a. a. O. S. 54.

（13）Kapital. III. 2. S. 354.

（14）Sorel, Décomposition du marxisme, 1910, p. 51.

（15）Huard, op. cit., 562; Cunow a. a. O. S. 53.

（16）Loria, Economic Synthesis, transl. by Paul. 1914, p. 148, et seq.

（17）Cunow, a. a O. S. 155; Marx. Kapital, III. 2, Marx, Ueber theorien der Mehrwert, III, S. 55.

（18）Huard, op., cit p. 563.

（19）Cunow, a. a. O. S. 52–53, 5.

（20）Sombart, Die Deutsche Volkswirtschaft in neunzehnten Jahrhundert, 3 Aufl. S. 445ff. ditto, Mod. Kapit. 4Aufl. II, S. 1094; ditto, Sozialismus etc., 9Aufl. S. 1 3.

（21）Kautsky, Klasseninteresse etc. Neue Zeit, Bd. II. S. 2?1ff.

（22）Huard, op. cit., p 569.

(23) Revue Internationale de Sociologie, 1903, p. 121.

(24) Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. 7Aufl. S. 345.

(25) René Worms, Philosophie des Sciences sociales, tome 3. p. 63; Tarde, Classes sociales, Rev. Int. de Sociologie, 1908, p. 125.

(26) Huard, op. cit. p. 570.

(27) Rev. Int. de Sociologie, 1903. p. 127 et seq.

(28) René Worms, op. cit., p. 68.

(29) Huard, op. cit., p. 570-572.

(30) René Worms, op. cit., p. 71-72.

(31) Cunow, a. a. O. S. 53ff.

(32) Loria, op. cit., p. 148 et seq.

(33) Engels, Socialism Scientific and Utopian, p. 78.

(34) Sorel, op. cit., p. 51.

(35) Huard, op. cit., p. 576.

(36) René Hubert, Organisation Syndicale des intellectuels, 1921, p. 70.

(37) Cunow, a. a. O. S. 65.

(38) Bücher, a. a. O. S. 345.

(39) Max Weber, a. a. O. S. 177-180.

マルクスとバクウニン

――社會主義と無政府主義――

大杉榮

一

どこの資本主義國家にでも、社會主義者や無政府主義者は、いつも氣違ひだとか、强盗だとか、人殺しだとか、又は其の國家自身が使つてゐるスパイだとか、宣傳される。其の敵の人格を民衆に疑はせるのは、政府にとつて、一番世話のないそして一番有効な方法だからだ。

ところが、此の政府的方法は、更に社會主義者によつても、いつも其の敵の無政府主義者に用ゐられる。しかも社會主義者は、資本主義者よりももつと政府主義的であるところから、資本主義者よりももつと惡辣に此の方法を用ゐる。

僕等はそれを、日本の社會主義運動史の第一頁に於て、既に見た。幸德が無政府主義を唱へ出して、多數の青年がそれに從つた時、社會主義の片山潜や西川光二郎は、幸德や堺を『買收されたと公言した。

ロシアのボルシエヰキ政府が今其の國内の無政府主義者に浴せかけてゐる惡名も、やはり此の『氣違ひ』であり、『强盗』であり、『人殺』であり、そして又『スパイ』であり『反革命運動者』である。山川菊榮が先きに本誌に發表した、エマ・ゴオルドマンに對する中傷の如きは、ボルシエヰキ政府の無政府主義者に對する態度を極めて忠實に飜譯したものだ。

そして此の方法は又、最近日本のボルシエヰキ共によつても、全力的に其の舊同志の無政府主義者に向けられてゐる。白色政府と之れによつて代らうとする將來の赤色政府との、同じ政府的手段による、協同戰線的黑化防止團が形つくられた譯だ。

由來、殘忍と陰險とは政府的思想のつき物である。其の敵を鐵と血とで默らして了ふのと、其の敵の思想を曲解して消化た

もいにして了ふのと、其の彼の人格を中傷して個人的信用をなくさして了うのとは、政府的思想のお得意の手段である。そしてその政府的思想の強いだけそれだけ、これらの手段は益々殘忍になり、益々陰險になる。

僕は今、世界の社會主義運動史の第一頁に溯つて、マルクスとバクウニンとの關係の中に、それを見出さうと思ふのだ。政府的思想は社會主義の傳統であり、從つて又政府的方法もやはり社會主義の傳統である。

二

一八四五年七月、バクウニンは其の革命的思想のためにドイツやスヰツルから逐はれて、始めてパリへ行つた。そこで彼れは、當時の最も進歩した有らゆる民主主義者と知合ひになつてプルウドンやマルクスとも始めて相知つた。

バクウニンはそれらの交友からいろんな影響を受けたのだが、殊に此のプルウドンとマルクスとからは最も大きな影響を受けた。そして彼れは、後年、此の二人を批評して次ぎのやうに云つてゐる。

『プルウドンは、古い理想主義の傳習を打ち破る事に全力を注いだのであるが、其の生涯はやはり矯正する事の出來ない理想主義者であつた。彼れは其の爪のさきまでもいつもメタフィジシアンであつた。彼れの大きな不仕合せは、曾つて自然科學を學ばず、從つて又其の方法を知らなかつた事である。彼れは彼れに本當の道を瞥見させる天才的本能を持つてゐた。しかしいつも其の理想主義の悪い癖に引きづられて、もとの誤謬の中に落ちて行つた。これがプルウドンの不斷の矛盾のもとだ。力強い天才と革命的思索家とが、いつも理想主義の幽靈と戰つてゐた。しかも曾つてそれに打勝つ事が出來ずに。』

『マルクスは、思想家としては、いゝ道にあつた。彼れは史上一切の政治的、宗教的、法律的進化が經濟的進化の原因ではなくつて結果だと云ふ事を、原則として立てた。これは大きな、そして實り多い思想だ。尤もそれは決して彼れが發明したのではない。他の多くの人々によつて既に部分的に瞥見され説明されてゐる思想だ。しかし、其の原則を確定してそれを其の全經濟學説の基礎とした名譽は、彼れの上に歸せられなければならない。』

「が、プルウドンは彼れよりも一層よく、自由を了解し又感得してゐた。プルウドンは、理論や哲學を云はないでも、革命家の本當の本能を持つてゐた。彼れは悪魔を崇めて無政府を唱へた。マルクスはプルウドンよりも、自由に就いてのもつと合理的な組織の上に、理論的に立つ事は出來るかも知れない。しかし

彼れには自由の本能がない。彼れは徹頭徹尾强權主義者だ。』

そしてバクウニンは猶、彼れ自身とマルクスとを比較して、次ぎのやうに云つてゐる。

『マルクスは、今でもやはりさうだが、當時は僕よりも餘程進んでゐた。餘程どころではない。僕とは較べものにならない程學者だつたのだ。僕は經濟學をちつとも知らなかつた。また形而上的抽象論からも拔け切つてゐなかつた。そして僕の社會主義はほんの本能的のものに過ぎなかつた。彼れは僕よりも若かたつのだが、(二人が會つたのはマルクスが二十六、バクウニンが三十の時だつた)既に無神論者であり、博識な唯物論者であり、又考深い社會主義者であつた。彼れが今日の其の學説の基礎を立てたのは此の時代だつたのだ。』

『我々は隨分よく合つた。何故なら、僕は彼れを、其の學問の故に、又いつも個人的虛榮心は混つてゐたがともかくも無產階級に對する熱心な且つ眞面目な其の努力の故に尊敬してゐた。そして彼れとの對話を貪るやうに求めた。それは、そこに卑劣な憎しみのはいつてゐない時には、いつも有益なそして才氣に充ちたものだつた。しかし悲しい事には、其の憎しみが餘りに屢々はいつて來た』

『が、我々の間には、隔てのない親しみと云ふものは決してなかつた。我々の氣質がそれを許さなかつたのだ。彼れは僕を感傷的理想主義者だと云つた。それは尤もだつた。僕は彼れを不實で危險な見え坊だと云つた。そしてそれもやはり尤もだつたのだ。』

實際、マルクスは其の學問を誇つて、非常に傲慢だつたものらしい。自分の天才の力を十分に意識して、其の會ふすべての人に自分の學説を强ひようとした。

アドレルは其の「ドイツに於ける社會民主主義の初期の歷史の中に、ロシアの著述家スネンコフの言葉を引いて、マルクスの此の態度を認めてゐる『彼れは絶對命令的の調子で話した。他人の少しの矛盾をも許すところがなかつた。同時に又彼れは自分の使命を感じて、自分は人々を支配して、人々に法律を規定するために生れたものだと考へてゐた。一言で云へば、彼れは民主的獨裁者の權化だつたのだ。

マルクスは又、『其の論敵に對しては何の遠慮會釋もなく、其の偉大な學識の故と、不幸にも又其の敵を攻擊する方法に無頓着な故とで』、其の論爭は實に恐ろしい程のものだつた。彼れには、罵詈讒謗のない論爭は絶對にする事が出來なかつた。そしていつも其の論爭のそとに出ては、事實の白を黑に變へて了つた。』

猶バクウニンは其のフランスの一同志アルベエル・リシアルに與へた手紙の中に、マルクスを『其の傳習的にも本能的にも、攪亂的の、陰謀的の、搾取的の、ブルジユワ的の』人間だと云つてゐるが、更にエンゲルスに就いても同様の事を云つてゐる。

『一八四五年頃、マルクスはドイツ共產主義者等の先頭に立つた。そして其の直ぐあとで、其の斷金の友エンゲルスと共に、ドイツ共產主義者卽ち强權的社會主義者の一秘密結社を創立した。此のエンゲルスは、マルクスと同じやうに學才があつて、彼れ程に博學ではなかつたが其の代りにもつと實際的だつた。そして政治的中傷、虛言や陰謀にはマルクスに劣らない程長けてゐた。』

三

一八四七年十一月、バクウニンは一八三〇年の最初のポオランド一揆を記念するポオランド人等の宴會に出て、そこで有名な大演說をやつた。

『ポオランド人とロシア人との和睦は、ニコラス皇帝の專制に對する其の協同の革命的運動によつて、始めて事實になるだらう。しかも此の革命は直ぐに來るだらう。そして又、ポオランド人とロシア人との此の和睦は、同時に、外國の羈絆の下にあるすべてのスラブ民族の解放を實らすだらう。』

バクウニンはスラブ人をもと〱最も自由な性質の民族だと考へてゐた。そしてドイツから輸入された專制政府の羈絆さへ打ち破れば、そこから自然に若い自由な民族が發達して出て、それが世界の文明の進歩のための非常な助けをすると信じてゐた。バクウニンのパン・スラヰズムと云ふはそれだ。そして彼れ自身も、『此のスラブ對ポオランドの問題は、一八四六年以來僕の固定思想となり、一八四八——四九年以來の僕の專門となつた　と云つてゐる。

然るにマルクスは、それと全く正反對の謂はゆるパン・ジエルマニズムを抱いてゐて、ドイツはロシアと結びついたので反動的になりそして此の影響が全ヨオロツパを專制に導くのだと主張してゐた。

そして此のパン・スラヰズムとパン・ジエルマニズムとは、バクウニンとマルクスとが後に純粹の國際的無產階級の革命を主張するようになつてからも、いつまでもやはり二人につき纏つて行つたやうだ。

が、それはとにかくとして、バクウニンは此の演說の結果、ロシヤ大使キスレフの要求によつて、フランスを追放されてブラツセルへ行つた。

キスレフはバクウニンに對する世間の同情をなくするために、彼れは其の使つてゐたスパイなのだが、やり方が少し激しすぎるので免職したのだ、と云ふうはさを擴めさせた。そしてフランスの内務大臣デュシヤテル伯爵も、貴族院での質問に對して、それを裏書するやうな答辯をした。

ブラッセルにはマルクスもゐた。彼れも一八四五年以來フランスを逐はれてゐたのだ。

バクウニンはそこから其の一同志のヘルウェに手紙を送つて、そこでの彼自身とマルクスとの交渉に就いて語つてゐる。

『マルクスとエンゲルスとが——殊にマルクスは——こゝでも其のいつもの悪事をやつてゐる。虚榮、奸佞、悪口、理論の高言と實行の憶病、生命や活動や實質を論じて、其の生命や活動や實質のまるでない事。文學好きの勞働者や雄辯な勞働者に對するヘドの出さうな手練手管。フオイエルをブルジユワだと罵つてゐる事。ブルジユワ以外の何人でもない人間共が他人に對して此のブルジユワと云ふ言葉を飽かず繰返してゐる事。一言で云へば、ウソとバカと、バカとウソ。そんな人間の間では自由な呼吸も出來ない。で、僕は彼等の共産主義勞働者同盟にはいらず、又彼等とは何事も一緒にしたくないと云ふ事を明白に宣言した。』

一八四八年、二月革命の結果フランスに共和制が布かれて、再びフランスの門戸がバクウニンに開かれた。彼れは急いでパリに歸つた。が、直ぐに又彼れは、ベルリンやウヰンナに續々として革命的一揆叛亂の起るのを聞いて、四月に先づドイツへ行つて、そしてそこからポオランドの革命運動に加はらうとした。

そして此時にも、又バクウニンに對する『買收』のうはさが立てられた。それは當時のフランスの勞働大臣フロコンが、若しフランスにバクウニンのやうな男が三百人もゐたら、とても其の國を無事に治める事が出來ないと云ふところから、ドイツで革命を起すと云ふ條件で、フランス人としての旅行券と三千フランを持たして、フランスから逐ひ拂つたのだと云ふのだ。

バクウニンは其の道でコロンに寄つた。そこでは、マルクスとエンゲルスとが『新ライン新聞』を創めようとしてゐた。そしてちようど其時は、パリのドイツ民主同盟がバアデンの大公領で一揆を企てゝ、それが慘敗に終つた直ぐあとだつた。此の同盟にはバクウニンの友人のヘルウエがはいつてゐた。マルクスは此の一揆に就いて猛烈にヘルウエを攻撃した。バクウニンは其の友人を擁護した。そして其のために遂にバクウニンとマ

ルクスとは絶交して了つた。

其後バクウニンは其の當時の事を書いてから云つてゐる。

『此の問題に就いては、私は今之れを考へて、正直に云ふが。マルクスやエンゲルスの方が尤もだつたのだ。彼等の一般の情勢を僕よりもよく判斷してゐた。が、彼等は其の攻撃のくせである餘りの無遠慮さで、ヘルウエを攻撃した。で、私は彼等に對して、そこにゐない友人のために熱心に辯護したのだ。そしてそれから我々の衝突が起つたのだ。』

それからバクウニンは、ベルリンへ行き、ブレスラウへ行き更にプラアグへ行つて、そこのスラブ人大會で民主主義と革命との宣傳をやり、又そこの直ぐ鎭壓された一揆運動にも加はつた。そして又ブレスラウに歸つた。

バクウニンの此のブレスラウ滯在の間に、『新ライン新聞』紙上にパリ通信として次ぎのやうな記事が載つた。

『此のポオランド一揆に就いて、我々から斷言するものがあるジョルジ・サンはこゝから追放されたロシア人ミシエル・バクウニンをひどく各地に陷れる文書を持つてゐる。それには、彼れは新しく雇入れられたロシアの一スパイで、そして彼れは最近の不幸なポオランド人等の捕縛の主役を勤めてゐると書いてある。ジョルジ・サンは此の文書を其の友人の或者等に見せた』

バクウニンは直ぐ一文を書いて此の中傷の反駁をした。それは先づブレスラウの一新聞に發表されて、更に『新ライン新聞』にも轉載された。そしてバクウニンは猶、ジョルジ・サンにも手紙を送つて、彼女の名がそんな事に使はれた事に就いての説明を求めた。

ジョルジ・サンは直ぐ其の返事を『新ライン新聞』の主筆に送つた。

『あなたの通信員が報告した事實は全く間違ひです。私は嘗つて、あなたがバクウニンに對して求めようとしてゐる風説の何んの證據をも持つてゐた事がありません。私はあの人の性格や主張の公明に就いて少しでも疑ひを持つた事がありません。此の手紙は直ぐあなたの新聞に載せて下さるよう、私はあなたの名譽と良心とに訴へます。』

マルクスは此の手紙を新聞に載せた。そして同時に、彼れがパリ通信員の讒謗を發表した事に就いて、次ぎのやうな説明をした。

『斯くの如くにして我々は、公人を嚴重に監視すると云ふ、新聞の義務を果したのだ。そして同時に又我々は、それによつて實際パリの或る團體では抱かれてゐた疑ひを晴らす機會を、バクウニンに與へたのだ』

其の翌月、バクウニンはベルリンでマルクスと會つた。そしてとにかく仲直りした。其後バクウニンは此の事に就いてかう云つてゐる。

『二人は共通の友人等がとう／＼我々を握手させて了つた。そして其時、戯談半分の妙な話しの間に、マルクスは僕にかう云つた。今僕は非常によく訓練された共産黨の秘密結社を率ゐてゐるんだがね。で、僕が其の黨員の一人にバクウニンを殺して來いと云へば、そいつは直ぐ君をやつつけて了ふんだぜ。此の話の後、我々は一八六四年まで合はなかつた。』

マルクスが一八四八年に『戯談半分』に云つた此の事は、それから二十四年後にこんどは眞面目に實行されようとした。第一インタナショナルの中で、無政府主義者間の反對がマルクスの行はうとした個人的支配の邪魔になつた時、彼れは全くの精神的暗殺でもつてバクウニンをやつつけて了はうとしたのであつた。が、其の事は又あとで云はう。

當時ライプツイヒでバクウニンと會つた、マルクスやバクウニンの先輩のアルノルド・ルウゲに據ると、バクウニンは非常な苦心をしてロシアで一揆を起す資金を漸く手に入れた。そして今彼れがブレスラウへ行くのも、ロシアの國境の近くにゐて、其の一揆を起す準備のためだつたのだ。』

そして「バクウニンはそこで多くの人々と關係を結んだ。彼は其の才智と其の愛すべき性格とから、皆んなに敬愛されてゐた。彼れは其の計畫した目的のために、多くのロシア人を其の周圍に集めた。彼れは又同じやうにしてチェク人とも聯絡を結んだ。そして種々のスラブ民族が互に了解するように、スラブ人の大會をプラアグで開く事にきめた。』

此の大會と其の直ぐあとで起つた一揆とに就いては、先きにちよつと云つて置いた。

『ボヘミアの政治』の著者ヤコブ・マリイに據るに、此の一揆が起つて、兵士等が街路に集まり出した時、バクウニンや其他の大會々員の多くのポオランド人が泊つてゐた青年ホテルの窓から盛んに銃聲が起つた。そして其後秘密の一揆政府が設けられてゐた事が分つた。そこには、バクウニンや其の黨派の者等が陣取つてゐて、机の上にプラアグの地圖をひろげて、其の一揆を續ける命令を出してゐた。』

此の一揆から漸く身を以て遁れたバクウニンは、其後ドイツのあちこちに隱れて、翌年即ち一八四九年四月に、ライプチヒのチェク學生間の間に現はれた。そしてボヘミアの一揆を準備しつゝ、『スラブ人に與ふ』と云ふ一小冊子を書いた。

四

此の小冊子の中で、バクウニンは其の當時の彼れの思想を明かにした。それはスラブの革命主義者とハンガリイやドイツやイタリイの革命主義者とを結合して、ロシヤ帝國とオオスタリイ帝國とプロシア王國との三專制君主國を倒し、かくして解放されたスラブ諸民族の自由な聯合を組織すると云ふのだ。

マルクスはそれを讀んで、『バクウニンは我々の友人だ。しかしそれは彼れの小冊子を批評する事を我々に妨げないであらう』と云つて、其の「新ライン新聞」に批評を書いた。

『ポオランド人とロシア人とのほかは、そして恐らくは又トルコのスラブ人のほかは、どのスラブ人にも將來はない。それは他の一切のスラブ人には、獨立と活力との歴史的、地理的、政治的、及び産業的の重要條件がないと云ふ單純な理由からだ。』

此のスラブ問題に對するマルクスと彼れとの意見の相異に就いては、一八七一年にバクウニンがかう云つてゐる。

『一八四八年には、我々の意見が違つてゐた。が、理屈は僕の方によりも彼れの方に多くあつたのだ。しかし次ぎの一點に確かに僕の方に理屈があつた。僕はスラブ人としてドイツの桎梏からスラブ民族を解放したいと思つた。然るにマルクスはドイツの愛國者として、ドイツの桎梏から自分を解放しようとするスラブ人の權利を認めなかつた。今でもやはり彼れはそれを認めてゐない。彼れは、今でもまださうだが、ドイツ人はスラブ人を文明化すべき、即ち否でも應でもドイツ化すべき天職を持つてゐると考へてゐる。』

バクウニンは其のパン・スラキズムの實行のために、ドイツの民主主義者等と一緒にスラブ民主主義者同盟を創つて、自らドレスデン防禦の指揮に當つた。

此のドレスデン防禦と云ふのは、一八四九年五月三日に爆發した民衆の一揆で、フランクフオルト議會が可決したドイツ帝國憲法をサクソン王が拒絶した事から起つたものであつた。翌日王は逃亡して、假政府が出來た。そして叛徒等は五日間ドレスデンの主人となつてゐた。

四月の中頃に、バクウニンはライプツイヒから此のドレスデンに來て、叛徒の首領の一人となり、プロシア軍の攻撃に對する最も有力な防禦方法を講じてゐたのだつた。

バクウニンの偉大な風采とロシアの革命家だと云ふ事が、民衆の注意を特に彼れの上に引いた。そして直ぐに彼れの身邊にいろんなうはさが擴まつた。其の中には、ドレスデンぢうに防禦の火を放つたのは彼れ一人でやつたのだと云ふやうなうはさもあつた。或人は又彼れを「全革命の魂其者だ」と云つたそして彼れは實に『泣く兒を默らす』程の勢だつた。

バクウニンは其の革命的本能から、此の一揆がもつと大きく擴がるものと思つた。そして此の一揆の、殆んど獨裁者と云ふやうな、重要な役目を勤めた

五月八日、ライプツイヒの代議員等の前で、バクウニンは此のドレスデン防禦の全ヨオロッパのなかの價値に就いて演說した。そして其日から、ステフワン・ボルンと云ふ若い活版職工が叛軍の司令官となつた。ボルンは其の前年に、アルバイテルプリウデルンク（勞友會）と云ふドイツ最初の一般的勞働者團體を組織したのであつた。

翌九日、叛軍は優勢な敵軍の來襲に遭つて、フライベルヒへ退却した。バクウニンは其の途で、ボルンを說いて、猶彼れに殘つてゐる叛徒等と共に、此のボヘミヤの土地で新しい一揆を起さうとした。が、ボルンはそれを拒絕して、其の軍隊を解散した。そしてバクウニンは假政府のホイプネルや音樂家のリヒアルト・ワグネルと一緒にヘムニツの方へ落て行つた。九日から十日にかけての夜の間に、武裝した市民等がホイプネルとバクウニンとを捕へて、プロシア軍に引渡した。ワグネルは其の妹の家にかくれて漸く逃げおうせた。

ドレスデンでのバクウニンの行動は、實に斷乎たる一戰士としての、又烱眼な一首領としての行動であつた。そして、そこで彼れは非常な名聲を博して、其の敵ですらもそれを拒む事が出來なかつた』とヘルツエンが云つてゐる如く、さすがのマルクスもそれを認めない譯に行かなかつた。マルクスは「ニユウヨルク・デエリイ・トリビユン」に連載した『ドイツに於ける革命と反革命』の一章の中で、『叛徒等は殆んど全く附近の工場地方の勞働者ばかりだつた。そして彼等はミシエル・バクウニンと云ふロシアの亡命者に、才能のあるそして冷靜な一首領を見出したのであつた』と云つてゐる。

かくしてバクウニンは、ドイツで死刑の宣告を受け、更にオオスタリイで死刑の宣告を受けて、遂にロシア政府に引渡され前後十三ケ年の牢獄と追放との後に、一八六一年六月シベリアから逃亡して。十二月にロンドンに着いた。

そして直ぐ又彼れはポオランド一揆を計畫して、六三年二月其の一揆の勃發と共にロンドンを去つた。が、其の首領等の無能と不和とは事ごとに失敗を招しめて、バクウニンは再び又ロンドンに歸つた。そして直ぐに又、フイレンツエへ出掛け、翌年更にそこからスエデンへ行つて、ロンドンとパリとを經て又イタリイへ歸つた。其時彼れは、ロンドンではマルクスに會ひ、パリでは又プルウドンに會つた。

バクウニンはロンドンでのマルクスとの此の會見に就いて、

自ら次ぎのやうに語つてゐる。

先きにバクウニンがシユルツセルブルグと牢獄にゐた間に、又マルクス等の社會主義者は、バクウニンはロシアのスパイだと云ふ例の中傷を蒸し返した。マルクスは其の辯解のためにバクウニンを訪ねたのであつた。

『ヘルツエンの云ふ所に據ると、其後インタナシヨナルとの主なる創立者の一人となり、そして僕がいつも一大學才をもつたしかも専ら勞働の解放と云ふ一大事に身を獻げた人として見てゐたカアル・マルクスが、此の中傷に大いに與がつてゐたのだ。が僕は大してそれを驚きもしなかつた。僕は僕の過去の經驗から何故なら僕は彼れを一八四五年以來知つてゐるのだ、かう云ふ事を知つてゐた。僕がいつも其の大きな才能を認めて來た、そして今後もきつとそれを認めて行くだらう此の有名なドイツ社會主義者は、しかし其の性格の中に、人道と正義との眞面目なそして、熱心な、主張者に見るよりも、寧ろドイツの諸新聞に通信するユデアの文士に見るやうな、或る性質を持つてゐる。で、僕は、一八六二年にロンドンに着いた時にも、彼れとの交際を新しくする事は勿論望ましくないので、彼れを訪る事もしなかつた。僕が、一八六四年に、僕がロンドンを通過した時、彼れは自分で私を訪ねて來た。そして彼れが決して、直接にも間接にも、僕に對する中傷に何等與からなかつた事を私に斷言した。そして彼れ自身も其の中傷を實に怪しからんと云つてゐた。僕はそれを信じなければならなかつた。』

バクウニンはマルクスが其の創設しようとするインタナシヨナルへの加盟を勸告したのにも拘らずそれを拒絶して、其年イタリイで最初の無政府主義團體である社會主義革命家同盟と云ふ秘密結社を組織した。

そしてマルクスの政府的方法は、後にバクウニンがそれに加盟した此のインタナシヨナルの中で、其の極に達したのであつた。

精神分析と群集心理

米田庄太郎

（一）緒言

今現代は群集の時代と見做さる可きか又は公衆の時代と見做さる可きかと云ふ問題は、余は拙著「現代人心理と現代文明」の中に、少しく論じて置いたから、此處に繰り返して論述することを避けたいと思ふが、何れにしても現代文明國に於ては、交通運輸の機關の著しき發達や、大都市の前代未曾有の大發達や、其他現代生活の諸條件は、現代人をして群集的に考へ、感じ、行動する場合を、實際上大に增加して居ることは、疑はれない目前の事實である。而して我國も近來著しく現代化するにつれて、又種々の方面に於て群集的活動は大に增加し、且つ盛んになつて來た。されば群集心理を科學的に研究して、其の眞相や法則をよく理解することは、實際的に甚だ肝要であり、隨ふて又夫れは現代社會學の重要なる一任務であると思はれる。而して今や群集心理の研究に、フロイド心理學の原理を應用して、其の新しき一發展を圖らんとする傾向は、著しく現はれて來たのであるが、然らば此の傾向は群集心理研究の發達上、如何なる結果を齎らすであらうか。此の傾向によりて群集心理の研究は、從來の方針によりも、眞に一層勝れた、又深い發達をなすであらうか。余は本論文に於て右の問題を、社會心理學の發達全體の上から考察して、少しく論述して見たいと思ふのである。詳しい事は到底一論文に於て、論じ盡くされ得るものでないが、假令簡單にせよ、此の問題に關して特に重要と思はれる方面は、此處に出來るだけ包括的に論述することに努めたい。

（二）今日の社會學上から見たるフロイド説の重要原理

墺太利の神經病學精神病學の大家ジグムント、フロイド氏が自から精神分析と命名せる、同氏獨得の方法を以て行なつた心理學的研究、即ち同氏自から深奥心理學（Tiefenpsychologie）と稱するものは、近來種々の學問の研究に應用されて、豫期されなかつた種々なる結果を齎らして居るが、社會學者間にありても亦、之を批判的に考察し社會學の研究に應用して、以て斯學の一進歩を圖らんとする人々は、殊に新進な若い社會學者の間に、今や續々現はれて來て居るので、吾人は確かに右の傾向を以て、社會學界に於ける晩近の一新傾向と見做すことが出來るのである。併し此處に注意すべきは、近來社會學者がフロイド氏の心理學說を、批判的に應用しようとして來たのは、決して同氏の心理學說が大に流行して、他の諸學問に於て其の應用を試みて居るから、社會學者も流行に驅られて、之を試みて見ようと云ふが如き、輕薄な動機からでないので、夫れには現代社會學の發達史上、深い理由があると云ふことである。

フロイド氏の說が神經病學者、精神病學者の間にありても、大に注意を惹起して來たのは、千九百十年代に入てからであると思ふが、然るに現代社會學の發達を、よく注意して考察すると、第十九世紀の終り頃詳しく云へば千八百九十年代に入りてから、一の重大なる發達方針となつて來た心理學的或は社會心理學的方針に於ては、今日フロイド說の如きものを大體上受け容れ、或は少くも之れに好意を表する素質とか、傾向とか云ふ可きものが、始めから具つて居ることが、發見されるのである。而して此の事を明らかにすることによりて、此處にフロイド說を批判的に應用せんとする傾向が、近來社會學者に起り來れる深い理由が理解されるのである。併し此の事を述べる前に、先づ今日の社會學上から見て、フロイド說の如何なる原理が、特に重要視されて居るか、又重要視さる可きかを、簡單に述べて置きたいと思ふ。

夫れ歐米諸國に於ても、殊に我國に於ては、フロイド說とか精神分析とか云へば、通俗的には人間生活の一切の現象を、結局性慾に還元して解釋せんとするものの如くに解されて居る樣である。併し若し夫れがフロイド說の眞髓であるとするならば、フロイド說は今日の社會學者にとりて、毫も新しいものでない。否な是れまでの社會學者中には、フロイド氏以上に、性慾と食慾とを以て、一切の社會現象を徹底的に說明せんとせる人々があつたとも云ひ得られる。併し今日の社會學者は一般に、如何に重要なる本能にせよ、只其の一二を以て人生の一切の現象を說明せんとするが如き方針を、甚だ偏局なものとして、又到底正當に或は健實に、社會現象の全體を說明し得るも

のでないとして、大に排斥して居るのである。余も其の一人である。余は一般の社會學者に比すれば、比較的により多く性慾を重要視して居るかも知れぬ。しかし決して性慾を過重するのでも、亦主として性慾の作用によりて、社會現象を說明せんとするものでもないものである。然らば今日の社會學上から見て、フロイド說の如何なる原理を、重要視するのであるか。余は是れより右の見地から見て、フロイド說の重要原理と思はれるものを簡單に說述することゝする。

却說余はフロイド心理說に於て、一般的理論社會學上から見て特に重要視さる可き主要思想は、大體上左の如きものであると考へるのである。

(1)人間の行動中で、意識的動機から生起するものは、比較的に小數にして、其の大多數は無意識的心理過程から、生起するものである。尙ほ意識的動機から起る比較的に小數の行動にありても、深く探究すると、其の意識的動機なるものの多くは、無意識的心理過程の影響によりて、根本的に決定されて居ることが發見される。要するに人間の行動は、根本的には主として、無意識的心理過程或は無意識的心意の過程によつて決定されるのである。

(2)無意識的心理過程は、意識から追ひ出されて無意識の中に押し込まれた或は抑壓されたる願望或は衝動から成り立つものである。但しフロイド氏の願望（Wunsch）と云ふは、甚だ廣義のものにして、普通に願望と稱せられるの外に、衝動、傾向、慾望、志向、態度なぞと稱せられるのをも、總て含んで居ると思はれる。

(3)意識から追ひ出されて、無意識の中に抑壓される願望は、決して無意識の中に消滅するのでも、亦其の中に沈靜して居るものでなく、常に意識の中に進入しよう。或は押し上ろうと努力して居る。然るに意識には監視者とか、檢閱者とか云ふ可きもの（Zensur）があつて、無意識中に抑壓されて居る願望が、意識の上に登ろう、登ろうとするのを、極力防止しようとする。そこで檢閱者と抑壓されたる願望とが、絕へず相爭ふて居るのである。而して何かの理由によりて檢閱者の力が弱はると、抑壓されたる願望が其の儘に意識に登つて來るが、併し檢閱者の力が弱らないと、抑壓されたる願望は變裝して、檢閱者の目をくらまし、意識の上に登つてくる。尙ほ兩者の間に屢々妥協が行はれ、抑壓されたる願望が、或程度まで形を變じて意識に現はれてくる。

(4)併し其の意識から追ひ出され無意識の中に抑壓される願望

或は衝動或は事柄と云ふは如何なるものであるか、換言すれば何故に、或願望、或衝動、或事柄は、意識から追ひ出されて、無意識中に抑壓されるのであるか。夫れはつまり人々が、其等の願望或は衝動或は事柄が、意識の上に有るのは、非難す可きであるとか、恥づ可きであるとか、苦痛であるとか、苦痛な經驗を憶ひ起させるとか、云ふが如き理由によるのである　然らば人々は如何なる願望或は衝動を、非難す可きもの、或は恥づ可きものと、考へ又は感ずるかと云ふに、夫れは其の人の屬する文化の階段或は類型によりて、色々異なつてくる。而して文化の階段或は類型が高まるほど、之れに屬する人々が非難す可きものとか恥づ可きものとか感じ、或は考へる願望或は衝動は增加してくる。かくて文化が高まるほど、人間の無意識的心意の內容、或は無意識的心理過程の種類は、增加してくるのである。然るに性慾は人間の有する、最とも强大なる衝動或は願望の一にして、しかも文化の發達するほど、種々の關係から益々抑壓されてくるのであるから、現代人の無意識的心意の內容に於て、或は其の抑壓されて居る衝動或は願望中にて、性慾に關するものは、大なる部分を占めて居るのである。

(5)フロイド氏は右に述べし如く、抑壓されて居る衝動或は願望として、性慾或は性的衝動を甚だ重要視するのみならず、更に人間生活一般の原動力として、大に之を重要視して居る。而して同氏は汎性慾說(Pansexualismus)を唱道するものの如くに、云ひ傳へられて居る　併し夫れに就ては、同氏が性慾或は性的衝動或は性的愛と稱して居るものの眞義を、よく理解することが肝要である。そこで此處に同氏の最近一著作によりて、同氏の性慾或は性的衝動と稱するものの眞義を、簡單に說述して置く。

今フロイド氏の述ぶる處によれば、吾人が愛として包括し得る總てのものに關する衝動の、分量的大さとして考へられるエネルギーが、即ちリビド(Libido)である　而して吾人によりて愛と稱せらるるものの中核をなすものは、世人が普通に戀愛と稱し、又詩人が讃美する處のもの、即ち兩性和合の目的を具有する性的愛である。併し其の外に愛の名を與へられる何れのものも、即ち一方に於ては自己愛他方に於ては親子愛、友愛、及び一般的人間愛も、更に又具體的事物及び抽象的觀念に己を捧げることとすらも、戀愛或は性的愛から切り離して考へらる可きものでないと思ふ。而して吾人が此の如くに考へることの正當なる理由は、精

神分析的研究が總て愛と稱せられる其等の諸欲求は兩性を性的和合に押し進めると同一の衝動昂奮の表現であることを、吾人に教へたと云ふ事實に於いて、認められるのである。但し兩性を性的和合に押し進める其等の衝動昂奮は、他の關係に於ては實に此の性的目的から押し遂けられ、或は此の性的目的が達せられることに於て中止されるが、しかも、其等の場合に於ても尙ほ、其の同一性（自己犧牲、近づかんとする努力）を明かに固持するだけ、其の原本的本質を常に充分に保存するのである。

されば、獨逸語が、愛と云ふ語を種々樣々なる場合に適用することに於て、全然正當なる一の包括觀念を立てゝ居るので、吾人は又かゝる包括的な意味の愛と云ふ觀念を、吾人の科學的研究及び叙述の根抵に置くを、最善の方法と考へるのである、併し精神分析が、右の如くに考へることによつて、恰も一大惡事をなし始めたかの如くに、世人の憤怒を招いた。しかも精神分析が此の如くに「擴大された」意味にて愛を解することは、寧も新奇なことではないので、哲學者プラトーの「エーロス」は、其の由來、作業、及び性的愛との關係に於て、精神分析の愛力（ーベスクラフト）、卽ちリビドーと、完全に合致するのである。又使徒ポーロは哥林多書に於て、何物よりも以上に愛を讃美して居るが、其の愛なるものは矢張り「擴大された」意味のものであることは、明らかである。而して今其等の諸般の愛衝動（ーベストリー）は精神分析に於ては、一層より適切に、又其由來からして性的衝動或は性慾（exualtriebe）と稱せられるのである

(6) フロイド氏の願望の概念を精練すれば、夫れを以て一切の社會現象の原動力と認めることが出來る

今フロイド說の主要思想は何であるかと云ふ問題に就ては、色々異見がある。又フロイド派に屬すると認められる人々の間にありても、何れの思想は原理を以て、フロイド說の主要思想或は主要原理と認む可きかと云ふ問題に就ては、意見は一致して居る樣であり、更に其等の人々の中には、フロイド自身の說に種々改變を加へて居る人々もある、されば余は上に述べし事を以て、フロイド說其物の眞髓であるとか、主要なる根本思想であるとか云へば、直ぐに異論が起ろうと思ふが、併し余は決してそう云ふ意味で、上に述べし事を以て、フロイド說の眞髓であるとも、主要なる根本思想であるとも云ふのではない。只今日の理論社會學上から見て、フロイド說に於て特に重要視さるべき根本思想は、何であるかと云へば、夫れは上に述べしが如きものであると、云ふだけである。

先づ上に述べし如く、今日の理論社會學上から見て、フロイド說の重要原理と認む可きものは、何であるかと見定めて置いて、夫れより今日社會學者間に、フロイド說を批評的に受け容れんとする傾向の起り來れは、決して偶然ではないので、現代社會學の主要方針たる心理學的方針或は社會心理學的方針は、其の發達の始めからして、今日フロイド說の如きものを受け容れる素質或は傾向を共有して居ることを、先づ該方針の發達を考察することによりて、究明して見たいと思ふ。

（三）現代社會學に於ける心理學的方針とフロイド說

今日の社會學に於て、重要なる一方針となつて居る心理學的或は社會心理學的方針は、さきに述べし如く、第十九世紀頃．千八百九十年代から著しく發達して來たのであるが、該方針は始めから一種の無意識的心理作用、一層嚴密に云へば一種の無意識的心理作用、即ち暗示作用を甚だ重要視して居るので、近代社會心理學の基礎は、社會學者が社會現象に於ける暗示作用の重要を覺つたことによりて、据へ附けられたのであるとまで。言明した人がある程である。そうして此の頃に至つて、社會學に於て社會現象の說明に、大に暗示作用を重要視して來たのは、是れ根本的には第十九世紀の中頃以後の一般の思想界に於ては。主知主義的合理主義的潮流に反抗して、主意主義的主情主義的潮流が段々發達し來り、人生を全く意識的理性的勢力の作用によりて、解釋せんとする傾向に對して、之を根本的に無意識的非理性勢力の作用によりて、解釋せんとする傾向が段々發達して來たこと、又び特に社會學に於ては、生物學的方針が主として云はゞ外部的に、社會現象を說明せんとする傾向に不滿を感じ、主として云はゞ內部的に之を說明せんとするが、しかも矢張り夫れと同樣に器械的に、之を說明せんとする傾向が、發達して來たことに基因すると思はれるが、其の直接原因は此の頃催眠現象の科學的研究が大に發達し來りて、暗示感性及び暗示作用の原因が究明せられ、更に夫れは啻に催眠狀態やヒステリ病態の如き、人間の不正狀態に於て行はれて居るだけでなく、人間の正常狀態に於ても一般に行はれ、個人生活の全體に於ても、亦社會生活の全體に於ても、甚だ重要なる意義を有するものなることが、證明されて來たことにあるのである。要するに千八百九十年代に入りてより、新進の社會學者が生理學的方針や、總括して圈境學的方針とも云ふ可き、總て外部的圈境の影響によりて、社會現象を說明せんとする傾向に滿足せず、主として內部的にしかも器械的に之を說明せんと企だてゝ來た際に、催眠狀態の科學的研究が發達して、暗示感性及び暗

示作用の原理を究明し、内部的にして、しかも器械に、人間の生活を支配する心理的一勢力の、現實に働いて居ることを證明したので、此くて社會學者は直ちに暗示作用の原理を巧みに適用して、以て社會現象を說明せんとするに至つたのである。されば現代社會心理學の發達は、催眠術の科學的研究の發達に、大に負ふ處があるのである。

余が社會學の研究に專ら力を注ぎ始めたのは、丁度上に述べしが如き社會心理學的方針の勃興し來れる際であつたので、總て新しきものを歡迎する傾向の强い、二十二三歲の青年としての當時の余は、勿論社會心理學的方針に大に魅せられたのである。そうして米國のギッヂングス先生に就いて學び、先生の懇篤なる指導を受けて感謝しつゝあつたが、又余の心は常に何となく、佛國のタールド先生に引き着けられて居た。後歐洲に遊學する機會を得た時に、余は眞先きに佛國へ渡りて、タールド先生を訪ね、又主として佛國に止まりて研學したのである。余は當時右に述べし如く、社會心理學的方針に魅せられて居たが、しかも全く之れに捕はれたのではなかつた そうして社會心理學的方針を中心として、一切の諸方針を總合し、最とも包括的な社會學を建設することを、理想として居たのであるが、今日も矢張り同一の理想を遵奉して、着々研究を進めて居るのである 併し右の如き理想を實現するは容易でない。殊に淺學不才の余の如きものにありては、日夜孜々として勉めて居るに拘らず、今尙ほ余の社會學を大成し得ないのである。昨年中に是非第一卷を公にしたいと思ふて居たが、不幸にして神經衰弱が强まり、遂に志を果たさずに終つた。併し神經の健康も大分囘復したから、本年は是非第一卷出版の目的を達したいと望んで居る。

尙ほ余は始めから社會心理學的方針を、上に述べしが如き意味にて大に重要視し、隨ふて暗示作用の重要を充分に承認して居たに拘らず、あまりに之を偏重する傾向には反對し、而して理性的作用をも亦大に重要視して居たので、要するに余は暗示作用の如き非理性的作用を重要視すると同時に、余が價値判斷作用と稱するものや、又强制作用と稱するが如きものを同等に重要視し、決して何れの作用にも偏せず、現實的社會現象に適合する仕方にて、之を正當に理解し、說明することを目的として居たが、今日も矢張り同一の目的を固持して居るのである。然るに其の後の社會心理學的方針の發達に於いては、殊に之を偏すると思はれる人々の間にありては、社會現象に於ける無意識的或は非理性的作用を重要視する傾向が、益々强まつて居ると思はれる。而して近來社會現象に於ける本能或は衝動の作用

を、殊に重要視する傾向が強まつて居ると思はれる。されば此の際に上に述べしが如き思想を含有するフロイド說が、汎く學界の注意を惹くに當つては、之を社會學にも批判的に或は無批判的に適用せんとする傾向が、矢張り新しきを求める若い社會學者の間に、現はれて來るのは別に怪しむ可き事ではないのである。右の傾向の發達に就て、英國のギンスバーグ氏は、昨年公にせる著作の中に左の如く云ふて居る「此くて社會心理學上の最近著作の傾向は、社會生活の無意識的及び本能的因素を強調することである。而して多くの著者は、最近心理學の結果を社會問題の主知主義的或は合理主義的解釋と稱せられるものに對する、攻擊の基礎として使用した。」(Morris Ginsberg. The Psychology of Society. 1921. Introduction) 又尙ほ近社會學や社會問題の研究に於て、人性問題が大に重要視され來り、而して又人性に於て本能的及び無意識的因素が大に重要視されて來た傾向に就て、讀者が矢張り昨年公にされた今日の社會學研究の好參考書、パーク氏の著を閱讀されることを望む。Robert Park and Ernest Bargess, Introduc.ion to the Science of Sociology, 1921

却說社會心理學的方針の發達に就いて、以上述べし點に注目し、而して前節に述べしフロイド說の重要原理を顧ると、今日同方針をとる若い社會學者の間に、フロイド說を批判的又は無批判的に、社會現象の研究に適用せんとする人々の、現はれて來たことは敢て怪むに足らないのである。先づフロイド說はさきに述べし如く無意識的心理過程を大に重要視するのであるが、夫れは既に社會心理學的方針に於ては、始めから現はれて居る傾向である。此くてフロイド說は其の根柢に於て、社會心理學的方針と合致して居る。然るにフロイド氏の精神分析は、無意識的心理過程の研究に於て全く一新方面を開けるものにして、而して其の研究の方法及び結果に於て、從來の無意識或は潛在意識の研究に比して、實驗的に勝れて居ると思はれる　されば從來の無意識或は潛在意識の研究を、其の方法に於ても亦其の結果に於ても、滿足なものでないと感じて居た社會學者、殊に若い社會學者は、大にフロイド氏の精神分析に引き着けられて來たのである。殊にフロイド氏の無意識的心理過程の槪念、即ち無意識的心理過程と云ふは、つまり始め意識的であつたが、意識から追ひ出されて、無意識の中に押し込められた願望或は衝動の作用であると見る考へは、從來の無意識作用や潛在意識作用の槪念の如き、何んとなく神秘的な色彩を有するものとは異なり、現實的な科學的な槪念として、一層勝れたものの如き感じを與へるのである。尙ほフロイド氏の人間生活の原

動力としての願望或は衝動の概念は、從來の欲望とか、缺乏感とか、本能とか、關心とか云ふが如き概念よりも、人間生活の原動力の動的（ダイナミック）にして心理的な性質を一層強く表示するものの如く感じられる。殊に人間生活の原動力を無意識的な動的心理的勢力と見るに於ては、フロイド氏の願望或は衝動の概念は、比較的に最とも適當なるものの如くに感じられる。此くてフロイド氏の願望の概念を修正し精練して、社會生活の原動力と認めんとする傾向が、現はれて居るのである。更に注意す可きは、近來米國の心理學界に於て、動作主義が大に勢力を振ひ、而して夫れが又社會學に進入して來て居るが、フロイド氏の願望の概念は、同主義の上から解釋し得られるので、現に之を試みて以て、社會現象の説明を企だつる人々も現はれて居るのである。例へば Edwin B. Holt の Concept of Consciousness 1914 及び The Freudian Wish and its Place in Ethics 1915 などを見られる。

併し余は關心（Interests）を以て、人間生活或は社會生活の原動力と見る見解を保持して居る。是れ余は人間生活或は社會生活の原動力として、無意識的な又は衝動的な心理的勢力或は作用を重要視すると共に、又意識的理性的意志的勢力或は作用をも重要視するが、關心の概念は之を適當に解すれば、兩者を包括し得ると考へるからである。關心即ちインタレスツの概念は、社會科學にありては、從來法學や經濟學に於いては利益の意味に、又教育學などに於ては興味の意味に解されて居た。併しラツエンホーフエル氏は、社會學上之を本能や衝動に類する廣義に、始めて使用した。（Ratzenhofer, Die Soziologische Erkenntnis, 1898）又デュウエー氏などのプラグマチズムの唱道者も、哲學上之を廣義に使用し始めた　而してスモール氏は、ラツエンホーフエル氏やプラグマチズムの唱道者の用法を參考して、インタレスツの概念を、社會學上の一基本概念として確立したのである。（Small, General Sociology, 1905）余は其等諸家の見解や、其他の人々の見解をも參考して、余の關心、インタレスツの概念を立てゝ居るのである。此處に之を論述する暇はないが、要するに余は人間生活或は社會生活の原動力として認める、無意識的或は衝動的な心理的作用も、亦意識的、理性的、意志的な心理的作用も、總て關心、インタレスツの概念に於て包括せんとするので、而して特に無意識的或は衝動的な原動力としての關心、インタレスツの研究に於ては、大にフロイド氏の願望の概念を參考して居るのである。

却說以上述べ來りし處によりて、社會心理學的方針の發達を考察すれば、今日同方針をとる社會學者の間に、フロイド說を

受容する傾向の起つて來たのは、夫れは、決して偶然でなく、又夫れを單に流行の影響に歸す可きものでない所以を、大體上説明したと思ふが、然るに今日の社會心理學的研究に於て、フロイド説の如きものが、特に歡迎されると思はれる方面は、群集心理研究の發達を考察して、以て今日フロイド説が同研究に於て重要なる影響を及ぼして居る所以、及び其の影響によりて、同研究が如何なる効果を收めつゝあるかを、稍々詳しく論究したいと思ふのである。

（四）群集心理研究の起源及び發達

夫れ群集心理の經驗的な、斷片的な考察は、昔から行なはれて居たので、古昔の中や又民間の諺の中には、群集心理の或方面を、適切に云ひ表はせるものがある（Orano, Psicologia Sociale. 18） 併し其の科學的研究の始められたのは、千八百九十年代にして、實に社會心理學的方針は先づ群集心理の研究に於て、著しき結果を齎らし、世の注意を惹起したのである　但し同年代以前に於て既に露國の哲學者、社會學者ミハイロウスキー氏は、群集心理の科學的研究に着手して居たので、同氏は千八百八十二年に先づ（Geroi i Tolpa（英雄と群集）と題する一論文を公にし、又其後群集心理を論究せる幾多の論文を公にして居る。併し其等の論文は皆な、露西亞文で書かれて居たが爲めに、西歐諸國には傳はらなかつた。そうして千八百九十年頃からして、ミハイロウスキー氏の研究とは全く獨立に、先づ佛蘭西及び伊太利に於て群集心理の科學的研究が始められたのである。要するに群集心理の研究は、露西亞、佛蘭西及び伊太利等の、歐洲諸國中暴動的群集運動の、比較的に最とも多く續發して居た諸國に於て、殊に暴動の心理的方面に就て。始められたのである。夫れより同研究は他の諸國に傳はつたが、獨逸なぞにありては、あまり學界の注意を引かなかつた樣である。併し世界大戰勃發後は、獨逸に於ても群集心理の研究が學者の注意を惹起して來たので、近來メーデ氏の如きは、實驗的群集心理研究に着手して居るのである。（Walther Moede, Experimentelle Massenpsychologie 1920） 但し群集心理研究の起源及び發達を論究した著書に就て、餘は時々諸方より尋ねらるるから此處に一寸一言して置くが、群集心理研究の發達をかなり詳しく論究せる著書は、伊太利語ではロスシ氏やストラチコ氏なぞの著書（Pasquale Rossi, Sociologia e Psicologia Collettiva. 1904 Alberto Stratico, La Psicologia Colletiva, 1905）の如きものであるが、余は他國語にそれほど詳しく論述せるものあるを知らない。尙ほ獨逸語では Sganzini, Forts

hrift der Völkerpsychologie 1913. Moede, Experimentelle Massenpsychologie (1920) の中に、簡單なる叙述があることに注意して置く。

却說群集心理の科學的研究を始めたる、佛蘭西及び伊太利の學者中にて、最とも早く之れに注目したるは、余の舊師タールド先生であると思ふが、先生と殆んど同時に、伊太利の犯罪社會學者シゲレ氏（Sighele）も、之れに着手した。併し群集心理を比較的に最とも組織的に、論述したる著書を始めて公にしたるはル・ボン氏である、ル・ボン氏の著「群集の心理」(Gustav Le Bon, Psychologie des foules. 1895）は、先づ佛國に於て大に歡迎せられ、夫れより歐米諸國語に翻譯せられ、我國に於ても既に二三の全譯及び抄譯の如きものがあると思ふ。そして同書は又今日に至るまで、群集心理の代表的著作と見做されて居るものである。併しル・ボン氏が同書中に論述せる群集心理の諸原理は、既にタールド先生やシゲレ氏が、大體上究明したもので、嚴密に云へば同書はあまり獨創的なものでない。併し其の論述が組織的にして。簡單に群集心理の全般を大體上包括して居るのと。又論述の仕方が巧妙であるのとによりて、一般の讀者の心を魅することが出來る。此くて同書は他の人々の著作を壓倒して、汎く世界に知らるゝに至つたのである。そうして今やフロイド說の影響によりて、群集心理研究の發達が、新しき時代に進入しつゝあると見做すことが出來れば、ルボン氏の著書は今日までの代表的著作であると、見做し得られるのである。併し同書を此の如きものと見做すに就て、種々注意す可き點がある。先づ其等の點に就て簡單に述べて置きたい。

第一にはル・ボン氏の群集の概念に就て注意す可き點がある同氏の群集の概念はあまりに廣大な、粗雜な、隨ふて漠然たるものにして、精確なる科學的研究の對象となし難しいと思はれる。群集を精確なる科學的研究の對象とするには、吾人はル・ボン氏の概念よりは、更に精確に之を限定せねばならぬ。而して此の點にて就て先づタールド先生は、有益なる研究を行なはれた。夫れは群集と公衆とを、少なくも概念上明確に區別することである。タールド先生の群集と公衆との區別は、社會心理學上の甚だ有益なる一貢獻と見做されて居るので、其の後の群集心理研究者は一般に先生の區別を遵奉して居る。但し先生の說は詳しく先生の論文集「輿論と群集」(Tarde, L'opinion et la foule, 1901.）の中に述べられて居るが、余は其の大要を拙著「現代人心理と現代文明」第二章中に述べて居るから、簡單に其の大要を學ばんとする人々は、右の拙著を閱讀されたい。要するに群集を精密なる科學的研究の對象となすには、之をル・ボ

ン氏の云ふが如き、粗大な、漠然たるものに止めて置くことは出來ないので、更に詳しく之れを限定せねばならぬ。然らば群集の概念を如何に限定す可きかと云ふに、諸家の呈出せる色々な云ひ表はし方があるが、余は左の如くに述ぶれば、最とも精確に群集の概念を決定することが、出來ようかと考へるのである。卽ち群集とは一定の場所に、一時的に密集する人々或は有心物の心理的統一、又は密接なる心理的交渉である。そうしてル・ボン氏の論述して居る群集心理論は、先づ右の如くに限定されたる群集に適用される場合に、大體上其の價値が最ともよく發揮されると思ふ。併し同氏が漠然同氏自身の群集概念の中に含ませて居る、其の他の種々なる社會圈や社會團體に對して、同氏の群集心理論は只特定の場合に於て、正當に適用されるだけで、其の全體の心理を説明するものでない。若し同氏の群集心理論によりて、其等の社會圈及び社會團體の心理全體を説明せんとすれば、吾人は大なる謬見に陷ゐる。要するにル・ボン氏の群集心理論は、根本的には只右に述べしが如くに限定されたる群集の心理に適用されるだけのものとして、吾人は更に群集心理の外に、公衆心理、政黨心理、宗教心理、階級心理、及び其の他の社會圈及び社會團體の心理を、夫れ夫れ別に研究せねばならないのである。

更にル・ボン氏の群集心理に就て注意す可き點がある。今群集の概念を上に述べし如くに限定しても、尙ほル・ボン氏の群集心理の原理は、其の儘にて群集の全體に、適用されることは出來ないので、吾人は更に群集を分類して、同氏の群集心理論は、何れの種類の群集に、最ともよく適用されるかを、見定めなければならないのである。而して此の分類に就ては、余以前に既に注目した人はあるが、併し之を判然云ひ表はす人はないと思ふ。余は十年あまりも以前に　或講習會で述べた群集心理講義に於いて、又其の后新聞雜誌に於て公にせる論文に於て、余の立てた群集の分類の重要を强調して置いたが、要するに余は群集を情動群集或は激動群集と、思慮群集或は共議群集とに大別するのである。そうして余の情動群集或は激動群集と云ふは、つまり感情によつて昂奮し、激動する群集と云ふ意味であつて、其の適切なる一例は暴動の如きものである。又余の思慮群集共議群集と云ふは、つまり或問題或は或る事件に就いて、相談し、協議し、論議し、思慮し、熟考する群集と云ふ意味であつて、例へば相談會とか、協議會とか、討論會とか、會議とか、議會とか云ふが如きものである。余は群集を右に述べし、二種に大別しそうしてル・ボン氏の群集心理論は、余の情動群集或は激動群集と稱するものに、其の儘に適用されるが、併し

余の思慮群集或はは共議群集と稱するものに適用される場合には、種々修正を要するものと考へるのである。但し思慮群集或は共議群集は情動群集或は激動群集に轉化し易き傾向を、有つて居るので、而して其の轉化したる場合には、ル・ボン氏の説は、矢張り適用されるのである。

尙ほ輓近に英國のマクッガル氏は、其の新著（Mc Dougall, The Group Mind, 1920）に於いて、組織されたる或は編制を有する群集と、組織されない或は編制を有しない群集とを區別し、而してル・ボン氏の群集心理論は大體上後者に適用されるが前者には、適用されないと論じて居る。此處に少しくマクッガル氏の右の區別に就て考へて見たいと思ふが、今群集に就いて組織されたるとか組織されないとか、又は編制を有すると有しないとか云ふことは、多少曖昧な區別にして、或意味では總て群集は、余が上に述べしが如き意味にては、大なり小なり組織されて居る、或は編制を有すると云ひ得られるので、一定の場處に一時的に密集する人々が、大なり小なり組織された時に、夫れが始めて群集となると云はねばならないのである。併しマクヅーガル氏が組織されたる群集の例として軍隊を擧げ、之れを詳しく論述して居るのを見ると、同氏の組織或は編制と云ふは、單に余が右に述べしが如き意味のものではなく、同氏の組織或は編制されたる群集と云ふは、つまり永久的或は持續的に組織されたる社會團體の、一時的或は多少持續的な密集を意味するものにして、又同氏の組織されない群集と云ふは、つまり豫め全く組織されて居ない人々、の一時的な密集を意味するものであると思はれる。而して同氏の區別の眞義は、右の如きものであるとすると、余は之を以つて群集の重要なる一分類と、見做すことが出來ると考へるのである。然らは此の分類は、余の立てたる激動群集と共議群集との分類と、如何なる關係を有するかと云ふに、余は此の關係を考究するに當つて、余の從來立てゝ居た右の分類を更に一層詳しくする必要を覺つたのである。それで余は右の二種別を先づ五種別としたいと思ふ。卽ち群集を激動群集、律動群集、感興群集、開明群集、及び共議群集或は思慮群集の五種に分たんとするのである。余が此處に改めて激動群集と云ふは、感情によりて昂奮し、過激に、或は急激に或事を實行し、又は實行せんとする群集にして、感興群集と云ふは只感情の昂奮其の物を樂むだけで、敢て何等の活動をも、其場に於てなさんとするのでない群集、又律動群集とは只感情に激して急激に事をなさんとするのでなく、一定の規律に從ひ、規律的に着々事をなさんとする群集、又開明群集とは知見の開發、知識の光明を求める群集、而して思慮群集或は共

議群集と云ふのは、さきに述べしが如きものである。但し激動群集を廣義に解し、只感情に激するだけで、又其の事を目的とするだけで、敢て實際的行動をなさんとはしないものも、之れに含ませる時には、余が特に感興群集とするものを、激動群集或は情動群集に含ませることが出來る。以下便宜上激動群集を右の廣義に解して置く、而してマクヅガル氏の組織或は編制されたる群集と、然らざる群集との別は、余がさきに述べしが如き意味に、解す可きものとすれば、余は右に立てたる四種或は五種の群集の何れに就ても、大體上組織されたる群集と、然らざる群集との別を立てることが出來る、又此の別を立てゝ考へることによりて、其等四種或は五種の群集の各々に就て、一層深い理解が得られると思ふのである。

今古に述べし如く、群集を詳しく分類して考へると、ルボン氏の群集心理論は、矢張り根本的には激動群集の心理或は余の新しき分類に從ふて、詳しく云へば、激動群集及び感興群集の心理を究明するものとして、殊に其の組織或は編制されないものの心理を究明するものとして、最も適切であるので、又此の如きものとして、大體上今日までの代表的學說であると認めらる可きである。尙ほ同氏の群集心理論の有効範域を、此の如くに制限することは、決して其の價値を減少するものでなく、實に其の眞價を正當に充分發揮するものであるのである。又吾人は此の如く同氏の群集心理論の有効範域を、適當に制限することによりて、從來之れに加へられたる非難の或物の正當でないことを、明らかに理解するのである。是れ其等の非難は、主として同氏の說を、情動群集以外の群集に適用せんとするより、生ずるものであるからである。

然るに群集心理研究は、今や根本的に新しき方針をとらんとして居る。夫れは主として動作主義心理學や、フロイド說の影響によるのである。而して本論文に於ては、只フロイド說の影響によりて、群集心理研究が如何なる新方針をとらんとして居るかを研究するに止めるが、併し其の意味を充分に理解する爲めには、先づ今日までの代表的學說としてのルボン氏の群集心理論の骨髓を、よく理解して置くことが肝要である。それで次節に於て其の骨髓を簡單に論述し、又之を論評して、群集心理研究が新らしき方針をとらんとするに至れる所以を明らかにして置きたいと思ふ。

（五）今日までの代表的群集心理論及び其の批判

ル・ボン氏の論述する處によれば、吾人が群集に就て先づ一般的に注意す可きは、群集は個人よりも遙かに熱情的な、過激

な行動をなし得ると云ふ事。又普通にはかゝる行動をなすと云ふことである。個人が群集内に入るときは、單獨で居る場合には決してしない樣な、熱情的な、過激な行爲を敢てするに、毫も躊躇しないので、全く異なれる人間となるのである。群集は與へられたる刺戟にありて、甚だ昂奮し易く、之れに對して何等の思慮も加へずに、直ちに衝動的に發動し易い。そうして又與へられたる刺戟の變ずるにつれて、氣が變じ易い。群集は又與へられる刺戟に感じ易く、告げられたることを信じ易い。更に群集の感情は甚だ單純にして、そうして極端に走せ易い。群集は又甚だ不寛容で、忍耐することが出來ず、野蠻人や子供の如く、其の欲望と充足との間に何物の挿まるところも許さず、暗示されたる觀念を直ちに實現せんとする傾向を、常に備えて居る　群集は他に對しては甚だ命令的威壓的であるが、併し又其の指導者或は煽動者に對しては、甚だ從順で、奴隷的である。以上述べしが如くであるから、群集は道德的には、與へられたる暗示の善惡如何によりて、單獨なる個人よりも遙かにより惡くも、亦より善くもなり得るのである。

併し群集は知力的には、單獨なる個人に常に劣るものである。是れ群集にありては、想像力が大に强まりて、想像は直ちに事實と信ぜられ、又群集は錯覺幻覺に陷り易く、そうして其の主として行なふ推理作用は、類推作用の如き下等なる推理作用にして、抽象的に考へることが出來ず、高等なる推理作用を行なふことが出來ない。要するに群集は感情に於ては、善惡共に個人より極端に進み、そうして知力に於ては、孤立せる個人に常に劣るのである。

然らば以上述べしが如くに、群集或は群集内の個人が、孤立せる個人と異なれる心理的特性を現はすのは、如何なる理由或は原因によるか。是れ先づ個人は種々なる方面に於て、如何に相異なつて居ても、心理學的に群集となるときには、彼等は一種の集團心を有し、そうして其の集團心は、彼等が各々孤立して單獨に感じ、考へ行動するときは、全く異なれる仕方にて、彼等をして感じさせ、考へさせ、行動させるからである。

併し此の如き一種の集團心は、如何にして形成されるか、此處に先づ注意すべきは、近世心理學の教ゆる一の眞理、即ち實に有機的生活に於てのみならず、精神の働きに於ても、無意識的過程が甚だ重大なる役目を演ずると云ふことである。精神の意識的生活は、其の無意識的生活に比すれば甚だ弱い一部分を表はすに過ぎない。吾人の意識的行動は、殊に遺傳の諸勢力によりて作られたる、無意識的地盤から生起するのである。そうして此の地盤に人種或は民族の精神或は心を構成する、無數の

祖先的殘存物を含蓄する。吾人の行爲の明白に意識されたる原因の下に、吾人の明白に意識しない秘密な原因が存するが、併し其の秘密な原因の下には、更に吾人の全く意識しない、一層秘密なる原因が存する。吾人の日常の行爲の大部分は、吾人の意識しない隱れたる動機の結果に外ならぬ。

今一人種或は一民族に屬する人々が、相互に類似するのは、主として其の人種或は民族の心或は精神を、構成する無意識的要素によりてゞある。而して彼等の相異なるのは、主として教育の果實たる、殊に非凡な遺傳性の果實たる、意識的要素によりてゞある。知力によりて最も相異なれる人々も、甚だ相類似する本能、慾情、情操を有つて居る。そうして群集に於て、共有されるもの、共同的なるものは、即ち無意識的過程によりて支配される其等の一般的諸性質である。群集の集團心に於ては、個人の知的諸特性、隨ふて其の個性は消失し、總ての人々に於て同質的なものである處の、無意識的性質が勢力を振ふ。そして夫等の無意識的性質は、一人種或は一民族の總ての人々に共通するものであると云ふことによつて、夫れは文化的には劣等なものであることは明らかである。要するに群集に於て集められるのは、智惠ではなくして無智である。

然るに今若し群集となす人々が、只彼等の各々の分有する普通の性質を、共同的のものとするに止まるならば、群集に於ては單に其等の人々の平均的性質が現はれるに過ぎずして、何等新しき特性は創造されないであらう。然らば群集の新しき特性は如何にして造られるか。之れには種々なる原因があるが、先づ第一に注目す可きは、群集内の個人は、單に數の事實によりて、何物によりても打ち敗られ難き廣大なる力の感じを獲得し、そうして此の力の感じは、彼が若し單獨であるならば強く抑制したであらうと思はれる本能の作用に、彼をして容易に從はしめる。尙ほ群集は無名のもの、隨ふて無責任なものであるから、群集内にありては、常に個人を拘束する責任の念は全く消滅するが故に、個人は益々本能を抑制しなくなるのである。

第二の原因は傳染である。群集内にありては、總ての感情、總ての行動は傳染するので、そうして其の傳染する度合は甚だ大なるものである。第三の最とも重大なる原因は、暗示感性にして、上述せし傳染の如きも、つまりは暗示感性の結果である。群集内の個人の心理狀態は、催眠術を施れて、其の暗示感性の大に強まれる人々の心理狀態と同じものである。彼れに於ては被催眠者に於ける如く、一の能力が停止されると同時に、他の能力が非常に強められ得るのである。彼は暗示の影響の下で、一定の行動を遂成する爲めに、不可抗的な猛烈な勢を以て

突進する。尙ほ群集に於ては、與へられたる暗示は、總ての人々に對して同一であるから、夫れは相互的となりて甚しく强まり、此くて群集人にありては。其の猛烈な勢は、被催眠者に於けるよりは、一層不可抗的となるのである、

以上述し處を總觀すると、群集人或は群集内の個人の主要特性は、左の如きものであると云ふことが出來る、

(1)意識的人格の消滅、
(2)無意識的人格の勢力の甚大なること
(3)暗示及び傳染の作用によりて、感情及び觀念が同一の方向に導かれること、
(4)暗示されたる觀念を、直ちに行動に移さんとする傾向。

却說ル・ボン氏の群集心理論に於て、其の根本思想と見做さる可きものは、大體上右に述べし如きものと思はれるが、今同氏は群集の心理的一般特性として敘述せるものは、余の情動群集或は激動群集と稱するものに、最ともよく適當するので、激動群集の心理的一般特性と云へば、實に同氏の巧妙に敘述せるが如きものであると思ふ。而して同氏は群集がかくの如き特性を獲得するに至る原因として、特に重要視するものは、上に述べし處によりて察せられる如く、無意識的心理過程が意識に上りて之を支配すること、及び暗示感性が大に强まりて、暗示作用が自由に行なはれてくることである。而して又同氏は此等の二原因或は二條件は、つまり意識的人格の消滅することによりて、現はれ、或は具はつてくると考へられる樣である。要するに同氏の說の骨髓は、つまり群集内にありては先づ個人の意識的人格は弱はり、或は消滅し、夫より無意識的心理過程が意識を支配し、而して暗示感性が大に强まり來りて、此處に群集心が成立すると、云ふにあると思はれる。

そこで同氏の說に對して先づ起る問題は、群集にありては何故に或は如何にして、個人の意識的人格が弱はり、或は消滅するかと云ふ問題である。而して同氏は其の原因を群集の人數の事實或は影響に歸せられる樣である。つまり群集に於て多數の人々が密集して居ると云ふことが、其の內の個人の意識的人格を弱はらし或は消滅させる原因であると、見られる樣である。余も此の點に於ては大體上同氏の見解に贊成するのである。併し數の事實或は力が如何にして個人の意識的人格を弱はらし、或は消滅させるかに就て、同氏の說く處は甚だ粗雜にして、吾人は更に詳しき研究を加へなければならないのである。

次にル・ボン氏の說に對して起る問題は、無意識的心理過程

が意識を支配してくる事と、暗示感性の大に强まる事との關係である。同氏は根本的には、只個人の意識的人格が消滅するにつれて、右の兩者が共に現はれてくる事實を述ぶるに止まり、兩者の間に如何なる實質的關係があるかを究明して居ない。兩者は共同原因の並立的結果であるか、又は兩者の間に因果の關係があるか、又は內屬の關係があるか。而して此の問題は、更に暗示感性の根元を詳しく研究するか、又は無意識の本質を詳しく研究するかによりて、始めて究明され得るものと思はれる。

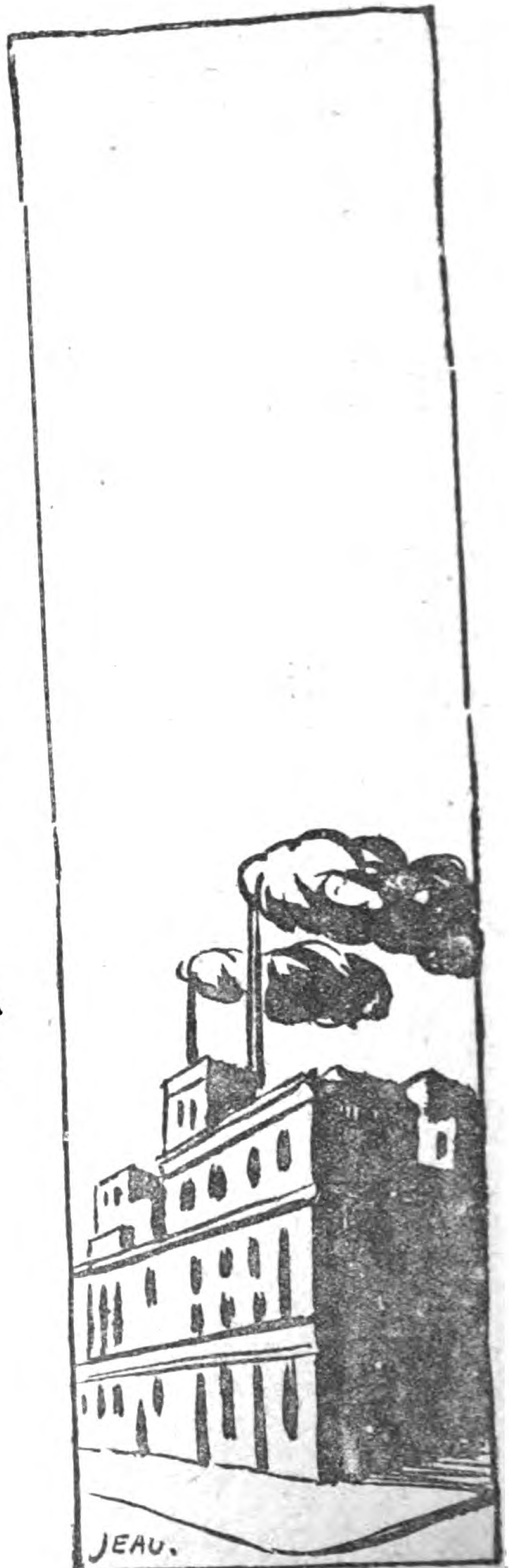
　されば余は無意識及び暗示作用の本質に關する輓近の研究に注意し、兩者の關係を如何に決定す可きかを考究したのであるが、近來此の問題に關して、英、米、獨、佛、伊、露等の諸國の學者が、種々樣々なる研究及び見解を發表して居る。併し此處に其等の見解に就て、一々論評して居る暇はないから、只比較的に最ともよく余を滿足させた一見解に就て、少しく述べるに止めるが、夫れはサイディス氏が千八百九十五年に公にされた暗示の心理（Sidis Psychology of Suggestion）及び其の後幾多の著書論文に於て、發表されて居る見解である。

　今サイディス氏の說の骨髓を簡單に述ぶれば、吾人の意識に覺醒意識と潜在意識とがある。而して覺醒意識は反省作用、批判作用等を、其の本質的作用となし、潜在意識は暗示感性を以て、其の本質となすものである。されば暗示作用は潜在意識固有の心理作用である、而して吾の正常狀態にありては、覺醒意識は潜在意識を統制して居るので、潜在意識は自由に働くことが出來ない、即ち暗示作用は拘束されて居る。吾人は此の狀態を意識の統一或は統一化と稱して居るのである。然るに何かの理由によりて、覺醒意識が弱はると、內から夫れが潜在意識を統制する力が弱はり、之れに反して潜在意識の力が强まり、暗示作用は自由に發動してくる。吾人は之を意識の分裂と云ふのである。此くて吾人は、暗示感性の强さは意識の分裂の度合と正比例し、又意識の統一化と反比例して變化すると、云ひ得るのである。而して群集は覺醒意識の力、隨ふて夫れが潜在意識を統制する力を弱はらし、意識の分裂を生ずる一條件にして、此くて群集內にありては個人の暗示感性が强まり、暗示作用

盛んに行なはれてくるのである。

余は右に述べしが如き、サイディス氏の說を以て、無意識或は潜在意識と暗示作用との本質的關係を、比較的に最とも滿足說明するものとして、之を承認して居たが、併し夫れは他により勝れた說がない爲めであつて、決して全然滿足して居た譯ではない。尙ほ其の後潜在意識の假說に對して、色々疑問を起し煩悶して居たのであるが、其の際フロイド氏の說が一般に注意されて來たから余も之を學んだのである、そうして之を群集心理の研究に適用すれば恐らくは、有益なる効果を齎らすであらうと考へつゝも、時勢に促されて一時專ら、社會問題や社會思想、隨ふて又文化哲學の研究に力を注いだが爲めに、群集心理の研究は其の儘にして置いたのである、然るに其の間に歐米の學者中、群集心理の研究にフロイド說を適用する必要を說く人々や、又實際之を適用して、其の新しき進歩を圖らんとする人々なぞが現はれて來た。而して昨年には遂にフロイド氏自身も亦之を企だて、「群集心理（或は集團心理）と自我分析」(Freud, Massenpsychologie und Ich-Analyse, 1921) と題する一書を公にされた。併し此處に群集心理の研究に於けるフロイド說適用の形勢を、詳しく論述して居る暇はないから、群集心理研究者にして余の知る範圍内に於ては、フロイド說の適用を、最とも徹底的に又詳しく試みたるものと思はれるマルチン氏の新著「群集の動作」(Everett Dean Martin, The Behavior of Crowds, 1920) 及びフロイド氏の右の新著を批判的に吟味して、以て群集心理研究に於けるフロイド說適用の、輓近の形勢一般を示し、又其の一般的評價を試みたいと思ふ。

（以下次號）



世界が救はるゝまで

――經濟的改造當面の問題――

福田徳三

『我等笛吹けども爾曹踊らず』とは、私共の口にす可き所ではない、私共は、人が踊らうが踊るまいが　吹くべき笛は　咽喉の續く限り吹かねばならぬ　吹いて吹いて　一人の踊る人が起らずとも　私共は一向之れを苦とす可きではない、唯だ己れが吹く可く命ぜられたりと信ずる笛を吹けば、其れで足りるのである。此意味に於て、私は繰返し〳〵世界を救ふ可き使命と我日本が身を挺して之れに當る可き焦眉の急務とを説かねばならぬと確信して居るものである。世

界を救ふことは、同時に日本を救ふことである。世界を今日の如き沈滯の極に其儘に捨て置いて、日本のみ獨り繁榮す可き道理はない。否、世界が今日の儘に何處までも推移して行くときは、日本も亦益々難局を加へるのみで、決して救はれる見込はないと私は確信するものである、日本の力は微小である　獨力では到底何事をも成し遂げ得るものではない、少くとも米國を動かして、其大なる使命に覺めしむるに非れば、世界救濟の大業は之を期することは出來ない。日本が日本として成し得る最大の仕事は、米國をして一日も早く此の使命に覺めしめることに存する。之れが私の深く信じて渝らざる處である　乍併　米國の覺醒は中々困難な事である。ヴアンダーリツプの力を以てしても、今日までに成し得たる所は、甚だ小であつた　況んや私共が日本の天地で、小さた聲で彼是言つたとて、殆んど何の力のないことは分り切つた事である　併し、私は決して絶望はせぬ、若しも日本の輿論が眞に目醒めて來るならば、其れは、他の多くの力と相提携して、多少は、米國を動かし得るに相違ないと思ふ。此意味に於て、私は本誌前々號及前號に寄せた拙文の趣意を更らに少しく布演して經濟的改造の當面問題に就て卑見の一部を詳述して見たいと思ふのである。

今日の世界の難局が、戰爭其ものゝ直接の結果であると云ふ考の大誤謬なることは、前文に於て少しく論じて置いた　改造社は此問題に就て、有力なる諸論客の間に意見を徴した、其答文は本誌前號に掲げてある。右の諸文は唯一つを除くの外は、何れも大體に於て、私の説を裏書せられたものゝように思ふ、殊に山川均氏の論文とベルリナー教授の論文とは、甚だ有力に私の論に贊成せられたものゝように拜見した。尤も山川氏は其マルキシストたる立場から、私の論の後半に對しては、甚力強い駁論を下された、之れは當然豫期す可きことであつて、私は謹んで其教を拜聽するものである。兎に角　戰爭の爲めに被つた物質的損害が今日の世界經濟の難局を醸した最大原因ではないと云ふ私の主張丈けは、山川氏も十分に之を承認せられたことは、私の會心を禁じ得ざる處である。更らに青木氏が、歐洲諸國に金を貸す必要を力説せられたのは、私に取つて百萬の援兵を與へられたものとして感謝せずして措く能はざるのである。私は勞農露國、獨墺國、東歐諸國救濟のためには、九億乃至十億圓の負擔を日本が敢てせんことを熱望して已まないものである。タトへ、米國が日本の前例によつて動かさるゝことなしとするも、私は少しも其れを惜むに及ばないものと思ふ。

然し私は、極く内輪に積つて、四億圓の投げ出しを主張するに止めた、兎に角、問題は、金高の多少ではない、我邦の世界救濟に對する眞の覺醒それである。此意味に於て、青木氏の主張は、私の徹頭徹尾賛同を禁じ能はざる處である。

（二）

歐洲各國の政府は戰爭のために莫大の支出をした、而して其勘定の大部分は國家の負債として今日まで殘つて居る、それは儼然たる事實である。私は先づ戰爭の爲めの負担の經濟的內容と意義とを此問題に就て最も明快な解説を下したピグーに倣つて少し明にして置く可き義務があると思ふ。

管々しい數字を擧げることは畧するが、歐洲各國の戰費の負担は實に言語に絶する底の莫大なものである。乍併、戰費と云ふものは、其全體が無駄に費されたものと思つてはならぬ。其反對に戰費てふ項目に顯はれたものが、歐洲諸國民の負担の全部を言顯はして居るものと思ふのも、大なる誤謬である。戰費として數字上に顯はれたものは、歐洲各國の政府が、戰爭に直接又は間接に關連して支出した貨幣額の全體である。政府以外の負担は少しも其數字の內には含まれて居らぬのである。歐洲各國の國民が或は直接に或は間接に戰時中、戰爭の爲めに費した貨幣額は、右の戰費なるものの中には、計上されて居らぬのであつて、而して實際に於て、其高は莫大なものであらう。乍併、我々は極めて漠然たる推測以外、其高の如何を知る可き手段は一も之を有して居らぬのである、而して其中には直接の損害もあれば、間接の犧牲もある、佛國の如き敵國軍の侵入した國に於ては、國民は直接に其財産を破壊されたものも尠からずあらう、其反對に英國の如く敵兵の隻影をも見なかつた處では、飛行機ツェッペリン船による損害の外には直接の損害はさまで被つて居らぬ。併し其何れにしても損害は既に過去の事に屬する、現在に於て歐洲國民の苦しむ所は、其れがために失はれた所得産出力之れである。此點は能く念頭に置かなければならぬのである。

我々が確かに知り得る戰爭の爲めの費用なるものは各國政府の手に於て支出されたものそれである、其費用は何れも金額を以て言表はされて居る。乍去、金額は唯だ費用を表示するに止まるもので、直ちに費用其ものを構成して居るのではない。——此點は政府以外の費用に就ても同じ事である——。即ち戰爭の爲めに直接間接に各國政府が費した人と物

との働きが、金額で言表はされたに外ならぬのである。其れは如何なる種類のものから成立つかと云へば、ピグー氏は凡そ次の六種類に分けることが出來ると云つて居る。（第一）直接又は間接に軍役に從事した陸海軍人、軍屬、人夫等の勤勞（第二）軍器軍需品の製造、作成に從事した人々の勤勞（第三）戰爭用の運送、交通に用られた船舶、鐵道、自動車、諸車輛等の働き、及其操縱に從事した人々の勤勞（第四）戰死者、負傷者等の爲めに設けられた一切の設備の働き、及其從業員の勤勞（第五）從軍者の衣料食料の爲めの費用から其等の人々の平時に於ける衣食料の費用を差引いた分（第六）英佛其他の國が戰爭の爲めに聯合國に供給し又は貸した物及働き、是等である。此等は戰爭の爲めに支出した費用である。乍併其全部が必ずしも戰爭による損失となるわけではない。何となれば、此等の費用の中には、戰爭がなければ、全く供給又は生產されないものが含まれてゐる。而して其れは可なり大なるものである。戰爭の爲めに眞に被つた損失は、現に費用されたものでなく、其等の物又は働きを生產し又は供給する爲めに、停止せられた物の生產又は働きの給付是れである。軍器、軍需品製造に要した一切の費用が戰爭の爲めの損失に歸するのではない、軍器、軍需品の製造に從事する爲めに、他の生產業を縮少し又は制限した高丈けが、眞の損失に當るのである、言葉を換へて云へば、戰爭がなかつたら、此等の軍器軍需品の製造の爲めに用られた物なり人なりは、他の生產業に用られたであらう。其れが出來なかつたこと丈が戰爭の爲めに被つた損失であるので、軍器、軍需品の製造に用ゐた人なり物なりが直ちに損失となる次第ではない。丁度、國際間の貿易に於て輸入品の費用とは、其物を生產するに要した生產國に於ける費用ではなく、之を得る爲めに換へて與へた輸出品の費用が其れであるが如く、又は個人間の交換に於て得るものゝ費用とは代へて與へた自己所有物の利用の喪失であると云ふ均しいのである。從つて、交戰各國の所謂戰費なるものゝ全體が、戰爭の爲めに各國が―從つて其合計は世界が全體として―被つた損失を言表はして居るものと思ふのは、誤つた見方であるのである。此事は、戰爭の經濟的結果を正しく觀察するに決して看過してはならぬのである

（三）

トコロで、右のように解釋した戰爭の爲めの眞の犧牲は、誰が之を負擔するかと云へば、現前の支拂者は多くは政府

であるに相違ないが、實際上は結局各國の國民が之れを負擔する外には道はないのである。ソコデ各國民は、此負擔に應ずるには、唯二つしか資源を有して居らぬのである。第一は將來の資源、第二は現在の資源それである。將來の資源を戰費の負擔に充てるとは、現在又は將來生ず可き資本を喰込むことを云ふのである。從つて其結果は、現在の所得高には變更を來さないが、將來の所得を減ずることになるのである。之を更らに分けて二種とすることが出來る。第一は對外的である。即ち外國との交通を維持する間に於て得るもの、獨逸墺國は之を用ゐることが出來なかつた。何となれば外國との交通は絕たれて居たから。第二は對內的で、獨墺國と雖も用ゆることの出來たものそれである。第一は更らに次の如く區別することを要する。(甲) 自國に現存する資本財を外國へ賣つて即時に所得を得ることそれである。之れは獨り動かし得る有體物のみでなく、土地、家屋、工場、其他の不動產に就ても出來るとである。物其れ自らは動かせないが、其所有權を外國人に賣つて、手取金を所得として戰費の負擔に充ることは出來る、其代り將來其等の物から生ず可き所得は、其買つた外國人の手に歸するので、自國人の懷から其れ丈けは減ずるのである　併し戰時の如く急を要する場合には、此れは餘り役に立たぬ、手取り早く輸送し得られるものでなければ、還金處分は急には辦じられない、即ち美術品とか、寶石とか、金銀塊とかが多く此目的の爲めに賣られたのである。(乙) 外國有價證券にして自國人の所有して居たものを外國へ賣放すこと、佛國は此種類のものを殆んど皆賣盡して仕舞つた。英國も亦大分賣放つた。(第二) 外國に關係なく自國限りの計ひで實行し得る將來資源の充當にも次の方法がある。(甲) 自國內の生產用資本を充當することと、但し之れからは餘り多くを望むことは出來ない、何故となれば、其大部分は、土地、建物、鐵道、等の形となつて居て直接戰爭用に供すること不可能である。唯だ食料品、原料品、既製品の或部分に限られて居る。(乙) 現存生產財の修繕、改修新舊取換等を一時見合せて、其れに充つ可き物や働きを戰爭用に供すること。之れは將來に取つて甚だ害を及ぼすことは言ふまでもない。(丙) 新規の投資を見合せ、其分を戰爭用に充つると。以上が將來の資源の戰費負擔充當の重な項目である。

第二の現在の資源の充當とは第一とは反對に將來の所得に手を觸れず、現在の所得丈けで戰費の負擔に應ずることとこ

れである。此れに二の方法がある、(甲)餘分な努力をなすことによつて餘分の所得を生じ出すと。政府の戰費、政府以外の國民の戰爭の爲めの犧牲中には、此種のものが少からず含まれて居る、これは決して損失を以て目す可きものではない。(乙)消費を節約すること、(甲)は對外的資源の道を絕たれた獨逸で殊に著しく行はれた所である　勞働者が平生八時間働く所を十時間も十一時間も働いたり、休日を廢したり、人爲的操業制限を撤廢したり、勞働爭議を見合せ其が爲めの停業を少くしたり、從來何等生産業に從事して居なかつた人々が勞働に就いたり、失業者數を殆んど皆無ならしめたり、種々なる點に於て此の第一は各國共盛んに行はれた所である。消費の節約は英國では『國民節約野戰』などによつて大に宣傳せられた　獨逸に於ては、宣傳せられずとも、必要上已むなく極端な消費の節約が行はれた。これは決して損失を以つて目す可きものでないは言ふ迄もない、否、却つて大なる利と稱す可きであるが、然し餘り極端な節約、又は不合理的な節約の爲め、將來の生産力を減じた部分は、慥かに大なる損失である。

此く將來資源、現在資源と云ふ別を立てはしたが、さて實際上に於ては、兩者斯くハッキリと判別せられない場合が甚だ多いのである。トコロで、將來、現在の區別を公債支辨、租税支辨と混同するものが尠からずある之れは大なる誤謬であつて、必ず匡さなければならぬのである。將來の資源を充てるか、現在の資源を充てるかは、國民の爲す所であつて、政府の決する所ではない。政府が戰費の支辨を公債によると云ふことは、政府の財政上其負擔を將來に讓ると云ふと丈けに止り、其れが直ちに國民をして將來資源によらしむることにはならない。其れと同樣に、政府が租税を以て戰費を支辨すると云ふのは、政府の財政上の都合丈けの事であつて、之れに應ずる國民が必ずしも現在資源を戰費の負擔に充てることにはならないのである。政府が戰費支辨の爲め新税を賦課したり、又は增税を行つたからとて、其れは政府が將來に於て公債の利子を支拂ふに及ばぬと云ふ丈けであつて、租税を支拂ふ國民が直ちに現在の資源を得て之れに應ずると云ふことにはならぬ。何故とならば、新税又は增税を上納する國民は、其租税額を生産資本の作出しに用ゐる可き財源から支出するかも知れない。然る場合には、其國民に取つては、租税の增納によつて將來の所得を減ずることになるのである。又其反對に政府が公債を募集して戰費を支辨するのは、政府としては將來に對して公債利子の支拂

の義務を殘すと云ふ丈けであつて、其の募集に應ずる國民に取つては必ずしも將來の資源を充當することにはならぬ。何故となれば、國民は現在の消費を節約して公債の募りに應ずるかも知れないから。但し此場合政府は將來何年かに涉つて其公債の利子を支拂はねばならぬので、其額丈けは國民將來の負擔となるのであるが、然し國民全體としては、一方には其れ丈け將來に負擔が增すと共に他方には其れ丈けの利子の支拂を受ける（外國債は別問題）のであるから、差引出ず入らずとなる勘定で、別に新しい負擔が將來に對して加へられるわけではないのである。即ち戰費の負擔を現在資源を以て辨ずるか、將來資源を以て辨ずるかは、眞の負擔者たる國民各自の爲す所によつて定まるので、政府が之れを決するのではないのである。但し其れと同時に政府は其やり方如何によつて、此國民の決定に著しい影響を與ふるものであることは注意せねばならぬ。政府が國民の消費に干涉したり、輸入の制限を圖つたり、又消費稅を重くしたりすれば、國民は勢ひ現在資源をより多く戰費の負擔に充てるようにならう、其反對に政府が新投資（殊に外國に於ける）を制限したりすれば、將來資源を戰費に充てることを多くすることになるのである。

（四）

歐洲各國の政府が政府として財政上戰費を支辨した重要方法は三つあつた。（第一）租稅の增徵（第二）公債の發行（第三）不換紙幣の發行、それである。

政府が戰費の負擔を租稅の增徵によつて支辨するか公債の發行によつて支辨するかの問題は、其負擔を現在の資源を以て辨ずるか、將來の資源を以て辨ずるかの問題と同一に見てはならぬことは前に說いた通りであるが、其れと同時に此問題は他面に於ては、直ちに國民の經濟狀態に重大な關係を有するものなるを考へて見なければならぬ、其は別事ではない、政府が戰費の支辨を主として租稅による場合と、主として公債による場合とでは、國民間に於ける富の分配に重大な關係を及ぼすことそれである。今少し此點を說明して見よう。

國民間に於ける富の分配が全く平等で各人が全く同等の地位にあるものと假定すれば——左樣なとは實際には決して存せない——政府が戰費の負擔を公債によつて支辨するも租稅によつて支辨するも、其作用は全く同一であらう。然し

公債支辨の場合は、後年に於て利子の支拂を要し、租税支辨の場合には其必要は全く存しない。乍併利子を支拂ふ爲めには、政府は其れ丈け矢張租税を國民に課する外はない、從つて國民皆全一の地位にあるものとの假定の下に於ては、利子の支拂をするもせざるも其結果は全じ事である。何故とならば、政府は國民全體から利子支拂用の租税を徴收して之を公債所有者に支拂ふのであるから、國民は政府へ上納すると同時に又た其れ丈けの利子の支拂を受けるわけで結局出す入らずである。政府の公債一萬圓を所有する人は之れに對して一ヶ年六百圓の利子の支拂を受ける、然し政府が此六百圓の支拂を爲し得る爲めには、此人は租税として六百圓を上納せねばならぬのである。同じ人が其一萬圓を一時に租税として政府に納めたとすれば、彼は年々六百圓の利子支拂を受けることはないが、其れと同時に又年々六百圓丈けの納税をする必要もない、結局は全じことである（元金償還の場合も亦同じ）。トコロが、實際左樣行かないと云ふものは、國民間に於ける富の分配平等ならず、各人の地位夫々大に異つて居るからである。即ち大いに富める者あり大いに貧しき者あり其中間に種々異つた狀態にある人々が多數存するのが實際の有樣である。ソデ右二つの場合は其作用甚だ異つたものとなるのである。

戰爭の場合のように一時に多額の徴收を國民に賦課せねばならぬ際には、政府は主として富者の力に藉らなければならぬのである、何となれば、貧者は一人々々に就ては勿論貧者全體としても一時に負擔し得る力は甚だ小なるものであるから、多額の徴收に應ずることは事實上到底不可能な事である。租税上納に充て得る餘剩は貧者之を有すること甚小である。從つて戰費支辨の爲めの被賦課者は主として富者でなければならぬ、而して所得の高の増す程租税負擔力は累進的に増すものである、餘剩の割合は所得高よりも大なるが常例である。五萬圓の所得ある人と十萬圓の所得ある人とでは後者は納税力は二倍では止まらない、更らに其れよりも大である。故に次の結論を生ずる。政府が巨額な戰費の徴收を要するときは、富者は必ず貧者よりもより多く之れに應ぜねばならぬ、巨富者は中富者よりもより多くそれに應ぜねばならぬ、而して其高は富の高に比例してでなく累加的に多くなければならぬのであつて、此れは選擇の餘地を殘さざる公理である。選擇の餘地の存するのは、其累加的徴收を租税の形に於てす可きか　公債の形に於てす可きかの一事あるの

みである。政府は此一事を決す可き權能を有すると共に其義務を負ふものである。

ソコデ、主として富者をして直接の負擔者たらしむる方法中、租税として徴收するのと公債として募集するのとの差違如何と云へば、直接の作用は殆んど同一であると答ふ可きである。何れの方法によるも富者は其有てる富の度に應じ若くは之れに近く累進的に其所有の富を支出するに止まるのである。然るに、其後日に於ける作用に至つては、兩者の間に甚だ大なる差違が起るのである。即ち租税によつて徴收する場合には、富者は其支出した富の全部を悉く結局負擔して仕舞ふのであるが、公債による場合は、直接には富者が支拂ふけれども、彼等は其全部を負擔するのではない。後日に於ける元利の支拂に方つて、彼等は無論其支拂に要する政府支出の一部分を租税として上納して負擔するには相違ないけれども、彼等以外の國民も貧者に至るまで、其爲めの租税上納を免れないので、結局一部——時としてはより大なる部分——は、此等富者以外の國民の負擔に歸することとなるのである。租税支辨の場合には其時の富者は何等の代償を與へられることなく費用の全部を負擔し、公債支辨の場合には、目前には富者が支拂ふけれども、其れと同時に彼等に對して將來何れの日かに於て、貧者から彼等に其或部分を返納せしむ可しとの約束を與へられることになるのである。此一事は兩者間に於ける重大なる差違であつて、其の社會政策的意義は輕々に看過するを許さぬのである。されば戰費支辨を租税によるか公債によるかの決定を爲す政府は、同時に其負擔を富者に課するか、貧者にも課するかの大問題を決定する所以となるのである。而して實際に於て、獨逸は初めから明かに租税支辨によつた割合は極小であつて、戰費の大部部は公債支辨によつたのであるが、租税主義によると稱して居た英國と雖も忽ちにして其主義を維持することが出來なくなつて大部分は公債支辨によつた、佛國其他の國何れも皆然らざるはなない。かくして交戰諸國は今何れも莫大な公債を負擔して居ることは、九月號の『改造』に於いて堀江博士が論ぜられた通りである。

（五）

公債には外國債と内國債とある。戰費の大部分を租税によらず公債によつた歐洲各國が、正直に其元利の支拂を爲さうとすれば、外國債の場合には、其れ丈け自國の現在の生産物を外國の債權者に取り去られるものであるから　其れ

丈け所得を減ずることは云ふまでもない。然し今日の處正直に外國債の利子すら支拂つて居る國はない、英國丈けは米國に對して利子を支拂つて居るが其他の國は有耶無耶の間に彷徨して居るのである。正直に支拂ふことは、到底出來ない相談であるが、若し其れが實行されるものとすれば、國民全體として其れ丈け苦しむわけである。トコロが、内債の場合は著しく異る。内債の元利支拂は、假りに戰前に於ける貧富の懸隔が當を得て居るものとしても、元利の支拂其事によつて、其懸隔を甚からしめて、社會上の不平均を大にする作用を有するものである。其れは何故であるかと云へば、公債の所有者は、頭數の上から云へば、中流階級以下の方が多い、愛國心に訴へ、各種のプロパガンダを行つた結果、下層階級の者も無理算段をして公債の募集に應じた。此れは獨逸のように外國に賴ることが全く出來なかつた國、而も殆んど一切の戰費を政府が公債によつて支辨した國に於て殊に然るのである。乍去、頭數は如何に多くとも、金高に就て見れば、各人當りは勿論、全體としても、中流以下よりは富者階級の占むる割合の方が多いのである。從つて公債の元利支拂を受くる者は、金高に於いては、富者階級に多いのであり、其反對に此元利の支拂に充つ可き租税は國民一般から徴收する。ソコデ、公債の元利支拂の行はる度每に、貧者中流階級は、其所得の一部を政府に取り上げられ、それに對して元利支拂金として、政府から受くる所は遙かに少いのである。反對に、富者は、租税の上納額よりもより多くを公債元利の支拂金として政府より受くるのである。されば、公債元利の支拂の行はれる每に、貧富の懸隔は段々増大せられる作用あるを免れないのである。これは、社會政策上甚だ重大な問題である。殊に今元利の償却を受くる富者は、或意味にては、不當の利得を收むるわけである。何となれば、彼等が公債の募集に應じたときと今日とでは物價の高さ言換れば貨幣の購買力が可なり違ふ。彼等が公債の募りに應じたときは、貨幣の購買力は、今日よりは小であつた。今日は、貨幣の購買力は曩日よりは大である(但し獨露墺等は其反對であることは云ふまでもない)。小なる購買力を有する貨幣を以て應募した富者は、今やより大なる購買力を有する貨幣を以て償還せられる。其差は彼等に取つて一種の不當利得となるのであるが、此不當利得の支拂者は誰であるか、其れは政府ではない、政府は國民から取つて國民に支拂ふ丈けである、結局眞正の負擔者は國民である。國民の大部分を占めるものは中流以下の小富者及貧者である、

彼等は戰費の負擔の外に猶更らに富者を不當に富ましむ可き支出をも負擔せねばならぬのである。

斯く考察して來ると、勞農露國が一切の公債を踏倒したと云ふことは、普通人々が考ふるやうに、亂暴一方のみの所業と斷ずることは出來ないのである。而して又た勞農以外の諸國は、勞農國の樣に原則として借金の踏倒しを宣言はしては居らぬが、實際の經過は其れと兄たり難く弟たり難き狀態に於てあるのである。右述べたような貧富の不平均を更らに此以上甚かしむ可き作用を惹き起さしめないで、各國の政府が正直に内國債の元金を償還しようとするには、其爲めに要する經費の負擔を富者に重からしめるような課税法を取る外はないのである。結局政府としては、唯だ工夫の責任がある丈けで、實際の負擔は國民中の何れかの階級に歸着する外はないのである。外國債のことは今姑く問題外とすれば、負擔賦課の方法さへ其宜しきを得れば事は濟むので、國民としては、公債元利の償却の爲めに別に新しい負擔を荷ふわけではない。戰爭の爲めの直接負擔は、旣に已に戰爭中及び戰後若干時に亘つて、國民としては荷ひ終つて居るのである。今内國債の元利償還を正直に又た大規模に行ふとしても、其れは國民の全體又は一部から取去られて、而して再び國民の全體又は一部に支拂はれるのである、其金額が如何に多くとも、國民を一體として觀るときは、右の手で支拂つたものを左の手で受け取るのであつて、決して新しい負擔を荷ふ次第ではないのである。從つて、公債――内國債――踏倒しと云ふことは、言葉の上では非道いことのように聞へるであらうけれども、國民全體として見れば、正直に支拂つて貰ふ場合と大して差違があるのではない。差違のあるのは、支拂者と受取者とが、國民中別々な階級に屬する者である場合に起るのみである。其れは負擔の新課ではなく、政府のやり方如何による富の分配の擾亂の問題である。戰爭の爲めの損失や犧牲ではなく、政府財政政策の犧牲である。此事は現在の狀態を正しく判斷するに方つて、是非篤と頭の中へ入れて置かなければならぬのである。私が堀江博士の說を斥けて、公債の負擔を以て現下の難局の最大原因なりとするを誤なりと斷ずる所以は玆に存するのである。

（六）

戰爭の爲めに現在の歐洲國民が苦しみつゝあるのは決して公債――外國債は今姑く問題外に置く、殊に私の說の如く

に之を帳消しにするものと前提すれば全く問題外に放出されるのである、――元利支拂の爲めではない。然らば其は何であるか、答へて曰く、前に説明した如く將來資源を以て戰爭用に充てた爲め是れである。將來資源の充當は公債支辨とは決して同一視す可きものでないことは前に説明して置いた。公債支辨とは、政府の懷勘定丈けの話で、而も其れは金融財政上の一假面に過ぎない、現實の負擔其ものでは決して無いのである。現實の負擔としての將來資源の充當とは何々であるかと云へば 其れは前にも述べた通り 現在又は將來生ず可き資本を喰ひ込んだことを云ふので、戰爭當時の所得を減ぜず、將來――即ち今日現在――の所得を減ずる作用を有する事項である。其方法は（一）對外的（二）對内的の二種あつて、對外的には又た（甲）自國の資本財を外國へ賣ること（乙）自國保有の外國有價證券を賣放つことの二つであり、對內的には、（甲）自國の生產資本を戰爭用に變ずること（乙）現在生產財の修理、修繕、補塡を中止して、之れに充つ可き財を戰爭用に充つることと（丙）新投資を中止し之を戰爭用に充つることの三方法がある。何れも將來――即ち今とすれば、今日現在――に於て生ず可き所得を、無理に戰時中に生ぜしめて之を戰爭用に使つて仕舞つたことである。御伽噺にある金の卵を產む家鴨を每日一々づゝ生ませる代に其家鴨を殺して一時に幾つかの黃金の卵を取り出して之を使つて仕舞つたやうなものである。言葉を換へて云へば、戰爭の爲めに現在歐洲國民が苦んで居るのは、物質上の有體物の損失ではなく、物質的の破壞の爲めの損失ではないこと、公債元利の支拂と云ふ積極的の支出の爲めでないのと同じである。其困難は受働的、消極的のものである。即ち戰爭が無かつたら依然として――或は更らにより增して――得る可かりし新所得が、今日に於いて得られなくなつたこと、即ち所得が減少したと云ふことと之れである。其所得の減少――得らる可かりし所得が得られなくなつた――と云ふのは、所得を產み出す可き資源が、所得を產み出す力を奪はれたからである。而して其れは主として、勞働に其勞働機會を與ふ可きインダストリアル、キアピタルの減少と云ふ形ちに於いて現に表はれて居る。即ち失業の激增と云ふ事が其れである。歐洲現在の失業は 勞働に業を與ふ可きインダストリアル、キアピクルの減少が其原因の一である。原因の一であると云ふのは唯一の原因であると云ふこととは異ふ、否其最大原因であるとも云へないのである。私は最大の原因は、此等有形資本財の減少にありと信ぜぬ 否

却つて全く外にありと思ふ。即ち國と國、人と人、民族と民族との間の憎惡心の激增並に經濟周期による人心の沈滯てふ二つの心理的原因こそ最大なるものであると確信するのである。乍去有形資本財の減少したとは、確かなる事實であつて、其れが現在の失業、不景氣の一原因であること、殊に其れが以上の心理的大原因と結付いて、今日の悲境を產み出したものなることは、毫も疑を容れる餘地はないのである。ソコデ此の有形資本財の減少を救ふ道は、其減少の道行を逆に行くより外にないと信ずる。即ち第一對外的の減少――資本財の外國への賣却、外國有價證券の賣却による――は、又た對外的に救はれなければならぬ。戰時中、歐洲諸國から資本財を買取り又た其保有の有價證券（公債も含む）を買取つた國々、主としては米國――日本も其仲間である――は、今歐洲の資本減少を救ふ可き其生產資本を、歐洲へ何等かの形――貸付でもよし、進上でもよし――に於いて返還してやらねばならぬ。斯くして歐洲に新たに所得を增す可き道を與へねばならぬのである。青木氏が大いに歐洲諸國に金を貸す可しと主張せらるゝのは、此意味であらう。否此意味でなければならぬ。唯一時の財政難――政府丈けの――を救つてやる爲めに、金を貸すと云ふのでは、無意味である、否場合によつては、却つて有害である。斯く將來資源充當の一部たる對外的將來資源の充當分は米國、日本を始め歐洲以外の諸國が一度決心しさへすれば、之を大部分消滅せしむることが出來る。ソコデ殘る所は、對內的なる將來資源充當分の處置である。其れは前にあげた通り、(甲)生產資本の戰爭轉用(乙)修繕、修理、補塡の中止(丙)新投資の中止の三項目から成立つて居るが、其多くは永久に失はれて仕舞つたもので、今更恢復し得ないものである。此點に於て對外的將來資源の充當とは、大いに趣きを異にして居る。ダカラ、世界を一體として考へて見るときは、對外的將來資源の充當の方が人類全體としては、遙かに健全にして妥當な方法であつた。何となれば、其れは唯だ一時の轉換に止まるもので、永久の喪失ではないから。其反對に交戰國が、戰時中あらゆる無理を忍んで、自國將來の資源を充てたことは、再び救ふ可からざる永遠の損失であつた。自國現在資源の充當は、其時に於いては非常に苦しかつたに相違ない、乍去其れは少しも後腹を痛めることなくして濟む――極端なる消費節約による國民能率の低下、國民營養不良による體質の退步は此限りではないが――。自國將來資源の充當は今日に於て歐洲國民に著しく祟つて居るのであつ

て、堀江博士が之を以て現在難局の二大原因の一に數へられるのも、此事計りを觀察すれば、十分諒解し得られるのである。乍併、誤解してはならぬ、其れは、現實の物の損失、有體的の破壞ではない、現在歐洲各國民を苦しめつゝあるは、其れより起る所の現在に於ける所得の減少、勞働機會の減少是れであつて、直接の破壞直接の費用其ものでは、決して無いのである。物の破壞は莫大ではあつた、然し其れは歐洲國民の生產能率が戰前同樣であつたなら若干年にして能く恢復し得るものであることは、前文に引用したケーンズ氏の言の如くである。而して物の破壞、有形の費用はイクラ大であつても、今日現在に於いて、歐洲國民の所得產出力が依然として大であるならば、其は少しも憂ふるには足りないのである。憂ふ可きは、過去の損失ではない、現在に於ける所得の減少、勞働機會及弊害の減少是れのみである。永久に失はれた生產財其ものを再び呼起すことは望まれないことである。問題は、如何にして現在に於ける歐洲諸國民の所得を增進す可きか之れである。然し此問題を考ふる前に、未だ一つ考慮に入れなければならぬことがある。其れは不換紙幣の處置それである。

（七）

歐洲各國の政府が、戰費支辨の爲めに取つた方法の第三は不換紙幣の發行——濫發——之れであつた。不換紙幣の發行は、一方に於ては一の強制公債募入であり、他方に於ては、一の強制徵發である。而して其何れとして見ても弊害の最も甚しいものであることは言ふまでもないが、何れの政府と雖も決して好んで此方法を取つたのではない、事情不得止として發行したものである。強制公債として見た不換紙幣は、利子の支拂を要せぬ點に於て普通の公債と全く異るものである、從つて前に內國債の利子支拂に就て論じた社會政策上の懸念は毫も不換紙幣には伴なはないのである。此點は甚だ結構な事である。其れと同じく元金の償却——即ち不換紙幣の償還——に就ては、內國債の元金償却とは、大分趣きが違ふのである。何となれば不換紙幣の所持者は全國民の各階級に普及して居て、公債の如くに富者階級に特に多く分布されて居るものとは同じでないからである。故に若し歐洲諸國が今何等かの方法によつて、兌換開始（全額兌換でなくとも）をすることが出來るとなれば、其利に浴するものは國民全般であつて、決して一部階級に限られるの

ではない。従つて內國債――外國債は勿論として――の踏倒しが必ずしも普通の人の思ふが如き亂暴な事でないと云つた道理は、不換紙幣てふ強制公債には適用せられないのである。不換紙幣の兌換開始（私は切り下げ兌換を主張する、其事は後段に說く）は原則としては、最も希ふ可きことであつて、其の踏倒しは公債の場合の如くに考へらる可きではないのである。然し其れと同時に直ちに考へなければならぬことは、其の兌換開始が如何なる工夫によつて、如何なる資源からして、實行せられるかの道行それである。不換紙幣の濫發による貨幣價値の下落は國民の凡ての階級を苦しめつゝある、乍去其苦しみの程度及び性質は必ずしも一樣ではない。財產所有者は債權者としては痛き打擊を受けるに相違ないが、其保有する財產の種類によりては、必ずしも打擊を受けては居らぬのである。近頃一の面白い逸話を聞いた、大戰爭の始まつた頃墺太利のヴヰーンで或人が二人の男兒に夫々財產を分與して死んだ、兄は極めて謹直な人間で、其分たれた財產を全部銀行に預入れた、弟は放縱な人間で、其大部分でウヰスキーや葡萄酒を買入た。然るに其後クローネの暴落の爲め謹直な兄の財產は、極めて僅かの購買力しか有せなくなり、銀行利子の收入では迚も家計を維持し切れず、甚だ憐れな生活を營むの餘儀なきに至つた。然るに放縱な弟は、其買込んで置いた酒類の價が甚だ騰貴した爲めに、巨大なる富者となつたと云ふのである。恐らく此れに類した運命は、幾多の財產所有者を見舞つたであらう。轉じて勞働者を見れば、勞銀の騰貴が貨幣購買力の下落に應じて居る場合は、不換紙幣の濫發によつて苦されて居ないわけであるが、定額俸給者の俸給は、原則としては、貨幣購買力の下落に比例して增加して居らぬものであるから、不換紙幣濫發の爲めに、最も甚しい苦しみに陷つて居るのである。

右は國內關係に就て考へた處であるが、不換紙幣濫發により被むる歐洲各國民最大の損害は、寧ろ他の方面にある。卽ち對外關係是れである。就中今日現在の如く歐洲各國の貨幣が其對內價値の下落より、遙かに强い度合に於て、其對外價値の下落して居る爲め、歐洲各國民は對外支拂の上に於て、外國より生活必要品や原料や其他のものを買入れるに於いて、他方には、自國の生產品を外國に送るに於いて、實に想像し得ざる程の損を爲しつゝあるのである。其反對に米國、日本其他の國々は、歐洲諸國の損に當る丈けの利を占めつゝあるのである。但し其れは、近頃のマルク崩落に見る

如く爲替相場が全く安定を失つて仕舞つては、唯だ勘定の上の話に止まつて、實際の利とはならない。損は現實で、利は假設的のものとなる。是れ位馬鹿々々しい事はないのである。其利がタトへ現實的であつても、其れは、決して正當なるものではない、其様な狀態は決して永續す可き筈のものではない、必ず國際貿易の衰徴を招き結局彼我共に損するのみである。況んや爲替關係が安定を失ふときは、國際貿易は不可能となる。今日世界の實狀は、殆んど此極點まで達して居るのである。

（八）

即ち先第一の急務は、國際間の爲替關係の安定を恢復するとそれである。其れは即ち各國本位貨の價値の安定を意味する。然るに不換紙幣の兌換開始が若しも急激に行はれゝば、貨幣價値の安定は迚も望まれない。兌換開始は結構なことであるが、其れは今の處如何なる方法による可きか、各國共に考案が立たない。其の考案の立つまで、今日の不安定の狀態を其儘に繼續して行くことは、到底堪へ得られないことである。其間に歐洲の疲弊は彌々益々著しくなる外はない。歐洲諸國の巨大なる不換紙幣の根本的整理は其案も立たず、案が立つても其實行の方法が見出されぬ。或人々の主張する如く――例へば、米國のアンダーソン教授――之を悉く金貨全額面兌換にすると云ふことは、言ふ可くして行はれ難いことである。其れに要する金は世界には存して居らぬし、存して居るとすれば、價値の恢復は出來ないことである。其様な底の知れない相談には、少くとも日本は、迚も與することは出來ない。之れに反して現在以下に各國貨幣の價値が下らないように、之れを安定する工夫（スタビリゼーション）は立たない次第ではなく、其の爲めの貢献は、日本の保有する僅かな金でも多少役に立ち得るのである。私は貨幣價値を戰前の程度に引上げると云ふ一切の試みは、到底成効せぬものと考へて居る、我々の爲し得ること、爲さゞる可からざることは、價値の引直しでなく、其安定である。言葉を改めて云ふならば、歐洲諸國民が、不換紙幣てふ強制公債又強制徴發によつて、既に今日までに支出し負擔し終つて居るものを、今改めて償還すると云ふことは、出來ない相談である。其れは、踏倒す外はないものと思ふ。從つて一見甚だ希はしく見へる所の不換紙幣の金貨全額償却と云ふことは、之を斷念せねばならぬと思ふ。其代り今日迄

に下落した其價値に於て不換紙幣を償却することゝ、即ち今日以上に踏倒しをせさることが、焦眉の急であると確信するものである。今日迄に下落した價値に於てゞも、償却すると云ふことは、歐洲國民の凡ての階級を利することであつて、內國債の場合の如く、貧富の懸隔を此以上著しくすることにならぬと思ふ。但し此事業を實行する手段が、貧者により重く、富者により輕き負擔を課するような性質のものであれば、其れは別問題である。歐洲諸國をして、此仕事を爲さしめる爲めには、戰時中莫大な金貨を歐洲から得た米國が先づ其保有の金を提供することを必要とする。日本も僅かではあるが、——併し日本としては、甚だ巨額な——金を獲得した、其一部は必ず此目的の爲めに提供せなければならぬ。歐洲諸國は、斯く得た金と自國現在の金とを基礎として、新たに定む可き割合に於て金貨兌換を開始す可きである。詳しく云へば、マルクもフランもリーラもクローネも——ルーブルは勿論のことなり——茲に思ひ切つた「デヴアルヴアチョン」(價値の切下げ)を斷行せられねばならぬ。其の決心が附かずにグズ〳〵して居る間に、困難は彌々加はるのみである。思ひ切つた「デヴアルヴアチョン」を行ふことなしには、貨幣價値の安定は到底之れを期待することは出來ないと私は信ずる。

(九)

ソコデ、話は前に戻る。歐洲の救濟は、色々な問題を含んで居るが、其多くは、何れも救濟の遂行、救濟の實現せられ得べき環境の作り出しに關係するものである、中心の問題は、如何にして、歐洲諸國民に少くとも戰爭前と仝程度の所得を産み出すことを得せしむ可きか是れである。

戰爭用の爲めに、將來資源を充てた內、對外的にかゝる部分は、米國が主として放棄すれば、之を恢復することは左まで難事でないことは前に論じた。ソコデ對內的のものは如何と見るに、第一の國內の生產資本の轉用は、實は甚だ限られたもので、必ずしも莫大なものではない、何となれば、土地、建物、鐵道其他の不動產は、戰時中は直接又は間接戰爭用に充てられたが、平和克復と共に、間もなく生產用に恢復せられたに相違ない。戰爭用に充てた切りで平和と共に生產用に恢復されないものは、多くは消耗品にかゝるのである、即ち食料、原料品、製造品等現に戰爭當時に存して居た

もの是れである。此等は一度其用を充たして消滅したものである。若し之を生産用に充當すれば、或は長く或は短く將來に亘つて所得産出の資源となつたる可き筈のもので、其れが戰爭の爲めに用られた爲め、最早所得を産み出さなくなつたのである。此れは今日に於て恢復に左迄困難を感じないのである、其高も左迄大でなく、而して歐洲國民の生産力にして伸張しつゝある限りは、其れ位のものは若干年の内に補塡するに苦まないのである。第二の各種の修理改良の中止は現に所得産出の額を著しく減じて居る、第三の新投資の中止も確かに所得減少の大作用を用して居る。ソコデ、當面の問題は、如何にして此の三つの項目から來る所得の減少を恢復す可きかと云ふこととなるのである。戰時中怠られた修理、改良は、今日以后之を新たにせねばならぬ、其中には修理の閑却の爲めに全く用を爲さなくなつたものもあらう、其れは全部の補塡を要する、又は著しく生産力を減じたものもあらう、其れは新たに著しく勞働なり資本なりを投ぜねばならぬ、戰時中繰延べられた新投資は、今日以後新たに試みられねばならぬ。以上何れの事をするにも、要する所は、新しい資本の投下之れである。歐洲は今其資本を有して居らぬ、歐洲丈けの力では、此二項の補塡は向後餘程年月を經るにあらざれば、之を實現し能はぬのである。然る限りは、歐洲の諸國民の所得增進は期し能はぬ。ソコデ我々は再び米國に立戻つて來ねばならぬ。米國が、戰時中莫大に增加した其資本の或部分を割いて、歐洲の將來資源充當を補塡して與れるのでなければ、歐洲は救はれないのである

斯く申すと米國人は或は云ふであらう、左樣汝等の主張する樣に、一にも米國、二にも米國と、米國が無盡藏の寶庫であるかのように、當てにされては、米國と雖も堪へ得るものではない。我々とても、歐洲救濟の任を敢て辭さうと欲するものではない。然し歐洲人のみならず、日本人たる汝等までもが、左樣我國許り當てにするのは、餘り虫が善過ぎる話で、折角の我々の菩提心も却つて其れが爲めに傷けられる。何とかモ少し他の工夫も凝して與れなくては困ると。如何にも尤千萬の話である。今苦境の淵に沈める歐洲は勿論、私共と雖も何も米國斗り當てにして、他に何等の工夫を凝らして居ないわけではない。唯だ米國の救濟が、問題の中核を形づくる所以を有力に物語らんた爲めに、以上の樣に八方から論じ詰めて見たに過ぎないのである。米國が一度思切つた援助を與へると決心したと云ふ一事だけで、歐洲人

の心理は俄然として建直るであらう。然れば、實際はたまで米國の御厄介にならずとも、一度向上の曙光を見出した歐洲人は、自己の奮發自己の努力によつて、失はれたるものは之を恢復し、更らに新に大に伸ぶるであらうと、私共は確信して居るものである。而して、米國が歐洲援助の大方針を確定すると云ふことは、今荒みに荒み切つた世界の人心を振興するに預つて多大の力があるに相違ない。私共の眞に重きを置く所は、實に此點に存するのであつて、米國の物質的、經濟的援助は、此の心理的建直しを招致す可き手段として、其の前提として、私共は之を切望するのである。何となれば、所得を産み出す眞正根本の淵源は、有形の貨財でなく、實に人心の作用であるから。

(一〇)

乍併、世界の人心の萎微沈滯は、獨り戰爭に伴ふ憎惡心の昂進のみによるのでなく、私の見る所では、經濟周期の關係も亦重大である。此點を無視しては、現下の問題の眞の解決は見出し得られない。歐洲に於ける不換紙幣の處分、「デヴアルヴアチョン」の問題、而して米國援助の決心も、歐洲に於ける所得産出力の恢復と共に、現在に於ては、何れも停滯の狀態に陷つて居るのは、世界人心の一般的萎微沈滯に加へて、經濟周期による最消極時代の到來が、其原因の一である。而して其れが爲めに、當面の問題たる經濟恢復、就中不換紙幣の整理は全く行き惱み、否中止の狀に置かれねばならなくなつて居る。殊に私共の主張するように、當面の仕事としては、「デヴアルヴアチョン」による貨幣價値の安定を先にす可しとする考を取らず、如何にかして下落した本位貨の價値を改善――即ち引上げ――し得可きかと云ふ事に腐心して居る人々は、此の經濟周期の到來の爲めに、全く手を拱いて退かなければならなくなつた。何となれば、然することは、現在の不景氣を彌々甚しくする外はないから。私は此一事丈けでも、其等の試みを以て今の時期に適せざる『インオポルチユーン』な試みであると考へざるを得ぬ。之れに反して、私共の主張する樣な『スタビリゼーション』の實現は、經濟的沈滯周期が到來しても、少しも中止するを要せず、否寧ろ却つて彌々其實行の急を認めるものである。何故に然るか。

資本制經濟組織は、貨幣價値換價の行程によるものである。一切の生産は、營利の爲めの生産であり、貨幣價値收得

の爲めの生産である。一切の生産設備が與へられて居ても、生産の結果より多くの貨幣價値が收得せられ得る見込が存するのでなければ、生産は起らないのである。生産は直接消費と何の關係なしに起る、其目標は、人の欲望充足ではない、人類に其必要とする財貨を供給せんが爲めではない、唯だより多くの貨幣價値換價を實現せんが爲めである。從つて、物價が一般に下落する傾向の存するとき、又は或生産業の生産品の價格が下落する傾向の存するときは、或は一般に、或は其下落の傾向の存する生産業に於て、資本的企業者は、生産を停止するか又は之を制限する、何となれば、折角生産費をかけて生産しても、其生産品の換價——賣價——が生産費を償はざるか、又は辛ふじて之を償ふ丈けで、餘分の餘剩貨幣價値を生ぜざる可しと考へるから、骨を折つて生産に從事するは無益なことであるからである。而して、生産費の中或ものは、短期間に之を切下げることの出來ないものがある、長い期間を當てにして創り出された器械の如きはそれである、又勞働者に支拂ふ可き賃銀も、物價下落の際だとて、之を切下げることは、多くの場合に於て甚だ困難である。殊に此度の戰後の如く、勞働者の勢力の著しく加はつた時期に於いては、僅かな切下げも、勞働爭議を惹き起す恐がある。ソコデ、物價下落の傾向の存するにも拘らず、此等の生産費の貨幣換價は之を縮少することは困難である。然るに生産品の換價は、一般の下落に背馳することは出來ぬ、企業者は其製品をより安く賣ることを餘儀せられる。だから出來る丈け、生産を手控へする。其反對に一般物價が騰貴の傾向あるときは、生産費を餘計奮發しても、生産を擴張する。直接の需要高の増減は必ずしも考慮に入るのではない。唯だ生産品をより多くの貨幣價値に換價し得可しとの希望は、企業者を驅つてより多くの生産を營ましめるのである。而して今日の發達した信用制度は此の勢を助長する。企業者は己れの手に必要な資本を有せずとも、より大なる換價の見込あるときは、信用機關を利用して、生産に必要な資金を借入れて、生産を擴張することが出來るのである。戰後の好景氣は我邦に於いても、銀行の無謀なる貸出しによつて彌が上にも煽られた事實は、讀者の熟知する處であらう。だから、一般の現象としては、物價騰貴の傾向あるときは、實際の狀況が許す以上に好景氣を呈し、反對に、物價下落の傾向あるときは、實際の狀況が已むなくする以上に、不景氣を呈するのである。

（十一）

戰爭中現在の資源は勿論、將來の資源をも充當して戰爭用の働きと物とを支辨したのだから、戰後に於いては、物及働きに著しい不足を告げ、其補塡の爲めに又た失はれたるもの丶恢復の爲めに、生產が激增す可きは當然である。即ち一時は其狀を呈した。然らば今日は最早其必要なきに至つたが爲めに、生產が縮少したのかと云へば、決して左樣ではない。生產は彌々益々擴張して見れなくては困る程、歐洲諸國民は不足を訴へつゝあるのである。イクラ作つても作つても、決して之れに對して需要のないのを患ふるには及ばないのである。然るに、今日は殆んど凡ての生產業者は、生產を手控へ、其れでも未だ製品の販路のないのに苦しみ、世界は大なる不景氣に襲はれて居るのである。尤も船舶の如きは過剩生產とも云へようが、其れは寧ろ稀なる例外である。一般に就て云へば、人類の眞の需要の立場から見れば、著しい生產不足を告げつゝあるのである。然るに生產業者は生產の手控へを餘儀されて居る。何と云ふ不思議千萬な光景である。乍去、これは、實に貨幣、信用經濟に立脚する今日の營利生產本位の資本經濟組織の本質の然らしめる處である。

貨幣價値の恢復は即ち物價下落の現象を伴ふ。獨墺露は別として、歐洲の物價は近頃段々下落の趨勢を示して居る、其下落が那邊にまで及ぶか、向後更らにもつと下落するか、其れとも此邊が底を入れたものであるか、人によつて夫々見る所を異にするが、兎に角騰貴の見込は一寸附かないとは一般に信ぜられて居る處であつて、若し變化が起ることあるとすれば其れは下落の方向を取るものと考へられて居る。此くの如き時期を佛蘭西語で『ベース』の時期と云ふ、今日は『ベース』も餘程甚しい時期に於てある。從つて、商品を有するものは、其價が向後下落す可きことを考へるから、早く賣放たうとするけれども、買手も亦向後猶下落しはせぬかと云ふ懸念を有するから、目下是非必要のもの丶外は買はないで、他日の安値を待つて居る。新規注文をしようとするものも、他日更に安い供給が得られるであらうと思ふが故に、目前に欠く可からざるもの丶注文だけに止めて置く。かくて商品の賣行は惡く、新規の注文は少くない。所謂注文生產でなく市場生產を營むものにあつては、生產品が出來上る頃は、其賣價は更らに下落するであらうとの心配

があるから、極く利益の見込あるものにあらざる限りは、生產を差控へる。生產の差控へは、勞働者雇入れの差控へであり、原料品買入れの差控へとならざるを得ない。かくて加速的に、一切の經濟的活動は萎縮するに至るのである。

資本主義的經濟組織の中心は、流通市場である。市場は全經濟的活動を左右する。市場に於て或る商品に對する需要が增加するときは、之れ應ずる供給は、需要增加の高よりも更らに多くなる傾向がある。其反對に市場に於いて或商品に對する需要が減じるときは、供給は需要が減じた以上に差控へられんとする傾向を持つものである。市場に於て需要が增すときは、供給は資本又は勞働の不足などを殆んど顧慮する暇を持たない。實際の事情として、賣行の見込さへ確實なれば、資本の供給は殆んど不足することはない。即ち信用機關が茲に働き出して如何樣にもして、資本を融通して來るのである。勞働の供給も亦不足を告ぐることは稀である、如何に好景氣の世の中でも、失業者の全く存せぬと云ふことのないのを見て、此點は直ちに首肯し得られるであらう。如何に好景氣の時代に於ても、資本的企業は一切の資本と勞働とを用ひ盡くし得ぬと云ふのは何故であるかと云へば、今日の企業組織は、物を生產する爲めの組織でなく、市場を見出す爲めの組織であるからである。此組織の下に於ては、需要あつて後供給起ると云ふよりも、寧ろ供給あつて需要の喚起を勉めつゝあるのである。此事はマーシァル先生が其經濟原論に於て、不可動的の確說を述べて居る。今日の企業者は、あらゆる方法を用ゐて、自己の生產品、自己の商品を賣附けんと勉めつゝある。其れが爲めに莫大なる費用を投じて廣告をする。最も盛んに廣告するものが最も多く賣る人で、必ずしも最も良き商品を產する人が最も多く賣るのではない。詰らない賣藥などでも、盛んに廣告すると澤山賣れると云ふことは、我々が日常見て居る處であるが、斯く極端ではないけれども、凡そ總ての商品は、皆同一の作用の下に供給せられて居ると見て大過ないのである。市場が一切の生產を支配するので、生產が市場を支配するのではなくなつたのである。

(十二)

普通景氣の惡いときは、資本も勞働も共に有り餘つて空しく使用者を待つて居るのであるが、今日の不景氣に於いては、有り餘つて居るものは勞働であつて、歐洲に於ける失業者の數は甚だ大なるものであるが、其反對に資本は却つて

不足を告げて居るのである。普通の場合に於ては、商品の賣行が止まり、資本の用ひ道がないと云ふのは、商品の供給が多きに過ぎた爲めに、其價格が下落し、企業者は相當の利益を得可き價格に於て其商品を賣捌くことが出來ないからである。此くの如き場合には、價格が少し騰貴しさへすれば、不景氣は一轉して好景氣となることも有り得るのである。否、其れが實際の事實であつたのである。然るに今日の不景氣は、其れとは趣きを異にして居る。商品の供給は過多ドコロか、今猶昨の如く甚しい不足を告げて居るのである。從つて其價格の下落は供給過多の爲めではない。ダカラいくら生産を手控して供給を減じたからとて、其れ丈けで景氣の恢復を期待することは決して出來ないのである。今日の不景氣亦價格下落を以て一原因とすることは、普通の不景氣と同じではあるが、抑々其の價格下落を惹き起した根本の事情が全く異つて居るのである。即ち今日の一般價格下落換言すれば、物價の下落は、甚しく下落した貨幣購買力の恢復が其主要の原因である。原因は主として貨幣の側にあるので、商品の側に存するのではない。而して貨幣購買力の恢復は未だ今日を以て終りを告げたりと斷言することは出來ない、向後も猶繼續して恢復の行程を續けるかも知れない。然るとき一般物價は向後も猶或る時期に向つては下落の趨勢を呈して、容易に逆轉することがないかも知れない。少くとも歐洲の人々否世界一般の人々の考ふる所は粗々左樣である。然る限り此點からしては、景氣の恢復は求め得られない、否、今日よりも猶更らに不景氣の狀を呈するに至るかも計られないのである。普通の經濟周期は易窮つて而して轉ずと云ふのが常例であるが、今日の不景氣は、勢は窮り放しになるかも知れないので、少くとも其轉換の力は普通周期の場合の樣に、自然的に其自らに任された儘で生じ得るとは考へられないのである、殊に貨幣價値の安定よりも、寧ろ其改善即ち引上げを急行す可しとの說が有力である限りは、景氣の恢復はよし自然的に起るとしても、甚だしく其力を弱められるものと思はなければならぬのである。

僅か乍らの利潤の增減の爲めに、好景氣不景氣忽ちにして處を變ずると云ふような現在の經濟組織は、決して理想的なものでないは言ふ迄もない。其爲めに人間の眞の經濟的厚生の向上が著るしく妨げられて居ることは疑を容れない處である。今日貨物の不足を訴ふること甚しい世界に於て、唯だ企業家等が利潤が得られない否得られても其率が低いか

らとて、生産を手控へて不景氣の現象を現出し、其爲めに人も我も共に苦しみつゝありと云ふことは、考へれば考へるほど、馬鹿げた話である。乍併、現在の貨幣及信用經濟に立脚する資本主義的生産の下に於いては、此れは不可免運命である。我々は、歐洲救濟の爲めに種々なる事を爲さねばならぬ、不換紙幣整理の爲めに多大の力を貸さねばならぬ。殊に我々は、歐洲に於ける、否世界全體に渉る國と國、人と人、民族と民族との間に蟠まる極端なる敵視心、嫉妬心、憎惡心の除却に勉めなければならぬ。乍併其れと共に、今日の如き行詰りを循環的に餘儀する處の貨幣經濟、其上に築れたる信用金融財政の仕組を、如何にして、少くとも、此循環から脱出することを得せしめる丈けに、建直し得可きかを考慮せねばならぬのである。此れは、實に重大な問題であるが、其れを考慮することは、世界の經濟的改造を眞に實現せんとするには、決して離するを得ざる所である。私は稿を改めて他の機會に於て、今日の貨幣制度が如何に建直され得るか、如何に建直すのでなければならぬかの問題を取扱つて見ようと思ふのである。而して此問題の考察は、又同時に歐洲現下の難問題たる不換紙幣整理の事業に對して、根本的方針を與へることになるのである、否ならねばならぬのである。

(一二、十二、四脫稿)

藝術と宗教より見たる日佛の傳統



ポール・クローデル

私の友人Gから諸君の前で、佛蘭西の傳統主義に就て話して呉れとの依頼を受けて、私は少しぎよつとした。佛蘭西の傳統主義と云ふ事は最も復雜混亂を極め、それに入る事は易いけれど、それから出る事の困難な問題だ。佛蘭西と云ふ國は殆ど二十世紀以上の過去を背景に持つた一の人格者だ。それは無論初から明白な國民的自覺を持つて居たとは云へぬが、引續いた而かも首尾一貫した存在と記憶とを持つた時代からを意味するのだ。眞の過去は永き遺産だ、豐富な記錄の寶庫だ、從て之れを研究する學者が其智情に充分の滿足を得んがためには、其民族の傳統と此の記錄とを照應せしむる必要があるのだ。

二十年來我等は知つて居る。一國民の魂、然かも其國民は偶然にも依らず、必然にも依らず、實に其熟慮的意志と、受諾した便宜に依て、最も早く自己に對する自覺を喚び起した程のものならば、其の民國の魂は總ての危險にのぞみ、總ての誘惑に會し、其の他自己の存在を危ふする他のあらゆる情に對し如何にして反抗し得べきものなるやを知つて居る。私は此の永き歴史の中より最も感動すべく又好奇心を引き得べき幾千の事實を引用し來つて、我等の國民的感情、即ち我等佛蘭西人を結び付くる頑强なる友情の何ものたるやを諸君に理解せしむる事のさまで困難でない事を知つて居る。此の國民的感情は、我等佛蘭西人が作る所の一の社會に對する好愛を意味し、而かも其の社會に於ては何人も孤立せず、各員の誠意は賞美せられ、各員は又自己に對して他人の批評と奬勵を受けつゝある事を知る事を意味するのだ。若し佛蘭西人に對して彼は禮義を知らぬ、彼は作法を持たぬと、批評が下されるならば、是れ程彼等に不快を與へる事は無いのだ。此の萬人即ち自己が屬する社會の生者死者を含む萬人の面前と批評の前に立てりとの恒久の感情こそ、是即ち我等の國民的傳統の最も不動なる一點なのだ。此の點こそ單に我等の長所を說明するばかりで無く、亦實に彼等外人が我等の欠點として指摘する虛榮心、殘酷なる皮肉を愛する傾向、我等の冷笑と我等の奇嬌を愛するの性癖を說明するものだ。

けれど私は此の心理的研究及び派手な引例の領分に無益な時を費すことを欲せぬ。亦我等の歴史の各篇又は古き各州の描寫が形作る快活な色彩あるアルバムの各頁を繰り開くよりは、（本來創意的にして統一的な佛蘭西は、最近まで封建的にして聯邦的な獨逸よりは、更に變化ある過去の痕跡を殘してゐる）寧ろ私は更に通俗にして、更に根本的なる諸點を明かにし、佛蘭西の傳統が何に依りて成立して居るか其の精神を理解せしめんと欲するのだ。

一國の傳統とは其天職を意味す。國民も亦個人の如く決して偶然には存在せぬ。彼等は自分に非ずんば成し得ざる或

る事をなし、自分でなくては、云ひ得ざる或る事を云ふが爲めに存在するのだ。換言すれば他人に依りて代られ得ざる或役割を演ぜんが爲めに存在するのだ。此の天職、此の傳統こそ過去に於ける痕跡を保存するものだ。そして此の傳統の古ければ古いだけ其の痕跡も亦深く、其の天職も亦人類一般の幸福の爲めに更に生命あり、更に本質的な或物のある事を考へさせる理由がある。そして私の考を更によりよく諸君に理解せしめん爲めに又外部よりするに非ざれば把持し難き此の廣大なパノラマの、より良き展望台に諸君を導く爲めに（諸君も知らるゝ如く、私の個人的の天職は主に私の祖國の外に生活する事であつた）私は對照と比較の方法を取らんとする。即ち先づ私は諸君の祖國に就て語らんとするのだ。言葉を變へて云へば、或外國人が日本に滯在する事數ケ月にして、漸く其の不案内より來る子供らしい滑稽な觀察癖より脱却し、而かも馴れつ兒になると、動もすれば失つて了ふ清新な好奇心と物珍らしさをまだ失はぬ者の（私は少なくとも、さうであれかしと望んで居るが）見た日本に就て物語らんとするのだ。若し私の印象が正當でなくとも、それは少なくとも諸君を面白がらせるだけの價値はあるだらうし、而かも或誠實にして同情ある外國の觀察者の眼に映ずる自國の姿の何ものたるやを知る事は、其國人に取て興味ある事であらねばならぬと私は思ふ。

私は世界の各國に於て一の活きた人物を構成する多種多樣な感情を、任意的な一種の渾一に要約して仕舞ふ滑稽な、思ひ上つた主張を持たぬ。唯私は日本人の性格中に於て最も獨得なものと見ゆる點を論じたいのだ。即ち特別に日本人的なりと見える態度は（佛語が此の種の表現に適した言語に富まぬから、更によき辭句を發見し得ぬ事を遺憾に思ふが）私は之れを知力の到達し得ざる優越者に對する敬虔尊敬、其優越者に對する自發的な認識と云ひ度い。亦存在の神秘に對する全體の宗教的態度とも云ひ度い。彼の古から日本が神の國と呼ばれたのは決して理由のない事ではない。此の傳統的な定義こそ、日本に對して與へられた最も正しき、最も深きものなのだ。日本は限り無き大洋の懷に其の凝結物の

如く擴つて居る。其の曲折に富む海岸、其入り込んだ内海、其神秘に滿ちた水路、總て是れ航海者に取つては眞に不斷の驚異なのだ。其の本土を形作る山脈は世にも稀しき複雜なる構造を成し、然かもそれが不可思議なる自然の痙攣に依て攪亂せられ、其の明日をも知らぬ賴り無き性質は、まだ靜まりきらぬ國土に漲る戰慄に依て發振たてられる。恰も之れ劇場の背景が今や取り付けられ、其の見えざる機械師の手を離れたばかりの畫布や柱がまだ其の慄えを止めぬ如くなのだ。見得る限り十重廿重に入り組みたる谷々、夜よりも暗き森林、茅や茨や小笹の群り茂つた藪計りだ。凡て是等の上に或る期節には小止みもなく降りしきる雨の幕が落ちる。不可思議な霧がさまよふ。貴國の新舊の畫家が斯くも巧に畫き了せた其の霧は、風景の一部をわざとらしく隱してはまた現はし、恰も其の見えざる秘義を指し示して、人の注意を引かうとする樣に見える。此の平原、山岳、島々、太洋、あらゆるものを凌駕し、自然が其の造物主の爲めに富て打ち建てたる最も大なる登壇として富士の大嶺が峙つ。

斯くして眼をめぐらす限り、日本人は到る處に、或は閉づるが爲めに時々開かるゝ幕、或は永き〳〵葬列の如く、喪の影の如く莊嚴に沈默せるながめ、或は神聖にして解き難き古經典の如く不可思議なる老樹の幹、水に洗はれた石、或は岩石の門、古木の柱の間を透して見ゆる幽しき遠影に圍まれて居るのだ。彼等の爲めには全自然は總て是れ禮拜の爲めに準備せられ、用意せられて居る物たのだ。歐羅巴人は自己を圍む事物を、其の快樂と利益の領地としか見ないのに反して日本人は自然を以て何より先づ神の作品とみなし、然かも神の勢力のいまだ滿ち〳〵てゐるものを考へてゐる。日本人は既に賤しき農家に入るのにすら履き物を脱ぐとしたならば、彼等は倚更以て、神が彼等に與へ、然かも、彼等と共有して居る此の領分の中に、如何なる敬意を以て進退し、行動せねばならないかは明白である。貴國の神殿は人間の氣儘に造つたものでは無く、唯風景の隱れたる暗示に從ひ是れを補足したものに過ぎないのだ。たとへば此の日光

の聖地に於けるが如く藝術は森の深き影を更に深くし、水の澄み渡たる響きを更に澄み渡らし、黒き葉陰の奥に永久に太陽の金と緋の光りを宿らし、青銅の鐘に雷の響きを捕へ、山門と階段の次第に高まり行きて、遂に土地をして雲に接觸するに到らしめ、鴻大なる殿堂の數々が千古の立合人の如く列を正して並んで居る其の眞中を通ずる鍵の手の通路の奥に、神殿の古き祈りは今も尙常に古いのだ。之れと同じく巡禮者の群衆は、其の感動すべき熱心を以て此神殿に押寄せ來り、とこしへに下げられたる簾の後ろに、彼等は何物を禮拜する。空の色を宿せる一面の靈鏡、木牌に記されたる祖先の名、夜の色にまぎれ勝ちな其の神像、殊に此の神秘に滿ちた夜なぞは、彼等の初心な靈が、信仰を以て默禱する所の者だ。

私をして最も驚かしたのは、奈良及其の附近の殿堂に於て見得る如く、日本初期に於ける佛教が、美しき彫像の數數に依て表現せられてゐるが、更に後世になると、日本人は此の外來宗教を自己本來の性格に依て變更を加へ、此の彫像てふ正確なる形象は漸次稀に、漸次莊嚴になり行き、其の禮拜せらるゝ像は益々濃厚の度を增す影のうちに消え去つて近世の如く完くその姿が見られない様になつた事だ。

日本に於ては超自然は決して自然に反對せぬのだ。即ち自然の法則に矛盾せず却てその神秘を表出するのだ。宗教の凡ての目的は不滅物に對して、精神を謙遜と沈默の姿に置く事なのだ。斯くして私は日本人の愛國心を以て、彼等が國土と精神上の交通の狀態にあるもの、即ち其の國土の表す姿に對して、渴仰崇敬の狀態にあるものと見るのだ。此の尊敬と禮拜の態度こそは、人の魂が特別に神靈の宿れる聖地に於て取るばかりで無く、亦實に凡ての被造物、即ち我等の如く同一の父に依て造られ、同一意志の表現として存在するものに對しても取る處のものだ。此の態度は日本人の作法と禮式に依て、凡ての生活關係の内に表れて來る。私は甞て京都に於て、此の世界に稀なる都の魅力を成す處の、彼の

美しき庭園の一つに散歩して、取つた齡に堪えかねて前に屈んだ松の大木を支えん爲めに、心盡しの大きな松葉杖を以て支えてあるのを見て非常に感動した事がある。云ふ迄も無く此の老木はそれが歐米人の考へる如く單に木材の材料や風景の斷片の如きものでは無かつた。それは活物であり一種の植物的老翁でありこれに對して彼等が孝養の義務あるものゝ如く考へて居るのだ。此の信仰的敬虔の感情、此の涙もろき親切心こそ、即ち貴國の藝術の極致である。最も不可思議と思はれるのは、私は貴國固有の藝術品を鑑賞して、如何に我等の趣味の貴國人のそれに遠いかと云ふことだ。我等の趣味は貴國人のそれが影響せられる以前に於ては、諸君が所謂デカダンの藝術と呼ぶ處のものに向つて進んだ。自分もまた恥しい事ではあるが、此の藝術の激烈にして華やかに、色彩に豐かに妙意に富み、無限の變化ある日常生活の光景に依て活氣付けられてゐるのを感歎してゐたのだ。此の藝術は人間が中心なのだ。之れに反して貴國人の趣味は、かの古畫に於て見るが如く、人物は殆どその影を認め得ざるか、或は亦不動なる木石とその趣を同じうする、羅漢老僧如き者の姿を點出するに過ぎぬ。一尾の鯉、木にかくれる一匹の猿、數輪の花、一場の風景、凡て是れ一本の靈筆が、字の畫の如き正確さを以て描き出したる數條の線に依て表されるのだ。是れ即ち價高き掛物の仕合せな持主が無限の注意を以て我等の前に繰り擴げる處のものだ。不斷に驚異と歡樂を求めて止まぬ我等野蠻人には、貴國の藝術に對する最初の所感は、時としては幻滅に終る事がある。然し我等は漸次微妙なる筆致、其の正確を得たる觀察を、例へば一匹の猿のその爪の先より尾の末端まで、其の運動の或一刹那を描く際に發見するのだ、その題材の單純なる、其の方法の簡潔なる、凡て無益なるものを省略する事に於て、明斷にして處女的情操に富めりとも云ひ度いのだ。之れを藝術と云はふよりは、寧ろ生命と云ふか。まだ名も無き物のはしくれを題材とするだけに其の意識には却て神々しさが現はれてゐるのだ。此處に存在の憐れなる一片が、謙遜で敬虔な藝術家の力に依て永久に生きたものと成つてしまふ。かの古の

大名が黄金や水晶の器具よりは、寧ろ單純なる土器を愛し、而かも陶器師が其の作物に肉の暖味、露の輝きを移し得たが如く、凡て宗教家たる日本の大藝術家は永遠を覗くが爲めに何等の象徴をも、何等の神々をも寫し出さずして、實に單なる鳥や、蝶や、それよりも更に果敢なき、將に開かんとする蕾、今將に散らんとする花(しかも其の花は何等外より力を加はふる事無く、自己の樹液の單なる膨張に依る纖維の緊張と戰慄のみに依て散り行く姿すらも)として現はされ、凡て是れ彼等の魅力ある筆端に依て、其の運動の姿を畫布に止め、其物體は吾人の面前に今も尚生き〳〵として不死不滅の姿に永久に殘されてあるのだ。

此の日本國民の感情の根本にしみ流れる尊敬心は、其の日常の實際生活の諸形式の上に現れて居る事は、今更事新しく云ひ立てる事迄もない。貴國の昔の社會に於ては、人と人との關係は其の家族内に於けると、其の藩内に於けると將た其の職業關係に於けるとを問はず、自て宗教的儀式らしく規律立てられて居たと云ふても過言ではない。若し木や石の中に神秘的な或るもの、神々しい、あるものがあることを許すとしたならば、まして生きた人間の中には更により多くそれが發見せられねばならぬ。是れが即ち日本人の傳統的な禮儀正しさを説明するものであつて、私は外國人から幾多の惡例が示さるゝに係らず、常にそれが保存せられるを心から望んで止まない。私は日本語學が時とか人柄とかよりも寧ろ對話者の位置、對話の場所に從ひ、吾人の用ゐべき敬語差別の上に成立することを操り返す必要はないと思ふ。たとへば我等西洋人の驚く所は、巴里や倫敦の街頭に於てよく實見するが如く、馬丁が行を爭ひ樣に其同業者に聞き苦しき惡罵を浴せ掛くるに反して、日本のそれは殆ど謝罪でもするが如く、丁寧に挨拶して過ぐる事だ、これと等しく異國人の凡てに最も神聖にして不可解なものとして存する禮讓の内感こそ、即ち古來貴國に於ける過度に名を惜む習慣として現はれたのだ。若し人が其の人格の最も深き部分を侮辱せられたとすれば、其の侮辱者を消滅せしむるか、それとも自

ら消滅するか、二つに一つの處置を取らねばならぬ譯だ。最最に私は此の趣味と此の神祕の宗教とを、彼の貴國人が凡て珍重するものを外部に示さずして之れを奥深き所に蓄藏するに拂ふ注意、其の附物や、買物や、總て家族の貴重品を包むに其箱と其の包み紙とに念入りな技術を盡す事實の上に表れたる尤も感情の奥深き所を圍む處女的情操に於て發見するのだ。けれども私は此處に此の心理的論述を終らんとする。私は無論是を以て言ひ盡したりとも、之れを決定的眞理なりとも言はぬ唯私は此に日本の特殊な宗教的感情が人類全體と直接に連絡する所のある共一點を示し度いと思ふ。私は其の材料を神戸の最も場末の貧民窟に於て貧しき者の爲めに生命を提げ、乞食や賣春婦と生活を共にせる一人物の感想錄、然かも私は今それを嘆美を以て有益に讀みつゝあるその感想錄中に求め度いと思ふ。此の人物は基督教徒となり、福音の教の中に於て尤も彼を感動せしめた部分は單に隣人を愛する許りで無く、亦實に之れを尊敬する事だと云ふて居る。精神的にも物質的にも最も墮落した、最も失墜した人物を我等は常に愛せねばならぬ許りで無く、亦實に之れを名譽付け、之れを尊敬せねばならぬと信じて居るのだ。何となれば彼等は我等と等しく被造物であり、神の活ける殿堂だからだ。此の崇高なる感情程基督教的のものはなく、然かもそれが、特別に亦最も深く日本人的であるを私は最も愉快に感ずるのだ。

此處まで述べ來つて自分は餘り問題の興味に捕へられて行き過ぎた事を發見する。即ち諸君が求める處の佛蘭西に就て語らずして、却て、私の考を占領したものは日本であつたのだ。私は諸君が此の點を策略なりとして私を罪せられない事を望む。實を云ふと余り知らない事で、間違つても人が許して吳れる事の方が、一層の事余り自分が馴れ過ぎて居て然かも自分がその繪畫の一部分を成すが故に、觀察の不便を有するものよりは、論ずるに容易いものだ。諺に所謂『森の木は其森を見るを妨ぐ』と云ふのは此の事だ。故に私は此處に佛蘭西に就ては一言を加ふる事を以て滿足し、然かも此

の言は之れを古き著書にして佛蘭西が未だゴールと云はれた時代の事を物語るものの中から引用したいと思ふ。即ち其の書の内に『若し天が落ちて來なければゴール人は何等恐るゝ處のものを持たぬ。』と云ふて居る。此の一句は今日に於ても我國の國民的性格の上に下し得べき最も正しき判斷たる事を失はぬ。日本人に於ては、天は落ちて來るの必要のない、天は常に着物の共袴に於ける關係の如く雲のひだに依つて地と連續して居り、四面を回む水の鏡は、其の水平線に於て天に接觸して居るのだ、けれど佛蘭西に於ては天と地とは明白に分離し、人は之れを治めんが爲めに與へられたる地方の王國に於て、獨立の君主たる事を感ずる。神が佛蘭西人に對して持つたる信任は、彼等が亦それを裏切る必要を認めぬ。從つて彼等の恒久の奮闘の歴史常に打ち勝つたる恐る可き危險の歴史領土を失ふてまた得たる歴史、常に名譽を以て結末を告げた大冒險の長き歴史こそ叙事詩の如く血にまみれ、議論の如く繼續し小說の如く變化するもので、然かも要するに我等を罪する性質のものでは無い。故に私は自信自任、こそこれ佛蘭西人の性格の最も根本的なものにして、本質的亦傳統的の一點なりと、主張する斯くして佛蘭西人は、此の世界の究極の意義の何たるに係らず然かもその神秘は我々地球上の他の國民の眼にも透視し得ざるものなるに係らず、佛蘭西人は常にその心の底から確信して居る。即ち彼等は正當にして合理的なる全體の一部を構成し、彼等がその内に通路を發見せん爲めには、造物主が彼等に與へたる自然的の能力を保有して行かねばならぬことを。然して其等の佛蘭西人中の能力に於て、其の第一位を占む可きものは、即ち彼等の智力なのだ。佛蘭西の文學及藝術の目的は、世界を智力に同化し得可きものをなす事だ。亦我等の政府の本質的性質は爲政者と人民の判斷との間に作られたる親密なる契約である事。然かも此の人民の判斷は無數の形式に依て表止されたとしても、常に其の爲政者の行動を監視しつゝあるもので、人は是れを輿論とその名を以て呼んで居るのだ。

此の日佛人兩様の精神的態度の間に私は其の撰擇を試みる積りも無く、その調和を豫見する心算も無い。此の議論の初めに言つた如く、各國民は個人の如く、個人的の天職を持つて居る、此の天職が過去に殘したる痕跡之れを私は傳統と呼ぶ。私を慰める處のものは是等種々なる天職と傳統の綜合はその互に相補ふ事に依て、世界歴史を通じて此處に鴻大なる音樂的作物をなす事だ。彼等の間に決して私生兒的の苟合や、或は亦人爲的の混合物をなさしむる必要はない。たゞ彼の碧き海と枝にかゝれる果實の間には何等論理的な關係はないけれども、畫家の眼は此の兩者を併置して其處に無限の快樂を發見する。之れと等く各民族は自然に依て各異れる事情の下に置かれ從て異なれる理想を追求するけれど此の差別は唯に不調和或は軋轢を生ぜない計りでなく、全體の調和の更に豐富にして更に微妙なる要素を用求するのだ。即ち其の差別は怒りと嫉妬の原因とならぬ計りで無く、異なる民族の間、將に日本と佛蘭西の間に於ては互に相並ぶ可き事多きが故に、同情と提携の原因とならねばならぬ。

法學博士 福田德三著

社會運動と勞銀制度

（十版）

定價參圓九拾錢
送料廿壹錢○四六版

金城鐵壁と思つて居た『國家』が『社會』の發見に愕然として覺めたのはツヒ此頃の事と思つて居る間に時代は刻々と奥深く進んで行く空虚ににして安價なプロバガンダは既に十二分に飽かれて居る。現代の文化は、嚴密な學理的研究と實證的考察の上に立つ徹底した社會學說を求めて已まない。本書は(一)社會運動の理論的根據(二)勞働爭議の意義及種類(三)勞銀制度の三篇に分つて、著者の實證的研究の結果を、極めて平易直截に說いたもので、『社會政策と階級鬪爭』の姉妹篇であり、又其の通俗的解說並に補論である。殊に勞銀制度の解說は、未だ嘗て唯人も指を染めざりし未拓の分野に鋤を入れたものである。而して其は、數百の工場に就いて、實際に調査した結果に基くものである。理を談じて高遠ならんよりは、寧ろ事を究めて痛快懇切ならんとするのが本書に於て期した所である。

法學博士 福田德三著

社會政策と階級鬪爭

廿一版

定價貳圓八十錢
送料十九錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二〇

ゾラ原作

三上於菟吉譯

定價貳圓五十錢

◇送料十九錢◇

◇四六判上製◇

女性改造新年號の偉觀

近代の世界音樂

le Créateur lui a fait don. Parmi ces facultés la première est l'intelligence. On peut dire que le but essentiel de la littérature et de l'art français c'est de rendre le monde assimilable à l'intelligence, comme le trait essentiel du gouvernement de notre pays a toujours été cette espèce de pacte intime entre ses directeurs et le jugement, formulé de cent manières diverses mais toujours vigilants, du peuple qui les regarde agir et que nous appelons "l'opinion".

Entre ces deux attitudes de l'esprit, il n'entre pas dans mon dessein, Messieurs, d'indiquer une préférence ou de prévoir une conciliation. Comme je le disais au début de cette conférence, chaque peuple comme chaque individu a sa vocation personnelle et la trace laissée dans le passé par cette vocation est ce que nous appelons sa tradition. Il est consolant de penser que de l'ensemble de ces vocations et de ces traditions diverses qui se suppléent l'une à l'autre se poursuit au travers de l'histoire une espèce de vaste construction musicale. Il n'est pas nécessaire d'établir entre elles des unions bâtardes, des amalgames artificiels. C'est ainsi qu'entre la mer toute bleue et ces fruits d'or par exemple suspendus au bout de leur branche, il n'y a aucun rapport logique et cependant l'œil du peintre tire de leur juxtaposition un plaisir infini. De même chaque peuple placé par la nature dans des conditions différentes poursuit aussi un idéal différent, mais cette différence loin de provoquer des dissonances ou des conflits, nourrit d'éléments toujours plus riches et plus subtils l'harmonie de l'ensemble. Loin d'être une raison de colère ou d'envie, elle doit être entre les différents peuples, et spécialement entre la France et le Japon, qui ont tant à apprendre l'un de l'autre, une raison de sympathie et d'alliance.



le Créateur lui a fait don. Parmi ces facultés la première est l'intelligence. On peut dire que le but essentiel de la littérature et de l'art français c'est de rendre le monde assimilable à l'intelligence, comme le trait essentiel du gouvernement de notre pays a toujours été cette espèce de pacte intime entre ses directeurs et le jugement, formulé de cent manières diverses mais toujours vigilants, du peuple qui les regarde agir et que nous appelons "l'opinion".

Entre ces deux attitudes de l'esprit, il n'entre pas dans mon dessein, Messieurs, d'indiquer une préférence ou de prévoir une conciliation. Comme je le disais au début de cette conférence, chaque peuple comme chaque individu a sa vocation personnelle et la trace laissée dans le passé par cette vocation est ce que nous appelons sa tradition. Il est consolant de penser que de l'ensemble de ces vocations et de ces traditions diverses qui se suppléent l'une à l'autre se poursuit au travers de l'histoire une espèce de vaste construction musicale. Il n'est pas nécessaire d'établir entre elles des unions bâtardes, des amalgames artificiels. C'est ainsi qu'entre la mer toute bleue et ces fruits d'or par exemple suspendus au bout de leur branche, il n'y a aucun rapport logique et cependant l'oeil du peintre tire de leur juxtaposition un plaisir infini. De même chaque peuple placé par la nature dans des conditions différentes poursuit aussi un idéal différent, mais cette différence loin de provoquer des dissonances ou des conflits, nourrit d'éléments toujours plus riches et plus subtils l'harmonie de l'ensemble. Loin d'être une raison de colère ou d'envie, elle doit être entre les différents peuples, et spécialement entre la France et le Japon, qui ont tant à apprendre l'un de l'autre, une raison de sympathie et d'alliance.

qui vous montrera comment le sentiment religieux spécial au Japon se relie à celui de l'humanité toute entière. Je l'emprunterai aux souvenirs que je lis en ce moment avec beaucoup d'admiration et d'édification d'un homme qui a consacré sa vie au service des pauvres et qui vit au milieu des mendiants et des prostituées dans l'un des plus misérables quartiers de Kobé. Cet homme devenu chrétien, nous dit que ce qui l'a le plus frappé dans les enseignements de l'Evangile, c'est celui non seulement d'aimer le prochain, mais de le *respecter*. Non seulement nous devons aimer même les êtres les plus déchus, les plus dégradés, matérielement et spirituellement, mais encore nous devons les honorer et les respecter, parce qu'ils sont comme nous les créatures, les temples vivants de la Divinité. Il n'y a rien de plus chrétien que ce sentiment sublime, et je suis aussi heureux de penser qu'il n'y a rien de plus spécialement et de plus profondément Japonais.

Mais je m'aperçois, Messieurs, que je me suis laissé entraîner trop loin par l'intérêt de mon sujet et qu'au lieu de vous parler de la France comme on me l'avait demandé, c'est le Japon surtout qui a rempli ma pensée. J'espère que vous ne m'accuserez pas de ce chef d'un artifice coupable : il est beaucoup plus facile en effet de parler des choses qu'on connaît mal et sur lesquelles l'erreur est excusable que des sujets qui vous sont trop familiers et qu'on est mal placé pour observer, parce qu'on fait partie soi-même des tableaux qu'on voudrait peindre. C'est alors comme dit le proverbe, que les arbres empêchent de voir la forêt. Je ne vous dirai donc de la France qu'un seul mot et je l'emprunterai à un des plus vieux auteurs qui ont parlé de notre pays alors qu'il s'appelait encore la Gaule. "Les Gaulois, dit-il, ne craignaient rien sinon que le ciel ne tombe". Eh bien, cette phrase contient encore aujourd'hui le jugement le plus juste qu'on puisse porter sur notre caractère national. Au Japon le ciel n'a pas besoin de tomber, il est toujours là, réuni à la terre comme par le pan de sa robe par le pli des nuages et de toutes parts le miroir de l'eau vient le toucher à ses horizons. Mais en France les deux domaines sont nettement séparés, et l'homme se sent seul maître de ce royaume qui lui a été donné à administrer. La confiance que Dieu a eue en lui, il ne sent pas disposé à se la refuser à lui-même, et la longue histoire de luttes constantes, d'effrayants dangers sans cesse surmontés, de territoires perdus et toujours reconquis, de grandes aventures d'où l'on est toujours sorti avec honneur, cette histoire sanglante comme une épopée, suivie comme un discours et diverse comme un roman, qui est celle de notre pays n'est pas faite pour lui donner tort. Je dirai donc que la confiance c'est le fond principal, le trait essentiel et traditionnel du caractère français. Quelque soit le dernier mot de ce monde où il se trouve placé et dont le mystère est impénétrable à ses yeux aussi bien qu'à ceux des autres citoyens de notre planète, le Français sait du moins, il est convaincu jusqu'au fond de son cœur, qu'il fait partie d'un ensemble juste et raisonnable et que pour y trouver sa route il n'a aucun motif de se défier des facultés naturelles dont

en conscience d'elle-même, plus divine sous cette forme anonyme. Voici ce pauvre petit bout d'existence qui grâce à l'humble et pieux artiste est devenu vivant pour toujours. Et de même que vos grands seigneurs d'autrefois préféraient aux vases d'or et de cristal une simple écuelle de terre mais à qui le potier avait su communiquer le moelleux de la chair et l'éclat de la rosée, ainsi pour exprimer l'éternel ces grands artistes qui presque tous étaient des prêtres n'ont pas peint des symboles ou des dieux, mais précisément ce qu'il y a de plus fragile et de plus éphémètre, un oiseau, un papillon, moins encore, une fleur qui va s'ouvrir, une feuille qui se détache, des fibres qui se tendent et qui frémissent sous le gonflement de la sève. C'est tout cela à quoi par un seul point de leur pinceau magique ils ont prescrit de s'arrêter. La chose est là devant nous, elle-même, vivante et immortelle, indestructible désormais dans son essence passagère.

Je n'insiste pas, tant elles me paraissent évidentes, sur les conséquences qu'a eues ce sentiment de respect profondément imprégné dans le coeur de la nation Japonaise sur toutes les modalités de sa vie pratique et journalière. Il n'est pas exagéré de dire que dans votre ancienne société tous les rapports des hommes entre eux au sein de leur famille, dans leur clan, dans leur corporation étaient réglés comme les rites d'une religion. Et en effet si l'on admet qu'il y a quelque chose de mystérieux et de divin dans un arbre et dans une pierre, combien plus dans un homme vivant. C'est ce qui explique cette traditionelle politesse Japonaise dont j'espère bien, malgré tous les mauvais exemples qui vous sont donnés, que votre peuple n'arrivera jamais à se débarrasser. Je n'ai pas à vous rappeler que la linguistique japonaise est fondée beaucoup moins sur les différences de temps et de personnes que sur les différents degrés de considération, de cérémonie, avec lesquels nous avons à nous servir de la parole suivant la qualité de nos interlocuteur et le milieu où nous nous trouvons. Par exemple nous sommes toujours étonnés, nous autres Occidentaux, de voir un cocher qui dépasse l'autre, au lieu de l'injurier, grossièrement comme ce serait le cas dans une rue de Paris ou Londres, le saluer gentiment comme pour s'excuser. De même c'est ce sentiment intime de ce qu'il y a dans tout homme d'inviolable et de sacré qui explique ce que montra d'excessif votre ancien code de l'honneur. Un homme insulté au plus profond du sanctuaire de sa personnalité n'avait plus qu'à disparaître s'il ne pouvait faire disparaître son insulteur. Enfin je pourrais retrouver ce goût et cette religion du mystère jusque dans la pudeur dont vous entourez vos sentiments les plus profonds, jusque dans le soin avec lequel vous cachez les objets qui vous tiennent le plus à coeur, jusque dans cet art compliqué des boîtes et des multiples enveloppes sous lesquelles vous savez habiller et dissimuler vos présents, vos emplettes et tous vos petits trésors domestiques. Mais je veux terminer cette rapide exquisse psychologique, à laquelle je suis bien loin d'ailleurs d'attribuer un caractère exhaustif et définitif, par un trait

Les effigies invoqués se dérobent dans une ombre de plus en plus épaisse jusqu'à ce que comme dans les temps modernes on ne les voie presque plus.

Le surnaturel au Japon ne s'oppose nullement à la nature. Il n'en contredit pas les lois, il en souligne le mystère. Tout le but de la religion est de placer l'esprit dans une attitude d'humilité et de silence au regard des choses permanentes. C'est ainsi que le patriotisme japonais me paraît en état de communion avec le pays, un recueillement pénétré devant la figure qu'il nous présente. Cette attitude de révérence et de cérémonie, l'âme est habituée à la prendre non pas seulement à l'égard de certains lieux qui servent de sièges privilégiés aux influences divines, mais à l'égard de toute la création, de tous les êtres crées qui sont avec nous l'oeuvre d'un même Père et la révélation d'une même volonté. Cette attitude implique des relations qui se traduisent à leur tour par des gestes et par des rites. Je me rappelle combien à Kyoto, me promenant dans l'un de ces beaux jardin qui font le charme de cette ville incomparable, je fus saisi et touché de voir un grand pin trop incliné soutenu par une espèce d'énorme béquille qu'on lui avait pieusement adaptée. On sentait que cet arbre n'était pas seulement ce qu'il serait pour un Européen ou un Américain, une mime de planches ou un vague comparse dans le paysage, c'était un être, une espèce de grand-père végétal à qui l'on prêtait une assistance filiale.

C'est ce sentiment de révérence pieuse, de communion dans une bienveillance attendrie qui fait la vertu secrète de votre art. Il est frappant de voir combien dans l'appréciation de vos propres oeuvres d'art notre goût est resté longtemps loin du vôtre. Notre goût, avant que vous n'ayez contribué à le former, allait vers un art que vous considériez comme un art de décadence, et pour lequel je rougis personnellement d'avoir conservé une faveur prononcée, vers une représentation violente, pompeuse, colorée, spirituelle, pittoresque, infiniment diverse et animée de la vie et du spectacle de tous les jours. C'est l'homme qui y tient la plus grande place. Votre goût au contraire va vers les images anciennes où l'homme à presque disparu ou n'est plus représenté que par quelques effigies monastiques qui participent presque de l'immobilité des arbres et des pierres. Une carpe, un singe suspendu à une branche, quelques fleurs, un paysage dont un pinceau magistral a caractérisé en quelques traits aussi nets que l'écriture les étages superposés, voilà ce que nous montrent la plupart du temps ces kakémonos sans prix que leurs heureux possesseurs déroulent devant nous avec des précautions infinies. Et parfois nous autres barbares qui avons toujours besoin d'être surpris et amusés, notre premier sentiment est celui de la déception. Peu à peu seulement nous nous apercevons que cette souplesse délicieuse, cette justesse, ce suspens exquis dans le mouvement qui enveloppe ce singe par exemple depuis le bout des ongles jusqu'à l'extrémité de la queue, ce choix simple et parfois des moyens, cette suppression résolue et pudique de l'inutile, ce n'est plus de l'art, c'est la vie,

encore. Partout ce ne sont que des vallées dix fois repliées, des forêts plus noires que la nuit, des jongles inextricables de roseaux, de fougères et de bambous. Sur tout cela descend le rideau d'une pluie à certaines saisons presque continuelle, errent ces étranges vapeurs, dont vos peintres anciens et nouveaux ont si bien tiré parti, qui cachent et découvrent tour à tour et comme à dessein certains coins du paysage, comme si quelqu'un voulait les signaler à notre attention, exposer pour un moment leur signification occulte. Et au-dessus de tout le pays, dominant les plaines et les montagnes, les îles et l'océan tout entier, s'élève comme l'autel le plus grandiose que la nature ait jamais élevé à son Créateur, la masse sublime du Fuji.

Ainsi partout où le Japonais tourne ses regards il se voit entouré de voiles qui ne s'entrouvent que pour se refermer, de sites silencieux et solennels où mènent de longs détours pareils à ceux d'une initiation, d'ombrages funèbres, d'objets singuliers comme un vieux tronc d'arbre, une pierre usée par l'eau, pareils à des documents indéchiffrables et sacrés, de perspective qui ne se découvrent à lui qu'à travers le portique des rochers, la colonnade des arbres. Toute la nature est un temple déjà prêt et disposé pour le culte. Tandis que l'Européen ne voit dans les choses qui l'entourent qu'un domaine destiné à son agrément et à son profit, il est certain que pour le Japonais la création est avant tout l'oeuvre de Dieu, encore toute pleine d'influences divines, et si chez vous on n'entre pas dans la maison du plus modeste paysan sans enlever ses chaussures, avec quel respect les humains ne devront-ils pas s'avancer et se conduire dans ce domaine que les dieux lui ont donné et qui leur est commun avec eux? Et de même que vos temples semblent n'avoir pas été construits de parti pris, qu'ils n'ont fait que compléter et exaucer le voeu obscur et latent du site, qu'épaissir par l'art, comme ici en ce lieu sacré de Nikko, l'ombre énorme de la futaie, que guider la voix des ces eaux toujours coulantes, que fixer éternellement sur le fond noir des feuillages l'or et la pourpre d'un rayon de soleil, qu'emprisonner le tonnerre sous une cloche de bronze, que reprendre et solenniser par la gradation des portiques et des escaliers l'ascension d'une terre qui ne cesse jamais d'être jointe à la nue, qu'affirmer par ces allées rectilignes qui y mènent au milieu de ces rangées de témoins gigantesques l'appel reculé du sanctuaire; — de même ces foules de pèlerins qui avec un zèle émouvant ne cessent de se presser dans vos temples, que vénèrent-ils derrière ces rideaux toujours baissés? un miroir pareil à un reflet du ciel, un nom d'ancêtre sur une tablette, une forme confondue avec la nuit et surtout cette nuit même, ce mystère devant lequel leur coeur naïf se recueille avec piété.

C'est un fait qui m'a beaucoup frappé que pour le bouddhisme dans la période primitive du Japon à Nara par exemple et dans les temples voisins on voit des quantités de statues, d'ailleurs fort belles. Plus tard à mesure que le Japon a eu le temps d'imposer son caractère à la religion importée, on voit ces représentations précises devenir de plus en plus rares.

taire montre plus de traces de passé que l'Allemagne jusqu'à ces derniers temps féodale et fédérale) je voudrais m'attaquer à quelque chose de plus élémentaire et de plus fondamental et vous faire comprendre en quoi essentiellement consiste la tradition de la France.

La tradition d'un pays, c'est sa vocation. Les nations pas plus que les individus n'existent par hasard. Elles sont là parce qu'elles ont quelque chose à faire, quelque chose à dire dont elles sont seules capables, un rôle à tenir dans lequel elles ne peuvent être substituées. Cette vocation, c'est la tradition qui en conserve les traces dans le passé. Et plus cette tradition est ancienne, plus cette trace est profonde, plus il y a lieu de penser que cette vocation répond à quelque chose de vital, à quelque chose d'essentiel pour le bien général de l'humanité. Et afin de mieux vous faire comprendre ma pensée, afin de mieux vous conduire au point dominant de ce vaste panorama qu'on ne peut embrasser que du dehors, (et vous savez que ma vocation personnelle a toujours été de vivre hors de mon propre pays), je procéderai par voie d'opposition et de contraste. C'est de votre pays que je vous parlerai d'abord, c'est du Japon tel que peut le voir après quelques mois de séjour un étranger qui, après s'être défait (du moins il l'espère) de la naïveté et de la bizarrerie des premières impressions, en a cependant conservé la fraîcheur et ce sens fort des différences que l'accoutumance fait disparaître. Si mes impressions ne vous paraissent pas justes, elles pourront au moins avoir le mérite de vous amuser et je pense qu'il y a toujours quelque profit à savoir la figure que nous faisons au dehors aux yeux d'un observateur sincère et sympathique.

Je n'ai pas la prétention ridicule de réduire à une espèce d'unité arbitraire la variété infinie des sentiments qui dans tous les pays du monde constituent un homme vivant. Je voudrais dire seulement ce qui dans le caractère japonais me paraît le plus profond, le plus original. Eh bien, ce que me paraît l'attitude spécialement japonaise c'est ce que, faute d'un meilleur mot, car la langue française n'est pas très riche en expressions de ce genre, j'appellerais la révérence, le respect, l'acceptation spontanée d'une supériorité inaccessible à l'intelligence, une position religieuse de toute l'âme à l'égard des mystères de l'existence. Ce n'est pas pour rien que le Japon a été appelé la terre des KAMI et cette définition traditionnelle me paraît encore la plus juste et la plus profonde qui ait été donné de votre pays. Le Japon repose comme un groupe de nuages solidifiés au sein d'un océan sans bornes. Ses rivages découpés, ses bassins intérieurs, ses passages mystérieux, sont pour le navigateur une surprise continuelle. Les montagnes qui forment sa partie essentielle constituent une des constructions les plus enchevêtrées qui soient au monde, troublée en outre par d'étranges convulsions naturelles, et dont le caractère précaire est attesté par les frissons qui agitent encore un sol mal apaisé. C'est comme un décor de théâtre que les machinistes invisibles viennent à preine de quitter et dont les toiles et les portants tremblent

Tradition Japonaise & Tradition Française.[1]

Paul Claudel

Messieurs,

Mon ami Gomi a bien voulu me convier à parler devant vous du TRADITIONALISME FRANÇAIS et je me sens un peu effrayé. Le traditionalisme français, c'est là un de ces sujets touffus et encombrés où il est plus facile d'entrer qu'il ne l'est d'en sortir. La France est une personne qui a derrière elle plus de vingt siècles, je ne dirai pas de conscience nationale explicite, mais de souvenirs et d'existence continue et cohérente. C'est là un long héritage, un opulent trésor d'archives ouvert à l'étudiant qui pour orienter son coeur et son esprit éprouve le besoin de les remettre en contact avec les traditions de sa race. Depuis vingt ans nous savons comment l'âme d'une nation, d'une de celles qui, formées moins par le hasard ou la nécessité que par une volonté refléchie et par une convenance acceptée, ont pris le plus tôt conscience d'elles-mêmes, réagit en présence de tous les dangers, de toutes les situations possibles. Je pourrais, à l'aide de mille traits émouvants ou curieux que je n'aurais que la peine de choisir dans cette longue histoire, essayer de vous faire comprendre notrę sentiment national, cette espèce de camaraderie obstinée qui relie entre eux tous les Français, cette préférence pour une société qui est une compagnie, où personne n'est seul, où la bonne volonté de chaque membre est présumée, mais où chaque membre aussi sent sur lui la critique et l'encouragement de tous les autres. "Il n'est pas convenable", "il n'a pas d'usage", "il n'a pas de manière" sont les choses qu'un Français aime le moins entendre dire de lui. Ce sentiment constant de la présence et du jugement de tous les membres, et je dis vivants et morts, de la société dont il fait partie, c'est là un des traits les plus constants de notre tradition nationale, celui qui explique non seulement nos qualités mais aussi tant de choses que nous reprochent souvent les étrangers et qu'ils appellent notre vanité, notre goût du panache bizarrement joint à une ironie impitoyable, notre penchant pour la moquerie et le paradoxe.

Mais je ne veux pas m'attarder dans ce domaine de l'investigation psychologique et de l'illustration pittoresque et plutôt que de feuilleter avec vous les tomes de notre histoire ou les pages de cet album gaiement colorié que fait la description de nos vieilles provinces, (remarquons en passant que la France innovatrice et uni-

[1] Continuu prononcie à Nikkō le 00 aunt devaut.

改造日本の提唱

改造政治の原理

室伏高信

一

政治の改造を說くものはしば〲普通選擧のことを口にする。私はそれが無意味なことだとはいはない。私はサンヂカリストの一派なぞのように、若しくはボルシエヴヰキのあるもののように、普通選擧と一概に輕蔑することはできない。私はたゞそれによつて何ものか根本的なものが解決されると論んずる人たちに同ずることができないだけなのである。言葉を換へていへばそれは一つの政策の問題として見るべきものであつて一つの原理の問題とはかゝわりなきものと考へねばならぬ。それは一つの政策として政治の改造のうへに何ものかを與へるであらうといふことを私は拒まない。私はこの點である一派の急進病者ほどに思ひきりのいゝ人間であることはできない。そして日本の勞働團體のあるもの、例へば友愛會のような一團が、一方に無政府主義やサンヂカリズムを非難しながら、そしてそれにもかゝわらず××を要望しながら、普通選擧運動を冷笑しつゝある態度を十分に了解しきれないものである。しかしまた同時に普通選擧をどこまでも政策の問題として見ようとするものであつて政治の根本改造の前には何のかゝわりもないと云ふことを力說するものである。こゝに私の立場はブルヂョア・リベラルとも、マアクス派社會民主主義その他とも分裂するものである。

またある者は政治の改造のためにソビエットの制度を說くのを聽く。ソビエットの制度は議會制度に比べて進歩した何ものかゞあるかに見える。代表者と選擧民との接近の機會において

ソビエツトの制度は議會政治よりもより善き制度であるかに見える。しかしソビエツトが議會よりもより善き點があるとしてもそれは一つの條件のうへに假定されねばならぬ。即ち鬪爭手段としてソビエツトの制度がより善きものだと云ふことができよう。しかしまた同時に單なる鬪爭手段としては、ソビエツトは赤衞軍以下であるかも知れぬ。若しくは赤衞軍を伴はなくては鬪爭手段としての目的を達することができないかも知れない。しかも尙ほ考へなければならないことは、それが鬪爭手段である限り過渡的のものであつて來るべき時代の秩序でありえないばかりではなく、それもまた一つの政策の問題であつて原理の問題とはかゝわりのないものだと見なくてはならない。

二

政治の改造はその根本原理の改造から出發しなくては、それは一年二年の間の問題ではあつても、社會改造家の目標とするには足らない。この原理の問題に面しては、マアクス派社會主義は何ものをも與へてはゐない。レニンは共產主義の最高相についてマアクスを引用して一つのユトピヤを畫いてゐる。私は嘗つて二年餘の前に「改造」でレニンのユトピヤについて一文を書いたことがあつた。この所謂共產主義の最高相ではどのやうな政治原理が支配するか。そこでは國家も民主主義も存在の理由を失ふものである。從つてそこには如何なる政治原理と云ふよりも無政治の原理が行はれるものと見なくてはならない。しかしこの時代はマアクス派社會主義の理論によつて期待することができるかどうか。また期待することができるにしてもそれはあまりに遠い將來のことでなければならぬ。マアクス派のわれ〱の目前に與へてゐる政治原理はレニンによれば獨裁政治である。カウツキイによれば社會民主主義である。この二つの政治原理のうちには一見したところ非常に大きな隔り、或は根本的な區別が存在するかに見えてゐる。その組織のうへにも、主張者の志向のうへにも慥に大きな隔りがある。二つのものが相爭ふに足りるだけのあるものがないとは云はれないであらう。しかも尙ほこの二つのものは、政治原理として何等の根本的な區別をもつてゐるものとは思へない。そはともに一つの政治原理の派生なのである。言葉を換へていへば一方は獨裁政治と云ひ、他方は民主主義と云つてゐる。しかも社會民主主義がほんとうの民主主義であらないことは、ブルヂョア民主主義が民主主義でないことと撰むところはない。撰むところはあつてもたゞ程度の問題であるに過ぎぬ。政治の改造は社會民主主義からは何ものも與へられては居らぬ。ボルシエヴヰズムにしても同じことである。獨裁政治を一つの政治原理として受

取ることはできる。しかもそは何等の改造的、若しくは革命的創造と能力とを示してゐるものではない。そはロオマ以來の舊原理である。そは僅に革命的精神の空氣のうちに存立してゐるとはいへるであらう。しかもそれ自身は何等革命的な要素を含むではゐない。そは同情に價ひする。しかも支持に價ひするものではない。

三

今日までの世界を支配してきた政治原理はロオマ以來のものである。この古るびた政治原理は時代によつて他の様々な分子と結び付いた。貴族階級と、自由民と、ブルジョアヂイと、各種の階級と若しくは經濟關係と結び付いて時代毎に色揚げをしてきた。ある時は代議政治の形を借りた。ある時は人民主權、人民總意　平民政府、普通選擧、様々の形によつて人目をも新らしくし、若しくはそれ〲の時代の、特に經濟的關係の求めるところに適應してきた。しかも各時代を通じて、若しくは様々の形態のもとで、常に同一の根本原理から隔つたことはない。そして政治原理の創造に無能な科學的社會主義は矢張り同一の若しくはやゝ違つた形態でこの古るきものをそのまゝに踏襲しようとしつゝある。危險は過去においてよりも來らんとするものにある。少くともその危險がより大きなものであると思ふべき充分の理由がある。今日の時代は　ラヂカリストが、科學的社會主義の前にたゞ拜跪しておるべき時代ではない。日本のようなラヂカリストの殆んど凡てを擧げてボルシエヴヰキとなりつゝある時に、われ〲の任務はたゞそれに同じ、その前に媚びて自らの位地の安きを求めべきの時ではない。來らんとするもののより善きものであり、より美しきものであることを希ふものは、現にあるものに對すると同一の鋭さをもつて正に來らんとするものに對して警醒し、批評し、そしてその來るべきものの道と目標とを誤らしめてはならぬ。何故なら、その來らんとするものへの誤れる指導はたゞ眞に來るべきものの道を阻むのみではなしに、一つのキヤタスロフエをもち來たさなくては止まぬからであらう。

四

ロオマ文明の精髓は二つのものにおいて要約されうる。ドミニウムとイムペリウムがそれである。ドミニウムは經濟的の原理であり、イムペリウムは政治的のものであつた。この二つのものは今日の時代にそのまゝに行はれてゐる。科學的社會主義はこのドミニウムに目をつけた。ドミニウムの破壞に目をつけた。そこに社會主義の革命的なものが存立する。しかも尚ほドミニウムに目をつけた社會主義は、そのロオマ文明の一原理を破壞するために、同じロオマ文明の武器イムペリウムをもつて

しようとした。獨裁政治にしても、社會民主主義にしてもこのイムペリウムの觀念から少しも解放されてはをらぬ。社會民主主義はイムペリウムをブルヂョア・リベラルの流儀に借用した。ボルシエヴヰキはボオダン、マキアベリイ、ホツブス流に借用した。しかも何れの場合にしてもイムペリウムから脫却してはゐない。ボルシエヴヰキになつてそれは益々その面目を發揚してきた。私はこゝにマアクス派社會主義の病を見なければならぬと思ふ。私は政治の改造はこの點から改造してかゝらねばならぬと思ふ。ソビエツトが一つの戰鬪的組織であることは前にも述べた。しかも戰鬪的であればあるほどそれは民主主義と遠ざかるであらう。かくのごとき非民主主義から自由、エンゲルスの所謂自由の王國が生れるであらうと云ふことは考へることはできない。ウヰルスンとカイザアとの戰ひにおいて自由と民主主義とがきたらぬようにヂヤコビン主義から自由と民主主義とが生れうるものと考へ及ぶことができぬ。そはそのあべこべにイムペリウムの發揚なのである。

五

改造政治はイムペリウムからの解放でなければならぬ。イムペリウムからの解放でなくては政治の改造はあらぬ。あるものはたゞ政策の末であつて根本の問題とは何のかゝわりもあらぬ。イムペリウムから解放された時に始めて根本的な新らしいものが考へられるであらう。それは××××××ることではない。人が事物を支配することである。××××代表することではない。代表と職分との一致するものである。

私はこう考へてゐる。この一文は短文だからたゞ私のこうした考の傾きだけを述べておくにとゞめるのほかはない。

農業改造方策

河田嗣郎

一 經濟一般の改造と農業改造

資本主義經濟は、商工本位の經濟である。されば資本主義が益々發展するに連れて、農業經濟は、漸次其の立場が苦しくなり、商工業の發達に逆比例して衰頽するか、然らざれば少くと

も、商工業の發達と轡を並べて進み行くことが出來ぬ。本來からいへば、農業と商工業とが、相並むで發達し得ざる理由はなく、二者は相倚り相扶けて進むで行くに於てこそ、始めて經濟全體の圓滿なる發達が爲し遂げ得られるのだが、今それが出來ぬといふのは、即ち資本主義といふ經濟の組織と遣方とが、あまりに商工本位であつて、然かも亦さうならざるを得ない理由を持てるものたるが爲めなりとする。

即ち資本主義は、普通に說かるゝが如く、營利を原動力として動いて行くものであり、資本の力に依て人の力を支配し、然かも其の經濟に與はり事業を營ぬ者は、互に資本の力に依賴して强食弱肉的の競爭を行ひ、事業界に於ては、元龜天正式の爭覇戰の行はるゝを以て本來の面目とする。然るに農業なるものは、固之れ「營利」よりも「必要」に應ずるを以て主眼とするものであり、又其の業務としての經營は、やはり人の力に待つ所多く、然かも之に與はる人々は、互に競爭者として相爭ふよりも、互に相扶けて共同自治的に遣つて行くべきものたるが爲めに、從て營利を專らとする事業としては、頗る不適當で、儲からない業務たるが爲めに、經濟一般が、愈々資本主義的になればなるほど、農業は寧ろ一般から繼兒扱さるゝことゝなり、之に從事する者は、段々落伍者とならざるを得ざるものとする。

だから私の信ずる所では、農業がやはり資本主義的な營利經濟に傾き、商工業の尻馬に乘つて進むで行つた日には、常に商工業の後塵を拜して居なければならぬばかりでなく、終には振り落されて、農業としての産業の滅亡を將來せざるを得ざることゝなるは、明かである。

然るに農業の衰亡といふ事實が、英國を見たやうな國柄に於て、たゞ一國の問題として起る分ならば、まだ何とか經濟全般を料理して行く道もあるけれども、之が我國の如き國柄に於て起り、又世界一般に涉る現象として表はれることになると、そこに忽ち食糧問題と工業原料問題とが起つて、之が爲めに經濟全般が行詰り、啻に農業ばかりの衰亡を以て勢は止らないで、經濟全體の瓦解を誘致せざるを得ない。此の意味に於ては、私は、資本主義の崩壞は、工業方面に於ける勞働問題其他に依て餘儀なくせられるよりも、却て早く農業の衰亡といふ事實に依つて齎らされるのではあるまいかと思つて居る。然かも其の農業の衰亡といふ事實は、資本主義經濟の行はれ、それが益々發展するが爲めに生るゝ事實なりとせば、資本主義は此の意味に於ても自滅的傾向を辿り行くものであつて、資本主義の體內には此の自滅の病因が宿つて居ると謂はねばならぬ。

すべて斯くの如く觀ることが、私の、資本主義と農業との關

係に就いて考ふる所であるから、普通に唱へらるゝ農業改造の問題や、農業救濟の問題やに關しては、私は、農業をば、資本主義に合致するやうに改造し、此道に依つて農業を救ひ得べしとは、考へ得ないのである。私は寧ろ資本主義經濟一般の行詰を信じ、其の早晩崩壞すべきを信じ、又之を全體として改造し、現時の經濟全體を救ふことに依つて、甫めて時勢の行詰りを釋き得、併せて農業をも救濟するを得ると信ずる所から、今農業の改造に就いて攷ふるに當つては、資本主義經濟全體を改造する道に沿ふて、農業の改造を行ふべき道筋を攷へざるを得ない。

然かも思へば、現時の資本主義が行詰つて、さて其次に之に代つて表はるべき經濟の據て立つ所は、其の精神に於ても、其の組織に於ても、在來農民の之を有し農業の之を有したるものと、其の根柢に於て相通へるものたらざるを得ざるべきは、社會主義の諸主張に照し見ても明かなる所である。

果してさうであるとするならば、資本主義經濟の改造の行はれるといふことは、農業に取つては、其の本來據て立てる地盤が更に一般的に確實にせられることゝなるに外ならず、農民精神と農業經濟とは、之に依て益々明確に其の本來の面目を立て得ることゝならざるを得ない。即ち將來に生れ出づべき經濟は一般に於て、強食弱肉の經濟ではなくて、相互扶助の經濟であり、其下に行はれる生產は、專ら利の爲めにする生產ではなくて、必要の爲めにする生產であり、又其の生產に關して行はれる勞働は、雇傭勞働ではなくて、獨立勞働であるといふやうなことが、現今經濟改造の眼目として普通に考へられて居る所である。然るに此等のことは、正に農民と農業とが、之を有する所のもので、今や漸く資本主義の爲めに之を失はとんしつゝある所のものなのだから、そが全く失はれない內に、一般經濟の改造が行はれるに於ては、農業は之に依つて其の本來有する面目を立て貫くを得ることゝなり、斯くて又甫めてよく其の存在の地盤を失はないで濟むことゝなる。蓋し若し農業が資本主義の爲めに、此の地盤を浸食せられ終るに於ては、農業は、前に述べた如く、それと共に亡び行く外はないからである。

何れにしても農業改造を行はんが爲めには、經濟一般の改造を行ふ必要があり、又農業改造の行はるべき道筋は、經濟一般の改造の行はるべき道筋たることは、先づ以て十分理解せなければならぬ所に屬する。同時に又その改造は、農業に取つては斯くて甫めて農業存續の地步を固め得べき唯一の道なることも十分理解されなければならぬ所に屬する。

二　小作問題と農業改造

農業改造に關する一般の議論は、どうしても上に示す所の如くならざるを得ざることは、私の信じて疑ひ得ざる所である。然らば次に、其の改造に關する個々の具體的問題はといへば、之は又種々の方面に關して、種々に考察せらるべきものを有する。

然し何といつても現今我國の農業に在つて、農業それ自身として最も切實に之を感じつゝある所の問題は、小作問題ならざるを得ない。而して其の小作問題が、現時の農業經濟組織に於ける大いなる欠陥より發生するもので、從て其の問題の根本的解決の爲めには、此の組織上の欠陥を除去するを必要とすること、少しく深く問題の眞相に就いて考慮する者の、誰しも認めざるを得ざる所なりとする。

然らば其の根本の欠陥とは何であるか、それは、農業生產上に於ける要素たる土地と勞働とが、別々の人に屬するといふことである。即ち土地は地主が之を所有し勞働は小作人が之を行ふものであり乍ら、其の勞働は雇傭勞働ではなくて、一種の獨立勞働であり、小作人は自ら勞働者として同時に又業務の經營者として其任に當り、然かも其の業務は實際に於ては純粹には作小人の獨立經營たるを得ないで、地主と組合的經營を行ふ有樣に在り、從て其の生產收益は、地主と小作人との間に大體之を折半(實際は地主が半額より少し多く取つて居るが)することになつて居る。然るに斯く生產の二要素が別々の人の間に分れて居て、從て收益の分割の必要を見ることが、抑も小作問題の起る源なのだから、此の欠陥こそ、實に世に小作問題なるもの在らしむる所以とせなければならぬ。然らば何が故に斯く生產の要素が別々の人の間に分れたることが、現時の經濟の欠陥と見なければならぬかといふに、其事は土地と勞働とに限つたことではなく、一般的に資本と勞働とに於て之を見る次第だが、特に農業に在つて、その分離を不可とせなければならぬ理由がある。なぜなれば農業といふ業務は今日に至るも之を工業に譬ふればやはり一種の手工業的な業務であり、然かも之を營む者に於て、資本なる土地を愛し之を培ひ養ふに依て、益々其の土地生產力を大ならしむるを得るものなるが爲めである そして此事は自作農の如く自ら土地を所有し自ら之を用ゐるものに在つては、容易に略行はるゝ所だけれども、小作制の如く、耕作を行ふ者、自らは其の用ゐる土地を所有せず、從て其の土地を愛養するとも、爲めに生ずる利益の大部分は、之を地主に獻げなくてはならぬものに在つては、到底よく十分に行はるゝを得べきものでない。それに又我國の如き小作制に在つては、地主の收得する所は、即ち所謂小作料なるものは、リカードーの說

いた地代に相當するものとは限らず、實狀に於ては、地代と併せて利潤收益が地主の所得となり、甚しきに至つては、小作人の勞働賃金の一部分までも、小作料の中に含まれて地主の所得に歸するやうなことも少くない。從て小作人は小作勞働を爲すとも、其の所得は、雇傭勞働者の得る賃金所得にも及ばないやうな實狀を呈することゝもなるからである。

然るに又更には、現今尚ほ農村には、封建思想が殘つて居て地主に對して小作人は從屬の地位に置かれ、社會的にも經濟的にも、常に其の下風に立たざるべからざる有樣であるが、之は全く地主といひ小作人といふ風に、土地所有の關係から、其間に區別の生ずるが爲めとせなければならぬ。併し此事は現時の人格平等主義の下に於ける經濟組織としては、大いなる欠陷を爲すものと謂はねばならぬのである。

總べて斯の如くなりとせば、今小作問題を解決せむが爲めにはどうしても農業組織そのものに手を着け、其の改造を行ふの避くべからざることゝなる。その改造を行はないで、たゞ地主の恩情に依て小作料の值下をしたり、其他小作人優遇の道を講じたりして見た所で、結局問題解決の爲めには、多く貢献する所がない。尚又、今の小作人を漸次自作農民たらしむる道を講ずる分でも、問題は當該小作人に關しては解決するだらうけれども、自作農民となり得ざる小作人の存する限り、問題の一般的解決は望み難い。然るに現時の如く所有權なるものが、自由に所有物を處分するを得る權利たるからには、一と度自作農民となつた小作人も、又其內何年かの間に種々な理由に依つて再び小作人となることもあるであらうし、又在來の自作農民にして下つて小作人にならざるを得ざる事情に逼らるゝ者もあるであらうから、問題はやはり何時迄も連續せざるを得ないのである。

されば小作問題はやがて之れ我國の農業經營全體を脅かすほどの大問題なれば、是非とも之を根本的に解決するの必要ある限り、其の根本的解決の爲めには、我が農業經濟組織の改造を行ふことの、實に已むを得ざるものありとせなければならぬ。而して其の根本解決の道は、一般的に勞働問題に於けると同じく、勞働を行ふ者と資本たる土地を所有する者とが、別々の私人たることを廢め、土地は之を國有となし、つまり社會總べての人々が之を共有するものとなして、總べての農業者は此の公有地を預り耕す所の農民たらしむる外に存せない。そして農民といへば皆實際土地を耕し農業勞働を行ふ人々であつて、今のやうにたゞ土地を所有するといふだけで、自ら何等農業勞働に從ふことなき種類の人々なからしめ、總べて皆働く人たらしめ

然かも働く人たる限りは、皆一家の生活を支ふるに足るだけの土地を預り耕すを得るものたらしめ、土地は其の意味に於て實際之を使用する者が支配する狀態を造り出すことが、實に問題根本解決の道でなければならぬ。私は此道を措いて、他に問題根本解決の道は存せないと信ずるのである。

三　農地國有制の實施

農地を國有にするといふことは、今の農業に對しては、隨分大いなる變革のやうに見へるけれども、然かしその程度の改造の行はるゝにあらざれば、小作問題其他之に類する現時の農業界の困難は、到底よく之を除去するに足らぬ。然かも又詳かに之を攷へて見れば、土地國有制の如きは、我國に在つては、決して何も珍らしいことでもなければ、又破天荒の改革と謂ふに足るほどのものでもない。私の觀る所では、我國に在つては、今日の如き意味に於ける所有權の認められたる土地私有制は、實は頗る新しいことで、明治の代になつて以後のことに屬する之を歷史的に觀れば、我國に在つては土地國有制は昔からの制度であつて、大化の改新に依つて其の制度が定められて以來、一般に認められたる制度としては、土地公有は實に原則的制度だつたのである。

試みに少しく其の有様を述べて見やうならば、我國建國以來大古に在つて氏族制度の廣く行はれて居た時代には、土地と百姓とは權勢ある大氏族に依て私有せられたと謂へるであらう。然るに權勢ある大氏族が漸次多くの土地と人民とを私有し、蘇我氏の如きが天下を窺窬するの危機を生むに至つた爲めに、終に大化の變革は行はれ、之に依つて氏族の土地人民に對する私有制を打破し、普天の下卒土の濱王土王臣にあらざるはなしといふ、大原則を樹立するに至り、茲に我國に於ける土地公有制は確定せられたのである。

其後大化の新政も廢弛して又再び氏族の私田私民が增加して其間から莊園制度の發達を見るに至つたが、賴朝の地頭政策は又此の私有制を打破することを目的として行はれた。即ち賴朝は天下を統御するの必要上、中央や地方の豪族共が土地を私有するの弊を除かんとし、源家の家の子郎黨をば地頭と爲して地方に派遣し、以て莊園の所有者たる本家領家と土地百姓との間の連絡を、其の中間に地頭を挿入することに依つて切斷することゝしたのである。從つて其後の莊園制度の下に在つては、何人が土地を私有するといふのでもなく、土地の上には先づ百姓の有する使用權と莊司や地頭の有する莊配權と本家領家の有す

る收益權と、幾つかの私權が重複して存在することゝなり、誰一人完全なる所有權を有するものとてはなくなつた。

然るに其後又土地私有の風再び興り、庄司や地頭の如きが漸次權勢を握つて土地人民を私し、足利氏の末葉に至つては、地方に於ける此等の大小無數の豪族の實力は、終に中央政府をして統御力を失ふに至らしめ、世は變じて戰國時代を出現するに至らしめた。然るに秀吉が天下を統一するに至つてからは、やはり氏の私有制の存する限り天下一統の政の行はれ難きを見、彼の有名なる檢地を行つて悉く天下の土地を丈量し、其の石盛を行ひ、諸侯は石高に依て封じ、其の有する權は所謂知行權なるものと爲した。斯くて後又家康の覇業成るに至つてからも、彼は專ら秀吉の政策を踏襲したのだから、諸侯の有する權は知行權たるに過ぎず、土地を所有するものとは謂ひ得られなつた、そして又百姓の如きは、土地に對しては昔から引續き使用權をこそ有しつれ、未だ一度も完全なる所有權を賦與せられたることなく、以て明治維新に及むだ。

然るに明治の代となり、民法の制定せらるゝこととなるや、彼の羅馬法式なる所有權の觀念が輸入されて、法典は其の觀念に依る所有權を認むることゝなり、土地に對しては玆に甫めて所有制が樹立せられ、農民中の或者等が農地に對して此の所有權を獲ることゝなつた。そして其の狀態が今日に及むだ現狀を爲して居ることは、改めて謂ふ迄もない。

要するに斯くの如き歷史的狀態を經して來て居るものだとすれば、我國に在つては土地公有制こそ大化以來の原則的制度であつて、所有權の認められたる私有制は頗る新しい制度と謂はねばならぬ。されば今農地私有制を廢して、國有制を立つるとも、それは謂はば大化の王政に依つて樹てられたる古き制度に復歸するものたるに過ぎない。即ち或意味に於ける王政復古た換るに過ぎね。言すれば、羅馬法から我が固有法に歸るものたるに過ぎぬ。そが破天荒の變革、未曾有の革新にあらざることは　之れで解かると謂はねばならぬ。

農地を國有にすることは、歷史的に觀れば、右の如く決して破天荒な企ではないにしても、然し現時の狀態より之を觀れば、可也大きな變革となることは之を認めねばならぬ。而して現時の農民が果して之を希望するや否やに至つては、大いなる疑問たらざるを得ない。現時の地主階級が之に反對するばかりでなく、恐くは自作農階級も之に反對し、小作人階級と雖も、今の地主階級を亡ぼして、自ら自作農の地位に上ぼり土地の所有を得んことをこそ熱心に希望すれ、土地の私有制を一切廢止することには、贊成せないであらう。けれども農民が之を好むにせよ好

まないにせよ、現時の如き農地私有制を存續して居ては、小作問題及び之に類似の問題は、到底根本的に解決せられ得ざるばかりでなく、農業一般の衰亡を防ぐことも、所詮困難なりとせねばならぬ。つまり問題解決の道は、現在の人々を滿足さすといふばかりではいけないのであつて、永久的に問題の起り得ないやうに、改造を行はねばならぬのだから、其の解決の道としては、どうしても、地主階級と小作人階級との別なからしむるやう、換言すれば、農民中、農地を所有する者と所有せざる者との別なからしむるやう、農地に關する私有制其物に關して改造が行はれなければならぬのである。

而して今此の改造の爲めに、農地國有制を行ふに就いては、實行策としては、一時に現所有者の所有を取上げてしまうことは、革命にあらざる限りは、行はれ得べきものでないから、政策としてはやはり徐々に地主の土地を國家に於て買收して行く方法を取る外はあるまい、卽ち現にバルカン諸國中に於て之をひ行つゝあるやうに、一定の標準を定めて土地の公正價格を算出し、其の價格に依て買收を行ふことと之である。而して其の買收に際しては、公債を以て代價の支拂を爲すを便とするや勿論で、然かも其の公債は利率を低くし、大體に於て農業の薄き利廻りに適合せしむべきものとする。そして又土地の公定代價に對する代價支拂は一定面積の農地までは（例へば二町歩とか三町歩とか）其の全價格に於て支拂ひ、其れ以上の面積の農地に對しては、面積の廣くなるに連れて支拂額を遞減する方法を採るが（例へば五町歩迄は價格の八掛、十町歩迄は六掛といふ風に）至當である。

然かも又更に之を攷ふれば、農地は地主に於て之を所有する場合にも、之に改良を加へないで、其儘にして每年使用すれば年々其の生産力を減じ、其の收益の遞減を來たす性質のものであるから、今農地を買收して之を公債に代へたる後に於ても、其收益遞減は依然として行はなければならぬ筈である。從て其の代價たる公債は、何年目々々々每に、其の利子步合を減ずべきものと定め、何十年かの後には、公債は全く無價値のものとなるやうに定め置くことと、理の當然と謂はねばならぬ、若し然かせないで、公債は永久に價値を有し、又永久に利子を生むものとして置くに於ては、そは經濟的に之を見て、土地よりも價値大なるものとなり、農地の買收に對する代價としては、農地の價値以上のものが支拂はるゝといふ、不都合を生ずる次第なりとする。

斯く國家が農地を買收する政策は、事情の許す限り迅速に、之を全國に及ぼし、なるべく廣き農地の買收を、なるべく短き

年月の間に行ふことを可とするのだが、今のやうに小作問題などが紛糾して、其爲めに地主の大多數は、土地を所有することの不便と苦痛とを感ずる有様の下に於ては、地主に取つても、其の土地の公用買收を得ることは、却つて便利な次第なれば、好むで買收に應ずる者多きを見るべきを、信ずるに足りる。從て事業は、人の想像するほど多くの困難と支障となくして、比較的容易に行はれ得べきを、信ずることが出來る。

四　自治組合に依る共同農業

國有にせられたる農地は、如何に之を使用經營するかといふことが、次に起る問題である。

國有農地の使用經營は、固より其の一部分は之を國家の直接管理の下に置くことが出來る。即ち國家が自ら其の經營を行ひ官吏と勞働者とをして其の經營の實際に當らしめるのだが、然し此の直接管理は、農業の性質上、豊かに生産を行ひ、其の生産物を國民消費の需要に向つて供給する爲めに行ふには適せない。されば此の官營農場は主として新種作物の試驗的栽培や、新しき技術及び肥料の試用や、新機械の試驗的使用や、育種上に於ける品質改良や、遺傳の研究や、其他ともかく農業試驗場として働くことを以て、主眼とせなければならぬ。同時に又其の農場には、作物其他に關する展覽會及び品評會の開設、教育機關の設置其他之に類する設備を爲して、模範農場として働くことにも、大いなる努力が拂はれなければならぬ。併し要するに官營農場は斯くの如く試驗場たり模範農場たるを以て滿足し常に國內農業の指導者として、一般農業の改良進歩の爲めに、專ら其力を致すべきものとせなければならぬ。

此の官營農業以外の農地は、成るべく農民の自治組合をして之を使用經營せしむべきものとする。即ち組合をして共同に之を使用經營せしむることは、農業の規模を大にし、從て其の生産費を省き、機械使用の範圍を廣からしめ、又勞働の能率を大ならしむる所以なれば、組合經營は、出來得る限り之を普及發達せしむるに努むべきものとする。現今農業上に於ける經濟的缺點は、その經營の規模が餘りに小さくて、生産に多くの費用がかゝり、機械使用が行はれ難く、勞働の能率低く、爲めに一國經濟の上から見れば、農業一般的に其の經營方法が舊式で、生産率少く、冗費多きことゝなり、農家個々より之を觀れば、其の業務收益少くて、一家の生活困難なるを免れ能はざることに存する。されば今此の缺點を救ひ、農業の生産率を高むると同時に其の經營を現代的ならしめ、其の收益歩合を大ならしめて、農家の經濟を良好ならしめんことは、農業を其の困難なる

狀態より救濟せんが爲めに、是非とも必要なる所で、然かも之を爲すの道は、右の如く組合經營を普及せしむることに存すると謂はざるを得ない。

殊には又元來農業なるものは、共同的なものであつて、共同作業の行はるゝに適するのみならず、共同作業の行はるゝに依て、益々其の生産業務として成績をば、技術的にも經濟的にも發揮するを得る性質のものなりとする。それに又農民の精神から之をいふも、共同自治を以て本來の面目と爲すものなのだから、今國有農地の上にコロニー的に農民が扶植せられ、其間に自治的なる組合が組織されて、機械や農具の如きも組合に依て共同に所有せられ、耕作經營上に於ける勞働や事務も共同に行はれ、恰も昔時村落團體に於て、共同耕作の行はれたるが如くにし、然かも其の技術と經營方法とは、飽迄之を現代的ならしめ、あらゆる智識を利用して、科學的農業の行はるゝことならば、其の業務成績の大いに擧がるべきことは、疑なき所である。

而して又其の組合を基礎として、農村生活が一般的に組成せらるゝに於ては、其はよく十分に共同生活の美果を結ぶを得て眞に農村らしき、美しく整へる、愉快にして住心地よき、部落團體たるを得べきことも、容易に期待し得べき所とせなければならぬ。

從て今國有農地の上に、廣きに渉つて多數に此種の共同農業組合が出來上がり、それが農村生活上に於ても、將又農業成績上に於ても、十分優良なる成績を擧げ、廣く模範を垂るゝことゝなるに於ては、國有地以外に於ける農業も漸次之に倣ふを希望することゝなり、一般的に農業の改良の行はれ得るのみならず國有地の擴張は漸次容易に又速に行はるゝことゝなつて、軈ての全國農地を擧げて、悉く國有地と爲し、其上に共同農業經營を建設して、農業根本的改造の業を成就するを得るに至るべきこと、決してユートピアたり得ないであらう。

而して國有農地に於ける共同農業組合に在つては、其の收益よりとしては、先づ以て國家に對して地代が支拂はれ、次には農舍機械農具の購入や修繕の爲めに要する費用、農用家畜の保存の爲めに要する費用、種子肥料の爲めに要する費用等が引去られ、然る上にて殘餘の收益は、組合員各自に對して、其の勞働の質と量とに應じて公平に分配せらるゝことゝならば、其の經營は頗る面白く行はれ得て、各人樂むで共業を勵むを得べき筈である。そして此の組合農業の於ける勞務は、すべて之を組合の自治に依て行はるゝものなれば、地主なるものゝ支配を受けることもなければ、雇主なるものゝ存在して之を支配することも

なく、共同にして然かも獨立なる勞働として、その勞働は十分愉快なるものならざるを得ないであらう。即ち此の組織を以てすれば、現今一般的に産業勞働に關して要求せらるゝ所の、勞働の獨立、經營の自治といふことは、遺憾なく實行され得べきものなりとする。現今頻りに唱へらるゝ資本主階級の廢除とか、雇傭勞働制の廢止とかいふことは、此の組合的共同農業組織を以つてすれば、容易に實現され得べきものである。而してそが決して實現困難のことにあらざるは、上に論示する所に依て明かなる所であつて、先づ小作問題の紛糾等に依て、地主の持て痾したる農地を國家が買收し、之に農民を扶植して、自治組合を組織せしめ、以て共同農業を營ましむることより始むれば、何時からでも實行され得べきものである。之をユートピアと思ふ者あらば、そは却つて彼等が物事を實際的に考へないで、たゞ人生とか習慣とかいふやうなことを、空漠に考へて、其考から之を推斷するが爲めであつて、その考こそ寧ろユートピアの基礎の上に立つものと謂はねばならぬ。

五　穀物專賣制の實施

以上論する所は、農地の所有に關する改造と、其上に行はるべき農業經營に關する改造の大綱であるが、そして私は其の改造の行はるゝに依て甫めて農業をして立つべき堅固なる地盤を得せしむるものと信ずるのであるが、然し問題はそれだけでよいかといふに、決してさうでない。右の改造の行はるゝと同時に尙ほ幾多の改造の行はるゝに依てのみ、農業は眞によく時代と共に發展し行くを得るであらう。そして其の幾多の改造の中には、或は穀物專賣制の樹立だとか、農村工業の復興だとか、工場の田舍分布だとか、其他一般的に文化施設の田舍分布による都鄙生活懸隔の緩和だとか、種々の重要問題が包含されて居るのである。然し今此等の重要問題に就いて、一々論義を試んことは、到底小論文の之を許す所でないから、玆にはたゞ穀物專賣制と田舍工業の復興及び工場の田舍分布とに就いて、簡單な觀察を試むるに止めて置く。

そこで先づ穀物專賣――特に我國では米穀專賣制のことだが元來農業に關する問題は、農業それ自身の疲弊衰頽に關することや、小作問題其他の勞働問題に關することやが、問題の一方面を形造ると同時に、我國の如き狀態の下に於ては、必ず又他の一面に於て國民食糧に關する問題が表はれて來て、兩者互に關聯して、農業問題全體をして、頗る內容複雜のものたらしめないでは止まぬのである。現に我國の如きに在つては、近年一般的に人口增加の勢の急速なのに比較して、食糧穀物特に米穀

の生産増加の勢が、兎角之に伴ひ得ざる所から、マルサスの之を憂へたやうな意味合の食糧問題と人口問題とが、段々迫つて來る有樣に在る。それに今又小作問題が非常な勢で發展し、地主と小作人との階級闘爭に依り農業生産は漸次衰退せざるを得ざることゝなり、小作人の小作地返還に依つて、農地の荒廢に歸するやうなのも少くない所から、此の食糧問題は、今後頻る急速に逼迫し來らざるを得ざる情勢を造り成しつゝある。

それに又此のマルサス流の食糧の分量對人口といふ意味の問題以外に、穀物の價格に關聯して、生産者たる農家と消費者たる都市住民との間に利害衝突を見、米價高ければ消費者側より其の調節の運動が起り、米價低ければ生産者側より其の調節の運動が起つて、之が爲めに段々都市對農村、商工業對農業 都會民對農民といふやうな對立關係を生じ、やゝもすれば其勢が進むで其間の一種の産業戰爭乃至は廣く社會戰爭の狀態を造り出さなければ止まざるべきを思はしめるものがある。

然るに又更には、穀物の價格に關聯して、社會の人々の中の或階級即ち貧民階級や勞働者階級中の或部分やは、穀物の供給分量こそ社會的に之を觀て、全社會の人々を養ふに十分であつても、其の價格が、此等の人々の所得に比較して高きが爲めに必要とするだけ十分に之を購入消費するを得ないで、常に空腹を抱いて營養不良に衰弱せざるを得ないといふ問題が存する。即ちマルサス流の食糧問題は主として食糧の分量より觀たる問題であるが、茲には又其の價格に關聯して生ずる階級的の問題が表はれて、一種の痛切なる社會問題として、食糧問題の一方面を形造りつゝある。

すべて這んなやうな風で、現今食糧問題は頗る複雜な問題となつて居るが、併し其中に在つても、食糧の分量に關する問題は、結局やはり農産技術に關する問題となつてしまうのであつて、之に經濟的の意義と社會的の意義とが、纒綿して來るに過ぎぬ。然るに食料品價格に關する問題は、其の經濟的の意義と社會的の意義とが頗る強くて、特に社會問題として最も重大なる意義を持つて居る。從て之が解決に關しては、頗るデリケートな關係の附きまとはるを免れ難い。

所で今米價に關して、或は調節策だとか何だとか色々に行はれて居るけれども、今の自由競爭制の下に於ける穀物商業を此儘にして置き、其間に造り成される所謂自由競爭價格と其の定まるが儘にまかせて置いて、さて其の出來上つた價格が高過ぎるとか安過ぎるとかいふので、之が調節を行はんとして見た所で、其の調節策が到底よく功を奏し得るものにあらざることは大正四年以來に於ける數回の經驗に照して見ても明かなる所で

ある。それに又價格を右のやうな意味合で調節する分では、如何なる程度の値頃に調節しても 利害の相反せる消費者と生產者とを 共に滿足せしむることは、どうしても出來得るものでない。値が高過ぎるからといふので之を引下げる爲めの調節を行へば 消費者は之を歡迎する代りに、生產者は農業の立行き難きを訴へて之を遮らんとするに定まつて居る。さればとて又價格が低過ぎるといふので之を引上げる爲めの調節を行へば、生產者は之を德とする代りに消費者は生活を脅かすものとして之に反對するは當然である。然かも現時に於ける一般消費者の生活狀態と、併せて又一般農民の生產經濟狀態とを、其の眞狀に就いて見れば、右兩者の態度は共に之を是認せなければならぬ有樣に在る。然し相反せるものを共に是認する分では、調節の行はれ得べき餘地はなく、調節策自身が一のヂレンマに懸つて居ることを證據立てるに外ならぬ。

されば今價格の問題を中核として出來上がる食料問題を根本的に解決せんが爲めには、主要穀物即ち我國では米穀、歐米ならば小麥やライ麥の政府專賣を實行するより外に道がないのである。即ち此等の主要穀物に關しては私的の賣買を一切禁止し農民の生產したる所を政府に於て賠償買上を行ひ、之を又政府の機關を通じて消費者に販賣するとゝ爲す外はないのである。而して此の專賣制の下に於ては、農民に對しては其の生產費を賠償する意味に於て各品種各地方に於ける價格を公定して代價を支拂ひ、政府は其の買上げなるものに利得を附せないで消費者に賣却することゝする 元來農業は營利の爲めに行はるべき性質の產業ではないのだから、農民に對する賠償買上價格は生產費を償ふを以て足れりとし 又斯くするに於て甫めてよく農業方面に對しては、營利の爲めに生產の行はるべきものにあらざる意義を徹底せしむることが出來る。それと同時に、又此等の主要穀物に關する私的の賣買商業が一切禁止せられることになれば、たゞ單に營利の目的の爲めに、國民の命を繫ぐべき食物の如きをまで、商業取引の具に供し、擅に其の價格を左右し投機取引や空賣買をまで行ふといふやうな現時の弊害をも、之を一掃することが出來る次第である。私は現今のやうに、無制限な賣買取引を、吾々國民の必要品中の必要品中にまで許して投機商人輩をして勝手氣儘な事を爲さしめて、少しも之を意とせない消費者と生產者ほど、お目出度い者はないと思ふ。此の時弊を救ふ方策としても、主要穀物專賣制は、之を斷行する價値ありと思はざるを得ないのである。

そして政府が、專賣穀物を消費者に供給するに就いては、富者と貧者とには 其の價格を異にして供給するを正當とする次

第だが、實際に於て之を行はんことは、頗る困難事たるを免れないであらうから、富者に高く賣る意味の爲めには、此の專賣制に伴ふ一切の經費は、之を富者階級の税負擔と爲すことが、正當に行はるべき方策と謂はねばならぬ。即ち穀物の如く其の需要の彈力乏しく、富者も貧者も一人の消費量に大差なく、却つて貧者の方が多く消費するやうな必需品に關しては、せめて左の如くにでもして、消費上に於ける負擔の公平を圖ることが至當の方策と謂ふべきである。

其他穀物專賣に關する種々の實行方策に至つては、幾らも之を細論すべきものがあるが、然し制度の眼目とすべき所は、大凡上に示す所で以て足れりとするであらう、要するに私は、一方農地の國有制と農業の共同經營との狀態を生産方面に於て造り出すと同時に、穀物專賣制を布いて其の生産物配給方面を整へることの必要缺くべからざるを信ずる者である。此の兩方面が兼ね行はるゝに依てのみ、甫めてよく、農業改造の事業は爲し得らるると思ふ。そして此の專賣制の實行の決して不可能ならざることは、戰時中に於ける獨墺諸國の實例の示す所であり實行比較的容易にして、又相當によき成績を擧ぐるに足ることは、此等諸國の實驗が、之を證し得たりとせなければならぬ。たゞ獨り共産露國に於ける專賣制の失敗したのは、其の專賣が名は專賣だけれども、實は徴發制に近く、殆んど無價値に等しい紙幣を以て強制徴收を行はんとしたが爲めに、農民一般の反抗を買ひ終に失敗に期してしまつたのである。即ち之は殆んど無償的に徴發せんとしたから失敗したまでのことなれば、相當代價を拂ひ生産費を償ふに足る賠償を爲して之を買上ぐるに對して、農民が何で反抗することがあらう。農民としては商人に賣るも政府に賣るも同じことである、然かも現時の如き狀態の下に商人に賣る分では、價格が下れば生産費をすら償ひ得ざる場合が少くない。それが何時も安定して必ず生産費を償ひ得る代價を以て買收せらるるならば、農業生産者は、何で之を喜ばざる理由があらう。たゞに之を喜ばない理由を有せざるばかりではなく、實は農業といふものは、斯かる安定を得るに依て、甫めて業務として立行く性質のものである。此點は農業本來の性質に鑑みて、十分に理解されなければならぬ點であつて、其の理解の得らるゝと同時に、專賣制の必要にして農業をして確乎に自立するを得せしむる所以の道たることは、容易に解得される次第である。

六　田舍工業の復活

既に農地國有制が行はれ、農業は共同組織となり、穀物に關

しては專賣制が實施せらるゝこととなるに於ては、農業それ自身に關する改造の、最も重要なる諸點は、大抵片付いてしまう譯だが、玆に尙一つ併せ行はれねばならぬ一重要事業がある。それは即ち工業の都市集中を廢めて之を田舍に分散し、併せて又亡び行きたる乃至は將に亡びんとしつゝある田舍工業を復活するといふことと之である。一見した所では、此の問題は農業に關する改造の問題を攷ふるに就いては、直接關係がないやうに見えるけれども、實は決してさうでない。此點に關する改造が行はれないに於ては、農業それ自身に關する改造の業が立派に行はれても、やはり農村經濟は立行き難く、農民をして田舍に安住せしむることは出來難い。

昔時農村に自給經濟の行はれた時代に在つては、田舍にはたゞに農業が行はれたばかりではなく種々の小工業が併せ行はれ、農業と工業との區別が、今日のやうに明瞭には出來て居なかつた。そして又都市の發達も今日の比較にはならぬ有樣であり、從て都市の產業と田舍の產業との間にも、今日のやうな明確な分業的區別は出來て居なかつた。田舍には小工業もあれば小商業もあり、農民にして同時に手工業者たり、農家の婦女は同時に織手であり裁縫人であつた。

然るに近世の產業發展が行はれ、資本主義經濟が漸次出來上るに連れて、都會は驚くべき發達を爲し、商工業は都市に集中せられ、都會と田舍との差が段々著しくなつて來て、其の懸隔終には經濟的にも一般文化的にも寧ろ驚くに堪えたるものあるに立至つた。斯くて田舍に於ける小工業の如きは殆んど悉く都會に吸收せらるゝか、然らざれば新たに興つた都市の大工業の爲めに亡ぼされて、田舍は單純なる農村と化し、農業ばかりが田舍の產業と考へられるまでになつてしまつたのである。現狀は實に此の有樣なりとする。

然るに翻つて農業の業務に就いて見れば、其の業務が季節的なるが爲めに、農業勞働は、忙がしい時には目の廻るほど忙がしいが、又閑な時には隨分閑で季節に於て所謂農繁期と農閑期とがあり、農閑期に在つては農民は農業に關してはその一家の勞働力を十分に利用する道なく、殆んど遊むで暮す外なき有樣にある。然し若し玆に田舍に小工業が多く存在して、其の大部分は家庭工業として行はれるものであり、其の製品は一部分は農村に於ける需要の爲めに、他の部分は社會一般の需要の爲めに供給販賣さるゝ性質のものであるならば、農民は農事の暇々に於ける餘つた勞働を之に向け得て、一年中をやゝ平均的に勞働することが出來る。斯くなるに於ては、其の農家一家の所得を增す上にも少からざる貢献あるべきと同時に、農家の勞

働が變化に富むことゝなつて、農民の精神と健康との上に、少からざる好影響を及ぼすことゝならざるを得ぬ。

されば昔田舍に農業と工業との併存したる時代に在つては、田舍の人々は田舍の生活を樂み、田舍の社會生活が、一の纒つた生活として、一の共同團體としての實質を造り上ぐるに、洵に都合よきものであつた。然るに今此の狀態が壞れてしまつた爲めに、田舍の人々は農閑期に於ける其の餘つた勞働を十分に用ゐることが出來ないで、精神的にも物質的にも、甚だ不滿足なる生活を營む外はないことゝなつた。尤も現今と雖も多少は家内工業的の副業が田舍にも行はれて居るけれども、若しそれが都會の商工業の經營して居る家内工業である場合には、例へば麥幹眞田や經木眞田をみたやうに、其の手工的勞働は、頗る無趣味な部分的な原料な仕事であつて、然かも其の賃金はスウエッチングに近いものたるが多く、之では玆に私のいふ田舍工業たり得ないのである。

私は田舍に獨立した小工業の復活する必要を、右の意味合からして是非必要と見る者であつて、例へば玩具の製造とか、木彫細工だとか、刺繡編物だとか、金屬及皮革製品だとか、籠細工だとかいつた風なものが、廣く田舍に行はるゝに至らば、今の農村經濟の單調を救ひ、田舍經濟を確立するを得せしめ、又田舍の人々をして田舍工藝に趣味を有し從て田舍を愛する人として、之に安住するを得せしむるに、大いに貢献する所あるべきを、信ぜざるを得ない。田舍の生活はたゞ金儲けの爲めに、農業ばかり營むで、算盤勘定ばかりして暮して居る分では、とても薄利で無趣味で遣り切れないものだけれども、田舍工藝の復活に依り、又一般的なる營利主義の打破に依つて、樂んで其の生活と業務とが營まれ得るやうになれば、こんな安住の出來る所はないのだから、其の意味に於ても田舍生活の藝術化は是非必要である。そして農民に此の安住の精神あるに依て而めて田舍と農業經濟とは立行き得るものなること、與々も忘るべからざる所に屬する。此の安住の精神が出來上らなければ、農業それ自身の組織を如何に整へて見ても、農村の荒廢は到底免れ難き所である。

此の意味に於ては又現今の都會に於ける大工業の如きも、之を成るべく田舍に分散せしむる必要がある。現今工業が多く都會に集中して居るのは、實に之れ資本主義の爲めであつて、商品を造るといふことよりも、之を高く賣るといふことが、事業の眼目となつて居るものだから、其の販賣上の便宜の爲めに、無數の工場が都會に集中群居して居る。そして其の結果は塵芥と煤煙とで以て都市の空氣を汚濁し、機械の擾音と勞働者や車

馬の出入との爲めに、都市生活をして宛然停車場生活の如くならしめつゝある。

けれども少しく營利本位の資本主義を離れて之を考ふれば、斯く工場が都會に集中する必要が何處にあるか。原料を得る上からでも石炭を得る上からでも、交通機關が發達してさへ居れば、工場が都會になければならぬ理由は少い。それに今では工場が都會に集中されて居るが爲めに、勞働者も都會に集中せざるを得なくなり、さなきだに、人口の都市集中の傾向ある所へ持て來て、愈々益々其の傾向を助長することになつて居るのである。

然し私はどう考へても、將來に於ける經濟一般と社會生活一般との改造の爲めには此の甚しき都市集中の狀態を打破せなければならぬと信ずる。私は一般的に文明の都市集中の極端なる狀態を打破し、文化上に於ける都鄙の懸隔を少からしめねばならぬと信ずる者であるが、その一般論に照しても、亦たゞ工業のみのことから考へても、工場の田舍分散を行ふことの、甚だ切要なるを思はざるを得ない。そして工場が田舍に分散すれば、工場としても、淸潔に作業を爲し、又勞働者の休息時間の如きを健康に好き自然の風景の下に過すを得せしめ、其の精神と肉體との疲勞を恢復せしむる上に、どれだけ都合がよいかわからない。それに又之を農業の側からいへば、勞働者は農業と工業とを兼ね行ふを得て所得の上からも、身神の健康の上からも、大いに都合のよいことゝなる。斯くて茲に都市と田舍との勞働生活上に於ける差異も緩和せられ抑も田舍と都會との差があまりなくなつて、社會生活一般の狀態は、大いに整頓さるゝことゝならざるを得ない筈である。

何しろ今のやうに經濟といへば營利一點張りで、其の營利本位觀から、商工業のみ獨り尊ばれ、獨り榮え、發達して、農業のやうな儲からない仕事は段々に等閑にせられ、從て人と資本とは競つて都市の商工業に向つて走り、田舍の産業と田舍の生活とが段々に荒廢して、社會生活といへば、形の上でも實勢上でも、殆んど全く都會ばかりを中心とし舞臺として行はれて行くやうでは、社會經濟は、終にそれが爲めに自滅する外はない此の自滅を防ぐことが、一般的改造の大事業の眼目とする所なりとせば先づ以て此の極端なる都市集中を打破すべく、産業上に於ける都鄙平均の大方針を建てゝ、改造の事業を遂行せなければならぬ。そして私は斯くて始めて農村と農業との建設的改造の事業も成就すると同時に社會生活一般の改造の事業が成功し得ると信ずる。工業の田舍分散の如きは此の大いなる意義の一端を爲すものとして、價値ある次第である。

要するに私は農業を改造せんが爲めには、現時の社會經濟一般に渉る改造を必要と信ずる者であつて、其の改造の大方針を確立し、それに從て農業の改造をも行ふべきものなりと信ずる。本論文に於て私の論示する所は　たゞ此の改造の大方針の農業方面に於ける表現を、其の要點々々に就いて、闡明した迄のことである　然かも其の要所々々を説くことに依て、全體に渉る大方針も、其の大輪廓だけは、之を髣髴せしめ得たであらう。

（完）

藝術改革と民衆の態度

村松正俊

事實として價値判斷を加へずに、承認せらるべきことはプロレタリヤ文學の成立であつた。これを否定しやうとするものは既にその事實を認めてゐるのである。人は自己の空想するところのものとして、事實を曲げて思惟する。五ケ年に汎る勞農ロシヤの存在を、承認しないことに依つて存在せざるものと思惟しやうとしたブルジョワ國家の過失がそれである。そうしてその同じ過失を現文壇の御歴々が敢へて犯さうとしてゐるのである。かゝるものは單にその眼の盲なるといはんよりは、寧ろ、自らを愚にしてもかく信じやうと願つてゐるのである。

かゝる信條は、一體どこから來たのであるか、それは疑ひもなく、いはゆる文學上の、官僚主義から發生したものである。文學上の官僚主義とは、他のあらゆる官僚主義と同じものであつて、それが單に文學的に現はれたのに外ならない。文學上の官僚主義はその政治的意味に於ける官僚主義と、ビューロクラシーとを兼ね備へてゐる。嘗てリヒアルトワグナーが、音樂に於けるユダヤ主義と名づけたものさへ含んでゐる。

凡そ、日本人程官僚的な、又官僚好きなものは餘りない。勝てば官軍とか、官尊主義とか、肩書き好きとか、下僚の奴隷根生とか、盡くそれである。さうして規則を知らない癖に、一切を杓子定規に扱ひ、一切を形式張らせることが好きである。さ

うしてその風が今や、日本のあらゆる部分に泌み込んでゐる。最も自由であるべき筈の政黨とか、新聞社にすら泌み渡つてゐる。以てその他の社會を推察すべきである。固より組織を變へてはならない。しかしそれとこれとは別である。人はこの風を日本が獨乙に學んだといふかも知れない。しかし乍ら、日本は必ずしも獨乙にのみ學びはしない。それは寧ろ、日本の素質ともいつて然るべきである。日本の現在の文明は、獨乙的に訓練されてゐるかもしれないが、社會的には、最も多くをアメリカに受けてゐる。さうして獨乙の惡弊とアメリカの短處のみを學んでゐる。官僚主義とは、結局日本文明の一特徴である。

日本の文學は、その多くを大陸に受けた。しかし乍ら、それは何れも英語を通じてゞあつた。それは單に經路又は動機に過ぎないで、本質的には、やはり日本的であつた。即ち英語を通じたるゾラ、モウパツサン、フロベールの自然主義は、單にかくの如きものとして採用せられ、さうしてそれが自然主義の原型と見做され、それ以前のものは一切自然主義でなかつたかくの如く一切を主義を以て區分し、或ひは形式を以て人を律するのが日本的官僚主義である。その見方に從へば、一度自然主義作家と認定せられたるものゝ作品は、その內容の如何に關はらず自然主義的と見做される。一度、人道主義者として銘をうたれたる時は、終りまでさうである。同樣にして詩人は決して小說に手を觸れることを得ず、評論家は戲曲を書くことが出來ないのである。專門家とはその名は美である。しかし乍らそれは決して官僚主義を意味するものでない。それをしてかくならしめたところに日本の弱點がある。そこに藝術といふいはゞアプリオリー的立場が出來てくる。しかもそれが實は經驗的なことを知らないのである。日本で小說といへば、結局現在存在してゐるところの、所謂主流となつてゐる人々のことを指すので、決してそれ以外のものではない。これ彼等が常に新らしき藝術がかゝるアプリオリーに適はざるの故を以てこれを否定しやうとする所以である。かゝる藝術に執着する態度は、彼ら自身が所謂通俗的とか藝術的とか、その讀者に應じて變ずることに依つてなほのこと官僚的なことを示してゐる。從つて彼等が、事實としてのプロレタリヤ文學を認めさらんとするのも亦當然である。しかし乍ら、如何なる觀念上の努力も結局事實に依つて轉覆せらるべきは明らかである。

かゝるプロレタリヤ文學の成立は、如何なる原因に基づくのであるか、それに二つの因子を指摘することが出來る。それは藝術自身の崩壞と、社會の新狀態の發生である。この二つは嚴密に分つものでなく、現在プロレタリヤ文學の成立にはこの二

つの因子が同時に必要であつたのである。かく分けるのは考へる爲の便宜に外ならない。

藝術は常に全體に對する一部として全體への交渉を保つてゐるが、又それと同時にそれ自身の世界を組み立てゝ、その獨自の存在を保つ。それはあらゆる存在について然り。かくの如くにして藝術は常にそれ自身や部に於ける變化と共に全體に於ける變化を受けてゐるのである。現在のプロレタリヤ文學はそれを同時に表明したものに外ならない。プロレタリヤ文學の成立は、最初いはゆる民衆文學にその耑を發した　しかし乍ら民衆藝術なるものは決して存在したことがなかつた。民衆は決して藝術を持つものでない。藝術は本來貴族的である。たまたま民衆藝術を唱ふるところのものは、自ら知らずして自己自身を民衆と僭稱してゐたのである。それは單に藝術内部に於ける一變化に止まつてゐる。即ち、藝術はそれ自身に於て進化するが故に益々精練を極め、巧智を盡すに至る。それを理解し得るものは同じ藝術圏内に於ても、極めて小數の通人、名人に限られてゐる。故に他のそれを了解せさる藝術の士は、好んで自分の立場を擁護せんが爲に、民衆藝術なるものを稱ふるに至るのである。それは寧ろその舊藝術の見地からすれば墮落であると共に、他の新たなる藝術の勃興である。それはたとひ民衆と號するといへども、民衆は決してそれに關係してゐない。それは純然たる藝術内部の出來ごとである。民衆がそれに關するのは、單にかゝる新たなる藝術を興す起因を與ふるに過ぎない。さうしてこの起因が常に藝術改革にとつて重大なものである。この點に於て民衆の役目を見逃すことは出來ない。

この問題を解決する爲には、見方を更に廣くとらなければならない。民衆とは生活の本體である。生活は只生物が生きてゐることを示すより外ないのである。固よりこの、生きるといふ事實を内觀すれば、種々なる段階に分つことが出來るであらう。例へば、植物的生活を存在といひ、動物的生活を生存といひ、人間的生活を生活といふが如きものである。しかし乍ら、かゝる見方は寧ろ人間中心說の如き考への致すところであつて、正確なる見方ではない。固より人間の交渉するところは人間であるが故に、さういふ見方も正しいかも知れないが、かゝる見方は結局一種の官僚主義に歸着しなければならないのである。生活を正當に理解する爲にはやはり生きる事實全體を目標としなければならない。さうして結局本當の意味に於ける生活とは　その意味に於て自己保存と種族維持の爲の生活である。即ち廣き意味に於ける本能の生活である。この意味に於て、本能生活が生活の中樞でその他のあらゆる生活はそれの分岐物に

外ならない。さうして人間生活も亦その中樞は本能生活に存し、理智の生活や、觀念の生活やいはゆる文化生活は何れも生活の派生物に過ぎない。

現在を立場として考ふる時、人間生活に於ては單に本能生活の外に文化生活があることは事實である。しかし乍ら本能生活を除いては文化生活は成立しない。寧ろ文化生活とは本能生活を完成せしむる補助物に過ぎない。文化生活とは今日一般にいはれるところの意味でなくして、生活全體を構成する一部として理智的活動全部を意味する。即ち生殖生活に對する思惟生活の意味である。哲學とか、科學とか、藝術とか、或ひは建築とか、裁縫とか、料理術とか凡て理智生活の所産を意味するのである。しかしながら、かゝる對立は嚴密にいへば、その意味を爲してゐない。一は他の派生物なるが故である。然らば如何にして一が他から派生したのであるか。

本能はその發達の段階に於て種々ある。又その意味も種々である。それはその生活を指導し、統御し、指標となるものなるが故にその生活に應じて異なるものである。人は自然界に於ける調和といふ。又微細なる昆蟲にも生活に對する銳き智識を有してゐる。それも亦本能の致すところである。人間に於ける理智も亦本能の一部として、人間の生活を統御し、指導し、その指標となるべく生じたのである。人間に於ての本能の意味を自己保存と種族維持にのみ限り、その指標的本能を理智と名づけ、他の生物に於けるそれを等しく本能といふのはやはり人間中心說の致すところである。正しき生物學者は決してかゝる過ちを致さない。

しかし人間にあつての指標的本能であるところの理智は、人間に對してのみは重大な意味を持つ。そこに文化成立の根據がある。それは內部的考察に從ふからである。即ち、他の動物にあつての指標的本能は、人間にあつては一個の價値體系として現はれる、その價値體系に排列らるゝが故に特にそれを本能と區別して理智となすのである。さうしてこれを純然たる本能生活から分離せしむるやうになり、そこに理智それ自身の世界が展開される。それは事物の自立性から考へても亦當然であらう。さうしてあらゆる科學なり、藝術なり、その他の百般の文化現象が生ずるのである。さうしてかゝる世界の內部に這入ることに依つて人は全然純然たる本能生活を捨て、文化的生活を以てそれよりも秀れたるものとなすに至るのである。この文化現象の發生は、本來の生活自身からいへばその墮落に當るものである。元來生活それ自身を指導すべき、補助的、指標的生活が、それの中樞である處の生活より秀れるといふことは正しく

墮落でなければならない。さうしてこの二者の對立は益々甚だしくなるのである。文化現象が高度に達すれば達する程本能的生活がその本來の意味を失ひ、本能的生活が擴大してゐる限り文化的現象がさまで發達しないのである。これを個人についていつても高度の教育あるものとなきものとの間に同じ關係のあることが知られる。

この現象を具體的にいへば生活に對する智識階級の任務如何といふことになる。智識階級とはその本能生活よりも文化的生活を見出さんとするものである。さうしてそれは正しく生活の事實と相反する。さうしてその任務は單に生活の指標となり、番兵となるの外一歩も出ない。然るにも拘らずその指標といふ任務や文化現象といふものが動もすれば重大視せられ、その中樞であるところの本能生活が輕蔑せられ、又は無視せらるゝに至り指標は指標の故を以て自らを高く揭げて誇つてゐる。これは正しく本末轉倒の沙汰である。指標の任務なり位置なり使命なりは飽くまでも指標として止まつてゐるべきでそれ以上に出てはならない。さうしてたとひ如何に指標がその文化や理智や文明を自慢し、又さう信じてゐても生活の事實が明かにこれを轉覆してゐる。よく人が歷史哲學の如きものを構成して觀念的に時代の價値を定めてゐるが、かゝるものは純然たる抽象的論理作用で決して事實には存してゐない。事實は常に存在し、常に生活の中樞であるところの本能に位置してゐる。實際本能生活は、極めて强力なもので、文明人とか文化人とかにあつても殆んどその力を減じてゐない。現に人間が生物中一種族としてかく存在し、又繁殖しつゝある事實がこれを明かにしてゐる。

然らばこの生活の中樞は何處に存在するかそれは社會的にはいはゆる民衆であり、個人的には性慾生活である。それが常に指標と定めるので、指標が民衆や性慾生活を作り上げるのである。指標は民衆に依つて支へられると共に、又それ自身で發達するが故にその關係は二方向的である。しかも指標自身だけでも決して存在し得ざるが故に常に民衆の支持を得なくてはならない。その民衆が指標自身の發展を或ひは妨げ、或ひは革新する。中樞としての民衆はしかも全然その本能生活に依屬するが故にそれの發展は殆んどないといつてもいゝ。數千年前の民衆の生活も現代の民衆の生活も、生活といふ點に於ては差異がない。差違のあるのは指標の世界のみである。さうして民衆は指標が餘りに生活から餘り分離する時は常に生活に引き戻してゐる。この二元的對立が理想主義對現實主義の爭ひとも見られる。しかもその現實主義は指標内部の出來事であつて決して民衆それ

自身ではない。換言すれば民衆は何ものも持たないがしかし指標の內部にその代表者を持つてゐるといふべきである。

藝術は固より、その起原に於ては性慾生活と關連してゐたのでその點に於ては純然たる民衆のものであり、さうして生活の中樞に於ける一補助的指標であつた。しかしそれが指標として性慾から獨立してくるに及んで藝術自身の世界を持つやうになつた。さうすると他の文化現象と同じく民衆と隔離し、藝術內部に於ける進化のみを續ける さうするとそれは一個の專門的分化となり、藝術家といふ一社會團が分離し、藝術家でなければ藝術が解らないといふことになり、更に藝術家內部に於ても高度に發達したものが高度の藝術を了解するといふことになる。さうしてこの場合に於てはさういふ人達は更に本來の指標としての任務を忘れて自己を最大級に置き、その指標的不具性を誇つてゐる。專門家の惡弊がそこにある。さうして各主義の相違や、藝術的見解の論爭などは全く藝術家團內部の事件であつて民衆は何等これに關するところはない。

民衆は未だ嘗て藝術を持たなかつた。從つてそれは指標としての藝術を見出すのみである。プロレタリヤ藝術がプロレタリヤに依つて產出されると思ふのは大きな誤りである。プロレタリヤ藝術と雖、結局藝術內部の出來事でプロレタリヤ自身の關知するところでない。只その指標として選んだのみである。

かくの如き解釋に於て現在のプロレタリヤ藝術を如何に見るかは一つの問題である。それは結局藝術の問題であるが故にそれを强ひて現在のプロレタリヤと結びつけることは誤りであらう。藝術家內部に於ける新らしき分子が從來組み立てられたる舊藝術の價値體系を破壞し、新たなる自分の藝術體系を組成することを意味する。それは生活と藝術との純平行的解釋に依るべきものである。故に常に中樞であるところの民衆の變化に應じて藝術も變化しなければならない。藝術の改革はかくして民衆の生活の變化に相應する 現文壇に於て 藝術は階級を超越するといふが如きは一見正しくしてしかも誤つてゐる。如何なる理想と雖、現實に存せずしてはあり得ない。藝術が階級を超越するといふが如きは理想としてはあり得るかも知れない現實にはない。さういふ主義の藝術は現實に於て亡ぼされるか、或ひはさういふ理想のもとに他の內容を含むことになる。民衆はかゝる理想のもとに於ける藝術に對してこれを改革するに何ら躊躇するところはない 民衆自身は藝術的習練もなく、全然無智であるかも知れないが、それは生活の凡ての力を藏してゐる。この民衆に反する時改革の力は直ぐに及んで來る。この意味に於て日本の最近の輸入藝術が好い例を示してゐる。

現在の文壇は正しくかゝる民衆の指標として存在するに足りるものであるか否か、問題である。民衆は藝術を持つてゐない。それが現在に於ける舊藝術の唯一の逃げ道であらう しかもそれは民衆が指標を勝手に作るといふことを忘れた逃げ道である。現在の文壇はいはゆる指標的衿持を持して自ら偉しとするものと、指標としての使命を解するものと二つある。さうしてプロレタリヤ文學のあるものは正しくその後者に當る。それが現在の事實であつて舊來の藝術に對する一打擊である。しかしそのプロレタリヤ藝術といへども、指標としての任務を持するのみに止まることは確かである。

『改造日本』と無産階級運動

山川　均

一

五ケ年間の大破壞と大殺戮が齎らした結果のうちで最も重大な結果は、『改造』の一語を當面の問題たらしめたことである。

一九一四年の八月に戰爭を始める時には、どの國でも、もつと強くなつて戰場から出て來るつもりであつた。一九一九年に戰爭を終つた時には、どうしてお互に立ち行くかゞ問題となつた。

戰後の歐羅巴には、大體に於て、『改造』に對する二つの努力が行はれて居る。其一つは、戰後の世界を、もう一度從來の基礎の上に建て直ほさうとする努力である。即ち資本主義の世界を復興する、努力であつてヴェルサイユの平和條約は、この復興運動の設計書であり綱領書きであつた。然るに此の設計は、愈々仕事に掛けて見ると破綻が百出した。英佛の利害の背反、米國に對する負債の問題、獨逸の賠償問題と露西亞の問題、近くば土耳古の問題と到る所にボロが出て、今や事實に於いて、反古同樣になりかけて居る。

今一つは、全く新しい基礎の上に世界を改造しようとする運動である。即ち無産階級の運動である。

二

日本の資本主義は、歐羅巴の先進國のそれに比べると、遙かに年齢が若い。其の上歐羅巴の資本主義のように、戰爭によつて致命的の損傷を受けなかつた。そこで日本の資本主義には尚ほ發達の活力がある。そして日本の資本主義だけを切り離して考へれば、尚ほ發達の餘地が殘つて居る。然し資本主義が今日の如く世界的の現象となり、從つて世界的の性質をもつて來ると、日本の資本主義は日本の資本主義だけで存立することは出來ぬ。資本主義は世界的に生存し發達してゐたように、また世界的に行詰らざるを得ぬ。「改造」は日本に於ても、同じように當面の問題となつて來た。

そこで日本でも、改造に對する二樣の努力が行はれて居るのである。

勿論この二樣の努力の中間には、尚ほ色々の改造の努力が行はれてゐることも事實である。和洋折衷の家を建てることにより、羽織袴を背廣にすることにより、國立榮養研究所の献立表を丹念に切拔いておくことにより、歳末の贈答を廢止することにより、節約デーを守ることにより、小賣商人を征伐することにより、朝飯をパンにすることにより、其他色々樣々な事により、生活の改造を計らうとする努力が行はれて居る。しかし是等の努力は、大風が大通りを吹き捲くつてゐる時に、紙切れや木の葉が、どちらに吹き飛ばされてよいのか分らずにうろ／＼してゐるようなものである。日本の社會には、歐羅巴の復興運動と呼應して、吾々の社會生活を、今迄で通りの基礎の上に喰ひ止めようとする必死の努力と、吾々の社會生活を全く新しい基礎の上に改造しようとする努力とが爭ふてゐる。そして此の二つの努力によつて代表せられてゐる二つの社會的階級が相對峙してゐる。そして此の二つの努力の中間にある色々樣々の努力は、この二つの階級の中間にある階級の、經濟上社會上の位地と心理とを代表するものである。しかし愈々風が吹き募つて來れば、紙切れも木の葉も、いづれは何ちらかに吹き飛ばされるに相違ない。

三

日本の資本主義の年齢が若いように、日本の無産階級も亦た年齢が若い。從つて獨立の一階級としての成熟の度合に、歐羅巴の先進國のそれに比べて遙かにおくれて居る。

一つの獨立した階級——資本家階級に對立した一階級——としての無産階級の成熟がおくれて居るばかりでなく、日本に特殊な經濟上政治上の形勢は、日本の無産階級運動に、色々の特徴を與へて居る。

歐羅巴の先進國では、資本主義は文字通りの精密な意味で『成長發達』した。ところが日本では、資本主義は『成長發達』したには相違ないが、それと同時に『成長發達』した資本主義を出來合ひで持つて來たとも云ふことが出來る。封建制度の下に芽を吹いた手工業と商業との資本主義が、工業資本主義の實を結ぶまでには一層長い年月を必要とする筈であつた。然るに日本では比較的短い年月の間に『成長發達』した資本主義を接穂した。

日本に於ける近代資本主義發達の第一步に遭遇した斯ような特徴は、無産階級運動の上にも、勢ひ一つの特徴となつて現はれざるを得なかつた。資本主義が『成長發達』した國では、資本制度に必然に伴ふ資本家と勞働者との利害の衝突といふ事實が先づ存して居り、遙かに後くれて、此の事實を反映した勞働階級の階級的意識が現はれた。勞働階級は先づ職業上の利害のみを見つめて鬪つた。そして此の鬪爭のうちから、漸次にそして極めて徐々と階級的の意識が現はれた。

ところが日本の場合には、資本家が出來合ひの機械を、輸入し、出來合ひの工場制度を輸入し出來合の資本主義を輸入したように、無産階級は久しい間の體驗と鬪爭のうちから生まれた無産階級の思想を、成熟した思想として受容れることが出來た。そこで日本には、近代的の資本主義に必然に伴ふ階級的の對立といふ事實と、此の事實から生まれる階級的の意識とは、同時に存してゐた。同時でないまでも、此の事實から此の意識が生まれる間の時間は、非常に短かつたのである。或人は之を以て、日本の無産階級運動の發達は不自然である。眞實の成長發達でないといふかも知れぬ。けれども水の中に石を投げて波の立つことが自然であるやうに道の上に石を投げては、波の立たぬのが、即ち自然である。特殊な條件の下では、特殊の成長と發達をすることが、即ち自然の成長發達なのである。

日本の無産階級運動が歐羅巴の先進國のそれと比較して、分爭の割合に階級的の意識と思想とが遙かに進んで居るのは其爲めである。

四

無産階級運動の政治的の方面を代表するものは無産階級の政黨——社會黨乃至は共產黨——であつて、經濟的の方面を代表するものは職業團體、即ち組合である。無産階級運動のある所では、この二つの組織と二つの運動となつて現はれるのが通例である。ところが日本では、無産階級の政治的團體は今日まで絕對に禁止せられて居る。從つて日本の無産階級運動には政治的の組織がない。言葉を換へて云へば、組織された團體として

の社會主義運動がないのである。此點では日本の無產階級運動は、少くとも形の上では跛である。

けれども無產階級の政黨——社會黨——と勞働階級組合とが並行して發達した場合には、又それ相應の欠點があつた。社會黨は勞働階級を意見の一致によつて結束し勞働組合は當面の經濟上の利害に基づいて結束する。そこで此の二つの組織の間に分業のみがあつて、緊密な協力が欠けてゐる場合には、包容的の勞働組合は、階級意識の水準が非常に下がつて來る憂ひがあるそして極めて保守的反動的の團體となる場合がある。

然るに日本に於ける特殊な狀況は、此方面でも、無產階級運動の上に一つの特徵を與へて居る。即ち日本では、組織された社會主義運動が無い代りに、勞働組合の組織の間に、…………………して居ることとである。それはかりでなく、日本の組合運動は、世界の………老衰期に達して、著しくは反動的となり、著しく焦躁となり、著しく緊脹的となつた時に生まれたものである。從つて組合運動は發達の第一歩から、絕えず官憲と資本家との、最も露骨な壓抑と迫害とに曝されて來た。現に今日と雖も、日本では單に、職業上の當面の利害に目醒めたゞけでは、此の壓抑と迫害とを冒して組合に加入することは六ケ敷しい。從つて組合に加入するには、當面の利害に對する打算以上の………………………。………………………………………………、…………………………傾向がある。

斯ように日本の無產階級運動は、外國の勞働者のやうに、曾て政治上のデモクラシーを享有したことがなく、當初から官憲と資本家との………の下に成長してゐる爲に、分量の上の發達を著しく阻害せられて居る。けれども之が爲に官憲と資本家とは、意外の結果をも收穫して居ることを記憶しなければならぬ。即ち彼等の政策は、勞働組合を多かれ、少かれ社會主義の團體たる性質を帶びしめてゐる。勞働組合運動の社會主義化は彼等の最も恐れるところであつて、此二つのものを隔離する爲には、………………、………、離間、中傷、□□に至る有ゆる苦肉の策を施して居るにも拘らず、實は自己の鎭壓政策そのものによつて、勞働組合の社會主義化を促進して居るのである。そこで若し政府が斯ような政策を續けるなら、日本の勞働組合運動は、………………………、……………………………………………、……………………………………。

五

日本の無產階級運動には、前述の如く政府の鎭壓政策の結果

として、政治的組織の一面が缺けて居る。從つて日本の無産階級運動は、歐羅巴の先進國のそれに較べて、政治の方面では著しく消極的であり、無産階級の政治的自覺が遙かに後られて居るかのようである。之は或る點までは、日本に無産階級が階級としてまだ充分に成熟して居らず、ブルジョアの政治から獨立した無産階級自身の政治思想を持つだけになつてゐなかつた爲めであつた。けれどもそれと同時に、日本の無産階級運動が政治の方面に消極的……態度を取つて來たことは、ブルジョアの精神的支配から獨立して、階級的に成熟する爲に必要な徑路であつた。一方には政治上のデモクラシーが少しも發達して居らず、無産階級の政治的團體が絶對に禁止せられて居り、しかも組合運動は漸やく起りかけたばかりで、勞働者の間には何等の無産階級的の結束も組織もなく、階級的に結合する目印も中心點すらもなかつた當時にあつては、無産階級が政治運動に參加することは、無産階級として獨立の政治行動をすることにはならずに、勢ひブルジョア政黨の政治運動のうちに捲き込まれることを意味してゐた。斯ような特殊な状況の下におかれた日本の無産階級運動は、ブルジョアの政治運動とその政治思想から獨立する爲には、ブルジョア政治に對して…………態度を取るの外なかつたのである。

或る人は、勞働階級中の階級的に自覺した人々が、勞働運動の勃興にした初年斯ような態度を取つたゝめ、日本の勞働階級の政治的自覺を遲くしたと非難する者がある。けれども當時日本の勞働階級が、ブルジョアの政治運動に對して消極的……態度を取つてゐなかつたなら、日本の無産階級がブルジョアの政治思想から獨立し、無産階級自身の獨立した政治的意識に目醒めることは、今日以上におくれてゐたに相違ない。言葉を換へて云へば、日本に眞の無産階級的政治運動の起ることは、今日以上におくれてゐたに相違ない。

然るに日本の勞働運動と勞働組合の主張や標語が、近來、多少政治的の色彩を帶びて來たことは注意に値ひすることである之は資本主義の下では、一切の經濟上職業上の要求と鬪爭とは、勢ひ國家を對象とする政治上の要求、政治上の鬪爭に發展せざるを得ないからである。それと同時に、一方には日本の無産階級は、今や漸やく、ブルジョアの政治思想から獨立した政治上の見解を持つようになり、從つて他方には、政治に近づくことをさまで危險と感ぜぬだけの、階級的の成熟と自信とを生じた結果と見做すとが出來る。日本の組合運動は尚ほ分量に於ては小である。けれども其れにも拘らず、日本の勞働階級の階級的意識を代表し、階級的結束の中心となり指導的の精神となつ

て居る。無産階級の政治的行動は、官憲によつて極度に恐れられ、極度に……せられて居るにも拘らず　そして無産階級の政治的行動に必要な政治上のデモクラシーといふ條件が全く缺けて居るにも拘らず、…………………………………………………、…………………………………。……………………………………、…………………………………………………………、……………………、…………………………、……………………………、……………………………………、……………………………。……………………………、……………………………、……………………………………………………………。

六

都會に於ける工業勞働者ほどに明確ではないが、しかも同じ方向を指して居るものは、農村に於ける小作組合の運動である。日本には純粹の農業勞働者に階級が發達して居らぬので、農村に於ける無産階級運動の役割は、小作人の組合に求めねばならぬ。小作組合運動の中心と見做されてゐた岐阜縣などでは、官憲の極度の頻壓政策の爲に、組合運動は一時下火となつて居るが、其代り今日では、最早や或る地方の運動ではなくて、全國的の運動となつて來た。唯だ小作人は農村に於ける被搾取階級ではあるが、形に於ては獨立企業の性質を帶びて居り、それだけ工業勞働者に比らべると、資本制度の經濟組織のうちに占める階級的の位置が明確でない。從つて亦た、それだけ階級的の意識も明確でない。

斯ように小作人組合の運動は、工業勞働者の運動と共に無産階級運動を形成するものであつて、殊に農民が人口の多數を占める日本では、無産階級運動の極めて重要な要素である。しかし小作農の階級は、工業勞働者の階級に比べると、階級的の意識が後くれて居る。言葉を換へて云へば、獨立した一階級としての成熟が遙かにおくれてゐる。從つて小作農の運動には、社會生活を新しい基礎の上に改造しようとする無産階級の努力であるといふ意識は、今日では尚ほ勞働組合運動の場合に比して、遙かに明確を缺いで居る。けれども其れにも拘らず、小作農の當面の經濟上の利害に基づく鬪爭は、必ずこの運動を、勞働組合の達した所、達しようとする所に達せしめるに相違ない。

七

普通選擧が行はれて、勞働階級に選擧權が與へられることになれば、ブルジョアの急進派を代表する政黨は、勞働階級の少くとも一角を切り崩して、其の地盤とすることに必死の努力をするに相違ない。之は都會に於ける無産階級運動に取つても、今

から殲滅すべきことである。ところが之に照應する危險は、農村に於ては一層大きく、且つ今日も既に存して居るのである。卽ち農村と都會の利害の相異を强調し、農村を都會に對立せしめることによつて地主と小作農との階級線を曖昧にし、斯くて小作農の階級的の自覺と結束とを阻止することである。

この計畫は最近著しく顯はれて來た。政友會の自作農免稅、憲政會の小作農創設策、それから帝國農會と農民聯盟との最近の活動の如きは卽ちそれである。若し此種の計畫が相當の効果を奏することになれば、農村に於ける無產階級運動の發達、延いては無產階級運動全體の發達は、著しく阻害されるに相違ない現在の小作組合の實力と階級意識とは、よく支配階級の斯ような戰略に對抗することが出來るかどうか、之が農村に於ける無產階級運動の當面の問題である。

斯ような地主階級の計畫を打敗る爲めは、日本の小作組合の運動も、恐らく或る點まで政治的性質を帶びて來るに相違ない何故ならば、農村に於ても同じく無產階級の政治的團體がない以上は、小作組合を外にしては、無產階級の政治的的行動を以て地主のそれに對抗する機關がないからである。現に此の傾向は、今日までにも多少は現はれて居り、或る地方では小作組合が村會乃至は郡會の選擧團體として活動してゐる場合がある。

小作組合運動を動かして居るものは、今日のところでは、大多數の場合小作料の輕減であつて、當面の經濟上利害以上には倘ほ一歩も出でゝ居られぬと云つてもよい。…………………………………………、……………………、…………………………………、………………………、…………………………………、…………………………。

それと同時に小作農の運動は、…………………………、……………………、………………ある。吾人は、其のうちに、現在の資本主義の經濟とは……………………、……………………、…………………………、…………………………………………………。

八

今日の世界が若し何等かの基礎の……………られるとしたならば、吾々はそれを現に吾々の社會に存してゐる條件と、現に吾々の社會のうちに動いてゐる勢力に求めねばならぬ。ところが此の條件と勢力とは、どちらかは資本主義が其の懷の中に生み出した。そして此の條件は、進步した生產技術と生產機關といふ形で、現に資本主義が、其の掌中に握つて居る。資本主義の勢力は此の條件を基礎として、其の上にもう一度資本主義の世

界を建て直ほそうとする。然しこの資本主義復興の努力が、到る所に破綻を示して居るのは、資本主義の舊るい勢力は、其の掌中に此の條件は握つては居るもの丶、最早之を有効に働かせる力、即ち進歩した生産力を指導し組織する能力を失つたことを證據立てゝ居るのである。

この能力は、資本主義のうちから生まれ出た……が握つて居る。しかし彼等には、殘念ながら、此の能力を働かせる對象物がない。それは資本主義の舊るい勢力が其の掌中に握つて居るからである。玆に改造の苦惱がある。玆に改造の鬪ひがある。

日本に於ける改造の問題も、この大きな世界の改造の問題の一部分に過ぎぬ。瀬戸内海や東京灣が太洋に續いて居るように日本の改造問題は世界の改造の問題に續いて居る。日本の改造の問題が世界の改……………………。……………………………………………………………………………………………………。

一畫工として

岸田劉生

〇私の今日の惡趣味的時代に處する道

私は今日の日本の（又は世界の）趣味なり審美なりのひどくなつて行くのを正視するがつらい。

殊に今日の日本位、趣味がわるくなつてゐる國はない様に思ふ。又日本としても、今日位趣味がわるくなつた時代はこれ迄になかつた事を思ふ。しかも、それは日毎にます〳〵惡くなつて行く。

日本といふ國は嘗ては世界に比類のない程趣味なり審美なりの進んだ國であつた。それが世界で一番俗惡な趣味を持つた國民になりつゝある。

私は先日三越に、支那と日本の古い南畫を見て、大へんに

心が樂しい思ひをしての歸るさ電車の中から不圖正に出來たらうとしてゐる新しい京橋を見てしまつた。その時私は思はず、同車の人に氣のつく程に面を顰め、聲を發した。何といふ醜い、何といふ冷たい感じであらう。其處には只美を知らない鈍い頭で考へた、冷い醜い線があるのみである。美を知らないものが常に陷る美に對する投機的な意企、即ち「かうでもしたら美くしのであらう」といふ惡い下等な意的意企、又は意志だけが冷たく見へる。少しも、生れたといふ感じのない。有機的に渾然としたところのない、冷たい無智な計畫だけが見へる。

私の心は忽ち暗くなり、誇張でなしに、厭世的な淋しさに捕はれた。なさけない。救はれない淋しさである。

畫家として、この世がます／＼醜くなつて行く。美くしいものが日毎にこわされて行くのを眺めるのは實につらい。

京橋はほんの一例にすぎない。この京橋に見られる醜さ、生意氣と無智の冷たい醜さは、實に大正年代に出來る一切の日本の建築、裝飾、工藝――のみならず更に美術、音樂、演藝にまで及ぼして見られるのである。

近頃はやる、青年俳優の新舞踊劇、子供にやらせる童話劇やダンス、ボール紙の樣な文化村、文化學院、若い婦人の髮形や斷髮、新意匠と稱する馬鹿馬鹿しい呉服の意匠、それを着て歩く女の趣味、これ等のものは毎日殖へ、毎日その程度を強くし、ます／＼日本の國は安つぽく、なつて行く。

私は必ずしも江戸趣味者でも國粹論者でもなく又がんこな東洋趣味者でもない。又更に私は只徒らな古典主義者でもない。私は只、善きもの、眞に美くしきもの眞に價値あるものを愛するのである。さういふものが現代の輕薄な趣味によつて滅亡されて行くのを見る時だけ或は江戸趣味者となり國粹主義者となり又古典主義となる。

江戸趣味にせよ國粹主義にせよ、又古典主義にせよ、これ等は要するに、人類の進化につれて起る文明の形式上の樣々なる變化に對する人類が、善きものを殘し、永久に傳へておき度いといふ願望、寶物を失ふまいとする意志の樣々なる顯現に過ぎない。

文明の形式のうつりかわりといふ事は、決して、常に美よりより美へ、善より更によき善へと變つて行くのではない。人類の文明は常に進歩の路にあるかもしれない。しかし人類が、倫理的に、又は合理的なる目的に對しての進歩して行つたからとて必ずしも、その文明の形式がそれと歩を同うして行くものとは云へない。人類の合理的生活と、趣味生活とはその善なり美なりのクライマックスに於て必ずしも歩を同じうしないと思

ひ得る。即ち、人類の最も合理的に生きられる時代が來た時が人類の趣味生活に於ても最高調に達した時であるといふ事は俄かには云ひ得ない。かくて、人類生活の文化といふ事が往々にして趣味としては實に尊む可き、又と得がたい古い寳をもおし氣もなく捨てゝ行くといふ事がある。

しかし乍らこの事は人類の一つの傾向に過ぎない。一方面に過ぎない。人類にはやはりもう一つの欲望がある。即ち、一たん獲得した寳を、自分の滅亡する迄も殘し、蓄へ、味つて行かうとする本能である。人類はやはり、趣味生活に於てもますます複雜な蓄積を企てゝゐる。

しかし乍らにそれも一面である。この一面も強いかもしれないが他の一面も強い。人類の文化とゝもに、多くの古い寳はふり忘れられるであらう。少くともこの點人類は多少幸福への道程に於て、あわてものである。少くとも忘れものを多くし過ぎる。この事は要するに人類の進化といふ事と相對的の事であつて、樣々の事が全部的な完成に至るといふ程のものではなく、人類最高の文化時代にあつても、それは人類の幸福が全體的に向上したといふに止まり、部分的には幾つもの退化を見出す事であらうと思はれる。少くも、今日の趣味生活の或るものゝ如きは一日人類がこれを失ふたら、再びこれと同じ尊さのものを得る事は蓋し難事であらう。日本の庭園の持つサビの味、茶の湯に於ける茶道、活花の持つ味、舊劇の持つ有機的な、民族的な一種の味、日本建築、江戸時代の町家の美感、日本人の服裝、婦人の結髮これ等のものは、或る時代の文化的過程にとつて邪魔であるがために稍ともすれば、失はれんとしつゝある。これを惜しみ、殘さんとする民族的又は人類的意志は案外に強く、或る人々によりて表はされてはゐるけれど、そして、それは無論、或る範圍の下に殘され、再び、來る可き時代に於てそれが珍寳とされるだらうけれど、しかし、その時には、それは實に今日のそれ等からみる時は、可なり貧弱なるものとなつてゐはしないかと思はれるのである。

この事は實に惜しい事である。しかし、人類の文化のおもむくところとすれば是非もない事である。人類はそれを必ずしも悲しまないかもしれない。悲しむとすればそれはむしろ人類の極く消極的な一部分の意志かもしれない。私共が古寳のだんだんと失はれて行くのを惜しみ呪ふのは、人類の強い意志に反する事かもしれない。

しかし、惜しいのは事實である。そして、それが滅びるのを呪ふのは事實である。たとへ一時の過程にせよ、それを滅して行く、のは形が醜い、不自然な冷い、わるいものである時、更

にこの呪はしい心地がおこるのは當然である。

私は、しかし、私が古昔を愛し、近代を厭ふ事を必ずしも人類の強い意志に反するとは思つてはゐないのである。それは私の使命である。私は人類の進化に對する強い意欲の下に、古昔を愛し、現代を厭ふのである。其處から私の仕事が生れるのである。そして私は私の仕事を決して愛する過去に捧げるものではない。私は、過去に對しては敬虔なる追憶の情を捧げるが、それと同時に人類の未來の文化に對しては愛と熱を以て、私の仕事を捧げ、殘したいと思つてゐる。

私は私の仕事が、正しいと信じられる間はたとへ、何百年間の間の人類に理解されずとも、人類にとつて、それが尊い寶でなくてはならぬといふ事は信じてゐる。人類がその一生に於てたとへ私の仕事に對して理解する時がない事があらうとも、私は私の仕事が正しいと思へる間は人類にとつて、私の仕事は寶である事を信じる。理解不理解は第二の事である。只人類にとつて、一個の人が本當に正しい仕事したといふ事が、人類以上の意志にとつての人類への祝福でなくてはならない。かゝる意味に於て、私は私の仕事が正しいと思へればそれでよいのである。まして正しいものであれば人類はいつかそれを理解するといふ事は先づ本當であらう。

かくて私は、人類が忘れて行かうとするいろ〳〵の寶を、出來るだけ味ひ自己薬籠中のものとして、仕事の中に織り込むのである。この事は實にせつかちな、忘れ物を常にする人類にとつて唯一の備忘錄である。忘れつぽい人類はこの意志によつてその健忘性から救はれる。傳統とはこの事の名である。

それと同時に私は私といふ一個人を一つの人類の製作として生かす。即ち私が、出來るだけいろ〳〵のものを味ひ、いろ〳〵の味を理解してゐるといふ事は、それだけで人類の一つの幸福である。これはだれにでも云はれる事だ。人皆々は、皆それ自身すでに人類の幸、不幸の顯現である。かくて私は、他少、エゴイスチックにがんこに生きやうと思ふ、たとへ世の中がどんなに醜いものになつて行かうとも俺一人でも、出來るだけ、いゝもののいゝところを味へばいゝのだといふ心境である。

かくて、私は、たとへそれが人類文化の一過渡であらうとも現代の醜に醜として憎む。この意志を尊むものである。そして、人類の健忘性、あわてものである性質をたとへ、文化の過程度仕方のない事であらうとも、その事を悪しと思ふ事にひけめは感じない。

私は必ずしも古いものゝみが好きではないけれど、私が現代を厭ひむしろ古を愛する傾向にあるのはこの理由である。

かくて私は、今日の日本人の趣味生活を正視するのが不快でならない。出來るならば、巷へでも出て、一々その醜い事を說き、美くしい事の如何であるかを知らしめ、滅び行くものを愛惜する事を教へ、更に新しき建設を、本當の美の下にする方法を說いてみたくさへなる。しかし、そんな事をしたとて、何の効果があらうぞ。

十七八の青年時代には青年時代らしい事より外には分らないのである。實感は概念を以て動すのは實に難い。やはり年をとつて內から趣味なり要求なりがかわつて來た時はじめて分る可き事は分るのである。

今日の日本の文化は正に二十歲頃の生意氣盛りの文化である。過去の老年文化に對する反動であらう。今日では何事でも青年第一である。昔はその反對であつた。しかし今日社會の中心となるものは凡て青年である。老年文化にはもとより弊があつたであらう。しかし、青年文化といふものは今日の青年文化の中に生きるものたちの思つてゐる程に價値のあるものでは決してない。

若い中には分らない事が、來る可き時代になつてきつと解る時代が來る。

『舊』いといふ事に對する輕蔑乃至は恐迫は、もう五十年昔の夢となつていゝ筈である。舊いといふ事が何でも惡いといふ事となつたのは實に最近五十年來の事であらうと思ふ。昔は「舊」いといふ事は尊いといふ事であつた。しかし、新しい西洋文明が入つて、所謂文明發化の世の中となつて、物質文明には不便であつた「舊」文明は一切、物笑ひの對照となつた。或る見方をすればこの事は正に、文明の觀念が精神より物質に移住したものである。

もういゝかげんにこの「舊」に對する恐迫からは卒業してもよからう。しかもまだ〳〵、否、今日は一層この「舊」といふ事を恐れる。何でも「新」の字がつけば生氣ある文明的な事だと思ふ。この事は笑ふ可き事である。あれは古いと一口に云ひ去るものをよく味つてみる事が今後の文明にとつてはしなくてはならぬ一つの文明成形上の要素となるであらう。

私は、如何に理論を以て說いたとて、今日の文化に本當の事が分る事は蓋し難いと思つてゐる。今日の文化はもう少し年をとらねばならない。その時の文化はかつて愛した、ダンスの甘たるさに惓き、文化村の無味なるに惓き。新しい舞踏が氣はづかしくなり、未來派が馬鹿々々しく見へ、新日本畫の色が不快になり、京橋やビルデングをこわしてやりなほしなくなるかもしれない。しかし、この事がかく云ふが如くにそのまゝ正し

表はれるか否かは、今の私には分らない。私はそれにしては前にも述べた通り人類の文化的進歩と趣味生活上の進歩との同歩調を信じ切らぬから。そしてもし、それに近い時が來るにしてもそれは相當に遠い先きの事であらうと思はれる。

かくて私は今は、今後の美術なり趣味なりの、改造といふ事については、別に法を講じないものである。何となればそれは骨折り損だから。そして決して、本當には考へて出來る事ではないから。

それならば私の態度は如何か、要するに、私はエゴイストになる事である。阿部次郎氏は人格主義を説いたが、私は畫家だから制作主義を唱へやう。

事實、本當に生活する法は只一つだ。人格に至る事、又は、仕事に沈潜する事だ。

私は今の世の文化を厭ふ。それでよろしい。私はいやなものはなる可く見まい。そして、出來る丈け、今日でも猶吸收出來る古い寶を漁つて歩く。そして、それを味ひ暮さうと思ふ。かつて私は今の中出來る丈け舊劇を見る事をおこたらない。そしてその時間、私は趣味の滿悦にひたり、何等かの力を内にたくはへる。私は支那日本の古畫を少ない金ではあるがゆるされるだけでも集めて、それを私有するたのしみをこの頃覺へてゐる女房には茶、活花を習はせ下手ながらも點茶をしてもらひ、花を床に活けてもらつて、そこに氣に入つた畫をかけて眺めて暮らす。私はかうする事が今日の社會問題には應はしい事ではない事も知つてゐる。私は所謂ブルヂョワの生活を欲し、行ふものかもしれない。しかし、私の心にはこれ等の問題よりも美の問題が切實なのだから仕方がない。

私は只、生活に於ては善良な凡人の様に、あり度いと思つてゐる。可憐なものには憐み、正しい事に對する信仰と愛を持ち兄弟、友、又人々を愛し、平和と幸福を祈つて暮したいと思ふ。私はこれで別に不自然は感じない、私の道德は美の問題の上にある。仕事の上にある。

私はかうしてむしろ、この世からはかくれて、味ふものを味ひ、造るものを靜かに造らうと思ふ。

これが私にとつて、唯一つの美の改造への贈りものである。私の畫が、この世に好かれるか否か、それは私は知らない。しかし私が私の仕事を美の上から正しいと信じる限り私は、私の仕事と、仕事をめぐる生活とをこの世に贈る事を私の使命だと思つてゐる。

私が出來るなら、もつと世からかくれて、仕事したいのである。私の仕事なり趣味なりは到底今日の日本又は世界の文化と

協調は出來ないのである。私の性質として、私をきらふ人々の前にシャシャり出てゐるのがいやなのである。私はきらいならいつでも引きこんであげたいと思ふのである。

只私は私の望む樣な仕事なり生活なりをするために相當の金が要るから、惜まれながら世にはびこつてゐる形なのである。

誰れか私に澤山金をくれる人があれば私はいつでも引込んで、默つて、すきな仕事をして行きたい、それが本當に私の理想である。私は支那の高士の樣に清貧といふ事、無欲といふ事をさ程に善い事と思ふことが出來ない。彼等は又彼等でよろしい、私は相當に、富みといふ事は好きである。そのくせいつでも富みの方では貧弱だ、呵々。

とも角も私はさういふ意味で支那の高士とはちがふが、しかし世に隱れて、仕たい三昧をし、好きな仕事をしぬくといふ點では彼等と大に志を同じうしてゐる。

「八大山人書畫に隱る」といふ言をよく思ひ出す。八大山人は明朝の皇族の子であつたが、清朝の代になつて、逃れて山にかくれ、書畫の三昧に入つて暮したさうである。そしてやはり世を厭ひ、世に隱れた生活を送つた人だとか、私も、畫に隱れたい。そして隱くれたところで隱れた　人の知らない寶と人の知らない處に默つて送つてゐたいものだとつくづく思つてゐる。

○しかし

しかし、私は、一面に於てはやはりこの世の文化の俗化を出來る丈けはふせぎ、稍ともすれば失はれやうとする古い寶を、出來るだけは人類の文化の上に保存させる事に盡したいといふ望みも持つてはゐる。

もしそれが、貧弱ながら自分の言論、幾分でもやくに立つたら、私は仕事をするひまを見て、時にそれを言ひ殘して行きたいとも思つてゐる。

しかし、それを望む事に強ければ強い程、今日の文化がいゝものをふり捨てて行く樣を氣にしなくてはならない。日毎に殖へて行く、不快な趣味の現象を氣にしなくてはならない。

私はそのため、ついそれにふれるがいやになるのだ。この事は、エゴイズムかもしれない。しかし、何と云つても、私のす可き事の第一の事は仕事だ。說く事は、私にとつては第二第三の事だ。

しかし、もし、人類又は民族の、意志として、自分の、愛古、惜古の心をこの世に語り失はれやうとするものを幾分でも蓄える事が出來れば、自分は又それをしたいと思つてゐる。

○現代文化の醜さの特長

日本の現代文化の醜さの共通な特長は。造形上の法則に少しも、必然性がないといふ事である。西洋でも、この事は云へると思ふが、とも角も、最近出來る建築、裝飾、模樣、等には、西洋も東洋も皆、內から生れたといふ味を全然缺いてゐる。

たとへば、市內の名もない樣な古い木橋にしても、そこには何の美術的計畫がなく、少しも、美術としてとりあつかつてないものであつても、その木組なり形なりには、極めて素直な自然さがある。見て、眼を惡く刺激しない。消極的な、美的調和はないのは當然だが消極的な意味で形に、自然さから來る調和を持つてゐる。木のてすりの上に附く金物やそれを止める釘にしても、少しも形に不調和がない。

だから、さういふ橋の架つてゐる町を通る時、吾々は別に美術的興奮を起しはしないがしかし、何となく、なんごりとした安氣さを失はずに住み、往來する事が出來る。

これは一例だが、日本では明治初年位迄文物は皆この味を失つてはゐなかつた。明治がだん〳〵と進むにつれ、更に日露戰爭を經又更に大正の年代となり、世界の戰爭を經て今日に至つて出來る、日本文化の文物は全くこの自然さを失つた。

吾々は、上野の博物館へ行つてみて、新舊二つの西洋館を見る事が出來る。正面の、本館と、その右手にたて增しされた、本館の續きと、左手に大きく建つ表慶館との三つの階梯をみる事であらうが、少しも心に「美」の事の分る人であつたら、この三つの階梯のどれが美しくて、どれが醜いかを立ち所にして識別する筈である。

即ち、最も古く建てられた、そして最も、純粹なハンブルな態度で歐風の古い體によつた、中央の本館には、その全體部分皆よく調和した、線と色とを以て成る、極めて自然な、少しも外部から考へで造つたといふ樣な冷さのない美しさを見る事が出來る。

それは觸れたら暖かさうに、ほつこりとしてゐる。れんがといふものが本當によく生かされてゐる。石も石の冷さを失ひ、その重さの美しさをよく生かされてある。其處には何等の、野心的なものにみへない。無論或る程度迄の美の、表現に對する苦心はあるのだらうが、その人は「美」といふものを內から知つてゐたから、少しも美くしくみせるといふ樣な野心に走る事なく、已れの知つてゐる美を目標として、凡ての形をそれに統一させ內からすべての形を生んだといふ感じである。

これに對して右手の建て增の本館は可なり堅い、冷たさを加

へてゐる。其處には、本館に見る樣な、なんごりとした暖かさはない。形がともすれば實用といふ感じが目につき、官僚的なかたくるしい冷さがある。しかし、まだどこかに自然さはある。別に、惡い美も知らぬくせに、美をあわよくは、表はさうとする樣な、惡い計畫の跡はない、如何にも冷たいが健氣な感じである。

ところが右手に一番、これがと云ふ樣に建つてゐる。表慶館に至ると、その冷さ、その醜さが一段とひどくなる。その形は頭の鈍いだるいしまりどころのないもので、その色もその形にそつて冷たく、だるく鈍い。

しかもそれは本館建て增しの樣に只冷たいといふに止まらず、其處には、既に、美を知らぬものは美に列する野心の跡が歴然とみへる。その形にはかくて少しの自然性がない。どこ迄も、こしらへた形である、生れた形ではない。本館を見ると、すぐその形が心に素直に入つて心と溶ける。しかし、表慶館をみると、その形は只そびへてゐるだけで、心に一つの線も氣持よく入つて來ない。冷たく、だるく、しかも惡い意志によつて一層それの積極的に來る。

ところでこの表慶館が近來の建築なり裝飾なりに比べてはまだましなのだからやり切れないと思ふ。

近來、丸の內、銀座、其他にボカ〳〵と出來る歐風建築なり、橋なり裝飾なり、其他、衣裳圖案等は、歐洲最近のセセッション派、又は未來派、表現派等の影響と、實用本意の近代の要求と歐洲の古文明を知らぬものは歐風かぶれの風潮との合致したものであると云へるが、歐洲のセセッションといふものが既に惡い意志の動機から生れたもので、本當に、內面的な美から生れたものではない。その趣味は只ほんの輕い趣味に滿足を與へるもので、しかも、それが惡い意志によつて、いぢくりまかされてあるだけに、ひどく不自然なものである。

前にのべた樣な、古い名もなき橋にある樣な、不圖した自然さといふ樣なものは少しも、近代の文物の形にみる事が出來なくなつてゐる。それを、又半可通の日本人が鈍い頭で、しかも、生意氣な心持ちでやるのだから、其の時の醜さは一寸耐らないものである。

近代文化の建築その他には、必ず、心を一度通つたといふ暖かみやふくらみをもつた線がない。昔のものには皆必ずそれがある。

近代文化の文物のそれ等の線は皆、冷たく固たく、目に立つてみへる。又線と線との交が常に、機械的な冷さを持つ、色も皆その通り色は線に支配されて必ずその感じを變へるものだか

ら。これは特に日本がさうだ又近代文化の文物のさういふ、冷たい建築その他にほどこされた、部分裝飾は必ず、その本體に融和してゐない。はりつけた樣に、それだけがくつ附いてゐる。そしてその形式は常に鈍く、又は、少しも生れ出たものは持つ有機的な美の法則を持つてゐない。よく、近頃出來るビルヂングなどの窓に、ステンドグラスがはまつてゐるが、その模樣などには少しの美的な感銘がない。

一體この心を一度通つたといふ感じは何であらうか、昔のものには何故皆それがあつたらうか、其の大工は皆えらい藝術家だつたのであらうか。さうではない。それは時代がいゝのである。民族が皆さういふ氣分に落ちついてゐたのである。一人の大工が橋を造るのに、何も新機軸をなさなくても、昔からの本當の法式を踏んでやればよかつたのである。そしてその昔からの本當の法式といふものは、日本民族が民族的審美によつて渾然と生んだものであつて、そこには民族的自然の力が加つてゐる。必然に、それは見る心に調和を與へる形となつてゐるのである。大工も、左官も、職人も皆さういふ、感じを體得してゐて、一つ家が出來るにしても町が出來るにしても、のれんを造るにしても、衣裳を造るにしても皆、一つ味のもとに、自然に生れるのである。これを私は、民族的文化の渾然性と名づける。

ところが、近代に至つて、西洋文明が入つたところ、日本民族にとつて、西洋文明といふものには全然民族的傳統がないのであるから何の美的理解も、內面的同化もなしに只、西洋館といふものを建て、西洋風といふものを外面から模したに過ぎない。

ところが丁度機惡くも日本が西洋のまねをし出すと間もなく西洋に於ても、古典的傳統その他が忘れられて、セセツシヨン其他の、惡い冷たいものが出て來た。しかも其れ等の興る動機の幾分には西洋が東洋との接觸によつて、得た、これもやはり外面的な、生可通な東洋趣味が加つてゐるのに至つては全く困るといふより外ない、つまり、西洋が東洋の外面をとり入れたのを又その外面を模るのだから外面的の二乘になる譯でこれでは全く本來のいゝ傳統の味や、內面的な美しさや自然さが失はれるのも尤もである。

私は、近代の心ある人がもう少し、內面から生れた美の感じといふものに注意したら今後の日本文化の文物の改造の上に最も大切な事が解ると思つてゐる。

私は、たとへば、只の何でもない木橋さへ持つてゐるところの、自然さの感じ、線や其他の、極めて、なんどりした、素直

な味、と、近代の文化の持つ、少しも有機的な自然さや調和ない冷たい固い線とのちがいを。本當に今日の人々に知つてもらひ度いのである。このちがひの分るといふ事は、やがて今日の傳化し、冷たく死んだ文化の再生の大きな動機となる。

文化の文物にはどうしても、民族的自然性が根强く生きわたつてゐなくてはならない。文明には「味」といふものがなくては眞の文明ではない。今日の文化には全く「味」といふものがない。これはそれが民族の心から生きて居ないからである。民族の心の生きわたつた文化には必ず、つきぬ「味」が澤山に生れるものだ。

私は、改造社の今回のおすゝめにしたがつて今日はこれだけの事を、心ある人に御すゝめしておかうと思ふ。

○次の文化に生れる可き味と私の畫

とも角も　今日の文化はひどいものだが、しかし、來る可きよき時代がないといふ事は考へられない。しかしその時代の「味」といふものが、舊日本の文化の持つてゐた「味」と比べて、はたして、勝つてゐるものか否かについては私はまだ樂觀的ではあり得ない。

しかし、歐風趣味が加つて、それがもし眞に民族的消化力にて、醇化されるとしたら又今迄になかつた一つの味が生れるかとも思ふ。

かく云ふのは烏こがましいが、私の藝術の中には來る可き文化の渾然性の或る大切なる感じが秘されてある事を私は私かに自認してゐる。

私は私の内にある民族的傳統を内から味ひそれを内から生かす事を知つた。しかも私は歐風粹美からそこに出發したのである。私は歐風粹美からとる可きものは大ていとつた。その限で私は新しく、古い東洋を見て驚いたのである。かくて私は内面的に西洋と東洋との融合を私の仕事の上で可なり完全に有機的に成し遂げつゝあるのを自認してゐる。これは決して、外面から計畫したのではなし、ひとりでになつたのである所へ又或る力がある。

私の近頃の藝術の持つてゐる味はたしかに新しい時代の味を暗示してゐる樣な氣が自分だけではしてゐる。私の畫の本當に理解されるのはだから次の本當の文化の建つ時かもしれない。

とも角も私は、私の仕事の中に古い日本の生命を新しい力で吹き込んでおくと同時に次の時代のために出來るだけ、古いものを失はせないでとつて置く事を心がける事が大切だと思つてゐる。

次の時代の文化にたとへ、新しい「味」が出來て、それがいゝものであつたにしても、やはり舊日本の持つてゐた寶は不用ではないし、又その時代には更にそれ等には新しい意義の價値が見出されようから。丁度私や私の友人たちが今、驚嘆してゐると同じ意義に於て。大へん。自分の事をほめすぎた様だが御勘べん下さい。

一九二二、一一、三〇、記

改造日本音樂の提唱

山田耕作

改造日本音樂の提唱と、いたゞいたまゝの題をかゝげましたが、私が此處で説かうとしてゐることは、日本音樂乃至日本音樂界の、reconstruction よりは r creation に近いものであるといふことを一言お斷り申しておきます。これは日本の音樂が他の姉妹藝術や文明的施設に比してずつと幼稚な段階に止つて居るものであり、從つて改造すべき舊來の形骸より、新造或ひは創造しなければならぬ必要物を過分に特つてゐる爲かもしれませんが、日本音樂の現狀に冷靜な瞳を注ぐ時、私はどうしても心から全然新たなるものゝ創造新設を祈らずには居られないのです。改造といふ字の中には、在つて益のないもの、無いに等しいもの）をこぼち既存のものに欠けてゐるところを新たに造るといふ意味も含まれてゐるやうな氣がしますが、私の解し得る限りに於いては、私が日本音樂に希求しつゝあるものは、reconstruc ion より recreation に近いやうであります。

先づ作曲の方面でありますが、日本舊來の所謂日本音樂なるものが、もう過去のものであつて、新時代の人間の要求を充すことの出來ないものであるといふことは、最近に於ける著しい西洋音樂の流行普及や作曲熱の勃興などによつても容易く知ることの出來る一般的事實であります。が、現在非常な勢ひで日本の社會を浸潤しつゝある西洋音樂は、その外廓は如何に立派なものであつても、その內容にどんな深みがあるにしても、日本人が日本人である限り、言ひ換へれば西洋音樂が外來のもの

である限り、假令一時的眩惑は與へるにしてもそのまゝに生來の日本人の心の表現ではあり得ない、從つて日本人本來の欲求を完全に滿すことが出來ないことになります。舊來の邦樂がそのまゝに現代人の要求を充すことが出來ず、現代人がその充されぬ心を走らせつゝある洋樂も畢竟日本人の欲求に答へ得ないものだとすると、私共はどうしても未來の、私共の要求に答へる眞實の音樂を、何らかの新らしい、私共自身の形式に於いて表現するより外ないことなります。此處で私は目覺めた新時代の日本にふさはしい新音樂の創造を叫はずには居られないのです。

そんなら、新音樂とは何でありませうか　新音樂の創造はどうしたら實現することが出來るのでせう？　新しい日本の音樂とは、從來の日本音樂の形骸を脱した新らしい科學的形式を通しての日本の心の表現でなければなりません。そしてその表現は、洋樂の樂理形式の徹底的理解により體得によつておのづから可能となるでありませう。いつたい在來の邦樂は、純なよい線の流れを持つてはゐるのですが、あまりに徇情的であつた爲、樂器や樂式や樂想があまりに貧弱であつた爲、又音樂があまりに歌詞の中に溺れてゐた爲、眞の藝術的な力とが音樂其自身に於いて獨立した純音樂の世界とかいふものを、殆んど全然欠いて居りました。かうした音樂は、舊時代の遺物或ひは一部の人達のあそびとしてこの僅かに存在の意義を持つてゐるもので、新しい時代に生きるものゝ藝術的欲求を充し得る性質のものではないのであります。そこで私は日本音樂家諸氏に、古來の傳統や舊殻を脱ぎ棄て、眞面目な研究的態度を以つて西洋音樂の外廓に觸れ、内容を探り、日本音樂の中にあるよいものを、整然たる洋樂の近代的形式を通して表現せられんことを心から希望しないでは居られません。日本音樂者は從來ともすると妙な偏見やひがみから、狭い自らの城閣に籠つて、理由なしに洋樂といふものに柄を衝く傾向がありました。それ故西洋音樂の研究などはもとよりのこと、洋樂の響きに接することさへ、一種の耐へがたい屈辱や卑下のやうに思つて、これを避けてゐたやうであります。今日日本音樂が衰微を見せつゝあるのも、かうした邦樂者の時勢遅れな狭量が原因になつて居りはしないでせうか。

日本の音樂は音階からして第一、西洋音樂とは全然趣きを異にしてゐる。それ故邦樂の洋樂化、或ひは邦樂の心を洋[illegible]して世の中に押し出さうとする試みは、必ず失敗に終るにちがひない、と説くものがあります。まつたく、日本の音階が、西洋のそれと趣きを異にしてゐるのは事實であります。單に趣きを異

にしてゐるばかりでなく、邦樂の音階は邦樂の音階として、洋樂のそれの中に見出すことの出來ぬ美しさを持つてゐるのも、否みがたない事實であります。然しながら、音階といふものは決して不變なものではありません。その生成の歴史さへ殆んど掴みどころがない上、その音階が形を成して後今日までどのようにして傳へられ、又それが各時代の個々人にどう解されて來たかといふことから、在來日本のものとせられてゐた音階がそのまゝ今後いつまでも絶對に我が國の音階でなければならないといふことは出來ないでせう。現に物賣の聲など數年前までは長二度の音程に限られてゐたものですが、最近に到つては殆んど誰も彼もが長三度の音程を發聲してゐます。こんな事實から推しても、音階といふ一つの形は、その國民の心のある一面を表現してはゐるかもしれないが、その形其物は決して絶對不變のものでなく、時代の推移に並行して絶えず進化しつゝあるものだ、と斷言することが出來るでありませう。同時に、此の形あるが爲に異つた音階を基礎とする洋樂を異端視して自分から範域する理由成立しないことになります。邦樂者が何等の拘泥なしに此の城から足を踏み出して、思ひ設けぬ廣い、立派な世界に接し、その外界の只中に立つて唱ひ出す新らしい歌こそ今まで邦樂の持つてゐた美しさをより美しい、より力强いものとして響き出さしめるものでありませう。それは我々日本人の眞實の心の眞實なあらはれであり、現代に生きる我々の心の要求を完全に充し得るものであるにちがひありません。

現代の日本音樂界に一番欠けてゐるもの、從つて最も創造の必要のあるものは、種々な方面に於ける音樂的施設でありません。早い話しが日本には氣持のいゝ音樂會を開くことの出來るやうな樂堂といふものが一つもありません。樂堂がないくらゐですから、歌劇座とか樂劇座とかのあり得やう筈はありません私は自分の藝術的立場からは、歌劇とか樂劇とかを最高のものとは思つて居りませんが、蓄音器を通して傳達せられたオペラの歌詞などが勞働者の口にまで、誦されてゐる今日、そのオペラの眞相がなにものであるかといふことを明示することの出來るオペラ座の一つもないといふことは、あまりに不合理のやうにも思はれます。獨逸などでは人口五萬に滿たぬほどの小都市でも必ず一つはオペラ座を持つてゐるといふ位です。これほど洋樂の一般化せられた今日であつてみれば、日本にも、オペラ座や、進んでは樂劇座が、せめて三大都市に一つぐらゐづゝでも常識的に設置せられていい頃だと思ひます。

獨唱から合唱に、獨奏から合奏へと進んで行く一つの流れは最近日本人の在洋音樂家乃至好樂家の間に、多くの素人樂團を

起しました。學生管絃樂團の演奏などは、此の傾向の生んだよい實の一つといふべきでありませう。かくの如く、一般の人達が單に管絃樂を求めてゐるばかりでなく、既に自分からその演奏に加はらうとする氣勢の著しく現れつゝあるにも拘らず、日本の何處を探しても、いまだに一つの交響樂團をさへ見出し得ないのは心細い氣がします。管絃樂團の創設を企てゝ失敗した九年前の若い經驗を思ひ起してみても、スイムフオニーの創設並びに經營は決して容易な事業でありません。九年の時日は日本の音樂界や音樂に對する一般社會の態度に非常な變化を齎しましたけれど、現在に於ても、よほど確かな經濟的基礎のない限り、獨力管絃樂團を經營して行くことはまず不可能であると言つても差支へないだらうと思ひます。それ故私は現在驚くべき氣勢を示してゐる日本の音樂の進歩を助成し、單なる獨奏に飽き足りなくなつて切りに管絃樂の演奏を求めつゝある現代人の欲求を充す爲に、政府や資本家達が進んで新しい管絃樂團創設の爲後援せられんことを熱望しないでは居られません。現に東京市が主腦となつて組織せられた市民合唱團が、豫想外のよい成績を見せてゐることなどから推しても、政府や投資家の意志さへ動けば、大がゝりなスイムフホニーの助産にはそれほど骨が折れないやうな氣も致します。

單に管絃樂團を創設するだけに止らず、その上に專屬の舞踊や特殊の舞臺装置常設の劇場を必要とする前記のオペラ座や樂劇座創設經營の困難な事は申すまでもありません。それ故歐洲諸國の有名なオペラ座は殆んど悉く王立、或は政府の補助の下に經營せられてゐるのであります。又北米合衆國が今日の如き藝術的盛観を見せるに到つた主因は資本家階級の經濟的援助に加ふるに社交界の婦人達の熱心な後援のあつた爲だと云ふ事實も見逃す事が出來ません。一例を擧げれば、かのメトロポリタン・オペラ・ハウスが、華々しい連夜の開演を續けて行く事の出來るのは、此の背後に默つて年三百萬弗の補助金を出してゐるオットー・カーン氏があるからであります。音樂的施設の爲に官憲に諛ひ、資本家階級に媚びるのは、現代の空氣を呼吸してゐるものといつて恥づべき屈從的行爲であるといはねばならないでせうが、音樂は他の姉妹藝術と異つた演奏とそれに伴ふ經濟的背景とを必要とする藝術である以上、殊に音樂の愛好者である一般民衆がその成育の爲に經濟的援助を與へるほどの餘裕を持つてゐない今日に於いては、何處かに投資者を求めざるを得ないのです。音樂が文化の極に咲く華に比すべきものなら、なほさら、他の種々な文明的施設の爲に投ずる資金を此の藝術の殿堂を築く爲に分つのは當然のことでせう。或る意味に於い

ては一番近い血縁である演劇の爲には惜しげもなく大金を投ずる人達が、貧しい爲に何事もする事も出來ぬ音樂者には見向きもしないと云ふことが、私には不合理にさへ感ぜられます、ブルジョーアに縋ることがプロレタリアの屈從的行爲であり、プロレタリアの自尊を傷けることになるのだとすると、音樂者はこれ以上手も足も出す事が出來なくなるでせう。が、現在の社會組織に於いてプロレタリアがブルジョアに向つて、主張し要求すべきものを過分に持つてゐる以上、音樂と云ふ一團の勞働階級は、資本階級に對して受くべき正當のものゝ主張すべき當然の權利を要求していゝだらうと思ひます。私は勞農露西亞が從來帝室や貴族の愛護の中にあつた音樂にどんな待遇を與へて居るか、よく知りません。が、聞く處によると藝術乃至藝術家は政府から特殊の厚遇を受けてゐるさうであります。私は現在の露西亞を人類のユートピアであるとは思つては居りませんし、新らしい社會組織に於いて音樂乃至音樂者を特別取扱ひにされることを望んでも居りませんが、今日の日本に於いて音樂が受けてゐる悲遇を嘆き、他の姉妹藝術や文明的施設の到達した水準に音樂をも昇らしめたことを熱望するのあまり、こんな弱音をも敢えて吹く次第であります。

最後に私は、日本の所謂樂壇の將來に私の希望しつゝあることを述べさせていただきます。既に日本樂壇といふものがまがりなりにも樂壇としての存在を認められてゐる以上、私がそれに希望するところのものは recreation ではなく reconstruction であるといはねばならないかも知れません。が、既存の樂壇が樂壇と稱ふる事にはあまりに內容の貧弱な、藝術味に乏しいものであると云ふ意味からは、やはり全然新たなものを新造すべきだといはねばならないでせう。日本の樂界には聲樂家と云はれてゐるものが屈指に暇ないほどあります。新聞の紙面に現はれた所から見ると、聲樂家――殊に女流聲樂家の數は、日本の藝術家の大部分を占めてゐるやうにも思はれます。しかしその聲の實質に觸れて見たら、謂ふ所の聲樂家の中に果して個人の音樂家　或ひは藝術家と稱へ得られるものがあるでせう。大多數の歌唱者は學校で習ひ覺へたなまな歌を羞しげもなく、繰り返し繰り返し、所々の音樂會で唱つてゐます。が多少優れた聲の質とか量とか容色とかを賴みに若いものゝ人氣を集めてゐる獨唱者も、藝術的批評眼から見たら、世界の何處の國のものとも知れぬ曖昧な歌詞を旋律に乘せて出してゐるやうなもので、その旋律さへ怪しげなものが多いのですから、發音の不分明な歌謠の奥にある歌の心、音樂の心を表現し得る筈がありませんまして其處に藝術的な力とか藝術味とかを求めるのは無理な事

であります殊に一見不思議に思はれることは、二三眞面目な研究者を除いて殆んど全部の聲樂家が、日本語の歌を明瞭に發音することが出來ないことです。邦語で書かれたいゝ歌謠は少い、またその唱ひ方を敎へる先生がない、といふことも理由にすればならないこともないでせうが、かうした失敗の原因は聲樂家自身の中にあるといはねばなりません。即ち、從來の聲樂家はあまり名聲を追ふに忙しくて、退いて內に問ふ研究的努力を欠いてゐました。殊に歌謠に於いて最も大切な發音研究を等閑に付して來たことが、詩や歌の心を理解する上に非常な支障となつたのではないかと思ひます。一つの國語の發音を徹底的に理解せられてゐれば、他の國語、殊に自國語は自ら容易に理解され得るものです。又、發音が徹底的に理解されて居れば、歌詞と音樂との關係や、そこに作曲者が表現して居る歌の心も自然に體得出來る筈です。ところが現在の聲樂家には、原詩の意味さへ考へずに歌つてゐるものが多いのですから詩の心や歌の心、全體としての歌謠の核心を唱ひ出すことが出來ない。そして、歌謠の心を知らずにいゝ加減な發音で唱ふものを、聲樂家――まして藝術家と呼ぶことがどうして出來ませう。此の意味に於いて日本の樂界には、例外的な數人を除いて聲樂家と呼ばるべきものは一人もゐないと云つても過言ではないと思ひます私は誕生後幾何もないのにもう寂寥と頽廢との氣に充ちてゐる日本の樂壇に、もつと眞面目な、堅實な、徹底的な研究態度を持つた新らしい聲樂家の出現せられんことを心から望んでゐますさうした新人の研究の結果その演奏を通して滲み出て來る藝術味により、藝術的力によつて、早くももう寄席藝に墮さうとしてゐる日本の聲樂を、眞の音樂の本道に引き上げ、聲樂を單なる聲樂以上の藝術とすることが出來るのでありませう。

器樂界には聲樂界に於けるより以上の寂寥の氣が巢喰ふて居ります。現在の器樂家は、前述の聲樂家達と等しく、技術的にまだ〱多くの練磨の餘地を持つてゐるのですから、その演奏には殆んど原曲の持つ藝術的香氣とか色彩とかを見ることが出來ません。勿論樂曲の心は技術の奧にあるものですから、技術の練磨が直ちに樂曲の藝術的理解を生むことにはなりませんが、日本の器樂家の大多數は演奏の準備的階段である技術其物に欠けてゐるところがあるばかりでなく、樂曲の力をも欠いてゐるやうであります。いつたい器樂の演奏は、技術的に何處までも原曲に忠實であるのは勿論、その技術を通して作者の心を彷彿せしめ、同時に樂曲の隙を突いて演奏者自身の解釋なり藝術なりを表現する所まで進まなければならないものであります。が、原曲の心を直觀する力を持つてゐない器樂者は、せめ

て譜面に現はれた音の眞理的解剖によつて、曲の心がおよそどんなものであるかといふことを推知するほどの努力はあつて然るべきだと思ひます。歴史の淺い日本の樂界に、超異的な天才の出現を待ち望むのは無理なことかも知れませんが、假令どんな鈍才に對しても、眞面目な努力と熱心とによつてかち得るものを期待しないのは、却つて禮を失したことになると思ひます。私は日本の器樂家に、藝術を求めるより先に、熱と努力と研究的態度との現はれて來ることを希望しないでは居られません。

聲樂家といはず、器樂家といはず、一般の音樂者が遊戲的氣分から脱しないでゐるといふことは、非常に嘆かはしい。事實であると思ひます。多數の音樂家は、自分が専門的、職業的な音樂者であるといふことを恥ぢとするものゝ如く、自分の技術をあそびの域に止めておかうとする傾向を持つております。だから彼等の演奏には緊張がない。嚴粛さがない。まして眞の藝術味のある筈はありません。私は屡々どうせ聽衆には解らないのだから、といふ捨台詞を演奏後の音樂者から聞いて、はつとしたことがあります。演奏は聽衆を對象としてのみ行はるべきものではありません。聽衆の存在を忘れ、凡てに對する顧慮や批評を棄て、眞實に赤子のやうな謙譲な心で、樂曲そのもの中に自分を打ち込んでしまはなければ、眞實の演奏の出來る筈はありません。聽衆を輕視することは、演奏者自身の技術上の欠陷を廣告することにはなつても、それによつて演奏者はいさゝかも偉くなることにはなりません。演奏者があそびの領域から足を洗つて専門的音樂者であるといふはつきりした自覺を得ないうちは、彼らから眞實の演奏を聽くことも、彼ら自身の技術的進歩も、ひいては日本樂界の進歩をも見ることが出來ないでせう。が、深く考へて見れば、日本の音樂者をして單なるあそびの領域に止まらしめる原因は、彼ら自身の中にのみあるとはいへません。勿論音樂者は自分の仕事に對して最も責任のあるものにはちがひありませんが、謂ふ所の音樂者がかなり群生してゐるのに、強固に音樂者組合とか、固定した音樂市場といふものがいまだに組織設立せられてゐないといふことも、多くの音樂者をして安定のない浮浪の民とし、彼らをして或る場合には餘儀なく彼らの仕事をあそびとし、専門音樂者でないことを標榜せしめることになつてをりはしまひかと思はれます。美術には帝展其他の出品機關があり。文學には無數の新聞雜誌と云ふ發表があるのに、音樂者のみ獨り、刹那的に開かれては又あとかたもなく消えてしまふ此處彼處の音樂會に臨時に出演してゐるのでは、連續的な發達を樂界及び個々の樂人に求めるのもいさゝか無理のやうな感じがないではありません。勿論音樂者側も

もつと眞劍に積極的に自分達の道を切り開いて行くべきでありませうが、音樂者に眞面目な發表機關を與へ、錬磨精進を獎勵する爲に、美術に於ける帝展にも比すべき日本音樂祭といつたやうなものを年々一定の期日に開催することになつたら、創設時代にある日本音樂を、のび〳〵と健全に生ひ立たしめることが出來るでありませう。

以上私は作曲、施設、演奏の方面に亘つて、將來の日本音樂に對する私の希望を述べて來ました。前にも一言しましたやうに、音樂は他の姉妹藝術や文明的施設に比して數段下の創設時代にあるので、從つてその未來には新たに造るべきもの、開拓すべき未開地が過分に殘されてをります。が、一面から見ればこれは音樂が特に他の文化に遲れてゐるといふよりは、音樂が文化の極に咲く華の如きものであり、又文明の智慧樹にも比すべきものである爲、他の文化運動が完成に近くのを待つて、その上に美くしく咲き出る爲であるともいふことが出來るだらうと思ひます。そして日本は從來の文化運動に於いて示した驚くべき力を、必ず新音樂の創造にも現はし、遠からず、歷史のどの時代にも、世界のどの國にも見出すことの出來なかつた文明の精華を、此の日本の土から生ひ立たしめることになるでありませう。

—一九二二・一二・一—

社會的道德への進化と日本

長谷川如是閑

時代の推移に伴つて、社會の制度に種々なる變化が惹起されるが、其れには殆んど、根本的の變化と思はれるものもある、然し乍ら、如何なる變化も、全く新らしい創造である場合は少ない。殊に社會の制度は、宗教にしろ、道德にしろ、法律にしろ、其れを生み出した生活の動機は、永い人間の歷史を通じて働いてゐるものなので、從て、全く新らしい變化と見られる過程の中に、非常に古い歷史を持つた働きの現はる事が珍らしくない、殊に近代に至つて、諸制度の發生學的研究が進んだ結果現在の社會制度の原始的の意義が次第に明かになつて、其の發達の本質的のものと、墮落的のものとが、自から判別されるや

うになつて來た。即ち人類生存の、進化的方面のみが必ずしも文明と共に發展しないで、其の墮落的方面が文明の進歩と、相伴つて發展し行きつゝある事が認めらるゝに至つた。其處で文明が、其の社會組織の難境に陷ると共に批判される事になる。即ち多くの文明の産物が、生存の發展であると同時に、障碍を伴つてをるものである事が發見されるのであるが、此の障碍を除き去るに當つて、社會人が何ういふ意志目的を採るか、言ひ換えれば、此の文明の行き詰りから救はれる爲めには、社會的にどんな方向を採らねばならないか、其の途を發見するに當つて、彼れ自ら非常に新らしい進化であると思はれるやうなものが、其、實、昔しから一種の生活意識として、人類に培はれて居つたものであると云ふ事が發見されるのである。例へば、舊露西亞の壓制に對して、舊露西亞の革命家が思ひ付いた社會理想は、有史前の社會形式であつた、又資本主義の社會組織の行詰りに對して、英吉利の社會主義の思ひ付いた、色々の種類の社會理想には、大抵何等かの復古的精神が含まれてゐないものはなかつた。其の中の最近の、ギルド社會主義の如きも、其のヒントを中世のギルドに得たのである。何故に制度の變革が要求せられる場合に、右のやうに全く新らしい創造であるよりは寧ろ、何等かの意味のルネサンスが、持ち來たされるかと云ふに、其れは畢竟、人類生存の過程は、絶對的に或る一定の、形態樣式をとらねばならないと云ふものではなく、Aの樣式で進んだ過程が、次第に行詰つてBの樣式に進化すれば、其れが一定時生活を生かす事になるが、又其のBの樣式の、次第に行詰るに從つて、次のCの樣式を生み出すのであるが、其のCの樣式は畢竟Bの反對であるから、或る點で必ずBが其の反對として起つた處のAの樣式に近づく、と云ふのは自然の事である。永く座つてゐた者は、次には必ず起つて運動する、然も、永く運動した者は、又次に必ず其と反對の行動を執る、然も、此の行動は必ず運動する前の行動、即ち、靜座に似た行動であるに違ひない、其れは一種の復興である。

社會進化の、前述のやうな過程を、現代の道德意識に當て嵌めて考へて見ると、其の事情が殊に顯著である、道德とは畢竟生存の約束である、人類の共同生活は、其れが偶然の集りであつても、家族であつても、民族であつても、必ず一定の約束の下に成り立つて居る、此の約束の意識が即ち道德である。要するに其れは、人間を社會的に生かす法則の意識に外ならない。

人間が社會的に生きる事を、「生活」と呼んでゐる、道德は則ち此の生活の約束である、從て生活に第一次的な、最も根柢的

な行動の約束が、第一次的の道德即ち根本の道德である。其れは生存の第一條件である、然も生活には第二次的、第三次的の過程がある、其れは第一次的の條件の根柢の上に、成り立つ處のものであつて、其の第一次的の條件が崩れれば同時に成り立たなくなるものである。其れは即ち「生活」に對する「生活の支配」である。

其處で道德の意識には、二つの流れがある、即ち「生活の道德」と「支配の道德」とである。前者は、生活の第一次的條件の約束であり、後者は、前者の生活條件に依賴する第二次的生活の約束である。例へば、自ら米を作るのが前者の道德である、自ら米を作らないで、米を作らせるのが後者の道德である。

然るに文明人の道德意識は、右に述べた生存の約束としての道德意識であつたかどうかは疑問である有史以來、人類の生活は、一貫した組織の下に進んで來たが、其の組織は、一樣に、生活同じ形式で支配し來つた處の大同小異の體制であつた。從つて其う云ふ生活組織を採り來つた人類の、生活の意識は、同じく一樣の道德的構成を有して居た。然も、此の道德は、前に言つた「生活の道德」ではなく、「支配の道德」であつた。其れが數千年來の人類の進化を秩序だて事は歷史の示す通りである。其れは全く大いなる貢獻であつた然し其の道德が生活の第一條件の意識でなかつたことは拒まれない、

此の「支配の道德」が、數千年來の人類の生活を秩序たてた處に依つて見ても、生活の其のやうな意識が充分其の發生理由を有し、又人類進化に對する確かな意義を持つてゐたに違ひないにも拘はらず、此の支配の道德は、其の發生の當初から、多數人類の生活意識と相容れなかつた爲に、反抗を受けたと云ふ事實がある。無論此の反抗は、意識的であるよりは、寧ろ無意識的であつた。思想的であるよりは寧ろ行動的であつた。其れは此の反抗が、生存の道德に基づくものだからである、生存の道德は元來、思想系統に於て發展した所の道德ではなく、生活行動の道德であるから、立派な思想上の組立を持つてゐず、又持つ必要をも持つてゐない。從て其れは古代生活の傳說の上に、斷片的に現はれてゐるに過ぎない。例へば、古代の支那に其の著しい例がある、元來、軍國的國家の、組織の完成に伴つて、軍國的支配の、思想上の完成が、最も早く現はれたのは、古代支那であつた。で此の軍國的支配の思想に根柢する道德の甚だ發達したものを同時代の支那の支配者は持つてゐた。今日の支那に至る迄、正統の道德として傳へられたものは、即ち、其の道德であつた。所が、其の古代支那に於いて、右の軍國的生活意識とは全く相反する生活意識——其れを社會的生活意識

と云つても不都合は無いであらう――の存在してゐた事が、傳説的に傳へられてゐる。軍國主義の讚美に對して、「帝力何ぞ我れにあらんや」と高唱した、生活意識が其れである。のみならず、古代支那の軍國國家の道德には、後代の國家道德に於けるよりも、遙か多く、生産尊重の傾向を持つてゐた事は、所謂、堯舜の法制にも現はれてゐる、今日の意味の、國家道德では、考えられない生産尊重の意識があつたのである。其れは、古代人が自ら生きるに當つて、如何に生産が重大であるかを、無意識的に理解した結果である。桑や繭を神秘化したのも其の一例である、支配の道德に、其の發生の初めから、此の生活の例道に依つて反抗されてゐた事は、頗る重大の意味を持つた現象であると見なければならない。

其れにも拘はらず支配の道德は、其れ自らを完成せしめる爲に、生活に對する彼等の階級の、顚倒的意識を、愈よ高昇せしめて、其處に、所謂希臘式文明を建設するに至つた。此の希臘式文明の様式は、生活の第一條件、即ち、生活の第一次的様式を、殆んど社會的生活の、範疇から驅逐して終つて、其れを非人間的生物、即ち、奴隷と牛馬等の仕事として終つた。其うして彼等は生活の第一次的條件を全く離れた、彼等の所謂理想的人間生活を營む事に依つて、生活組織を組み立てた。其處で、全く第一次的の生活行動を離れた人間の組織が、極端に發達して、希臘文化が、歴史あつて以來の偉業を遂げる事が出來たのである。

此の希臘式文明は、人間が成し遂げた仕事の最も偉大なるものゝ一つであつたには相違ないが、生活の第一次的條件を自ら爲ないと云ふ、重大な過誤を持つてゐたので、到底永續すべき性質のものではなかつた。從て彼れの學術、藝術、哲學は異常の發達を遂げたに拘はらず、其れと反比例に、生活が崩壞して終つた。然して、此の希臘文明に次で起つた、中世の文明が生産尊重の生活であつたと云ふ事は、極めて暗示に富んだ事實であるに拘らず、人類は其の傳統的衝動――支配欲――の爲めに、更に、近世の希臘式文明の復活となり、近代文明を、支配の様式の上に組立てる事になつた。即ち、生活の第一次的條件は、特種の半奴隷階級に委ねて、支配組織の根柢の上に、一切の生活を發展せしめる事となつた。從て、其の道德意識は、生活的でなく、支配的である。で生活は矢張り希臘の其れと同じやうな危險を持つものであると云ふ事が認められる、言ひ換へれば彼れの哲學が偉大の發展を遂げつゝあるのと、反比例に、其の社會的生活が、動搖を感じてゐると云ふ事になる。

此れが即ち、社會が其の第一次的生活條件を蔑視した當然の

報ひである。其の結果、生活の組織が、凡ゆる方面に於て、障碍に出合つてゐる。此の障碍は、生きんとする人間にとつて無感覺に其れを見過す事の出來ない程痛切に、社會的事實として現はれて來た。其處から、現代的生活の道德意識に、著しい變革が要求されてゐるのである。

現代の道德的進化は、右に述べて來た樣な過程をとつたのであるが、然し斯樣な生活の意織が、一般人類に一樣に發生すると云ふ事はあり得ない。何となれば、人間は神の如に、凡ゆる立場から、生活を意織すると云ふ事は出來ない。彼等は各々、彼れ自らの生活の立場に於て生存する、從て彼れ自の生活の立場に於て生存を意識する。其處で、現代に於ても、自己の生活を傳統的支配の根柢に、置いてゐる者は、其の立場から意識する所の、彼れ自らの生活意識を、人類一般に普遍的と見るのは已むを得ない。此に反して、傳統的生活の障碍が、彼れ自の生活に迫つて來てゐる人人 —生產階級の人々——は、此の障碍を痛感して、其處に傳統的生活意識の缺陷を發見する。而して此の發見に基いて、彼れ自らの生活意識を構成する。其處に、傳統的道德と甚だ異つた、『生存の道德』が見出される、此れは新しい道德ではなく、數千年前傳統的道德の發生と同時に、其の反對の極に於て、感じられてゐた意識なのである。

特に日本の事情に就て言へば、其處に、甚　他民と異つた或る一つの事情がある。其れは甚だ日本の爲に幸福な事情であるか、不幸な事情かと云ふに、民族的固有の道德か、比較的「生活的」であつて、傳統的支配の道德の哲學が、悉く借物であると云ふ事である。

一體日本人は實利的である、と云ふ事を批難する樣に云ふ人があるが、此れは、英吉利人にとつて幸福であつたと同樣に、日本人にとつても幸福であつたのである。傳統的文明を意識する所の哲學は、一つも日本民族の產物ではなく、皆其の根柢を他民族の生活に發したものである。だから印度の古代哲學でも獨逸の近代哲學でも、其儘根本的に、日本人の生活から取捨てる事の出來ないと云ふものでは決してない。生活の道德が、吾々の生活を生かさねばならない時に當つて、投捨てるべきものが、悉く借物であると云ふ事は、極めて好都合の事情である殊に生活の前途が生活そのものの上に築かるべき時に。

法律學に於ける古い頭と新しい頭

高柳賢三

□

「法律學は他の科學よりも半世紀程後れて居る」とは西洋で度々云はれる相言葉の一つである。從て法律學者の頭は舊いものと世間の相場が定まつて居る。これは西洋許りでなく、日本でも大體、世間は左様見て居る。併し同じ舊い中にも、其處に大ぶると中ぶるとがある。又稍ゝ新しと見るべき頭も絶無ではあるまい。特に現代の様な所謂急激な過渡時代、變遷時代、に於ては、舊い頭と新しい頭との對照が色々な點で、あざやかにあらはれる。

現代日本に於ける法律家の頭は殆んど全部西洋の法律學の影響を受けて居る。併し、その中にも純日本式たらんと欲する頭もあり和漢折衷を得意とする頭もあり和洋折衷式の頭あり、和漢洋折衷の頭もあり又純西洋式の頭少くも純西洋式たらんと欲する頭もないではない。又西洋式の内にもドイツ式あり、フランス式あり、イギリス式あり、アメリカ式がある。從て和洋折衷式中にも和獨折衷、和佛折衷、和英折衷、和米折衷の細分がある。更に漢の影響の大小をも考の中に置くと、分類は一層面倒になる實に百花爛漫の狀態である。が併し、その間に自ら、古い頭と新しい頭とが相對峙して居る。併し豫め斷つて置き度いのは、舊必ずしも惡ならず、新必ずしも善ならずと云ふ事である。又舊新の區別も決局見る人々に依て異るので、必竟、それは一私見以上に、出づるものでない

□

舊い頭は法律の世界を特種な世界だと考へる。他の世界から獨立した領域をもち、獨立な方式に依て作用するものであると考へる。從てその努力の主たる中心は法律現象の分析である。從て又法律學に於ける分業の方面を高調する。之に反し、新しい頭は、法律の世界を、他のあらゆる世界との關連と云ふ方面から、眺めんとする。法律の世界も、必竟、廣い意味での人生――人間生活の一顯現であると考へる、從て法律の研究と云ふ

ても法律學の内に他の學問がなした貢献や其の採用する進歩した方法を取り入れんとする方面に特に努力する。舊い頭は法律と云ふ狭い世界に安立して、その精密なる分析と綜合とに法律家の本分を見出さんとするに反し、新しい頭は哲學、美學、歴史、社會學、經濟學、政治學、統計學自然法科學、文學の諸方面に趣味を有ち、その新しい傾向や新しい貢献を法律の世界に編み込まんとする、舊い頭は精密である。新しい頭は粗雑である。舊い頭は專門に立ち籠らんとするに反し、新しい頭はあらゆる領域にまで浸入せんとする。舊い頭は他の干渉を許さゞる獨特の領域に立ち籠るが故に生きた人生其ものには觸れる事がない、新しい頭は「人間味」と云ふ事と「活きた世界」「生きた人生」と云ふ事に特に鋭感である。新しい頭のカルテュアは、確かに舊い頭のカルテュアよりは廣い。然し深いかどうかは疑問である。

□

舊い頭は語學の教養と云ふ方面でも割合に狭い。西洋では自國語以外出來ぬ頭も數多くある。日本では、苟も學者と云ふ名の付く以上大抵一個國丈の外國語は出來る。英か佛か獨がどれかには通じて居る。併し、新しい頭は廣いカルテュアがその理想丈に英佛獨丈は大抵判讀位は出來る。併し、舊い頭は一本槍丈にその槍先に可成り冴えて居つたが、新しい頭は兩刀使、又は數刀使丈にその槍先は大分に鈍つて居る。舊い頭は讀む事も話す事も書く事も相當にやつてのけるに反し、新しい頭は讀む事がやつと出來る丈で、話も出來ねば、又書く事も出來ない。廣い丈に淺い。併し、更に、一層新しい頭には英佛獨語をデッドランゲエジ・として取扱はずにリヴイング・ランゲエジとして取扱はねばならぬと云ふ自覺が芽ざして居る。「生キタ法律」を研究する熱と同時に「生きた言葉」を自由に使用する能力を尊重する風潮が起りつゝある。追々は各國の法律家達を自由に法律上の議論を上下しうる程度の新しい頭も少なからず發生して來る事であらう。

□

舊い頭は法律と云ふ領域に立てこもるが故に、理論法律學の範圍に於ては「法の性質」と云ふ問題を中心として、盛に議論を鬪はす。或は法律は主權者——君主・又は民衆——の命令であると論じ、或は法律は國民の確信であると論ずる。或は制裁(Sanction)は法律の要素であると云ひ或は無いと論ずる。

新しい頭は「生きた世界」に多大の趣味をもち、法律は只その一つの方面だと云ふ處に力を入れて考へるから、理論法律學の範圍内に於ても「法律の性質」と云ふ點よりはむしろ、「法律の

職能」と云ふ方面に特に興味を有つ。複雑な人生を規律するファクターとして法律はどれ丈の力を有するものであるか。社會規律の力として法律はどの程度まで有能であるか。どれ丈の範圍までは道徳の力、社會の力に委して　どれ丈の範圍まで法律が干渉すべきであるか。法律が干渉すべき場合に如何なる範圍まで「立法」と云ふ形式に委すべきや如何なる範圍まで「判例法」と云ふ形式とに委すべきやの限界は、果して如何にして之を定むべきか。新しい頭にとつて、理論法律學はこうした形式の問題として、呈供される。

□

法律自體の研究に就て舊い頭は成文法と判決例との研究を以て能事了れりとする。それは又舊い頭が法律と云ふ金城鐵壁に立籠るから來る一つの歸結であらう。舊い頭の中にも成文法のみの分析を偏重する傾向は、大ぶるの部に屬し判決例の研究に趣くのは中ぶるの部である。

新しき頭は「生キタ法律」によつて多くの興味を有ち、法律と慣習それから又法律と道徳との區別など云ふ「法律性質」論から來る議論などは之を輕視して、「現實に社會を規律する法律」を觀察と推理に依て發見せんとする。

□

舊い頭は法律上の原則が抽象的に「正義の原則」に合するとか「傳統的の原則」であるとか、或は「論理的に正確」であるとか云ふ丈で立派な法律であると考へる。併し新しい頭は常に實際上それ等の法律が如何に運用せられて居るかと云ふ點に着眼しつゝ法律の可否を批判せんとする。そして抽象的に正義に合した法律が實際上不正義に終つて居る事の多いのに驚いて、その原因を探究する。經濟的原因、心理的原因、民族的原因等を考察して實際上に於て正義が實現せられる樣に工夫を凝さうと努力する。

□

舊い頭は實體法、即ち民法とか商法とか刑法とかの規定にのみ趣味を有つ。コンヴエンショナルな考方に依れば抽象的な正義原則の形成としては是等の法律は最もテイピカルなものであるからである。そして手續法即ち民事訴訟法とか刑事訴訟法とかは必竟從たる法律であるとして之を輕視せんとする傾がある然るに新しい頭は訴訟手續と云ふ一般からは輕いそしてドライな題目として考へる問題に就て多大の興味を感ずる。實體法で認められた權利義務が裁判所を通じて實現されるのには手續法が是非共通らねばならぬ關門であり、これが不完全であれば實體法上權利があつても實際上は請求が出來ないものだ

と云ふ事を強く感ずるからである。殊に訴訟遅延、訴訟に要る費用の問題を中心として、司法機關と訴訟手續とに就て痛切に考へさせられるからである。これも新しい頭の相應な考方であると云はねばなるまい。

□

舊い頭は財産權に關する法律に趣味を有つ、十九世紀の法律殊に私法は財産を中心として規定されて居つたのである。そしてその法律學も主力を財産に置いたからである。然るに新しい頭は「人格權」と「勞働權」とに特に趣味を持つ、蓋し人格權と勞働權と二十世紀に於て、法律的保養を享受すべき、プログラムとなつて居るにかゝはらず。現在の法律が特にこの方面に於て、不完全であるからである。勿論財産權中でも私有財産制度の可否と云ふ大きな根本問題丈は新しい頭が喜んで考へる處である。又ある點で人格權の延長と見らるゝ所謂智能所有權――著作權とか發明權とか云ふ方面の問題は矢張り新しい頭の興味をそゝる。併し、勞働法それが新しい頭の一番發達せしめようと努力する題目である。

□

古い頭は法律の解釋適用に就て、文理解釋と論理解釋とを重んじ立法者の意志の解釋に重きを置く。その頭の奥には十九世紀の法律思想の二大特質である法の完全性と三權分立思想とが潜在する。法は由來完全である、裁判官は只之を見出して解釋適用するにある。法は立法者のみ之を作るものである裁判官の任務は只立法者の意志を探究して之を解釋適用するにある裁判官が法の缺陥を補つて法を作り出すと云ふが如きは法の完全性の理論と三權分立の精神に反するものであると考へる。そして此の「法の完全性」と「三權分立」と云ふ二つの前提の背後には「法的安定」と云ふ考が潜んで居る。

新しい頭は法律の解釋適用に就て自由解釋を主張する。立法者の意志よりもむしろ立法の精神を目標として解釋を施さんとする。そして「法の完全性」も「三權分立」も必竟現實には必ずしも妥當でない一の獨斷であると考へる。抽象的な法を器械的に具體化するのが裁判所の任務ではない。具體的係爭事件を、正義と公平とに合致した樣に解決するのが一番大切な事であると考へる。「具體的妥當性」それが裁判官の心得でなければならぬ、法的安定とか云ふ樣な事は舊い頭の學者達の空想で御座る。事件が妥當に片附きさへすれば社會は圓滿に動くと考へる。從て此方面の新しい頭の考方は素人には極めて受けが宜い。

□

その外、色々な點で舊い頭を新しい頭とはその傾向差をあらはして來る。併し、之を要するに舊い頭の働き方は靜的である、スタテイツクである。之に反し新しい頭の働き方は動的である、ダイナミツクであると云ふ事が出來よう。舊い頭が如何にも專門家らしいに反し新しい頭が廣く人生のあらゆる方面に興味をもつ素人味に富んでアマターリツンである、舊い頭が語學に於て一本槍で行くに對し新しい頭は數個國を兼學する點、然も讀む事丈でなく數個國語を話し 書くと云ふ動的な語學に趣味を有つ點、舊い頭が理論法律學の領域に於て「法の性質」に興味を持つに對し、新しい頭が「法の職能」を中心として論究する點、舊い頭が成文法と判例と云ふ文字の上の研究に沒頭するに反し新しい頭が「生キタ法律」——即ち人生を現實に動かして居る法律に力を入れる點、舊い頭が法規の抽象的沿革的論理的妥當性を考へるに反し、新しい頭がそれが妥當に運用されて居るかを考へる點、舊い頭が實體法のみに特に重きを置くに反し、新しい頭が手續法に重きを置く點、舊い頭が既成の財産法に趣味を有つに反し新しい頭が未成の人格權 勞働權に、重きを置く點、古い頭が法的安定を高調するに反し新しい頭が具體的妥當性を高調する點、何れも皆な靜的な世界觀と動的な世界觀との差異の發見に過ぎぬものと見られよう。

□

現實の法律家を一人一人とつて考へれば徹底的に舊い頭も徹底的に新しい頭も少ない。大抵兩者の色彩は相混合して「現實の法律家」を形成する。舊い頭も新しい頭も畢竟一の「假想的頭」である。只新舊の混合の度合の多少に依て比較的に舊い頭と比較的に新しい頭とが「現實法律家の頭」の特徴を爲すにすぎない。

舊い頭必ずしも呪ふ可らず、新しい頭も亦必ずしも危險視すべからず、兩者は相扶け、相補つて、新しき世界、より宜き人生を生み出すために存在する。

天才！ それは新舊の域を超越して輝く。そして天才は少くも數世紀の間光明を放つて其光を失はないであらう。改造の日本改造の世界はかゝる天才の來現を法律學の方面でも待つて居ると私は考へる。（完）

講義室のアインスタイン教授

講義室に於けるアインスタイン先生の印象

遠藤美壽

○

憧がれし偉大なる人。アルベルト・アインスタイン先生を十一月廿五日午後二時半理科大學のあの天井高き急勾配の階段大教室に待ちぬ。五分また十分、晴天に陽を迎ふるごとき嚴肅なる時は靜かに去る。間もなく準備室よりの扉開かるゝ氣配にわが心思はずも戰きつ又いと大きやかなるものに對して小さく縮まるを覺えつ——たとへば畏き神殿に獨り跪けるときの如く。

先づ默禱す。「わが前に現はれし此人を正しく見、その語るを正しく聞かしめ給へ」と。

筋　に長岡先生の紹介の辭は終る。そつと面を擧げて見ればやはらかき髪、黒く濃き髭優しき眼の偉いなる人は靜かに目禮しつゝ黒板の前に立てり。懐しき容、夢にもあくがれし姿そのまゝに、萬物をやさしく包容する——おゝ神の愛に充てる感じよ。

○

説き來り説き去る自然認識の相對性。光の眞の姿。四次元世界より觀る宇宙形象の整齊更に進みて重力場の原理に入れば自然法則の絶對がまざまざしく私の思惟の中に導かれる。しかも發見者その人によりて　く眞理の尊さ。

高く低く先生の言葉のまゝにわけゆく眞理の海。難解なる數字も先生の口より出づるとき彼岸に見ゆる眞理の島に達する老船長の確實なる指示に過ぎず。たゞ快くたゞ安かに。

○

美しき南獨逸の言葉。やわらかきアックセント。北獨逸の强き語勢は感激に充てる詩を讀むに適せんも冷靜なる科學的眞理を説くは先生の如き南獨逸語に如かず。

○

先生の講義はとくに言葉を飾るにあらず。たゞ素朴に丁寧に解く眞面目さのみ。されど我等の心はその素朴の中にあふるゝ處女の如き唯美的の魅力に引きつけられて時のうつるを知らず。モスコウスキーは云ふ「先生の講演そのものゝ内には二つの主な心的要素を含む。其一つは先生の性情、他の一つは先生のもの優しき心持」と。

○

美しき白き手、やさしさの籠る眼の光り。ひろき額に刻める深き皺、太やかに微笑める鼻。

○

すべてが自然そのまゝの現れ、清楚な眞の情にみつ。

○

澱みなき講義の熱し　るとき先生はしばしば高き窓を仰ぎ見る。恰も神の榮光を見つゝ語るが如く。

又むづかしき數理に興味ある例を見出せるとき先生の頬に微笑の浮ぶを見る。嚴肅なる科學の殿堂にユーモアを見得る先生の餘裕、おゝ天才の閃きよ。

○

右手を後にして教壇をしづかにあちらこちら歩みつゝ諄諄として説き重要なるところにくりかへさるゝ力强き言葉、我らの胸に秘められし小さき智の芽も自然に萌え出でゝいと大きく育くまれるを覺えぬ。

偉大なるアインスタイン教授

伊藤　德之助

さまざまの感想が、それからそれへと涌いてくる。今しがた講義が終つたばかりで、心の中に次第もなく、涌き出てゝくる感想を、どうして述べることができやう。強い印象、深い感銘を與へた先生の風姿。その優しい南ドイツのアクセント。

眼のあたりに見る、溫雅そのものゝ樣な先生は、講義の第一日に　教壇に立つや、やをら白墨を手にして　いきなり講義にかゝられやうとした。何の虛飾もなく、何の衒氣もなく、少しも取り繕はぬ床しさ、そして諄々と一緒に研究しやうと、相對性原理の思想の發展、その重な應用に說き及ぼされる。講義の後の質問にも、一々やさしくこれを承け容れて、滿座に明確な答を與へられる。聽く事、視る事、悉く溫雅。やさしい謙讓な態度の裏に、強い自信の閃の覗へるのは、一萬年に一人といふ偉人の力强さであらう。

そのゆつたりと步調を運びつゝ語られる輕い抑揚に流れゆく、先生の講義の旋律には、そゞろに平和論者としての、偉大な心の反映が、滿ち溢れてゐて、私はしみじみと深い感激にうたれる。

しかし、自分の語學の力の足りない爲め許りでなく、いや多數の若い人々は等しく、切角の講義を、果してどれだけよく、解し得たであらうか。言語上の障碍が、又痛切に感じられる。一昨夜も去る學者に、エスペランテストである事を嘲笑されたけれども、理想としては人類愛に進む過度とともに、實用的にその必要を、あらゆる嘲笑に耐えて主張する事が、どれ程吾々の福音であるかを痛切に味つたのである。

優しい先生の語調の旋律は、今に耳に離れない。偉大なる學者の、深い廣い胸の中に築きあげられた壯嚴な理論の體系は、今迄皮想た實用をのみ追ひ覓めてゐた　迷える日本の學界の思想を一掃して、軈て美しい學術の實る秋も近づかう。

生れてから今迄、私は先生の講義のやうに安滿となつかしさを感じたことはない。

（一九二二、一二、一）

なつかしき人アインスタイン

矢崎　美盛

十一月廿四日の午後、彼は根津嘉一郎氏邸に同家の什寶を見た。見るべき東洋藝術の逸品は數多くあつたのに、彼の時間はあまりに尠なかつた。且つ、それは恐らく彼にとつては、東洋藝術に對する極めて數すくない鑑賞の經驗であつたであらう。ここで、佛畫に描かれた形象の思想的內容や、吾々の傳承的區感に訴へるものなどに對する、寧ろ特殊なる理解をば、私は彼に望まうとは思はない。彼が「自然」に表現を與へた繪畫をば、より多く悅んだことは當然であつた。否、彼はそれ以上であつた。彼は、そこに東洋の藝術家が往住する藝術的風韻の奧に、寧ろ私の豫想以上に、吾々を產んだ祖母の心境そのものを味感し得たと同時に、彼の興味を引いたどの畫に於いても、何かしら藝術一般が普遍的に有ち得るが如き美の本質的要素をば見出してゐた。彼は、科學の第一の規定をばエモーションであると言つたと聞いてゐる。彼こそは實に「驚き」を知る人であつた。彼は、咲き出でた花の美しさに、愛と驚きの心に滿されつゝ、この美はしさに惠まれたる「花の秘密」の探求に、堪え難く心ひかるるまゝに植物の學者となつた人の樣な種類の、純粹なる心の自然科學者であつた。

彼は、多くの日本の山水畫の前に立つたと

き。「一幅の畫の中に、部分的に纏つた世界を描きつゝ、然かも全體としての諧調において、渾然とした藝術的世界を表現してゐる特殊な透視畫法」を理解しそして悦んだ。雪舟や啓書記の山水が、寧ろリアリスチッシュである」とさへも言つた。佛徳を讃へんがために釋尊の前に集つた樣々の沙門、羅刹の姿を眺めて、「この樣にただ一本乃至二本の線によつて描かれたこれらの顔が、この樣にまで個性的な鋭い表情の表現を與へられ得ることはすばらしい」と言つた。巨勢金岡の那智瀧圖に於いては、「この藝術家の理想主義的把握を通して、この畫は眞の自然をリアリスチッシュに活かしてゐる」と言つた。これらの言葉が包有する内實は、決して單なる歐洲人が吾々の山水畫に對して直ちに實感し得る所ではあり得ない。私はなつかしいうれしさを感じた、そして心に厚く感謝した。私はここにこれらの事柄を諸君に物語るとき、必ずや諸君の多くが、彼に對して、私と同じ感謝となつかしさとを懐くであらうことを豫期してゐる。

桃山時代風の美術もまた別の意味で彼の氣に入つたらしかつた。光琳の杜若圖屏風の前に立つたとき、彼は『實に美しい、あのリズムは本當に活きてゐる』と言つた。そして彼は二三歩さがつて、あの澄んだ輝きをこめた瞳、あの夢見る樣な眸をば、ぢつと畫面いつぱいに注いでゐた。けれど元祿の浮世畫に描かれた奴婢のリズムには、『活きた所がすくない』と言つた。これらの素朴なけれど本質的な直觀を、言葉すくなく卒直に口にする彼を、私は單なる物理學者の名で呼びたくはなかつた。

巨勢金岡の紅蓮圖があつた。そして、この藝術家の屬する時代の思想的背景が佛教的世界觀によつて支配されてたことを彼が知つたとき、彼は『この畫の中に、どんな佛教的なものがあるか』と尋ねた。私はそこに、ただ莊嚴な蓮華が描かれてゐるといふ單なる事實以上には、（それも　に蓮華そのものが佛と關係するといふ聯想を以つての外には）、何物　所謂「佛教的」を見出し得なかつた。それでその事を彼に語つたときに、『さうした思想的世界の中にゐた藝術家が、この樣な自然の觀方をしてゐることは、單なるこの畫の事實以上の意味がある』と彼は言つた。そして暫く彼は默してゐた。その時彼の腦裡に往來した思想は、恐らくは、「物象」の世界について考へる人のそれではなくて、「生　」の大實について思索する人その人のものであつたであらう。

かくして、私は、相對性理論について語る彼のほかに、藝術と心とについて感じる彼を知つた事を悦ぶ。おだやかに物を見て素朴に感じそして深く理解する彼は、何といふなつかしい人であつたであらう。愛染明王（？）の前に輝いた赤鬼の眼に極立つ　鮮かに殘つた胡粉の白を、『入れ目の樣だ』と言つて、嬉々として子供の樣に笑つた此の偉人は、若いヘルデルリンがいかなるゲエテに對して抱いたあのなつかしさをば、私の中に育んだ。彼の瞳と唇には、私は偉大と皮肉の片影をすらも見出し得なかつた。彼は、清く靜かに落ちついた雰圍氣を、彼自らの存在によつて、自らの周圍に作り出す。そしてその靜けさの中に確と卒直に立つてゐるの。この事柄の意味は重大である。それは地上を超へて清い人格の尊さを語るべきものである。この　靜けさは、莊大なる宇宙の調音にひたすらあこがれる人のみの靜けさである。いかにも心の純粹なる自然の學者にふさはしい。それは、功利主義的な物の考へ方から、全く淨められた人のみに屬する靜けさである。私は彼の性格をしみじみ尊くなつかしいものに感じた。彼はなつかしくして偉大なる人格である。

（一九二二、十一、三〇）

感謝

東京帝國大學理論物理科學生
仲瀬　善太郎

美しい幻想！憧憬！そうだ。私も若いものの常として、名士や名所に接せんとする前に、いつも、美しい幻想、強い憧憬を懐きます。併し其の人其の物に親しく接して、描いてゐた幻想の余りに事實と懸け離れてゐるために、幻滅の悲哀を、痛切に感じさせらるゝ事は一再に止りません。而も其の幻想が美しい程、憧憬が強ければ強い程、其の悲哀は甚だしい。

今まで屡々來朝さるゝ名士、探求し歩く名所舊蹟について、この悲哀の余りに多くを、感じさせられました。それで私の心は、美しい幻想と憧憬を懐く毎に、實物に接した場合の悲哀を想起する程までにひねくれました。

アインスタイン氏が改造社の招きで、來朝さるゝといふ報道を見た時、氏と專門を同じうせる私の心には、美しい、美しい幻想と、強い強い憧憬の念が湧いてきました。併し次の瞬間に、其の接した後の悲哀を思ひ至つて心弱くも、私は氏に接しないで、いつまでもいつまでもこの美しい幻想を失ふまいと思ひました。併し乍り反つて考へれば、あの立派な相對性理論を作りあげた其の人に接し、一言なりとも、其の人の口から聞くといふ事は吾々の名譽であり、吾々の義務であるとも思はれます。かうした、接したい様な、接したくない様な氣持で、いづれとも決しかねてゐる中にア氏は入京される事になりました。

進まぬ乍らも、誘はるゝまゝに、東京驛に氏を迎へて、其の風貌に接した瞬間から、其の謦咳に接しても、私の幻想は毀されやせぬといふ印象をつけてしまひました。

かうなつた以上、私はア氏の講演を出來るだけ多くききたい。通俗講演は勿論の事、一度でもよいから、特別講演を聞かして頂きたい。前の方は頗の容易であつたが、後者は、其の道の深い研究者だけに、聽講の許されるもので人數にも制限あるとの事だから、吾々の様な弱輩には到底許さるゝ様も見えませんでした。併しこの特別講演の初まるといふ、四五日前から、先生方の御好意で六回の中一回だけ特に許さるゝといふ風許で、それだけでもう私は嬉しくて耐りませんでした。一日も其の日の早く來れと、それ相當の準備をして待つてゐました。

忘れもせぬ。明日から愈々始るといふ二十四日の朝でした。長岡先生がいつもの講義を終られた後で

「昨夜、ア氏に出會つたら、學生にも聞かしてやりたいといふ事であつたから、後期の學生で獨逸語に自信のあるものは聞いてもよろしい。」

余りの事に、學生は皆暫くは顔見合はせて默つてゐた。恐らくは、嬉しさの余りであつたらう。一度でさへ有り難いと思つてゐたのにア氏の御心付と、長岡先生の御盡力で、光榮諸氏と同席で、六日の間も、あの美しい、相對性理論といふ建物の説明が、其の建築者自身の口から、親しく聞く事が出來るのだもの。

ア氏の講義は、二十五日から初りました。特殊相對性から説き起して、一般相對性理論に移つてゆかれました。

熱心な態度。獨語とも思へぬ程、流暢な獨逸語。質問に對する懇切な應答。總てが私の描いてゐた幻想以上であつた事が、どれだけ私を喜ばした事でしやう。そうして、憧憬即悲哀といふ、ひねくれた心を再び、もとの素直な心にしてくれました。有りがたい。全く總てが感謝です。

併し私が寔に申譯ないと思つてゐるのは、準備が足らなかつたために、氏の言を充分に味ふ事が出來なかつた事です。氏に尊敬の意

を表する事は、氏の言を尤もよく理解する事にあつたのに、これが充分に出來なかつた事を心から悔いて居ります。併し吾々は若い。而もこれから長い生涯を理論物理學に委ね樣としてゐる私は、きいたり、しらべたりして其の理論を深く究め、その理論を元として、今まで解けてゐないものでもし解き得たならば、これもア氏に對して捧ぐる、最も大きい尊敬であらうと思はれます。

歡喜、感謝の余りと、御依頼とによつて、不束な筆を走らせました。これもア氏の御親切、教授方の御盡力、改造社の御好意に對して謝意を表すための心からでございます。

アインスタイン教授の印象

桑木嚴翼

講堂に於けるアインスタイン教授の印象を書けといふのは、少し私を侮辱したことになるのではありますまいか。學生などで講義が分らなくなると、よく帳面に徒ら書をしたり、先生の似顔などを描いたりしますが、講義を聽く積りで出て居る私共に、印象なんて記す餘裕がありませうか。と、から眞正面から出たい氣がしますが、實は御諒察の通り、私には中々專門の講義は分りません。少し準備して置きたいと心掛けては居たのですが、雜用や自分の專門に追はれて、中々基礎的研究までには手が伸びません。それで何か得たいと思つて聽講して居ますが、時には實際或種類の學生のやうに似顔でも書く他ないやうな氣分もします。然し繪筆も又文筆もないので、印象を鮮かに寫出すことも出來ません。たゞ一口に言へば、如何にも世間を超越した學者的態度で、諄々として倦まず、二時間に渉る間に一瞬の弛緩もなく、引續いて講義よりも更に疲勞をなさしめる質問にも應答し、飽くまで自己の學說を說くに忠實なる所は、何人にも敬慕の念を起さしめるものがあると思ひます。一たび面接した人は何れも皆其の寫眞を見て、その通りだと言ひます。寫眞が本人に似るのは當然ですが、然し多くは幾分か異つた所があるものです。此の場合に、その通りだと萬口一致に言はれ得るのは、其の寫眞が平生を其儘に示すことを意味するもので、換言すれば常に同一の態度を持して居る、といふことを證するものであります。俗な言葉で言へば、氣取らない、態とらしくない、といふことが其の本質に存すると思ふのです。隨て講堂に於ても、壇に立てば直ちに本題に入り、細字の數學式を記しつゝ論理を進めて行く所、對稱を保つ數學式が巧に結論に導く所、其所に何等の技巧もありませんが、自から一種の美感を生ぜしめます、而して何等意味のないやうな數學式が突然（ではないのであらうが）物理的意味を示す所、人をして寧ろ驚異の念を生ぜしめるものがあります。

一個劣等學生として講堂の後方に在る私は、自らの準備の不足を悔いながら、數學と自然科學との方法的關係に就て竊に考察し、延て是等の科學的方法の哲學的意義を推察したいと思つて居ます。講義が會々是等の方法論的問題に觸れゝば、何か得る所があるだらうと豫期して見ます。デカルトやスピノザ或はライプニッツは各自異の數字で其の數學を導いて居ます。カントに至つて數學と哲學との認識論的關係が說かれると共に、其等の方法論的關係は絕緣せられたやうにも見えますが、然し斯る新しい數學物理學は又哲學に影響せられないとは言はれますまい。數學式が自由に活躍する所を見ると、ライプニッツなどが哲學にも斯る符號を造りたいと思つたことが尤もだと感ぜられます。……然し、斯樣な空想に陷つてばかり居ては、相對性理說の講義と離れて仕舞ふ恐れがありませう。

私は此講堂に在つて久し振りに眞の學生氣分になりました。數年前此大學でデューイ教授の講義をも傍聽しましたが、其際は委員の

一人として多少責任を有し居たのでした。今は全く一個の聽講者であります。然も十日續いた講義なので、久し振に學生として大學の講義を聽いて居る心持がするのです。其れで端なく先年獨佛の大學で聽講した折の事を思出しました。伯林大學では、弟に誘はれプランクやルーベンスの講義へ一二度、又馬に出た事があります。巴里ではキューリ夫人の講義を傍聽しました。此折の事を想出し、常に是等諸家の講義が理路整然として、且つ其の言葉に泥みなく無駄のないことを想越し、今アインスタイン教授のアンプロンプテュで然も殆ど無用の繰返しをすることとまでもないのに感服して居ります。

専門知識を缺如する講義に飛入りして六日間も暇を要し、然も何を理會したか、といふやうな問に對しては、私は専門家的には理會しないが、只だけには得る所があつたと言つて置きませう。然し其れよりも、もじたいのは、例の一部分の人々が妙な自主主義を振り廻して、徒らに外國學者を崇拝するの非を説く者のあることであります。此事は昔てラッセルの場合にもあつたのですが、其は第一に事實を誤まつて居ました。一般民衆が時々の問題に熱狂するの、其事が悪くない限り決して咎むべきことではありもせん。然し此場合に學者が果して如何なる態度で之に接したか、といふことは其折り實際に言はれたこと、書かれたことから判斷すべきでありませう。而してラッセルの場合にも此の場合にも、苟くも多少専門的智識のあるものは、其の學説人物等に賞賛すべき點を認むると共に、其が必しも完全でなく、又其の優れた點も他と歴史的若しくは論説的關係のあることを指摘して居たのです。固より歡迎の席上、或は其の講演を聞いた際には相當の禮儀を以て接しますが、是は勿論然でありませう。初めから討論をする積りなら又別問題ですが、我々にしもそんじよ其處らの講演や教育會などに招聘せられて講義して居る最中、其地方の新聞や何かで盛に惡口をきかれたりしては餘りよい心持はしますまい。人に接するに禮儀を以てすることを弱氣地がないなどといふものは、先づ地方などで大官に對する接伴の如何であるかといふことを考へて見るべきであります。

とにかく遠來の珍客、殊に態々招聘した人などに對する敬意を失ふのはよくありません。而して招聘といふことも今日では大に對手を擇ぶやうになつて來ました。西洋人ならマトロスでも先生にした、といふ時代は過去の夢であります。我々は隨分、外國で相當の大學で教授となつて居る人の要求に對しても、講義を希望しないと答へることがあります。然しとにかく世界的名聲を博した人に對して相當の敬意を表することは別に怪しむに足りません。學術や藝術は本來世界的意義を有すべきものであります。外國學者だからといふて、よくもなく又惡くもありません。世界で評判になつて居る問題を世界的學者から聞くことに興味を感ずることは、たとひ其が流行であらうとも、何處に非難すべき點がありませうか。アインスタイン教授の學説は政治や文藝哲學の論よりも素人に入りにくいでせう。然し幾分なりとも之を理會せんとする一般民衆に對して、我々は毫も非難すべき理由を知らないのであります。況んや専門學者が相當に研究して意義ある質疑を發し、議論を上下して其の眞意を一層闡明するを得る場合には、此の如き招聘に對して一層の意義を生ぜしめるものがあります。私は講堂にあつて或人々と教授との質問應答に對し、よく分らないながら斯樣な感想を有つて聞いて居るのであります。

一體に他人の熱心に奔走することを傍から見て居ると、何とか難癖をつけたくなることもあるものです。私は固より御祭り騒ぎを好みません、謙讓にして何等俗念のない學者諸

術家も亦、因より之を好まないでせう。然し何等かの刺戟によつて活氣を得る所の社會が、其の刺戟物として最早クレマンソーのやうな人を擇ばず、エルマンとかパブロワとかいふやうな人に向ふ、といふやうなことは私の最も愉快とする所であります。其意味に於てたとひ流行でも科學者が世界的人氣を集めたことを喜びます。世界的學者を以て流行藝術家に比することは、或人に取つては不倫と思はれることでありませうが、私は此の機運の中に於て我々の希望する價値の世界が漸次實現せられて來たような氣がするのであります。印象談が端なく議論になつたことは相濟まない譯です。是では似顏が徒ら書きになつたので、如何しても怠惰學生の境涯を脫しないことになりました。（十一月三十日）

アインスタイン先生の印象

小倉　金之助

私は未だ甞て、先生ほどニコ〳〵した、そしておちついた講義振りを見たことがありません。

先生は計算に達者ではありませんでしたまた論理もそんなに嚴密ではありませんでした。併しながら先生は偉大なる直觀力の持主でした。先生が本當に吾々に敎へて下されたことは、幾何學に於ても理論物理學に於ても、天才の尊い仕事が如何ばかり直觀的であるかといふことでした。

堂々たる講義

竹内　時男

理學部の講堂で先生の御講義を拜聽する事を得ました事は主催者の改造社に向つて厚く御禮を申し上げる次第で御座います。

私の印象を受けました第一は先生の御講義の堂々たる事であります。對話に於いて見る彼の靜かにして物優しい處は少しも此の場合に見出されませんでした。淀み無く流暢に語られる處は誠に卓拔なる敎授振りでありますす。私どものやうなドイツ語の聞き取れ難いものに取っても　確なる發音を聽いて御趣旨の大體は了解する事が出來ました。黑板に書かれる彼の奇麗な數式は原理の創唱者手づからに書かれる處だと思ひますと、感慨無量なるものがありました。

先生は二時間に亘つて講義せられて少しも疲勞を見せ給はず質問者に快く應酬せられます事は感激に堪えませんでした。

私が特に奇異に感じたのは積分の記號を多く下方より上方に向つて書かれる事でした。一寸考へると不自然のやうですか、其處に先生の異常な心理の働きがあるのだと思ひました。（十一、十二、二）

講義室に於けるアインスタイン

愛知　敬一

講義室に於けるアインスタインを書き出すには先づ講義室の模様から寫さなければならぬ。講義室は物理學教室の中央講堂で、舊いが立派で歐洲の大學の講堂と比較して遜色がない。物理學教室の北の入口をはいると受付があり、是處で記名して聽講券をもらふ。左右に石の階段がある、左右何れなり御隨意に昇りて廊下を横ぎりた所で聽講券を渡し、內へはいると講堂の彼方で最も高い所である。之れから左右と中とに分れ、階段になりて机と腰掛とが八段になつて列である。

講義は二時から（初日は二時半）であるが一時半頃には已に過半は着席で見渡した所で目につくのは、一番前の段の眞中に近い所に立派な支那服を着た紳士がおる。机の上に寫眞機の樣なものを置いてある。之れは誰れか。慶應の通俗の講演の日から見ておらるゝ篤學なる福田德三博士である、寫眞機と見ゆるのは徵音機である。其外にはドクトル、ベルリア御夫妻が目立てておる其內、滿員となりて合計百二十名位、席がなくて立ちて聽く學生もある。

扨此階段の前面には長い講義机があり、其中央には い棒と白墨の箱が二つ（一つは白の白、一つは色つきの白墨）ある。又赤い黒板消しが二個行儀よく列ん 置いてある。此内で色のある白墨と棒とは終にアインスタイン博士の手に觸るゝ光榮に浴しないでしまつた。それから机の上には瓦斯の栓が左右に五つゞゝ列んでおる、之れは昔から用いた事のない栓である。此机の向ふには大きな黒板がありて上下に動き、黒板の上には大きな電燈が二つある。三時過ぎに一つ、又少しして今一つと點じられた。

黒板の右手の横に大きな時計がある。針が二時を し其内に九分過ぎても、十分過ぎてもアインスタイン博士は姿を見せない。「いや大學の講 の時は十九分だ」と云ふ低い も聞へる。成程十五分過ぎると黒板と時計との間の戸が開きてアインスタイン博士と御 内の長岡博士が見へ續きて中村、田丸の兩博士が入場さるゝ。長岡博士が座長で初日には獨語で、アインスタイン博士を 介された。

アインスタイン博士は黒のモーニングで、第四日迄は白襟付の襯衣が、第五日からは白襟がなくなつた。黒の少々白……の混じた縞だネクタイで、左の手には黒ゴムのバンドで腕時計を附けられるが、（一度も見られた事はなかつた。

講義の間は左から右、右から左へと往復して歩みながら話される。丁度黒板 の兩端が振幅（アンプリチユード）になりて居る。白墨を右手の中指と人さし指との に輕く持たるゝ事が多い。手眞 はよくされる。黒板上で説明さるゝ時は左手を用ひらるゝので自ら時計の方に向はれる。聽衆から云へば中央より右に着席せらるるのが形勝の地位になりて左に着席せるものは御姿が影になる。又講義 に接せらるゝ時は瓦斯の栓を順に一つゞゝいぢらるゝ事がよくある。

講義は明亮である。通俗の講義の時の様に緩ではない。普通の速さが、或は獨逸での普通の速さよりは や遅いかも知れない。キチンキチンとした一言一句忽にせずと云ふ様な嚴格なのではないが、判りよくて、上手にされる。獨逸語も北方獨逸の強く響くのではなくて、軟い南方獨逸か或は瑞西化のしなやかなのである。

ノートは一切持たれない。何にもなしで講義される。只第二、第三の日の外はプリンストン大學での講義の本を持ちて來られた。第四の日には忘れて行かれて桑木（嚴）博士が跡で御室へ持ちて行かれた。此本の間に黄い紙が一枚ありて一寸と式が書いてあつた。第五日からは此本を見て數式を黒板に寫された時もある。

獨逸の大學ではどうかと云ふと、伯林大學ではノートなしに講義する教授が多い。併しプランク教授も時々隠しから式を書いた紙を出して見らるる事はあつた。之れと正反對のはゲッチンゲン大 で、教授によると講義の後に講義のノートを圖書室に出して公開される。段々たまりて本の様になる。日本では講義につきて試験をするため講義は一一筆記するが、獨逸では試験がないので筆記する人は少ない。只ゲッチンゲン大學の様な場合には講 の儘を筆記する人が多い。

講 に氣が乗るとアインスタイン博士は時間に氣が付かれなくなる。初日には三時半から學生の歡 會があるので長岡教授から注意された。丁度説明しかけた速度の加るのは極めて簡單にして終られた。第二日には横の時計を見られて「もう遅い（シヨン、ツー、スペート）」と云ひて其後のは簡單にされた。大低二時十五分から初めて三時四、五十分になり、此後は質問等で先づ一時間以内ですんだ。すむと前にはいりて來られた戸を開けて出て行かれ、長岡博士等が跡から出でられて御室に入らるる。アインスタイン博士せ手を ひ安樂椅子にかけて紅茶を飲まれる。此御室には一寸と飾物と植木が置てある。

第五日は宮内省で雅樂を聞きてから來られ、大學の池の所で一同と寫眞を撮られた日であるが、雅樂に御氣に召したためか一番御機嫌がよくて時々 を帶びつゝ講義された。

講義は一通りの相對原理でありて、未だ發表されない意見とか云ふ様なものは聞く事を

得なかつた。之れは少々遺憾であるが、講義外の質問の機會にあつた。

獨逸の大學での講義も日本の大學のより高くはない。講へで大體の事を聞いて、それから本で委しく勉強しやうと云ふのが普通の順序である。

終りの日即ち第六日には講義を聽いた人々からアインスタイン博士に贈る可き記念帳に各自記名したり、ごたごたした事が多かつた爲めか、講義机の上に黒板消しだけ只一つ淋しくならんで居つた。講義の終つたのが丁度三時半で質問に移り、終りて長岡博士から獨逸語で御禮を述べられ、アインスタイン博士が握手され、續きて改造社の山本社長が挨拶を述べられ、之れに對してアインスタイン博士が握手され、一同の拍手の音が高く響きてアインスタイン博士の御姿が戸の影にかくれた時に、例の時計は四時十分を名ごりおしげに示しておつた。

講堂に於けるアインスタイン

鹿子木員信

二十餘年前修めた儘、今日まで殆んど唯だ忘却の虫食ふに任かせてゐた私の解析幾何と微積分學の朧ろなる記憶は、豫期せることゝは言ひながら、アインスタインの特別講義を聽くにあたりて、少しも私を助けては呉れなかつた。私は六日の間殆んど聾者、唖者、盲者として、參然、アインスタインの前に坐つた。……私はアインスタインの講義の内容を語る資格は無い。

若し私に、多少とも語り得るものがあるとすれば、それは講義するアインスタインと、而してその講義すると研究するとを問はず、常に彼の思索を導きつゝあると見ゆる或る精神、彼の數學式の展開を以て充ち滿つる講義の内容には入り來らぬ彼の思索指導の明星についてゞある。

私は、毎日、續けて六日、アインスタインを聞いた、彼の、終始ものやわらかな、ひそめて、物言ひの靜かな精神を聞いた。彼の思索は、宛かも春の野を浸し行く氷河雪溪の雪消の水のやうに、極めて、靜かに、せかず、あせらず、智識の曠野を、その千萬無量の意味を堪ふる數學式の輝く寶石を以てちりばめ滿たして進み行くのである。……私の心にはいづくよりともなくプラトンのテアイテトスの姿がくつきり浮び出してゐた。プラトンは數學者テオドロスをして彼の愛してゐた數學の青年テアイテトスを描き言はしめてゐる「私は、かほどまで驚くべく善く生れ付いた人を知らぬ。彼は、他に比類なきまでに好學であり、すぐれて優しく併かも、勇敢である……彼が、靜かに、滑らかに、蹉づくことなく確實に學問と研究に進むその樣は、宛かも音なき油の流るゝが如くである」と。

而してアインスタインの思索は、プラトンの愛したテアイテストのやうに、また[illegible]の閃めき、否、寧ろ深き哲學的靈感に依つて照らされつゝ進むものゝ如くである。彼の思索の靜かなる流れが、或る急湍、或る躓きの石或る障害、或る右と左の分岐點、或る決定を要求する問題に遭遇するごとに、彼の思索は立ち止まつて自に囁くものゝ如くである——Die Welt kann nicht so hasslich so kompliziert beschaffen sein! 世界はそ 根抵に於て、單純清明なるもの、美はしきものでなければならぬ。あゝ、これ實に、アインスタインの凡ての豐富なる物理學的智識と、細密精緻なる思索と深重複雜なる數學式とを支配し指導し、またさしまねきつゝある彼の方法の大原則ではないであらうか。彼は、常に、一樣この理論の間に、最も善きものを撰む。而して最も善き理論と共、彼に取つては、此の世界を最も善きものと見得る理論である。而してそは即ち單純玲朗なる世界——美はしき世界である。彼の方法の原則は遂に τὸ ἄριστον καὶ τὸ βέλτιστον である。ὡς ἀληθῶς τὸ ἀγαθὸν καὶ δέον συνδεῖν καὶ συνέχειν（プラトン）である。

私は、嘗てガリレイに見し如く、またアインスタインにプラトンの精神を見る。私は、深き心の親しみを感ずることなくして、アインスタインを見ることができなかつた。

（大正十一年十二月五日）



アインスタイン博士の笑顔　一平生画

博士の笑顔が總ての人に好評である。實に柔かな笑顔である。それは象の笑ひの大きさと柔かさである。一平生

東京帝大に於けるアインスタイン教授特別講演聽講者

京都帝大理學博士　西内貞吉
横濱商工教授　池内本
中西勝治
東京帝大工科講師　谷安正
東京帝大理學博士　竹内端三
東京高工教授　竹内時男
第一高等學校教授　竹内潔
東京帝大理學博士　寺田寅彦
東京帝大理學博士　寺澤寛一
京都帝大理學博士　玉城嘉十郎
東京帝大理學博士　田中館愛橘
田上光
山形商工教授　田中三四郎
星製藥技師　長須賀周次郎
東京帝大理科助教　高嶺俊夫
東京帝大文學博士　得能文
東京帝大理科講師　高橋胖
大學院　辻正治
東京帝大理學博士　田丸卓郎
理化學研究所員　福田光治

商科大學法學博士　福田德三
時事新報記者　福澤三八
林祐次
長谷川萬吉
林友輔
東京帝大文學博士　林博太郎
醫學博士　林春雄
學習院教授　長谷川健
山林局技師　平田德太郎
東京帝大星學教授　京山清治
天文臺技師　荻原雄祐
理學博士　藤澤利喜太郎
鹽見研究所　岡谷辰治
女子高師教授　乙部孝吉
東京電氣技師　大橋重威
第四高等學校教授　大島文茂
桐生高工教授　大田代唯六
鹽見研究所　清水武雄
清水辰次郎
大學院　芝龜吉

柴崎茂
東北帝大助教　酒井佐助
東京帝大理學博士　新城新藏
篠原覺
京都帝大理學博士　園正造
東京帝大理學博士　吉江琢兒
國學院明治大學講師文學士　矢崎美盛
山本忠興
法學博士　山田三良
砲工學校教授　野田貞
荒木俊馬
日本光學工業株式會社長　今井重吉
廣島高師　光藤珠夫
森金之助
的場鐵哉
農商務省技師　的場緞哉
水上隆吉
廣島高師　三村剛昂
東北帝大理博　三枝彦雄
一高教授　掛隈健彦
東京帝大工科教授　眞島正市
森金三郎
東京帝大理學博士　中村清二

東京帝大理學博士　中川銓吉
東京帝大助教授　西川正治
東京帝大理科學長　長岡半太郎
東京帝大講師　成、毛實
那須常正
一高講師　土井不曇
九大助教　伊藤德之助
九大助教　池田芳郎
横濱商工教授　伊藤直
理學博士　石原純
第一高教授　石谷傳一郎
三井鑛山技師　飯田德太郎
東北大學教授　遠藤美壽
柿田三郎
片岡龍尾
大學院　金光正直
九州帝大理學博士　桑木彧雄
大室貞一郎
小倉金之助
東京氣象臺技師　小野澄之助
東大法科教授　小野塚喜平次
航空研究所技師　小口太郎
東大工科教授　末廣恭二
慶應教授　伊藤吉之助

九大工科教授　末綱恕一
理研研究員　杉浦義勝
大學院學生　鈴木照
東大理科教授　佐野靜雄
航空研究所技師　佐々木達次郎
高師教授　渥美正
早大教授　阿部良夫
荒木吉次郎
東北帝大理學博士　愛知敬一
大學院學生　秋山峰三郎
第四高教授　青山兵吉
京都理科學生　荒勝文策
東京帝大理學博士　木下季吉
熊谷直三郎
北川久五郎
三菱研究　木内政尾
兒玉達童
東京帝大文學博士　鹿子木員信
天文臺技師　百濟教猷
古賀
新潟高校教授　工藤孫八郎
安川數太郎
東京帝大　ベルリナー
同　夫人
和田隆雄

横濱高工教授　渡邊孫一郎
佐藤覺
東京帝大文學博士　井上哲次郎
製藥技師　Dr. Klager
日光學工業株式會社設計技師　オットスタングー
星製藥技師　センチーレンフイリップ
東大學生　竹内伊一郎
仝上　藤田繁一
仝上　古谷健三郎
仝上　清水吉之助
仝上　佐伯切介
仝上　吉田洋一
仝上　八木貫之
仝上　中瀬善太郎
仝上　松澤武雄
仝上　宮本九一郎
仝上　西村傳三
仝上　仲瀬善太郎
仝上　栗原嘉名芳
仝上　青木小三郎
仝上　淺尾庄一郎
仝上　脇本榮治
仝上　三橋要次郎

アインスタイン先生歡迎の辭

宇宙の眞理は萬古に存するものであらうが其大部分は未だ人間に知られてゐないであらう、其未知のものを發見して大に人智を啓發し學問の進歩を促すは何等の慶事であらう先生の今回の大發見の如きは卽ちそれである而して眞理には境界がない是れ世界の學者が齊しく先生に敬服し驚嘆措く能はざる所以である。今先生が鵬程萬里を遠しとせずして本邦に來遊せらるるに當つて先づ感ずるところはこれである

抑々先生が發見せられたる相對原理は近くは地球上に於て吾人が觀測せる事實に例證せられ遠くは銀河星霧等の隅々までも及ぼすべき時間と空間との觀念及び之に附隨する物質と萬有引力との淵源に遡り前人未發の卓見を公表し全世界の思潮を風靡するに至つたのである。嚢にガリレオ、ニウトン等が力學と物理學とに於いて首唱せる原理は二百年來萬世不易なるべしと考へられてゐたが先生は一朝別見地より宇宙の狀勢を洞觀し遂に時間と空間との融合を圖り以て自然現象を究明するの針路を開かれた其業績の大なる實に古今獨步である。

斯く學界に一大革新を惹き起したる曠世の偉人、今玆に本邦に迎ふるを得るは抑々何たる幸運であらうか我帝國學士院會員一同は先生の高風を景慕するの餘り先生の[illegible]駕を辱らし先生と共に一堂に相會し互に歡を盡すことを得るは誠に欣喜に堪へざる次第である先生滯留僅に數旬に過ぎないけれども眞理を發見せられたる先生其人より直接に其學說を聽くときは啻に相對原理が深く腦裏に浸潤するのみならず本邦の學界其風を聞いて感奮興起する者亦決して尠くないであらう。春秋正に盛なる先生は尙ほ將來に亘り幾多深遠なる研究を以て廣く人智を啓發し永く學界の針路に不滅の光明を放たれんことを希望する。

大正十一年十一月二十日

帝國學士院長正三位勳一等法學博士　男爵　穗積陳重

WORTE ZUR BEGRUSSUNG DES HERRN PROFESSOR EINSTEIN.

Die Naturgesetze die die Welt beherrschen gelten für alle Ewigkeit; nur bleiben grosse Teile davon dem menschlichen Verständnis unzugänglich. Was für ein freudiges Ereignis, zu entdecken was bisher unbekannt blieb und dadurch das menschliche Wissen zu bereichern und den wissenschaftlichen Fortschritt zu fördern! Die grosse Entdeckung des hochverehrten Herrn Professor gehört dazu. Da die Wahrheit keine Grenze kennt, so ist es nur natürlich wenn die Gelehrten aller Länder sich in ihrer Begeisterung und Bewunderung uber Ihre grosse Leistung vereinigen. Dies ist auch das Gefühl, mit dem wir Sie nach Ihrer langen Reise in unserer Mitte begrüssen.

Die, von dem hochverehrten Herrn Professor entdeckte Relativitätstheorie ist durch die auf der Erde beobachteten Tatsachen bestätigt; weiterhin geht sie von neuem zurück auf die Begriffe der Zeit und des Raumes die in den fernsten Fernen der Milchstrasse und der Nebelsterne gelten sollen, sowie auf die Urquelle der dazu gehörenden Begriffe: Materie und Gravitation. Sie, hochverehrter Herr Professor, haben einen, von keinem Vorgänger geahnten, vollständig neuen kuhnen Gedanken aufgestellt, der die Geistesströmungen der ganzen Welt in neue Bahnen gelenkt hat. Die von Galilei, Newton und andern aufgebauten Grundlehren in der Dynamik und der Physik wurden zwei Jahrhunderte lang fürun unumstösslich gehalten. Sie, hochverehrter Herr Professor, haben, von ganz neuen Gesichtspunkten ausgehend, einen tieferen Einblick in die Natur des Weltgebäudes erschlossen und durch Verschmelzung von Zeit und Raum der Forschung den Naturgesetze eine ganz neue Bahn gewiesen. Ihr grosses Verdienst steht in der Annalen der Naturforschung glänzend und unvergleichlich da.

So sei es denn den Mitgliedern der Kaiserlichen Akademie gestattet, Ihnen, dem Schöpfer der Relativitätstheorie, ihren ehrerbietigen Glückwunsch zu der grossen Entdeckung darzubringen. Wir freuen uns dass Sie, unserer ergebenen Bitte gefolgt sind und sich in diesem Saale mit uns zusammengefunden haben. Obwohl Ihr Aufenthalt in unserem Lande leider nur kurz bemessen ist, so wird doch die Erklärung einer Theorie durch ihren Entdecker nicht nur zum tieferen Verständnis der Relativitätstheorie beitragen, sondern auch ganz allgemein eine Anregung zu wissenschaftlichen Forschungen in unserem Lande geben. Schliesslich sei es uns noch erlaubt der Hoffnung Ausdruck zu geben dass es Ihnen, hochverehrter Herr Professor der Sie jetzt in der Blüte Ihrer geistigen Tätigkeit stehen, vergönnt sein möge auch in Zukunft durch zahlreiche tiefschürfende Forschungen das menschliche Wissen zu bereichern und dem wissenschaftlichen Fortschritt die nie verlöschende Fackel Ihres Geistes voranzutragen.

Tokio, den 20. November 1922.

Der Präsident der Kaiserlichen Akademie.

BARON HOBUSHIGE NOZUMI.

アインスタイン教授の講演

石原純

一　講演前記

アインスタイン教授が日本に、たとへそれが暫くの日數であらうとも、來られることは我が學界並に一般にとりてどんなに重大なる意義をもつことでありませう。私たちは今親しく教授の謦咳に接して感激のこゝろを湧かさずにゐられません。

もう私の記憶にはふるいことですが、明治四十四年に東北帝國大學が仙台に創設せられたとき、澤柳總長の知遇によりて私もそこに赴くやうになりましたが、その頃からアインスタイン教授を我が大學に招聘してはどうかと云ふ相談を長岡教授や私などの間に持ち出されたことがありました。併しその實現にはいろ〳〵困難な事情があつてさう云ふ話もその儘になつてしまひました。その頃アインスタイン教授は墺國のボヘミヤなるプラーグ大學に招かれてゆかれたのでしたが、翌年は端西チューリッヒのポリテクニクムに移られました。私は丁度その年の春に歐洲留學に旅立ち、翌年の夏學期にチューリッヒに行つて同教授にお目にかゝることが出來ました。其頃その折の印象記を書いたものは「アインスタインと相對性理論」のなかに載せてあります。

それから大正九年の十月でした。改造社の山本氏が私を訪問せられて、相對性理論の大要を改造に載せたいことを話され私の執筆を求められると同時に、アインスタイン教授を講演のため招聘したい意志のあることを漏らされました。同氏がかやうな計畫をなされるに到つたのは京都大學文學部の西田教授の慫慂に基づいたものであると云ふことでした。

私もこの快擧については非常に贊成し、我が邦の諸大學が恐らく熱望してはゐながらしかも到底これを仕遂げることの出來ないやうな事がらが、一個人の山本氏の手によつて實現されるならば、それは寧ろ深大な感謝に値すべきものであることを感じましたので、及ばずながら之に對する勞を取らうと云ふことを約しました。その後山本氏はやはり仝氏の招聘によりて來朝せられたラッセル教授の言によりて、愈々アインスタイン教授招聘の企を固められ、その具體的の企畫を始められました。昨大正十年夏私はその爲めに一書を、獨逸ベルリンなるアインスタイン教授に宛てゝ送り、山本氏の意を傳へたのでしたが、それと同時に山本氏は當時ベルリンに滯在せる改造社員室伏高信氏をして直接にアインスタイン教授を訪問せしめて、この事を圖り、大體に於て仝教授の快諾を得られたのでした。近時仝教授の名聲が世界に響きわたると共に諸方からの招聘は數多く集まり、既に米國英國などには赴かれましたけれど、その他の招聘に一々應ずることは到底不可能なことであるばかりでなく、また學者としての研究時間を空しうすることに於て仝教授自からの堪へられない處であつたのでありませう。しかも之等の事情のもとにありて、仝教授が特に多くの時日を費す日本への旅行を思ひ立たれたことは、日本の事物に對する異常なる興味が主として教授の心を動かしたにはちがひありますまいが、亦特に禮を厚うして教授を待たうとした山本氏に對する好意も與つて力多いことであらうと私は信じます。その際仝教授から室伏氏へ書信のなかにも「この事が愈々確定するまでは公表を見合はせられたいと思ひます。さもなくては自分は餘り多くの招待に對する應答に煩はされなければなりませんから」と云ふ意を傳へられたのに見ても、教授が特に日本への意向のあつたことが察せられるでありませう。

この快諾があつて後、私は昨年十二月山本氏のために教授招聘の契約書を草して、之を送ると同時に、東京大學の長岡教授はこの招聘が山本氏の手によりてなされるとは云へ、それは亦我が帝國學士院を始め學界全般の熱烈なる希望に一致する旨を說いて仝教授に感謝の意を表されました。超えて今大正十一年五月仝教授からこの契約書に對する正式の承諾書が到着しました。今年九月獨逸ライプチッヒに開かれる自然科學者大會は創立百年の紀念會であるから、そこでの講演を與して後、直ちに日本へ向つて出發すると云ふことが記されてありました。そしてこの書信の終りには

「あなたとこの秋におめにかゝること、そして私たちにとりてはお伽噺の模様で包まれてゐる輝かしいあなたの國を知ることをよろこばしくもくろみながら、

私は親しい挨拶をもつて

あなたの親愛な

アルベルト・アインスタイン

です。」

と云ふ懐かしい言葉が添へられてあつたことに、私はどんなにうれしさを感じたことでせう。かやうにして仝教授は十月八日マルセーユ出帆の北野丸を選んで夫人と共に遙かな旅途につかれました。途中で見られた熱帯地方の風物がもの珍らしく教授の眼を慰さめるに足りたであらうことは想像することが出來ます。この間に改造社は一切の準備をとゝのへて教授及び夫人の來着を待ちました。仝社員稲垣守克氏夫妻は豫め上海に行つて之を出迎へました。十月十七日に船は神戸に入港する豫定であつたので私は山本氏夫妻と仝行して十五日夜東京から神戸へ向ひました。東京大學の長岡教授、九州大學の桑木教授、東北大學の愛知教授も出迎へのためこゝに來合はせられました。十六日は雨が降つて天氣がはつきりとしなかつた爲めに明日の空をも氣づかつてゐましたが、そのうちに航路も稍々波が高いと云ふので朝の入港が午後になると云ふやうな知らせが來ました。私たちは前夜無線電信で安着を祈る旨申し送つたものゝ、並ならぬ天候が長途の航海の疲れを更に増しはしないかと云ふことに不安の虞れを抱かずにはゐられませんでした。十七日の朝着かれたなら、その日にすぐ京都郊外の紅葉をお目にかけやうと計畫してゐたこともこれがために中止しなければなりませんでした。そればかりではなく十八日の夜東京へ着いてすぐその翌日には講演をお願ひすることになつてゐるので、私たちはこれを遠慮して一二日講演を延期しやうと相談したのでした。ところがこれを船へ申し送りましたら、會場も都合もあらうから講演は延期するには及ばないとの返事があつたので、私たちは教授の好意に深く謝するより外なかつたのです。そればかりでなく教授からは只一回の講演では充分親切に聽衆の理解を期するわけにはゆかないから、少くとも二

同に亘りて講演したいと云ふこと、併しそれも二日に分けて種々の都合がよくゆかないなら、數時間の休憩を狹んで前後二回にしてもいゝと云ふやうなことを豫め傳へられてゐたのでした。私たちは教授がいかに眞摯にこの講演について考へられ、そして出來るだけを盡さうとしてゐられるかに對して涙ぐましい感謝を捧げずには居られませんでした。

十七日は幸に空も晴れました。午後二時私たち一行は小蒸汽船を装して和田岬沖なる北野丸へ向ひました。私たちの船が近づく頃、高い甲板を見上げますと、おほ勢の船客に交りてあの私たちの待つてゐた教授の姿が下甲板の中央に見えました。溫雅な風丰に笑を湛へた柔らかさ、私はすぐにあのチューリッヒの高い山腹の街で出遇つてゐた十年以前の日を追憶しながら、そして教授が今始めて私たちの國に到着して何を先づ心に浮べられてゐるであらうかを思ひながら私の胸に波うたせずにはゐられなかつたのです。北野丸の掛梯子の下に小蒸氣が横づけされる頃には、教授はゆるやかに帽を振つて出迎の人たちに挨拶されてゐるのを見受けました。私たちがだん／＼に甲板に上つてゆきますと、もういろ／＼な人たちが教授のまへに立つて握手の禮を取り交はしてゐました。私も續いてまゐりましたら、「久し振りでお目にかゝるのは大層うれしい、ほんとうに暫く振りだ」と云はれて固く握手されました。以前にはそれ程伸びてゐなかつた頭髮の無造作に散らされたのが大分白くなつてゐるのを私は仰ぎ見ながら、「暫く振りでした。長い御航路はいかがでしたか」と云ふより外、感慨のなかに言葉を見出し得なかつたのでした。新聞記者などたくさんの人たちが待つてゐるので私はその儘で傍を去りましたが、改造社から贈られた花環をうれしがつて抱へられた夫人と一緒に向ふ側の甲板へ出て、新聞の寫眞班が數多く立並ぶ正面に座られました。撮影がすむとすぐに別室で新聞記者の質問の言葉に圍繞されてしまはれました。そのうちに北野丸はゆる／＼と動き出して三十分ばかりで突堤に横つけされました。出迎への群衆のさはめきの中に教授夫妻はどれ程道を塞がれたことでしたらう。上甲板から一段降りると、また寫眞の撮影が始まります。教授はいつもすなほにその前に立たれました。日暮れのうす寒い風が人々の面に觸れる頃、漸く自動車でホテルへ向はれました。自動車の周圍を充たしてゐる群衆を見て夫人は「たくさんの人出ですねえ」と云はれました。埠頭に帆柱を林立してゐる和船を眺めて夫妻は先ず見慣れない第一印象を止められました。路を歩んでゐる女の服裝に眼

を止めて夫人が「おゝ日本の女がゆく」と云はれましたら、教授は「あれはまだ純粋の日本風ではあるまい」と云ひ添へられました。恐らくは神戸の街の既に歐化せる分子を含むことが教授に感ぜられたのでありませう。

オリエンタル・ホテルで少憩の後、私たちは教授夫妻と一緒に京都に向ひました。もう日がすつかり暮れて周圍は見るわけにはゆきませんでした。灯のともる家々が兩側に見られただけです。淀川の鐵橋をわたつて次は大阪であることをお知らせすると、教授は「大阪は日本の第二の都會だよ、おまへ知つてゐるか」と夫人に云はれます。大阪驛で新聞や辨當賣の呼び聲をきいて、夫人はおもしろがつてその調子をくち眞似されながら、「一種の日本音樂」と笑はれました。それから京都へついて都ホテルへゆく途中で眼にされた本願寺の建築や、兩側の小さな家々や、四條通りの賑かな街燈飾などは最初の日本都市の印象として教授夫妻のこゝろに深く殘つたことでしたらう。蠟燭のぼんぼりを灯した都ホテルの狭い假食堂で靜かな夕餐がすまされました。之に續いて應接間の一隅で教授は長岡、桑木兩教授及び私との前にいろ／＼學術上の問題を話されました。十一時を過ぎるまで少しも旅途の疲れを感じないかの如くに。教授の頭腦の一切が其深い研究のなかに浸されてゐるのに接して、私たちも知らず／＼そこにすつかりと惹き入れられてゐました。向うの隅で他の人たちと話されてゐた夫人が「もう餘りに遲いから」と立ち上られましたので、教授も漸く立たれました。―そして「明朝ははやく起きて京都の街をごらんになりますか」と云ふのに對して「それは結構」と應じて部屋にゆかれました。

十八日の朝は一面に深く紫ばんだ霧のこめた京都の街をこの小高いホテルから見下して大層快さうに見うけられました。八時から一時間ばかり自動車で駈けまはつたのです。薄霧のかゝつた松樹の間に朱い殿堂の見える賀茂神社や、靜かなひろびろとした平安神宮の前や、朝の靜寂な舊都の街々はどんなに教授の心に適うたことでしたらう。「ほんとうに美くしい」と物深い思ひのこもつた眼を教授は私にも向けられました。汽車に乘つてからは空はすつきりと晴れわたりました。琵琶湖のはるかな水や、關ケ原あたりに赤く色づいてゐる紅葉や、田園の收穫に從事する農夫の姿や、すべてのものが教授の眼を慰めたやうに見えました。濱名湖へ出ると雪を戴いた圓錐形の富士が既に鮮かに眺められまし

た。その正しい幾何學的の美くしさには寧ろ驚異のこゝろが伴つたことでありましたらう。天候は教授の一行に幸して一點の雲も妨げない玲瓏さをもつて立つてゐるこの山が夕ぐれの暗に包まれるまで私たちはこれを眼にすることが出來たのでありました。

夕食を汽車のなかで濟ませて食堂を出ると新聞記者の多數が教授たちを待ち合せてゐました。感想を聞かうとするものや、寫眞を撮らうとするものや、そんな煩雜が汽車の東京驛に到着するまで續きました。そして驛のプラット・ホームはまた何と云ふ雜閙を極めたことでしたらう。充ち滿ちた群衆にすつかりと通路を塞がれてゐました。かなりの時間を費して教授夫妻が改札口を出られると、そこには群衆の萬歲の聲が響きわたつたのでした。その歡迎の盛んなことはすべてのものの豫想の外にあつたでありませう。この有樣を見て私たちも心よろこばしくは思ひました。たゞ併しその歡迎がいま少し秩序立つて行はれたのでしたら、どんなにか長途の旅を經て來られた教授夫妻を煩はすことが幾らかでも尠なかつたでありましたらうのに。それでも教授たちは「全くたいしたことだ」と云つてよろこびと感謝の心をあらはされてゐました。

驛上のホテルの食堂で特別の出迎への人々に挨拶などせられてからすぐ帝國ホテルへ向はれましたが、そこへ落ちつかれたときは、さすがに疲れを感ぜられたことでせう。暫くして私がその部屋へ行つた時「お疲れのところを、明日はすぐ講演で大變ですね」と申しましたら、教授は「自分は講演することには少しも差支はない。只研究は出來ない」と云はれましたのには、私は寧ろ恐縮しなければなりませんでした。ほんとうに教授は自分の研究のための尊い時間を割いて遙々こゝまで來られたのでしたから。私はその夜尙ほ明日の講演の通譯を引きうけてゐましたので、その內容について多少の打ち合せをお願ひしておいたのでした。けれども餘り遲くなつては濟まないことと思つて、それを明日午前にして頂かうとしましたら、「自分に取つては今夜でも明日でも同じことであるから」と云つて、私をそこへ强ひて座らせられました。そして親切に話を續けられました。私は教授の講演に對する忠實な態度に感激させられながらも、どうしてもほんとうに落ちついて座ることが出來ない程でした。夫人は改造社の人たちから贈られた花環の美しいのに見入つ

て、「今獨逸ではこんなきれいな立派なものは製られません」と云つて、自分の國の苦境を想ひ起されて、感慨に堪へないやうでした。それから「この部屋は餘り贅澤過ぎます。このホテルは大層私の氣に入りましたが、もつと質素な簡單な部屋に取り換へるやうに山本氏に傳へて下さい」と云つて聞かれません。「山本氏は禮を盡して出來るだけのことをあなたがたに捧げたい希望です。そして自分の誠意だけを承け容れて頂きたいと云つてゐます」と私はそれに答へましたがそれでもやはり前言を繰返してをられました。そのうちにも心ない訪問客が續いて來るので、夫人は稍々氣疲れの態度で之に應對してゐられました。私は少なからずお氣の毒に思ひながら自分の用事をすませてすぐ辭しました。それがもう夜の十時でした。

二　慶應大學講演前半

翌十九日は慶應大學に於ける第一回の講演の日です。私は午前十一時半頃ホテルへ行きましたら、新聞記者たちがやはり詰めかけてゐました。時間がないので教授夫妻及び山本氏と食事を共にしてすぐ慶應へ向ひました。もう豫定の時刻一時を少し過ぎてゐました。寫眞撮影者のまへに立たれてから、休む間もなく講演場に入られ、講壇に立たれました。聽衆は講堂に充ちてゐましたが靜かでした。演題は「特種及び一般相對性理論」と云ふのでした。拍手の後、教授はその明晰な言葉で講演を始められたのです。

「みなさんがた、私は今日本へ來てこの第一回の講演をすることをよろこびとするものでございます。私の今日の講演は大體に於て二つの部分に分たれます。第一は謂はゆる特種相對性理論、第二は一般相對性理論であります。」

かくて先づ教授は運動の相對性と云ふことから話し始められました。

「運動を云ひあらはすにはいつも或る物體を標準に取り之に對して相對的に述べられなければなりません。地球の上で物が動く場合にはそれの地面に對しての運動が觀測されるのです。机の上で球をころがせば机に對する球の運動が見られます。かやうに運動の相對的であることは久しく私たちに知られた處であつて、運動と云ふことの概念のなかに既に含まれてゐるものです。この相對的な運動をあらはす際に基準として私たちの隨意に選び得る物體、即ち前に述べた例

に於ける地球とか机とか云ふものを一般に基準體と云ひます。力學ではこの基準體に座標系なるものを結びつけて、之に對して運動物體の位置を云ひあらはします。」

運動がその本性の上に於て相對的である所以が斯やうに判り易い言葉で鮮かに述べられました。かくて教授は力學の問題に立ち入つて行かれました。

「力學は物體の運動に關する法則を論ずるものですが、私たちはその第一法則としてガリレイの惰性の法則を知つてゐます、この法則の云ひあらはす處は次の通りです。一つの運動點はそれに外から力がはたらかない限り一直線上に一樣な速さの運動を續けます。私たちは物體のかやうな性質を、惰性として云ひあらはし、この法則を全力學の基礎とします。」

私たちはガリレイやニウトンの時代からこの法則を認めてそれを疑ひませんでした。けれどもそこには尙ほ私たちの考ふべき問題が存在してゐるのです。アインスタイン教授は之に次いで述べられました。

「併しガリレイの惰性則はすべての運動が相對的であることを述べてゐるでせうか。私たちは之に對して否と答へなければなりません。今こゝに机を一つの基準體として物體の運動をあらはして見ませう。若し之れに對して惰性の法則が成り立つならば、運動點は力にはたらかれない限り一直線の運動をしますところがこの第一の基準體K_1に對して廻轉してゐるやうな第二の基準體K_2が與へられたとします。さうすれば先の運動點はK_1に對して一直線に動くにも拘らずK_2に對しは直線運動をしません。K_2なる基準體に靜止してゐるやうな人がこの運動を見ればそれが一つの螺線に沿ふて動くのを見出すでありませう。即ちK_1に於て惰性の法則が成り立つ時、それは同時にK_2に於て成り立たないことは明らかです。私たちはそれ故いろ〳〵な基準體を取るうちに、之に對して惰性の法則の成り立つやうなものと、さうでないものとを區別することが出來ます。前者を總稱して惰性系となづけます。つまり惰性系と云ふのはそれに對して力學の法則がその儘立てられるやうなものであつて、力學はさう云ふ基準體だけを、私たちの思惟し得るすべての基準體のなかから、特別に選び出すものです。従つて力學に於ける運動の相對性は惰性系に屬する基準體の間に制限せられたもので

あり、一つの物體の運動をかやうな基準體の何れに對して云ひあらはしても同じ法則になると云ふことだけをゆるすのです。かやうな意味で實際の力學に於ける相對性原理は特殊（制限的）相對性原理と云はれなくてはなりません。そしてこの事がらは私たちに知られた力學的諸事實が之を證明するものであると信ぜられてゐました。」

「ともかくも特種相對性原理はすべての惰性系に於て成り立ちます。その具體的の例は地球場の實驗室に於て見られます。併し之を詳しく考へて見ますと、太陽のまはりの地球の運動は既に直線的ではありません。只極めて小範圍の運動のみを考へればそれは凡そ一様であつて、地球軌道の接線の方向に向ひますけれども、之をもつと長い間續けて見れば惰圓軌道をとるので、種々の時節によりて運動の方向を異にします。それですからこの全體に對しては地球を惰性系と見ることは出來なくなります。」

教授はこの問題を一般相對性理論に殘して、更に力學現象から他の現象へ進まれました。

「地球上の力學現象の法則は短い時間を取れば惰性系に於ける法則が成り立ちます。併し私たちはこの特殊相對性原理を物理學の他の現象にまで一般に擴げることが出來るでせうか。私たちは光や電氣についていろ〳〵實驗をしました結果は、それ等の現象からは地球の運動の影響を見出すことが出來ませんでした。光の進行の法則は大層簡單なものとして私たちに知られました。眞空のなかで光の進む速度はいつも一定の大さです。そして光源の運動速度に少しも關係しません。マックスウエル及びローレンツは光及び電氣の法則を一定の數學的公式に纏めてあらはすことが出來ました。併しこの結果は明らかに特殊相對原理と矛盾します。何故なれば光は眞空中でどの基準體に對しても一定の速度 c で進むと云ふことを示すからです。」

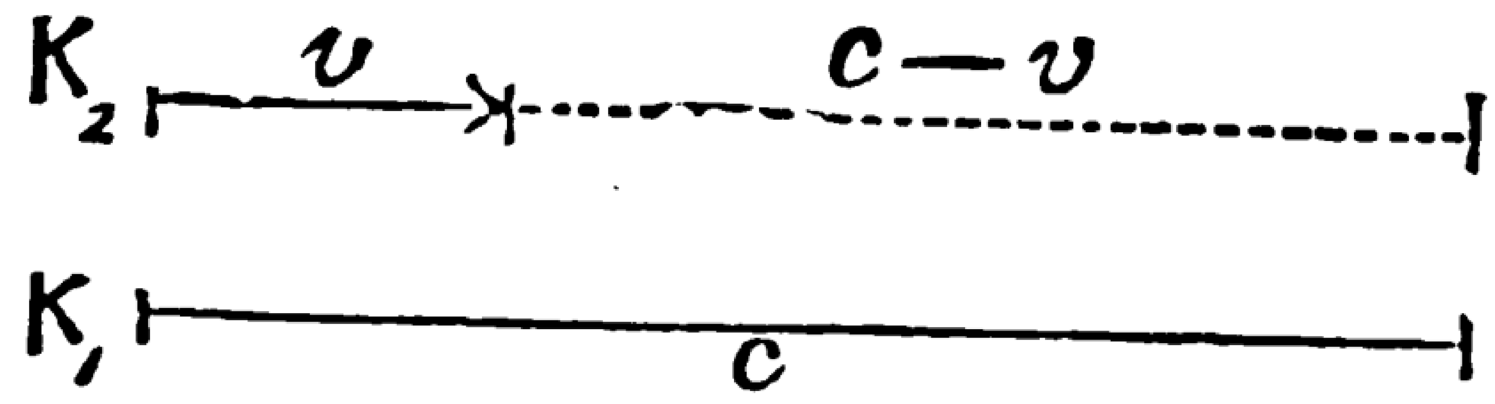
教授は之を説明するために黑板の上に左のやうな圖を描かれました

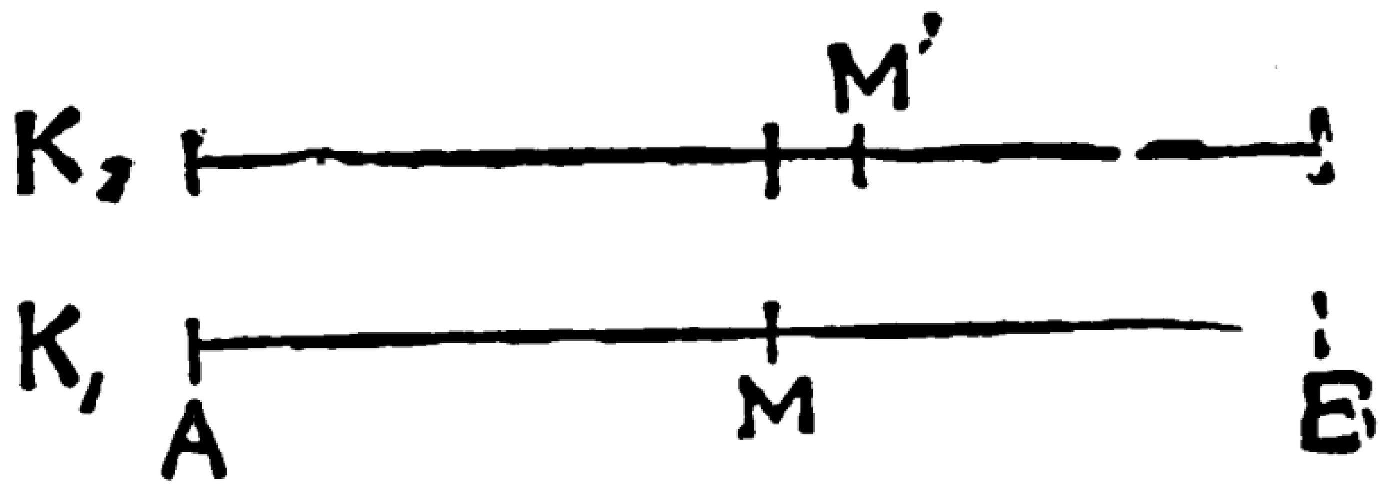
「今この黑板を一つの基準體 K_1 と取りますと、光は一點から出て之に對して一秒には c だけの距離に進みます。次に第二の基準體 K_2 がありて、之は第一に對し v なる速度で右方に進みます。一秒の後に K_2 は v だけ進みますから、この點から光の到達する點までの距離は $c-v$ だけしかありません。つまり K_2 に對しては光は $c-v$ の速度で進むことになりま

す。之が特殊相對性原理から云つて正當であるべき筈であるのに、一方に實驗の結果は第二の基準體K_2に對しても第一のK_2に對すると等しくなる速度で進むことを要求したす。こゝに私たちは理論の上に一つのデイレンマをもたなくてはなりません。このデイレンマをどう解決したらよいでせうか。私たちは之に對して一つの大きな困難を感じなければなりません。」

この困難の除外が實にアインスタイン教授をして彼の驚くべき相對性理論に赴かしめた重大なる轉向點であつたのでした。教授は之に就て次のやうに云はれました。

「上の如く實驗は特殊相對性原理と光速不變の法則とを教へました。しかもこの兩者はお互に相容れないものであることを私たちは悟りました。この上に起つた困難の解除はもはや實驗に待たるべきものではなく、只私たちの思考に屬するものです。私たちはその用ひる種々の概念そのものに就て立入りて研究する必要を感じなければなりません。私たちが運動の速度を云ひ表はすには先づ時間と長さとの概念が必要です。そしてそこには默つてなされてゐる假定が這入り込んでゐることを認めなくてはなりますまい。そもそも物理學者の用ひる時間と云ふものは何によりて云ひあらはされるものでせうか。それは或る事象の繼續を指すものでありますが、之を測るには時計と云ふ裝置を必要とします。時計は必ずしもゼンマイと齒車とで作られた普通の機械裝置に限るのではありません。私のこゝで云ふのは寧ろ完全な理想的な時計であつて、そこに或る週期的な過程が繰返されゝばよいのです。之によりて始めて時間の繼續を測ることが出來ます。併し二つの時計を合はせるには各處に於ける同時刻性を決定する必要があります。通常は私たち人間の感覺によりて二つの離れた場處の同時刻性をも特別の定義なしに定められるやうに思つてゐます。つまり日常の習慣によりて感覺的にいつも之が出來るやうに見なしてゐます。例へば二つの燈火が發光するのを或る人が同時に認めれば、之をすぐに同時の出來事と思ひ込みます。けれどそれは一つの幻覺であつて、實は發光が觀測者に認められるのは決して瞬時的ではなく、やはり或る傳達時間を要して光は觀測者に到達するのです。それですからこの觀測者が燈火の發光の同時であるか否かを判定するには





光がどんな速さで傳はつて來るかを知る必要があります。即ち同時刻なるものを物理學的に定義するには光速一定の實驗的法則を考慮に取らなくてはならなかつたのです。例へば二つの電燈が同時に光り出したかどうかを決定するには、その電燈を結びつける線の中央にありて、この發光を同時に見たかどうかに依らなくてはなりません。そしてこのことが始めて同時に體驗を私たちに示すのです。」

「ところがかやうな事がらを行ふためには、先づ幾何學的に二つの電燈の距離を測りて、その中央の點が何處にあるかを定めなければなりますまい そして之がためには基準體がやはり必要なのです。それ故同時刻なるものは一定の基準體に對して始めて意味があるので、基準體を任意に選ぶことが出來るならば、それぞれに對する同時刻なるものの定義も亦相對的に變じ得るわけです。つまり同時刻の定義は決して絕對的ではなくて、或る惰性系に對してのみ成り立つのです。」

「今こゝにお互に一樣に運動してゐる二つの惰性系K_1とK_2とがあります。K_1のなかで二つの相離れた場處A及びBに起つた出來事の同時であることは、前の方法でその中央の點Mを定め、A及びBから發せられた光がその中央の點に達する時刻が等しいと云ふことによつて判斷せられます。併しかやうなK_1に對して同時と見られる出來事は亦K_2に對しても同時でありませうか。」

「K_1が地面であつて、K_2が之に對して動いてゐる長い汽車であるとします。さうすれば汽車の兩端A及びBから發した光は之が地面に靜止してゐるならば中央Mに同時に達するでありませう。併し之が動いてゐるならば、MはM_1まで移動しますから、Aから來た光がM_1に出遇ふよりも以前に、既にBの光がM_1に出遇ふことになるでせう。即ちK_2に於てはAとBとは同時でないと判斷されなければなりません。光速不變の法則が正しければ、同時と云ふことは相對的でなければならないことは之によりて明らかになるでせう。」

「時間の相對性と共に物體の長さも亦相對的であることが判ります。上の例で示された汽車の長さを測るにしてもその前後兩端の點の位置を同時に記しその距離を見なければなりません。然るにK_1と

K_2とでは同時の意味がちがふのですから、長さも相一致するとは云はれなくなります。」

時間と長さとの相對性はこれではつきりと說明されます。そこで特殊相對性原理と光速不變の法則との間に横はる困難を除くにはどうしたらよいでせうか。教授は左の論理的方法を辿られました。

「この困難を取り除くには、K_1から見た光の速度がcであるならば、K_2から見たものも$c-v$ではなくて、やはりcに等しいとしなければなりません。併し之れは特殊相對原理と矛盾するごとくに思はれますが、この矛盾を消滅させることは果して可能でありませうか。」

この難問は教授によりて然りと答へられたのでした。

「一般に知られた如く、K_1なる基準體に對して任意の空間的の場處を記すには三つの座標 x_1 y_1 z_1 を必要とします。それは三つのお互に直角な剛體的の線を一點で交はらしめ、此の各の線から目的點に至るまでの距離をあらはします。又その場處での或る出來事の時刻を記すために、適當な時間原點から測つた時間 t_1 を用ひます。K_1が一つの惰性系であるとしますと、或る出來事の場處と時刻とは四つの數 x_1 y_1 z_1 t_1 で完全に定められるのです。次にK_1に對し一様に動いてゐるやうな他の惰性系K_2がある場合には、之に對しても同じ出來事の場處及び時刻が四つの數 x_2 y_2 z_2 t_2 によりて云ひあらはされるでせう。此の兩系の間には一定の關係が存在しなければなりません。私たちが之を知てゐるならば、一方の x_1 y_1 z_1 t_1 から隨意に他方の x_2 y_2 z_2 t_2 を見出す事が出來ます。一般にかやうな一方の座標系から他方の座標系へ移ることを轉換と名づけます。昔のやうに私たちが絕對の時間をもつとすれば、この轉換の一の關係として $t_1=t_2$ が成り立たなければならないのですが、現在の私たちの理論によれば、時間も長さも相對的のものでありますから、アプリオリにはこの轉換關係がどうなるかは少しも判らないのです。私たちは實驗的事實であるところの光速不變の法則が成り立つやうに之を決定しなければならないのでせう。かやうな關係を滿足する轉換はローレンツによりて見出されました。そしてそれをローレンツ轉換として云ひあらはしてゐます。この轉換が丁度特殊相對性理論の基礎になつてゐるので、それがまた光速不變の法則に適つてゐるのです。」

アインスタイン教授は實に之によりて理論に於ける矛盾を取り除いて新らしい光明を得られたのでした。そしてそれは丁度一九〇五年のことです。教授は更にこの理論の効果とその結果とを述べられました。

「自然現象は何時何處に起るかと云ふことがいつも云ひあらはされなければなりません。從つて一般の自然法則のなかには必ず直接又は間接に空間及時間座標たる $x\ y\ z\ t$ が這入るのです。私たちが若し二つのお互に運動せる座標系k及びKの間の轉換を知つてゐるならば、そしてその上で一方の座標系で自然法則がどう起るかを見出し得たならば、この轉換によりて他方の座標系に關して成り立つべき自然法則を求めることが出來ます。そして相對性原理によれば、この兩座標系は全く相對的であつて、そのどちらが絶對であると云ふことは決してない筈ですから、自然法則の形は兩系に對して亦全く同等でなければなりません。私たちの方法はかやうな意味で自然法則の發見に役だつのです。」

「最後に私は特殊相對性理論から結果する物理的結果の主要なるものを簡單に述べませう。ローレンツ轉換によりて $x\ y\ z\ t$ の間の關係が結合されましたが、之等は剛體と時計との性質を決定すべきものであります。剛體の長さに關しましては之が運動する場合には運動方向の長さが短縮しなければなりません。之は謂はゆるローレンツフイツツジエラルド短縮と名づけられるものでありますが、この短縮は全く相對的に表はれます。お互に擦れ違ふ二つの相等しい汽車があるとすれば一方から他を見れば長さの短縮を示すと同時に逆に後者から前者を見ればやはり同樣の短縮が起つてゐなくてはなりません。この原因は同時刻の判斷の相對性に依るものであることは、上の說明から推されるでせう。」

「第二の結果は時計が運動すると遲れて見えることです。この遲れは運動速度が增して光速に近づく程大きくなるのですが、通常はその影響は殆ど見ることは出來ません。從つてその範圍では昔からの力學がその儘成り立ちます。併し電子の運動のやうな速いものになりますと、この結果が實驗的に觀測されるやうになります。」

「第三はエネルギーに關する問題です。ニウトンの力學によれば物體の運動エネルギーは速度の二乘に比例して增します。併し私たちの理論によりますと物體の速度は光速を超えるわけにはゆかないのですから、この事がらを云ひ換へると、物體が速度を增して光速に近づいたとき、そのエネルギーは無限大に近づくと云ふことを意味します。この際には

惰性的質量も無限大になつて、物體はそれ以上の速さで動き得ないと云ふことになります。即ちこの理論ではエネルギーと質量との間に密接な關係があらはれます。質量保存則とエネルギー保存則とは昔の力學ではお互に獨立なものであつて、その間に何の關係もなかつたのですが、相對性理論では之を密接に結びつけてゐます。この事から尙ほ一つの基準系に靜止してゐる物體も、そのエネルギーの增減に伴つて質量を變へなければならないことが結論されます。私たちは之等の論により惰性的質量とエネルギーとの本源を同一のものに歸することが出來るのでありませう。」

アインスタイン教授の諄々と說かれた言葉は通譯の時間を含めて實に一時半から四時半まで續きました。その間に聽衆は極めて靜肅に之に耳を傾けてゐたことは、教授の硏究とその講演とがいかに力あるものであつたかを覗はせるに足ります。一時間の休憩を約して教授は講壇を下られた。

三　慶應大學講演後半

慶應の圖書室で休憩を取られた教授は午後五時半再び講壇上に立たれました。緊張した聽衆は却つて數を增したかのやうに講堂に充ちてゐました。思ひの外に長時間を要したので教授は聽衆の倦むのを氣づかつて、後半は少し簡單にしたいと私に云はれました。特殊相對性理論を終つてこれから一般相對性理論の難問題に入るのでした。

「運動と云ふことを單に記載するのは極めて一般的にすることが出來ます。私たちはどんなものを基準體にとつてもかまひません。すべての物體はこゝに全く同等の權利をもつて選ばれ得るのです。運動の概念は單に物體の相對的位置の變化を云ひあらはすのですから、斯うなければならないのです。然るに特殊相對性理論におきましては惰性系と云ふものが特に選び出されて、それに對してのみ自然法則が成り立つやうに思はれてゐました。之は何故でありませうか。そしてそれがともかく運動の一般なる相對性に對比して滿足に感じられません。私たちはそれをもつと一般にして、すべての物體を同等に基準體として選び出すことが出來るやうにしたいと云ふ要求をもちます。即ち自然法則を記すにすべての基準體が同等であるやうにしたいのです。」

「今日までの力學には以上のやうな不滿な點がある外に、もう一つ特別な缺點があります。それはニウトンの力學の

法則では質量と物體に固有な一つの量であるとし、之により一物體の力學的性質をあらはしてゐますが、併し質量は一重に定義されてゐることとです。即ち第一には質量は惰性をあらはし、運動速度の變化に對する抵抗として定義せられると共に、第二は物體の重さに比例するものとして秤によりて測られます。この二つの意味の質量が相等しいものであることは、重力の場に於て得る物體の加速度がその性質に拘らず常に同一のものであると云ふ事實によりて裏書きされてゐますけれども、併しこの兩者が何故に相等しいかをニウトンの力學は説明することが出來ません。同じ質量が一方重力と、他方運動に對する抵抗とによりて定義されることは果してどう云ふ關係があるのでせうか。」

教授はこゝに一般相對性理論の必要なことを感じられました。そしてそれが重力の理論と結びついて發展して行つたのです。

「一般相對性理論はすべての基準體を自然法則の記載に關して同等と見なすものです。自然には運動狀態を記すに特に選び出さるべき基準體はないのです。私たちはどんな物體をも基準體に取り、之を靜止してゐると見なすことが出來なければなりません。之がためには私たちは先づ重力と惰性との相等しいものであることを考へてゆかなければなりません。」

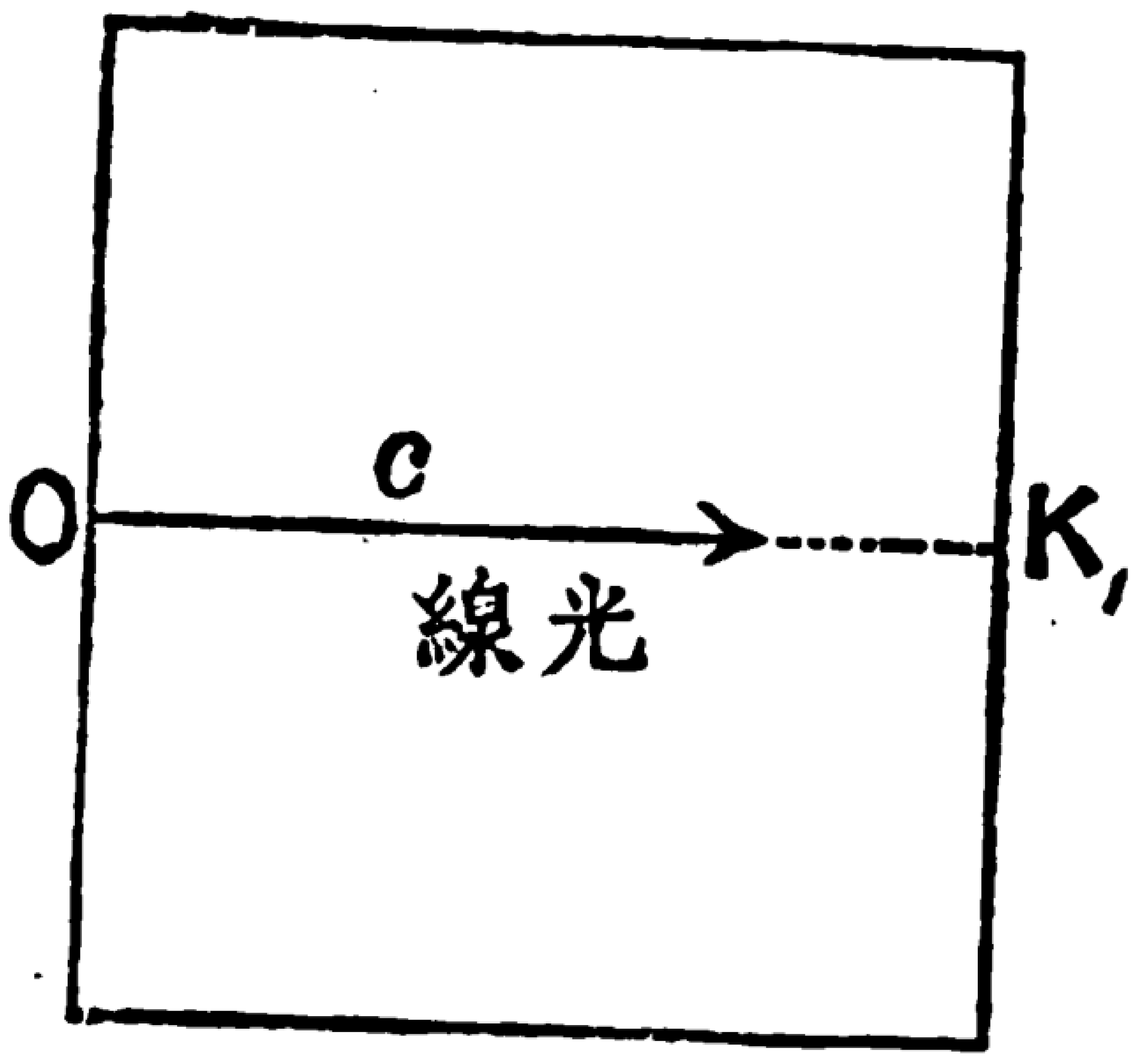
「今こゝにガリレイ及びニウトンに從つて一つの惰性系が與へられてゐるとします。即ち恒星のやうな他の物體から充分遠くに離れてゐて、それからの影響をうけない空間があるとします。そこに一つの箱を想像すればこのなかの空間ではガリレイの惰性の法則が成り立つでせう。從つて亦之に關して特殊相對性理論が應用されます。この基準體をK_1と名づけませう。次にこゝに第二の箱があつて第一に對して上方に一樣な加速度で動いてゐるとします。この基準體をK_2と名づけませう。然うすればK_1に於ける現象はK_2から見てどうあらはれるでせうか。」

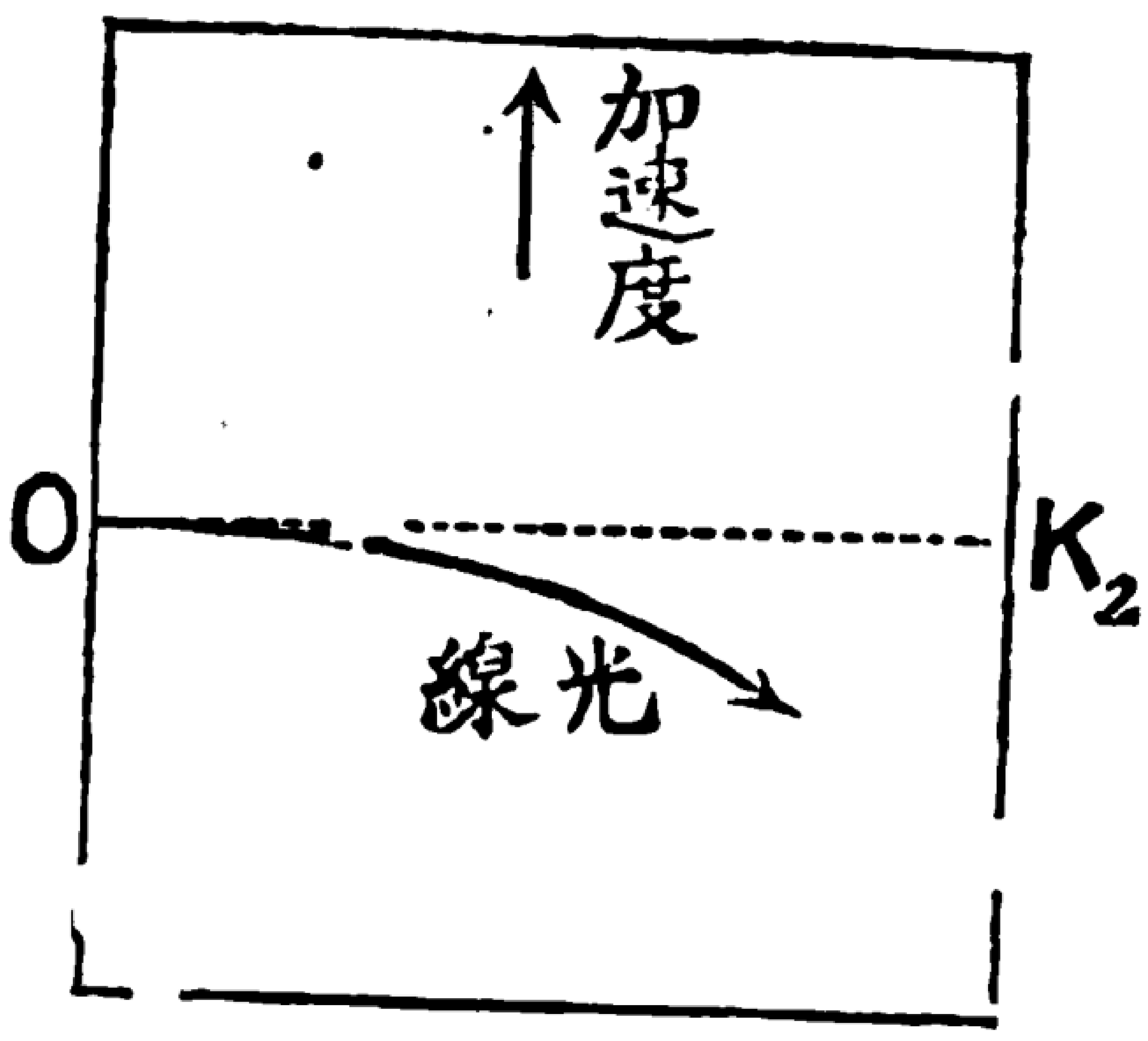
この巧妙な例は事がらを非常に判り易くさせます。私たちはこれから大切な關係を導くことが出來るのです。

K_1のなかには少しも物體から及ぼされる重力は存在しません。それ故このなかで物體はどんな場處にも靜止することが出來ます。ところがK_2はK_1に對し上方に一定の加速度をもつて動きますから、K_1の空間のなかに靜止してゐる物體は

K_2に對してはその箱の底の方に近づいてゆきます。云ひ換へれば物體はK_2のなかではすべて同じ加速度で底へ落ちます。この事は丁度私たちが地球重力の場で經驗するのと全く同じ現象であつて、私たちは、K_2に於ける現象を、K_2が加速度をもつて動くとする代りに、そこに一つの重力の場が存在するとして云ひあらはしても全く同じことであります。この場合に私たちはK_2を一つの基準體に取り之を靜止してゐると見なすことが出來ます。さうしても此のなかに於ける力學的事實を全く同等に云ひあらはすことが出來るわけです。即ち運動の相對性はこの意味に於て一般に押し擴めることが出來るのでせう。」

「そこで私たちは一つの假說をつくります。二つの任意に選んだ基準體K_1及びK_2は單に力學的關係ばかりでなく、もつと一般にすべての自然現象の記載に對して同等であり得ると。即ち相對性理論はかやうにしてすべての自然法則に一般に應用することが出來るやうになります。この假說を私たちは相等假說と名づけます。」





この相等假說は實にアインスタイン教授の一般相對性理論の根本を形づくるものでありました。教授は更にこの假說からどんな事がらが從つて來るを極めて明確に示されました。

「若しこの相等假說即ち一般相對性原理が正しいならば、自然法則は次のやうにあらはれるでありませう。或る現象の法則が一つのガリレイ惰性系K_1に就て成り立つことを知つてゐればこれに對して加速度を有する第二の基準體K_2に關しては、只そこに重力の場が加はつてゐることを考へに入れゝばよいのです。光はK_1に對しては明らかにcなる速度で一直線に進むでありませう。之が重力の場で

どうなるかと云ふ問題に關しては私たちは上方に加速度をもつてゐる第二の箱K_2から見て光がどんな路を取るかを考へればよいわけです。K_2は上方に動きますから光はOを離れて右方に進むに從ひ、K_2の箱の底はこの光線の路に近寄るでせう。即ちK_2に對して光は下圖のやうな曲つた路を取りて進みます。それ故若し相等假說が正しいならば、重力の場に於て光は屈曲すると云はなければなりません。そして光の速度は場處によりて異つた値をもつでせう。太陽の周圍には地球重力と同じくやはり萬有引力の場があります。それですから星から來る光線が太陽の近傍を通過する場合には上に說明したやうな屈曲を示さなければなりません。この事實は恰かも一九一九年の日蝕によりて證明されました。」

私たちはその當時この證明が世に發表されたことによりて、一般の人たちがどんなにアインスタイン教授の理論に驚いたかを思ひ起すことが出來ます。

「相等假說の第二の應用は次のものです。K_1を一つのガリレイ慣性系とし、K_2を之に對して一樣に廻轉せる第二の基準體といたします。お互に相等しい時計がこの兩系の各處に配布されてゐるとします。私たちはK_1とK_2との何れをも勝手に選んで之を靜止せるものと見なすことが出來ます。K_1から見ますと、K_2なる基準體は廻轉してゐますから、こゝに慣性のために謂はゆる遠心力があらはれます。併しK_2から見ると、自分の基準體は靜止してゐるのでこの遠心力は存在しませんけれども、その代りに丁度之と相等しい重力が起つてゐると判斷しなければなりません。この重力は遠心力と同樣に中心から半徑に沿うて外方に向ふものであります。今K_2にある時計をKの時計と比較しますと、之はK_1から見て或る速度をもつてゐますから、特殊相對性理論に從つて時計の進みは遲れなければなりません。之をK_2に移つて見ますとこの時計の遲れは即ち重力の場の影響に歸せられます。時計といふのは前に述べた通り任意の週期的の現象として解せられるので、原子から發せられる一定のスペクトル線を示すやうな光の振動も勿論之に屬します。それ故上の理論の結果として、或る大きな星の上で萬有引力の作用する場處では光の振動週期が異つて見えなくてはなりません。之はその光のスペクトル線の位置の移動、即ち色の相異として私たちの觀測に入るのです。太陽からの光線について斯やうな變化があるかどうかはいろ／＼研究せられてゐますが、スペクトル線の移動の原因がたくさんに在るため、まだ充分に

證明せられゐてないのです。併し之に對しては現在熱心に研究せられつゝあります。

こゝで教授は一般相對性論がすべての體系に於て自然法則を同等の形に云ひあらはすものであることを繰返して述べられました。そしてこの條件を滿足する最も簡單な關係を私たちが採用するときに、そこに萬有引力の理論が云ひあらはされ得ることを指摘されました。最後にこの理論と經驗上の事實との關係に云ひ及ぼされました。

「第一にはこの理論は大體に於てニウトンの引力の法則と一致すると云ふことです。これは同時に一般相對性理論が天體運動の現象をよくあらはすことを意味します。更に計算の近似の程度を進めますと、ニウトンの法則からの多少の外れを與へます。そのうちで水星近日點の移動はニウトンの法則で說明されないものでありましたが、この新らしい理論によりてそれがよく觀測と一致することが示されました次には光線の屈曲の事實でありますが、之は既に述べたやうに先年英國觀測隊の日蝕觀測によりて亦理論との合致が證明されました。この二つは從來この理論が事實によりて證明された著しい事がらです。この外スペクトル線の移動につきましては前述のやうにまだ確かな證明が得られずに居ります。」

「この理論から結果するもう一つの大切な事實は幾何學との關係です。昔の物理學は幾何學と全く無關係のものとせられました。即ち空間のなかに剛體をおき並べる關係は自然現象には關係をもたないのであつて、之は單にユークリッド幾何學によりて記されると見なされましたところが一般相對性理論は重力が物體の幾何學に影響することを教へるやうになつたのです。例へば、一樣に廻轉せる圓板を考へてごらんなさい。圓板の周圍の長さは之に沿うて小さな剛體的の物指をおき並べることによりて測られます。若し圓板が靜止してゐるならば、圓板の周邊の長さを直徑で除したものは謂はゆる圓周率πなる數を與へなければならないのでありますが、圓板が廻轉してゐると、その周邊におかれた物指は運動のためにローレンツ短縮を示しますから、その長さが變つてゐます。それ故之を直徑で除したものはもはや圓周率に等しくなりません。從つて廻轉圓板の幾何學は通常のユークリッド幾何學ではあらはされないことになるのです。そしてこの結果を圓板に對し靜止してゐる觀測者は重力のためであると解するより外はないでせう。即ち幾何學は物理

學的の狀態によりて變化されなければならないのです。」

「この考察は亦宇宙全體の幾何學が物質の分布に關することを結論させます。若し私たちが天體を宇宙空間全體に一樣に平均して散布したと想像し、しかもその質量密度が零でない有限な値を取るとすれば、宇宙空間は無限でなくて或る有限な體積をもつやうになるでせう。之等に就ては尙ほ第二回の講演に於て述べやうと思ひます。」

かやうにして教授の第一回の講演は終りました。丁度午後七時半、前後五時間に亘つた長講演は恐らく類例の少いものであらうと思ひます。

この夜夕餐後、教授は帝國ホテル內の音樂演奏會でその疲れを休められました。教授が靜かにその音樂に聞き入つてゐられる傍に侍して、その演奏ぶりを賞されてゐる教授の言葉を耳にしながら私はすが〳〵しい心に浸みゐることなしにはゐられませんでした。

四　青年會館講演

超えて二十四日の夜、第二回の講演が神田青年會館に開かれました。「物理學に於ける空間及び時間に就て」と云ふ題目です。併し講演內容を通俗的に制限するため、又第一回の講演を聞かない人々が大多數であることが豫期せられるため、大體はやはり前回講演と同樣な事がらに止め、只主要點を空間及時間に關する考察において、之を繰り返へされたのでありました。教授は先づ幾何學の說明をもつて始められました。

「幾何學を學校で敎へられる場合にはその應用に關係なしに、即ち私たちの經驗とは無關係に、公理の上に築きあげられたものとせられます。論理學的にはそれでいゝわけでありますが、併しこゝに注意しなければならないことは、幾何學も經驗的事物に依るといふことです。即ち實際の人間の經驗に關係してゐることです。つまり幾何學的の關係は、私たちが物體をいかに置き並べ得るかと云ふことをあらはすものなのです。幾何學の第一章で私たちは距離の全等といふやうなことを學びます。距離は剛體の物指の長さによりて云ひあらはされるもので、その全等の性質はかやうな物指の比較によりて始めて實際的の意味をもつのです。斯う云ふ點では幾何學は實在の物體の間の一定の法則を示すものです。」

物理學の立場からは剛體をおき並べる法則が幾何學的關係によりて與へられるのであると云はなければなりません。そして斯様な法則としてユークリッド幾何學が見出されるのです。」

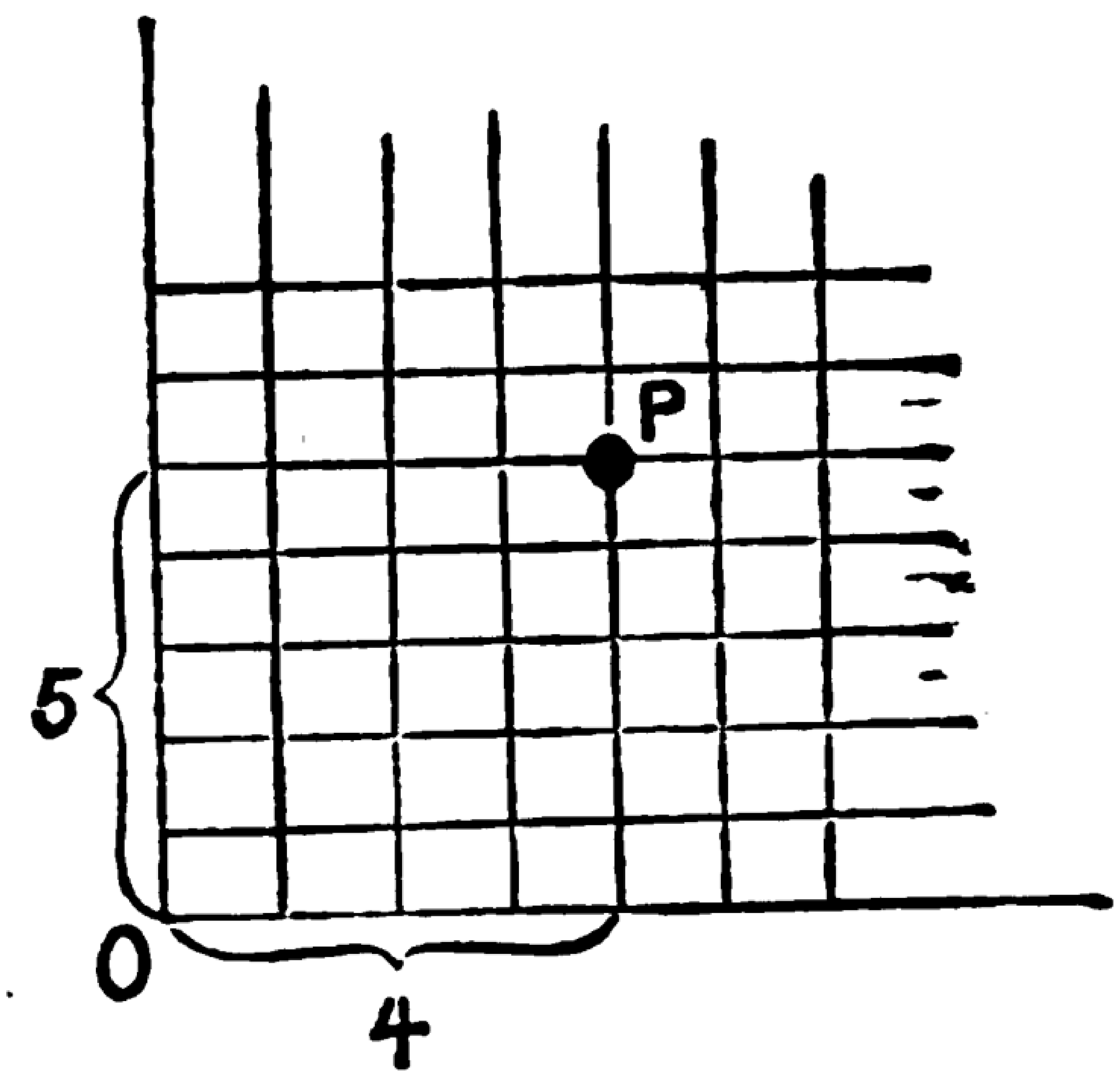
「四つの等しい剛體の棒を取りて之を平面の上に並べると正方形が出來、その二つの對角線の長さはお互に等しくなります。この正方形に接續して尙ほ同様に等しい長さの棒を並べますと、正方形の連續がつくられます。この並べ方は一定にユークリッド幾何學の關係によりて與へられるのであつて、私たちはこの場合に相等しい棒を接續して、二つの對角線の相等しくないやうな四邊形をつくることは出來ません。」

「平面の上にはユークリッド幾何學の法則が實際に成り立ちますから、右の様に棒を並べることが出來ますけれども、之と同じことはもはや球面の上には不可能になります。若し棒が充分短いならば、最初は正方形がつくられるやうに見へますが、漸次球面上に之を接續してゆきますと、その面はもはや正方形で充たされないやうになることが判りませう平面の上に正方形の網をつくると同じやうに、若し空間のなかにユークリッド幾何學が成り立つならば、剛體の棒を接續して骰子の目をつくることが出來ます。之は自明の事がらのやうに思はれますけれども、若し球面のやうにユークリッド幾何學が成り立たないやうな空間が自然に存在してゐたならば、そこでは剛體の棒を骰子の目の形に並べて之を充たすことが出來なくなるのです。かやうな空間は歪んでゐると云はなければなりません。」

空間の歪みは私たちの直觀の上に想像することに甚だ困難を感ずるものです。しかも教授の右の說明をよく味はつたなら、恐らく自ら悟ることが出來るでありませう。教授は次いで座標と云ふことの說明を試みられました。

「ユークリッド幾何學が物理學的に成り立つことを假定しておきませう。その上で私たちが空間の種々の點を云ひあらはすには或る數をもつてすることが出來ます。空間のなかにはこの場合に剛體の棒を並べて骰子の目の形の格子をつくることが出來ます。」

「今先づ空間の代りに黑板の面を用ひ、この上に圖のやうな格子を描いたとします。之を直交座標系と云ひその一隅の點Oを原點と名づけます。そこで一つの點Pの位置を云ひあらはすには、原點の右方、並にその上方に向つてP點に至



るまでに單位の棒が幾つだけ入るかを數へます。この數がそれぞれ4及び5であるとしますと、Pの位置はこの二つの數を云ひあらはすことによりて決定されます。この4及び5なる數をP點の座標と名づけるのです。空間では之と同樣にして、もう一つ前方へどれだけ隔たつてゐるかをあらはす數を必要としますから、點の位置は一般に三つの數によりて完全に定められます。どんな點でもかやうな座標でその位置をきめることが出來るでせう。物理學に於ける空間的關係はすべてかやうな座標によりて云ひあらはすことが出來るのです。この事實は物理學の空間が測定の可能であることに基づくのです。

教授は物理學に於て自然法則を記すには必ずこのやうな座標系の必要であることを說かれると共に、又一方で實際上法則の記載に用ひられ得る座標系が或る制限を附せられてゐることに云ひ及ぼされました。私たちは即ちこの座標系を常に惰性系として云ひあらはされてゐる或る基準體に固着させなければならなかつたのです。そして之に對してのみガリレイの惰性法則が成り立つことを說明されました。更に時間に關して次のやうに述べられました。

「時間といふものを私たちは自分の體驗によりて一樣に流れてゐる一次元的のものと考へてゐます。そしてこの直觀からして時間の物理的意味を取り出さうとします。それで客觀的に何時出來事が起つたかを記すためには、この直觀的の時間を或る機械的裝置で客觀的に置き換へ、そして之によりて時刻を測らなければなりません。かやうな裝置を私たちは時計と名づけるのであつて、それは閉ぢられた一つの體系のなかに週期的に一定の過程が繰返へされるものであります。私たちは丁度空間內で座標の網の目の數を測りて距離を記すと同じやうに、時計にあらはれる或る過程の繰返しの數によりて時間を記すことが出來ます。座標原點で時計を調整しておいて、この時計によりて各處の時間を記します。

かくて惰性系に起る出來事はその空間座標をあらはす三つの數と時刻をあらはす一つの數とによりて完全に之を定めることが出來ます。」

この前提のもとに教授は相對性理論の根本問題に入られました。絶對運動の否定と、併しガリレイ惰性系の成立とが先づ話されました。お互に一樣な速さで動く二つの座標系K_1及びK_2の一方が惰性系に屬するならば、他の方も亦さうでなければならないこと、從つて惰性系には唯一つの座標系がおかれ得るのではなくて、之に屬するものは無限にたくさんあることも説明されました。そしてそれからの凡てに對して惰性の法則ばかりではなく、力學法則の全體が成り立つのであつて、これを特殊相對性原理として云ひあらはされると述べられました。

更にこの原理を力學以外の物理諸現象に擴張しやうとするに當りて、光の進行速度の問題があらはれること、之を解くには同時刻の相對性を考ふる必要あることから、座標と時間との間のローレンツ轉換に及ぼされました。

「ローレンツの轉換の第一の結果としては剛體の形が絶對に定まるものでなく、一定の座標系に對してのみ意味があると云ふことになります。一つの惰性系K_1に對して球體であるやうな物體を取りますと、之に對して動いてゐる他の惰性系K_2から見て、それはもはや球體ではありません。運動の方向にその長さが短縮しますから、扁平な一つの廻轉楕圓體と云ふものになります。この扁平さは勿論極めて僅かであつて、電子のやうな非常な高速度の場合でなければ觀測に入りませんが、併し原理的には甚だ大切のものです。即ち物體の形は只或る座標系に對してのみ一定の意味をもつと云ふことからです。」

次に時計の運動によりてその進みが遅れること、及びエネルギーと質量との關係が説明されました。これで特殊相對性理論を終つて、一時間の休憩の後、一般相對性理論に赴かれました。

そこでは先づ特殊相對性理論の不滿足な點を擧げ、之を一般にする必要のあることを述べ、惰性系に對し一樣の加速度をもつて動く第二の座標系を導き、前者に對し一直線上に一樣に動く物體は後者に對し拋物線を描くことを示し、これ後者に於て重力のあらはれるのと同等であるとなし、依て重力と惰性との本質的に同じものであることを説明されまし

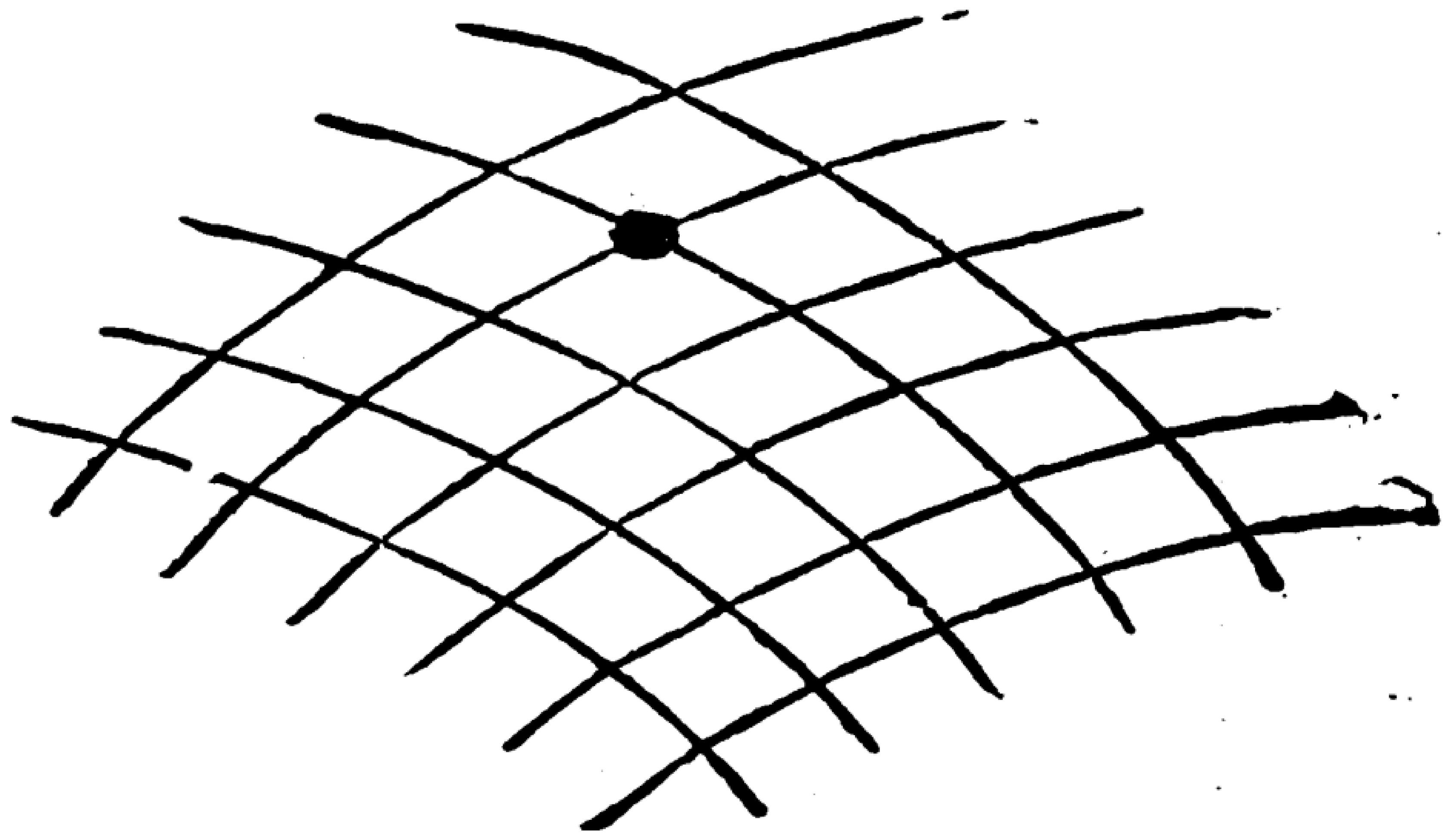
た。そしてこの理論から導かれる結果を簡單に述べられ、再び之が空間及び時間の問題に重要なものであることに言ひ及ぼされました。

「空間のなかに一つの惰性系K_1を考へ、次に之に對し一樣に廻轉する第二の系K_2を考へますと、舊力學では勿論このK_2は自然法則を記す一つの立場として認められません。併し一般相對性理論ではこゝに適當な重力の場の存在をゆるすことによりて、之をやはり同等の座標系として採用することが出來ます。」

廻轉系に於ては重力のために物指と時計とが變化すること、從つて圓板の幾何學的關係がユークリッド幾何學の敎へる處と異なることとの說明が之に續きました。

「幾何學の發展を見ますと直線を二點間の距離として定義し、之から漸次にユークリッド幾何學が生れて來ました。併しこのユークリッド幾何學の成立しない場合には之等の基礎的な概念も變化されなくてはなりません。それがどう作られるかと云ふ問題は純粹數學に於て旣に解かれました。ガウスやリーマンの發展したものが之れです。そこでどこにかやうな數學と私たちの問題との關係があるでせうかを、短く說明してみませう。」

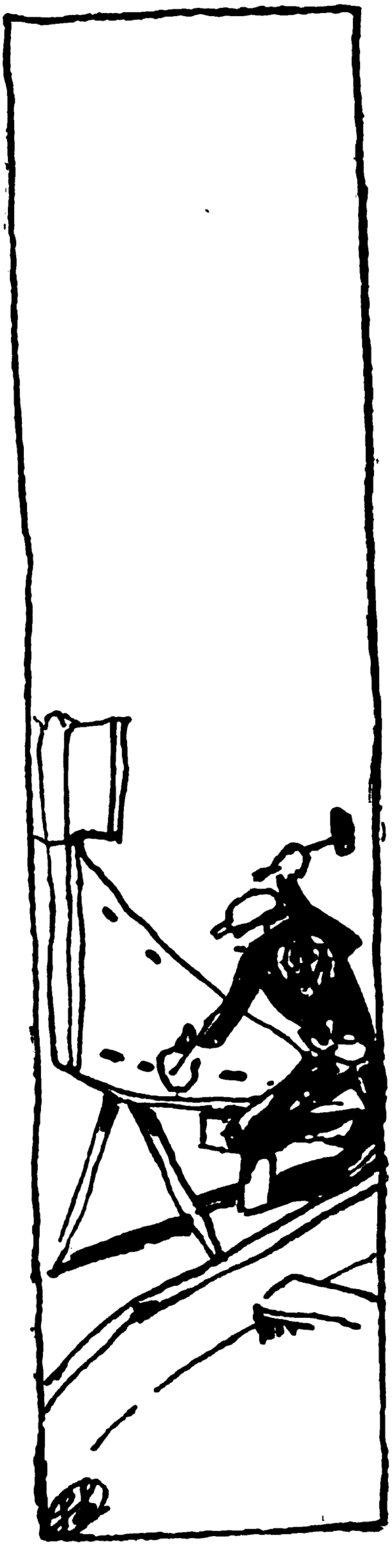
「直交座標では棒の網の目をつくつて點の位置を定めます。平面の上ではそれが二つの數で定まることは前に述べた通りです。ところが平面でない他の曲つた面例へば球面のやうなものの上では棒で網の目をつくることが出來ません。ガウスは任意の與へられた面の上に棒をどう置き並べるかと云ふことを數學によつて論じました。一般に面の性質を定めるには相隣つた點を順次に考へてゆかなくてはなりません。それで今面の一片を取り、その上にお互に相交る任意の二種類の線を引きます。勿論その面の上に橫はり得る線でなければなりませんが、さうでさへあればどんな線でもかまいません。この二種類の線を丁度平面の場合の網の目をつくる縱橫の線と同樣に考へますと、一つの點の位置はやはり適宜の原點から測つて目の數によりてあらはれます。そしてそこにはやはり二つの數によりて之を定めることが出來るでせう。斯やうな數を一般にガウス座標と名づけます。ユークリッド幾何學の成り立たない場合には私たちはいつもこのガウス座標を用ひなければなりません。」



「私たちの空間の幾何學が重力の場の存在によりてユークリッド幾何學から外れるならば、そのなかで點の位置を定めるのには、同樣に直交座標の代りにガウス座標を用ひなければなりません。出來事を完全にあらはすにはその場處をあらはす數と時刻をあらはす數と、一般に四つの數を必要とします。即ち四つのガウス座標によるのです。」

斯やうにして一般相對性理論はすべての自然法則を之等の座標に關して全く同じ形になるやうにするものであります教授は次いでこの理論と經驗的事實との一致について述べられました。ニウトンの引力則や、水星の軌道や、光線の屈曲についてです。そして最後に更に空間の幾何學と物理學との關係を述べ宇宙空間の極めて小さな範圍ではユークリッド幾何學が成り立つと見られるけれども、廣大な範圍にありてはそこに分布される物質によることを說明し、宇宙空間の有限性に云ひ及ぼされました。そして之等の事實も將來天文學が充分に發達したならば之を經驗的に證明することも不可能ではないであらうと云ふことを附け加へられました。

この日の講演も夕五時半に始まり中途一時間の休憩を措いて十時半まで續きました。聽衆は前回に勝りて堂に充ち溢れ、入場し得られなかつた人たちも大分あつたと云ふことでした。みんなこの偉大なアインスタイン教授に憧憬する人たちであつたのでせう。かやうにして教授の東京に於ける公開講演は終つたのでした。私たちはかやうな嚴肅な長時間の講演と熱心なる聽衆の態度を恐らくは容易に他の場合に見られないことであると思ひます。廣い東京の空氣はその隅々までも教授とその學說とに關する噂きで充たされたやうに思はれました。（未完）



日本に於ける私の印象

アルベルト、アインシュタイン

此二三年私は世界の各地を旅行した。それは一人の學者にとつては多すぎた　私のやうな種類の人間は研究室に止つて靜かに勉强してゐべきものだと考へてゐた。だから私はいつも旅行に對する申譯又は理由を考へ出してそれで安心してゐたのだ。今までの多くの旅行には丁度都合のよい申譯が立つたものだから、左程敏感でない私の良心も忽ち其呵責から免れ得たやうな次第であつた。ところが今回山本氏から「日本へ來て見たらどうか」との招待があつた時私の考へ付いた申譯は今までのとは全然其性質を異にしてゐた。と云ふのは「若し此機會を失したなら、もう日本へ行く機會が來ないかも知れない、此機會を眼前に見ながらそれを利用しなかつた、と云ふ後悔は一生忘れられまい」と云ふ感じが、

二三ケ月どころか半年も一年も私の時間をつぶさなければならぬ東洋への旅行を決心させた理由であつた。

私が日本から招待されたと云ふことを人々は聞いて非常に羨望した。伯林に住んでゐてあれ程羨ましがられたことは始めてゞあつた　私どもにとつては日本と云ふ國は神布を以て包まれたやうに不思議な國と思はれてゐる　その夢の國に私がよばれたのだ。日本人、獨逸では淋しく生活し、熱心に勉强し、親切に笑つてゐる――その日本人の住んでゐる國によばれたのだ。日本人のあの笑！　あの笑の背後には吾々の心とは質と形とを異にしたやさしい日本の心もちが潜んでゐる。小さな可愛らしい日本の器具や、時々流行する日本風の讀み物で現まれてゐる日本の氣分がどんなに吾々のそれと異つてゐるだらう？――

色々と想像はしてゐたものゝ、どうしても日本と云ふものを明確に頭に浮べて見ることは出來なかつた。北野丸が瀨戸内海に這入つて綠の島々が朝日に照されてゐるのを見た時、私の好奇心は極度に緊張した。船客及船員の顏は喜びに輝いた　平生なら朝食の前には顏を見せない日本のやさしい婦人たちが朝の六時と云ふのに、もうデッキに飛び出て一時も早く故國の土を見やうとて歩き廻つてゐた。寒い朝風が荒く吹いてゐたにも拘はらず、人々が强い感激を覺えてゐるのを見て私の心は動かされた。「日本人は故國と其國人とを愛してゐる。恐らく日本人程愛郷心の强い國民は他には無からう。日本人は外國語をよく話し、外國の事情に對して大なる硏究心を有してゐる、にも拘はらず外國に於てはいつも遠來の客たる感じを忘れ得ない。其理由は何であらうか」と私は考へて見た

今日まで私は日本に二週間滯在した。二週間後の日と雖も到着の最初の日と同じやうに多くのことが秘密の幕の後に殘されてゐる、然しながら可なり澤山のことがわかるやうになつた、一番私の氣が付いたことは日本人が歐米人に對し

て遠慮勝ちであると云ふことである。

歐米の教育の全體は生存競爭である。最も有利なる條件のもとに、個人として生存競爭場裡に効果をおさめることが吾々の受けた教育の方針である。特に都市に於ては極度の個人主義、傍若無人の競爭、際限なき勞働——只それが出來るだけ多くの贅澤と享樂とを獲ち得んが爲めに、それが爲めに家族の結合は緩んだ。日常の生活に對する藝術的、道德的傳統の影響は比較的僅少である。團體生活に必要なる「快活なる安心」は生存競爭の爲めに消滅し、生存競爭は個人の孤立を當然の結果として生んだ。歐米の實際生活には缺くべからざるところの著ろしい合理的の教養は個人主義を益々強くした。そして個人の孤獨が強く自覺さるゝに至つたのである。

日本は之と全然事情を異にする。個人主義は歐米には强いが此國では殆んど見へない。家族の結合は歐米に比して遙かに鞏固である。法律が家族を保護することがすくないにも拘らず、結合の鎖それ自身と輿論とが家族制度の緩まぬことを保障してゐる。此點は歐米と趣を異にしてゐると思ふ。日本人の生れつき具へてゐる親切心と日本の教育とは家族の結合を固むるに充分であるのに加へて、風聞の女神は更にそれを確實にする。——字に書かれた時でも、書れない時でも、その女神の强制の力によつて。

日本人各個人の食と住とに對する慾求が少ないことは物質的方面に於ける家族の結合、相互扶助をも容易ならしむる。一家の秩序が亂されないで他人を一家内に生活させる場合を考へて見るに、歐洲人は普通は一人の人間きり收容出來ない。普通の場合一人の歐洲人は其妻子を養ふのが關の山であらう。妻が職業の爲めに外出し、子供を召し使ひの者に託さなければならぬ場合は決して稀ではない。成長したる兄弟姉妹又は遠い親族が互に物質上助け合ふ如きことは歐米

に於ては殆んど例外の場合と云つてもよからう。

日本に於て個人と個人との互助的結合が容易に行はれ得る第二の原因は日本人獨特の性質に存する。即ち日本人が共感情を表はさないで、常に之を抑制し得る點である。だから日本人はお互に性質が合はない人間同志でも同一の家屋に共同生活し而も見苦しい爭ひをしないで濟む。茲に於て私は日本人のあの「笑ひ」の中に深い價値が在ることを惟ふ。――歐洲人には如何にも不可思議なあの「笑ひ」の中に。

然らばかくの如き感情の抑制は他面に於て個人の內的貧弱と個人それ自身の壓迫とを意味するであらうか？ 私はさうとは思はない。此性質は日本人に固有のやさしい感じ方と優れた同情心との美しい働きの結果だらうと思ふ。他人の苦樂に對して同じ心の響きを感ずることは日本人は歐洲人よりも强いのではあるまいか。荒い言葉に對して感情を害することは歐洲人も日本人も同一であるが、前者は直ちに報復的態度に出でるに反し、後者は惱んで退き――そして泣く。日本人は不誠實であると思はれることがあるが、それは日本人が荒々しい言葉使ひをなし得ない點から生ずる誤解である。

私の如き一外國人には日本人の心に深く立ち入つて觀察することは不可能である。私は至るところで丁寧に歡迎されいつも特別に撰擇された言葉のみを聞いてゐたから、人間の心の底から自然に流れ出る言葉を聞く機會が少なかつた。それ故に人間に對して私が直接に得た經驗は少ないが、藝術より直接に得た私の印象はそれを補つて餘り有る。實に日本ほど多くの印象を藝術より得る國は他にはあるまい。

私が茲で云ふところの「藝術」とは人間が絕へず創造してゐる美術的の工作物のすべてゞある――美術的たることがその第一目的であつても、乃至副目的であつても。

此點に關しては私は驚嘆するばかりである。自然と人間とが宛然一體をなしてゐるやうである。此國の上に現はれて

ゐるものは凡てがやさしく、快活であつて、抽象的でない、寧ろいつでも自然を通して與へられたものと親密に結ばれてゐる。綠の島や丘の景、樹木、よく耕されたる畑、畔道によつて細かく分たれたる田、——特にその上に建てられたる家々。更に日本人の言葉と、其擧動、衣服及其用ゐる器具が何れもやさしく、可愛い。格別私の氣に入つたのは柔かい疊の敷いてある澤山の部屋と小さく分れてゐる壁との有る日本の家である。其家の中に在るところの小さい個々の物が皆意義を具へてゐる。而も住へる人は繪のやうな笑ひを浮べて、おぢぎをして、坐して、——すべてのもの、皆驚くべく而も眞似し得ざるもの「汝、外國人よ！　試むるとも無駄なるべし、あの繪のやうな日本食は汝には食し得まじ、寧ろ愼しやかに眺むべし。」——日本人は、吾々に比して、お互の交際に於て一層快活であり打ち開けてゐる、將來に生きてゐるのではなく現在に生きてゐる。その快活は常に上品であつて決して喧騷ではない。

日本人の洒落は直接に吾々にも解かる。又滑稽味にも富み諷刺にも長じてゐる。この樣な心理上深い關係にある事柄に關しては、日本人と歐洲人との間に大差ないことを私は事實觀察して驚いた。日本人の心が柔らかいことは其諷刺が不快を伴ふやうな皮肉でないと云ふ點に於ても證明されてゐる。

日本の音樂が歐洲のそれから全然獨立して發達してゐることに對し私は此上もない興味を感じてゐた。日本音樂と西洋音樂との相異は根抵的である、後者に於ては和諧音と調和の構成とが欠くべからざる要素であるが前者は此點に欠くるところが在る。然しオクターヴオに分れてゐる十三の音階の存することは兩者に共通である。私には、日本の音樂は思ひがけない直接の印象を與へる一種の感情畫のやうに思はれる。藝術的の效果としては音の正確なる高度は左程重要の地位を占めてゐないやうだ。鳥の鳴く聲又は波の音の如き自然の音響又は人間の聲　それより受けた人間の感じを形

として表はしたものと思ふ。以上の印象は日本音樂に撞打樂器が重要視せられてゐるのを見て强められた。撞打樂器は一定の音の高度を固有してゐないが、しかし特にリズムの性格を出すにふさはしい。日本音樂の主要な感興は、到る處に美しいリズムがあるといふことに存すると思ふ。音樂の曲がよいのか樂手の個人的奏し振りがよいのかを區別するためには長い經驗を必要とすることは勿論であるが、それのみならず私は言葉を解せぬ爲め日本音樂の深みに潛んでゐる味はとても未だ了解し得ざることを告白する。——言葉は日本音樂に於ては特に重要の役目を演じてゐると思ふ。

日本音樂には吹奏樂器としては小さなやさしい笛があるのみで西洋音樂の如く强烈の音を發する金屬製の吹奏樂器が無いこと——これも日本人の特質が藝術に現れた一面である。音樂のみならず繪畫に於ても、日常生活の器具に於ても日本人が特にやさしいもの、可愛いものを好むと云ふことが證明されてゐる。芝居又は舞踊に於ける音樂特に能樂は私に强い印象を與へた。

日本の音樂が其音律の形式上の構成とその組み立てとに欠けてゐることはそれが偉大な様式の藝術となるのには一大障害であらうと私は思ふ。

日本の藝術の中で私の最も感服したのは繪畫と木彫とである。日本人は物の形を喜んで見る、宇宙の現象を丁寧に藝術的に抽き出してそれを一定の線に收める。吾々の意味する實寫主義の如き自然の描寫は日本人の得意とするところではない。又感性的方面が宗教的に换へられてゐる。これは佛教の影響であらう——アジヤ大陸の佛教は日本人の心には寧ろ内的に固有のものでは無かつたやうに思はれるが。

日本人にとつて、すべては色彩と形とにおける直接の體驗である。そのかぎり自然に忠實であるが、常に様式が實要

視されると云ふ點に於て自然に遠ざかるとも云へやう。鮮明と單純なる線とは其最も好むところである。

私は此一二週間に於て得た大なる印象の極くすこしをしか書く事が出來なかつたし、又政治上及社會上の問題には少しも觸れ得なかつた。又日本婦人の特質、その花のやうな存在の特質に關しても、私は完く沈默した。かういふ事柄に關しては、詩人の筆に託したい。然し只一つ私の心に横つてゐることを云はして貰ひたい。日本人が西洋の科學を稱贊し自己も大なる理想を以て之に向ひつゝあることは素より喜ぶべきことではあるが、自己が西洋に優越して有する大なる質を純潔に保たれんことである。――生活の藝術的形を具へてゐること、質素にして而も個人的慾求の少なきこと、日本の心の淸くそして靜かなること。

persönlichen Ausdruck des Künstlers stets eine grosse Erfahrung voraussetzt, entgeht mir die Beziehung zum gesprochenen und gesungenen Wort, das ja bei den meisten japanischen Musikstücken eine erhebliche Rolle spielt. Für die künstlerische Einstellung der japanischen Seele scheint es mir charakteristisch, dass als Blasinstrument nur die zarte Flöte auftritt, nicht aber die viel grelleren Blasinstrumente aus Metall. Es zeigt sich auch hier die besonders in der japanischen Malerei hervortretende und in der Ausgestaltung der Gegenstände des täglichen Lebens so charakteristische Vorliebe für das Liebliche und Zierliche. Am meisten wirkte die Musik auf mich, wenn sie dazu diente, ein Theaterstück oder eine stumme Handlung (Tanz) zu begleiten, insbesondere beim Noh-Spiel. Der Ausgestaltung der japanischen Musik zu einer Kunstgattung grossen Stiles steht meiner Meinung nach der Mangel an formaler Gliederung und architektonischem Aufbau im Wege.

Das Herrlichste, was für mich an japanischer Kunst existiert, liegt auf dem Gebiete der Malerei und Holzschnitzerei. Hier zeigt sich so recht, dass der Japaner eine formfreudiger Augenmensch ist, der das Geschehene unermüdlich künstlerisch gestaltet, in stilisierte Linie verwandelt. Kopieren der Natur im Sinne unseres Realismus ist dem Japaner fremd, ebenso die religiöse Abkehr vom Sinnlichen trotz dem Einfluss des der japanischen Seele innerlich fremden Buddhismus des asiatischen Festlandes. Alles ist ihm Erlebnis in Form und Farbe, naturwahr und doch insofern naturfern, als stets eine weitgehende Stilisierung vorherrscht Klarheit und einfache Linie liebt er über alles. Das Gemälde wird stark als Ganzes empfunden.

Nur wenige der grossen Eindrücke, die ich in diesen Wochen empfing, konnte ich erwähnen, nichts sagend über die politischen und sozialen Probleme. Auch über die Besonderheit der japanischen Frau, dieses blumen-ähnlichen Wesens—schwieg ich; denn hier muss der gewöhnliche Sterbliche dem Dichter das Wort lassen. Doch eines liegt mir noch am Herzen. Mit Recht bewundert der Japaner die geistigen Errungenschaft des Westens und versenkt sich mit Erfolg und grossem Idealismus in die Wissenschaften. Möge er aber dabei nicht vergessen, die grossen Güter rein zu erhalten, die er vor dem Westen voraus hat, die künstlerische Gestaltung des Lebens, die Schlichtheit und Anspruchslosigkeit in den persönlichen Bedürfnissen, und die Reinheit und Ruhe der japanischen Seele.

nicht in der Zukunft, sondern in der Gegenwart. Seine Heiterkeit äussert sich immer in feiner Form, nie geräuschvoll. Der Witz des Japaners ist für uns unmittelbar verständlich. Auch für das Drollige, Humoristische hat er viel Sinn. Ich habe mit Staunen konstatiert, dass in Bezug auf diese psychologisch gewiss tief liegenden Dinge keine grosse Verschiedenheit zwischen dem Japaner und dem Europäer besteht. Die Weichherzigkeit des Japaners zeigt sich hierbei daran, dass sein Witz nicht sarkastischen Charakter annimmt.

Von grösstem Interesse war für mich die japanische Musik, die sich ja teilweise oder ganz unabhängig von der unsrigen entwickelt hat. Erst beim Anhören ganz fremder Kunst kommt man dem Ideal näher, das Konventionelle vom Wesentlichen, durch die menschliche Natur Bedingten zu trennen. Die Unterschiede der japanischen Musik von der unsrigen sind in der Tat fundamental. Während nämlich bei unserer europäischen Musik Akkorde und architektonische Gliederung allgemein sind und unentbehrlich scheinen, fehlen sie bei der japanischen Musik. Dagegen sind beiden gemeinsam die dreizehn gleichen Tonstufen, in welche die Oktave geteilt ist. Mir scheint die japanische Musik als eine Art Gefühlsmalerei von ungeahnt unmittelbarem Eindruck. Für die künstlerische Wirkung scheint sogar die exakte Tonhöhe nicht so unbedingt massgebend zu sein. Es macht mir vielmehr den Eindruck, dass es sich um eine stilisierte Darstellung von Gefühlsäusserung der menschlichen Stimme sowie solcher Naturlaute handelt, die auf das menschliche Gemüt einen Gefühlseindruck hervorbringen wie das Singen der Vögel und die Brandung des Meeres. Dieser Eindruck wird dadurch verstärkt, dass Schlaginstrumente eine wichtige Rolle spielen, welchen keine bestimmte Tonhöhe eigen ist, die aber besonders geeignet sind zur rythmischen Charakterisierung. Der Hauptreiz der japanischen Musik liegt für mich in den überaus feinen Rythmen. Ich bin mir vollständig des Umstandes bewusst, dass mir die intimsten Feinheiten dieser Art Musik noch verschlossen sind. Abgesehen davon, dass eine lange Erfahrung zur Unterscheidung des rein Konventionellen vom

Der Japaner zieht sich verletzt zurück und—weint. Wie oft wird dem Japaner die Unfähigkeit zum rauhen Worte als Falschheit und Unaufrichtigkeit gedeutet.

Für einen Fremden wie mich ist es nicht leicht, tief in die japanische Seele zu blicken. Überall mit grösster Aufmerksamkeit im Festgewande empfangen höre ich mehr sorgfältig abgewogene Worte, als solche vielsagende, die unbeachtet aus der Tiefe der Seele heraus schlüpfen. Aber was dem unmittelbaren Erleben an den Menschen entgeht, das ergänzen die Eindrücke der Kunst, die man in Japan so reich und vielfältig empfängt wie sonst in keinem Lande. Dabei verstehe ich unter "Kunst" alles, was hier Menschenhände mit ästhetischer Absicht oder Nebenabsicht an Dauerndem hervorbringen.

In dieser Beziehung komme ich kaum heraus aus dem Staunen und der Bewunderung. Natur und Menschen scheinen sich vereinigt zu haben, um eine Stileinheit hervorzubringen wie nirgends sonst. Alles, was wirklich von diesem Lande stammt, ist zierlich und heiter, nicht abstrakt metaphysisch sondern stets ziemlich eng verbunden mit dem durch die Natur Gegebenen. Zierlich ist die Landschaft mit kleinen grünen Inselchen oder Hügeln, zierlich die Bäume, zierlich das sorgfältig in kleine Parzellen geteilte, sorgfältigst bebaute Ackerland, besonders aber die darauf stehenden Häuschen und endlich die Menschen selbst in ihrem Sprechen, ihren Bewegungen, ihrer Kleidung samt allen Gerätschaften, deren sie sich bedienen. Besonderen Gefallen habe ich am japanischen Hause gefunden mit seinen sehr gegliederten glatten Wänden, seinen vielen, mit Matten weich ausgelegten Zimmerchen. Jede kleine Einzelheit hat da Sinn und Bedeutung. Dazu zierliche Menschen mit ihrem malerischen Lächeln, Verbeugen, Sitzen—alle Dinge, die man nur bewundern aber nicht nachmachen kann. Du versuchst es vergeblich, O Fremder!—Doch das zierliche Essen Japans bekommt dir nicht, bescheide dich lieber mit dem Zusehen.—Der Japaner ist verglichen mit unseren Menschen heiter und sorglos im gegenseitigen Umgang,—lebt

noch als bei uns und sorgt dafür, dass das Gefüge der Familie nicht gelockert wird. Die gedruckte und nicht gedruckte Fama hilft durch Zwang vollendem, was durch Erziehung und angeborene Gutherzigkeit des Japaners meist schon genügend gesichert ist.

Der Zusammenhalt der Familien im weiteren Sinne in materieller Beziehung, die gegenseitige Hilfe, wird erleichtert durch die Anspruchslosigkeit des Individuums in Wohnung und Nahrung. Der Europäer kann im Allgemeinen eine Person in seiner Wohnung beherbergen, ohne dass die Ordnung des Hauses empfindlich gestört wird. So kommt es, dass der europäische Mann meist nur für Frau und Kinder sorgen kann, wenn es gut geht. Oft musst die Frau am Erwerben teilnehmen, auch die Frau der oberen Stände und die Erziehung der Kinder den Dienstboten überlassen. Dass erwachsene Geschwister oder gar fernere Verwandte für einander sorgen, gehört schon zu den Seltenheiten.

Aber noch aus einem zweiten Grunde ist der engere schützende Zusammenhang der Individuen in diesem Lande leichter möglich als bei uns. Es ist die eigentümliche japanische Tradition, die eigenen Gefühle und Affekte nicht zu äussern, sondern unter allen Umständen ruhig und gelassen zu bleiben. Hierauf beruht es, dass viele, auch seelisch nicht miteinander harmonierende Personen unter einem Dache wohnen können, ohne dass es zu peinlichen Reibungen und Konflikten kommt. Hierin scheint mir der tiefe Sinn des japanischen Lächelns zu liegen, das dem Europäer so rätselhaft ist.

Bringt diese Erziehung zur Unterdrückung der Gefühlsäusserung des Individuums eine innere Verarmung, eine Unterdrückung des Individuums selbst mit sich? Ich glaube es nicht. Die Entwicklung dieser Tradition war gewiss erleichtert durch eine diesem Volke eigentümliche Feinfühligkeit und durch eine Intensität des Mitgefühls, das lebhafter zu sein scheint als bei dem Europäer. Ein rauhes Wort verletzt den Europäer nicht weniger als den Japaner. Ersterer schreitet sofort zum Gegenangriff, Gleiches mit Gleichem reichlich vergeltend.

schaft. Manches zarte Frauchen, das sonst vor der Frühstückszeit niemals gesehen wurde, lief unruhig und selig um sechs Uhr morgens auf Deck herum, den rauhen Morgenwind nicht achtend, um sobald als irgend möglich die heimatliche Erde zu schauen. Ich war gerührt, als ich sah, wie tiefe Bewegung sich aller bemächtigte. Der Japaner liebt sein Land und sein Volk mehr als alle anderen, und er fühlt sich trotz seiner sprachlichen Fähigkeiten und seiner grossen Neugier allem Ausländischem gegenüber doch fremder im Ausland als alle anderen. Woher kommt das?

Zwei Wochen erst bin ich in Japan gewesen, und gar vieles ist mir noch geheimnisvoll wie am ersten Tag. Aber manches habe ich doch verstehen gelernt, am meisten die Scheu des Japaners dem Europäer und Amerikaner gegenüber. Bei uns ist die ganze Erziehung darauf gerichtet, dass wir den Kampf ums Dasein als Einzelwesen unter möglichst günstigen Bedingungen erfolgreich aufzunehmen vermögen. Besonders in den Städten weitgehendster Individualismus, rücksichtslose Konkurrenz bei Anspannung der höchsten Kräfte, fieberhafte Arbeit um möglichst viel Luxus und Genüsse zu erringen. Das Band der Familie ist gelockert, der Einfluss der künstlerischen und moralischen Tradition auf das tägliche Leben verhältnismässig gering. Die Isolation des Individuums wird als notwendige Folge des Daseinskampfes angesehen, sie raubt dem Menschen jene heitere Sorglosigkeit, die nur das Aufgehen in einer Gemeinschaft verleihen kann. Die vorwiegend rationalistische Bildung—für das praktische Leben unter unseren Verhältnissen unentbehrlich—verleiht dieser Einstellung des Individuums noch mehr Schärfe; durch sie tritt die Vereinsamung des Individuums noch stärker in das Bewusstsein tritt.

Ganz anders in Japan. Das Individuum ist hier weit weniger allein auf sich gestellt als in Europa oder Amerika. Die Bande der Familie sind viel enger als bei uns, trotzdem das Gesetz sie eigentlich wenig beschützt. Aber die Macht der öffentlichen Meinung ist hier stärker

Plauderei über meine Eindrücke in Japan.

Albert Einstein.

Ich bin in den letzten Jahren viel in der Welt herum gereist, eigentlich mehr, als sich für einen Gelehrten schickt. Denn ein solcher von meiner Art soll eigentlich still in seinem Zimmer sitzen bleiben und studieren. Nun gab es für meine früheren Reisen stets eine Entschuldigung, die mein nicht sehr empfindliches Gewissen bequem zur Ruhe bringen konnte. Als aber Yamamotos Einladung nach Japan kam, entschloss ich mich sofort zu der grossen Reise, die doch Monate in Anspruch nehmen musste, ohne dass ich dafür eine andere Entschuldigung anführen kann als die eine, dass ich es mir nie hätte verzeihen können, wenn ich die Gelegenheit, Japan mit eigenen Augen zu sehen, hätte unbenutzt vorbeigehen lassen.

Nie in meinem Leben bin ich in Berlin mehr und echter beneidet worden wie in dem Augenblicke, als man erfuhr, dass ich nach Japan eingeladen sei. Denn dies Land ist bei uns von einem Schleier des Geheimnisvollen umgeben wie kein anderes. Man sieht viel Japaner bei uns, einsam lebend, eifrig studierend, freundlich lächelnd. Niemand kann die Gefühle ergründen, die hinter diesem schützenden Lächeln verborgen sind. Und doch weiss man, dass eine von der unsrigen verschiedene Seele dahinter steckt, die sich im japanischen Stil zeigt, wie er sich in den zahlreichen bei uns vertretenen japanischen kleinen Gebrauchsgegenständen äussert und in einer japanisch beeinflussten Literatur, die von Zeit zu Zeit Mode wird. Alles, was ich über Japan im Kopfe hatte, konnte mir kein klares Bild geben. Meine Neugier war aufs Höchste gespannt, als ich auf der "Kitanu Maru" durch die japanischen Meeresgen fuhr und die unzähligen zierlichen grünen Inselchen in der Morgensonne leuchten sah. Am meisten aber leuchteten die Gesichter aller japanischen Passagiere und der ganzen Schiffsmann-

レーニンと哲學

――アルダノフ著「レニンより」――

第一露西亞革命の失敗後に於て、露西亞に於けるマルクス思想は危機に遭遇した。で、多くの社會民主々義者、ボルシエヰスト、並に非ボルシエヰストは、エンゲルス、メーリング、ラフアルグ若くはプレハノフ等の物質主義とは異つた他のもので、彼等の社會思想に、哲學的根據を與ふることの必要を感じてゐた。そして哲學に關する論文が盛んにルナチヤルスキー、バザロフ、ボグダノフ、イユケヰッチ、其他の社會民主々義者に依つて書かれたものだ。

『學問上の掠奪（マローダ）、即ち先例のない學問上の崩壞が始まつたのはこの時代だ、彼等は勞働者に貸附けるに、マルクス主義の商標の下にブルジョア哲學の腐敗した思想を以てしようとしたのだ』と、ヂノヰエフは云ふてゐる。

この現象を、レニンは見逃さず、直ちに悲憤の目をそれに光らせた、彼はその中に危險を藏してゐることを見てとつたのであつた。

レニンはその時まで、曾て哲學の門に入つたことがなかつた、そして概念的に、マルクスやエンゲルスに依つて解決されなかつた『哲學的』問題なるものが、善良な社會民主々義者にとつて存在し得ようとは思惟してゐなかつた。兎に角、唯物主義からの脫走者の無恥無法が、彼を憤慨せしめたのだ。マルクスやエンゲルスの辯證的論法の物質主義に對して反逆――確かに失敗はしたが反逆だ――を企てつゝあつた所のこれら社會民主々義者は、是非とも、その本然に立ち歸らしめねばならなかつたのだ。

そこでレニンは、巴里の國立圖書館に閉ぢ籠つて、ブルジョア哲學の研究に着手した。私は彼の一友人から、彼が六週間でブルジョア哲學を習得したと聞かされた、が併し、ヂノヰエフに依れば、彼はこの問題のために、彼の生涯の二個年を費したと云ふこと、である。何れにしろ、彼は膨脹なる本を書いて一九〇八年に出版してゐる。そして此の本こそは『一大理論的著述で、哲學にとつての重要なる貢獻で、しかも共產主義に基礎を與へたものだ』とヂノヰエフが賞讃したものだ。

この本は實際、非常に珍本だ。が、それは心理學的見地――病理學的でない――から云つてのことだ。レニンが哲學的問題を取扱ふ態度は、絕對の嘲笑に價する。大抵の抽象的哲學者どもの著述は、ボルシエヰズムの見地から檢閱されて、その敵手を而喚はしてゐる。過去の哀れな哲學者たちは、彼等の學說中からレニンが見出し得たものを知つたならば、屹度喫驚するだらうよ。

レニンはプレイの書いた穩健な論文年四回刊行の科學的哲學雜誌中の『經濟學中の形而上學』から引用して、そしてかういふことを附言してゐる『讀者は恐らく、われ／＼がこの明瞭を缺いだ驚くべき陳腐な言葉を、此所に喋々しくも引用したのに惱まされたであらうと思ふ、この似而非科學的哲理は、アヴエナリウスの術語學で調理したに過ぎないものだ。けれど獨逸の諺にもあるとほり『敵を知らんとする者は、敵國に入らなければならない』そしてアヴエナリウスの哲學的批評は、マルクス主義者にとつての本當の敵國だ。』

夫れでレニンが哲學に興味を持つたといふことは、恰度敵がその敵に興味を持つのと同じであつたことは明だ。彼は廣汎に亘る――哲學書を――『研究した』――換言すれば、一瞥した、それは即ち、獨逸の士官が、――一層眞劍に――露西亞語を研究するのと同一理由からなのであつた。……（餘平名譯）

「死線」以來の大歡迎！

旬日にして四十版突破

近

文學博士

廚川白村著

定價 貳圓五十錢

◇送料十九錢◇

◇四六版上製◇

結婚、三角關係、離婚

一青年生物學者の見た考へ

山本宣治

人類以外の動物は今日ある事を感ずる許りで明日ある事を知らず、唯本能の導くがまゝに生殖の事を行ひ種族保存の實を全うして居る。理知を具へて生まれ出た我々人間は之に反して理想に憧がれ將來を思ひ子孫の事を慮つて居り、雜駁で纏まりの附け難い諸種の本能を整理し、其等を統御しやうと試みて努力精進をして居る。即豚や牛馬に罪を犯し得る自由意志が無いと同時に有德なる猿も居ない、一方に於て人は罪を犯し得る自由を有すると共に進んで有德の人たり得るの自由がある、此所に萬物の靈長たる人間の尊嚴が存すると共に、所謂「獸性」を統御せんと試みて事志しと違ひ煩悶する人間獨特の悲哀がある。

斯様な立場から見れば、人類以外の動物には生殖こそあれ結婚といふ文化的行爲は無い、だから無論生物界には結婚もなければ離婚も無い、生殖に就ての多角關係はよしあつても戀愛の三角關係なぞは無論人間以外に無い。一個の生物學研究者たる私は、此考へから出發して他の生物の性的生活を參考にして我々の「かくあるべき」結婚生活の始終を考へて見たい、特に斷つておく事は此說は私一個の解釋であつて、從來世に多く行はれた人間の生活を強ひて畜生の生活に引摺り下して汚さうと試みる『僞惡者』の自稱科學的人生觀とも大分趣きを異にして居る。

男女に優劣はない

女の頭腦の重さが平均男のそれよりも百二十瓦だけ少いから百二十瓦がた女のが低能だとか、或は猿より三本毛が多くて男より三本毛が足らぬ者が女だとか、或は髮長ければ智慧短しとか、色々な事を云ふて其「低能」な女に失戀したらしい女嫌ひの男は空威張をして居るが、此樣な見方は男女の特性が或能力を所有する量の多少に因んで居る即同じ能力を男は多く女は少く

所有して居るのだと解釋するものである。併し乍ら公平な生物學的智識の教へる所によれば、兩性は質の違ひであり量の差でない、即男女に優劣はない、唯双方互になくては立行かぬ一半、此半人前を二つ合せて始めて人間らしい一對が出來る次第である。所で本來優劣が無いのだから、今迄の様に征服者對奴隷或は主人對下女或は飼主對家畜の如き一種の脅迫的主從關係は、之迄女性をなみした男性文化の中に於てこそ存立はしたが、將來解放さるべき全人間の社會に於ては全然不合理のものであり追つて自然消滅をなすべき運命を有するものと見る外はない。斯樣にして將來の結婚に於てまづ第一に結婚する本人同士が互になくてならぬ一半である事を自覺しなければならぬ。即結婚の一要件として相互の同格性承認がある。

配遇者の候補を比較の上自由撰擇

扨男女が互に同格だと認た上で、其同樣な異性の數ある中から此人こそ我意中の人と自由意志を以て撰まなければならぬ。家の爲だから是非も無いとか、親の仰せの重ければとかで、泣の涙で嫁入するのは暴力に對する屈服忍從であり、何等自己の主張が無いのだから眞の結婚と云ふ事が出來ぬ。又異性でさへあれば誰でもと近づいて來た者の第一に引かれるならば、其所に何も撰擇が無いから之も眞の結婚でない。併し悲しい事には今の日本の現狀では多くの異性を危險無く比較し撰擇し得る機會が少い、親と世間とが馬鹿だから娘の童貞をまるで眞空にした硝子瓶の番をする様に後生大事に守つて居る。所で用心堅固過ぎるものだから、水に譬ふれば『淺く共せけば溢る川水の』だ、土手に蟻の穴があつても其所からドーッと流れ出す。電氣で云へば電位差（ポテンシャル）が高まつて一寸した機會でもすぐ爆發を發して火花放電をする。星と菫とスヰートホームの名に憧れた過去の新人の『自由結婚』の中の或ものは、お氣の毒乍ら此種の火花放電であり、電位が平均した後に『何だい之は、オヤ〳〵』と幻滅を感じた人もあつた。今戀愛至上主義の名許りで自己陶醉に耽つて居る若人達の中にも御仲間があらうが、唯偶然に會合し或は唯近く住んだ丈で配遇關係が成り立つのなら動物の生殖と別に異る所が無い。其所で過渡時代の此缺陷を補ふ爲には自由無礙な社交の機會を與へて比較撰擇の便宜を作り、同時に色魔や不良青年を見分けて自身で蹴飛ばす丈の強さ賢こさを呼び起さねばならぬ。男女共學も其一手段であらうが惜み〳〵少し宛思はせ振りタップリでは却つて危險が多い。性教育と同樣に共學でもやるなら一思ひに隔ての垣を撤廢しなければ却つて危い。

理想の愛人と現實曝露

所で此人こそと思ふ人が實際世の中に居るか。成程若い浪漫的な氣分に充ち〳〵た頃には、どんな寂寞を感じて居る時でも深い絶望に陷つた時でも、此廣い世界の何所にかに私を待構へて唯一人の異性が居るのだといふ信仰を呼びさますと忽に一道の光明が現れ一脈の溫かさが心の中に湧いて來る。併し段々世事に馴れ自己の特色も徐ろに發揮して來ると共に、其樣な空想が漸くに消滅して來て、一體其樣な「理想の異性」が本統に居るものかと疑ひ始める。此場合に出る態度は二通りで、穩健派の方はさう〳〵いつ迄も贅澤は云ふて居られぬから此邊で我慢しておかうと、之迄嚴しかつた理想の標準を引込めて今度は目前に實際居る相手にあてはまる樣な極內端な注文丈にしておく、急進派の方は大低氣が早いから愼重熟慮する暇も無く沒頭する、忽幻滅が來る、すぐ匙を投げて又追究を始める、中には峠を越えて彼方に展開する新天地に憧れる氣分で、峠を越えては又次の峠と終生戀愛巡禮を續けて、終には常暗の國に迄久遠の女性を追掛けて行く、之は特に男の方に著しい特徴である 所で、

『同一種の動物の中でも外部生的器官の形や大さは區々である。特に分化著しい人類のそれは男女の頬が異なるが如く各種多樣である、其故に注意の一對の間に完全なる調和適合を欲するのは、個々の鍵を或一の錠前に手當り次第にあてはめやうとする、如く、分に進んで居れば居る程困難である。』 十九世紀の獨逸の動物學大家ロイカルト

成程我等は文化人として精神生活の內容が豐富になればなる程共鳴理解し得る相手の數が少くなる、即性的器官でなくても我等の精神生活の錠前は金庫のそれの如くに複雜になつて居る原始人の錠前は我々の裏の炭小屋のそれの如く出來合せの錠で滯り無くあけられる。併し乍ら性的器官に限らず、我々人間の一切は鍵や錠前の如く固定造りつけで融通の利かぬ窮屈なものじやない。併し今迄の人間には大抵野蠻人から受繼いだ原始的考へ方が殘つて居り、何でも固定したものの完成したものに考へ直さないと承知しない、例へば國家といふ考へでもさうだ、結婚生活でも結婚式當日に落成式を擧行した鐵筋コンクリート建築物で鶴は千年龜は萬年の後迄も終絶せずに殘るものだと考へたがる、そして新婚の當日から夫から妻に『理想の佳人』であり又『ヨリよき一半』である事を要求する。所でよつく反省して御覽、その花婿御自身が『理想のハズバンド』であるか…。鏡と相談してから物を云へといふのは、唯に顏ばかりの問題でないのである。

相互調整と硬化固定

何しろ當人自身をかくあるべき自分に叩き直せない位いだから、相手が當方の固定した要求の通りに完成して居さうな筈がない。併し結婚の實際に於て進んで結婚したのと强ひられて式を擧げたのと差別無く、何しろ胸がワク／＼して居るから相手が理想的な樣に見える。やがて其甘い夢が覺めて苦い現實に觸れた時でもビックリして引退くといふのは非常に勇敢な人か又はよく／＼の場合の事丈だ、其所が錠前や鍵の樣な死物と異る人間の特色で、一方の缺けたものは他が補ふ、一が或點で後れて居たなら急に驀進を試み他は步調を緩めて追付くのを待つて居るといふ風に、相互の調整が始まる。此相對性繼續關係が結婚生活の本來の中心であり、どちらか一方が死ぬ迄不絶一進一退變化極まり無き流動である。跳躍(エラン)する生命(ヴイタル)共ものである。

所が實驗心理學の敎ふる通り、習的欲求に於て女の欲する物は固定完成したもの、男の求むるは生長變化するものである。實業家で云へば前者は銀行家後者は株屋である。一は堅實である代りにボロイ事は無い、他は山カンで險呑な代りに興奮と刺戟に富んで居る。で所樣にして女は天性自ら結婚生活の始めに既成完備を求め易い、既に相當の地位財産ある者を撰まんとするのは敢て日本の御婦人に限つた事でなく、又其が生物學的に當然であり決して惡い事だとは申すのでない。併し乍ら結婚とは曰比谷大神宮神前に式をあげた後カメラの中に入りそれがやがて何々畫報に登載された事によつて千秋樂を告げるのでなく、之は唯本の前幕でそれから後の色々の變化發展が結婚生活其ものなのであるが、前申した通りの女の考へ方は完成既定に安んじて居る許りで、例へば夫君の地位は上る共下る事は無いとか收入は增す共減ずる事は無いとか、又彼の愛は永久に變る事がないとか、彼が他の女に愛を移したり或は彼の首が切られるなのど心配は無いものと安心して、其まゝ老ひ込み易い、殊に玉の如き愛子を設けた場合などは殊に安心が其極に達して唯さへ靜止不動停滯に陷り易い女の精神的生活がはたと行詰まつてしまふ事が多い。

一方の生長停止と互の隔たり

「生命とは内外の關係に於ける不斷の調整である」ハーバート・スペンサー。

『萬物は流動する』結婚生活にしても日々其環境の變化に順應して其内容を新にして行く事は、即前述の生命の定義通りであり、此際配遇者二人を一の單位とする一個の有機體の生長進化と目做す事が出來る。然るに何事も三々九度と或は又七五三の祝ひに自己の將來は完全に保證されたと考へ易い多くの女性

の内面生活は大抵行づまりになる。日本の文化の現狀では日々無意味な機械的勞働の繰返しに伴ふ多忙が婦人の智的生活を空虚索莫たらしむる事も事實だ、之を氣の毒だと思ふたらば、我々の家庭に勞力と時間とを節約し能率を高める爲に必要な設備を輸入せねばならぬ。併し斯樣な餘裕のある家庭にしても尙離婚や三角關係が時として起るのは何故であらうか。

成程それには暇すぎるから其時にあり餘つたエネルギーが遊戯的戀愛に注がれる事も幾分あらう。併し乍ら私の見る所によれば、大抵の家庭葛藤は妻が家庭生活の安樂固定に馴れて精神的に靜止する、家の外では夫が不絕世智辛い又刺戟の多い環境の中で不斷の生長を續けて行く、即一進一退餘り遠くは離れてならぬ間柄が段々隔つて行く、其揚句男の活動の範圍は廣く其所に又不斷な成長を續けて居るチャーミングな女性にもぶつかつて機會が多いから、單一の相對關係が變化して二つの相對關係の組み合はせに始まる三角關係生じる。そして其緊張が極端に及んだ時に一方のが切れて其所に離婚となる。即三角關係や離婚を惹起す筋道は大抵之であり、其よしあしは暫く論じないが、兎に角不絕平行して進むべき二人が一方の靜止不動によつて全然交渉の無い他人同士にならうとする。此際種々の因襲といふ首環が双方の首に巻附けられてあるから、心の中は他人同士又敵は同士であつても外見上道づれの樣な顔を裝ふて空虚な後半生を過す者は更に多い。

離婚豫防の秘訣

此樣な困難は、第一に女の方で結婚生活は不斷の努力永遠の行進である事を始終念頭において配遇者との相對關係に緊張を失はぬ樣に注意する事、之と同時に男の方では配遇者が天性固定靜止に陷り易い事を常に念頭において不絕彼女を助け勵まして自分との隔りが遙にならぬやう密な精神的接觸を續けねばならぬ。其爲には無論繼續して同棲する事は互の生長を調整し調和を求むる爲に必要であるが、且又單調から來る退屈を豫防する爲に、併せて配遇者の有難味がわかる樣に、時々短期間の別居も望ましい、尙又其一對の趣味にもよるが双方のお望みならだ時々適度の夫婦喧嘩も亦面白からう。併し此樣な事は一々説法は無用と心得るから省略する。

かくあるべき結婚の定義

偖以上述べ來つた事を基礎として一寸七六ケしく結婚の定義を下して見れば、

結婚生活とは、一人の男と一人の女とが、夫々豫め多くの候補者を比較した上で自由に撰み出して我配遇者と定め、そし

て互に同格な事を承認した上で、其後の一生を二人一體として送らうと試みる継續的意志が行爲に表現されたものである。

此結婚生活に對する戀愛

『結婚は戀愛の墳墓である』といふ云ひ方に從ふて、戀愛を解すると、私の所謂結婚生活に入らんとする豫備時代に於ける本人双方の不安や緊張した白熱的氣分と希望に充ちた歡喜等の總和が戀愛と云ふものであるらしい。戀愛至上主義者否寧ろ其追從雷同者とも申すべき人々は、斯様な「戀愛」に出發しない結婚はよし圓滿であり互に理解があり幸福であつても、それは檻に入れられた猿の雌雄の幸福に過ぎないと迄も極言したがる。所で私も戀愛の功德をも認める、否功德といふ様な功利的表現は全然避けて、私自身が其甘くあり又苦い戀の甘酒に死に至る迄浸りたいと思ふた者ではあるが、併し自分が第三者の位置に立つた時には、昔渦中に奔走した時程に夢中になつて、ラヴは人生の始（アルファ）なり終（オメガ）なりと絶叫する事は出來ぬ。如何となれば白熱氷をも溶し自らをも燃し立つべき戀愛の焰を不絶燃し續くべきやうもない、斯く藝術に不朽の跡を留め、後の世の人を悦ばせ且悲ませ、老ひたる人を常にありし日の思ひ出に若返らせ得るラヴは、此人生といふ交響樂の高調である、一度味ふては再び其を繰返し得ない天與の美酒の陶然たる醉の極みである。其は永き人生の中の最も重要な一刹那であり、時こそ短かけれ吾人の一生の焦點に位して居る。熱烈であるが爲に短い、短い爲に麗しい。其故に或特殊な天才例へば八十幾つ迄も不老の戀愛遍禮を續けたゲーテの如きはさておき、世間一般の人間にはさう緊張と不安と熱情と歡喜とが久しく續きさうな筈がない。續くといふなら、其は熱情の小出し月賦拂であり又慢性アルコホル中毒者の果敢ない恍惚であり、我等が一生一代の大事たるラヴといふ其名に相當するものではないのだ。

戀愛は結婚の必要條件か

所で斯様な戀愛が私の所謂結婚生活の必要條件であるか。……否、日本の現狀を廣く見た時に私は其が必ずしも必要でないと云ひたい、そして前に述べた如き戀愛至上主義者が一時の興奮に驅られて、戀愛に始らぬ結婚生活は檻にほりこまれた猿の雌雄だといふた事に對して、斷然反對を唱へる。如何となれば思慮深い兩親や先輩の賢明な撰擇の下に行はれた仲介結婚の多くで、其初めには散文的事務的であつたものが、年月經る内に成長進化して理解同情調和敬慕にみちた理想的 Married love を造り上げた例を眼前に見る事が出來るのではないか。戀愛は

盲目である、其時の白熱は如何なる物質的障害をも焼き盡さねば止まぬ。双方の天性や趣味や教育が非常に懸け離れて居ても其前には問題にはならぬ、緣に上下の隔て無いといふのも其當時の氣分としては如何にも御尤だ、第一それでないと藝術は成り立つまい。併し其の熱がいつ迄續くか、跡は永い後半生の事だ、青春病の戀愛至上熱が醒めてからどうするか。無論播た種は當人達が刈取る外はないから大抵の事は双方で我慢するのが當然なのだが、辛抱の無い又身の程を知らぬ自惚の强い男などは早くも逃出す樣な事もある、中に尤御念の入つた宣言を公けにして新しい求婚廣告に代へる者もある。刹那を重んずる戀愛なら必然の結果かも知れぬが、現狀維持を好む女性が好んで撰む運命でない。斯樣な危險はあらゆる場合に伴ふとは限らないが、今の過渡期に於て唯無自覺にジャーナリズムの鳴物入の騷ぎに浮かれ出す男性の或者は、一世一代の大事業であるラヴの眞意義を解せず其に伴ふ重大な責任を解しない樣だ。理知の尊いものによらず唯獸的接觸慾の衝動發作を恣にしやうとして此耳新しい美名を借りる者も可成あるらしいから、其等に對する女性側の自重警戒を必要とする。

戀愛はあつた方がいゝ

一方戀愛を眞劍に考へる人の中には、其重大と眞劍味におぢけ附いてふぐは食ひたし命は惜しとウロ／＼して居る内に、何か時の行掛り潮時の調子で極無邪氣に平凡に結婚生活の中に入つて平和に納まりかへつてる人も可成多い。斯樣な有樣を目の前に見ると、結婚の前提として戀愛の必要有無は各人の趣味の問題でなからうか。趣味は理屈を超越するのだから、是非ラヴが無ければといふ側の人は御注文通りにせられるもいゝ。併し象牙の塔を出た文學者の樣に、因襲的結婚の空虛に憤慨するの餘り、誰彼の見境ひも無くラヴの美酒を强ひられるのは、世の下戸たる者の聊か迷惑とする所であらう。私自身は矢張御同樣に上戸黨に屬する一人であり、結婚生活の內容豐富な爲には最初の陶醉があつた方がいゝと思ふが、扨誰にでも其盃を押附ける程の勇氣を持合はせない事を殘念に思ふ。

現世の事が第一それから子供の事

扨前述の結婚生活の定義を云ひ直せば、結婚生活といふ此結合は所謂「靈肉の總和たる全人」の遺憾無き合一である。……而して健全な兩性の順當な結婚に於ては其必然の結果として種族保存の實が擧げられる。即我等の望む結婚は現世の事を第一とする、子孫と其將來の事は其上の事だ。之が從來の偽善的行

識者や職業的愛國者や優生學者と自稱する牧畜家と私の說の異る點で、産兒機械として妻を迎へた女大學一流の考を根本から排斥せざるを得ない。何故にさうであるか、之は現代人に自明の事だから今詳くは述べない。

自由戀愛と自由結婚の權利

人は一度此世に生を受けて現れた以來、他人の生命と幸福財産と私はわざといはぬ）とに害を與へぬ限り此生命を維持し此存在を主張し得る權利を持て居る。更に進んで解放の新時代に入つた將來には、私の信念に據れば、誰しも自由に戀愛に醉ひ自由に結婚し得る權利を有すべき筈である。今でも有して居るではないかと問ひ返す人が居るならば、其は其人の考へ違ひだ。資本主義制の荷した重荷の下に惱む貧乏線以下の男女は結婚し得る權利を奪はれて居る、或は又貴族と稱する特殊階級を見よ、彼等は自己の發明した因襲といふ箱の中に窮屈な生活を送り、自由に戀ひ自由に娶り得る權利を奪はれた憐むべき者否自ら棄てた愚な者であるのではないか。

産兒は權利か義務か

然るに一面に於て種族保存にあづかる事即生殖産兒は一體權利か義務か。ブルジョア政府は勞働搾取の爲に貧民共の勞働能率の低下を惹起すと見たら、出來るなら性的享樂を爲すの自由をも奪ひかねない、併し一方に於て過剩勞働を掠奪する爲に潤澤なる豫備隊を備ふべく勞働者間の出産率減退を憂ひて、産兒制限の宣傳を妨げ又は之を禁じ、健全なる兒を多く産む事は國家に對する忠義であると云ふて居る。之では生殖は義務の樣であるが、一部の優生學者が社會に好もしくない連中の生殖能力を取上げる事をもくろんで居る所を見ると、生殖は一種の權利であり世間に迷惑を及ぼす子を出鱈目にへりばなす事は取も直さず此權利の不當行使であり、取締りを要すると見る次第である。

産兒は夫婦の自由

如何樣に七六ケしい法律の術語をふり廻して三百理屈をこねても、結局子供をうむとうまぬとは夫婦の自由である。イヤならうまぬ丈の事であるが、イヤだと申しても今日の避姙法では到底素人の思ふ樣に或は藪醫者が法螺吹く程に自由に行くものでない。若し避姙法が完全に効を奏する時には、女は誰も子を産む事はあるまいなどゝ取越し苦勞をする男も居るが、それは結婚前の不良青年か切り捨て御免の强味を失ふまいとする遊蕩

兒の考へ丈だ。本能的に血を分けた兒を欲する事に於て或は女親に劣る事もある男親でも時が來れば矢張子を求むる樣になる即自分の陷つた誤も避け自分の行ひ得なかつた事をもさせて、自分の限りある一生にやりおふせなかつた事を、其子に自分の分身としてやらせたいと望む親の心は、靈魂不滅の教へに憧がるゝ一本能の尊い表現である。だから自由に任せておいても決して子供をボイコットする樣な心配は御無用である。

產兒が危險有害と期待される時の結婚

斯く自由撰擇・自由戀愛・自由結婚・自由產兒と根本の考へをきめて掛れば、色々の難問題の手掛りも自然つく譯だ。性教育の必要を宣傳し乍ら生物學を修めて居る私に屢々問はれる事は、問ふ人が遺傳學上好ましくない素質を有して居る事を自覺して居る場合にそれでも結婚した者であらうかといふ問題である。成程多くの優生學者は生物學の名によつて斯樣な結婚の禁止を命じて居る、之は結婚の唯一目的を產兒と見るならば。如何にも種馬種牛の掛合はせを支配する調子でさうも云へるだらう。併し乍ら我々は人間であつて牧場の牛や馬でないのだ、人間である以上戀愛の自由、結婚の自由の主張をするは當然である。所で最後に產兒の自由と云ふ問題になると、此世に未だうまれ出でない子供自身の事も考へねばならぬ、即子には親を撰み得る自由も無く親が希望し又希望せぬに頓著無く母の胎内に宿つた以上時熟して娑婆の太陽を仰ぐに至る次第だから、生み落された子が親を恨み呪ふ事のない樣に、且又其子が他人の子を傷けたり色々の迷惑を掛けるのを見て親たる者が堪へられぬ程の苦痛を受ける事の無い樣に、始めから夫婦双方承知の上で自由な產兒の事だから進んで親たるの樂みも之に伴ふ苦みが恐ろしいから放棄して子を產むまいと決心し、尚其上に其決心を實現する爲に確かな方法を執るのは私は至當だと信じて居る。斯樣な難問を抱いて居る人は大抵世に勝れた人に多く、殊に遺傳の恐れありとして居る性質が眞に遺傳性ありや否や今日の遺傳學では尚疑問として居る程だ。其故此際、種馬種牛の樣に人を產兒器械と見做して居る優生學(しかも幼稚な學問)が、よし其結婚を否認したとて、結婚が夫婦互に其事情を理解した上の同情で築き上げられるのは、双方の先見と思慮があるならば寧ろ望ましい事、又禁じやうとしても禁じ得られぬ事柄である。

離婚の解決

次に離婚の問題であるが、之は前に繰返したやうに、始めにろくに考へもせず撰みもせずに人から強制された結婚や、一時

の空騒ぎに五色の酒や親鸞上人やと同じ様に流行物のラヴの名にかぶれ「浮氣は其日の出來心」とはまり込んだ『戀愛』や、之等の後始末の離婚沙汰ならばブッキラボーに申せば身から出た錆なのだから、御當人同士で離れる共逢戻る共それは御自由だ、併し大抵の場合双方共自惚タップリ自分の悪い所を棚にあげておいてもつと好い相手と要求される積りなら、それは悪い根性だ少しでも妥協調和の路出しが築かれたのなら其まゝ双方共我慢しておき給へと御忠告申上げる。但し理屈で行かぬ行張りと感情の食ひ違ひもある場合には、さうも行くまいからどう共御自由におやり遊ばせ。

扨其次は私のいふかくあるべき結婚の條件のあてはまる様なものであり乍ら、光陰の移り行きと共に双方の歩み方が段々隔たつて來て終に其がごまかし切れぬ程になつた場合の事だ。元來科學は世界を狭くしたと同時に時間をも縮めたのだから、吾人の一生涯は目まぐるしい變化に富み昔人の一生に幾倍する様な内容を具へて居る。昔の人がまあ〳〵と棺に入る迄我慢して居た事でも我々なら十年二十年もたゝぬ内にぶつかつて双方共に目を白黒しなければならぬ事も起り得る。元々世間で誰もが生存競争の驅足をして居る以上、日本の「奥様」のやうにさゝえの殻に閉ぢ籠つて居てはとても今日の日も過す事は出來ぬ男や又一部の女は、こつちが足弱でも驅け出さねばやつて行かれぬのである。同じ家の棟の下で雨露をしのいでも住む世界がかけ離れて來ると、路傍の人同様になる。更に進んで之が氣まづい誤解や取返しの附かぬ出來事の生じた事の爲に、敵同士の様に互に白眼をむき合ふ様になつた時はどうか。一體かう云ふハメに陥つてから今更妥協や調和が出來る位なら、始めから不和や隔りが生ずる筈が無い。所で世間の口の端に掛るのがうるさいといふのなら、まだ世間がこわい内だからやさしい、家族の手前恰好がわるいといふ内ならまだ解決も出來る。併し其不和が公けになり、子供の前も憚らず親が互に敵視する程になつたとすれば、もはや一刀兩斷の外はない。子供としても冷え切つた家庭の中で敵視を傍觀し或は敵對行動を仲裁し或は一方に同情して加勢應援しなければならぬとすれば、彼等の將來にとつて非常に有害である、其時は速に其後双方の獨立生活を出來る丈幸福にやつて行ける様に物質的要件を公平に按配した上永久に分離するより外はない、此場合彼等の結婚生活は極めて短日月の内に充實し終り其使命を果し終つたのは悲しむべき事であり、彼等が元は具へて居た同情調和共働を失ふて硬化し終つた事は悼むべくも又是非無い事である

斯様に述べた例に漏れた場合はもはや議論の餘地も無い不合

理なものであるか、又は明白に合理的なものだ、例へば某女史の家出と離縁狀叩附け事件の如きは空虚な唯一片の形式に蓋はれた内容の曝露に過ぎない。

多角關係は實際不可能

藝術家であるが矢張文筆勞働者である事を免れぬ小說家が、食はんが爲にやむを得ず其所此所の雜誌に原稿稼ぎをおやりになる有樣を横から窺くと、舞台次第で一生懸命にやつたり好加減に見物人をなめて掛つて調子を下げて掛つたり、仕振りこそ變るが、極少數の天才は別として大抵の御方は同じ事を色々に云ひ直して居るのに過ぎないやうだ。男の考へ方を實驗心理の方で女に比較すると隨分趣異性に富んで居て單調でないといふのだが、或一時期に或人の頭の中を占めて居る事件はさう〱多くない事は、小說家の樣な天才文學者諸君の作品に徵してもわかる。斯樣な天才に於てさうなのだから、まして我々一般俗人がさう〱同時に頭を多方面に働かす事は實際不可能である。よし一見して多方面の活動をして居ると思はれる場合でも、其眞相に立入つて見ると全力を注ぐべきものと他をきつぱり區別をして、精力を注ぎ熱中するのにそこ宜しく手加減が自然に加はつて居る事を發見するのである。

三角關係が結婚前後に於ける違ひ

扨斯樣な人間の生れ付の傾向が戀愛葛藤の三角關係の中に演ずる役目を見るに當つて、結婚の前後によつて非常な相違がある事を注意せねばならぬ。但し此際前後と云ふたが何の前後であるか、之は人々の趣味や信仰によつて異なり簡單なキスだとか相互の童貞の終結とか人前の披露の結婚式とか又は事後承諾の要素である懷姙とか色々であるが、兎に角に當人二人が認めて一時代を區切つた其出來事と思ふものを指しておく。所で其前に於ける愛人同士は唯希望に充ちた歡喜に恍惚として周圍を忘れ過去と將來とを沒却した現在に醉ふて居る許り、拘束も無い壓迫も無い何一つ浮世の苦勞も皆其瞬間に忘れられてしまふ。其瞬間と云ふたが、瞬間が事情によつては一日となり一週間となつて次の瞬間に移る事となる。其時は大抵誰でも暴風激動期なのだから、事態が確定した樣で其實不安定であり、次の瞬間に入つて更に力強い異性の出現肉迫に逢ふと又新たなる歡喜と希望が生ずる事も起り、其各々の瞬間に時間の前後事の因果順序を忘れ果てる白熱火の中に沒入する。斯樣にして生ずる戀愛の多角關係は其實時間の考へが其都度に消し去られるから、各々の瞬間に於ては純眞な單一の相對關係であり、唯困る

事には前後の瞬間が、互にはずれて一對一といふ様な例へば二人のますらをに云ひ寄られて煩悶した茅原乙女(ちはらおとめ)チレムマに及んだ時。池に投じて双方に義理を立てるか、義理といふ様な古臭いものに目も呉れない現代人ならだ是か彼かに手を差延べて立所に三角關係の埒を明けてしまふ。大抵話は結局の所此所へ落ちるのだが、それでは小説なら原稿に書くのに短か過ぎるから引延ばしてある許りの事である。即戀愛に於ける三角關係は、本來戀愛なるものが、瞬間的の火花である以上、永續するものでない、そして其孰れにして當人二人が進んで飛込んだ事業なのだから、傷つくのも得心づくだ、第三者が兎や角心配しても左右し得られるものでない。靜電氣に譬ふれば陰電氣を負ふた一點に對して陽電氣を荷せられたAＢの二點が對立する様な場合で、電位差の最も大い方とパチと火花を放つたが最後事は終つてしまふ、即戀愛に於ても生存競爭自然淘汰が行はれるのは此世の中の常法であり如何共致し難い事を誰でも會得しておく事は肝腎である。

生物學上男女の根本的相違

結婚に於ける三角關係となると、前のが瞬間的であり第三者の干渉を容れる事が出來なかつた微妙のものであると違ひ、繼續的であり又多少共當人二人許りと云はず第三者に影響を及ぼす程の對外關係を共へて來て居る。所で其を述べる前に先づ生物學から見た男女本性の相違を考へておきたい。

すべての動物に於て、卵は大形であり營養分を豐富に貯へ一所に靜止して精子の進入に對して居る。一方精子は小形であり體の大部分は運動器官であり活潑に運動する。此雌雄兩性の生殖細胞の形の迄では人類許りでなくあらゆる動物の兩性の性質を象徴的に現はすものと見做してよからう、即女は守成的建設的、男は攻擊的破壞的である。そして人類に於て男がよし教養に富み豐かな自制心と努力精進の志を有して居る人でも、矢張心の底に多妻主義的傾向を秘めて居る事は、よくもあしくも斯様な生物學上の普遍的事實なのである。

男達の考へて居る事

其等の男同士が語り合ふて居る時は、愛を求める男が愛人の前に出た時の樣にオツ〱しても居ない、又多くの識者の記された婦人雜誌向きの原稿の文體の如くしかく他所行の慇懃鄭重さもない。彼等の會話は私の此文の如く『あらまあ隨分だわ』である、粗野である代りに至つて簡單明瞭だから時間も空費せず誤解の生ずる事も割に少い。其男が妻としての異性を現にど

う思ふて居るか。私は彼等の心中を推測して次の様な譬へ話を作つて見て、色々な境遇にある男達に其觀察の正しいか否か、意見を叩いた。多くの男は卒直に其が自分の思ふて居る通りだと答へた。其内の或者は附加へて曰くさうは考へて居るが色々境遇の都合で實行しないか又は行ふ事を制して居る丈の事だと云ふた。少數のピユーリタンは默して答へない、恐らく言語同斷の女性觀だ、緣無き衆生度し難しと許りに匙を投げて居るのだらうが、扨、眞正面から駁論を叩き付けて來ぬ所を見ると、彼等も或は心ひそかに此解釋を是認して居るのかも知れぬ。

「すべての人は、彼の胸中に於ては、性的犯罪者である」獨逸の犯罪學者ヴルフエン。

所で次の譬では、配遇者をだ物もあらうに、生命も無い一個の物品になぞらへとあるから、『解放された婦人達』から途方も無い女性侮辱だと柳眉を逆立てられさうで甚だ恐ろしいが、男といふ劣等な動物が實際さう思ふて居るのなら不愉快でも一應參考の爲にお目に掛ける事は必要であらう。かういふ風に觀察して居る男が多いといふ丈で、此見解が正しいと私はいふ者でないから、私がお叱りを受けぬ様前以てこわ〲お斷りしておく。

譬へ話　第一　字書としての妻

多くの男にとつて妻は書齋に常に備へ附けた大字書か百科字典である。妻以外自分の心を誘ふ女性はたとへば詩集小説のたぐひである。

スタンダード字書を座右に離さぬ彼は、愛用すると云ひ乍らＡＢＣと各頁を順に一々目を通す譯でない。息もつかずに字引を始から終り迄棒讀しやうと試みる馬鹿も無い、よしあつても終り迄續くものか。併し通讀しないから尊重せぬかと云へば、決して〲、もし泥棒なぞにさらはれたら早速『字書ヤーイ』と鐘太鼓で探し廻らねばならぬ。愈々紛失したときまると、今更に字書の有難味が肝に銘じて、或男なぞは『失ひたる字書を惜む』小冊子を自費出版してありし昔に其を粗末に取扱ふた幾分の罪滅ぼしにしやうとした。併しいくら惜んでも返らぬものは仕方が無いから、やがて字書第二世を探しに出なければならぬ。男は欲の深い動物だから、前のよりも新版で内容の豐富なものをと注文するが、やがて注文通りのものが手に入つても兎角逃げた魚のが大きくて、前に紛失させたものと比べて難癖を附けたがる。例へば前のは裝幀は粗末だつたが内容が豐富であつたのに、今度のはイヤに天金や革表紙許りケバ〲しくて其割に中味が空つぽだなどと小言を云ふ奴も居る。併し中味も見ず初手から天金革表紙に惚れ込んだのは自分なのだから、今

更事新しく小言も云はれた義理であるまい。字書でも銘々特長があつて、慣用の符號とか分類排列の順序を充分飲込む前は自由に使ひこなす事が一寸六ケしい。他の或男の曰く字引が手馴れる迄には少く共十年は掛る、俺の年配で之から十年も其爲に費やすのは損だから字書無しに辛抱しておくと云ふた。此述懐を聞かされたのは或有名な漫畫家であつた。無遠慮な男の中でも特に漫畫家は無遠慮鐵面皮な者だから、早速それでは字引なしに今日の時世をどうしてやつて行けるかと御面一本參つた所が、鐵面皮な點で其漫畫家以上の男も流石に顏を赤らめて、それはね小説といふものもある世の中だからとお茶を濁したさうだ。小説をコツソリ讀んで字書參照の代用にしやうとは太い根性だが、此太い根性がなければとても世智辛い世の中で男爵や大臣になる事は不可能だらう。

譬へ話　第二　小説としての女性

小説といふものは本來食ふに困らぬ者が過剩エネルギーを處分したり退屈紛らかしに道樂に讀むもの　と私は近頃考へて居る。もつとも或論者によれば、眞の藝術品は食ふ物を食はず共之さへ味はへば命が繋げる、否死んでも本望だといふが、私の様な俗人は矢張侍の子でなく素町人の子だから腹がへつたら無論ひもじうござる。して又命に執着があつて犬になつても豚になつても此世に生殘つて居て、昔虐げられて居た民衆が段々勃興して行き、石に挫がれた雜草がむく／＼頭をもたげる一陽來復の春に廻りあひたいとひたすら此世にしがみついて居る次第、元々藝術は閑暇の産物ならだブル藝術のやれプロ藝術のと喧ましい近頃のワン／＼騷ぎは之も亦暇つぶし、就中ブルを撲殺すべしなどゝ犬殺しめいた絶叫は正氣の沙汰と思はれない。閑話休題

扨男が暇つぶしの爲過剩エネルギー處分の爲讀まうとする小説は、此世の中に數へ切れぬ程存在して居る。頑固な人間共は、此澤山な小説が目障りだから、「男は小説ヲ讀ム事ヲ禁ズ、之ヲ犯ス者ハ……」などと脅かす様な仕掛けで以て小説道樂をやめさせやうともくろむ人も居る。又秦の始皇帝の様に小説燒の計劃をする蠻勇家もある様だが、小説を濫造させる様に出來上つて居る目前の經濟組織を叩き直さなければ、世に小説の種はつきめえ。

斯様に多い小説は孰れも用不用を超越した贅澤品だから、實用向の字書よりも裝釘が美しく且變化が多いのは當然である。之が個性の發達した文明國であると各々特色を發揮して皆各々自分を讀ませやうと中には人を脅かすやうな警戒色迄塗り添へ

て、我こゝにありと許りに頑張るが、日本の様な（兵教授の語を借れば）模倣專一で個性を沒却した半開國では小説迄が何かなしに流行を追ふて、布がはやれば布許り、ポプリンならどれも之もポプリンと耳かくしや市松模様と同様に無自覺な人眞似をする、或表題が人氣に投じると其をもぢる、本でも女性でもお化粧になると變りがない、生物學上の擬態保護色に相當する現象があり、針ももたぬ蠅が蜂の様な形を裝ふて人を脅かす様に、内容のつまらぬもの程仰々しい道具立や紙數でおどかすものもある。人の好奇心を唆る爲に態とアンカツトといふ様な面倒な仕掛けをして、金を出して買はねば中味が容易に知れぬやに仕組んである。切らねば讀めぬ綴ぢ方で表裝の美しい物程油斷がならない。好色な男が童貞追究を樂みとするは好書狂がアンカツト頁を竹刀で斷つ時未知の國を開いた様な悦びを抱くに比ぶべきものであらうか。此際小説愛讀者の中には、つまらぬ小説でもアンカツト頁を切斷するのが樂しみだといふ人と、そんた面倒な事は御免だ人の讀みさしでもいゝから内容のシッカりした物を希望する二型がある。

扨此小説の讀み方を見れば、元來遊び半分に讀むものだから無論寢轉んで讀む、端座して讀まなければならぬ様なカチ〳〵の物は始めから相手にしない。所で寢て讀む内に二三頁でこいつは「つまらないとほうり出すのもあり、すつかり捕虜になつて幾日幾晩夜の目も寢ず食ふものも食はずに讀破するのもあろ。併しいくら熱中しても尋常の心理を持合はせて居る人ならば、其愛讀の小説が氣に入つたからとて字書の代りにしやうとする事もあるまい。情に厚い又生活に追はれぬ人なら愛讀書は書架に載せておいて時々取出して表紙を一瞥してあゝ此本は面白かつたと昔の氣分を思ひ出す位な處だ。更に貧乏な讀書人になると讀み殻はすぐ古本屋へお拂下になり、其資本に更に若干の追加をして、又新刊の小説を求め之に新しい刺戟與奮に得且新思潮に觸れやうとする。

此の小説道樂が少年時代に始まる時は、世に字書といふ重寶な物がある事を知らずに、唯小説の新刊をのみ漁り求めるのに汲々として一生を過ごす事もある、之が所謂ドンフアン生活である。

女には小説を讀む權利がないか

斯様な見方が、新時代の賢明な女性の御氣に入ると入らぬとに頓著無く、現代日本に於て多くの夫たる者が公けに行爲として外に表現し或は心潜かに抱いて居る所の、妻としての女性觀である。妻たる婦人は如何に夫たる男性を觀察してるか、其

は女性側から卒直な突撃を試みられなければ我々男子には判明しない。

所で此聲を聞いてうなづいた一人の男は、然らば妻として女は小説を讀み得る權利を有して居ないかと反問して來た。私の見る所によれば、元來斯樣に配偶者の人格を認めずに物品視する事は、此配偶關係の成立がさういふ唯物性を帶びて居る不當なものだから此結果として生ずるので、かくあるべき結婚生活が一般に普及すれば斯樣な不都合な見解は自然消滅をなすのであらう。併し乍ら唯今眼前の過渡期に於て今迄虐げられた女性が覺め始めた時反動氣分で、何でも男の眞似をしたがる。出もせぬドラ聲を絞り出さうと試みた政談演説は無體な男の爲に野次り倒されるが、若し女でも小説を讀まうと一念發起したならば(實行に入つた人もあるが)、それは物好きな又道樂氣の多い男性の事だから、小説候補者は乏しくない。斯樣にして戀愛を玩ばうと試みるのは其方の自由だが、一寸前以て御注意を申上げたいのは前述の生物學的男女の相違の事である、即解放は解放でも、解放された本性は男のそれと別物である、別な本性を展開活動する際に男のそれを無自覺に模做するならば、それこそ三本毛が足らぬと口の惡い男に罵倒されるばかりでなく、飛んでもない悲劇的運命に陷る樣な事になりますぞ。

現在の結婚制度

一體こんな色々不屆な見方が生じるのは、此世間の我々の眼前に存する多くの家庭生活が不屆なものであるからなのだ。不屆な物を見て不屆な解釋を下しても當然で、別段當方が不屆だとお叱りを受くべき理由は無い筈である。

私は之迄かくあるべき結婚生活の諸要件を考へる許りで、目前の結婚生活の實狀は餘り云はなかつた、併し乍ら今此所に其に評價を加へなければならぬ。

現代日本に於ける多數の結婚生活は、私有財産制の一變形であり、夫といふ占有者が、妻と名づくる家畜を養ひ、之を性的快感を得る爲の機械として用ひ、又同時に之を腐らずに食物とする場所である。(非科學的庖厨生活の內に妻の血肉をそぐ事は、取も直さず彼女を食ふ事になる)、妻を機械から昇格させて奴隷だとすれば、結婚生活は夫と稱する主人が、妻と稱する奴隷を飼ひ、此奴隷をして晝は家事を處理せしめ夜は寢室の世活をさせる事であり、疑ふべくも無い一の奴隷制である。家畜ならば系統が判然して勝れて居る程買ふ時高價だ、奴隷ならば柔順勤勉である程高價である。家畜にも奴隷にも人格は無いが、唯作業能率を高める爲に調教を試みる、此調教訓練を稱し

て良妻賢母教育と云ふ、但し此調教者が餘り有能でないから、名前の看板とは正反對に奴隷制から見ても牧畜術から考へても能率の低い物許りが生産されて、實際は愚母惡妻教育になつて居る。近頃之ではならぬと流石感じの鈍い牧畜家や奴隷養成者も頭を惱まし始めたが、調教能率を高める爲には先づ第一に人格を認めなければならぬ、併し飼主や主人と同等な人格を認めるとすれば、現在の私有財産制や奴隷制が根本から顚覆する即彼等の語を借れば祖先傳來の醇風美俗が破壞されるから、痛し痒しで大煩悶をして居る。併し下手の考へ休むに似たり、煩悶して居る内に家畜も奴隷も自覺して差別待遇撤廢を要求する樣になつた。本來此制度の下にあつては「分際」といふ語が喧しく云はれて、「女子の分際」で（即家畜の癖に、奴隷の癖に）男子（即飼主や主人）と同じ物を食ふのは生意氣だとあつて、特に家畜向奴隷向の食物が準備してある。之が女學校教育と婦人雜誌と稱する物であつて、飼主と主人が御免を蒙り匙を投げ辟易した低級下劣の材料許りが振向けられてある。併し家畜扱され奴隷視されて差別待遇を受けても、結局女は人間であるから自分で自由に人間の要求する物を撰むに至つた事は悅ばしい事である。但し一部の女には家畜根性と奴隷氣質の名殘が殘つて居て、特にいたわつて貰はぬと虐待された樣な僻み根性を起す者もあるが、全く同格の者なら殊更に「御婦人」とか「お女中」とか御機嫌を取る必要はあるまい。男が單に男なら、女は單に女と呼ばれて別に侮辱を加へられたと思ふに及ばぬ。

奴隸持主の心理

昔の世間の誰もが人のよい頃には此物は某の所有と札を立て置けば、先づ誰も手を出さなかつた。性的奴隸制では燒印を押す代りに、お齒黑を塗らせたり丸まげを結はせたり唇の廻りに入墨をさせたり、種々の形式を以て斯樣な占領濟の廣告をしたものだ、現に何々ホテル何々軒に於て催ほされる披露會は進化した形式を具へた家畜飼人廣告である。斯樣に披露した上飼入れた家畜が時として飼主の氣に入らぬ場合には、すぐ遠慮なく野原へ放逐して新鋭の者を求めて再び披露をするか、又は勘定高い飼主になるとそんな無用の出入に出費は面倒だ、之も節約の時節柄で古い家畜は其のまゝにしておいて新しい實用的のを今度は廣告せずにコツソリと飼ひ始めた。それから此の牧畜家共が更に團結して何とか階級とか云ふ一大トラストを形成する段になると、飼主が自由に家畜を撰む權利を有しないで、唯其トラスト全體の利益と繼續を圖る爲に幹部が撰んであてがふて呉れた種牛種馬のお守をしなければならぬ、併し飼主でもす

きな家畜を摑みたいのは山々なれど、出鱈目に餘所から買つてくるとトラスト全體の家畜の尊い血統の純正を傷つけるといふので、やむを得ず辛抱して居る。若し自由撰擇を斷行しやうとすれば其牧畜トラストから除名せられるか又は自ら進んで脫退しなければならぬが、大抵は飼主迄が家畜の氣風に同化されて順良に去勢されて居て其まゝ長いものにまかれてしまふ。トラスト員は、大抵其組織で漁り得た暴利の分配に與るから、生活の餘裕があり過ぎる程だ其所で牧畜の相間には音樂を味ひ歌や畫を描いて見たり、中にもオツチョコチョイの飼主共はつぴをきて公園に飛出して來て下司下郞の眞似をして草むしりをしては、世間の物笑となり又トラストの親玉から睨まれる種をまいて居る。どうせ氣まぐれにあちこちと浮氣をする發作だから、音樂でも畫でも生物學研究でも草むしりでも長續きはしないが、（小人と申しては失禮千萬だが）閑居不善をなすのとは事變りいづれも至極結構な道樂だ、道樂を自慢にして仰々しく恩に着せたり廣告をさへしなければ、吾人トラスト外づれの人民でも別段抗議を申立てる必要を感じない、且又其退屈に苦む惰眠生活に燒餅やく程のさもしい根性はないのである。

家畜數の制限と其所有權問題

利己主義から出發した私有財產制でも、飽く事のない私慾が社會聯帶感（ソリダリチー）に衝突した際多少の修正を必要とする。俺の儲ける事に何も干渉は無用だと資本家は頑張るが、結婚といふ名を冒した此牧畜事業に於ても元は家畜を飼ふ實力さへあれば（甲斐性さへあつたら）幾頭でも飼ひ放第であつた。遠く支那や土耳古の牧畜業を引照する迄もなく、偐紫田舍源氏でも、何百といふ數を養ふたとあり、よくも一人の飼主で手が廻つたと驚くが實際其飼主の下に準飼主とも云ふべき者があつたのに相違ない併しそれも昔の物語、今文明の昭代となつては斯くも多數の家畜を一個人で占領するのはいかんと云ふ事になつたが、それも表向き丈で矢張飼ひ次第、又『犬になつても大所の犬』といふ樣な家畜根性で悅んで其橫暴な飼主に走る家畜も居る。が表て向丈でも餘り多く飼ふのはいかんとなつたのでも、斯樣な怪しからぬ牧畜業や奴隷制が漸くに廢れ行く微候と見る事が出來る。

所で何にせよ強迫抑壓を加へた上で占領した家畜や奴隷の事だから、鞭を用ふるのも適宜以上を越えると如何に柔順な者でも他の牧場を出奔したり他の飼主の懷の中に飛込んだりする事もあるが、元來此の樣な事が何所でも行はれるとなると、世間一般の牧畜業と奴隷養成組合が根本から崩潰するから、皆總掛りで斯樣な不心得者を袋叩きにする事にきめてある。併し矢張

我利々慾性の寄り合の事だから、よその牛がおとなしく乳を多くとれると聞くと、コツソリ家畜を取替て見様などと非望を起し或は其計畫を實行に移したりして不絕飼主相互間の內輪もめが絕へない。殊に昔は某の飼牛と札をぶら下げてさへおけば誰も指一本も出さなかつた者だのに、末世濟季の今日になつては占有慾迄が變態性を帶びて來て、態とさういふ樣な札付の家畜のみをねらふ不屆きなよその飼主が頻々出來てきて、所有權爭ひが喧しくなり、之と同時に飼養家畜の「人道的」取扱ひも云々される樣になつた。

所謂「三角關係」といふのは此所有權爭ひの事で、『生活改善能率增進』と稱する策の一部も奴隸の『人道的』管理法の事であらう。人は筋道立つた事業を行ふて居る時に何等辯解を必要としない、唯何か不都合な後暗いする時に限つて『人道的』だとか『正義の爲』だとか一種のお念佛を唱へる、如是畜生發菩提心、いひわけやお念佛を、口にする丈まだしもしほらしいのである。

それから牛の乳を絞る時に、清潔な牧舍で蓄音機音樂を聞かせると平素より乳を多く出すのだが、近來特に云々される上すべりの『文化生活』も此類の勞働搾取法でなからう。

結婚の三角關係・理論上存在不能

扨斯樣な現在の悲くも亦馬鹿〳〵しい有樣から振返つて、私の云ふ『かくあるべき結婚』に戻るならば、其は其本人二人同士互に他の中に全部沒入して不絕變化調整を續ける狀態其物であり、戀愛の如き瞬間に完結終了するものでないから、始めから他に發展すべき自己の餘裕が保留されて居ない。即理屈上結婚の三角關係が出現する事は不可能である。蓄妾の如きは始めから奴隸制ときまつて居るから、三角關係なぞの內へはてんで入つてこない。今若し一人の男或は女を中心として二人又は其以上の異性が渦き廻つて居る時に、戀愛ならば瞬間的に事は決する、其中の一が眞の結婚關係である場合に他との聯絡が又同樣に眞の結婚關係の如き觀を呈して、其三角關係が繼續するならば、其等の關係はもはや眞の結婚でなく又もや昔からの奴隸制に戾り墮落したものである、即一が征服者となり主人となり飼主となつた場合に於てのみ三角又は多角關係は可能である。一人の僕は二人の主に兼仕ふる事は出來ぬが、一人の主は幾人でも僕を養ふ事が出來る。一人の飼主の周圍に數多の家畜が遊んで戲れて居ても、其は單に性的牧畜業であつて、飼主が男たると女たるとを問はず、眞の結婚は其多角關係の開始と共に消

滅する、即言を換ふれば單數の對等關係が消滅した瞬間に一個の主人を中心とする複數の主從關係が發生する事に外ならぬ。

現實曝露は改造の準備

所でかく理想論を高く振かざして絶叫して見た所が、目前の牢獄と小說と家畜と奴隸とは依然として舊態を改めない。私は之等女性の自重心を傷つける樣な色々の比喩を用ひたが、現代日本の虐げられた女性の爲を思へばこそ、此樣な率直な現實曝露を試みた。呪ふべき賣笑制を痛擊し之を支持する資本制度を憎んでも、此制の犠牲となつた憐れな我々の姉妹を決して責める事は出來ない。我々眼前の性的奴隸制は即普遍的賣笑制であり、之の撤廢を圖る爲には女性自心がパンを求むる方法を根本からやり直さなければならぬ。其爲の改造である、改造とは背景張りや其日逃れのごまかし細工の事でないのである。

まづ第一に自己保存

あらゆる生物は自己保存を先づ第一の仕事として居る。人類の女性も亦第一に自己保存を圖らなければならぬ、現在の人間として生を續ける事が不可能ならば、是非もないから奴隸に落ぶれ、家畜に成下つても構はぬから、まづ生物として取不敢日

己の存在を全うするといふのは、男女の性を問はず誰でも同情すべき事であり決して非難すべきものでない。常盤御前は清盛の奴隸となつて僅に自己と子供達の存在を全うした。世の多くの女性は二十世紀の今日に於ても尙或意味に於ての常盤御前ではないか。

一夫一婦制と一時的變態

世界大戰の後多くの壯丁を奪はれた獨佛英の婦人連の間に一種既成道德に對する懷疑の念が起り、其或者は實際行動を以て寧ろ多妻制を是認するかのやうである。ストープス女史の著書によれば、濠州では戰死者の寡婦の團體Sisters in Motherhoodと稱するものが、國家奉仕の唯一の方法は母となる事にある、所で多妻制は道德に悖るから性交によらず、科學的方法を以て優良な男の精液を集め人爲姙娠の法によるなら自己を國家奉仕の爲に捧げると決議した。斯樣な異常の出來事は、矢張皆婦人自身が自己保存慾を異常の外界に適應せしめんとする試みであり又多妻制の下に衣食足りれば寧ろ家畜となつても悠々其日を過したいといふ心持もある。純粹な意味で婦人の自立は今日の社會制度の下にあつては不可能なのだから、之等の煩悶と努力とは當然であり且又同情に價する。理想家に云はすと、一度覺め

た女が自ら斯様な恥しい多妻制に降服し奴隷に退化して迄も生にかじりつくより、寧ろ人間として尊厳を保つたまゝ自殺した方がいゝとするのだが、成程それなら詩になる、藝術品になりもしやうが、人類の社會全體は一體どうなるか。私は生温い唯物論者だから、矢張生存第一である。家畜となり奴隷となつて生を續けて行かうとする執著が有難い。現に我々の國内丈を考へて見てもわかる、啓蒙といひ解放といひ此熱心た運動が若し有効であつて、日本の女性全體が一度に覺醒して『人形の家』のノラの如く一齊に家出したら、其日からすぐ殆どすべての亭主は飯を食べさせて貰ふ事も出來まい。若し彼女達が皆ユーヂツトの様に短刀を懐に斷乎たる決心をしたならば、其翌朝多くの夫は共ふしどに屍となつて發見されるだらう。若しルクレチアの如く彼女達が自己の辱を憤つて自らの刄に倒れたならば、我大和民族は一朝にして種切れになり僅に史上に其名を留めて永久に滅びてしまふだらう。幸か不幸か吾人の解放運動は此様な効果に至らしめる程に有効でない、またあらゆる女性が小説家の描寫する程に藝術的でないものも勿怪の幸ひである。

結婚生活は經濟現象

一體私の云ふ理想的結婚にしても、之が繼續的狀態の問題であり、我々人間が霞を吸ひ霧を食ふて居ない限り食物を食ふて生きて行かねばならぬから、勿論衣食住に就て種々の經濟的要件を具へなければならぬ。まして今日の世間一般の性的奴隷制では徹頭徹尾衣食住の問題許りで、僅に戀愛至上主義の絕叫で其乾燥無味な所に幾分か色彩を附けやうと企てゝも、すぐに其メッキがはげて興醒めな現實の殺風景さが現れる。即此意味に於て今日資本主義制度の社會に於ける結婚は、純粹の經濟現象であり、衣食住を超越した藝術味なぞは到底求めて得られるものでない。得たと思ふても其は束の間の幻である。得てゐると信ずるのは頭の惡い自己瞞着である。

一夫多妻制は一時の變態

故に私の云ふ結婚生活は絕對一男一女間の關係であるが、一方純粹なる經濟現象としての世の所謂結婚に於ては一夫一婦は永遠の鐵則でない、唯生物學上の原則として男女の數が略同數であるから一對一の關係が維持されてゐる丈の事で、例へば大戰の歐洲各國の如く結婚可能な男女の數に俄に不平衡が生じると忽に男に寄生せねば生きて行かれぬ哀れな女達は棘ある良心も矜ある自重心も打棄てゝ食はせて呉れる人に依り頼まなければならぬ。妻となるは女として最も安定確實な生活法である、妻

となる事が出來なければ妻に準ずる形式でも命あつての物種だから我慢する。此様なドン底に戀愛至上至上主義も何もあつたのでない。今若し又斯様な大戰が時々起つて數多の壯丁を遠慮も無く大砲の餌食とするならば、男女數の不平等が可成永續して或は一夫多妻制が今ある性的奴隷制に於ても是認される事もあらう。併し乍ら生まれた人間の中から特に男のみを奪ひ去る様な戰神の末路が實際來たといふならば、我等が今歐洲で見やうとする様な一種の一夫多妻制は本の一時的存在をなす許りでやがて二三十年もたてば昔の通りの一夫一婦制に立戻るに相違ない、如何となれば我等の細胞學の或信ずべき假說によれば、人間の性決定は卵受精の刹那に決定される、そして人間では卵は性決定に沒交渉であるが之に對して二種の精子がある。一が卵に入れば男となり他が赴けば女になる。此二種の精子は常に數學的正確さを以て同數生ずるのだから、男女の生れ出づる比例は常に一對一である（戰後に男兒が多くうまれるといふのは法螺だ）其故よし今の不平均があつても、やがて其も元の平衡に歸するのは生物學上の鐵則なのである。

父を確かめる必要上の同棲

資本主義の下に行はれて居る此性的奴隷制は斯くの如く簡單な數の比例によつて機械的に支配されてゐる。尙其上に一夫一婦の繼續的同棲を必要とするのは、生まれた子に對して扶養者たる父を確かめねばならぬ其事である。母子の間柄は昔自然人の生活に於ても本能的に密に繫がつて居た。群民の中の亂婚から族長制度に移つた時分が事業の後繼者として又助手として子を求めたが、掠奪征服によつて得た多くの母によつて生ませた子との間に眞に血統上の連絡が確め得らるゝ事は其時の父たる者の智情共に要求する所の事であつた。今吾人の『文明社會』の一夫一制婦に於ても夫が妻の貞操を追究するは、當然の責任者たる前に責任と義務の生じ來つた順序を確かめやうとするのにある。多くの利己的な男性は、其責任をいづれに歸してよいか疑はしい場合には極力逃げやうともがく、子を抱へて自立の力がない哀れな女性は其際最も信頼するに足る男の足元に跪いて訴へる。此時彼女の訴の根據ありなしに關係なく其信頼に感激していざ引受けやうといふ寛大なる男は極めて稀だ、斯様な性分が男子に特有なのだから、女性として危險千萬な一婦多夫制を執るよりも自己保存に確實な一夫一婦制に依頼する方が頗る賢明である、之をば私は婦人貞操の利己的（婦人の立場から）存在理由であると見る。即經濟生活としての結婚は斯く一夫一婦制を以て必然の事實とする。

將來或は同棲は無用か

然るに將來に於て此關係は變らぬか。現代の血清診斷學の進歩は異種動物の間の血緣關係を數量的に確かめるのに成功した（生物分類學に於ける蛋白反應）。其原理を更に進めて今父が不明な場合に其子と數多の想像上の父との血淸間に凝集反應を試みて、眞の父を決定しやうといふ企もある。當分其成功は疑はしいが、原理に於て有り得べき事だから、將來技巧の進歩と相俟つて此豫想の實現されるのは唯時間の問題であらうと思はれる。若し父子が必ずしも母との繼續的同棲によらず其確かめ得られるならば、是非共、家を立つべき必要も失せるかも知れぬ。又婦人が男子の專制の下に降服せねば自立出來ぬ様な今日の經濟組織が他の合理的なものに進化した曉には、其時こそ私のいふ理想的結婚生活が世間一般に實現される時であらう。

我等何をすべきか

然らば其理想實現の爲めに我等何をすべきか。答に曰く、結婚生活は其根本に於て經濟生活である以上、其理想の實現は經濟的手段による外はない、革命か漸進か、其は各人の信仰に任せておく。

斯く將來に對する方針は定まつたとしても、今日の我々の結婚生活はかくあるべきものといくら注文して見た所が、周圍が周圍だから到底不徹底たるを免れない。人の心理にも惰性があるから、奴隸を解放しても早速に奴隸根性は拔け切らぬ、拔けぬ所に人間らしい所があると我慢する事だ。何事も一足飛びに行かぬから、まず古き革囊に新しい酒を盛らう、中には弱りはてた囊がはち切れるのもあらうが其は同情に價ひするとしても詮方無い、何しろ酒ばかり新しくても新しい囊がまだ用意されて居ないのだから……。今我々のなし得る事は内容を變へる事だけである、外形を改めやうとしても其は膏藥張りかごまかしに過ぎない、ごまかしでない法を執らうとすれば……？。

戀愛至上主義一天張は世間見ず

終に臨んで戀愛至上主義を尚一度考へて見た。私一人の解釋では、人生はそばである、戀愛其人生といふのそばに添へた藥味である。譬が頗る卑近である事は自分でも恐縮せざるを得ないが、古人の曰くと他人の云ふた事を引照する程博學でないからやむを得ず自分の思ひついた通り安つぽい所を暴露するより外に仕方がない）。戀愛といふ藥味の中にはわさびの様なピリツとするのもあり、葱の様な臭いのもあり、海苔のやうなオツな

ものもあり、唐辛しの樣にたゞからいのもあり、必ずしもラヴは甘いものとも限らない。所が贅澤な連中は藥味がなきやそばなんか食べられたもんぢやありませんねなぞと云ふて居る。さういふ自身でも此藥味を要求した一人ではあるが、併し人によつては藥味もなしにおいしく召上つて居られる人もある事を知つてゐるから、滅多矢鱈に藥味の有難味の宣傳は試みない。ブルジョアの小悴共がカフエーの卓にもたり毛唐の酒（其中實は輕蔑されて居る和製）の瓶とレッテルとに醉ひ乍ら、此藥味のなくてならぬ理由を管卷いて居るのを傍聽して居ると、まるでそばを食はず共藥味だけで命をつないで行ける樣な話、翻つて世間を見ると藥味にもありつけずやつと『かけ』で滿足して居る人のが多いのである。

ブルジョアに濫用されんとする戀愛至上主義

更に他の方面から見れば、戀愛至上の叫は虐げられた奴隷共のあきらめのはての捨世辭でもある。鐵鎖に繫がれて巨船を漕ぐもの共がいつ板子一枚下の地獄に葬られる共知れぬはかない運命を悲しんで歌ひかわすその哀調である。歌ふ者は此世に望のない餘りせめてもの心やりにやるせない思ひを歌に托してゐる。奴隷の使ふ主人はその亡國の悲歌を彼等が歌ふて居る限り彼等がおとなしく勤勉に働く事を知つて安心して居られる。

併し腹の中からの奴隷はどんな弱い音は吐かふとも、又我々自由人の體はたとひ幾重の鐵鎖を以て縛られて居やうとも、我々の心を縛る鐵鎖は此世の中にないのだ。友よ、徒らに感傷に走せて望ある將來を捨てゝはならぬ。

（一九二二、十、三京都市外宇治町にて）

自說のあらまし

一、此論文は、私の見た理想的結婚生活の諸要を述べ、之に關して現狀の分析を試み、將來私の理想實現の爲に進むべき方向を示し、併せて當世流行の戀愛至上主義の履き違へと惡用によつて起り得る危險弊害を指摘しやうと試みたものである。

二、私のいふ結婚生活とは、一人の男と一人の女とが、夫々豫め多くの候補者を比べた上で自由に撰み出して之こそ我配遇者と定め、そして互に同格な事を承認した上で、其後の一生二人一體として送らうと試みる繼續的意志が行爲に現はされたものである。

三、此の結婚は其二人相互の幸福を第一の目的とする、產兒は結婚生活の充實に伴ふ二次的（重大でないといふ意味ではな

い現象であり、常態の結婚に於ける必然の結果である。但し或特殊の場合産兒が其二人の存在を脅かすからだ、（出來得るならば）彼等が科學的方法によつて第二次的現象の起るのも未然に防ぎて、累を第三者に及ぼさぬ様に注意する事も正しい事である

四、戀愛至上主義者の力說する白熱的戀愛は、私のいふ結婚生活の始めにあつた方が其後の結婚生活を豐富にし又此殺風景極まる現代生活にうるほひを與へる爲に望ましいものだとは思ふが、人各々の趣味や情操や人生觀の違ひもあるのだから、誰の結婚にも頗る藝術的な前奏樂がなければならぬと主張するのは餘りに行過ぎた事だと思はれる

五、日本の現代人の中で、多數の男は、一般に女性を内心物品や器械視して居る即妻は彼にとつて字引であり、其の意外の女性は小說詩集などの興味本位の讀物と見做して居る。

六、今我々の眼前に存するのは人間同士の生活でなくて、性的奴隷制の一相たる性的牧畜業である。そして之は資本主義制の下に起る必然的現象であり、其撤廢を計る爲には何かの經濟的具體的方法によらねば、他の感傷的お念佛や抽象的お說教では解決はおろか、諦めのやうにも諦め切れるものでない。

七、理想的結婚では環境の如何に係らず一男一女の關係であるが、一方現在の性的奴隷制に於ける一夫一婦制は生物學的に定められた男女等數といふ鐵則の機械的支配を受け、尙女の側で確かな自己保存を全うしたいと望む利害得失上の考へを以て支持されて居る。其故機械的便宜的な後者は時として外界の突然變化によつて一時的變化をなす事もあるが、やがて其内に又舊態に戻るにきまつてゐる。

八、瞬間的戀愛に於ける三角關係は可能であるが、直に自然消滅する。理想的結婚の三角關係（對等性を有する三角關係）と見えるものも、其は一個の飼主の下に二個又は二個以上の性的奴隷が侍べつて居るに過ぎない。

九、現代社會に於て婦人の自立は不可能であるから、離婚後及び其の附屬者が生活し得る方法を講じた上で男女對等合意の上で離婚するのは夫婦間の心的體的隔離が到底回復し得ない程に遠くなつた場合に當然である。其他輕卒な選擇や又は自發的意志の無かつた事等すべて出發點を誤つたものの失敗破綻は自業自得である、此間の消息を公表するのは後人の戒となつて大變結構であるが、互に他を罵り自ら獨りでいゝ子になりたがるのは、其人の考への淺墓さも見えすけて片腹痛い。

十、戀愛至上主義を無差別に誰にも押賣するのは世間見ずのオボツチヤンの仕草か、色彩の乏しかつた靑春の日を徒らに過した中年者の返らぬ愚痴の繰言ではないか。更に一方戀愛の空名に唯詠嘆し淚を流して其日を過すセンチメンタリストの多くなるのを、一方では悅んで傍觀して居るタイラントも居る。

併し我等の心は縛られて居ないから、唯空想的に自らを虐げ、又は空想的に他を征服する樣なはかない變態性慾に耽つて居るべき時でないのだ。

終

表現藝術と書道

瀧　精一

(一)

萬年筆を調法がる世の中に、東洋の書道を盛にしやうとするのは、時代錯誤だとの説も起らうが、實用としての書が器械的に拙速を尙ぶのはそれで善いとしても、藝術としての書を樂むのはおのづから別である。明治時代には一時書は美術であるかないかの議論が起つて、非美術論を唱へた人も大分にあつた。先頃出版された天心全集を繙いて見ると、その中に小山正太郎氏の書は美術に非ずとする論文を駁した一文がある。それに依ると小山氏は如何にも痛快にやられてゐる。岡倉氏は遂に書が何故に美術なるかの積極的議論を發表しはしなかつたと思ふが小山氏の説を駁するに於ては眞に餘す所がない。併し今日では書が美術であるかないかの論をするなどは愚な話で、少しく考へて見るならば、誰でも書の藝術的價値を認めない譯にはゆくまい。唯之を認める上に於ての輕重深淺があるのみである。

今日世の中の一部の人が書を騒ぎ始めたのには種々の原因があらう。一つの原因は粉飾を努める繪畫が飽きられて、瀟洒淡泊な趣味の藝術を欲しがる事にあると思ふ。即ち是れは文人畫の復興とも關係のあるもので、文人畫が流行するやうならば、書道も持て囃されるに至るのは自然の勢である。文人畫の興るのも書道の持て囃されるのも、概して粉飾的な藝術に對する反動にその動機があらう。けれども若し之を積極的意味あるものとして云へば、文人畫も書道も藝術として表現的のものであることに原因して、兩者共に復活の氣運に向ふべき筈である。表現主義は今日の藝術に於ける一つの大なる要求であるが故に、文人畫や書道の興隆は時勢に適したものと云はなければならぬ。

東洋に於て古來發達した藝術の中では、書が最も徹底した表現藝術であると云つて善い。東洋の書は象形に出づるものとは云ふが、書の象形は繪畫の象形とは異つて、自然の直接なる模

倣ではない。況んや書の成立に關する原則は六つあるとは、支那人も昔から云ふ事で、即ちそれが書の六義である。六義とは象形、會意、轉注、處事、假借、諧聲であつて、而して象形はその一義に過ぎない。斯く書は所詮自然の摸寫を離れるのが本性であるとすれば、書に於ける藝術的の要素は抑も何であるか。先づ書には筆者の心情から出た節奏的運動の感じを調和的に形の上に傳へると云ふ事があつて、それが又鑑賞者の心に響いて來て快感を起さしむるのである。その模倣を離れて、而かも藝術的となる上から云ふと、書は建築にも似てゐるが、音樂舞踊などゝ殊に近接する性質を持つものと云ひ得る。表現論者の中には、繪畫に對しても須らく之をして音樂の如くならしめなければならぬと唱ふるものがあるが　有形藝術の中で音樂とその性質を同うして、主觀の表現を何より大切とするものは即ち書であると云つても差支なからう。

(二)

さすがに支那には昔から書の議論が盛であつて、その中には甚だ傾聽するに足るものがある。けれども又支那人の議論はとかく物を誇大に考へたり、又は附會の理屈を說かうとするものがあるので、書論に於てもその點は餘程注意して見なければならん。揚子が法言の中に「書心畫也。心畫形。則君子小人見矣。」と說いたのは甚だ有名である。それは要するに書が人の心術に關係があつて、それに依つて人品の高下が判かると考へるのである　更に言へば書に於て道德的性格の區別が認められると云ふのである。郝經の書論には書法は則ち心法であつて、柳公權が心正しければ則ち筆正しと說いたのは一時の諷諫のやうだが實は書法の本である。秦相李斯は刻薄寡恩の人であつたから、其書が屈鐵琢玉の如く、又瘦勁無情である。二王顏坡は忠正高古の人であるから、假令その書が下手でも非凡な所がある筈だが、況んや上手だから備極して餘蘊なきものであると說いてゐる　此論法を以てするから　宋の蔡京、章惇や元の趙子昂や、明の張瑞圖、錢謙益などの書は、如何に精巧でも尙ぶに足らんと云ふやうな議論も起る。その理由は是等の人々が人となり既に名敎の罪を辭することが出來ないと見るからである。けれども書に於て道德的性格の現はれを見やうとする此種の議論は書を藝術的に見る上からは正しいとは云へない。何人も惡人の書いた書を喜びはしない。床の間に掛物として懸けて樂まうとする位の書は、成るべく高正な人の筆迹である事を望むのは人情の常である。けれども嚴密に批判すると、それは人を想ふの情であつて、書の技藝を樂む所以の情とは異ふ。何人の書であつ

ても、書は書として見るべきものに相違ない。書に筆者の情趣が現はれる事は確であつて、その意味に於ては書を心畫と云ひ、又は心法となす事は少しも差支ない。けれどもその情趣たるや要するに藝術的の情趣であるに過ぎない。之を以て道德的なりとするは、由來支那人が藝術に對して勸戒主義を應用するの性癖を有する故である。

けれども書に妙致を得やうと欲すれば、心情のそれに適する特殊の狀態を必要とする事は事實である。書はその法式技巧に於ては他の藝術よりも遙かに簡單であつて、而かもその法式上の面倒が尠い割合に內面的要求が多い。瀟然無爲、心手相忘れて筆を下だし得るにあらざれば縱橫の妙をなし能はぬとの論は正しいので、要するに心に餘裕を有し得る程の人でなければ、妙書をなすに適せざるは明かである。從つて又心術の餘まりに下劣なる者であつたならば、書藝をなすには堪へないと云ふ事にもならう。それにしても書に必要の心理的狀態は直接に道德關係を持つものとは認められない。道德的ではないが、閑雅の境地が得られなければならぬので、閑雅の境地より發する所の情趣か技巧を超脫するを望む事は、書畫に於けるよりも適切である。書に於ては殊に專門家よりも素人の方に却つて勝れたのがあるとせられるのも、つまり技巧超脫の要求が大きいからではなからうか。

次に支那の書を論ずる者の多くは　書にも亦畫に於けるが如く客觀的な存在の現はれがあるかのやうに說いてゐる。晉の衛恒の四體書勢や、梁の武帝の草書狀や、唐の張懷瓘の十體書贊の如き、殊に書を天地の物象に比して論ずるもの丶著明なる例である。それ等の議論に依ると、書には例へば山嶽の聳え立つが如く、雲の起るが如く、雨露の墜つるが如く、龍蛇の蟠まるが如く鳳鸞の飛翔するが如きものがあつて、始めてその妙があるとするのである。是やうに見來るが故に、遂に「山水崖谷。鳥獸草木。日月列星。風雨雷霆。歌舞戰鬪。天地事物之變。皆な之を書に寓すとの說が起る。その說はつまり書を本來象形なりとするの考よりして、書を出來得るだけ畫に近づかしめて說明しやうとする爲に起るのでもあらう。若し單にその旨意よりするものとすれば、その論は餘まり重きをなすに足らんであらう。寧ろ書は書で、畫を離れての價值を明かにするの方針を取るべき筈なのに、却つて畫に混同する考を抱くのは善い事ではない。けれども又深く考へて見るとそれは畫に混同する旨意からのみ來てゐるとは云へない。書に於て當然あるべき事を述べる爲めに爲す說であるとも見られない事はないので、そこに又格段の面白味があると思ふ。

要するに古人の說には文詞の潤飾があつて、藝術の談義となると、とかく比喩的の叙述の多いのはその常であつて、書の客觀性を說くにも比喩に過ぎたものがある。けれども事實として書の筆勢には天地自然の事物の姿に擬して見ても善いものがあるのである。空海の飛白體などを見る者は、誰れもその書勢に何等か天地事物の變を想はしむるものがあるのを認めない譯にはゆかぬ。飛白でなくても草書の妙品の如きは、多くはその面白い節奏の間に、自然界の何物かの運行を觀るやうな趣を認める。それは蓋し書をかく者の意識に對しては偶然の事であらう。書物が自から形を自然物に似せやうとすれば、繪書又は勾白字の類となつて徒らに巧を弄する卑俗に陷るの外ない。書が眞の書であるならば、その自然運行との類形は無意にして得られなければならん。夏の空の雲が風に動いて飛ぶ間には、或は人の形の如く見えたり、鳥獸の如く見えたりして、自然のミミックとでも云ひたいやうなものが起る。それと同じやうに又書に於て自然の類形が生ずる。それは筆勢に基いて、律動の間に生ずるのであるから、或は動的象徵と名けても善いであらう。動的象徵は筆者には無意識にして得られるのであるが、併しながら又それのあるのは、書の妙を增す所以であつて、即ち筆者の技藝に關係する所がないとは云へぬ。

或はその動的象徵を以て書の客觀性をなさしむる所以の重要なものであるとするの論も立ち得る。又若しその象徵が天地の趣勢を代表的に取り集めたものゝ如くなつたとすれば、愈々書の妙は深くなる。古人の言ふが如く結構を謀略となし、出入を號令となし、縱横自在の進止を以て書を書するに於ては、書も亦遠達の趣を得て、恰かも世界を領略するが如き氣概を有し得るとも云へやう。この見方を推し進めて行くと、書の妙は筆者の世界觀と關係がある。書に於て筆者の世界觀が現はれ得るとまでの議論もなし得ない事はない。古人の見る所は蓋しそれであらう。併しそう云ふ風に云ふと、事が餘りに抽象的になつて、誇大に聞える恐がある。要するに書に於ても自然世界の直感は確かに關係のあるものであつて、自然の直感に鈍い人の書は妙味に乏しいと云ふ事は事實と見て善からう。けれどもその直感は筆者その人に於けるの資格として必要なので、その直感したものを直接に形の上に現はすのではない。その點に於て書は何處迄も畫とは違ふ。直感の力のある者にして書法に達すれば、その書に於て知らず識らず自然の事物に認められる自然運行の趣勢が象徵的の暗示されるのである。而して又その象徵的の暗示が裕であればある程、妙が深いと云ふ事は疑がない。

畢竟するに書は有形なる藝術中の最も主觀的なるもので、そ

れが形に現はれるものでありなから、最も主觀的であり又象徴的であると云ふ事に於て特色を認めなければならぬ。建築が如何に奇拔な意匠を凝らしても、書の如くに覿面に主觀の表現をなして、且つ左樣に深く象徴性を得るものとはなり能はぬ。但し書は音樂に比べるならば、それ程に強く感情を動かすものではない。又繪畫程に濃厚な味を持たないで、深酷性を缺いて、寧ろ却つて瀟洒淡泊な所にその特色を有する。支那人は文學に於ても又畫に於てもとかく遯世的の考を以て之を樂まうとする傾向があるが、書には殊に現實を離れたものがある故に、之を好む事甚しきものがあるとも云へる。文人畫にもそれはあるが、書はその技藝の性質上殊更に現實を離れる。我々は書の樂を以て決して藝術的快樂の準的なるものと認めやうとはしない。けれどもそれが又一種特別のものであつて、他の藝術の樂みと共存するに於て沒却し難い價値あるを認める。事實として書のみを好んで、他の藝術を喜ばない人はないであらう。書を好むものは又畫をも好むのが普通である。

（三）

書が既に特殊の藝術的價値を有するものであつて、又東洋に於て古來一貫して發達をなしたものである故に、今日に於てもその道を興起する事を望むは敢て不當とすべきではあるまい。殊に書は専門家を俟たずして、誰れでもが常に携はる事の出來るもので、通俗的であると云ふ點に於て一つの長所がある。通俗藝術として書の如きものは亦他に多くの類がない。それは何人でも日常文書を書する間に鍛錬する事が出來る。忙はしい世の中で實務に從事する間に於て多少に拘らずその筆法を味ひ得るとすれば、是程便利なものはない。

併ながら又書は藝術として入り易く學び易くして、而かも達し難いものである。書を唯法式の上から學んで結構を整へるだけならば左程に面倒はない。併し前にも云ふ通り書の妙は法式を脱した所に在るのであつて、その法式を超脱しての妙を得やうとすれば、筆者の心に餘裕があつて閑雅の境地を必要とするのであつて、それを得る事が今日の世の中では或は困難であらう。何れの藝術に於ても内面よりする修養が今日の世の中ではとかく行はれ難く、それが爲め只管技巧にのみ走らんとする弊がある。古代の藝術に於ての長所は、作家が藝術的生活に自適した結果をその製作物に表出する所に在る。書道が古代に盛にして今日に衰へたのは、書が殊に表現的で筆者の生活と密接の關係を持つからである。書道はどうしても遊戯三昧の技である古の書を善くするもの丶多くは、唯書のみに長じてはゐない。

書を善くする程のものは他の技藝にも長じて、而かもその技藝はすべて偶發的である。つまり藝術意識の興に乘じて動く所のものが、偶ま詩文ともなり、書ともなり又畫ともなるので、技の精粗優劣はあつても、その發する所の本は一つで、その本を養つて始めて妙を得るのである。殊に書は文學思想の缺乏してゐる者には不適當で、無學者の書と云ふものは巧は巧でも韻致の擧がらざるを事實とする。奈何せん書道はその技巧よりも、背後に潜むものゝ要求が六かしいから、寧ろ今日の世の中には不向だとも云へよう。

けれども又今の世の中の實際的傾向のみから見來つたならば藝術そのものが既に不適當だと云ふ斷案に陷らざるを得ない。實は今の世の中の實際傾向が是の如きものであるだけに、藝術は人生向上の爲めに益々必要なのであつて、藝術が世の風潮に準じて單に技巧本位に安んじたり裝飾化にのみ走るやうであつて、何んで存在の目的に愜ひ得やう。藝術はもとより超世間的のものであつて、その眞價を發揮し得る。若し左樣に超越の困難を訴ふるならば、藝術を止めるに若くはない。超越性の必要は獨り書道のみに於て認むべきではない。

近頃文人畫の復興を唱ふる者に於ても、必しも文人畫の眞髓を理解しての上で、それをなすのかどうか問題とすべき場合が多い文人畫は復興すべきであつても、それには因襲の形式があつて、その形式のみを取るものならば復興は意味をなさぬ。文人畫の復興はその動機たり、若くはその精神となる所のものを取らなければならんので、そうすれば先づ文人的生活と云ふか、又は通達した藝術意識のそれに適するものを體得する必要がある。而して之を得るの必要は書道に於ても同じである。寧ろより以上であるかも知れない。若し文人畫なり書道の鍛錬が筆墨以外から來るやうであるならば、それは古法の倣習に終らずして、今の時代に應じた特色のあるものを生じ來るのも自然である。書は殊に時代精神の變移と關係のあるもので、今の時代には今の時代の書がなくてはならぬ。現今の如くにして進まば、書道は唯衰落を以て時代の徵としなければならんかも知れないが、若し適當の鍛錬が行はるれば活きた藝術としての特徴が現はれ得るであらう。

文人畫書道の宣傳が舊思想の藝術を骨董的に取扱はうとする人々に依つてなされ易いのは、その道の爲め却つて迷惑なる場合が多い。尤も文人畫の方は今や漸次新らしい人々に依つても研究され始めた。西洋でも文人畫を研究する者は尠くないので日本の洋畫家の如きは西洋の畫家に促された氣味もあるが、それにしても洋畫家の側で之を研究するに至つたのは面白い。然るに書の方西洋人はにその趣味の解され難い事は勿論、國人の之を鼓吹する者が今ま尚ほ小範圍に止まつてゐる。何れかと云ふと舊思想の人に多い。是も遂には根本の理解を明かにして、弘く多數の人の注意を惹くやうになるべきものと思ふ。

追はるゝまで

□英國社會運動裏面史のエピソード□

野坂鐵

□

船は靜かにドーバー港の岸壁を離れた。

Tと妻のRとは、甲板の中央に近い通風機（ベンチレーター）の蔭に腰をかけてゐた。

まもなく、二三人の船員が、雨合羽を腕に抱へて、ドヤ〳〵と甲板に現はれた。その内の一人は、T等を見つけると大急ぎで近づいて來て、耳慣れぬ佛蘭西語で、何か早口に喋つた。Tには、何を言つてゐるのか、サッパリわからなかつた。たゞ『ムシウー』いふ音だけが、強く耳に入つた。しかし、言葉の樣子から、海水の飛沫がかゝるから、この合羽を身體に纒へと言つてゐるらしく察しられた。そして、返事も待たずに、海水に汚れた、天幕ほどもありさうな合羽を、Rの膝にかけて行かうとした。Tは周章てて、「ノン、ノン」を連發しながら、それを突き返した。するとその男は、また何處からか、大きな折椅子を持つてやつて來て、この方が『具合が好い（トレ、ビヤン）』といつて、其所に置かうとした。Tは、それをも强硬に斷つた。男はブツブツ云ひながら、合羽と椅子とをさげて、別の客の方へ云つた。かうして、彼等は、旅慣れぬ外國人に、親切の押賣りをして、幾何かの酒代を獲やうとするのだつた。

Tは俄に旅情を感じて來た。

その時、不意にRが聲をひそめて、倫敦からドーバーまでの列車中、同席した男は、どうも怪しい。始終監視してゐるやうだ。若しあの男がさうだつたら、要心せねばならぬと云つた。

しかし、Tには、その男より以外に、なほ二人の怪しい男が目についてゐた。一人は、一等の甲板に立つてゐる紳士、いま一人は、先刻から彼の傍を離れなかつた商人體の男。見廻して見

ると、それ以外にも、まだ／＼彼等を監視してゐさうな男が、一人や二人はありさうだつた。さう思ふと、船客全部が、彼等を注視してゐるやうにも見へてくる。『これがほんとの、凝心暗を生ずといふのだな。だが、尾行などは、どうでもいゝや』と彼は笑つた。

　船は餘程進むでゐた。ドーバーの倉庫の上に飜つてゐた英國々旗も最早黒點のやうにしか見えなかつた。西岸に見える筈の有名な『シエキスピア斷崖』も、薄霧に、隱されてゐた。冷い風が烈しく吹いて來る。横波を喰ふ毎に、海水は右舷を洗つた女の客は、キヤツ／＼騷ぎながら、椅子を持つて左舷に移つて行く、船の動揺は、だん／＼とひどくなつて來た。

□

　その時、Tは獨逸社會民主黨の闘將、ベルンシユタインの著書『わが追放記』の中に、初めて英佛海峽を渡つた時のことが面白く書いてあつたのを想ひ出した。

　獨逸を追はれた當時三十歳のベルンシユタインが、社會民主黨の創立者ベーベルと共に、倫敦に配所の月を眺むるマルクスとエンゲルスとを訪ねて、一八八〇年の十一月、佛蘭西海岸のカレーから汽船に乘つた時のことである。大陸で育つた二人はその日まで、汽船に乘つたことは、一度もなかつた。それで、船に乘る前から、海峽横斷の問題が極度に神經を惱ましてゐたさうだ。ベルンシユタインは、その時の樣子を次のやうに書いてゐる。

　『何事も樂天的に考へるベーベルは、「僕は醉はずに濟むと思ふネ」といつた。自分も、前夜不愉快な汽車旅行で、一睡もしてゐなかつたから、「私だつて、きつと平氣だ」と答へた。しかし、實際のところは、内心でビク／＼もので、恰も絞首臺に上る死刑囚のやうな心持で、自分はカレーからドバーに通ふ汽船に乘りこむだ。甲板の上にゐる者が一番に醉はない、と豫て聞くか讀むかして知つてゐたので、自分は上甲板の舳先の隅に席を見つけて、其處に陣取り、なるやうになれと、觀念の眼を閉ぢた。』

　英佛海峽の冬は一番の荒れ時だ。ベルンシユタイン等の乘つた船は、極く小さかつたばかりでなく、その日は殊に天候險惡で、風が強かつた。彼の追想錄は、更に斯う續けてゐる。

　『荒狂つた大波は、引き切りなしに前甲板を洗ひ、自分はその飛沫を全身に浴びた。間もなく、自分の傍にゐたベーベルは「どうもいけない」と云つたまゝ、甲板を去つていつた。すると同じやうに他の船客も大方姿を消して、終には甲板で働いてゐた水夫さへ、船暈の氣持で、引込むでしまつた。自分も同樣に

—追はるゝまで—

やられると覺悟したが、消極的反抗によつて、できるだけそれを遲らさうとし、我慢の出來なくなるまでは、席から動かないことに決心した。その内、到底駄目だと思つたことが數回あつたが、いつも危く持ち堪へた。そして、愈々危機が絶頂に達した時、その時船の動搖は偶と止むだ。すると、忽ち「ドーバー、ドーバー」といふ聲が耳に響いて來た。』

しかし、ベーベルは餘程參つてゐたと見へて、上陸してからもコーヒ一杯呑むさへやつとだつた。そして、倫敦行の汽車に乘つても、カンタベリを過ぎる頃までは、全く弱り切つてゐたその時、ベーベルは、同船した英國の女學生二人は船室でやつれてゐるが、中々美人だといふやうなことをベルンシユタインに目で敎えた。で、ベルンシタインは『ベーベルも美人に目をつけるほどになれば、もう回復したんだ』と思つた。さうして十分間後には、二人は元氣よく會話を交へてゐたさうである。

□

Tは、以上のベルンシユタインの物語を回想しながら、並居る資本家代議士を睥睨して、獨逸議會壇上に咆哮したあのベーベルが、英佛海峽の船中で輾轉反側してゐる有樣、それから、今なほ白髮の老軀を提げて社會民主黨の陣頭に起つてゐるベルンシユタインが甲板の隅で蒼い顏をして目をつぶつてゐる青年姿などを如に描いて見る時、微笑の浮ぶを禁ずることはできなかつた。

それと共に、當時の英國と今日の英國とを較べて見ると、徒に今昔の感を深ふすることばかりであつた。當時は、ベルンシユタイン等の如く、自國に自由を得られざる者は、英佛海峽を越へて、『自由なる英國に』渡つたものだ。英國は世界に於ける革命家の唯一の隱家だつた。例へば、歐羅巴大陸を追ひ廻されたマルクスやクロポトキンなども、終に此處に安住の地を見出して、三十餘年の餘生を靜に送つたことは、何人も知るところの事實だ。しかるに、現在はどうだ。この異國の一青年をさへ容れる餘裕もなくなつて、あらゆる國家の權力を用ひてまで彼を『自由なる國』から追ひ出してゐるではないか。この事實は、英國國家の强きを示すものでなくぐらつき出した資本主義制度の根底を、再び昔に還さんとする最後の足掻きを物語るものである。

Tは外套の襟を立てゝ、目を閉ぢた。英國官憲に對する壓え難い憤怒の情、同志に對する愛着、一年半住みなれた風物に對する親しみ……是等の感情は、彼の胸の中で渦を卷いた。しかし、是等の感情も、忽ち前途に對する不安によつて壓倒された。佛蘭西の海岸に着いた時、果して其所の官憲は彼等を無事

に上陸させるか、どうか。たとひ上陸させるとしても、また英國と同じく、國外に放逐しないだらうか。

しかし、船は愈々高速度を出して、佛蘭西海岸に近きつゝある。『なるやうになれ』と、Tはあきらめた。

彼の頭には、過ぎ去つた二週間の遽しい生活が、百色眼鏡のやうに現はれて來た。

□

Tの去つた英國には、白色恐怖が猛威を逞ふしてゐた。倫敦キング・スツリートの英國共産黨本部へは、各地方から、頻々として同志の捕縛、檢束の飛報が舞込むでゐた。警官に襲擊されて難波船のやうに荒された本部の二階には、若い臨時書記のピートが、是等の報道を受取つては、手帳に書きつけた。彼の手帳に載つてゐる名前は既に五十を越えてゐた。

四月一日に八十萬の炭坑夫がロックアウトされてから二週間英國の天下は危殆に頻した。資本家と官憲とは金力と權力の全部を擧げて、勞働者階級の結束に對抗した。が、四月十五日の三角同盟の總崩れと同時にその危機は去つた。資本家の天下は再び安泰となつた。

勝に乘じて資本軍は强硬な追擊を試みた。そして、その頃頭を擡げて來た共産主義の怪物退治に勢揃ひした。この過激派狩の先登に立つたドンキホーテこそは、警視廳のサー・ベシル・トムソン將軍であつた。

五月七日には、共産黨本部は十數名のトムソンの部下によつて包圍されて、書記のインクピンと一切の書類は、警視廳に連ひ去られた。その翌日には同黨一の活動家スチユアートは捕縛された。十六日には、マンチエスターの赤色勞働組合インタナショナル假事務所が襲はれ、議長と書記とは拘引された。更に南ウエールス炭坑地帶に亙つて、有力なる共産主義者は捕はれた。白色恐怖は英國全土に急速に擴つた弱腰革命家は悲鳴を上げて逃げかくれた。たゞ少數の者のみが、各自の支部に立て籠つて、最後まで踏み留つた。

□

Tは共産黨本部がやられたことを知つた時、『こんどこそは俺も助からぬぞ』と直感した。取調べには必ず來る。ことによると家宅搜索くらひするだらうと思つた。それで何日取調べられても、何日襲はれてもいいやうに、早速準備に取りかゝつた。先づ書類と手紙から片着けていつた。英國の官憲に少しでも口實を與へさうなものは、裂いてしまうか、何處かにうまく隱した。

紙片は、床の上に堆く積つた。彼は、それを風呂敷に包んで

裏の果樹園まで運び出しRと一緒に丹念に燒いた。

最後の一片まで燃え盡きた時、彼はスッカリ安心した。何日何が來たつて大丈夫だといふ輕々とした氣持になつて、園の中を散歩した。下宿の愛犬ブルノーは愉快氣に吠えながら、先にたつた。

五月の中旬と云へば、英國では、一年中で、一番いい季節がこれから始まらうといふ時だ土地も草木も、明るい光線を一杯に浴びて、新綠に輝き、垣根には、薄紫のリラの花が咲いてゐた。

T等は、兩側の果樹で狹められた細い道を、往きつ戻りつし乍ら、この春には、倫敦と、スコツトランドとを見物して、夏までにフランスに渡らうと話し合つた。

□

それから三日經つた。Rは、『もう大丈夫だらう』といつて苦笑した

しかし、Tには、何事もなく濟みさうにはどうしても思へなかつた。こんなに暇取つてゐるのものは、彼等の豫想してゐるものより以上のものを、英國の官憲は用意してゐるのであるまいかと疑つた。

その日も、午前中は無事に過ぎた。

確に二時頃だつた。偶と道路に面した書齋の窓から外に目をやると、立派な體格をした見知らぬ男が、恰度門を入らうとしてゐるところだつた。Tは、その顔を見ると直覺的に、來たなと感じた。Rに『來たぞ』と云ひ置いて、下宿の人の出ぬ先に急いで玄關口に出た。

戸を開けると、その大男は、君に會ひたいと云つた。玄關内に入れ、戸を閉めてから『僕だが、何用か』と尋ねた。その男は、スコツトランド、ヤードのトムソンが、至急に會ひたいので、迎へに來たのだといふ意味を、叮嚀に告げた。それ以上は何も云はなかつた。尋ねもしなかつた。

Tは彼の書齋を避けて、この『特別高等』を下宿の者の使ふ應接室に導いた。日本でも勿論さうだか、この連中をウツカリ書棚のある部屋などに通さうものならとんだ目に合ふ。一寸油斷してゐる間に、どんな本を讀んでゐるとか、どんな新聞雜誌を取つてゐるとか、或はそこいらに散らかつてゐるものの名前を手帳につけていつて、いゝ加減な報告の種子にされる。かういふこともあつた。恰度、その時から二三ケ月も前のこと、妙な緣故で突然二人の日本人が訪ねて來た。二人共彼には初對面であるが、日本のある新聞社に關係してゐるものだそうだ。しかし、倫敦で何をしてゐるのかと尋ねると、どうもその答へは曖昧だ

話をしてゐる内に、益々妙になつて來た。何を讀んでゐるかとか、毎日何をしてゐるかとか、或は誰と交際してゐるかとか、世間話の體で聞きだした。Tはスッカリ警戒して、話を中心點から外す事に努力した。

その時、何かの用事で一寸二階に上り、書齋へ戻つて來ると新聞記者の一人は、書棚のカーテンを開いて、中をぬすみ見てゐるところだつた。Tが入つて來たので、一寸驚いた樣子だつたが、『中々本をお持ちですね』とその場を誤魔化してしまつた。（御苦勞樣にも、かういふ連中が、最近には亞米利加、英國、佛蘭西、獨逸といふやうな重要な國々を廻つて、在留日本人の動靜を探つてゐるさうだ。）

□

Tは『高等』を應接室に通しておいて、Rにその旨を告げた彼等は數日間の不安に片がついて、一種の安心を感じた。

その日は、可成り暑い日だつたから、Tは雨外套でも用意して行けば大丈夫だと思つたがはRは拘留を慮れて冬の厚い外套を持つてゆけと云つて聞かなかつた。それで彼は、仕方なしに、暑苦しい外套を持つて、『高等』を促して、玄關を出た。二人を送つて出たゝに向つて、『高等』は『何でもありますまい。御心配はいりません、すぐお歸りになりますよ』と愛想よく云つた。Rは『よろしく』と答へた。

全く、TもRも、何でもないと信じ切つてゐた。少し嚴しい說諭位で濟むと思つた。いゝ加減に誤魔化せば直ぐ歸れると思つてゐた。

□

Tは外に出て、『高等』と肩を並べて歩いた。といふといかにも體裁よくきこえるが、實は、Tの身長は、どんなに反身つても、『高等』の肩のところまでしかなかつた。そして、彼は、Tの歩調に合はすために、余程の苦心をしてゐた。彼は立派な背廣を着、そして、英國の紳士が誰れでもするやうに、左手には手袋をもち、どう見たところで、一廉の紳士だ。後で彼が話した事だが、彼は巡査部長ださうだ。なるほどこの體格なら、部長になる資格は充分だと、Tは思つた。一體、英國で巡査になる第一の資格は、身長が六呎何吋以上でないといけないことで其他の點はどうでもいゝさうだ。だから英國民は、正服巡査を以て、交通の整理をするものか、或は道を教へる生き地圖か、皇帝の行列の時の裝飾位にしか思つてゐない。

二人は、倫敦の中心に通ずる小さい停車場に着いた。『高等』はTに、通辯はいらないねと尋ねてから、辻自動電話室に、飛込むだ。警視廳に犯人同行の旨を報ずるのださうだ。

時間表を見ると、次の上り列車までには殆ど小一時間も間がある。石炭不足のために、列車の數が非常に削減されたからだそれでT等は仕方なく、ロンドンの中心近くまでゆく郊外電車に乘ることにした。そして、電車の屋根の椅子に並むで腰をかけた。

電車の上三十分間、彼等は、數回しか口をきかなかつた。それも、お互にできるだけ根本問題に觸れないやうにした。で、二三の世間話の後、〃は「高等」に

『僕はこの間、日本の皇太子が着かれた時に、停車場まで敬意を表しにいつたが、中々綺麗だつたね』と云つた。すると彼は

『君はいつたのか？』と意味ありげにTの顔を見た。

そこでTはまた話頭を轉じ、少しく探りを入れて、

『近頃は忙しいかね』と聞いた。

『君等のやうな人間が多くて困るよ』と高等は怒つたやうな顏をして答へた。

『君等つて、僕がどうしたと云ふんだ』と、Tは笑ひながら聞き返した。しかし、『高等』は、默り込むで答へなかつた。

□

彼等二人は、ウエスミンスター地下電車停留所で降りた。ニユー・スコツトランド・ヤードは停留所の直ぐ上だ。ニユー　スコツトランド・ヤードとは、警視廳の建物の名前で石造の古風な、而も威壓的なスコツトランド式建物だ。入口はテームス河に面してゐる。

Tと『高等』は、玄關に入ると直ぐ、リフトで四階に昇つたそれから、高等は、先に立つて、屈曲した長い廊下を奥へ〳〵と導いた。ある角の一室の戸が開いてゐたので、Tは通り過ぎつゝ中を見ると、室いつぱいに共産黨から奪つて來たらしい書類が亂雜に投げ込むであつた。その內のある表紙に『インタナショナル』と印刷してある太い赤色の文字が、Tの目に浸みるやうに映つた。瞬間に彼は、思はず憤りにカツとした。

『高等』は、やつとある廊下の突き當りの一室にTを導き、しばらく、其處で待つてゐてくれといひおいて、出かけて行つた

その室は待合室らしいものであつた。しかし、他に何人もゐなかつた。Tは室內を靜に步き乍ら、彼のトムソンに對する態度を考へた。

間もなく、『高等』は手に一束の書類を持つて入つて來た。そして、Tを促して、また別の一室へ導いた。見たところ、これも待合室らしかつた。室內では、二人の男が何かヒソ〳〵と話しながら、恰度立ち上らうとしてゐるところだつた。見ると、一人の男は日本人だ。その男は、チラと、Tを見るなり目をそ

——追、 は る ゝ ま ——（ママ）

らせて、そのまゝ室から出て行つた『大使館の男だな。何か打ち合せてゐたんだ、クソツ、寄つてたかつて、一體どうしようといふのだ』とTはいま〱しく思つた。

彼はその室でも暫く待たされた後、再び『高等』が來て、數室先の一室に導いた。

それは、あまり廣くない陰氣な室だつた。壁際の大机には、いかめしい貴族的な髯を生した紳士が書類を見てゐた。Tは、ハアこれがトムソンだなと思つた『高等』はTを彼の前に連れて行つた。トムソンは比較的叮嚀に椅子にかけろといつた。Tは大きな椅子に腰を下して、さて彼の顏を見た。

サー・ベシル・トムソンは、警視總監サー・ホーウツド（最近毒入りのキヤンデイを贈られたといふ）の次席で、副總監の地位に居り、『特別高等課』の長官だ。彼の名は、彼の惡辣な過激派狩りによつて知られ、彼が露國共產黨の機關紙『プラブダ』を倫敦で擬造して、デタラメの露國實情を言ひ觸らしたといふ事件以來、殊に有名になつた。彼はノーザンバーランド侯爵樣の知遇を受け、政治的にも、思想的にも保守黨中の保守黨だ。で、ロイド・ジョージ等の自由派とは常に合はず、遂に一九二一年の十月に、免職されたといふ人物だ。だから彼の名前は、貴族社會では中世の騎士の如く謳はれ、勞働者仲間では鬼の如く恐れられ、社會主義者の間では、ダニの如く嫌はれ憎まれた

Tは、彼の顏を、一度は寫眞で、今一度は社會主義雜誌のポンチ畫でみたことがあつた。前者は彼を立派な老紳士にみせ、後者は彼の面を鬼のやうにしてゐた。が、今、Tの前に現はれた實物のトムソンは、寫眞とポンチ畫とを混ぜたやうな印象をTに與へた。彼はもはや六十に近いやうだが、軍人上りだけに元氣旺盛、その風丰と、その太い髯は、いかにもこの建物の副主人公に應しかつた。

トムソンは、型の如く、名前や住所を聞いてから、徐に、手にしてゐた一通の手紙をTに見せ、それは眞の筆者かどうかを聞いた。その手紙は、Tがある友人に與へた何でもないものだつた。Tは自分が書いたのだと答へた。直に、女書記に、Tの言葉を速記した。

更に、トムソンは、他の書類に目を移し乍ら、昨年の九月に『全國鐵道從業員組合』の事務所を訪ねた事があるだらうと尋ねた。それも事實だ。しかし、そんな些細な事實まで、どうして調べてゐるのか。（Tが、後になつて知つたことであるが、英國の大きな勞働組合の事務所等には、必ず一人や二人の警察の廻しものがゐて、大小の事件を本部に報告する役目を勤めてゐるさうだ。）

Tは、その質問通りに、事務所に出かけたと答へた。すると彼は傍の書記らしい男に向つて、『九月には、ストライキがあつたんだ』とつぶやくやうに云つた。

Tは、その時ハツと氣がついた。トムソン等は、鐵道のストライキ最中に、Tが組合本部を訪ねた、ケシカラン奴だと思つてゐるらしいのだ。しかし、ストライキのあつたのは、その前年の九月だつたのだ。Tは、聲を立てゝ笑ひ乍ら、

『ストライキのあつたのは、一昨年の九月ではありませんか。僕が鐵道組合事務所へ出かけたのは、去年の九月です。ストライキには全然無關係です。』と云つた。

さう云はれて、トムソンは一本參つた樣子で、直ちに書記を顧みた。書記は少々うろたへ氣味に、

『さう。ストライキのあつたのは一昨年でしたかな。』と口の中でつぶやいた。

トムソンは茲で威嚴を損じては、と思つたのか、直ちに疊みかけて質問をした。

『君は、何故そこへ出かけたのか。』

『僕は、一個の社會運動の研究者です。それで、鐵道從業員組合を調査する上から、その材料を集めに出かけたまでゞす。』

トムソンは難しい顏をして、更に次の紙に眼を移した。

『君は〇月〇日に、マンチエスターへ出かけたらう。そして、〇〇〇會議に出席したらう。』とう〱わかつたなと、Tは思つた。隠したところで仕方がない『さうだ』と答へた。トムソンは、『どうだい。俺の方には何もかもわかつつてゐるんだぞ』といふやうな顏をして、更に紙を繰つた。

『こゝに君の手紙がもう一通ある。これによると、君は君の友人に、炭鑛夫のストライキ最中、どんな仕事でもやらうと書いてゐるが、假にその友人が、これから爆彈を何處かへ投げつけろと云つたら、君はそれをやるのか』

『そんなバカな事を誰がするものですか』

『では、何をするつもりなのか』彼は鋭く突き込むで來た。

『僕はたゞ友人に事務的仕事（クレリカル・ウォーク）を手傳ふと云つたまでゝす。』Tはホツとした。

トムソンは段々と險惡な顏になつて來た。二ツ三ツ同じやうな種類の質問をした後、彼は聲を改めて、宣告を下した。その時の彼の顏は、小雀を捕へた荒鷲のやうな、殘忍と傲慢との錯綜した表情を現はしてゐた。

『君は直ぐ英國を退去しなくちやならん』

『退去？』

『ウン、退去だ、直ぐにだ。』

◇は退去といふ事だけは、全く豫期しなかつた。說諭か、惡くて家宅捜索位が關の山だと思つてゐたのだ。退去とは意外だ。身體中の血が一時に沸き反るのを覺えた。そして、それは直ちに怒りに移つた。が、今辛抱しなければやり損ふと思ひ、ヂッと堪へた。すると、性來の横着氣が大いに動き、このまゝ、參つてしまつては駄目だ。勝ち誇つた敵の虚を衝いて、逆襲するのは今だと思ひ、

『何のための追放です。その理由を云つてほしい』から問ひ返した。

『君は、「好ましからぬ外人（アンデザイアブル・フオレナー）」だから、「外人法」によつて退去を命ずるのだ』

Tは、これだけ聞けば、もうたくさんだと思つた。

『何日迄に英國を退去すればいゝのです？』

『二三日中だ』

『二三日中？　バカな。そんな事を云つたところで、僕はここに一年間もゐたのだから、二日や三日の中に引き上げる事は不可能です。』

『それまでに退去しなければ、君を捕縛するまでだ。』

最はや、何もいふ必要はなかつた。日本の大使館に當つて見るのが唯一の殘された方法だ

『僕はこれから日本の大使館へ往つて來たいがどうでせう』

『よからう。これから直ぐゆき給へ。そしてもう一度此處へ歸つて來て呉れ給へ』

Tは默禮して室から出た。『高等』と續いて出た。

□

大使館では、隨分待された後、やつと一人の書記官が出て來て、何も知らぬやうな顏をして、要件を聞いた。Tはたゞ退去の日を一ケ月先に延ばして欲しいと云ふ事だけを賴むだ。書記官は『高等』と別室で、長い間相談した後、出て來てから云つた。

『大使館の方では、英國官憲に對して、抗議のしやうないが、出來るだけのことはしませう。しかし、他の日本人との關係上、貴方を特別扱する事もできません。實は最近、未だもう一つ厄介な問題が起つてゐるのです。』Tはむづがゆいやうな氣もちがした。

彼等が大使館を出たのは、四時間だつた。『高等』は五時が、スコットランド・ヤードの閉切りだから、早く歸らねばいけないといつた。Tは近くの辻自動車を張りこむで、一緒に乘つた。自動車の中で、高等は、退去を一ケ月延ばす事は、到底不可能だが、一週間ならどうだ、大して、準備はかゝらないぢやな

いかと、說得しやうとした。しかし、Tは、一ケ月でないと駄目だと、强硬に要求した。

スコツトランド・ヤードでは、余り待たされずに濟むだ。『高等』は、トソンの室から歸つて來て、愈々最後の宣告を下した『一週間内に退去しろ』と。

それから『高等』は宥める樣に、日本大使館の願により、法律的退去命令は出さぬから任意に退去してくれといふこと、命令に從はぬと、捕へられて、無理矢理に、船に乘せて、國外に放逐されるといふ事。この儘、默て出國すれば、再た英國に歸ることも出來るといふ事。若し一週間内に準備が出來なければ、Tの妻を殘しておいて、彼女にゆつくり支度をさせてもいゝではないかといふ事。この樣な取扱は、Tにとつては非常な恩典であること等、クド／＼と話した。そして、尾行などはつけないことを契つた。

ここで爭つて見たところで仕方がないので、Tは、ともかくも、一週間内に瑞西に向つて出發する準備をすると契つた。『高等』は、出發の時日が決定したら、通告してくれるやうにと云つた。

□

Tは廊下で、『高等』と別れて降り口の方へ行つた。その時廊下で書記らしい男に行き遭つた。Tその顏を見て驚いた。その男は、Tがある小さい會合で日本の運動について話をした時に。彼等の仲間として、出席してゐた男たつだからだ。Tは思はず『ハロー』と聲をかけた。その男は、顏を少し赤めて、不精無精に振り返つた。Tは早速、

『君とは、○○○○會合で會つたね』といつた

『ウン、君の話を聞いたつけ』さすがに、きまり惡さうに口の中で答へた。

『君は此處で働いてゐたのか』

『ア、、最近働くやうになつた。』

『大奴、おかけ樣で、僕は放逐されるんだ』

Tは全く、抑へ切れぬ怒りが、破裂しさうになつた。その男は、スツカリ度胸をすへたと見へて、わざと笑いながら、

『どうだね、マルクスの資本論は。』

Tはカツとなつた。彼の手は怒りに慄へた。そのスパイが『資本論』といつたのは、その會合で、Tが日本譯の『資本論第一卷』を持つていつて、日本にも、こんなものが出來たといつた事を、その男は冷かし半分に云ひ出したのだ。

『資本論がなんだ。覺えてゐろ。畜生！ いつか復讐してやるから』とTは怒鳴つて梯子段をかけ降りた。

外に出れば、最早街燈がついてゐた。テームス河から吹いて來る風は、冷たく頬に觸れ、Tの熱情も、興奮も、自然に靜まつていつた。

□

Tは、直ちに〇〇〇〇〇〇支部の書記、A君の家に驅けつけた。しかし、いくらAのベルを押しても答へはなかつた。やつとの事で階下の老婆を見つけて、Aの事を聞くと、Aは昨日から、田舍へ出かけて、暫く歸らないだらうと云つた。奴、先廻りをして、逃け出したな、英國の奴等は、どうしてかうも臆病なんだらうと齒がゆく思つた。

更に、引き返して、PとKを訪ねやうとしたが、もう日はすつかり暮れてゐた。で、そこから下宿に歸ることにした。

□

家では、Rが不安な氣持で待つてゐた。Tは戸を開けて入りながら、

『何でもなかつた』とわざと笑いながら云つた。

『さう、それはよかつた。』

『しかし、一週間内に英國を出てゆけといふのだ、もし出なければ、フンじばるといふのだ。つまり追放だね』

Rは目を見張つて驚いた。

『あら、それでは、「何でもない」どころぢやないわ、一週間なんて。で一體、何が悪いといふの。』

『僕にはその理由がサツパリわからないがね、つまり「好ましからぬ外人」だから出ろといふのだ。しかし、まあ、Iのやうに監獄に入れられるよりはいゝよ』

彼等は、下宿の者達には、日本から早く歸れといふ手紙が來たといふ事にしておいて、出發の計畫をたてた。

頭を惱ました問題は、行先地の選定であつた、巴里には親しい友人がゐるが、佛蘭西の官憲は、英國よりも苦手だ。獨逸も、三月一揆以來、過激派狩りは、隨分猛烈を極めてゐると聞いた。で、最も安全らしいのは瑞西だ。幸な事には、瑞西に、彼等の知己が一人ゐたので、そこへ行く事に決定した。

しかし、彼等はどうしても、一週間内に、出發したくはなかつた。實際に於て、十四日の土曜は半休、日曜と月曜とは、恰度聖霊降臨祭日で役所も商店も閉ぢてしまつて、この三日間は何事も出來ぬ。Tはこれを口實にして、三四日延期してもらうと考へた。

□

翌日は早朝から家を出た。先づコベントガーデン〇〇〇へ行つた。WとCと、それから二三人の事務員がゐた。元氣者のし

は『君、ウンとガン張つて、捕へるなら捕へさせたらどうだ。そして、國際問題にでもして、トムソンの野郎を、やつつけてやるといゝんだがな』と云つた。すると傍にゐた老練のWは、『してし、君は「外國人法」でやられたんだから、吾々にはどうにもしやうがない。まあ默つて出かけるんだね』と云つた。結局、この際、長いものに卷かれて一週間内におとなしく出る事に決めた。

Tはその足で日本領事館へ出かけた。そして、佛蘭西經由瑞西行の旅券の手續を願つた。大使館から通告でもあつたと見へて、書記は默つて、すぐ手續をしてくれた。Tは氣味が惡かつた。

次に、エクレストン、スクエアの『勞働調査部』へ出かけた。ダウニンク、ストリート（その十番地に首相官邸がある）といへば、英國政界の中心地を意味する如く、エクレストン、スクエアといへば、勞働界の總本部を意味する、スクエアの三十二番地には『勞働組合大會總委員會』があり、三十三、三十四は『勞働黨』本部になつてゐる。これらは、白ペンキ塗のあまりパツとしない四階建長屋だ。

その三十四番地の天井裏に『勞働調査部』がある。調査部は、勞働問題百般の事情を調査し、加盟勞働團體に之を報告するのが目的で謂はゞ、英國勞働運動の頭腦の部を受け持つものである。シドニー、ウエツブ等の力によつて、フエビアン協會の中に造られたものだが、一九一八年に協會から獨立し、更に翌年には勞働黨本部の四階を無賃で貸してもらふことにして、蔭にあつて、英國勞働運動に貢献したことは、甚大なものである。勞働黨や勞働組合の宣傳ビラ、パンフレツトなどは、多く此處で作られたものだ。ウエツブの有名な『英國勞働組合運動史』の一九二〇年版の最後の三章の骨子なども、實は此處で編まれたのだ。

勞働黨の厄介になつてはゐるが、この調査部は決して勞働黨の御用ばかりを勤めなかつた。主事のページ、アーノツトや、國際部のパルム・グツト（印度人）は、英國共產黨の主腦の人物だ。彼等は、天井裏から、常にヘンダーソンやトーマスを手ひどく攻撃してゐる。

Tは、この調査部へ、仲好しのアーノツトを訪ねた。彼はTの出來事を聞いて驚き、且つトムソンと日本大使館とを攻撃した。Tの噂を聞いて、他の仲間もやつて來た。そして彼を取りまいて、一しきりトムソンの惡口に花を咲かせた。アーノツトは明後日、Tの送別會を開く事を約束した。

其所を出てTは、チヤリング、クロス、ロド六十六番地の

『爆弾書店』へ行つた。チヤリング、クロス、ロードは、東京の神保町に當る本屋町で、爆弾書店は、社會主義的書籍の一切と、新興藝術に關する書籍とを取扱ふ小さい本屋だ。此店へは、諸種の社會主義者が集つて來る。主人のヘンダーソンは、クロポトキン等と親しい古い社會主義者で、彼の禿頭と、口髭の格構が、レニンに似てゐるので、レニンの綽名がある。赤ネクタイをつけて、店番をしてゐる

Tは、その店のFに會ひに行つたのだ。人のよいFは、Tの話を聞くと、色を變へて驚いた。荷物の準備を手傳つてやらうと云つたが、迷惑をかけてはいけないと思つて、斷つた。そして、その夜、再びある場所で落ち合ふ事を約して別れた。

□

翌日から出發の當日までは、晝間は友人を訪ね、夜は準備にかゝつて、殆ど、不眠不休の日が續いた。幸、未知の日本人がTの噂を或る英國人から聞いて、親切にも、突然Tを訪ね、二日間も、荷造の手傳をしてくれた。T等は、捨つる神あらば助ける神ありといふ諺を想い出して喜び合つた。

その夢のやうに過ぎた十日間の中、Tの忘れる事の出來ない印象を受けたのは、十八日の水曜日の夜の〇〇〇倫敦中央支部例會の光景だつた。

それは、Tにとつては、實に最後の會合であつた。彼は、仲間の人達に逢いたさに、夕暮から出かけた。會場は、大英博物館地下電車停留所の裏手に當る、ミネルバ・カツフエ・の三階だ。この建物は、最近まで、英國の男女同權運動中心になつてゐたが、今なほ二階には、『婦人自由協會』の事務所がありその機關紙『選擧權』も此處から出てゐる。三階は集會所になつて、以前は勇敢な参政權運動者が毎夜集つて氣焔を擧げたものださうだが、一九一八年の選擧法改正で三十歳以上の婦人に選擧權が與へられると共に、彼等の間も幻滅の悲哀が來た。そして、ある者は社會主義運動に、ある者は勞働黨に、またある者は勞働組合に走つて、婦人自由協會は、纔に貴婦人のポケット・マネで支へられてゐる有樣になつた。このカツフエは手輕な菜食料理だけを作り、夕方から閉めてしまつて、夜間は三階の會場を勞働組合や思想團體の會合に貸してゐる。

Tは暗い裏通りから門を入らうとすると、其所に見慣れぬ職工體の男が立つてゐて、『今夜の會はありません』と云つてはTを入れまいとした。そんな筈がないので彼は無理に入つて、暗い梯子段を上つた。三階には、最う三四名の仲間が廊下で立話をしてゐた。彼等は何處で聞いたか、既にTの事件を知つてゐて、彼の顔を見るなり、『やられたつてね』と云つた。T、

◆いて、いつも會場に入らうとすると、鍵が下してあつて、戸が開かなかつた。仲間の一人に理由を聞くと、警察が手を廻して、今夜の會合を開かせまい算段らしい、と云つた。

　その時、荒々しい靴音を立てゝ、元氣者の鐵道從業組合員Kが上つて來た。彼は會場が無いことを聞くと、『ロックアウトが宜し、別の室を占領してやらう』と云つた。

『他の室も駄目だよ』と、合同機械工組合のSが云つた。

『四階はどうだ』と、最近アイルランドから來たのだといふ、アイルランド訛の多い二十三四の大學生が聞いた。

『四階は開いてゐるかも知れんぞ』。君上つて來てみろよ』と鐵道のKが云つた。

　大學生は、いかにも大役を仰せつかつたといふやうな様子をして、暗い四階の梯子をゴトゴトと上つていつた。すると、間もなく、暗の中から、

『萬歳（ブラボー）、開いた室があるぞ、同志（コムレード）、みんな上つて來い』と、大聲で怒鳴つた。三階の者は歡聲をあげて、四階に通ずる廊下の方へ行つた其處は眞暗で、手さぐりでなくては歩けなかつた。交る交る、マッチをとぼしては梯子段を上つた。

　四階の室は、狭くはあるが意外にも立派だつた。安樂椅子やテーブルが整然と並べてあつた。何のために、こんな室が必要なのかわからなかつた、恐らく婦人自由思想家が晝眠でもする處だらうと、誰かゞ云つた。

　席に就くと、Kは例の通りに大聲に話しだした。

『今ね、階下の戸口に、おかしな男がゐて、今夜の會はお流れだなんて云ふんだ。それで、俺は嘘つき奴と云つて、なぐりつけてやつたんだ。先生悲鳴をあげて逃げ出したよ。官憲にして見れば、この俺達の支部だけが、かうして倫敦の眞中で公然と會合を續けてゐるのが癪にさわるんだよ。それで、とうとう奥の手を出して、今夜は妨害に來たらしい。しかし、あんな弱い奴は駄目だよ。』

　この支部で一番の働き手であるアルランド婦人のWは、煙草の煙を吹き出しながら、

『今夜、此處を襲ふやうなことはありますまいね。〇〇〇〇では、ひどくやられたさうじやありませんか』と、心配さうに云つた。

『ナーニ大丈夫さ。此處には柔術の先生がゐるからな』と、機械工のNが半畳を入れたので、皆Tの顔を見てドッと笑つた。

　すると、鐵道のKはTを正面から見ながら悲痛な顔をして尋ねた。

『オイ、日本の兄弟、君は追放されたんだつてね。』

『追放といふほどではないが、ともかくも、トムソンに呼びつけられて、一週間の宣告を受けたのだ。』と、Tは答へた。

『氣の毒なことをしたね。けれど、何處へ往くつもりなんだ。』

『何處といふ當はないが、ともかくもドーバーを越へて、佛蘭西へ渡るつもりだ。それから先は、よくわからないよ。』

『往き處がなくなれば、露西亞へ往くサ』と、アイルランド大學生が云つた。『獨逸から露西亞に入るのは、非常に樂だと云ふぜ』と、後から來た散髪屋のCが云つた。

『Tも氣の毒だが、俺もとう／＼首になつた。今朝、會社から手紙が來て、一週間の通告を受けたんだ。もうスッカリ手が廻つたらしいぜ。何しろ、〇〇〇〇名簿が奪はれたんだから仕末が惡い。君等の首も何時飛ぶか、わかりやしない』と、鐵道のKが述べ立てた。

『それで、君の組合は何うしたんだ』と、Cが尋ねた。

『てんでお話にならないサ。今日の午後組合の事務所へ行つたところが、幹部の野郎、君は思想がいけないから、君の復職を會社にかけ合ふことはできない、とぬかすんだ。俺は、癪にさわつたから、會社の手帳を引き裂いて幹部の顏に打たきつけてやつたんだ。』

昂奮した鐵道君は、例の如く、鐵道從業員組合員の不甲斐ないこと、組合主事のトーマスが異徒であること、彼が自己の地位を保つためにあらゆる陋劣な手段を用ひてゐること、組合員にして社會主義團體に關係ある者は虐待され、或は除名されること、などを永々と話した。そして、『俺も最う英國はいやになつた。また布哇へ歸つてゆくかな』と、彼は放浪者(バガボンド)らしい目を輝かして、つぶやいた。彼は英國人ではあるが永らく米國や布哇を放浪して、數年前歸つたのださうだ。また布哇で日本人と一緒に働いたことがあるので日本人に好意をもち、日本の事情も多少聞いてゐた。Tは彼から吉原や藝者のことを聞かれて、赤面したこともあつた。

□

會は定刻よりも二十分遲れて開かれた。この支部に屬する會員は四十人近くもゐたが、例會に出席する者は常に五分の三を越えなかつた。が、最近官權の壓迫が激烈になつて以來、その數は更に減じて、その夜の會合には十八九名の者しか出席しなかつた。しかし、この難局に當つて、十八九名でも踏みとゞまる者があるといふことはTには心强く感ぜられた。

支部長のKも書記のAも、官憲の追跡を逃れて何處かに姿を隱したので、退職軍人のHが書記を務め、一番古顏の事務員組合のDが議長に選ばれた。Dは官權の迫害は益々激しくなつた

が、吾々はビクともしないといふやうなことを述べておいて、炭坑夫の悲惨な状態を報告した。最早や鑛夫聯合會の基金はなくなつて、鑛夫は自分の家財を賣つたり、他の勞働者の救援によつて生活してゐる。この支部からも、出來るだけ救濟したいと云つた。

すると。アイルランド婦人は立つて、『炭鑛夫の小供等に』と書いた小さい鉢を廻して歩いた。銀貨を入れる者が多かつた〃は二志六片銀貨を張りこむだ。

誰かゞロツクアウト前に、病氣の故をもつて鑛夫聯合會長の職を退いた老將スマイリーの問題を出した。

『俺は卑怯だと思ふ。この大事件を恐れて逃げ出したんだ』と、鐵道君が大膽な斷定を下した。

『そんな馬鹿なことがあるか』とスコツトランド人の鐵工Mが猛然と立上つた、『俺はボブ・スマイリーをよく知つてゐるんだ。スマイリーは決してそんな卑怯な男じやない。彼は實際身體が惡くて、こんな大爭議は到底最後まで導けないと思つたので、潔く辭任したんだ。それが何うして卑怯だ。』

『僕はスマイリーについては、まだ外にいやな事を聞いてゐる』と、床屋が口を入れた。

『それは例の金の問題だらう。その噂なら、それは主事のフランク、ホツゼスの作り事だ。』

Tは、炭坑夫組合の内部にも、ゴタ／＼があることを知つた

議長は鈴を鳴して立つて、スマイリーの話はこの位にしておき、議事が先に進めたいと云つた。そして、彼はTが退去を命ぜられたことを報告した。初めて聞いた者は驚いてTの顏を見た。Tは椅子から立つて、全くつまらないことに引かゝつて、英國を去らねばならぬことは殘念だと云つた。『僕は諸君と再び見へむ日の早からむことを切望する』と結むだ。

それから、鐵道君、床屋、鐵工といふ順序で、Tに對する同情やら慰藉を述べ、皆云ひ合せたやうに、英國官憲を呪ひ、英國が一日も早く新社會制度にならむことを望むと結論した。Tは淚ぐましい氣持になつたから、かうした會合に出るのも最後だ、是等の同志と何時再會できるかわからない、と思ふと今更ながら慕しい氣持がして來た。

Tは出發準備に忙しいので、彼の報告が濟むだので、歸ることにした。みんな一人一人彼に輕い握手をして、『同志(コムレード)、身體を大切にし給へ。再た會へる日を作らう。』とか『將來の英國は喜むで君を迎へるよ』と云つたりした。

『さよなら』と、Tは戸口に立つて云つた。

『永久に』と、アイルランド學生は上づつた聲で叫むだ。

『お黙りなさい。永久じゃないよ。』と、アイルランド婦人が鋭い聲で云つた。

『おばさん。僕にとつては永久だよ。この冬までには、僕の命は……』彼は昂奮して後が續かなかつた。一座は、この熱狂兒の將來を想つて、暗然とした。

Tは、感傷的な氣持になつて、眞暗な梯子段を降りていつた。

□

警視廳に交渉した結果、Tは出發を三日間延すことができた。

二十三日の午前十一時に、倫敦ビクトリア停車場から、ドーバー行の汽車が出る。T等は荷物をまとめて、郊外の職工街を出た。下宿の老主婦は、眞底から彼等との袂別を惜むだ。何事も知らぬ彼女は、佛蘭西と英國とは近いから、是非もう一度歸つて來るやうに繰返し繰返し云つた。そして、門口でTを抱いて頬にキスした。彼女はT等の姿が消えるまで、涙を一杯溜めて門口に佇むでゐた。

停車場に着くと、其處には例の『高等』が待つてゐた。そして、T等の荷物や切符の世話をしてくれた。プラットホームに出ると、『高等』はTに向つて、

『私を御存知ですか？』と、聞いた。

『誰が忘れるものですか』と鋭く答へた。

『高等』は氣まり惡さうな顔をして横を向いた。Tは思はず吹き出した。

『高等』は空いてゐる座席を見つけて、T等を載せて、汽車の出るまで待つてゐた。汽車が動き出すと、彼は、

『さよなら、御機嫌よう』と云つた。

Tは窓から首を出して答へた。

『さよなら、御厄介をかけました。トムソンによろしく。』

（一九二一、一一、二〇）

禪臭

岡本一平

禪居士は朝らつくり起きる。着物を着換へる。顔を洗ひに出る。

齒を磨き乍むそろ〳〵禪の商量を始める。むかし趙王が趙州從諗禪師に尋ねた事がある。

『お歳を召して幾枚の齒がお殘りか』

『たつた、一枚です』

『それでどうして物が召上られるか』

『一枚でもなんの〳〵』

禪居士は趙州和尚の所謂一枚の齒は、實は山河大地草木瓦石、佛魔共に咬み破るあの一枚の大きな齒である事を意味すると承知して大に得意だつた。應へらく、趙王はそうとも知らずこの返事に無不審を懐いたらう。馬鹿な奴だ。

金盥に水がある。水に向つた。

迦那提婆尊者が龍樹尊者に相見した。龍樹は提婆が來るのを見ると一鉢に水を汲んで默つて前に出した。提婆は默つて一本の針を取つて鉢に投じた。龍樹は之を肯つた。

この話頭を想起した居士は齒磨揚子を水の中に落した。金盥の底に當つた揚子の音は水に含まれて鈍かつた。揚子の沈下する爲め水面に出來た窪みを充たそうと水は周圍から寄つて來た。中央で衝突した反動が波となり逆に金盥の椽へ寄せた波紋の靜まるまで待つて居士はごし〳〵と顔を洗つた。

顔を拭く時丁寧に顔の道具の在所を調べて見て居士は譯の判らぬ事を云つた。

『當下に眼横鼻直なることを認得して、遂に人に瞞ぜられずか、眼横鼻直、珍重』

それから居士は椽側へ坐布團を持出して新聞を展げた。しばらく居士の頭に於て佛法は世法と一致する。

電報欄を見て政治面を見て經済面を見て社會面に移らうとする時に

『おとうさん御飯ですよ』

といふ子供の聲が聞えた。『なんだもう朝の粥事か』居士は立つて行つて食卓に向ふ。

子供の姉と弟が已に食卓の前に坐り箸を握つて居る。妻君が飯をよそつて居る。

居士は想つた。一粒の飯でも志さへあれば世界中の人民に與へて悉く令得飽滿せしむる道理があるのだが、動物的の學問をしてゐる先生達には判らぬ。居士の前に白き飯が盛られて置かれた。

居士は合掌して氣に入りの食事の偈を勝手な節をつけて唱へた。

天下太平、鉢盂喫飯

永平の語錄よりこゝの處だけを抽いたのだ。

弟の子供が塗箸に狹んだ芋を滑り落した。姉が拾ひ取つてやらうとした。それが弟の氣に入らぬ。箸で顏の突き合ひの喧嘩を始めた。母親の仲裁では埒開かぬ。居士の裁配を促した。居士しばらく良久して居たがやたら口を開いた。

『一得一失、一失一得』

『そをら又おとうさんの寐言が始まつた』

家内中では居士を問題にして居らぬ。

母親は時計を見て居たが急いで子供の周圍に落ちた飯粒を口へ拾ひ込み乍ら

『そら〳〵もう時間ですよ。早く喫粥了也になさい。まだ喫粥了也でないんですか、困りますね。學校が始まりますよ』

近頃母親や子供の間にも居士の寐言に釣り込まれこんな禪の術語を通用さすようになつた。

居士は眞つ直に身體を伸して悠々と飯後の茶を飲んで居る。

嘗て一人の新參の僧が趙州從諗禪師のところにやつて來た。

趙州が口を切る

『お前、前にこゝへ來た事があるか』

『來ました』

『茶でも飲め』

その僧は歸つて、又一人の僧が來た。又趙州が訊ねる。

『お前、前に來たか』

『來ません』

『茶でも飲め』

これを聽いてある院主が和尚に訊ねた。

『來ましたといふ僧にも、茶でも飲め、來ぬといふのにも茶でも飲め、それは一體どういふ譯ですか』

聞流して趙州は別に口を開く

『院主さん』

『へゑ？』

『茶でも飲め』

この話頭を悉く味ひ終ると、居士は最後の餘瀝をぐつと仰ぐ。

して立ちかけた妻にいふ、

『お前、茶を飲んだか』

『飲みましたわ』

『茶でも飲め』

『ふん』

食後の休息に庭へ出た。庭の植木も等閑なるは一つも無い。祖師西來意を象徴する柏樹子。投子の所謂、羅松異色なきは羅松ならずんば標し出ですの松、般勤に梅檀樹を抱き得たりの句下に歸宗禪師を脫落せしめた梅檀。竹が二種ある。叢竹は多福和尚の心境、一莖兩莖は斜に三莖四莖は曲つて居る。孟宗の綠を仰いで居士は箒を執り舉げた。そして、竹の幹へ向つて芥を強く掃き付けた。瓦の缺、小砂利が幹に當つて音がする。居士は箒を斜にして音に聽入る。

香林閑禪師が、潙山に問着せられた後の事である。

林、經卷冊子上の記得は畫餅、飢に充つべからずを悟つた。茅を焚いて南陽に抵つて忠國師の遺跡に庵居した。一日草木を芟除する際、跳ね飛んだ瓦礫によつて、竹を擊ち聲を作した。廓然として惺悟した。居士はその聲を聽かんが爲めである。

聽き畢つて居士はひとり言をいつた。

『竹が細いから響が悪い。もつと太いのを植ゑなくては』

濟んで石の上に腰を下ろし心を遊ばせる。天清地寧。鳥飛んで鳥の如し。

塀の下を潜つてちよろ〳〵と隣の小犬が入つて來た。小指程の尻尾をこまかく振り立て鼻を地に摩つて庭中を嗅ぎ廻る。四肢の運び具合に見惚れる許りの節奏がある。嗅ぎ去り嗅ぎ來つて遂に居士の足に逢着した。小犬の鼻は濡れてゝ冷めたい。思ひがけなくも足の指先をべろ〳〵と嘗め出した。

居士はしばらく小犬の相手になる。

小犬には名がある。ベスといふのだ。だが居士はそんな事は言はない。狗子と呼ぶ。

『狗子、何か嗅ぎ當てたか』

ベスは默つて居士の瞳を見てゐたが急に二三尺後へ飛び下り身を縮めて襲はうとする勢を示す。

居士は小犬を前にしてやをら兩手を舉げ空中に大きな圓を描いた。そして柔しい貌を作つて

『狗子、判るか』

ペスは居士の手に驚いて一寸飛退いた。身構へを直して

『啐々』

普通の如く犬はわん／＼と鳴いたのだが居士の耳にはこういふ難しい字に聽える。それから犬は遮二無二向つて來た。居士は少々辟易した。漸く小犬の耳を捉へ當てた。耳で提げて小犬を宙に釣ると小犬は蹤蹣を踠き乍ら悲しき聲を立てた。

居士はそれにも關はずに、小犬の重量をはかつて見た。耳で提げて量つて見ても足で提げて量つて見ても尻尾で提げて量つて見ても小犬の重量は同じだ。居士はわが意を得たりと許りにやりと笑つた。暝目やゝしばらくあつて云つた。

『畢竟如何』

そして今度、彼は眼を閉くと同時に小犬を抛り出して仕舞つた。掌の毛を拂ふ。

小犬は疲勞れて仕舞つた。箒が横になつてる傍へ行つて寢た。

居士の商量はそれからそれへと渉つて行く。

肇論にこう云つてある。

情と無情との別ちは無い。みな共に一體である。萬物は自己である。云々。居士はこの問題を研究し始めた。居士は實際に徴して見る氣になつた。棒を持つて立上りかの犬と竹箒の側へ寄つた。先づ小犬を撃つた。

小犬は跳上り逃げて行つた。次に竹箒を叩いた。竹箒は逃げぬ。

『狗子は情あり即ち去る。竹箒情無ければ自ら住る。情と無情と如何が一體を成すを得ん』

こういつて居士は自問した。頭を掻き乍ら自答

『須らく狗子も竹箒も總に擲下すべし。咦！』

居士は大きな聲を出した。

來客がある。

何れ居士の如きところへ訪ねて來る客だから用があるような無いような妙な客だ、坐につく。

『時に金は無いか』

『人の處へ來て何故挨拶しないのだ』

『門を入る前に挨拶が出來てる』

『ではこゝへ入つてからどうする』

『入つて若し挨拶すれば帽子の上へ帽子を冠つて仕舞ふ』

『なんだ、君は帽子を冠つてるのか』

『いや、手に持つてる』

『何に遣ふのだ』

『入用の時にさ』

『ぽつ〱雨が降つて來たぞ』
『ちや冠らう』
『冠る必要があるのか』
『冠るけれども雨は漏る』
『時にその帽子はいくらだ』
『四圓十五錢』
『廉ものだな』
『廉ものでも帽下、三千大千世界が容れられる』
『僕に借せ。（冠つて）どうだ似合ふか』
『丁度、君に肖てる』
『違ふ、僕さ』
『君が君を冠つて居ない』
『角に牛が生へてゐる』
『時に君に訊き度い事がある。潙山一頂の笠を作らずんば莫傜の村に到ることを得るなしといふ語を知つてるだらう。潙山一頂の笠とは何だ』
『教へよう。一寸來い』
客側へ行く居士蹴倒して蹋む。客脚の下で
『蹋むのは随意だが時に金はどうだ』
居士居住ひを直して
『有るには有る、然し、金を遣るのも眞理を遣るのも同じだ。財法二施、等うして差別なし』
『只今は財施の方に差別して貰ひ度ひ』
居士用箪笥から紙幣一束を取出し客の前に帶封を切つて並べる。客手を展して
『こんなにいらぬ二三枚借りよう』
『君子は財を愛す。但之を取るに道あり』
『證文でも書くか』
『その必要は無い。君、無手で取つて見ろ』
『無手で出せ』
『それは大燈國師が瓜を貰ふ時の言葉だ』
『君がその時の瓜の施主の言葉を遣ふからだ』
『未在、更に道へ看ん。若、一轉語を下し得ば金を貸さう』
客、懐から収めた紙幣を取出し居士の前に置き、居士の頭から帽子を取戻し自分の頭へ冠つて
『驢往き馬過る』
『好い道得だ。さよなら』
客去る。主人紙幣を元の束に取揃へ用箪笥へ藏ふ。
妻の聲として
『あなた、親類の子供が惡るいと申しますから一寸見に行つて

やります。女中も連れて行きます。ですから肴屋が來ましたら、あなたお買ひになり、お菜は一人で喰つて下さい』

『よし』

居士は自分の書齋に毛氈を敷いた。紙を展べた。慰みの繪を描く積りだ。筆に墨を含ませて紙に臨んだ。

二尊者の繪を描こうと思つた。若し描けば、二尊者は繪中何を互に對談するだらう。考へて見る。やがて、二尊者のみならずこの紙この筆、那個か對談しないものがあるか。この結論に到着すれば二尊者は既に描いたも同じだ。紙をくる／＼と丸めて捨てた。

新らしき紙を展べて向つた。牛が樹に繋がれたところを描こうと思つた。一體牛が樹に繋がれてるのか樹が牛に繋がれてるのか。それが判らねば牛を先に描いていゝか樹を先に描くべきかも不明だ。又考へる。樹も牛も畢竟心に繋れて居る。そして慧可大師曰く心を求むるに不可得である云々。樹と牛と共に繋がれてるところを描く仕方は卽ちこの通りと紙を破つて棄てた。

山水を描こう。居士は立上つて山高くと云ひ、ごろりと横になつて水長しと云つた。山水を描くにはこれでも濟む事だ。何も筆紙を煩はすに及ばぬ。筆を措き紙を卷いて傍へ寄せた。

自畫像を描かう。果してどれが自分の顏だらう。子供を愛す時は菩薩の顏となり、腹が減つた時は餓鬼の顏となり喧嘩をする時には修羅の顏となる。人に意見をする時は佛の顏だらう。物に應ずる三十二應神みな一々に違ふ。眞の自畫像は父母未生以前に承當せねばならぬ。

作麼生か是れ本來の面目。

むかし洞山价禪師は爲人應化の爲めに鳥道といふ一つの熟語を設けた。到つたある心境を象徴するに空飛ぶ鳥の往くも還るも跡なき處を以てした。

僧があつた。禪師に問ふた。

『あなたは普段、弟子達に鳥道といふのを歩かせようとなさる相だが、鳥道とは何ですか』

『其處は一人にも逢はない』

『どうしたら行けますか』

『關はず、脚下無私に成り切れ』

『鳥道といふのは、では本來の面目の事らしいですね』

『お前は何故そう顚倒する』

『何處が顚倒した點ですか』

『お前顚倒せぬなら下郎を旦那と思ひ違ふ譯が無い』

『では改めて御尋ねします。何が本來の面目でしょう』

『鳥道を行かぬ』

鳥道を行かぬとて別に鳥道を避ける岐路は無い。果然本來の面目は無面目にして始めて本來の面目に契ふ。洞山の親切、この呼吸のところを爾く道破して與れたものであらう。

『僕の自畫像もこれで描けた』

置いた紙を取除く眞似をした。新らしく敷き展べる眞似をして故の紙の上へ一氣呵成に二行の字を書いた。字は稚拙のうちに俗氣を帶びてる。

世畫有法　匠畫無法
佛言法本法無法

これは、近世の名匠博多聖福寺、仙厓和尚の畫讚である。居士は近頃の言葉でいふオリヂナリテーが無いから大概他人のもので間に合はして仕舞ふ。

そして書齋の椽側の欄干に椅つた。午に近い陽に血脈の順行を良くした蒼空は高さも幅も充分に張り擴げて居た。鳶が一つ凝滯なき環を描いて居た。居士はそれを仰いで

『ほしいまゝに描き出す啼鳥の聲か、鳶は繪が巧い』

といつた。大きく伸びをした。

しばらく、ぼんやりしてると丁度肴屋が來た。

『今日は、今日は鯛、鮪、平目、烏賊、太刀魚、鱚、蛤、鯉と鰻と蝦と蟹は生きてます』

居士は出て行く。魚盤の中に水が少し入つて居る。多くは泳いで居る。中に一二尾腹を浮かして死んでる。鱚だ。

『肴屋、魚は水が命だな』

『そうですとも』

『だのに何故水の中で死ぬのだ』

『揺れるからでしよう』

『揺れない河の水ぢやどうだ』

『病氣でなければ巖の角へでも頭をぶつけますかね』

『その返事ぢや駄目だ。貴様代つて僕に訊いて見ろ』

『へい何と訊きますか』

『さつき、俺れが言つた通りさ』

『何とか言つたつけ。魚は水が命だのに何故水の中で死ぬのですかね』

『それは丁度地に立つ人間が轉べば、叉地によつて立上るようなものだ』

『中々難かしいね。時に魚はいかゞです』

『魚が陸に遊ぶ時はどうだ』

『冗談はやめて下さい』

『でも試しに逃つて見ろ』
『捉まりますね』
『河の水へ戻れば』
『逃げちまひます』
『それでいゝのだ』
『魚を買つて下さい。旦那蝦を置いてきましよう。旦那は蝦がお好きだ』
『その蝦は何か、お前が見付けたのか、蝦がお前を見つけたのか』
『河岸の問屋の親方があつしを見付けたのです。買へつてね。あつしが代もののいゝので無くちや相手にしねゑのを知つてるものですから』
魚屋は臺所へ廻つて桶を持つて來て車蝦の生きのいゝのを七八尾入れて置いて行つた。
『さよなら。又、明日』
居士が桶を取上げると中で蝦が跳ねた。
『蝦跳れども斗を出でずか。これは鬼殼焼がよさそうだ』
臺所へ持つて行く。板の上へ蝦を取出し、出刃庖丁を下さうとして庖丁の腹で蝦を三遍叩いた。そして引導を渡した。
『喝　この蝦、看來れば只是れ鬚と甲と尾と些少の手脚。來るべき蝦なく去るべき蝦なし』
庖丁を突込んで遂に脊開きにした。串に刺して焼いて居るところへ臺所口より若者が顔を出す。
『桶か盥の繕しはありませんか。旦那、この桶が壊れてます。繕して來ましよう』
『うむ、いつ出來る』
『明後日』
『お前のところに桶と胴側と底の無い桶は無いかね。その桶なら丈夫だが』
『旦那揶揄ちやいけません』
『修業して拵へる工夫をしろ』
『さよなら』
居士は飯を獨りで喰べる。櫃側を杓子で叩いて
『飯櫃の側に居ながら餓死する奴だ』
湯の入つてる鐵瓶の蓋を叩き
『湯に臨み乍ら渇へ死する奴』
飯を飯椀に盛り、湯を茶椀に注ぐ。次に箸を湯の中へ突込み攪き廻して
『湯の中に居乍ら渇へ死する奴』
飯へ箸を竪に突込み

『飯の中に居て餓死する奴』

終に飯を口へ運ぶ。含んだ口で云ひ惡くそうに

『通身是れ飯』

湯を呑んで

『通身是れ湯水』

頓て喰ひ畢つた。

午後はいよ〳〵好晴である。居士は散歩に出度くなつた。ふらりと出る。留守番なぞといふ事を考へる居士ではない。市の中を行く。幼稚園がある。保姆が運動場の眞中でピアノを運び其處で唱歌を奏して居る。こども達がその周圍を舞つて居る。居士は一つの話頭を想ひ出した。

むかし乾闥婆王、世尊に樂を奏して聽かせた。山河大地、盡く琴の音に和して唱へた。迦葉も起つて舞つた。それに就て王が世尊に訊ねた。

『迦葉は充分修業の積んだ人と聞きました。それにあのように踊るのは、まだ何處かに誘惑されるところが殘つてゐるのではないでしょうか。』

世尊が答へた。

『全くもつてそんなところは無い。無闇に法を謗るまいぞ。』

王は續いて琴を掻き鳴らして見た。三遍も。三遍とも迦葉は立つて舞つた。そこで王が承知せぬ。

『その後もたび〳〵彼はおどります。矢張りいけないのでは無いのですか』

世尊

『迦葉は全く踊りはしない』

『あなた、嘘を仰しやつては困ります』

『誰が嘘を云ふ。よくお聽き。お前が琴を鳴らすと山河も大地も木石もみな琴の音を出すではないか。これは善からう』

『そうですとも』

『迦葉もそれと同じさ。意識してではない、自然だ。だからあれが踊つたのではないとわたしがこう云ふのさ』

『判りました。信ぜられます』

居士はこの因縁にあやかる爲め墻の外で踊つた。近頃は幼稚園の唱歌でも發達してる。居士が合せて踊るには難かしい。踊つて踊をおどらぬ城に達するまでには居士は汗を流した。

其處を離れて出かけた。賑かな町が盡きて城の石垣がある。石垣に沿ふて行くと城の見附。見附から外は郊外の野原、新らしく建つた住宅が少し許りある。見附の眞中で居士は又一つの話頭を心に喚起した。今度のは阿難尊者、對世尊の問答である。

阿難の方から申出る。

『今日、城から外へ出て感銘すべき事實を發見しました』

『何だね』

『城に入ると一群の踊り子が舞つてゐました。だが城を出るとすつかり無常を感じました』

『そうか、阿難。自分は昨日、城へ入つて感銘すべき事實を發見したよ』

『妙ですな、どういふ感銘すべき事實でしよう』

『自分が城に入つた時一群の踊り子が舞つてゐるのを見た。城を出だ時も亦一群の踊り子が舞つてゐるのを見た』

生と死と分ちて觀たのが阿難かも知れない。

苦と樂と分ちて觀たのが阿難かも知れない。

煩惱と菩提と分ちて觀たのが阿難かも知れ無い。世尊に於ては生と死と總に生命。

世尊に於ては苦と樂と總に歡樂地。煩惱と菩提と總に一實相。

こゝに於て、從つて城の出入に關する世尊の表現と阿難の表現との相違が生れたのだらう。

但、解說の一部を聽いて假に世尊の說示と阿難の說示の間に甲乙を附けてはいけない。更にこの上に、生命が生と死に別れて活躍し、歡樂地が苦と樂に別れて働き、一實相が煩惱と菩提に分れて仕事をする頗る妙味のある向上の一路である。高き必ずしも世尊の下にあらず。この點の參究、須らく微に入り細に入るを要す。

居士は心から話頭を打拂ひこう自らを警しめた後。城の出入の實地踏査に取かゝつた。先づ戻つて城の中に入つた。按摩が眼開きに道を敎へて居た。城の外へ出て見た。屠殺場の車で馬が馬肉を運んでた。

その儘あてもなく郊外の新開地を逍遙した。

兩側にぽつ〳〵家が並んでる。大きく間をおいては又ある。立派な電柱だけが規則正しく建つてる。拓かれた路には雜草が生へて枯れてる。路を横斷して開拓當時の溝が殘つてる。

溝の水は腐つて水面に鑛物性の油が浮いてる。

跨ぐに雜作も無い溝だが板を渡してある。居士は先づ渡つて顧る。すぐ後から來た學生が續いて渡らうとした。居士は板を持上げて、

『君渡り給へ』

學生は妙な顏をしたが懷手のまゝぴよんと飛越へてさつさと行く。板を下ろして居士は言つた。

『空手鋤頭を把り、步行、水牛に騎る、人橋上より過ぐ、橋は

流れて水は流れず』
五六十歩行つた處で不審したものか學生は立停まり後を顧き居士を透して見て居た。
細い横町から幼い娘の子が駈けて往來へ出た。居士の行手の足下に倒れた。それを見て居士はほとんど同時に娘の子の姿態と平行に倒れた。
『嬢つちやん、さあ立てた〳〵』
と居士は云つた。娘の子は泣いてゝ容易に起上らぬ。居士も倒れた儘だ。母親が出て來た。
子供を抱起さうとすると居士
『子供を倒してはいかぬ〳〵』
と云つた。立上つてから居士と母親の問答
『あなたお危なうございました。でもお怪我は無いようで、結構でした。
『倒れたのではありません。お嬢さんを起したのです』
『でも』
『あれがわたしの起しかたです』
『へゑ?!』
母親は子供を連れて去つた。
模範になるような好時もいつしか日が暮れ、雨が降り出して來た。
『大好雨』
その儘行く。傘をさした人が後から來た。さしかけて呉れて伴になる。
『すつかり濡れましたね』
『美事に濡れた』
『濡れない處がありますか』
『何處に』
『水灑げども着せず』
『それは詩吟ですか』
居士無語。しばらく行く。傘の男空を仰いで
『止みそうも無くなりました。どうします』
『大根に根が生へぬ』
『あなた頭がお悪いか』
『頭は少々病氣だ』
『神經衰弱ならいゝ藥を教へましよう。試つてご覧なさい——』
『病氣は病氣だがとても難治の病氣だ』
『はてね』
『衆生を悉く救ひ取らうといふ病氣さ。ところが衆生は永遠の昔から未來永遠まで盡きる事が無いように出來てるのでね。

實は困り切る。君は如意輪觀世音の像を見た事はあるかね』
『見ませんね』
『あれは佛がこの煩ひを起して神經衰弱になつたところを現したものだ。だから片膝をこう立て頰に掌を當てゝ屈托顏さ』
『佛に屈托がありますか。これは初耳だ』
『君は生命といふ事を知つてゐるか』
『馬鹿にしてはいけません。これでも私は專門學校を出ました』
『失敬。ところでその生命に病氣がある』
『成程』
『生命に到達しても噛り付いて居てはそれが一つの病氣。生命の中へ入り込み生命の氣配ひさへ感ぜぬ程生命になり切るとも、他に働きかけねばそれが一つの病氣。得ぬ生命を得たと思ひ違へ、その自由さだけを眞似て歩るくこれは勿論病氣だ。前の二つに比べて後のはお話にならぬ。眞理探求道に於て痴呆性瘋癲狂と誇大妄想狂を兼ねた狂者だ』
『どうすればいゝのです』
『君は中々感心の男だな。菩提心を起した。前世に餘程の善根を積んだと見ゑる。宿縁淺からず今報を得て目のあたり善智識に遇ふと思ひ給へ』
『土手へ腰かけないで歩るき乍ら話して下さい。わたしの家はもう過ぎて仕舞つたのです。通り過ぎた序に一軒用足しをして來ようと思ひますからあちらへ歩るきましよう』
『先づ落付き給へ。これは大事の話だ。用足しなぞはこの世だけの業だ。扨と。どうも柳の雫が襟に入つて冷たいたね。むかし疎山といふ和尚が弟子達に示して云つた。自分は咸通といふ年以前に生命の本體を會得した。咸通年已後に生命の活用を悟つた。丁度その時雲門といふ名僧の卵が弟子の中に居た。君と同じような疑問を抱いた。君もその點では名僧候補者になる資格がある譯だ。
雲門疎山の前に出て云ふにはあなた生命の本體を咸通年以前に會得され生命の活用を咸通已後に悟られたといふが本當ですか。
疎山そうだ。雲門、ではお尋ねいたします。
生命の本體とはどんなものですか。疎山、曰く、椿杌。生命の活用は。疎山曰く、椿杌では無い。雲門、今度わたくしの方から勉强の爲めに、その理解を申上げて見度くありますがよろしくありますか。疎山よからう。雲門、椿杌こそ生命の本體を説明したものではありませんか。疎山、その通り。雲

門、棒杭で無い事が生命の活用を表現して居ります。疎山その通り。雲門、そこで生命は一切を該ねてますかどうでしよう。疎山、該ねない事があるものかな。この時に雲門、傍に在つた塀を指した。そして云つた。これをも該ねて居りますか。疎山、貴様塀の形式に捉はれちや駄目だぞ。云はれて雲門、恭しく御辭儀をした。なんと、これですつかり判つたらふ』

『いゝゑ』

『仕方ないな。では生命の血精注射だ。この方は効けば馬鹿に効くが、遣り損ずると命ものだ』

『やつて見て下さい』

『如何か是れ法身向上の事と訊き給へ、成る丈け勢よく』

『如何か是れ法身向上の事』

居士腹に力を籠めて

『井底の蝦蟆月を呑却す』

『さよなら』

『お辭儀を忘れてはいかぬ』

雨は晴れた。日が暮れて來た。居士はふと思ひつき女友のところへ廻る。居士に女友があるとは不思議のようだが相手を觀れば自然と解せよう。

彼等の交際は又趣が變つてゐる。

芭蕉と木犀が植ゑてある門を入つて行く。

『いらつしやい』

『何をしてたのです』

女、默つて箒を見せる。

『箒ですか』

『いゝゑ』

『箒では無いのですか』

『いゝゑ』

『何です』

女默つてさつさと掃いて行く

『掃いて淨潔になりますか』

『ならないの、掃けば掃く程塵が出て來るの』

『すつかり塵を除るものがあるのですかね』

『どんなもの』

居士あたりを見廻して

『これで判りますか――』

と云ひかけるところを女、箒でぴしやりと叩き

『あなた、お喋りねゑ』

居士頭を掻く。女掃除道具を仕舞ひ。
『こつちへゐらつしやい』
火鉢へ双方から焙る。
『あなたはいつも美しいな』
『どこがです』
『眉も、眼も、鼻も、口も、唇も、耳も――』
『そうやつて、あなた、すつかりわたくしの身體中を數へ盡せる許りなの』
『數へ盡して見ませう』
居士女の手を執つて握手をする
『これは握手ぢやなくて』
『握手々々』
『誰が誰に握手してるの』
『お客が主人に』
『主人がお客にですわ』
『そうです、然し客が客に』
といつて今度は居士急に立上る。女默つて眺めて居る。居士が坐ると同時に女立上る。
女、茶の間より狄の餅を運んで來る。
『お喰りなさい。あなた今日いくつお喫りになれますか』
『五つ』
『座敷の柱はいくつ喫べられるでしよう』
『茶の間へ行つてお茶でも喫んどいでなさい』
それからしばらく世間噺をやつた居士
『日本のような窮屈な土地で女は不自由ではありませんか』
『わたしは前にそう思つた事がありましたがこういふ話頭によつてすつかり自由になりました。あなた舍利弗と天女の話、お存じ』
『いゝえ』
『話しましようか』
『ゑゝ』
『舍利弗が天女に訊ねました。お前は折角神通力を持つてるのに何故女身を便利な男へと生れ更はらせないのかと。すると天女が申すに、わたしは永い間自分に女人の相を求めますのに了に不可得です。今更その必要はありません。そういつて天女は神通力を以つて舍利弗をいつの間にか天女の姿に變らせました。自分は舍利弗の身になりました。そして舍利弗の天女に訊ねるには、お前、何故女身を早く轉じないのか。すると舍利弗が云ふに我今知らず何ぞ轉じて而して變じて女身とならん。話は先づざつとこうです』

『あなたは今、あの天女の心理狀態に居るのですね』
『だらしのない天女ですこと』
居士は辭する。
『家へ歸ると妻君も子供も歸つて來て居る。晩食は藥石と稱して求道者は佛に內密で食べる糧食だ。むかし求道の僧侶は朝は粥晝は枯淡な麥飯黍飯、二度の定めであつた。夜寢る時分には空虛の腹が冷えて病氣を惹起す。で、石を焙つて腹に抱いて寢た。その名が傳はつてるのだ。居士の藥石は妻の手料理の西洋料理であつた。
少憩中、近くの菩提寺の和尙が湯を貰ひに來た。居士は一しよに入る。
『和尙。寺の湯殿は箍でも壞れたのか』
『いんにや、新らしゆう建て廣げうと思うとる』
『すでに垢を離れた佛家、垢を落しに湯に入るはどういふ譯だ』
『淸淨にならうとも思はぬ。定水湛然として滿つ、此の無垢の人を浴すか』
湯から出て流しへ坐つた和尙の脊を居士は洗ふ。居士和尙の脊中を一つ掌で叩いて
『いゝ御本堂だが、佛が無い』
和尙少し本氣になつて
『失禮を申すな』
『だが佛は無くても御光はさしてる』
『多分、そんな事だやろと思うた』
代つて和尙が居士の脊中を洗ふ。洗つて行つて脚のところに來る居士、一足を翹げて云つた。
『西天の二十八祖もこの通り。唐土の六祖もこの通り。和尙もこの通りだし僕も亦この通り』
和尙、石鹸で打つた。
湯から上つた。和尙は歸つて行つた。
電球の前の机に頰杖つき居士は無心になる。
居士の無心に關係なく世間はいろ／＼の營をやつてゐる。椽側の下で先頃子を生んだ母犬が子が他犬に嚙まれた耳の傷痕をしきりに甞めてやつてる。道を距てた向側の普請場へ近所の老婆が木屑を窃みに來て鉋屑を踏む音がする。階下では居士の子供が机を並べ肘で突き合ひつゝ勉强しては又喧嘩をしてる。母親は手製の家計簿の朱線を引き損ね平行線の幅にひどい廣狹が出來たので眺めては苦笑して居る。天井で鼠が鼬に追はれ必死になつて逃廻つてる。太くて間隔を置いた足音が鼬の足音。忙しく神經質に小點を打つ足音は鼠である。裏の保險會社の勸誘

員の家には同僚が寄集まり、架空な會社創立の計畫に謀を秘めて居る。

角の三等郵便局では雇の女事務員が退刻の時間なので黒の事務服を脱ぎ乍ら居殘りの男事務員と活動寫眞の評判をやつてる。横町の大きな資本家の邸宅では權高な顔の令嬢に小間使が意地惡るく叱られて居る。奥さんはヒステリーが出て床についてる。書生部屋の蓄音器が五月蠅とて侍婢を停めにやつた。脊中合せの官吏の邸では主人が國元の實家の仕末につき長兄へ宛てた長い手紙を書いてる。

町並の商賣家では、果物屋につや〳〵と色付いて來た林檎が出てる。藥屋の主人が客の患者の容態を聽取つてる。小さい靴屋の店で一段低くなつてる仕事場に子供が落ちて泣いてる。仕事の手を離さずに亭主が額に青筋を立て妻を呼んでる。謡の聲。尺八の音。遠くの森に風のわたる音は低いけれども重い。

居士の庭の笠の葉ずれは大きいが輕い。

寒月は平凡に大地を照して居る。自働車は奇聲を立てゝ通つて行つた。

居士が無心狀態を繼續してる間に世上はかく流轉しつゝある。居士の上にはたゞ胃の腑の食物が靜に腸へ送り込まれた外、格別の變化もなかつた。

居士が普通の意識に復した時に時計は十時を打つた。

居士は寢室へ入つた。

『誠に草庵夜閑にして耿々たる天の燈の影に黯々たるとき、御衾ひきかつきて臥させ玉ひ候はん世にあらまほしき御事にて候。臥させ玉ひ候時も佛に違はぬことにて候なり、此の時生死の業盡きて臥したる身心共に佛にて候なり』

床の上に端坐してこの大智禪師の法語の一節を口誦した後居士は横になつた。脇を下にするのは佛の臥像に倣ふ。

夜着を搔ぐ時　徐に鐘聲來る。音を聽いて居士。

『ＡＢＣＤＥＦＧＨＩＪＫＬＭＮＯＰＱＲＳＴＵＶＷＸＹＺ』

響きの消ゆるまで斯と唱へた。

附記　篇中の說話はほとんど古人商量中の消息より得たものである。努めて意旨の墮落を防いだが筆者もとより門外の俗漢、偶に禪門の字句上に向つて興味を寄せる底の因緣しか惠まれてない。從つて全く亂道に陷つて居るであらう。祇、萬一この一篇によつて好奇の心を索かれ、道に向はるゝ士は必ず師に趣かれよ。道はこんな玩具みたようなものではない。この文は道化の方便として殊更に禪味紛々たる揶揄に努めた。

自叙傳（七）

大杉榮

四

順天中學校といふのは、尤もほかにもそんなのが幾つもあつたのだらうが、ちよつと妙な學校だつた。

僕のはいつた五年は三組で二百人か二百五十人かゐた。四年は二組で百五十人、三年は百人、二年一年は四五十人と云ふように、級がさがるに從つて生徒の數が減つてゐた。わざわざこんな學校に一年や二年かではいるものはないんだ。そしてたいがいのは直ぐと四年か五年かへはいるんだ。

僕等の組には、哲學院（東洋大學の前身）を出たものだの、早稻田を出たものだの、其他いろんな專門學校を出たものがゐた。そんなのは何にかの必要からただ中學校卒業の免狀だけを貰ひに來たのだ。又、顏を見ただけでも秀才らしいまだ年少の、或はぼんやりとした年かさの、獨學の人も可なりゐた。それから又、僕たちと同じやうに、どこかの學校で退學させられた不良連も隨分ゐた。そして僕と同じやうに、換玉ではいつたのも此の不良連の中に多かつた。

僕と一緒に此の順天中學へはいつた友人に登坂と云ふのがゐた。やはり僕と殆んど同時頃に、男色で、仙臺の幼年學校から逐はれて來たのだつた。

此の登坂とは、其の年の一月、即ち僕が東京へ出て來ると直ぐ、市ケ谷の幼年學校の面會室で出遇つた。そして彼れから、新發田での舊友で同時に幼年學校へはいつた谷と云ふ男ともう一人とが、やはり彼と一緒に退學させられた事を知つた。四人は直ぐ友達になつた。ほかにもまだ、やはり同時頃に同じような理由で大阪の幼年學校を退學させられた、島田と云ふのともう一人と、どこかで落ち合つて、これも直ぐ友達になつた。皆んな、名古屋、仙臺、大阪と所は違ふが、同じ幼年學校の同期生だつたのだ。

皆んなは其の名譽恢復のためと云ふので、互に戒めて勉强を

替つた。そして其の年の九月十月には皆んなどこかの中學校の五年にはいつた。

其の中でも登坂と僕とは、最初に出遇つた關係からか、又お互に文學好きで露伴と紅葉との優劣とを論じ合つたりしてゐたせいか、一番近しくなつた、殊に一緒に順天中學へはいると直ぐ、本郷の壹岐坂下に一室をかりてそこに一緒に住んだ。

二人とも、學校の方もよく勉强したが、小說も隨分よく讀んだ。坂上にちよつとした、貸本屋があつた。そこから借りて來るのだが、暫くの間に其の、貸本屋の本を殆んど皆な讀んで了つた。

後には島田も此の下宿に仲間入りした。島田は擊劍の御自慢で、眞黑な顏をして嚴丈なからだの男で、いつも僕等が小說なぞを讀むのを苦々しさうにしてゐた。そこで、登坂と僕とが一策を案じて、其のいやがるのを無理押しつけに、『不如歸』を借りて來て讀ました。先生、最初の間はむづかしさうな顏をしてページをめくつてゐたが、だんだん眉の間の皺をのばして來た、とうとう了ひには其のさゞえのやうな握拳でほろほろと落ちる涙をぬぐひ始めた。『それ見ろ』と云ふので、其後二人は島田の喜びさうなものを選んでは讀ましてゐたが、島田は浪六の『五人男』がすつかりお氣に召して、『俺は黑田だ、大杉貴樣は石何んとかだ』と云ふような事を云つて一人で喜んでゐた。

浪六物や弦齋物はとうの昔に卒業して、紅葉露伴のものまでももう物足りなくなつてゐた僕等は、島田のそんな話には相手にならなかつた。しかし僕は、其の『石何んとかだ』と云はれたのが、內心は餘程の不平だつた。

『成程、僕は石何んとかのやうに、一面にはごく謹嚴着實に濟ましてゐる。しかし、それだけ他のもう一面には、黑田のやうな豪放が私かに燃えてゐるんだ。貴樣なんかのえせ豪放が何んのあてになるもんか。』

僕は自分で自分にさう叫んで、『今に見ろ』と腹の中で一人で力んでゐた。

其頃、僕よりも一期上でやはり名古屋出身の田中と云ふのが中央幼年學校から逐ひ出されて、これも僕等の下宿にころがりこんだ。其他にも、登坂の仲間の何んとか云ふのと、島田の仲間の何んとか云ふのと、これも一時僕等の下宿に來たが、此の二人は僕等の『謹嚴着實』な生活に堪えきれないで直ぐほかへ出て行つて了つた。

又、僕等よりもやはり一期上で、そして僕等よりも一年程前に仙臺を出た箱田と云ふのが、其の年に高等學校へはいつて、ちよい〳〵僕等の下宿に遊びに來た。僕等よりも一期一期あと

の、其後に退校せられた二三のものも、學校や其他のいろんな事に、就いて僕等の所に相談に來た。

かうして、幼年學校の落武者共が、殆んど皆な僕等の下宿を中心として集つた。そして其の次ぎの年には、皆んな無事に中學校を終へて、僕と島田とは外國語學校に、登坂と田中とは水産講習所に谷は商船學校に、皆な可なりの好成績ではいつた。谷は今郵船の船長をして居る筈だ。田中はどこかの縣の技師になつてゐると聞いた。島田は、もう大ぶ古い頃に、どこかの田舍かの聯隊の將校集會所でドイツ語を敎へてゐると云ふ話しだつた。登坂は一時水産で大ぶ儲けて、山陰道のどこかで土地の藝者を二人ばかりかこつてゐたと云ふ程の勢ひだつたさうだが、十年ばかり前に失敗してアメリカへ行つた。そして今でもまた失意の境遇にゐるらしい。箱田は朝鮮で檢事か判事かをやつてゐる。

僕は又、壹岐殿上の貸本屋のほかに、神保町あたりの或る貸本屋のお得意にもなつてゐた。そこには、小説本のほかに、いろんな種類のむづかしい本があつた。僕は矢來町の下宿にゐた時から引續いて、そこから哲學だの宗敎だの社會問題だのの本を借りて來ては讀んでゐた。矢野龍溪の『新社會』は矢來町時代に、丘博士の『進化論講話』は壹岐殿時代か或は其の少し後かに、幾度も繰返しては愛讀した。

『新社會』は少し早く讀みすぎたせいか、其の讀後の感興と云ふ程のものは今何んにも殘つてゐない。しかし『進化論講話』は實に愉快だつた。讀んでゐる間に、自分のせいがだん／＼高くなつて、四方の眼界がぐん／＼廣くなつて行くやうな氣がした。今までまるで知らなかつた世界が、一ペエジ毎に目の前に開けて行くのだ。僕は此の愉快を一人で樂しむ事は出來なかつた。そして友人には皆な、強ひるやうにして、其一讀をすすめた。自然科學に對する僕の興味は、此の本で始めて目覺めさせられた。そして同時に又、すべてのものは變化すると云ふ此の進化論は、まだ僕の心の中に大きな權威として殘つてゐたいろんな社會制度の改變を叫ぶ、社會主義の主張の中へ非常にはいり易くさせた。

『何んでも變らないものはないのだ。舊いものは倒れて新しいものが起るのだ。今威張つてるものがなんだ。××××××××××××××××ぢやないか。』

しかし、僕にはまだ、何かの物足りなさがあつた。母が死んで、と云ふやうな事も殆んど忘れたやうにはしてゐたが、其意識の中では餘程さびしかつたに違ひない。又、

やはり同じやうに忘れたやうにはしてゐたが、幾年も続けて來た同性の謂はゆる戀を全く棄てた僕は、其の方面でも餘程さびしかつたに違ひない。友人と云へば、さつき云つた幼年校の落武者逹だけだつたが、それもたゞ同じ境遇から互に励み合つたと云ふ程の事で、本當に打解け合つた親しい間柄ではなかつた。

多分そんな饑えを充たすのだつたらう。僕はよく飯倉の親戚の家へ出かけた。從兄の山田良之助(今陸軍の少將で憲兵司令官をやつてゐる)の細君の家だ。山田は當時陸軍大學校の學生で、此の飯倉の邸内の小さな家に住んでゐた。僕はそれからの人のしんみな親しみの中にもひたりたかつた。その邸の可なり贅澤な適位な生活の中にもひたりたかつた。そして又、そこのいろんな綺麗な女の人逹の笑ひ顔も見たかつた。しかし、その人逹は皆な、男も女も綺麗ではあつたが、其の顔も心も冷たかつた。殊に、僕が幼年學校を逐ひだされてからは、猶更さうのやうな氣がした。僕よりも二つ三つ年下の何んとかさんと云ふ娘なぞは、僕の幼年學校時代には随分よく一緒に遊びもしふざけもして、僕は心中密かに『僕が任官したら』と云ふ望みをすら持つてゐたんだつたが、もう大ぶ娘らしくなつてツンと濟ましてゐた。

そんな寂しさなど[illegible]新しい進歩思想を求める要求なぞが手傳つて、順天中學校を卒[illegible]る少し前から僕はあちこちの教會へ行き始めた。そして下宿から一番近い、又其のお説教の一番氣にいつた、海老名弾正の本郷會堂で踏みとゞまつた。

海老名弾正の國家主義には氣がついたのかつかなかつたのか、それともまだ僕の心の中に多分殘つてゐた謂はゆる軍人精神とそれとが合つたのか、それは分らない。とにかく僕は先生の雄辯にすつかり魅せられて了つた。まだ半白だつた髪の毛を後ろへかきあげて、長い髯をしごいては、其の手を高くさしあげて『神は……』と一段聲をはりあげる其のいゝ聲に魅せられて了つた。僕は他の信者等と一緒に、先生が聲をしぼつて泣くと、やはり一緒になつて泣いた。

先生はよく『洗禮を受けろ』と勸めた。『いや、まだキリスト教の事がよく分らんでもいい。洗禮を受けさへすれば、直ちに分るやうになる』と勸めた。僕は可なり長い間それを躊躇してゐたが、遂に洗禮を受けた。其の注がれる水のよく浸みこむようにと思つて、わざ〳〵頭を一厘がりにして行つて、コップの水を受けた。

此のキリスト教は、僕を『謹厳着實』な一面に進めるのに、

大ぶ力があつたやうだ。しかしそれも長くは續かなかつた。

五

僕は外國語學校の入學試驗に及第すると直ぐ、父のゐた福島へ行つた。父は其の少し前に、部下の副官の何かの不しだらの責を負ふて、旅團副官から福島聯隊の區副官に左遷されたのだつた。

其後父の兄から聞いた話しではあるが、其頃父は師團長と喧嘩してゐたのださうだ。旅團長の比志島義輝が師團長の誰れとかと仲が惡くて、と云ふよりも寧ろ其の師團長に憎まれてゐて副官たる父はいつも旅團長を擁護する地位に立たなければならなかつた。比志島は以前にも借金のために休職になつたのだが日清戰爭で復活して、又以前のやうに盛んに借金してゐた。そして父は、表向きの副官であるよりも、より以上に比志島家の財産整理のために忙がしかつた。旅團長は又幾度も休職になりかゝつた。父は其のたびに仙台へ行つて、旅團長のために辯解して、師團長と激論した。そんな事から、旅團長の出す進級名簿の中からは、いつも師團長の手で父の名が削られた。そして遂に比志島は休職となつて、其のあとへ師團長のそばにゐた何んとか云ふ參謀長がやつて來た。其の結果が父の左遷となつたのださうだ。

更に其後、これは父が誰かに話してゐるのを聞いたのだが、比志島は日露戰爭で又復活して、戰地から一萬圓二萬圓と云ふやうな金を幾度も其の債權者のもとに送つて、歸る頃には借金を全部濟ました上に可なりの財産までもつくつてゐたさうだ

父は聯隊區司令部の直ぐそばの、僕等がまだ住んだ事もない程の、小さな汚ない家にゐた。そして女中も置かずに、僕の直ぐの妹に學校をよさして、多勢の弟妹等の世話や其他の一切をやらしてゐた。

が、僕の驚いたのは、それよりも父の甚だしい變り方であつた。年はまだ四十三四だつたのだらうが、急にふけて、もうたしかに五十を幾つもこえた老人のやうになつてゐた。そして以前には、うちの事は一切を母に任して金の事なぞはつい一ことも云つたのを聞いた事がなかつたのに、妙にけちんぼな拜金宗になつてゐた。

尤も、以前からごく質素で、自分で自分の小使錢を持つてゐた事もなく、又恐らく金の使道も知らなかつた程なので、其の本來のけちんぼうが少しもそとに現はれなかつたのかも知れない。が、母が死んで、自分でうちの細かい會計までやつて見るとなると、それが急に目立つて來たのかも知れない。

どにかく父は、月給や、勲章の年金だけではとてもやつて行けない、と云つてゐた。そして、どうして母が今よりずつとはでな生活をしてゐて、それで毎月幾らかづゝ殘して行つたのかと不思議がつてゐた。父はそんな心配や、母のない多勢の子供等のための心配なぞで、急に年がふけたのだ。急に金の有りがた味を感じだしたのだ。

それに、父の兄の話を本當だとすると、父はもう軍人生活に見切りをつけて、實業界へでも鞍がへするつもりでゐるらしかつた。毎朝新聞を見るのにでも、きつと相場欄に目を通してゐた。そして僕にもそれを讀むように勸めて、其の讀みかたなどをいろ〳〵と講釋までしてくれた。僕はいつの間に父がそんな事を知つたのだらうと怪しんだ。が、此の實業熱も新聞の相場欄に對する熱心も、實は其の先生があつたのだつた。或日聯隊區司令官の何んとか云ふ中佐が大佐のうちへ遊びに行つたが、僕は其司令官から父の講釋其儘の講釋を又聞かされた。

僕は父が急にふけて見すぼらしくなつたのは傷ましかつたが、しかし其の心の變化には少しも同情が出來なかつた。寧ろ父を賤しみさへした。そして父の先生が其の司令官であつたのを見て、軍人が皆なそんなさもしい心になつたのぢやないかと憤慨し且つさげすんだ。

從つて、暫く目の僕の歸省も大して愉快ではなかつた。そして一ケ月ばかりして東京に歸つた。

外國語學校にはいつて見て直ぐがつかりした。幼年學校で二年半やつて、更に其後もつい數ケ月前まで佛蘭西語學校の夜學で勉強しつゞけて、もう自分で分らんなりにも何にかの本を讀んでゐたフランス語も、又アベセの最初から始めるのだ。

尤も一ケ月ばかりしてから佛人教師のジヤクレエの心配で、卒業の時には本科卒業として出すと云ふ約束で全科白選集の選科生として、二年へ進級したが、其の二年も素より大した事ではなかつた。そして此の二年へ行つて氣がついたのだが、先生のまるで無茶なのに驚かされた。フランスに十年とか十五年とかゐたと云ふ先生が、二年生の出來のいゝものよりももつと出來ないんだ。そして本いつぱいに鉛筆で何にか書きつけて來て、それを拾ひよみしながら講義して、それ以外の事には殆んど何に一つ生徒の質問に答へる事が出來ないんだ。そして出來る二人ばかりの先生は、怠けもので隨分よく休みもし、又出て來てもほんのお義理にいゝ加減に教へてゐた。そして其の多勢の先生の教へるものゝ間に、殆んど何んの聯絡もないんだ。

たゞ一人、ジヤクレエ先生だけが、實に熱心に、一人で何にもかも毎日二時間づゝ教へた。僕は此の先生の時間だけ出ればそれで十分であつた。そしてそれ以外の先生の時間は出來るだ

け休む事にきめた。

ちやうど其頃だ。日露の間の戰雲がだん／＼に急を告げて來た。愛國の狂熱が全國に漲つた。そしてただ一人冷靜な非戰的態度をとつてゐた萬朝報までが急に其の態度を變へ出した。幸徳と堺と内村鑑三との三人が、悲痛な『退社の辭』をかゝげて萬朝報を去つた。

そして幸徳と堺とは別に週刊『平民新聞』を創刊して、社會主義と非戰論とを標榜して起つた。

これまで僕は、それらの人とは、たゞ新聞上の議論と、時に本郷の中央會堂で開かれた演說會での雄辯とに接しただけで、直接にはまだ會つた事がなかつた。しかし此の旗上げには、どうしても一兵卒として參加したいと思つた。幸徳の『社會主義神髓』はもう十分に僕の頭を熱しさせて居たのだ。

雪のふる或る寒い晩、僕は始めて數寄屋橋の平民社を訪れた。毎週社で開かれてゐた社會主義研究會の例會日であつた。

玄關をはいつた直ぐ左の六疊か八疊の室には、まだ三四人のしかも內輪の人らしい人しかゐなかつた。そして其の中の年とつた一人と若い一人とが切りに何にか議論してゐた。僕は默つて、そこから少し離れて、壁を背にして座つた。議論は宗教問題らしかつた。年とつた方は安座をかいて、片膝を膝に立てゝ額をなでながら、切りに相手の青年をひやかしながら無神論らしい口吻をもらしてゐた。青年の方はきちんと座つて、兩手を膝に置いて肩を怒らしながら、眞赤になつて途方もないやうなオオソドクスの議論に、文字通りに泡を飛ばしてゐた。そして其の間に、ちよいちよいと、もう一人の年とつたのが、それが堺である事は始めから知つてゐた、先きの男程突つこんでゞはないがやはり其の青年を相手に口を入れてゐた。

僕は其の青年の口について出る雄辯には驚いたが、しかし又其の議論のあまりなオオソドクスさにも驚いた。僕も彼れとは同じクリスチヤンだつた。が、僕は全然奇蹟を信じないのに反して、彼れは殆んどそれをバイブルの文句通りに信じてゐた。僕は自分の中にあるものと信じてゐたのに反して、彼れは萬物の上にあつてそれを支配するものと信じてゐた。僕はこんな神がどうして社會主義に來たんだらうとさへ思つた。そして無神論者らしい年とつた男の冷笑の方に寧ろ同感した。

此の年とつた男と云ふのは久津見蕨村で、青年と云ふのは山口孤劍だつた。

やがて二十名ばかりの人が集まつた。そして多分堺だつたらうと思ふが、『けふは雪も降るし、大ぶ新顔が多いやうだから講演はよして、一つしんみりと皆んなの身上話やどうして社會主義にはいつたかと云ふやうな事をお互に話ししやう』と云ひ

出した。皆んなが順々に立つて何にか話した。或る男は「私は資本家の子で、日清戰爭の時大倉が鑵詰の中へ石を入れたと云ふ事が評判になつて居るがあれは實は私のところの鑵詰なんです、尤もそれは私のとこでやつたのではなくて、大倉の方で或る策略からやつたらしいんではあるが』と云つた。

『それじや、やはり大倉の鑵詰じやないか。どうもそれや、君のところでやつたと云ふよりは大倉がやつたと云ふ方が面白いから、やはり大倉の方にして置かうじやないか。』

から云つたのもやはり堺だつたらうと思ふが、皆んなも『そうだ、そうだ大倉の方がいゝ』と賛成して大笑ひになつた。その資本家の子と云ふのは、今の金鷄ミルクの主人澁見何んとか云ふのだつた。

もう殆んど最後近い頃に僕の番が來て、僕も『軍人の家に生れ、軍人の間に育ち、軍人の學校に教へられて、軍人生活の虛僞と愚劣とを最も深く、感じてゐるところから、この××××××めに一生を捧げたい』と云ふやうな事を云つた。

そして最後に堺が立つて、『こゝには資本家の子があり、軍人の子があり、何んとかがあり、何んとかがあり、實に吾々の思想は今や天下の有らゆる方面にまで擴がつてゐる。吾々の運動は天下の大運動にならうとしてゐる。吾々の××××××××××××××××事ではない』と云ふ激勵な演說があつた。

僕はそう云はれて見ると、本當にそんなやうな氣がして、非常にいゝ氣持になつて下宿へ歸つた。其日幸德がそこにゐたかどうかはよく覺へてゐない。

それ以來僕は毎週の研究會には必ず缺かさずに出た。そしてそれ以外の日にもよく遊びに行つたが、殊に下宿を登坂や田中のゐた月島に移してからは、殆んど毎日學校の往復に寄つて、雜誌の帶封を書く手傳などして一日遊んでゐた。

六

平民社は幸德と堺と西川光二郎石川三四郎との四人で、石川を除く外は皆な大の宗教嫌ひだつた。でもそとから社を後援してゐた安部磯雄や木下尚江は石川と共に熱心なクリスチヤンだつた。そしてそこに集まつて來た青年の大半がやはりクリスチヤンだつた。當時の思想界では、キリスト教が一番進步思想だつたのだ。少なくとも忠君愛國の支配的思想に背く最も多くの分子を含んでゐたのだ。

幸德や堺等は可なり辛辣に宗教家を攻擊もし又冷笑もした。そして研究會ではよく宗教の問題が持ちあがつた。しかし幸德や堺等は、宗教は個人の私事だと之にドイツ社會民主黨の何んかの決議を守つて、同志の宗教には敢て干涉しなかつた。

石川は本鄉會堂での僕の先輩だつた。が、其頃にはもう教會

と言ふものにあいそをつかし、殆ど教會に行く事もなかつたらしい。

僕も平民社へ出入するやうになつてからは、皆んなの感化で、先づ宗教家と言ふものに、次ぎには宗教其者に、だんだん疑ひを付け始めた。そして日露の開戦が僕と宗教とを綺麗に縁を切つてくれた。

僕は、海老名彈正が僕等に教へたように、宗教が國境を超越するコスモポリタニズムであり、地上の一切の權威を無視するリベルタリアニズムだと信じてゐた。そして當時思想界で流行しだしたトルストイの宗教論は、益々僕等に此の信念を抱かせた。そして又僕は、海老名彈正の「基督傳」や何とか言ふ佛教の博士の「釋迦牟尼」の、キリスト教及び佛教の起源のところを讀んで、やはりトルストイの言ふように、原始宗教即ち本當の宗教は貧富の懸隔から來る社會的不安から脱け出ようとする一揆の共產主義運動だと思つてゐた。

然るに、戰爭に對する宗教家の態度、殊に僕が信じてゐた海老名彈正の態度は、盡く僕の此の信仰を裏切つた。海老名彈正の國家主義的、大和魂的クリスト教が、僕の眼にはつきりと映つて來た。戰勝祈禱會をやる。軍歌のやうな讚美歌を歌はれる忠君愛國のお説教をする。「我れは平和を齎らさんが爲めに來れるに非ず」と言ふやうなキリストの言葉を飛んでもないところへ引合ひに出す。

僕はあきれ返つて了つた。そうして海老名彈正だの、當時よくトルストイ物を飜譯してゐた加藤直士だのと數回議論をしたあとで、すつかり教會を見限つて了つた。そして同時に又うつかりは、行かけた「右の頰を打たれたら左の頰を出せ」と言ふ宗教の本質の無抵抗主義にも疑ひを持つて、階級鬪爭の純然たる社會主義にはいる事が出來た。

戰爭が始ると直ぐ、父は後備混成第何旅團かの大隊長となつて、旅順へ行つた。

僕は父の軍隊を下野停車場で迎へた。そして一晩驛前の父の宿に泊つた。

僕は父が馬上で其の一軍を指揮する、こんなに壯烈な姿は始めて見た。ちようど涙ぐましいやうな氣持にもなつた。しかし何んだか僕には、父の其の姿が馬鹿らしくもあつた。「××××、×××××××」×××行くのかと思うと、父の爲に悲むと言ふよりも寧ろ馬鹿々々しかつたのだ。

宿にはいつてからも、父や其の部下の老將校等は皆な會ふ人ごとに「これが最後のお勤めだ」と言つて、たゞもう喜び勇んでゐた。僕は又それが×××××××かつた。

父は僕にただ「勉强しろ」と言つただけで、別に話ししたい樣子もなく、ただそばに置いて顏を見てゐればいゝと言ふやうな風だつた。

切支丹夜話

佐々木味津三

人皇百八代明正天皇が寛永年間と云ふから、越前松平忠直が亂行の故を以つて未だに豐後に配流せられてゐる頃のことである。

肥前天草に千東伊九郎と言ふ變物があつた。

當年とつて三十有三歳、齢已に志立は越へたに拘らず、人に自慢の出來る程のものは、居眠りと釣り氣違のたつた二つださうで、とにかくその志たるや未だに以つて去就不明と言ふことであつた。

舊記に依ると、歩行半ばに居眠り、談笑半ばに居眠り、座しては眠り食しては眠ると言ふことであつたら、話し半分にしても其居眠りたるや、甚だ以て自慢とするに足りたるに違ひなかつたのである。

同族千東善右衛門と言ふのは、そのかみ小西行長が御家人として朝鮮の役に近隨從したと言ふ、れつきとした山所ある家柄であつたから、從つて彼伊九郎たる者確かに四民の上に立つ可き侍の出に違ひなかつたらうが、しかし彼不思議なことには何等武士たる心得がなかつた。

文武八藝に通じて、槍は是を山本無邊流につきよく達し、劍は是を鞍馬八流によく達すと言ふ樣なことを自身人前に廣言こそ吐いてゐたが、自身の腰の物は左刄か右刄かそれさへろくろく知らなかつた位だつたのである。

その伊九郎が不思議千萬にも切支丹宗徒であつた。

しかし彼伊九郎が伴天連宗徒に歸依したに就いては別に深い仔細があつてからのことではなかつた。

同族千東善右衛門が已に名たゝる切支丹で、彼が別懇の大矢野のなにがしが又代々の伴天連で、當の伊九郎が妻女と言ふのは、その大矢野なにがしの縁邊先からかたづいてゐたと言ふ樣な關係だつたので、實は四面伴天連の故を以つて余儀なく彼も鳥渡間に合せに改宗したに過ぎない、

正直言つて本人の伊九郎にとつては、居眠りか釣り道樂なら

いざ知らずのこと、ぜうすと言ふもいるまんと言ふものも、實際は千束沼でちよいちよい彼の釣糸をたぶらかし數匹のこまかい寒鮒の價にさへ未だ遠く及びえなかつたに違ひなかつたのである。

に拘らずその伊九郎がさも信心堅固なる切支丹を敢てこころみる所以のものは、必竟するに樂々と居喰ひが出來たからのことに過ぎなかつた。

人間は一生樂に居喰ひが出來るとなれば、豈只一切支丹のみならず、裸體の正覺坊にさへとうになつてゐたかも知れなかつたのである。遮莫丁丑、十四年十月中浣のころほひである。例に依つて例のごとく彼千束伊九郎が朝から千束沼の岸べりに陣取つて天下一のいい心持で居眠り乍ら專念に釣糸を垂れてゐると、同族善右衛門が火急の使者と名乘つて、無禮至極にも不意に慌たゞしく彼をおどろかした者があつた。

その口上に從ふと、一門宗徒の面々が甚兵衛嫡男天草が四郎を頭目に押し頂いて、島原天草兩所を以つて今日にも義兵を擧げると言ふのが彼に一味の加擔しろと言ふことだつたのである。

所が生憎その時當の伊九郎は、朝から只一度さへなかつた糸のあたりが、今になつて不意にぐいぐいと二三べん續けて大きく指先に響いたその瞬間だつたので、はツと正氣を取り直ほすと、片唾呑んでまさに二三尺向ふへ及び腰になつた所であつた。

「伊九郎殿、御内儀さへ最早や籠城の御覺悟でムる。」

使者は氣を利かしたつもりで妻女のこと迄色をつけ乍ら恰も彼が背中を叩かんばかしに又促すことは促したがしかし當の伊九郎に通じる筈はなかつたのである。

眼色を替へて一心不亂で糸の先を見つめてゐると、瞬間又ぐいぐいと見事な糸のあたりに接したので、全身を前へ泳がしたかと思ふと、はツと夢中で竿を手先へかき寄せるやうに曳いてゐたのであつた。

しかし肝心の獲物の方は、ひらりと大きく水際の邊でもんどり打つと、已に姿はどこにもなかつた。

とたんに又先刻からの使の者が、

「伊九郎殿、伊九郎殿、即刻御歸り召され。舅御殿も御呼びでムるぞ」

尾に鰭をつけて、三度び彼を促すことは促したが、しかし伊九郎はそれ所でなかつたのである。呆然自失水の上を只恨めしさうに見つめてゐたに過ぎなかつた。

その後殆んど十數へんと言ふもの、執つこく使者が促し

たのに、まるでしかし伊九郎は返事がなかつた。一心不亂で糸の先に眼を皿にして吸ひ寄せられてゐたかと思ふと、不意にこくりこくり居眠りを初めて、全く問題にならなかつたのである。

それには更に頓着する所なく、事愈々急と言ふので宗徒一味の面々は、すでに島原天草に據つて、已に義兵ののろしを擧げてゐたのであつた。

彼伊九郎は從つてその僅かなる逆上の喰違のために、つひに一味に加擔する暇がなかつた。所が流石に彼が妻女は、只夫が一身をおもんぱかつた故にか、當の伊九郎が馬鹿面をして、日暮方その家路へ歸り着く迄、ちやんと籠城の用意はととのへ乍らも、いまだにつしましく待ちあぐんでゐたのである。

しかし彼伊九郎はその翌日も、貞烈無比な妻女の期待を見事に裏切つて、又のこのこと千束沼に陣取つた。

なにより彼には釣りおとした鯉が、ちらくら眼先にちらついてならなかつたのである。

それに愛想がつきたものか、つひに妻女は伊九郎を棄てゝ、その朝、けなげにも一門宗徒の義擧に走つた。

一揆益々勢ひを加へて、全島是に加擔する者已に三千有餘人と言ふ程のさかんなる氣勢を擧げてゐるのに、しかし當の千束伊九郎は、時にこくりこくり居眠り乍ら一心不亂で糸の先を終日一人でにらめ暮したのである。

その翌日も亦伊九郎は、千束沼に一人陣取つた。四日目も亦彼は、一人千束沼に糸を垂れた。

宗徒勢ひ猖獗を極め、日に日に神社佛閣を燒拂ひ、夜に夜に金銀財產を掠めて、山野共に火を以つて埋まり、徒黨四方に蔓延すると言ふ程な氣勢を示してゐたのに、しかし伊九郎が糸の先には、その後氣紛れな細かい鮒さへまるでぴくりとも答へを見せなかつたのである。

是が若し三日目位で伊九郎が執心の釣りおとした鯉が完全に糸にでも引つかゝつてゐたら、彼は逆上のあまり、遲れ走せ乍ら一味に向つて走せ加はつてゐたに違ひなからうが、何日を閲みするも一向に片鱗さへ見せなかつたとあつては、流石の彼もつひに竿を投げた。

その不滿足の棄鉢が、奇怪にも急轉直下で彼伊九郎を方向轉換させたのである。釣りにのぞみがないとあらば、去就不明でぺんぺんとなにも天草界隈をさまよふべき理由はないに違ひなかつた。遮二無二一揆に死に身で加擔でもしたら又格別のこと、機會を失した今となつては、つとめて切支丹顏にも當らない吶しだつたのである。

中途半端な伊九郎となつては、犬になつても生き永らへたか

つた。そのことのみに別な望を囑したかつた。

まことに千東伊九郎としては、甚だ出かした思ひ付だつたのである。

そしてその晩意を決すると、闇に紛れて天草を落ちた。

とは言へしかし、彼に行く可きなんのあてもなかつたのである。嘘にも文武八藝を賣り物にして、當座筑前は柳川の立花飛騨が藩中に、うまく糊口を求め出そうと考へないではなかつたが、道聽途說に從ふと、鍋島黒田立花迄が、一揆討伐の幕命を受けて、日ならず兵を結束せんと言ふ勢なることを聞知したので、彼は又彼並にひそかに身ぶるひを身に覺えると、急に足を替へて道を長州路にとつた。

海一つ國を隔てた長州でも、喧々囂一揆討伐の風聞は耳をおほはんばかりであつたので、自身は已に口をぬぐつて切支丹顔は棄てゐたに拘らず、追討の募兵に結束されんのを只ひたすらに恐れおのゝいて、身の安全に又道を雲州路にとつた。

松平雲州侯は世々代々の名君だつたのである。又世々代々の喰はせ者であつた。通人の名にかくれて、まがひものの覇輕がその權門よりも大好で、度量の豁達を賣りものにして、にせもののおちよッかいが又なく大好物であつた。

その雲州侯にまがひ者の切支丹なる千東伊九郎が、本來にせものの文武八藝を以つて、破天荒にも食祿百二十石の馬廻りお伴頭に雜作なく立身出世したと言ふに就いては、別に何の變哲もなかつた。

只居眠りと釣り氣違と言ふ年來伊九郎の金看板が當座誰にも發見されずに濟んだと言ふことのみは、確かに大きな不可思議に相違なかつたのである。

文武八藝に通ずるの眞僞は、是を左右に言托して、竹刀にさへも手を觸れなかつたら、或は一生字義通り鞍馬八流の達人としても、ぼろを出さないで終りえたかも知れなかつたが、しかし居眠りの金看板に至つては、つひにいつかは暴露せずに居なかつた。

恰も霜月二十日のことである。例年その日は已の上刻を期して、恒例の紅葉狩りが城內稻荷山に催されると言ふので、藩を擧げて家の者が朝から何かと準備に忙殺されたことがあつた。

元來その日は藩侯にとつて一年中の擬入日で、紅葉狩りと言ふ季節物の呼名を一寸借用はしてゐたものゝ、實は藩侯ご自慢の藝づくしを、家中の面々一統に對つて一から十迄全部披露がしたいためのその催しに過ぎなかつたのである。

稻荷山を東西へ紅白二色に染め分けて、先づ何くれと下されもの丶酒肴なぞ存分に振舞つてから、やがてほどよく無禮講になつた時分に、頃合を見はからつて天下の雲州侯ご自身が、すてゝ踊やどぜうすくひなぞ全部その場へ總ざらへと言ふのが是迄その日の御目錄であつた。

俄か出世の馬廻りお伴頭千束伊九郎も勿論その日は晴の無禮講に、朝の程から用意おさおさ怠りもなかつたのである。

巳の上刻と言ふ觸れ出しに些の間違もなかつたが、下されものの酒肴の故か、年に一度の無禮講の爲めか、家中面々一流の者は、未だ午下り半刻も出ないと言ふのに、誰も彼もが大方は已に咫尺さへ辨じかねた。

そこを特につけ込んだと言ふ譯ではなかつたが、千束伊九郎は先刻から已に、金看板のおのが居眠り癖のために、屢々こくりこくりと堪え得なかつたのである。

彼に若し天草以來の金城鐵壁なる切支丹宗徒の假面をとうにぬぎ棄てるだけの才覺がなかつたならば、元より今にして金看板をぬりかへやうとする努力は要らないに違ひなかつた。

又彼に若し新らたなる方向轉換がなかつたならば、誰に遠慮も要らないに相違なかつた。しかし伊九郎は犬になつても生き永らへたかつたのである。

そのため彼はいつになくはつと正氣を取り返へして、慌てゝ金看板を見破られまいと焦つた。

金看板はしかしやはり金看板だつたのである。いつの間にか又伊九郎は已にこくりこくりこくりと前後がなかつた。

無禮講と言ふ鶴の一聲があつた故か、乃至は眠り上戸とでも勘違ひしたせいか、本人の伊九郎が焦る割合に、家中一統の面々の方は、それ程深く伊九郎の居眠りを別に氣にとめてはゐなかつた。

それを一瞬にして看破の出來る位に、彼伊九郎が智惠者であつたら、なにもいち百二十石位の知行取りにぺんぺんと滿足の出來る彼ではなかつたらうがはたの者が平氣以上に、本人の彼は滑稽なほど焦つた。

しかしそれ以上のぼろは出さないで、曲りなりにも無事に恒例の紅葉狩りは濟むことは濟んだが、宴終つて歸路に着こうとした時である。折あしく御馬屋先を血氣の面々と、肩を並べて彼伊九郎もなに喰はぬ顏で通りかゝると、中にも剽輕な一人がやにはに、御乘馬の一頭を平氣でつかつか曳き出して來て、いきなり自ら打ちまたがると、今からこの場で念佛巡りに乘馬の手並を試み合はうと言ふ發案を提議したのであつた。

御意はよし酒はよしと言つたあんばいで日本晴の上機嫌だつ

たので、血氣の面々一議に及ばず言下にそれに手を打つたのであつた。

巡り巡はつて彼伊九郎が順番に際したのである

文武八藝に通ずの手前、彼もそれが否めなかつた。

高が馬位と言ふ風に高をくつて打ちまたがつたもの丶、さて實際に乘つて見ると、臍の尾切つて初めての乘馬に、まるで勝手が違つたのである。

腰がぴつたり落ちつかないはまだいいとして、馬が人見知りして、更らに歩かないのはまだよいとして、鞍の上でも今猶例の金看板の居眠り癖が所嫌はずふんだんに襲つたのには、流石の千束伊九郎も荒膽をひしがれた。

稍もすると、くらりと全身が前にのめつて危うく轉落せんとするのを、渾身の勇を奮ひ起して、とにかく辛うじて鐙だけ踏ん張つたのである。

鐙の方へ氣を奪はれると、文武八藝に通じた彼の肝心な馬術の方がまるで問題にならなかつた。醉つた紛れに向ふ見ずで、それを遮二無二にしたゝかに一鞭喰はせると、とたんに馬はそくを加へて、もろ足で以つて走しり出したのである。

歡聲共に擧ると思つた瞬間、五體が宙に舞ひ上るやうなえも言はれぬ快感に接して、又彼は例の金看板の居眠り癖を馬上で不覺にもとろとろと感じた

とたんにくらりと半身が前にのめつたと思ふ瞬間、已に伊九郎のまるまるツちい五體は、御馬場先のだゝツぴろい原ツぱの眞中へ恰も芋虫のごとくころころとちぢこまり乍ら二つ三つもんどり打つてゐたのである。

やんやと多分手も叩いてゐたらうが、しかし伊九郎は上の空であつた。醉つた御陰でそれ程五體にはひゞかなかつたに拘らず、しかし彼はさも痛さうに、てれかくしの澁面をつくつた。

その翌日、已に彼伊九郎の姿は、松江城下のどの街にも見えなかつたのである。

他人は何と考へ様とも、珍らしく彼にはそれが恥辱に感じられてならなかつた。又今となつてその恥を忍んで迄も、敢て金看板を天草以來の無關心で押し通すだけの勇氣がなかつた。

それもこれもみな悉く切支丹宗徒の側面を脱いだ故と知り乍ら、しかし伊九郎は聊かも悄氣なかつたのである。

勿論今にしておめおめと、二度と再び天草には彼の足も決して向けられなかつたのであつた。

山を南へひそかに越えて、姫路街道を當てもなく、東へ東へと只足を向けてゐるうちに、その年師走、いつのまにか伊九郎は大阪へ這入つてゐたのである。

大阪天滿の諸橋半太はその頃奇怪な理由を以つて、可なり町道場の評判を賣つた者であつた。

先の准三后近衛家の御徒侍だつたさうで、故あつて數年前追放の刑をうけた者だつたのである　追放の理由と言ふのは、實は彼が盜癖の故であつた。恩賜の御衣を夜中ひそかに盜み出した所を發見されて、自ら大阪に走つたのである。

大阪天滿へ落ちつくと、貯への汚財を傾けて口を拭ぐうと早速に大きな町道場を開いた。武藝諸道指南と言ふ看板には勿論大の僞りがあつたのである。高の知れた堂上家の徒侍位に、寛永頃の武道諸藝に達せられる筈はなかつた。

しかし彼諸橋半太は、おのが魁偉なる筋骨を幸ひにして、巧に武道の名をおほつたのである。御藏奉行と南北町奉行の與力同心をのぞいて他には、多く小者仲間と言つた階級が多かつたので、從つて彼にも道場が張れた。たまにお目見得以上のれつきとした二本さしが二人三人あつたとしても、諸橋半太ごときに無論何の用もなかつたのである

時折り訪ねる諸國武藝者と言ふ面々に對しては、長い間の汚財を巧みに撒いて、とにかく是れ迄一向に無風帶であつた。

それを他にして猶一つ諸橋半太が町道場をいちだんと盛んならしめた理由が別にあつたのである

鳶が鷹を産んだ以上の令色並びない、縹緻のきぬ女と是は又段見劣りこそはするがとにかく年頃なる妹のすぎ女と言ふ二人の娘がその原因であつた。

それある故に將を射る前に先づ馬を射んとして、小者仲間與力同心の面々迄がひそかに道場を賑はしたのである。

松江を走つた千束伊九郎が又運よくその道場の師範代に住み込んだのであつた。別に伊九郎本人としては、半太の素性を熟知してゐるためにそこをねらつてまんまと住み込んだと言ふ譯ではなかつたが、武藝諸道の看板を僞る諸橋半太と文武八藝に自稱よく通じ過ぎた彼千束伊九郎とは、暗中已に何程かの共感を發見してゐたに違ひなかつたのである。

又今の伊九郎が身の上としては、位置や系圖は問題でなかつた。犬になつても、或は又犬以下になり下らうとも、天草脱走以上の安樂な保證を生活の上に見いだしえたかつた。それがためには口を拭ぐつて、自ら切支丹寐返へり者と言ふ樣な氣配はおくびにさへ出なかつたのである。

故あつて雲州藩を脱走した者と言ふ樣なことを敢て賣り物にして、居眠りのために落馬したなぞの事は、又決して顏色にさへ表はさなかつたのである。

それ以上に彼に苦心を要したものは、年來金看板の居眠り癖

をいかにしおほはんかと言ふ問題であつた。そのために彼は苦心の擧句晝も眞深く頭巾を冠むる一策を編み出したのである。

師範代と言ふ位置を以て、遙か高座に侍し乍ら、つねに頭巾で顏をおほへば、不覺に捕へる居眠りのこくりこくりも、何か稽古の氣合でも取つてゐるものとして解釋されるに違ひなからうと考へついたのであつた。

蓋し伊九郎としては、實に大出來の新案に違ひなかつたのである。又心ある者とて一人もない半太のごとき道場に於いては伊九郎が苦策をそうやすやすと看破する者はなかつた。

稽古は決してつけないのが掟で、是は啻に師範代伊九郎が發明のみでなかつた。主半太のやはり反間苦心の策が、そのまゝぴつたり都合よく伊九郎にも當て篏つただけのことだつたのである。

若し半太たり共實際に腕に覺えのある者があつたらば、斯樣な掟が半月と支持される道理はなかつた筈なのに、しかし將を射んとするやからにとつては、それは凡て無用のいたずらに過ぎなかつた。

しかしたつた一人、彼伊九郎と相前後して入門した所の相州浪人と自ら稱へる大喜多某だけは、伊九郎が岡目にも穩やかならん腕前に思へた。

左手と首筋に殘つた二つの大きな刀瘢は、又何程かの歴史を語る物に相違なく、古來無仕官、業は無流儀と自ら稱へることは稱へてゐたが、顏色蒼白威あつて猛からず長軀痩身の容姿はとにかく一曲ありげに見えた。

その上寡計沈默滅多に竹刀を取らなかつたのである。たまに二三合誰かと渡り合ふ樣なことがあつても不思議に多くの場合師範代伊九郎が居た時に限つた。又伊九郎の姿がちらりとでも道場に現れるが最後、其場に竹刀を投げるのがつねであつた。

伊九郎自身が内心大喜多を怖れると同じやうに彼に又伊九郎を怖れさける風が見えたのである

何かの拍子に遇然伊九郎と大喜多の視線がかち合ふ樣な場合伊九郎が慌ててそれをさけやうとする前に、已に大喜多が素早く顏をそむけるのがつねであつた。

それを伊九郎は已れの腕前の程も亦居眠り癖迄も彼大喜多が凡て弱點を熟知するが故に、わざとていよく遠慮するものと解釋を下してゐたのであつた。

實際つねに伊九郎が怖れる以上に、又大喜多がいつも注意深く立ち振舞つて、うつかり彼が居眠り癖に襲はれるやうなことがあつた場合、はつと慌てゝ正氣を取り戻し乍ら、先づ何より大喜多の顏色を伺はうとすると、却つて向ふは生欠伸なぞを嚙

みころすごときていさいを作つて、とても堪へかねるやうた様子をよそほふのがつねである。

そのくせ伊九郎は不思議に大喜多が氣にかゝつた。一面又大喜多にへんな尊敬と奇怪な親しみを感じた。

明くれば寛永十五年正月五日の道場開き當日のことである。たとへ木ッ葉浪人の喰はせ道場と雖も吉例は天下の吉例に相違なかつた、その日は半太の道場も時ならぬ賑ひを呈した。

小者仲間の士分以下のやからを初め、與力同志の面々迄が、朝から當日を晴れの小手脛當と言つた工合で、さも一騎當千顔に治まり乍ら、その實きぬ女の玉顔を拜せんために、せい一杯の年頭を奮發して一せいにどやどや詰めかけた。

師範代伊九郎はしかし頭巾を棄てなかつたのである。先に松江で失脚の一條もやはり斯様な人寄せの中であつた　それを新たに思ひ起こすと、今日ばかりはおのが金看板居眠り癖によつて　滿座に恥を掻くまいと決心した。

彼が並はずれの緊張に依つた爲か、不思議に例の金看板が起こらなかつた。遙かに見ると末座には自稱相州浪人の大喜多が、やはり平生のごとく生ッ白い顔をさらして注意深く伊九郎の視線を逃げ乍らさも窮屈な様子をして陣取つてゐたのである。

一から十迄比較的とんとん拍子で、何の失敗もどれ程の不安も別に起らなかつたので、先づ一安心と思つたとたん、今日に限つて主の諸橋半太が、

「大喜多氏、千束殿と一本吉例の御手合せ召され。」

意地惡く又疑をかけたのであつた。只の手合せだけでも可なり大きな難題であつたのに　討手が例の大喜多とあつては、尠からず伊九郎は震慄を覺えた。見ると討手の大喜多の方も、はッと何かに當惑を覺えたごとく、ろくろく聲も立てずにうとうつむいたのである。しかし伊九郎は萬事休した。是がつねなる酔狂の命令ならば、言を托して逃げえられないこともないではないが、とにかく吉例の道場開きであつた。又苟しくも偏の師範代として、年に一度の吉例を無下に斷りもならなかつたのである

やむなく彼は頭巾をとつた。股立ち高くかいとつて。白襷綾にきりりと組みとると、なめし革の後鉢卷りりしく結んで、一見天下師範代を辱しめなかつた。

今は對手の大喜多の方も、止むをえないもののごとく、やがて青眼に位をとつたのである。とたんに何のはずみか、伊九郎はつひ思はずに、木刀を持つたまゝで胸の邊にさんたまりあの十字を切つた。それと間一髪を容れないで、對手の大喜多が又伴天連の十字を切つた。

双方共にはッとそれに氣がつくと、互に狼狽し合つてゐたのである。蓋し天下の手合せにさんたまりあの十字なぞは、どこの流儀にもないに違ひなかつた。

やがて二人はつひにじりじりと詰め寄つたのである。先づ伊九郎の方に遮二無二怪しげなる鞍馬八流の刀法を以つて、滅多打ちにしたゝかな打を入れると、それをよろしくあしらひ乍ら

對手の大喜多はぢりぢりと後へ下つた。あと一打ちと思つたとたん、伊九郎はおのが兩手の木刀が唸を發して宙にけし飛んだのを覺えた。はッと思つて遮二無二兩眼をつむつたのである。とたんに確かに額の邊へがんとなにか固い木切が當つた感じを持つたが、しかし彼は不思議千萬にも、對手の大喜多が「參つた。」

と言ひ乍ら已にへたばつてゐるのを認めた。

その夜何が故か大喜多の方から、いつになく眞劍な眼ざしでもつて伊九郎をそつと表へ誘ひ出した。晝間の敗を恥に感じて少しく彼がためらつてゐるのを、しかし大喜多は薄氣味の惡るい程眞劍極まる眼ざしで以つて、是非にと言ひ乍ら又伊九郎をいざなひ出した。

强いては彼も否みえなかつたので、しかし頭巾は注意深く眞深にかむり乍ら、おどおど後に隨つたのである。角を曲つて暗い露路口へ導き入れると、

「卒爾乍ら貴殿もこの方でムるか。」

平生の大喜多とは打つて變つて、甚だしく眞劍な顏をし乍ら突然伊九郎に詰めよつたのであつた。

たぢろぎ乍ら闇をすかすと、いつ大喜多はそれを取り出したものか、夜目にも輝く銀の十字架を胸にかけて、憚るやうに伊九郎に向つて指し示してゐたのである

しかし伊九郎は返答に窮した。まさか釣氣違故に切支丹を棄返つて天草を追はれたとも言ひかねた。と言つて、しかしはつきりと否と答へやうものなら、彼は大喜多の眞劍なまなざしに怖れた。晝間の程の彼が腕前の今にも及びそうな結果を怖れた答へもならず、答へるもならず只もぢもぢとためらつてゐると、

「今朝程たしかに貴殿も十字を切られたやうに思はれるが、身共ぜうすに誓つて御訊ね申す。他意ならお明し召され。」

大喜多は又詰め寄つたのである、伊九郎は全く萬事窮した。大喜多が今言ふがごとく別に彼は今も切支丹故に、さんたまりあの十字を切つたのではなかつた。只あの時は、つひおのが度胸をすゑるために、習慣的に十字を切つたに過ぎなくて、或は與ろなむあみだぶつと呟いたつてよかつた。

それを斯様に詰め寄るとあつては、勘違ひも亦甚だしかつたのである。しかし彼は絕體絕命であつた。身共誓つてと言ふ以上は、結果の程が空おそろしかつた。否と言はゞ一刀のもとに或は彼の首は已に宙に飛んだかも知れなかつた。

伊九郎は只一身の安全を計るために、つひ心ならずも肯づいてみせたのである。それを知るや知らずや、初めてほつと大喜多も氣を寛いだごとく、

「身共最初から貴殿の節々をそれとお察し申しおつたが、適中いたしてなによりでムつた。」

肚から安神して一切を打ち明けたのである。その言ふ所に從ふと、相州浪人に僞りはなくて、前からの切支丹宗徒だつたそうであつた。

天草つひに起ると言ふ風雨に接して、一味に微力を添へるた

め夜を日について相州を發足したそうである。しかし大城に這入る手前で、幕府が新たに板倉に命じて、天下を擧げてもその剿滅を期せんばかりの形勢を知つて、心ならずも此土地で來るべき時機をねらつてゐると言ふことであつた

所詮は果す可きいのち乍らも、出來うる程の同宗糾合と改宗宣傳を以つて、天草一味に遙かなる助力を添えたい希望と言ふことだつたのである。

伊九郎はその眞劍に喉がつまる程の身震ひをかんじた。しかし今は萬事止むなく、一身の安全のためにいちだんと伴天連類をするの他はなかつた。

「ではどうでムらう。諸橋氏をも改宗させては、きぬ女を先づおとし入れたら、ぜうす、さんたまりあのみ名に誓つて成功申す。」

なんの自信もないくせにさも信心堅固な切支丹顏をよそほつて、伊九郎は一向出たらめな言を吐いた。

眞から信心堅固なる大喜多に何程の躊躇もなかつたのである彼等は互に胸に十字を切り合つて、ぜうすの名に於いて成功を誓ふと、その場に已に踵を返へした。

伊九郎が頭巾に別な苦心なぞの潜んでゐやうとはまるで知しらずに、大喜多も言下に夫をなぞらつて、自ら深く面を包んだ。先へ立つて大喜多を案内し乍らも、しかし伊九郎は氣が氣でなかつたのである。とにかく今此の場だけ旨く切りぬけえたらと言ふ考へのみで、彼は自ら妹のすぎ女を選んだ。大喜多には特に姉のきぬ女を與へて、他に何の腹藏なく、只彼女等を先づ改宗させんがために、そつと小陰へ二人を呼び寄せたのである。

所がしかし彼女等の方は、それを怪しく曲解を持つたのであつた。暗い道場の片隅へめいめい一人宛いざなつていつたのを、先づ勘違ひしたものは姉きぬ女の方であつた。どこでどうすりかへられたものか、伊九郎は知らずにその姉のきぬ女を導いてゐたのである。その上彼は、おどろくべき事件の急轉直下に出あつた。形はきぬ女に望みの要求を迫られたのである。

伊九郎は只狼狽と自失に、逆上の他はなかつた。やがて正氣に返つたものの、しかし彼はその夜輾々とちゞこまり乍ら、幾たびか寢返へりを打たざるをえなかつた。望外の結果がもたらす奇怪な喜悅と、かりにもぜうすさんたまりあのみ名に誓つて大喜多に約した前言の背む怖るべき不安の半々な逆上にうろたへ上つて、つひに一睡も貪りえなかつた。

その翌朝である。

彼は白面きぬ女から、見覺えのある一通の書簡を受取つた、前夜の對手を今にして猶すぎ女とのみ思ひ込んでゐる伊九郎にとつては、きぬ女の態度がなによりも腑におちかねたが、しかし手紙は前夜伊九郎の立ち去つたあとに遺棄されてあつたものだそうである。

勿論手紙は彼にも覺えがあつた。前日松江雲州藩の同役だつた者から、伊九郎が大阪の天滿にあるを聞き知つて、はからず送つた一通であつた。

「貴殿の脫走未だに同役面々の者ら、理由不審と共に相さゝやき居る事に候。醉後に乘馬のたわむれなぞは、決して心に止むる可きものには候はず、吾等貴殿の過ちなる落馬を以つて、いさゞかたり共貴殿御手並をおろそかに致す者には無之、藩候手前はいか程にもおとりなし申すべきに付、即刻御歸藩一統の者迄へん望罷りあることに候」

と言ふ樣なことが書かれたものだつたのである。彼はその一翰をなんの氣なしに受取り乍ら、しかしやがてはツと氣がつくと猪首迄眞赤に恥ぢ入つた。

前夜の對手が意外にもそのきぬ女だつたことに初めて氣がつくと、手足が鮹のごとく眞赤にうろたえざるをえなかつた。同時に落馬の一條迄、多分洗ひさらひきぬ女に讀まれたに違ひなからうと又氣がつくと、狼狽以上に恥ぢ入らざるをえなかつた。

その赤面以上に、彼はしかし大喜多との約言を怖れたのである。結果の及ぶ可き範圍を先づ怖れた。誓つた言葉に僞りのあつたおのが出たらめにやがて又強い自責を覺えた。

僞りが生んだ望外の收穫に、豫期しなかつた不安を感じた。今にして伊九郎は初めておのが本然に歸つたのである。不用意なる方向轉換が、僅かなる偶然に打つかつて、もろくも土臺から完全に覆がへされたことを初めて伊九郎は氣がついた。

その夜彼は、道場にも歸へらなかつたのである。朝が來ても亦夜が來ても、二度と再び伊九郎は道場に歸へらなかつた、

その後伊九郎が今にして翻然と志を立て直ほしたものか或はひよつくり昔戀しくなつたゝめに又のこの事天草が千束沼へ糸を垂れに赴いた者かその邊のところは一向消息不明であつた。

その年二月天草一揆はつひに力つきて潰滅したと言ふ事だけは確然と傳はつたが、しかし肝心の千束伊九郎は、平然と口を拭つて再び舊にさんたまりあの十字を切るやうになつたものかどうか、或は極く洒蛙々々とした顏をして、又松江雲州藩で居眠り乍ら醉後の乘馬でも試みてゐるかどうか、更に樣子が解らなかつた。

僅かに只、諸橋きぬ女が今猶貞烈な孤閨を守りつづけてゐると言ふことだけが傳はつたので、それもこれもみな伊九郎故と言ふ風にけつこうな解釋をほどこして、御苦勞にも色々と馬評をこころみる手輩はざらにあることはあつたが、しかし妹のすぎ女の方は、果してさんたまりあの十字を切るやうになつたかどうかその方は誰も傳ふる者さへなかつた。（完）

文學以外？

辻　潤

“Dada is the seventh Dimension off Literature”——とアインシュタインだか、シタイナハだかが云つたか云はなかつたか、そこまで僕には確と保證出來かねるが、いつぞや和蘭のハイデルベルヒの圖書館で覗いたことのあるクナストロキウス博士の名著「時間と空間」の第一頁の三行目と四分の一位のところに、たしかその文句が引照してあつたと記憶する。博士はなんの爲めにそれを引き合に出してゐたのだか、それも同樣に忘却したけれど、時間や空間には抽斗が澤山ついてゐて、博士の研究しただけでもNo. 1からNo. 7まで位はあると書いてあつたが、——たツたその抽斗の數が七ツ位では別段、澤山でもないなどと云ふやうなことをボンヤリその時、考へながら讀んだやうな記憶がまだ朧ろ氣に殘つてゐるが、——博士はその抽斗の説明をする爲めにその文句を引用したものか、それとも七番目の抽斗を開けたら、空間や時間がダダになつて、それからはあんまり無數の抽斗があるやうでもあり又一ツもないやうでもあり、トント博士の頭が混亂して、わからなくなつてしまつたと云ふことを説明する爲めだつたか、始めに云つた通り明瞭に記憶から失念されてしまつてゐる。

ところで僕はその第七番の抽斗を開けたところを出發點にしてやらうと思つてゐるのである。僕はそれをなんの氣なしに開けて見たのだが、その抽斗の底は筒拔けで、カラツポ同然である、——だから、その抽斗に首を突込んで、いつまでも覗いてゐると色々な物が見えて來る。そして不思議なことには一切が顚倒してゐるのだ——まるで人間の眼のレンズで存在を眺めてゐるやうな氣持がした。

僕はその後、退屈すると、その抽斗に首を突ッ込んでは覗いて見る癖がついた——そのせいか、段々僕の眼がそれになれて來て、反對に世間の現象が顚倒してゐるやうに見える癖がつき出してしまつた——と云ふより、どつちがほんとうなのだか、例令へば馬が狐に乘つて歩るくのが眞理か、狐が馬に乘つて歩

るくのが正常なのかわからなくなつてしまつたのである。

だから、僕には到底世間並に、人並に文章一つ書くことさへ覺束なくなつてしまつた。强ひて頭を混亂させずとも、自づから混亂してゐる――だから、自分でもなにを書かうとしてゐるのかわからない、題を付けやうにも付けられない、仕方ない苦しまぎれに「文學以外」と號したが――と云つて、別段生理學や、心理學のやうなものを書かうと云ふのぢやない。やつぱり小説みたやうな物を内々書いて見たがつてゐるのだ――その證據には「猫と婆さん」にしようか、「アキレスと龜の子」にしようか、「提灯と釣り鐘」としようか、それともいつそ寫實主義らしく、「小説の書けない男」と云ふ奴に定めやうか――或は與ろ……などと色々迷はないでもなかつたのである。かうなると題を付けるだけにも相應に苦心慘憺してゐる始末なのである。

折々どうかすると、頭の中で、四五行乃至十四五行位なんとなく小説のやうなものを書いては消し、消しては書いて見るが、いつの間にかそれ等の幾行かはミラアジュのやうに消えてしまふ。大方それはお前の頭が砂漠のやうになつてゐる爲めであらうと云はれたところで、將に首肯出來る。

しかし、小説はもう澤山だと云ふ氣がする。傑作はタラの子のやうに、カズの子のやうに毎月〳〵賣り出される、いづれもコン然たる藝術品、不朽の名篇である。今更僕などの出しや張る幕ぢやないと云ふ氣が沁々起つて來る。そして、駄作さまぎれに偶々小説らしい物が書けたところで、とても賣り物にはなりさうもない。

嗚呼！ 小説、小説！ 小説といつちやいけないなら創作――その創作よ――と溝を跨いだ拍子に度忘れをした與太郎なら差し詰め云ひさうなところだ。一體、おまへさんはなんの爲めに文學をおやりだねと長火鉢の向ふ側に長煙管で煙を輪に吹きながら意見をする女房でもゐたら、定めし今頃は朝晩、日課の如く御談義を聽聞しなければならないところかも知れないが、あいにくそんな親切にも忠實な女房の持ち合せもないから、その點はいたつて氣樂だが――さて、膝頭に改めて談合してみないまでも、己はつく〴〵首をひねらさるを得ない。抑も〳〵文學とはなんぞや？――藝術とはなんぞや？――なんぞや？ なんぞや？――と思案にあまつて、博識な學者先生に伺へば、先生は不然たるもので、「なに君、そりや變態性慾だよ」と快刀亂麻でスパリと解釋されるが、その變態性慾と云ふ奴がこんどはまたわからなくなつて來る。なにしろ己はそのわけのわからない怪

物の爲めに半生をあたら空費して來たのだ！——それでゐて今もつて小說が一ツ書けないとあつては誰に對して申し譯があるのか？——單に道樂とばかりでは說明にはなりさうもない。だが、もう今更ジタバタしたところで取り返へしはつかない、それよりも觀念の眼をつぶつて、下手の橫好きの末路はかくの如きものだと云ふ模範でも示して、後進子弟の戒しめともなれば、どうやら、そこに一脈の血路が開らけさうだ——先づその邊のところで、己の存在理由を肯定しなけりや、實際、アビバッチでテケレッツのパアで手も足も出ない。

ありがたくも勿體ない大日本帝國臣民たるの籍が拔けない限り、「わが輩」が「猿」でない限り、無能なら無能なりに「職業」と云ふものを持たなければ相ならぬのである。實際、なにをやつても碌なことの出來ない己は區役所や、村役場の屆けの職業欄には「無職透明」とかなんとかして置きたいのだが、無產者の無職と云ふのは大日本帝國の法律と云ふものが御許しにならない。强ひてそれを押し通せば、浮浪罪で拘引もしかねられない始末だ。「御商賣はなんですか？」と訊かれればやむを得ず「ホンヤクのやうな仕事をやつてゐるのですが！」と答へる。「では、著述業ですな」と先樣ではなんの苦もなく、簡單明瞭に己の職業に命名してくれるから、「何分よろしく」とかなんとか云つて引退がるより仕方はない。

僕は去年の十一月、神奈川縣のF町に引越しをして來た。それまでは東京の北郊落合村に巢を食つて、毎日火葬場の煙を眺めて暮してゐた——その前は？——宿なしの形で、諸々方々友人の下宿や、知人の住宅にゴロ〱して、寄食してゐた——さうして機會さへあればかれ等を唆かして酒を飮んで步るきまわることを仕事にしてゐた——その方が本職で、著述業の方は內職で、ホンの小遣錢位にしきや當らなかつた。そんな風にして一生を送られるものなら、結句太平樂で、世話はないと考へて見ることもあつた。しかし、さうは問屋が卸してはくれない、僕だとて滿更、木の股から生れて來たのではないとすれば、自分のことばかり考へて暮らしてもゐられない——人類や、社會のことは兎に角、差し詰め年をとつたおふくろと子供のことは知らん顏の半兵衞ぢや濟まされない——そして、自分のおふくろや子供だなどと思つて許りゐたら大きな誤まりだ——かれ等もこの國で生れたとなれば大日本帝國の臣民で、陛下の赤子だその赤子が飢死にするのを見す〱見逃がしにしてはゐられない、おふくろに對しては子としての扶養の義務があり、子に對してはオヤヂたるの資格はゼロでも、やはり生活の保證は自分がしてやるより仕方はない、だが、己は今儀、なんの爲めに生

れて來たのか？――少年の時學校で教へられたやうに、國に忠義を盡くし、親に孝行をする爲めに、生れて來たのだらうか？――國家の爲めに戰場で花々しく死ぬこと、親の爲めに苦界に身を沈めること、御主人の爲めに、骨身を挫いて働くこと、社會の進歩發達に貢献する爲めに學問をする學者、人類の運命を氣にしてその爲めに努力する文藝家、社會奉仕の爲めに節約をする金滿家、人間の靈魂を救濟する爲めに樂隊を鳴らして歩るく宗教家、プロレタリアを双肩に擔つて階級戰の爲めに奮鬪する勞働運動家……その他、無數のため――

K町の路次の突き當りに久しぶりで、一軒家を持つて、おふくろと子供と僕と三人で暮らすことになつた。これで己も當分、薄汚ない風呂敷包に原稿紙と二三冊のノートと三省堂發行の古ポケタ英和字典と尺八とを包んでブラ〳〵歩るきまわる必要がなくなつたのだ。六疊の二階は至極日あたりがいい、西向きの窓を開けると、桐の葉がバサついて、その蔭から遠くの丘に沈んでゆく夕日の影が見える。町の雜音もあまり騷々しくない程度で耳に這入つて來る――唯だ地上げをしたボロ長屋で土臺がシツカリしてゐない爲めか、電車や汽車の通る度にグラ〳〵搖れるのは如何にも己の生活に安定のないことをシンボライズしてゐるやうだ。これを話の序にある男に話したら、其奴はすました顔をして、「しかし、から云ふ風にグラついてゐる家は地震の時は案外危險が少ないよ、恰度、それは不斷弱々しい病身の人間が案外長生きをしたり、笹が雪の重壓に耐えるやうなものだよ」と一角の眞理を道破したと云はない許りに得意さうに饒舌つたが僕には今もつて信用出來かねるのだ。

K町だらうが、S村だらうが何處だらうが、己の生活には別段大した影響も變化もない、漫然として、行きあたりバツタリの生活が一向眼先きの新らしいこともなく續いてゆくばかりだつまり、僕はいつの間にか生活を見失つてしまつたと云つた方が適切かも知れない、第一、朝と晝と晩のケジメがつかなくなつてしまつた、寢床はどうかすると、三日も四日も敷さつぱなしで、原稿書きがイヤになると、その上に仰向けにひつくりかへつて欠伸をしたり、バツトを吹かしたり、天井の節穴を眺めたり、古本を亂讀したりする。いつの間にか疲れて寢て眼が覺めると、又他にしようもないから、原稿紙へ字を塡める仕事を始める。散歩に出る、懷中に偶々金があれば、縄暖簾をくぐつて一杯飲む、陶然とするとこんどは女の顏が見たくなる。と云つても、唯だ顏だけ見て滿足が出來るなら、よその奥さんや、娘さんの顏を拜見してゐるだけでもことは濟む、話をしただけで滿足が出來るなら、友人の妻君か、カフエーの女給さんでも

つかまへて無駄口を叩いてもことは濟む——此處で、問題は愈々「金」になるのだが、その金と云ふ奴には兎角縁のないやうに運命づけられてゐるのが始末がわるい。戀人や、女の友人なら、金は入らないかも知れない、戀人もなく、女の友達もなければ、どうしても金によつて相手になつてくれる女の處へ行くより仕方はない。しかし、その女を買ふ金がなければスゴ〳〵と又敷きつぱなしの寢床の上に横はるより別段名案もない。實に「不自由人」だと——已はそんな時、可笑さが腹の底からこみあげて來ることがある。

高臺の閑靜な庭園の廣い、植込みの奥の西洋館の二階の書齋には大きなテーブルと安樂椅子と、書棚と、萬卷の書物と、名畫と、ピヤノとヱトセトラ……美しい十四五の少女と、品のある立派な奥さんと、湯殿と、暖かい寢床と、熟練な料理番と、大きな犬と、子供の遊び場と、……仕事に疲れたら、默つてゐても何時の間にか紅茶が湯氣を立て、香りの高い葉卷が燻らされ、原稿が一枚二三十圓になり、一時間ばかり饒舌ると五十圓になり……一冊本を書く前には必ず、千圓位前借が出來……文化生活の見本はコチラで御座いと別段、木戸錢を取るわけぢやないが、時々模範を雜誌の口繪で展覽したり、T氏の書齋だとか、御家庭だとか、娘が年頃なら、何子の君だとか、才媛だとか、銀時計だとか、留學だとか、秀才だとか、博士のタマゴだとかそれが御聟さんの候補者で御座るとか、……何々神宮にて、華燭の典を擧げたり、帝劇へ招待したり、音樂會で見合をしたり、……まことにはや、結構至極の御身分で、そんなことを夢のやうに見せつけられたり、聽かせられたりすると、自分の家の息子も早やく出世して、隱居所でも建ててくれたり、自動車へ乘せてくれたり、芝居を替り目に見せてくれたり、春は花、秋は紅葉……京大阪の見物をすませ、安藝の宮島へまわり、天の橋立、日光——などとプログラムはチヤント出來てはゐるが、……息子は一向出世もせず、それどころか、會社や、銀行へ務めにも出ず、下宿住ひでノラリクラリと、一向オアシにならない紙屑同樣の原稿とやらを書いてゐたのではオヤヂやオフクロはさぞかし助かるまい。それがなけなしの田地や畑を賣つて、遙々と都へ學問をさせにやり、最高學府の角帽姿を「今に、悴れも……この通り大學へ通つて居りますから……」と、悴れの出世を樂しみに、近隣近在の縁者や知り人に鼻高々と自慢をした甲斐もなく、……卒業して二年待てど、三年待てど小遣の催促こそすれ一向に出世は愚か自分一人が生活する月給も滿足には取れぬとあつては、なんたる情けないことだらうと、息子の腑甲斐なさを歎くより、いつそ帝國の最高學府に欺されたやうな氣がし

て、學校を恨んで見ても、今更月謝の返却も請求出來ず…近所の人達にも合はす顏がなく、先づは泣き寢入りで、一言目には Anti-school movement でも起しかねまいケンマクで、それでも、息子はいつかそのうち有名な文學者とやらになるまいものでもないと、果敢ないことを賴みにしてその日〳〵を暮らしてゐる人達もあるだらう。

己の死んだおやぢなども先づ五十歩百歩の組で、金持が一番エライとは云はなかつたが總理大臣が一番エラク、學者なら博士が一番エライと己の子供の時分に教へてくれたから恐らく自分でもさう信じてゐたのだらう。だが、御自分樣はその時分高々四五拾圓の俗吏より、一歩も出ず、無能で淘汰をされてからは、士族の商法のやうな骨董屋を始めたがそれも一向商賣にはならず、息子の教育は碌に出來ず、始終生活に脅やかされ、揚句の果には氣が狂つて死んでしまつたとはなんたる愚かにも氣の毒なおやぢだつたことよ!! 僕は少年の頃、大人の馬鹿らしさと、人間の醜惡愚劣なことは大方、オヤヂとその兄弟と、オヤヂの處へやつて來る人間共から泌々と教へ込まれたやうな氣持が今でもしてゐる。

僕は少年の時分から、唯だ好きにまかせて文學の書物を耽讀した、――單にそれだけの話に過ぎない、――一生食ふに困らない財産でもあれば、今でも默つて靜かに自分の好きな本を讀んで暮してゐる――つまりそれが道樂で、その道樂を一生續けてそれで死ねば滿足する――僕には傑作とか不朽の名篇などを造りあげようと云ふ別段の欲望も野心もない、況んや、それによつて、人類や社會を高めるとか向上させるとか、そんな大それた考への持ち合せは毛頭ない。僕は自分の才能や、人柄に對して第一そんなエライことを企てるだけの自信を持つてはゐないのだ。だから、僕は今迄一度だつてそんなことを口にした覺えはない、しかし、あいにく僕は無産者だ、おやぢが意久地のない爲めに財産どころか、借金を殘して、おまけに僕は中等教育さへ碌々受けず、若い時分から飯を食ふために働らかなければならなかつた。實際、戲談ではない。それでも、己を教師などに雇つてくれる學校があつたので、どうやらかうやら二十六七までは教師生活に噛ぢりついてゐたがとう〳〵我慢しきれなくなつて來た。僕の青春はまるで乾涸びた貧困と苦痛と心の束縛との連續以外のなにものでもなかつた。

僕は今でも、元氣のある中學生や、高等學校の生徒諸君が勇ましくベスボールやテニスをやつたり、校歌や寮歌を高らかに歌つて往來を歩いてゐる姿を見ると實に羨望に堪えない、僕は學生生活の樂しさをとう〳〵一度も味はずに過ごしてしまつた

のだ。

一概に「運」がわるいと諦らめてしまへばそれで事はすむ。先づ〳〵無事息災で、三度の御飯が頂いてゐられれば結構ですなどと、云つてゐられれば世話はない。「長い物には巻かれろ」「泣く子と地頭にや勝たれない」身分を忘れてはいけない」……その他色々の名訓が殘されてゐる 永い間、虐げられて來た人間の心は兎角卑屈になり、意久地なくなつてしまふ。その間に權力に對する恐ろしい迷信がいつの間にか深かく人々の心に巣をくふ――

頭が混亂してゐるから、時々狐が馬へ乘つたり、馬が狐へ乘つたりする。自分でもなにを書いてゐるのだか一向見當がつかなくなつて來る。しかし、頭の中にあることだけはかうやつてペンを持つて書いてゐる中に流れ出して來る。僕の文章には玄關も應接も、客間も書齋も、臺所も寢室もない。――あたりまへの話だ、――プロレタリヤにそんなものがあつて耐まるものか、便所を除いたら、あとは食堂が一間あるだけだ。

問題は先づ食ふことだ。みんなが食へると云ふことだ。馬鹿でも無能でも、低能でも、生物である以上理屈なしに物を食ふ權利がある。萬事はそれが解決されてからの話だ。腹の減つてゐる人間にとつては、文化も、文明もヘチマもトーナスもカボチヤもなんにもありやう譯がない。おまけにいくら働らいても働らいても、滿足に飯が食えないでは頭もなにもかも混亂して來る筈だ。世の中は精力絶倫で、貪慾で、狒々みたいで狡猾で、頭腦が明敏で、殘忍な人間ばかりが生存の權利を擅にするところなのか？ さうして病身に生れた人間、無智無能な人間、無力の女子供、老人などには生存の權利は與へられないのか？――

食ふことに心身を疲勞させてゐる間に、僕はいつの間にか志とか目的とか云ふものを見失なつてしまつた。元來、あまり健康ではない上に、愚劣で不具な兩親の遺傳を受けたあまり發明でもない頭腦の所有者はもうなにをやる根氣もなくなつてしまつた。なにをやつて見たところで滿足に飯が食えさうぢやない。先づ少しばかり習ひ覺えた異國語を種に危ない生活の綱渡りをやつてゐる間に人生は容赦なく半分以上過ぎてしまつた。せめて、自分の好きな異人さんの書いた本でも讀むかはりに日本語に改めて、その日がどうやら送つて行かれれば結構だと思つてでもゐなけりや、とてもやりきれない。

原稿を書いて、それを賣つて食つてゐる人間が文士なら、僕もどうやら文士の端くれらしい、――どうれで、時々地方の青年が、小說みたやうなものを書いて送つて來て先生に是非拜讀

して頂いて批評して頂きたいなどと隨分見當ちがひなことを云つてよこす。――見てくれと云ふだけならいいが、――若し御覽んの上で發表する價値があると御認めになつたら、どこかの雜誌へ御世話して戴きたいなどと、たいてい文句はきまりきつてゐる。己れのところへも、こんなものが時折り舞ひ込んで來るところを見れば、所謂、大家や大先生のところへは隨分と澤山同じやうな連中の手紙が轉がりこむことだらう、――それを一々見るだけでも容易なことぢやない――などと變んな同情をしてみる時もある。ところで、僕のやうな「先生」になると滑稽なことには自分の原稿の賣れ口もどうやら頗ぶる怪やしいもので、偶々、物好きな「改造」などと云ふ大雜誌の御註文に預かるのは蓋し近來の傑作なのである。さうして、日本の大家先生ばかりでなく、遠く海外の名家――アインシュタイン、ラッセル、リッケルトなど云ふ錚々たる學者博士の間に名前を連らねることはなんたる光榮だらうと大に感謝してゐる次第である。そして僕のやうな人間の書いたものも、それ等の諸先生の光彩陸離たる大文章の對照として、たしかに無意義なものぢやないと考へる。つまり、一層、先生達の面目、風采を引き立てて躍如たらしめるために聊かに與かつて効能があるとすれば、僕の文章のレエゾン・デエトルはそれだけで最早充分であらう。

K町では、引越したては家主を始め近所の人達が異様な眼で僕を眺めてゐた！如何にも無理はない――K町にはSと云ふ詩人が一人ゐるきりで、他に文士らしい人間は一人もゐないのだ――そのもS町の人達からは、少數の青年を除いては、――義太夫を唸る道樂息子位にしきや思はれてゐないのだ。堂々たる日本詩人も折々それを話しては苦笑してゐた――いい年をして、ブラ〳〵遊んでゐると思はれるのは無理もない、本をこしらへると云へば製本屋だと早呑み込みをする人達に出遇つては詩人も文士も二文の價値はない。

路次を出ると、つい二三軒目に赤い大きな提灯をぶら下げた家がある。それは町の人から「大提灯」と呼ばれてゐる居酒屋なのだ、近いので越したてにはよく其處へ出かけた、あたりに工場が出來てからは、この古い東海道の宿場の町も、次第に昔風の面影を失ふつて、東京の町外れのやうな新開地情調を呈してきた、安價で腹のふくれる支那ソバ屋の數の多いのでも、如何にプロレタリアートの澤山に住んでゐるかゞよくわかる。居酒屋では、たいてい店先におでんの鍋を置いて、コップ酒の肴に供してゐる、通りがかりの土方や、馬方が白馬やセヤを一二杯ひつかけてゆくのもあれば、中へ入りこんで悠々と飲んでゐる連中もある。お肴で一番高いのがセイ〳〵十五錢位なところ

だ、湯豆腐、ぬた、かけ醬油などと大抵いつも同じやうな種類で、徳利は至極透明なガラス瓶ときてゐる。

入つて腰をかけると、小女が「お酒ですかビールですか？」と、とき／＼「白いの」と云へば盃の代りに茶椀を持つて來る、毎晩出かけてゐる間に、常連と懇意になり、おかみさんにも口を利くやうになつた。

「あんたの商賣なにさあ――」と、或晩いつもの通り、湯豆腐に掛け醬油かなにかで三本ばかり瓶を並べて、いい心持になり始めた時におかみさんは訊ねた、

「あててみたまへ――」

「大抵わかるけれど、あんただけはどうしてもわからないからきくのよ――鎧をぬいぢやつたのよ――」

「序に鎧をぬぎ給え――」

「ええ、なんでもぬぐわよ……こないだもさう云つてゐたんだけれど――もしかあれぢやないかつて……」

「あれとはなんのことさ――」と、僕は大抵想像はついたが、白ばつくれた。

「怒つちやいけませんよ――ぢやなくつて？」とおかみさんは鼻の先へ人さし指をあてた、

「戯談云つては困るよ――」と云つたが僕の風采まさにそれに近かつた、ドテラにひらぐけを前結びにしてゐるのだ。

「だから、わからないから先きから聽いてゐるぢやありませんか？――でも、顏や、頭を見ると、西洋畫描きさんみたいね――」

「成る程――おかみさんは中々眼識が高いね――だが、どつちもあたらない、僕わねこれでも職工なんさ」

「へ――、そんなデタラメを云つたつて駄目ですよ――」

「職工だつて、君色々あるからね、――僕は歐文工なんだ――」

しかし、それはおかみさんには通じなかた。

「オープンコウつてなにさ」

「橫文字の方の印刷をやるのさ！　毎日橫濱の異人のやつてる新聞社へ通つてゐるのだよ――」

「ああ、さうなの――」とおかみさんは始めて合點がいつたと云ふやうな顏付をして、すつかり僕を信用してしまつた。今迄、なんとなく薄氣味わるく思つてゐたが、職工と聞いてすつかり安心し、それから、口の利き方も至極ぞんざいにフアミリヤアになつて、なんでもベラ／＼と話すやうになつた。

しかし、それも僅かの間で、ヂキに化の皮は破れてしまつた、――僕は先づ文士としてよりも、社會主義者として町の人達から注目されるやうになつた。さうして、いつの間かに僕の

家には町の若い連中が遊びに來るやうになつた、模範青年までがやつて來るやうになつたのだ——。色々な智識慾に炎えてゐる青年達は、僕を一角の學者か物知りであるかの如く買被つて、社會問題や、人生の問題に關する質問を手をかへて品をかへて僕のところへ持つて來る——さうして、自分達の知らない、なにかしらむづかしい、未知の世界を獲得しようとするのである。——だが、實のところ、自分はなんにも知らないばかりか、さうして質問をする若い連中の方から多分に色々なことを教へられるやうな氣がした——否、實際教へられたのだ、——さうして、自分は諸君に對して、なにも有益なことは話すことも、教へることも出來ないが、唯だ僕が自分の經驗から如何に今までつまらぬ事のために多くの時間と勞力とを費やしたか、つまり、諸君の參考の爲めに、僕自身の失敗の經路を話すより仕方がない、と云ふやうなことを話すと、青年達はなにか僕が謙遜でもしてゐるのかと感ちがひをして、愈々僕を信用して、一々問題を提供して僕にそれを解決させようとするのである。僕は大にありがたくは思ふが一方に甚だ迷惑なことであると思つた。

僕は自分の現在を省みて一番自分に對して不滿を感じてゐることに筋肉勞働の訓練と科學的智識の缺乏だ。僕は今からでも出來るなら、たとへ幾分なりとその方面の缺乏を補つて行きたいと思ふが、それをやつてゐる暇がない、つまり金がない、——いくら直接生産に當る仕事を讃美してみたところで、身體が云ふことを利かず、頭が働らかなけりや仕方がない、結局虻蜂とらずで慘めな思ひをするばかりだと思ふとやつぱり現狀維持より方法はない。それに今日のやうな社會組織に對して少しでも眼を開いたものは聖人か馬鹿でない限り、他人がうまい汁を吸ふ爲めの機械にオイソレとなれるものぢやない。だが、自分のことは先づ棚へあげて、青年諸君達には大に筋肉勞働と科學的知識と、直接生産の仕事を奬勵することにしてゐる、——しかし、同時にそれを狡猾で貪慾な資本家の爲めの犧牲に供しないやうに注意するが、——そんなことは青年諸君の方が僕なぞよ遙かに心得てゐる。そして、こんな問題を青年諸君の來る度に話してゐるうちに、何時の間にか青年諸君の方が立派な新時代のソシヤリストになつて、僕の方は一向舊式なデカダンでニヒリストだと云ふ様な攻撃を受けて、反對に僕の方が忠告を頂くやうになるのだ。時代はグン〱進んでゐる、澎湃として押し寄せて來る思潮の流れは新時代のフレツシユな頭腦と官能とにヅン〱吸收される。それを愚にもつかない、陋劣な手段で無理にも堰き止めやうとするだけが滑稽だ、寧ろ悲慘だ——

いい加減におとなしく鍵をぬいで腐れかかつてゐるブルジョアジイの城廓を明け渡したらよささうなものだ。自分達の御庫に火がついて見ないと眼が醒めないやうぢやまことにはや御氣の毒千萬だ。

マルクスの經濟學の一頁も覗いたこともなく、巡査に尾行されたことも、牢屋に入れられたこともない――それでも世間は僕のことを社會主義だと云ふ、――眞面目なソシアリストが聽いたら嘸かし苦々しく思ふことであらう。デタラメに淺草の公園で芝居の眞似をすれば、僕はいつの間にか俳優のスタンプを押されて、オペラ俳優番付の尻から三番目位なところに登錄されるの光榮に與かる。酒と女が好きだと云へばデカダン、生きてゐるのがつまらない。實にナンセンスだなどゝ云へばニヒリスト、駄原稿を雜誌や新聞に賣りつけて賣文の恥を曝らしてゐるといつの間にか文士になる。その他、危險思想家、自由人、アナアキスト、エゴイスト、コスモポリタン――なんでもござれである。大阪の新聞は曾て僕のことを音樂批評家だと云つたさうだ、なんとでも勝手に御命名になるがいい。で、僕は面倒臭いから自分では最近ダダイストの看板を自分でかけたのだ。その登錄商標には大津絵から瓢箪鯰を借りて來て差詰め間に合はせて置くつもりである。つまり僕が自分はタダの野郎に過ぎないことを表明して置きたいのである。しかし、自分が人間であると云ふことだけは自分で確く保證して置く。ダダイストは人間ぢやないなどと云ふ人があれば僕は早速抗議を申し込む。だが、實のところ僕は人間であることをあまり名譽とも、誇りとも思つてはゐない、若し自分の勝手なものに變形することが出來れば、早速人間を辭職したいと思つてゐるのだ、自殺してみたところで、それから後はなんになるのだか一向見當がつかないでは實に薄氣味がわるい、――運わるく人間に虐待される動物などに生れて來たらそれこそ恐るべき災難だ。

ところで、不思議なことには、この世の中には特別に「人間らしい人間」と云ふ者が存在してゐるのださうだ。僕はまだ直接にそんな者に出遇つたことはないが、そんな特別な人間になつたら、恐らく僕のやうに人間であることを不名譽だと思つたり、嫌やがつたりはしないのであらう。それどころではなく、人間であることを唯一無上の存在であると考へ、所謂人間らしくない人間、即ち人非人を自分のやうに立派な、完成された人間に高めようと骨を折るらしい、まことに御苦勞千萬なことだと思ふ。しかし、唯だ口の先きや、筆の先きで、人間らしい人間になれと云つたところで、一向その目標のわからない人非人には見當がつかない。つまり、一目瞭然とした人間らしい人間の

見本でも見せてもらはなければ困るのである。第一人間らしい人間の資格はどんなものか箇條書きにして見せてもらひたいものである。

それと同じやうに、文學や藝術にも色々とむづかしい等級や、差別があるらしい。たしかこの雜誌でも里見さんがさう云ふ方面のことを詳しく説明しておいでになつたやうだ。そこで、こんどは文學らしい文學、藝術らしい藝術、眞の藝術品、純眞な作物――などと註文が次第に面倒になつてくる。詩人に云はせると同じ文學の中でも小説や、戲曲は純粹な藝術とは云ひかねる詩のみが文學を使用して表現する藝術の最高に位するものだと云ふ。しかし、詩にも敍事詩とか劇詩とか云ふやうに小説や戲曲の領分に踏み込んでゐるものがある。さう云ふのは純粹の詩ではないのか？――また近頃では文學者と云ふ言葉はあまり使はれず、たいてい文士と云はれてゐるやうだが、僕は「文士」と云ふ言葉位ひ凡そ虫の好かない言葉はあまりないと思ふ。音の感じからくるのか、それとも聯想からくるのか知らないが兎に角イヤな言葉だ、まだ「記者」の方がよほどいい。それから、小説家と云ふ代りに、創作家と云ふ言葉の方が多く用ひられてゐるやうだ。小説を創作と云ひ出したのは何時頃からか知らないが、隨分曖昧な言葉だ。しかし、「小説家」と云ふよりは「創作家」と云はれた方がなんとなくもらしい感じがするのだらう。役者よりも俳優、俳優よりも技藝員と云はれる方が嬉しいのだらう。しかし、猫八や、梅坊主が時々自分のことを藝術家と云ふのは頗ぶる愛嬌があつていい。

僕は自分の生活を見失つてしまつたと同樣にいつの間にか文學や藝術と云ふものの標準や、價値や、目的がわからなくなつてしまつたのだ。そして、古來から萬人が認めて不朽の傑作だと稱せられてゐる作品、たとへば、ホオマアの「イリヤス」だとか、ミルトンの「失樂園」だとか、ダンテの「地獄」だとかゲエテの「フアスト」だとか、さう云ふ作品を幾度か讀みかけて見たが、十頁とは辛棒して讀むことが出來なかつた。畢竟、自分は語學の力が足りない爲めに興味がないのだらうと考へて、日本譯で讀んでみやうとしたけれどいつでも面白くないのでやめてしまつた。自分には世界第一流の文學を味はふ資格がないのであらうか？――だが、このサイコロジイを段々押し詰めて行くと結局自分にとつて一番興味の深い讀み物は自分の惚れてゐる女の書いたラヴレタアだと云ふやうなことになつてしまふらしい。

自分以外のオウソリテイを見失つてしまつた人間にとつては、其處に何等の客觀的價値と云ふものが存在しなくなつてし

まつたのである。自分以外には其處に何等の價値標準は存在しないのである。そして、その自己と云ふ者も大體の傾向は定められるかも知れないが、絶えず動いてゐるから決して不變の標準を下すわけにはゆかない。自分の經て來た境遇、經驗、遺傳、教育、環境、年齡、生理的狀態――その他、人間の知識ではわかりかねる「生命」を形造つてゐるさま〴〵の微妙な作用――兎も角與へられた狀態に生棲してゐる一個の「自分」と云ふ不可思議な存在はその時々の內外の影響の下にあつて自分を生きてゆくのである。考へたり、感じたり、食べたり、饒舌つたり、物を書いたり――兎に角、何等かの形によつて自分を表現してゆく、しかし、度々繰り返へして云ふが、自分の生きてゆく上の標準を見失つてしまつた自己はどうしても、行きあたりバツタリに行爲するより仕方がなくなつてしまつたのだ。

そして、僕はいつの間にか、自分のやつてゐることや、他人のやつてゐることや、この現世の社會組織と云ふやうなものに對して一應その時々の自分の標準で批判をして見ないではゐられない癖がついた。批判を下して見たところで、どうにもならないと知りながらもやはりさうせずにはゐられないやうになつてしまつたのだ。そして、その結果はいつでも絶望に終りを告げるのだ。

自然の風物や情景に對しても、それを無邪氣に單純に眺めてゐた少年時代のことを考へると遉がに懷かしく思はれてならない。宇宙の神秘とか、神の存在とかそんな風なものを漠然として考へてゐた青年時代には、それでも、落日の美しい金色の雲の波の彼方には天國があるやうに想像したり、星の光りを仰いでは創造者の絶大の力とか、久遠の生命だと云ふやうな抽象的な想像を逞しくしてゐたが、今では、そんな連想が伴はないせいか一向、天を仰いでもありがた味が少ない。やつぱりこの地上と大差はないところかも知れないなどと考へるとなんとなく氣持がわるくなつてくるのだ。

芝居の舞臺を見ても奈落で動いてゐる人間のことを考へたり、奇麗に着飾つてゐる半玉を見ても、彼女等を金力で自由にする爺のことを考へたり、キネマを見ても、人間はあんな眞似までして生きなければならないのかと考へてみたりするやうになつてはまつたく御仕舞だ。イリユウジヨンは片端から打ち壞されてゆく。さうして最後には所謂、眞理と云ふ奴だ。「眞理はイリユウジヨンで、イリユウジヨンは眞理だ」と云ふ言葉がたしかグウルモンの「アリユクサンブルグの一夜」の中にあつたと記憶する。イリユウジヨンでも結構だから、そんな物が始終眼の前にぶら下つてゐてくれると非常に都合がいいの

だが、相憎、自分にはそれもとうになくなつてしまつてゐる。

さうして、僕は稍やもすれば、ゴルキイの「どん底」の中に出て來るクレシチと一緒になつて「眞理とはなんだ、眞實とはなんだ、仕事もねえ、――力もねえ――これが眞實だ！　身の振り方が付かねえ、とりつく處がねえ――だからクタバツちまやあいたいんだ――それが眞實だ……」と叫びたくさへなるのだ。まつたくアビバツチの狀態だ。しかし、僕は自分がこんな風な狀態に落入つたことを僕自身にのみなすり付けたくはないのである。僕はどう考へても生れながらこんな風な人間ではなかつた筈である。僕はどうしても自分の生活を何者かに略奪されてしまつたやうな氣がして仕方がないのだ。

大晦日と元日とが劃然としてゐた氣持をもう一度取りかへしたい、「大晦日の晩に松一本くばりませう」と、大きな提燈のさがつてゐる下町の商家の軒下を仲よしの友達と一緒に馳け歩いたり、「影やトウロクジン」をやつたり、「今日は二十八日、あしたはおかめの團子の日」と云つたりして無邪氣に遊んだ少年の日のことがさすがに偲ばれるのだ。晴れた日にはよく鳶の「ピーヒヨロ〳〵」と鳴く聲がきこえた、夕方には「おうわた」と云ふ虫が飛んでゐた、「おうわたこい〳〵ままくわしよ」と云つて、この虫を追ひ驅ける。――こんな風な連想はいくらでも限りなく出て來さうだ。その頃は勿論、特別に童謠詩人などと云ふものはなかつたが、僕等は別段、童謠に不自由はしてゐなかつた。そして、子供も大人も一樣に御正月をエンジョイしたやうに思はれる。

僕は自分の少年時代の回想を書かうとしてゐるのではない、つまり、僕の「生活」と云ふ言葉に含まれてゐる朧ろ氣な概念の一部分を說明するための例として擧げて見たまでなのだ。自分の心に批判が生れてからはどうしても自分の心に自然だと思はれないやうなことはなに一つ素直にはやれなくなつた、たとへば「年賀狀」だが、これが虛禮であるないはさて置いて、いくら習慣でも、改まつたやうた氣持の起らない人間には自然には出來かねるのである。唯だ强ひられるやうな氣持の起ること は何事に對しても不愉快だ。

誰れでも自分の生れた鄕土を愛さないものはないだらう、さうして鄕土から生れた美しい習慣や風俗を輕蔑するものはあるまい。僕等が物心を覺えてからでも、かなり多くの美しい風習が次第に失なはれて來たのは甚だ不快である。僕は傳統主義者ではないが、自分でけの好惡から云つてみても、耐らなく腹が立つて來るのだ。かうなるとなまじ少しばかりの物が殘存してゐる方が慘めで眼ざはりになつて來るのだ。それを大切に保護して自然のままに育ててゆくと云ふやうな氣持は何處をみまわ

してもないやうだ。いつそキレイさつぱりと打ち壞してしまつた方が餘程セイ／＼する。

希臘の夢を見たり、江戸の夢を見たり、巴里や、伊太利や、ニユウヨルクの夢を見たりすることもわるいことぢやないかも知れないが、夢は遂に夢にすぎない、現實に醒めれば雜駁な、混亂した生活が用捨なく自分の周圍に旋轉してゐるのだ。僕はそれ等の一切を肯定せずには一日も生きてはゆけないのだ。それ等が自分の生活のマテリアルを一切構成してくれるのだ。それを逃がれやうとするのは不可能で同時に愚かなことだ。

僕は自分の生活のデタを少しばかり書いてみようとしたまでである。これがダダに進むプロセスの説明にもなるかも知れない。

徒らに奇矯な文字を羅列したり、無意味なことを並べたりするのがダダの能ではない、だが、ダダはいつも自分に對しては正直で忠實だ、――ダダは自分の生地そのままで生きてゆくことが好きなのである。ダダは山師ではないのだ、有を無にすることは好きかも知れないが、無を有の如く見せかけることを憎むのである。

僕は自分を唯だ無技巧に擲げ出すばかりだ、下駄の鼻緒が切れたら、それをスゲル機會の見つかるまでは、無格恰な風をして歩るくばかりだ。面倒な時はスグト洗足になる。ダダは下駄に支配されない。だから、他人の下駄にも一向無頓着だ。その代り誰れの下駄でも穿いて歩るく。

ダダは眞理の爲めにも、美の爲めにも、人類の爲めにも、善の爲めにも動かない、唯だダダの欲するままに動くばかりである。ダダは藝術でも、文學でも、社會運動でも、宗教でも科學でもない。未來派でも表現派でもない、さうして同時にそれ等の一切である。ダダには軌道がない。唯だ「無」の軌道が存在するばかりだ。

絶對を否定するアインシュタイン博士はダダ主義者だ、なぜなら、彼は絶對の價値を認めないからである。

ダダは相對に絶對の價値を與へる、屬性が全體を包含して、蟻がマンモスを呑み込む。駱駝が易々として針のメドを抜けるのである。彼はダダ以前の一切のイリユウジョンを絶滅したことによつて、同時に新らしいイリユウジョンの中に飛びこんだのだ。しかし、彼の足はいつまでも堅く地上を踏みしめることを忘れてはゐない。言語は直に道斷される。一切の眞理が單なる符牒に還元される。眞理がマホメットの山の如く、無數に「自己」に蝟集して來る。なぜなら、ダダが眞理の源泉だからである。眞理の源泉にはだが水は一滴もない、唯だそれは噴き出してゐるのである。それが宇宙に瀰漫して、再び最初の源泉に歸來するが如く見えるのはこれ又一種のイリユウジョンであ

る。ダダは遍在する。

自分は矛盾の織物を着た泥人形だ、いつでも過去と現在と未來とを交醋して生きてゐる。朝から晩まで「南無マミダ」や、「呆蓮華狂を唱へてゐる人間のやうに、口を開らけばブルジョアだとかプロレタリヤだとか搾取とか云つてゐるモノマニヤのやうに、ダダダダダダ……と云つてばかりはゐない。欠伸が出れば遠慮なく嚔もする。恐らく鼻から提燈をも垂らすであらう、

自分はこの世の中に原稿を書く爲めにのみ生れて來たのぢやない、——日本にダダイズムを宣傳する爲めに生れて來たのでもない。勿論、高橋新吉を有名にする爲めに生れて來たのでもない、——恐らく、僕には天職はない筈だ、僕は唯だなるべく自分が自由に生きて行きたいと思ふから、なるべく他人の邪魔をしたくない。如何なる場合でも強ひられることはキライだ、だから、人を強ひることもなるべくしたくない。人間以外の生物に對しても僕の邪魔にならない限り、なるべくかれ等の自由を尊重してやりたいと思ふ、至極殊勝な心懸けの人間だ。

こんな風な考へ方は生物學者の物笑ひになるかも知れない、階級鬪爭の上に立つソシヤリストの輕蔑を招くかも知れない。しかし、一切の歴史を無視するダダはそれに頓着はしないのである。人類の思し召しに協はないでも、僕自身の思し召しに協へばそれで結構だ。神、佛、人類、社會、自由、國家……相手變はれど主かはらずでは困る、言葉の上の揚げ足をいくらとつてみても、要するに偶像の交代に過ぎない。

自分のダダは當分極めてダラシナク生きようと思つてゐる、そして、しきりに笑ひたがつてゐる、なんとなく息がつまつて噎せかへりさうだ。偶には大きな聲を出して笑ひたい、肩が凝つてやれきれない。三日位、飯を食はないでも平氣な面をして、野原の眞中にブンゾリかへつて、馬鹿笑ひをしてゐたい。さうしたら、新年は大に御目出度くなことだらう。

僕は今、フト少年時代、僕の好きだつた淺草觀音堂の額を思ひ出した。あの額はいつ頃からなくなつたのだか、兎に角今ではない、階段をあがつた眞正面にあつた額だ。

柿色の衣を着た大きな入道坊主が右の手を突張り、左でその袖をまくりあげながら、片眼を大きくむいて眉をつりあげ、口が張り裂けさうな欠伸をしてゐるのだ。その背後には大きな虎が寢てゐて、兩側には二人の唐子がいい氣持さうに寢てゐる、一人の方は片膝を突いてその上に卷物を展ろげたまま頬杖をしてゐる、そして一方は締木をかたへに投げ出してうつむきになつて寢そべつてゐるのだ。

入道坊主の顏を見てゐると、欠伸をしてゐるのだか、哄笑してゐるのだか、癇癪を起してゐるのだか一寸見當がつかないやうな表情になつてくる。全體、その虎と坊主と唐子とは如何なる關係に置かれてゐるのだか、少年の自分にはトント要領を得

なかつた。虎が眼を醒したら、温なしくスヤ〳〵と寢てる二人の童子は食はれやしないかなどと、つまらない心配をしながら、それでも觀音樣へ行く度には必ず、その額をいつもチット眺めて興味を感じてゐた、そうして、始めは、憎々しさうに見えた半眼の入道坊主にも次第に親しみを感じだして來た。

その坊主が豐干と云ふ坊主で、唐子のやうな二人が寒山拾得と云つて、普化菩薩と文珠菩薩の化身で、その二人は Where there is Jack, there is Jill と云ふやうな關係に置かれたる人物だと云ふことは餘程、後になつてわかつた。

全體、なんの爲めに文珠と普賢が乞食小僧のやうな姿をして天臺山の近邊をうろついてゐたのだか、豐干が何處から、そんな大きな虎を生け捕りにして來たのだか、恐らく誰れも知らないだらう。だが豐干は始終虎へ乘りて馳けづりまわつて歩るいてゐたものと見える。拾得は寺の小僧をして、箒を擔ひでは庭をブラ〳〵してゐたのだらう。其處へ寒山が、今日はともなんと云はず、フアリとやつて來る用事は拾得の取つて置いてくれる寺の餘り物を竹筒の中へ入れて持つて歸へるのだが、そんな事はどうでもいいと云ふやうな顏をして　拾得と無駄話を始める。そこへ、虎に乘つた豐干が退屈で耐らないと云ふやうな顏をしてやつて來る。三人が顏を見合すと、先づ、一同に馬鹿〳〵しい大きな聲を出して笑ふのだ。なにが可笑しいのだかわからないが、大方それで挨拶の代はりなのかも知れないのだ。

拾得は始終箒を擔いでゐるが、庭など萬遍なく掃いた試しはあるまい、寒山や豐干の來たのをいい幸ひにいつでも寺の仕事もサボツテゐたに相異ない。寺の坊主が留守の時には豐干が先頭で拾得が案内役で、寺の庫裡を隈なく探して、般若湯を飲み放題に呑みある程の物を食べ散らかして、「豐干が蛸入道のやうになつて向ふ鉢卷かなにかで、まさかカッポレも踊るまいが大きな破れ鐘のやうな聲を出して怒鳴り出すと、それにつれて、拾得は箒を振りまわし、寒山は卷物を頭にまきつけて、「トッサイトッサイサヽカイリンネテケレッツノパア」とかなんとか歌だかなんだか、わけのわからないことを頻りにわめきたてて、果ては三人がベロ〳〵になつて倒れてしまふまで踊りまわるのだ。さうして疲れきつて、天臺の山中響き渡るやうな鼾をかいてねこんでしまふ。淺草觀音堂の額は多分、その眠りから豐干が醒めたところでもあるのだらう。こんな人間を黑燒かなにかに調合して藥にしたら、キット神經衰弱の特効劑になることは受合ひだ。高林無法庵がトランク一つになつて放浪を始めない前、まだ猫と婆さんとを相手にして糀町の芭蕉庵の二階にゴロ〳〵してゐた時分、醉つ拂ふと、よく、寒山の經言のやうな詩だかなんだかを唸つてゐたが、恐らく孤獨地獄に落入つてゐた無法庵の神經衰弱はその咒ひで多分に癒されたものと見える。この話はまた追つてゆつくりすることにしよう。

さて、「文學以外？」も書いてゐるうちに次第にダラ〳〵と取

りとめがなくモザイクの出來損ねたやうなものになつてしまつた。第七番の抽斗を覗いてゐることも、少々疲れてイヤになつて來た。今迄にまだ美人は一人も通らない。この邊でひとまづ打ち切りとしよう。だが、諸君、僕もこんなことを道樂にばかり書き散らかしてゐると思はれては甚だ困るのだ。これでも常人は大眞面目に冷汗を流しながら書いてゐるのだ。面白いと思つたら遠慮なく喝采でも、アンコールでもなんでもやり給へ。僕も高座へあがつて御饒舌りをしてゐる以上「ヒツコメ!!」などと云はれちや、席亭「快象」の手前、甚だ面目を失ふことになる。大きな聲ぢや云へないがね——なにしろ、新年のことでもあるから、讀者への景物として、大師匠ダダラ・ロオレンス師の文句を御紹介に及んで後進と交代と云ふことにしやう。

『諸君、若し人間の胸の中に在りまするモマスの鏡のトリツケが、大批評家の御指圖に從つて、一々取り替へられなければならないと致しますれば、——先づ第一に、どんな結果と相成ることで御座いませう、その阿呆らしい結果は、先づ第一に、最も賢明な、又最も嚴粛な先生方も、我々の日常生活の窓を覗く度に、必ず一々某かを御拂ひにならなければならないことになるでせう。ところでその鏡の位置さへ變りませんでしたら、別段むづかしいこともなく、人間の心を讀む爲めには、そつと椅子を引きよせて、恰度、デイオプチカルな蜂の巣を覗いてでも見るやうに、その中を覗いて御覽んになれば、いつでも靈魂の丸赤裸を御覽んになることが出來るでせう、さういたしますと、靈魂の凡ゆる動作、凡ゆる仕掛が手にとるやうに御解りになるでせう——』

師匠は靈魂を女性にして「彼女、彼女」と云つてゐる——もツと後を通譯したいのだが少しばかり手におへなくなつたから、師匠の言葉そのままを引用することにする……"—would have been traced all her maggots from their first engendering to their crawling forth, — watched her loose in her frisks, her gambals, her capricios; and after some notice of her more solemn deportment, consequent upon such tricks, etc,—"フタスクギヤンボル、キヤツプリシオスなどは一寸手がつけられない、ところで、そんなことは到底この地球では出來ない相談で、火星へでも行かなければ駄目だらうと云ふのだ。これから愈々ロオレンス先生一流の筆法でダダ天文のペダントリイに入るのだが、——この邊でひとますケリを付けることにしよう、

When his Hobby-Horse grows headstrong, — fare well cool reason and fair discretion!

（一九二三年、十一月）

南歐の空

吉江喬松

伊太利人等が故國を遠く離れてゐるとき、何よりも先きにその故國について思ひ起すものは、アルプの彼方、その半島の上を覆ふてゐる光ある紺青の空の色のやうである。ことに、霧のかゝる、青白い太陽の、曇り勝ちな中歐の冬に身を包まるゝ時は、彼等はとくにそれをこひ慕ふ。伊太利の空（ル・シエル・ディタリイ）！と彼等が叫ぶのを、私は五回迎えた巴里の冬の間、いく度となく耳にした。

千五百十六年、若い佛蘭西の王、フランソア一世に連れられて、故國を去つて、西南フランスのアンボアズの宮殿近きクルツの館（シャトウ）へ住むやうになつたレオナルド・ダ・ヴインチイの晩年は、明るい光の國と、思ひ出の女性等から遠く離れて、寧ろ悲しいものであつた。この天才の巨匠は、この異境の新居の周圍の寂しい光景の中に、せめて、南へ向ふ道を、光の方へ流るゝ水路を造りいだし、「フランスの中心をイタリアへ近よらしめよう」と考へた。そして、ロアルとソオヌとの兩河を結ぶ水路を計畫した。それは完成せられなかつたけれど、今日でもなほその天才の悲しい夢の跡はとめて見ることが出來る。

若いフランソワ一世は、この巨匠を自國へ連れて來ることによつて、藝術の根元、美の生きた精髓を自國へ殖えつけることが出來ると思つた。そして「伊太利に於ける有ゆる美はしきものが、佛蘭西に於ても繁えゆく」ことゝ考へた。レオナルドにもその意向は解せられた。そして彼は右手に痲痺が來てゐたにも關らず、努めた。最後の三年間に、三つの傑作が出來上つた。「或るフランス女性の肖像」と、「若き聖ジャンバプテイスト」と、「聖女アンヌ」とがこれであつた。

けれど、この佛蘭西に於ける彼の最後の三年間は決してこの天才を悦ばせはしなかつた。

「フランスに於て、解らぬ國語でぶつ〳〵いふ囁きの中で、この新しい風土で、太陽を蒼白くする霧の中で、レオナルドは、故國なるもの丶意味を見出した、そして、伊太利が自分の故國であるんだといふことを知つた。不意に、彼は、自分の幾つかの思出と共に、彼方に殘してきた若さと別れて、自分が年とつたといふことを一層烈しく感じた。……辛じて六十四才に過ぎなかつたのに、彼は七十才以上にも見られた」と、つい先頃物故したガブリエル・セアイユがその一代の名著「藝術家及び學者としてのレオナルド・ダ・ヴインチ」の中で言つてゐるが、その時、レオナルドは故國よりの訪問者に接して、何よりも悦しく、思ひ出の數々を物語つた。が、その時とくに、この老天才の次第に憔悴して行く頭腦と、次第に曇つて行く兩眼とに、鮮かな最後の閃めきを見せたものは、彼がミラノの、サンタ・マリア・デル・グラジイの僧院の壁上に殘して來た「最後の晩餐」のクリストの背後からのぞいてゐる青光の漂ふ故國の空、伊太利の空であつたと想像しても、決して間違ひではないであらう。

それほど、伊太利復興期の藝術は空の惠みを受けてゐる、空の光を受けてゐる。この時期に於て初めて、人々は空を仰いでその美を感じ、この時期に於て初めて、伊太利特有の空は人間の藝術の中に降つて、その光、その色を具象化してゐる。この空の發見が、伊太利復興期藝術の生きた大切な要素の一つであつた。そして、その時以來、伊太利人は到る處にこの故國を持つて行き、到る處でその故國の空をなつかしむのである。

千九百十八年の燈火の無かつた、燃料の缺乏した巴里の冬は、とりわけ人をして南國の思はしめ、南國人そしてその故國の空を思はせた。その時、カルテイエ・ラタンのルユウ・デ・ゼコル街の小さなイタリイ食屋へは、伊太利の學生や、兵士や、とくに澤山の飛行家が來てゐた。その中の三人の飛行家が屢々私達と同じ食卓に來たので、連りに伊太利の話をして聞かせた。三月と五月のロマが最もうつくしい時期である。この兩月では太陽の光りがいつもより柔い。復活祭に先きだつ五六週間はロマは人の美で飾られ、それに遲なく四五週間にはこの永久の都市はリラの花と早咲きの

薔薇とで充たされる。けれど、と、彼等は語調を強めて、「伊太利の空の美しさは多だ、とくに一月頃だ、これは到底フランスでは見られない。行くならば、今、行たまへ。君は濃い光あるその伊太利の空を見出すであらう」といつた。「けれど、その空の自由と美しさとを何人よりも一層享樂し得らるゝのは、君等だけだ、君等飛行家だけだ」と、私がいつてやつたら、「それはほんとだ」と答へて、彼等は如何にも快心なやうな笑顔をした。私は今でもその若い飛行家等のその時の笑顔を思出すことが出來る。

四百年前に空を發見し、その空の征服を企てたレオナルド・ダ・ヴィンチの子孫として、この若い伊太利人等は、この天才の頭腦に閃いて來た大空の自由を今にして初めて享樂してゐるのである。南歐の空といふ文字は今では一層現實的な意味を持つやうになつて來た。その意味を彼等が最もよく具體化してゐるのである。つまり、彼等はレオナルドの夢の中から生れ出た子供等である。

この若い伊太利人等が定つて會合する或る家があつた。これはセエヌの岸からサン・ミシエルの大通を少し登つて、直ぐ左へ折れる或る狹い巷路の中程にある舊い小さな食屋（レストラン）である。この家は巴里に於ける伊太利人等にとつては舊い歴史のある家であつた。此處は曾て故國の統一を計畫した伊太利の志士等の集合した家であり、この家の老主人も當年の志士の一人であつた。それ故、伊太利王が巴里への來遊の場合は、必ずこの家の主人をも招いて饗宴するのであつた。私は生粹なマカロニが食べられるのと、伊太利の話だけを純粹に聞かれるのが面白いので、時々其處へ出掛けて行つた。特に同宿のH君はこれ等の伊太利人等に知人が多かつたので、H君と一緒に行くことは一層伊太利を知る機會になつた。其處では、それ等の若い空の征服者等も無論來てゐた。けれど、その中で、いつも中心の人物となつて元氣好く喋つてゐるのは一人の老大佐であつた。

彼は從來伊太利が關係した戰爭へは盡く出てゐた。いや、のみならず歐洲に於ける戰爭は盡く知らないのはなかつた。今度の戰爭でも諸處に轉戰してゐたが、最後はサロコクの戰線で頭部へ負傷をして、三日間、無意識狀態で戰場へ捨てられてゐた。が、後に收容せられて、頭部の負傷の個處は薄い鐵板で覆はれてゐた。或時、彼はその個處へ私の手

を持つて行つて、指でその鐵格に觸らせた。右の前頭部の半分は、長い頭髮で覆はれてゐるのでちよつと見たところでは、判らないが、その髮の間へ手を入れて、抑えると、冷たい不氣味な感じが、人體の一部に觸れてゐるとはどうしても思はれなかつた。その後、闇の中などで鐵の柱などへ手が觸れると、不圖その時の大佐の頭が思ひ出されて氣味惡く思つたほどであつた。

彼は一般の伊太利人等と同じく日本が好きであつた。少くも好きだといつた。或時、彼は自分の同士四五人と私達二人の日本人とを合手に夕食の卓で喋つた後で、その家の歷史のある地下室を案內しやうと蠟燭を持つて先きに立つた。この地下室へ降りるには、幾段もの曲り曲つた狹い石階を、或は脊を曲げ、頭を下げ、足許に注意しながら下つて行かねばならなかつた。

下の地面へ足がつくと、蠟燭の光を暗くするほど塵が立つて、空氣が重く冷々した。その地下室の底をまた石の壁が幾つかの小部屋に仕切つてゐた。その小部屋の最も奧まつた一つへはいると、頭の上にセエヌの波音が幽かに聞えた。それ等の中の最も大きな、會合場に當てられた部屋には、土間に、粗末な木卓と椅子とが當時のまゝに並べてあり、壁には當年の志士等の自署の名前が亂雜に書きつけられてゐた。その中に、GARIBALDI と一層大きく讀まれた。

老大佐は其處へ來ると、蠟燭を卓上に置いて、皆を椅子へ掛けさせ、我々日本人を前にして、太い聲で喋り出した。日本と伊太利とがまづその地勢上非常に似てゐると言ひ出した。一つは半島であり他は島國である。米と春蠶の國である。共に熱情に富んだ獨立心の強い國民である。自分の國がアドリアチックを十分制御することが出來れば、他日の雄飛は期して待つ可しである。日本が若し黃海を十分手中に收め得れば、亞細亞の大陸は西方の勢力から完全に獨立することが出來るであらう。自分の國は南歐の明い國、日本は東方の光の國、これが共に手を携へて、同じ勢で伸びなければならない。と、半世紀以前の歷史の人物が、薄暗い部屋のいつも坐りつけた椅子へ掛けて、亡靈のやうに喋りつゞけた。──これは、何もこの老大佐に限つたことではなかつた。日本人さへ見れば當時の伊太利人がいつも言ひだして來る、挨拶の握手のやうなものであつた。戰時及び戰後も豫想しての自國の苦しい立場の理解を、遠い

利害關係の薄い極東の日本人へ求めたのであらう。

そして、この老ミリタストはとくに私に向つて、付けたりして言つた。「あなたはまだ伊太利の空の下にゐたことはなからうが、若しあなたがあの伊太利の空の下に一度住んだならば、必ずや心から伊太利が好きになるであらう」と。私はこの老大佐が言つた他の言葉は皆な忘れてしまふであらう、けれど、この時、彼がいかにも懐しげに「伊太利の空」といふ語を口にしたその調子は不思議に私の胸に殘つてゐる。そして彼等が今日もなほこの地下室で何かしらいつも計畫をしてゐるのではないかとやうに思はれた。

おそらく、往年、晝でも暗いこの地下室へ集つて、故國の統一を謀つてゐた連中にあつては、丁度暗い獄屋の中をかすかに覗く紺青の空の一片に限りない憬れを繋ぐ囚人のやうに、光に充ちた濃碧の空に、思ふまゝ胸を照らさるゝ獨立した故國の姿が、何よりも尊く、何よりも懐しいものであつたに異ひない。

越えて千九百十九年、平和會議の際中、ダヌンチオが一隊を率ゐて直接フイユメの占領へと走つた。その前後からして若い伊太利人等の姿は次第に巴里から見られなくなつてゐた。いつもの食屋でも最早や老大佐をはじめ、若い飛行家を見掛けることは全くなくなつてゐた。フイユメ占領の後、私の友人の所へ來た伊太利からの通信は、我々の熟知してゐた三人の若い飛行家の消息をもたらした。それによれば、彼等は、フイユメ占領の當日は、北部伊太利のミラノ郊外で飛行機の練習をしてゐたのであるが、その練習用の飛行機に塔乘したまゝ、三機ともに半島の空を横斷して、アドリアチイックを越えて、一氣にフイユメへ飛んで行つてしまつたとのことであつた。これは、ひとり彼等にのみ限られたことではなかつたらう。恐らく、その日は伊太利の空に、各方面に同じ現象が見られたのであつたらう。その時こそ彼等は、故國の空の上を、伊太利の空を、胸を張り、翼を伸ばし、羽叩きして、思ふまゝの活躍をなしたことであらう。そして、彼の老大佐も多分ダヌンチオ軍の中堅にゐて、彼等が自由に飛びまはる空を仰いでゐたでもあらう。

伊太利の飛行家が日本まで飛んで來たことについて、彼等が如何なる使命を持つてゐたか、それは知らないが、少くも、四世紀以前に、ダ・ヴインチが大きな白鳥形の空行機に乘じて、「世界を驚異で充たしてやらう」と、企てた夢の連

續、實現であり、南歐の空を極東アジアの空まで延長せしめようと望んだものをだけは見るべきであらう。

千九百二十年の四月、巴里の大通にはマロニエが若葉して、その葉の間から、祭壇の蠟燭のやうな花がそろ〳〵見えがくれする頃であつた。羅馬の五月に間に合ふやうにと、私達三人は、巴里のガアル・ドゥ・リヨンから夜行で、羅馬行きの汽車に乘つたのであつた。國境ではうるさい旅行劵その他の檢閲があつて、アルプの長いトンネルを越えて伊太利へはいつたのは十幾時間の後であつた。

トリノからジエノヴアへと汽車は地中海の岸へ向つて走つて行く。輝く空は、スヰスの北から紺碧の果てしなき高さ、深さを思はするものとも異ひ、また佛蘭西の蒼い、淡い、漂ふやうな思ひを起さするものでもなく、寧ろ紫がかつた、青光のあまねく輝く、氣高さと懐さとを同時に呼び起すものである。この輝く空が、蒼黑い橄欖の林の上へ、乳白の羊の群れてゐる牧場の上へ、黄ばんだ丘陵の上へ、更に、その丘陵の上に立つてゐる崩れかゝつた古城の上へ、おなじ光を投じてゐる。

たゞ我々をして日本を思ひ起さしむるものは、たけ高き桑の木の連續と、稻の水田をつくるために、ほゞ同じやうな地を耕してゐる人々の姿とである。ジエノヴアから汽車はまた半島の中央を南へ南へと走つて行つた。

約百年以前にスタンダアルはローマを訪問すること前後六回、彼を巴里から運んで來た驛馬車は、廿三日目でやうやくローマの近くまで來てゐたのであつた。我々がこの永久の都市（ラ・ヴヰル・エテルネル）にはいつたのは、巴里から出て幾時間の後であつた。

戰後の伊、佛の各都市は旅客の入り込むものが多く、旅館は何處でも滿員で、宿りを探がすのは容易なことではなかつた。それでも王宮近くの或ホテルを纔かに求めることが出來た。

「羅馬を見るには二つの見方がある。一の街區の有ゆる不思議なものを觀察して、やがて、他の區街へと移つて行くか、毎朝、人が起きがけに思ひついた特殊な種類の美を追掛けて走り廻るかけである」と、スタンダアルは、その「羅馬市中の散歩（プロムナアド・ダン・ロオム）」のなかでいつてゐるが、長い滯在と研究時日を持つてゐるならば、前の方法を撰ぶが好いが、時日のな

いものは、後者をとるに限る。我々もまた後者をとつた。

羅馬は歴史と、塵と、人とで埋つてゐる都會である。古代と現代とが錯綜し、寧ろ現代は歴史の陰に呼吸づいてゐる都市である。此處ではむしろ、全體を感ずるがよい。詳しく味はうとすれば、するほど、人はこの巨大な迷宮、古蹟の中へ呑みこまれてしまふ。此處では、不思議な破壊力と復興力との源泉地たるを感ずればよい。地上に建てられた異常な都市、支配と、壓仰と、統治と――卽ち人間の力の限りが、時の破壊力に抵抗して、一方に廢墟、古蹟を、他に復活の整美、調和を示してゐる。つまりこの都市に入る者は、直に、人間と自然との不斷の戰端に身を入れた感じを受けるのである。

何となく荒い、巨きな、黒い、壓倒の力と、生成、伸展、完調の美とが共存し、その間と砂塵と人間とが補綴し、盤動してゐるのである。少くも此處では異常が感ぜられ、極端が見られ、巨大が味はれる。ことに整調の都、流動美の都、巴里から直接此處へ來たものには、大きなスフインクスの前へ置かれたやうである「凡て人生の不幸に際會したことのない若人には、ロマの興ふるこの感じは了解されぬであらう」と、スタンダアルはいつてゐる。

黄橙色の夕映は長い間、空一面からこの古都市の上を照らしてゐる。フオロム、圓形劇場、凱旋門、パンテオン、コリセ、總てがその黄色の光の中に高く浮び上り、さらに南に走る石を敷つめた古代羅馬大路の處々に立つてゐる廢墟、カムパアニヤの野を貫く高架水道の遺跡、それ等を籠めて、野外から吹き寄せる夕風は、七つの丘の上にたゞなはる舊都の中へ、輝く空の下へ、無數の燕の群を送つて來る。空の光と、地上の黒い建物とに疲れた旅人等の眼は、しばしこの燕の群にそゝがれる。

爽かな朝の空氣の中を、微かなるリラの花の香が漂ふ。乳白色に輝く大理石のサン・ピエトロのピアツアは新たに目を醒まして、噴泉を湧き立たせ、胸を開き、兩手を擧げて、その奧なる大伽藍を抱かうとし、廻廊に立つ古代を具像する多數の立像等は、新たなる力を籠めて四方から見おろしてゐる。その朝の輝きの中を、新しき力の目醒の中を、旅人等は、小さな黒い影を舗石の上へ投じつゝ、コツ、コツいふ靴音をさせて、廣場から、歩廊へ、歩廊からサン・ピエト

ロの大殿堂の中へと吸ひ込まれて行く。

　此處は歴史の上に咲き出た藝術の花、初代教徒の殉道の血の甦つた具象化、ネロンと聖ピエルと近代藝術との生きた生命が造りいだす巨大な合製美の殿堂である。此處は寺院といふよりは一つの都市である。巨きな十字型に出來上つてゐるクッポオルは、歴史と近代と、美と宗教と、人間と自然との交叉を意味す。古代は薄暗い歩廊の陰から呼吸を通はし、近代は明るいドオムの下で伸々した息をついてゐる。祭場と客間、會堂と美術館、遊歩場瞑想の靜處、安眠と活動、總を包括した復活の一つの都市である。この伽藍の背後からの敷石路は、人々をヴァテイカンの宮殿への入口へと導いて行く。

　羅馬を熱愛したスタンダアルはロマに於て見る可きものとして(1)古代の遺跡――ル・コリセ、パンテオン、幾つかの凱旋門その他。(2)繪畫の傑作――ラファエル、ミケランジュ、アニバル・カラシュ等の壁畫、(3)近代建築の傑作――聖ピエル、ファルネエズ宮殿その他。(4)古代の立像――アポロン、ラオコンなぞ、(5)近代彫刻家の傑作――ミケランジュ、カノヴァ等のもの、(6)政治及びその結果としての風習時相、この六つを擧げてゐるが、ヴァテイカンの宮殿はこの大部分を含んでゐるのである。

　美の迷宮ヴァテイカン！　此處は一方に時代を超越すると同時に、他方には常に時代を支配しつゝある不可思議な力の權化。法王の美に包まれた居住地であると同時に、大衆が、自分等の中から代表的に作り出した偉大な表現力を味はふべく集つて來る集合場である。恐らく、此處へ來る大衆の眼からは、直接には接し得ない法王なるものも、一種、彼等がつくり出す生きた表現力の象徴と思はるゝでもあらう。開放と閉鎖との共存する場處、理解力と不可解力との交流する堂宇。古代と現代との呼吸を交ふる宮殿、西歐諸國へ流れ出ずる傳統の源泉地である。

　戰時ロマの市全體は、敵機の來襲を防ぐために暗黑に包まれてゐる時でも、ヴァテカンの王宮だけは、燈火が煌々と輝き、ロマ政廳に幾度びの革命が行はれても、この宮殿内だけは古代よりの平靜を保ち、何人ひとり、インコニトオにて法王が市中を歩くとき、それと氣付くものは無いけれど、祝福の日には、幾萬の大衆がサン・ピエトロの廣場に重り

合ふ。理知が弱められ、理性は破壊を思ふ。伊太利政府と時に扞格が生じても、歐羅巴全體に對する勢力は衰えず、時に大きな喜悦と、感激と、集合力とを呼び起す。偶像破壊の聲が如何に高く呼ばれても、ヴァチカンの山の空氣は微動だにせず、法王の遊歩の庭園には鈴掛鳩の幽かな聲が茂葉のなかに靜かにひゞき、現代に於て、何處にも見られざる莊厳な戴冠式が擧行せらるゝ。文明は破壊の連續の如く思はるれども、此處には完全な保存性が示されてゐる。

古代美の廻廊には、アポロンが動き、ラオコオコンが呻く、暗いなかに希臘の生命が、埃及、アッシリアが、さらにエトルユスクの原始の美術が呼吸してゐる。時の力を一ヶ處に緊縮して、驚異に形を、渇仰に衣を、斯くて、群像を刻み出し、モザイクを作り、石棺の連續、古瓶の斷片、を列せしめる。

復興期の藝術は、若いラファエロの水々しい天才をして、詩に、哲學に、昇天に、近代の目醒め、再生の光りを思ふまゝ伸はさしめ、自然力の完全なる伸長たるミケランジェロをして「最後審判」の壁畫を、「天地創造」の天井を描かしむる。此處は有ゆる時代と有ゆる材能の完全なる合作、協力である。そして、このシスティナの會堂では「最後の審判」の前で、「天地創造」の下で、今日もなほ、全歐羅巴の大司祭の選擧が行はれ、任命がなさるゝ。此處には廢墟はない。美は常に生き、力は無限に伸びる。生きた歴史の軀幹であり、此處では「神」が形を現はして、人間の體軀をとつて藝術の中に生き、人間の向上は、常態を脱して、大地より脱け出た大樹の如き爽かさを示す。

驚喜と、覺醒と、不審と、疲勞と、それ等が旅人等の頭腦を掻き亂す。殿堂を出て日の照る廣大の廣場を歩いて、振返れば、宮殿と伽藍とは、地上に据ゑられたる巨大の樂器の如く、青光の空へ向つて、大地の力を發上せしめ、空中へ向つて、音なき無限の樂器を奏し出してゐるやうである。

廣場を手抜けた街路の片隅の小さな古いレストランが我々に、晝餐の前の輕い食事を提供する。小さな馬車が我々を運んで、タイブル河を渡らしめ、古蹟と近代人の住居との交錯した不思議な街路をめぐりめぐつて丘の上のホテルへ連れかへる。

或る日、正午頃の日の光が直射する頃、我々は古代政廳の舊墟へ來て立つて居た。日光は地上の何物をも殘さないやうに容赦なき嚴しさもて喰ひ入るやうに、照り付けてゐた。地皮の皸破れた間に、敷石の隙に、築地の煉瓦の破れ目へ痛きまでに射し込む日の光は、空中へ無數の動波を描き、幻像を刻み、無音の樂を彈じいだす。

羅馬が此處に完全に築かるゝまでに、羅馬の軍隊は、各處に多數の民族を滅亡させた　凱旋門が一つ出來るためには、幾千の人が死んでゐる。そして、今、此處に見る古政廳の廢墟は、また全く歷史の墓場である。嘗てこの廢墟が近代人の家畜市場にせられてゐたことがある。古代に共和政が行はれ、帝政が行はれ、そして近代には牛馬の市場であり、今は保存せられたる歷史の墳墓である。嘗てこの古蹟の間からセザアルの亡靈を月夜の空に浮ばせた詩人があつた。白日の下では、たゞ圓柱の斷切が、石階の跡が、古煉瓦の推積が、そして、凱旋門の幾つが、古禮拜堂の一部が、舊時を語つてゐるに過ぎない。

羅馬といふ名が、現時の伊太利には重すぎる。都市そのものすらその歷史の重荷で喘いでゐる。現時のロマに歷史の遺跡があるといふよりは、歷史の片隅に近代都市が巣をくつてゐるのである。フオロムそのものの跡は、思つたほどに廣くはないが、市街全體を取繞く古代の姿はまつたく威嚇するまでゞある。

ロマの郊外へ。例へばカタコムブへ、シイプルの樹の立ちつゞく木下路を辿つて行く時、或は古代羅馬大路の敷石を暫くでも南へ下つて行く時は、振返つて都市の方を見れば、丘上の要所々々は歷史の占むる所、若し人家がなくてたゞ古蹟だけであつたらば、そして、人聲もなく、烟も立たず、たゞ白日の下に廢墟の姿のみがあつたならば、その嚴しさは一層烈しく人に感ぜらるゝであらうと思はるゝが、實は、ロマに於ける人間の生活は　荒れ果てた大伽藍の軒に巣を營む小鳥のやうなものである。それがために、荒墟は別に力を緩めはしない。

或日の午後、リラの花の木陰にたゆたひ、羽虫の群れ飛ぶ草原の中に、我々はカリユス・セスチイユスのピラミイドの近くに來てゐた。この草原に立つ巨大な三角型の聳ゆる肩を掠めて、ロマの空は明に晴れ、古光の微笑は、深い思ひをたゝえて、遠く漂つてゐた。木立から落つる綠葉の影が、白い墓標の面にちら／＼と閃き、碑文を見せつ、隱くしつ

するやうにしてゐた。此處は、プロテスタンの墓場で、白い碑面は詩人キイツのであつた、「此處に、その名を水に書かれたる者ぞ、横たふ。」このエピタフはかすかながらに、我々が記念に撮つた寫眞の中にも收められた。キイツは千八百二十年の九月に故國を去つて、ナポリへ直航し、ロマへ來たのはその年の十一月であつた。それから翌年の二月には世を去るまで、彼はロマの古蹟の間を散歩し、時には馬上でも出掛けたが、病氣は次第に重くなつた。友人セヴアンの忠實は看護の中に命の弱つて行くのを感じた。「自分の身體の上へ花草の茂つて行くのを感じる」と、彼は或る日臨終近き病床で、その友人に言つた。やがておだやかに語をついで、後に彼の碑面に刻まれた句を口にした。それから間もなく、その枕頭に立てられてゐた蠟燭の光の薄れて行くやうに、廿五歲の若い天才は死んで行つた。

詩人シエリイの墓は、キイツの墓とは區劃を異にした。多くの他の墓石の間に、濃い綠葉の陰に、地面に平かに横たへられてゐた。シエリイの死んだのは、キイツの死の翌年であつた。彼は小船に乘つてスペジイア灣へ出た時、嵐にあつて、他の二人と共に波に投ぜられて死んでしまつた。數日して彼等の死骸が岸へ打上げられた。シエリイは一方のポケツトにソオクルの詩を、他のポケツトにキイツの詩集を入れてゐた。彼はキイツがナポリへ來たと知つたとき、彼が滯在してゐたピザへ來るやうにと招いたが、それが出來ないでキイツはまづ逝つてしまつた。シエリイ遺骸は深い柔い砂濱で、眞夏の烈日の下で、火葬にせられた。そこへ列したものは、彼の信友のトレロオニイと、リイ・ハントと、バイロンとであつた。バイロンはその頃、伊太利の各地を歩いて、ヴエネチアではスタンダアルとも逢つて時勢を話し合つてゐた。そして、彼自身がその翌る年千八百二十四年、希臘のミツソロンジイで世を去つた。遺骸に對する最後の禮として注がるゝ葡萄酒は火勢をかつて、鐵を白熱せしめ、南國の太陽と、火とは、烈々たる焰の中に、至純なりし詩人シエリーの遺骸を燒きつくした。バイロンはその時、「默して、思ひ深げであつた。」

かくして、シエリイの遺骨はロマへ持ち出されたのであつた。

この二詩人の遺跡をとゞむるプロテスタンの墓場（シイムテイエール）。これはロマに於ける數限りなき墓場の一つである。或意味で

は、ロマそのものが古墳の都市であり、その郊外に廣がるカムパアニヤ・ロマナはまたロマそのもの、墳墓である。テエヌはその著「伊太利の旅」の中でカムパアニヤの野についてかういつてゐる。

「自分は、此處が羅馬の墓であり、羅馬が嘗て破壞した有ゆる民族の墓であるといふことを、考への中から取り去ることを敢てし得ない。イタリア人、カルタアジュ人、ゴオル人　スペイン人　ギリシア人、アジヤア人、野蠻人も、文化都市も　總て錯雜した古代も、ともに、それ等を貪食し、またそれ等を貪食したがため死んだ奇怪なこの都市の下へ來つて埋められた。野を走る綠の一波ごとに、特殊な國民の墳穴を示してゐるやうである」と、さらに、彼はいふ一人間の唯一の痕跡とては路を限る柵のみである。そして、牧畜時期に獸群を包容するために波立つ綠草が從横に走つてゐる。けれど、今は、總が空虚である。そして空は、この凶はしき廣野の上に、苦しげに、皮肉な晴やかさもて、その神聖な天蓋を固めてゐる。日は沈む、そして、褪せ行く空色は透明となり、碧玉の感知せられさるほどの色合ひもて、その結晶に綠をながす。何ものとても、この空の永久の美しさと、地の癒し難き荒廢との對稱を表示し得るものはない。ヴイルジイルが最初に、ロマの華麗の極致に於て、既に、ジュピテルの堂内から、人間の不幸と罪過とを驚駭をもつて眺めやつてゐる神々の哀憐に充ちた目を示してゐた」と。噴墓の都市を取りまくのに、更に大きな自然の噴墓をもつてしてゐるのである。現代の伊太利人が、祖國の美を說くのに、第一にロマを擧げずして、空の美しさをいふのも、彼等も既に、この荒廢の歴史の重き負擔に耐へられないがためであらう。

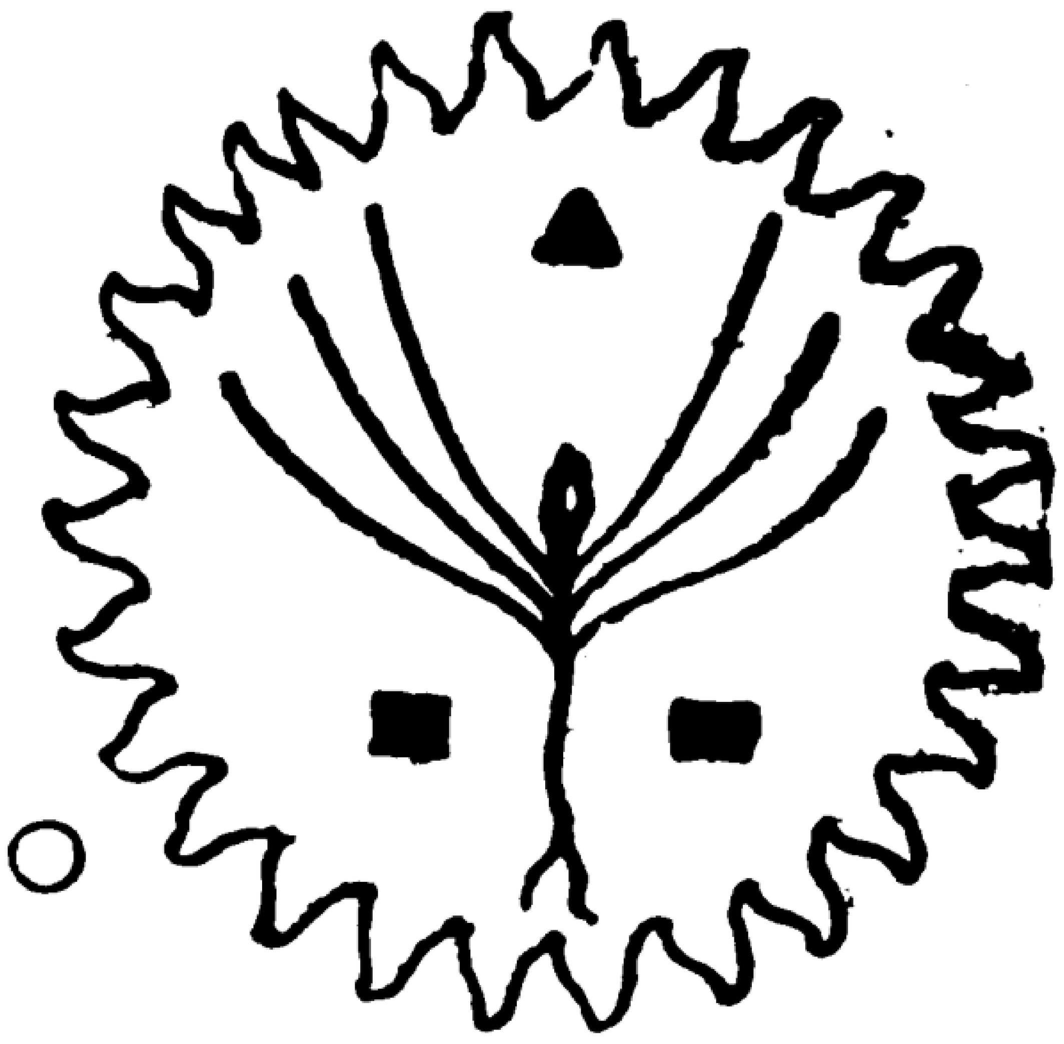
また或の日の夕方、我々が市中の散歩から歸つて來た時、街路といふ街路が盡く、騎兵の兵士に埋められてゐるのに出逢つた。側の人に訊けば、國王の通過だといふことであつた。けれど、何といふ嚴しい警戒であらう。通路の一線は勿論のこと、これを横切る左右の巷路まで盡く警戒の兵士で埋まつてゐた。英國の君主が、白耳義の兩主君が巴里へ來た時でも、ほとんど人々は平氣で近くまで寄ることが出來た。伊太利王はことに巴里では、最も氣輕に振舞つてゐるとの出來た一人のやうに聞いてゐた。それが本國に於ては何といふ行々しいことであらう。尤も、本國と、外國とでは、

その發展の仕方が異るのが自然なのかも知れない。嘗て、ロシヤのニコライ二世がまだ世子であつた頃巴里へ來て、大オペラの廻廊からバルコンへ導かれ、前の廣場へ集つてゐる大衆の歡呼の聲を受けた時、それが餘りに大勢であつたのと、それが餘りに近かつたのとで、駭いて、喪心されたと、或る教授が話してゐたことがあつた。風習の相異は國々に於て自然のことであらう。けれど、ロマに於ては餘り大げさで、それがロマなるが故に、往時の歷史の復活でゝもあるかの如く思はれたが、實は五月一日が近いのと、議會に於けるその黨派の動作が急激だといふことが原因であつたらしいのである。けれど、激し易い南國人の中には、現にそれに對する極端な反動がまた起つてゐるやうである。何事でも、兩極端を見せるのが羅馬に於ては不思議な現象ではない。相反する二つの力が共存し、矛盾でありながら生き、衝突しながら存在する。それが羅馬である

青光に輝き、黄橙色に黄昏るゝ永久の空と、黑き色に荒れすさんだ古蹟を擁して、綠の草の生ゆるに委かせてゐる大地と、古墳の都市と近代藝術の源泉地と、破壞と創造、荒廢と新生、傳統と獨創、イドラトリイとイコノクラストと、即ち人間の歷史そのもの、人間と自然とが協力作成する生活そのもの、瞬時と永久とが同時に示さるゝもの、それが羅馬である「人生の不幸を知らずしてはロマが解せられない。」ロマを解することは、人生を知ることであらう。

日沒後の餘光が、惜しげもなく滿面の廣野を照らしてゐる時、我々を乘せた汽車は、カムパニヤの野を橫切つて南の方へ、ナポリの海の方へと走つて行つた。巨きな蛇の遺骸のやうな、原の面に斷續して、遠い彼方の山懷までのべてゐる古代水道(アケデュク)の不思議な姿、車窓を襲つて來る無數の羽虫の群、それ等はみな、往時沼澤地であつたこの廣野の面影をとゞめてゐるのである カムパニヤの野が惡水の滋潤地であつたればこそ、ロマ人等に水道を工夫せしめ、ロマの大道を築かせた。そして彼等はこの習慣を征服した到る處の邦々へ殖え付けて、近代都市の基礎を開いたのであつた。

餘光のうすれ行く野は、寂しい風に次第に包まれて、羽虫の群すら やがてその闇の中に沒し、「永久の都市」の影もいつしか地平線の彼方に沈んでしまつた。



その時々

武者小路實篤

レンブラントのファウストの畫を見てゐると自分は感心しないわけにはゆかない。

そのビジョンが實に生てゐる。何かの啓示が其處に顯はれてゐる。

それは輝くものである。

我等の生命のある瞬間にひらめく啓示が其處に輝いてゐる。

この世には我等以上のものが何かあると云ふ感じである。

その感じが實感をもつて顯はれてゐる。

見てゐるとその啓示を我等も

ファウストと一緒に受けてゐるやうな氣がする。

白と黑とのあつかい方、光と影とのあつかい方が其のビジョンを實に强く生かしてゐる。

自分はこの畫を見てゐると、夢中に愛したくなる。見てゐてあきない。心の中に强い力が自づとわいてくる。

こんな感じが、かうまで微妙に出せるものは本當の天才だと思ふ。其處にはすべてが、その微妙な感じを强めるため

に役立つて、少しのさまたげもなく、その感じのみが全面になりひゞいてゐる。ファウストの右の手なぞは實に生てゐる。それから身體全體の感じが、その瞬間、肉體のことを忘れた人間の感じが實によく出てゐる。それは無心にその瞬間の感じを味はつてゐるものゝ感じだ。

それが自づと出てゐる。

感心しないではゐられない。

かう云ふ實感をはつきり持てることだけで大したものだ。それが又ごく自然に畫面一面に生かすことの出來ることは大天才でなければ出來ないことゝ思ふ。不思議なことをのみこんでゐる。感心しないわけにはゆかない。

（二三、一一、一三）

○疳癪を起こしたあと

自分は病的の疳癪持だが
疳癪が破裂してしまふと
愛の泉があふれ出てくる
自分は目に涙をたゝへながら
和解の手を出したくなる。
そして一緒に泣きたくなるのだ。（二三、一一、一五）

○

偉大な精神にふれるよろこび、そのおちついた充實しきつたよろこび、自分は靜かにそのよろこびにふれる時

心は閉ぢこめられたる牢獄の壁をいつのまにかとかして廣々した青空のもとの大平原のまつたゞ中に立つてゐるやうに感じる。

心が廣々しておちついて、自由で、解放されたやうに感じる。

自分の心は一個のあはれな人間の内にとぢこめられてはゐずに、人類の心のうち、自然の心の中を自由に濶歩してゐるやうに感じる。

自分はかゝるよろこびが人間に與へられてゐることをよろこぶものである。(二二、一一、一六)

○

文學史や、美術史をひろい讀みするよろこび、其處には一生をもつて眞劍に自己の生命を生かさうとした人々が連山の如くに立つてゐて、とりどりに美しく、立派で、充實し切り、生々してゐる。

人間の心の最高な連山を見るよろこび。(二二、一一、一六)

○

自分の心を最も美しく、最も崇高に、最も正直に、純粋に、力強く、微妙に生かしぬいた人々、それは吾人の心を美しく、強め、力づけ、豐富にする人だ。讃美に價する。(二二、一一、一六)

○

つまらぬことをくよくよ思ふかはりに
自分の心を清淨にするやうにつとめやう
そして自分を立派な人間にしやうと心がけやう。

自分は時々くたばるだらう
いや、數へ切れない程、くたばることがあるだらう
だが決心して立ち上り
筆の仕事の出來ない時は
身體の仕事で兄弟姉妹のために働から
そして自分の心を出來るだけ淸く美しくするやうにしやう
その他の解決は
自分を不活潑にし、怠惰にし
虫よくし
いら／＼させる。
自分は立ち上らう
くたばつても又立ち上らう
そればかりが俺に似合はしい
解決の方法だ。
口許りではなく根氣よく
この解決方法をくりかへしてゆから。（一二、一一、一七）

〇

——(その時々)——

私の頭が水道のやうだつたらさぞいゝだらう。
雜誌記者がかはり番にやつて來ても
せんをひねりさへすれば
出したいだけの水は出てくれるから。

處が私の頭は强情ばかりで
自分がいくら机に向つても
いくら頭をひねつても
出ないと來たら一滴の水も出てはくれない。

皆、お待ちかねだよ
俺は約束にそむきたくない
さういくら俺がどなつても
出ない時と來たら一滴の水も出てくれない。

皆も閉口するだらうが
閉口するのは俺が一番だ。

早く頭の具合がよくなつて
いくらとめたくも
とめられない程
水がほとばしつてくれるのを
俺は待つばかりだ。

それは明日こそ天氣になるといゝと思つて
待つやうなものだ
ちつともあてにならないので
ほんとうに困つてしまう

本當に俺の頭が水道のやうだつたら
いゝのだがな
さうすれば、皆も安心し
俺も安心するのだがな
この強情ばりの頭め！　（二二、一一、一七）

●

○

俺は子供の時に氣違ひになるとよく母に云はれた。
この頃になつてその母の言葉をよく思ひ起す。
俺は生理的に彈力性がなくなつて
辛抱する力がよはくなつたやうな氣がする
用心しやう。用心しやう。

○

俺の望みは大きすぎて
俺の身體の力は少なすぎる
だがおちついて進んで行かう
天にとゞかぬことを知つても
杉が益々天をめざして
成長してゆくやうに。(一二、一一、二四)



わが家

西條八十

日暮に、われ
うたひつつ歸り來れり。

妻も病み、
子も病み、
母は遠き旅に姉の訃を訪へる、
燈火も無き家に。

されどわれ
微笑みつつ、なほうたふ。―

地なるものは凡て寂し、
おもむろに天上の美を仰げ。
看護婦が洗ひ濯げる
母、妻、子らの單衣は
今し物干竿のうへに、夕日の中に、
樂しく手をつなぎ、
談笑するもののごとく翻へれり。



旅

若山牧水

（一）

乾きたる
落葉のなかに栗の實を
濕りたる
朽葉がしたに橡の實を
とりどりに
拾ふともなく拾ひもちて
今日の山路を越えて來ぬ

長かりしけふの山路

樂しかりしけふの山路
過れたる紅葉は照りて
餌に饑うる鷹もぞ啼きし
上野の草津の湯より
澤渡の湯に越ゆる路
名も寂し暮坂峠

○

朝ごとに
つまみとりて
いただきつ
ひとつづゝ食ふ
くれなゐの
酸ばき梅干

これ食へば
水にあたらず
濃き霧に卷かれずといふ

朝ごとの
ひとつ梅干
ひとつ梅干

○

草鞋よ
お前もいよいよ切れるか
今日
昨日
一昨日
これで三日履いて來た
履上手の私と

出來のいゝお前と
二人して越えて來た
山川のあとをしのぶに
捨てられぬおもひもぞする
なつかしきこれの草鞋よ

○

枯草に腰をおろして
取り出す參謀本部
五萬分の一の地圖

見るかぎり續く枯野に
ところどころ立てる枯木の
立枯の楢の木は見ゆ
路は一つ
間違へる筈は無き筈

磁石さへよき方をさす
地圖をたゝみ煙草とり出で
元氣よくマッチ擦るとて
大きなる欠伸をばしつ

○

頼み來し
その酒なしと
この宿の主人云ふなる
破れたる紙幣とりいで
お頼み申す隣村まで
一走り行て買ひ來てよ
その酒の來る待ちがてに
いまいちど入るよ溫泉に
壁もなき吹き晒しの湯に

時評

金利問題に對する諸觀察

堀江歸一

金利と國家の權力

金利の必要其存在の理由、其歩合の高低する所以等は經濟學上に於て、常に論爭を惹起す問題であるが、私は今、前二者に關する問題は之を措き、單に金利歩合の高低する所以を論述し斯くて究めた高低の道理を我國當今の實際問題に向つて、應用して見ようと考へるのである。

我國當今の金利問題としては、日本銀行の金利引下げ問題なるものが吾人の目前に横はつて居るのであつて、其引下げの可否如何は純然たる經濟問題であるに止まらず、政治上の方面にも多少の交渉を持つように見へるに至つたが、金利本來の性質から云へば、純然たる經濟問題であつて、政治上の關係から、之を左右することは、國民經濟全體の上に大なる弊害を齎さゞるを得ない國家は今日如何に經濟政策上に大なる權勢を擁して居るとしても。卒然市場の金利歩合を支配し得るものではないが或る道を以てしたならば、或る程度まで國家の希望する如くに、金利歩合を上下せしめるを得る。唯斯る處置を敢てすることが幾何の效果を奏するか、又國民經濟上に、如何なる利害關係を及ぼすかと云ふことを以つて、問題とする。元來市場利率市中諸銀行の金利歩合は一ツの金融市場に於て銀行其他の金融關係に依つて、供給される貸出資本と之に對する需要との關係に基いて、高低する次第であつて、更に此關係の最も明瞭に現はれるものは、銀行の預金に對する支拂準備金の比率に外ならない。然らば今純然たる經濟上の關係から離れて、國家が一個

の意思に依つて、市場の金利歩合を左右し、又支配することが出來るかと云ふに、以上の事實を根據として考へを進めると、其可能なることを知るを得るであらう。例へば國家が新に政府紙幣を發行し、寛大なる條件の下に、民間諸銀行に貸付けることゝしたならば、諸銀行は斯く借受けた政府紙幣を取つて、預金に對する自行の支拂準備に充て、準備金比率を高からしめる爲めに、自ら金利歩合の下落を促するに至る道理である。唯此人爲的に釀成された金利歩合下落の勢が何時まで繼續するか、近き將來に於て、反動的騰貴を來すことなきや否やは、一個の問題であるが、兎に角一時は金利引下げの狀態を現出するであらう。之を同一理由に依り、國家が遽に中央銀行の銀行券發行制度に改正を加へ、從來其發行法に加へられて居つた制限を解除するなり、緩和するなりして、中央銀行をして自然寛大なる條件の下に、銀行券を貸出割引に用ひしめたならば、自ら金利歩合引下の勢を成すに難しとしないであらう。

既に斯の如く國家が人爲的に金利歩合の引下げられるやうに干渉する力があるとすれば、人爲的に之を引上げしめることも可能なる道理である。現に我國に於て金融の甚だしく緩漫に爲つた場合に、銀行業者が金融調節の一策として、政府に依つて公債の發行されることを希望する場合があるが、如何にも其通りであつて、國家が或る程度まで公債の發行に依つて、市場の遊資を吸收する方針に出たならば、斯く遊資の吸收される時と公債に依つて國庫に吸收された資金が經費として支辨される時との間に或る間隔の存するだけ、金融は緊縮し金利は上進することを誤まらないであらうし、又之と同じく國家が公債を發行する場合に、之に付する利子を高率にして、銀行の應募を誘うなり、又は銀行を強制して之を應募させる手段を取つたりしたならば、銀行の所有する支拂準備金の或る部分は公債に變形し、預金に對する準備金比率の薄弱と爲る結果、高步の利子の公債に依つて、新に國民の間に、貯蓄の盛に行はれるに至らない限り、一般金利歩合の上進を促さゞるを得ない。國家の公債を發行する高が適度を得れば、金融調節の效果あるものとして金融業者に依つて歡迎される一方に、其發行高が適度を超へれば、財政に依つて金融を壓迫すると云ふ非難を生ずるもの亦謂れなしとしないのである。

中央銀行に對する國家の干渉

然し國家が金利歩合を左右するには、上記のものよりも、更に簡便なる手段があるのであつて、其れが動もすれば多くの國に於て、濫用される趣きのあることを免かれない。國家は中央

銀行に對して、如何なる態度に出づ可きものであるかと云ふことは、從來世人に依つて、論じ古された問題であるが、今日に至つて確乎たる解決を見るに至らない。英國は中央銀行たる英蘭銀行に臨むに、最も自由寛大なる態度に出で、銀行券發行の制度に對しては、嚴重なる干渉を試みたものゝ、銀行業務の一班に對しては、單に或る定まつた形式の下に、毎週一回貸借對照表を發表させる外に、何等の束縛を加へず、營業を擔當する正副總裁以下理事も盡く株主總會の任選する所に係るのであつて、政府に對して何等の交渉を持たない。政府が英蘭銀行に對して或る希望を傳へた所で、同銀行は之に應ずることを以つて、不可能であり、又不利益であると考へたならば、當然之を拒絕するであらうし、拒絕された場合に、政府は之を強要する何等の方便を持たない、唯英蘭銀行に於て、政府の希望を果すことが國家の利益であり、又中央の職分を盡す所以であると考へた場合に於て、始めて政府の所望が實際に充たされるに過ぎない。左ればこそ歐洲開戰當初英國金融市場の混亂した際、英蘭銀行は敢て政府の旨を奉じて、其營業方針を律したと見る可き跡はなく、其必要と認めるだけ、金利歩合を引上げるに就て、遠慮する所を知らなかつた。固より恐慌の爲めに混亂した市場を救濟する爲めに、英蘭銀行が市場に向つて、融通した資金は莫大の金額に上つたが、是れとても同銀行一個の意思に基いたものであり、政府亦市場救濟策としては直接に英蘭銀行を利用せず、別に「通貨並に銀行券法」を政府紙幣の發行に依つて、市中諸銀行の支拂準備金を潤澤ならしめることを期した次第である。

之に反して中央銀行に對して、極端なる程度に於て、政府の干渉の加へられる顯著なる事例は、佛獨兩國に之を見るのであつて、兩國共に國法を以つて、中央銀行の營業科目を限定し、其範圍外に出ることを許さないのは勿論、中央銀行の正副總裁を始め、其他の理事者に對しても、政府に於て任免の權を持つのである。唯資本金が民間資本家の出資に係る點から云つて、民有事業であると云へるだけで其他の點に於ては、殆ど國有事業と擇ぶ所なく、政府の意思一つで、中央銀行をして國家財政の機關たらしめることを難しとしない。獨佛兩國が歐洲戰爭に臨み殊に獨逸が戰役に於て、彼の如き無理なる財整の立て方をしたからには、其通貨の上に惡しき影響を及ぼし、殆ど根柢から通貨制度を破壞するに至つたのは、當然の歸結としなければならないが、其れにしても開戰の當初から、兩國共に通貨攪亂の狀態の釀成されたことに對しては、政府が無制限に中央銀行を利用し、銀行亦政府の利用することに任かせて、何等規矩

とす可き所を知らなかつた一事を舉げて其原因としなければならぬ。

日本銀行と政府との關係

我國に於ては、往年日本銀行に關する制度を作るに當り、佛獨兩國と同じく、銀行に對する國家の監督並に指揮權を嚴重にしたこと、寧ろ驚く可きばかりであつて、啻に營業の範圍や、種類を法律で律したばかりでなく、又正副總裁の任免に對する權利株主總會で選擧された理事候補者中から適任と認める者を任命する權利を政府に於て持つばかりでなく、日本銀行の營業にして政府の認めて不利であるとする所のものは、盡く之を制止するを得るのは勿論、金利步合の改正に就ても、一々政府の認可を經なければならない事となつて居る。即ち是等の規定は日本銀行をして政府に隸屬する一機關たらしむるものであつて、政府の一令は直に日本銀行を如何樣にも動かすに足りる。時に日本銀行が政府の命令に服するを喜ばず、之を躊躇するようなことがあつたとしたならば、政府は日本銀行の正副總裁に對して持つて居る任免の權を動かす趣きを示す。此場合に正副總裁にして其地位に戀々たる情ある以上は、政府は政府の所望を付けて、自家の地位を危うするよりも、之を容れて、地位の安泰を謀ることを以て、得策とする道理であつて、政府は大手なり搦手なりから、日本銀行を壓倒して、自己の便宜に供用する武器を備へて居る次第である。

從來如何なる場合に政府が日本銀行を利用して、政府自身の利益に副はしめようとしたかは、政府と日本銀行との交渉に關する裏面の事情を知らない限り、何とも判斷を下すを得ないが、門外漢にも認められる位、明瞭に政府が日本銀行の營業に干渉を施して、政治上に同銀行を利用した事例は少なしとしない。即ち日清戰後遼東半嶋の還付に依つて、經濟社會の沮喪した際に、日本銀行が卒先金利步合を引下げて、人氣の振興に勉めたことの如き、日露戰爭後政府が南滿鐵道會社株式の應募を機會として、人氣の轉換を謀らうとした際に、日本銀行亦市中諸銀行に對する資金の融通を便にし、南滿鐵道株に對する應募に空前の盛況を呈せしめたとの如き、第二次桂內閣が無謀なる公債借換計畫を遂行するに當り、之を成效せしめるには、豫め金融緩漫の形勢に釀成されることが必要であり、而して日本銀行は此勢を促進する爲めに、金利步合を引下げ、市中諸銀行をして之に準ずるに至らしめたことの如き、日本銀行に對して、政府の加へる干渉の最も著しく外面に現はれた實例とするに足るであらう。斯る次第であつて見れば、日本銀行の金利步合な

るものは、銀行單獨の意思に基き、純乎たる經濟上の關係で、決定されるとは見ることが出來ず、時に政治上の利害から打算した政府の干渉の及ぶことを知らなければならぬ。即ち金利歩合の改正に對して政府の持つ認可權は日本銀行に於て、金利を引上げやうとする場合に之を阻止するであらうし、日本銀行の正副總裁任免に對して持つ政府の權能は總て同銀行に向つて、利の引下を求める場合には之を有效のものたらしめる。日本銀行の正副總裁が鞏固なる信念を持つ、確乎たる意思を養ひ、自己の主張に反した政府の要求に對しては、其職を奪はれるまて政府に對して力爭し、抵抗し、其及ばざるに至り、政府から罷免されるに先だつて、職を辭するような事件が起つたならば或は、中央銀行組織の問題に就て、世人の注意を惹く所大と爲り、或は組織改正の議論を生ずる導火線と爲つたかも知れないが、今日までの所で、斯る強硬の態度に出た總裁は前後二人あるだけであつて、(一人は富田鐵之助氏にして、横濱正金銀行に對する資金融通問題に就て、政府の命令に異見を懷いて辭職し他の一人は岩崎彌之助氏であつて、金利改正問題に就き大藏省と所見を異にして、辭職した)此外歷代の總裁は多く政府の財政機關たるに甘んずるの狀態であつた。

中央銀行金利歩合の性質

右の如き次第であるから、日本銀行の金利歩に合就て考へる場合には政府との關係殊に其當時の內閣が一般施政に對して、如何なる考を懷いて居るか、當時の財政當局者が金利とか、金融とか云ふような、日本銀行の營業若しくは金利政策と最も密接の關係を有する問題に就て、如何なる意見を藏して居るかと云ふことを攻究しなければならぬ、今日具體的問題として、日本銀行の金利歩合引下げの必要を唱へる人々は日本銀行が既往三年以上に亘つて、同一の金利歩合を維持し來つたことを以つて、中央銀行として餘りに世間に沒交渉の事であるとし、今日の如き經濟社會の沈衰を極めつゝある時に、之に對する刺戟劑として、金利を引下げるのが然る可き手段であらうと云ふのである。之に對して適當の解答を與へる前に、吾人の一考を要する所は中央銀行金利歩合の性質であつて、中央銀行は果して論者の云ふが如くに、時勢の變化するに隨ひ、又其變化に先だち、又時に時勢を指導する意味に於て、頻繁に金利歩合を動かす可きものであるかどうかと云ふ點である。

今日文明諸國を通じて、中央銀行の內に於て、金利歩合を動かすことの最も少なきものは、佛蘭西銀行であつて、千九百十

四年一月から最近に至る七年十一ヶ月の間を通じて、金利歩合に數回の變動を受けたのに過ぎない。即ち

一九一四年	一月	二十九日	三分	五厘
同	八	一	六	
同	同	三十	五	
一九二〇	四	八	六	
一九二一	七	二八	五	五
一九二二	三	一	五	

と云ふ狀態であつて、戰時戰後に於ける金融市場混亂の期間に於ても、尙ほ金利歩合の變動する回數が少なく、又變動の區域の狹いと云ふことは、佛蘭西銀行の營業に於ける一の特色を以つて目される。而して此事たる、佛蘭西銀行が戰前に於ては、英獨兩國の中央銀行の如く、金利歩合の上下に依つて、敢て金貨の輸出入を制する働きに出でないのと、市場に對する直接の取引の少ないのとの結果であつて、斯く金利歩合の變動の寡少となることを擧げて、佛蘭西銀行の怠慢であるとするを得ない同時に、之を以つて同銀行の功業とする說も亦當れりとするを得ないのである。

　日本銀行の金利歩合が平靜であることも、佛蘭西銀行に讓らない、否佛蘭西銀行を凌駕する狀態に居るのであつて、各種金利の內、商業手形に對する割引歩合を揭げると、

大正三年	七月	六日	二錢	
五	四	一七	一	八厘
同	七	五	一	六
六	三	一六	一	四
七	九	一六	一	六
同	一一	二五	一	八
八	一〇	六	二	〇
同	一一	一九	二	二

と云ふ高低を示して居る。私は右の如く表示された日本銀行金利歩合高低の跡を一瞥して、其の平靜であつたことを認めると同時に、既往の政策に大なる誤まりがあり、而して其誤まりが今日に至るまで、依然として或る脅緣を及ぼしつゝあることを考へざるを得ないのである。大正五年四月から同六年三月に至る間、日本銀行が屢々金利歩合を引下げたのは、歐洲戰爭の影響を受けて、大正四年以來我國の輸出貿易は漸次增進し、一方に海運業に於ける運賃傭船料の收入と相俟つて、多額の對外債權に對する金貨が我國の受取勘定と爲つたものであるから、此機運に乘じて、我國商工業の發達を期圖する趣意に出たものと考へられる。當時內地の金融市場も亦緩和して、商工業者をして、安んじて事業經營の衝に當らしめたことは、徹ら可からさる所であり、日本銀行の金利引下げも亦正しきを得た處置と認

められるであらう。然しながら經濟社會の形勢に一弛一張のあるのは、免かる可からざる所であつて、何年か好景氣の續いた後には必ず投機熱が勃興し、此熱が其赴く儘に昂進したならば其極恐慌の襲來に接することは、何としても避け難き勢に屬する。恐慌を未然に防がう、又は恐慌が襲來しても、其餘波として起る慘害を少なからしめるには、投機熱の勃興し掛けた當時に於て、信用の膨脹を制することが必要であつて、而して此必要を充すには、一ツの金融市場に於て、互に對立し、互に競爭して居る市中諸銀行に依つて、達成される譯のものでなく、必す諸銀行の上に立つ中央銀行の措置に依らなければならぬ。中央銀行は必ずしも金融市場に於て先き馳りをする營業方針を取ることを要しない、然し投機熱の勃興を抑制するには、何としても其甚だしきに至らざる内に、中央銀行の率先的施設を要するのであつて、其施設の最も重要なるものとしては、金利步合の引上げに依る信用の制限を擧げるの外ないのである。

日本銀行の金利政策

此點から論斷して、日本銀行の今日まで取り來つた金利政策は果して當を得たと評し得られるであらうか。前表に示した所に據れば、日本銀行は大正七年九月から同八年十一月に至る間に於て前後四回の金利引上げを行ひ、割引日步をして最低時代の一錢四厘から二錢二厘の高きに至らしめた。之を年利に換算すると、五分一厘一毛から、八分三毛に至る引上げに當るのであつて、必ずしも引上げの程度に於て微弱であるとはしない。然しながら一方に歐洲戰時に於ける我國の投機熱は當時如何なる程度に於て昂進して居つたであらうか、此位の程度の金利步合引上げを以てしては、容易に之を抑制することが出來ず、投機熱は其赴く可き所まで赴き、遂に大正九年三月の恐慌と爲り攻府や日本銀行をして其善後策に手を下す所なからしめた。而して恐慌後に起つた不景氣が今日に至るまで、尙ほ恢復の曙光を迎へるに至るを得ないことの如き、投機熱の高かつた反動として、恐慌が恐る可き慘害を社會に及ぼし、恐慌の慘害の甚だしかつたゞけ、不景氣時代も亦永引かざるを得ざる道理に支配されるものであつて、斯の如き結果を生ずるのは、何としても日本銀行の金利政策に於ける過失の然らしめたものと認めなければならぬ。

然しながら日本銀行の此過失は日銀當局者單獨の意思に依つて惹起されたものであるか、其れとも他の掣肘に依つて　已むを得ず、演出されたものであるか、此一事は何人も知らうと欲する所である。斯る事柄は其れ〴〵局に當つた者の與かざる告

白に接しなければ、之を確めるを得ないが、私の此際一言したいのは、我國に於て大正七年から八年に掛けて、投機熱の勃興しつゝあつた際政局に居つた原内閣は實に此投機熱を歡迎し、又之を煽揚し、斯くして經濟社會に外見的好景氣を裝うとを能事として、渝らなかつたのである。此際日本銀行總裁が經濟上に健全なる意見を懷抱し、實際に引上げられたよりも、多く金利歩合を引上げて、市場に警戒を加へることを必要と考へたかどうかは、私の知るを得ざる所であるが、假に日銀當局者が斯る意見を持ち、之を實行する爲めに、政府に向つて金利引上げの議に就て、申請する所あつたとしても、政府の認可を得なかつたことは勿論であつて、此邊の事情が略ぼ判明して居つたればこそ、日銀當局者も金利歩合の引上げを彼の如き緩漫なる程度に止めて、其以上に出ることに勉めなかつたとも解釋される。即ち高橋是清氏の放漫なる經濟政策や、之を容れて、黨勢擴張の資に供しようとした原敬氏の私心などが相集まつて日本銀行をして健全なる金利政策を行ふことを妨げしめ、投機熱をして其甚だしきに至らしめ、投機熱の甚だしかつたゞけ、其れだけ、今日に至るまで不景氣の慘状をして拔く可からざるものたらしめたことを斷定するを得るのである。隨つて高橋是清氏の如きは實に我國に於ける金利政策を誤まらせ、其正しきに就くことを妨げた張本人であつて、此點に於て責任を負はなければならぬ道理であるのに拘はらず、恬として顧みる所なく政友會總裁として、頻に一知半解の經濟論を喋々しつゝあるが如き、何たる厚顏何たる無恥の沙汰であらうか、私の驚かざるを得ざる所である。

總裁に對する攻撃

昨今日本銀行總裁井上氏に對しては、世間到る所から攻撃が加へられ、辭職を勸告する者すらあるようである。日本銀行の既往幾年間に於ける金利政策が宜しきに適せず、斯くて恐慌を惹起したとか、恐慌の慘害を甚だしからしめたとか云ふ以上は日銀總裁は正に中央銀行の首腦者たる任務に背いた者として、責任論から辭職勸告の出て來ることを不可思議としないであらうが、日銀總裁が右の如き態度を敢てしたのは、或は自己の意思でもあると見られるが、寧ろ背後から政府の命を受けて、今日の制度上、唯々諾々之を奉ぜざるを得ざるに至つたものとも解される。然らば日銀總裁の如きは、如何に實業界に於ける地位が高く、又日銀に就て、資金の融通を受けようとする者が阿附した所で、政府の傀儡であり、案山子同樣のものであるに過ぎない。隨つて日銀總裁に向つて、今更の如く責任呼りをして

辭職せよと云ふが如きは、寧ろ日銀總裁の地位を買被つたことの嫌なきを得ない。私をして云はしめれば、金利政策を誤つた日銀總裁には何等の責任はなく、却つて斯る誤りを爲すに至らしめた政府に責任があり、同時に此事は現在に於ける政府對銀行の關係に大なる間違の存することを示す資料とするに足りるのである。

高橋なり、彼を藏相とした原内閣の金利政策に對する攻擊は兎に角として、右の如き事情の下に、日本銀行の金利歩合は其引上げられ可き程度まで、引上げられなかつたのであることは明白の事實であつて、既に引上げの程度が足らなかつたとすれば、引下げの機會に到來することの遠いのも、亦當然の數であつて、若しも曩日適當の點まで引上げられて居つた場合には今日に於て引上げられ可き筈であつたと云へるであらう。即ち日本銀行の金利歩合は佛蘭西銀行などではないとしても、尙ほ餘程固定的性質を持ち、高かる可き時に、高く爲らない代りに低かる可き時に、低く爲らない譯であつて、此の事情をも顧みないで、濫に金利引下げを要請する者あるが如き、道理を辨へない沙汰であり、殊に金利の引下げられ可き勢を妨害する原因を作爲した政友會内部に引下げ論者が居るに至つては、彼等の經濟論が如何に支離滅裂のものであるかを語るに外ならないのである。

英米の金利と我國の金利

如何にも目下我國に於ける金利歩合の一般に高貴であることは爭ふ可からざる事實であつて、單に内國だけで見て、高いばかりでなく、他の諸國に比較して、亦高貴であることは、左に掲げる各國中央銀行割引歩合に關する一表に依つて、之を知り得るであらう。

所在地	變更期日	利率
アダムテルダム	一九二二年七月十八日	四分
アゼンス	一九二〇　五　一五	六五厘
伯林	一九二二　九　二〇	八
ブラッセル	同　六　八	四五
倫敦	同　七　一三	三
巴里	同　三　一一	五
羅馬	同　七　一一	五五
東京	一九一九　一一　一八	八
紐育	一九二二　六　二一	四

一時我國と略ぼ同等の程度に於て、金利歩合の高かつた英米兩國に於ては、最近金利歩合に著しき下落を告げ、殆ど戰爭前の平和時代に行はれた所と異ならざるに至つたのに對して、日本が世界を通じて、第一等の高利國であることは、右の表に於

て明であつて　斯の如き有様であつては、或は國民の貯蓄心を剥殺し　貯蓄の增加に依つて、自然金利步合に反動的下落を來すこともあるであらうが、斯ゝ現象の生ずるに就ては、假すに時日を以てしなければならず、此現象の生ずるまで、我國の經濟社會は金利の高きことに依つて、事業の振興に妨害を蒙らざるを得ないし、事業の勃興しない限り、景氣も恢復せず、失業者に授職の道を開くことも出來ない譯と爲る。即ち日本銀行金利引下げ論の起るものも、亦偶然でないであらうが、私は斯る引下げ論に同ずるに先立つて、金利の斯く上進するに至つた原因を攻究することを以つて、當面の急務と考へる。而して其の原因は何に之を歸す可きかと云へば、其第一は物價騰貴の勢であり、其第二は政府の財政方針に在りとするに躊躇しない。物價と金利との關係に就ては、世間に種々の異說もあるが、私見を以つてすれば、物價が騰貴し、殊に其騰貴が繼續する勢の下にあれば、必ず金利步合の上進を促すものと考へざるを得ない即ち物價の騰貴は一面に於て以前と同一の規模を以つて、產業を經營する者をして、多くの資金を需要せしめる他の一面に於ては、今後物價騰貴の勢が繼續し、貨幣價値の將來低落することの明瞭なる事實である場合には、債權者たるものは、貨幣價値の高かつた時に、他人に貸付けた金額を其低く爲つた際に回收する道理であつて、兩時期に於ける貨幣價値の差だけ、損失せざるを得ない、此損失に報ゆる爲め、債權者は金利步合の引上げに勉めるものであるとすれば、我國に於て金利步合の上進して已まないとの如き、何としても其原因を物價の騰貴に歸せざるを得ない。現に英米兩國に於て、中央銀行なり、紐育準備金銀行なりが金利步合に引下げを行ふに至つたのは、千九百二十一年からであるが、物價も亦之と時を同じうして、低落したとは、左の一表に依つて之を知るを得るであらう。（英米兩國とも千九百十三年の平均物價を百とす）

年月	英國 物價指數	英國 銀行利率	合衆國 物價指數	合衆國 銀行利率
一九二一年一月	二三二		一七七	
二	二一五	七分（一九二〇年四月改正）	一六七	六分（一九二〇年六月改正）
三	二〇八		一六二	
四	一九九		一五四	
五	一九一	六、五（一九二一、四月改正）	一五一	
六	一八三		一四八	五、五（同年七月改正）
七	一八六		一四八	
八	一八一	六、（同年六月改五）	一五二	
九	一七五		一五二	
一〇	一六三	五、五（同年七月改正）	一五〇	五、（同年九月改正）
一一	一六一		一四五	
一二	一五七		一四二	

一九二二年一月	一五六	五（同年十一月改正）	一四二	四、五（同年十二月改正）
二	一五五		一四六	
三	一五七	四、五（一九二三年二月改正）	一四七	
四	一五九		一四九	
五	一五九	四（同年六月改正）	一五八	四（一九二三年六月改正）
六	一六〇		一六一	
七	一五八	三、五（同年同月）	一六五	
八	一五二		一六五	
九	一五一	三、七（同年七月改正）	｜	

即ち最近一年九個月の間に於て、英國の銀行利率が七分から三分に合衆國に於ける紐育準備金銀行の利率が六分から四分に低落するに至つたとことは、著明の事實であるが、就中千九百二十一年始から、千九百二十二年九月に於て物價下落の勢の合衆國よりも餘程强かつた英國に於て、大なる金利步合の低落を告げて居ることとは、吾人の興味を惹く所である。然らば我國の如き今日現に物價の騰貴しつゝある國、少なくとも英米兩國に比較し、戰時の物價に對して、下落の勢の頗る緩漫である我國に於て、金利步合の下落しないのは敢て異とする能はざる所であつて、斯る事情あるに拘はらず、日本銀行の金利引下げに依つて、金利低落の趨勢を作爲しようとすることに就ては、其所に大なる無理があり、矛盾があるとせざるを得ない。

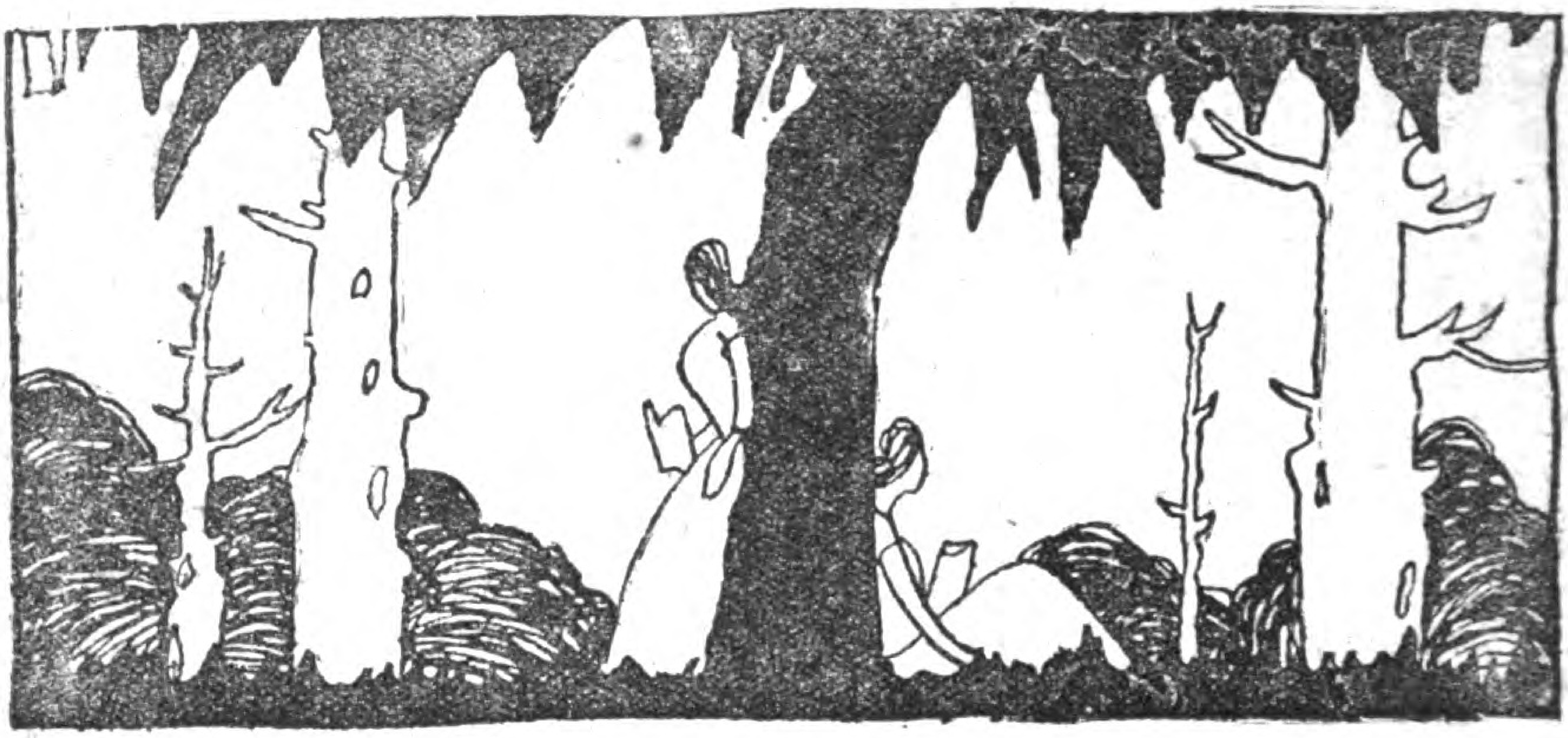
中央銀行は金融を支配し得るか

中央銀行と市中銀行とは金利步合の決定に就て、如何なる關係に立つ可きものであるか、前者は兌換制度を擁護する責任を負うて居ることとの關係から、金利步合の高低に依つて、金貨の流出入を制する點に於て、重要なる働をなしなければならず、中央銀行にして此般の關係から、金利步合を引上げたに拘はらず、市中諸銀行が之に順應しない場合には、之に順應させる目的を以つて、中央銀行自ら進んで內國に於ける金融市場をして緊縮の方嚮に向はしめようと努力することがある。又國內金融の關係から考へても、投機熱の勃興を制する爲めには、中央銀行は大局から判斷を下し市中諸銀行に卒先して、金利步合を引上げることとを必要とする。然し是等特殊の場合を除けば、中央銀行は大體に於て、市場の大勢の赴く所に從つて、金利步合を上下す可きものであつて、中央銀行自ら金融の趨勢を決しようとするが如き、力を料らざるの甚だしきものである。此點から我國金利の實際問題に考へを進めると、吾人は如何なる結論を得るであらうか。昨今我國の金融市場は多少緩和したと稱されるが第一流商業手形の割引步合の如きは、日本銀行の割引步合に比較して、若干の上鞘に居ること、依然たる有樣である。然

らば斯る場合に日本銀行が殊更に金利步合の引下げを行つて、市場に行はれる金利よりも餘程の下稍に之を置くと云ふことは日本銀行自ら其資力を以つて、金融の大勢を利導し、動かす可からざる原因あつて、今日の如く上進した金利步合を强いて低落せしめようと計畫するものに外ならない。日本銀行の金利步合の引下げられたことは、市場に於て市中諸銀行に資金の融通を求める取引先をして諸銀行に就て、金利を引下げることを要請するに至らしめるであらう。而して諸銀行は日本銀行が日步二錢位の所に引下げられた金利步合を以つて、手形の再割引に當つて與れることに依賴して、取引先の要求に應じたならば、卽ち日本銀行の金利引下げに依つて、市場全體の金利步合を左右するに至ることゝ解される。斯る事實が起つたならば 中央銀行の威力は世間に發揮される譯であらうが、斯る金利の引下げが資金に對する需要を促進することは、果して幾何に上るであらうか。第一には金利の引下げは必ず有價證券の有價に影響を及ぼして、之を騰貴させ、銀行に對する擔保品として、之を利用するに當つて、資金貸出の高を增加せしめ、第二には斯る有價證券市價の騰貴は自然從來の事業を擴張する目的を以つて、增資を行うに至らせ、又は會社の新設を盛にして、新株式を發行させるに至る。斯の如く爲つたならば、是等二樣の方面から資金に對する需要は增加し、諸銀行は日本銀行の金利步合の低廉であることを奇貨として、同銀行に就て貸付割引を求めるに至るであらう。斯くて日本銀行が之に堪へざるに至つたならば、一旦引下げられた金利步合は再び反動的に引上げられざるを得ざる次第と爲り、經濟社會は此無意義なる金利步合の高低の弄ぶ所と爲つて、平地に波瀾を捲き起したと同樣の趣きを免がれない。斯の如きは時機の未だ熟せざる際に强いて金利步合の引下げを濫行する結果であつて、吾人は其弊害に顧みて 深く戒しめる所なければならぬ。政府の物價調節策が從來の如き不徹底のものであつては、我國の物價が何時に爲つて、英米兩國と步調を一にするまでに低落するか、測り知るを得ない。私が金利引下げの先決問題として、物價調節策の確立、其實行を必要とする所以であるが、假に此點に就て方針一變し、物價が下落して、國民の生活が容易と爲り、資本の蓄積の行はれる一方に、貨幣價値の將來騰貴する見込が定まつたならば、金利は何としても低落する。而して其低落は中央銀行の金利步合に於けると市中諸銀行の金利步合に於けると、其別を問はない。政府が頻に國民に向つて消費節約を宣傳したことも、若しも徹底的に行はれたならば、必ず金利引下げに效果を奏するであらう。然し消費節約に依つて、金利に斯る效果を及ぼさうとするからには

單に國民をして之を行はしめるに止まらず、政府自ら經費を縮少し、殊に公債發行の必要を省約し、公債を高き利廻りの下に發行して、民間の資金を奪取することを制しなければならぬ。

斯の如く觀察し來つたならば、學問上の議論としても、政策上の問題としても、我國に於て今日金利歩合の引下げらるゝ根據が如何なる邊に在るであらうか、何としても之を知るを得い。物價が下落して、金利亦低落し、斯くて經濟社會が整理の緒に就き、低落した金利が物價の下落に依つて、低廉と爲つた生産費の下に、事業を刺戟し、不景氣と云ふ奈落の底に沈んだ經濟社會を好景氣と云ふ九天の上に昇らしめるに至る次第である。我國の今日に於ける如く、物價が依然として高かつたならば、一切の整理計畫は半途に停滯し、金利歩合も亦容易に低落せず、何時までも混沌たる狀態を彷徨する外に出づ可きの道を得ないであらう。此事たる、決して私が我國經濟社會の狀態を對象として述べた一家言ではない。幾多先進の學者が經濟的循環期學說の下に、說き古した所であつて、何等異とし又珍とす可きものでない。最近我國に恐怖が起つたのは。大正九年三月であつて、爾來不景氣の狀態に居るものとすれば、不景氣時代は約三年の久しきに亘つて、繼續して居ることが、明瞭に爲るであらう。經濟的循環期の學說から考へれば、最早や狀態が一變するとか、又は一變する徵候が發するとかして、然る可き筈であるのに、今日に至つて不景氣の愈々濃密を加へようとするのは、要するに從來の經濟政策に大なる過誤があつて。不景氣時代の徹底することを妨げた結果に外ならない。金利問題の如き、不景氣時代の特徵として、金利引下げの起る可き道理でありながら、尙ほ其起るを得ないと云ふ事情の存するのも、亦已むを得ざる所ではないが、此邊の事情を明にしないで早くも金利の引下げられ可きものと考へるに至つて、其考へに足らざる所あることを認めるのである。若しも政友會内閣の如く、理否の如何に拘はらず、金利歩合の引下げに依つて、經濟社會の人氣を盛にし、斯くて之を政治上に利用しようと云ふ考へが今日の財政當局者にあつたならば、金利歩合引下げの如きも、或は具體的問題と爲つて、吾人の眼前に現はれるかも知れない。此以外に私は金利の引下げられ可き根據を知るに苦しむ。唯諸外國で頻に金利が引下げられたとか、日本銀行の金利歩合が久しい間、居据りの儘であるとか云ふ理由だけて、利下げを主張する、時機や、道理の如何を問はず、利下げさへ行はれゝば、其れで經濟社會が振興すると論じるのは、餘りに單調なる論法として、私の應酬することを好まざる所である。



青銅の基督

「一名南蠻鑄物師の死」

長與善郎

一

父秀忠と祖父家康の素志を繼いで、一つにはまだ徳川の天下が織田や豐臣のやうに榮枯盛衰の例に洩れず、一時的で三代目あたりからそろ／＼くずれ出すのではないかと云ふ諸侯の肝を冷やす爲めに、又自分自らも内心實はその危惧を少からず感じてゐた處から、さし當り切支丹を鎗玉に擧げて、凡そ殘虐の限りを盡した家光が死んで家綱が四代將軍となつてゐた頃の事である。

實際、無抵抗な切支丹は、所謂柔剛その宜しきを得て、齡に似合はずパキ々々と英明振りを發揮して、早くも「明君」と云はれた家光が、一方「國是に合はぬ」事は何處迄も嚴酷に懲罰して苛責する處がないと云ふ「恐ろしさ」を諸侯に示すには得易からざる無難な好材料であつた。「何と云つてもまだあの青二才で」と高を括つて見てゐるらしく思はれた諸侯達を就職のとゞ始めに度膽を拔いてく

れやうと思つてゐた若將軍の切支丹に對する處置の酷烈さと、その詮索し方の凄まじい周到さとはたしかに「あはよくば又頭を擡げる時機も」と思つてゐた諸侯の心事を脅し　その野望を斷念せしめて行くには效き目は著しかつた。奥羽きつての勢力家で、小心で、大の野心家であつた伊達政宗さへ、此年少氣銳な三代將軍の承職に當つて江戶に上つた際、五十人の切支丹の首が鈴ケ森で刎ねられるのを眼のあたり見て、その耶蘇教に對する態度をガラリと變へた程であつた。

かくて何でもかんでも德川の基礎を萬代に固める事が自家一代の使命であると心得てゐた家光は、諸侯と直接刄を交へて脅迫するやうなまづい手段に依らずに、諸侯がとも角も同意しない譯に行かぬ理由と名義の下に、此日本の神を否定し 佛を否定し、國法を無視し、羊のやうな柔和な顔をして、其實國土侵略の目的を腹に持つてゐる狼の群を鏖殺しにする事に依つて、間接に德川の威勢を天下に示し、同時に自分の威力の反照を眼のあたり見る事が出來る事を此上なく面白がり、喜んだ。何となく氣味のわるかつた姻戚の伊達政宗迄が思いがけない奥羽での切支丹迫害の報告書を奉つた時、彼は自分がもうそれ程迄におそれられてゐるのかと云ふ得意の爲めに、まだどこか子供々々した俤のぬけきらぬ顔を赭くし、パタ〳〵とその書面を叩き乍らそれを奥方に見せに座を蹴つて立つた程であつた。

併し切支丹が神の道と救いの教えを說くと稱して實は日本侵略が目的であると云ふ事は只彼の構へた口實ではなかつた。實際彼はさう信じてゐたので、それは又その筈であつた。朝廷に最も勢力のあつた神道主義者と佛僧との耶蘇教に對するあらゆる反對讒訴姑息な陰謀は秀吉時代からの古い事であつたが、まだその他に商業上の利害の反目からフランシスコ・ザヴエリオ以來日本の貿易と布教とを一手に占めてゐた葡萄牙人を陷れやうとして元來西班牙の廣大な領土は宣教師を手先きに使つて侵略したものだと實しやかに述べ立てる西班牙人があり、又家康の時には更に西班牙と葡萄牙とを

商敵とする新教國の和蘭人が現はれて家康の前に世界地圖をひろげ、耶蘇教國の君主すら宣教師を危險視して國外に放逐してゐる位であるなぞと云つて眼の前で十字架をへし折り、聖母の畫像を踏みつけて見せた事もあつた。のみならず捕獲した葡萄牙の商船から發見したものだと稱して僞造の密書——所謂「和蘭の御忠節」を勿體らしく捧呈したりしたのである。

さなきだに切支丹には誤解される點が實に多かつた。罪を犯して悔い悲しむ者は、罪を犯さぬつもりでゐる過ちのない傲慢な者より救はれ易いと云ふ意味が罪その物を肯定する教と見做された事も當然な事であつたが、又靈魂の救はれる事の爲めに肉體の死苦を甘んじると云ふ事がやがて死の讃美に思はれ、そしてその死に民衆を「嗾かす」ばてれん達は又國民を亡ぼして行く者と見做された事なぞも凡て尤もな事には相違なかつた。

且つ慶長の初めには疫病が流行り、天變地異がつゞいた。こんな事を佛僧や神官が神佛の怒りとして持ち出さずにおく譯はなかつた。秀吉はそれには耳を貸さなかつたが、切支丹の一婦人に懸想してその婦人を妾にする事が出來なかつた時、始めて本當に切支丹は憎いと思つた。彼はその女を裸にして竹槍で突き殺させた後で、今日の吾々が子供の時から耳にタコが出來るほど學校で聞かされた常套語の元祖を放つた。

「外國の土に善く適ふからと云つてその木をすぐ日本へ持つて來て植へると云ふ事は間違つてゐる。日本には日本の櫻がある。」

そして自ら朝鮮を侵略して行つた此猿英雄は一度でそれが懲らし得るつもりで、先づ廿六人の「侵略者」を長崎の立山で磔刑にし、虐殺の先鞭をつけた。

家康は秀吉よりも一層切支丹を最初から嫌つてゐた。徳川の運命と同じく、切支丹の運命にとつて致命的であつた闘

ケ原の決戦が濟み、切支丹の最も有力な擁護者であつた石田三成、小西行長、黒田孝高等が滅び失せて後は元和八年の五十五人虐殺を筆頭に露骨に切支丹迫害が始められた。かくてそれ迄は自ら洗禮をうけ、或は切支丹に厚意を持つてゐた西國の諸侯は幕府の嫌疑を怖れるが故に改宗し、切支丹の討伐にかゝつた。そして爾後切支丹の根絶やしは徳川家代々の方針となつた。

寛永十五年正月、島原の亂が片付き、續いで南蠻鎖國令が出て後、天文十八年以來百餘年の長きに亘り、二千人以上の殉教者と三萬數千人の被刑者とを出してなほ執ねく餘炎をあげてゐた切支丹騒動なるものは一段落ついたやうに見へた。

「一つ時はほんに日本全國上下を擧げてなびいた位えらい勢ひぢやつたもんぢや。信長が本能寺で討たれた頃にや三十萬からの生粹の信者がおつた相な。それが此通り消え細る迄にやお上の仕打ちも隨分と思い切つて酷ごいには酷ごかつたが、片つ方も、亦執つこいとも執つこいもんぢやつた。が、かうなつて見れや此國に切支丹が容れられなかつたと云ふなあ、それが結局天主（でうす）の御所存ぢやつたのかも知れんてな。」

こんな疑念がひそかに切支丹に厚意を持つ人々の念頭にもきざしかけてゐたその頃の事である。

それでもなほ全國市町の要所々々には

定

きりしたん宗門は累年御禁制たり、自然不審なるもの有之者申出づべし、御褒美として

ばてれんの訴人　銀三百枚

いるまんの訴人　銀二百枚

立ちかへり者の訴人　同斷
同宿並に宗門の訴人　銀百枚
かくし置き他より顯はるゝに於ては其處の名主並びに五人組まで一類共可處嚴科也、仍下知如件
奉　行

と認めた檜の高札がいかめしく樹てられてゐた頃の事である。
長崎の古川町に萩原裕佐と云ふ南蠻鑄物師がゐた。

二

「おい。お佐和。此間のあの「虎」をどこへやつたんだ。」
「よくもかう珍なものを集めたものだ」とつい人がおかしくなるほど煤ぼけた珍品古什の類を處狹く散らかした六疊の室の中を孫四郎は易者然たる鼈甲の眼鏡をかけて積んである繪本を跨ぎ、茶盆を跨ぎして先刻から机の上、床の間、押し入れの中と頻りに引つくる返へして何か探してゐたが、から荒々しく聲をかけた。
「ぬしは又賣つちまつたんだらうが。え？　俺にかくして。」
孫四郎の調子にはもうやゝ、刺があつた。その刺にさゝれて隣りの四疊で針仕事をしてゐた細君はやぶれた襖をあけた。
「まあ、「又」なんて誰がいつそんな事をしましたらうか。」
やゝ上氣した頰の緒味のために剃つた眉のあとが殊に蒼く見へる細君はかう云い乍ら羞ぢらいげに微笑むだ含羞を客

の裕佐の方へなげ、「まあ、此散らかし方！　まるで屑屋さんのやうですわ。」と尻上りの調で云つて一寸突つ立つた。

「貴樣、探して見い。ありやせん。」

孫四郎は邪慳にかう云い捨てゝ敷けば却つて冷た相な板のやうに重い座蒲團をドサリとわきへ放りなげ、長煙管の雁首で、鐵に銀の象嵌をした朝鮮の煙草箱を引き寄せ乍らその長い膝をグッと突き出して座つた。

「それやこんなものよりやずつと傑作じや。此間の緣日の虎を早速やつて見たんぢやがな。」

彼はかう云つてひよろ長い體の居ずまいを直し、裕佐が緣近く持ち出して胡座をかいて見てゐた一枚の繪を煙管でさした。それは山田長政が象に乘つて暹羅の國王の處に婿入をする圖で、版畫にする原畫であつた。

「ほうら。ありましたがな、こんな處に。矢つ張り貴郎が御自分でお藏ひになつたんですわ。」

細君は嬉しさの餘り長い白い脛を一寸あらはして、束になつてくずれてゐる錦繪を跨ぎ、安心と怨めしさとが一緒になつて堅くなつた表情を向け乍ら一枚の繪を夫に渡した。そして「いつだつてかうなんですの。」とやゝとげ／＼しく云つて、そのとげ／＼しさに自ら上氣した顏を更にぽつと赧らめ乍ら裕佐に笑顏を見せ、チラリと又夫を顧みて　次ぎの間へ去つた。

「あつたか。」孫四郎はうけ取り乍ら一言かう云つて、大事さうにフッと一息かけ

「こゝへ來て御覽。こゝの方がまだ明るい。」

と云い乍らその繪をサラリと敷居の上へなげ、飲み殘しの冷たい茶をゴクリと一息に呑むと今度は眼鏡の球を袖口でこすり乍ら下から覗き込むやうにじろり／＼と裕佐の顏を覗入るのだつた。

諏訪神社の縁日に虎の見世物が出て非常な人氣を博した事はついその十日程前の事であつた。孫四郎の繪ではその虎の檻が街頭に引き出されてゐる。「朝鮮產大虎」「大入々々」「大人一文小兒半文」と書いた札を背にして切りに客を呼んでゐる男が一方にゐる。かと思ふと張り子のやうな虎が檻一杯に突つ立つていかめしく睨んでゐるその檻の前には「おらんだ人」と肩書きのある紅毛碧眼の異國人が蝙蝠傘をさした日本の遊女と腕を組んで、悠長にそれを見物してゐる。ステッキをついて猩々のやうに髯を生やした馬鹿に鼻の高い「おろしや人」が虎よりは見物人の方を見乍ら長閑にパイプを喫かしてゐる。大小をさした丁髷の侍のわきには日本の子供と支那人の子供とが遊んでゐる。――

「ふむ。―」裕佐は思はずその繪のユーモアに微笑まされた。「なるほどこれや面白い。」

「近來の傑作ぢやらうがな。ヘッヘ」

むしろ好んで皮肉を銜ふやうなその歪んだ口許に深い皺を寄せ乍らにや〳〵と傲りがに裕佐の顏を見てゐた孫四郎はかう云つて高く笑ひ出した。

「傑作ですね。版にしたら又一しほ面白いでせう。」

その笑い聲の下品さに嫌氣を感じ乍らも裕佐はかうほめざるを得なかつた。「あの虎は君が畫くと面白からうと僕も思つてゐたんです。」

「へ、へ。中々見逃しやせぬよ。」

と孫四郎は又雁首に煙草をつめながら

「往來にさらしてある見世物に「大入」はおかしいが、そこがかう云ふ繪の愛嬌ぢやでな。」かう云つて又笑つた。

たしかに齡よりは十位老けて見へるがその實漸く四十になつた許りの此繪師は當時長崎きつての唯一の版畫師であ

つた。

實の處裕佐は口に出してほめた以上に內心感服―むしろ驚いてゐたのであつた。「實際變な奴だ。」と彼は思ふのだつた。人間としては猶ほ更の事、畫家としての孫四郞にも彼は決して飽き足りてはゐなかつた。孫四郞は趣味のみに生き、自分は趣味のみに生きる事は出來ない。趣味のみに生き得る孫四郞の趣味はどうしても偏頗で局部的であり深みがない。自分はよし趣味によつて繪筆を執り、鑿を把る事があるとも、その趣味はいつしか消えて見へなくなり、それに代つて全身の心が現はれ、直ちに萬人の心をピタリと打つ底の生ける魂が儼として作品を支配しきる處迄行かなくては氣がすめない。

孫四郞の畫くものが現に面白い事は否定出來なかつた。唯「面白い」と云ふ丈けにすぎぬ藝術は所詮二流以上のものではあり得ないと裕佐は思つてゐた。併しその一流の境を求める自分はまだその俤の窺はれる仕事すらしておらぬのに、孫四郞はとも角その「面白い」自家の一道を既に摑まへてゐる。「山田長政」や「虎」の繪にはその「摑んだ」と云ふ感じが顯著に出てゐる。そして彼はその狹い道の上で傍眼もふらずにめき〳〵と進みつゝある。孫四郞の到底了解し能はぬ底の傑作にも廣く共鳴を感じ得る自分は まだその廣汎な理解と燃えたぎる深い內心の慾求とを寸分も生かして居らぬのに孫四郞はとも角もその卑俗な趣味の偏狹に徹底して、それを自家の製作の上に生かし、悠々自適してゐる。かくて裕佐はその先輩に飽き足らぬ乍らも一方羨ましく思ひ、その「面白さ」さへもない自己の仕事を顧みて淋しく感ぜずにはゐられなかつた。

「どうも僕は少しいろんなものに引かれすぎるのかな。」

裕佐は思はずから嘆息を洩らして破れ芭蕉の亂れてゐる三坪ばかりの庭の方を向いた。

「いろんなものに引かれるのは結構じやないか。つまりそれ丈け、おぬしは眼があるのだからな。」

さう出られゝば「勿論」と裕佐は云い度くなるのだつた。しかし自分の裡にはたしかに孫四郎なぞの覗いも得ぬ何かゞあると自信してはゐるものゝまだその現の證據を實現した譯ではない。實現して眼のあたり見た上でない以上矢張り内心不安であり、空虚である。畢竟誰にでもある單なる自惚れ、架空の幻影ではないかと疑ふ。自分で疑ふ位なら人が見縊る事に文句は云へない。

「とに角僕は何か一つの道に徹底したいよ。差し當り僕はどうもその事を願はずにはおられない。自分が結局どの道にも徹底出來ない質なのではないかと云ふ氣がどうもしてな。」

裕佐は又おとなしくかう云つてかゝえた膝をゆすぶつた。

「ふむ、徹底すると云つたつて、こんな一文や二文のおもちや仕事に徹底したんじやおぬしは滿足は出來なからう。もつとえらい仕事でなけれやな。――わしの仕事なぞは貧乏人の子供對手の乞食仕事だ。之れでも隨分丹精はして造る。こんな阿呆らしいやうな繪草紙一枚だつて見かけよりや骨を折つとるんだ。しかしいくら骨を折つたつて結句子供だましの夜店仕事を。でもこんなのらくらの遊び人の繪をとも角も一文や二文で買つてくれ手があるから不思議さな！どうで雪舟も山樂も拜む事の出來ぬ肴屋や八百屋の熊公八公がわしの御上客だ。殿様だ。それがわしには相應しとるて。へツヘツヘ。奴等にや又わしのやうな乞食繪師が相當じとるんだ。だからわしのやうな者もなけれやならんのさ。雲上人相手の白拍子ばかりじや世の中は足らん。熊公八公相手の夜店もなけれやな。どうだ。君も徹底して夜店になるか。」

孫四郎はかう云つて煙脂だらけの黒い口をあいて笑つた。

裕佐が此版畫家に對して何よりも嫌に思ひ、それが爲めに友に飢へてゐ乍らもさう繁々と訪ねて深く交つき合ふ氣

にどうもなれなかつたのは實に此男の下等な僞惡趣味であつた。

人の心持ちを何でも下等に淺薄に解釋して獨り見拔いたやうな得意の薄笑ひを浮べ、人がそれに不快を感じて何かへコマすやうな事を云ふと誰も吹鳴りもしないのに「まあさ、さう吹鳴らんでも」と云つて笑ふ。笑へば必ず故意の冷笑である。いかなる場合にも冷笑する事が人生で最も優越な事であると思ふ事にしてゐるらしい此男は、人情として笑ふ事が必ず不可能である場合にも必ず意識してヘラ／＼と笑ふ。何がそんなにおかしいのかと訊けば「何もかもおかしいのだ。自分自身も可笑しいだ」と答へて又笑ふ。無論決して本當におかしいのではない。只おかしがる事が好きなのである。おかしがつてゐたいのである。そして又おかしがり度いために凡て人生一般の對照物をその冷嘲の的となる下段な階段迄引きずり降ろさずにはおかないのだから相手が不快がるのは無理はない。そして相手が苛立てば苛立つほど彼はます／＼その犬儒主義を享樂する上に滿足を感じて、相手が何でそんなに苛立つのか合點が行かぬやうな顏して冷靜にかまへるのみである。それが彼の「勝利」なのだ。

併し、今彼のくた／＼しい毒舌を聞いた者は、彼の冷かな犬儒趣味が決して單なる彼の興味から出るものでない事を容易く見拔き得たであらう。表面氷の如く見へる彼の自己冷嘲の奧には苛立たしい刺があり、ひねくれた者の弱い火があつた。その火は彼の意識を裏切つて蒼ざめた頰をぽつと赭くしてゐた。

「しかしとに角君は畫家ですよ。僕は畫家ではない。」

「夜鷹」と云ふやうな言葉をつかふ孫四郎の興味に例の厭氣を催しながらもその上氣した顏を見ると何となく氣の毒なやうな氣がして、裕佐はかう云つた

「低いなりにもな。へ、、ハ。わしは之丈けの繪商人さ。何と云つたつて。併しおぬしなぞは誰れから云つてもわしな

ぞとは仕事の譯がちがはなけれやならんぞ。れにまだ若いし、――あせる事はないさ。些しも。」
何の心切氣もない調子でから云ふと彼は長い立て膝を抱え乍らその冷却した顔を又横に向けた。
「此間の又兵衛張りの人物畫はどうした。面白く行き相だつたが。」
「駄目だ。ふむ。」
只「人物畫は」とは云はずに「又兵衛張りの」と一寸嫌がらせを附け加へずにはおかない彼の癖に、裕佐がからぶつきら棒に應じたのを、孫四郎はなほも平然として訊いた。
「君、鑄物をやる氣はないんかね。阿父さんの傳法でやつて行きや、忽ち日本一だが。」
「ふむ、誰もまだあの術を知つてゐるものは他にないからな。」裕佐は孫四郎の言葉の意を自分の方から云つた。
「あれでも其道のコツを飲み込む才がありさへしたら案外面白い、いゝ仕事が出來るもんぢやないかとわしは思ふがなあ。」
俺がやつたらと云ふ顔附きで孫四郎はから云ひながら蒼い頤をなでた。
「さうも思へるが、どうも僕にや…」
「物足らんか。望みが太いでな。はゝ。」
から云つて孫四郎は形だけの欠伸をした。
「姐さん。一寸出て見なされ。又お通りですよ。」
此時上口の格子戸をガラリとあけて、から娘の聲が聞こえた。
「あら、そう。もうそんな時刻でせうか。」

かう云つて細君は襖を開けて現はれ「萩原さん。一寸出て御覽なさらない。おいや？」と口についた糸を指で取つて丸めながら二人の方を向いて云つた。

「何です。」裕佐がかう云ふのを「丸山連さ。」と孫四郎は「知つてゐるくせに」と云はぬ許りに押へつけるやうに云つて、「おいやな事もなからう、切支丹じやなし。なア。」と裕佐の顔を流し眼に見て附け加へながら立ち上つた。

「でも貴方なんぞ御覽なさらない方がいゝわね。毒ですわ。」細君はむつつりと下を向いてゐる裕佐の方にかう云つて出て行つた。

異國に對して嚴酷であると共に臆病であつた幕府は當時長崎在留の異國人の住居を出島の郭内に禁制すると共に、一方丸山の遊女を毎夜そこにつかはし、侍らしめて、紅毛人の歡心を買ふ事につとめてゐた。

雨の日も雪の日も灯ともし頃になれば。三十人、四十人の遊女がさはればポロ〱と剝げて落ち相な粉飾に綺羅を盡し交代に順番に應じて、奉行から差遣の同心に驅られ、曳きづられて、丸山から出島へと練つて行くのであつた。そして其翌曉には前夜のそれとは見まがいも得ぬ落剝した灰色の姿に變つて三々伍々蕭條と又丸山へ戻つて行くのであつた。

「さあ、此方もそろ〱お出掛けなさるか。今夜こそ一ちよあれを描いてやらんにや。」

「何を。」と裕佐は「もう此處へは決して二度と來まい」と心に呟き乍ら云つて起ち上つた。

「おらんだ屋敷さ。「紅毛人遊興の圖」だ。」

孫四郎はかういひ乍ら半紙を綴じた帳面を懐に入れ、矢立ての墨を改めて、腰にさすと變に興奮した體で衣紋掛けの羽織を取つて引つかけた。

「まあ、又お出かけ。萩原さん　誘惑されないやうに用心なさいよ。」

出て來た夫の出で立ちを見ると細君は光る眼で裕佐の方を見乍らかう云つた。

「へ、へ誘惑されちやいけませんは皮肉だな。」孫四郎は延び上つて行列の方を見乍ら云つた。「どうだ。一緒に行くか。童貞の青年。」

「いや、僕は此處で失敬します、では又。」

裕佐は細君の方に向つてかう云ふと、薄暗い人込みの中にすぐ姿をかくして了つた。

三

「俺は弱過ぎる。なぜかう人を求めるのか。後で必ず後悔する事が分つてゐるのに。」

裕佐は何遍も自分にかう云つた。そしては時々後ろを振り向いた。脊の高い孫四郎が群衆の上に延び上つて、その蒼ざめた小さな皮肉な顔で笑ひながらどこ迄も自分の跟を見送つてゐるやうな氣がしてならなかつた。彼はその視線を脊中に感じてムヅムヅするやうに體を顫はした。「行列を盜み見てゐるあの眼のあやしさを見ろ、わしが誘惑するもないもんだ。へ、あの猫被り奴。」こんな事を何もかも見抜いたやうな調子で細君に云つてゐる孫四郎を後ろに想像すると、彼はたまらない惡感を感じ乍らも、不思議にその豫言に支配されるやうな氣がしてならなかつた。

然し大股に急ぐ彼の步調はいつの間にかのろくなり勝ちだつた。眠むくてたまらぬ者が氣がついては眼を無理に開き乍らもつい居睡りをするやうなものであつた何とも云へぬ淋しさが重い黑雲のやうに上から彼の頭を抑えつけてゐた

自分を信じない者が唯孫四郎に止まるなら「あんな奴に俺の何が分つて堪るものか」と平氣でゐられる。併し孫四郎の冷たい表情の裏には同じ相恰の運命の顔があるやうな氣がした。それを自分の莫迦らしい氣の故であるといかに思ひ、

その不快な幻影を拂ひ退けやうと頭を打ち振り乍らも腦裡にこびりついた孫四郎の顏は只孫四郎の顏とは思へず、その皮肉は只孫四郎の皮肉とは思へなかつた。此方が力なく反抗すれば向ふは更に恐ろしい聲で「あいつに何が出來るか、へツへ！」反響し相に思はれた。

彼はステッキで堅い地を叩き、咳拂とも、叫びともつかぬ聲をしぼり出して空を仰ぎ、そして歩いた。通りでは遊女の列にからかふ男の下等な笑ひ聲や、甲高い氣違ひじみた女の聲が聞こえた。一種の本能で裕佐はその行列を見るのはいやだつた。それで小路に入つた。しかし何方へ向つて？彼は自分の家の方へは行かなかつた。彥山の中腹を少し降りた處に父の建てた自分の古家、六十になる出戻りの伯母と二人で彼が住むでゐるその家には朝日はよく照るのだつた。日が照つてゐる間そこは彼にとつて眞に落ちつける唯一の溫い自家であり、「道場」であつた。彼はそこに祀つてある「伎藝天」と共に暮して少しも淋しくなく、孤獨の樂しみに充實して醉つてゐる事が出來た。しかしそこは晝の家である。日が向ひの稻佐獄にかくれて　眼下の町々にちらほら灯りが瞬き始め、さらさらと云ふ夕の肌寒い風が障子の穴から忍び込むが否や、彼に全く新らしい第二の一日と世界とが始まり、彼は落つきを失ふのだつた。天上に二三の星が何かを招くやうにきらめき、地上にぽつ々々と明りが光りそめる事は朝赤兒が眼を明くのと同じ新鮮な感じで彼をおののかすのであつた。かくて夜の世界の不安と寂寥と、戰慄と魅力とが魔の如く彼を襲ひ、捕へた。魔に捕へられる事は恐るべき苦痛であり、又寒い喜びであつた。何かが抵抗すべからざる力で若い彼の心臟を涌き立たせ、眞晝の端正な「伎藝天」迄が妖艶、阿娜な姿に變じて燃える眼で彼を內から外へ誘ひ驅りたてるのであつた。

その家に歸る事は思つた丈けでも恐ろしい苦痛な事であつた。それが苦痛でなくなる迄彼は外で、夜の世界で、疲れ切らなければならなかつた。

彼は大波戸の海岸の方へ向つて濱から來る汐臭い秋風に顫へながら歩いた。毎も其店を通る毎に絆のやうに引きづられて立ち寄る支那店の前をも彼は今氣がつかずに通り越してゐた。

彼は海岸へ出た。蕭條たる十一月の海邊には人影一つなく、黒い上げ汐の上をペタ〳〵と撫で來る冷風のみが灯りを點けた幾十の苫舟を玩具のやうに翻弄してゐた。岸に沿つて彎曲してゐる防波堤の石に腰かけて杖を垂らせばその先きの一二寸は樂に海水にひたる。犇々と上げくる秋の汐は帆のない屋根舟を木の葉のやうに輕くあほつて往來と同じ水準にまで擡げてゐる。――彼はそこに腰をかけた。

海に突き出して一つの城廓のやうに館が右手に見へる。點々たる星の空の下にクツキリと四角く浮き出すその家の廣間の中は煌々としてどの位い明るいのかと想はれる。たしかに白晝よりも明るいにちがひない。しかも何と云ふ物々しい、無氣味な明るさであらう。そこには人の家らしい落ちつきや、幸福は微塵もない。島を圍む黒い漣がぴた〳〵とその礎を洗ふ如くに、夜よりも闇い無數の房々がその明るい大廣間を取り卷いてゐる。そこからは落寞たる歡樂の絃歌が聞こえ、干乾びた寂しい笑ひ聲が賑やかに洩れて來る。――それは普通和蘭屋敷と呼ばれてゐる「出島の蘭館」である。

裕佐はその異様な家の方に向つて歩き出した。そして歩き乍ら彼はキヨロ〳〵と四邊を物色した。孫四郎を彼は探してゐたのである。出島へ渡る爲めには艀に乘らなければならない。艀の渡し守は奉行から遣はされてゐる侍である。異國人と、遊女と、佛僧の外そこへ行く事の許されぬ禁斷の島へ孫四郎の行く譯はない。「どうせ嘘にきまつてゐる。あの道樂者が今更らしくこんな處へ繪など描きに來るものか。」と彼は思つた。しかしそう思つて振り返つた瞬間、彼は大きな、白い　首の長い一の顏を見たやうな氣がしてギヨツとした。彼は身顫ひし、そして怖い物見たさのやうにもう一度それを見た。それは番小屋の後ろから高く首のやうに突き出た新しい白木の高札であつた。

ぱてれんの訴人　　　　銀三百枚
いるまんの訴人　　　　銀二百枚
立ちかへり者の訴人　　同斷

同宿、並びにかくし置き、他より顯はるゝに於ては　――云々の文句が威脅するやうに墨黑々とそれに書かれてゐる。それは人間の書いた字ではなく、鬼の書いた字のやうに思はれた。「ぱてれん」とは敎父、宣敎師の事であり、「いるまん」とは法の兄弟　即ち準宣敎師の事であり　「立ちかへり者とは一旦宗門を轉んで　再び切支丹に歸つた者の事である。

「誰だ。」歩いてゐた侍は寒相に腕をこすり乍ら訊いた。

裕佐は返事をしなかつた。

「何者だ。」

「鑄物師だ。」

「鑄物師とは何だ。」

「銅を鑄る工匠だ。」

「銅を鑄る。そして何をつくる。」

「何でも。富士山でも、君の首でもつくる。」裕佐は一寸からかひ度い氣持ちになつた。

「貴樣よく來るな。島へ行き度いのか。」

「或る女を見度いんだ。だけど行つちや上げないよ。」

そして彼れが去らうとした時、眼の前にあつて手に取るやうに猥らな高聲の聞こえて來る和蘭屋敷の二階に女の叫び聲が聞こえて、けたゝましい跫音と同時に大きな菊の鉢がその窓から落ちた。そして石に砕ける音がした。一時森とした後、猫を抱いた日本の女の小さい顔と、その上にのしかゝつた恐しく巨きな毛むくぢやらの男の顔とが現はれ、そして彼等は何かいがみ合ひ乍ら笑つて、赤いカーテンをおろした。

四

「あなた、もしや――これではなくつて？」

　女はふつくらした人差し指で膝の上に十字を描いた。

「何だ、それは。」男は眼を圓るくして女の顔を凝視した。

「これよ。」と女は又書いた。「分つてらつしやるくせに」

「切支丹か？」

「叱！」

　女はあわてゝ制し乍ら眉を寄せて、四邊の氣配ひをうかがひ、ほつと息を吐いてからまつすぐに彼の眼を見て、うなづいた。

「僕が？なぜ。」

「只、そんな氣がしたのよ。そうちやなくつて？」

「さうぢやない。あれ等から云へば、僕は異端邪宗の徒だ。」

「誰でも罪な、けがれた事をしてる時は神聖なもの丶事を口にしたり、思ひ出したりし度くないものですね。でなくちや呑氣に樂しめませんものね。」

「ところが僕はそんな神聖なものを信じちやゐないよ。奴等の云ふやうな意味では。」

「さうお。なぜ?」

女は又彼の眼を覗入りながら追窮した。

「なぜと云つたつて僕は切支丹は嫌いだからさ。」と男は聲を低めて云つた。「奴等は奴等の仲間でない者は人間ぢやないと思つてゐやがる。良心の無い者だと思つてゐやがる。ふむ。羊の皮をかぶつた奴等の謙遜な傲慢さ位胸糞のわるいものはないよ。」

「それはまつたくですわね。今時の信者つたら本當に駄目ですわ。蟲がよくつて、不信實で、卑怯で、後でおきまりの痛悔(こんちりさん)の禱(オラツシヨ)を唱へさへすればどんな恐ろしい地獄の罪でもキレイに贖はれると思ひ込んでゐるのですものね。始めから赦される事を當てにして、きりしと様のお像でも何でも踏めと云はれゝば平氣で踏むのですもの。切支丹でないと誓へと云はれれば平氣で僞の誓ひも立てますしね。あんな不貞節な蟲のいい事で救はれるなら本當に救はれる事位お安い事はありませんわ。」

「さうでない者だつてまだゐるにはゐるが。」と男は一寸横を向いた。「とに角お上と云ふ奴があんまり滅茶な虐め方をしやがるからみんながいじけちまつたんだ。人間が堪える力にも限度があるからな。」

「それは無論よ。無理はありませんわ。」と女はしめやかに云つた。「人間は狡るく利口にならないでは生きてゐられないのですものね。誠だの、正直だの、熱い情けだのなんてそんな間拔なものは、今時の人はみんな捨てちまはずにはゐ

られないのだわ。昔の勇ましい信者達は何と云ふお馬鹿さんだつたのでせう！——おゝ、だけど寒いわね。」

女は障子をキチンとしめに裾を亂して起つた。

「あら、花火」と彼女は緣の欄干に手を突いて云つた。「寂しい花火だこと。」そして又右を向き「今晩は。お馬鹿さん。」と云つて手を振つた。

「此方へ這入れよ。寒い。」と男は火鉢を抱いたまゝ動かずに云つた。

「人に顔を見られるのが嫌だから？こそこそ泥棒さん。」と女は男の方を向いて白い歯を見せた。

「何だかおぬしのお客はわしの知つてる仁のやうな氣がするがな。へゝへ。」と彼方で男の聲がした。その聲を聞くと女はぞつとしたやうに體をふるはせた。

「貴方のお連れのやうな人ぢやなくつてよ。もう少し取り柄のある人だわ。見に入らつしやい。」と云ひ乍ら女は障子をピシンとしめて這入つて來た。そして男の手を兩手で取つて「おゝ冷たい。」と云ひ乍ら肩を寄せ、紅い下唇をむいて見せた。

二人は少時じつと顔を見合せながら座つてゐた。

「君、信者だらう。」やがて男が云つた。

「妾が？信者？へえ、これは面白い！」女は笑つた。「何か云はうと思つて云ふ事がないもんだからあんな事を。」

「かくしたつて分つてゐるよ。少くとも以前にはさうだつたのだらう。え？」

「まあ、妾、そんな女に見えて？、妾一度信者になつたらどんな目に逢つたつて轉ぶやうな女ぢやなくつてよ。」と彼女は云つた。「だけど妾、あの方の事は中々くわしいのよ。今日は師走の、八日だわね。だから、さん、じゆわん、え

わんぜりした様の御命日だわ。おゝもうぢき降誕祭(ナタル)が來るわね。それからお正月――あゝあ。」

「さうだよ。君は信者だ。僕は探偵だから一眼で分る。」

「止して下さいよ！あんまり冗談を云ふと罰が當るわ。」と女は遮切つて、やゝ眞劍に眼を光らせた。「信者がこんな商賣をしてゐると思つて？」

「ぢや、君は、僕が信者である事は金輪際許されない事だと思ふのかい。」

「さあ、許されないつて事はないわ。あなたのやうな善い人ぢやありませんか。」

「處が君にそんな商賣をさせてゐるのは誰だ。僕のやうな「善い人」ぢやないか。」

「だつて、本當に人を救ふ事の出來るやうな善い人でも、魔がさせば、人の魂を殺す事も出來るものだわ。殺す事があるものだわ。」

「無論僕は善い人でも信者でもないさ。邪宗徒だ。だが不幸な境遇で罪な商賣を强ゐられた爲めに信者になれないやうな宗門なら、俺はそんな宗門を呪つてやるよ。」

「お志、有り難ふ。ところが妾は又妾のやうな墮落した罪人がさうたやすく這入る事を許されて、髮の毛だけでも救はれる事が出來るやうな宗門ならちよつとも有り難いとは思はなくつてよ。それどころか輕蔑しますわ。妾は妾のやうなものに堅く門を閉ぢて　決してうけ入れないやうな厳しい宗門をこそ崇めますわ。讃美しますわ！」と女は强く云つた。

「ぢや、「まりや・まつだれな」は救はれてはならなかつたのかね。

「止して下さい！ちがいますよ！」と女は叫ぶやうに云つた。「あの方は始めから淸かつたのです。よしどんな事をなさつたにしろ魂の淸さが全でちがいますわ。そして本當に心の底の底から悔恨なすつたのだわ。だから救はれなすつたの

よ！妾なんぞ始めつから魂が腐つてゐて悔い改める心なんぞ爪の垢程だつて持つてやしない。大違いよ。そんな比較をされちや妾腹が立つわ。だから妾、自分が救はれやうなんぞとは夢にも望んではゐなくつてよ。却つて救はれない事を望みますわ。讃美しますわ！本當によ！妾は此儘で地獄に墮ちて行けば本望なんですの。」

「そんなら、僕も地獄に行くさ！甘んじて喜んで。お前と一緒に！」

「へむ。いらつしやい。」

女は素つ氣ない調子で低くかう云ふと、蒼褪めた顏に、かすかな小皺を漾せて冷やかに笑つた。そして「まあ御馳走の遲いこと。どうしたんだらう。」と獨り言を云つて、ポンポンと手を拍つた。

「お前、俺を信じないのかね。俺の誠を。」

男は燃えるような眼で女の眼を見つめて云つた。

「信じなくつてよ。」

女は眼を外らしもせず、冷然と男の眼を見返へして答へた。

「しかし今俺の事を「善い人」と云つたぢやないか。」かう云い乍ら男は愚劣な事を云つたもんだと思つたらしく顏を赤くした。

「えゝ、善い人は善い人よ。結局ね。一寸信者らしい感じを妾に起させたくらい。」女は眠むた相に答へた。

「だが實のある男だとは思はないんだな。」

「えゝ。少くとも或る道にかけては。貴方は若いやうで齢取つてゐるのね。何だか貴方が亢奮して被仰る事はお爺さんが、若者の言葉をつかつてゐるやうだわ。どこか不自然な、虛僞な處があるわ。」

「虚偽。俺が。ふむ。そう思へるかね。」

男は一度赭くなつた後で苦々しくから云つて、ごろんと仰向けに横になつた。そして女の心底を讀まうとするやうにけはしく女の顏を睨み見た。

「さう思へてよ。妾にはもう貴方は分つた。」

女はどこ迄も冷然と答へた。「貴方。誰か妾に似たいゝ人があるんぢやなくつて？」

「え？――」男はギクリとして耳の根迄赭くなつた。

「ホラ、赭くなつた！　赭くなつた！　詰まつたでしよ？」

女は男と共にサツと上氣したやうに顏を赭くして膝を叩いた。そして刺々しく笑つた。「さア、白狀なさい。貴方はどう世妾の眼力をくらませはしないわ。まつすぐに白狀してお了いなさい。妾ちつとも怒りやしなくつてよ。宥して上げるわ。どう世妾、貴方に惚れてる譯ぢやないんだから。」

「宥してくれ。だが…」と男は云つた。「俺が君に對して不貫だと云へば噓だ。君が信じないのは當り前だが、君はもう俺にはそんな借り着のもんぢやない。決して。」

「よくつてよ。そんなに苦しい辯解をしないでも。貴方はまだ坊つちやんね。」と女は笑つた。「失戀した男の人はよくその戀人に似た似而非女をあさるものだわ。そしてその戀人の幻をその似而非女の形骸でまやかしてゐる事に自分で氣がつかないんだわ。女こそいゝ面の皮だわね。そのくせ厚ましく貴があるなんぞと思はせやうとするんだわ。自分を不貫な男と思ふのが自分でいやだもんだから！　だけどそれでもいゝのよ。今式でいゝのよ。ねえ、その人は切支丹？」

「うむ。信者の娘だ。」

「まあ、可哀相に。それで貴方は斷はられたのね。なぜそんな偏狭な事をするんでせうね。貴方のやうな可愛い人に。妾に出來る事なら、一肌ぬいで上げるんだのに。そんな顏するのお止しなさいよ。妾ちつとも貴方に嫌味を云つてるんぢやないわ。妾、貴方が妾なんぞに實があつて下さる事を冗談にも望んぢやゐなくつてよ。本當に！　貴方の深い實は何かもつと他の尊いものに捧げられてゐれやいゝのよ。天國(パライソ)にあるその戀人の神聖な幻にでもね。こんなきたならしい、淫喰の人形のやうな女のむくろなんぞに捧げられべき質のものではないわ。妾ちやんと知つてゝよ。そして貴方も御自分でちやんとその事を知つてなさるのだわ。だから貴方のやさしい燃えるやうな言葉には空(うつ)ろな響があるのは當り前すぎるわ。いくら貴方がそれを御自分では不滿足でもね」

そして女は起ち上り、沈んだらしく默り込んでゐる男のわきへ近づくと、長煙管の烟をフツとその顏へ吐きかけた。

「貴方、怒つた？」

男は飛び上り、痺れる程の力で女の手頸をぎゆつと摑んで引き寄せると、その白い濃厚な薫りのする胸に噛む如く接吻した。と、女の胸に頸から吊してあつた細い黒檀の珠數とその先きにぶら下つてゐる銅貨のやうなものがちらりと見えた。

「や。何だ。これや。メダイか！」

「念珠(コンタス)よ！　それでも。」

ふいに男に抵抗して遮二無二鎖を引きちぎられた時、女は投げ出すやうにかう云つて男を睨んだ。それは古い南蠻渡りのコンタスであつた。

「お前、こんなものを持つてゐるのか。」

と男は夢中でそれを灯りの下へ持つて行き乍ら訊いた。

「異人さんから貰つたのよ。引つ奪つて來たのよ。」と女は云つた。「一昨日の晩だつたかしら、和蘭屋敷で。あそこにはそれはほしいものがうんとあつてよ。あいつ等は沸々だから、妾達がほしいと云へば垢だらけの襯袢とだつて何でも交換してくれるわ。此指輪だつてさうよ。」女はかう云つて、琥珀と群青石の指輪を一つ宛はめた兩手を餉臺の上に並べて見せた。

「ほう、何と云ふいゝ色配いだ。肌の味だ。」男は女の言葉も耳に這入らぬらしくかう云つて、そのコンタスに見惚れながら何遍もそれを撫でゝゐた。

「妾の肌の膏がついたからよ。」

「そして此彫り物も素敵だ。さんた、まるやかな。」

「びるぜん様ではないわ。まるや、まつだれな樣だわ。」と女は云つた。「貴方、「びるぜん」て横文字でどう書くか知つてる？ 知らないでしよ？ ほゝ、妾、教はつたから知つてるわ。」

女は餉臺の上に飲みかけの茶をこぼし、その水を人さし指の先きにつけてあやしく Virginis と書いた。そして自分で怪しむらしく、小頸をかしげ〳〵終りの is を消しては書き、消しては書きした。

「それ見ろ。お前は矢つ張りあれにちがいないよ。どうしても。」

「あれ。あれですつてへえ！あれがこんな神聖なものをこんな穢れた肌に平氣で着けてると貴方思ふの？」女は笑つて云つた。「信者が見たらどんなに怒るか知れはしないわ。冒瀆だつて。でも妾はさうぢやないんだから平氣よ。只飾りにつけてるんだわ。」

かう云ひ乍ら女はそつと男に近寄り、急にそのコンタクスを引つたくつた。そしてあはてゝ袂の中にそれをかくし乍ら
「叱!」と云つて睨み、何喰はぬ顔ですました。
その時、襖があき、酒と、肴とが運ばれた。
「さあ、お前さんも、」と彼女は云つた。
「一つお上り。口をあいて。口をよ。」さうして彼女は杉箸を裂き、一切れの壽司をつまんで、運んで來た男に云つた。
「口をおあきつてばさ!」彼女は男がさし出した手の平をぴしやりと撲つて云つた。男は賤しく笑ひ乍らあんぐりと黒い口を開いた。
「馬鹿な、犬さん。さあ、お歸り。之はおあづけよ。」
彼女は大きな飯の塊を無理に男の口に押し込み、その無様に頬張つた口つきを見てあは〱と高く笑い乍ら、もう一片の海苔卷きをつまんでその男の掌の上へポイと投げた。
「ワンヤヤ、之はどうも、えらい御馳走様。ヘツヘツ」
賤しくかう笑つてピシヤヤと膝節の音を立てながら起ち上つた時、そのつるりとした男の顔は無氣味な諧味をさしてゐた。そしてその細い眼がこんなに大きく開くのかと驚かれるほど大きく眼をむいてギヨロリと女を睨むと再び眼を細くして聲もなく口を一杯に開き、そして去つた。
「あれは犬なのよ。本當に犬なのよ。」
と女は一寸の間氣配いを覗つた後で云つた。「お上から廻はされてこんな處に迄化けて這入りこんでゐるのよ。」
「あれを嗅ぎ出しにか。」

「えゝ。だから妾犬扱いにして態とお客の前で足の指を舐めさせてやつたりするわ。するとあの犬、本當に舐めてよ。」

「お前を恨んで、疑つちやゐないのか。」

「疑つてるでしよ。無論。妾は又わざと疑らせてやるのよ。このコンタスだつて此方から見せてやつた事があるわ。あんまりしつこく神棚の奥をのぞいたりなんかするから。」

「そんな無茶な事をして掴まつたらどうするんだ。」

「掴まつたつて殺されるだけだわ。殺されゝば妾本望だわ。こんな躰、いつだつて……妾、貴方見たいに臆病ちやないわ。」

そして彼女はからかふやうに一寸男の顔を見、にこりと笑つて酒を飲んだ。

「妾もう自分の先きの短かい事を知つてゝよ。」

「あゝ、哀しい。又ちやるめらが聞こえるわ。ほら、ね。」女は深い溜息を吐いて云つた。「そりやさうと、貴方は彫物師さんね。ちやなかつた、鑄物師さんね。」と彼女は摘まんでぶら下げたコンタスを眺め乍ら又急に元氣な調子で云い出した。「貴方、これほしい？ ほしけれや上げるわ。その代り貴方、これをお手本にして一つ妾を彫つてくれない？ 綺麗に。上手に。え？ そしたら妾こんな嬉しい事はないわ。此妾が聖母様に似やうつてわけだから！」

「何の事だ。」

「まあ分らないの？ 貴方は妾を造るつもりで實は貴方の胸の中に生きてゐる戀人の像を造るのよ。むろん！そしてそれが貴方の胸の中の戀人に似れば似る程それは屹度まるや様のやうに神々しく美しくなるのだわ。そしてそれが又どこか妾にも似るのよ！ あゝ何と云ふ光榮でせう！」

「よろしい！」男は叫ぶやうに云つた。「俺はそれを造るよ。屹度。それを見たらお前は俺がどんな人間か始めて少し分

るだらう！」
「えゝ、どんな實のある人かそれを見たらね。妾にではなくつてよ。だけど、さうしたら妾、貴方の奥さんになるわ。」
さうして女は又男の眼を睨み、高らかに笑つた。
通りを流す哀れなちやるめらの音の中に秋の夜は更けて行つた。

五

朝日の照り返へしに眼がチク〳〵としみるやうな石だゝみの道を祐佐は自分の家の方へ歩いてゐた。何と云つて辯解してもおのづと滅入り込んで行く胸の暗さを抱いて悄然とうな垂れた彼の姿は慘めであつた。誰がけがれてゐると云つて、世にも自分程良心の汚れてゐる者はあるまい、誰も彼も俺を買ひ被つてゐると彼は幾度か心の中に云ふのだつた。自分の輕蔑してゐる孫四郎さへも、自分よりは單純な、正直者に思はれた。彼は通りの誰を見ても謙遜な心持ちで一種尊敬の念を起さずにはゐられなかつた。「綺麗な靴を穿いてゐる者は心してぬかるみをよける。だが一旦靴が泥にそまると、だん〳〵泥濘を恐れなくなる。そして遂に靴が泥だらけになると、もうどんな泥の中にも踏みこんで平氣になつて了ふ。」彼は人から傳へ聞いたある宣教師のこんな言葉を思ひ出して、本當だ、と心から思つた。たしかに俺の靴はもう泥だらけだ。俺にはもう本當に罪を悔いる事は出來ないのだ、否、感じる事も出來ないのだと彼は思つた。併しさうして滅入りながらも彼はそこにも或る虛僞がある事を意識した。事實彼は未だ醉つてゐた。むせ返るやうな前夜の幻に醉つてゐた。けはしく睨むでゐるその奥で見る者の心をぎゆつと捕へ、底知れぬ闇の世へ引つさらつて行くやうな、奇しくも甘い眼つき、脅かすよりはむしろ唆かすやうに八の字を寄せるその狹い額、その淡紅な濕い唇、むせ返へるやうな

みづ〳〵しい黒髪の香と、化粧した肌の香い、―その女が、散々いやがらせを毒吐いた後で「貴方、怒つた？」と云つて上から彼の顔に煙を吐きかけた時の笑顔。その顔が彼の腦裡に刻み込まれて離れなかつた。

彼がその女、―名は君香と云つた―に逢つたのは昨夜が二度目であつた。最初彼女が和蘭屋敷へ赴く列の中にゐたのをちらりと通りで見た時、彼は實に撃たれたやうに驚いたのであつた。「何と云ふそつくりな似方であらう！」そして彼は自分の胸の動悸を自ら聞ける程に喜んだのであつた。「俺はあの女を買ふ事が出來る。そしてあの女に依つて恐らく、あの人に觸れ得ぬ悶へをまやかす事が出來る。」と第一に彼は思つた。「そして同時に俺の一方のかねての野望をも充分滿たす事が出來る。俺はその口實を得た。」次に彼はかう思つた。と、急に胸が押しつぶされるやうに苦しくなり出した彼は頭を振り、「オ、！」と叫び、力任せに自分の股を撲り、又項垂れ、そして自家へ歸ると、其夜つぴて惱みあかすのであつた。「何と云ふ見下げた、卑劣な奴だ。俺は。」

しかし夜が明けるが否や、眞つ蒼な顔をした彼は鼠色の沖から吹き來る潮風に身を顫はせ乍ら、出島の渡しのわきにたゞずみ、一舟一舟、七八人宛組みになつて蕭條と戻り來る遊女の群を充血した眼で見守つてゐるのであつた。五番目の舟に君香はその窶れた小さい顔を茶色のこそ頭巾につゝんで乘つてゐた。そして館の二階の窓に寢間着姿の半身を乘り出して、にや〳〵とぼんやり彼女等を見送つてゐる二三の外人に向つて唾を吐き、「馬鹿。」と云つて、後ろ向きに腰をかけると、頭痛がするらしくその蒼い米かみを押へてゐた。

裕佐は彼女の跡をつけた。そしてその家を見屆けると、自家へ歸つて午迄寢た。彼が妓樓と云ふものに始めて上つたのはその夕であつた。

彼は今も君香の事を想ふと、その幻が、彼の久しい戀人であつた信者の娘、モニカの幻とごつちやになり、一つにな

り、そしてモニカの幻は前者のそれの後ろに次第に消えて行くやうな氣がした。否、後ろに消えて行くと云ふよりは、それより高く、上に、曉の星の如くうすれて行く如く思はれた。その二つの幻が混同する事は彼にはまぎらしやうのない苦痛な事實であつた。彼が二年の間一すじに焦がれに焦れ、その焦れが崇拜になり、遂にそれが絕望と定まつた時、次第に熱情的な占有の慾望が靜かな諦めの祈りと變り、宗教的あこがれと變じ、一方天高く遙かに仰ぎ見る如き額づいた心で居ながら、而もその人が世にも不幸な儚ない者に思はれて、慈悲の眼で、蔭から見守つてやりたくなる。その秘めやかな宗教的記念。その記念故に今迄とも角も身の過ちを免れて來られたのに、その記念に對する美しい慾望の實相は、實は此の遊女に依つて充たした處のものであつたのかと思はざるを得ない事は彼の心を止めどなく傷け、眞暗にせずにはおかなかつた。それにも拘はらず、彼はその女の事を想ふと、幸福に充たされずにはゐられないのであつた。

「何だか貴方の亢奮して被仰る事は不自然で、虛僞な處があるわ。」とあいつは云つたつけな。そして「自分を不實な男だと自分で思ふのが嫌だもんだから、强ゐて人に自分を實のある者と思はせやうとする。厚ましくも。」とも云つたつけな。」彼はほゝ笑み乍ら獨り語つた。「あいつはからかつてゐるんぢやない。實際本當の事を云つたのだ。しかし見てゐろ。その不實者が何をするか。——おゝさうだ！」と彼は何かに思ひ當つた如く、ステツキを打ち振つて云つた。「俺は、あいつを身うけする事が出來るのだ、俺は身うけしてやるだらう！乾度！そして俺は今の世間の小狐共から遊女にうまく〳〵釣られた、あの間抜けが。と笑はれて見たい。それは俺から一層緊張した力を引き出すであらう。素的だ！あいつは俺を嫌つてはゐないな。たしかに、自惚れではない！」

彼はその時の幸福を想像して、躍り上る程の力を內に感じ乍ら荒々しく自家の格子戶をあけた。一夜を妓樓に明かした彼は伯母への手前、さう云ふ場合にすぐそれと氣取られるやうな悄衰した後ろ暗い狀を見せまいとして、わざと此方

から伯母を壓倒するやうな態度に出やうと其瞬間に思つたのである。
「夜前此御仁がお見へになつてな。」と伯母は少し不安な調子で云つた。「お前に何ぞ御用があると云つてぢやつた。」
そして彼女は大きく切つた檀紙に澤野忠庵と認めた名札を渡し乍ら萠佐の顔色を覗つた。
「澤野忠庵」と萠佐はその名札を持つて立つた儘訝かし氣に首をひねつた。「聞いた事のある名だが、どんな人ですね。」
「日本人じやないのよ。異人さんでな。それも御前、まあ二た眼とは見られぬ恐ろしい顔のな。それが又和服で、しかもお役人らしい羽織袴を着てぢや。」かう云つて、伯母は溜息をついた
「さうですか。はゝ。」と萠佐は何だか笑い度くなつて笑つた。「何とか言づけてゐましたか。」
「又來ると云つてぢやつた。―お前、」と伯母は聲を低めて云つた。「あれは、ばてれんぢやなからうか。」
「さア。近頃のばてれんと來たら穢多にでも、おんぼうにでも平氣で化けるから、或はさうかも知れないが。」萠佐は尤もらしく頸を傾げて云つた。「しかしそれにしても變ですね。僕に用があるなんて。事によると天狗かな。」
天狗とは當時迷信家達の間に惡魔とか、支那で謂ふ「鬼」とか云ふ意味に遣はれて居た。
「さうよ―ほんに―」伯母は思はず恐怖の眞面目さを以て云つた。「あゝ何と云ふ厭なものが舞ひ込んだもんぢやらうか。妾はもう恐ろしうて。恐ろしうて。あの仁がばてれんの化けた者ぢやとしても、お上のお役人ぢやとしても、どつちにしてもお前の身に吉い事はない氣がするでな。ほんに天狗よ。」
「之を御覽なさい。何しろ僕はこんな物を持つてゐるのですからね。」
萠佐はさう云い乍ら、懐から例の念珠を出して見せた。

「まあ、お前。それは！」

伯母は内心恐れきつてゐたものを面と見せられたやうに眼を圓るくし、魂消たやうに祐佐の顔とコンタスとを見比べたなり、小皺だらけの耳の根迄赭くして、齒のない口をモグ〻〻と動かした。

「は、は、は、！」と祐佐は大聲で笑つた。「僕は鑄物師ですからね。どんな物だつて參考に入り要なのですよ。まあ、見て御覽なさい。面白いものでせう。」

遊女君香を愈々身うけする段になつた時伯母が必ず、强制的に反對しない迄も、喜ばないであらう事を想ふと彼は、今から一寸いけずをし度くなるのだつた。そして彼は恐ろしい疑惧と絶望の淵に沈んでゐる伯母をそこに殘したなり、口笛を吹きながら自分の「道場」へ立ち去つた。

「おゝ桑原。あれは惡魔に見込まれたのぢや。切支丹ぢや。そして妾もそれで捕まつて共に殺されるんぢや！」

彼は伯母が後でかう呟いて身も世もあらず滅入り込むでゐる樣を想像して、心から氣の毒に思い乍らも、おかしくなつて獨り笑つてゐた。そして例のコンタスに幾度も接吻しつゞけながら室の中を歩き廻はつてゐた。

六

祐佐は其日の日暮れ近く迄客を待つてゐた。しかし誰も來なかつた。で、彼は先刻から選り揃えておいた七八册の挿繪入りの漢書―それは皆彼の父が丹精して手に入れたものであつた―を風呂敷に包み、又、彼の父が始めて南蠻鑄物の術を習ひに幕府から歐羅巴へ派遣させられた時の土產である小さい浮彫の鑄物を懷ろに入れると、包みを抱えてふらりと表へ出た。

古書と古道具の一切を賣買する銅座町のある店で彼はその漢書を賣り、又その浮彫を見せた。それは「大天使みける」が龍と鬪つてゐる默示錄の中の一圖で、むろん基督教に關係ある物ではあるが、直接耶蘇の生涯を題材にしたものではないので、單なる異國の美術品として、門外漢に見せても直ぐ樣疑られる惧れのある品ではなかつた。

「結構なもんですなア。何ですか、之も讓つて頂けませうか。」

狡猾相な主人は涎を流さん許りの表情を隱し得ずにかう云ひ乍ら彼の顏色を覗つた。

「いや、それは賣るんぢやないんです。」

祐佐は思はずかう答へた。彼はそれをも賣るつもりで持つて來たのであつたが、それを主人に見せると同時に急に惜しくなつた許りでなく、何故かそれは自分にとつて賣つてはならぬ意味のある物のやうに俄かに思はれて來たのであつた。そしてさう答へた事にホツと安心した一息をもらして、漢書の金を受け取ると、又その鑄物を懷にして倉惶と店を出た。

「之で俺は又、二度や三度はあの女に逢ふ事が出來るのだ。確實に。」

かう思ふと彼はもう胸がぞく／＼と躍るやうに身を顫はせた。そして興奮した足取りで、北風に逆らひ乍ら坂道を上つて行つた時、「萩原さん」と後ろから思ひがけない聲がした。

彼は振り返つた。そして一人の青年が小走りに彼を追つて來るのを見た。

「藤田君?」

と祐佐は云つた。そしてサツと顏を赧らめ乍らも何か思ひがけぬ喜びに出逢つたやうに、にこ／＼して逆戻りに其方へ近づいて行つた。

「暫く。どうも貴方ぢやないかと思つた。」

と青年は寒氣の中を急いだ爲めにその健康な色の頬をなほ林檎のやうに紅くし、汗ばんだその白い額を一拭ひして、息を吐き乍ら云つた。

「本當に暫く。すつかり御無沙汰して了つて。」裕佐は少しもじ〳〵して云つた。「皆さん、お變りないの。」

さうして彼は顏を赧くした。「皆さん」と云ふ言葉がすぐ或る人を指しての意味に此青年に取られる事を想ひ乍ら、而もその意味に取つて貰ひ度い爲めに。

「え、有り難う。皆丈夫です。」と青年は何か工合惡氣に下を向いて答へた。そして、「此方こそ御無沙汰してゐます。」と口籠るやうに云つた後で、「之から何方へ？」と訊いた。

「別に何方へと云ふ譯でも――」

「さう。ぢや、よかつたら少し一緒に歩きませんか。久しぶりに…」

美しい青年はそのぱつちりした大きな黒い瞳に、弟の兄に對するやうな親しみをこめて裕佐の顏をのぞいた。彼は一つの包みを持ち、紺飛白の着物に羽織も着ず、足袋も穿かずに、ヒヾの切れた足にほう齒の下駄を穿いてゐた。

「え、歩きませう。」と裕佐は云つた。「何處へ行つたんです？」

「何、一寸町へ。賣り物があつて。――」

「賣り物？」

「えゝ、」青年は少し羞かし相に云つた。「造花を賣りに、」

「造花、造り花をですか。」

「えゝ、一寸必要があつて。」そして彼は包みの中から一つの白百合の造花を出して見せた。「こんな無細工なものだから

どうせ少しゝか賣れやしません。」

「君が造つたんですか。」

「いゝえ、皆んなで造つたんです。僕の母や姉や近所の人達で。」

萩佐は俯向いて、默り込んだ。

「此頃では始終造花を賣つて居られるんですか。」彼は突拍子もなくこんな事を訊いた。

「いゝえ。──今日丈けです。今夜は降誕祭ですから。」

「降誕祭。──今夜がですか。」

「本當は今夜ではありません。明後日です。」彼は四邊を見乍ら云つた。──けれども本當の當日には詮索がきびしいから假りに今夜ひそかた御祝祭をするのです。「──よかつたら來て御覽なさいませんか。」

萩佐は赭くなつた。偶然にも吉三郎と云ふこの青年も自分も共に町へ買ひ物に行き、そして共に若干の金を懐にしてゐる。併し自分のは女を買はんが爲の金であり、吉三郎のは聖なる人の誕生を祝し、それを記念せん爲めのひめやかな集りを飾らうとしての金子である。「むろん俺には切支丹とならない立派な理由があるのだ。そして俺があの女を「買ふ」と云ふのも、それには否でも應でも金錢が必要とされる不快な事情からで、決して所謂遊蕩ではない。何で恥じるに當るものか」少しでも眞面目な心ある凡ての遊蕩者が初めに必ずする如く彼は心の中にかう辯解した。

しかしさうは思ひつゝも彼は此青年と並んで歩き乍ら何となく自分を汚れたものに感じないわけには行かなかつた。吉三郎は自分より三つしか齢下ではない。しかもいつ迄もその童顏の失はれね、あふるゝ日光のうちに伸び／＼と育つ若木のやうなそのまつすぐな善良さ。顏の明るさ、星の如く澄んで微塵の濁りも見へぬ子供のそれのやうた綺麗な瞳、

そのみづ〱しい健康な體の全體に現はれてゐるふつくらとしたやはらかみ。それは此の世の意地惡を知らず、皮肉を知らず、淫慾の妄想に苦しめられる不眠の夜な〱を知らぬ者の如き顏である。單純な信仰者にのみ見られる平和の顏である。その人と今並んで歩く自分の顏のいかに不健全に病人の如く蒼褪め、頽廢して見える事であらう。彼は自分のぞべ〱した絹の着物と青年の粗末な身なりとの對照からも、ついかう意識せずにはゐられなかつた。

「此奴は單純なんだ。羊や兎のやうに。しかしその單純が何だ。」

彼はかう思つて呑氣に吉三郎を子供扱ひしやうと思ひ乍らも、どこかに引け目を感じずにはゐられないのが自分で不快であつた。「よかつたら來て御覽なさいませんか。」と吉三郎に云はれて、「いや、僕は或る遊女の所に行かなければなりませんから」とは云へるものではない。

「僕がですか？」裕佐は口を切つた。しかし僕は信者ではありませんからね。」

「構やしません。來て下されば嬉しいのです。」と青年は云つた。「尤も萬一の事があつては御迷惑ですから、無理におすゝめもしませんが。」

「發覺ですか？　そんな事は平氣ですが。――貴方のお家で僕が行つては御迷惑でせう。」かう云つて裕佐は自分の言葉の刺に顏を赭くした。

「そんな事あるもんですか。」と青年は苦し相に打ち消した。「それに僕の家でやるんではないんです。わきでやるんです。遲く夜中に。」

「しかしいづれ貴方のお家の方も入らつしやるんでせう。」

「えゝ。父は病氣で來られませんが母と姉とは行きます。貴方が入らつしやれば姉は喜ぶでせう。」

此一言を聞くと祐佐は耳の根迄をサツと赤くした。彼はさはつて貰い度くない、その癖全くさはられなかつたら又不滿である傷口にさはられたのである。それは永い涙の忍從と苦がい〳〵血とによつて漸々皮を被ぶせた許りの深い傷手であつた。而も再び皮を引剝がされた傷口からは、皮の出來る前よりは更に治し難い程の痛みを以てだく〳〵と血が流れ出さずにはゐなかつた。彼は咆え度い口を封じられたやうに全身を顫はせた。

「止しませう。――お氣の毒だから。貴方の方にも自身にも。」

祐佐は青年の同情ある慰め言に却つて立腹したかのやうに顏を火の如くほてらせて苦々しくから云つた。

吉三郎は苦し相に口を噤むだ。

「今時の切支丹は實際駄目です。」と青年はやがて口を切つた。「彼等は基督の精神を本當に了解して消化する丈けの力がないのです。それで只教義を鵜呑みにしてゐるのです。だから形に囚はれてゐて動きがとれず、偏狹なのです。偏狹なら偏狹なりに毅然とした强い處があれば又美しいのですがね、あの島原の亂此方、實際教會には偉大さが無くなつて了いました。」

「眞の基督教はしかし」と俯向いてゐた青年は又續けた。「自由な宇宙的精神がすなほに共鳴してうけ入れ、愛する事の出來るものでなくては生命がないと僕は思ふんです。僕も一時は親兄弟に叛いて教義を捨てやうかと本當に煩悶した者です。僕は此宗門に深い疑いと反感を持つてゐました。殊に肉體に對しての解釋に於て。しかし今では自分を切支丹であると自分で許す事に何等の矛盾を感じてはゐません。なぜなら眞に本當の神をみづからの内に信じる者は畢竟切支丹です。だから僕は切支丹です。」

「君は本當に神を信じられるのですか。」

「おゝ信じますとも！」青年はきつぱり云つた。「神を信じる。私には之より當り前な事があらうとは思へません。私自身の意識の存在を信じるのとちつともちがひはありません。」

「君は生れつきの信者ですからね。しかし僕にはそんな信仰はない。」と新作は云つた。「又必しもその信仰を必要と感じてもゐません。」

「噓ですよ。貴方だつて實は信じてゐるんですよ。」と青年は斷言的に云つた。「信仰はその人の生れ乍らの性質です。胸です。自覺すると否とは別としても。貴方は神の性質を先入主で誤解して居られるんぢやないでせうか。切支丹の唱導して來た人格的な神の先入主によつて。それは實際一寸奇異な事です。なぜと云つて、神と云ふものゝ觀念を始めて本質的に明かにして、それを精神的な實在と正しく解釋した人は基督です。その神の觀念の本當な確立丈けでも基督の人類に對する功績は絕大なものです。然るに、その教えを奉ずる切支丹によつて、多くの人は神に對する窮屈な先入主を抱くやうになつたのです。無理のない事ではありますがね。人間と云ふものは何でも物を人格的にしか考えられない原始的な癖を持つてゐるものですから。しかし教養のある貴方々迄がそれに引つかゝるのは詰らない事です。そんな筈はありませんよ。貴方は宇宙の精神的中心、——何と云つたらいゝか、——つまりそれがちやんと儼存してゐる事で宇宙の大體の平衡と秩序とが保たれて、無事に進んで行き、それが少しでも傾ぐと世界の運命が狂ひ出すと云つたやうな無形の核心を貴方が感じられないなんて。人類と個人との幸福や、安穩が一つにそれに係つてをり、それに從へば平安を得、離叛すれば絕望に陷る一つの宇宙的意識——良心がある事を。靜かに考えて見られゝば貴方がさうしてとも角も人生に絕望せずに、平穩に生きて居られるのは只盲目な、偶然な自然の現象だとのみ思へますか。」

「さうです。只自然と運命の爲めです。其他の信仰はすべて生死の法則に支配されるか弱い生物の人間がその弱さの爲

めに自分で考え出した作り物ですよ。」と裕作は云つた。「あしたに生れて夕に死んで行く儚ない運命の人間には偉大な宇宙の力に對して、先天的に一種宗教的な性質を與へられてゐる事は事實です。それなしには人間は自然に對抗出來ないのです。神や惡魔に對する信仰はその宗教的性質が生み出す一種の感じです。その感じは人間の本能と共に進化しては行くでせう。しかしいくら進化した處で結局感じは感じです。幻に對する感じです。僕は幻を信仰する事は出來ませんね。」

「併しその幻がなかつたらどうでせう。貴方は生きてゐられると思ひますか、」青年は確信のほゝ笑を浮べ乍ら云つた。「それなしには貴方の生活は根底から無意味になるのですよ。根柢から！そして生き甲斐を感じる事は愚か、生活を持ち續けて行く事も出來ないと僕は思ひますがね。いや、斷然出來る事ぢやありませんよ。たとへ一つ時でも。人間はそんな強い者ぢやありません。」青年はその美しい眼を輝かして云つた。「人間は決して完全な無意味に堪えられるものではありませんからね。どんな虚無主義者だつて虚無主義と云ふ主義を立てゝ生きずにはゐられない丈けの何かを與へられてゐるんです。彼等だつて自分の滿足する事をすれば必ず嬉しいし、空虚な時は必ず淋しいのです。それならその喜びや、淋しさはどこから來るのでせう。「良心から」と貴方は被仰るでせう。それならその良心はどこから來たものでせう。確かにそれは幻に對する感じにすぎないと云へるでせう。しかしその幻は吾々人間にとつては實在なものです。儼然たる生きた實在です！肉體にとつては太陽が神であり、精神にとつては神が太陽です。惡魔主義者にはその惡魔が變態な神です。虚無主義者には虚無が神です。そしてその人達の生活は各々それに近づいて行く事です。」

「むろんさう云ふ風に云ふなら僕には僕の宗教がありますよ。しかしそれは君の云ふやうなものとは全で別なものです。僕は決して安穩ではありません。それどころかかなり不安で、絶望的にさへなり勝ちです。それは神に遠ざかつた

生活をしてゐるからだと貴方は云ふでせう。しかし僕は又それが好きでもあるんですよ。僕は動亂を好んでゐます。神に祝福された平安も求めないではありませんが、又必ずしもそれが得られなくとも僕は平氣なのです、」

「それはね、貴方が矢つ張り心の奥底で無意識に神を信じて居られるからの事なんですよ。」と青年は音もなく彼等の上に落ちて來る褐紫色の櫻のわくら葉を拾ひ乍ら云つた。「しかしまあ、貴方は藝術家です。だから藝術によつて神にふれて行かれゝばいゝのです。貴方の天賦は矢張り神が貴方に投げ玉ふたものなのですからね。その天賦を殺して基督信徒にならるゝ事を神が望み玉ふとは僕は思やしません。否、むしろそれは神に對する反逆です。なぜと云つて吾々の心靈は一の親である精神によつて萬人共通的に作られてゐる同じ性質のものです。だから貴方が貴方の神に近づきふれて行けば行く程、つまり貴方は普遍的な全一な神に近づいてゆくのです。貴方は貴方の神に類づく事によつて萬人の神に類づくのです。個人にどうしてそれ以外の事が出來るでせう。」

裕佐は全く意外であつた。彼は此青年の頭のいゝ事を知つてはゐたものゝまだ見た處は依然として子供のやうな此童顔の青年から此等の事を聞かうとは全く思ひがけないのであつた。彼は青年の進歩におどろいた。

「よく人が單に自分を切支丹と認めない丈けの爲めに、自分自身の信仰を否定して、故ら神を迄否定する傾きがあるのは實際悲しむべき馬鹿げた事だと思ひますね。良心の鋭い、理性的な人であればあるほどさうなる傾きがあるのは全くなげかはしい事です。」青年はつゞけた。「それらの人は皆めい／＼自分の裡に神を感じる事の出來る頼もしい人達なのです。しかし今時それらの人は皆餘りに基督教に囚はれるのです。なぜと云へば今時本當に良心と理性との眼覺めた人が一度も基督教に囚はれずに濟むと云ふ事は恐らく不可能な事だからです。人間が本當に救はれる唯一の合理的な福音がフランシスコ、ザヴィエリオによつて吾々の前に持ち來たされたのです。實際それはあらゆる精神と信仰との墮落し、衰微

しまつた今日に於て全く唯一の光明であり、救ひの門だつたのです。苟も精神的要求の豊かな人が自分を無良心だと思はずに、その門に冷淡で無頓着である事は出來る事ぢやありません。その苛責と拘泥に打ち克つて、然も邪道に陷らない事はむしろ奇蹟です。それで多くの眞面目な人が自からも人からも無良心と思はれる事の不安に負けて、大した格別な動機もなくて信者になつたものです。それらの人は又自分が信者になれないのは發覺して殺される事が怖いからだと人から思はれたり自分でも思ふ事が強復なので、只自分の空しい勇氣を示したい丈けの爲めに洗禮をうけたりしたものです。そしてさう云ふ馬鹿々々しい「潔よさ」に負けない丈けの強さと僻みを持つた人は無理に惡魔主義になつてその尊い生命を持ちくずし、自棄に棒に振つて了ふのです、――貴方が苦しまれた事は私はよく知つてゐますよ。」

「全くもし藝術がなかつたら僕は破滅したでせう。」と祐佐は遮切つた。「――しかし今では僕は全でちがつた考を持つてゐます。僕は異端です。それは決して自暴自棄からではありません。僕は惡魔主義者でもなければ神主義者でもない、一種の自然快樂主義者です。そしてその事に些しも良心の苛責を感じてはゐません。實際の處僕はもう宗教には冷談です。僕に信仰があらうと無からうと、それを君がきめる事は勝手ですが、僕にはどつちでもいゝ事なのですよ。」

「さうです。結局どつちでもいゝと云ふ放任した氣持ちに迄ならなくては駄目です。それは自暴自棄に似てゐて、凡そ反對なものです。」

「ふむ。その意味とはちがふのですが。」祐佐は冷やかに苦笑して云つた。「併し君の親切な厚意から出る故意の誤解を僕は拒まうとは思ひません。僕の方から云はせれば、君こそ單に基督のお弟子としてのみ畢る事は惜しくてならないのですが。しかし僕は、君が自由思想家になる事を君に勸めやうとも思ひません。それは人間として潛越な事ですからね。だから君も僕を此儘に打つちやつといてくれ給へ」

「無論です。人は要するにめいめいの人生觀によつて生きるよりないのですからね。又それでいゝのですからね。」青年は淋し相に云つた。

「しかしもし今日本で基督の像を眞に生けるが如く寫す事の出來る人がゐるとしたら、それは貴方丈けだと云ふ事を僕は知つてゐます。お世辭ではありません。だから僕は安心して貴方を信じてゐますよ。」

「ふむ。恐縮ですね。」と祐佐は云つた。「しかしとも角僕はその百合の花を一つ買はせて貰い度いものですね。いけませんか。」

「どうぞ買つて下さい。——しかし一寸此處で休んで行きませうか。」

「此處でもいゝが、あの神社の中はどうですか。あそこにはもう少しキレイな茶店があります。」

「神社佛閣は僕らには少し鬼門なのですよ。只の參拜者のやうな風をしてそれとなく禮拜しない者を探りに來てゐるお役人がよくゐますからね。」

「うるさい狂犬達ですね。ぢやまあ此處にしましよう。」

そして二人は或る見晴らしの緣台に腰をかけた。

七

眼下に一日に見渡される町々の家にはもう明りがついてゐた。

「綺麗ですね。何と云ふ澤山の明りでせう。あれを一々みんな人が點けてゐるのですね。」青年は眞面目にかう云つた。

「天には星が光り、地上には人が明りをつける。僕は此處でよく夕方此景色に見惚れて了います。人が明りをつけると

云ふ事は實際神秘な感じのものですね。只夜になつたから明りをつけると云ふ以外に深い意味を持つてゐます。何だか涙ぐみ度いやうな、可哀いやうな、有難いやうな感じではありませんか。」

「本當に、いかにも地上らしいいゝ感じですね。」祐佐もかう云つた。

「地上らしい、實際です。だから愛さずにはゐられません。祈り度い心にならずにはゐられません。同じ明りでもあの星のいやに落ついた冷やかな無限の明りとの感じの違ひを御覽なさい。何と云ふ儚ない、いじらしい感じでせう。泡のやうに生じてはすぐ消えて行く此儚い人間と云ふものゝいかにも點け相な明りではありませんか。人間は本當に可哀相なものですね。」

そんな事を云はれると祐佐は泣き乍ら笑ひ度いやうな氣持にもなるのだつた。此青年の姉に失戀した彼は幾度こゝへ來てぼんやり腰を卸し、深い溜息を吐いては、こみあげて來るその涙を羽織の裏に隱した事か知れなかつた。

「僕も此處へはよく來たものですよ。」

「さうですかね。——僕は此處へ來て此景色を見ると私も何だか悲愴な嚴肅な氣持ちになつて祝福し度い心に充たされるんですよ。此町は實に苦しむだのですからね。恐らくこれ程精神的に苦しんだ土地は日本國中他にはないでせう。そして今でもなほです。變な言ひ草のやうですが僕は此町その物が何だか可哀相で仕方がないのです。」青年は一寸默つた。

「あの立山を見ると僕は實際ゴルゴタのカルヷル山を見るやうな敬虔な氣持ちになつて心が引しまらずにはゐられません。僕等もいづれは彼處へ引張られて行く時が來るのでせうが。——」

青年は右手に半ば諏訪山にかくれて兀鷹の頭のやうに見へる眞黑な丘をさしてかう云ふと、俯向き乍ら下駄の齒で土を掻いてゐた。

助作は言葉もなく黙つてゐた。そして臓物を見るやうにその黒い丘をちらりと見ると體を顫はせた。

彼は昔その丘に一度は伯父に連れられ、一度は母に連れられて、切支丹の虐殺を見に行つた事があつた。八つの時伯父に抱きあげられて黒山のやうな人の垣の頭越しにその刑場を見た時、十幾本かの十字架を遠巻きに燻し立てゝゐるその薪の火がその十字架に燃えうつり、燃えうつゝた火に肉に喰い込む程くゝりつけてある荒縄がぷつりと切れて、自分と同じ位の小さい子がその十字架から落ちて倒れ煙の中を小走りに走つて、隣りの十字架に素裸のまゝで縛りつけられて唇を噛み、眼を屹と天に向けてゐるその母親の處に駈け寄つて、泣き叫び乍らその胸に犇と抱きついた――それをちらりと見た時、彼は泣きも得ず只地團太を踏んで、なほ終り迄それを見續けやうとする伯父の頭髮を滅多矢鱈にむしつた。伯父は上氣して顏を眞赤にし、彼がグツと云つて一時息が吐けなかつた程荒々しく地びたに放りなげ、そして周圍の人を見乍ら「意氣地なし奴」と云つてとげ〳〵しく笑つた。放り出された彼は轉げ乍ら伯父の足を力一杯ピシヤ〳〵と撲つた。そして腹の底からの輕蔑と憎悪とを以て伯父を睨みつけ乍ら「歸らうよ！歸らうよ！」と火の如く叫んで聞かなかつた。

「此弱蟲奴が！だから來るなと云つたに！」伯父はかう云つてにく〳〵しげに少年を睨み乍らも彼を引つれて歸つた。

少年は生長し武士道によつて敎育された。「氣が弱い」「意氣地なし」と云ふ事は彼には此上ない恥辱に思はれて來た。彼は又熱心な忠君愛國主義者になつた。そして日本の國土を狙ふ夷狄の邪魔に憑かれた者。國賊が虐殺される事は當然な正しい制裁だと考へるやうになつた。彼は十字架を作つてはそれをぶち壞はす遊戯に快感を感じ、切支丹と指を差される者には石をぶつけた。そして、彼が十六の秋、丁度父が外國へ行つて留守であつたので、無理にいやがる母の手を引いて又虐殺を見に行つた。

云ふ事は實際神秘な感じのものですね。只夜になつたから明りをつけると云ふ以外に深い意味を持つてゐます。何だか涙ぐみ度いやうな、可哀いやうな、有難いやうな感じではありませんか。」

「本當に、いかにも地上らしいいゝ感じですね。」耐佐もかう云つた。

「地上らしい、實際です。だから愛さずにはゐられません。祈り度い心にならずにはゐられません。同じ明りでもあの星のいやに落ついた冷やかな無限の明りとの感じの違ひを御覽なさい。何と云ふ儚ない、いじらしい感じでせう。泡のやうに生じてはすぐ消えて行く此儚い人間と云ふものゝいかにも點け相な明りではありませんか。人間は本當に可哀相なものですね。」

そんな事を云はれると耐佐は泣き乍ら笑ひ度いやうな氣持にもなるのだつた。此青年の姉に失戀した彼は幾度こゝへ來てぼんやり腰を卸し、深い溜息を吐いては、こみあげて來るその涙を羽織の裏に隱した事か知れなかつた。

「僕も此處へはよく來たものですよ。」

「さうですかね。――僕は此處へ來て此景色を見ると毎も何だか悲愴な嚴肅な氣持ちになつて祝福し度い心に充たされるんですよ。此町は實に苦しむだのですからね。恐らくこれ程精神的に苦しんだ土地は日本國中他にはないでせう。そして今でもなほです。變な言ひ草のやうですが僕は此町その物が何だか可哀相で仕方がないのです。」青年は一寸默つた。

「あの立山を見ると僕は實際ゴルゴタのカルヷル山を見るやうな敬虔な氣持ちになつて心が引しまらずにはゐられません。僕等もいづれは彼處へ引張られて行く時が來るのでせうが。――」

青年は右手に半ば諏訪山にかくれて兀鷹の頭のやうに見へる眞黑な丘をさしてかう云ふと、俯向き乍ら下駄の歯で土を掘いてゐた。

裕佐は言葉もなく默つてゐた。そして臟物を見るやうにその黒い丘をちらりと見ると體を顫はせた。

彼は昔その丘に一度は伯父に連れられ、一度は母に連れられて、切支丹の虐殺を見に行つた事があつた。八つの時伯父に抱きあげられて黒山のやうな人の垣の頭越しにその刑場を見た時、十幾本かの十字架を遠卷きに燻し立てゝゐるその薪の火がその十字架に燃えうつり、燃えうつゝた火に肉に喰い込む程くゝりつけてある荒繩がぷつりと切れて、自分と同じ位の小さい子がその十字架から落ちて倒れ、煙の中を小走りに走つて、隣りの十字架に素裸のまゝで縛りつけられて唇を噛み、眼を屹と天に向けてゐるその母親の處に駈け寄つて、泣き叫び乍らその胸に犇と抱きついた――それをちらりと見た時、彼は泣きも得ず只地團太を踏んで、なほ終り迄それを見續けやうとする伯父の頭髮を滅多矢鱈にむしつた。伯父は上氣して顏を眞赤にし、彼がグツと云つて一時息が吐けなかつた程荒々しく地びたに放りなげ、そして周圍の人を見乍ら「意氣地なし奴」と云つてとげ／＼しく笑つた。放り出された彼は轉げ乍ら伯父の足を力一杯ピシヤ／＼と撲つた。そして腹の底からの輕蔑と憎惡とを以て伯父を睨みつけ乍ら「歸らうよ！歸らうよ！」と火の如く叫んで聞かなかつた。

「此弱蟲奴が！だから來るなと云つたに！」伯父はかう云つてにく／＼しげに少年を睨み乍らも彼を引つれて歸つた。

少年は生長し武士道によつて教育された。「氣が弱い」「意氣地なし」と云ふ事は彼には此上ない恥辱に思はれて來た。彼は又熱心な忠君愛國主義者になつた。そして日本の國土を狙ふ夷狄の惡魔に憑かれた者。國賊が虐殺される事は當然な正しい制裁だと考へるやうになつた。彼は十字架を作つてはそれをぶち壞はす遊戯に快感を感じ、切支丹と指を差される者には石をぶつけた。そして、彼が十六の秋、丁度父が外國へ行つて留守であつたので、無理にいやがる母の手を引いて又虐殺を見に行つた。

その時の虐殺ぶりは、彼等がそこへの途中腦貧血を起して頭を抱え乍ら戻り來る何人かに行き逢つたほど又ひどいものであつた。併しそれはなほ彼の病的な好奇心を戰慄させ刺戟した。「今日こそは見てやるぞ、參つてはやるまい。」彼は心の中で幾度もかう自分を勵ました。

濛々と煙が立ち昇つてゐる刑場に近づくと火葬場の煙の如き異臭が風に送られて來る。掃き清められた廣い刑場の奥手には白衣を着た女達がずらりと髮の毛を木の釘にくゝりつけられた儘だらんとぶらさげられてゐる。彼等は體の重みの苦しい苦痛の爲めに閉じた眼がつるしあがり、顏は蒼い土色をし、そしてその引つつた髮の毛根からは血がしたゝつてゐる。中には自分の重みの上になほその子供を帶にくゝりつけ垂れ下げられてゐる。そしてそれを遲徐に焚木の煙がじり〳〵と燻してゐる。

彼等と向き合にその夫と、父と、兄弟と、外人のばてれん達とが並んで座らせられてゐる。或る者は竹の鋸で少しづゝ徐々とそのさし延べた頸背をひかれてゐる。ばてれんの前には叉斧が置かれ毒を混ぜた硫黄がぐら〳〵煮つめられてゐるその蒸發する毒氣は凡て管によつてその男の口に當てはめられ、鼻は塞がれてゐる。男はむせる事も、咳する事も出來ず、苦悶したまゝ顏は見る〳〵眞黄色になり、どす黑い土色になり、そして皮膚がばさ〳〵と剝げ落ちて行くのである。凡てそれらは拷問である。刑者にとつて殺戮は欲する處ではない。被刑者がもしその苦痛に堪えず宗門を「轉ぶ」と一言云ふならば彼等はすぐその場に刑をとかれるのである。併し、信徒の強情が不退轉であればある丈け拷問の殘虐は工夫を進めたのである。然もいかなる死苦の中にも彼等は「舌を嚙み切つて自ら死ぬるやうな僞造者に對する罪」は許されてゐないのである。

「ゼズス・マリヤ！ゼズス・マリヤ！」

「キリエ・レンゾ、キリエ・レンゾ」
「アベ・マリヤ・アーメン・デウス！」
女達は無理にむき開いた眼で天を仰ぎ乍ら唱へた。
「パライゾは確かだ。光榮な一つ時を忍べ！」
「身を殺して靈を殺す事の出來ぬ者を怖れるな。アーメン！」
信者達は或ひは自らを或は他を勵ましてから云つた。そして拷問の中に一人々々その地上の生命を「神の御手に還し」に行つた。
裕佐は、併しその鋸びきを見た譯ではなかつた。役人がその大きな竹の鋸を持つて現はれた時、彼はもう既にひどい腦貧血を起してゐた。彼はそれでも幾度か空を見たり、霜枯の草を見たり又外つぽの丘の樹木や家に眼を向けて心をまぎらし、氣を確かに持たうと努めた。「國賊だ。いゝ氣味なんだ。」彼は又強いてから呟いても見た。そして事實みづみづしい女の肉體に對する殘酷な苛み方は彼の性慾に異樣な苦しい挑發を促してゐたのであつた。彼はその事に驚き羞じ乍らも一方その殘忍な肉感を自ら誇張し、煽動しやうと努力してゐた。しかし或る女の腰紐にその肥つた乳飮兒が縊れ乍らくゝりつけられるのを見た時、彼は遂に我を忘れて叫び、そして後ろにゐる男に倒れかゝつた事を自ら知らなかつた。――そして彼は家へ歸つても寢かされてゐた。
その時以來彼は陰欝な「默りん坊」と呼ばれる青年になつた。
彼は人間の精神と云ふものゝ力を眼のあたり見た。人間の思想、信仰、救はれやうとする願望、それのいかに怖ろべく強く、動かし難いものであるかを見た。人が肉體によつて生きてゐるのでなく、實に精神によつて生きてゐるもので

ある事、精神は生死よりも強いものである事を現實に見た。肉體としては到底堪えられやう筈のない事を、人は精神の故に敢然と堪えるのみでなく、却つてこれを望み、喜んでうけるのである。「精神一到何事か成らざらん」と云ふ事を彼は小さい時から聞かされもし、信じてもゐた。しかしそれがかく迄實際に怖るべきものであるとは彼は決して想像も出來なかつたのであつた。――彼は本當にそれ迄知らずにゐた或る世界の前に驚き、打ちのめされたのであつた。――

そして其の事は彼に勇氣と深い悲しみとを與へた

かく迄人を怖るべく強きものにする力ある宗門には何か自分の全く知らない或る非常な物があるにちがいないと彼は疑い出した。人々が「國賊」と呼ぶ「彼等」が事實これにちがひないとしてもこれだからと云つて憎み排斥しきる事の出來ぬ何かしら鋭い威力が彼等の中に彼は感じない譯には行かなくなつた。一體その樣な不純な野心からあれ程の決心と威力とが出得るものであらうか何方が正しいのか？それはとも角としても彼は何だかその「彼等」に好意と一種の尊敬を感じないではゐられなくなつた。そして自分が空虚な詰らぬ者に思はれて來た。

併し一方彼は又そこに他の疑念をも抱かざるを得なかつた。なぜあれほど迄の殘虐を忍んでも宗門を轉んではならないのか。轉んだ者は仲間から排斥されるのか。人間の魂が救はれると云ふ事の爲にはそれほどの肉體の犧牲がどうしても必要なのであらうか。天地はもつと悠々としたものである其天地の中に人間が生かされてゐる處にはもつと自由と、赦しとがあつてい丶譯である氣がする。さうでないとすれば人間にその犧牲にすべき肉體を態々與へた者は餘りに無慈悲である。「恐らく一方が不正な爲めだ。基督教が殘酷なのではない。」と彼は考へた。しかしさう考へても何だか基督は嚴酷にすぎる人のやうに思はれた。その宗門は餘りに窮屈な、苛酷なものに思はれた。此世にはもつと此世に調和した自由な宗教があつてい丶譯ではないか。――そんな氣がした。

彼は生長し、基督教に對する自分の誤解を覺り、そして良心が苦しむでゐた時、此青年の姉に戀をした。
「貴方は天主様とその御子のきりしと様をお信じなさるか。」
と戀人の父は訊いた。
「信じません。——まだ。」
「それでは…」と父は宣言した。「不信徒の方との婚約は許されてゐませんから。」
そして彼は失戀した。
彼は失戀し、そして藝術を得た。「以技藝天爲我妻」彼は自分の室の襖にかう太く書いた。

八

「此處にも高札が樹つてゐますね。あれを見て平氣ですか。」
祐佐は此切支丹とのひそ〳〵話を人に見られて疑はれはしないかと、つい何度も四邊を見廻はしては心に羞じるのであつた。それ故彼は石段の上り口に突つ立てられてゐる禁制の高札を指して態とかう訊いた。
「平氣ですよ。僕はもう。慣れてゐますから。」
と青年は答へた。そして彼の意を察したものか「しかし遅くなりましたね。僕はもう歸らなくてはなりませんが。」
かう云つて彼は立ち上ると改めて注意深く周圍を見廻はした。
「實は先刻貴方をお招きして見たのは、今夜は少し特別な譯があるからなんです。貴方にも一度見せ度い人がゐるのです。」

「僕に見せ度い人ですつて。」

「え〻。或る長老です。八年ぶりで天草から脱走して來られたんです。それは立派な人ですよ。」

「もしかしたら行くかも知れませんが。——何時どこでですか。」

青年は彼の耳に或る事を私語きそして去つた

「誰が行くものか。」祐佐はその後ろ姿を見送り乍ら暗い心に呟いた。彼は青年の自分に對する熱い厚意と同情に感じないではゐられなかつた。吉三郎はたしかに彼の失戀に同情して、彼が自暴自棄に陷る事を怖れ、強いて彼に希望を持たせやうとして、彼としては珍らしくいろ／＼な「慰め言」を云つたのである事も祐佐には分つてゐた。しか祐佐が何よりも彼から聞く事を求めてゐる唯一の事「私の姉は貴方を愛してゐます。そして貴方々の結婚を私はきつと纒めるでせう。」其事を青年は云はなかつたのである。その一言が聞けない以上、青年の千百の慰め言や、勇氣づけの感想は、彼にとつて實に煩さい無駄口であるに止まらず、更に彼の忘れかけてゐる傷口を新しく掻き破る丈けの事である。

「あの馬鹿奴。長老が俺にとつて何だ。」

彼はその愛する青年の事をかう云つてステッキで石を打ち、百合の花を叩き捨てやうとして捨て得ず、掌の中に握りつぶし、そして立ち上つた。

「忘れやう！彼處へ行きやい〻んだ！」

彼は頭を打ち振り乍らかう呟いて、石段の降り口の方に向つた時、後ろから青年と行き違ひに來る男の聲を聞いた。

「何でもな、男には皆「ノ」の字が附くんぢや。ジワンノ。カラノ。ミギリノ。抔と云ふ風にな。女子（おなご）ぢやつたらジワンナ。カラナ。イザベリナと云ふやうに「ナ」が附くんぢや。」

それは聞いた事のある聲だつた。祐佐はハツとして、思はず立ち止まつた。その瞬間その男は祐佐に追ひつき乍ら

「おや、荻原ぢやないか。」と聲をかけた。

「さうだ。荻原だ。君は…」

「わしぢや。分らんかね。富井ぢやよ。」

「分つてゐるくせに、とぼけるな」と云ふやうに男は云つた。そして頭巾を取つた。

「わしは今な、おぬしの家へ行つたのぢやよ。おぬしは近頃毎日のやうに家を明かすと云つて伯母さんはこぼしてじやつたぜ。」孫四郎は歯の抜けた口を開いて聲もなく笑ひ乍ら云つた。「御心配なさるな。あの仁は堅いでと、わしは云つて來たぢや。はつは。」

「だが變な處で逢つたな。どこへ。今頃。」

彼は又かう云ひ乍ら、祐佐の身なりをわざとらしくじろじろと凝視めて附け足した。「どうしたね。えらう伊達ななりをしてゐるぢやないか。わしの處へ見える時とは全で別人のなりぢや。」

そして彼は又意味あり氣に前の方を顎でしやくつて見せた。その小路を行けば丸山へ出ると云ふ事を諷するやうに。

「丸山へ行くのさ。」と祐佐は云つた。「僕が丸山へ行くと云ふ事が君にはそんなに興味があるのかね。」

「さうさね、清廉高潔な君子然たる仁がびくびくものでこつそり悪所通ひをやつてゐる處を見つけちまふなぞはと代人の面白がることつちやてな。へ、へ、さもしいもんで。」

祐佐は一言も云はず、すぐ其場で此男と別れやうかと思つた。孫四郎が自分を僞善者と思ひ、嘘吐きと思つてゐる事は彼には分りすぎてゐた。しかし孫四郎の前で、又誰の前でも「俺は遊ばない。女にふれた事はない」とは彼は一度も

云つた事はないのである。「俺は遊ばない」と稱して、蔭で遊ぶのは僞善であらう。しかし、恥を知らぬ。自堕落な連中が、どこ迄も只道樂を道樂として臆面もなく下等に馬鹿話を吹聽し合つてゐる時、一人沈默を守るのは僞瞞でもなければ衒る事でもない。懺悔や告白はひそかに自分の神の前に於てのみ神妙に爲すべき事であつて、人前で、殊に孫四郎如き者の前で輕々しく喋々すべき事柄ではない。少くとも打ち明けるべき場合に、打ちあけるべき相手にならば自分は決して陰日向を好む男ではない。――と裕佐は思つてゐた。その心持ちが徹底も分らずに「こんな何喰はぬ顔してゐて……と簡單にこそ〳〵者ときめてゐる孫四郎の心事が彼には此上もなく不愉快だつたのである。

「それやそうと、わしは今一寸その事でおぬしを訪ねたのだがな。」と孫四郎は急に態とらしく調子を改めて云ひ出した。

「おぬしの處に先夜澤野と云ふ仁が行きやせなんだか。」

「澤野。あゝ、來た相だけれど、俺は逢はなんだ。」

「左樣か。おぬしあの仁を知らんかな。元とキリシトフア・フエレラと云つてゐた天國の門番さんぢやが。」

「そうして今では地獄の番犬になり下つた男ぢやないか。」

「はゝ。まあそんな處かも知れぬ。あの踏繪を發明したのはあの男ぢやからな。」

「あの發明も最初にはえらい效き目のあつたもんぢやが。」と連れの男が云つた。「もう此頃ぢや信從者は皆えらうなり居つたで。中々あんな事位ぢや手にはおへんて。」

「いや、それでもな、滿更役に立たぬでもないさ。何せ、今迄んとは紙ぢやからな。大勢が踏んで踏つけて汚ないボロ紙になつちまふと、もうゼズもマルマもあつたもんぢやないわ。何が書いてあるかてんで分りやせんのだからそれを踏んだがさうひどく氣が咎めもせんのぢや。只の反古紙を踏むと思へばな。」

「本當にえらい發明だ。」と祐佐は云つた。「そしてその犬を僕に紹介してくれたのは君なんかね。」
「まあ紹介と云ふ譯でもないが。何せさう云ふ譯で、今迄の紙の踏繪ぢや一向役に立たぬで、何か彫り物で、いつ迄も
その有り難いお像がはつきり殘るやうな物を作る工人はなからうかとあの男がわしの處へ訊ねに來たもんぢや。」
「それで僕に思ひ當つてくれた譯か。」
「さうぢや。わしの知つてゐる彫物師は他にもあるが、そこが親友の間柄ぢや。へへ。おぬしの專門は南蠻鑄物ぢやが
金物なら木彫よりはなほ磨滅する憂いもなしな。わしがさう云つて話すとあの唐人先生、日本にさう云ふ鑄物師がある
とは知らなんだ、鑄物で出來るなら素よりそれに越した事はないと云ふて大喜びさ。どうぢや。一つやつて見んかね。
儲けもんぢやぜ。」
「ふむ。そしてそれを君や世間の有象無象に踏んづけさせてくれやうと云ふんだね。――有り難う。僕は御免蒙るよ。」
祐佐はさう云つて、挨拶もせず不意に横道へ曲つた。
しかし一人になるが否や、どうしてこんな亂暴な別れ方をしたのかと彼は悔むのであつた。なぜか彼は、常々厚意を
持つてゐた孫四郎の細君の姿をふと考へた。そして彼等夫婦の仲と、寂しい愛とを思つた時急に哀れな氣がして來た。
もし自分の憤りが單にひねくれた邪推にすぎなかつたとしたら本當に氣の毒な事をした、餘りに大人氣なかつたと思つ
た。併し彼はなほ憤りを鎭める事は出來なかつた。「そんな事はない。彼奴はその位のいたづらはし度がる奴だ。もう
彼奴とは愈々絶交だ。」彼は强ゐて自分にかう云い乍ら苦い顏をして妓樓ののれんをくぐつた。

女はすぐ出ては來なかつた。物悲しいほどの寂しさに滅入つてゐた裕佐は、しかしその女の室に入つて、見慣れたいろいろのものを見ると次第に心持が甘く明るく變つて行くのであつた。彼はごろんと肱枕を突き、何氣なく欄間の額を見てゐた。誰が書いたものか南畫風な淡彩で、白髪な支那人と若い顏の遊女とが「枕引き」をして遊んでゐる圖である。繪は飄逸を狙つてやゝ俗になつてゐるが下手ではない。それに「木まくらの角は丸山たをやめに心ひかるゝみつうちの髮」と云ふ狂歌の讃がしてある。

「呑氣な奴だな。」と彼は思つた。しかし今の彼にはそれが少しもいやではなく、却つてそんなものを見てゐる事でくさくさした氣持がのんびりと柔げられて行く事が快かつた。

しかしその途端、突然襖があき、いつにもまして絢爛た裝ひをした君香が這入つて來るが否や、「貴方。お檢べよ。」と低く鋭く云つた。

裕佐は一寸ぎくりとした。先刻變に大膽な心持ちで孫四郎の連の前でいろいろな事を口走つた事を想い出したのであつた。然し彼は横になつた儘自分の前に生人形の如く突つ立つてゐる女を眺め乍ら云つた。「何だ。冗談だらう。」

「嘘だと思ふなら之を御覧なさいよ!」と女は眞劍に云つた。「貴方を探訪ねて來たのよ。」そして彼女は奉行所の役人丈けが持つてゐる大きな名札を見せた。

「はゝ。驚かしやがるな、犬奴。」これを見ると裕佐は笑つた。「だがどうして奴、俺が此處にゐる事を嗅ぎつけやがつたのかな。」

「それが犬だからよ。」と女はやゝ安心したらしく云つた。「貴方、此犬を知つてるの?」

「いや、まだ逢つた事はない。」

「貴方、大變な者と關係が出來ちやつたのね。これは貴方、あの仲間からユダと云はれてゐる轉びばてれんだわ。――妾を檢べに來たのかしら。」

「さうかも知れぬ。とに角逢つてやるから此處へ通せよ。」

「妾の事だつたら平氣よ。あゝ屹度さうよ。白樓の犬が犬同士密告したんだわ。ほつほ。面白い！　妾からかつてやらう。」そして女は起つて行つた。

再び襖があき、二人の男が這入つて來た。一人は七尺の鴨居を頭を下げてくぐる程の大男の異國人であり、一人は、ずんぐりとしたその供の下役であつた。大男は不器用に和服の羽織袴を穿き、四邊を壓する程の悠揚さでギゴチなくそこに座はると輕く頭を下げた。

「御遊興のお邪魔をして濟みません。」と下役は禮をし乍らいかつい調子で云つた。「此澤野さんは日本語にはもうカナリ堪能なんですが、しかし萬一の不便があつてはと云ふんで、私が幾分通譯の意味でお伴に上つた譯です。」

「先夜は宅へお入で下すつた相で失禮しました。」萩佐は赤面し乍らも落ちついて云つた。彼は自分がかう云ふ場所へ來てゐる時、それを狙つてわざわざ冷やかしのやうに訪ねて來る此役人の心に不愉快を感じてゐた。しかしさう云ふ反抗的な氣持ちで此男に逢ふが否や、彼の氣持はぐらりと變つて、落ちついてゐる以上に此異國人に對して何となく一種の不惑さを直覺的に感じたのであつた。

實際此巨大な異國人の感じは一種異樣な驚くべきものであつた。室に這入つて來る處を一眼見た時、彼は癩病人に逢つた如くハツとして、思はず顏を背向けた程無氣味であつた。頰のこけた蒼白い顏の上部、兩の瞼と額とは大火傷の痕の如く赤黑く光つてひつつれてゐる。そして眉間と、左右の米嚙みの處に燒け火箸で突いた程の穴の痕が殘つてゐるの

である。それが何を語るものか祐佐には忽ち覺られるのであつた。

切支丹の拷問に「囚徒」を逆吊りにして、その頭の鬱血と、胸を臓腑が壓迫する事の爲めに、口からは素より、陰には眼と鼻とから迄出血して、大抵七八時間の「早さ」で往生するのを妨ぐ爲めに、眉間と米嚙みとに小さい穴をほがし、そこから鬱血をしたたらすことによつて死を長びかす仕方のある事を彼は聞いてゐた。此ばてれんのフエレラは嘗てその拷問には堪えたのである。しかし更に一層殘酷な拷問、——溫泉嶽の沸騰する熱湯の中に逆吊りに浸たされた時、彼は遂に夢中で轉宗を叫んだのであつた。轉宗を一度叫んだ以上彼はもう「天國とは縁が切れた」のである。而もなほその嚴しい監視と、堪え難い迫害とは續くのである。かくて彼は思ひきつて自己に對する自棄な反逆から、奉行に身を賣り、切支丹探しの犬となり、踏繪の法を案出して、奉行の歡心を得やうとした。「どう世天國に叛いた上は地獄の鬼となれ。」彼はさう云ふ捨て鉢な氣持ちになつたのであつた。

「富井さんからもうお聞きになつたかも知れませんが……」

フエレラはその硫黄の灰のやうな色をした顋髯を逆に撫でながら横を向いてからボツボツ云つた。「貴方に一つお賴みしたい事がありまして。」

人の顏をヂロヂロと偸み見はするが、決して眞面には見ず、人に顏を見られる事を憚したやうな風で口籠る如く丁寧な言葉をつかふ此男の様を見ると、假令それ此が男の「手」かと疑つても祐佐は苦しい程氣の毒になるのだつた。

「えゝ、分つてゐます。聞きました。」祐佐は急いで云つた。「踏繪の事でせう。」

「さうです。その事です。」フエレラは始めてほゝ笑みを見せて云つた。「お願ひ出來ますでせうか。」

その時君香が自分で茶を持つてそこへ這入つて來た。そして二人を見て、「入らつしやい。今晩は。」とにつこり微

笑み乍ら云つて茶を注いだ。

「實は少し急がれてゐますんで……」と下役が口を切つた。「と云ふのは、御存じの通り、踏繪の檢べは毎年正月の末に行はれる事に定まつてゐるんで、なるべくならば來年のそれに間に合せたいと思ふんです。それで貴方がもし幸にそれを承諾して下さるとすると、一刻も早くお願ひしておく方がいゝと考へたんで、實はこんなお席へ迄出しやばりたくはなかつたんですが――」

「へえ。さう？」君香は茶化したやうな調子で横から云い出した。「だけどどうして此人が妾のお客である事が貴方方にお分りになつたんですの？此人はまだそれやこそ／＼の坊つちやんで、妾の處へなんぞ通つてる事をどんな親友にだつて打ちあけられる人ぢやないんですのにね。」

「私達は今そこで偶然富井さんに行き逢つたのです。そして隨分そこらの樓を訪ねたのです。」とフエレラは云つた。

「富井さん？――あゝ、あのいやな奴。」と女は云つた。そしてフエレラの顏をじつと見入り乍らつゞけた。

「異人さん。貴方、いゝお聲ね。說教でもなすつたらさぞよく通るでせうね。だけど――貴方、隨分苦勞なすつたでしよ？一通りならない煩悶をなすつたわね。そして今でもまだ貴方のお顏にはちやんとさう書いてあるわ。いゝえ妾、苦勞人が好きなんです。呑氣人は嫌いよ。」

「ふむ。さう見へる筈です。此顏ですから。」とフエレラは冷やかされたと取つたらしく苦笑した。「私怖いでせう。」

「えゝ、子供は泣くでせうね。ほゝ。だけど凡そ怖いのとは反對よ。貴方、昔はさぞ立派だつたでせうね。ほんとにどんなに立派だつたでせう。今だつて貴方が其處に座つてゐらつしやると何だか他の人達が貧弱で、見すぼらしくつて氣の毒なやうですわ。だけど、」と君香は小頸をかしげた「貴方のお顏には何か肝心なもの――何と云つたらいゝか知ら――ま

あ命の光り水氣と云つたやうなものがすつかり失せて了つたわね。その立派なお鼻から兩方の口許へかけてのいつた皺なんぞは昔はなかつたもんにちがいないわ。きつと後で出來たものだわ。さうでせう？妾、之れでも人の心を見拔く事は名人なのよ。だけど唯一人、どうしても氣心の知れない人があるの。それは此人、」彼女はから云つて新佐を指した。

「ふむ。」新佐は赤面し苦々しくから云つて横を向いた。

「ふむ、ですつてさ。あの口の端を一寸引つ吊つた處を見て下さいよ。あれが此人の唯一のお得意な皮肉の表情なんですの。「ふむ」位で人をごまかさうたつてごまかされるやうな妾ぢないわ。妾から云ふ狡るい人は嫌い。」

さうして彼女はその眉を上げ、下眼をつかうやうにして頤を出した。

「澤野さん、之から時々妾の處に來て上さらない？　おいや？　もう貴方、自由なんでしよ？　こんた街をうろついてゐて富井さんに逢ふ位なんだから。妾あなたの淋しい氣の引けたやうな處を見ると何だか涙ぐみ相になつてよ。貴方又體が馬鹿に巨きいからなほその寂しさが眼につくんですわ。恰度不幸な人の住んでゐる家が大きくて立派であればあるほど哀れな感じが深いやうなもんだわ。貴方がいくら威張つて、すごい眼付きをして歩いたつて矢つ張り駄目よ。後ろらか見ると貴方はまるで死刑囚のやうよ。どうしてゞせう。貴方は貴方の今迄經て來た煩悶丈けでも尊敬される資格がゐるのに。だけど、妾が占ふ處によると―」彼女は顏を横にねせて下から見るやうにして云つた。「貴方はきつと終りを完ふしない方だわね。貴方はきつと病氣ぢや死なない方だわ。」

「さう思いますか。」

默然としてゐたフエレラはその蒼白な顏に異樣な赭味をさし、濁つた眼に無氣味な光りを湛へて女を見た。

「おゝ美しい顏。」と女は思はず云つた。「あラ、もう消えちまつた。暗い空の中にひらめく稻妻のやうだつたわ。」そし

て彼女は立ち上り乍らやゝ亂れてゐた裾をそろへた。「妾、今の貴方の顏に惚れちまつたわ。本當に。夢の中で見た事のある惡魔の顏にどこか似てゐたわ。それよりも弱々しかつたけれど。貴方本當に來て頂戴ね。妾全身の愛で夢中に可哀相がる事の出來る人に飢へてゐるんですの。妾自分が愛されやうなんて氣はもう全で微塵もなくつてよ。だけど妾心から可哀相だと云ふ氣にならなくつちや本當に愛する事は出來ないんですもの。だからかう云ふ―」と萠佐を指し乍ら「溫和し相でゐて心底の骨の強い人には妾決して惚れる事は出來ないの。此人はこんな人の善さ相な顏してゐて心はそれは氷のやうにきついんですからね。ほゝ、どうもお八釜しふ。」

　そして女は去つた。

「如何でせう。今の話は。」

間の拔けたやうな沈默を破つて、下役は眼で笑い乍らかう云つた。

「折角ですが――多分お斷りする事になるでせう。」

むつつりしてゐた萠佐は下役の冷やかすやうな顏をぽかんと見てゐた後で思い出したやうにかう云つた。

「どうしてゞすか。」

「第一に材料が今の僕の氣持ちに全で向かないからです。それに自分の作物を人の下駄にする氣もしませんからね、」

「下駄。はゝ、しかし鑄物でしたら、同じ物が幾つも作れるんぢやないですか。だから其中の幾個かは踏台につかはれても、他に別のを殘しておけるでせう。」

「しかし幾つ作つた處でどれも自分の子である事に變りはありませんからね。それに又たとへ作り度い氣があつたにした處で、僕には碌なものを造れる自信もないのですよ。」

「何も作品としてさう非常な傑作でなくともいゝのです。只本當の信者がいくら自分をごまかさうと思つてもつい氣が咎めてそれを踏みにくゝなる丈けの一種の神璽さ、——信者にとつての犯し難い威嚴と云つたやうなものがそこに現はれてさへゐればよいので、その程度に作つて頂ければ御禮は奉行から相當に差し上げられる事になつてゐるのです。」

「私達は」とフエレラが云つた。「無暗に人を疑つて詐りゐる役人のやうに思はれてゐますが、そして又信者達からはさう思はれるのが當然ですが、貴方々に迄そんな疑ひの謎をかける者では決してないのです。此點は安心して下さい。」

「考えては見ませう。しかし作る氣がしないものは何とも仕方がありませんからね。」

役人達は十中九迄諦める事になつて歸つて行つた。

一〇

祐佐が其夜妓樓を出たのは子の刻に近かつた。頭はズキ〻〻と痛んでほてり、體は疲れてゐた。雪もよいの闇空から吹く新鮮な冷風が心地よく鬢や顏に當つても枯れ果てた心の重苦しさはなほらなかつた。自分は一生結局之と云ふ何の仕事もせず、徒らに生の悪夢にひたつて平凡に死んで行く運命の者ではなからうか。併しその事は案外此頃の彼には簡單に諦められる事のやうな氣がしてゐたのだつた。仕事が結局何だ。事業本位で齷齪と膏汗を流して生き、且つ死ぬる事が、與へられた束の間の生のうちに次から次と美しき幻を追ひ、充實してそれに酔いながら死ぬる享樂本位の生活よりも果して どれ丈け人生本來の意義に叶つた事か、それが第一疑問である。事業、それも畢竟或る享樂を目的とするものにすぎぬとすれば、直接その結局の目的の爲に生きる事が現世に於て輕蔑され、手段たる事業の爲めに生きる事が尊敬されやうと、それが死と云ふ絕對者の前にどれ丈けの根本的差別をなすものであらう。畢竟只「自分の氣のまぎらし方

の區別」に過ぎなくはないか。そんな氣が近頃の彼には屢々眞面目に起るのであつた。「かと云つてその自分の享樂の爲めに他人が眼に見へて不幸になり、多くの運命が狂はせられる事が事實に於て自己の享樂の障りとなり、苦となるとするならば、自己の享樂が他人の享樂と一致する處に生ずる更に深い調和的な享樂の欲を滿たす法は何であるか?」彼はさう考えて、「それはね、貴方が矢つ張り識らず／＼神を信じてゐるからの事ですよ。」と云つた吉三郎の言葉を思い出した。そして自分にとつて享樂が享樂となつてゐたのは君香が自分を眞に愛してゐると思つてゐたからの事で、それは又自分が矢張り何かの事業によつて自己を不滅化する處に得られる幸福の意識を欲してゐ乍ら、その事業が自分に覺束ない事を思ふが故に、その空虚をまぎらさうとして無理にあんな空な享樂主義を肯定したかつたからの事だと思つた。「もしあの女が…俺が全心をこめて愛してゐる心算のあの女が」と彼は更に考えた。「一緒に死なう」と俺に促したら、「よし死なう」と其時俺は云ふではあらうが、いざとなつたら矢張り決して死にはしないだらう、そしてあの女の死んで行く樣を案外冷然と見てゐるかも知れない。あの女が毎も俺に「實がない。狡るい。」と云つたり、「此人はこんな人の善さ相な溫和しい顏してゐて、心はそれは氷のやうにきついんですからね。」と云つたりしたのは皆本當だ。」しかしさう思ふと彼は自分が厭になると共に可哀相になり、腹が立つて來た。

「あいつだつて……」と彼は思つた。「俺が思つてゐたやうな女ではない。せめてそれ丈けが俺の意識の上での生活の望みでもあり慰安でもあるあの女の誠は畢竟「遊び女の誠」にすぎなくて、それを身うけが出來る抔と夢みてゐた俺は矢張りお芽出度い坊つちやんに過ぎなかつたのだらうか。」

君香が始め惡く云つてゐたフエレラを一眼見るが否や急に態度が變り、哀憐の情を起したらしい其心理は彼には合點も行き、氣持ちよくも思へたのであつた。しかも君香が冗談のやうに皮肉のやうに饒舌つた言葉の中にはとしも只笑つ

ては聞き流せない實感ら多くしいものがあつた事を彼は疑へなかつた。彼女の云つた事はどこ迄が眞實で、どこ迄が嘘なのか彼にはさつぱり見當がつかなかつた。フェレラは彼女の昔の情人にでも似てゐて、それを「夢に見た事のある惡魔」なぞとごまかしたのではなからうか。それは自分の好きなものを態と譏り内心嬉いたものを故らに褒める遊び女らしい一つの技巧に過ぎなかつたであらうか。或は唯單に嘲弄であつたのであらうか。

「疑つてもゐないくせに疑つたやうな顏して實のある處を見せやうつたつて其手は喰はなくつてよ。」と彼女は後で云つた。「嘘つき。あれつぽちの事で苦しめる柄でもないのに。」とも云つた。「無論よ。妾、貴方を思ふ存分苦しめて上げ度いわ。貴方はもつと苦しまされる必要があるのよ。だけど妾は甘いからそれが出來ないのよ。あゝ妾貴方を本當に苦しめてやり度い。それは貴方を愛するからよ。貴方の爲めを思ふからよ！、」彼女は又こんな事も云つた。

彼はそれらのことを想い出して、泣き乍ら笑い喚き度いやうな氣がした。「あゝもしあいつ迄が俺を見捨てたら、あいつの愛がまつたく信じられなくなつたら?……」

ふと彼は吉三郎の明るい顏を思い出した。そして「あいつは幸福だな」と呟いた。

「オイ、自殺に寒いと思つたら其筈だ。雪だぜ。」と一人の鍬のやうなものを擔だ男が云つた。「此土地に晩春の中に雪が降るなんて、陽氣の奴、氣が違やがつたな。」

「本當に。俺ア霜だとばつかり思つてたに。」ともう一人の男が云つた。「なにぢき上つちまわアな、一寸たア積るめえよ。」「なるほど雪だ。」トボ々々と暗い坂道を上つてゐた莊佐は始めて氣がついたやうにかう呟いて、墨のやうな重い空を見上げた。チラ〳〵と大きな雪の片々が顏や肩にふりかゝるのが彼には快かつた。

「お前、金槌を持つて來たか。」又一方の男が訊いた。

「そんなもの持つて來るもんかな、馬鹿臭え、」ともう一人が答へた。

「だがまア、行く丈けは行くだ。行つて見て誰も來てなかつたら歸るのよ。堀つて見ましたが矢つ張り犬の死骸でしたつて云やア濟むんだからな。」

「本當に惡い惡戯をしやがるな。十字架をおつ樹つといて猫の死骸をほじくらせやがる。それつてえも役人共が死んじまつた者の棺桶をほじくり返へして迄檢べるやうなしつつこいマネをしやがるからだ。」

「何も死んだ者を檢べる譯ぢやねえ。それで後に生き殘つてる自家の者を檢べるんさ、だけど又片つ方も片つ方だ。死骸の頭へ頭陀袋位掛けられたからつて御苦勞さんに土ん中の棺桶の蓋をひつぺがして迄外さなくつたつてよさ相なもんぢやねえか。頭陀袋一つで亡者が浮ばれねえつて譯でもあるめえに、」

「兩方が意地の張りつくらをしてけつかるんだ。お蔭げでこつちとら迄こんな寒ふりの夜更けにこき使はせやがつて。だが來たからにや只ぢや歸らねえて、」

こんな事を彼等はブツ〳〵云い乍らや、千鳥足で祐佐の前を歩いて行つた。

祐佐は自家へ歸る氣はなくなつてゐた。彼は今何よりも眠りを求めてゐた。一切を忘却の川に流し捨て、翌朝の日光と共に自己を生れ變つた如く新鮮な、生き〳〵した者にして與れる眠りの「救ひ」を求めてゐた。それが得られ相に思へるならすぐにも彼は飛んで歸り度かつた。しかし歸つた處でその救ひは到底得られ相もないのみか、只果てしない覺醒の闇になほも身を任し續けるよりない事は眼に見へてゐた。其時二人の勞働者の會話が計らずも彼の好奇心と、望みとを確と捕へたのであつた。

「よし、あいつ等に蹤いて行つて見やう。」

そして彼は何かを豫感する如く、彼等の後に默然と從つた。

「オイ、道を間違えやしねえか。墓地はこつちぢやねえぜ、」

「薄野呂奴。もうあそこに墓が見へてるぢやねえか。袈裟を着た坊主が蹲んでるやうな格恰をしてよ。」

「なるほど、近道をしたんだな。——ヤ、人がゐるぞ。何か白いものが動いてるぢやねえか。」

「ぼけちやいけねえぜ。オイ。手前先刻の酒ですつかりぼけちまやがつたな。あれや、杉の木に雪がつもつたのが風で搖れてるんぢやねえか。」

「さうぢやねえよ。や、提灯かな。はゝ。なるほどあそこに新しい塚があらア。あれだな、うめえ〳〵。」

「何だ、手前掘るつもりなんか。」

「わけはねえや。どうせ泥をぶつかけてあるばかりなんだからな。それに棺桶だつて直ぐ蓋ア開けられるやうに釘を外へ打ち拔いてあるんだからひつぺがすなア造作はねえや。」

「ふむ。それや自家の者が頭陀袋を取り外す爲めのこんだ。もう今頃行つたつてちやんと本式に釘づけにしちまつてあらアな。見ろ。梟めがホウ〻〻と笑つてけつから。」

「釘づけだらうが粕づけだらうが構ふ事アねえて。そいつをぶつこはしや、銀の十字架かメダイが取れやうつてもんだ。うすれやそいつを潰ぶして錢にした上に褒美の酒手が貰へるつて譯だ。」

併し裕佐は自分の後ろに、半丁ほど離れて、二人の婦人らしい人影が跟いて來るのを見た。彼は一寸立ちどまり、そして彼等がその墓地へ、その新塚へ、行く者であるかどうかを見屆けやうとした。併し二人の婦人はその墓地の手前で立ち止まり、何かを私語くらしく左手の道を指し、そして非常な早足で其方へ曲つて行つた。

「きつと降誕祭へ行く連中かも知れない。」と祐佐は思つた。「だがなんであんなに急ぐんだ。まだそんな時刻でもないに。」と、又二人の去つた後を丁度又半丁程の距離で、更らに二個の黒い影が忍びやかに跟けて來るのを彼は見た。闇眼でよくは判らないがその一方は非常に背高く、そして二人は黒いマントのやうなものを頭から被り、一言も口を利かず少時く立ち止つてじつと此方を見てゐる樣子であつたが又二人の婦人の跡をつけて左手へ曲つて行つた。

「何だらう。」祐佐はやゝ不安の氣に襲はれて訝かり始めた。「事によつたら、あの一人はフエレラではなからうか。もしさうとすれば……」と彼は考えた。「彼等はもう今夜降誕祭のある事に感づいてそれを探りに行くのではなからうか。」

そう思ふと彼は一種不安の緊張の爲めに身を顫はした。「よし。あいつらの後を俺が又跟けて行つてやらう。」そして北方へ向つて彼は大阪に歩き出した。

「降誕生へは俺は行くまい。」と彼は又獨り言つた。「あの人に逢ふ事は恐ろしい。そして此穢れた體の俺が行く事はその神聖な祭りの清淨をけがすものだ。俺は只窓から中を盜み見てやらう。只一眼！　そして俺は外で見張りをしてゐてやるんだ。」

彼は急いで後へ引き返へし、曲り角を左へ折れると坂の頂上にちらりと明りが見へた。その灯の赤さによつて、「焚き火をしてゐるな。」と彼は思つた「あり難い。そしてあの茶屋へ行つたら多分樣子が知れるだらう。」

彼がその茶屋であり又一膳飯屋でもある家に這入つて行くと、二人の男は後ろ向きに土間の爐椽に腰をかけて焚き火にあたつてゐた。

「ぢや卵酒でもつけますか。溫まりまするで。」

五十前後の齒を黑く染めた主婦は這入つて來た祐佐に莞爾とお辭儀をし乍ら「お寒ふ。おあたり。」と云つた後で、又

二人にかう訊いた。

「いや、肉類も卵も禁止だ。今は一寸、精進物の他はやつてならん折なんでな。」二人の男は頭から足の先き迄ヂョロリと祐佐を見た後でから云つた。「只熱燗に漬物でも添へてもらへれや結構だ。」

「此犬共奴。」と祐佐は思つた。「降誕祭(ナタラ)と悲しみの節とを間違へて下手な化け方をしてやがるな。」彼はかう心に苦笑し乍ら悠とそのマントのやうなものを着た大男の前へ廻はつて「御免」と云い乍ら煙草に火をつけた。大男は頭巾を眼深にかぶり、黒い毛織の襟巻きを鼻の頭が隠れる迄ぐるぐると頸に捲きつけて俯向きながら、その恐ろしく大きな痩せた兩手を火にかざしてゐたが、ゆつくり顔を擡げるとハツとしたやうに「や、萩原さん、先刻は失禮。變な處で逢いましたね。」かう云つて底光りのする眼で愛想よく彼に會釋した。

「どうも貴方らしいと思つたんです。」祐佐もハツとし乍ら云つた。「今頃こんな處にお務めですか。

「御苦勞さんです。一寸用がありましてね。」フエレラはその連れを顧みて苦笑し乍ら云つた。「で、貴方は？　何か墓地に用事でもおありになつたんですか。此夜更けに」

「あんまり氣違ひじみた世話厄きを見るとつい此方迄物好きな氣持ちになるもんで」祐佐は一寸默つた後でから云つた。「何しろ死んだ者の體の検査迄しないと氣が濟まない世話厄きが居るんですからね。」そして彼は二人の「おかしな男」に逢つた事と、その二人が何をするか見やうと思つて跡をつけて見た事を有體に話した後で附け足した。「それに僕は雪の中を歩く事が好きなんですよ。此土地では珍らしいから」

「さう。雪の夜は美しいもんです。」フエレラは云つた。「しかし貴方は今夜もつと美しいものを見られるでせう。——そしてそれは多分先刻お願いした貴方の仕事にいゝ材料になるでせう。」

「何です。それは。」
「降誕祭です。ゼズスの誕生を信者達が祝ふ祭りです。それは美しいもんです。」
「さうでせうね。そして貴方々はそれを捕縛しに來て居るんですね。」
「ふむ。ところが奴等だつて中々さう容易く捕まるやうな間抜けはしませんよ。もう心得てゐますからね。」と連れの與力が云つた。「第一今夜はその祭りの當夜ではないんです。御存じの通り。だから奴等は用心深く先き廻はりをしてこんな晩にやるんです。こつそりと。それもどこでやるんだか全で分りやしません。」
「なるほど。それで貴方々は此處の內儀さんからその場所を嗅ぎ出さうと思つて、あの仲間らしく思はせやうとしたんですね。――だがさう云へば今貴方々の前を二人の婦人が歩いて行きましたね。」
「えゝ、茂木の方へ。」と又與力が云つた。「よくやる事ですが、私達が跡を踉けてると思ふんで、足跡をくらますつもりで態と大浦の方へ曲つて行つたやうな風でした。ヘツヘ。」
「だが大抵分つてはゐます。」とフエレラは云つた。「どうせすぐ近所に祈唱が洩れ聞こえるやうな人里の中で彼等は集まりはしませんからね。いつも大抵茂木のはづれにある醬油屋の庫を彼等は密會所にしてゐます。行つて御覧なさい。もうそろ／＼始めてゐる時分です。」
「私達は今夜は捕縛なんぞはしませんよ。御覧の通りの仕度ですからね。只一寸様子を見る丈けです。何しろ向ふは多勢ですからな。」と與力が口をそへた。「え、道ですか？　茂木の入り口の處で右に細い田圃道がありますがね。何でも人通りの少い筈の處に足跡が多かつたらそこを行きやいゝんです。ヘツヘ。時ならぬものが降つてくれたお蔭げで足跡を見つけるにや丁度いゝ都合でさ。」

そして二人は顔を見合はせてにやりと笑つた。

「茂木までは少し大變だな。それに風も出て來た。」裕佐は呟くやうにかう云つて一寸外を覗いたが、主婦の處へ行つて茶代を拂ふ振をし乍らそつとその手に銀貨を握らせた。そして今夜此近くに切支丹の集まりがあるのを知らないかと低く微かに訊ねた。主婦は眼を圓くし、銀貨と彼の顔とを見比べてゐたが實際何も知らない様子であつた。

裕佐は外へ出た。

二

雪はもう止んでゐた。そしてサラ〳〵と淡雪をふり落とす松の梢の上に高く、二三の星が深淵の底に光る金剛石のやうに寒くまたゝいてゐた。

彼は急ぐと云ふより寧ろ走つてゐた。そして發作的に何遍も後ろを振り返へつた。彼等が自分の跡を跟けて來ないと云ふ事は彼には一層無氣味な事であつた。彼等はいやに餘裕綽々としてゐる。そして凡てを見拔いてゐるらしい。信徒の集會所は茂木であると彼等は云つてゐるが果して本當にさう思つてゐるのであらうか。併しもし今夜の密會所を彼等が知つてゐるとするならば、彼等は何であんなに空とぼけて迄それを探らうとするのであらう。さう思ふと「矢張り知つてはゐないのだ。」と彼は安心もした。しかし何故自分に、此何者であるか分らぬ自分に、彼等は輕々しくその秘密な知識を打ちあけるのであらう？　彼は自分の去つた後で彼等がカラ〳〵と笑つてゐるのを眼に見るやうな氣がした。「何でもいゝ。早く知らせなくてはならない。」

彼がさう思つて目あての家の方へ道を曲らうとした時道端の納屋の後ろから突然ぬつと一人の男が現はれた。
「待つてゐました。萩原さん。」と其男は靑年らしい聲で云つた。「貴方が此道を通られはしないかと思つて來てゐたんです。此處を通つてはいけません。雪に足跡がつきますから。」
「だがぐず〲してはゐられませんよ。もうそこの茶屋には與力が來てゐるんですから。」
「もう?」吉三郎は流石に驚いたやうに云つた。「しかし大丈夫です。奴等はあの場所を知つてる筈はありません。さア、此處を飛ぶんです。よござんすか。」
そして彼は三尺程の溝を飛び起へ、熊笹の茂つてゐる一間餘りの崖を攀じ登ると上から手を差し延べた。祐佐がその後に續いた時、その叢の中からは鶺鴒がチ丶、キ丶、と啼いて飛び散つた。崖の上は桑畑であつた。
「えらい處へ案内して濟みませんでしたね。」靑年は元氣よく太息を吐き乍ら笑つた。「だが本當によく來て下さいましたね。共代り今夜のは本當に今迄にない立派な降誕祭です。」
「長老は來られましたか。」
「えゝ。實はもう七日程前から私の處におかくまいしてあつたんです。私は是非貴方に一度あの長老を見せたかつたんです。」
「しかしよく天草から無事に渡つて來られる事が出來ましたね」
「熱心な信者の船頭がうまく隱してお連れして來たんです。何しろもう七十近い齡で八年の間あの天草の山で無人島同樣な所に乞食のやうな生活をして、僅かな信者を作り乍らかくれておられたのですからね。しかしその鑁鑠とした氣力と、つや〱しい顏の輝きとの少しも變らないのには全く驚きますよ。」

風と闇とに抵抗して二人は漸く道らしい道へ出てゐた。そこは峠の絶頂で眼の下に底知れぬ闇の如く黒く展がつてゐる千々岩灘が一眼に見へ、左手には宛ら生ける巨獣の頭の如く尨大に見へる島原の温泉嶽が蜿々と突き出てゐる。どう〳〵と哮つて彼等に吹きあたる風の音は、その既に幾千の人命を呑み食つてなほ飽き足らぬ巨獣の吼へる聲の如く思はれた。と、又遥かに――漂渺の彼方には海上としては高過ぎ、天空としては星の光りとも見へぬ、海とも空ともつかぬあたりに天草のいさり火が吹きすさぶ木凩に明滅する如く微かにまたゝいてゐるのであつた。

「御覧なさい。こゝへ來るともうこんなに澤山の足跡が見へるでせう。あそこに箒のやうに風で曲つてゐる森が見へますね。」と吉三郎はグツと襟を押えて掻き合はせ乍ら云つた。「あの森の下にその家はあるんです。どうです。全で見へないでせう。晝間なら屋根は見へるんですが。」

「しかし萬一發覺された場合には、逃げ道はあるんですか。」

「えゝ、無論です。しかしどうせ私が外で見張り番をしてゐますから、踏み込まれるやうな心配はありませんよ。」

まつたく其の家はすぐ側迄行つてもそれと知らずには一寸氣がつかない程闇の中にあつて闇にとけ込んで見へる不思議な一軒家であつた。

「さあ、裏から廻はりませう。さうすれば此眞つ暗に見へる「天の岩戸」の中にどれ程の光りが湛へられてあるか、貴方は吃驚なさるでせう。」

併し其「岩戸」の中の光景は「裏から廻はつて」這入つて見ずともその一分の光りも洩れぬ壁に耳をあてればカナリ充分に想像は出來るのであつた。その厚い壁を通してそこからは祐佐が嘗て夢想にも聞く事の出來なかつた世にも美しい合唱が洩れ聞こえて來るのだつた。

「あはれみの御母天つ御みくらに輝ききらめける皇妃にて在す
御身に御禮をなし奉る
流人となれるエワの子供ら
御身に叫びをなし奉る
此涙の谷にてうめき泣きて御身に願をかけ奉る——」
「聞こえますか。あれはサルベンジナと云つて、「まりあ」に憐れみを乞うお禱りの歌です。今夜は殆んど一晩中祈り歌ひ明かすので、降誕の祝ひの歌の他にあゝいふのも歌ふんです。」
歌はなほつゞいた。
「あはれみのお眼を我等に垂れ玉へ
慈しき御手の御執り成しによりて此の悩みのさすらいの後に
御胎内の尊きにて在すひりをの若君を我等に見はし玉へ
深く御柔軟、深く御哀憐すぐれて在す
びるぜん、さんた、まるやの御母
おうら〳〵のびす。おうら〳〵のびす。」
「此處が還入り口です。牛小屋ですがね。」吉二郎はかう云ひ乍ら納屋のやうに見へる裏口の戸を開けた。「御覧なさい。貴方始めてですか。之も毎年やる儀式なんです。
爐にあか〳〵と焚かれた火の餘燼が綺麗に掃き清められた小屋の中をほんのりと温く照らしてゐた。一隅には一匹の

黑白の斑の牛が新らしい藁をタツプリと敷いて靜かに口を動かし乍ら心地よげに臥してゐた。牛の前には赤飯を盛つた盆が供へられ、そのわきにはなみ〳〵と「産ぶ湯」の水をたゝえた飼桶が置いてあり、その水に灯かげが赭く映つてゐた。勿論、火が焚いてあるのは「御子」が凍えぬやうにとの意味である。

吉三郎は指でコツ〳〵と合圖をするやうに扉を叩いた。と、ぱつと扉が開き、あふるゝ許りの光り――祐作にはさう感じられた――が瀧のやうにそこから迸り出るのであつた。

「吉三郎さん？――お一人？」

扉口に立つた女はかう張りのある聲をかけて扉に片手を添せながら、胸にかけた小さい金の十字架がぶらりと前に垂れる程頭をかがめて薄暗い小屋の中の方をのぞくやうに見た。

「いや。一緒。丁度うまくお會ひ出來たんでね！」吉三郎は元氣よく云つて、眩し相に眼をしばだゝき乍ら呆然と傍に突つ立つてゐる祐作の方を顧みた。

「あら。さう。――」女は一歩退いて一寸眼を伏せた。「爽、随分、心配してゐたのよ。」

「だらうと思つてゐました。さあ、萩原さん。上つて下さい。」

「いゝんですか。」祐作は畏れるやうにモジ〳〵と口籠つた。「僕は上るつもりではなかつたんですが。」

「いゝどころではありませんよ。無論。」

吉三郎はかう云つて自ら上り乍ら、此「よくやつて來た珍客」に何か歡迎のお愛想を云はないかと促すやうに姉を見た。

「本當にようこそ。――随分大變で御座いましたでせう？こんな山ん中で。――」

むしろ努めた感じで之丈けの事を云つたモニカの調子は、最早心に思ふ半分も云ひ現はし得ぬ、羞じらい深い娘の口調ではなかつた。ましてそこにチヤーミングな餘情を含ませんが爲めの態とらしいあまい「舌足らずさ」ではない。かと云つて、それは又善良な教養ある人妻にのみ見られる一種の世故慣れた母らしい落ちつきの聲でもない。決して無愛想な調子ではないが、氣の利いた世俗的な感じでは更にない。冷たいと云ふにしては奥底に「心」がありすぎる。しかし只溫かく、柔和なと云ふのともちがふ。それでゐて角立たしい氣持ちがあるのでは微塵もない。

「隨分暫くでございましたね。」

むしろ弟の方に體を向けながら彼女は又かう云つて祐佐の前に高島田に結つた頭を下げ、輕く手を突いた。そして「暫く。」と吃るやうに漸く云つてあはてゝ其處に座はり、ぺこんと頭を下げた祐佐の赭くのぼせた顏をちらりと見ると、かすかに苦し氣な微笑をたゝえ乍ら又弟に顏を向けた。が、其時彼女の頰にひらめく如くさした赭味は、四尺とは離れてゐなかつた弟の眼にもとまらないらしかつた。

彼女が島田に結つてゐる處を見るとまだ人妻でない事はすぐ知れる事であつたが、その縹緻と、年華とを以て未だに獨身でゐるのはなぜかと云ふ怪訝も同時に誰にも起る筈であつた。一度ならず二度迄も信者からの緣談を彼女が斷つた眞の理由を知つてゐるものは只弟の吉三郎のみであつた。「あの姉はね、母になる事を怖れてゐるのですよ。自分の運命が「疊の上で」息を引取るものとはちがふ事を何となく迷信的に自覺してゐるのですよ。僕はさう思つてゐます。」吉三郎は昔て祐佐にかう云つた事があつた。

「あゝ、さう。」起ちかけた彼女は又何か弟にさゝやかれて無雜作に低く云つた。「あの詰らない花を貴方、買つて下さいましたのですつてね。お陰様でこれ丈けでも飾りが出來ましたんですのよ。」

外見は廢家のやうに見えるその五十疊許りの家の中央には枝葉を繁らせた大きな松と竹とが樹てられ、その枝にさした幾十の紅白の蠟燭があか〳〵と燈つてゐた。そこには又一々「アーメン・ゼウスぺてろ何某」「全く、よはんな、何某」など〻認められた五色の紙切れと、造花の白百合とが無數に結び垂れ下げられてあつた。正面には高く兩つの燭台の間に聖像が掛けられ、そのわきの椽上にはばてれんらしい黑衣の老人が腰かけて一人の男と何か熱心に話してゐた。そしてその前には白襟に黑の禮裝を着た多くの女達と、男とが並んで、頭をたれながらその話しに耳を傾けてゐた。

「あちらに行らつしやいませんか。およろしかつたら。今長老様のお話が始まつてゐる處ですの。」モニカはから二人にさ〻やくと、輕く一禮してそつちへ去つた。

「まあ自由にして〻下さい。努めないで。」と吉三郎は云つた。「僕は又見張りに行つてゐなければなりませんから。」

「いや、今度はわつしが行つてゐますじや。」と一人の百姓らしい男が傍から立ち上つて遮切つた。「貴方許りに行かせてちや相濟まない。」

「でも貴方は年寄りだから。—それに風が强いのですよ。」

「なあに、風位。から見へたつてわつしはまだ〳〵あんた等よりは頑丈ですて。へッへ。」

年寄りはもう下駄を突つかけてゐた。そして吉三郎がなほ危ぶむで「大丈夫ですか。本當に。」と訊いた時にはもう外へ出てゐた。

「さうだ。私は貴方のその問を待つてゐたのだ。それは大事な問題です。」と長老の聲は響いた。「だが吾々は靈に於て神の國に生きる事が出來ると同時に肉體に於てカイザルの國に屬してゐるのですからね。今の現世に於て、吾々は何と云つてもカイザルの支配を受けない譯に行かないのです。が、吾々が捷利——即ち救ひを得る道は、徒らにその事實に

あらがふ事ではなく、苟も自分の靈が害はれ、縛され、殺されるのでない限りは、此運命を諦め、出來るならばそれに超越して、カイザルのものはカイザルに返し、忍べる處迄は彼等の要求に讓り、ゆるして、只靈に於て益々神の國と共義しさとを求める事である。吾々はそれでいゝのであつて、又どうせ自由なものは靈丈けなのですからな。吾々は肉體に於ていかに束縛され、迫害を受けるとも、もし靈に於て義しく生きるならば、常に神の愛を感じて喜び、自由である事が出來るのですからな。」

「しかし奴等の無法と云つたら――」一人の男は膝を乘り出した。「もうお話にも何もならねえチヨツカイ尼きの悪魔でムいますでな。」

「たしかに悪魔の暴力は今殊にはげしい。神の國とその義しきを求める事が强ければ强い丈け吾々は苦しませるのです。」長老は少し顏を曇らせた。「しかし悪魔は決して最後のものではない。必ずその後ろにまだ何かある。吾々はその悪魔の後ろにゐるものに試練を受けてゐるのです。しかし――」長老は一段聲を强くして云つた。「吾々は基督が十字架につかれた事を彌が上にも生かさなくてはならない。吾々の使命が皆基督と共に十字架につけられる處にあるとするならば、基督があれほどに進んで自ら十字架の苦難につかれた意味はどこにあらう。それは却つてその重大な意義を消すことになる。殉教者は尊まれなくてはならない。が、云ふ迄もなく殉教のみが尊まれてはならない。吾々はカイザルの支配下に生きながら、而も身を殉ぜずに立派に義しく生きた多くの聖者のある事を知らなくてはいけない。吾々の幾多の先輩は既に義しき者の强さを遺憾なく發揮し盡したのです。吾々は今義しき者の賢さを示さなくてはならない。「蛇の如く悧しくあれ」と云ふ事は素より放縱な狡猾をさして云ふのではない。併し深く身を愛する事は靈を大切に守る事である。その靈と肉とは只自分の物ではなく、神のもので又隣人のものである。もし基督の敎へが父なる神を眞心をこ

めて愛し、その義しきを求め、又隣人を愛することであると同時に、又その神によつて與へられた身の生を神ならぬものゝ爲めに空しく抛げ捨てるやうな愚かな不敬な事をせずに、それを深く愛し尊重して自然に生きる處に自づと神の惠みを受けて無信徒の知らぬ樂しみを樂しむ事にあるのでないとするならば、基督は十字架にはつかなかつたでありませう。

「しかし乍ら皆さん。」長老は語をついだ。「私達の尊い先輩が造り、今又此わたし達が現に造りつゝある日本での切支丹の事蹟は決して單に日本一國の史上に於てのみの異彩ある光りではありません。永久に神の國とその義しきとを求める凡ての熱烈な眞心の鑑となるでせう。日本人はその美しい眞心を強く持つ上に於て他のいかなる國民にも決して劣らぬ者である事を吾々切支丹によつて程強く示した事は會てないのです。此事實は永久に日本國民の深い力となり、希望となるでせう。わたしは遙々遠い國から此心を求めて、此心にふれ度くて貴方々の處に來た。基督と云ふ大なる星の導きと、その光りの暗示とによつて、遙かに離れてゐる二つの小さい星がまゝたき合ふやうに、私と云ふ一つの心が貴方々と云ふ心を尋ねて　はるかに暗い長い海上を、荒い波や風と戰つて此處迄辿り來た。そこには暗礁があり、そして岸に着いてゐる私を岡へ上げなかつた。私達はお互に岸の上と岩の上とから呼び合つた。叫び合つた。八年の間。しかも遂に貴方々の眞心が一つの強大な引力に結晶して私を共暗礁から引きづり上げ、此處へ連れて來たのです。私の心は今貴方々の百合のやうにやさしい淸らかな愛と、燃えるが如き眞心とのさ中に抱かれ、ひたつて、今死んでも悔む處もない程の法悅に醉つてゐます。私の期待はそむかれなかつた。あゝ此地上に於て此の如き深い喜びが神から惠まれるのでなしにどこにあり得ませう！あゝ眞心ほど美しく、その力ほど強いものはないのだ。併しもしそれが眞理の巖の上に立ち、その光りによつて輝くのでないならばそれは決して此世を導いて行く力とはなり得ないのです。吾々は基督によつて示された眞理と、神との名に於てなほ益々團結を固くしなければなりません。それは此くらき世に光りを燈し、そ

れを守らんが爲めである。あゝ、我等をしてなほ強く此聖なる團結を增さしむる神への愛を彌まし玉へ。アーメン。」

長老がかう云ひ終るが否や群がる男女達は各々その胸に十字をかき、長老の傍に集まり跪いてその衣の裾に接吻した。

「アーメン・ゼズス！アーメン・ゼズス！」

しかし彼等が口々にかう呟いた丁度其時であつた。長老の眞後ろにあつた「非常口」の扉が突然カタリと音がして一寸程開いた。とサッと其處から風が吹き込んで聖像の兩側にある燈を消した。忽然として我れを忘れた歡喜と此世ならぬ陶醉との絕頂にあつた一同の顏は一齊に化石した如く蒼く硬ばり、そして彼等はハッと一時に息をひそめて、瞬開いた視線を其方に向けた。

そこには眞暗闇の中に燭火の反射によつて二つの眼が光つてゐるのが見えた。一同は棒のやうに立ち上つた。

「靜かに！」と長老は制した。「あわてゝはいけない。私にお任せなさい。」

そして彼は靜かに後ろに振り向いた。

三

吉三郎は長老の身を守らうとして逸早くそのわきに來て立つてゐた。併し彼がその「二つの眼」と長老との間に立ち塞がつたやうに吉三郎とその二つの眼との間に祐佐は割り込んだ。

「君達は默つてゐらつしやい。」と祐佐は低く鋭く吉三郎に云つた。「そして誰も掴まる必要はない。さあ、早く、あつちから！」と裏口をさした。そして彼はその扉口をガラリと開けた。

「はあ！貴方は矢つ張り「見に來て」ゐましたね。」

その闇の中の男は云つた。

「さア外で話をしやう！外で！」祐佐は自分で外へ出乍ら云つた。「犬は人間の座敷に立ち入る資格はない！」

そして彼は扉を閉めやうとした。併し扉は何かを間にはさまれたやうに動かなかつた。

二つの眼は蛇の眼のやうに動かず、じつと長老を見つめてゐたが

「おゝ。アントニオ。ルビノ！　ルビノ！」

と低くふるへるやうに叫んだ。その聲を聞くと長老はやゝ愕然としたらしく口響するやうに重く應へた。

「おゝ汝はキリシトフア・フエレラ！　フエレラ！」

「フエレラ」と云ふ語を聞くと家の中の一同は又沸き立つ樣にざわめいた。「ユダ！　ユダ！」と云ふ聲が聞こえた。そして一二の侍は隱し持つてゐた刀を執つた。

その時、呼び笛の聲が高く響き、もう一人の男が闇から現はれて、その閾に足をかけた。祐佐は綱を持つてゐるその右の手頸を掴んだ。

「何だ貴樣は！」その男は抑えられた手を強く振り乍らわめいた。「仲間か！」

「さうだ。俺は此仲間の頭だ！　掴まへるなら俺を掴まへろ！」

「おゝ長老樣！　早く〳〵お逃れになつて！」

モニカはかう叫んで、長老の膝にすがりついた。

「わたしはいゝ。海神はわたしが所望の贄なんだ。わたしを投げれば海は鎭まる。」

長老は自若として厳かに云つた。しかしモニカは聞かなかつた。

「いゝえ、役人は貴方様のゐらつしやる事を知つてはゐなかつたのです。どうして貴方様をこゝに殘して姿達は逃れられませう！」

「わたしの云ふ事を聞きなさい！」長老はやゝ激した如く顏を赭くして命令するやうに云い放つた。「わたしはもう既に身を隱しすぎたのだ。時を待ちすぎたのだ。しかしそれは何の爲めだ。貴方々眞に生きねばならぬ人達を守らんが爲めではなかつたか！　さあ、早く！」

そして彼は鋭く裏の戸口を指すと、又後ろに向いて捕手の方に一歩近づいた。

「さあ、わたしを捕へなさい。昔の親友よ！　大なる神は乾spiel君の罪をも宥し玉ふだらう。」

長老は厳かにかう云い乍ら、自分の裏に一同をかばう如くその大きな兩手を擴げた。そして一眼フエレラの眼を屹と覩ると眼を閉じた。

フエレラは水のやうに眞蒼になり、無言のまゝ靜かに繩を取り出した。しかし彼が閾の上に立ち上るが否や、彼はフラ〳〵としてよろめき、そしてもう一人の男の足許に斃れた。

三

半時間程を經て後、祐佐は一人道もない峠の上を歩いてゐた。いばらや萱の爲めに傷ついた足や手から血を流してゐる事も知らぬらしく夢中によろ〳〵と歩いてゐる彼の姿は宛ら夢遊病者のやうであつた。そしてとある草原へ來た時、彼はそこが雪で霑れてゐる事も考えず、自づと倒れるやうにそこに身を轉ばした。

何と云ふ一夜であつたのであらう。ガン〳〵と鳴り響く混沌たる彼の頭の中には先前からの一切の光景、人物の渦

――夢のやうな墓場の景から茶屋の中でのフヱレラとの異様な邂逅、青年の顏、晝の花園の如き光りと色とにあふれた祭りの光景とその歌、モニカの顏、長老の顏、そして最後に突然蛇のやうな眼を持つた探偵者の襲撃が一座の有頂天を破つた時「おゝ、長老樣。早く〳〵お逃れになつて！」と叫んで、その膝許に身を投げた時のモニカと、それに對して儼然と答へた時の長老の姿、フヱレラの昏倒。

それらが一時に彼の頭の中にグル〳〵と渦の如くとめ度なく廻轉し、そしてその一つ〳〵の印象がくつついたり、離れたりした。凡てが全く夢と他思はれなかつた。

「さうだ。俺は此仲間の頭だ！　捕まへるなら俺を掴まへろ！」俺はあんな事を云つたのだな。――ふとかう思つて彼はゾッと身を顫はせた。併し「俺には矢つ張り勇氣があるんだな。眞心から出る勇氣が、」と思ふ子供らしい意識が彼の顏に滿足氣な微笑を浮べさしてゐた。

實際彼は指揮官フヱレラの實に思いがけない昏倒の爲めに、捕縛が「その場丈けとしては」とも角不成功に畢つた事を思ふと、もうその後を「どうなつたか」と追窮して考へる氣にはなれなかつた程滿足な自意識に醉つてゐた。そして自意識がそのやうに滿足した時にのみ人の心に湧然と起つて來る一種の愛感――凡ての悲劇的運命の中に生死を賭して眞劍に生きてゐる人々、その緊張した一々の顏――に對するなま〳〵しい哀憐が彼の胸の裡に苦しく痛ましく起つて來るのであつた。そしてその「悲劇的な運命」の人々の顏が、抽象的に人類全體の一つの不幸な姿に見へて來た時、彼の眼にボロ〳〵と熱い涙が浮んで來た。

彼がその涙にうるんだ眼で、既ういつの間にか去つて微かに遠雷のやうに聞こえる嵐の音に耳を傾けながら、降る如く一面に星の現はれた空をぽかんと仰向いて見上げてゐた時、突然何か驚くべきものを見たやうに彼は「アッ」と云つた。

彼が驚いたのは當然であつた。彼が何心なくぽかんと視入つてゐた大空の一角には、實に故らに星を其形に並べて鏤めたとしか思はれぬ巨大な十字形の一星座が判然と見へるのであつた。愕然として思はず彼が半身を起し、そしてその恐ろしい巨大な十字架に相應する丈けの悲慘のすがたをふと心に描いた時、突然稲妻のやうにある天啓が彼の頭に閃いたのであつた。

彼の眼の前に、再び、現實のそれよりはなほ一層高き神秘なる美と權威とに於て、長老と、モニカとの結合體が髣髴と現はれた。その結合體が星座の大十字の中に燦然として見へた時、彼はその前にひれ伏した。が、次の瞬間彼は「オヽ！」と叫んで飛び上つた。

「オヽ、之だ！　之だ！」彼は拳を空に打ち振つて喚いた。「オヽ、今こそ、俺はあの聖像を造らう！　あゝ、もう俺には造れる！　造れる！　有り難い！」

一四

其翌日、彼が伯母に起された時にはもう午を過ぎたらしかな日が眞上から長崎の町を照らしてゐる頃だつた。隈なく晴れ上つた紺青な冬の空の下に雪にぬれた家々の甍から陽炎のやうに水蒸氣がゆら〳〵と長閑に立ち上つてゐた。

伯母は彼の枕許で役人が來た事を知らせてゐた。

「え？　役人？」

祐佐はドキリとして思はず身を起した。「捕まへに來たのか？」彼は昨夜捕手に向つて云い放つた自分の夢中な言葉を不意に思い出した。

しかし彼は其瞬間さつと顏色を變へたが、案外すぐ落ちついた氣持ちに返へつた。そして一寸默つて考えた後で決然と玄關へ立つて行つた。

「何です。」彼は突つ立つた儘訊いた。

しかしフエレラはゐなかつた。

「いや、別に、新しい用事で上つた譯ではありませんが。――昨夜は失禮しました。」

役人は頭を下げた。それはフエレラと共に彼を妓樓に訪ねた「通譯の件」であつた。

「昨夜お願いした事ですが、――實は早くはつきりした御返事を伺い度いので。――矢張りどうしてもお願い出來ますまいか。」

「いや。」と祐佐は急に安心と、喜びの爲めに勇んで云つた。「やりますよ。お引きうけしませう。」そして彼は附け足した。

「實はその事を今日貴方の方へ云いに上らうと思つてゐたのでした。」

「え？　承諾して下さる。さうですか。それなら願つたり叶つたりです。」役人は安堵したほゝ笑みを洩らし乍ら云つた。

「どうぞ精々よく作つて下さい。お出來ばへがよければよい丈けお禮の高も增へるのですから。はゝ。」

「それでは本當によく出來れば出來るほどつまりお禮は減るわけですね。」祐佐は一寸から云い度くなつた。しかしそれより彼はもうその嬉しい仕事の想像に氣を取られてゐた。そして只、「承知しました。」と云つた。

役人は時々樣子を見に來させてくれと云いおいて歸つて行つた。

「どうです。かう云ふ天狗ならいつでも來て貰い度いでせう。」と彼は元氣よく伯母に云つた。「大黑さんが來たやうに嬉しいでせう。」

「ほんに妾はもうこんな嬉しい事はないよ。いよ〳〵お前にも運が向いて來たのだね。」伯母は袖で眼を拭き乍ら云つた。

「はゝ、本當にさうですよ。」

祐佐はかう云つたが、何だか胸が擽つたいやうな氣がした。「さア、此金で、俺はあいつを身うけする事が出來るんだ。もしそれが出來る事なら！」彼はかう考へてゐた。そして晴々してゐた彼の顔は俄かに曇つて來た。

しかし其時伯母が彼の顔をのぞき乍ら云つた。

「だけど、お金はとれても惜しいもんぢやね。そのお前が丹精して造つたものが人の足に踏まれるんぢやと思ふとな。」

「ふむ。心にもない事を、人の氣を察したつもりで。」と祐佐は苦々しく思つた。「もし察したつもりで云ふならば、それを踏む事を強ゐられ、踏まねば殺される切支丹の方の事を思ふがいゝ。」

しかしさう思つた時、祐佐は更に或る恐ろしい不安にドシンと胸を打たれたのであつた。「俺が作るその踏繪をあの人も、そしてあの弟、――立派な思想と信仰とを抱いたあの美しい有爲な青年も踏む事を強ゐられる事になるのだ。彼等はそれを能う踏むであらうか？　踏んでくれるならば有り難い。それは自分の神聖な作品であつても、もしあの人の淨よい足がそれを踏むならば俺はいやではない！　否、むしろそれを本望とするであらう！　だが、あの人は、あの熱心な信女はそれを爲し得るであらうか？。」

彼はそこにゐられなくなつて、自分の室に入り、まだ疊んでない床の上に寢轉び乍ら考へつゞけた

「もし俺がそれを作つた爲めに、そしてそれがよく出來てゐる事の爲めに、それを踏むあの人の良心がなほ一層苦しみを増し、それをなし能はない事になるとするならば、俺はあの人を、戀人を自ら殺す事になる！」

そして彼は悶へ、一刻前の凡ての輝ける希望と、喜びとは忽ち底知れぬ絶望と煩悶とに變つた。「あゝあ、」彼は凡てが

いやになり、眞つ暗になつて力無く呻めいた。

「しかし…」と彼は又考えた。「あの人は今迄幾度となくあの踏繪の試錬を經て來たのだ。假病をつかつて役人を欺く事は殆んど不可能な事である。矢張り否應なしに苦しい痛悔(コンチリサン)を賴りに踏んで來たものにちがいない。たとへそれは皺くちやな、何の反古か知れない程の紙であらうと、あの人はとに角それに堪えたのだ。」それは彼には實に意外な事に思はれたが、又嬉しい意外の事であつた。

「さうだ。何の畫像か讀めぬほどの紙屑であらうと、判然たる鑄物であらうと、それが聖像であると云ふ意識に於て變りはない筈である。それならばあの人は今迄幾度かそれを爲し得た如く、今度の俺の聖像に於てもそれを爲し得るであらう。」

彼は又彼女の傍に賢い弟の吉三郎がついてゐる事と、昨夜の長老の說教とを思い出した。「いや、あの人は輕々しく『神ならぬ物の爲めに神から與へられた身を空しく犧牲にするやうな愚かな不敬な眞似はしない』であらう。――そして、さうだ。俺は又その試錬の時の前にはあの人達を訪ねて、是非それを――宗教的意味に於ては單なる物質の破片にすぎぬ鑄像を、俺の爲めに踏むでくれるやうに賴んでおく事も出來るのだ。」

そして彼は又希望を取り戻した。

一五

その日の夕方、彼はもう仕事にとりかゝつてゐた。

「踏繪にすると否とはとに角として、俺はあれをとに角作らう。作らずにはおけない。たゞ作る事、それ自身の爲めに。」

そして彼はもう安心して、その仕事に沒頭してゐた。

彼はもう「あの人」の事も考へなかつた。君香の事も忘れた。そして長い間寂しい闇の野中へ行き暮れ、不安にさ迷つてゐた者が、一道の光明――人家の明りをハツと見つけて、只もうひた走りに其處へ行きつく事を考へる他には何も考へない時の如く、机にかゝりきつて、幾枚かの下圖を引いた。

一歩も外出せず、不眠の夜をつゞけた餘念ない三日の沒頭の後に下圖はまづ彼の望みどほり出來上つた。そして下圖が出來上るが否や彼は粘土の捏ね上げに取りかゝつた。そしてその捏ね上げがすむと彼は青銅の鎔爐にかゝつてゐた。自分のどこからこんな無限な精力が出て來るのかと彼は自分でおどろいてゐた。

彼の仕事が進むにつれて彼の處にそれを「拜見」に來る者が多くなつた それは彼の伯母が「お上からの仰せつけで」自分の甥が名譽ある仕事を「お引きうけ申し」てゐる事を近所にふれ廻はしたからであつた。むろん其間は誰も彼の仕事部屋に這入る事は嚴禁されてゐた。が、中には只の物好きな見物人のやうな顏をして「拜み」に來る信徒の女もゐた。

「まあ、何と云ふ結構な。――有り難い。こんな有難いお像を拜んだ事はほんに妾始めてゞござんすわ。」その信徒はうつかりから口を滑らして自分の信徒である事をあかしてゐた。しかし藝術なぞの分りやうもないかう云ふ普通の人の心でも打つ何かが自分の作に宿つてゐると思ふ事は祐佐にはうれしかつた。

「萩原さん。奢らんけれやいかんぜ。あんた、俄かに大福長者になられるんぢや。」

「あんた方の仕事はえゝなア。當り出いたら大したもんぢや。」

こんな事を云ふ男達も少くなかつた。

年は改まつて祐佐は卄七になつた。

元日の朝彼は窓に立つて昇る太陽を拜んだ。「わが仕事に祝福を垂れ玉へ。願はくは夫を我が意の如く成さしめ玉へ。生命の主よ。」彼はかう口の中に祈つた。

彼の仕事は着々と云ふ程には渉取らなかつたが比較的早く進んだ。

「ぢや、月末の踏繪式までには結構間に合いますな。」と見に來た役人は云つた。

「それ見い。やつて見れば、お主にはこれ丈けの腕はあるんぢや。だからわしがあんなにすゝめたんぢやに。――」と孫四郎は或る晩來て見て云つた。

「よう出來とるよ。ちと西洋式な香いは多いが、まあ西洋の材料ぢやからな。此襞のつけ方なぞは、此大天使ミケルの襞にそつくりぢや。が、決して劣つとりやせん。」

彼はわざと「龍と鬪へる大天使ミケル」の浮彫と、祈作の作とを手にとつて見比べ乍らかう云つた。が、祈作はもう此男の「ケチを附ける癖」には腹も立たなかつた。何物も只褒める丈けでは濟まさない此男が之丈けの事でも云ふのは餘程感心した事を意味するのが祈作には分つてゐた。

或る晩祈作は君香に手紙を書いた。

「新年お芽出度ふ。お變りないか。俺が久しく君の處に御無沙汰してゐるのは君が想像するやうに、君の嘲喩ひに憤慨しての事ぢやない。たしかに俺は「坊つちやん」だが、巨人の坊つちやんだ。だからあんな事怖氣にしてはゐない。俺は今或る仕事の爲めに生れて始めての「忙がしさ」に追はれきつてゐる。それは君がいつか俺に「參考品」としてあのコンタスをくれて、「之を手本にして妾の像を作つて下さいね。云々」と云つた、まあそのやうな仕事だ。否くあのコンタスは今や全で別物のやうな生きた力で俺の役に立つた事をお禮する。お蔭けで俺は今度もしかしたら、始めていゝ仕事をした

と云ふ自分の滿足を買へる上に、大分金儲けをするかも知れない。少くとも女一人を身うけする事が出來る位の金に悠に得られる豫定だ。だが俺は「不實」だから君を身うけしやうなんぞとは素より思つてゐない！　一寸そんな事を考へた事もあるが、まあ君の身はあの「紅毛の犬」に任せる事にしやう。

尤も今夜あたり、俺は一寸君を訪ね度くはある、しかしつゝしむ事にした。俺の仕事は多分明日あたり出來上るのだ。仕事の神は猜疑深く、おまけに君のやうに惡戯氣に富んでゐるから、俺はもう一日と云ふ處で其神にたゝられる事を怖れる。もう一息と云ふ處でその神はと角そんな惡戯をやり度がるのだ。今夜もし君の處へ行つたら、俺の仕事はきつと呪はれて滅茶々々な失敗に畢るだらう。だから俺は行く事を控へる。それはたしかに「惡所通ひ」だからね！

しかし此「關所」を通り越したら行くよ。いくら君がいやでも！

しかしまあ君の健在を祈らう。俺の體はひよろ／＼だが、元氣は大したものだ。まだ君をいやがらせる位の力に十二分に持つてゐるよ。」

君香殿

不實な男より」

翌日の朝、彼の仕事は出來上つた。降誕祭（ナタラ）の夜から廿五日目であつた。

三人の役人がそれをうけ取りに來た。

祐佐は綿で包んだ青銅のピエタを見せた。

「はア、之ですか！」

三人の役人はそれを見るとハツとしたやうに顏の色をかすかに變へた。そしてその聖像（ピエタ）と祐佐の顏とを交る／＼見比

べた後で、役人同士又互に顏を見合はせた。
「見事に出來上りましたな。」
二人の役人は同じやうな事を一齊に云つた。
「之を今日頂いて行けるのですね。」もう一人は云つた。
「まだそれ一つしか出來てゐないのですから。」と祐佐は答へた。「貴方の方に上げるのは今じ物をもう一つ二つ作つてからにして下さい。」
「しかしとりあへず奉行に御覽に入れ度いのですが。奉行も隨分樂しみに待つて居られますんで、」とに角今日之を拜借して行く事は出來ますまいか。」
祐佐は斷る譯に行かなかつた。そして「どうか大事にして下さい。」と惜し相に云つた。
三人の役人は丁重にその聖像を抱えて歸つて行つた。

一六

奉行からは其後何の便りもなかつた。そしてその聖像は四日經つても歸つて來なかつた。祐佐は苛立つて來た。彼は出來上つた許りの自分の作をもつと自分の傍においてゆつくり眺め度かつた。それに即しきつた苦しい製作者の立ち場から、鑑賞者の自由に離れた立ち場に移つて、心ゆく限り眺めて樂しみ度かつた。人にも見せ度かつた。殊に誰よりも早く吉三郎姉弟に見せ度かつた。「あの豚共奴に見せるべき眞珠ではないんだ。勿體ない！」彼はから奉行の冷淡に腹を立て、取り還しに行かうかとさへ思つた。

しかし其晩であつた。

彼は例の如く遲く床に這入つて仕事中から一層靜になつた不眠に惱んでゐた。外には冬らしい風がさら〳〵と吹いてゐる樣子であつたが、家の中は森として、一間隔てた六疊から伯母のかすかな鼾が聞こえてゐた。

其時彼の室の窓を何かコツ〳〵と叩く者があつた。漸くまどろみかけてゐた彼はハツと眼を瞬開き、そして默つて耳を澄ましてゐた。風で折れた木の枯枝が窓の戸に當るのかなと思つた。しかし又コツ〳〵と叩く音は聞こえた。たしかにそれは人の指が叩く音である。「もし人とすれば誰だらう。」から思ふと彼は俄かにいろ〳〵の想像の興奮の爲めに頭が赭く郷いた。彼の頭の中に恐ろしい想像と、嬉しい想像とが一時に混亂した。しかし恐ろしい想像の方が強くなつた。

「きつと吉三郎だ。之は疎な事ではない。」彼は最早から決め込み乍ら、寢間着の襟をかき合はせて立ち上つた。そして決心した者の如く、二歩許り歩いてその窓の雨戸をあけた。

「誰です。」彼は云つて闇の中を睨んだ。

「妾よ！」

其處に立つてゐた一人の女性は黑い頭巾を取つた。

「君香か！」彼はギヨツとして思はず叫んだ。「ど、どうしたんだ！」彼は眼をこすつた。

「叱！　靜かに！」君香は四邊を素早く見廻はし乍ら云つた。「一寸、出てゐらつしゃい！　大變な事なのよ！」

「何だ！」祐佐はヒラリと窓を飛びこえて外へ出た。そして戸を閉めた。

「貴方、大變よ！」君香は鋭く云つた。「貴方ぐず〳〵してゐると明日にも捕まるのよ！　だからさア、早く妾と一緒にお逃げなさい！」

「一體、何の事なんだ！　どうした譯なんだ！」

「貴方の作つた聖像が今奉行所で問題になつてゐるのよ。そして貴方は切支丹だと云ふ事になつたのよ！」

祐佐には何の事かさつぱり譯が分らなかつた。

「貴方に分らないのは當り前よ。だけどつまりあの聖像はあんまりよく出來すぎたのよ。無論妾は見た譯ぢやないけれど、お役人達はたしかに貴方のお作の神聖な力に打たれたのよ。それであんな物を切支丹に見せたらそれを踏む氣はしなくなつて、却つてなほ有り難がつて信心深くなるだらうつて云ふのよ。そしてあんな神々しいものを作る事が出來る貴方自身も矢つ張り切支丹にちがいないと云ふ事になつたのよ。」

「馬鹿な！」祐佐は呆然として只かう云つた。「そしてお前、一體どうして、どこからこれを聞いたんだ！」

「あの「赤毛の犬」から聞いたのよ。」

「赤毛の犬？　フエレラからか？」

「さうよ！　貴方は馬鹿ね！　妾があの赤毛の犬をあんなに可愛がつて見せたのは一體何の爲めだつたかつて事が貴方には全で分らなかつたのね！」

「え？　それでは…」

「それだから貴方は坊つちやんだつて云つたのよ！」女は罵詈するやうに云つた。「まさかこんな事が起らうとは妾だつて考えてゐた譯ぢやないけれど、あの犬を摑まへて、舐めさせておきやきつと何かの役に立つ事があるとあの時妾ふつと思つたからよ！　そして妾貴方の惡口を云い乍ら、根掘り葉掘り今度の事をすつかりばらさせてやつたのよ！」

「本當か。いつ！」

「今夜たつた先刻の事よ！あの犬は此頃もう氣が少し變になつて妾の處に全で入りびたりなのよ。」

「何と云ふ氣違い奴。だが彼奴がいくら決め込んだつて此方がさうでない事を明かにすれや何でもない事ぢやないか！」

「まあ、どうして、そんな事が出來ると思つて！ どんな手段でよ！ そんな誓ひ位でそれが出來る事なら妾だつてこんな心配をして上げはしないわ。貴方、自分の胸と頭を斷ち割つてあの犬達に見せる事が出來て？」

「よし。そんなら逃げる許りだ！」祐佐は一瞬間默つて、考えた後で云つた。「面白い！ お前と一緒ならどんな無人島へでも行くぞ！ だが一寸待つてゝ、くれ！」

「何か取つて來るの？ そんな暇はなくつてよ！」と女は云つた。「お金は妾が少しは持つてゐてよ！ さアお逃げなさい。すぐ！」

「だが、どこへ！」

「天草へ行くのよ！ 妾の故郷へ！ あそこは無數の島があつて昔から奉行の手が屆かない唯一つの隱れ場所なのよ。そして妾の家にゐらしやい！ そしてしばらく樣子を見てゐるのよ。それは妾が知らせて上げるわ！」

「何だ。お前は行かないのか！」

「妾は行く事は出來ないのよ！ 行き度いんだけれど。今夜妾が飛び出たんでもう妾の後には追つ手がついてゐるのよ。今頃はきつともう大騷ぎをして探してゐてよ。そして妾が捕まれば貴方も捕まつて了ふわ！」

「誰が一人で行くものか！ 俺はそんな處で寂しさと憤慨の爲めに死んぢまだらう。お前が捕まれば俺も捕まつてやる許りだ！」

「よくつてよ。とに角そこ迄一緒に行くわ！」

二人は闇と風との中を浦上の方へ向つて走り出した。

祐佐には運命の實相はどうしても信じられないのだつた。それは本氣で信じられるには餘りに馬鹿々々しい話に思はれた。しかし身うけし度いと願つてゐた女と夜逃げをすると云ふ事が彼の若い浪曼的な興味を燃やしてゐた。そしてその興味が、それでもなほ一方に起る恐怖ともつれ合つて彼を戰かせてゐた。しかし峠の茶屋にさしかゝつた時彼女は云つた。

「お待ちなさい！　事によつたらもう此處に來てゐるかも知れなくつてよ。私見てやるわ。貴方一緒に來ちやいけなくてよ！」そして彼女は一人で進んで行き、中を一寸のぞくと彼を手招きした。

「一體何と云ふ事になつたのであらう！　もし之が本當に冗談でないとすると！　そして誰が、何の權利があつて、人をこんな目に遭はせるのだ！」と思ふと、祐佐はむら／＼と殺伐な怒りに燃えたつのであつた。そして彼女の後についてその茶屋へ這入つて行かうとした時彼女の叫び聲が聞えた。

彼女は早くも彼等を見つけて隱れてゐた二人の男に手を抑えられて悶えてゐた。

「お離しつてば！　摑まつてやるから！」そして彼女は男の手に噛みついた。

「ふむ。お前丈けの事ならいくらでも離してやるさ！」男は輕く女の頭を突きのけ乍ら云つた。「だが他に誰かゐるだらう。お前がわざ／＼此夜半にかけつけて行つて驅け落ちを誘つた色男がよ！」

「此處にゐる！」

祐佐はそこへ出て突つ立ち乍ら云つた。「それがどうしたんだ！」

二人の男は嬉し相ににやりと笑つた。そして女の手を離した。

「へ、案の定お入でなすつたな。色男。用事は馬にあるんぢやない。此牝馬に乘つてゐる貴樣にあるんさ。

さう云つた男は降誕祭の晩に祐佐がその手頸を握つた與力であつた。

「貴樣は切支丹だとあの時云つたつけな。」

「皆を助けてやり度い爲めにだ！　だが俺が切支丹だつた處でそれが何だ！　貴樣に何の關係あるんだ！」

「當り前よ。あつてたまるもんかな！だが國家にはあるんだ相だ。」

「お前さん達此人を切支丹だと思つてゐるのかい！藪睨みの當てずつぽにも程があるよ！」と君香はつんざくやうに笑つた。「もし此人が本當にさうだつたら何で自分の仲間を殺すやうな踏繪なんぞを作るだらう！　それ丈けで分らないんてまあなんて馬鹿な役人達だらうねえ！」

「役人が馬鹿だらうと利口だらうと俺達の知つたこちやねえや。とに角一緒に來りやいゝんだ。さア。」

祐佐は無念相に默つて考えてゐたがキヨト〳〵して娘の持つて來た熱い茶を飲んだ。

「よし、行く丈けは行つてやつてもいゝ。そして俺を切支丹だと疑ふなら俺はあの踏繪を自分で踏むでやらう。さうすれやいゝ譯だナ！」彼は茶を飲む事によつて考えた事を云つた。

「處があの踏繪を作つた者の罪は、それ踏まない者の罪よりは重いんだ相だ。」復讐心に燃えた眼を横に向け乍ら與力は云つた。

「まあ、「何ですつて!?」祐佐よりも早く君香は叫んだ。それなら一體踏繪と云ふものゝ意味(ワケ)はどこにあるんだらう！「そんな事ならわざ〳〵面倒な踏繪なんぞを踏ませなくつたつて作つた者をどん〳〵片つ端から殺して行きやい

ゝ譯ぢやないか」その方がよつぽどお前さん達らしいわ！」

「まつたくさな！　たしかに理屈はあらア。」と與力は云つた「奉行の前でさう云つて見ろよ！　其通り！さうしたら多分御放免にあづかるだらうて！」

「さア。貴樣はおとなしく樓へ歸れ。な。親方は心配してら。大事な玉が遁げちやつたつて。」ともう一人の男が君香の手を取つて云つた。「多分明日の晩あたりは又お芽出度く此色男に逢へるだらうよ。そしてお祝いの酒盛りでもやるがいゝやな。」

「もうどうせ遁げたつて駄目だよ。お前の爲めに網の目のやうに非常線を張らせられてあるんだからな。」與力は又祐佐に向つて云つた。「おとなしく從つて來るのが一番利口だよ。」

そして四人は茶屋を出た。

十七

祐佐は奉行の前での訊問に於て、態度が「尊大」であつたのが非常な損であつた。そして彼に「手頸を摑まれて動けなかつた」與力の復讐心がその損をなほ大きくした。

「とに角踏繪を踏まない者は處刑をうけるのが掟だ。なぜうけるかと云ふと國法に背く切支丹、つまり國賊と云ふ事になるからだ。それは分つてゐるな。そして貴樣はあの時自分でわざ／＼その國賊である事を與力に宣言してくれた相だからな。」と代官は云つた。

「併し君達が僕を疑り出したのは君達に頼まれたので僕が作つたあの踏繪からではないか。」と祐佐は云つた。「た

から僕はそれを踏むでやらう。何なら、それをこゝでぶちこはして見せてやらう。君達の眼の前で。」

彼は君香が與力に云つた言葉をも繰返へした。

「いや、わしはあの像が傑作である事は認めるんぢや。」奉行は云つた。「あの傑作はわしの方で大事に所藏するだう信者の心を本當に試めすにはあれ位の傑作でなくちや役に立たぬでな。その點君の功勞は永く記念しておくだらう。しかし」奉行は流石にやゝ云い澁り乍ら云つた。「甚だ奇怪な行きがゝりにはなつた譯であるが、あの作に現はれてゐる君の信仰、――それはたしかに普通一般の信者のそれよりは力強く、深く、怖るべきものであるが、此處にゐる凡ての同僚が等しくそれを認めるが故に、遺憾ながら我等は君を死刑に處せねばならぬ。それはつまり君が信者として又一種の傳導者としてぱてれん、同樣に重んぜらるべき者であると認めるからぢや。」

奉行は息を吐いて靜かに四邊を見廻はした。

「しかしそれだけではと！」彼は又語調を柔らげて云つた。否、それ丈けでも充分處刑の理由にはなつてゐるのぢやが更に萬全を期して云ふならば、それ丈けの理由を以て君を處刑する事はまだ幾分一人決めの推量に依る處分であると、の非難をうけても仕方がないと云へる。吾等は法官としてどこ迄も一人決めの推量を排し、現實の證據を尊重する。ぢやからして、その證據を見やうではないか。今度の踏繪の調査に於てぢや。君の傑作がもし吾々の不吉な想像を裏切らなかつたら、君は自分の仕事の成功の證明に死して瞑すべきぢや。が、反對にもしそれが吾々の想像を裏切つたとしたらぢや。君は生命の無事を大に祝すべきぢや。」

かくて、審問は終つた。

が、其晩長崎の町には踏繪の鑄造者萩原祐佐が「特別なお慈けを以て秘かに斬罪に處せられたと云ふ噂が擴まつた。

正月の廿八日から三十一日迄、四日間に亘つて踏繪の儀式は奉行所に於て莊重に行はれた。

そしてその儀式には萠佐の作「青銅のピエタ」がつかはれた。

三日間のうちに十五名の踏み得ざりし者が現はれた。か〻る事は前例のない事であつた。

最後の日更に四人の者がそれを踏まない事の爲めに捕へられ。「檢べ」の爲めに殘された後、モニカは白無垢の裝束を着け、したゝる如き黑髮を一と處元結で結び、下げ髮にして靜々と現はれた。

水を打つた如き式場の中央に藁莚を敷き、その上に低い台を置き、更にその上に、踏繪は置かれてあつた。そして其左右には與力が向い合いに床几に腰を卸し、一々の者の「踏み方」を疲れた眼できつと睨み見てゐた。二千人以上の其日の「踏み方」は畢つてもう日暮れに近かつた。

モニカは神色自若としてその前に進み、跪き、先づその像を手にとつてじつと打ち眺めた。

「あゝ貴方は、矢つ張り、信心を持つてゐらしつたのですね。有り難ふ。」役人にも聞こえぬ程の低い聲で彼女はかう呟いた。そして急にそれを抱きかゝえる如く犇と胸に押し當て、接吻し、又それを恭しく台の上に置くと手を合はせて拜んだ。勿論彼女は其場に引き立てられた。

彼女の後に君香はつゞいた。君香は同じ事をし、そして自分を捕まへた役人に云つた。

「妾は信者ではないのよ。それは本當。だけど妾には此お像を踏む事は出來ないわ！人間としてそんな事は出來ないわ。さあ繩をおかけなさい。地獄の犬殺しさん達。」

そして彼女は曳き立てられ乍ら云つた。「あゝ嬉しい！妾は今日の日をどんなに長く待つてゐたゞらう！」

翌日の夕方立山の刑場には廿一の新しい十字架が樹てられてゐた。しかしそこに曳き立てられた者は廿一人ではなかつた。廿一人がその十字架にくゝりつけられた後、更に二人の男囚が意外な處から曳き立てられて來た。それは長老アントニオ・ルビノと萩原祐佐とであつた。

此二人の面被が剝がされた時、二人の女が十字架の上で叫び聲を擧げ、そしてその一人は其場に氣絶した儘息を引き取つた。それは君香であつた。彼女はその一週間前から全く絶食したのであつた。

長老は一同に最後の言葉をかける事が出來ないやうにその口を布で塞がれてゐた。

「あゝ長老樣！もう何も被仰る事はございません。妾達は勝ちました。天國は妾達の物でございます！おゝ何と云ふ光榮な喜び！」モニカは煙の中でかう云つた。

祐佐は刀を持つて自分の方に進んで來る男を見ると唐突けにその胸を蹴飛ばした。そして濫らに竹矢來の方に向つて走り乍ら「助けてくれ！誰か！誰か！吉三郎！」と叫んだ。血走つた彼の眼は狂ふ如く此友を探してゐた。恰かもその友の救ひに最後の望をかけてゐたやうに。しかし彼の縛された手には繩がついてゐた。その繩で彼は後ろに引き倒された。彼は起き上り、そして自分を捕へに來た者を再び蹴らうと足を上げた時、「助けてやらう。お慈けだ！」と云ふ聲が後ろにして、刀が脊中から彼の胸を突さ拔いた。彼は足を宙に上げたまゝ斃れた。

かくして奇怪なる運命の繰りによつて生涯としては廿七を最後に、仕事としては「唯一つの聖像」を此世への供物として彼はあへなく死んだ。

其時その刑場で一人の版畫師が「二人の女と南蠻鑄物師の死」と云ふ諷刺畫を描いてゐた。

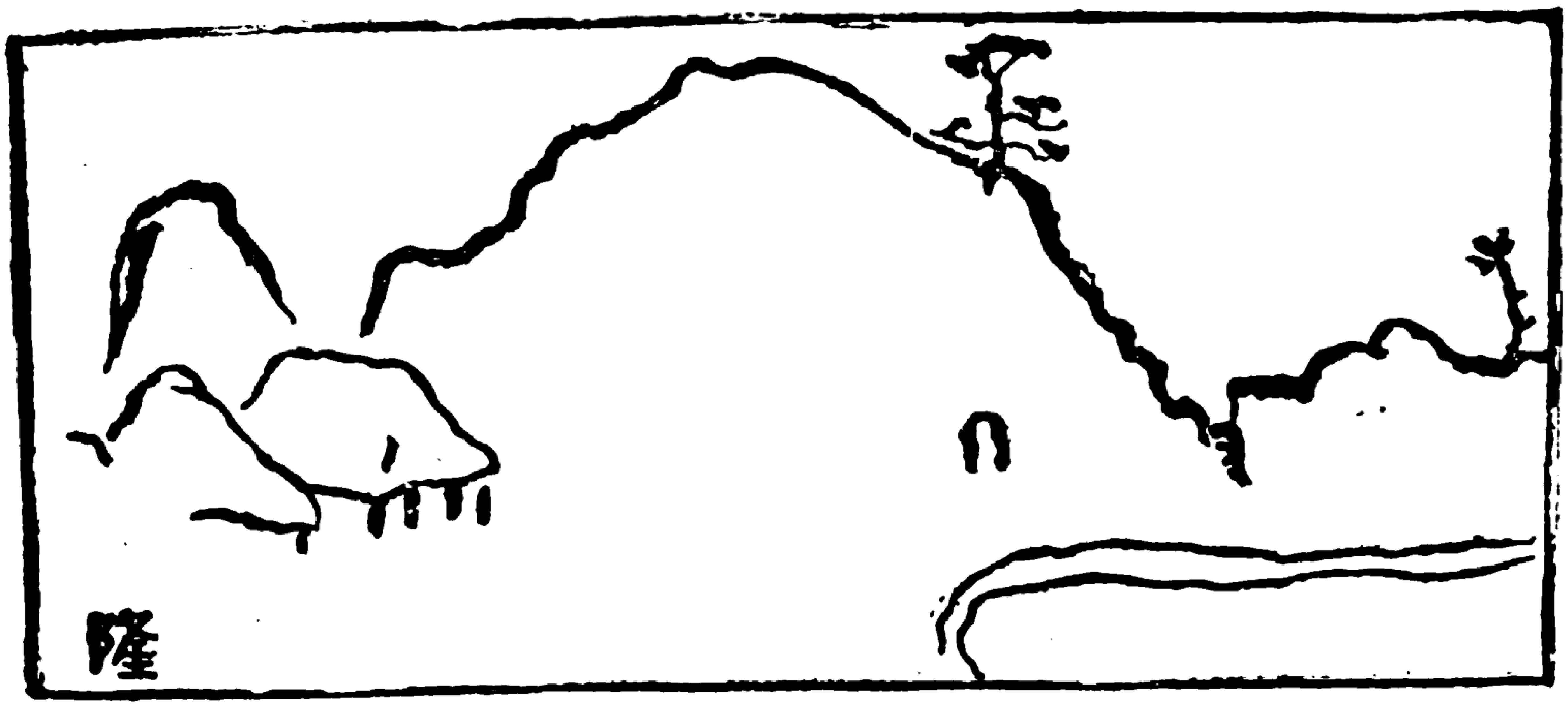
「あゝお蔭でわしにも傑作が出來たわ。」その男は、矢立てを帶に突つ込むとから云つてそのなま〱しい殘忍な基督を役人達の前で一同に見せ乍らトゲ〱しく大きな口をあいて笑つた云ふ迄もなくそれは孫四郎であつた。

しかし「貴方は矢張り信心を持つてゐらしつたのですわね。」とモニカが云つた事は誤りであつた。

萩原祐佐は最後迄決して切支丹ではなかつたのである！　彼は只一介の南蠻鑄物師にすぎなかつたのである！

附記

寛文の頃長崎古川町に萩原祐佐といふ南蠻鑄物師がゐた事、そしてその踏繪の神々しく出來すぎた爲めに信者と誤まれて殺された事は事實である。又拷問の仕方や、始めの歷史敍說は無論、澤野忠庵と云ふ轉び伴天連が踏繪を發明した事も事實であり、アントニオ・ルビノと云ふばてれんが殺された事も事實である。此作の生れるヒントを與へてくれた長崎永見氏に此處で記念としてお禮を述べておく。　一九二二年一一月二九日



疎隔

神近市子

俊吉老人は、停車場で村から連立つて來た五六人の仲間と別れた。

『それでは杉本さん、こゝでお別れにしますで、よろと氣をつけてお出でなつせ。ご子息にお逢ひであつたら、わつらがこともよろしゆうお願ひしますだ。』

かう云つたのは、老人の東隣に喰べるほどのものを持つて、村でも工面の好い仲間のうちに數へられてゐる幸平と云ふ百姓であつた。彼は粗末なマントの下に、少しの蜜柑や卵の包みを下げてゐる。彼はこれから演說會が始まる迄の時間を、娘の嫁付き先で孫の顏でも見乍ら待たうとしてゐたのであつた。

『有難申します。遠いところを悴の爲めに態々見えたやうなもので、さう申して聞かしたら、なんぼうかよろこびませうに。』

俊吉老人は思ひがけなく降つて湧いた喜びの爲めにワク〳〵として、只だもう子供でゞもあるやうに胸をおどらしてゐた。彼はこれからそこの町の旅館に、東京から前日あたり着いてゐる筈づの自分の長男を訪ねようとしてゐたのであつたが、ま

るで知らない大きな旅館に、樣子の分らない偉い人々と一緒になつてゐる自分の子を訪ねるといふことが、如何にも晴れがましくて、彼は仲間の者に面はゆいやうにさへ考へた。

『淸さんに竹さんは、別に用向きもありますねえなら、わつらと一緒に旅館の方に待たして貰ふたら、どうしたもんですかねえ？』

老人は其の二人が、町には別に訪ねるやうな知合ひもないのを知つてゐたので、かう誘ふて見た。彼は出世した自分の子の演說をするのを聞く爲めにわざ〳〵一日の仕事を休んで來て吳れたといふ爲にも、村の人にさう言はなくてはすまないやうに感じたのであつた。けれど、二人の百姓は頑强に頭を振つた。

『なあん、わつら大學の先生樣などの前に出ては、ちやんとよく坐ることも判らねえだ。それよりも婆さんに古着を買つて來いと言はれたで、古着屋の方でもゆつくりひやかして、すんだら幸さんの娘衆のところでも寄せて貰ふて、辨當でも使はして貰ふべ』

『おゝ、さうさつせ。そんならおらも其の意りで待つてゐるだに』

幸平老人も愛想よくさう言つた。彼の娘は建具屋の職人にかたづいて、もう二人ばかり孫も出來てゐた。

『それぢや、どうも別にお勸めも出來ねえな。ぢやまた會場の方へでもお伺ひすることにして、わつらだけ先にやつて貰ひますかな』

老人は遠慮深くかう言つた。彼は自分の出世した子供の爲めにも、一層謙遜に遠慮深くあらうとつとめた。

『あゝ、さうさつせ。今日は俊さんはわつらの世話どこではねえだ。待つてゐる人があるだに。ほんとによい子は十年の豐作だつて言ふが、俊さんのは十年や二十年でねえだ。一生の豐作だ。早う顏見せて、喜ばしてあげることだね』

『大事にして側を離しまいぜ。樂しみなことだ。絹布團か何かの上で、晩まで待つのでせうさ』

百姓達は何かと頭に來ることを、がや〳〵言ひ合ひながら、老人をうらやましがつた。おとなしい老人は、さうでなくとも久し振りで可愛い息子の顔を見ようといふので、胸が一杯になつてゐたところで、其の上の仲間の追從は、彼をまご〳〵とさせてしまつた。彼は頻りに顔を赫くしながら、それでも嬉しさうに皆なに會釋して別れた。

『十一時に終列車がありますだ。皆なそれで一緒に歸り度いと思つてるだが、杉本さんは勿論判らねえな』

幸平が老人の背後から思出して叫んだ。老人は二足三足戻つて來た。

『なんとも判りますねえだ。婆さんが一緒に是非連れて歸つて來て呉れと言つとりますで、悴の都合次第で、直ぐ一緒に歸りますとも、また今夜だけ旅籠に泊めて貰ふて、明日一緒に村へ歸りますとも、さつぱり樣子が判りますねえだ』

『おほきに』

二三人の百姓が仰山にこつくりをした。

『でもまあ、連れは皆な其の汽車で歸らうとしてゐるで、あなたも都合もあるだらうと思ふたで、ちよつと申し上げておきますだ。それでは』

『お氣をつけなせえ』

老人はまた挨拶をして、自分の目指す方へ歩み出した。彼は其の息子からは、宿に就いては何の通知も貰つてはゐなかつた。けれど町と言つたところで、東京から來る自分のある人が、落付きさうなところは、十軒も二十軒もあるのではなかつたから、心あたりの宿を次から次に二三軒訪ねて廻る意りにしてゐた。講演會を開催した町の役所に行つて聞けば、一番簡單でよいと考へないこともなかつたが、しかしそれでは彼が自分の息子の出世を餘り見榮にしてゐるやう

に思はれることもあやぶまれるので、彼はわざと廻りくどい方法を取ることに定めたのであつた。

朝の寒さに引き比べて、其の日は實によく晴れた小春日和であつた。市の紀念日を二日後にして、町はなんとなく活氣がいつて賑かであつた。其の日の仕度くに人夫などが、町の辻々を飾つてゐた。花傘、旗、提灯などゝけば〳〵しい色彩が、明るい町を一層明るくして見せてゐた。子供達は何かの待ち設けに、それ〳〵の小さい無邪氣な心を一杯にして、生々とした興奮を見せて大聲に驅け廻つてゐた。

人だかりのしさうな要所々々には、紀念日の催し物のビラが一面にはつてあつた。素人相撲大會、擊劍試合、自轉車競爭、素人芝居、其他何、其他何、と言つた風にべた〳〵とはつてあつた。が、其の中に特に老人の眼を鋭く射たのは市主催の講演會のビラであつた。さすがに役所の催しだけに、他の興行物のやうにむやみに人の心をそゝるやうなことはしてなかつたが、其の代りにそれらしく上品な正確さを以て、他のビラを威壓するやうに一段高く吊してあつた。講演者の中には、勿論法學博士杉本俊作と彼の愛子の名が、〇〇大學法科教授といふ、いかめしい肩書きを附けて書き出してあつた。他に軍人の名が二つと、實業家の名が二つならべてあつた。皆な土地出身の所謂成功者で、今度の紀念日の爲めに、市が其の名譽をかけて招待したのであつた。

町々にこれ等のビラを見て行く時、俊吉老人の胸は、あやしくときめかずにはゐなかつた。實際に彼は、自分の子には過ぎたものであつたことを心から感謝した。

『十年どころではねえだ。一生の豐作だ』

彼の仲間が彼を祝福して吳れたことは間違ひではなかつた。水車小屋を抱へた小川の邊の老人の荒家から、誰が大學に澤山の人を敎へるやうな立派な人を出することを豫期したことであらう？

彼は愛子が成長した頃のことを、何一つ忘れずに覺えてゐた。俊作は俊吉が小柄で容貌なども取るに足らないとは反對に、母親に似て、色の白い鼻筋の通つた立派な子供であつた。彼の妻は、俊作の後に四人の子供を生んだけれど、俊作にまさつた子供は一人も出來なかつた。家族の希望も愛も、それで俊作一人の上に集められ、特に俊作の爲めには他の子供を餘計な邪魔物にさへ感じたことがあつた。

『ほんとにあいつらは、あれとは一つには話すことも出來ねえだ』

今ですら俊吉は、ともするとそんなに考へるのであつた。

俊吉を中學に通はせるといふことも、普通なら殆ど問題にもならないところであつた。けれど俊作が學問に對する烈しい愛着と立身といふことに、總ての目標を据えてゐたことを發見したので、彼等夫婦は久しく頭を悩ましたものであつた。けれども夫婦の心は決した。彼等四人の子供を犧牲にして、一人の俊作に目的を遂げさせようと決心した。

『お前達は作兄さんが、立派な人になるのが嬉しいか』

老人は俊作の下になる二人の子供を、側に呼んでこんなに訊ねた。

『嬉しいならお前達は奉公に行かなくちやなんねえ。其の代り兄さんが出世したらお前等のことはどうでも見て吳れるだ』

老人はこんなに二人に因果を含めた。二人の弟妹は、父や兄の共同の目的に自分達が力を籍すのだと知ると、むやみに喜んで手もなく奉公に出ることを承諾した。

『兄さんを中學にやるとすれば、一人でも食扶持を減らすのが上乘だ。明日からでも行くところがあれば行くことだ』

父親はかう最後の宣告をした。いたいげな弟妹の決心を見ると、俊作は心から感謝して物陰で泣いた。

『すまない。其の代りおらが目的を遂げた上は、必らずお前等の面倒を見るだ。十年、永くも十五年待つて呉れ』

彼はかう叫んだ。

愛子の決心を聞いて共涙を流した彼は、もう老ひて腑甲斐なかつた。彼の妻は永く病氣に伏して、さらに頼りなかつた。彼等は最後の娘に入夫して、水車と少しの田畑の耕作を引繼がし、それに倅作から來る月々の補助で、どうにか不自由なく生活を支へて來たが、彼等一家の永い間の希望は、今に其の姿さへ見せなかつた。既往は既に其の希望を呑み、そして將來は尚ほ更ら何人も何らの期待を持つことを許さないやうにさへ思はれた。倅作は今の位地に登つた頃、一度郷里をあわたゞしく訪ねたことがあつたが、それ以來まだ老親を省ることも出來ないで暮してゐたものであつた。今度思ひがけなく近郷の町の開市紀念の催しに招かれて出張したのは、十年振りに近かつた。

このことを聞いた老人は、心から打ち喜んだ。彼はともすると彼を惱ましてゐた疑惑を、自分から進んで押しのけようとした。そして彼は其の明るさと希望とを以て、病妻と他の家族の希望と好意とを新しくしようとした。

『作は今度こそ家に歸るだよ。歸つて二三日はゆつくりするだ。作は鰻がえらい好きだつたで、鰻でも少し捜しておいてかましてやろかな』

彼は朝の火鉢の前の思案ごとにかう叫んだりした。

が、今彼は町の目貫な通りを、とぼ／＼と歩いてた。町の混雜はます／＼烈しくなつて、自轉車が飛び、人力が走つてゐた。乘合自動車がけたゝましく人を追ふて、其の間を通つて行つた。皆な町の催しに出ようといふ在郷の人らしくけば／＼しい白いシヤツや硬ばつた着物の線が、際立つて見えた

老人は息子の爲めに訪ね廻るには及ばなかつた。彼がその通りの大きな新らしい旅館の前に立つた時、彼は自分の

息子の名が、他の客達の名とならべて、れい〳〵しく書き出してあるのを見當つた。

『〇〇大學敎授法學博士杉本俊作氏御宿』

其の札にはさう書いてあつた。札は其の他にも立つてゐた。けれど老人は其の最初の札を見るだけで澤山であつた。

彼は急に何かに怯えたやうな威壓されるやうな氣がした。

彼が古い袂の短いインバネスの袖を返して、つか〳〵と宿の入口に進み寄つたのは、それから少し間があつた。彼はなんとなく氣をくれがして、思案しながら、やゝ久しく旅館の樣子を窺つてゐたのであつた。が名譽ある客を呑んでゐる旅館は、奥まつた所に人の動く樣子が見えるだけで、表の方は門を立ち出る人の影もなかつた。彼は思ひ切つて入口に近づいた。

『御免下さいまし。御免下さいまし』

彼はおそる〳〵二聲ばかり聲を振り立てた。が其れは誰も聞きつけるものはなかつた。帳場の奥は、間の障子の硝子越しに見えたが、そこに坐つてゐる人は、眠つてゐるのか身動き一つしなかつた。

老人はすつかり當惑して茫然とあたりを見廻すよりほかはなかつた。彼が他に救ひを求めやうとして、うろうろとそこを離れかけた時、ばた〳〵といふ輕い足音が聞えて來た。そして直ぐにそこの二階に通ずる階段を二十四五の若い奇麗な女中が降りて來た。

『御免下さいまし……』

老人は腰をかがめて、玄關の上り端に手をついた。

『お爺さん、何か御用かね?』

女中は怪訝な顔をしながら言つた。
『少々ものをお訊ね申しますだ、こちらさんに杉本ちう者が、逗留してゐるではございますまいか』
『杉本さん?』
女中はかう口の中に繰り返すと、尚ほ怪訝さうに老人の様子を見てゐた。
『杉本なんとおつしやる人を、お訊ねになるんだね』
『えゝ杉本俊作ちう者でございますだ』
『へえ、そしてあなたさんは、どなたですか』
かう言つた女中の言葉には、初めてものに驚いた様子が見えた。
『お親父でございます、俊作に田舎の親父が訪ねて來ただと、お取次をお願ひいたしたうごぜえます』
老人はかう言ふと、またふかく〳〵と腰を曲げた。
『少々お待ち下さいまし』
女中は運んでゐた盆を物蔭にさし置くと、急に新しく身づくろいして、老人にかう挨拶をした。彼女はやうやくにして、思ひがけなかつた事柄の眞相を學んだのであつた。余りにありふれた、あまりにありさうな事實を彼女は忘れてゐたものであつた。さうと氣付くと、彼女は彼女の立場を一分も誤らなかつた。
『只今は御來客ですが、さう申し上げますから、少々お待ち下さい』
彼女はもう一度會釋した。老人は慌てゝまたふかく〳〵と腰をかゞめた。
それから女中が老人の所に歸つて來たのは、かなりな時間が經てからであつた。老人が待ちこがれてゐた俊作の顏は

見えなかつた。老人の顏が、ことの意外さにおろ〳〵と歪むのを見ると、女中はそこに手をついた。

『どうかお上り下さいまし』

彼女はかう言ふと、かひ〴〵しく老人を助け、二階へ階段を導いた。そして彼女が仕度をしておいたものらしい廣い靜かな部屋に彼を招じ入れた。

『只今少々御用事でございますから、どうぞここで少しの間お待ちを願ひ度いといふことでございます』

彼女はみすぼらしい老人に對して叮嚀にしなければならない、自分の滑稽な位置を、つとめて意識しまいとする風で疊の上に眼をつけながら、切り口上でかう言ふと、其のまま音をたてないやうに唐紙をしめて、何處にか立ち去つた。

二度目に彼女が現はれた時には、彼女は見事な茶器と菓子器とを携へて來てゐた。そしてもの馴れた樣子に老人を驚かしながら、黄色なねつとりとした液體を、茶椀の半ば注ついで、老人の前にさし出した。そして餅菓子の這入つた菓子器の蓋をとつてすゝめながら、また滑るやうに出て行つた。

一人になると老人は、ほうと長い溜息をもらした、彼は絹の布團の上に胴丸の火鉢と菓子器と茶器とにとり圍れて、妙にそぐはない氣持ちでそこに坐つてゐた。彼は乾いて、お腹をすかしてゐたが、それでも何かが氣まづくて、菓子など摘む氣にはなれなかつた。

「まあよかつた」

老人はかう思はぬでもなかつた。が、ただ俊作が影も見せないことは、老人の心を寂しくした。彼はなんとなく希望に欺かれたやうな氣がした。しかし今の場合そんなことは、眞面目に考へてゐる可きことではなかつた。俊作が土地の有力者達にとり圍まれて、次々に何かと打ち合せに忙殺されてゐることは判り切つたことだつた。俊作は今夜多くの人

々の前に立つて、其の一つの言葉、其の一つの身振りによつてさへ、多數の人に感化と影響とを與へやうとしてゐたのであつた。なんといふすばらしいことになつたのであらう！　それを考へると、老人はわく／＼として落付いてゐることが出來なかつた。

が、寒さと空腹とが、いつか知らず老人を征服してしまつてゐた。それから寒さと空腹から來る疲勞の爲めに、老人は最愛の息子のことを忘れやうとしてゐる時になつて、急に廊下を、其の部屋の方に來る人の足音を聞いた。

『この部屋かね？』

から女中にものを訊ねてゐるらしいのは、俊作の聲に違ひなかつた。老人は急に身體をすぼめた。

『やあ！、お父さんでしたか、大變お待たせしました』

無雜作にかう言つて、俊作はフロツクに包んだ姿を現はした。

『いろんな人が、なんだかだと言つてやつて來て、話し込んでゐて、つい失禮してしまひました。』

俊作はかう言ふと女中が運んで來る座布團の上にどつかりと坐つた。

『あなたもいつも元氣で結構ですね』

『あゝおれはこれで鼻風一つひかないで、年中押し通すだ、東京でも奥さんに子供等も達者かね？』

老人は俊作の家族のこととなると、なんといふこともなく氣がひけて、親しみを以て語ることは出來なかつた。自分で其のことを意識すると、彼は一層氣まづい口のきゝやうをした。俊作は大學で彼をさき立てた恩師の娘を娶つて、一男一女を擧げてゐた。

『なんですか、風邪ばかりひき易くて、この頃では三人が、替る／＼床に就いて大騷ぎです。でもまあ、いつも大した

ことにはならないのですがね』

訊ねられた方も一向に氣乘りがしないやうにかう答へた。そしてどちらからといふこともなしに、言葉は途絶えた。

丁度其の時旅館の前を通りかゝつた樂隊があつた。障子にはまつた硝子越しに見ると、其れは紀念日の催しをふれ步く町の若衆のやうであつた。いろいろな滑稽な假裝をした人達が、得意げに樂隊の後をねつて行つた。

『町はえらい騷ぎで……』

樂隊が通り過ぎた時、老人はほつとして、息子の顏色を見ながら言つた。が、そこには冷い微笑があつただけであつた。

『……………』

『お前さんが演說をやりに來るといふので、村ではえらい騷ぎで皆仕事を休んで聞きに來たつけが……』

老人は今朝仲間と別れる時に、幸平老人が言つたことを思ひ出した。

『東隣りの幸平さんも、淸さんも竹さんも來て下すつたのだ、そしてよろしゆうに申し上げてくいろと言つておりましただ』

老人はなんとなく立派な役人の前にでも出た時のやうにおど〳〵しながら言つた。

『私のする講演は、判る意りで來たんですかね』

俊作はなんとなく面倒くさそうにあしらつた。

『何をいふだね、判る判らんは第二として、皆ながお前の出世を、自分の家のことのやうに思つてゐたのだ』

『いや、さうでしたか、はゝは……』

彼は無雜作に笑つた。彼の其の調子には、どこか高慢なところがあつた。十年の間の彼の名聲ある地位は、彼をすつかり別人にしてしまつてゐた。少くも老人にはさう感じられた。

『久しく會はんであつたが、お前さんも變つたつけの。身體はいつも達者でしたかい』

老人はまた自分の方から口を切つた。彼は其の場の氣まづさから、逃れようとするもののやうであつたが、彼は自分で心の中にあることを、卒直に言ひ現はすことは出來なかつた。

『だいぶ久し振りであつたが……』

『えゝ、僕はいつも達者なんです。ところでお母さんは、其の後よいといふ方でもありませんかね？』

『あゝ、いつも〳〵お前さんに迷惑をかけてすまないの。どうも余りよい方でないもんだから』

『…………』

唐紙がまた音もなく開くと、さつきの女中が次の間に頭を下げてゐた。

『時間が追々迫つて參りますから、皆さんが御食事に遊ばすさうでございますが、こちらは如何いたしませう？』

女中はうや〳〵しく訊ねた。

『さうか………』と博士はポケットから小型のプラチナの時計を出して見ながら答へた『それでは皆さんと一緒に食事をしよう。今そつちに行きます』

『…………』

女中は默つて頭を下げて、そこを引きさがつた。

『でお父さん、あなたはどうなさるのですね』

彼は立ち上つて、洋服の膝の塵など拂ひながら訊ねた。

『さあ、わつらはなんだか婆さんが、今夜の演說會がすんだら、さつさとお前と二人で歸つて來てくいろと言ふたもんで…今夜はもうお前さんには會はれめえと思つとつたのが、お前さんが思ひがけなくやつて來るといふので、婆さんの騷ぎやうたらねえだ。演說會に行つて、樣子を見て來てくいろ、話をしてくいろと言ふてな』

『ではあなたも來る意りですね』

『邪魔にならずば行きてえもんだな。それとも一緖について行つたら、邪魔になりますかい』

老人は遠慮して俊作を見上げながら言つた。

『邪魔つてことはありません。が、私は他の連中と一緖に自動車で行くことになつてゐますから、お父さんは食事でもやつたら、一人で出かけて行つてゐて下さい』

俊作は事の面倒なのに、あき〳〵とした樣子を見せた。けれど老人はまだ彼を離しともなかつた。

『したがお前さんは今夜わつらと一緖に村に歸つて吳れますかい』

老人はさつきからこのこと一つを確めやうとしてゐた。

『行つて吳れますかい』

『さうですね、今のところたんとも言へません。演說會の後で歡迎會をして吳れると言つて、いろ〳〵打ち合せに來て吳れた人もありましたが、まだ判然り定まつてゐる譯けでもありません。もし其れが延びるやうでしたら一緖に行きませう』

俊作はかう答へると、老人から解放されたやうに、ほつとした樣子を見せて出て行つた。

『食事をさう言つておきますからね』

俊作が出て行つてしまふと、老人は心からがつかりした。彼は寢ても起きても忘れる事が出來なかつた自分の子供に會つたので、餘程滿足して幸福である可き筈なのに、事實はさうでなかつた。俊作がそこにゐる内は、老人は何となく氣骨が折れて、始終はら〳〵してゐたのであつた。俊作は中年を迎へると、なんとなく氣むづかしく、老人の言ふことなど頭から問題にしてはゐない樣子で、反つて自分の側から追ひのけやうとしてゐたやうにさへ老人には、感じられてゐた。

が、俊作が今日演說會の後で、一緒に村に歸ることを、割に手輕く約束したことは、彼にとつては、總ての疑惑と苦痛とを償ふて餘りあつた。其一つの喜びが、彼を不安と失望との中から救ふて呉れた。彼は其の一つの喜びにすがつて、他の不安を暫時く忘れようとした。

間もなく別の女中が、黑塗の膳に、老人の見たこともないやうな立派な料理を載せて運んで來た。女中は別に銚子も運んで來て、頻りに老人に酒盃を起すやうにと勸めたけれど、一人全く變つた空氣の中に取り殘された老人は、好きな酒さへ飮む氣にはなれなかつた。中食を取らなかつた飢えた腹に、僅か二品か三品の料理に手をつけると、他は其まゝに下げて貰つた。

僅かに空腹を滿した時、老人は今夜停車場で、老人の幸福をうらやみながら別れて行つた仲間のことを思ひ出した。彼等はそれ〴〵の要件をすますと、幸平老人の娘の家に落ち合つて、そこで用意の辨當をつかつて、演說會に出かけることになつてゐた。誰に遠慮もなく、建具職人の薄汚い茶の間に、ごた〳〵と坐り込んで、世話しに打ちくつろぎながら、幸平の娘がさしだす番茶に冷え切つた咽喉を潤してゐる筈であつた。其の氣易い遠慮のない有樣を想像してゐると

幸運であるのは、反對に彼等であるやうに老人は考へ始めるのであつた。貧しいながら單純で幸福な彼等の生活こそ、今の老人には最もうらやましいものに思はれ出した。出世した子を持つといふことは、決して家族の者にとつては、幸福を與へないといふことを考へた。反對に其の子の爲めに、其の對象となされて、世間の前に一層みじめな一層貧しい姿を曝してゐるもののやうであつた。老人はたとへば女中の妙に叮嚀な態度のことを考へずにはゐられなかつた。俊作さへゐなかつたら、彼は決してこんなに人を威壓するやうに聳えてゐる旅館などに來て、なんにも知らない女達からじろ〳〵と白眼で見られることもなかつた。老人には總てがあまり思ひがけなかつた。彼は最近になつて、夜も晝も積み重ねてゐた希望がぐら〳〵と壞れて行くのを感じたのであつた。

老人は間もなく默つて旅館を出た。時間はまだ早いといふことは知つてはゐたが、其のままそこにつくねんとしてゐるよりは、建具屋の家に立ち寄つて、仲間も一緒に落ち合つて、會場に出かけた方がよささうに思はれたので、女中も呼ばず、俊作にも言斷らずに出てしまつたのであつた。

訪ねて行つた建具屋には、仲間の者は一人もゐなかつた。幸平老人の娘が、子供を相手に留守をしてゐたが、俊吉老人を見ると、驚いて不審さうに老人の背後を覗いたりした。老人が一人でやつて來たことが、彼女にはなんとなしに思ひがけない、全く意外なことのやうであつた。

『晝過ぎまで皆なで話がはづんでゐたのですが、皆さん今夜は、是非終列車で歸るといふことで、宅が案内して、いろいろな催し物を見に出かけました。見物がすんだら、何處ぞで茶にでもして、時間までには演說會の方に行き、杉本さんのお話を聞くのだつて申してをりました。ほんに今度は、あなたさん方もお喜びのことで、小母さんがどんなにか御滿足のことだらうと、さつきも皆さんにさう申したことでございますよ』

幸平の娘はさう言ひながら、熱い番茶など入れて、傳吉老人をもてなした。器量はよいといふほどの女ではなかつたが、すなほな性質のよい子で、老人の末娘とは子供の時から、特に仲よしであつた。

『お末さんはどうなすつて？　子供さんが大きくなんなすつたでせうね。後はまだ出來ませんか』

彼女は女らしく細かくものを問ひ訊ねた。老人は手土産代りに、小錢を子供に握らせながら、村のことや町の話をしてゐるうちに、いつとなく打ち寛いでしまつて、愉快な輕い氣持になることが出來た。

演說會が始まる二三十分ばかり前に、老人はそこを立ち出た。

『なあにね、皆なこゝで落ち合つて行かうといふことであつたで、わつらも一緒にしようかと思つて訪ねて見たのでしたよ』

老人はなにげなくかう言つて、立ち出でたが、どことなくしほ〳〵として寂しさうであつた。

『折角のところを殘念でございましたね。皆な息子さんと御一緒であらうと申して、お出でにならうとは夢にも思はない風でしたよ』

建具屋の若い女房は、なんの屈托もなさゝうにさう言つた。

『…………………』

老人はなんとも其れには答へなかつた。彼は一人すご〳〵と會場の方へ出かけて行つた。會場は町の中央にある大通りを、少し右に這入つた公會堂があてられてゐた。粗末な建築ではあつたが、それでも御大禮の紀念事業に建てられたもので、ちよつとした人數は入れることが出來た。今老人がそこに近かづく頃には、もう時間も間もないことで、いろいろな服裝をした群衆が集まつて來てゐた。彼等のうちには白いシャツを襟と袖口とに覗かした村の青年もあつたし、

在郷軍人のしかつめらしいカーキ色の正服をつけた者もあつたし、氣取つたインバネスの袂を、背後にはねて屛風を切つて行く町の人もあつたし、紋附袴の教員らしい四五人の連れもあつた。彼等を迎へるもの〻やうに花火は幾度も打ち上げられた。夕方の青く澄んだ靜かな空に、花火の鋭い音が起る毎に、塒に歸らうとしてゐる鳥の群れは驚き、群衆は喜び騷いだ。總てのものはうき〳〵とした喜びの中にあつた。けれど袂の短いインバネスに身を包み、腰に兩手を廻して、屈伏した身體を太儀さうに運んでゐた老人には、何の喜びも感じられなかつた。青く澄んだ靜かな空も、花火も、喜び騷ぐ群衆も皆なものうく、寂しく感じられてならなかつた。

老人が其の群衆に近かづいた時、老人とは反對の路から飛び出して來た一台の自動車があつた。其れはけた〻ましい爆音を立てながら、群衆の中に道を開かうとしてゐた。群衆は爆音に驚いた風に、一度は兩側に寄つたが、其の自動車に乘つてゐた人が誰であるかを認めると、また潮のやうに自動車の周圍に押して行つて、其の道を塞いでしまつた。自動車には四人の人が乘つてゐた。一人は市長のやうで、他の一人は胸に澤山の勳章を下げた軍人であつた。そして三番目は、たしかに俊作であると老人は考へた。彼は群衆に押されて、背後の物蔭から、其の光景を見てゐたのであつた。老人は其の瞬間前のくづほれた氣持ちとは反對に、急に興奮を覺えて、掌で視力の衰へた兩眼をこすりながら、頻りに自動車の方を見守つた。

と、彼の俊作は群衆に挨拶する爲めに、右手を帽子にかけようとしてゐた。

『……杉本博士萬歲！……』

かういふ聲がどこからとなく群衆の間に起つた。其れは次から次に人々の口に傳はり、最後には全體が一つになつて名譽ある博士を祝福してゐた。

『……杉本博士萬歲！……』

そこに取り殘されたやうに物蔭に立つてゐた老人の兩眼からは、たゞ譯けもなく涙が流れ出た。そして其れに氣付いた老人がとめようとすればするほど、涙はこみ上げて來るのであつた。

『もし杉本さん……杉本さん……』

突然かう言つて肩をたゝく者があつた。見ると其れは建具屋の主人であつた。彼の背後には老人の連れが立つてゐた。

『やあ、杉本さん、大したものですね。どうです、息子さんには會へましたかい』

幸平老人は俊吉はまだ息子に訪ねあたらないでゐて、偶然そこで其の姿を見かけてゐたものだと考へたやうであつた。

老人は彼が旅館に息子を訪ねて會つたことゝそして會場には一緒に來られない事情があつたので、皆なと一緒になる意りで、捜したことを手短かに物語つた。

『それはお氣の毒であつたな。實はこちらが案内して下さつたので、今日は二時頃から所々を見物さして貰ひましたよ、早くさうと判れば、お誘ひするのであつたにな』

仲間はかはる〴〵から言つて、老人を氣の毒がつた。

『なるほど俊作さんは同じ俊作さんでも、昔の俊作さんではないのだから、一緒にやつて來られないといふのも、もつともだ。立場が立場だでな』

彼等は單純な心から俊作の態度に就いて、何の疑惑をも持たない樣子であつた。老人が旅館でどんな氣持ちがしたかといふことなど考へて見る人もゐなかつた。

『…………』

俊吉老人は無言のまゝ寂しさうにたゞうなづいて見せた。

一同は建具屋の背後について群衆にもまれながら公會堂の中に這入つた。そして中央の話を聞くには、かなり便宜のよい席に着いた。

直ぐ公會堂は群衆で一杯になつた。さうした狀景のもの珍らしいのと、會場外の興奮もまだ醒めきらないのとで、彼等はがや／＼と騒いで鎮まらなかつた。誰も彼も杉本博士の噂さで持ち切つてゐた。彼等は自動車の中にチラと見た博士について、自分達が知つてゐる丈けのことを口にすることによつて、博士に對する自分達の渇仰の想を滿さうとしてゐる風であつた。

『博士と云ふからには、私は又もうよほどの年頃の方と思つてゐましたよ。まだお若いですね。』

かう云つた人があつた。

『そりやさうでせうさ。まだ四十を一寸出た位の方でせうよ。』

第一の人とは何の因緣もない次の人が、かう答へた。

『へえい、それでは余程若くて博士になられた方ですね。』

『それはさうでせうよ。何でもあの方のやうに若くて博士になつた人は、何人とかより無いと云ふのですからな。』

『偉いものですね。』

第二の人は直ぐに第一の人に答へる代りにたゞ大きくうなづいて見せた。

『偉いなどゝ云ふことは、あの人などには月並のことでせうよ。』

俊吉老人の直ぐ後方で、こんなに聲高く話す人々があつた。

『私は、杉本博士とは中學時代の同窓生でありまして。』

又かう云つた商人風の男があつた。

『あの人も村生れの人で近くには中學校がなくて、こゝ迄毎日二里の道を通つて來られたものでありますよ。よく出來る人ではありましたが、まさか今日のやうに大名を爲す人であらうとは思ひませんでしたよ、へい。』

その男は、人間の運命と云ふものがいかにもはかり知れなくて、好くも惡くも無際限であることを今始めて感じる風で、染々とした調子をもつてかう云つた。彼は杉本博士に較べて、全く無名の一商人に過ぎない、自分の過ぎ越し方を考へて、どこにこの二つの運命の相違の點があるかを見やうとしてゐるやうであつた。

『ほう、あなたが中學時代の友人でありましたかい？ なら、博士の方でも無論あなたを覺へておいでになることでせうな。どうです、旅館の方にでもお訪ねになりますかい？』

百姓らしい男が無遠慮に商人に尋ねてゐた。商人は滅相もないと云つた風に頭を振つた。

『博士方のやうになれば、毎日又は毎半日一人や二人の新しい人に逢はれることでありませうから、古い中學時代の仲間のことなどは頭にはありますまいよ。それもこちらが議員とか會社の社長とか云ふのであつたら又別ですが。』

その男は、自分が忘られてゐることを當然のことゝして、その爲めに杉本博士が尙ほその偉大さを增すことをよろこんでゐるもののやうにさへ考へられた。

周圍に行はれる高話を聞きつける度に、仲間の者はソツと老人のインバネスを引いた。

『えゝ、俊さん、どうしたものだな。お前さんとこの作さんの評判たら大したものだぜ、えゝ？』

彼等はかう云つて老人の幸福を心から祝つた。

そして老人自身もさうした空氣の中にゐるうちに、ツイさつき迄も彼れの心を諦めつけてゐた失望と不滿との暗い氣

分を忘れやうとしてゐた。彼は旅館で逢つた俊作が傲慢で冷かであつたことさへ、一の悪夢として忘れやうと努めた。そしてその代りにその俊作を待ち焦れてゐる老妻が、今日の會場の様子を聞いて、どんなによろこびどんなに咽び泣くか、それを想像しやうとして、何時か自分迄ホロリとなつてゐた。彼は群集と一緒に、熱心に講演者の出現を待つてゐた。

× × ×

正面の演壇の上が忙しくなつたのは、それから間もなくのことであつた。市の吏員達の手で、白い紙に大きく書いた其の晩のプログラムが、ベタ／＼と壁にはられた。そして背後にならべてあつた椅子が、一つ／＼前面に持ち出される頃には、左手の扉が開いて、そこから主催者たる市長を先導にして、洋服の紳士達の一團が、どや／＼と會場に這入つて來た。市長の直ぐ背後は、其の晩の講演者である二人の主賓であつた。群衆は直ぐに其れを見分けた。彼等は一人一人に自分が他人よりもよく見ようとして、皆な總立ちに起つてしまつた。俊作はしつくりと身體に合つた黒のフロックコートに、華奢な身體を包んで、これも黒い山高帽は、脇に伏せて持つてゐた。つや／＼とした頭髪や高い廣い額やよく通つた鼻など、よく統一のとれた顔立ちは、其の重々しく結んだ口もとゝ共に、幾分人を見下した傲慢な性格を示してゐた。其れがまたこの人を如何にも貴族的に見せてゐた。何人にも彼が小川のほとりの貧しい水車小屋に生れた人だとは到底思へなかつた。

其れと比較すると、栗色の顔をした軍人の方は、なんとなく見劣のする、子供のやうに澤山の勲章を飾つたりして、單純な人間らしく思はれたが、それと同時にのんきな氣易い氣持ちを人に起させた。彼は杉本博士の前座として、市長の紹介で壇上の人となると、『歐洲戰爭と新武器』といふ題で、大戰爭中に發明された新武器の數々を掲げ、それによつ

て將來の國家間の戰爭なるものが、どんな方面に進まうとしてゐるかといふことを、極く簡單に述べ、軍人らしく其れに關して地方の靑年の覺悟と奮起とを起望して話をとゞめた。其の話の間彼は如何にも不安らしくそわ〳〵として落付きがなかつた。そして話のうちに我知らず其の地方の訛を出したりして、若い人々を喜ばしてゐた。

其の軍人に代つて、杉本博士が壇上に立つと、聽衆は威壓されるものゝやうに、其の樣子が全く變つてしまつた。博士は雄辯其のものとも思はれるやうであつた。矢張り市長の紹介で重々しく起ち上ると、彼はやゝ暫時く兩手を前に組んだまゝ、無言で聽衆を眺めてゐて口を開かなかつた。彼のこの動作は、幾分うき立つてゐた聽衆を靜かにした。彼等は始めてものを聞かうとするものゝ熱心を、其の顏にたゝえ始めた。これを氣付くと博士はおもむろに其のひきしめてゐた口を開いて、ゆつくりとした調子で、一語一語と重ねて行つた。

其の晩の彼の演題は、『世界に於ける民主主義運動』と題するものであつた。其れによつて彼は歐洲戰爭後に起つた世界の民主主義の運動に就いて、極く簡單な大意を述べ、この思想が過去に於て、日本の歷史にどんな變革を生じたかといふ問題に說き及び、最後にこの世界の風潮に對する現在日本の位置と狀態とを論じて、國民の自覺を促さうとするのであつた。

博士の演說は殆ど自由自在であつた。彼は軍人の其れのやうに、下書きも持たず兩手を前に或は背後に組みながら、演壇の上を左右に步いて其の話を進めて行つた。が、音量といひ、言葉の撰擇といひ、巧妙で且つ少しも調子はづれなところがなくて、何人にも前の軍人のやうに驅け出しの講演者でなく日本の最高學府の敎授として每日敎壇に立つて、多くの生徒を敎えてゐる人であることが感じられた。聽衆はこのめつたに得られない機會をつかみ得たことを心から喜んで、皆な熱心に耳を傾けた。老人は中央前列に仲間の者とぽつねんと坐つてゐた。彼は俊作のさうした講演を聞いて

ゐるうちに、いつの間にか以前のおづ〳〵とした氣持ちを打ち忘れ、半ば夢中になつてしまつた。壇上の俊作の顔を熱心に見詰めてゐるうちに、彼はいつとなく俊作自身になり切つてゐた。彼は俊作が頭を振り手を動かす度びに、彼自身も自分の頭や手が思はず動き出すやうな氣さへしてならなかつた。

博士の講演は一時間半の長時間に亘つた。其れが終ると市長の十二三のおさげに結つた愛らしい令嬢が、花束を二人の講演者に捧げた。聽衆は自分達が其の光榮を分つてゐるものゝやうに、喜びのあまり盛に拍手した。そして市長の家族と博士とが歡談する樣子を見落すまいとして、またも總立ちになつて爭つた。

主催者側が客人を連れ立つて休憩所の方に引き上げると、聽衆も何かと頻りに騒ぎ合ひながら會場を出た。俊吉老人もいつの間にか押されながら、仲間と一緒に外に出て行つた。

『お蔭さんで大學校の先生の演說といふものも聞いたし、これでわつらも一生の話の種になるといふものだ。俊さん、あなたの前ではあるが、どうも俊作さんは出來たものではあるわい。あれだけの話を覺書一つ持つでなくやつてのけようといふのだからな』

幸平老人は老人を顧みながらかう言つた。が、其れは彼の仲間の意見を代表して言つてゐたやうなものであつた。仲間の者も俊作をほめそやすことにはおくれを取らなかつた。

『わつらはえらくなんなすつたとは聞いてゐたが、どうも思ひの外であつたよ』

『わつらがあんな子でも持つてゐた日には、わつらは嬉しくつて、氣が間違つてしまふよ』

百姓達は自分達が感じたことを卒直に言つた。めい〳〵に醒め切らない興奮から、口をとがらして熱心に語つたのであつた。

老人の興奮も仲間にまさるとも決して劣ることはなかつた。が、たゞ複雑な感情が、彼の胸を滿してゐて、彼自身すら判然りと自分の氣持ちをつかむことが出來なかつた。

『時に俊さんはどうなさるだね？　わつらと一緒に歸りますかね』

幸平老人は人波に押されながら俊吉に訊ねた。

『それとも旅籠の方に行きますかい』

『さあ……………』

老人の顏には明かに當惑の色が浮んで來た。彼は俊作から一緒に村に歸らうといふ言質を取るには取つてゐたが、演說會がすんだ後、何處でどんな風に落合はふといふ具體的な打ち合せはしてなかつた。それで今幸平老人に、判然りしたことをさう訊ねられて見ると、はたと行き詰まつて、何とも返事のしようがなかつた。

老人がそんな事情であることを言ひ出すと、終列車に乘る意りの幸平老人は、一緒に弱つた樣子であつた。

『それは困つたつけの』

と彼は思案するやうに言つたが。

『それでは兎も角役人にたのんで聞いて見たらどうですか』

彼はかう言ふと自分が先になつて、會場にとつて返した。そして入口のところに何か忙しさうに取りかたづけにかかつてゐる役人らしい男を呼びかけた。

『ひとつものをお訊ねしたいのです。杉本俊作先生には何處に參りましたら、お目にかかれるでございませう？』

幸平老人は相手の氣持には余り顧慮する樣子もなく、聲高くさう訊ねた。が相手の役人が、不審さうに老人と老人の仲

間を見返つて、返事をしようとしないのを見ると、更らに追つかけるやうに老人は言つた。
『それが杉本先生の親御でございますが、今夜先生は親御と一緒に村の方へ行くといふことに旅籠の方で定まつて別れたのですが、こちらはなにしろこの混雜で、どうにも先生の近くには寄れないんでございます。何處に參りましたら、會はれますかい。ひとつよろしゆうにお願ひ申し上げます』
と老人が雄辯に述べた時、役人の顏が始めて解けて、其の疑ひ深さうな眼が急に微笑をふくんで來た。
『やあさうでしたか。實は先生は會がすみますと、この上のお寺で休息なさることになつてゐて、さきほど皆さんと庭傳ひにお引き上げになりました。なんでしたら私が御案内申し上げませう』
役人は鄭重に應待した。
『今夜は遲くもなりましたし、もう宿にお歸りになるばかりでせう。ただ御承知の通り、市長の御家族が御一緒ですから、お茶とは言つても普通よりは少し御手間が取れるかも知れません。けれど其の他には、なんにもない筈です』
役人の説明を聞くと、俊吉老人はほつとして、俊作が自分と一緒に家に歸つて行くことを、もう少しも疑はなかつた。彼は幸平老人を顧みて、彼等に自分は俊作に會つて行くから汽車に遲れぬ爲め、一足先に歸つて行くようにと勸めた。
仲間の者が立ち去ると直ぐに、役人は仕事を引き繼ぎにして、老人を連れて近くの寺の玄關口に立つてゐた。
『お爺さん、では中の樣子を覗つて、御取次ぎをして見るからね。少し待つてゐて下さいよ』
かう言ふと彼は一人どこともなく奧まつた方に這入つて行つた。
もう夜は遲く深けて、空には星のきらめきが冷たかつた。どことなく乾いた寒い風が吹いて、寺の廣い庭園の立木の葉が、かさこそと落ち散つた。大きな寺の建物は、暗い夜の中に寂然と聳えてゐた。金屏風を立て巡らした玄關口には、

電燈だけが煌々と明くついてゐて、そこらには人の影もなかつた。ただ奥まつた廣間と思はれるあたりからは、多勢の人のときめく氣配がもれて來た。門の近くに置かれた自働車は、疲れたもののやうに、または眠むたげに闇の中にじいつと横はつてゐた。

玄關口に人の影がさしたのは、それからよほど經つてからであつた。空腹と寒さとにいぢけて、老人はがた／＼と慄え出してゐた。

『えーと……杉本博士の身寄りの方といふのは？……』と言つて玄關口のくらがりに立つてゐた老人を覗いた者があつた『あなたですかね？……』

其れはさつきの若い役人とも違つた、もの／＼しい口のきゝやうをする四十余りの肥つた男であつた。片手をズボンのポツケツトに突き込み、片手に小楊子を使ひながら、彼は老人の前に立ち塞つた。

『一緒に歸るとか言つて、待つてをられるといふことであつたが、今晩はこんなに遲くもあるし、それに長時間の講演で、非常に疲れてお出でにもなるやうだしするから、また明日の御相談にしてはどうしたものですかな』

此の男は博士の意志とも自分の考へともつかぬ、ものの言ひ樣をした。

『それに只今は、まだちよつと饗應のところで、大勢の人が集まつてゐるところを今直ぐといふ譯けにもゆかないものでね』

彼は老人が杉本博士の近親であるといふことは、少しも信じてゐないもののやうに、あくまで傲然とした態度で言つた。

『へえい！……』

老人はかう答へたゞ、彼は何かに頭から打ちひしやがれたやうな氣がして、呼吸がとまるやうにさへ感じ、二の句がつげなかつた。

『ではお爺さんどうしますかね？』

彼は早く其の場を切り上げようとして老人を促した。

『へえい！……』

老人はもう一度かう言ふと、悲しみとも怒りとも判らないものが、胸に込み上げて來た。絶望の深みから彼は役人の上に、かすんだ老眼を据えて見上げた。

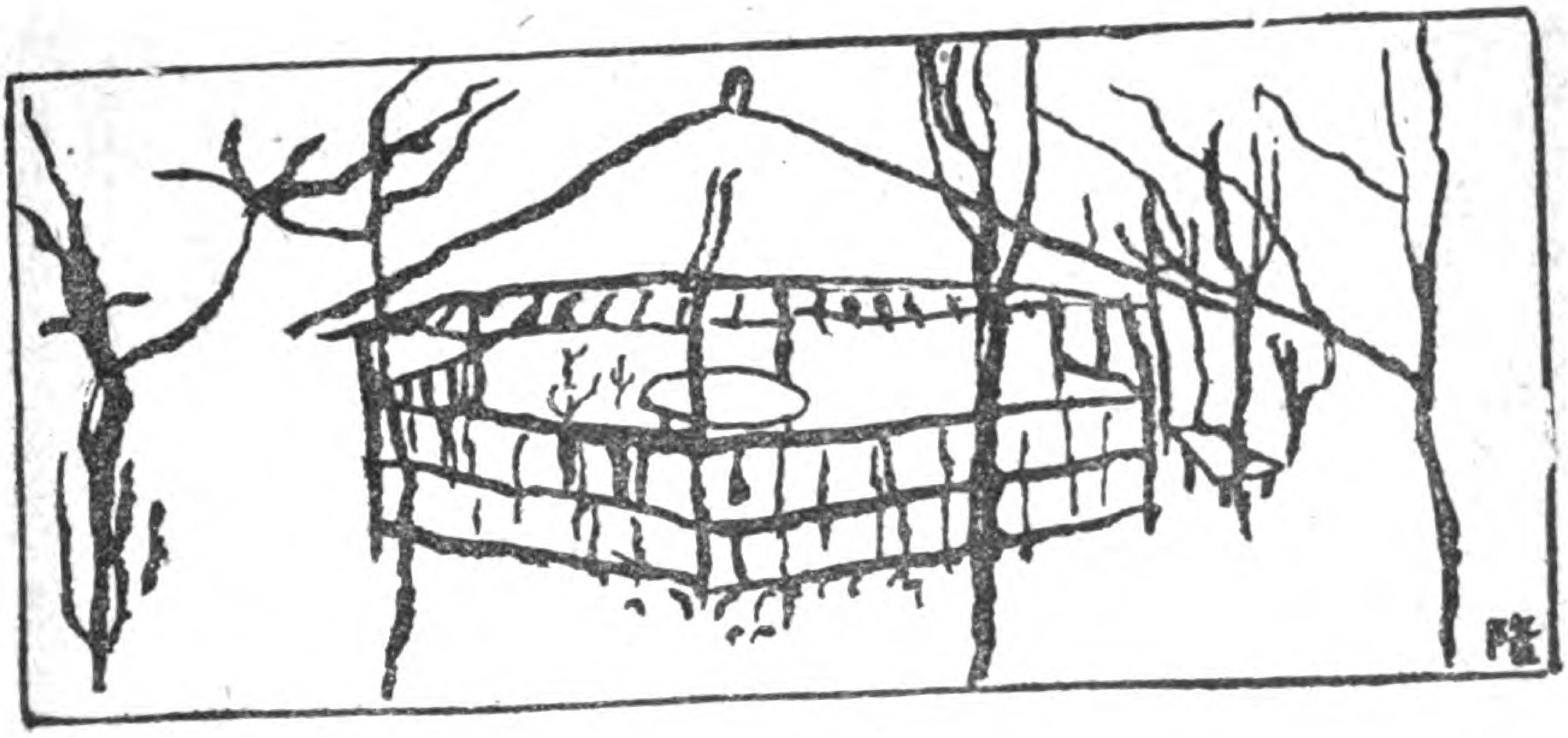
『ちよつとでようございますが、こゝへ呼んでは貰へますめえかね』

『こゝぢやだめですよ。先生は今忙しいところですからね』

役人は嘲笑ふやうに老人を見下した。

『さうでございますか。それでは仕方がありません。どうも御邪魔さんでした』

老人はかう言ふと、其の男に會釋することも忘れて、しほ〳〵とそこを立ち去つた。秋の短いインバネスを前に合せながら、寒空の中を、かたことと寺の敷石を渡つて行つた。



暗夜行路

志賀直哉

十九

赤兒は殆ど仕つ切りなしに泣き續けた。眉間に太い皺を作つて、小さな唇を震はしながら「ふぎやあ〳〵」と云ふやうに泣く。其聲が謙作や直子の胸を貫した。さうして絶えず聽いて居ると、偶々泣き止んだ時でも、耳の底から其聲が湧いて來た。往來へ出る。其所はもう自家から泣聲の聽こえぬ遠さなのに、不意にそれが聽こえて來たりした。

「オイ、如何したらいゝか――如何すればいゝのか」余り烈しく泣かれる時に謙作は思はず、こんな獨りごとを云ふ。が、實際如何しやうもなかつた。

赤兒の聲は段々に嗄れて來た。到頭仕舞ひに顏ばかり泣いて居て、聲は出なくなつた。これは赤兒には苦痛の表明の二つを一つにされたやうなもので、不憫な事だつた。が、まわりの者には絶えざる刺激の泣聲が聽えなくなつたゞけでも幾らか助かつた。

直子の乳は幸に止まらなかつた。赤兒もそれ程苦みながら、乳だけは思ひの外、よく飮んだ。まわりの者はそれに希望を繋いで居たが、十日經ち、二週間經つ内に、矢張り蜂窩式炎を起こして了つた。

直子の國から出て來た母が臺所口の柳を鬼門の柳だと云つて、切りに植替えたがつた。謙作は母と一緒に左う云ふ御幣を擔ぎたくなかつたが、度々云はれ、それを植替えさした。

彼がそれより何となく氣になつて居たのは、赤兒の誕生の日の夜、前からの約束で末松等と三條の青年會館に演奏會を聽きに行つた、其所で彼はシューバートのエールケーニヒを聽いた、その事だつた。彼は前から曲目をもつとよく見て居たら、此演奏會へ行かなかつたらう。この嵐の夜に子供を死神にとられる曲は今の場合、聽きたくなかつた。然し彼は何氣なく行つて、誕生の日に聽くには如何にも緣喜の悪い曲を聽くものだと思つた。彼は一寸厭な氣持になつた。

若いコントラルトの唄で、其晚の呼び物だつたが、謙作には最初から知らずく〳〵の悪意、反感が働いて居た。彼には其曲を少しも面白いとは感じられなかつた。總て表現が露骨過ぎ、如何にも安つぽい感じで來た。それは只、芝居がゝり、より露骨に、より刺激的に强調しただけで、それは音樂の與へられた本統の使命には達してない曲だと彼は考へた。

ゲーテの時までが彼には氣に入らなかつた。それは本統に死を扱つた深味のある作ではなく、藝術上の一つの思ひつきだと云ふ氣がした。比較的若い時の作に違ひないと思つた。此點メーテルリンクの「タンタジイルの死」の方が彼には好意が持てた。

寺町を歸つて來る時、水谷が亢奮しながら、

「エールケーニヒは素敵でしたね」と云つた。

「あれは矢張りいゝね」末松が答へた。末松は自身では何もやらなかつたが、好きで、音樂の事は精しかつた。末松は默つてゐる謙作の方を向いて、

「あの曲はシューバートの中でも最もいゝものだと思ふよ」と云つた。

謙作は返事をしなかつた。彼は音樂の事では餘り明瞭した事を云ひたくなかつた。云ふだけの自信がなかつた。そして、彼は二重廻はしのポケットの中で丸めてゐたプログラムを何氣なく道へ落とした。厄落とし、そんな氣持で。

彼はこんな事を氣にしたくなかつた。氣にしても仕方なく、氣にする程の事ではないと思つた。勿論それは直子にも話さなかつた。そして自分でも忘れてゐたが、今、赤兒にこんな病氣になられると、誕生日にエールケーニヒを聽いた事が讖をなしたといふやうな氣もされるのだ。

丹毒は傳染する恐れがあり、皆も割りに注意深く手先きの消毒をして居た。或る麗らかな朝だつた。謙作と母とが茶の間で食事をして居る時に、直子が、廻はり緣を靜かに縫間着の裾を惹きながら赤兒の病室の方へ行つた。乳を飲ます爲めである。

「あら！ベルや。ベル！いけません」

「どうしたんだ」謙作は茶の間から聲をかけた。

「一寸來て頂戴。ベルが昇汞を飲みさうにするの」

謙作は茶の間の前から下駄を穿いて庭へ出た。ベルといふ嘗て此家に飼はれてゐた小犬が、喜んで、飛び廻はつてゐた。

「これを飲みさうにするのよ」更える爲めに踏石の上へ下ろしてあつた、洗面器の昇汞を指して直子が云つた。

「そりやあ、飲みやしないよ。只好奇心で匂ひを嗅いでたんだらう」

「左うでせうか？今本統に飲みさうにしてたのよ。こんな水を飲んだら、それこそ、直ぐ死んで了ひますわ」と直子が云つた。

引越の時、手傳に來てゐた爺やが貰つて來て與れた犬で、然し直子の嫉妬が分かると、同じ年の動物は飼はぬものだといふやうな事で、小屋ごと、一軒措いた隣りの家へやつて了つた。然し犬はそれからも始終遊びに來て、今は何方の犬ともつかず、行つたり來たりしてゐた。

看護婦の林が出て來て、默つてその琺瑯の洗面器を取上げると怒つたやうな顏をして、どん〳〵臺所の方へ下げて行つた。

謙作達は此一つこくなやうな所のある、勝氣な看護婦に信頼してゐた。林は赤兒の事では緊張し續けた。よく健康が續くと思ふ位だつた。謙作は寧ろ林の健康の爲めに、もう一人看護婦を頼んだが、林は却つてそれを喜ばなかつた。赤兒に對する、その看護婦のやり方が氣に入らなかつた。そして自分は自分で一人の時と全く同じに働き、その人に任かせてゆつくり休養すると云ふ事はしなかつた。或る時その看護婦が風邪で歸ると、林は「若し私の爲めでしたら、どうかもうお頼みにならないで頂きます——だけど私一人で御不自由だとお思召すんでしたら別ですけど」こんなに云つた。

謙作は若し林に倒れられたら、どんな代りが來るとしても、赤兒の爲めには大打撃だからと云つたが、林は大丈夫倒れる事はないからと云つて居た。

今の場合、赤兒の爲めに直子に要求する所は母であつて貰うよりは乳牛になり切つて居て貰ふ事だつた。で、乳の時以外は全く赤兒に近づけない事にしてゐたが、然し赤兒としては、生れたての未だ何も分からない赤兒たがら、母乳以

上の母愛をも要求しないとは云へなかつた。だう謙作には思へた。そして此感情——此母愛に近かい感情は他の看護婦では却々求められさうになかつた。——兎に角、林のやり方が看護婦としての義務を遙かに越へてゐた事は謙作達には嬉しい事だつた。

赤兒の病氣は益々望み少なくなつて行つた。今は脊中全體が赤く腫れ上がり、ぶく〳〵と中で膿血の波打つのが分かつた。K醫師は同じ病院の外科醫と一緒に來てそれを開切する事にした。外科醫は開切の結果は請合へないと云つた。それは一か八かの手術だつた。勿論その儘にして置いては駄目なのだが幸ひ今、手術に堪えられたとしても、結局十中八九、矢張り駄目らしかつた。其所までは醫者も云はなかつたが、それが本統だらうと謙作は思つた。それは一か八かよりも、結局は一か一かのものに違ひなかつた。

謙作はK醫師が食鹽注射の支度をする手傳ひなどをしてゐた。然し彼は自身手術に立合ふ氣にはなれなかつた。恐しかつた。

「かまひませんか？」

「えゝかまひません」かうK醫師に云はれ、彼は庭へ出て了つた。手術着を着た若い外科醫が緣側でシヤボンとブラシで根氣よく手を洗つて居た。

間もなく、皆病室へ入つて行つた。謙作は直子のゐる部屋の方へ行つた。

「お立合ひにならないの？」直子は非難するやうな眼附きをして云つた。

「いやだ」謙作は顏をしかめ、首を振つた。

「可哀想だわ。そりやあ、可哀想ですわ」

「Kさんがいゝつて云つたんだ」

「左う仰有つたかも知れないが、誰も血すぢが行つて居なくちや、可哀想よ。ちやあ、お母さんに行つて頂きませうか」

直子は傍に坐つてゐた母を顧みた。

「はい」左う云つて母は直ぐ出て行つた。

謙作も又庭を病室の方へ歩いて行つた。障子をメ切つた中からは時々醫者達の低い話聲か、一寸した物音がするだけで、何時まで經つても赤兒の聲は全くして來なかつた。謙作は[illegible]に不安に襲はれた。もう死んで了つたんだ、左う思はないではゐられなかつた。彼はじつとしてゐられない心持で庭を往つたり來たりした。ベルが、頻りに其足元に戯れついた。

少時して、障子が開いて、林が顔を出した。亢奮し切つた可恐い顔をしてゐた。謙作を見ると、

「どうぞ、直ぐお乳を上げて頂きます」左う云つて直ぐ又障子をメめて了つた。

「助かつた」謙作は思つた。彼は急いで直子の部屋に行き、

「オイ。直ぐお乳‥‥」と云つた。

「よかつたの？」直子は立ち上がりながら云つた。

「うむ」

直子は急いで縁を小走り行つた。林が血のついた綿やガーゼを山に盛つた洗面器を隠すやうに持つて風呂場へ急ぐのが見えた。

謙作が行つた時には病室は奇麗に型づいて居た。K醫師が赤兒に酸素吸入をかけて居た。直子は側に坐つて泣き出し

さうな顔をしてそれを見てゐた。

「どうも却々えらい膿でした」K醫師は顏を擧げずに云つた。

「………………」

「食鹽注射と酸素で、どうか取止めましたが、然しよく堪えて下さいました」

謙作はK醫師に代つて、酸素をかけてやつた。

赤兒は疲れから、よく眠入つて居たが、その顏は眉間に八の字を作り、頰はすつかりこけ、頭だけがいやに大きく、恰で年寄りの顏だつた。赤兒は眼を閉ぢたまゝ急に顏中を皺にして、口を開く。苦痛を訴へるには違ひないが、もう全く聲がなく、泣くとも云へない泣き方だつた。それを見てゐると、これが助かるとは迚も思へなかつた。然し直子が乳首を持つて行くと、これは又どうした事か、死んだやうになつてゐた赤坊が急に首を動かし、直ぐそれへ吸ひつくのだ。それは生きようとする意志、左ういふ力をまざ〳〵と現はしてゐた。が、それも餘り長くは續かなかつた。赤兒は充分飮む前に又眠りに落ちて行つた。

此日からはK醫師の代りに毎日外科醫が來るやうになつた。毎日取り更へるガーゼが血と膿でどろ〳〵になつてゐた傷の場所は大きさにして大人の開いた手のひら位のものだが、赤兒にはそれで背中全體の大きさだつた。仕舞には白くぽつ〳〵背骨が竝んで見え出した。もうどんな事をしても助かるとは思へなかつた。生きてゐる方が不思議だつた。衰え切つて呼吸をしなくなる事がある。直ぐカンフル注射をする。酸素吸入をかける。かういふ事が度々あつた。酸素吸入は毎日一本づゝ使つてゐたが、用意して置いた方が何時かすつかりなくなつてゐて、夜中車夫を病院まで取りにやるその間の不安が堪らなかつた。何しろ、夜と云ふものがよくなかつた。夜の明けるのが切に待たれる。やがて戸外が白

み、雀の聲がして來ると皆はほつとするのだ。殊に靜かな陽ざしを見ると漸く不安な一ト晩の過ぎた事を染々と感ずる。

病室には酸素とカンフルの匂ひが始終漂つてゐた。その匂ひが鼻について了つた。

別に希望が持てるわけでもなかつたが、その日〳〵の醫者の診察が待たれた。

「どうも不思議な位です」若い外科醫は二階の書齋で紅茶を飲みながら云つた。「實は昨日の御樣子では迚も六づかしいと思つたので、病院の方へ若し此方からお知らせでもあつたら、直ぐ電話で知らすやう云ひ置いて歸つたのです。今日は直接こちらへ伺ふつもりでしたからね」こんな正直な事を云はれても、謙作は今はそれに不快を感ずる事も出來なかつた。彼は今は、もう死ぬと決つたものなら、少しでも早く苦痛から逃がれさせたいといふ氣さえしてゐた。然し此考へは赤兒が生きよう〳〵とする意志を現はす時に僭越な濟まない考へだとも思はれた。然し醫者達も迚も六ケしい事を明瞭に云つてゐ、彼自身見ても何所に希望を繋いでいゝか、分からない程ひどい樣子を見ると、赤兒の尙生きよう〳〵とする意志が彼には堪らない氣がした。

「死ぬに決つた病人でも、死に切るまでは死なさないやうにしなければならないんですか。生きてる事が非常な苦痛になつてる場合でも」

「佛蘭西と獨逸で考へが違ひます。佛蘭西では權威ある醫者が何人か立會つて　家族の者もそれを希望した場合、藥でその儘永久に眠らす事が許されてゐるのです。所が獨逸ではそれが許されてないんです。醫者としては最後の一秒まで病氣と戰はねばならぬと云ふ考へなんです」

「日本は何方です」

「日本はまあ獨逸と同じ考へなんですが、考へと云ふより醫學が大體獨逸をとつてるからでせうが、それはまあ何方に

も考へ方の根據はありますわね」
「醫者の判斷が例外なしに誤らないといふ事が確かなら、佛蘭西流も贊成ですがね……」
「それは數ある中には何んともいへませんね」
謙作と外科醫とがこんな事を話し合つた翌日、赤兒は發病後一ト月で到頭死んで了つた。赤兒は苦みに生れて來たやうなものだつた。

二十

葬式、その他、簡單に運ばれた。總ては矢張りS氏の世話になるより仕方なかつた。謙作達は今後どれだけ此地に落ちついて居るか分からなかつたし、墓にして、仕舞ひに無緣佛のやうにするのも厭だつたので、骨はその儘、石本の菩提所になつて居る花園の靈雲院と云ふ寺に預かつて貰ふ事にした。
赤兒の死で一番こたえたのは何と云つても直子だつた。その上、產後肥立たぬ内に動いた事が障り、身體が却々回復しなかつた。謙作は未だ一度も直子の實家へ行つて居なかつたし、神經痛で寢てゐる伯母の見舞ひを兼ね、二人で敦賀へ行き、それから、山中、山代、粟津、片山津、あの邊の溫泉廻ぐりをして見てもいゝと思つた。然し直子の健康がそれを許さなかつた。それに、直子は心臟も少し惡くし、顏にむくみが來て、眼瞼が人相の變る程、腫れ上がつてゐた。醫者はその方からも、溫泉行は以つての外だと云つた。
直子は每日病院通ひに日を送つて居た。
謙作は久しく離れて居る創作の仕事に還り、それに沒頭したい氣持になつたが、未だ何かしら重苦しい疲勞が彼の心身を遠巻きにして居るのが感ぜられ、左う沒頭は出來なかつた。彼の感情は物、總てに變に白々しくなつた。恰度、腦に

貧血を起こした人の眼に左う見えるやうに、それは白らけてしか見えなかつた。彼は二階の机に向ひ、ぼんやり煙草ばかりふかして居た。

どうして總てがかう自分には白い歯を見せるのか、運命と云ふものが、自分に對し、左う云ふものだとならば、そのやうに自分も考へよう、勿論子を失ふ者は自分ばかりではない、その子が丹毒で永く苦しんで死ぬと云ふのも自分の子にだけ與へられた不幸ではない、それは分かつて居るが、只、自分は今までの暗い路をたどつて來た自分から、新しいもつと明かるい生活に轉生しようと願ひ、その曙光を見たと思つた出鼻に、初兒の誕生と云ふ、喜びであるべき事を逆にとつて、又、自分を苦しめて來る、其所に彼は何か見えざる悪意を感じないでは居られなかつた。僻だ、左う想ひ直して見ても、彼は尚そんな氣持から脱けきれなかつた。

龍雲院は衣笠村から左う遠くなかつたから、謙作はよく歩いてお參りをして來た

年がかわり、正月も過ぎて、二月二十五日の命日は、よく晴れて温かい日だつた。謙作達は朝飯を濟ますと、霜解けの所々にある田舎の路を脊に陽を浴びながら、長閑な氣持で歩いて行つた。前には雪を頂いた愛宕山が眞青な空からくつきりと、高く、屏風のやうに立つてゐた。

二人は妙心寺の裏門から入り、寺内を抜けて花園へ出た。枯草の下に同じ草の若芽がもう隠れて居た。桶の靴を穿いた百姓達が路傍の流れの中で蔬菜を洗つて居た。

「敦賀の方もだが、もう少し温かくなつたら朝鮮へ行かうかと思ふんだ。一遍自分で見て來る方が早いと思ふよ」

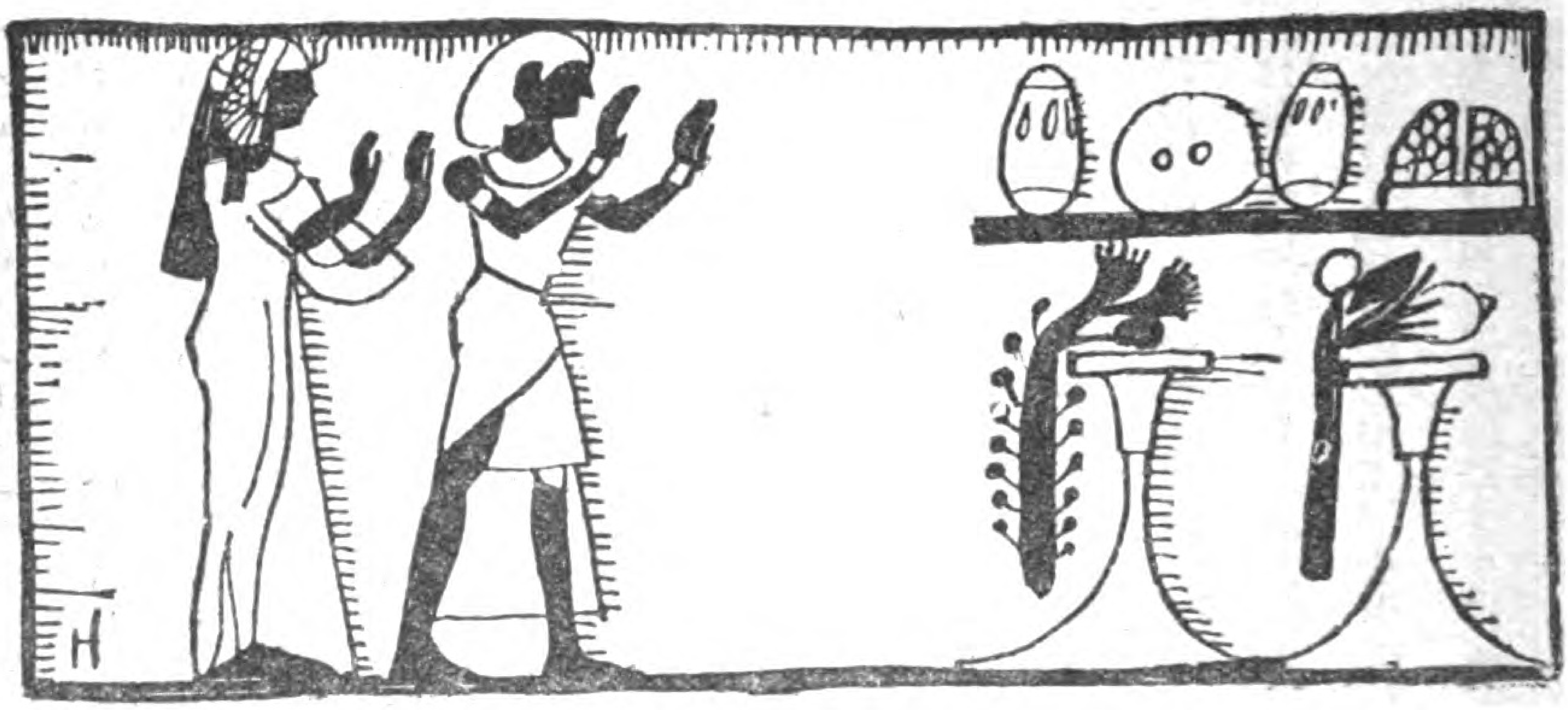
「何をして居らつしやるの？」

「それがよく分からないんだ。僕の方へは此頃ちつとも便りを呉れないからね。警部か何かの家に居候をしてると云ふ

んだが、愚圖々々してずに早く歸つて來るがいゝんだよ。お榮さんは馬鹿ぢやないんだが、一人になると、矢張り女は駄目になるんだね。一人でやれるやうな氣だけあつて、其實明瞭した方針が立たず、迷つてばかり居るに違ひない」

「大連から直ぐ歸つていらつしやればよかつたにね」

山城は日本中で最もいゝ竹材の出る所で、殊に葛野郡がよく、葛野郡では花園村、花園村では靈雲院のが一番いゝのだと和尙が自慢の竹林がある。二人はその間の大きな竊柱の立つた、寒くて暗い路を、狹い敷石傳ひに眞直ぐに一丁程行き、突き當りの小ぢんまりとした形のいゝ門を入つて行つた。門の內は陽のよくあたる、晴やかな氣持のいい所だつた。（つゞく）



一つの寫眞

久米正雄

輕い肺尖加多兒にかゝつたのを口實に、殆んど轉地療養の必要もないに係らず、學校を休んで鵠沼のＡ屋に滯在してゐるＫ――大學々生河野信一は、今朝も此頃の習慣で、午前五時には眼を醒ますと、其儘そつと硝子の雨戸を開けて、海岸の方へ散歩に出かけた。

初冬の、空氣は濕りを含んだながらに、頰にひり〳〵と觸れて、しかもしんと動かないやうな、灰色錆びた朝だつた。Ａ屋の廣い庭の枯芝は、薄霜を帶びたやうに、仄白く黃色く光つて矮い庭の松叢が、殊更に黑ずんで見えた。地上はまだすつかり明るくなり切らなかつた。が、海の方の空はすつかり白みを包んで、重く閉ぢ籠めながら、地軸の廻轉を思はす程度に、靜に搖曳してゐた。

信一は白い息をはきながら、かうも冷たい空氣を、強く吸ふのは肺に惡いとは思ひながら、鼻から出來るだけ徐々深く吸ひ入れては、ふーつと暖まつて出る呼氣を吐き出しつゝ靜に歩を移した。その氣持は惡くなかつた。彼は此頃此の朝の散歩

を、可なり樂しいものに思ひ出した。東京に居れば、銀座あたりのカッフェで夜を更かして、まだ今時分は起きようともしない頃であるが、かうして會に海岸へ來て、朝の散歩を日課とするなぞは、非常に清淨な努力のやうに感ぜられて自分ながら感心にも、殆んど毎日缺かした事はなかつた。――一體に彼は此處へ來てから、好んで散歩に出るやうになつた。それは一つには、勿論療養的意味もあつたが、もう一つ彼に取つては、更に重大な樂しみがあつたからだつた。それは、彼が寫眞器を携へて、散歩毎に何か心を牽く畫題を發見すると、直ちにそれをカメラの中に收め得るからだつた。

殊に此の一週間ほど前から、彼はその寫眞に、一倍熱心になり出した。と云ふのは、丁度その頃、東京に居る彼の同好の友人たちが、組織してゐる或る寫眞會で、展覽會を開く事になつてゐたからだつた。彼はその展覽會へ、何か傑作を發表して、皆を驚かしたいと思つてゐた。それで彼は此頃では、始終寫眞器を携帯して、何かいゝ被寫物にぶつゝからないかと、熱心に探し求めてゐるのだつた。

其朝も彼は、名刺型のイカレツト、(テツサー4・5附の愛器を、懷中するのを決して忘れなかつた。それでも、もう少し空氣が暖かければ、彼は更に猶二枚掛けの大きなグラフレツクスを、擔ぎ出したい所なのだが、朝はさすがに寒いので、いゝ構圖を見付かる迄は、懷ろ手をしてゐきたい必要上、小型寫眞器の方を持つて出たのだつた。それを以て彼は朝の柔い感じなり、淸々しい感じなりを出せる對象に出會つたら、取り敢へず手早いスケツチを得る積りだつた。

彼はA屋の庭を出て、小川にかゝつてゐる橋を渡ると、海岸の砂地へ出た。そして渚傳ひに、辻堂の方へ歩いて行つた。海は凪で、波頭はさう白みも見せず、寒さうに打返してゐた。彼は其單調な、物倦げな音を聞くと、何となくぼんやりして、深呼吸も寫眞も忘れたやうに、暫らく歩みを運んでゐた。海岸には、何故か漁師の姿も見えなかつた。そして

漁船も、灰色寒く骨のやうに砂丘のところ〳〵に横はつてゐるきり、少しも動いてゐるものはなかつた。平常月並だが優美な江ノ島さへ葉鐵でも張つたやうに、かつちりと灰青色に浮出して、味も素ッ氣もないやうに見えた。

其上、今日は飛んでゐる鷗さへ、一羽も見えなかつた。彼は十日ばかり前に、一度朝早く、矢つ張りかうして散歩に出た折、偶然夥しい鷗の群が、渚に集つてゐるのに出會した。が、其時は合憎まだ展覽會出品の刺戟がなく、さう熱心でなかつたため寫眞器を携へてゐなかつたのでその幾十羽となく白い鷗が、波打際に群れてゐる光景を、ロング・ショツトでスナップする事も出來なかつた。それは只鷗が群れてゐると云ふだけの平凡な併し單純ないゝ光景だつた。別に奇もない渚の背景ではあつたが鷗が亂れて飛び立つて互に斜に身を交叉し合ひながら、渦を描いて翔つてゐるところは、實際寫して見れば、案外白く鮮にはねけないかも知れないが、それを逸した事は、實に千古の遺憾に思つた。そしてそれ以來、彼は必ず寫眞器を忘れずに携へて、又同じやうな鷗の群れに出合ふのを、毎朝の期待にしてゐた。けれども、それつきり彼は、さう云ふ多數の鷗には出會はなかつた。たまに一二羽、岸に近い波の上を、彼を愚弄するやうにゆらり〳〵と飛んでゐるのを、僅に發見するに過ぎなかつた。そしてそんなものを撮つたとて、寧ろ海上に出來た灰色の瑕位にしか見えないので、彼は口惜しさうに其姿が、江ノ島寄りの方へ紛れて行くのを、見送つてゐるだけだつた。彼はそんな事から、ひそかに古の畫家で、ある富豪から鷗を描くのを頼まれ、其人の別莊に滯在して、毎日海岸をぶら〳〵散歩するきり、別に畫を描かうともせずに暮してゐたので、とう〳〵其依賴者も堪えられなくなつて、或日嚴重に催促したところ、それならばと云つて、其日から筆を取り初めたが、描き終つたのを見ると、鷗の形は千態百姿、悉く其眞に迫つてゐるのに感心し、どうしてこんなに精妙に描けるのに、毎日ぶら〳〵遊んでばかり居たのかと聞いたところが、それは決して遊んでゐたのでなく、絶へず鷗の形を観察し、研究してゐたのだと答へたので、依賴者も更に感心した、と云ふ

話などを思ひ出したりした。そして今の自分を、ひそかに其名畫家に比したりして、自ら微笑を浮べることもあつた。

が、今日は勿論其名匠氣質を、少しも滿足させるやうな邃い鷗すら居なかつた。彼はすつかり寫眞は斷念した。そして海岸を暫らく歩いたところで、右に松原の方へ途を取り、辻堂からの里道の方へ歸路を求める事にした

そこらには、風の爲に割合に低く、曲りくねつては居るが、一帶に松並木のやうな、形狀だけは備へてゐた。そして其間を、砂を踏みつけた徑が、細々と通じてゐた。彼は其松の間の道を、懐ろ手をしながら、もう寫景慾も深呼吸慾も失せて、ぶら〳〵とやつて來た。が、突然其道の中程の、少し大きい松が二三本並んで、一つの森めいた感じのする地帶まで來ると、彼は立停つてぢつと前方を見た。

何だか、さう思へば異樣な、足をすくませるやうな氣配が、ふいにしたと彼は後で思つた。が、其時はたゞ偶然、何氣なくふいと見た前方の、一番太い松の下枝に、黒い何ものかゞぶらりと下つてゐるのを、發見したのに過ぎなかつた。

併し、彼が凝然と目を睜つて、其處に突立つた瞬間、直ぐにそれは何ものだか、彼にははつきり解つた。彼は其瞬間、慄然と兩方の膝の下が、異樣に冷たく戰くのを感じたが、それは併し恐怖ではなかつた。たゞ一種の衝撃だつた。そして其衝撃の後は、兎も角も一應事實を確めねばならぬ、妙な義務的な好奇心だつた。發見の歡喜、そんなものも彼のどき〳〵する胸の底に、忽ち萌して來るのを禁じ得なかつた。

兎も角も、躊躇すべくは、餘りに近い位置にそれは在つた。彼は心持二三歩前進して、自分の眼前三間ばかりの所に、ぶらりと松の枝から下つた物體を眺めた。

それは紛ふ方なき、正銘の縊死人だつた。黒いとのみ見たのは瞬間で、其彼が一番先に認めたものは、背い紺の褪め

た股引を穿いた、そして汚れた紺足袋をつけた、人間の足だつた。それがぐつと硬直したまゝ、二本を殆んど一體に揃へて、爪さきまで垂平に下つてゐた。其上には、筒つぽの茶縞の半纏を、懐はだかにぶわ〳〵と着て、白い、と云ふよりも鼠色の、シャツを胸から腹にかけて露出してゐた。帶は、縊るために枝に吊つたらしく、何もしてゐなかつた。それで半纏の裾が、だらりと下げた手のあたりで、末廣がりにぶわついてゐるのだつた。そして其上には、身體と直角をつけられたやうに、一つの蒼い土氣色の顔が、前後にも左右にも傾かずに、きつちり、併しぐたりと正面を向いてゐた。よく見ると、それはもう可なり老人らしかつた。額が廣く、禿げ上つてゐるので、特別に白みを帶びてゐた。そしてたるんだ頬には、白い疎らな無精髯が、銀色にもぢや〳〵光つて、そして鼻だけがまだ血の色、――と云ふよりも何かの色素を、一番濃く持つてゐた。眼は、一方はすつかり塞いでゐるが、一方は、少し釣り上げたやうに、歪つで半眼に見開いてゐた。彼は其白眼をはつきり感じたやうな氣がした。而して、黒ずんだ脣を、下脣になる程分厚に、開いたと云ふ程ではないが、だらりと弛めたあたり、鼻の下から顎にかけて、鼻とも涎とも唾液とも名狀し難い汁が、數條てらてらと光つて垂れてゐた。――顔全體の感じは、氣味惡く呆け、呆けながら半眼に睨んでゐるやうに見えた。

彼は一目でずつとそれらを見て取ると、殆んど本能的に、踵を返して走り出さうとした。兎も角も、直ぐ交番か何處かへ行つて、知らせなければならぬと考へたのであつた。そして彼は無意識のやうに、四邊に人は居ないかと見廻した。早朝の事で、さう交通の激しくもない、謂はゞ田舍の散歩道とも云ふべき其處らには、誰れもまだ通りかゝる人はなかつた。松の木立を通して、ずつと向ふに展けた、藤澤寄りの田甫にも、黒い土と黄色い刈株と寒々と光る溜り水の外に聲を擧げて呼ぶやうな人は見當らなかつた。遠く、鐵道線路の方に當つて、丘越しに汽車の音が聞えるきりだつた。それで彼は自ら、其處から可なり離れた巡査駐在所まで行つて、知らせなければならないのを感じた。

彼は二三歩、急ぎ足に驅け出さうとした。と、其時、彼は自分の懷の中に、急に固く重い邪魔物——寫眞器の入れてあるのに氣が付いた。そしてそれと同時に、ふと此の縊死人を、好個の被寫物だと、思はない譯には行かない自身を發見した。彼は立停つて、手を懷中のイカレットに觸れたまゝ、鳥渡躊躇した。さすがに此の縊死人を、此際寫眞に寫すと云ふ事は、何かに對して濟まない氣がした。どうせ死んで了つてゐるからには、そつと寫眞を取つたとて、死者に對して、何も實際的に迷惑になる譯ではないが、併しそれでも、一種死者に對する涓瀆、そんな感じがしないではなかつた。他人の死を享樂する、さう云へばさうに違ひないと思はれた。けれども又、それにも增して、得がたい好機會だ、こんな對象は二度と得られない、どうせ死者は默つて、どつち道其處にぶら下つてゐるのだから、是を自然の一部、景色の點景人物として、撮影したつて差支はない、寧ろ思ひ切つて、死者に對する妙な感傷（センチメンタリズム）などは棄てゝ、自由にカメラを向ける方が、自分の欲望に忠實だ。とそんな風な考へが、むら〳〵と彼の胸中に湧き上つた。レオナルド・ダ・ヴインチは、死んで行く彼の主人?の苦痛を、ちつと見てゐたと云ふではないか。自分はレオナルド・ダ・ヴインチではないが、寫眞器を以ては一個の藝術家だ。………そんな妙な理窟さへ、今は彼の心に同時に起つて來た。

もう、其中に、併し此儘寫眞を取らずに、駐在所へ知らせに行くと云ふ氣持は、すつかりなくなつてゐた。そして、どうかして寫眞を取りたい自分を、是認したい氣持で一ぱいだつた。

併し、いづれにもせよ、躊躇してゐる事は、此際彼の氣持を、更にわく〳〵と戰はせた。

「えゝ、二度とない機會だ。やつけろ。」

とう〳〵彼はさう決心した。そして今度は、靜に自分の動作をはゞかるやうに、四邊を見廻した。四邊には今の通り、誰も居なかつた。誰の來る氣配もなかつた。それを見濟すと、懷は懷中から、初めて寫眞器を取り出した。さすがに胸がわく

〱して、喉のあたりが自りでに動くやうだつた。指先もわな〱と戰へた。が、彼は思ひ切つて、急いで蓋を開けると、蛇腹をぐつと引張り出した。彈機のぴちんと云ふ音や、滑り勝ちに軋り出る器械を、彼はもどかしい思ひで取扱つた。

見ると其被寫體は、眼前六米突ばかりの所に、頭部は暗い松の茂みを背景として、脚部は其下の、白い室と遠景とに食ひ入つて、打見たところ、黑白明暗の對照はなしてゐるが、併しまださう充分外光も明るくない所へもつて來て、木の蔭になつてゐるので、寫眞に撮るにはどれだけの露出を與へたらいゝのか、鳥渡見當がつき兼ねた。形だけは、どうやら撮れるには違ひないが、目には見えても光りに背いて、苦惱と安住とを堪へてゐる縊死人の顏面表情を、はつきり寫し取るには、少しは長い露出時間を與へねばならない。が、又さうすると背ろになつてゐる空や、木の茂みを洩れる光りで、外の方が露出過度（オーヴァー）に陷る恐れがある。……

彼の目測で、六米突の距離の處へ、取り敢へず焦點を合せると鳥渡其露出時間に迷つた。が、今はそんな事を云つてゐる場合でない。彼は突差に、再び得がたい此寫眞の、尠くとも一枚だけ完全なものを作製するには、適度だと思ふ前後のあらゆる段階の露出を、與へねばならないと思つた。そして先づ第一に、百分の一秒の速度を裝置して、白心を引つめて見付器（ファインダー）を覗きながら、其小さい鏡面に映る、小さい縊死者の黑い姿に對して、第一番のシャッターを切つた。そして氣を落着けて、フイルムを捲いた。それから七十五分の一のを取つた。五十分の一のを取つた。二十五分の一を取つた。十分の一のを取つた。そして最後に、支へ持つ手の戰へを更に氣にしながら、五分の一の露出を與へた。それから先はもう取りたくても取れなかつた。六枚つゞきのロールフイルムは、もうそれで一枚もなかつた。彼はもつと違つた位置からもつと違つた構圖で、出來るだけ取つて置きたかつた。が、相憎、そんなに寫す事もなからうと思つて、一本しかフイルムを入れて來なかつたのとを、彼は名殘惜しかつた。が、併し六枚寫す間も、彼は氣が氣ではなかつた。か

うしてゐるところへ、誰か通りかゝりはしないか、誰かに見られはすまいか、と、その不安も一通りではなかつた。で、六枚取り終ると、彼は引窒めてゐた息を、ほつと吐くやうにして、急いでフイルムを捲き切つた。そしてもう一度改めて、四邊を靜かに見廻した。

と、先刻は見えなかつたが、向うの松の間から見える、寒々とした刈田の、黄色い畔道の方から、一人の青い半纒を着た百姓が、遠くからではあるが、何となしに此方に向つて、とぼ／＼と一直線に歩いて來るのが目に入つたそれは勿論、此方の動作には氣もつかなかつたであらうし、遠くて此方の姿さへ、發見した恐れは更になかつたけれどその歩く度に、ひよこ／＼と一上一下するやうな姿が、此方へ刻々と近づいて來さうなのを見ると、彼は急に恐怖に似た、狼狽の念を覺えない譯には行かなかつた。

彼は寫眞器を懷ろに入れると、思はず驅けるやうにして、海岸の方へ逃げ出した。そして少し其處の松林を出離れると、今度は走つては却つて人に見咎められるやうに感じて、急ぎ足ながら、强いて普通らしい歩行に移つた。併し、もう彼は、其儘駐在所へ行つて、巡査に報告する勇氣は、すつかり失つて了つてゐた。何だか氣が咎めて、口を拭つて知らせに行つても、自分の寫眞を取つた事が、巡査に見破れさうな氣がして、どうしても行く氣はしなかつた。

彼は其儘庭の方から、A屋に歸つて了つた。A屋ではまだ、女中もすつかり起きてゐないと見えて、彼の開けて出た戸も、彼の部屋も、先刻散歩に出た時の通りになつてゐた。彼は結局幸ひだと思つて、もう一旦冷たくなつてゐた寢床に、寢られぬと解つてゐる身を滑り込ました、そして强ゐて目を瞑つた。……

――晝飯の時に、彼は女中のお松の口から、今日例の松林の中で、縊死人が在つたと云ふ噂を、面と對つて聞かされ

た。が、彼は、「ふうむ。さうかい、」と云つたきり、別にそんな事には興味の無ささうな顔をして、話を切り上げさせて了つた。而してもつ其後は、別にあの寫眞を取つた事には、深い罪惡感を覺えると云ふよりは、果して、あの寫眞が、一枚でもうまく寫つてゐるかどうかと云ふ事が、何となく念頭に上り出した。

彼は其夜、女中たちが床を敷きに來て、そして去つて了ふのを彼ち兼ねて、一人で洗面所から金盥と水とを持つて來それからひそかに有り合せのMC液を溶いて、現像に取りかゝつた。フイルムはわざと、器械の中へ入れ放しにしたまゝ、机上に放り出して置いた。が、今、すべて現像の準備が整ふと、さし代へた赤い電球の明りの中で、それを取り出し開いた。

赤い紙をぐる〳〵解ひて行くと、やがて中から、黄色くどんよりした光を帶びた、例のフイルムが現はれ初めた。彼はそれを見ると、妙な期待に戰へる指先で、台紙からフイルムだけを取り放し、傍に置いた金盥の水へ、ざつと滑してそれから更に胸を轟かせながら、現像液を入れたバットへ、其中央部から靜に浸し初めた。そして其一尺五六寸はあらう長いロールフイルムの兩端を抓んで、一端から一端へと液を滑らせて、絕えず一上一下させ初めた。

現像液中に浸すと、フイルムは毎もの通り、最初幾らかぐにやりと柔らいだ。そして其はつきりした黄色が、だん〳〵薄鼠を帶びて行つた。やがて、かの、松と空とを背景に、ざらりと下つた人の像は、黑いところは白く、白いところ黑く、だん〳〵、幻出して來るであらう。初めは薄く、併しながら現はれ出したとなると、忽ちすーつと魔法のやうに、靜に陰顯墨の如く。……

赤いラムプの光りを浴びて、彼の蒼白く興奮した頬も、異樣に輝きを帶びてゐた。彼の少し血走つた眼は、更に眞つ赤な燈火を受けて、寧ろ黑ずんだやうに濁つてゐた。彼はフイルムの端から端を、液中に浸して上下する度に、激しい

期待の念に、息を喘ませて眺め入つてゐた。一秒、二秒、三秒、一分。……なか〳〵映像は黑く現はれなかつた。彼はひよつとすると、ＭＱがどうかしてゐるか、又はフイルムが腐つてでもゐるのではないかと、一時不安の念に驅られたそして赤いラムプの光りへ、恐々ながら近づけて、一應檢めてようとした時、見よ、忽ちフイルムの一方――それは恐らく露出の速度が遲かつた方であらう、――から、黃色い中に黑く四角い畫面の輪廓を取つて、かの首縊りの寫眞像は、恰もエル・グレコの繪のやうに手足を伸ばして、順々と現はれ初めた。

彼は赤いラムプの下で、赤い眼を輝かせながら、歡喜の念に胸がどき〳〵するのを覺えた。が、其歡喜は、僅かの間しか續かなかつた。ふと氣が付いて見ると、フイルムの橫緣の方から、同やうに黑い線が、ぼやけながらもすーつ〳〵と、一つの畫面について二條位づゝ、橫に映像を橫ぎつて走てゐるのを、彼は發見せざるを得なかつたからだつた。

「しまつた！　明りが何處からか洩れたな！」

彼が低くさう叫んで、思はず現像の手をやめ、傍に置てあつた寫眞器を、口惜しげに見守つたけれども、もう取返しはつかなかつた。今更寫眞器の蓋を、檢めて見たところで役に立つ譯もなかつた。併し彼は立上るやうにして、まだ現像液のほた〳〵垂れるフイルムを、其儘念のため赤いラムプに近づけた。近づけて見ると、その洩れ入つた光線の痕は、更にはつきりまざ〳〵と、いづれも肝心な映像の中央部を走つて、畫面と大なしに切斷してゐた。どうやら縊死人の、手足や松の木の一部分は、それとはつきり分るやうにはなつてゐるが、どの畫も顏面のところから、又腹部のあたりから一條づゝ、橫線に走つた光りの橫線で、見るに沫殺し盡されてゐた。

彼は暫らく呆然として、此の掛け代へのないフイルムに、ゆくりなくも生じた光線洩れを、ぢつと眺め入つてゐた。赤いラムプは何かを呟くやうに、彼の蒼ざめた頰と血走つた眼とに、氣味の惡い光虹を投げかけてゐた。

（大正十一年十二月）



沒落

河東碧梧桐

一

「姑らく休んでゐて……此頃の社の樣子はまるで違つてますね。

「きのふのT主幹の告別演說をきゝましたか。

「イヽエ、T主幹が引退するつて、事情は略ぼ聞かんでもありませんが……それでゝすね社は一體どうなるのです。

「どうなるか、私は今それを明言することの出來ない、甚だ月並な立場にあるのを自分に悲んでゐるのです。

「A新聞の社長が、本社の現狀について、株式組織は新聞に適せない好適例を見せてくれた、と言つたとか言ひます。

「株式組織と言つても、本社を創立した中心人物に對する同情と共鳴、それが一株二株に具體化してゐることは、寧ろ自然な、又た美しい現象ではないのでせうか。

「さういふ美しい現象の下に集まつてる人々で、本社を經營して行くことは出來ないのでせうか。

「其の美しい株主の一人が、この二三日前の臨時株主總會の席上で、我々は全部

を掴み込んでも、亦た更らに増資をされても喜んでそれに應ずる者だ、本社の創立は、そんな金の問題を超越してゐ筈だ、と難有い説を述べられました。けれども、其の人はたゞ二株の株主であつたといふことが、私には淋しく悲しいことであつたのです。

「つまり大部分の株主は、そこまでの理解を持つてゐないといふことになるのですか。

「更らに私の悲惨だと思ふことは、本社も財界の好況時代に出來たボロ會社の一つだつた……さう思はれるやうな事實をやがて世間に暴露しなければならない立場にあることです。

「それは甚だしくお見限りぢやありませんか。

「本社を縮少さへすればいゝといふ者へは、縮少して後に本社がどうなるかの假定に立脚してゐます。其の假定を信ずるものと信じないものとの間には、大きな距離があるのです。

「財政に行詰つて一時逃れをやつても、再び同程度の財政難の來る例は、珍らしいことではありませんからな。

「財政難よりも人物難です。世間の評價よりも社員の資質です。私はそこに破綻を生じたものを彌縫し得る何物もないと信じます。

「内容と形式、精神と形骸と言つた關係ですな。

「そこを無理に彌縫しようとするが爲めに……私は人間の得手勝手な眞似を今度ほど痛切に見せられたことはありません、人間はいつでも自己の都合のいゝやうに、プロレタリアにもなり　ブルヂョアにもなり得るのです。

「といふと……。

「自分が店員である間は、盛んに社主の横暴を攻撃します、併し自分が小錢でも溜めて、社主の地位になると、以前自分の攻撃した社主のやる通りのことを平氣でやります。

「日本の民衆は、少し地位が出來ると官僚に早替りをするツてやつですね。

「もつと早いのになると、きのふまで店員派で力んでゐた男も、若し資本を迎合する利害の打算がつけば、けふはもう

社主擁護になります。

「マンモースですね‥‥。

「我々社員は社の一分子として、株主と同等の權利を持つてゐる筈だ、株主は法規上の空權利である、我々は組織上の實權利である、そんなことを得意にいふ男に限つて至つて危いのです。

「いくら世間の俗物をさうと見切りをつけてゐても、時にはあきらめられない場合もありますね。

「ブルジョア主義の行き詰まりが、勞農ロシアを生んだのだ　レニン、トロツキーはたゞ其の行き詰まりの大勢の傀儡だなんて言つたつて、この我々の住む世界とは、餘りに距離があり過ぎて、テンデお話になりませんねえ。

「私も繪を賣るといふことの‥‥自分の尊い能力を金錢で評價することの自己撞着の岐路に立つ場合があつて困ります

「誰でもそれを「生活だ」としてあきらめてゐるのでせうが、たゞ値段さへ高く賣れゝば、金錢の評價にさへ豐滿であれば、それでエライと思つてるのも、一ブルジョアジーの生活なんでせう。

「併し、被生活脅威者の運命も慘めですよ。

「それは今日の社會制度から來る一缺陷ですよ‥‥それは兎も角、人間も或る戰はねばならない位置に立ちながら、鉾を倒まにして敵に下る位醜い弱いものはありませんね。

「人道主義といふ奴なんでせう。

「人間の眼は、虎を睨み殺す、といふ威力を現代人は忘れてゐます、其の健忘性が現代人の、現代に生き得る最も賢明な人の武器ですよ。

「‥‥‥

「犬のやうな嗅覺と、蝙蝠のやうな第六感とを働かして、腹のさぐり合ひをやるのには、もう飽き／＼しました。

「盲目を集めて展覧會をやるやうな苦痛ですね。

「それが所謂人間苦だと見れば、辛棒も出來ませう、餘り早く見切りをつけない方がいゝかも知れません。けれども、一人しか通れない道に狹められた者は、相手を蹴飛ばしてゞなければ通れない……。

「道を讓る雅量…… 自分は泥田の中に落ちても……。

「古びた言葉だが、金力と暴力は尚ほ尊く物を言ふのです。それが本社を好況時代のボロ會社視せしめる第一のモットーです。

「もう我々のをるべき世界ぢやなくなつたのですね。

「私も少くも二三年は落着く場處を得たと思つてゐたのですが……たつた半年は餘りに果敢ない、呆氣ない氣もするのです。

「まるで夢のやうですね。

「私も人間の弱點で、時にはこの裏切られた悔恨と嘲笑に惱む發作も起ります……彼らの惡、彼らに言はせれば善、それに對する批判的な憎惡を打消すことも出來ないのです。

「自分を低下して考へれば……。

「時には自分にいふのです、なアに六ケ月間にブルヂョアーの金を百五十萬圓使つたのさ、それを威勢よく小氣味よく出し惜しみをしないで使つたのさ……そんな捨鉢で慰めなければならない場合もあるのです、

「藝術的反抗とでもいふのでせうか。

「反抗の藝術もをかしいが、矢張我々には孤獨の世界しかないのでせう。始めからこゝに落着かうとしたのが誤つてゐる、出發點を間違へてゐたのかも知れません。

「何しろ淋しいことですねえ。

「淋しさに堪へ得る自分をしつかり掴んでゐたいですねえ。

私は二三日前、Y畫伯とこんな對話をしたとが、なぜか力强く頭に殘つてゐた。私の其の時の心持が何のこだはりもな

く言ひ現はされたものとして、又た私の言ひ現はしたことが其のまゝ、或はそれ以上に享け容れられたものとして。

二

T主幹の告別演說後、社の空氣、社員の心理が不安と疑懼に覆はれてゐる、それをどうにか落着かせなければならないといふ幹部の協議によつて、正午から編輯總會の開かれる日だつた

私の往つた時には、もう編輯員の全部は、編輯室の一方の隅に圓陣を作つてゐた。腰掛けもないので、大部分は立ちながら　肩と肩で押し合つてゐた。

この頃まで本社は、こゝが手狹だの、昇降の具合がよくないのと言つて、建築の外部にも內部にも手を入れてゐた。壁土や鉋屑が、いつまでもまだ仕上らない未成の建物を彷彿せしめてゐた。本社は本社が建ち上るのと同時に、其の精神は滅亡するのだ、と言つた悲壯な皮肉を私は考へてゐた。私の腰かけたすぐうしろの荒壁のコテ跡がザマア見ろ、と嘲笑の口を開いてゐるのだつた。

私は多賀木君が　どのやうな報告をしたか、餘り注意してはきかなかつた、それを聞いてゐるには餘りに放心であつた。

「……一般經濟界の不況と、本社の財政の窮迫の爲めで、遺憾ながら已むを得ない結果なのでありまして……尙ほ明後日の十九日に新重役會議を開くとのことですから、其時に總ての事が決定するのだらうと……どうか諸君も我々幹部を御信任……今まで通り職務に盡されることを……。

いつ濟んだとも知らない、これらの言葉が何處か遠い處から響いて來るものゝやうに私の耳を掠めて過ぎた。

「質問を許して下さいますか。

すぐ耳元で話すやうな、澁い濁つた力强い聲に私は目ざめた。多賀木君は、我々幹部の方を向いて、どうしようと相談した。

「お答への出來る範圍內のことでしたら。

「たゞ今の御報告は」左側の人垣の前に出てゐた背の低い三笠君の、微笑を含むやうな口元が妙に重くるしく動いた。「餘りにアウトライン過ぎる、もすこし內容に立ち入つてお伺ひがしたい……社務を縮少するといふことは、紙面をどの程度に縮少するのか、又たT主幹引退後の編輯局長及各部長の進退はどうなるのか、又た我々部員もどの程度に增減されるのか、無論大半は馘首される事になるのでせうが……」

絕望的な嘲笑と言つた、冷やかな笑ひが、人垣の總ての顏を通して、波動的に傳播した。其の笑ひは、我々のこの不安がおわかりになりませんか、といふ心持を强ひた。

「我々は常に」Y諸們の、はにかんだ紅を帶びたやさしい顏が言つた。「社の名譽と責任を分擔してゐます、かういふ大事な場合に、もつと立入つて事實を知る權利も持つてゐるやうに思ひます。

「三笠君とY君の御質問にお答へします」多賀木君は少しどきまぎしながら「紙面をどういふ風に縮少しますか、その計劃もないではありませんが、まだ決定してはゐませんのです、T主幹の後繼者、其他部長の進退も不明であり、部員諸君の增減にも何らきまつたことはありませんのです。事實何にもお話することが……。

多賀木君の答への終るか終らないに、右側の人垣のうしろから、肩から上を突き出してゐた四本君の蒼白い骨張つた顏が、ちつと多賀木君を橫から見据ゑた。

「T主幹は本社創立の中心でありました、本社の精神は、T主幹を中心にして出來上つた、と言つてもよろしいかと存じます。其の引退は本社の運命に關する大なる事件、損失でありますが、それに對して幹部ではどうお考へになつてをりますか、たゞ已むを得ない事情として看過されるのでありますか、それとも……。

「その事でしたら、我々も相當に苦心してをりまして、T主幹の復歸されることを希望してをりますのです、尙ほ今後も十分盡力することをお誓ひします。

藤町君は、人を分けて頑丈なずんぐりした身體を押し出した。

「たゞ今伺ひましたところでは、幹部の諸君にも、本社改造に關して、何ら具體的におわかりになつてゐないやうに心得ますが、左樣心得てよろしいのでせうか、幹部諸君も今後の方針について、まだ何も御存知ない、とかやうに斷定してもよろしいのでございますか。

齒切のいゝ一句々々を噛んで吐き出すやうな、ネチ〳〵した口調のあとにつゞいて、

「そんなことがあつて…馬鹿々々しいそんな筈はありやアしない、もう君ちやアんときまつてるんだ、紙面を朝刊だけの八頁にして、社員は半分に淘汰するつてことア…君、さうなんだよ。

都築君は、口早に藤町君に話すとも、このサアクル全體に向つて呼びかけるともなく、そゝくさと言ひのけて、さうして

「どうして、こゝでその言明が出來ないのですか、言明するとしないとで、社員の不安がどう變るとお考へになるのですか……。

挑戰的に多賀木君に食つてかゝる態度を見せた。今まで靜かさに押しつけられてゐた群集は、この都築君の煽動によつて、大きくなだれを打つた。

「藤町君の御想像の通り、我々もまだ詳細な內容については、何も知らないのでございます。前に申した通り、この十九日に新重役會議を開いて總てを決定するとのことです、これだけを言明して置きます。

都築君には一切構ひつけない多賀木君の態度を追窮する者もなくて、あとは新重役がいつ顏見せに來るかとか、どんな經歷の人だとかいふ、問題の中心から離れた雜問に落ちて往つた。

「何だつまらない報告ぢやないか。

「故意に事實を陰蔽してるんだ。

「もう幹部は信賴するに足らないね。

「我々は我々の直接行動を取るのさ。

こんな私語を耳にはさみながら、私は幹部室に引上げた。

「大變上出來だつたよ。

「まアあゝして置くより仕方がないからね。

「僕だとどう脱線したかわかりやアしない。

「變にこぢれて來る奴を默殺したからね。

多賀木君讃美の會話が一時榮えた。私は社員の私語と皮肉なアイロニーを感ぜずにはゐれなかつた。

三

この半年間日夕親しんでゐた編輯室の私の机に愈々おわかれをする時が來た。先づ机の上に重ねられた、何かしら堆く積まれた媒竹の籠を引き寄せた。新刊の寄贈雜誌や、謄寫版の紫インキの書類などが次ぎから次ぎと出て來た。ヂヤリ〳〵する砂が、不愉快に手にさはつた、イヤに埃りぽかつた。大抵のものは、もう過ぎ去つた社用の書類であつたので、ポン〳〵反古籠へ投げ込んだ。一番底から、暇のある時に讀まうとも思つて持つて來てゐた、ゲーテの伊太利紀行の譯本が出て來た。白い表紙が灰色にくつきりと片隅を染められてゐた、まるで型紙をあてゝ染めでもしたかのやうに。上積みになつた書類で覆はれなかつた露出した部分が、僅かの間に、これだけの變化を見せる、この編輯室の空氣が、私自身をもかやうに染めかへてゐるのではなからうか、私はそんなことを考へて思はず淋しく笑つた。一應手で拂つては見たが、其の跡は容易に消えなかつた。私は編輯室の空氣を見ようとして、ずつとそこらを見廻した。經濟部のうしろの窓の一つから、カーテンの下げてなかつたガラス戸を透して、無遠慮に西日がさし込んでゐた。日の筋に劃然と描き出された濛々とした埃は、無音の鳴動に驅られて、跳躍し躍動する大混亂の最中だつた。

「どうも空氣はよくないと思つた……。

自分にさう言つた、冷やかな科學者のやうな氣分が、私に別な淋しさを咬つた。

たつた一つしかない抽斗をあけた。抽斗の中もぎつしり詰つてゐた。手近かなものを引きぬくと、それはシカゴ早大兩大學の野球試合に關する準備の書類だつた。私がこの興行の委員長として、東京支局のH社會部長と打合せ、又たこちらでは鳴尾運動場を使用する爲めに阪神電鐵の重役とも交渉して作つた準備計劃書だ。何しろ關西では、始めて野球に入場料―それも安くはない―を取るといふ試みの意味も含まれてゐた　私はこの興行に携つて、始めて私設會社と新聞社の間には、習慣的な醜關係のあることを知つて、そんな因習を打破しようとまで主張した。けれども、さういふ理想を實現するには、もう時機を失してゐた。目を瞑つて總てを見のがさねばならなかつた。もと〱私の柄にないことであり、社の運命も其の時分から略ぼ見切りのついてゐた内情も知つてゐたから　成功失敗それはどうでもいゝことだとして、我武者らに突進した。で、紙面の廣告や、外部の準備の一切を私がやり、會計其他の雜務は四本君が引受けてまア二人で盲目滅法に片づけた。愈々開戰間際になつて、東京からH部長が來た。早速の打合會の席上で、H君が

「少しばかり損したつて、本社のデモンストレーションさ、これ位效力のあるデモンストレーションはないからね。

デモンストレーション説を强調してゐることが、少し許りの損と見越してゐる樂天的な打算よりは、私には大きな皮肉として響くのだつた。

「一體何のデモンストレーションなんだ……。

私はかう言はうとして咽まで出た言葉を鵜呑みにして

「そりやアさうさ、言ふまでもないさ。

苦しいバツを合はせた私の狼狽が、今もあり〱と眼前に浮ぶ。それでもあの野球興行――神戸、京都、名古屋まで持ち廻つた――が、成功と見られる結果を收めたことは本社の今日の運命と對照して、それが華やかな弔鐘であつたことを追懷するのだつた。

天王寺公會堂でやつた「新聞博覽會」の準備計劃書が出る。生活改善を宣傳する某團の活動寫眞地方巡廻の見積書が出る。本社員の地方講演會の日割及辯士割宛表が出る。今更ながら私は興行の請負元のやうな仕事ばかりしてゐたのだ

といふことが滑稽でもあり悲惨でもあつた。

手紙類が出て來る。夕刊の小説を依賴したA文士のがある、S女史のがある、讀者文藝の選者を依賴したB歌人C川柳坊のが出て來る。四五通もあつたS女史の手紙の一つを開いて見ると、新式の書簡箋に細かいペンで一字々々正しく書いてある。

日かげもの丶妾風情に對して御同情を込められたお手紙をいたゞきまして神のすくひのやうにうれしく難有く思つたことでございます何をさし置いても御同情に酬いたいと存じまして不束ながら筆をとることに決心致しましたなれども此度の妾の世間をさわがせました事件については今しばらく沈默を守らしていたゞきたく我まゝながらお願ひしたいのでございますそれは追つて他日のお約束と致しまして此のたびはどうかわたくしの書いて見たいと思ふもので御しんぼう下さるでございませうか……。

S女史の或る事件後間もないことだつたので、社にも多少の異論のあつたのを强いて依賴することになつたのだつた。

他の一通

思ふやうに書けませんで、ただあせるばかりでございましたわ、自分でも不滿足であつたものですわ、どうかお許し下さい、お目だるいものであつたらうと恐縮してゐましたに過分の原稿料をいたゞきまして。わたしどうしようかと思つたのでございます、本統にお情け深い御恩は終生忘れることが出來ないのでございます。

當時私はこんな打解た手紙を見られて、社内人の問題にされてもつまらない、とそつと仕舞込んで置いたものだつた。今はもう忘れ果てゝゐたS女史の面影が、私の念頭に浮んだ。それが孤獨に投げ出されて險はしいものになつてゐた私の淋しさを和げるのだつた。

U文士の手紙は何通となく束になつてゐた。白い和紙の封筒に萬年筆で書いた名宛は、どれを見ても一つのやうに、赤い切手の貼り場處もきまつてゐた、大阪を見物するといふので、私が最初の東導役になつて、それから南の宗右衛門のお茶屋の主人のG君を紹介して置いた。U君は毎日のやうに、其のお茶屋へ遊びに往つて、宗右衛門町情調を味ふの

だつた。Ｇ君の内の女中頭をしてゐたＣが、法善寺裏あたりを案内してＵ君を連れてあるいた。其二人連れを通りすがりに見たＧところの馴染客が、Ｃにレコが出來たんか、と親指を出して見せて、あんまりえゝ男やなかつたぜ、と眞顔で言つたといふエピソートの、自然な輕いユーモアになつてゐることが私をほゝ笑ませた。

抽斗が空になつたすが〱しい氣持で、まだ何が殘てゐやアしないかと、隅々を覗き込んだ私の眼の下に、さも隱れるやうにしてゐた黄楊に彫つた認印が出て來た。拭き切つてなかつた朱肉の跡が埃りまぶれになつて、もう三年も使はないやうな古びさを與へてゐた

「隨分盲目版を押したもんだつた。

私はそれを紙にくるんで捨てゝもしまはれない荷厄介な心持で、ポケツトにしまひながら、ハガキ一枚使ふにも、責任者としてのサインを要求する制度其のものゝ不自然さを呪ふ長い間の苦痛を喚び起した。なぜもつと時間と勞力を省く、單純な簡易な組織が生れないのだらう、總ての人間を惡人と見做して、それを制度の上で取締らうつて、若し總ての人が惡人であるなら、それは布で火を包むやうなものだ。總ての人を善人と見てそれを解放し制度を撤廢するのでなければ、法の上に法を加へて繁文縟禮は停止する處を知らない筈だ。一個の認印、それは眼瞼の下に隱されるほどの小さなものであつても、私の手によつて虐使された其の罪惡史は、やがてこの制度の尨大な罪惡史を象徴するものだ。若しこの認印に人格があつたとしたら、果して無條件に私の虐使に甘んじてゐたゞらうか。今日の制度では、總ての責任者になることは、同時に罪惡の問屋であるといふ歸結に到達する。責任を重んずるほど罪惡を敢行する勇者であることになる、何といふ恐ろしいことなのか、それが世の中であるとして、私も人並みに盲目判を押して來た。けれども、其の世の中と私の赤裸々の欲求とには、かけ離れた大きな溝渠が無ればならない、深い底知れない暗澹とした溝渠がそこに横はつてゐる筈だ。私はその溝渠をどう無關心に渡り得たのだらう？――何の恐怖も戰慄も感じないで……。

「ちよつ　これを……これを……。

眠りから覺めたやうな私の眼の前に、四本君が立つてゐた。うしろには三笠君もゐた。

「きのふ選ばれた代表委員十五名で、こんなものを新重役に提出することにきめたのです、一應御覽下さい。
私は綴ぢた原稿紙に書いたものを手にして「希望條項」と題した各條を見てゐた。
「成るべく鋒鋩を現はさないやうに、出來るだけ穩やかに書いたのです、まア條項はこんなものだらうと思ふのです。
四本君の說明も十分にはきかないで、私は無關心と言つてもいゝ氣乘りのしない氣分で、それを机の上に置いた
「私は折角ですが、もうこれを批評する權利、と言つても何だが、まア資格を持たないのです……實は私はけふさつき
畑内新常務に會つて話をまとめて來たのです、私はもう社員ではないのです。
「ア、さうですか、もう……。
四本三笠の兩君は顏を見合せて事の意外に驚いたやうだつた。私の淋しい微笑に釣り込まれて、二人とも當然見せなければならない苦笑を口元に浮べた。
「ぢやア、畑内に……」四本君が私の印象を探ぐるやうに「一體どんな風でしたか。
「畑内ツてどんな男？」三笠君も附加へた。
「サア、どんなつて、私も始めて會つたんですし、それに會見はたゞ十分許りで了つたんですからね……。
「そんなに簡單にですか、
「どうせ永くは話してゐられないのさ。
「ですけれども、定評のある程イヤな感じもしませんせでした、たゞ何となく勝ち誇つたやうな浮調子のところが目につきました……イヤなのはそれだけだつたのです、案外話せる男かも知れませんよ。
「ぢやアそれほどゴロツキでもないんですね。
四本君は何か言はうとした氣を反らして
「ですけれど、それは……あなたの問題はまだ一般に發表されてゐないことです、新重役とあなたの間だけの秘密ぢやありませんか、我々はまだあなたを從前通りの部長として見てゐるのです、……それを見て下さることに不合理はな

いちやありませんか。

再び「希望條項」に話を戻した其の理論には私も強ひて爭ふ餘地を見出さなかつた。私は改めて「希望條項」を改めから眼を通した。

「成程よく出來てゐると思ひます、私として何も附け加へるものはありません。

「編輯局員全部のサインを取るつもりです、いゝぢやありませんか、あなたも是非これにサインして頂きたいのです、あなたが辭職される以前にサインして頂いたものと見做すことも我々の便宜です、編輯局全員の一致といふことが有力なのです。

私は隨分得手勝手な便宜論だとは思つたが、四本君の强要に同意を表してサインをした。其處にはもう各部長の同意のサインがずらと列んでゐた。

「彼らにも否應なしにサインさせたのです、いゝでせう、きのふの報告演說で、幹部は何も知らない、と藤町君が憾めた手前、サインしない理由は存在しないのです。

四本君はこんなことを小聲でさゝやくやうに言つた。目を細くして、私が如何にそれが苦肉の策であるかを理解したもの〻やうに首肯いた。

二人は之を今夜中に、畑內新常務に提出するのだと言つて忙がしさうに、前途の希望にみちた快活さであちらに去つた。

私は今更とりとめのない自分を恥ぢた。なぜもつと强く、輪廓をはつきりと自分を出し得なかつたかを責めた。さうしてなぜだか、私の椅子とテーブルに離れ難い、限りない愛惜を感じた。

四

高い天井から八方に引張つた電燈線は、昔土蜘蛛が繰り出したといふ千筋の糸に似てゐた。其の巣に引つかゝつた蝶

か蟬のやうに、朝刊擔當の編輯室の喘ぎもがく時分が來た。けれども、希望條項を携へて、新重役に會見に往つた三名の代表が、いつまで待つても歸つて來ないので、氣乘りのしない時間が無意義に經過した。いつもの蜘蛛の巢を突き破る潑溂たる元氣はなくて、それは習慣的に喘ぎもがく、エネルギーの放散した惰勢其のものだつた。

「往つたのは七時頃なんですよ……何をしてるんですか。

「さうですね、もう九時を過ぎてますね。

「別に手間をとるわけはないんですが……この騷ぎで、種なんかありアしません、又さうかつて責めるわけにも行きませんし……。

私と机を並べてゐた乘松君は、例の癖で出かけた鼻汁を吸ひ込むやうに、一つ大きく鼻柱を鳴らした。此頃新聞らしいもの〻出來ない苦痛と焦燥が、放射的な洞ろな眼にも刻み込まれてゐた。私は此人の創刊以來の勵精と努力と、物を觀、摑む注意周到な銳敏さとに、新たな感謝を表するのだつた。

「それでゞすね、夕刊主任のM君ですね」と妙に聲を落した。「かういふ騷ぎの中を例のN女史の家にです……入り浸つてるといふことなんです、皆んなが疑ぐるつて言つてるんです

意外なことをいふ乘松君を私はもう一度見直した。疲勞に鞭うつてゐる尊い一圖な心が光つてゐた。

女記者のN女史を中心にした社會部の艶つぽい話は、いつか社內全體の評判にもなつて、嘗て私も私の責任であるかのやうに赤面したことがあつた。併し、筆を持つ戰鬪的な、殺伐な空氣の中では、人間性な、情的な潤ひを持つた一事件であつた。それに對する制裁の加へやうもなくて、到頭今日に及んだことが、なぜか私に伸んびりした快味を與へた。

「へエー、M君は相變らずなんですか……だが今になつてもうヤキモチを燒くにもあたらないぢやありませんか。

私の仕掛けてゐた仕事を總て片づけてしまつた跡に、まだ一つこの情事の殘つてゐた或る驚きが私に遊びのある洒落半分のことをも言はせたのだ。

パラ〳〵、拍手の音がして、そこらの人が一時に椅子を離れて立つた。

三人の代表は四本君を先頭にして歸つて來た。四本君が一寸私に目くばせした其の顏には、勝利の華やかさが閃めいてゐた

社員はもうそこに半圓形を描いて四本君らを取り圍んでゐた。

「どうでした。

「畑内つて、馬鹿といふのか、無邪氣といふのか、何も彼もしやべつてしまつたんですハツハツ。

四本君はS音を混じた特色のある快活な笑ひ方をして、そこの椅子の上にいきなり立ち上つた。

「諸君、我々三人が代表の責めを負うて、畑内新常務に會見した顛末をこれから御報告致します。

莊重な語氣で左右を見廻しながら、强ひて我から落着かうと努めてゐるのだつた。さうして、我々の希望條項は、單に明日の重役會議の參考に提出して置くつもりであつた處が、畑内氏は即答してもいゝといふので、我々の知らうとも思はなかつたことまで明快に答辯せられたといふ來歷を述べた。四本君は編輯員全部のサインした「希望條項」を片手にして稍調子を張つた。

「希望條項の第一、本社の主義主張に關することは別に渝ることのないのは勿論である、と言ひながら、其の語尾を濁して、併し記事が餘り不穩當と重役で認めた場合は、注意位はするかも知れない、と……この何でもないやうな言葉が何を意味するかお考へ下さい、從來の信條だつた編輯局の獨立、に對して或る脅威を暗示してゐると思ひます。第二、T主幹の復歸に關することは、編輯顧問といふ名の下に於てなら贊成である、隨分T君も得手勝手なまねをやつたからねえ、といふ冷笑的な言葉も添へられました。第三、七月一日から本紙を八頁に縮少することは見合はされたいといふに就いては、それは既定の事實であつて、もう考慮の餘地はない、七月一日よりももつと時機は早められるかも知れない、とのことです。我々の希望は、先づ第一段で見事に跳ねつけられたのです。第四、この六月のボーナスは、前重役時代に決定されたものであるから、其の決議を尊重して實行してもらひたい、といふことまで附け加へた

のでありましたが、ボーナスは一切あげられない、現在社には金がない、ない袖は振れぬでないか、と斷言されました。第五……今後社務の都合により退社を命ぜられる場合は、一ケ月以前に豫告されたい……に就いては、紙面縮少もこゝ四五日の中に決行するかも知れない、すれば社員の陶汰も同時にやらなければならない、一ケ月前どころか十日以前に豫告することも事實出來ないではないか、とのことです、……成程それはさうかも知れません……第六、退社される者には月給三ケ月分以上の手當を出して貰ひたい……是は我々の死活問題でありますが、ボーナス同樣金がないからそんなことは出來ない、けふも或る營業局の者をやめさせたが、この月の月給は日割で勘定し、別に一ケ月分の手當をやつたに過ぎない、編輯部に限つて特別の取扱をすることは御免を被る、矢張これ以上出すことは絕對に出來ないと明言されたのであります。

此時ズシリといふ無音の響きによつて、半圓形の人垣が押し狹められた。オーツといふ獸の吼えるやうな唸りが地底から湧いた。

「第七、社務縮少の場合も、社員の俸給を減額せざること、之については、どうも今までの俸給が一般に多かつたやうだ、何事も本社の財政が基本であるから、多いものはずん／＼減さにやアならない、それでいやならやめて貰ふ外はない、と云ふことです。私は成るべく餘計な事を言ひたくはないが、是によつて新重役は我々を一商事會社の雇員同列に見てゐることを悟めたのです。……第八、社員を轉勤せしめる場合には、なるべく本人の意思を尊重せられたいに就いは、そんな馬鹿なとは出來ない、本人の意思を尊重してゐたりして、社員の移動が行はれるものでない……。

「横暴だ」「無茶だ」「待て／＼」「報告を皆きけ」今まで押しつけられてゐたバネが一時に彈きあがつたやうに、群集の野太い力強い聲が口々に怒鳴つた。思ひなしか薄暗くなつた電燈の下に、血に燃えた惡魔の形相が一齊に呪ひを謳歌してゐた。

「諸君、しばらく私の報告を全部おきゝとりを願ひたい……第九、社員を退社せしめんとする場合は其部の意見によつて自治的に決せられたい……この自治的といふのはどういふのかわからない、と自治的の意味をきかれましたから

多少說明したのでありますが、さういふ情實を考へることは此場合不可能であるとの答へでした。第十右に對する御回答は六月二十日までに文書又は口頭を以て云々は、前に申述べたやうに、今日こゝで即答するとのことであつたのです。以上で我々の希望條項に對する回答は得られたのです。それが如何に冷遇されたか蹂躪されたかは、唯今までの報告で十分おわかりだらうと存じます。

群集の爆發しようとする憤怒を制するやうにして四本君は尚つゞけた。

「尙ほ今後の方針について、畑内常務の非公式に語られたことも、我々の參考に値するものが數々ありました、これも是非諸君にお傳へしなければならない重要事であります。

これ以上どのやうな壓迫が襲來するかの恐怖と懊惱の黑影が全社員の目の前に戰のいた

「先づ第一に」四本君の一語は一語より明快に響いた。「社員は少くも現在の半數に減ずる豫定であるさうです。我々半數の社員は、日割り勘定の月給と、一ヶ月分の手當とを頂いて潔よく追拂はれることになるのです。次ぎに東京支社を始め各地の支局は全廢するか又は大縮少を行ふさうです。之も支社支局員にとつて重大な事であります、と同時に又た我々の職務の大障害であります、諸君！　東京支社を我々からもぎ取られて、それで我々の職務がどうして完全に遂行されますか‥‥何たる無理解な暴狀だと言ひたいのです。次ぎに現在の幹部のうちで、多賀木經濟部長は今後の主筆編輯局長として立つて貰ふことにお願ひして、既に一昨日本人の承諾を得ました‥‥。

「ホー」「ヘー」といふ冷笑の感投詞が、他日の爆發を豫斷するやうにそこゝから發せられた。

「諸君昨日の編輯總會に、多賀木部長は今後の方針については何も知らない、と明言されたのでありますが、畑内業務の談では、既に一昨日かやうな具體的なことまでが決せられてゐたのであります。

四本君が群集の昂奮と挑戰とを期待してゐたやうに、もう反抗と憤怒と復讐と敵意の催眠的な空氣に醉つてゐた群集は、猛然として鬨をあげた。この數日拔殼になつてゐた魂の目醒めた緊張が總てを支配した。反抗の悪化が潮のやうに寄せてゐた。

「諸君、驚くべきことは、まだそればかりではありませぬ、畑内常務の談によりますと、多賀木、隅川二部長は、今こゝに來てゐるといふ事でした。別室で他の重役と今後の處置について具體的な相談をしてゐるとの事でした。言ひ落しましたが、隅川部長も、今後の主筆多賀木氏を援けて幹部に居殘るとのことでした。諸君、多賀木隅川の二部長が彼ら新重役と會見したのが、今日に始まつたとして、かやうな内相談が出來るものと想像されますか、如何に迂鈍なものでも、新重役と二部長の會見は、遠く株主總會以前に始まつてゐることを斷定し得ると存じます……。

再び起つた喧囂の中に「我々を賣つたのだ」といふ甲高い鉦のやうな聲が響いた。

「報告の終りに臨んで、畑内常務はこの四本をつかまへて、君は永山部長の後繼者として働いてもらはねばなりません、又都築朝田二君にも今後共力してやつて下さい、と我々三人の代表に總花を撒かれたことをお景物とします。

四本君が椅子を下りたか下りないかに、今まで自分の机に凭つてゐた乘松君がつか〳〵と群集のうしろに歩み寄つた。

「……何たる無情冷酷な」乘松君は叫んだ、がや〳〵してゐた群集は彼に聽くべく鳴りを鎭めた「血も涙もないこんな重役……我々は一刻も働くことが出來アしない……只今限り僕はもう筆を執らない……僕はもう決心した。

手に持つてゐた筆を汚穢なものを捨てるやうに、力任せに足もとへ打ちつけた。群集の耳を劈く鋭利な石を打つやうな音が走つた。

「僕は今まで成るべく冷靜に……運動がましいことは僕の職務以外……成るべくそれを避けてゐた、現在今まで筆をとつて……新聞を作る意思だつた、それ…僕の總てゞあつた……併し新重役の方針のもとでは、我々は作るべき新聞を持たない、新聞を作らせないことが明らかになつた、社員を半減し、支社支局を廢して、どうして仕事が出來るか……我々の理想が傷けられたばかりか、我々から耳も眼も奪つてしまふのだ……。

乘松君はせき込みながらも、鋭利な刃物を打ち下ろしたやうに、自己の決心の明るさを意識した。自己の仕事に沒頭してゐた乘松君から、其の仕事の系統と組織とを奪つた致命的な宣告を聞いた。

「我々も同じことです」群集の中から藤町君が、其の演説馴れした錆びた聲を張り上げた。「我々の運命は今までた

ゞ不安な暗澹なものでした、がこの御報告によりまして、それが明白なものになりました、我々は大地に投げられた蛙のやうに、資本家の横暴の下にペチャンコになつて虐げられてゐることが明白になつたのです、我々の投げ出された新たな世界は、我々の個人性を沒却する太陽の照らない世界でした、我々はたゞもうこの世界を脱却する外生きる道はないのです。

乘松、藤町二君の斷定は、混亂し紛糾してゐた群集の呪ひに、明らかな行くべき道を指示した。暗中の葛藤に炬火を點じた。「もう新聞は作らない」最後の決心が、稻妻のやうに、群集の頭の中を貫いた。

「諸君！」藤町君は一層調子を張り上げて、底力のある鋭い眼をぐるつと周圍に向けた。「我々がこの暗黑な世界を脱却することは、同時に我々の職務を抛擲することです、職務を抛擲することは、新聞を作らないことです、諸君、我々の中で一人でもこれに反對する理由を持つてゐる人がありますか……。

爆裂彈のやうな同意の叫びと、床を踏み鳴らす破壞の響きとが同時に起つた。藤町君は「重役の爭ひは彼らの爭ひだ、我々とは全然沒交渉だ、けれども、其の爭ひが我々の生活と職務の脅威に變じたのだ」と嵐のやうな群集の中に叫びつゞけた。

腹が痛いと言つて、眉を顰めながら下腹を兩手で抑へてゐた四本君は、突然獰猛な勢ひで、机の上に飛び上つた。二三度足を動かしたので、泥だらけな靴跡があり〳〵と堅い板の上に印しづけられた。十二文の足袋を穿く、馬鹿に大きな足跡が、總てを足下に蹈みつけようとする勇氣を裏書きするやうに。

「諸君々々―、我々が本社に來る時、現社會に對する新聞の職責に對して崇高な理想を持たなかつた人が幾人あるでせう、我々は理想の國憧憬の世界として本社に集まつたものなのです、及ばずながら、我々は今日まで其の理想の實現と遂行にあらん限りの努力を盡したのです、世間の新聞のどれもが、財閥の傀儡であつたり、官僚の手足であつたりする汚臭紛々たるものを一蹴し去る勇氣と氣慨を示したのです、それがどうですか、今のザマはどうですか、新聞に理解もなければ、何の理想もない彼れ畑内輩が、この我々の築き上げた理想國を一蹴しようとするのです、我社は

ごろつきの巣ではありません、我々は彼らに對してこの我々の金城鐵壁を守る權利と責任を持つてゐると信じます殊に……悲むべきことは、我々の神聖な仲間から、彼れらゴロツキ仲間に欵を通ずるやうな汚らはしい悖徳者を出したことです、彼らゴロツキ連が、もう明日はこの城塞を蹂躪しようとするのです、我々は平然としてそれを默視することが出來ますか……。

四本君は檻から放たれた猛獣のやうに吼えた。もう總てが何物をも鎔かす熱湯の煽動と混惑の渦卷きだつた。

「併しただ新聞を作らんといふだけでは」四本君は語調を一轉して物和らかに言つた「私の言つた本社を彼らの毒手から救ふ意味が徹底しません、私はこゝに編輯大會を開いて、彼らに對抗する道を講じたいと提議します、彼らの暴力に對しては正當防衛として、編輯全部の一致團結を要します、此際諸君の同意を得て實行委員を選擧して、我々の運動を具體的に決定したいと思ひます。

「諸君！」乘松君は火のやうに瞳を輝かしてゐた、矩形な顔の角々を鋭く尖らした、其の焦點であるやうに「我々に對する新重役の横暴は、それが果して我々の從事する一新聞社の出來事だらうか、重大な一社會問題ぢやないか……我々は之を社會に報道する義務を持つてをると考へる……我々は極力彼らの横暴を筆誅したい、さうして最後の筆を捨てたい……。

再び海嘯のやうな拍手と叫喚が湧いた。私は群集の力の強さに壓されて、それまで拍手もしない、一語も發し得ない窘窮のどんぞこにゐた。どうすることも出來ない迷妄に落ちてゐた。併し今までの成行きを、案外取り亂すことのない落着いた心持で見てゐることも出來た。偶然が必然を生んだこの場の徑路を考へる餘裕も持つてゐた。新聞を作らない、それも本社の運命としては當然來るべき反抗であるやうにも思つた。そこまで行かねば、この懸案は解決しないだらうとも考へた。けれども、重役の横暴を明日の朝刊で筆誅することに賛同して、それ〳〵が凱歌を奏するやうに、銘々の部署に歸らうとする危險は、私には餘りに明白な不合理だつた。鉾を倒まにして自らを刺すものだつた。私の狼狽は、いつの間にか、四本君の立つたテーブルの上に私を立たせた。さうして私でないもののやうな或る力が私を叫ばした。

「……私は諸君が新聞を作る作らない、といふ諸君の自由意思にまで立入つて、それに干渉しようとは思ひません、けれども重役の横暴を筆誅するといふことは、遺憾ながら公器を利用して私憤を晴らす、天下の公器を私するといふ結果を生みます、私は諸君の運動に尊敬を拂ふ心持から、諸君を公器を亂用する罪人にしたくはありません、此點だけは、どうか御再考を願ひたいのです。

私は前後の二三句を明らかに意識してテーブルを下りた。

永山君は深い決心を堅く一の字に結んだ唇に見せてすぐ私につゞいて立つた。さうして、自分は編輯部長として又た工場部長として、新聞休刊の全責任を負ふことを明言して、重役筆誅の小さい復仇心であることを說いた。

三笠君が先づ二部長の意見によつて再考したいと言つた、垂松君も前說を撤回した。

群集は次第に冷靜に還つた。さうして編輯局を一個の有機體として、今後の事變に策應する準備を考へる態度に立戾つた。

實行委員選擧に各部に分れた人々は、先づ言ひ合したやうに銘々のテーブルの整理をし始めた。紙を引裂く音、抽斗をがたつかせる音、それに交つて物の壞れる音が一しきりつゞいた。編輯室は瞬く間に白紙で滿地の雪となつた。暴力の蹈み荒して過ぎた荒凉たる曠野となつた。

其の曠野に立つた鐵道のシグナルのやうに、編輯大會の左の決議が貼り出された。

決議

一、吾等は新重役を信任せず
一、吾等は新に主筆兼編輯局長たるべき多賀木竹二郎及び部長隅田健治の兩氏を信任せず

この室の大時計はいつもの編輯締切時間、十一時半過ぎを、俺は無關係だと言つた風に指示してゐた。

五

新任主筆兼編輯局長たる多賀木君は、あれ程の昨夜の大事變に就いて何の情報をも受け取らなかつた。本社を財政上の危機から救ふべき重要な相談をうけて、眞面目にそれを考へつゞけた。ゆふべも其の爲めに、熟睡する事が出來なかつた。眼瞼の重い疲勞を感じながら、けふは少し早く出社しようといふ理由のない意識といふよりも要求が湧いた。その理由を考へるまでもない必然性のものだつた。

いくら他の大新聞と對抗するたつて、そんな錦繪のやうな空想はこの際捨てねばならない、財界の不況が原因して、もうあとの金を拂ひ込むことを、大多數の株主が是認しない、そんなら一時の借入金でもしようたつて、二十萬三十萬は愚か、二萬三萬の金だつて、世智辛い日歩の十錢も出さねば貸手はありやアしない、そんな金でどうして今の經費——隨分無駄の多い——をつゞけて行けるか、二進も三進も動きはとれアしない、一體こゝ迄押しつまる迄センチ詰めになる迄打ちやつて置いたことすらが、無計算無謀を通り越した、まるで下手な將棊だ…多賀木君はかう考へつゝ自分の警句に共鳴する快感を味つた…T主幹に對する情實も、新聞を縮少して聲價を落すことも、本社の命脈を保つ上からは、大事の前の小事だ、本社をブッ潰してしまつて、何處に本社創立の意義があるか、忍びないことではあるが、こゝを一つ忍ばねばならない、大多數の社員に對しても眞に氣の毒なことだ、けれども萬已むを得ない運命だ、金がなくて何も出來アしない、この數の上で明白なことがわからない道理はない、普通の常識さへありさへすれば…經費を半減することは、同時に社員を半減することだ、社員を半減して、今までの粗雜な亂脈な會計を整理して、出來るだけ緊縮しよう、社員も社員で隨分クヅが多い、居殘り宿直料が、月給より多いなんて、そんなベラ棒なことをやる奴もゐるんだからなア、社の冗費を節することは、實際朝飯前の仕事だ、と言つて我輩には何一つ野心はないのだ、たゞこの運命に際會して、眞に心配してゐるだけだ、誰か代つてこの難局に立たうといふ人があるなら、誰にでもやつてもらひたいのだ…紙面を縮少することは一時に聲價を落すと言つても、それが全然他の小新聞同樣に下落してしまふとは思はれない、今までの紙數の二分の一は繋ぎ得ない筈はない、一枚をいくらに下げるとしても、二分の一の紙數を保ち得れば…誰かの計算してゐたやうに、萬更絶望したものではない、イヤこゝで一時を忍耐することは、やがて他日の雄飛を

意味するものだ……。

多賀木君は誰に話しても疚しくない自己の立場の合理性を考へながら、本社の玄關に立つてゐる自分を見出した。

玄關には別に平日に變つた何の印象もなかつた。自轉車が雜然として投げ出されてゐた、下駄箱が横柄に立ち塞がつてゐた、餘り好かなかつた小使が、例によつて不愉快な顏して、尻目にかけながら行き過ぎた。

本社の折れ曲つた階段を上つて、編輯室に二三歩踏み入れた時、始めて今までに經驗しない明るさを感じた。と同時に熟した木の實の中をあるくやうな甘い快感を覺えた。編輯室に群がつてゐた誰もが、晴々しい愉快な顏をしてゐた。水をまいてゐる掃除婦までが若々しく美しかつた。始めはばら／＼鳴つてゐた拍手が、瞬く間に一齊的な盛んな大音響となつて天井に反響した。多賀木君は何の理由で拍手するかの解釋に苦んだが、それは自分が拍手されてゐるのだと直覺した時、そこに自分に銃口のやうに向けられてゐる群集の眼があつた。知つた顏のD社員がすぐ顏前に現はれた「オイどうしたことなんだ」と聲をかけようとする間もなく、Dは疾風のやうに驅けぬけた。多賀木君は、或るエタイの知れない羞恥を感じながら、それを我輩を歡迎する爲めの意味の一表現だらうといふ不自然な、自分ながらこぢつけた解釋に入らねばならなかつた、どうして我輩を歡迎するのかは、もう新たに主筆兼編輯局長として立つ事情が明白になつたからだらう、と强ひて理由づけねばならなかつた。

何の疑問も躊躇もなくいつもの自分のテーブルに進んだ。「お早う」といふ挨拶が無雜作に出るのだつた。隔意のない自分の挨拶が、當然受け容れられるべき調子の澁滯がそこにあつた。自分の聲を反撥する障壁に立向はねばならなかつた。

「狸！」

異樣な獰猛性を帶びた叫びが意識に上つた。同時に滿堂の人がドッと笑つた。不愉快な下劣な空氣が眼の前に震動した

「狸！」の意味を考へる間もなく

「まだ何にも知らないんだ。

「あれを見ないか、あれを、

次ぎ〳〵に耳を貫くいろ〳〵の音色の聲が鼓膜を刺戟した。さう言へば、編輯室の光景がいつもとはまるで違つてゐた。或る急迫した何物かゞ支配してゐた。この室の一番奥の方の壁に、何やら大きく書き出してあるとは、最初からぼんやり氣づいてゐた。赤インキで○や◎を圏點につけた無暗にイルージョンを起させるものがあるとは思つてゐた。初めにそれを注視しなかつた不覺を悔る或る衝動が起つた。同時に或る危險が身に迫つてゐる直覺が湧いた。決議、としてある二個條が、不思議に明快に其の一字々々がすら〳〵と頭にはいつた、これ位一字一字が透徹した意味を傳へた經驗は今までに無つたやうに思つた。この突然は總身に水を浴びせた。氷の矢が頭から足の先きまで貫き通つた。一時に咽の引きつる渇きのやうな苦痛が咽喉を絞めつけた。舌が化石のやうに硬張つた。物を言ふことも出來なければ、出すべき聲も無つた。旱りでカラ〳〵に涸れた井戸の中に投げ込まれたやうな、焦熱の幽閉が肉と骨を異常な力で壓倒した。二箇條の文字が、火になつて鼻のさきに焰々と燃えた、一字一字が燃えながら頭の上に落下した。再び骨まで氷結しさうな戰慄が總身を襲つた。

もう理由も由來も考へる餘裕のない、たゞこの場を逃れたい本能に突進した。意識も反省も伴はない昏迷の暗中に躍り込んだ。

六

ストライキ軍の有機的な組織は、きまりよく出來上つた。實行委員十八名は交渉、記錄、會計、整理の四部に適當に分けられた。特別な事件に對しては、それら四部の中から特別委員が選ばれた。特別委員の評決は是を實行委員全部の評決に問うた。多數の意見も少數の意見も、自由に開陳された。實行委員の評決は、一日に二度開く編輯大會の議決を待つて確定議となるのだつた。どのやうな交渉も請求も、この三段的な有機的な俎上に料理されねばならなかつた。總てが公明に、總てが平等に、特權も階級もない、總てが一兵卒なら、總てが一將軍である透徹した組織だつた。我々の

學問や議論で言ひ古されてゐた觀念が實現されてゐた。

實行委員は本社の横暴な專政政府に反旗を飜へした假政府だと言つてゐた。露西亞帝室を倒したソビエツト政府のさしづめ中央執行委員だと言つてゐた。場處が梅田橋の側だから、梅田假政府だとも言つた。イヤ橋畔假政府がいゝとも言つた。レニンと狼の申し子のやうなツラをしてゐると誰かの評した四本君は、其の實行委員のレニン役でもあつた。それまで實行委員會を立ちながら開いてゐた應接室は、狹くて窮屈で、且つ會議の要項が外に漏れる患ひがあつた。社長室兼會議室の廣間を占領して、そこに各委員の据わるべき椅子と長テーブルを見出してからは、南受けの六月の光線に照らされた空氣の明るさが、更らに強度に革命氣分を唆つた。始めてストライキのアルコール的刺戟に魅惑された陶醉氣分さへがそこには漂つてゐた。

この假政府の最初の外交問題、有機的組織の最初の料理は、自分の態度を辨明して、若しそれが容れられなければ、どのやうな處分でも受けるといふ隅田君の單騎乘込みであつた。

實行委員の説は大體二つに分れた。其の辨明を聽かうといふのと、聽く必要はないといふのとだつた。聽かうといふのは、正にも邪にも總ての人に口を開かしめねばならない、といふ一般論からだつた。聽く必要はないといふのは、彼の功罪は此際一指を染める必要のない明白なものだ、といふ個別論からだつた。一方は我々の公明と平等を傷けると爭ひ、他方はソビエツト政府が果して、露國皇帝の辨明を聽いたかと駁した。議論が段々岐路から岐路に入つて、討議が約二時間に渡つた。聽く必要のない否定論が、頑强に主張されたので、實行委員の多數は否定論に傾いた。之を大會の評決に問うた時も、同じやうに贊否論が繰り返された後で、否定論が勝つた。けれども若し聽かうといふ者があるなら、其の自由意思までは拘束しない、といふ條件つきだつた。

正午頃から約三時間、應接間に待たしてゐた隅田君に、ありのまゝの條件つきの議決を通じて、あなたの辨明を聽くものがあるかも知れぬから、御自由に編輯室にお出でを願ひます、と言つた時

「それは私として終生の遺憾です、法廷でも被告の陳述はきいてくれますが……。

昂奮した中にも絶望的な淋しさを包み得なかつた、陶田君の顔が――總てが平均を保つてゐた顏の筋肉の運動が永久に靜止したやうな、其の底に執拗な復讐心の萠してゐるやうな――交涉委員の眼にいつまでも消滅しない影像のやうに燒きつけられた。

七

私はT主幹や、舊重役の重だつた人や、是までの主なる同情者などを歷訪するに忙殺された。それが一通り片付いてから其の後の社の情況を視に來た。視に來たといふよりも、私の始めての經驗を一層强める欲求に燃えてゐた。私には新たな世界が現實に開展したのだつた。

編輯室に入つた左側の窓際には、給仕を相手にして、社會部員の誰彼がピンポンをやつてゐた。新らしいネツトや白い球が、インキや墨で汚れた机の上にくつきりと際立つて浮き出てゐた。經濟部、地方通信部、電話部の人々は、休暇外出のない全員が入り交つて、靜かに讀書したり雜談したりしてゐた。平生よりも賑々しい顏振れが、平和に落着いてゐた。煽動的な昂奮も、破壞的な反抗も、そこには見出されなかつた。愉快な希望を包む微笑と決心とが漂つてゐた。

委員達は皆會議室にゐますよ、と注意されて、私はすぐ會議室に入つた。

「どうなすつたかと思つて……實は待つてゐたのですよ。」

四本君は立つて私に椅子を與へながら言つた。

室の片隅のテーブル――それは社長川の――の上に、晝飯のかはりに食つた茜麥の笊が山と積まれてゐた。二重ねに積み上げた笊の間に、社長川のインキ壺の冴えた紺色が妙なアイロニーに光つてゐた。

この會議室はもう二ケ月も前から、社の運命を決する爲めに、殆んど每日のやうに使はれてゐた。社を精神的に滅ぼすか、形骸的に存績するか、そのやうな議論も幾回となく戰はされた。この壁、この窓、この机、この天井に、共の激論の反響のほとぼりがまだ冷めないうちに、新たに社の運命を決する他の組織がこゝに生れてゐる、御前會議に對する

民衆會議が陣取つてゐる……。

「イヤ面白い滑稽があるんです」乘松君は私の側に來て、ゆふべ遲く何も知らなかつたM君がN女史と連れ立つて、偶然社に立寄つた、發送係の某に、新聞休刊の事變を説明されて、そんな暴擧はないと其の發送係に共鳴して、工場に入つて、兎も角最終の地方版を市內版として出すことに運動してゐた、それを宿直員が發見して怒鳴りつけた、蒼くなつて逃げ出したのを、校正の柔道二段の先生に追窮されて、階段を團子になつて落ちた事實を面白く話してきかせた。

「それでも、どこか痛みはしなくつて、なんて介抱してくれる人がついてるからね。

「さしづめ、忠臣藏の伴內といふところだよ。

實行委員會にも、こんな悠揚とした時間のあることが私をまご〳〵させた。私も釣り込まれて、新聞「日本」で編輯全體がストイキをやつた時、一人同盟に加入しなかつた先輩があつたのを、當時斧九太夫に譬へて、一人の九太夫がなければ芝居もうてない、と笑つた二十年前の想ひ出を語つた。

「オイ、東京支社から電話だよ、今朝九時支社總會を開き、本社員と一致の行動を執り、且つ一切の措置を一任するに決す、といふのだ。

記錄係りの報告がある。

「よし〳〵、さう來るにきまつてるんだ。

「尙ほ決議後直ちに支社代表I君を派遣して本社員の運動に參加せしむ、とも言つてる、明日の朝は遲くも來るだらう。

「神戶、名古屋、下關、敦賀各支局は來てるんだが、京都が遲いね、何を愚圖々々してるんだらう。

「京都氣分で不得要領にテンテコ舞ひをやつてるんだね。

不得要領にテンテコ舞ひをやるといふのも變だなど〻言つてる處へ、京都支局からB君が來た、と通知に接する、驚いた交渉委員が面會に出て行く。

昨夜「本紙休刊」の號外を不取敢附近の讀者に配るべく發行したのを、發送で握り潰した事件についての善後策が問題になつて、兎も角事件の顚末を第三者の立場から公平に書いたパンフレットを株主にだけでも報告として送る事に決した。

事變を正當に報道して貰ふ爲めに、市内の各新聞社を歷訪して來た、朝田、都築二君が歸つて來て、其の報告をする。營業部員の中にも、この運動に參加したいと申込んで來た、其の回答の催促がある。今夜の當直、宿直員の決定を待つ、といふ要求がある。二個條の決議を書いた掲示の左右に、いろ〳〵過激な不穩な文句を貼りつけたのは、空虛な煽動に過ぎない、アンナものは撤去したい、といふ申出がある。有機體の組織も、内外の應酬で一時緊張する。

「君の部では、よくアンパンを毎日食つたもんだね、飽きもしないで。

「あれが面白いんだ、まア拾錢出す者も貳拾錢出すものもあるんだ、部長もそこにゐるから、義理にも一つどうですかと言はにやアならんさ。

「部長はそんなアミダにやア加はらないのか。

「無論！、そりやアこまかいからね……一つや二つ御馳走するのもいゝさ、こりやア却々いゝパンだとほめるのもいゝさ、子供に一つ貰つてくよ、で三つも四つも紙にくるんでしまはれるのには驚いたよ。

「ハツハツ、それぢやア君らの食ふ分がフイになるぢやないか。

「もうないのか、なんて大きな聲したつて平氣なんだからね。

「そこまでこまかいとは知らなかつたね。

「部長部員のアンパンを盗むも、ニユースにはならんからね。

こんな會話が私の耳には、火事で燒けた跡の近處合壁の逸話のやうに響くのだつた。

「靜肅に願ひます、もう個々の無駄話は個々の道德心に訴へて、禁止することにしようぢやないか。

「藤町君に贊成！、我々はそんな餘裕を持てない筈だ。

今まで無駄話の相手の一人であつた四本君が一番に叫んだので、皆がどつと笑つた。藤町君も仕方なしに、微笑を含みながら」

「もつと眞面目に……もつと眞劍にやるやうにしよう、どうも僕はお祭氣分になるのがイヤなんだ、ね、君、さうだらう、考へても見給へ、我々の生活に降りかゝつてゐる大事變なんだからね、生活を脅威するものに面接して、浮かれてゐるといふのが、日本人の通弊なんだ、イヤ自己を認識しない舊思想なんだ。

ネチ〳〵說き始めたのが、段々演說口調になつて往つた。又た藤町君の生活脅威論だ、といふやうな顏をしてゐた四本君は

「さういふのも無駄話ぢやない、矢張一種の無駄論だ、之を禁止しますハッハッ。

「委員長橫暴！

委員一齊の笑ひ聲が華やかに四壁に反響した。

「ぢやア僕も無駄書きをやめようか」Y畫伯は持つてゐた筆を捨てながら、何氣なく言つた獨語が妙に空氣を引き締めるやうに響いた。

給仕が私にR監査役が面會に來たことを通じた。R監査役は今度の新舊重役改選の際にも、中立の態度で、再選された唯一人だつた。R監査役の來ることは、この爭議の調停を意味してゐたので、其の報をうけとつた委員は一齊に沈默の緊張を見せた。

R監査役は親類の不幸の爲め、京都に往つてをつた。が、新聞休刊の報をきいて其のまゝ飛んで歸つた。新重役とストライキ軍の間に幾度往來してもいゝ、又は今夜どれほど遲くなつてもいゝ、この衝突を解決したいといふ希望だつた。私は私に其の交涉に應ずる權能のないことを明らかにして、四本君を紹介した。四本君はR氏と接衝して自席に歸つた。

「非公式ではあるが、かやうなR氏の仲裁申出に對して、之を受け入れるかどうか、それが先決問題だ、と思ひま

す、それに御異議はあるまいと存じますが、一應お謀りします。

實行委員會は、やゝ正式の調子に始まつた。

「我々は何も仲裁を待つてゐる者ではありません、けれどもR氏が本社の重役の一人として、本社を思ふ赤誠で、我々と新重役の間の懸案を解決したいといふなら、又た其の解決に適當な資格と準備を持つてゐるなら、其の申出でを拒否する所以はないと思ひます。

藤町君は「資格と準備に」の語氣を强めて、來るべきものを待ち設けてゐる口調で述べた。皆の默契が棚引く霞のやうに流れた。

「それでは御異議のないものと認めます。R氏はこの衝突を解決する爲めに、出來得るだけ我々の希望を容れる、といふことも明言されました、が、こゝに一つ條件がございます、この事件の解決の責任を自分が負ふのと同時に、どうか新聞を發行してもらひたい、といふことです。大體の解決は、いくら遲くなつても今夜中に解決する、細目の解決は新聞を發行しつゝ日を追つてと言つても、こゝ二三日の間に協定したい、といふことです。で、先づ我々に重要な希望を示してくれといふ要求があります。我々はこの要求に對して、どういふ回答をすべきでありますか、至極重大なことだと思ひます。

しばらく何かの激動を豫覺させるやうな沈默がつゞいた。變に各委員が壓しつけられたやうな息も苦しい沈默だつた。

「諸君は何も自ら好んで新聞を作らないのではない、新聞を作るべき狀態に置かれてないから、仕方なしに筆を執らないといふまでゞはありませんか。若しこゝに、諸君を新聞を作る狀態に置くものがあつたとしたら、當然新聞を作るべき義務も職責も蘇生して來ると思ひます……。

餘りの沈默に堪へないで、先づ私が口を切つた際に、側にゐた四本君は私の股をこづいて、何事かを警告するやうだつた。四本君は私と顏を見合せた時、眉を顰めて意味ありげに首を振つた。重く鋭く。

「僕も自分の職業から考へて、かうして筆を持たないでボンヤリしてゐることに飽き足らなかつた一人です」藤町君

は、私の語尾をうけて言つた「我々を新聞を作らせない狀態に陷れたものは、煎じ詰めれば新重役の態度であつた、若し新重役が其の態度を改めて、我々の前に白旗を揭げることになれば、私らも亦た其の職責に歸らなければならない、是は何よりも明らかなセオリーです、イヤ現實です、我々はこの不滿足苦痛から逃れねばならない：：我々も我々の本領なり權威なりを傷けない範圍に於て、我々の敵の立場をも考へてやらなければなりません、彼等の所謂體面を、又彼等の行きがゝりを：：：そこに我々も生き又た彼等をも生かす道があると思ひます。

藤町君の意見による委員の口々の私語は、其の告白を是認し又た贊成の雰圍氣を作つた。四本君は、私に向つて「新聞を出しちやアおしまひです、おしまひですよ」と感傷的な言葉を發してゐたが

「イヤ、いかん！　いかん！」と怒號するやうに、大勢を押し戾すやうに怒鳴つた「只今藤町君は、彼ら新重役と妥協的態度に出るやうに言つたが、それは斷じていかん！　我々はそんな生溫い動機でこの運動を起したのではない、我々を一商事會社の雇員と見る彼らと我々とは、どちらが生きるか死ぬるかの全然相容れない立場にあるのだ、劍を持つた人間と人間とのブッカリ合ひなのだ、新聞を出してくれ、それは彼らの手段だ、それから我々の團結を切り崩さうといふのだ、イヤ切り崩さうとしなくても、團結は破壞されるのだ、この我々の全人格を打込んだ運動を龍頭蛇尾に了らしめたければ、急いで新聞を作るがいゝ！

左傾の動搖が、方向を轉換する運動體の中に起つた。

「イヤ、僕がいつ新聞を作ると言つた、新重役と妥協しろと言つた」藤町君は對抗的に熱してゐた「我々の本領なり權威なりを傷けない範圍と明かに斷つたのだ：：：だが、一個新聞を作るといふことを恐れる理由が何處にある、我々は無稽な幻像を描いて、それに脅かされるほど非常識であつてはならない：：：

「何が無稽の幻像なのだ、非常識といふのは君のことだ。

「どちらが非常識であるかを證明しよう：：」藤町君はもう總てをいふ時だとの決心を見せた「我々百餘名の群集の生活が何であるかを先づ反省したければならない、又た我々の團結の內容がどんなものであるかの實質を知らなけれ

ばならない……我々の生活は新聞記者なのだ、今日其の生活を停止してゐることは、我々が斷食してると同じに不自然なんだ、我々は出來るだけ其の不自然から自然の生活に歸らうとしなければならない、それが我々の本能なのだ、新聞を作ることは、其の自然に歸る第一モツトーだ、腹が減つたから飯を食ふのと同じなのだ、……それから我々の團結といふものも、若し之を個々に解體して見て、果してどの程度までの結合力があるか、僕は僭越ながら、それが甚だ薄弱であることを認めるものだ、なぜそれが薄弱であるかは、個々の生活を停止してゐる不自然の生む當然の歸結なのだ、我々はそれら個々の生命に、其の生きる生活を與へるが爲めには、合理的な基礎による方法を講じなければならない、我々は世間の多くの勞働運動が、この合理的な基礎を誤つて、核心を離れた岐路に迷ひ入つてる醜態を學びたくはない、總ては個々の生活が基調なのだ、生活の眞の叫びを迫害するものは暴君だ。

「そんな屁理窟はどうだつていゝ」四本君は面倒臭いといふやうに怒鳴つた「我々は我々の生活以上に、もつと尊いものを持つてる筈だ、飯を食ふことのみが我々の生活の全部ぢやないんだ、僕だつて、僕だつて我々の團結を慘めなものにしたくないから言ふんだ、個々の生活に拘泥して、團結の生命を賣るのが君の屁理窟なんだ。

「我々の生活以上にもつと尊いものを持つてる……それが東洋流の逃避的空想に過ぎないんだ、幻滅哲學なんだ、我々はもつと確實な現實に面してゐるんだ、空想でなく事實を摑んでるんだ、事實の前に我々は禮拜しなければならない。

「どちらが事實に卽してるといふんだ、さういふハイカラ論が大事を誤るのだ。

「僕が餘計な口をきくやうだが……」三笠君は段々激論になつて行く双方を宥めるやうに、兩手を伸べて、鳥の翼のやうに二三度動かした「僕のきく所では、藤町君の意見にも十分な合理性がある、四本君の意見にも亦た別な合理性がある。つまり藤町君は新重役をも我々をも、敵も味方も同じ爭議の一個體として見ようとしてゐる、四本君はそこを區別して、新重役の資本家的常習を目安にしてゐる、全然立場が違ふから、議論の方向も別になるやうに思はれるんだ、で、僕がこゝに提議するが、既にR監査役の仲裁を容れた以上、それに何らか回答を與へなければならない、

其の條件を四本君も贊成し、藤町君も異議のないものに作れば、兩君共に其の意思が疎通するのぢやないだらうか。

「さうなんだよ」Y畫伯は又た何か無駄書きしてゐた筆を置いて言つた。「どうせ我々個人の寄り集りは、區々の意見の綜合なんだ、綜合力が弱められて、區々に動くことは自由であるとしても、そこに群集心理とは別な群集道德が生れる筈だ、我々の運動を有效にし意義あらしめ、さうしてR氏にそれを取次ぐ力があるとしたら、當然そこに一致點を見出し得ると思ふんだ。

重んぜられてゐたY君の意見によつて、條件の討議に入つた。

藤町君と四本君の間に、實行し得る程度にまで讓歩すべきだ、イヤ實行不實行を問題にしない、我々の全的希望を提出すべきだ、といふ議論が再び對抗的に鬪はされた。其の間に各委員の贊否論も挿入されて、捕捉の出來ない混亂に陷つた。

「一歩を讓ることは同時に千歩を讓ることだ」四本君は最後に總てを決定するやうな語氣で、おつかぶせるやうに言つた。血の氣のない眞靑な顏が異樣に冷たく光つた。「彼らが實行し得るやうな或る計畫を我々の條件に加味することは、我々の運動の一分子として彼らを見ることだ、それならこんな敵對行爲は起らない筈だ、我々は我々個人の問題よりも、もつと大きな目的の爲めに我々の生活を犧牲にしてゐるのだ、諸君がこの運動に退屈を感じない限り、一步も出ける必要はないのだ。

藤町君がもつと爭ふとする氣勢を擁塞する大勢が、もうそこに流れてゐた、自己の信ずる正當な立場の侮辱され無視された憎惡心から、藤町君のもう一語も發しない深い沈默の前に、最大最重の條件が可決された。藤町君が、まるで低級な群集心理だ、と言はぬ許りに苦り切つてゐるのと沒交渉に、委員は痛快々々の凱歌を擧げてしまつた。

八

勞働者が工場を占領したやうなこの對陣は尙ほ二三日つゞいた。R監査役は案の如く仲裁の手を引いた。畑內常務か

らは、最後の手段として、ストライキ軍の講和的意思を求めた。[illegible]きの希望條項に對する逐條審議といふやうなものだつた。我々の信任しない新重役の提議に應ずる必要はない、といふ理由の下に、それには答へることをしなかつた。其の間ストライキ軍の株主に配つて事件の經過を報じたパンフレットに對して、多賀木、隅田二君の反駁的パンフレットが出たりした。其の外悲壯な眞面目な經緯の中に、油に水の交つた滑稽な偶然が織り込まれたりした。

ストライキ始まつてから第三日目に血の中から氷を掘り出したやうな、掲示の不思議な文字を、編輯室に見出したのだつた。

六月三十日まで本紙を休刊す

但し俸給は二十五日午後三時より午後六時の間に支給す

六月二十日　　總務部

この掲示は、新重役の編輯ストライキに對する逃避を意味してゐた、同時に本社の運命を其の手に握つてゐた新重役の投げ出し、本社の解散を暗示してゐた。新重役はいつの間にか大阪を引拂つて其の隻影を止めなかつた。敵を失なつたストライキ軍の死守しようとした城塞の中に、彈丸の盡きた砲身が、勝利の悲哀と、永劫の冷却を物語つてゐるやうに、この掲示がいつまでも吹きさらしになつてゐるのだつた。――(完)――



鯉の巣

里見弴

一

「堀田先生。お宅からお迎ひでございます」
誰やらの男衆が來て、膝行りよつて、耳もとで囁いた。
「うちから？　可訝しいな。なんです、書生でも來てゐるんですか」
「いゝえ、お宅の奥様……でせう」
はゝア、と氣がついたので、
「ぢアちよつと失敬しますよ。ひと休してゐてくれ給い」
居所々々に立つたり坐つたりして　云ひかけた臺詞、爲かけた科分を急にやめて了つて、一齊にこつちを見てゐる役者たちに、さう聲をかけながら、臺本を載せた机の前を立つと、堀田は、努めて悠々と階段をおり、廣々ととつた本家の下足場へ出て行つてみたが、誰も立てはゐなかつた。
「どこにゐるんです？」
すぐあとからついて來た男衆を振り返ると、

「あの、なんです、自動車のなかです。運轉手さんが來てさう申しましたんで……」

「あ、さう。ちアちよつと……」

「へ、お靴。オイ、庄さん、ちよいと堀田先生のお靴を……」

「いや、草履でもなんでもいゝ、そこらに出てゐるものを突ツかけさせて貰はふ」

「いゝよく、どれでもいゝよ。誰ンでもいゝから、そこらにある下駄をおあげ申しておくれよ」

下足番が揃へてくれた駒下駄を突ツかけて、九月末の日射のなかへ出てみると、本家の前を一二間はづして、箱の自動車が、彼方向にとまつてゐた。うしろの小窓にはブラインドがおろしてあつた。堀田の姿を見ると、降り立つてゐた運轉手が、片手に帽子をぬいで、扉をあけやうとしたが、なかで制めたとみえて、すぐまたパタンとやつて、そこを離れて行つた。

硝子をさげた窓のそばへ顔をよせて、豫想どほり、絹子が微笑してゐた。その微笑が言葉だつた。まづ堀田が口を開いて、それに答へなければならなかつた。

「……困りますねえ」

「どうして？」

「どうしてつて、まだあなた、十一時まわつたばかりでせう。今日は調子よく行つてるから、いつもよりちつとは早いだらうとは思つてますが……」

云ひながら、ちよつきの衣嚢から金時計を出してみて、「それでも、……さうね、一時半にはなるでせうね。一體、三時に、むかふでお目にかゝるつて約束ちアありませんか」

「あのね、あたし、あなたが、舞臺監督つてことをしていらつしやるとこが見たいの」
「そんなこッたらうと思つた」
「いけない？」
「いけませんさ。こつちはいゝとしたつて、第一あなたがてれちまいますよ。男ばかりのなかにはいつて來て……」
それアとても駄目ですよ」
「誰かおつれがあればいゝ？」
「まア然し、よした方がよござんすね。役者の素顔が見たけりや、またなんか機會をつくつて見せてあげますから……」
「あら！」
と、睨みつけて「ぢアもう……、そんな風にとつていらつしやるんなら、もう決してお願ひいたしません」
「えゝ、その方がよござんす。あなたのやうな方に見てゐられちや、第一役者が硬くなつちやつて、どうにも仕様がありやアしません……」
「まアいやだ？」
急に、襟がみをとつて引かれたやうに、身をそらして「二階から覗いて見てるわ……」
しまつたな、と思つたが、振りむきたい首をぢつと据えて　さも平氣らしく
「それごらんなさいな、下廻りに覗かれたくらゐでそれなんだもの……。然し、慌て首を引ッ込めたりしちア困りますね。うちから女房が來たつて、あたしんとこに呼びに來たんだから……」
「それで、あなた、奥さんだと思つて出ていらしつたの？」

胸は翅したが、うは目つがひに、茶屋の二階から見えない程度をはかつて、奥の方へ腰をかけ直し、序にあたりを見廻して「あら、運轉手どこへ行つちまつたらう」
「ゐますよ、どつかそこらに。……だつて、まさか女房が來るわけはないぢアありませんか……」
「あたし、ほんとに惡かつたわね、お稽古中にお呼び立てしちまつて、ごめんなさいね。お稽古最中だつたんでせう？」
「えゝ、まア、それアよござんすが、……ぢア、二時半から、四十五分までの間に、必ず會場の前で待つてますからね、どうか一つ、西洋時間でお願ひしますよ」
「えゝ……」
「なんだかひどく氣がないんですね。それほど行つて見たくもないんなら、よしてもよござんすぜ」
「面白いでせうか」
「冗談ぢアない。あなたが、行つてみたいから、つきあつてくれつて仰有つたんぢアありませんか。面白いか面白くないかは……」
「えゝ、よござんす。行きませう。二時半ですね。藝術院の前でしたね」
「え？　藝術院ですか。一昨日の話ぢア分立會つてことに……」
「あゝさう。ぢア分立會、よござんす」
「いやだなア、何もさう、義務のやうにして見に行く必要は……」
「いゝえ、見たいの。大へんに見たいの。……どうも、お忙しいところを御邪魔してすみませんでした。ぢア、二時半に分立會の前ですね、十五分以上はお待ち申しませんよ」

「えゝ、よござんすとも。その代り、あたしの方もさうですよ」
「えゝ、無論でせう。……すみませんが、ちよつと運轉手を探してみてくださいませんか」
「えゝ、よござんす。ぢア後ほど……」
「さようなら。お邪魔してほんとにすみません」
「どういたしまして」
見廻すと、座の前で、繪看板をあげるのを見物してゐた八九人の人だちのなかに、煙草を啣えて立つてゐた。堀田はこちらから聲をかけ、手をあげて呼んで置いて、
「さよなら」
と云ひさま、下駄を引づり〳〵、小走に茶屋へとつて返した。
「どうもお待遠さま」
二階の稽古屋へはいつて行くと、景氣よくさうは云つたが、なんとなく氣がおくれて、人の顏が見られなかつた
「どういたしまして」
と、机のそばに横坐(よこすはり)でゐた座頭の役者が、一同に代つて挨拶を返しながら、居ずまゐを直すと「なんか、急な御用ぢアござんせんでしたか」
その、眞面目、と云ふより心配顏を、けれども堀田は、そのまゝうかとは受けとらなかつた。二階から顏をだしてゐた連中の御注進が、それからそれへと傳つて、もうちやんと御大將の耳へも聞えてゐさうなことだし、さうだとすれば、この人の性分としては、猶更どこまでもうちからの迎のやうに白ばツくれるのが、一番自然だつた。それを知つて

ゐるだけに、堀田も、
「いえなに、ちよつと……」
と、輕くうけ流して、すぐまた稽古にかゝつた。
「ぢア、えッと……、なんの……、若いもんの出から返してください」
あつちこつちに塊まつて雜談してゐた役者たちは、喫ひかけた卷煙草を灰のなかに差したりして、ぞろ〳〵と、各自の居所についた。

二

一枚の繪の前に立つて、まづ眞正面と云ふ位置が、幾人もの人を容れないには違ひない。また、批評めいた言葉を、はたの人に聞かれまいとするのも、殊に女としては當然の心遣ひだ。——とは云へ、いくらか凭れ加減に、ぺつたりと肩を押しつけて來る絹子の馴々しさには、堀田の方で辟易して了つた。さも解つてゐるらしく、頭から馬鹿にしてかゝつた氣持の露な批評には、尚更あてられた。薄氣味わるいほどの好意をみせ、人前ではこつちがてれて了ふやうな色氣をふくんで、頻に近づいて來やうとしてゐるこの女として、もし利口なら、兎も角も等しく藝術の仕事に與はつてゐる俺の前だけでも、そんな風に、藝術品に對して、頭から小馬鹿にしてかゝつたやうな態度は愼まうとする筈だ。勿論自分では、女らしい自惚から、美術鑑賞の非凡なところを、十分相手に印象させてゐるつもりなのだらうが、それにしたところで、いやに皮肉がつた警句批評などは、もう時代錯誤だ。——そんな風に考へて、いゝ加減不愉快になりかけてゐたが、ちよいと一つあたまを換へて、なにどうせ他人のことだ、どうだつて構やアしない、と云ふ氣持になつて了ふと、一向うはのそらで、たゞ「ふうむ、さうですねえ、えゝ、成程、うん、さう〳〵」などゝ、出鱈目な相槌さへうつ

てゐればいゝわけで、それほど苦にはならなかつた。それとは反對に、初のうちは、辟易はしながらも、やつぱりさう悪い氣持ではなかつた肩の摩擦が、だん〱やり切れなくなつて來た。いかに評判の萬年新造とは云へ、堀田よりは七つ姉さんの、もう四十を一つ越してゐる。美貌と小柄のおかげで、他所目には、存外さう可訝しくは見えないのだけれど、なんと云つても年は年で、知つた人や、こつちでは知らないでも、新聞雜誌の寫眞、講演などで、むかふだけで顔を見知つてゐるやうな人たちに、遠くからぢろ〱觀察されてでもゐようものなら……、と、相應名士らしい自尊心もあつて、堀田は、しんから迷惑に感じだした。つまらなさうに、二三枚とばして先へ行つたり、ちよつと小戻りして見たりして、出來るだけ佐々木未亡人のそばを離れる算段をしてゐた。そんな風で、分立會の展覽會場を出ると、絹子は、引き續き總評と云つたやうなものを述べたてながら、厚いフエルトの下に小砂利を軋ませて、どん〱藝術院の方へ歩いて行つた。

「藝術院……、どうします？」

ちよつとした言葉の切目をみつけると、堀田は足を停めて、突然さう云つた。

「どうしますつて、序だから見て行かうぢやアないの」

「勞れやアしませんか」

「いゝえ。だけどあなた、なんだかへんだわね。こないだから、どうも藝術院と云ふと、行きたくなささうになさるのね」

「別にさう云ふわけぢやアないけれど……」

と、また歩きだしたが、絹子は默まつてゐて、

「ないけれど……、どうなんです」
「どうでもないんですよ」
「あら、云ひかけたことを中途でよすなんて失禮よ」
「いゝえね、なんでもないんですけど、どうもあすこには、知つてる連中が多いんでね」
「だつて、ちつとも構はないぢアないの」
「ですから、お伴しますよ」
「いやアねえ、お伴しますだつて……どう云ふ方？　あすこの同人で御存知なのは」
「北垣君、小柳津君、郡司君つて云ふやうな若手連は、大抵知つてます。北垣君なんぞ、京橋で、小學校から中學まで同級で來たんだから、もう隨分舊い友達でさアね。この三四年こそまるツきり往き來しませんけれど、以前は一番の親友でしてね」
「どうしてこの頃はお逢ひンならないの？　なんか、喧嘩でもなすつたの？」
「いゝえ、まさか喧嘩もしないが、ちよいとへんなとこがある男でしてね。それに、仕事は違ふし、お互に年中忙しいから……」
「お綺麗な方なんでせうね」
「どうして？」
「だつて、のべつ都新聞の艶種に出されてなさるわ」
「さう〳〵、さうですね。新聞でみると、大した色男ですね。大正の業平か、世之助か、つてところですかね。何しろ

日本畫の先生は、一つ當りやア一年たゝないうちに成金になつちまうんだから、さぞ豪遊を極めてるこつてせうよ」

「うちにも慥五六幅あつたと思ふけど、北垣鄭谷つて云へば、隨分もう以前から有名よ」

「さうですとも。ですから今ぢアもう大したもんでせう。中野とかに、とてつもなく宏大な邸を建てたつて話ぢアありませんか。吾々の方たア大違ひですね。吾々の方で、吾々くらゐな年結構で、邸はおろか長屋建みたいなもんでも、自分のうちと名のつくものをもつてる人間なんぞ、一人だつてありやしません。ありやア『處女林』の同人くらゐのもんでせう。――なアんて、思はず愚痴が出るんだから、可哀想なもんです」

「ほんとねえ、實際文學者つて報はれないもんね。その代りまた……」

「なんぞいゝことがありますか」

「それア澤山おありでせう。第一あなたなんぞ、後世になれば……」

「後世？ 後世恐るべしだ。さきの一萬圓より、手どりの百圓の方が結構ですよ。第一その方が當世ですよ」

やがて二人はまた、場内の白ッぽい光のなかに立つた。分立會では、不思議なほど知つた顏を見かけなかつたのに、こゝでは、いきなり這入口で、新聞社の男に捉つて、芝居の方のことをいろ〳〵訊かれたりしたのを手初に、行く先々で挨拶ばかりしてゐなければならなかつた。その度に絹子は、あとで、そばへすり寄つて來て、「今のだアれ？」などゝうるさく訊ね、それが藝術家だつたりすると、幾度もそうッと振り向いて、繪の方などはまるでお留守になつて了ふのだつた。

丁度この派の頭梁の作品の前に、二人が押並んで立つてゐると、うしろから、默つてポンと、堀田の肩をたゝく者があつた。

「ヤア、しばらく」

「しばらく、御機嫌さん」

と、頭は一分刈で、本薩摩の對に、石摺の袴を低くはいた、なんとなく大入道と云つた感じのする男が、柄になく、可愛らしく顔ぢうを笑皺めながら、關西訛で、「つい忙しいもんで、いつも御無沙汰ばかりしてゐてすみません」

「それアお互様ですよ。然し、相變らず、……ぢアない、ます〳〵御旺で結構ですよ」

「何が御旺なことあるもんですか。あんたこそ、體が二つあつても三つあつても、まだ足らんくらゐでつしやろ、然しお互に、ちつと御無沙汰すぎますなア」

ちらりと振り返つたきり、二足三足さきへ行つて、すまして繪に見入つてゐる絹子の後姿へ、猛禽類のそれを思はせるやうな鋭い眼を射つけながら、「久振りで、せめてちよつとなとお話がしたいし、どうです、お茶でもめしあがつてくださいませんか」

「有難う。ちよつとつれもありますし、まだすつかり拜見してゐませんから」

「よろしいでせう、どうです、御一緒に……。こんな繪なんぞ……」

と云ひかけて、慌て口を叩きながら、大聲に笑ひだして、「ぢアまア、ごらんなすつてから……。わたし、あの、休憩所の方でお待してゐますから、どうぞ……」

「えゝ、有難う」

暖昧に挨拶し、互に頷き合つて別れると、絹子は、それとなく振り向いて、さつさとそこを出て行く男を見送つてから、

「どなた?」

「分りませんか」
「いづれこゝの畫家さんには違ひないけれど……」
「分りませんかね」
「まさか、北垣さんぢアないでせう？」
「さうですよ、あれがさうなんですよ」
「へーえ」
「不思議な桑平でせう？」
「いゝえ、それアなんてつても、やつぱり立派ですよ。顔だちだつてしつかりしてゐるし、それアさう云ふ點ではちつとも不思議ぢアありませんけど……」
「ぢアなんです、何が意外だつたんです？　裝ですか？」
「いゝえ、頭」
「ふゝん」
と、輕く笑つて、「あれアね、逆上性の頭痛もちで、昔ッからあゝしてゐるんです」
「それよりも可訝しいのは言葉。隨分ひどい上方訛ぢアありませんか」
「だつて、大阪かどつか、あのへんの人間ですもの」
「それにしぢア、あなたと小學校が一緒だなんて、へんぢアありませんか」
話し〳〵、二人は、だん〳〵室の中央へ、――あたりに人のゐない方に歩いて來て、それでも向合ひにはならずに、

肩を並べて、兎も角も顔だけは、繪のある方へ向けて立ち停つた。

「えゝ、それアね、から云ふわけです」

上着の襟に兩手をかけ、ちよつと反身になつて、堀田は話しだした。「生れは無論彼方ですが、なんでも小學校の二三年時分からはいつて來たんだから、十か十一でしたらうね、今から思ふと、親父さんのお妾のうちなんですがね、どう云ふ事情だつたか、そこへ預けられてゐたんですよ。無論當人もそんなことはちつとも知らずに、叔母さん〳〵つて云つてましたがね。それが、親父さんが、相場かなんかで失敗しましてね、お妾さんどころの騷でなくなつて、急に實家に歸つたのが、縣中學二年でしたつけ。それからその次に、今から八九年前に、繪の勉強に出て來た時分の三四年の間が、一番あたしと親しくしたんですが、その後また暫く歸つてゐましたよ。ですから、もし勘定してみたら、無論半々よりは、あつちにゐた方が多いんだし、それになんてつても、生れ故鄕ですからね、それア言葉は、あんなもんでせうよ」

「あゝさう」あたしもね、初ちよつと、さうぢやアないかしらつて云ふやうな氣もしたんですけど、何しろあなたと小學校が一緒だつて云ふんで、すつかり江戸ッ子と思ひ込んぢやつたもんですから、言葉を聞いて、やつぱり違ふな、と思つたの。あゝ、さうですか……」

云ひながらまた、どちらからともなく歩き出して、人の流のなかにはいつた。勞れもしたし、それに、つれの感じが、だん〳〵重くなつて來て、堀田は早くそとへ出たかつた。隙をみては、どん〳〵先へ來て了つた。

「堀田君、堀田君」

北垣が、休憩所の卓を離れて馳せよつて來た。見ると、その卓には、郡司、畑、と云ふやうな連中がゐて、遠くから

輕く会釋を送つてよこした。

「奥さんは？」

そばに來ると、北垣はいきなりさう云ひながら、ひとわたり絹子の姿を求め見廻してから、「堀田君、君はいかんね、なんぼ久振りだからつて、奥さんにぐらゐ紹介するもんですよ。けしからん！　いや、然しお目出度う。つひ知らなかつたもんで……」

「有難う、二年前に、慥に女房は貰つたが、今日いつれはさうぢアないですよ」

「なほけしからんわけだ」

はぢけ返るやうに笑つて、「ぢア、あんまりひつかう云ふたら、御迷惑ですな」

「いや、そんなことはない。久振で、あたしは、なんなら、晩飯でもつきあつて頂きたいくらゐですが……、ちよつと待つてください」

一度こつちに來かけて、それと見ると、また何げなく、遠のいて行つた絹子のそばに行つて、

「どうです。北垣君を御紹介しませうか」

堀田には、絹子が、いやと云はないことはよく解つてゐた。この類の女として、さうでないのは稀だけれど、また絹子ほど「名士好き」も少なかつた。亡なつた良人が、先代の遺産を、さうして殖しもせず、減しもせず、それと云つて人目にたつやうなことは、何一つ仕遺さなかつた、家名や財産のわりにして、あまりに人に知られなすぎて生涯を送つたために、謂ばその反動で、何よりも、彼よりも、「有名だ」と云ふことが有難く思はれるのだつた。政治家、僧侶、軍人などはそれほどでなかつたが、そのほかなら、落語家だらうと、藝者だらうと、職人だらうと、藝術家だらうと、畫

業家だらうと、髮結だらうと、料理人だらうと、役者だらうと、なんだらうとかんだらうと一緒くたに、たゞ有名でさへあれば頭から好意をもつて臨まずにはゐられなかつた。何の某の書、畫は云ふまでもなく、どこそこのかき餅、誰の指した箪笥、佛國某社製の香水、何々屋なにかしが好みの帶、——鬼にも角にも、彼の女が持ち來す名詞は、かき餅だらうと、帶だらうと、たゞかき餅、帶、ですむためしがなく、必ずなんとか、有名なるところの肩名を背負はされて了ふのだつた。そして、堀田にしろ北垣にしろ、平均一月に二度や三度は、新聞に名前の載る人間だつた。

「さうね、お目にかゝつてもいゝわね」

かくし切れない喜びに、白粉の濃い頰を、ぽツと薄く染めながらも、負ン氣から、どうでもよささうな返事をした。

「ほかに、郡司君と畑君がゐますが、これもお差障ないでせう。お茶を差上げたいつて云つてますから……」

「あゝさう。あたし別段……」

「さうですか、ぢアどうぞいらしつてください」

さきに立つて行くと、北垣はもう休憩所の卓に返つて、三人で談笑してゐた。堀田は、自分たちのことが話題にされてゐるやうな氣がした。—— いまに見ろ、十分たつかたゝないうちに、みんなこの女の網に引ツかゝつて了ふんだ。—一月ほど前に、男爵家の嗣子で、劇藝術を研究中の、謂はゞ弟子分にあたる、まだやつと二十を出たばかりの坊城に、彼の叔母として紹介されて、その見晴しのいゝ崖ぶちにたつた四阿で、夏の夜を樂み、冷い飯ものを攝りながら、輕い世間話に耽つた折の、したゝるやうな絹子の魅力を思ひ出すにつけ、ひとごとながら、みんながあゝころ／＼とひつかゝて來たら、さぞいゝ心持だらうと、今では堀田は、それな肚になつてゐた。

郡司や畑と、簡單に挨拶を交すと、まづ三人の名前を並べてから、

「佐々木さん、――麹町の佐々木さんの未亡人、絹子さん……」
ついしたいたづら心から、かう勿態をつけて、芝居がかりにやつてみると、果して、或る感動が流れたなかに、有繋に北垣だけは平然としてゐた。
「ようこそお越し下さいました。まアどうぞおかけなすつて……」
言葉だけは鄭重だが、にべもなくさう云ふと、眞ツ先に自分が腰をおろして了つた。

三

二本目か三本目の銚子を運んで來た女中が、
「おつれ様がお見えになりました」
思はず二人は目を見合せたが、すぐ絹子は微笑ひながら、
「なんか間違ひぢアないんですか。私たち、別につれつて……」
「なんてつて尋ねて來たんだい」
悠々と盃は銜んでも、然し不興味な氣持は、眉宇の間に隱しきれずに、堀田が、「あたしたちの名前を云つて來たのかい、さつき宿帳につけた名前を……」
「……さア……」
「さアつて、さもなきア、つれかどうか解るわけはないぢアないか」
「なんですか、私はお出迎申しだんぢアございませんから、よくは存じませんけれど、こちら様のおつれさんがお見えになつたからつてたゞさう云はれて參りましたんで……」

「もう一度よく聞いてごらん。誰かほかの客の間違ひだらう」

「さようですか……」

と、なぜかもぢ〳〵立ちかねてゐるところへ、三和土の上に置いた渡りを踏み鳴して、足音が近ぢいて來た。有繋に色をかへて、絹子は、堀田に眴をすると、體ごとくるりと床の間の方へ向つて了つた。立ちあがつて、廊下に出ようとして手をかけた襖が、勢よくそとからがらりと引きあけられて、大男が、ぬツとそこに立ち塞つた。

「やア、堀田君、昨夜は失敬……」

押しのけるやうにして、ずツと通つて、帽子や外套をかなぐり捨た北垣は、呆れて見上げてゐる絹子に、「先日はどうも失禮しました。然しよくお出かけでしたな。えゝ、こゝはちよつとえゝところですよ。……や、女中さん、もう一つ座布團をどうぞ」

「へえ、たゞ今……」

と、前からゐたのが立つて行き、北垣を案内して來たのは、ぬぎ捨た帽子や外套を仕末してゐた。堀田は、ぢろりとその女を見てから、北垣と目を合せると、急にニコ〳〵顔になつて、

「君、一人？」

「えゝ、一人ですよ。今日はね、ちよつと内職で、朝からこつちに來てゐました

「内職つて？」

「えゝ、釣ですよ。そいで、偶然いまそこを……」

と、硝子戸のそとに、洋々と流れてゐる、暗い水の面を顎で指して、「ついあそこを舟で通りかゝると、あんな方の姿

がみえたから、……丁度あたしもこゝのうちで飯を食つて歸るつもりでゐたところだつたし……、アッハヽヽ、ハ」

「へえ、さうですか」

さつきから、一言も口を利かずに、——兎も角も手について——挨拶してゐる北垣に對しても、小首一つかしげずにゐた絹子が、その時、うはづいて震えを帶びた聲で、「あなたには、さう云ふ御趣味がおありですかねえ」

「釣ですか？えゝ、何より好きですな。第一、體によろしいです。かう、川面を見晴しましてな……」

「釣をなさりながらでも、御酒を召あがるんですか」

「や、これは失禮、臭ひましたか」

と、席をいざると、半分乘つてゐた座布團の上に大胡座になつて、「失禮序に、かうさして頂きませうかな。どうです、堀田君、あなたも……。えゝ、それア、意地のきたない話ですが、瓶詰と云ふやつを持ち込みましてな……」

そこに、北垣の食べものが運ばれて來た。早速一杯飲んで、すぐそれを堀田にさし、

「どうです一つ……」

と、うけ取らして註いで「……どうです一つ、また昨夜のやうな景氣にいかうぢやありませんか。アッハヽヽ、ハ」

「へえ、昨夜どちらかで北垣さんと御一緒だつたんですか」

絹子にぢツと睨まれながら、堀田は、唇に盃をあてがつたまゝで、曖昧に頷き返すと、「まア、一ついかゞです」

「あたしは澤山。頂きません」

「まア、奥さん、さう仰有らんと……」

女中の手から銚子を奪つて、酌をしようとする北垣には、目もくれずに、

「へえ、さうですか」
と、獨語に呟いたが、急にあとを早口に、「フン、口の輕い男……！」
「堀川君」
と、大きな聲で、かぶせて、「ぢアこちらに廻して頂きませうか」
「あ、さう。これァ一體、御返盃でした」
手もとの、自分の盃を見ながら、「どうでした、釣は？澤山獲物がありましたか？」
「いや、あたしのは、なんでもと云ふんでないから、さう數はいきません」
「へえ、と云ふと？」
「鯉です。それも、大きいやつばかり狙ふんで、一日やつて、一尾か、たか〲二尾です。まるツきりいかんこともあります」
「へえ、そんなことで、よく怠屈しませんね。あたしらには、とてもそんな悠長なまねは出來ない」
「いや、ところが、一旦この味を覺えたら、どうして中々……。鯉と云ふやつは、御承知だか知りませんが、巣がありましてな、……えらい玄人がるやうですが、その巣を一つめつけるのに、みんな五日も六日も無駄して、……ひどい時には十日もかゝつて、やつと探しあてるんです……」
「ふうん、大した根氣のもんですな。それァ、然しそれだけ凝つたら面白いでせう」
北垣は、頻に盃の數を重ねながら、ます〲雄辯になつて、
「えゝ、大へんに面白い！まァ、一つ巣をめつけた時の嬉しさツたらありませんな。あとはもう、幾日あひだおいて

行つても、そこなら必ず一尾や二尾はつれるんですからな。見失はんやうに、ちやアんと目標をつくつて置いて、……無論のこと、大秘密です。喋つたが最期、苦心惨憺して探した巣を、みいんな人に荒されて了ひますからな。だから、鯉釣ばかりは、自分で櫓が漕げんことにはしよがありません。船頭なんぞに知られて、たまつたもんですか。こツそりと、自分ひとりで出かけるんですが、そこがまた人間、可訝しなもんでしてな、一つ巣をめつけたとなると、なんやかう氣がそは〳〵して、釣好き仲間の顔みると、喋り話して聞かせたくなつて、どうも我慢ならんのです、廣い川のなかのことだから、凡そどのへんと云ふたくらゐで、知れる筈もなさゝうなもんですけど、そこが彼方も玄人やと、うつかりしたこと口すべらしても、嗅ぎあてられて了ひますからな。こりや喋つたらあかん、と一生懸命肚でさう思ふてながら、つひうか〳〵つとなア、ヘツ、ヽヽヽハ」

北垣は、さも面白さうに、高笑をして、ぐつと一杯のみほすと、話の間に、だん〳〵顔色を蒼白ませて、伏眼になつて了つた堀田へ、「まア、一ついきませう」

「頂戴？　あたしが頂くわ」

急に絹子が、甲高い聲を出したと思ふと、横合からひつたくつて、女中につがせやうとしたが、「どうせ頂くんなら、これにしませうか」

と、盃洗をとるなり、まださげずにあつた茶盆のなかにざぶりとあけて、腕いつぱいに突きだした。

「や、結構！」

と、北垣は、はツとでもすることか、急いで兩手に銚子をとりあげ、滴もあまさずついだけれど、七分目ほどしか滿たなかつた。

「姐さん、どうぞお銚子を大急ぎで……」

云ふなり絹子は、目をよせて、たゞ一息に呑みほした。

「や、見事々々」

その聲を聞いて、やつと女中が立つて行つたあとに、

「さア、北垣さん、あなたもこれでお呑みなさい」

「頂きませう……ですが」

と、うけとつて、「困りましたな、相憎お銚子の切れ目で……」

ギイー、櫂を鳴して、傳馬が岸ちかく過ぎて行つた。川波はゆるく舟の腹をうつた。三人とも、聞くともなしに耳をすました。……思ひは、それ〲に動いたが、誰一人として、晴々と、心の底が明るんで行くものはなかつた。——そつと盃洗を置いて、北垣が目を伏せた。絹子は、ちやぶ臺の上に兩腕を載せてぢつと一つところを見詰めた。

低く頭を垂れた堀田の目は、シパ〲と痛くばかりあつて、涙にうるんでは來なかつた。

ほんの一瞬間、彼等は、心のうちに、見るべきものを見たが、遠くから、小走りに、女中の足音が近づいて來ると、

忽三人が各自らしい、心の姿勢(ポオズ)に返つてゐた。



おせい

葛西善藏

『近所では、お腹の始末でもしに行つてたんだ位ゐに思つてゐるんでせう。さつきも柏屋のお内儀さんに會つたら、おせいちやんは東京へ行つてたいへん綺麗になつて歸つたと、ヘンなやうな顔して視てましたよ』と、ある晩もお酌をしながら、おせいは私に云つた。

父の四十九日の供養に東京に出て行つて、私もそのまゝ弟の家の二階で病氣の床に就いてしまつた。肺炎の熱が續き、それから喘息期節にかゝつて、三ケ月餘り寢通してしまつた。その間ずつといつしよに出て行つたおせいの看病を受けてゐた。四十九日が百ケ日が過ぎても、私は寺へ歸つて來れなかつた。『◇がお供をつれて歩いてる……』東京の友人たちの間にも斯う噂さゝれたりした。

『近所ではそんな風に思つてるのかなあ。何しろこの邊と來てはそんなことの流行るところだからな。……それではどうかねひとつ、僕等もこさへて見ようか知ら。おせいちやんさへ構はないんだと、僕はちつとも構はないね。僕に落胤があるなん

て、男の面目としてもわるい話ぢやないな』と、私も冗談らしく云つたが、しみ〴〵と顔を視てゐると、やはり氣の毒な氣がして來る。

山の上の部屋借りの寺へ高い石段を登り降りして三度々々ご飯を運び、晩は晩で十二時近くまで私の長い退屈な晩酌のお酌をさせられる――雨、風、雪――それは並大抵の辛抱ではなかつた。それが丁度まる三年續いた。まる三年前の十二月、彼女の二十歳の年だつたが、あと半月で二十四の春を迎へるのだつた。その三年の間、彼女は私の貧乏、病氣の癇癪、怒罵――あらゆるさうしたものを浴びせかけられて來た。私はエゴイストだ。また物質的にも精神的にも少しの餘裕もない生活だつた。私は慘めな自分の力いつぱい仕事に向けるやうにして、喘ぐやうな一日々々を送つて來たのだつた。『少し長いものが一つ出來るまで世話して置いて與れ。それさへ出來たらお前のとこの借金も返してやるし、おせいちやんにも何でもお禮をする。僕は仕事さへ出來ればいゝんだから、仕事が出來て金さへはいるやうになつたら、お前とこのお父さんにも資本だつて何だつて貸してやるよ』私は斯う子供にでも云ふやうなことを云つたりしては、叱つたり宥めたりして、自分の氣紛れな氣分通りを振舞つて來たのだつた。おせいの家への借金もかなりの額になつてゐたが三年經つたが、長篇どころか、この夏貧弱な全收獲の短篇集一冊出せたきりで、その金もおせいの家の借金へは廻らず、自分の父の死んだ後始末などに使つてしまつた。私はチエホフの「犧牲」と云ふ短篇が思ひ出されたりした。醫學生の研究臺となり、性慾機關となり、やがてその醫學生は學校を卒業して女と別れて行く、女はまた別の醫學生に見出されて同棲して同じ生活を繰返さゝれる――おせいと自分の場合とは違ふとしても、二十だつた娘がもうぢき二十四になる――この三年間のことを考へただけでも自分は氣の毒にならずにゐられない。何と云ふ忠實ないゝ娘だつたらう。せめて性的にでも慰めてやるべきだつたらうか。が自分は今、春になつて雪でも消えたら、遠く郷里の山の中に引込みたいと思つてゐるのだ。自分はその時のことを考へると淋しくなる。自分のやうな人間のために多少でも婚期に影響した――そんなこともあり得ないとは、或は云へないかも知れない。

『關係してるんだらう。ないと云ふのはどうも嘘らしいな。案外君と云ふ男は何にもしてゐないやうな顔してゐて、何

でもやつてるんだからな、わかりやしないよ。さうなんだらう？　また君としても、關係してると云つてる方が氣が樂ぢやないか』と、ある友人が私に云つたりした。

『まあさうだな。それではさうと云ふことにして置くさ』と、私も苦笑するほかなかつた。

夏父を郷里に葬つて鎌倉に歸つて來ると、私はすつかりボカンとしてしまつて、それを紛らすため何年にもしたことのない海水浴に出かけて行つた。建長寺境内から由井ヶ濱まで汗を流しながら毎日通つた。海水場の雜踏は騒かれるばかりだつた。砂の上にも水の中にも、露はな海水着姿の男女が膚と膚と觸れ合はんばかしにして、自由に戯むれ遊んでゐる。さうした派手な海水着の若い女たちの縱ひまゝな千姿萬態のフヰルムが、夕方寺に歸つておせいのお酌で飲み始めると、何年にも憶えない挑發的な感じで眼先きにちらついて來て、私は頓に健康が恢復された氣になり、チエホフの醫學生の役をも演じ兼ねない危險を感じさせられたりしたが、それも十日とは續かなかつた。無茶な海水通ひからまた昨年來止んでゐた熱が出だして、東京で靜養を强ひられることになつた。昨年も今年も、おせいの看病で私は救はれて來た。

『どうだねおせいちやん、春になつたら僕の方のゐなかへ行かないか。奥州の方も見て置くさ。山の林檎の世話なぞして、半分百姓見たいなことをして暮すつもりだがね、急にはうまくは行くまいがね、三年もしたらどうにか百姓並の飯位ゐは喰へるやうになるだらうと思ふよ。僕の女房だつておせいちやんが行つて呉れると吃度喜ぶよ。斯うして四五年も別れて暮して來てるんだからね、女房だけでは僕の仕事の方までの世話が出來ないさ。僕の方のゐなかからだつて、いゝお婿さんは見つかるよ……』と、私は此頃も酒を飲みながらおせいに云つた。

『あなたさへつれて行つて下さるなら、私はどこへだつて行くわ。お婿さんなんか私は要らないわ……』と、おせいはいつもの相手を疑はない調子で云つた。

『行うよ。いつもの通りあの鞄を持つて、魔法壜を肩にさげて……』

どこへ出かけるにも、おせいは私の藥を飲むための用意の魔法壜を肩にさげさせられた。さうした脊丈の低い彼女の姿を、私は遠い郷里の山の中へ置いて、頭の中に描いて見た。

――十一年十二月――



戯曲

愛なき人々

——三幕四場——

谷崎潤一郎

人物

梅澤要次郎

小倉　梅澤の友人

お杉　梅澤の妻、後に小倉の妻となる

玉枝　梅澤の情婦、後にその妻となる

森田　小倉の友人

時　現代

所　東京

第一幕

梅澤の家の客間。中流以上の生活をしてゐるらしい部屋の作り。向つて右側に床の間があり、左側に襖がある。正面後方は中ガラスの障子、障子の外は庭に臨んだ縁側。

冬の日の午後、中央の紫檀の卓に向ひ合つて上手に梅澤、下手に小倉が火鉢にあたりながら話してゐる。梅澤は凝つた和服の着流しの上に二重廻しを纏つたまま、帽子を傍に置いてどつかと坐り、銀のシガレット・ケースをいぢくりながら金口の煙草を吸つてゐる。三十五六の、道樂者らしい所のある青白い顔色の男。小倉は同じ年輩の、色の淺黑い小太りに太つた男で、見すぼらしい紺の背廣服を着て、此れも敷島の袋を持ちつつそれを吹かしてゐる。

(梅澤) ところで君、今日は玉枝が此處へ來ることになつてるんだがね、あの女が來ないうちに一つ約束をきめようぢやないか。

(小倉) へえ、玉枝さんが？ 玉枝さんが此處へ來るのかい？

(梅澤) (得意さうにニヤ／＼する) うんさうだよ、

(小倉) そりやあ君、少し亂暴過ぎるやうだね。まだきつぱりと話が附いたと云ふ譯でもないんだし、何ぼ何でも奥さんに可哀さうだぜ。

(梅澤) なあに、そんな事はないさ、却つてさう云ふ思ひ切つた態度を取つてやつた方が、あきらめが附いていいんだよ。僕と玉枝とはどうしても離れツこない、もう事實上の夫婦だと云ふところを眼の前で見せ附けてやるんだね。少し殘酷なやうだけれど、そのくらゐにしてやらないとお杉の奴にやあ應へないんだよ。

(小倉) 成る程ね、多年の經驗でその邊の呼吸は心得たもんだね。だがそのくらゐな非常手段を取つた方が或は早く片がついていいかも知れんな。何しろ今の樣子ぢやあ「何年でも待ちます」ツて、泣いてばかり居るんだから。

(梅澤) それ見給へ、いくら君が女を口說くのが名人だからツて、あの女は無教育で、話が分らないんだから始末に終

いよ。今日は僕は玉枝を呼んで散々ツぱら見せつけてやつて、もう此れツきり此處の內へは足蹈みしない積りなんだから、あとは宜しく君に賴むぜ。

(小倉) おツと、その點は百も承知してるんだが………それぢや一つ君、もう一度よく話をきめて置かうぢやないか。君と僕との間だからまさか間違ひもないだらうけれど、何しろあんまり例のない取引だからね。あははは―(嬉しげに笑ふ)

(梅澤) よろしい、君の方から條件を云つて見てくれ給へ。

(小倉) (狡猾さうに眼を光らして考へながら)でと、………條件と云つても大體は此の間の通りでいいんだけれど、………まあしかし君、外套でも取つたらどうだい。さうやつてられちや話が出來ないよ。(次ぎの言葉を冗談のやうに云ひながら腹の中では何か別の事を考へてゐる) 今日はいろいろ御相談の件もあるんだしするから、何もお構ひ申しませんけれど何卒御ゆつくりなすつてね、――

(梅澤) あははは、條件もきめないうちから、そいつはちつと早過ぎるぜ、まだ此處の家は僕の家だよ。(云ひながら外套を脫いで帽子と一緒に後方へ押しやる)

(小倉) あははは………それでと、僕が君から讓渡される物件は何と何だと云つたつけね? 此處の家屋と、京橋の方の家作と………

(梅澤) それからその家作に附いてゐる地所を全部上げると云ふのさ。

(小倉) ふん、成る程、それだけ貰やあまあ不足は云へない譯か。一體その地所は坪どのくらゐするんだらう?

(梅澤) まあ內輪に見積つても七百圓はすると思ふね。

(小倉) 七百圓が二百五十坪か。(ちつと胸算用をする)………それで僕はそれに對する代償として、どれだけの事をする

んだつけね？

（梅澤）先づ第一にお杉を說きつけて、僕と離緣をする事を承諾させる。――

（小倉）よろしい、それは分つたよ、それから？

（梅澤）××
×××××××××××

（小倉）ちよつと、ちよつと待つてくれ給へ、色魔たる手腕を以てなんて、そんな事はビジネスの話には餘計物だね。

（梅澤）××
×××此處が一番重要な點なんだよ。

（小倉）よろしい、つまり僕が××××××××××いんだらう。

（梅澤）さうだ、そしてその汚名がもたらすところの一切の社會的制裁を甘受すればいいんだ。尤も單に××××××
×××××××××××××××××××××××××いんだけれど、そこは君の考へでどつちでもやりいゝ手段を擇んだらいい。いくら色魔でもさう易々とは行かないだらうから。

（小倉）分つたよ、分つたよ、さう色魔色魔つて云はんでもいいよ。――だから何だらう、要するに×××××××
×××××××××××××世間の人がそれを信じるやうになつて、君の親類だとか友達だとか云ふものが、君に同情するやうになればいいんだらう。

（梅澤）さうさ、で、それに對する報酬として、僕はさつき云つただけのものを君に進呈すると云ふんだ、どうだい、巧く

やつてくれるだけの自信があるかい。

（小倉）　そりやあ自信はない事はない。懸賞附の仕事なんだから大いに腕を振つてみるさ。なあに、××××××××××××××××××××××××××××××××××あるんだからね、それで何かい？　若しもうまく行つたとして、その××××××××××××××××××××い？　××××××とをどう云ふ風に使用しようが、それは全く僕の自由に任すのかい？例へば僕が一旦約束を果たした上で××××××てしまはうが、その財産を何かの資本に注ぎ込んでしまはうが、或ひは損をして一文なしになつちまはうが、君は毛頭それに對して不服はないと云ふのかい？

（梅澤）　いや、實はそこの處なんだが、多少の希望がないことはないんだ、僕も君に讓つた以上は何も思ひ切りの悪い事は云ひたくはないんだが、………

（小倉）（何か物音を聞きつけたらしく、はつとして梅澤を制する）　ちよつと、………ちよつと待ち給へ………

下手の襖を明けて、お杉が茶道具を持つて這入つて來る。二十五六の人の好ささうな單純らしい女。髷に結つて身嗜みも綺麗にはしてゐるが、散々泣いてゐたと見えて眼の周りを赤く腫らしてゐる。茶碗に茶を注いで卓上の二人の前に置き、梅澤の後ろへ廻つて脱ぎ捨ててある帽子と外套を取り、それを持つて又すごすごと逃げるやうに下手へ去る。その間二人もぢつと默つて、梅澤は妙に取り澄ましながら煙草の火を視つめ、小倉は時々お杉の姿を偸み視てゐる。

（小倉）（お杉が出て行つた跡を見送り、暫く立つてからこつそりと囁く）　見給へ、あんなに顔を腫らしてゐるぜ、今朝ッから泣き通しなんだよ。

（梅澤）　ふん、（依然として煙草の火を視ながらニヤニヤ笑ふ）

（小倉）　だがあやつてる處を見ると、滿更悪くもないぢやないか。

(梅澤) ××××××××××××××××××××××××××××××××あしないかね。

(小倉) じよ、冗談を云つちやあいかんよ、……で、さつきの君の希望と云ふのはどんな事だね？

(梅澤) 外の事ぢやないんだけれど、君の所謂所有權の問題だがね、そりやあ一旦讓つた以上は完全に君のものには違ひないんだが、然し何だね、××れないと、世間體をごまかすことが出來ないからね。

(小倉) その點はちやんと心得てゐるよ、まさか××××××××××××××××××××××××××××××××××くはやつて見るよ。××××××云つてもそいつが程度問題だけれど、どうせ僕の事だから心から愛するなんて云ふ譯には行かないだらうぜ。それは君だつて承知だらうね？

(梅澤) うん、それは分つてゐる。こんな事を頼む奴も頼む奴なら、頼まれる奴も頼まれる奴なんだから、君に向つて眞の愛情を持てなんて事を云ふんぢやないんだ。

(小倉) するとまあ、あまり×××えるやうに取り扱ふ。——せいぜいその程度でいいんだらうね？

(梅澤) さう、それでいいんだ。——あの××××××××××××××××××××××××××××××××××けてやればそれで滿足するんだよ。別れるのが厭だと云ふのも要するにただ淋しいんだからね。殊に彼奴は名代の淋しがり屋なんだから、その淋しさを成る可く紛らすやうにして、上べだけ××んだ。

(小倉) あはゝゝ、猫と一緒にするのはひどいな。

(梅澤)　なあに、實際それに違ひないんだよ、それで財産の方の話も、君がそれをどう使はうと勝手だけれど、今も云ふ二三年の間だけは、あの女が喰ふに困らない程度の事をしてやつてくれ給へ。

(小倉)　よろしい、つまり何だね、扶養の義務を盡すと云ふ奴だね、

(梅澤)　さう、それだけ含んでゐてくれゝば文句はないんだ。

(小倉)　で、條件はそれできまつたとして、一應念の爲めに斷つて置くんだが、まさか君は、後に××××××××××××××××××ね?

(梅澤)　あはゝゝ、そんな馬鹿な事があるもんか。

(小倉)　いや、なかなかさうでないんだて。君は今でこそさう思つてゐるだらうが、後になつてから實は×××××××××××××よく世間にはある口だからね。

(梅澤)　大丈夫だよ、萬一僕が恨んだにしたつて、もうさうなつてしまつてから何も恐れる必要はないぢやないか。

(小倉)　さう云へばそんなもんだが、「×××××××××」はまだいいとして、序でに「財産も返してくれ」なんて云はれた日には往生だからな。

(梅澤)　おい、おい、柄にない事を云ふもんぢやないぜ。×××××××××××××××××××人間だとは思つてゐないから大丈夫だよ。

(小倉)　あはゝゝ、そこまで話が露骨になつちまふと、いつそサバサバして氣持がいゝね。

(梅澤)　そりやあさうさ、もともとお互ひに惡人だと云ふ了解の上に、此の契約は成立してゐる譯なんだよ。……

上手の方で呼鈴の鳴るのが聞える。

(小倉)（耳を澄ましながら）あ、玄關が開いたやうだぜ、玉枝さんが來たんぢやないかな。……

小倉急いで立ち上つて上手の廊下へ出て行く。梅澤はわざ〳〵悠然と構へてゐる。短き間。玉枝が小倉に導かれて這入つて來る。二十一二歳の、女優らしい、派手な裝ひを凝らした女。バックを提げて、手袋を外しながら部屋の中央に來る。

(小倉)（梅澤の隣りへ座蒲團を敷きながら）さあ、何卒此方へ、さつきからお待ちかねでね。

(玉枝)さう？　そんなに待つて？（と、梅澤に云ひながら其處に座り、室内をぐるりと見廻す）――まあ、なかなか好い家だわね。

(梅澤)直き分つたかい？

玉枝）ええ直ぐ分つたわ。――何しろ今日は明後日が初日だつて云ふんでせう、それで朝から舞臺稽古があつたりしたもんだから、忙がしくつて忙がしくつて。――でも濟ませると直ぐ自動車で飛んで來たのよ。

(小倉)それで稽古もロクロク身に沁みなかつたつてね、

(玉枝)まあいいわよそんな事は。で、どうしたの？　あなたがたの方の話は？

(梅澤)話は大體濟んだんだよ、此の間の條件で小倉も異議はないと云ふのだ。

(玉枝)あ、さう云へば今玄關で遇つちまつたわ、

(小倉)ふん、あれには僕も面喰つたね、急いで飛び出して行つたんだけれど、行つて見ると玉枝さんがイヤに取り澄して挨拶なんかしてるもんだから、――

(玉枝)だつて、そりやあ當り前だわ、始めてお目にかかるんですもの、ああ云はなけりや惡いぢやないの？

(小倉)けれど玉枝さんも、今まで全然知らない顔でもないんだしするから、――

（玉枝）だけれど口をきいた事はないんだし、訪ねて來るのは今日が始めてなんですもの。
（梅澤）で、どんな挨拶をしたんだい？
（玉枝）どんな挨拶ッて極まつてるぢやないの、「わたくしは鈴川玉枝と申す者でございますが、今日此方様で要さんとお目にかかる約束になつて居りますから」ッて、さう云つたんだわ。
（梅澤）あはゝゝゝ、「要さん」はよかつたな。先方ぢやあ何と云つたい？
（玉枝）「はあ、左様でございますか」ッて云つて、それから後は何だか口の内で分らなかつたわ。
（小倉）可哀さうに、先は面喰つて二の句が出なかつたんだらうよ、何しろちよいと珍な陶だつたね。
（玉枝）でも小倉さんは、なかなか親切にしてたぢやないの、「奥さん、あなたは風を引いてゐらつしやるんだから、無理をなすつちやいけませんよ、さ、彼方へ行つて休んでらつしやい」とか何とかつて、ひどく劬はつてた様子だつたわ。
（小倉）××××××××××××××××××。

下手よりお杉が出て來る。三人とも急に默つてしまふ。お杉、恐る恐るテーブルの方へ進み、新らしく茶を入れ換へて三人の前へ置き、再びそつと出て行からとする。

（小倉）やさしい、（低い聲でお杉を呼び止める）あ、ちよつと奥さん……
（お杉）はい、（聞えないくらゐ微かに云ふ）
（小倉）恐れ入りますが、この炭取りへ少々炭を頂けませんか。
（お杉）はい、

殆んど無表情な顔つきでさう云ひながら、炭取りを持つて下手へ退入る。その間小倉は絶えず意味有りげにニヤニヤしてゐる。

(小倉)(卑しげに笑ふ) ヘツ、何しろあれが金の蔓になるんだと思ふと、僕に取つちやあ大切なもんさ。

(玉枝) だけどほんとに、××××××××××××××、あれで幾つなの？ 二十六？

(小倉) ええ、

(玉枝) まあ、若いわねえ、三か四ぐらゐにしか見えやしないわ、苦勞をしたなんてところはないわね。

(梅澤) あれはお人好しで無神經なんだから、ちつとぐらゐ苦勞をしたつてなかなか骨身に應へないんだよ。

(玉枝) ほんとにあたしなんかよりよつぽど別嬪ぢやあないの、××××××××××××××××。

(小倉) ×××××××××××、——

お杉が炭取りと菓子皿を持つて這入つて來る。菓子をテーブルの上に置き、ちやうど小倉と並ぶやうにうづくまつて火鉢へ炭を注いでゐる。

(小倉)(菓子皿を玉枝の方へやりながら) さ、お一ついかがです、

(玉枝) どうも有りがと、——まるで小倉さんが御主人のやうね、

(小倉) 今日は其方がお客様の格ですからな。——どうも此の邊はまこに不便だもんですから、お口に合ふ物はありませんが、ま、お一ついかがです。——奥さん、此のきんつばは角の榮花堂のでしたかな？

(お杉)(オドオドしながら) あの、序でがございましたもんですから、日本橋の清壽軒から……

(小倉) や、そいつはしまつた、これは清壽軒のきんつばださうです、では僕も一つ頂戴するかな。

云ひながらきんつばを摘まんで喰べ始める。お杉、炭を注いでしまつて下手へ去る。

（小倉）（茶をがぶりと飲んで）どうです？　××××××××？

（玉枝）ほんとうにいい奥さんだわ、大人しくつて、しとやかで、あたしのやうなお轉婆とは譯が違ふわ。——だけど×××××××××××××？　××××××××××××××××××××××××××××××。

（小倉）なあに大丈夫。兎に角今日あたりの模樣ぢやあ、大體別れると云ふところまで話を漕ぎつけたんですからね。

（梅澤）「別れるのは厭だ」つて、泣いてばかりゐるつて云つたぢやないか。

（小倉）口では「厭だ」と云つてるけれども、お腹の中ぢやあ大概あきらめてゐるんだよ。それは僕には分つてゐるんだ。君の說ぢやあないが、奥さんにはしつかりした親類がないんで、ただ何となく心細くつて仕樣がないんだから、そこを僕が慰めてやつて、いろいろ力になつてやつたり、相談相手になつたりしてやれば、「では孰れとも小倉さんにお任せ申しますから」つて、遠からずさう云ふ事になるのさ。×××××××××××××××ろなんだが、まあ默つて見てゐらッしやい。

（玉枝）さう巧く行けば結構だけれど、……

（小倉）いや、僕の方は決して御心配には及びませんが、××××××……××××××××××××××××××××××××××しないかと思つてね。

（梅澤）あははは、馬鹿を云ふなよ。

（小倉）いや、さうは云つてゐるけれど、未練があるかも知れないんだて。玉枝さんの前ですが、一つあなたからもダメを押しといてくれませんか。

（梅澤）うふふふ、（二人に顏を見られて極まり惡るさうに、曖昧に笑ふ）
（玉枝）何よ、何をうふうふ笑つてゐるのよ、あなた未練があるんぢやないの？
（梅澤）馬鹿を云ふなつてば。
（小倉）いくら報酬が貰へるからつて、こんな仕事を仰せ附かつて、その上後で憎まれたりしたんぢや、僕も立つ瀨がないからね。ねえ君、思ひ直すなら今のうちだぜ。
（玉枝）ほんとうよ、あなた、あんないい奥さんがおんなさるのに、考へて見りやあ罪ぢやないの、お止めになつたらいかが？
（梅澤）止せよ、好い加減にしないかつたら。
（小倉）また柄にないつて云ふかも知れないが、僕も此の場合ちよいとばかり善人になつて忠告するがね、――何も奥さんを離緣しないだつて、かうして玉枝さんと一緒になつてゐられるんだからいいぢやないか。（玉枝の方を向いて）ねえ、それとも何ですか、それぢや玉枝さんの方が收まらないと云ふ譯ですか？
（玉枝）（少し傲然として）ええ、そりやあたしは何なんだけれど……第一此の人がさうしなければ厭だつて云ふのよ。
（梅澤）厭だね僕は。――此れが僕の性質なのかも知れないが、たとへ名ばかりの女房にしろ、どうもそんな者があつちや、惚れた女と完全に一緒になつたと云ふ心持ちになれないからね。それが僕には厭なんだよ。
（小倉）はあ、つまり何か、もう邪魔者は何でも彼でも追ひ出しちまつて、玉枝さんだけを舐めるやうに可愛がりたいと云ふ譯なのか。
（梅澤）（ニヤニヤしながら）まあそんな處だらうよ。

(小倉) 一つそんなに惚れられて、見たいもんだな、ねえ玉枝さん、

(玉枝) けれど、どうせお互ひに惚れ合ふならそのくらゐでなきや面白かないわ。小倉さん見たいに二つも三つも一度に口をかけたりするなんか、あたし嫌ひよ。

(小倉) へツ、そいつは痛み入りましたな、――ですが、餘計な事を云ふやうだが、其方様も長續きがすればいゝがな。大きに此れが、×××××××××××××、あなたがたの方は一年こつきりで別れちまつたつて、そんな事になるんぢやないかな。

(玉枝) そりやあどうだか分らないわよ。あたしだつて此の人だつて、惚れる時は夢中になつて惚れるけれど、飽きたとなつたら又直ぐ厭になるんだから。二人とも其處まで性が合つてるのよ。

(小倉) いくら性が合つてるからつて、――(梅澤に)ねえ、さうかい君?

(梅澤) だつて、お互ひに飽きると云ふ事はあるんだから、厭になつたらどうも仕方がないぢやないか。惚れる程度が激しければ激しいだけ、それだけ飽きるのも早いかも知れんよ。

(小倉) ちよ、冗談ぢやないぜ、

(梅澤) 冗談ぢやあない、眞面目な話さ。僕も玉枝も、そこは始めツから了解が出來てゐるのさ。

(玉枝) さうよ、ほんとうに。――「厭になつたら別れませう」つて、始めツから其の約束なの。夫婦になるのもいゝけれど、一生それで縛られるんぢや遣り切れないわ。だからあたし、結婚しても女優生活は止めない積りなの。

(小倉) 玉枝さんはそれでいゝかも知れないけれど、――梅澤君、君ほんとうにいゝのかい?そんな事もないだらうけれど、若し玉枝さんは一年ぐらゐで捨られちまつたら淋しかないかい?

（梅澤）淋しくつたつて仕方がないさどうせ僕は享樂主義者なんだからそのくらゐな事は覺悟の前さ。——それに一體お杉の奴とは始めツから結婚する氣がなかつたんだからね。無理に親父に押しつけられて貰つたんだから、僕は彼奴を一度だつて自分のほんとの女房だと思つた事はないんだよ。

（小倉）だけどさ、あんまり物好きが過ぎるやうだから。——此れが全く僕に關係のない事なら「どうでも勝手になさいまし」だが、それがさうでないだけに始末に困るよ。「小倉の奴があの時あゝ云つたもんだから」なんて、さう思はれると僕も寢覺めが惡いからね。

（玉枝）小倉さんも此れで案外人が好いのね。

（小倉）いゝや、人が好いんぢやないんです。どうせ僕が忠告したつて用ゐない事は分つてるんだが、僕はたゞ、金が欲しさに自分の方からけしかけたのでないと云ふ事を明かにして置くんですよ。さうして置かないと僕の立ち場が損ですからな。あはゝゝ、

（梅澤）大いに拔け目のないところを發揮したんだね。

（小倉）うん、さうなのさ、だから僕のは忠告と云つても決して誠意ある忠告ぢやあないね。「金は欲しいが身は可愛い」と云ふ奴だね。

（梅澤）分つたよ、分つたよ、もうそのくらゐ用心すれば澤山だよ。

（玉枝）だけど、小倉さんのは惡黨を標榜してるから氣持ちがいゝわ、云ふ事がキビ〳〵してゐて。

（小倉）ねえ、實際さうでせう？そりやあ相手にも依りけりだが、僕はあなた方に對しては駆け引きなんかしやしないんです。今度の事だつて僕があなた方を引つ懸けるんぢやない、あなたがたの方から引つ懸かつて來たんだからね。

(梅澤)　折角引つ懸かつてやつたんだから、巧く引つ懸かつてくれないぢや困るね、さう威張つてばかりゐないで。
(小倉)　あゝいゝとも、さう極まつたら決して僕は遠慮しないよ。——君は奥さんを貞女だと思つてゐる、そりや貞女には違ひなからうが、××××××××××××××××信じてゐる。……
(梅澤)　信じてゐると云ふ譯ぢやないが、それが早く行けば無論結構だよ。
(小倉)　けれども君、若しも君が半歳かゝると思つてゐる場合に、××××××××××××××××××××、いくら何でもあまり好い氣持ちはしなかないかい？　くどい言を云ふやうだが、……
(梅澤)　いゝや、早ければ早いほどいゝんだよ。その方が僕も安心して戀を樂しむ事が出來るよ。お杉の奴に獨りでめそめそ泣いてゐられると困るけれど、兎に××××××××××、慰められてゐるかと思ふと、此方も多少氣が輕くなる譯だからね。
(小倉)　それ見たまへ、それがやつぱり未練なんだよ。
(梅澤)　なあに未練ぢやあないさ、そのくらゐな人情があるのは當り前さ。
(玉枝)　何だかそろ〳〵怪しくなつて來たぢやないの？　いゝのほんとうに？

お杉が襖を明けて、閾際に畏まりながら顏を出す。

(お杉)　あの、小倉さん、ちよつと、——
(小倉)　はあ？
(お杉)　あの、ちよつと失禮でございますが、——
(小倉)　はあ、

云ひながら下手へ行く。お杉何事かこそこそと耳打ちをする。小倉、「ふん、さうですか」と頷きながら彼女と共に襖の外へ出る。

(梅澤) 小倉の奴、大分信用されてるやうだぜ、あの男はあれで如才がないんだからね。

(玉枝) 何しろ慾が手傳つてるから恐ろしいわ、大きに……………………………。さうしたらどうするんでせう？

(梅澤) さうなりや懐ろに金があるから、會社の方は罷めてしまつて相場をやるんだつて云つてたよ。女は好きだが金のないのが疵なんだからね。

(玉枝) お腹の中ぢや、あれでなかなか珠算盤を彈いてゐるのね。

(梅澤) そりやあ彼奴はこすいんだからね、「……………………」つて云つてるけれど、內內あれで喜んでるんだよ。今度ぐらゐ彼奴が熱心に働くことはありやしないから。あはははは、

(玉枝) それぢや此處の家もいづれ彼の人の物になるのね、

(梅澤) うん、——それともお前、此の家が氣に入つたのかい？

(玉枝) いやだわあたし、いくら好い家でも杉子さんのゐた處なんか眞つ平だわ。あたしは西洋館の方が好きなの。

(梅澤) だからね、さう云ふ話だつたから、築地の居留地の方に一軒賣り物があるつて云ふんで、それを明かしてあるんだよ。——お前、明日は暇なんだらう？

(玉枝) ええ、明後日の夕方まで空いてゐるの。

(梅澤) 明日それぢやあ一緒にその家を見に行かない？ 大分好ささうな家なんだけれど、お前が氣に入つたつて云へば、直ぐに話を極められるんだ。どうせちつとは手入れをしなけりやなるまいけれど、……

（玉枝）（急に甘つたれたやうな口調になる）ねえ、それよりか今夜箱根へ行かない？　家なんかいつでも見られるぢやないの。
（梅澤）うん、（何となく躊躇する）さうしてもいいんだけれど、……
（玉枝）よう、さうしてよう、……いろいろ話があるんだもの。……
（梅澤）お前の話は後でゆつくり聞けるからいいやね、
（玉枝）いやいや、今夜聞いてくれなけりやいや、少し急ぎの話なんだから。……よう、いつまで此處に居るのよう？もう歸らない？
（梅澤）まあお待ち、今もう一度小倉に會つてから直ぐ歸るよ。
（玉枝）まだ何か用事があるの？——だつて、小倉さんに任して置けばいいぢやないの？　それとも杉子さんと話でもしたいの？
（梅澤）（モヂモヂしながら）さうぢやあないけれど、……小倉が來るまで待つてゐたつていいぢやないか。……
（玉枝）小倉さんなんかどうだつて構やしないわよ。——あなた杉子さんに會ひたいんでせう？　ねえ、さうなんでせう？
（梅澤）己は會つたつて仕様がないよ、ただ間接に話だけ聞いて歸ればいいんだ。
（玉枝）うそよ！　會ひたいのよきつと！——そりやあさうでせうさ、もうこれつきり會へないんだと思ふと、せめてもう一度顔ぐらゐ見たいでせうさ。そんならさうと正直に云つたらいいのに！
（梅澤）おい、どうしたんだい？　怒つたのかい？

（玉枝）あなたは駄目よ！　口の先ばかり强がつてたつてお腹の中は弱いんだから。
（梅澤）うそをつけ、ぢやもう歸るよ。
（玉枝）どうぞ御勝手に。——何ならあたし一と足お先へまゐりますから。
（梅澤）もうお止しつたら、詫まつたよ。
（玉枝）（バッグの中から化粧箱を出して、顏をパッフで叩きながら）それぢや箱根へ連れて行く？
（梅澤）うん、行くよ、何も行かないと云てやしないんだから。
（玉枝）行くなら堪忍して上げるけれど、……
云ひながら化粧箱をしまひ、手袋を篏め始める。
小倉が戾つて來る。
（小倉）（もとの席へつきながら玉枝を見て）何です？　もうお出かけ？
（玉枝）ええ、……これから箱根へ行く事になつたもんですから、……
（小倉）（梅澤に向つて、當惑さうに）君、まあちよつと待つてくれたまへ、……………………………………、兎に角一遍、たつた一遍でいいから會つて話がしたいと云ふんだ。
（梅澤）厭だなあそりやあ、……
（小倉）厭だらうけれど、まあ君、ちよつとでもいいから會つてくれたまへ。「會つてもとても無駄だから」つて因果を含めて見たんだけれど、無駄でもいいから一度會はしてくれと云ふんだ。
（梅澤）だつて君、君が何處まで仲へ這入つて口を利いてくれると云ふ約束だつたぢやないか。僕あ厭だよ、もう彼奴

とは此の間から一と言も口を利かないんだから……利かうと思つてもてんで利く氣にはなれないんだから、結局僕の心持ちは君を介して傳へて貰へばそれでいいんだ。もうそれ以上何も云ふ事はありやしないんだ。

(小倉) そりや分つてゐる、よく分つてゐる、だが、……(頭を掻きながら) 困つたなあどうも、……なあにね、どうしても君が厭だと云ふなら會はせないやうにも出來るんだがね、それぢや何だか、僕が間で邪魔をしてでもゐるやうに取られるし、……さうなるとどうも、今後の發展に惡い影響を及ぼすからね。

(玉枝) あなた、會つてお上げなさいよ、あたしは先へ歸りますから。

(小倉) (狼狽して) ま、玉枝さん、あなたがさう仰つしやつちやいけない、あなたは待つてて下さらなけりやいけないんだ、ね、いいでせう、ほんの五分か十分も會へば濟むんだから。

(玉枝) 五分や十分でなくつてもいいわよ、半日でも一日でも。……

(小倉) そんなにかかりやしませんから、ま、待つて下さい、ね、お願ひだから。……さうしてくれないと僕が一番困るんだから。……

(玉枝) (ますますむつとして) あたし知らないわ。——(梅澤に) それぢや左樣なら、何卒御ゆつくり、——

ふいと立ち上つて、バツクを提げたまま障子を明けて、上手の廊下へ出る。

(小倉) (玉枝の跡を見送りながら) ま、玉枝さん、困つたなどうも、……(梅澤に眼くばせする) ぢや、君も歸りたまへ、玉枝さんが怒つてしまつちや仕方がないから。

(梅澤) おい! 今行くから待つといでよ! (立ち上りながら小倉に云ふ) それから後は宜しく頼むぜ。今も云ふ通り會つたところで仕様がないんだし、それに今日はまあ口こそ利かなかつたが、……(やや涙ぐんだ調子になる) お互ひに顏を

見合つて餘所ながら別れを告げた譯なんだから、僕はもう二度と此の家へは來ない積りだと云ふ事を、君からよくさう云つてくれたまへ、いいかい？　分つたらうね？

（小倉）うん、分つた、よくさう云はうよ、

（梅澤）要するに僕の考へは君に傳へあるんだから、君の云ふ言を僕の意志だと思つたらいい。（ニヤニヤしながら）あらゆる意味で君を僕だと云つたら一番早いさ。

（小倉）あははは、まづ其處いらから這入つて行くかな。

（梅澤）ちや失敬、（廊下へ出ようとする）

（小倉）（慌てて呼び止める）おい、ちよつとちよつと、——君は奥さんには會はないだらうが、僕には會つてくれるだらうね？　まだ二三回はどうしても會ふ必要があるんだから。

（梅澤）ああ、用があつたら電話をくれ給へ。今夜箱根へ行くとして明後日は歸つて來るよ。夜に大概樂屋の方へ遊びに行つてる積りだから。

（小倉）ああさうか。一遍女優の大勢居るところを見に行くかな。

（梅澤）（外套のないのに心附いて）あ、君濟まないが、外套と帽子をそつと玄關へ持つて來てくれ給へ。お杉が彼方へ持つてたんだよ。

（小倉）よろしい、今持つて行く。

小倉下手へ去る。梅澤は廊下へ出て、其處に待つてゐた玉枝と共に上手へ這入る。短き間。突然ばたりと襖が明いてお杉が泣きながら驅け出でる。つづいて小倉が外套と帽子を持つて、彼女を追つて出る。

（小倉）ま、奥さん、さう云つたつて――（お杉の前に立ち塞がる）

（お杉）後生ですから……後生ですから會はして下さい！（小倉を押しのけ行かうとする）

（小倉）（外套と帽子をテーブルの上に置き兩手で彼女を抑へる）え、そりや分つてます、分つてますから何卒僕に、――

（お杉）だつて、もう今日限り會へないやうな氣がするんですもの、……

（小倉）そんな事があるもんですか、又そのうちにきつと來ますよ、來るつて云つてゐるんですから、（お杉テーブルに泣き崩れる。小倉もそこに坐り、背を撫でてやりながら）ね、僕がきつと會はせるやうにして上げますよ、ね、奥さん、さう聞き分けがなくつちやいけません、何しろ今日はああ云ふ連れが居るんですから止した方がよござんす。……

玄關のベルが鳴る。

（小倉）あ、もう出て行つてしまつたのかな、こいつを持つてつてやらなくつちや、――

云ひながら外套と帽子を持つて、廊下へ驅けて行つてしまふ。再び玄關のベルが強く鳴る。お杉テーブルに突伏したまま、聲を擧げて泣き入る。

第二幕

第一場――第一幕より二年後の出來事。小倉は落ちぶれて見すぼらしい借家に住んでゐる。二重舞臺の上手が居間、下手は玄關。後ろが往來になつてゐて、玄關の突きあたりの障子を明けると、土間の格子戸が見えるやうにする。居間には箪笥長火鉢など置いてある。障子を隔てて後ろに緣側があつて、板塀圍ひのささやかな庭に面してゐる。上手の襖の際に梯子段がある。

冬の夜のことである。上手に小倉、下手に森田が炬燵を圍んで、酒を飲みながら話し合つてゐる。燗徳利が疊の上に直かに置いてある。小倉はどてら姿で、時々長い管で[illegible]みを吸ふ。森田も同じ年恰好の太い八字髯を生やした男、ぶくぶくした銘仙の綿入を着てゐる。幕が開く時、小倉は森田に酌をしてやつてゐる。

（森田）だが君あ又、何だつてそんな氣になつたんだい？

（小倉）まあ、要するに喰ひ詰めたからさ、此處んところ僕は八方塞りだからね。

（森田）あはははは、だがさう云ふなよ、その代りにやあさんざ甘い事もして來たんだから。

（小倉）何がさ？　甘い事なんぞ何にもありやあしなかつたぜ。

（森田）いや、一昨年あたりは大分さうでもなかつたぜ。僕はあの時分ハルピンに居たんだが、君の噂はちやんと新聞で知つとつたからな。金持ちの妻君を蕩し込んで財産ぐるみ手に入れるなんて、太え事をしやがる。相變らず小倉式だと思つたよ。

（小倉）馬鹿を云ふなよ、だから世間は厭だつて云ふんだ。――僕は彼奴…………。……………………

……………………、……………………。……………………！……………………

……………、…………………………。

（森田）まあ辯解をせんでもいい。――で、先の亭主と云ふのはどうなつたんだい？

（小倉）どうなつたか其の後さつぱり會はんけれどね、――君、鈴川玉枝と云ふ女優がゐたのを知つてるだらう？

（森田）うん、さうさう、よく新聞で見る名前だね。

（小倉）あれと喰つ着いて一年ばかりゐたんだけれど、すつかり入り上げてすつてんてんになつた時分に捨てられちまつて、外に往き處がないもんだから、未だに其の女優の處で男衆か何かをやつてると云ふ噂だがね、まあ御同樣にいい

事はないんだらう。享樂主義の末路ツてものはどうせ皆かうなるのさ。

（森田）それでも君はまだ享樂をしたいんだね？

（小倉）ああしたいね、生きてる間はいつまでゞもしたいね、何と云つても金と女がなけりや駄目だよ、僕はその二つを得る爲めには敢て手段を擇ばないんだ。

（森田）よからう、そいつも！（酌をしてやりながら）まあ上海へ行つて大いにやるさ。

（小倉）うん、やる、大いにやる。日本は狹くつてうるさくていけないから、一つ彼方へ伸して行つていいチヤンスを摑まへてやるんだ。僕は「金、金」と云ふやうだけれど何も決して財産を殘さうツと云ふのぢやないのだ。始終女を漁つて歩いて、思ふ存分快樂を味はふ事が出來ればいいんだ。

（森田）そりやあ女を漁るなら上海だね、何しろ各國の奴が入り込んどるから合ひの子の奇麗なのが非常に眼に附くよそれに支那の女も見馴れて來るといいもんだね、一度僕が貰つたのなんぞ、未だ忘れられんのがあるが、それなんか君、二流どころの藝者でもつてオールナイト十五弗よ、……

（小倉）（眼を光らせて膝を乘り出す）へえ、そんなに安いのかい？

（森田）うん、あの時分そのくらゐな相場だつたな。――支那は生活費が安いんだから、その點は便利だ。

（小倉）それでいい女かい？

（森田）いい女だとも、まあ新橋の一流と比べても遜色はないね。――なあにそんなに出さんでも、まだいくらでも安いのがあるんだ。夕方の六時になると往來だの茶館だのへぞろぞろ女が集まつて來て、盛んに客を引つ張るんだ。さう云ふ中にどうかすると素的な掘り出し物があるんだよ。

（小倉）そんなのはいくらなんだい？

（森田）大概四弗か五弗だね。

（小倉）ふうん、……そりやいいなあ、警察なんかあまり干渉しないと見えるね。

（森田）あはははは、おい！　大分上海が氣に入つたらしいぞ。

（小倉）氣に入つたとも！　物價が安くつて、好い女がゐて、それで警察がやかましくなけりや、僕に取つちやあパラダイスだ。

（森田）あはははは、――だが、支那梅毒でも背負はんやうに用心しろよ。

（小倉）なあに背負つたつて構ふもんか、どうせ僕なんかそれで死ぬんだ、もう日本へは歸つて來ない積りなんだから。

（森田）ふん、獨り身になつてしまやあそれもいいだらう。（小倉が酌をしようとするのを手で拂ひながら）いや、もういかん、もう澤山だ、大分さつきから醉つちやつたんだ、それに今夜はまだ、これからちよつと用があるから。――小倉）ま。いいぢやないか、まだ話もあるんだしするから。

（森田）（急に眞面目になり、低い聲で云ふ）その話は又、いづれ丹が立つまでにもう一度來にやあなるまいけれど、しかし大體手筈を極めて置いてもいいね、……

（小倉）（同じく低い聲で）僕は十日の船で神戸から立つ積りなんだが、君はいつ頃になるんだい？

（森田）多分二十日過ぎになる。――

（小倉）長春までかい？

(森田) いや、やつぱりハルビンまで行く事になるだらう。——だから却つて都合がいいんだ、なあにシベリヤへ這入つてしまやあ、ちつとやそつと亂暴を働いたつて分らんのだから。

(小倉) ……………………!

(森田) そりや大丈夫だと云つてゐるにさ、………………………。

(小倉) けれども君、亂暴をするのはいいが、絶對に內地へ知れないやうにやつてくれなきや困るんだぜ。それでなけりや、何もそんな事をしないだつて、僕が上海へ行つてしまつてそれつきり歸つて來なければいいんだけれど、さうなると又世間の口がうるさいからね。何しろ世間では僕があの女を先の亭主から欺して取つたと思つてるんだらう? それを又ここで捨ててしまつて支那へ逃げて行つたとなると、又ぞろ批難が激しいだらうし、折角纒まつた上海行きの口の方も駄目になつてしまふからね。僕はそいつを何よりも恐れるんだよ。

(森田) うん、よろしい、………………………、そいつに萬事頼んでやらうと思つてゐる。——だが何だね、(一層低い聲になる)……………、……………ことはないだらうな?

(小倉) ………………、………………、——彼奴は馬鹿で、氣が弱くつて、今までさんざんいぢめられつけて來てるんだから、……………………。一つ巧くやつてくれ給へ、………………… いらないんだから。

(森田) とうとう僕も…………………………、あははは——それぢや、今日はこれで失敬する。

(小倉) さうかい、ぢや、ちよつと待ちたまへ。——(上手の襖を明けて、二階へ向つて怒鳴る) おいお杉! ちよつと下りて來い! 森田君がお歸りだぞ!

お杉、「はあ」と返事をしながら二階から下りて來る。髷に結つた髪の毛が亂れて、よごれた着物に紺コール天の足袋をはいてゐる。、が、歳はいくらか取つたけれども、顔つきや體つきはまだ水々しい。

(お杉)（上手へ來て挨拶する）まあ、もうお歸りでございますか。

(森田)（尤もらしく畏まつて）や、どうも大變御邪魔しました。――

(お杉)どういたしまして、何もお構ひ申しませんで。

(小倉)（お杉に）それではお前、今森田君によくお願ひして置いたからね。――僕は十日の船で立つから、お前は後から上海へ連れて來てお貰ひ。

(お杉)（森田に）どうも飛んだ御迷惑な事をお願ひしまして、…

(森田)あなた、どうせついでがあるんですからそんな事は一向構ひません。

(小倉)森田君が一緒なら何より確かだよ、始終日本と支那の間を往つたり來たりしてるんだから、…

(森田)ええそれはもう、私(わたし)は日本人よりも支那人の方に近い人種でね、私が附いてゐれば間違ひはありませんから。

(小倉)森田君が立たれるのは二十日過ぎださうだから、それまでにすつかり仕度をして、家の方の仕末をつけてね。

(お杉)（何となく不安な氣持ちで二人の顔を見ながら）はあ、…

(森田)いづれ何です、荷造りなどなさるのにお一人ぢや大變でせうから、日が極まつたら、お手傳ひかたがた上る事にしませう。いろいろお打合せもしなければなりませんから。

(お杉)はあ、ありがと存じます、…

(小倉)それぢや森田君、お杉の旅費は僕が立つ時に君に預けて行くからね。（お杉に）お前は何だよ、身の周りの物を

片附けて、まあがらくた道具でも賣り拂へば幾らかになるだらうから、それを小遣ひに持つて來るがいい。な、分つただらうな。

（お杉）はあ、……（躊躇しながら）あの、上海までは幾日ぐらゐかかるでせう？

（森田）神戸から船で行つてしまへば割りに早く行けるんですが、ちよつと私は外に用事があるもんですから、朝鮮へ出て北の方を廻つて行く事になるかも知れません。尤も何です、その方が幾らか日にちはかかりますが、船へ來るのは僅か一と晩であとはみんな汽車ですから、御婦人には却つていいかも知れません。殊に此れからは海が荒れる時分ですから。

（小倉）なあに、少しぐらゐ日にちがかかつたつて、獨りで行くより安心だよ。

（森田）うん、そりやあね、女の獨り旅と云ふやつは內地なら何でもないんだが、支那ではちよつと物騒だからね。

（小倉）まあ一つ宜しく賴むよ、君がゐてくれるので大きに助かる。

（森田）さあ、では失禮するかな。――どうも奥さん、大變御馳走になりました、それぢやその節にいづれ又。

（お杉）いろいろ御親切に有りがたう存じます。――なんにも分りませんものですから、どうぞ何分よろしく。――

森田、立ち上つて玄關へ行く。小倉とお杉もその後について行く。お杉が森田にマントを着せてやつてゐる間に次の話をする。

（森田）小倉君、上海へ奥さんを送り屆けたら、彼方で一つゆつくりと飲み直すかな。

（小倉）うん、よからう、支那料理で一杯やるのもいいだらう。

お杉マントを着せ終り、帽子と襟巻きを取つてやる。

（森田）や、どうも恐れ入ります。――奥さんいかがですか、支那はお嫌ひですか？

(お杉)　(淋しくほゝ笑む)なんでございますか、樣子が分りませんものですから。……
(小倉)　知らない土地へ行くつて云ふんで、心細がつてゐるんだよ。
(森田)　(障子を明けて土間へ降りる)あははは、これからの人間はそんな事を云つてゐらッしちや駄目ですよ、なあに支那だつて日本だつて同じ事ですよ、まあ行つて御覽なさい、直に支那がよくなりますから。——や、ではさよなら。
(小倉)　さよなら。
森田出て行く。
(小倉)　(障子をしめて居間の方へ戻つて來ながら)ああ、寒い晩だな、折角の酒がさめちまつた。(身ぶるひしながら炬燵に這入り、燗德利にさはつて見て)おい、一杯お酌してくれ。
(お杉)　(夫の前に坐り、酌をしてやりながら)今日は大分上つたのよ、もういい加減にお止めになつた方がいいわ。
(小倉)　まあさう云ふなよ、お前にお酌をして貰ふのも日本ぢやあこれがおしまひだからな。
(お杉)　上海へ行けば一緒にゐる事は出來ないんでせうか？
(小倉)　そんな事はあるものか。そりや彼方へ行つたつて一緒にはゐるんだけれど、かうして炬燵にもぐりながら、長火鉢の前で一杯と云ふ譯には行くまいからな。
(お杉)　あなた、ほんとうに十日にいらつしやるの？
(小倉)　うん、行くよ、——なぜ？
(お杉)　なぜつてことはないんだけれど、——上海なんて、そんな知らない土地へなんか、あたし行くのは厭なんですもの。

(小倉) さう云つたつて仕方がないさ、商賣となれば支那へだつてアメリカへだつて行かなきやならんよ。
(お杉) そんな商賣は止して下さいよ、ねえ、お願ひだから。
(小倉) あははは、馬鹿な事を云ふなよ、折角口がきつたところでそいつを斷つてしまつた日にや、明日から飯の喰ひ上げだからな。己も昔は大いに野心があつたんだけれど、もう斯うなつちや支那へでも逃げて行くより仕方がねえや。
(お杉) あたしどんなに貧乏したつて構はないから、自分の生れた土地にゐて暮らしたいわ。
(小倉) そんならお前だけ殘つてゐるかね?
(お杉) それはいやだわ、殘つてゐたつて居所がないんですもの。――ねえ、若しどうしても行かなけりやならないなら、あなたと一緒につれて行つて頂戴、ねえ、いけない?
(小倉) どうしてさ?――お前、森田を信用しないのかい?
(お杉) 信用しない譯ぢやないけれど、……
(小倉) あの男は確かだから大丈夫だよ、……それにお前、十日と云へば日限がないんだから、後の仕末をお前がしてくれなければ困るからな。
(お杉) あなたの方は二十日頃まで待つて貰へないんでせうか?
(小倉) さうは行かんさ、己の體は鈴木洋行の命令で行くんだから。――己が一と足先きへ行つていい處を見附けて置くよ。着くと早早夫婦で宿屋暮らしぢやあ、金が懸つてかなはんからね。
(お杉) それぢやあたし、幾日あなたに會へないんでせう?

（小倉）幾日つて程のことでもないさ、まあ、二十日か一と月ぐらゐなもんさ。
（お杉）そんなに長く？
（小倉）一と月ぐらゐ直きにたつてしまふぢやないか。何がそんなに心細いんだい。
（お杉）だつて、たとへ一と月でも半月でも別れてゐるのは心細いわ、それつきりあなたが何處かへ行つてしまふのぢやないかと思つて。――
（小倉）そんな事ありしないから大丈夫だよ、
（お杉）上海へ行つたらあたしを可愛がつてくれる？　今までのやうに内をあけたりなんかしないで。――
（小倉）ヘツ、そんなにお前、己と一緒にゐたいのかい？――ところでもう一つお酌をして貰はうかね。
（お杉）（酌をしながら）だつて、夫婦ならそれが當り前ぢやありませんか。
（小倉）ふん、そんなに己に惚れてるのかい。「あたしはあなたの女房ぢやない、ほんとうは梅澤の物です」つて、いつかさう云つたぢやねえか。
（お杉）それはずつと昔の事だわ。今ではあたし本當にあなたの女房だと思つてゐるわ。
（小倉）へえ、いつからそんな氣になつたんだい？
（お杉）いつからつて事はないけれど、かうして一緒になつて見たらあなたが好きになつたんですもの。
（小倉）成る程、さうかい、やつぱり「猫を飼ふやうなもんだ」と云つたなあ本當だね、梅澤はうまいことを云つたもんだよ。
（お杉）何と云はれたつて仕方がないわ、あたしは實際さうなんですから。――だけどあなただつてさうぢやないの、

あたしのやうな人間でゝ、一緒になつてくれた以上は夫婦と思つてくれたつていいぢやないの。

（小倉）さあね、思はない事もないんだが、……………………………、……………………………。……………………………

（お杉）いやよ、二た言目にはあなたはそれを云ひ出すんだもの。……

（小倉）あははは、ぢやあその話は止めにするか。――だけどもお前、己のやうな人間の何處がそんなにいいんだね、お前の持つて來た財産は一文なしに使つてしまふし、浮氣はする、酒は飲む、働きはなし、……

（お杉）いいえ、あたしそれでもいいの、可愛がつてさへ貰へれば。

（小倉）浮氣はしても構はない、しかし可愛がつては貰ひたいと云ふのかね？

（お杉）ええ、さうなの、――どうせあなたは浮氣者なんだからそれは覺悟をしてゐるのよ。ただいつまでもあたしを捨てないで傍へ置いといて貰へばいいの。

（小倉）傍へ置いときさへすれば、可愛がらないでもいいのかい？

（お杉）だつて、年中傍に喰つ着いてればちつとは可愛がつて貰へると思ふわ。――あたし、ほんとうは一度誰かに心の底から可愛がつて貰ひたいと思ふんだけれど、でもそんな事を云つたつて、あたし見たいな馬鹿な人間は人が眞面目で相手にしてはくれないんだから仕方がないわ。ねえ、さうでせう？

（小倉）ふん、そりやあ厭味のつもりかい？

（お杉）いいえ、厭味ぢやないの、ほんとうにさう思つてるの。――それに、男つてものはどうせ皆浮氣なんだから、あたし此頃はあきらめちまつたわ。

（小倉）（半ばは冗談のやうに、半ばは哀れみを感じながら）まあさう云つたもんでもなからう、そのうちには又、お前でたけりやならないつて云ふ男があるかも知れないからな。

（お杉）そんな人がある譯はないわ。あつたつてあたし、あなたの傍を離れないわ。

（小倉）なぜ？

（お杉）だつて、もう一度取り換へたんだから、そんなに度び度びいろんな男の處へ行くのは厭だわ、もう此れで澤山よ。

（小倉）さう云ふけれど又此れがどうなるか分らんさ。己よりずつと親切で、情愛があつて男つ振りが好くつて、浮氣なんかは此れつぱかりもしないと云ふのが出てくるかも知れないから、……

（お杉）いやよ、そんな冗談を云つちや。――だけど何ね、男つて者は口の先ではいろんな事を云ふけれど、お腹の中ぢやどんな事を思つてるんだか、考へと恐ろしくなるわ。あたしには男の心はちつとも分らないわ。

（小倉）それぢや己なんかも恐ろしいかい？

（お杉）ええ、馴れてしまつたらさうでもないけれど、始めのうちは恐ろしかつたわ。

（小倉）あはは、だからお前のは猫を飼ふやうなもんなんだよ。また別な男がやつて來たつて「恐ろしい恐ろしい」と思ひながら、直きに馴れてしまふんだから。

（お杉）でも恐ろしいと思ひながら、いつの間にか馴らされてしまふのかと思ふと、やつぱりそれが恐ろしいわ。

（小倉）あははは、お前の云ふ事は相變らず振るつてるな。

（お杉）でもほんとうにさうなんですもの、――ねえ、もうそんないやな話は止して頂戴よ、――

玄關の格子の明く音がする。

(男の聲) 今晩は、‥‥御免下さい、

(小倉) はあ、どなた？

(男の聲) 御免下さい、‥‥

小倉とお杉、顔を見合せてはつとする。

(小倉) だれ？‥‥どなたです？

(男の聲) 小倉君、僕、‥‥僕だよ、梅澤、‥‥

(小倉) (意外な表情) へえ、梅澤君？

云ひながらモジ／＼する。

(お杉) (囁くやうに) 何しに來たんでせう？ あたし二階へ行つてるわ。

お杉急いで襖の蔭に去る。小倉玄關へ行つて障子を明ける。

(小倉) やあ、‥‥(多少不氣味に感じながら)どうも暫く、

(梅澤) どうも暫く、――僕は今、直き此の近所までやつて來たんだよ。君が此處に居ると云ふ話を聞いたもんだから
ちよつと寄つて見たんだが、‥‥

(小倉) ああさう、‥‥

(梅澤) いつ此處へ越して來たんだい？

(小倉) 去年の暮れに越したんだよ、君は此の頃は？

（梅澤）僕は何處と云つて、目下のところ極まつた住所はないやうなもんだね。まあ宿なしも同然なんだよ。

（小倉）（冷淡に）さうかい、そりやあ困るだらうね、

（梅澤）君、濟まないがお茶でも一杯飮ましてくれないか、いいだらう、君久し振りで會ふんだから。――

（小倉）ふん、（考へてゐる）

（梅澤）――長くお邪魔をしようとは云はんよ、御迷惑ならどうでもいいんだが、

（小倉）ぢや、まあちよつと上り給へ、別にお構ひは出來ないけれど。

（梅澤）ああさう、そりや有り難う、では上げて貰はうかね。――

梅澤上つて來る。身すぼらしい綿入れに毛糸の襟卷をし、鳥打ち帽子を被つてゐる。痩せて、齡をとつて、顏つきや體のこなしに何處か卑しいところがある。帽子と襟卷を玄關に置き、小倉の後について上手の部屋に來る。そして、何か搜し物でもするやうな眼つきでそれとなく室内の樣子を見廻し、ちらりと燗德利に秋波を送る。

（小倉）（長火鉢の下手へ座蒲團を取り、自分は上手へ坐りながら）さあ、まあ此處へ來てあたり給へ。

（梅澤）（坐りながら）有り難う、今年は大分寒さがひどいね。

（小倉）（炭をつぎながら）どうしたい君、それから後は？――いろいろ面白い事があつたんだらう？

（梅澤）うん、そりや面白い事もない事はなかつたよ。――今になつて考へると、まるで夢のやうな氣がするけれど、でも夢にしてもいい夢だつたね。負け惜しみを云ふ譯ぢやないが、僕はさう思つて慰めてゐるんだよ。

（小倉）うん、さうさう、君は捨てられたんだつてね、そんな話を誰かに聞いたが、……

（梅澤）ああ、「飽きた」と云ふから別れたのさ、最初から其の約束だつたんだから。

（小倉）しかしどうだい、捨てられて獨りぼつちになつてしまつた心持ちは？　やつぱり淋しくないこともなからう。

（梅澤）（姿さうに火鉢にあたりながら）そりや淋しいには淋しいけれど、どうも此れも仕方がないさ。かうなる事は覺悟してゐたんだから。

（小倉）玉枝が恨めしいとも思はないかい？

（梅澤）恨めしい事はちつともないね。世間の奴等は僕を馬鹿だと云ふけれど、しかし馬鹿でも何でもいい、――僕は兎に角自分の力で、一時は玉枝を劇壇の座頭にまでしてやつたんだ。「女優と云へば鈴川玉枝」と云はれるやうな時代があつたのも、みんな僕の力だと思へばもうそれで滿足だよ。恨むどころか、僕は今でもあの女に感謝してるね。

以上の會話の間に、小倉は傍の茶簞笥から茶道具を出し、鐵瓶の湯を急須に注いで茶を入れる。

（小倉）さうして君は、その後玉枝には會はないのかい？

（梅澤）いいや、會はないこともないんだ。僕も行く先がないもんだからその後暫くあれの處に置いて貰つて、まあ男衆のやうな役目をしてたんだがね、以前の關係があるもんだからお互に工合が惡くつて出ちまつたんだよ。

（小倉）あの女も薄情だなあ、どうにか君の身の振り方を心配してやるがいいぢやないか。

（梅澤）そんな事をあの女に云つたつて、そりあ無理さ。自分の爲めに一人の男が落ちぶれたからつて、それを心配してゐた日にはとてもやり切れまいからね。僕にはあれの心持ちはよく分るよ。あの女のさう云ふ我が儘なところのあるのがいいんだから。

（小倉）うん、よくもそんなにあの女が氣に入つたもんだね。それぢや何かい？　今でも君は玉枝に惚れてゐるのかい？

（梅澤）いいや、僕の惚れてるのは過去の玉枝だよ、少くとも一年前の玉枝だよ。
（小倉）と云ふのは、どう云ふ譯で？
（梅澤）君はあの女の近頃の事を知らないんだらうか？
（小倉）何でも又外にいい男が出來たんで、女優を止めて何處かへ引つ込んでゐるとかつて、そんな噂は聞いたことがあるけれど。
（梅澤）ところがそのいい男ともとツくに別れちまつたんだよ。
（小倉）もうその男にも飽きたのかい？早いもんだね、あんなのがほんとうの淫婦と云ふ奴なんだらう。
（梅澤）そりやあ淫婦だ、淫婦には違ひないんだが、――しかしあの女ももう近頃は昔の俤はないんだよ。一體あまり丈夫な方ぢやなかつたんだが、去年あたりからすつかり體を惡くしちやつて、何だか見るも氣の毒なやうに疑つてね、君が見たらきつとびつくりするだらうよ。
（小倉）何だい病氣は？大方梅毒か何かだらう。
（梅澤）うん、その方もあるんだが、それに肺を惡くしてね。
（小倉）（ほつとして愉快さうに）へえ、そいつあ初耳だ、あの女にもやつぱり罰が中つたんだな、――それぢや困つてゐるのかい？
（梅澤）ああ困つてるんだよ。此の間も見舞ひに行つてやつたんだけれど、その男にも逃げられちまつて、ばあやと二人で汚い家に住んでるんだよ。あの我が儘な勝氣な女が恐ろしく神經質になつちまつて、めそめそ泣いてばかりゐるんだ。もうああなつちやおしまひだね。

(小倉) だけど、君も昔はそれほど惚れた女なんだから、傍に附いてゐて看病してやるがいいぢやないか。それが君の本望だらうが。

(梅澤) そりや、看病はしてやつてもいい。此の間も散散泣いて、「昔の事はみんな自分が惡かつたから堪忍してくれ、どうか傍に居てくれ」つて頻りにさう云ふもんだから、僕も可哀さうになつちまつて「又來て上げる」とは云つたけれどね、しかし僕は今の玉枝はもう厭だよ、もうあの女には惚れてゐないよ。ただ會つてゐると過去の玉枝が思ひ出されてなつかしいもんだから、それで時時看病に行つてやるんだね。

(小倉) しかしなかなか殊勝なもんだね、さうして時時見舞ひに行つてやるだけでも。――やつぱり今でもいくらか惚れてゐるんだらう?

(梅澤) 馬鹿を云ひ給へ、僕はいつそあの女が死ねばいいと思つてゐるんだ。あんな情ない姿を見ると、折角の過去の美しい夢がだんだん壞れて行くやうな氣がして、何だか自分の身が悲しくなつて來るんだよ。現在の僕に取つてはその夢を思ひ出すだけが、唯一の樂みなんだから。

(小倉) 成る程、(さういつてから暫く考へて) だがまあ君はそんな夢でもあるだけいいや。僕なんぞは君、あれから此方(こつち)相場には損をするし、世間の奴等は相手にしてくれないし、君のお古(ふる)を頂戴して彼奴と一緒に小ひさくなつて燻(くす)ぶつてゐるんだから、てんで話にもなりやしないよ。僕はあの時悧巧に立ち廻つた積りだつたが、考へて見るとあの取引は僕の方が損だつたね。やつぱり惡い事あ出來ないもんだよ。

(梅澤) だつて、君は兎に角かうして一戸を構へてゐるだけ、まだ僕よりは優しぢやないか。

(小倉) そんな事があるもんか、君の方が獨り身なだけ始末がいいよ。僕は此れからどうするッたつて、あんな瘤が附

いてゐるんぢや全く動きが取れないんだ。

（梅澤）（悲しさうな顔をして、モヂモヂしながら）さうかね、そりやあ或ひはさうかも知れないが、……實は何だよ、君に向つて此んな事を云へた義理でもないんだけれど、若し君の方に好意があつたら、ほんの少しでいいんだが、……五圓か三圓でもいいんだが、どうかして貰ひたいとさう思つてゐたんだがね。……いけないだらうか？

（小倉）（聞いてゐるうちに不機嫌な顔つきになる）折角だけれど、そりや君いかんよ、僕の方が何とかして貰ひたいところなんだから、……

（梅澤）（ばつが悪さうに微笑する）さう云ふ譯ならどうも仕方がないけれど、……實は何だよ僕の事ならどうでもいいんだが、玉枝の奴が藥を買つたり何かするんで、明日の晩までにどうしても十圓ばかり都合して來てくれつて、擬りに賴むもんだからね。

（小倉）あははは、（嘲ふ）僕なんか君、自分の體をどうしていい事か困つてゐる場合なんだから、人の色女の病氣の事なんか心配してゐたら追つ着かないよ。

（梅澤）（不愉快な氣持ちを押し隱して）さうかい、ぢや、もうその話は止めにするから氣を惡くしないでくれ給へ。君に賴むのは無理だつて事は、僕も思はないぢやないんだから。

（小倉）（やや機嫌を直す）そいつが分つてゐてくれりやあ何も云ふことはないんだが、僕は君からそんな事を云はれる筋はないんだからね。――今更君を摑まへて愚痴をこぼしても始らないが、君は今ぢやあさうやつてゐるけれど、兎に角さんざ面白い目を見て來たんだ。…………………………。好きな女とはしたい三昧な遊びをする。

（梅澤）僕はそれだから滿足してると云つてるんだよ。

（小倉）だけども君、僕はどうだい？　僕は決して滿足しちやゐないんだよ。…………………………………………

…………………、……………………………、此れはと思ふ樂しみをしたんぢやないんだからね。

（梅澤）けれどもそれは、……

（小倉）それは君の責任ではないと云ふんだらう、そんな事あ當り前さ。僕が相場に手を出してその金をすつてしまつたからつて君の知つた事ではないのは分つてゐるさ。だから僕　愚痴だと云ふのさ。けれども君に金を貸せなんて云はれるとつい云はないでもいい事まで云つちまふんだよ。

（梅澤）ぢやあ此の頃は、君は遊んでゐるのかい？

（小倉）うん、仕方がないから上海へでも行かうかと思つてゐるんだがね。

（梅澤）上海へ？

（小倉）うん、もう内地ぢやあ僕も八方塞がりだから、土地が變つたらちつとは何か面白い事でもありやしないかと思つてね。鈴木洋行の支店の方へ今度やうやう這入れる事になつたんだよ。

（梅澤）鈴木洋行つて、あんまり聞いた事のない名前だね。

（小倉）どうせロクな會社ぢやないだらうさ、僕なんかを雇はうつて云ふんだから。――それでも僕はやつとその口を見附けたんだよ。

（梅澤）ぢやあ妻君はどうするんだね？　一緒に連れて行くのかね？

（小倉）連れて行きたかあないんだけれど、此方へ置いといても仕送りをする餘裕はないし、さうかと云つて此のまま放り出してしまやあ世間の口がうるさいしするから、まあ向うへ連れて行つて、どうにかしようと思つてるんだが、‥

……(そこまで云ひかけて、急に言葉を曖昧にする)

(梅澤)(心配さうに小倉の顔を見る)どうかするつて、——どうするんだね?

(小倉)(陰險に笑ふ)どうするかそりやあ、……向うへ行つてからの都合だから。……

(梅澤)(悲しげな表情になる)……けれど、餘計な事を云ふやうだけれど、……もしも彼方へ行つてから捨ててしまふくらゐなら、內地で別れてやつた方が赤君も助かるだらうが、……

(小倉)ふん、(依然として前の笑ひを續ける)何も僕は捨ててしまふと云つたんぢやないよ。

(梅澤)(機嫌を取るやうな口調で)あゝさう、向うへ行つて一緒に暮らす積りなんだね?

(小倉)だからそれは行つて見てからの都合だと云ふのさ。——一體君は何だつてそんな事を聞くんだね? そんな權利はない筈だぜ。

(梅澤)それはさうだとも、……ただ成る可くなら、捨てないやうにしてやつてくれ給へと云ふだけなんだよ。

(小倉)おかしな事を云ふぢやないか。捨てようと捨てまいと、僕の女房を僕が勝手で處分するのに何も差し支へはないぢやないか。それとも君は今になつてお杉の奴に未練があるのかい? ええ君? ……正直の事を云ひ給へ、お入用ならあんな女はくれてやつてもいいんだから。(冷かすやうな口調で云ふ)

(梅澤)いいや、僕は未練はない。僕はお杉が何處までも君の女房として可愛がつて貰へる事を望むばかりだ。

(小倉)おいおい、君、とぼけちやあいかんぜ、……………………………。(次第に激昂して來る)自分がさんざいぢめて置いて、そいつを人になすり着けて置きながら、今更可愛がれもないもんぢやないか。ふざけた言を云つちやあ困るよ。

（梅澤）（涙ぐんで伏し目がちになり、獨り言のやうに）君の云ふのは尤もだ、……自分で可愛がれないものを、可愛がつてくれと云ふのも無理だけれども、……

（小倉）無理だとも！　全體君あどの面下げてそんな事が云へるんだ。あの女のお蔭でどんなに僕が世間を狹くしてゐるか、考へて見たら分るぢやないか。日本を喰ひ詰めて支那くんだりまで逃げて行かなきやならないやうになつたのもみんな彼奴のお蔭なんだ。それも相手がもうちつとどうにかしてるならいいけれど、あんな女と姦通したの何のと云はれて、それでこんなに世の中から排斥されて、今になつてから君にまでぐずぐず云はれるやうぢや僕あましよくに合はないよ。ちつと氣をつけて物を云ひ給へ。

（梅澤）それぢやあ君はその腹癒せにお杉をいぢめると云ふのかい？

（小倉）僕は兎に角……………………、…………………と思つてくれ給へ。

（梅澤）（ほろりと涙を落す）君、そりやああんまりだ、あの女には罪はないんだ、……僕や玉枝はどんなに罪を受けてもいいがあの女は何一つとして惡い事はしてゐないんだ、……

（小倉）（梅澤の態度に驚かされて一層憤激する）してゐないからどうしたと云ふんだい！　僕が貧乏鬮を引いて一人で罪を背負へと云ふのかい！　僕あそんな事は眞つ平御免だ……何だい君あ、男らしくもない！　みんな自分が仕出來して置きながら今になつてからめそめそ泣くなんて！　君がそんなに悲しいなら僕は一體どうすりやいいんだ、僕の方が君の十倍も二十倍も泣きたいくらゐだ！（思はず彼自身も泣き聲になる）

（梅澤）（ますます泣きながら）さう云はれると僕は君にも濟まないけれど、……僕は、僕は此頃どうしたんだか馬鹿に

氣が弱くなつちまつてね、……お杉が可哀さうでならないんだよ。ねえ、君、後生だからお杉を可愛がつてやつてくれ給へ腹癒せをするなら僕を打つなり蹴るなりして、……

(小倉) あはは、君もなかなかいい事を云ふね、君のその體を打つたつて蹴たつて今ぢやあ血も出やしないだらう。そんな事を云ふなら僕の名譽を返してくれ給へ。(大聲を出す) え、おい！ 一體僕をこんなにしといて君あどうしてくれるんだ！ 君のお蔭で僕は姦通の汚名を背負つたんだ！ 名譽を返してくれなけりやあ僕は腹癒が出來ないんだよ！

梅澤、默つて泣いてゐる。短き間。

(小倉) 君あ人の家へ上り込んで厭味を云ひに來たのかい！ 久し振りで來たんだからお茶を飲ましてくれなんて、圖圖しいにも程があらあ！ (短き間) おい、もういい加減に泣くのは止してくれ給へ。よう君、僕も云ひ出しやあきりがないんだが、今更君を相手にしたつて仕様がないから、さつさと出て行つてくれ給へ。泣きたきや表で泣くがいいや。

(梅澤) 君、お願ひだから君の妻君にちよつと會はしてくれ給へ！

(小倉) 何だつて？

(梅澤) ちよつとでいいから會はしてくれ給へ。上海へ行つてしまへばもう此れツきり會へないんだから、……會つて一と言詫びを云つて罪を許して貰ひたいんだ……

(小倉) 何だ、詫びを云ふ？ ふん、笑かしやあがる！ そんな事を云つて手前だけ善い兒にならうたつてさうは行かねえよ。手前はそれで濟むかも知れねえが、己の世界はやつと此れから開けるんだ。後悔するなら己がするまで待つてゐろよ！

（梅澤）ちよつとでいいから會はしてくれ給へ！……

（小倉）うるせえな！　會はせる事あ出來ねえつたら！　さあ、ぐずぐず云はねえで出てつてくれ！　おい！　出てつてくれ！

小倉、立ち上つて梅澤の襟を掴み、（さあ出て行け）と云ひながら無理に引つ張り出さうとする。上手の襖を明けてお杉が駈け出でる。

（お杉）（夫を制しながら）まあ、あなた、お止しなさいつたら！　そんな手荒な事をしないだつて、――

（梅澤）（お杉を見て）おお！　僕あお前に詫まらなけりやならないんだ！……勘忍してくれ！……許すと一と言云つてくれ！……

さう云ひながら玄關の方へ引き擦られて行く。

（小倉）（いよいよ焦ら立ちながら）さあ出ろ！　畜生！　出ろつたら！

云ひながら土間へ引きずり落し、格子を明けて往來へ突き出す。梅澤ばつたり倒れる。其の間お杉はたゞおろおろしながら、梅澤の帽子と襟卷を持つて障子際に彳んでゐる。

（小倉）（土間に立つてお杉を呼ぶ）おい！　その帽子と襟卷をよこせ！

お杉、あつけに取られて默つてそれを夫に渡す。小倉それを受け取つて往來へ投げ、格子戸をぴしやりと閉めて上つてくる。

（お杉）（恐ろしさうに夫の顏をのぞく）まあ、あんな亂暴な事をしないだつて――

（小倉）構はないから打つちやつて置け、――

云ひ捨てて上手の部屋へ戻り、長火鉢の傍に坐る。

（お杉）（ぢつと表を見ながら）まあ、まだ彼處に寢てゐるわよ、どうかしたんぢやないかしら――ねえ、

（小倉）いいから放つて置きなよ。

お杉）だつて、打ちどころでも惡かつたんぢやないでせうか？　何だかあたし心配だわ、ちよつと行つて見たらど

（う？

（小倉）行つて見たきやあ見て來ねえな、己あ知らんよ。

（お杉）あたしは何も行つて見たかあないけれど、……ようあなた、あなた行つて御覧なさいよ、……（再び表を見

る）まあ、まだ寢てゐるわ、……

（小倉）うるせえな、己あ知らないつてば。

（お杉）（思はず土間へ下りかけて、表の方へ聲をかける）もし、どうかなすつて？　何處かお打ちになつて？——

短き間。返辭なし。

（お杉）まあ、あの、どうなすつたの？

云ひながら、障子と格子を明け放したまま表へ飛んで出る。以下、往來の闇の中で二人の聲だけが聞える。

（梅澤）有りがと、有りがと。——大した事ぢやないんだから、心配しないでくれ給へ。なあに、ちよいと此處を打つ

打ただけなんだから。

（お杉の聲）大丈夫？　お歩きになれる？

（梅澤の聲）大丈夫だとも、歩けるとも。——そんな事よりか僕はお前にお願ひがあるんだ。ねえお杉——お杉さん、

今までの事はみんな僕が惡かつたんだから、お前堪忍してくれるだらうね。許すと云つてくれるだらうね。

小倉、その聲を聞くと同時に落ち着かない様子で席を離れ、玄關の障子際へ來て立ち聞きしてゐる。

(お杉の聲) だつて、あたしにそんな、許すなんて事は云へやしません。もうその話は止して下さい、ね、止して早く歸つて下さい。お願ひですから。……

(梅澤の聲) いいや、許すと云つてくれなけりやいやだ、許すと一と言云つてくれ給へ。

(お杉の聲) ぢや、「許す」つて云ふわ、ね、いいでせう?

(梅澤の聲) うん、有りがと。よく云つてくれた。――お前、さぞ僕を恨んでゐるだらうね?

(お杉の聲) 恨んでなんかゐやしませんわ、あたしだつて惡かつたんですから。

(梅澤の聲) お前はちつとも惡かないんだ、お前に苦勞をさせるのはみんな僕のした事なんだ。

(お杉の聲) あたしだつて惡いんだわ、何年でも待つツて云ひながら、かうなつてしまつたんですから。……

(梅澤の聲) お前、小倉君と一緒に上海へ行く積りなのかい?

(お杉の聲) え〻、

(梅澤の聲) そんな遠い處へ行つて、もし捨てられたらどうするんだ?

(お杉の聲) もうそんな事は聞かないで、――ね、さうして早く歸つて下さい。……小倉の言葉に從ふより外、あたし仕樣がないんですから。

(梅澤の聲) 小倉君はお前を邪魔にしてゐるんだ、欲しけりや僕に返してやると云つてるんだ。――お前、小倉君さへい〻つて云へば、僕の處へ歸つて來てくれるだらうか?

(お杉の聲) そんな事は、……そんな事は、……小倉が何と云ふか分りませんか、……

(梅澤の聲) 今夜玉枝の處へ行つて、よく彼奴にも話をして、明日もう一度、小倉君に頼みに來るからね。承知してく

れたらお前はきつと歸つて來てくれるだらうね？

（お杉の聲）　……もし小倉がいゝつて云へば、……

（梅澤の聲）　僕はお前を今度こそ心の底から愛してやるよ。どんな小ひさい家でもいゝから世帶を持つて、お前を死ぬまで愛してやるよ。……

（小倉）（むらむらと嫉妬を感じ、突然表を向いて怒鳴る）そんな譯にやあ行かねえよ、——おい、お杉！　いつまでそんな奴の相手になつてるんだ、見つともねえから中へ這入れつたら！

小倉、表へ飛び出してお杉を捕へ、玄關へ引き摺り込みながら上つて來る。

（梅澤）（外の格子に掴まりながら、しどろもどろに泣き亂れて）小倉君！　僕の頼みをきいてくれ給へ！　君はお杉を返してくれるつて云つたぢやないか！

（小倉）（障子を締め切る）いやだ！　己をおつ放り出しといて手前たちだけ幸福に暮さうッたつて、さうは問屋で卸さねえよ。もう斯うなつたら皆不仕合はせで終るんだ！

お杉、最初はぼんやりしてゐたが、やがて涙をふくんだ眼で訴へるが如く夫を見上げる。

（作者記、——此の幕は第二場を設ける積りで最初に第一場と書いた。が、中途で豫定を變へることにした。）

第三幕

玉枝の住居。——貧乏長屋の內部。居間と臺所と二た間だけしかなく、上手の居間の方に玉枝が瘦せ衰へて寢てゐる。枕元に藥瓶な

ど置いてある。梅澤が臺所の七輪の前にしやがんで土鍋で粥を煮てゐる。その後方に流しがあり、戸が締つてゐる。

第二幕より二三日過ぎた晩。居間の方にただ一個しかない電燈が、臺所の境の障子際へ引つ張つて來て吊るしてある。

(玉枝)　(子供が甘つたれてゐるやうな、情ない聲で)　要さん、手拭ひをしぼつておくれよう!

(梅澤)　ああ、待ちなよ、今しぼつてやるからな。

土鍋を七輪からおろし、玉枝の枕もとに來て頭にあててゐる手拭ひを取り、ちよつと額に手を觸れて見る

(梅澤)　どうだね?　苦しいか?

(玉枝)　ああ、苦しいよう!　どうかしておくれよう!

(梅澤)　苦しい?――そりやあ困つたな、――だが何だよ、昨日から見ると大分熱が引いたやうだから、もう直き樂になるだらうよ。まあ待つてな、今しぼつて來てやるから、

かひがひしく勝手口へ行き、汲み置きの水で手拭ひをしぼり、それを持つて戻つて來る。

(梅澤)　(手拭ひをあててやりながら、いたはるやうにぢつと病人の顔を見る)　どうだい、ちつとは此れで好い氣持ちかい?

(玉枝)　そんな上の方ぢやないんだよう!　もつと下の方だつてば!……ああさう、そこん處だよう!……

(梅澤)　お前、何か喰べる氣はないかい?　今お粥が煮えたんだけれど。

(玉枝)　いやいや、なんにも喰べるのはいや。

(梅澤)　だつてお前、それぢや體が衰弱するばかりだからね、……いやだらうけれども、まあ我慢して一杯お上り。ね、いい兒だから、……

(玉枝)　いや!　いやだつてば!

(梅澤) いやならお止し。……そんなら又あとで喰べるがいい。ぢや、僕はちよつと行つて藥を取つて來るからね。

(玉枝) 何處へ行くんだよう?

(梅澤) だから、吉田さんのところへ行つて藥を貰つて來るんだよ。ね、いいだらう?

(玉枝) 藥なんかいらないから、ちやんとあたしの枕もとに坐つてゐておくれよう。何處へも行つちやいけないよう。

(梅澤) そんな事を云つたつて、それぢや病氣が惡くなるばかりぢやないか。ね、分らないことを云ふもんぢやない。

(玉枝) いやいや、要さんはあたしを捨てる氣なんだ、(めそめそ泣きながら) お杉の奴が、……お杉の奴がきつとそこいらで待つてゐるんだ。

(梅澤) あははは、そんな事はありやしないよ、お杉には立派な亭主があるぢやないか。

(玉枝) 要さん、……お前は私を欺さうとしてゐる、……いいえ、さうなんだ、私を欺さうとしてゐるんだ。昨日もお杉が臺所へ來て、何か二人でこそこそ話してゐたぢやないか。ちやんと私は知つてたんだよ、寢たふりをして聞いてたんだよ。

(梅澤) (さあらぬ體で) あははは、そりやあお前の氣の迷ひだよ、——

(玉枝) いいえ、さうぢやない! 來たのを私は知つてるんだ。そんな事を云つて、……私を……私を巧く欺さうツたつて、誰がその手に乘るもんか! 私は死んでも、……死んでも要さんをお杉の奴には渡さないから。……

短き間、玉枝さめざめと泣きつづける。梅澤はほつと溜息をついて考へ込む。

(玉枝) (急に昂奮して叫ぶ) お杉を出しておくれ! お杉の奴を! あたしや彼奴を殺してやるんだ!

云ひながら身をもがいて床を乘り出す。

(梅澤) これ、馬鹿なことを云ふんぢやない、お杉は居やしないぢやないか。

(玉枝) いゝえ、何處かに隱れてゐるんだ! お杉を出し!此處へ出しておくれつてば!

勝手口の戸をこつそりと明けて小倉が這入つて來る。ずつと臺所を見廻してから、障子際に身をひそめて様子をうかがつてゐる。

(梅澤) さあ! そんなに動くと又あとで熱が出るから! よ! 靜かにしておいで靜かに! よ! 僕は何處へも行きやあしないから。

(玉枝) お杉を出しておくれつてば! (臺所を見る) 彼奴はきつとそこにゐるんだ! いいえ、私は知つてるんだよ! きつとそこに隱れてゐるんだ。昨日も臺所に居たんだから!

(小倉) (ぬつと二人の前に現れる) おい、梅澤君! 僕がお杉を引き取りに來たよ、穩さないで出してくれ給へ。

(梅澤) (ぎよつとして小倉を見上げる) 君は一體、…… 人の家へ斷りもなく何しに來たんだ? お杉は此處に居やあしないよ。

(小倉) 此處にゐなけりや何處にゐるんだ! さあ云へ、隱したところを云へ! 昨日も留守に拔け出して來やがつて、今日もきつと此處へ來やがつたに違へねえんだ。……

(玉枝) お前は私を欺したんだ、……欺したんだ、……欺したんだ、……

一層激しく身悶えしながら枕の上に突つ伏す。

(小倉) (玉枝の姿をぢろりと見て) ふん、それ見ねえ! こんな病人を放つたらかして、人の女房を取らうなんて、手前の方がずつと己より惡ぢやねえか。手前がほんとに改心したなら此の女を可愛がつてやれ。―― さあ、お杉を此處へ出せと云つたら!

いきなり室内へ踏ん込んで押し入れを明けて見る。が、お杉の姿は見えない。

（小倉）　おい！　何處へ隱したんだ？

（梅澤）　（心から後悔したらしく）小倉君、勘忍してくれ給へ、――ほんとうに今日はゐないんだよ。昨日は確かに會つたんだけれど、今日はお杉は來てゐないんだ。

（小倉）　ふん、ほんとうに來てゐないんだな？

（梅澤）　あゝ、ほんとうだよ、僕は決してうそは云はない。――若しやつて來たら會はずに歸してしまふから安心してくれ給へ。

（小倉）　そんな事あ當り前だ。――よし、さう云ふなら勘忍してやるが、手前も此れからもう好い加減に惡い事あ止めにしろよ。又此の女を捨ててしまやあ今度こそほんとうに、ロクな死にざまはしめえからな。

（梅澤）　あゝ、僕もきつと眞人間になるつもりだから、……ねえ、小倉君、君もその代り妻君を可愛がつてくれ給へ。可愛がることを誓つてくれ給へ。ねえ、ほんとうに賴むから。……

（小倉）　（臺所の方へ行きながら）　ふん、餘計な世話は燒かねえでもいいよ。

（梅澤）　後生だから誓つてくれ給へ。もう此れツきり僕は君等に會はないんだから、それを誓つて安心さしてくれ給へ。

（小倉）　あははは、そいつあお生憎樣だつたよ、己はこれからまだまだたんと面白い夢を見なけりやならねえんだ。――それぢや大きにお邪魔をしたね。

小倉、勝手口から出て行かうとする。梅澤突然立ち上つて戸口の所へ追つて行く。

（梅澤）　小倉君！　待つてくれ給へ。

(小倉) 何だい？ まだ何か用があるのかい？

(梅澤) 君、どうしても僕の頼みを聽いちやあくれないんだらうか？僕は、——僕はあの女が可哀さうでならないんだ。

……

(小倉) あの女ばかりが可哀さうで、己は可哀さうぢやないと云ふか。

(梅澤) あの女さへ可愛がつてくれりや、死んでも僕は恨みはないんだ。もう一度云ふがお願ひだから、……

(小倉) ああ分つたよ、用があるなら上海へ來給へ。

(梅澤) ぢや、どうしても頼みを聽いてくれないんだね？

(小倉) 勝手にしやがれ、

云ひ捨てて出て行く。

短き間。玉枝は披れ切つて死んだやうになつてゐる。梅澤、戸口に佇んでぢつと考へてゐるうちに次第に恐ろしき表情になる。

(梅澤) よし！ 聽いてくれなけりや覺悟があるんだ！

流し元の出刃庖丁を懐ろに入れ、小倉の跡を追つて出る。

やや長き間。明け放された勝手の戸口に包みを抱へたお杉の姿が現れる。そつとあたりを見廻し、臺所に這入つて下駄を中へ入れ、足音を忍ばせながら障子の蔭に寄り添つて奥を覗く。が、ひつそりとしてゐるので、再び勝手口へ來て表を見てゐる。間。やがて梅澤の足音が聞える。

(お杉) (梅澤を認めて、小聲で云ふ) あなた、……

(梅澤の聲) (お杉のよりも更に低い、掠れた調子) だ、だれ？……

(お杉) あたし、あたしです、……今日はほんとうに覺悟して逃げて來たのよ。……あたしを此處へ置いて下さい……玉枝さんと一緒でもいいから、……女中でも何でもしますから、……

梅澤、血の附いた刄物を提げて上つて來る。

(お杉) あッ! あなた!

(梅澤) しッ、しづかにしてくれ! 僕は小倉を殺して來たんだ。……

(お杉) ど、どこで?

(梅澤) そこの裏の空地のところで、……ま、まだ息があるかも知れない、……お前、早く云つて見てやれ、……

お杉駈け出でる。

玉枝、以上の會話の間にお杉の聲を聞きつけて床を這ひ出し、臺所の方へ膝で摺つて行く。障子際で梅澤に行きあたる。

(玉枝) (梅澤にしがみ着きながら) 畜生! お杉を出し! お杉を何處へやつたんだよ! たつた今聲が聞えたぢやないか!

梅澤、兇器を後ろへ廻し、憎いやうな哀れむやうな心持ちで、默つて彼女を見おろしてゐる。

(玉枝) よう! お杉を此處へお出しッたらよう! あたしや彼奴に云つてやることが澤山あるんだ。要さん! お前はあたしを欺したばかりか、小倉さんを欺したんだね。うそッつき! 惡黨! どんな事があつたつてお前を彼奴にやりやしないから。

(梅澤) (その眼が憎惡で一杯になる) 己あ何處へも行きやあしないよ、お前と夫婦になつたんだからな。惡黨同志でちやうどいいんだ。(いきなり玉枝の胸ぐらを取る) 玉枝! その代り己と一緒に死んでくれ!

(玉枝) (兇器を持つた男の手頸兩手でおさへる) あれェ！ 人殺しッ、助けてくれ！――

(梅澤) (女を組み伏せたまま、妙に落ち着いて微笑しながら) 馬鹿を云へ、お前を助ける者なんて此の世の中に居やしないんだ。さあ、覺悟してくれ！ 己も後から直ぐに行くから！

(玉枝) うそツき！ お前は私を欺すんだよ！ 私を欺してお杉の奴と一緒になるんだ！ うそツつき！ 惡黨！ お杉の奴を、……彼奴を咀ひ殺してやるから、……

梅澤、手頸にからみ着いてゐる女の指を靜かに解き、兇器を彼女の喉にあてる。

(玉枝) 人殺しッ、人殺しッ、助けてくれ！……

梅澤、遂に玉枝の喉を突き刺し、屍骸の上に打つ俯しになる。暫くしてから、まるで子供のやうにしくしくと意氣地なくしやくり上げつつ、いつ迄も泣きつづける。

――(幕)――

編輯だより

◇我が學界及び社會全般に多大の感激を與へたア氏は、十二月二十六日榛名丸で故國へと去る、氏の來朝は王者や凱旋將軍の來朝にもまして熾烈な歡迎であつた、そして深刻に印象された。眞理を求むる聲のいかに旺盛であるかを知るに足る。

◇そしてア氏が人格者としていかに我國民に敬慕されたか七千萬國民中唯の一人として氏を難ずるものがないことでそれが立派に證明される。ア氏は所謂國賓ではなかつた、しかし完全なる國民賓であつた、民衆賓であつた。

◇學賓として官私各大學で歡迎された熱烈さは眞に空前であつた、學界の大偉人に對して我が國民が發露した眞情には寸毫も遺漏はなかつた。

◇ア氏が帝都を去るときの眼のうるみ、それが完全に我國民に對する謝意を表徵してゐた。

◇そしてア氏は年二回、我誌に寄稿することを承諾した。世界の新聞、雜誌中で氏が寄稿するのは我誌あるのみだ、今後我誌がいかに世界學界に重きをなすかはこれでも分明する。

◇ウエルス氏の雄篇、これまた雜誌界の驚異だ、新年號に燦としてゐる。

◇かくして英語國民中の第一の人氣男と、世界學界の獨歩の權威者とを併せ有せる本誌新年號は雜誌として殆んど完璧に近きものだ。

◇その上、福田、末弘兩雄が筆陣を揃へて雄篇を寄稿して下さつたことは學徒多大の喜悦であらねばならぬ、クローデル大使亦た洗練されたる名文を寄せた。

◇我社が本春以後に執るべき道はあまりに多岐に亘らんより名人の境地を探るべく奥深く突き込む。そして今まで雜誌の領分でないと思はれた所にもグン／＼と伸びて行きたい。

◇同人意氣軒昂 すべての方面に勇氣と堅忍とを以つて前進する、そして界の雜誌が曾つて窺測もし得ない絕對境を究めてと欲する、科學も、哲學も、藝術も、專門雜誌を率ゆる權威ある論文を發表したい。

◇十二月のアインスタイン號は再版までしたが、それも賣切つた、全く誌界破天荒のことだ。

◇神田青年會館に於けるア氏講演は聽講者多數のため、入場を拒絕したが六百名に及んだ、これ等の方に對しては誠に申譯がなかつた、玆に陳謝します。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不要

註文の注意

本號特價金 貳圓

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

○本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす

◇金切れの際は發送を停止す

◇外國發送の註文は本誌一冊郵稅貳拾四錢を申受く（但し支那を除く）

◇見本は發送せず

◇郵稅切手代用は壹割增のこと

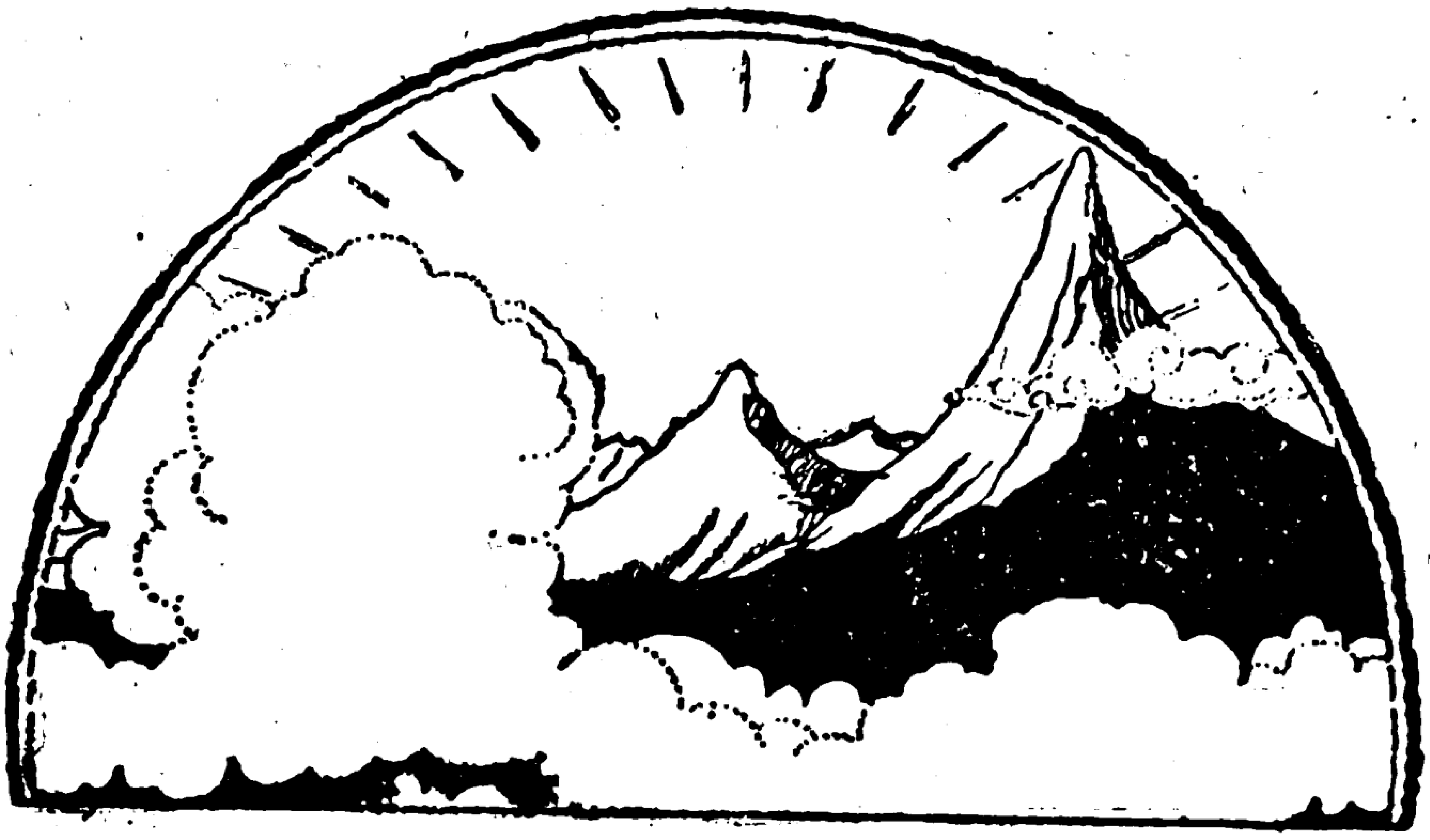
◇拂込みは振替によるが最も便なり

大正拾壹年十二月十八日印刷納本
大正拾貳年一月一日發行

特價貳圓

編輯兼發行者 東京市芝區伊皿子町四十番地
印刷者 東京市京橋區西紺屋町七番地 平田貫一郎
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話 芝(長)一六三八 芝二八五四 芝四三〇三
振替東京八四〇二



謹賀新年

大正十二年一月一日

株式會社 秀英舍

室生犀星新著

忘春詩集

四六判 四百八十余頁 著者自装 美本

定價金貳圓五拾錢 書留送料金十八錢

佐藤惣之助著

琉球諸嶋風物詩集

四六判 上質洋紙印刷 著者自装本

定價金壹圓八拾錢 書留送料金十八錢

早川三 孝三藤 齋藤响 共譯

ストリドベルヒ 復活祭 外二曲

四六判 三百五十余頁 天金箱入 美本

定價金貳圓貳拾錢 書留送料金十八錢

松永延造新著

長篇創作 夢を喰ふ人

四六判 五百頁 總布裝 箱入 美本

定價金貳圓五拾錢 書留送料金十八錢

東京本鄕區元町壹の三 株式會社 京文社 振替東京八二二六番 電話小石川五九八六番

沙羅の花

芥川龍之介作

定價貳圓八拾錢

◇送料十九錢◇

◇四六版美裝◇

現文壇に於ける一異彩として、靈妙豊かなる世界に常にその獨自の藝術境を開きつゝあるは芥川龍之介氏である。沙羅の花に收められたる二十餘種の短篇は、氏がこれまでにものせるもの、中より粹なるものを拔き取つたものである。氏の絶えざる藝術的精進の力と、年毎に加はる作品の精鋭さとは、實に他に其の儔を見る能はざる目ざましさである。眞の藝術を味ひ藝術の深奥を究めんとするものは須らく、本書を繙くに如くものはない。

忽五版

龍之介
傑作選集

東京芝區
愛宕下町

改造社

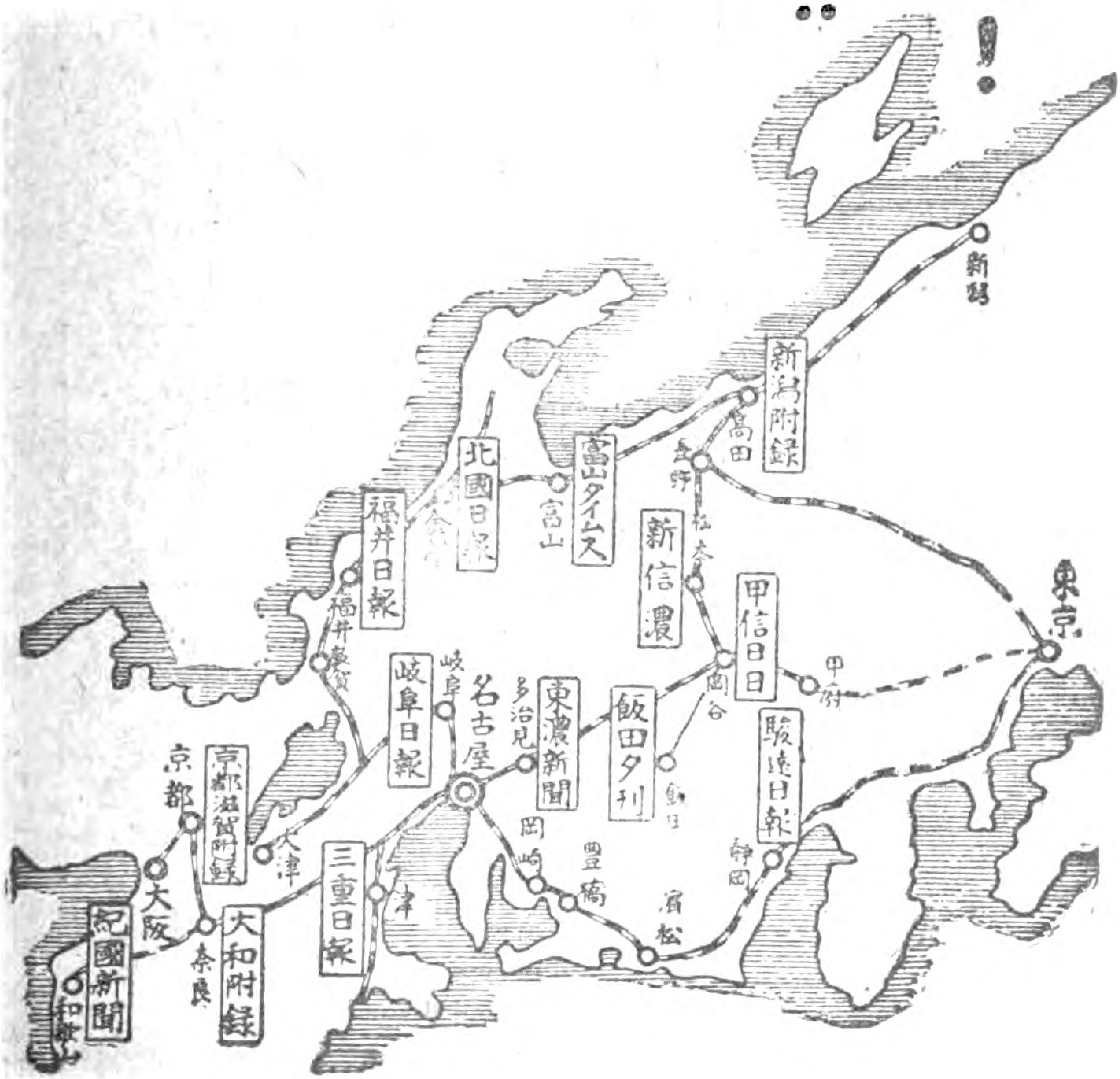
振替東京
八四〇二



飛行船は揚った！

中部日本の高空に

言論界の巨人！！



日本で唯一の六頁夕刊

年中無休刊

◇親切な人程物は判り易く教えて呉れる

世界の事や政治の事でも經濟の事でも一般社會の事でも又家庭の事でも極めて容易に、そうして敏速に報導しつゝある事ほど左樣に東京每夕新聞は親切である

東京每夕新聞

定價　一ヶ月　六拾錢

思想の變遷は自己の環境を目まぐるしく變化させるその一歩づゝ先に助言して行く。如何となれば東京每夕新聞は悉く新進の記者を以て網羅して居るからである

◇新人の話はどこかに教へる詞がある

日本橋區蠣殼町一丁目參番地　東京每夕新聞社　振替口座東京六八八六番

戯曲 愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

本書は明治、大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の惱みがいた〱しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ快著だ。

大正文壇の藝術的代表作

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

第四十一版

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

LA REKONSTRUO MONATA REVUO DE POLITIKO, LITERATURO, SOCIAJ AFEROJ, KTP.
PREZO: UNU EKZ. OKDEK SENOJ, JARE DEKDU JENOJ.
OFICEJO: KAIZOŜA, 1 ATAGOŜITAMAĈI, ŜIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十一年十二月十七日印刷納本 第五巻第一號 新年號 特價金貳圓